平賀源内全集

源頼寿

下

西洋婦人圖

大阪　鹿田靜七氏藏

竪　一尺三寸七分五厘、　横　一尺二分。

源內が何人から油繪の法を學んだかよく判らないが、我が國ではじめて洋畫の描法を試みた人であつて、秋田藩主佐竹義敦（曙山）同藩士小田野直武にその法を傳へたことは明かである。こゝに揭げた西洋婦人圖は源內の遺作として知られた優品である、繪は麁布に油繪具で畫かれたもので、恐らく外國畫を模したと思はれるが、その手法の圓熟しない古拙なうちに筆者の性格をあらはしてゐる。

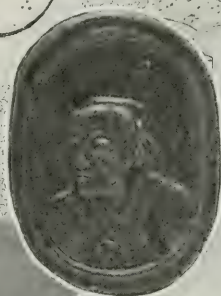
東京　帝國圖書館藏

源内畫像

竪　四寸六分　横　四寸一分　　先哲像傳著者自筆本所載。

像は同書卷一に載つてゐるもので、原本が源内の門人である桂川甫周の筆と云はれるから、模本ではあるが眞に源内の風貌を寫したものとして、特に尊重すべきである。なほこの像の傳來について、同書の所說を紹介しやう。

此肖像は桂川月池老人が寫し置ける者にてありし由東條琴臺が藏圖を予に送るをこゝに記す。

風来山人肖像
旭渓平賀國倫
風来山人

源内畫像のさま〴〵

(1) 里のおだ卷評の插繪（上集三九六頁參照）で、麻布先生、古遊山人、花景の三人が遊廓の話に花を咲かせてゐる場面である。この麻布先生こそ源内その人であつて、圖に梅鉢の紋付羽織を著け、机に凭つてゐるのが即ち源内自身である。

(2) 帝國圖書館藏栗原柳庵の肖像集に載つてゐる。像は天狗髑髏鑒定緣起の插繪（上集三八五頁參照）からとつたものらしいが、源内としてはあまりに老年過ぎた感がある。

(3) 萬延版長枕褥合戰の口繪である。矢張り、傳來が判明しないばかりか、見たところ少し老齡すぎる面持である。

(4) 一番よく見受けられるこの像は、明治十九年一月、中丸精氏が木村默老筆の畫像（上集口繪）によつて描いた油繪である。（東京　大槻茂雄氏藏）

（中央）道八燒德利（京都市三條通柳馬場東入杉浦丘園氏藏）の側面に燒出されてあるが、源内の肖像と傳へてゐる外、何等物語るところがない。

戌十一月出拼

一朝鮮種人参百根

亥三月植付

内

一廿三根　亥年芽出

一七十七根　芽出不申候

右ハ蒔付候内分訳

人参趣此訳　御座候以上

田中与右

新井彦多

源内の覺書

埼玉　中島國作氏藏

この覺書は源内の門人である武藏國猪股の名主中島利兵衞貞叔が、心覺に何くれとなく書付けてある折本の小册子（竪四寸五分五厘横一寸八分五厘）のなかに記されてゐるが、書風から源内の筆蹟であることが判かる。そして源内と貞叔との關係から書中の戌は明和三年戌歳で、亥はその翌四年亥歳であることが知られ、貞叔の身分から源内が拂下げになつた朝鮮人參をば貞叔の所有地である某所に植付け、その保護をたのんだので、この書付けが作成されたものと思はれる。

源内筆三社託宣

竪一尺二分、横一尺四寸五分五厘。

大阪市東成區中道元町一丁目一番地
佐々木昌興氏藏

源内の筆蹟ではあるが、彼れ自身の文章でなく、所謂三社託宣を書いたに過ぎない、右下隅に「間宮どの」とあるから恐らく誰かに依頼されて書いたものであらう。そしてこの書は源内の筆蹟として最も謹嚴に書かれたものであり、源内の筆蹟の多くが書翰であるのに比べて、最も尊重すべきである。

八幡大菩薩

天照皇太神宮

春日大明神

鐵丸雖爲食心不受穢人之物

銅焔雖爲座心不到穢人之處

謀計雖爲眼前利潤必當神明罰

正直雖非一旦依怙終蒙日月憐

雖曳千日注連不到邪見之家

雖爲重服深厚必到慈悲之室

源内筆三社託宣

竪一尺三寸、横一尺四寸五分五厘。

大阪市東成區中道元町一丁目一番地　佐々木昌興氏藏

源内の筆蹟ではあるが、彼れ自身の文章でなく、所謂三社託宣を書いたに過ぎない、右下隅に「開宮どの」とあるから恐らく誰かに依頼されて書いたものであらう。そしてこの書は源内の筆蹟として最も謹嚴に書かれたものであり、源内の筆蹟の多くが書翰であるのに比べて、最も珍重すべきである。

（一）

（二）

（三）

源内墓所

（一）墓石（修築前）總高五尺四寸

（上段角石）平賀源内墓

（下段角石）安永八己亥年　智見靈雄居士　十二月十八日

（花立石）梅鉢紋

（二）墓所外景（修築後）

（三）墓所内景（修築後）

左に片よつて樹々の間に立つてゐるのが墓石で、右側大きなのは今度建てられた修築碑であつて、裏には昔杉田玄白の撰した墓碑銘を刻み、表にはこゝに印刷してある故吳秀三氏撰文の修築碑銘を鐫り付けてある。

東京市淺草區橋場町二五二番地　總泉寺境内

平賀源内墓地修築之碑

伯爵　松平賴壽篆額

平賀源内先生逝かれて百五十年先生には許多の著作があり發明された物事も少くなく今を盛の電氣など其一である誰とて其功業を稱へない人があらう先生の墓はここ總泉寺跡にありて大正十三年史蹟に指定されたのに一昨秋區劃整理のため寺と共に市外に移されやうとしたが有志の人達の骨折で元通り保存されることになつた今茲に境内を弘め石碑を建てて表に事の由を記し裏に昔杉田玄白の作つた碑銘を刻んだのは績著い此偉人を慕つて尙永く偲ぼうとてである。

昭和五年四月十八日

醫學博士　吳　秀三　撰

平安退士　山田得多　書

郷里に建てられてゐる源内墓

香川縣大川郡志度町　自性院境内

源内の墓標は歿後、杉田玄白によつて江戸淺草の總泉寺境内に建てられたが、郷里の平賀家でも、菩提所である自性院に別に一基の墓標を建てた、これはその墓標で、正面に「殺智見靈雄大居士」左側面に「安永八巳亥年十二月十八日」右側面に「平賀源内國倫春秋五十二歳」こ刻されてゐる。

源内自製のエレキテル

香川縣大川郡志度町　平賀輝子女史藏

箱　木製、高九寸、竪八寸三分、横一尺二寸の長方六面體

源内が製作したエレキテルの遺存するもの二個、うち一は上集三四五頁に載せたもので、二はこの圖の下部左端に見ゆるものである、内部の構造は二個共、同じであるが、上方に突出した傳導線は一つは二枝に分れ、鐵鎖が缺失し、二は單一な棒狀で　末端には鐵鎖が吊るされてゐる。箱は一つは塗物の美しいもので、二は白木造の粗末なものである。この寫眞は一方にエレキテルを置き、右側に碁盤上に人が坐つてゐる、盤の足は曲げ物の内底に絶縁用の皿を敷いた上に据られてある。今し一人が鎖を持つて、一人がエレキテルのハンドルを廻して實驗しようこする光景で、盤上の人は源内の妹婿平賀權太夫の後裔故平賀熊太郎氏でハンドルを手にするは平賀家の緣者の林喬氏である。

凡例

一、本集は平賀源内先生顯彰事業の一として編纂したものである。

一、この下集は神靈矢口ノ渡以下九編の戯曲と上集に漏れたものとを收め、巻末に源内先生の著作として是非相半するものを附載した。以上で先生遺作の主なものは大體收輯し盡したと信ずる。

一、下集編纂にあたつて貴重な資料の借覽、謄寫、撮影等に少なからぬ便宜を與へられた宮内省圖書寮・帝國圖書館・東京高等學校竝に秋岡武次郎・伊藤松宇・大槻茂雄・故黒木勘三・高安六郎・近森岩太・佐々木昌興・坪井九馬三・德田泰造・中島國作・浪岡具雄・平賀輝子・藤井乙男・武藤長藏・松浦正一・南大曹・森繁夫・渡邊富三郎の諸氏に感謝の意を表する。

一、下集刊行にあたつて、その體裁の統一と校正の勞とをおしまれなかつた板垣市藏・小里璣・片岡良一・加藤宗厚・城戸甚次郎・小池藤五郎・小柴値一・新名登・軒原利雄・野村八良・武田政一・藤村作・堀田璋左右・故待鳥清九郎の諸氏に感謝の意を表する。

一、下集編纂刊行に直接間接の便宜と援助とを賜はつた、有川武彦・板澤武雄・稲村坦元・尾佐竹猛・小田德三・岡田唯吉・小川壽一・金鑽宮守・後閑文之助・佐武林藏・柴田常恵・菅原一・田中一松・田邊勝哉・西村貞・濱隆一郎・濱本助千代・本多厚二・矢島恭介・山本一信等の諸氏竝に帝國圖書館在勤各位の厚

意に對し謝意を表する。

一、補遺の部「石の枝折」に押入の梵字は源内先生と同國の出である東京目白僧園の釋眞戒師の筆を煩はしたので特に謝意を表する。

一、索引に關する注意事項はその首部に載せた。

一、索引は尾崎元春、關根龍雄、小菅進之助、原平三、福山精義の五氏が專ら擔當せられた、特に誌してその勞を謝す。

一、本集の扉題簽はもと先生が祿仕してゐた舊高松藩主松平家の當主である松平會長の筆である。

昭和九年六月二十五日

編纂者しるす

平賀源内全集下目次

戯曲集

補遺

圖版

附録

索引

平賀源内全集編纂始末

伯爵　松平頼壽

解題略

（一）戯曲集

神靈矢口ノ渡以下九編の戯曲を集めた。

神靈矢口渡

源內の處女作で、彼れが戯曲家としての力量を認められた著作である。はじめて明和七年正月十六日江戸外記座で興行され、座本は豐竹新太夫であつた。新田義興を題材として五段に分れ、吉田冠子、玉泉堂、吉田一二が補助とあるが、源內の跋文には初段の切と三段目の口とか自分の筆でないと明記してゐる。なほこの起稿の動機に就ては、關根正直氏の小說史稿に

されど其實、新田の神の祠官某は、源內が相識なりしが、ある日某、源內に語りけるは、本祠は畏こくも南朝の忠臣新田義興朝臣の神靈を齋き祀る所なるを、世に知る人稀にして、近來堂宇傾頽し、誰詣する者なきを、何卒して神威の炳焉なるを知らしめんと願ふ也、其許にも、いかで我志を助け給ひてよといへば、源內そは安き事なり、我に一策あり、待ち給へとて別れしが、不日

にして矢口渡の傳奇を作り、操曲に演せしかば、俳優藝妓等を始め、大方の人さへ競ひて彼所に參詣し、神垣のうち群集して、荒にし社殿も忽ち修復したりといふ。

と述べてゐるが、饗庭篁村は名著文庫の風流志道軒傳解題に

すべて風來山人の作文は、世の流行人の噂を捉へて工夫をなしたるにて、「神靈矢口渡」も矢口の新田の社、參詣者多く所謂當時の「流行神」なりしゆえ、其緣起めかして神德を述べ、新田大明神を假りて、大入大評判を取りしなり、是をも後には源内の工夫にて、はやらぬ新田明神を新作淨るりによりてはやらせたりと、源内が機智に富みたる一例にする者あれども、是は反對にて機智に富みたる例にはすべきも、新田の社の參詣繁昌は源内の御蔭にあらず、源内お蔭を蒙ふりしなり、其の明證は「武江年表」寶曆年間の記事中に「寶曆末から新田の社に參詣多し、社地に矢を賣始む、詣人求めて守とす」とあり、此書は神社佛閣の祭禮開帳等はもつとも詳しきものなり、源内の「矢口渡」は明和七年の作なり、寶曆末といふを假りに、寶曆年號の終りの十三年とするも、明和七年は夫より八年後なり、以て源内が時好に投ずる工夫者なりしを知るべし。

と云つてゐるので、作曲の動機が判然しないが、上演してから好評を博したことは當時の著作物に散見するところであり、今日までも人口に膾炙せられてゐることは人々の知るところである。

源氏大草紙

時代は建久年間、源賴朝の臣畠山重忠、和田義盛、梶原景時などの人物を題材としたもので、全編五段から成り、源内一人の作である。明和七年八月十九日豐竹東治の座本で、江戶肥前座ではじめて上演せられた。

弓勢智勇湊

この曲は壽永の亂を五段に仕組んだもので、吉田仲治を補助とした。そして明和八年正月二十日江戶の肥前座で發表せられた。

嫩窠葉相生源氏

安永二年四月卅日江戶肥前座で上演せられたもので、座本は豐竹東治である。平治の亂に敗れた源義朝と牛若丸とを題材としたもので、九段から成り、一人の補助者もなく、彼れ一人の作物である。

前太平記古跡鑑

平親皇將門の沒落後の物語を十一の場面に仕組んだもので、安永三年正月十二日吉田專藏が座本となつて江戶結城座で興行せられた。

忠臣伊呂波實記

安永四年七月十五日江戶肥前座で上演せられ、座本は豐竹東治である。題材を赤穗義士にとつて全編を十一場に仕組んだもので、一人の補助もない。

矢口後日荒御靈新田神德

安永八年二月八日江戶結城座で上演、好評を博した神靈矢口渡の後日咄として、他人の勸めによつて綴り出だされたものらしい、七場に仕組まれ、門人の森羅萬象と浪花の二一天作との二人を補助として完成したのである。

靈驗宮戶川

この編は淺草の觀世音の由來を說くもので、全場十一場であるが補助者はない。安永九年三月三日、豐竹東治の座本、江戶肥前座で上演されたのであるが、作者の源內は既に歿してゐるから、作者歿

後の發表である。

實生源氏金王櫻

源義朝と常盤御前とに題材をとり完結しないで歿したから、三段目までしかない。源内の歿後二十年、寛政十一年正月江戸肥前座で發表せられ、座本は豐竹東治であつた。

二　補遺

上集の編纂を了へた後に得た著作、書翰はもとより、上集にもれた詩歌の類までを蒐めた。

病名補遺序

戸田旭山の病名補遺に寄せた序文で、松浦正一氏藏本である、美濃判黑付四枚。

香椒譜

この書は渡邊富三郎氏（著者と同鄕の友人であつた渡邊桃源の後）の所藏本で、昭和七年の秋、同家の古書類中から發見されるまで、その書名さへ世に知られなかつたもので、著者自筆の未定稿本で

ある。稿はところ〴〵に抹消があり、付箋が貼られてゐる。本文と番椒五十三種とに、甜番椒一種を附載した圖譜であるが、その選述の年代は明かでない。原本、美濃判和紙假綴、本文十一葉、圖譜五十九葉、本集には製版の便宜上、本文は稍〻縮寫したが、圖譜はその圖が實物大であることから、これをそのまゝ模寫して二三葉を一圖版にまとめた。

俳諧二十棒

寶暦元年から明和八年まで二十一年のながい間、江戸の俳壇を賑はしたのは、延享二十歌仙（湖中・蟠石・和推・存義・有佐・平佐・米仲・祇丞・買明・秋風・楼川・涓北・木髪・旨原・和專・紀逸・再賀・石腸・蝸名・馬勃）を中心とした論爭である。この論爭は雪中庵蓼太か「雪おろし」と云ふ書を公にして、二十歌仙の獨吟を論難したのを、雁宕は蓼摺小義を、漁汶は遲八刻を著してこれを論駁した。この論難を第三者である著者が、芝居の評判記に見たて、頭取・シャレ組・老人組・雪の家手拭組・田舎者・大ゼイ・わる口組・利屈組・出過者・スキキヤウ者などが集まつて、各人の長所短所を滑稽的に批評したのが本書である。そして明和八年の自敍には作者止笑とあるばかりで、この書が源内の著述であることを物語る確證もなければ、止笑の號が源內の別號であると云ふ他の文獻もない。たゞ雪中庵では代々源內の著作と傳へてゐる。さりとて誰一人この說を否とするものもないと伊藤松宇翁から聞い

た。止笑は恐らく源內の一時的の戲號ではあるまいか。今は伊藤氏の說によつて、本集にも採錄することゝした。書名の三十棒は本文の末にいひ得ても三十棒、いひ得猿も三十棒とあることから名づけられたものであらう。表紙に二枚の題箋があつて、中央とその左側に片寄つて貼られてゐる。前者は輪廓のうちに「俳諧三十棒　全」とあつて、後者には

高曼天狗俳諧　全

とあるけれど無輪廓である。そして本文の柱に三十棒とあるから。本來は俳諧三十棒であつて、高曼天狗俳諧と云ふのは刊行後に呼ばれた別名ではあるまいか。原本、半紙本、輪廓竪六寸三分五厘、横四寸四分。序文匹葉、本文二十七枚、明和八年渡裏德兵衞梓行。

里笑草

この書は源內の門人である中島貞叔の家に遺存するもので、その撰述の年代は明かでない。同家では源內の著作と傳えて、しかも源內の自筆であると云はれてゐるから今はこの說によつてこの補遺に縮寫して載せた。

石の枝折

この書は里笑草と同じく源內の門人である中島貞叔の家に傳はつてゐるもので、撰述の年代は明和五年の初秋と思はれて。そしてこの書は武藏國子持ノ渡から秩父へ行く道にある秩父道しるべ十一里と記してある一石標について、著者の管見を述べたものである。美濃判、墨付五枚。

畑苗代の傳・米麥種子撰の傳・田畑土燒竈雛形圖

この三種で完結のものであるかどうか明かでない、またその刊行の年代も發兌の書林も判然しないが、原本はどれも半紙半裁の一枚刷りである。本書に收錄したのは森繁夫氏藏を縮寫したものである。

和歌一首

津輕舟云ゝの和歌は宮內省圖書寮所藏の百草露卷九の頭書にあるけれども、帝國圖書館藏のそれには見當らないことを斷つて置く。

七言絕句一首

藤井乙男氏所藏の七言絕句一首を書いた源內の筆蹟は、源內の筆蹟の多くが書翰であるに比べて、、

一層注意を拂ふべきばかりでなく、源內の作詩として最も尊重すべきものである。

東都藥品會引札

この引札は寶曆十二年閏四月十日江戶湯島で開かれた源內主催の藥品會の廣告で、その前年である寶曆十一年十月に各方面へ配布されたものである。引札は和漢兩文で書かれ、藥品會開催の主意、出品者心得、出品物の運搬方法までをこまぐと述べたもので、上集五九四頁に載せた藥品會目錄と對比することによつて、一層その價値と興味とを高める。原本大槻茂雄氏藏、和紙、美濃判二枚大。

高松藩祿仕拜辭願

この願は故大槻如電氏の新撰洋學年表寶曆十一年の條下に見えてゐるが、舊高松藩の松平家で調査したが、その原本はとにかく、その寫しさへも見當らないから、今は新撰洋學年表から轉載するので滿足せねばならぬ。

安永七年細註曆

安永七年の暦で、竪六寸七分、横四寸四分五厘の一枚刷りを、四ッ折りにして、竪四寸五分、横一寸七分五厘の上下の開いてゐる小袋に入れられてある。暦の本紙に安永七年つちのえいぬ風來山人戲作、袋の表に細註暦、不許賣買などの文字が記されてゐる。

三　附錄

源内の著作として、是非相半ばする、そしり草、里靏風語、世の中善悪鑑の三編の外、末尾に不採用の書目を擧げた。

そしり草

守屋大連、源頼朝、藤原藤房、新田義貞、楠木正成等三十七人に仙人、宗論、論語談を加へた四十項を書目の示すかように誹謗したものであるが、既に先輩は源内の著作を疑つてゐながら、百萬塔、帝國文庫、有朋堂文庫等に源内の著作として載せてあるが、本集にはこれを眞僞未詳として附錄にのせた。

里靏風語

洒落本大系第四卷里靏風語の解題に、山崎麓氏は安永年間刊歟、風來散人は風來山人と同じで平賀鳩溪の別號であるとて、この書を源內の著作にしてゐるが、編者の寡聞では風來散人は風來山人と同じであると立證すべき確な文獻もなく、風來散人が風來山人と同一人であつて、平賀鳩溪の別號であると考へられない、從つてこの書が源內の著作であることを立證する何物も持たないから、今は附錄として登載したに過ぎない。原本　縱五寸三分、橫三寸八分。

世の中善惡鑑

前後の二編に分れ、卷首に風來山人作とある。表紙の見返しに風來山人平賀先生作、東都玉養堂梓、裏表紙見返しに、書林下谷御成道唐人飴橫町紙屋德八、京都菱屋治兵衞、同吉田屋新兵衞、大阪藤屋彌兵衞、江戶蔦屋重三郞、尾張菱屋金兵衞とあるのみで、刊年も判らない、果して源內の著作であるか、これを立證すべき何物もない、今はたゞ疑を存して卷末に附載した。原本　半紙半截形。

四　不採用書目

風來先生春遊記

明治十四年刊陳喬翰著、寢惚先生批評、醉多道士加評としてゐる上下二冊の小本がある、これを平賀鳩溪の著作としてゐるけれども、文章から見ても、源內の著作でないことが明瞭であるから附錄にも採らなかつた。

風來先生馬鹿理屈欠草

卷首に耳目鼻口狂歌喧嘩の辨とあるが、文章は源內としてはあまりに拙であり、風來先生とあるが源內を指したのであるかどうか判らないが、どうも源內の著作ではあるまいと信ずるから、この集には載せなかつた。

芬明開花 窮理外傳

明治五年平賀源内遺稿、假名垣魯文の披閲、東京の書肆萬笈閣から上梓された一部五卷の書で、内容は「家藏に手を付す車のごとく廻すをしへ、金銀を望のごとくためるをしへ、價なしに、三國一の寶を儲るをしへ」など六十一項の秘法を述べたものである。外題に窮理外傳とあるけれども、本文の柱に極秘卷とあるから窮理外傳の名は後の改題ではあるまいか、魯文の序に「我國近來の物產家平賀源内鳩溪天竺浪人たりし頃、海外に漂流し、竺羅の澳の孤島に於て風來仙人より授與せられし、秘書中の拔萃にて上梓の儘書庫に秘し云云」とあるから、たとへ平賀源内遺稿とあつても、それは源内が或る書から拔萃したもので、源内自身の著述ではないからこの集には省略することとした。

寂志集

神靈矢口渡

又段續役割

初段

奏 豊竹伴太夫

中 豊竹新太夫
豊竹八十太夫

切 豊竹村太夫

二段目

口 豊竹門太夫
豊竹志摩太夫

中 豊竹伴太夫

切 豊竹絹太夫

三段目

口 豊竹折太夫
豊竹新太夫

中 豊竹村太夫

切 豊竹住太夫

四段目

[illegible] 豊竹村太夫

口 豊竹伴太夫
豊竹麻太夫

中 豊竹伴太夫
豊竹絹太夫

切 豊竹住太夫

又段同

豊竹麻太夫

千秋万歳楽

神靈矢口渡

座本豊竹新太夫

序詞 楚辭に曰。身既に死て神以て靈なり。子が魂魄鬼の雄となる。されば國事に死する者。精神强壯武毅長く。百鬼の雄傑たるとかや。遠く古を考れば。異國の伯有我朝の。菅家の例目のあたり。武藏ノ國荏原の郡。矢口の村に鎮座ましします。新田大明神の御神德。ヲロシ「靈驗有リ共。中カヽに。地 申スも恐れ大君の。御代傳りて九十九代後光嚴院のしろし召ス。天ンに二タツの日の本トや南北朝と引キ分カれ。都の花の歸り咲吉野の内裏にましますは。後醍醐帝第七の王子後村上の皇。假の皇居も月キ移り。爰も雲井の御所作り經營。フシ 殘る方もなし。地 附添給ふ公卿には。四條ノ大納言隆資卿坊門ノ宰相清忠卿。其外カ公卿天ン上人ト禮義正しくフシ 參列有ル。地 比は延文四ツの年菊月キ半ば召シに依て參内と披露して。新田左兵衛ノ佐義興。智仁勇備の御ン貌御階のフシ 本トに平伏す。地 隆資卿笏取リ直しイカニ義興。詞 汝を召ス事餘の義ならず。父義貞北國に亡び。楠父子討死ニしてより無勢の南ン朝を見侮り。尊氏押シて將軍に任じ。悴義詮を都に差置キ。其身は鎌倉に引キ籠り。四海を幷呑せんず勢。捨置カば御ン大事。地 汝ジを討ッ手に遣カはすべしと是成ル清忠の奏聞。此事勅問有ラん爲といとこまやかなる詔。地 義興はつと袖かき合ハ

せ　詞同じ清和の流にて。一チ門ンながら朝敵の首領といひ。父の仇にていへば。尊氏を亡さんと晝夜軍慮を廻らせ共　地彼が勢四海を覆ひ。味方小勢の此時節。軍サを出しはんは。謀なきに似たり　詞義興退て考ッるに。彼レが執權畠山入道道誓。高ノ師直師安にも。劣ざる奸曲我ヵ儘。己レに親しき輩には功なきに所領をあたへ。疎き者は忠臣ンをも退る。是を惡む者多ければ。地足利家內亂を生ぜん事遠かるべからず。其時節を考て楠正詮と心を合ハせ。京鎌倉を亡さんは。義興が方寸には。詞天ンの時キ至らざるに只今義興討ッて出なば。御勢ィ少き皇居の守護。地心元なくはとッシ勅答有レば。地坊門ン清忠詞ヤア迂遠き義興が軍慮。足利家の內ィ亂ンを待ッて。謀をなさんなどゝは。相ィ手の誤を待タん迚端の步兵をつく下手象棋。差當タつたる理に叶はず先ずる時キは人トを制し。後るゝ時は制ィせらるゝの本ン文。地片時も早く討ッて出。尊氏を亡ぼせよと。橫紙破りの一チ言ンを。聞キ流して義興公。詞ハア詩歌管絃は天ン上の御玩び。軍サの事は武門の職。百戰百勝も善ンの善たる物ならず。謀を帷幕の內に廻ッらし。勝ッ事を千ン里の外に決するは。地身不肖なれ共義興が軍ン慮の奧儀。詞當時守護の武士少き皇居を捨て軍サを出さば。義詮が京都の軍ン勢。襲奉ッらんは必定　地其本ト亂るゝ御ン大事此義は是非に御無用と。いはせも立テず坊門ン清忠ヤア過言ん義興。詞官軍少ィきに似たれ共。和田楠を始メとして。皇居の守人いくらも有リ汝一チ人居らぬ迚。御味方事欠べきか。ム、聞へたく軍ン慮にかこ付ヶ尻込ミするは。地軍が強いか。恐しいか。比興未練の億病者。詞コリヤ倫言は汗のごとし。違背す

れば違勅の科。討ッ手に行クか。但はいやか。なんと〳〵とせりかけ〳〵　地 己が工を押シ隠し。勅定

ごかしのフシきめ歴状。地 義興公胸にすへかね。軍ン慮の妨天下の仇。引キおろして只一ト討と。立チ寄リし

が待テしばし。禁裡の騒君への恐れ。去リながら時節至らぬ今ン度の討ッ手拙き負をなすならば。先祖の

名おれ家の恥。父義貞伯父義助。楠親子が跡を追イ。潔く討チ死し。末ッ代に名を穢さじと思ひ定メて御

前に向カひ。詞 勅定の趣畏り奉る　夫レについて一トツの願ひ。先ン祖頼光ゟ傳りし。水破兵破の二タ

ツの矢。代々源家の重寶たる故父義貞所持せし所。討チ死の其後チ北ッ國ゟ差上しを。地 大内に止め給

ふよし。何卒下タし給はる様。奏聞願ひ奉ると思ひ込ンで願ふにぞ。清忠卿せゝら笑ひ。詞 ヤア鹿忽之

義興。忝くも二タ筋の矢は。養由か娘椒花女より。汝が先ン祖頼光へ。夢中に授し奇代の重寶。代々

源氏の棟梁たる者是を所持す。汝ジが父義貞は左中將に任じ。惣軍ンの大將たる故。矢を所持しても苦

しからず。汝は漸左兵衛ノ佐にて昇殿も叶はず。地 あノゝちも切レぬぶんざいで。矢を望マんとは不敵〳〵

及ばぬ願ひとフシやり込ノられ。地 こたへにこたゆる義興公。無念ンの瞼血をそゝぎ。思ひ詰メたるフシ其

有リ様。地 叡慮何とか思しけん。隆資卿を近カく召サれ。しか〳〵の。キン勅定有レば。ハツト答へて隆資卿。

玉座に餝し二ツの矢恭々敷携へて　階近〳〵フシおり立チ給ひ　詞 切なる汝ジが望ミに任せ。二タツの矢を下タ

し給はる。有リ難く頭戴せよと。地 渡し給へば義興公。ハ、、、、はつと飛しさり。家の面目身の冥加此

上やはべきと歡給へば。地 清忠は不肖〳〵のフシ無性面。地 君は二人が胸の内固知ラせ給はねば　詞 早く

朝敵ャ討チ亡し。宸襟休め奉れと。地御簾さつとおりければ。諸卿各退出有ル。フシ義興公は討チ死と思ひ定メし御覺悟。是ぞ内裏の見納めと名殘惜げに。見返り〳〵。猛き心も打しほれしづ〳〵。御門ンに。キンさしかゝる。地思ひも寄ラぬ落し穴。踏込ミ給ふ頭の上。丈に等しき大石キの どうと落ッるを身をかため、兩手にしつかと。フシ請ケ留メて。詞ヱイヤウンと飛上り。ア、ラ心得ぬ此有リ樣 此穴へ踏ミ込ば。とたんの拍子に此石の 上より落ッる仕掛の工。扨は此義興を。なき者にせん爲に。佞人共の計ひよな。ハアおこがましや片腹いたや。譬いかなる磐石たり共。義興が爲には塊同前。去リながらかゝる非常の此石を内ー裏に置カんも穢らはしと。地兩手をずつと差のべて。築地の外トへ投ゲ給ふ。表に扣へし伏ブ勢イの。天窗の上へ落かゝれば。何かは以ッてたまるべき。押シに打れて十余人微塵に成ッてフシ死てげり。地殘りし者共身の毛立チ。天狗の所爲か魔の業か こはや〳〵と一チ同にフシ跡をも見ずして逃ゲ歸る。地凡人ンならぬ勇猛力ォ 末ッ世に。新田大明神ンと拜れ給ふも。大三重哥行ク末ヱは誰カはだふれん紅の花。案じ過ゴしを枕に語れ。ナヲスフシ諷ふ一トふし。媚ける。爰ぞ都の色里へ誰レも尋ネて九條の町キンヲクリ井筒が。内の居續は。新田小太郎義岑公。遊び勞れしフシ居眠りに。地太夫の膝を托手の。輿を催ほすフシ牽頭の小吉詞コリヤ〳〵五作我カ小歌ではお目が覺ぬ。昨日の意趣に一チ番ン參ろか。ヲ、望ミならやりかけふ。コレお玉殿。三絃頼む。地アイと返ンジ事に中居か三絃ン。しかつべらしく差向カひ。詞問ましよ〳〵。何ンでも問しやれ。問ーましよ〳〵。問ハしやれ〳〵。小袖は。羽二重。刀は正宗。坊主は。鉢才。お醫者は 寸ン伯。女

は。おもん。男は。お安ヤア待〳〵今のは。男にお安スとは。サア一ツ盃呑マさにや置カかぬと。地寄ッてかゝつてフシつぎかくれば。詞ア、コリヤ〳〵余り騒な姦しいと地云れて二人が。詞ソリヤ〳〵旦那のお目が覺メた。コレ太夫様ン。お目覺マしに此大盃キで。旦那へ一トツ上ラなされ。コレ五作子。主様ンは風引キなさつて。頭痛がするとおつしやつてじや。アイヤ〳〵其頭痛の。故事來歷彼水慈姑めが。おれ等はお前が。毒じやといふた格で。風等は太夫様ナフ小吉。ヲ、イノ三人に成ッて二人が淋しがるといふ。付合の通リ句の通リ。人交ずのちん〳〵こつてり。申シ旦那。内に計リござらず共太夫様を連レまして。東シ山か高尾の紅葉。イヤ〳〵おれは余ンり長カ逗留。今朝も兄貴義興殿から。大急用をいふて來タれど。またぶら付イて歸らねば。堅い顔で呵つて居やらふ。ハテゑいわいなせめてマア二三ン日。コリヤ太夫様ンのが御尤。淋しく成ルと歸らふとおつしやる。サアわつさりと酒にしよふ。中居衆。銚子と。地立チ騒げば。追イ〳〵出る中居共。詞さつきにいふてやりなはつた。江戸兵衛様か來なはつた。追ッ付爰へ。見へるぞ〳〵。地都では藝子と名付ケ東では。踊らぬ時も踊り子のすんとして又訛しきは夫者と町の藍こび茶物好キしたる袖裙も引カばフシ轉ばん其風情。地義岑公はじろ〳〵と。不思儀そふに顔打眺め。詞おりや江戸兵衛さいふた故。男藝者かと思つて居たりや。コリヤ美しい踊リ子だ。サイナ。あの子はナ此中江戸から登リなはつて。どふすべいかふすべいと。まだ詞が直らぬさかいで。有ル名は呼バいで。江戸兵衛様ンと仇名計リ呼わいナ。ム、夫レで聞コへた。ヤ申旦那。同じ兵衛でも少シの事で。助兵衛でなふて仕合セでござります。

アイきついおてらしさ。わつちや此間登いして。まだ勝ッ手をしらないから江戸詞を云ィやすによ余ンり笑つてくれなさるな。アイヤおれも上州の新ッ田で育つた故京の詞はなまけて悪い。ならふなら太夫などども、江戸の詞にしてほしい。アイお前の折リ〻そふ云ハんすさかいで。わたしも此間〻藝子様〻に江戸詞を習やんした、稽古にいふて見やんしよふさ江戸兵衞が 地胸ぐら取ッて。詞 コレナぬしや詰りんせんよ。わつちが方を打やつて 此中も丁子屋のみな鶴様〻の所へいかんしたを、子供らが見付ヶんしたはナ見なんしアノ。まじめな顔わい本〻にあつかましい。余ンり馬鹿らしう有リいすによ。ホ、、、ヲ、恥かしさフシ 袖覆へば。詞 ハ、、、、コリヤ太夫様ン出來ました。地 どふもいへぬさそゝり立チ一チ度にフシどつさ打笑ふ。詞 ナント小吉も五作も、閉口か、イヤモ。閉イ口の段じやござりませぬ 閉イ口次手に此所で 江戸役者の聲色を、やりかけ山。江戸兵衞様ン彈て下タんせ。是もお江戸に隱レなき 市川の團十郎で中ましよ 市川の、三ン升でせい。詞 ア、コレ〳〵いけもせぬ聲ハ色置キにしろ。南無三ン寶又付ヶた 折角つかい掛ヶた所をさめられ 痳病にならねばよいがさ。地 天窟をかけば中居のお玉。詞 江戸兵衞様ン。お前此中云ィなはつた。きやんこやら。わんさやら、喰付ヵ様なヶ喧嘩の身ぶりが見たいわいな。ヲ、又身かへ久リしいもんだよ、わつちや恥ヵしいによ。モ、、、そんな事ッたずつさ流しさ。コリヤよかろふ。地 所望〳〵さ口〻に、望めば立ッてフシ 身拵へ。詞 子供衆其帨巾取ッてくれなさ地 いふ間に五作が椽側の。布簾はづし、て當座の肩衣。詞 東西〳〵此所で京さ江戸さの喧嘩の身を致し分ヶます。 御神妙に御一チ覧下さりまし

よふ。其爲のお斷左様に 地烟管で枕をかち〳〵。詞マア上ミ方の出入リはナ。頭巾をかふかぶつて草履下駄にてかふいふ身ぶり。おつな胴聲を出して。コレ〳〵若イの。ちよと橋詰メ迄出て貰ひやシしよ。ちよと下に居て下ダされど。此様なまだるい事で日の短い時キの間にや合ハぬによ。江戸の喧ン嘩は帨巾をかふ打懸て　かふ肩を力キませて。何ンのこんだはつつけめ。人トを茶にしあがつたうぬが様な癡心漢は。鼻の穴へ花緒をすげて。何ンでも安ス賣リ十九文日和下駄にしてくれべい。いま〳〵しい置キ上カれホヽヽ、地こんな物だと打笑へば。皆一チ同に打こけて。フシ興を催す計リなり。地騷キの内に中居がさいばい。詞とかふする内夜が更ケた。モウお休ミと 地いふ鹽に然ラば旦ン那又明日チ。詞 太夫様ン江戸兵衛様ン。ヲヽ、皆太儀だ歸つて休ス め。そんならもふいなんすかへ。アイわつちもお暇お玉殿ンや。三絃ン箱頼ンますによ。ヲヽ、皆様ンよふお出たさばへ。アレ小吉様ンの又じやうだん。悪ル事しなさるな。詞 さるなは妙儀の隣なり。りなりの宮へ參らふか。らふかふかの物案じ。あんじ宜しう 地頼ミやすとどよめき連レてフシ立歸れば。地義岑公も一ト間の内ヲクリ温盤の へ床に入リ給ふ。地一ト間の内ぶつつかは面ふくらせし坊主客。

詞どいつもこいつも初會だと思つて。余ンりむごくし上カる。モウ來るか〳〵と賣レぬ根附ケを見る様に。蒲團の上ヱに待チぼうけ。地いま〳〵しいと云イつゝ傍見廻し〳〵。相圖のしはぶき二ツ三ツ。跡ぶ出る竹澤監物秀時。江田ノ判官景連有リ合ふ褥を携へ出。先ツ、是へとフシ招ずれば。地おめず憶せず褥の上ヱにつかと居りし大入道。尊氏公の執權職。畠山入道道誓とは云ハねどフシ顔に顯はれたり 地兩人は近カく

指シ寄リ。詞家内ィもふせり。倡妓共も寐させ置キ間を隔たる此座敷キ。とくとお談じ申シ上ん。ホヽ兼てより此入道天下に望ミ有ル故に。地防門ノ清忠と心を合ハせ。新ッ田足利威を爭ひ。合ッ戰に及ぶ樣に糸を引キせ。楠親子義貞なんども謀の圖をはづさせ。憤らせて討チ死させ尊氏一人に成ッたれば。詞折リを見合せ刺殺し清忠を王位に卽。此入道將軍職。お手前二人を兩執權と思へ共。地南ン朝に有ル新ッ田義興親にも勝る大ィこはもの。きやつが此世に有ル内は中ヵ〻大ィ望思ひもよらず。彼楠を湊川へ無理に追ィやつた其格で。尊氏追討の勅定ごかしじれさせて討テ死さすか。それ迄もなく討チ取ルかとさま〴〵の計略。詞サアそこを存ジて此判官。清忠殿としめし合ハせ。地南ン朝へ忍び込ミきやつが内裏を出る時。門ンの上に大石を上ケ置キ。下には落し穴を仕掛踏ば上ヱから落る樣に。工夫を以ッて拵ヱ置しに。詞サアお聞キなされ。兼て義興キ大力キにて二十五人ン力キ有リとの噂故。三十人にて持チ兼る大石キを。あたまの上から落し懸しに。宙にて請ケ留メ剩。手鞠か小石を投ゲる樣に。地築地の外トへ投出しッ此判官が伏セ勢ィ十三人迄討チ殺され。モ近ン年の大しくじり。詞イヤ〳〵そんな事では參るまい。此監物か思ひ付キには弟の義岑め。此廓へ入リ込しこそ幸ィ。きやつから取リ入一ト思案。ヲヽ其事は此入道も油斷なく。二人の家來を牽頭に仕立テて付ケ置ィたり。ハア此監物は義岑が相ィ方。臺と申ス女郎をたらし込マんと色ミの贈物。樣〴〵に拵てもこいつも賢き女にて義岑に心ン中立テ。むさと大事も明ヵされず。旁以ッて難ン義至ヽ極。其上水破兵破の矢は武運の守モりと成ル故に。尊氏公も御懇望。これも義興が手に入レば。地とかく

こつちが皆すかたん。ハテどふかなと三ン人が慾悪ぶ道の思案取リ〴〵。横手を打て竹澤監物有ルぞ〳〵上分ン別。詞某シは親入道ゟ新田方の幕下に屬し。方〻にて手柄も有リしが。地義貞討チ死の其後チは入道殿の御世話にて。尊氏公へ宮夫レからの思ひ付。詞ム、然ラはとくと一ト間にて。地示合ハさんいざこなたへと三人ンは打連ヲクリへ奥へ入にける。地思ひ〳〵の夢結ぶ座敷〳〵も子の刻過キ。一ト間を出る義岑公。詞ノフ臺其竹澤監物とやらはどふしてそなたを其様に。サイナ死ンだ娘こと私が顔が生キ寫し。娘じやと思ふ迚。紋ン日其外カ氣を付ケて様〻の贈物。地さくにもお前へいふ筈なれど。尊氏方の人なれば。どんな方便も計られずと。今迄お耳へ入リませなんだ。詞ム、今時の人心むさと氣は赦ルされずと。地咄しの半一ト間の内。はつたばた付ク物音ト人音ト。先ツ〳〵こちへと義岑公障子の。フシ蔭に立忍ぶ。地透間もなく入道道誓。懐劔持し竹澤が。腕捻上ケ怒の大聲。詞我レをたらして遊所へ引キ出し。寐首かゝんづ謀ト。ヱ、憎い奴ッと捻伏スれば。竹澤無念の齒がみをなし。詞己レが首を土産にして昔シのよしみ新田方へ。奉公と工しに。其方便の顯はれしは。地ヱ、殘ン念やと起返るを。刄物もぎ取リ入道が椽ゟどうど踏落し。詞ソレ判官。地心得たりと刀の背打骨も碎とぶち居る。竹澤息キもたへ〴〵に。手足をもがき七轉八倒入道聲懸。詞モウよい〳〵。一思ひに殺さんより世上の見ごらし逆磔。其松にくゝし付ケ。夜明ケての上成敗せん。イカニモ左様と地判官が。ぐつとしめ上フシ猿つなぎ。詞夜明ぬ内にいざお歸り。泥坊めは此通リ縛つて置ケば氣遣イなし。仕置キは家來に云ひ付ケん。フシイザ歸らふと兩人ンは。したり顔にて出て

行。地始終忍んで立チ聞臺。手燭携へ走リ出。庭に飛おり漸く禁解て耳に口。詞竹澤樣、監物樣と呼ビ生ケるフシ息吹返し詞ホ、臺ナ殿か忝ナい。我レも昔シのよしみ有レればこそ新田方へ奉公せんと兼々こなたへ賴め共、一ッ旦尊氏へ隨ひし某故疑ふも尤。地一トツの功を立テん迚仕損せし殘ン念やと。はら〳〵とこぼるゝ淚。臺も倶に貰ひ泣。詞ヲ、御無念ンは御尤。私を娘も同前ンに。地思召シて下さりますお心を疑ひてかふいふ時宜は私が科。こらへてやいのと取リ縋れば。詞コレ〳〵泣イて居る所でない。義岑公お入リの事は兩人ンがけどつたれば。地討ッ手の來んも計リがたし。早〳〵落し參らせよと。詞も終らぬ其所へ。どつと込ミ入ル捕手の大勢。詞ヤア〳〵義岑此家に居るをはかり知リ。入道殿の下知を請ケ荒濱軍次向カふたり。恥を思はゞ腹を切レと。フシ呼はり〳〵亂レ入。地臺を忍ばせ竹澤監物、物をも云ハずなぎ立ッれば。コリヤ叶はぬと大勢が表テをさしてフシ逃ケげて行。地いつの間にかはいりけん、障子の内カら荒濱軍次臺を小脇にかい込で飛ンで出るを。竹澤監物首筋摑んで引キ戾し。拔キ身もぎ取リ軍次が首フシ討チ落してつゝ立は。地障子開いて義岑公。詞ホ、監物疑ひ晴た。地當座の褒美と投ケ出す一ト腰。ハア有リ難き御惠。昔シに替らす御奉公。又も討ッ手の來タるは必定、君には早く御歸り奉公初路次の御ン供。ア、そんならお歸りなさんすかへ。隨分お怪我の地ない樣に賴ミますするとフシ臺か名殘リ。詞ヲ、我レは裏カら蜜に出ん。監物は表テカは委細承知仕ッる。イケ。ハアハット地表をさして。三重「走り行。謠一セイ千早振、神、の惠の石淸水、きねが皷も、聲すめり。地新田左兵衞ノ佐義興公。今日出ッ陣ンの龍頭鍬形打ッたる五枚

兜。緋威の御ン着長威有ッて猛き御骨柄。同ク舎弟小太郎義岑色香爭ふ若カ武者の。花の姿や小櫻おどし御ン供には竹澤監物秀時。其外カ家の子士卒迄万ン燈の火に映たる。鎧の金物武の光カり。實も。ゆゝしく見へにける。地 義興仰出さるゝは。イカニ旁。詞 此度朝敵足利尊氏。討チ亡せとの勅定なれ共。必定今ン度の一ッ戰ンは。はかぐ敷キ勝利有ルまじ。地 閫の外カは武將の下知。軍の事は臣ンに任カせ。時節の來るを待チ給へと色ミ諫申せ共。詞 親義貞には劣し器量。比興至極と清忠が惡ッ口。達て諫メは億するに似たり。地 先ン祖の名迄穢さん無念ンと。天ン運未至タらず共。正八幡ンの御利生。源氏を守りませと。詞 此宮居にあのごとく。神慮を仰ぐ万ン燈は。地 神ミの惠を頭に戴き。一ッ戰ンに討チ亡し宸襟やすんじ奉らん爲。詞 ヤアイカニ監物。汝ジは新參ンながら武藏の國の產と聞ク。敵地の案ン内よつく知ラん此度の先陣ンは汝たるべし。地 猶も忠勤勵むべしと。仰に監物頭を下ケ。詞 ハア、有リ難き御ン詞。新參の某シ。大役仰付ケらるゝ段武士の面目身の本ン望。地 君の武勇に聞キおぢして。脚腰立ぬ足利勢イ。味方は一ッ致の逸武者。只一ト揉に踏破る味方の勝利疑ひなし。片ン時も早く御出ッ陣ンと。万ン卒フシ一ッ度に悅びの。地 聲に勇ミの御大將。詞 イザ神ン前へ御暇。賽もうしの拍掌の。地 音トかあらぬか砂煙ぱつと吹キ來る風に連レ。一チ度に消る燈籠の。皆とこやみの神ミの告線に。フシ殘る一ッ燈の。光カりは薄き武運かと。胸に當タりし義興公。所詮勝利はない身ぞと。極メめし上に極メる覺悟。心に徹して小太郎も。あら心得ぬ此不思儀。詞 尤火を烈敷クなすも風。消ユるも風とは云イながら。燈し立テたる万ン燈の。一チ時に消しは今度

の一ッ戰。敗軍ンとの告成ルか。御身の上も覺束なし。地 とくと賢慮を廻ヶらされ。然ヵるべしとの給へば。竹澤進んでコハ義岑公の仰共存ンぜず。詞 神ン力キ勇者に勝ッ事あたはず。何の是式キに神ミの告ヶ。今南ン朝北ク朝と引キ分ヵれ。威勢イにはびこる尊氏が。峙たる万ン燈を。地 眞此 ごとく打消て。南朝一ッ統の世になさんとの知ラせの一ッ燈。目出度キ奇瑞に候と底工有ル秀時が。フシ 詞を錺つて申シける。地 義興莞爾と打笑給ひ。詞 ホヽよくも祝ひし盥物。義興思ふ子細有ば。義岑は只一チ人蜜に都へ立チ歸り。禁庭の守護怠るなと。地 仰に義岑大キに驚キ。詞 コハ兄上への詞共覺へず。一ッ旦御供申せし某シ。目前ン怪敷神ミの御告。彌以ッて心得ず。片ン時もお傍を離る事は思ひもよらず。地 生キるも死スるも兄弟一ッ所。但シ用に立ヶぬ腰拔ヶと思召 ての御事かと。云ハせも果ずイヽヤ左にあらず。詞 命を捨ッるは君の爲。子孫を殘すは家の爲。先ン祖源トの頼光ゟ傳ハりし。ヵイ破兵破の二タ筋の矢。敵足利尊氏も同ジン清和の流レなれば。兼て望と聞キ及ぶ。參ン内の折からも。清忠が支しかど。地 君ン恩ンの有リ難さ。某に下し給はりしは。キン弓矢の冥加家の譽。詞 戰ン場に持ッならば若運盡て兄弟一所。討チ死せんも計られず。左有ル時は家の重寶。敵方へ渡さんは先ン祖へ不孝武名イの疵。又心得ぬは坊門清忠。必ッ定朝敵一ヵ味の族。地 我レミ都を出るならば其虚に乘ん彼レ等が工。我レに替つて君を守護し。必 忠勤怠るな。天の命數限キり有リ若シも運ン命盡キ果て身は戰ン場にさらす共。名は末ッ代に輝さん。汝シは都へ立チ歸り。時節を待て消殘る火影のごとく源トの。氏の光りを輝やかせ。南ン朝世ミの忠臣と末代に武名を上ヶよ。詞 此詞を用ひずば。未

來永〻勘當ぞと。地必死と定し武士の口には云で心には是今生の別れぞと。さしもゆ〻敷キ御大將ッ恩愛離別の。フシ目の內に滿る。キン泪の伏勢を防。智謀はなかりけり。地義岑も勘當との。重き詞に詮方も。泪を押サへて。詞ハア畏り奉ッる。勝負は時の運ンなれば。譬敗軍有ル迚も。必短慮に思さず共。目出度凱陣待チまする。ホヽ聞レ入ッ有て滿足〳〵。今汝シにあたへ置ク二タ筋の矢を心のかため。二張の弓の名を取ルなッ。詞ヤア〳〵めん〳〵。篠塚八郎重虎は軍勢催促に遣はし。此所には有ラね共斯と下知を傳へたればッ追イ〻跡ゟ欠付ケん。地イサ出ッ陣ンと。仰の內キン引キ出すお召シの白栗毛に。ゆらりとフシめせば。地義岑は見上見おろす血筋の別れ。武士の盛りを吹キちらす無常の。嵐櫻井の親子の思ひ。楠が名は盤石と堅たる。義心ンに劣ぬ義興公障泥立チたる。鐙の鳩胸隼の。翅と駈る駿足の跡に隨ふ諸軍ン勢。飛かごとくにッフシかけり行。地跡に義岑しみ〴〵と。肝にこたゆる同袍の別れに心。しほ〳〵と。影見ゆる迄。伸上り。見送クる影も籏の手の。次第〳〵に遠ざかれば泪を。ふくんで立ッたる折から。思ひがけなき宮居の陰。どつと上ケたるフシ時キの聲。地スハ何者の寄スするぞと。傍を睨で立ッたる所に。詞ヤア〳〵ホッ田小太郎義岑。見ン參ンと聲かけて。地キン跡を飛す。駒下駄や半太夫ゆり上ケ裙の八文ン字。どんなお敵キも。キン弓張の目元トの月や花の顏。戀の。臺が寄セかけて。いきとはでとの。キン討手の大將。跡からどや〳〵禿末社。詞ヤアそなたは臺ナ。コリヤどふじやと。地力キ身し腕も拍子拔ケ。敵は敵でもフシ悄からず。地臺は傍見廻ハして。詞ヲヽあの悄クりの顏わいナア。いつぞや廓の別れの時キ。兄御樣と御一ッ所に。武藏とやらへ

軍仕に。いかねばならぬとおつしやつた。聞くと持病の此痞。どふぞいかずと濟むよふと。神〻樣へ立願やら。はだし參りのかいもなふ。けふは出陣なさるゝと。聞て身も世もあられぬ故。お顏が見たさ逢たさに。地あの衆頼んで遠い道。來事は來ても大勢の。詞侍樣方兄御樣の前といひ。物いふ事もならぬ品どふかかふかと思ふ内。結ぶの神〻の義興樣。都にお前を殘すとは。粹の上もりヲヽ嬉し。エヽ何じやいナ濟ぬ顏して。人の思ふ樣にもない。地憎い男と鎧ごし。詞ヲヽいた。つめつても擲いても。こつちの手が痛む計。コレイナア。エヽそんな機嫌じやないわいの。どふ思ひ廻しても。一所に行ねばと兄上の。御身の上も覺束なし。アヽ申〳〵旦那。お前をやつては太夫樣が此五作がきつい難義。ヲヽ夫〻。太夫樣もよく〳〵に思召ばこそ。傾城の。晝寐ぬ程に思ひ詰。どふぞ今一度お顏が見たいと。屋敷方の女中方が。芝居行か何ぞの樣に夜の九ッからどつさくさ。道は飛やらかけるやら。外八文字も一文字。所にやんだお前の出陣。悦び事の我等が趣向。地お敵の旦那を討ッてしめる寄手の大將太夫樣。四方を取巻此鎗手。亂調に打太鼓持。廣げる指の亂杭逆茂木酒肴。詞兵粮のコレ〳〵〳〵〳〵此提重幸の幕の內。地跡賑はしに呑かけふ。堅い妾のお床入。詞コレ門出の笑ひ本サヽ、作り物や乾物ものとは違ふ。生の物を生でお目にかける。サア〳〵地お出と無理やりに。キン道に弱る色の道。女のよれる神がきに是非なく引れ入給ふ。地跡に二人はしたり顏詞兼て望の彼一物。引たくつて主人へ渡せば褒美はずつしり。色男でも道の義峯。

あら立ては事の破れと。地幕を覗いてうまいぞ〱。詞例の大酒のとろつぺきアノ紛れに奪取ん汝は傍りに眼を配れ。ヲ、サ合點首尾よくせよと。地小吉は幕へ跡には五作。四方に氣配り忍び足なんなく御矢盜取り。小吉が小聲に上首尾〱。詞是さへ取ば義岑を。ぶち殺すは手間入らず。片時も早く主人へ手渡しサアこいと。地逸足出してかけり行。地俄に騷ぐ幕の內。かけ出る義岑に。取付縋る臺も倶に引摺れても放さばこそコレ〱申殿樣。吃相かへてコリヤ何事。なんぞ夢でも御らふじたか。コレ氣を鎭めて下さんせ。ヤア何事とは。兄義興が預りし大切の二筋の矢。思ひも寄らぬ紛失。兼て尊氏懇望と聞。敵方へ奪れては。味方の不吉我落度。地兄上への申譯と。差添拔手に取付臺詞イヤ〱放せ。マ、、、マア待て下さんせ。ヲ、道理じや〱が。コレ申今お果なされては。誰が殘つて御矢の詮義。兄御樣へ此樣子。申上る人もない。もふかふ成た上からは。再び廓へ歸らぬ胸。身を碎ても詮義して。其上で叶はずば。わたしも一所に冥途のお供。地死る命は惜からねど。此御難義も皆私故。詞コレ堪忍して暫くの。お命ながらへ地野の末。山の奧迄も夫よ。妻よと呼び呼ばれ。一所に居たらわしや本望。思案して下さんせと。女心のくど〱と跡や先立淚〱。詞ム、尤よく云た。此所で相果なば。盜賊の僉義もならず。犬死と成骸の恥辱。一先此場を立退て。草を分つて御矢の行衞。地定めなき身の俄旅小褄引上帶引しめ。身拵する間もなく。引返して二人の牽頭。跡に付添數多の家來。ソレ討殺せと追取卷。詞ヤア合點の行ぬ二人の

奴原。扨は御矢を奪取しも。僻等二人に極つたナ。何國の誰に頼れし。サア眞直に白狀せよ。ヤアちよこざいな詮義だて。引くゝつて主人へ土產。地アレ打居よと聲に連。捕たとかゝる身をかはし。投すへ蹴すへ踏飛し。手をつくして働けど。敵は大勢身は一ツ。見るにハア〳〵臺が案じ助ん方便も女業。群る大勢義岑の。手取足取打倒し。既に危き折こそ有。篠塚八郎爲虎は主君のお供の後ばせ。かくと見るゟ飛かゝり。家來を投退踏ちらし。詞様子聞間も足弱連。此場を一先。落させ給へ早ふ〳〵と見送つて。地宮居の前に鳥居立。遁さぬやらぬと家來共。兩足兩腕數十人押どしやくれど動ばこそ。詞にこ〳〵ほや〳〵打笑ひ。ム、ム、ハ、、、うつ虫めらがほでてんがう。新田の御內に隱なき。四天王と呼れたる篠塚伊賀守が嫡子八郎重虎。此兩足ははへ拔の。大佛柱を鼷鼠。動かぬ事いかぬ事。助けた迚殺した迚。高の知たる下﨟共。早く此場をなくなれ〳〵。ヤア下﨟とは推參〳〵。畠山入道の郞等石原丹治逸見傳吾。姿をやつし義岑を。討取方便の牽頭。一ばい喰せて奪た御矢。主人へ渡せば新田の滅亡。廣言吐前髮首。さらへ落せと切込刀。地柄と拳を一握り。ヲヽそふぬかせばモウ助ぬ。御矢の盜賊觀念と。一振ふつて打付られ。ソレ遁すなと下知の下。どつと馳寄雜人原。引つかんでは人礫ばらり〳〵と三重へ投ちらす。地無法不敵の石原逸見。透を伺ひ切かゝる。身をかはして鐵拳。素頭ぴつしやり石原藥鑵兀あたま。みぢんに碎け逸見傳吾。一度に息はたへにけり。地ヲヽ氣味よし心地よし、御矢の有所は畠山。都に有は一大

事。かくと様子を若殿の。御ン身の上も覺束なし。一ト先館へ。イヤ〳〵先ッ我君に追ッ付イて事の次第を申シ上。思案ンぞ有ランあら金の。土砂踏立ッる猛虎の駈。獅子忿迅の勢ひは。實も新ッ田の十六騎。其隨一チの勇士の挙。父も父たり子も子たり。キン二代の忠臣シ篠塚が武勇を代々に傳へける。

第二

謠月キの名イ所を引キかへて。爰やかしこの鯢波。地 矢並繕ふ小手差原。霰たばしる武藏野の。空物凄きフシ氣色かな。地 新田左兵衞佐義興公。勅命イもだし難ければ今ン度の合ッ戰ンは。討チ死と覺悟極めし軍サ立。馳違ふ馬煙太刀の鍔音天地に響。日を招く。魯揚が勢ひ山を拔。項羽が力ラも是にはいかで增べき痿す去ぬ戰ひに。さしも多勢イの鎌倉勢イ。フシ色めき立ッて見へにける。地 追イ來る敵を喰留メんと。鎌倉方の侍イ大將。江田ノ判官景連家の子郎等前ン後を圍。太刀拔キかざし懸向カひ。手を碎たる働きに勝チほこつたる官軍ンも少シしらけて見へたる所に。詞 ヤア比興々旁。竹澤監物秀時キ是に有リと呼はつて。地 判官目懸ケ討ッてかゝれば。家來は主を討タせじと。懸塞るを竹澤が縱横無盡に討チちらせば。叶はぬ赦せと迯ケちるを。遁さじやらじと追ッかけ行フシ其隙に。地 江田判官漸と迯ケのびて味方の加勢を松原に。フシ 鎧好キして居る所へ。地 取ッて返す竹澤監物まつしぐらに懸ケ付クれば。判官も駈向カひ丁〳〵はつしと渡り合イ。暫しが程は戰ひしが双方太刀をからりと捨。互イにむんづと引ッ組ンで。ゑいや〳〵と揉合イしが。傍見廻ハし

起上り。フシ塵打拂ひ小聲に成。詞ノウ判官殿其以來は。サレバ〳〵敵味方と隔れば互に普通の取遣計り、シテ其元の手都合は。いかにも彌上首尾〳〵。初の程は義興めも中〻微塵も氣をゆるさず。サ欺すに手なしと此監物。さま〳〵の忠節顏。今では譜代同前に心置なく軍の相談。夫は重疊。兼てしめし合せし通いつでも貴樣が討て出ると。味方は迯る。貴樣は追。手柄にさせて義興に。取入せんと思ふ故。先程は此判官も足早に迯申た。イヤモどふもいへぬ迯ぶりよつ程下地が有てふな。ハヽヽヽとフシにが笑ひ詞コレサ監物殿。義興が氣を赦すこそ幸。飛かゝつてすつぱりは。イヤけもない事〳〵。そふ早まる故先達ても吉野で貴樣大しくじり。しる通り力は強し。打物取ては鬼神同前。古今に稀な早業手利。ハテノフそんなら所詮いけまいか。サいかぬ所をやるが工夫。釋迦でも喰せる我等が方便委しくは此白紙と。地渡せば取て不審顏。詞何此白紙が思案とは。ヲヽサ假初ならぬ蜜事の計略落ても人の見ぬ樣に。此白紙認め置水にひたせば皆讀る。コリヤおそろだ。出來た〳〵上分別と。地點き呫きフシしめし合する折からに。地又も聞ゆる人馬の音。詞ヲット任せと渡り合。二打三打。地仕組の狂言迯るをやらじと竹澤監物。返せフシ戻せと追て行。地義興公は只一騎。脩氏に近寄て一時に勝負を決せんと駒を早めて駈給ふ。大將と見る方も。一度に寄來る鎌倉勢〳〵。八方〻取圍。我討取んと切てかゝる。詞シヤ物〻しやと懸向ひ。追かけ追詰切まくる。地神變不思議の太刀風に。吹ちらされし木の葉武者。むら〳〵ばつと。フシ迯て行。

詞ヤア數にもたらぬ。雜兵共うぬらを目懸ヶる義興ならず。イデ尊氏に見ン參ンと。地乘り出タさんとし給へば。馬は俄に高嘶き打どあをれど動ねば。詞ム、扨は此しげみに伏せ勢ィ有りと覺へたり。シャ何程の事有ランと動ぬ馬をあをり立テ。かけ出し給ふ後ロ方。案に違ず武者一人。鐙の上に蓑打かけ顏を隱せしがんどう頭巾馳行ク馬の尾筒を抓で引戻せば。詞ヤア推參成ル曲者。討チ放さんは安スけれど此義興が乘たる馬を引キ留メんとはホ、、、、しほらしゝ。ならば手柄に留メて見よと。地一ト鞭當て駈出す。馬は駿足乘り人は達者。踏出す足なみどう〳〵〳〵。鐙の金ナ物から〳〵〳〵。互ィのかけ聲鄣泥の音ト。谺に響武藏野にまだ枯殘る初ッ冬の芒かるかや敗醬亂。散てぞ三重「もみ合しが。地きやつもしれ者踏モとゞめ引ィつ引カれつ爭ふ内。地頭巾ンは脫て見合ハす顏。詞ヤア其方は我カ家來ィ由良兵庫ノ助信忠。ム、其意を得ざる今の振舞。南瀨ノ六郎と其方は。我家の政務を任カせ古鄕新田の城を守モらせ。妻子を預ヶ置ィたるに。城を打捨來るのみならず。今尊氏を追ッかけんと。乘り出せし此義興が。邪魔せしは所存ばし有ッての事か速に返答せよと。以ッての外の御ン怒。地兵庫ノ助は義興の姿を見上ヶ思はずも。はら〳〵と涙を流し。詞君勅命を蒙り給ひ。大將たる御身にて。匹夫の勇を好せ給ひ。かくかろ〴〵敷キ御振舞。千ン斤の弩は鼷鼠の爲に發たずと。申ス事は申さず迚もよく御存ジ。都而此度の軍サの樣子。日々注進の趣にて。とくと思案ンを廻クすらに。日比の軍慮に違はせ給へば。必定今ン度の御出ッ陣ンは。討チ死との御覺悟と。睨だ眼コに違ひは有ラじ。是非御留め申さんと御館には六郎を殘し置キ。蜜に來つて樣

子を伺ひ。御所存とくと見定たり。地御氣に障る事有共。恥を忍び身をこらし。年を重ね日を積ねば大功はなしがたし。一旦の御怒に御身を失ひ給ひなば。誰有て天子を守護し。朝敵を亡して。公家一統の代となさん。エヽ情なき我君やと。或は怒或は歎き。詞を盡し理をせむれば。地義興公も内裏の首尾。我胸中を打明て。物語んかいや〳〵。彼に打明語りなば。行先へ付まとひ諫んは必定。所詮決せし覺悟なれば。止めらるゝも六ケ敷と。さあらぬ躰にてイヤトヨ信忠。詞夫は皆汝が廻り氣。討死の覺悟のとは。思ひも寄ぬ一言目に餘る敵の大勢。士卒の心を勵さんと。手をおろしたる我働き。イヤ〳〵いか程に御意有ても。此兵庫が有内は。一騎立の御働きは金輪際お止め申。敵陣は此兵庫が。一當て御目にかけん。君は暫く御休足と。蓑脱捨て一さんに。敵陣さしてかけり行。地大將の御座所尋さかして味方の軍勢。井ノ彈正を始として。追〳〵に欠來り。一息ほつとつぐ所へ。己が工を押隱す惡には智惠の竹澤監物。首二三級引提來り。實撿に備れば。地大將御覽じ。詞監物。度數の高名手柄〳〵。軍の様子はなんと〳〵。さん候頃日數日の戰ひにて勝に乘たる御勢に。兵庫が荒手差加り。手ひどき味方の軍配に。地勞れ果たる鎌倉勢。尊氏を始として鎌倉さして迯のびたり。此虚に乘て責討給はゞ。敵の大勢皆殺しと。工を隱す勸めの詞、地こなたは固討死と。覺悟極めし軍なれば。いつの時をか期すべきぞ。天下の爲には。朝敵我爲、には親の敵尊氏を。討ずんば再び生ては歸るまじ。いざ追かけんと陣觸せよと。勇にいさんで乘出

し給ふ向ふゟ。欠ヶ来るは由良兵庫ノ助　信忠かくと見るゟ引ッ提し。敵の首投ヶ捨て。轡づらをしつかと取詞コレ殿。最前シも此兵庫が。詞を盡し申シ上しに。まだ御合點シが参りませぬか。ヱ、淺間しき御所存シ。◗日比に替ハりし御振ル舞ヾ。天シ魔が見入レしな。一ッ旦負し尊氏なれ共。地鎌倉へ引キ籠らは中カ〻容易責メがたし。一先ッ古郷へ歸らせ給ひ。英氣を養ひ時節を見て。討て出るが万全の謀と。お馬の口をフシ引ッ返せば。地せきにせいたる御大將。放せ〳〵とあせれ共。こなたは手強き忠義の一チ圖。ヱ、面倒なと義興公。陣扇にて兵庫が顏。目鼻も分カず丁〳〵〳〵。打ど擲けど放ナさばこそ。詞ヤア出ッ陣の先キを折。味方の英イ氣をくじく曲者。敵に一チ味か二タ心か。勘シ當じやそこ立チされ。主従の緣シ是限りと。地扇を顔へ投ヶ付ヶ給へば。ヱ、御勘シ當とはお情ヶない。何國迄も御諫メと。又も縋るを鐙にて。蹴飛し〳〵あほり立テ。諸軍一チ度に進行。地跡に兵庫は呆れ果。留メめても留マらぬ御若氣。ヱ、是非もなき次第やとどつかと座して男泣。詞譬御勘シ氣蒙る共。追ッかけて御諫メと。地立チ上る折りこそ有レ。さつと吹キ来る飈。木の葉土石を卷キ上〳〵。傍に捨たる陣シ扇。俱にフシ虚空へ吹キ上クれば。地兵庫は急度眼コを付ヶ。詞ア、ラ心得ぬ此有リ樣。捨置カれし陣シ扇。土石キと俱に吹上ヶしは。我君の御身の上。地善シか惡クか何にもせよ。扇の行方を見屆んと跡を。したふて　三重「行空の。地上野の國新田の庄義興公の居城といつぱ。上は嶮岨の山續き。松の古木の枝たれて。雲なき龍かと疑はれ。下タはきり岸傍つて晴ざるキン虹かとあやまたるフシカヽリ塀には矢間透もなく。亂杭逆茂木引キ渡し。要害堅固にフシ見へにける。

フシ比しも、小春、中空や、味方の勢の木枯に敵を木の葉と吹ちらす　武藏野の勝軍御壽き有べしと。御臺所築波御前まだ三歳の德壽丸。乳母が膝にフシいたいけ盛。お傍の女中立かはり敵にかち栗熨斗昆布、銚子取り〱持運ふ。お家の家老由良兵庫助信忠が妻の湊。一子友千代を乳母に抱せ手づから捧る嶋臺も　君を祝する鶴龜にやたけ心の味方の手柄　松に寄せたる御壽き御前に直しフシしとやかに。詞御勝軍の御祝義お目出度存ますると　地申上れば御臺所　詞ホヽ湊か毎日の出仕大義〱　殊にけふは勝軍の祝義迚心の付た上物。是まで日毎の注進に一度も惡い沙汰もなく。十一分の味方の勝。殊に一騎當千の兵庫助も。跡から加勢氣遣ふ事はなけれ共。地くど〱思ふは女の常若や深入し給はんかとよければよふて案じられる。詞イエ〱そこはぬからぬ私が夫勝て兜の緒をしめる御用心させませんと。跡から參る程なれば。殿樣のお身の上夫の事に案じはなけれど。私が弟の篠塚八郎。まだ年若な氣丈者。仕損じも有ふかと。是計が心がゝり。イヤ〱八郎が手柄の樣子。とくな委ふ聞て居る八幡での働き流石お家の四天王。伊賀守が子程有迚一家中の譽沙汰。ヲヽよい弟を持やつた。アレ見や友千代があの氣丈。同年でも德壽よりは大がらに見へるはいの　兩親の血筋どちらへ似ても強からふ。此若が能片腕と。地殘る方なき御機嫌に詞ハア有難いお詞本に夫よ。御家中の內、儀達御祝儀申上ん迚　お次に扣へて居られます。ヲヽそれは皆大義〱是へ通せのお詞に、地お侍女中の案內にて一家中の妻女達連ヲクリへ御前へ立出る。フシ思ひ〱の嶋臺や。おさら

じと氣を播磨潟。君の御名もウタイ高砂や敵をさつと掃ちらし。地首をさらへの尉と姥ヲクリ五十。餘りの年ばいは流石思案の底深き。井ノ彈正が妻の水木。キン谷の戸出る鶯の笠に縫てふ梅の花。フシ勝色見せし先陣に。心は世利田右馬之助が宿に殘せし女房お鈴。云ねど薄き唇の滞なき口上は立板に水長臺に富士の裾野の思ひ付。フシ君の名字に仁田ノ四郎。夫も籠れる武藏野に組で臥猪の牙よりもフシ運の月形鎌倉武士。三國一の高名も時に大嶋長門が妻。お浪といへど浪風も治る武功君が代は。千代に八千代にさゞれ石フシ巖の上のキン釣竿は。軍の先生名も高き。キン太公望といふ人かと。女中は寄て其譯を土肥ノ三郎左衛門が。比翼と契るフシ女房お辨。道具や七福神の船遊びしつかり入た兵糧を。キンかつぐ布袋の。福祿壽キン身をかためたる毘沙門小手。鰕で夷の大敵を。釣寄せてフシ打出の小槌。地市河五郎が勇力をしめてぬる夜の睦言はつがも内儀の名もおつが逆。家中名うてのフシぼつとり者。地キン其外お家昵近の女房娘殘りなく。皆それ〳〵の捧物廣間せましとならべ置。詞勝軍の御壽きお目出度存じますると。地一度に開く口紅や。つらりと並ぶ襠は。染井の躑躅飛鳥の花。眞間の紅葉に胡枝花寺を一に寄せたるごとくにて花〻。フシ敷ぞ見へにける。地御臺は御機嫌うるはしく。詞何れも揃ふて奇麗な事。爰では皆も氣が詰らふ。奥へいて緩りつと。酒でも呑でたもやいの。友千代も寐たそふな乳母も共に地お詞に。ハット一度に群鳥の立や姿の柳腰、キかいどりの裾長廊下ヲクリざゞめきへ連て入。跡へ。地是ぞお留守の要石動ぬ胸のしめくゝり。南瀨ノ六郎宗澄出仕の上下さはやかに。金作りの大

小も流石お家の家老職と。云ハねどしるき其人品フシしづ〳〵と打通り。詞先ッ以ッて今日は。勝チ軍の御祝儀恐悦至極と相ィ述れば。ヲ、六郎か近カふ〳〵。兵庫が行きやつて其後は。軍の知せはまだないか。ハア相役の兵庫ノ助申シ上クべき子細有ッて。軍サの場所迄參りしかど。未便リも是なしと。地噂取リヽ成ル所へ。取リ次キの女中立チ出て。詞武藏野の軍場な。兵庫殿の凱陣ンと。フシいふ間程なく。立チ歸る由良兵庫ノ助信忠。御座を積る苦勞の黑革威差詰マりたる胸板や。キン軍サ出立チを其儘に。本フシしほ〳〵として立チ出しが。御前を見るな。ハアハアと計リに兩手をつきフシ指俯いて詞なし。地心ならねば女房湊。詞思ひの外カ早いお歸りそして常ならぬ御顏持チ。御臺樣のお案ンじ。どふいふ譯かついちよつと。地申上たがよいわいなと　せけばせく程屈詫顏。詞何を女の小さし出た。御諫言がお氣に障り此兵庫を御勘ン當。御出ッ馬のお供も叶はず。なま面さげて歸つたはやい。ヱ、御勘ン當とはどふいふ譯。地何科有ッてと驚く女房。御臺所も御不審顏六郎は摺寄て。詞御諫言の其子細は。サレハサ。勝ッに乘ッたる御ン大將。竹澤が勸にて。鎌倉を責落さんと。逸切ッたる御出ッ陣ン。其意を得ざる御振舞と。地申ス詞も終らぬ所へ。間近カく聞ゆる轡の音トゝ　コハ何事と見る所に。御注進と呼バはり〳〵表テ御門ンに馬乘リ捨。篠塚八郎重虎。鐙に立ッ矢蓑毛と折掛ヶ。眞一チ文字にかけ付ヶしが。ハツト計リに息キ切レし。悶絶すれば湊はかけ寄リコレ〳〵〳〵。詞氣を慥に持ッてたも。八郎のふと　地呼ビ生ヶる。六郎は聲高カノヘ。詞日比の勇氣に似合ハぬ振廻。後れたるか八郎。比興〳〵重虎と。地呼バはる聲の通じてや。むつくと起れば。ノフ嬉しや氣が付ヶたかと。悦ぶ姉取ッて突退どつかと

座し。詞深手に弱る八郎ならねど。心せかれし早打チに。悶絶せしか口惜やと。地歯がみをなせば六郎は詰メかけ／＼。詞様子はいかにサ何ンと／＼。されば我君には。武藏野の御出ッ馬ガ。勇にいさむ味方の勢ィ。我レおさらじと乗リ拔／＼鎌倉さして責寄スる。地兼て計し竹澤監物。江田ノ判官と心を合ハせ。詞矢口の渡しの舟底に。穴をくり明ケのみを差今やおそしとフシ待ッぞとは。夢にもいざや白栗毛の駒に。鞭打我君は諸軍ンに先キ立駈拔ケて。彼御ン舟に召シ給ふお供に隨ふ武士は。世利田大嶋井ノ彈正土肥市河を始メとして。主從纔十一騎ゑい／＼聲にて押シ出す。固名高カき玉川の。余所の時雨に水かさ増り。矢を射どき川中カにて。詞兼て仕組の舟ナ子供怪我のふりにて櫓を取落し。舟底ののみを拔キ。地水イ中へ飛入／＼行キ方フシしらずくゞり行。地向カふのキン岸には江田ノ判官こなたには竹澤監物。伏セ勢どつと押シ寄せて。射矢は霰舟には水。譬翅の有ラば迯遁れがたなき御有リ樣。天ン魔を欺く我カ君も。叶はじとや思しけん鎧脱間もあら無念ンやと怒の御ン聲諸共に終にあへなくフシカヽリ御生害十人ンの人々も。思ひ／＼に腹かき切リそこはかとなく成行ケば。追ミ馳付味方の軍勢。大將失させ給ふ上は。生キ存命て何ニかせんか。敵陣へかけ入／＼一リ人も殘らず討死と。聞クガハツト人トミは。余マりの事に詞も出ずフシ呆。果たる計なり。地一ト間の內には家中の妻女。聞クに絶兼聲を上ケ一チ度にわつと泣出す。八郎は息キつぎあへず。詞此事お知ラせ申さんと。暫時の命ながらへて。君のお供に後れたり。何れもさらばと地いふより早く咽吭をぐつと貫きフシ息キたへたり。地湊は死骸に取リ付ィて。詞コレ八郎。殿樣の御遺言。お尋ォ遊ばす御用も有ラふに

早まつた此最期。コレ 地 のふ〳〵と縋り付きあなたこなたを思ひやりかつぱと伏して泣居たる 地 御臺所は怏然と歎きに心空蟬のもぬけのごとくにおはせしが。地 漸心や付たりけんしほ〳〵と立上り乳母が膝に居眠りし若君を抱取。詞 コレ徳壽。稚けれ共大將の子。とつくりとよふ聞きやや 父上は敵の爲にはかなくお成りなされたはいの。母も一所に行く程に。そなたは早ふ大きふ成り。敵を討つて父上の修羅の恨を晴してたも。地 官軍の惣大將義貞樣の孫君。淸和源氏の嫡流と生るゝ果報は有りながら。二人りの親に別れなば誰を便に成人せん。母が歎きも父上の最後も夢のすや〳〵としらぬ寐顔のいとしいぢらしやと抱しめ〳〵落る涙と泣聲に。御目をさ覺し若君は。詞 いやじや〳〵聞ぬ〳〵。赤かぼしいと。地 嶋臺の舟に取付わんばくも。詞 ヲ、數有る臺の其中で此舟がほしいとは 地 船の中にて果給ふ。父上戀しといふ事を自然と虫が知らせたか。思へば〳〵淺間しや。場所も多きに船の內。前後の敵に取卷れ水におぼれて御生害。文彌 此世からなる地獄の責。詞 嘸御無念口惜かろ。そふとはしらずたつた今迄祝ひざゞめく此嶋臺。地 舟と聞くさへ恨めしい。七福神の富榮も。夫に別れ何かせん。鶴龜の千代萬代齡は嘘か僞りか サハリ 高砂住の江相生の松にも夫婦は有る物を。はかなき我身あぢきなの世の中や。祝ひは却て逆樣事。此嶋臺もいま〳〵しいと取つて投ほり押碎き物狂はしき風情にて。泣涕こがれ伏し給ふ。地 六郎も顏ふり上。詞 此度の鎌倉責。其意得ずとは思ひしかど。道にて變の有んと迄は。思ひ設ぬ御災難。周の昭王漢を濟に。船人共是を惜み。膠を以つて船をかため。

川中に至る比。膠蕩て船砕け。水中にて失ひし。方便に等しき竹澤が謀。某御供するならば。仕様模様も有ルべきに。地エヽしなしたり口惜やと。無念ンの拳手の裏へ爪も通らん風情にて涙の玉のばら〳〵〳〵空にしられぬ村時雨餘所の。見る目も哀なり。地一ト間の方には女中の聲〴〵。詞御家中の内方達チ。君の御最期面々の夫トの別れを悲しみて皆々自害致されしと。地聞イて驚ク人〴〵より御臺所は心付キ。詞ハア死ニおくれたりさらばぞと。地守刀を抜放し。自害と見ゆれば湊は押シ留メ。ヲヽ悲しいはお道理ながら。今お果て遊ばしては。若君様のお身の上。地イヤ〳〵最早かふ成御運の末。生キてうき目を見んよりは死せてたもと争ふを。六郎及物もぎ取ッて。詞ヱヽ御短慮成ル御振舞。お家の事も若君の事も。忘れての御生害ならば御勝手次第と 地呵られて詞スリヤ死ヌるにさへも死れぬは地よく〳〵因果の此身かと歎けば湊も諸共に。お道理様やと計にて。フシ又さめ〴〵と泣居たる。地かゝる歎キの折りこそ有レ物見の軍ン兵かけ來り。詞我レヽ遠見致せし所。遙向ふに高煙。數多の軍勢此城へ押シ寄ると相見へたり。地御用心ンいへとフシ言イ捨て又引返す。地コハそもいかにと御ン驚キ。兩人ン騒ず扱こそ〳〵。詞竹澤の軍ン勢共押シ寄スると覺たり。先ツヽ奥へ御ン入と。地湊が介抱漸とヲクリ一ト間の。內へフシ入給ふ。地六郎は心せき。詞ナニ兵庫殿。固無勢の此城へ。勝チほこつたる竹澤が。大イ軍を引キ受て。貴殿ンの軍ン慮は何とでござる。イヤ先。貴殿の御工夫は。此六郎が存ズるには。我君の吊ひ軍サ。命限り敵を防。叶はぬ時は城を枕。討チ死の外思案ンはござらぬ。シテ又貴殿ンの御思案ンは。此兵庫が存ズるには。寡は衆に敵

すべからず。及ばぬ事に犬死せんより。兜を脱旗を巻き。敵へ降るより外ヵはござるまい。ム、何敵方へ降參とは　氣が違たか狼狽たか。イヤ氣も違ずはず狼狽も致さね共　所詮叶はぬ腕立せんより。降參するが當世かと存る。貴殿もとくと分別有れと。地 落付ク程猶せき立ッ六郎。詞 ヤア分ン別もへちまもいらぬ。身は八ッざきに成ル迚も。二君に仕る六郎ならず。ハ、、、、夫レは近ヵ比若氣の至り。管仲は敵へ降り。覇王の助ヶと成りし例。ヤアなまぬるき毛唐人の引キ事。今敵へ降ては御臺若君の御ン身の上。未來の主君ンへ　どの面さげて御ン目見へなすべきぞ。比興未練の畜生侍ィ　詞をかはすも身の穢。汝が樣なる臆病者は　牛蒡程な尾を振て。鎌倉武士に犬つくばい。糠でもねぶつて命を繋げと。地 惡ッ口たら〳〵六郎はフシ 疊蹴立チて入にけり。地 何思ひけん兵庫ノ助ずんど立ッて身拵へ。奥をさして入ラんとす。出合イ頭に女房湊　詞 最前からのせり合を聞イて居たが。眞實お前は敵方へ。降參なされるお心かへ。ヲ、くどい〳〵　尊氏方へ降參ンの手土産。御臺若君引ッくゝつて連レて行。地 邪魔ひろぐなと突キ飛すを。起直つてしがみ付。詞 ホンニ惘レて物が云ハれぬ。大事の〳〵お主樣。御難ン義の此時節。命限キりお力ラに成リはせで。ヲ、科なき我を勘當し。諫を用ずむざ〳〵と。殺されし馬鹿大將。新田の家にあいそが盡た。勘ン當請ヶたりや主でもなく家來でなし。イ、ヤ御勘當請ヶたり迚。是迄代ィゝ御知行にて。育られたお前の體。何はとも有レ是迄に。一ト方ならぬ御よしみ。コレ思案仕かへて下さりませと。地 夫ト思ひの眞實心ン取リ付ャ歎ヶば。詞 エ、めろ〳〵と邪魔ひろくなと。地 突退刎退行ヵんとす。裾を押サへ

て詞コレ待ッた待タしやんせ。讐連レ添夫マにもせよ。お主の大事にやかへられぬ。そふいふ汚穢お心なら。
夫ト迚用捨はない。ヤア細言いはずと爰放せ。イヤ放さぬとしがみ付。地ヱヽ面倒なと取ッて組伏セ。用意
の早縄手はしかく椽柱にくゝり付ケ。詞己レが夫トを見限れは。此方にも飽果た。夫婦の縁ンも是限キり。
女房去ッたと。地睨付一ト間の。フシ内へ入にける。フシ跡見送りて。女房は胸迄せきくるうき涙。けふはい
かなる悪日ぞや。殿様には不慮の御最後。たつた一人リの弟を殺し。頼ミに思ふ夫トに去ラれ剰ヘ此縄目。か
ふいふ因果な身の上が又と世に有ラふかと。くどき立〳〵とふど倒れてフシ泣沈む。地大手の方には敵の
大勢。四方を取巻ク責太皷フシ鬨をどつとぞ上ケにける。地湊はすつくと立チ上り。詞扨は敵の寄セたるか。
御臺様六郎殿。ヱヽ此禁解てほしい。ナアチヱ恨めしい我夫マ。女ながらもお家の大事。みす〳〵詠め
て居られふか。地と命限キり根限り起つ。轉んづ身をもがき。岩をも通す女の一チ念ン。詞縄にすらるゝ
栢の柱。陰陽激して火を生じ。縄は燃切レどつさりと。こけても打ても厭はゞこそ地へヱ有リ難しと一ッ
さんに奥をさしてぞ走リ行。地程なく寄セ來る敵の大將竹澤監物秀時。眞先キに踊出。鬼神ミと呼バれたる
義興さへ討チ取レは城の奴原皆殺し一チ人も遁さず討チ取レと込ミ入ラんフシする所へ。詞降參ン〳〵と呼バは
つて。地立チ出る兵庫ノ助。竹澤見るか。詞ムヽ心得ぬ汝が降參ン。其手をたべる監物ならず。ハア其お疑
ひ御尤。論より證據手引キして。此城を乘取ラせ、拙者が心ン底見せ申さん。ムヽ其詞に相違なくば。尊
氏公へ申シ上。恩賞は望ミに任カせん去リながら。降人ンの法なればソレ家來共。合點と地兵庫一人を取リ

圍。透もあらせず亂入。地湊は身がるにかいぐ／＼敷長刀小脇にかい込で、御臺所を先に立。透間を見て落さんと心を配る向ふ方。竹澤が家の子笹目ノ兵太。大勢引ぐしどつと押寄ソレ遁すなと下知すれば。心得たりと女房がくも手かくなは十文字。追立られて敵の大勢逸足出して迯行を遁さじやらじとフシ追て行。地跡に御臺はハア／＼あぶ／＼。長追無用とあせる内。後へ廻つて笹目の兵太。してやつたりと飛かゝる。透もあらせず立歸り。かくと見るより湊が早業長刀に。血と一所に兵太が首フシころりと落て死てげり。詞サア／＼申御臺樣。若君樣は六郎殿がお供申せば氣遣ひない。裏道より早ふ／＼と。地御臺の手を引逸參にいづく共なくフシ落て行。地南瀨六郎宗澄は徳壽丸をかき抱上へに腹帶しつかとしめ。拔身引提眼を配。素肌ながらも一心の。誠は金石鐵の。たてづく者もあら氣の若武者。取卷士卒を蠅蟲共。思はぬ心の大丈夫フシしんづ／＼と落て行。地一間の内より高聲に。詞ヤア／＼六郎。命計は助てくれん。徳壽丸を置て行と。地呼かけられて六郎はきつと。後を見返れば。一間の障子さつと開き。床几にかゝりて竹澤監物。こなたには由良兵庫。鎧甲に身をかため。釆配追取りゆう／＼とフシさもいかめしき其形相。地六郎は歯がみをなし。詞チエ新田代々の此城を。朝敵の蹄に懸られ。叛逆ぶ道の愚人原に。乘取れしは殘念や口惜やナア。あはれ若君のお供でなくば。うぬらを助置べきか。命冥加な盗賊共。徳壽君は六郎が懐に入奉れは。千騎萬騎のお供も同前。道おつ開いて早通せと。地あく迄に廣言し脇目もふらず出て行。詞ヤ

ア〳〵者共　六郎やるな遁すなと。地下知に隨ふ諸軍勢ィ右往左往に取リ圍を。痿ずさらず切リ結び爰を
せんどと。三重「戰へば。地敵の大勢たまり兼しどろに成ッてフシ引キ退く。詞ヤアきたなし返せと呼ハつて。
地火雷神の荒レたる勢。流石の二人リも底氣味惡く。奥をさして逃入レば。ヤア比興至極のうづ虫めら。
目に物見せんと懸寄リしが振リ返つてイヤ〳〵〳〵。地天にも地にもかけがへなき若君の御供せん。イザ
此隙にと立チ出るキン手並にこりぬ大勢が。又むら〳〵と追ッ取卷ク。詞ヤア性凝もなき蚊とんぼめらと。
地當タるを幸ィ切立テられ。多勢を頼ミみの雜兵共一チ度にぱつと。フシ逃ケちつたり。地六郎も數ケ所の深手
踏しめ〳〵たどり行ク。城内ィには諸軍ン勢どつと上ケたる凱歌を。聞クも無念ンと立チ留マりしが。イヤ〳〵
〳〵一ト先ッ此場を立チ去て行ク方知レざる義岑公。御家門ン脇屋義治公和田楠を始メとして。官軍ン一チ味に
心を合せ。若君を守リ立テて時節を待ッて本ン意を遂。今の恥辱をすゝがんと無念ンながらもフシ出て行。
地阿斗を助ケし趙雲が。長坂坡の働きにもおさ〳〵劣ぬ其骨柄。古今獨歩の忠臣ンやと感ぜぬ。者こそ
なかりけれ

第三

地東路を登下タりの。フシ街道は。武藏相摸の國境。往來の足休め。能程ケ谷とつかの間も。たへぬ旅人の
馬竹輿も。フシ爰に立テ場の茶屋か軒。所の名さへ燒餅坂。往來の道者腰打かけ。詞コレ茶一トツ下されも

ふ何ン時じやぞ。イヤモフ七ツ過ギでござりましよ。ナント川崎迄行カれふかの。イヤ川崎迄は心元トない神奈川泊りと見へまする。コリヤ〳〵太郎左。わりや夕部のふとり肉しめたな〳〵。何をいふぞい。アノおたふく。腕は松の木腰は臼泣聲猪に似たりけりヤアいふな〳〵夫レでも今朝立チ際にこそと二百なぜやつた。有リ様はおれも約束したけれどおれが所へはうせなんだ。ムウそこで手前が焼餅か。イヤ夫レで思ひ出した爰の坂を焼餅坂といふげなのウ御亭主。イカニモ〳〵。此坂に付イてきつう謂がござりますお咄し申シましよか。イヤ〳〵夫レ聞てゐたら日がくれるあれ〳〵腹の加減も七つ過。ドリヤ茶代拂ふと 地 一ツ錢ン二錢ン錢つく杖つく道者共フシ別レ〳〵に急キ行。地 又も往來の街道筋 哥 おらが殿様はナア姫路をとりやるナ。そこで姫路か繁昌するとは 詞 ナアヱほてつぱらめ高が十二三貫ン目の荷を附ケながら。埒の明カぬ畜生めと。地 鳴わめくフシ雷聲。地 馬の上から湊は聲かけ。詞 コレ馬士殿私は馬にはしめて乘ッた。落チふかと思ふて強ふて〳〵どふもならぬ。靜な程こつちの勝手。殊に竹輿に召たは大イ切ッなわしが御主人ン。ちつとの間も離れては氣遣カひ。此竹輿の衆はどふじやぞいのふ。ヲヽ氣遣カひはござりませぬ。東海道五十三次は云ッに及ばす。奥街イ道迄を股にかけて居ル此長藏。わしが呑込ンだ仕事アレ〳〵もふ爰へ見へる。ヲヽイ〳〵早ふうせやがれヤアイと 地 どやげば跡からいきせきと登リ坂道にた山竹輿の雲助共。肩もあたまもちぐはぐに。漸と追ッ付イて。詞 ヤイ〳〵寢言よ早ふ〳〵と儕は馬と人ン間を一トツだと思ふかやい。けふはあまり貰がなさに。新ン町の宿はづれに晝寐して居たが。何する

も錢設だと。願西と云ィ合せて新町から戸塚迄。百五十の駄賃かふ急いでは立テ場で一ッぱいせにやなら
ないナア願ン西。ヲヽじつとしてゐると寒い故荷を持ッてあたゝまるのだ。長藏我ヵ雇しやが何ンと旦ン那
に願ふて一ッぱい呑せい。ヲヽサ何にもいふな爰が泊りじや。これ〳〵六兵衛殿お泊マりのお客を乘せて
來たと。地呼ッに亭主が走リ出。サア〳〵是へと店先キへ。湊をフシ馬ヵ抱キおろせば。詞ヲヽ思ひの外ヵ早
い來樣。跡の宿から三里には近ヵい。モウ爰が戸塚とやらいふ所かへ。イヤ爰はといふを打消す寢言の長
藏。ヤコレ成程〳〵爰が戸塚の宿ノ御亭主と目で知ラすれば亭主も去者。いかにも爰が戸塚でござりま
す。そしてお連レは。イヤ連レといふは私が主人ン。地サア〳〵是へと舁寄セさせ。いざ御出と介抱に。義輿
の御臺築波キン御前ン。本フシならはぬ旅に身もやつれ。立チ出給ふ御姿。藁屋の軒に三ケ月キの。みがゝれ
フシ出る其風情。地長藏は現をぬかし。詞何ンと二人共に見たか。旅やつれでもあの器量。旅籠屋のふんば
り共とは。伽羅と甘藷程違つて美しいもんではないか。あんな物を抱て寢る男めは憎い奴ッじやないか
いやい。コリヤ長藏わりや何ぼ所の名じや迚いらぬ燒キ餅だな。そしてつまはづれといひ物ごしといひ。
先ッお前方はどこからどれへ行ヵしやりますと。地問れて湊が詞イヤわれ〳〵は武藏の者。地頼みしお
方の御病氣故ッ箱根へ湯治に參る者と。フシ云ィ紛らして。詞コレ主ジのお方。奥へ參つても苦しからずば
あの一ト間へ。成ル程〳〵御念ンに及ばぬサア〳〵是へと。地亭主が案ン内湊も詞そこ〳〵に一ト間のフシ内
へ入跡に。地願ン西は大欠。詞ヤレ〳〵草臥た〳〵。コリヤ長藏わりや爰を戸塚だ迚女を欺し。爰に留メた

は何ンぞうまい仕事が有ルか。他人ンにせずと半ン口のせぬかナア野中カよ。ヲヽそれ〳〵戸塚迄行クを変で仕舞仕事故、だまつては居たが何ぞ是には譯ケが有ラふ聞カせいやい。イヤサ譯ケといふて高がかふだ。あの竹輿に乗セて來た女に我レ等首だけ。供といふも女の事。今宵中に一ト太刀云せたい思ジ入レ。夫レれで戸塚は入リ込ミの旅人、聲山立テても遠慮のない様に此立テ場の雲助宿を、戸塚の宿ク、だと欺して連レて來たのだ。何と智恵か〳〵と地うぬ惚のフシだみそは鼻に顯れたり。地願ン西手を打扨もしたり。詞戀の智恵は又格別。おれは又あの供の女久しぶりの女犯肉食。フウわれも其心かサア二人ながら相談はきまつた〳〵コリヤ野中カよわりや何ンとする。イエおりや女が一ぱいやつてぐつと寐たい。そんなら前祝ひに一ぱいづゝおれがもめるサアこいと。地山も見へざるそら祝ひ。實長はんが當テ呑やフシ咽を。ならして入にけり。フシ御痛はしや。筑波御前シ。表具見るもいぶせき藁やの軒。湊は障子押明ケて。暫ラく是にて旅の憂はらさせ給へとフシ進れば。地御臺は思ひの顔を上。詞ノフ湊自が身の上程。世にあぢきない物はなし。地二世と連レ添我夫マは。思ひ設ぬ御最期。いとし可愛の我子には生キ別れ。惜からぬ命ながらへしも。何卒徳壽を世に立んと。夫を頼に此艱難。そなたのいかい心遣カひ。あかぬ別レを忠義にかへ。詞男勝りのかい〴〵敷。長カの旅路の介抱。若シ煩ひでも仕やらふかと。地思ひ過コして悲しいと。跡は涙にキン詞さへ曇。フシかちなる御顔ばせ。地俱に悲しき。涙を隠し詞是はマアお心弱い其様に思召て長カの旅が成リませふか。義治様へお前を手渡しする迄は。めつたに風も引事じやござりませぬ。私が夫ト兵庫ノ助。

思ひも寄ラぬ二心故夫トを捨てお前のお供。又南瀬ノ六郎殿は若君を御介抱。何卒尋逢ッたなら。仕様模様もござりませふ。暫しの間のお艱難。必ズきな〳〵思召サぬがよふござりますと。地口にはいへど心には。是が新田の。奥方の。お有リ様かと打しほれ。タヽキ見かはす顔の花ぐもり。上見ぬ鷲や鵰眼。寐鳥さゝんと寐言の長藏。願ン西が二人リ連にて。フシ奥方立チ出。詞若シ女中様ン嘸お疲れでござりませふと 地いふに悔り泣キ顔隠し。詞そなたはさつきの二人の衆。何ンぞ用ばし有ッての事か。アイ用といへば用の様な物ナア願ン西。ヲヽちつとお前方にアノナアノ。コリヤ〳〵長藏おれに計リ云ハせずと我レもいへ。ハテマアあたま役じやわれからいへ。イヤわれから。〳〵〳〵〳〵。ムヽ二人共に云イにくいといふは。酒でも呑ミたい故價をくれといふ事か。アイまあそんな事もよごんしよ。がちつと御無心ンがごはります。シテ又外カに無心とは。アイお大事の物では有ロけれど。お二人リながらアノわしら二人リを今宵一チ夜抱て寐て。乳を呑マせて下さりませ。ヱヽ。アイ出ッ家一ト人お助ケなさるはいかひ功德でござります。跡にも先キにもたつた二人リ。どふぞ取ラせてやつてくだありませと。地思ひがけなき一チ言ンに。御臺はとかふ詞もなく。ぞつとフシこはげの胴震ひ。地湊も聞イて悔りの驚胸を押シしづめ。弱みを見せじと膝立テ直し。詞ヤア身の程しらぬ慮外者。女子じやと思ふてなぶつたらあてが違ふ。長カの旅を女の身で主人ンの介イ抱覺へがなふて成ル物か。殊にれつきとした武士の妻。今一チ言ンいふと赦さぬぞと。地尖き詞に長藏は。詞へヽヽヽ、何と聞イたかこはい事ンだないかいやい。そふ強ふ出やりやこつちも意地。

云ィかゝつた色事。コレよふ聞ヵしやれ。戸塚の宿と欺して留メたはおれが思ひを晴そふ計リ。爰は武藏相摸の國境。燒餅坂といふ立テ場。一チ里四方に此家たつた一ッ軒。泣ィても詫ても外ヵに人は一人リもないナァ願西よ。ヲヽそふだ是非いやだといやりや引ッ縛つて抱ィて寐る。サアどふだ／＼と 地 二人リして戀の手詰メの居催足。聞程つらき身の難ン義。遁レがたなき一ッ世の灘キン湊は思案し笑顔を作クり。詞 ハテ夫レ程に迄思ふて下さるお心を。何ンの仇に成ル物ぞ。私シらも長ヵ旅の獨寐有リ様はこつちから。ヤア／＼夫レは夢ではないか又有ルかくのうそではないか。サア嘘か誠トは寐て知レると 地 脊中ヵ叩けばぐにや／＼／＼／＼ 詞 サアさつぱりと埓明ィた。此長藏は近飢手附ヶにちよつと口ミフシさすがり付クを。地 湊は押シ留メ。詞 あなたも私シも顏見合せてはどふも恥しい。互に見へぬ樣に目をふさぎ。めんないちどりかけてなら。イヤモウどふなりと君の仰は背きやせぬ。幸ィ爰に帨巾が、おつとよし／＼。わしがする樣にならんせと。地 帨巾取て二人共。湊が手早くめんないちどり引キしめ／＼。サア／＼。是からこつちも目隱しする。用意の內見まいぞと。いへば二人が。合ッ點ンだ。支度よくばしらせてと。心はもぬけのキンから衣きつゝ馴にし裙引キ上ゲ湊は御臺に目くばせし。早ふ／＼の目遣ヵひに毒蛇の口や門ト口を。拔ヶて御臺の御手を取リつ轉つまろびつ漸と行キ方。しらずフシ落給ふ。文彌詞 跡に二人は夢現。詞 サア／＼女中樣／＼。早ふ寐たい。聲のせぬはおもたせぶりか、ソリヤ難面ぞへ／＼。願ン西よどこに居るぞ。最前ンからだまつてゐるはわりやきまつたな／＼ 何をいふぞいやい。さつきにから盲搜しにさぐつても知レ

ぬぞよ。ヤア我もそふかおれも知ぬ。あた面倒なこ　地　帆巾かなぐりフシ傍を見廻し。詞ヤア〳〵女め

はうせぬか。ヱ、腹の立撮れた遠くは行じぼつかけよ。地ヲ、合點とかけ出す向ふへ。竹澤監物が家

來犬伏官藏。主の權威を鼻にかけ供人トフシ引連歩來る。地所の名主が先に立。詞是〳〵亭主何か御

詮議者が有迚人吟味。泊りの衆も皆是へこ。地いふに亭主が罷り出。詞イヤ私が所は雲助宿御氣遣

ひな者は一人もござりませぬこ　地　聞くより官藏ぐつこねめ付。詞ヤイ〳〵其雲助が猶不審。此度

新田義興の家來南瀨六郎こいふ者。義興の悴を連此邊を徘徊するよし。依て宿々の旅籠やを人改め

己が内の泊り人殘らす是へ呼出せ。マヅ爰に居る坊主め。合點が行ぬ己は何故其ざま。マア生國は

いづくの者こ。地問れて願西錫杖振り立。サイモン奇妙頂來のら如來。詞抑わつちが國は上州。幼い時か

ら穴一小博奕。色事覺へて十四で勘當寺へかけ込和尙の大黑盗んで欠落。商ひ知ねば喰込計。女

房ぐるみに博奕に打込。夫にもこりずに年まにはまつて盆ござぐるめに。くるむき裸に坊主にされ

た。去りこは〳〵うるさいこんだにヨウ。次は。セツキヤウ盲の伊勢參り。キン幟片手に聲はり上。詞奧州

仙臺お伊勢様へ。三十三度參りの盲に御報謝。ヤア己らが様などう盲に。詮義はないこつこゝうせい

こきめ付られ。詮義がないこは有りがたい。只今のお心ざし。伊勢大神宮様へ上ますでござります

まめ〳〵〳〵まめ息災延命によふお守りなされて下さりませホ、、、フシほう〳〵急ぎ出て行。鼓哥扠

其次へ出てくるは。是は戸塚の名代物。云ねど皆様御ぞんじの。狸の。峯西。鼓にあらぬたゝき鉦。撞

木杖つき渐とフシ表をさして出て行。次は差詰メ。詞野中の松。アノ私ャは元。角力好ャ。エ角力といふ物はしやう事もない物。大きにけがを致ました夫レでも角力取ならかふ。エイ。〳〵〳〵。何の事た。こいつは〳〵。儕レはコリヤ氣違イだな。エヽ役にも立タぬ奴ッ等に隙取ッた。併只今申ヽ渡した。南瀬六郎見付次第搦取ッて此官藏が旅宿クへ連レ來れ。褒美は望ミ次第。ヤア百性共次キの宿へ案ン內せよ。地早ふ〳〵と云ヒ渡し。皆ヽ引キ連レフシ急ぎ行。地跡に長藏一人リ笑。詞何と聞イたか二人の者。さつきに跡の松原でがんばつて置イた金の蔓。褒美は分ヶ取リ奥でとつくり相談せふ。地サアこい〳〵と三ン人は打連ッ
クリへ奥に入リにけり。地キン既に其日も入リ相の。フシ鐘の響も。おのづから寂滅。フシ爲樂も西の空。地願カふは彌陀の誓願力キ。六十六部廻國に姿を略す南瀬ノ六郎。忠義は重き笈の中。錫杖つく〳〵立チ留マり。實春の日の長きといへど。急ぬ旅のあてどなし。詞日が暮レふが夜が明ヶふが高カが野宿クの此身の上暫ッくつかれを晴さんと。地笈をおろして傍なる榜示杭打詠め。詞フウ何ゝ是ゟ東武藏の國。是ゟ西。相摸の國。扨は爰こそ武藏相摸の國境と。地四方を見廻し。笈の戸を明ヶてフシ四ッの稚ナ子は。地義興の若君德壽丸。詞サア誰レもおりませぬ御心よふ御遊びと。地道の邊の花折リ取爰迄ござれ此花しんじよ。サア〳〵御出と膝サに乘セ撫つさすリつ六郎が機嫌取リゝ道野邊の。草に露吸蝶ゝの夢共わかぬ稚ナ子の餘念はさらに。フシなかりけり。地せめては是へと榜示杭引キ拔イて押シ直し。若君を抱キのせ御顏つく〴〵打守モリ。目にもる涙押ヘかくし。果報はいみじく源氏の正統。新田義興公の公達と產れ給へ共。足利尊氏に世をせばめ

られ。綰の笈に御ン身を隠し、お乳の人にも。傅にも付キ添者は某一人。地かく淺間敷キ御身の上弓ミ矢神ミ
にも。天道にも見離されしか殘ン念ンやと。拳を握り歯がみをなし。無念ンの涙にしづみしが。フシ去リなが
ら。詞稚ナけれ共源ン家の公ン達。此六郎が申ス事。能お聞キなされや。今御足の下なる榜示杭は。武藏相
摸兩國の境イ杭。尊氏は相摸の國鎌倉に居を構れば。時キに取ッての足利尊氏。武藏の國は今敵竹澤監物
が領分。二人が軍勢踏破り。武藏相摸を一ッ時に。踏隨へ給ふべき前表。地夫レを祝せし我カ寸ン志追ッ付尊
氏討チ亡し。目出度御代に飜へさんと祝ひフシ悦ぶ折こそあれ。地いつの間にかは寐言の長藏。南無三寶
と若君を。手早く笈に抱キ入あたふたしめる兩方か。同じく願ン西野中の松三人ン一ッ所にフシ追取巻。地中
にも寐言の長藏は。詞コレ六部殿。行暮ラしたる追剝じや御報謝に預カりたい。ホウ心安スい事ながら。
此方も人の情を受ケて通る修行の身。貯へ迚は更になしと地半ン分云ハせず。詞ヤア貯へが有ル迚も高の
知レた六部の路金シ。大金ネに成ル其笈が貰たい。ムウ此笈がほしいとは。コリヤ常ネの盗賊ても有ルまい。
早速やらふと云イたけれどマアならぬ。ヤア甘ふいへば付キ上カる。どふで直クではいかぬ奴ッ二人共合ッ
點か、ヲ、。合點と地兩方から。組ミ付ク首筋引ッ掴ミ。詞右キと左リへもんどり打せ。寐言が透さず後ロ
より。しつかと抱クを腰車。ヤア面倒なる青蠅めら。此世の暇を取ラせんと。地錫杖に仕込ミし刀引キ拔キ
切拂ふ。こなたは刄物叶はじと。見世の道具の手に當タる。茶碗盃キたばこ盆投付ケ〳〵三重「打付る。地
切拂ひ切拂ふ劔キの下に野中の松。此世の枝葉は枯うせたり。地願ン西も手は負ぬ。長藏有合庖丁追ッ取

立向へど　手練の六郎叶はじと持ッたる出刄を投付クればあやまたず。六郎が膝の口へずつぱと立ッよろ〳〵たぢろく中チ。いづく共なく逃うせたり。地六郎は歯がみをなし。ヱヽ討チもらせしか口惜やと、庖丁抜キ捨下々着の裾　引キ裂てしつかと巻キ。詞取逃ヵせしは殘ン念なれど。大事の〳〵若君の御ン身の上が大切ッと。地痛手にくつせず踏しめ〳〵。歩めどちが〳〵足曳の。山坂に氣を春の夜の。そこ共分ぬ宵闇にたどり行こそ　三重「是非なけれ。地由良兵庫ノ助信忠は二張の弓も引かたの。竹澤が推擧にて尊氏卿へ　宮　新に所領賜りて不義の富貴の夫レぞ共。しらぬ我ヵ身の程ケ谷や十塚の宿に隣たる。所の名さへ吉田村傍に目立　一構。手を盡したる物好キの。キンヲクリ庭に泉水築山の木ヾの梢を洩出る。朧月キ夜に映ひしッ木フシ櫻が枝の。白妙も浮る。フシ雲とや詠むらん。地鎌倉よりの召シに依て主兵庫が留守の内　呵人のない娵共　乳母交りにどつたくた。詞サア若子様のお馬が通る。ハイシイドウ〳〵　地高嘶。まだぐはんぜなき友千代を。抱キ乗セたる四つ這の。生れ付たる棚尻。ひこつかせてフシかけ廻れば。地ノフあぶなやと抱キおろし。詞コレ皆の衆。旦那様のお留守じや迚やりぱなしに騒しやるな。若子様をだしにして面〻の慰半ン分シ。怪我させましたらどふしなさる。そしてマア有ラふ事か。大キな臀を振リ廻して。お鍋殿ンもお鍋殿。イヤコレ人トの七難より我ヵ八難ン。お乳母殿のおゐどじや迚。余ンり小そふもござんすまい。なんぼわつちが棚尻でも。見懸に似ず上ッて有ロと。どなたでも譽なさるよ。ノフお松殿。そふじやないか　ホヽヽ上ヵつたの下ヵつたのとは。子供の上ケる凧しや有ルまいし。イヤコレ〳〵其蛸魚

は少差合ィじやと。地どつとフシ笑へば詞イヤコレ若子様の今すや〳〵。大な聲よして下され。ほんに愛
らしいお子では有ルぞ。サイノ此お子産だ母御が見たい。サレバノ。奥様のない此お屋形。寶は身の差
合ハせ。寡暮しの旦ン那様に。わつちが蛸魚で吸付ィたら。身も同前に相ィ果ッると。おつしやるで有ロぞ
いの。アノお鍋殿ンとした事が。旦那様は石部金吉。女護が嶋へやつて置ィても氣遣カひの氣の字もない。
イヱ〳〵〳〵口先キでちよびくさいふより。得手堅ぞふめがしつ深な。必油斷さつしやるなと。地三ッ
寄スれば姦しいフシ目口乾きの色咄し。地折から旦ン那お歸りと下部が呼ビ次ク聲に連レ ソリヤ野等かはい
て呵られな。イザ若子様も御一ッ所にと。皆打連レてフシ入にける。地館の主ジ兵庫ノ助信忠。江田ノ判官ン景
連を同道にて。立チ歸るフシ我家の内。地イザ先ッあれへと賓主の禮。上座に直ヲつて江田ノ判官。詞先ッ以ッ
て今ン日は御前ンの首尾も上〻吉。此判ン官も去年の冬。さしも手強き新田義興。手もぬらさず討チ取りし
は。莫大の勲功と。尊氏公御感の余マり相摸半ン國を給り。此上へもなき悦び。貴殿ンは固義興が舊臣。
お疑ひも有ラんかと思ひの外のお取リ立。ハア御意の通リ。此兵庫ノ助新田の家を見限り足利家へ降參。
當時ケ様の活計も。貴公と竹澤殿のお取リ成。御芳志の程言語には述られずと。地媚諂ひの挨拶に。判
官猶も近カく差寄リ。詞夫レに付キ義興が弟義岑。又悴レ德壽丸。今において行ク衞知レず。少シにても手が
ゝり有ラば。古主迚用捨召サれな。ハアイヤ其御念ンには及ばぬ事。死損ひの新田の一チ類。捻り殺すに
手間隙いらず。夫レはそふと判官殿。今宵も最早初夜過キなれば。見苦しく共奥の間で。地夜と共のお

物語。詞イヤ〳〵拙者も急の道。先今晩は御暇申さふ。ハテサテ夫は殘念千万。イヤ我等領分方鎌倉への往來には。丁どよい中休。以後は一寸〳〵と御尋申さふ。然ば其内おさらばと。地家來引連判官はフシ己が舘へ立歸る。地世をうき草のよるべなき。義興の御臺筑波御前。湊一人を、力にてしらぬ。夜道を。とぼ〳〵と。フシ門外にたどり付。詞道踏迷ひし旅の女。地一夜の御宿といふ聲のほの聞ゆれば内には不審。フシ手燭携へフシ歩寄。地互に見合す顔と顔、思ひ懸なき恂りに兵庫は流石面ぶせ、入んとするを女房は。つか〳〵と立寄て胸づくし取て引すへ。詞コレ爰な人でなし殿落人と成り給ふ。御臺様の此お姿。嘸本望でござんしよのふ。お前の心一つにて。さま〴〵の御艱難。けふ迄お命續しは。地まだしも神佛の扣へ綱。世を忍旅なれば何かに付て不自由がち。御臺様のお足の痛此家作りの結構さ一夜の無心と來て見れば。どふかおまへの内そふな。地かゝる暮しで有ながらお主の事も女房の事も。忘れ果たる無得心。詞エ義理しらず道しらずと異見いふもよしみだけ。どふぞ本心に立歸りお家の御先途見屆て、是迄の恥をすゝぎ。元の女夫に成てたべ。憎い〳〵と。‖此の恨、己やれと。思ふて居たが顔見れば稚馴染。心が味に成て來て。恨も漸百分一。詞友千代は息災なか、流行風など引はせぬか。かふいふ暮でござるからは。コレ申。お内儀様を呼やなされぬかいな。コレどふぞ。いふて。地聞せて下されと強い様で女氣の。しどけフシ涙にくれ居たる。地御臺も漸顔を上、殿様には不慮の御最期頼に思ふそなたさへ。尊氏へ降參。徳壽を連て立退し六郎が行

衞知レねは。そこや。爰やと尋ネても行ク先キゝが敵の中カこ東の住居叶はねば。脇屋義治殿を頼ミにして上ミ方へ志し。迷ひ来たるも盡せぬ機縁。ならはぬ旅につかれ果。置キ所なき露の身の。消なば消ね兎も角も。よきに頼ムとフシ計リにて。跡は。詞もないじやくり。詞ホヽいたはしき御有リ様。お力ラにと申シたいがマアならぬ。昔は昔シ。今は。足利家の祿を食此兵庫。新田方の落人搦捕筈なれ共。女義の事なりや了簡して。見遁いて進ンぜふ。足本トの明カい中チとつとゝござれとフシにべなき詞。地女房は猶せき上ケ。詞ヱヽ聞ケば聞ク程あいそづかし。コレ飼養犬も主を知リ。尾を振ってそばへる物を。犬に劣つた人畜生。サア御臺様お立遊ばせ。行キ着キ次第にさんじませふ。ヲヽ時キ世につるゝ人心。地是非もなき世の有様と。フシしほ〳〵として立給へば。地心つよくは云イながら。流石女の跡や先キ。笑顔作つて傍に寄。詞コレ兵庫殿。云がゝりに云はいふたが。アレ御臺様のお足の痛。殊に夜更て一寸ンも。おひろいはなされまい。地座敷にならずば軒の下タ。木部屋に成リ共たつた一チ夜を。イヤならぬ。そんならどふぞ友千代に。ちよつと逢ハせて猶ならぬ。夫婦でなければ子でもなし。とつとゝうせふとあらけなき。地詞に湊は身を震はし。詞へヱ御臺様のお供でなくば。喰付イても此恨。人トに報ひが有ル物かない物か。地覺てござれと見返り〳〵。御臺所の御手を引キ。すご〳〵フシカヽリとして。出て行。心ぞヲクリへ思ひやられたり。地されば其の幹摧るゝ時は枝葉全からずとかや。南瀨ノ六郎宗澄は數多の追ッ手を切リ拔ケて。忠義一チ圖に若君を漸脊に笈の内。深手に弱る足たぢ〳〵。此家を目當テにフシよろぼひ來り。詞行暮ラせし旅人なるが。

盗賊に出合難ン義至極　お家を見懸ヶお頼申ス。御かくまひ下されよと。地内へはいれば。詞ヤア其方は
南瀬ノ六郎　ム、人ン非人ンの由良兵庫　ハレ思ひがけなき對面じやナア。愚人ンに向ヵひ詞はなし。サア
〳〵フシ勝負と詰メかくれば。詞ハ、、、血迷ふたるか六郎、イマ存ン外の譫言。所詮ン助ヵからぬ我ヵ命。
己が首を冥途の土産　ム、、、血迷ッたとはそこの事。ナント。尊氏公の御威勢イ見たか。唐土天ン竺はい
さしらず　日本ンの地に在リては　いか程遁れ隠るゝ共　袋の物を探るに等しく終には尋ネ出されん。そ
こを討つて此兵庫　手短に降参ンし一ッ廉の知行を取ば。コリヤ此通リ豐の暮ラし。彼蟷螂といふ虫は　己
ゝが斧を頼ミにして車に向ヵふ眞其ごとく　汝が武勇を頼ミにして。鎌倉へ弓引ヵんとは淺はかな了簡　大キな
物には呑れ　長ヵい物には巻ヵれるといふ諺の通リ　譬いか程働いても御威勢にて取リ圍ば。行先々が皆
敵　其上にソレ其深ヵ手。手向ヵひはおぼつかない。ヤア道知ラずがぬかしたり。瓦と成ッて全からんよ
り。玉と成ッて碎よとは古人ンの金ン言。身は醢になるとても　汝がごとき不忠不義恩を忘スるゝ六郎なら
ず。ホ、其理屈は聞コへたが。今某シと討チ果タさば。ソレ其篋の内なる徳壽丸。誰レ有ッて介抱するぞ。
サとつくりと分ン別せよと。地星を差たる一ト言ンに。詞イヤサどふで遁ヵれぬ御命。但は汝ジ善ン心ンに飜
り。かくまひ申所存ンなるか。イ、ヤかくまふ程なりや鎌倉へ降参ンはせぬはやい。かくまひもせず。
本ン心にも返らね共　高のしれた小倅一ッ疋。鎌倉殿の害にもならねば。見遁ヵしてやる分ンの事さ。ム、
、しかと見遁してくれふや。究鳥懐に入ル時は獵人も是を取ラず。ハア忝い。地命惜むにあらね共。御

一ﾁ門は皆ちり〴〵　義岑公は御行衛知レず。新田の家の御血筋殘リ給ふは若君計リ。詞大切ッの御命見遁してさへ下さるれは。御恩ンは忘れぬ。コレ手を合して拜申さ　地油斷を見すまし近カ寄ッて。只一討チと切付クるを。騷ず鍔にてしつかと請ケ。詞ム、、、迚も及ばぬほで手合。其手では参るまい。去リながら。木にも萱にも心置クは落人の習ひ疑ひは尤モ至極。コリヤ見遁カすといふ其證據と　地刀の鯉口拔ケかけて。丁〳〵と金ン打し。詞深カ手の上に氣を揉ずと。奥の一ト間で養生お仕やれ。ヘエ天にくゝり地に拔キ足。思慮分ン別も愚に返り。かく成下カる我身の上ッ地弓矢の冥加に盡たるかと。キンくらむ心を取リ直し。心ならねど是非なくも。ヲクリ奥のへ一ト間にたどり行。フシ程もあらせず。地討ッ手の大勢ばら〳〵と亂レれ入。矢ぶすま作つて追ッ取卷。コハ何故の狼藉と云ハせも果ず捕手の頭。詞新田の小悴レ德壽丸。南瀨ノ六郎を付ケ込ンたり御渡し有レと罵れば。地人數の中ゟ馬士の。寐言の長藏ぬつと出。詞コレ親方。金に成ル代物を燒キ餅坂で取リ外し。追手の衆の手に餘れば。どうでおいらが手際にやおゑないと　見へ隱れに付ケけて來て。奥へ入たをとつくりと見て置イた。四の五のなしに渡さつしやれ。渡せ〳〵と地大勢が透もあらせず詰かける。フシ折もこそ有レ表の方。地上使なりと呼バばつて。入リ來る竹澤監物。詞ヤア家來共麁忽の振舞。皆引ケ〳〵と　地追イ退け。フシ上座に通れば。詞ム、思ひ懸ケなき御上使とは。ホ、上使の趣き余の義ならず。南瀨ノ六郎德壽丸。最前ン道にて討チもらせしと追イ〻の注進。尊氏公聞コし召サれ。固古主の事なれば。兵庫が心ン底計リがたし。吟味せよとの嚴命。早打チにてかけ

付しに。案ンのごとく貴殿ン隠し置ク條紛れなし。昔シのよしみにかくまふや。又首討ッて出さるゝや手短の一ト口商ひ。返答いかにと問かくれば。地 兵庫は何のいらへもなく。傍に有リ合ッ弓と矢追ッ取リ。きり／＼と引キ絞リ。一ト間を目當テに切ッて放せばあやまたず。はつしと手ごたへ血煙と倶に障子を踏はづし。朱になつて南瀬ノ六郎。詞 ヤア比興至極の表裏者。甘き詞に我レを欺き。飛道具にてしとめんとはヤ愚〱。是式のへろ／＼矢。百筋千筋身に立ッ共。何程の事有ラん。類を以ッて友とする。奸佞邪智の愚人ン原 一チ〱首をならべんと。地 無二無三に切ッてかゝる。心得たりと兵庫ノ助。請ケつ流しつ上段ン下段。尖き太刀筋こなたは手負。心はやたけにはやれ共切込ム刄を請ケはづし。左の肩先キ切リ付ケられかつばと伏セば。ワツト泣。若君奪取ル兵庫が早足。むつと起キて六郎が。やらじと縋るを又一ト太刀。うんとのつけにそり返るを 見向キもやらず若君の首宙に打落し。フシ 撿使の前に差置ケば。地 竹澤につこと笑を含。詞 兼て知ッたる貴殿ンの心ン底。疑ふ筈はなけれ共。德壽丸か面躰を見知ラざる此監物。燒鳥にへを。念ンの爲誰ゾ見知リし者や有能リ出よといふ聲に。地 以前ンの馬士おづ／＼這出。首をとつくと見改め。詞 今ン日道にて見付ケし悴レに。相違はござりませぬ。ホヽ、是にて万ン事相濟ンだり。尊氏公へ申シ上なは嘸御悦喜。褒美は追ッて御沙汰有ランと立チ上れば。ハア何分にも御前ン宜敷。近カ比御苦勞千ン万ンと。地 互イの挨拶竹澤監物首取。フシ 持せ立歸る、地 フシ 此家の騒。地 若君の御ン身の上と聞クよりも。有ルにもあられず御臺所。湊か介抱漸と道かも引ッかへし走リ。つまづく氣は狂亂。詞 德壽はいかゞ。若君様。六郎殿はいづ

くにと。地うろ〳〵きよろ〳〵。兵庫にばつたり。詞ムヽコリヤ何ンじや。徳壽丸に逢イたいか逢イたくば逢ハせてやらふと。地投出すは首なき死骸。二人ははつと氣も轉動。詞スリヤもふ若は殺されたか。コハ何とせん悲しやと死骸に。取付キ泣沈む。湊は身震ひ齒がみをなし。詞ヘヱ鬼共蛇共魔王共。名の付ケ様のない惡ク人。コレ申シ御臺樣。所詮いふても返らぬ事。サアお覺悟遊ばしませ。地ヲヽいふにや及ぶと用意の懷劍。兩方ゟ突かゝる。ヤア及ばぬちよこざいひろぐなと。腕首つかんで突飛せば。又突かゝる一チ念ン力キ。あしらひ兼てや兵庫ノ助。フシ一ト間をさして迯入ッたり。詞ヤア迯る迯迯ガそふかと。地飛ヒ込襖の小影より寢言の長藏踊出。詞こんな事も有ラふかと跡に殘つた甲斐有ッて。重ネ〳〵褒美の種。此趣を注進と。地云イ捨てかけ出す。後ロの障子の透間ゟはつしと打ッたる手裏劍に。フシぎやつと計リに息キたへたり。地コハ何者の仕業ぞと。見やる一間に聲高カく。詞官ン軍ンの御大將。新田左兵衛ノ佐義興公の御嫡男徳壽君。御安躰にて渡らせ給ふ御安堵有レと呼はつて。地傳出る兵庫ノ助。見るゟ二人ンは夢に夢。詞ヤア徳壽丸は存命てか。若君樣にてましますかと。地抱キ取たは煎豆に花の笑顏のにこ〳〵を。見る目ぞく〳〵嬉しさは。何にフシ譬へん方もなし。地女房ハット心付キ。詞若君樣を助ケるとは思ひかけなきお前の忠義。嘸かし深カい方便でかなござんせふ。したが最前ン竹澤とやらに首切ッて渡したは。何人トの子でござんした。ホヽ夫レこそは悴レ友千代。ヤアスリヤ此死骸が我子か。ハア地はつと計リにこうどふし前ン後。ふかくに泣出す御臺所も御涙。地我カ身の上に引キかへて。夫婦の心根思ひやる。い

かに主の爲じや迚。我子を殺して此若を助ヶてくれる志シ。詞家來ではなく。氏神ン共命の親共。今更に禮はフシ詞に。盡されず。詞そしてマアいつの間に友千代と取リかへて此子を助ヶた其譯ヶが、ホ、其子細は六郎が。中上ヶんと起直れば。地思ひがけなく又悔り。詞ヤア殺されたと思ひしそなた。ハイヤ此六郎は兼てから命を捨ての謀。ホ、忠義はかはらぬ此兵庫。善ン惡ク二タつに引キ分カれし地一ト通リ。フシ御ン物語。詞扨も我カ君義興公。朝敵を亡せよと勅命を頭に戴。必死と定めし御出ッ陣ン。續く兵六万餘騎。敵は名におふ足利尊氏。隨ふ軍ン勢十万ン餘騎。地兩陣互にいどみ戰ふ。さしもに廣き武藏野の草より。キン出て草に入ハキンヲクリやさしき詠に引キかへて月キに緣ン有弓張や射矢亂レて篠芒。枯野の草を踏越〳〵キン互イに恥有ル源シ氏と源氏天ン下分ヶめの晴軍サ組ンづ組マれつ討ッつ討タれつ矢さけびの音ト鯨波修羅の街に異ならず固猛き御ン大將。追ッつまくりつ數ケ度の軍サさしもの尊氏敗軍ンにてフシ鎌倉さして引退く虎にも乘ルべき御勢ひ竹澤が勸にて跡から追ッかけ討チ取ラん。續や〳〵と乘リ出し給ふ。詞ヲ、其勝イ軍が我ゥ夫マの御身の仇で有ッたかいの。イヱ〳〵いか程逸らせ給ふ共。無理にお留め申シなば。アイヤそこに如在の有ルべきか。拔ヶめなき兵庫殿。さま〴〵お諫め申されても。勝ッに乘ッたる御大將。御承引ましまさず　いさむるを曲セ事迚御勘ン當。ヲ、主從暇の印シ迚投ヶ付ヶ給ひしコレ。此扇。跡にて見れば御書キ置キ。朝庭には佞人ン多く君をまどはし奉ッり。我謀トを用ゐざれば思ふ軍サの圖をはづし。見苦しき負をせば我レのみならず先ン祖へ對し新田の名字を穢さんより。潔く討チ死せん。汝ジは跡に生キ殘

り六郎と心を合せ。悴を守り立てくれよと有。コレ細〻との御筆ずさみ。地さま〴〵御諫め申せ共。聞入れ
給はぬ日比の御氣質。力及ばずすご〳〵と。羽なき鳥の心地にて。是非なく古郷へ立歸り。地思
案の間もなく竹澤と。江田ノ判官が謀計にて。矢口の泡ときへ給ふ。名有家の子郎等は悉討死し。
守りがたき新田の城。落城に及びなば若君の御行衞。草を分つて捜すは必定。兎やせん角やと火急
の思案。詞昔唐土趙の國に程嬰杵臼といふ二人の臣下。主の孤を助んと。敵を計りし故事を思ひ出
して相談極め。ヲヽ若君と取りかへて立退たるは此六郎。ヲヽサ我は敵へ裏返り。蜜に若君御養育。夫
とは知らず御臺様。地焼野の雉子夜の鶴。子故に迷ふ御旅づかれ。最前入らせ給ひし時。詞態難面
饗應せしも若や敵へ洩んかと。思ひ過しは若君の御身の爲と思召。御用捨なされ下さるべしと。
地始終委しき物語り初て明す本心の智略の。程ぞ類ひなき子細を聞て人〻の。疑ひ晴ても晴
やらぬ涙は瀧を争へり。地六郎は座をかため落たる刀取り上て。腹にぐつと突立る。コハ何故の生害
と驚き。すがればにつこと笑ひ。詞ハア快や嬉しやなア。助りがたき若君のお命助け奉り。御臺様へお渡
し申せば。思ひ置事微塵もなし。地我命ながらへては。邪智深き鎌倉武士。兵庫殿を疑はゞ若君の
御身の大事。殊に數ヶ所の此手にて。助かるべき謂なし。詞兼て落城の折から。友千代を殺させて
敵に油斷させんずと。約束にて立退しが。いかに忠義といへば迚。一人りの我子を突出して。我に
渡した兵庫殿の心根を。思ひ計て惜からぬ。命をかばひ方〻に身を忍び。そこや爰やの貰乳も。落人

の身の心に任ヵせず。東西ィ分ヵぬ稚子の。餓れば泣出すやんちや聲。飯の取リ湯や地黄煎で。賺しすかして漸と。なつく程猶いぢらしさ。我レを親共乳母共。起キふしの上ガ下タにも。伯父よ〳〵としたへ共夜ルの寐覺はいつ迚も乳を探つて泣出し。かゝアノ〳〵といふ時は。子を持ぬ身も骨身にこたへ。地嘸かし親の心では。夜の目も合ハず慕ふらん。詞どふぞ手渡しせん物と。漸こなたの在所を聞キ出し。忍び來る道追ノ手に出合イ。去年の深ヵ手に不自由の體。又ぞや深ヵ手を負ながら。何卒こなたに一ト目見せ。其上は鬼も角もと此家へたどり付キしかど。跡方慕ふ不敵の曲者。悟られては一チ大事と。夫レ故へにしみ〴〵と。地顏も見せざる殘ン念ンさと。語るを聞て女房は。不便ンの者やいぢらしや。詞久ッサしう連レ添夫婦の中ヵ。子のない事を苦にやんで。地藥よ灸よ湯治よと。樣マ〻の心遣ヵひ。夫トに隱して佛ッ神ンに立願祈願ンの甲斐有ッて。漸産だ友千代丸。疱瘡はしかもして取レば。最早樂じやと悦んで。袴着寺入リ讀物は。何からどふしてかふしてと。案じて居たも皆むだ事。三ッや四ッで死ヌるなら。産ぬがましで有ッたかと。地譯ヶも涙に取リ亂しきへ入ル。計リに泣沈む。兵庫は態聲はげまし。詞とくにも死スべき忰レが命。けふ迄もながらへしはまだしもの仕合せと。泣な女房日比に似ぬ比興者。エヽ未練至極と地呵られて。女房は猶しやくり上。詞お役に立ッて死る命。合點づくなら泣もせまい。思ひ切リ樣も有ラふけれど。地お前一人の了簡で。わたしには露知ラさず。詞殺して置イて今に成ッて。比興な泣な未練ンなとは。いかに男のかうけじや迚。我ヵ儘いふも事に寄ル。地むごいわいのとフシ打ふして又さめ〴〵と泣居たる。

詞アイヤ其恨ミは去ル事ながらお家の蜜事。天下の大事。女童に打明ケる兵庫ならず。さはいふ物のいかに計略なれば迚。地朋友の六郎に手を負せ。詞久サしふりで逢ッた忰レをもぎ取ッて。只一ト討。知ラぬそなたの歎キより。我子と知リつゝ手にかける其時の心の内。コリヤどの様に有ラふぞやい。アイヤ何六郎殿忠義といひ器量といひ。末頼もしき若武者を。やみ／＼と先キ立テて。此兵庫は生キながらへるを比興とさみして。フシ下さるな。詞ア、イヤ死は一ッ旦にして安し。跡に殘つて若君を守リ立ッるこなたの大イ役。死スるに増る千ン辛万ン苦。其上一人リの秘藏子を。イヤ三ン代相恩のお主の爲には。我子を殺すもヲ、サ身を捨ッるも塵埃共思はね共。君を守リ立朝敵を亡して。天下の苦しみを安ンぜんと思ひし事も皆むだ事。地時に逢ねば名將も仇に過キ行光陰の。矢口の渡しでやみ／＼と。詞愚人ン原があざとき方便に討タれさせ給ひしは。お家の不運か。南ン朝の衰ふべき時なるか。是非に及ばぬ兵庫殿。六郎殿。無念／＼地と手を取組忠臣義士の溜涙。天に通せば銀河堤も切レて。流るらん。地御臺所はむせかへり。我子を捨命を捨ッる。かゝる家來の有リながら。御運ン拙き我夫マの。御身の上の悲しやと。過ギし事迄キンフシ思ひ出し悲歎の涙にくれ給ふ。地六郎は目を見開き。詞ア、後たり狽たり。死する所は違ふ共。我カ一チ念ンは亡君の御ン跡慕ひ奉ッらん。さらば／＼地と聲の下タ。吭のくさりをかき切ッて。かつばと伏シてフシ息キ絶たり。地妻は泣ク／＼我カ子の死骸フシかき抱き。地となふる回向は弘誓の舟。生死の岸に煩惱の流れを渡る。フシ三ツ瀬川。地タ、キかはいや先キ立ッ稚子は。無常の風の櫻川。塵に雜る芥川。フシかゝる浮キ

世に隅田川、兵庫が心の荒川と見へしも智謀深ヵ川の。深き忠義の胸の中ィ、磨立たる玉川や淵は瀬と成ル飛鳥川。御臺所は若君に思ひも寄ラず。藍染川。六郎が魂魄は。主君の跡を大井川。其源ミの濁なきキン君に。仕る武士のやたけ。心ぞ頼もしき

第四　道行比翼の袖

詞キン白ラ玉か何ぞと。人トの問し時露とこたへん落人の。身に添ものはナヲス影ばかり。夫レさへ月の入リぬれば二人リはもとの二人リにてフシけふたち初メし旅衣。地きるに切れぬ縁ンの糸結ぶの。神の神かけて二世も三世もまだ先キのキン世もかはらぬ中カのフシ義岑は。地過キし八幡の難義よりヲクリしるべの。方にやう〳〵と地臺諸共忍ぶ身の忍ぶとすれど忍ばれず。まだ夜をこめて鳥が鳴東の方へとたどり行。フシヲクリ心のへ内ぞたよりなき。二上り表具二人リが中カはつき出しの。其日に呼ンで呉竹の。ふしぎな縁ンで。大津ぞとみな口の葉にうたはれて。カハサキ互ィにのぼる坂の下タキン人ト目の關も龜山の。しやうの惡いは男のならひ。キン見せかけ計リ石藥師。女良にくは。ない物と見やしやんしたは間違ひのキンかふいふ事になるみ潟。おまへも。捨て岡崎と思へばわたしも藤川のもつれ合たる胸の内。打明ヶていやあか坂のなんぼ源氏の大將でも御いせいに惚や。せぬわいな。器量吉田の。二かはめ下ャさまの事しらすかの。キンあらゐ上ャたる殿ぶりに。深ふはまりし濱松の。そぶりをナヲス見付られフシまいと。地誓紙を隱す袋

井の契りを。江戸冷泉二世と。掛川や。金谷せぬとはいみ詞。フシ云ぬ嶋田のキンヲクリ亂れ髪、フシ人目に。心
沖津川。地由井しよ正しき御身にて此有リ樣は何事と。思ひ廻せば廻す程。はらの立のは女のくせ。顏〳〵
〳〵と三嶋より運ぶ箱根の山こへていつかはときに大磯と打涙ぐむ計リ〳〵。義岑公も諸共に。しほる
ゝ心取直し。詞大事をかゝへし我身なれば。鎌倉へ忍のび込ミ。再び御矢を取ッかへすか。兄上の敵を討ッ
か。二ッに一トッ何れにも。助カりがたき我命。地そなたは都へ立チ歸り亡跡とふてくれ〳〵と。跡は詞も
涙〳〵。臺ははつとせき上ケて。タヽキソリヤ餘ンマりじや。どふよくな。今更いふではなけれ共。勤メの身に
て勤をばはなれてキン逢ッは勤メせぬ人よりは。又百ってうばい。粹程結句キン愚痴に成リ根のない事に腹
も立チ。口舌いふたりつめつたりあちら向イても張よはくついした拍子に下タ紐も。猶打解てひつたりと。
抱キしめたる睦言に。かはい〳〵の明ケ烏。盡キぬ咄しに。つく鐘の。サハリならふ事なら夜の明ケぬ國に生れ
て。いつ迄も。抱カれてねやの隙白ロく。置キ別れても。うつり香の殘る思ひの。十寸鏡。片時キ顏を合さねば
生キて居ぬ氣を知リながら。むごい心と計リにてすがり付イてはフシ中〳〵に。地離れがたなき花水の橋も、
漸打過キて。ひらに〳〵と平塚やキンゆかり求る藤澤に。宿のおじやれが聲〳〵に。三下り哥東マ男に都の。
女郎いきと情ケを一トつに寄セて色で。丸めた戀の山。傍で見るさへキンにくらしい。そりや余ンり強過キる。
武藏野の月。吉野の櫻。景とふぜいを一トッに寄セて雪で。丸めた富士の山。噂聞クさへうらキン山し。そり
や余ンり。強過る。フシ謳ふ一トふし聞キ捨て。キンいってげば道もとつかはと古郷も近カき程ケ谷とヲクリ思

へば。いさゞ二ッ文字牛の角文字 直ヶな文字 讀つくされぬ。かな川に漸たどり 三重へ着給ふ 地藏經歸妙頂禮地藏尊しやかのふぞくを臆念し。惡趣に出現し給ひて衆生の苦患を導けり。フシ 鉦鼓の聲も。幽なる。生麥村の離れ家に。住ば都こ墨染に。浮キ世を捨し道心者。フシ たそがれまへの看經は。殊勝にもフシ 又物淋し 地 大海は塵をゑらはず。不淨にも。日は照國の 公や。持テあましたるあぶれ者 道具やぶつたくりの万八がゆがみ捻れた縄のれん。あたまで明ヶてずつこ這入。詞 コレ道念 看經もモフよさつしやれこ。地 いへどいらへもフシ 一心ッ不亂願以此功德平等施一切發菩提心往生安樂ちやん〳〵こ鉦打 フシカヽリ 納め燈明しめし。詞 ホヽ万ッ八様お出なされませこ。イヤ坊ン様精が出るよ。したが先キの知レぬ後生願ふより施餓鬼かおんぞうでもじろかい。ハイ其おんぞうこやらせがきこやらをもじるこは何の事でござりますぞ イヤコレこぼけた顔せずこおらは大乘ぶちまけて仕舞しやれ。デモ一ッ向に存じませぬ。ハテやぼなわろじやの。おらはかこひ者の相談に寺方へ出入ル故よふ覺て居まする。おんぞうこは鰻の事ンだが。宗旨によつてしゆきん共又鉢卷共いふげな。せがきこは鯖の事。又鯖を普賢こいふ事は法花經こやら廿八こやら片假名こやらへちまこやらで。八ッ宗を兼學せにや一チミは知ラれぬ事ンだこ。旦那寺の和尚がお花の席て咄された。今時の出ッ家がこんな事知ラないでよい寺は取レぬぞや。次イ手に覺て置カつしやれコレ人こ足こは不もちの事。百性こは田作リの事。こいらはずんど覺やすい。蛸を天ンがいこいふては凡、夫めらが悟る故に。今では袋足袋こやらかすだ。地 國姓爺こは 蛤 淨國こは鮑の事。よふ稽古して置カし

やれと。地いへど相手になら柴折くべフシ火を吹付て。詞イヤ／＼かふあたまを丸めては肴が喰たい共思はねば。聞て置氣もござりませぬ。イヤ／＼夫は惡い了簡。世帯佛法腹念佛。コレ坊様。そんな片意地言ず共。こなたに少頼事が有。何と聞て下さるべいか。ハアテあたまを丸めた役なれば。お前のお爲に成事ならとは忝い。別の事でもないがコレ。高がかふだは。貴様を歴々の和尚に仕立外に釣出す仕事が有。どふぞ頼まれて下され。ア、イヤ／＼／＼そんなおつかない事は赦して下され。ヤレ／＼こはや醜しやと地取ても付ぬ杵で鼻嚙付様に万八が。詞イヤコレお坊。余り潔白にやらかしてもおれががんばつて置ためんかのまぶいげんさいの事さ。ハイ。いやさ昨日の暮過器量のよい女と若い男が爰の内へはいつたをとつくりと見て置た。あれは慥に欠落者こなた一人の仕事にや行まい。おれと相談する氣なら男めをまいて仕舞玉をこつちへ引たくり品川へ賣つてやれば十兩詰から上の代物。したがコレ。弓箭筋なら金にやならぬ。又親指に肉がなけりやこれも商賣屋で嫌ふ事。氣を付て置つしやれ。癲癇を採にはなた豆喰しやついしれる。身の代ハこなたと山割。なんとうまいか／＼と。地儕一人が呑込でぬれ手で粟のぶつたくり。世に万八といふ事は。此男。フシより始りける。地道念は無氣まじめ。詞ハテ扨御前はとんだ事。明るけりや月夜だと思ふて。起てゐながら寐言いはしやる。一人住の此庵室。欠落者とやら女子とやらそんな事は存ませぬ。そんならこなたは知ないか。しらなけりや是非がない。必後悔さつしやるなと。地苦を放してじろ／＼とそこら傍を

見廻しへ／＼立歸る、詞ヤレ／＼／＼さんだ男が有物ださ地云つゝ立て詞ホヽ冬の日は扨短い。咄しする間にもふ暮たさ地表を遙にながめやり、内へ這入てあたふたさ門の戸しめてフシせどロの地稲荷の社の扉を開けば、内ゟ出る義岑公臺も倶にしほれ顔。詞マア／＼こちへさ。地内へ伴ひたつた一枚嗜の掛川莫蓙をさらりさ敷遙下つてフシ手をつかへ、詞思へば盡ぬ御縁迚、昨日不思儀に御目にかゝり。御供申は申ながら世を忍ぶお身なれば。人の見る目を憚れ共、地見る影もなき此庵室忍ばせ申所もなく、詞幸ひさアノ稲荷様は、此村の鎮守にて、預りの此道念外からいらいてもござりませねば神は見通し稲荷様へお詫申て暫しの隱家。地嘸お氣詰り御究屈。いかに世の末なれば迚、義貞様の御公達。義岑様共有ふお身か此有様は何事ぞさ、キンこぼす涙に義岑公。詞思ひがけなきそなたの世話、何角に付て心遣ひ過分至極さの給へば、地ほんに不思儀の御縁にて見ずしらずのわたし迄。いかいお世話さ計にてしほるゝ姿。海棠のキン雨をおびたる。フシ風情〻。詞アイヤ／＼其お禮には及びませぬ、私はお前様を能存じて居ますれど。末〻の者なれば御見知りも遊ばしますまい。兄御様に附添て武藏野の御合戰。矢口の渡しの御最期迄始終御供に參りし者、其證據御目にかけんさ、地佛壇の下戸棚フシ明て取り出す一包、内に何かは白木の箱、蓋を開いて有合す。物干竿を手ばしかくきり／＼しやんさ押立れば。外に類ひの中黒は。紛ふ方なきお家の白籏、壁に立かけ飛しさり。詞御籏を所持する此坊主は。元來御家の御籏持。久助さ申者にて身は輕けれど普代の御家來。地

矢口でお果なされた時の其無念さ口惜さ。詞冥途のお供と川端へ幾度か立寄ったれど。御先祖ゟ傳はりし大切の此御籏。敵の手へは渡すまじ。一先古郷へ持歸り若君様へ差上て。其後は死でくれふと殿様の御最期を。地見捨てすご〳〵歸りましたりや。詞情なやお家は亡び城は敵に乘取れしと。聞た時のほいなさ悔しさ。己やれ敵の中へ踏込で一人成共切殺し。死で仕舞と思ひしがイヤ〳〵弟御のお前様のお行衛を尋出し。お籏をお渡し申さんと。此通り姿をかへ上方へと思ふても。差當つて路金はなし。お行衛知ぬと聞からは世間も少しづまつたら。古郷の方へ御出有んと。此所に住居してたくはつするも海道筋。待に待った甲斐有て。昨日不思儀に御目にかゝりましたは。私が存念が屆たか。有難やと思へば〳〵嬉しくて。夕部もろく〳〵夜も寐られず。嬉し涙で此正月。名主殿からしてくれた。布子を涙で絞りましたと 地すゝり上たる泣聲は。奇特にも又哀れなり。

地義岑公はから手水。キン御籏を取て。キン押戴。詞此籏を見るに付。討死なされし兄上の最期の御無念思ひやる。地思へば〳〵八幡にて。我を殘させ給ひしも。生ながらへて家を繼と云ぬ計の御情。夫に引かへ義岑は。若氣の至りの不行跡。遊所ゟ付込し竹澤が計略の元を搜せば皆我故。手こそおろさね兄上を殺せしも同じ事。其天罰にて此艱難。御赦されて下さりませと歎けば臺はしやくり上。詞敵の方便にたらされて。とやかふ云たが種と成。兄御様の御最期の惡人を引入し科人は此臺。御籏の手前も恥かしい。罰當りの我身をば蹴殺し給へと 地打ふして又さめ〴〵。と泣居た

る。道念は目をすり赤め。詞 いふても泣ィても返らぬ事。此上にもお前様はお家を發すが御孝行。私はかふいふ身の上。是より諸方を修行して。他力キをかつて我君を一ッ社の神ミに祝んと。地 思ひ立ッたる道念が志願は今に傳はりて新田の社建立と。たへせぬフシ修行ぞ頼もしき。フシかゝる折しも。地 万ン八が勸にて一チ度に寄ッ來る百姓共。内にはハット驚く道念ン。義岑公は手ばしかく御籏を取ッて懷中し又も隱るゝフシ稲荷の社。地 表テの方には無二無三戸を蹴破つて一ッ時にどつと這入レば。詞 ヤア何奴ッなれば狼藉と云ハせも果ずコレお坊。此万ン八が相談ンに乘ぬからはお觸の有ッた欠ヶ落者引ッくゝつて連レて行。玉はどつちへこかしおつたぬかせ／＼と摑付ク。そふはさせぬと道念が。地 有リ合彎刀を追ッ取ッて切てかゝれば百姓共御免ン／＼と迯ヶ行を跡を慕ふてフシ追て行。地 万ン八は小戻りし社を目懸ヶ立チ寄ッて。扉を明ヶんとする所へ取ッて返す道念が。彎刀振リ上し勢ひにコリヤ叶はぬと万八が一ッさんにフシ迯ヶて行。地 猶もやらじと追かけしが半ン途ゟ立チ歸り。扉を開き二人リを呼ヒ出し。詞 今の奴ッ等が歸らぬ内。此道ゟ落給へと。キン勸に是非なく義岑公。臺も用意そこ／＼に。あてどもフシなしに落て行。地 道念跡を見送て社ロの内へそつと這入リ。扉を立ッるフシ間もなく。地 追ミ歸る百姓共万八も一チ度に落合イ。詞 コレ／＼皆の衆玉の有リ所は見て置イた。さつきにもいふ通り何ンでも角でも二ッに割。半ン分はおれがしてやる。半ン分を惣割だぞ。地 皆こい／＼と立かゝり扉開いて引キ出せば、思ひ懸ヶなく道念が。狐の面を引ッかぶりすつくと。立ッたる有リ樣にワイと 地 驚百姓共。万ン八も悔りフシはいもう。地 道念ンは作クり聲。詞 うぬらが根性

ため直せと稲荷大明神ンの御神託謹で 地 承はれと横飛こん〳〵狐の身ぶり百姓共は身の毛立チ只ハイ〳〵と計リにて一チ度に頭を地にすり付尻フシもつ立ッてひれ伏ば。地 しすましたりと圖に乘ル道念。詞 わいらが心をためさんと。假に女の姿と化し此所へ來りしに。强慾無慙の百姓めら。文彌地 稻荷の神ンの御罰にて田畑殘らず踏あらし。思ひ知ラさん思ひ知レとはつたと。にらむ目も口も面ンで。地 隔て見へね共ふんぢがつたる勢ヒひに。恐れわなゝく百性共。詞 ア申シ〳〵夫レは余ンりお胴慾樣。私シ等は露塵程も曲つた心はござりませねど。此万八が賴ム故雇れて參つた計リ。御免なされて 地 下さりませとフシ口〳〵詫れば。詞 ム、そんなら此以後落人など搦捕とは云ハぬか。何が扨〳〵。夫レなれば赦ルして取ラす。ハア有リ難ふござります此お禮には小豆飯。イヤまだ有〳〵此庵の道念がたくはつに出た時。通れと云ハずにたんと入レるか。何が扨〳〵。大抓に入レませふ。夫レなれば赦ルして取ラす。此万八めは大惡ク人。林清 儕レ常陸の拔ケ參りの。小娘をかどはかし神奈川へ飯盛に賣ッた事 地 覺てゐるか。詞 南無三寶是は委しうよふ御存シ。其時は博奕に負しやう事なしの出來心。微塵も慾では致しませぬ。お赦しなされて下さりませ。イヤまだ有ル〳〵。イセヲント伊勢原の百性が。御年ン貢納めに出る所を。おこはにかけて船へ乘セ。五十三兩負させた其言譯ケは少ッ共有ルまい。詞 ア、悲しや夫レ迄を御存ジか。そふ知ラれてはおたまりやない。まだ有ル〳〵。隣の權助が房州へ鰯網にいた留守で。かゝアを儕レがちよろまかし孕せた迄知ッてゐる。コレハ扨きつい見通し。イヤモ一チ言もござりませぬ。ヤイ〳〵百姓共ハアイ聞ク通りの大惡ク人。万シ八めが村に居る故。ソコデ

此村が繁昌せぬ、村境から追放するおれに付ィて引ッ立來れ。ハア畏つたと百性共。万ン八を歴状ずくめ。道念は神前ンの幣帛取ッて先キに立。兵庫クドキ 抓面張ぶつたくりの万ン八はヨイ〳〵、慾の深カい事は糀町の井戸よヨウイ〳〵ヨイ〳〵〳〵アリヤリヤコリヤリヤ 二上リキヤリ ねりま大根で太いの根と來た。爪の長ゥさが三十三間ン三尺三寸ン三分三厘三毛三拂。そこで稲荷様の腹を立。ヨイヤサ王子の親玉眞先キかけ見ぐり笠森烏森リ。杉の森から三ン崎熊谷蕎麥切ッ九郎助福徳愛敬稲荷に西の宮。此神ミの御罰にて。そこら若い衆頼ミます。此万八めをしめろやいヨイサ〳〵ヨイコレハノサヨイヤナア引ッ立てこそ 三重 へ行末の六郷は近カき世よりの渡シにて。フシ 其の古は。都ゟ東マへ通ふ旅人トのキンヲクリ廻ハるも、遙弓と弦。矢口の渡シと開へたる。フシ 其の水上は調布や。キン さらす垣根の朝露を、貫き留メぬ玉川の舟を浮る流レよりフシ 知レぬ心の底深カき。 地 津人の頓兵衛が内とは思ひ棧作。物好キしたる亭座敷キ渡世には似ぬ家作りは、馬腦の階瑠璃の門扉龍宮城の乙姫か夫レかあらぬか娘のお舟。 鳶が孔雀のぼつとり者。キン 田舎に惜きフシ 姿之 地 擔桶に水を打かたげ立ッ歸る下人ノの六藏中シお舟様。詞 モウ料理は出來ましたか。旦ン那殿はまだ晝寐、ほんにマア有ふ事か。今渡シ守の頓兵衛といふては。おそらく日本ンの國中に續者なき大イ長者。なれ共余ンり人使イがひどいから。幾度置イても奉公人ンが。三日とは居たゝまらぬ故。お娘御のお前が。竈本の世話なさるで。可愛らしい其お手が荒ふかと思へば悲しうて〳〵。酸漿程な血の涙、御家老か番ン頭かこ恭れる此六藏、渡シ舟を漕隙ミには。薪を割ッたり水汲だり。いま〳〵しい事ンでは有ル。爰な内でも

旦那殿と渡し舟がなけりや樂じやと。地 小言にお舟は氣の毒顔。詞 コレ六藏人聞の惡いとゝ樣の噂地 よしてたもれと制する折からどや／＼と。しつかり候兵衛三上十次。からのびん助三人連。親分は內にかと揚口から大あぐら。地 皆樣よふお出なさんしたと。お舟があいその烟盤。詞 とゝ樣はまだ晝寐。御用が有なら起しませふと。地 いふ聲聞て一間ゟ欠まじくら。詞 ム、今そこへ行て逢ふべいと。地 ゆるぎ出たる主の頓兵衛。雪を欺く白髪に朱をそゝいだるしかみ面。强慾無道のフシ眼ざし。地 八反掛の大廣袖紙子仕立の伊達羽織。どつかと座して。詞 ヲ、皆揃つてよふ來た。して仕合はどふだぞやい。どふかふ所じやごんせぬ。持て立た大しくじり。三人ながら此中の元手。すつぱり負て仕舞ました。地 面目もなき仕合さ。フシ もぢかはすれば。詞 ム、ソリヤさん〴〵な目に合た。ゑいは。負る時がなけりや勝事もない道理。少計負た迚。補鍋匠が華鯨を請合た樣に。騷事たないわい。今一勝負やつて見ろ。コリヤ娘よ。ソレ板厨の金を出してやれ。アイ板厨を明るにも及ませぬ。さつきに品川の兵五郎樣と靑山の万九郎樣が見へて。日外借た金じや迚。持て來てござんす故。つい掛硯の引出しへ。ム、そんなら出してやるべいと。地 引出し明て。詞 ヲ、幸爰に六包有。一人前二百兩で足ずばもちつと借ふかと。地 いふに三人肝をつぶし。詞 ナント聞たか。ヲイ。ヤイ凡金持も多けれど。つがもないはした錢か何その樣に。掛硯にも六百兩、目出度といふも程が有。サレバサ。昔からない物は金と化物といへ共。化物はまだも出よふか。今時ない物は錢金。折ゝ氣ばらしに芝居を見ても。近年は

浄るりでさへ。何ンぞといや金のない事。余ンりけちな此時節。有ル所にはかふ澤山。マアどふすれば此樣にめつたに金が出來まするぞ。咄して聞カして下されと。地いへば頓兵衛烟管こち〳〵。詞イヤサ皆が了簡が惡いから。出來る金も出來ないわい。塵が積つて地山といへど積る内には又吹キちる。詞二文ン四文じや埒や明ない。出ッ世しやうなら相場か金山博奕は勿論。地是も近ン年ンはこずいかうで能烏もフシかゝらぬ故詞此頓ン兵衛が思ひ付キ。彼鎌倉で借元トの大將。地足利ノ尊氏樣ンと謀反勝負の義興殿が。やみ雲の高カつばり。詞武藏野の窩賭で大勝負。元手の强い尊氏樣も根こんざいぶち負ケて。コリヤ一チ番ン切リ替ふと鎌倉へ。地盔がへ。何か破かぶれの義興。うぬが命を投ガ長半ン。鎌倉へ仕掛ケの博奕。詞手におへない首尾に成ッたを。地鼻ッぱりの竹澤監物殿。かすり取の江田判官殿から。詞此親父へ人トをよこして。てらをしてくれると思つて。どふぞ魂膽してくれろと。モ色〳〵とのお賴ミ。地ハテ後生こそ願ガふまいけれ。詞人の爲に成ル事ンだ。じやが。甘口ではいけまいと。水銀奴からの思ひ付キで船の底をくり拔イて。六藏めにさるを引カせ。一チ番ごつきりで義興めを。地川中カでぐはんと云ハせたフシ其御褒美に此頓兵衛。詞尊氏樣の尻持チで。大名に成筈なれど。夫レでは結句氣が詰マり。好キの博奕か打タれませぬ。大名けんどんよしにして。やつぱりたべ付ケたぶつかけの渡シ守がよござりまするど申シ上たりや。そんなら何なと望メと有ル。そこでお金をしたゝか請ッ。地こそいつを元ト手に大勝負。勝ッ程にける程に持チ丸長者とは。フシおれが事。詞かふ普請をやらかしても。昔シを忘スれない樣にと。アレアノ通り床

の間に櫓や簑を錺物。地出世の因縁かくの通りとフシ語るにぞ。地三人は不審晴。詞夫レで聞コへた。そんならおいらも一ト思案シ。何ンぞあてずつぽうにやつて見よかい。ジヤガくり抜ふにも船はなし。是から坪皿をくり抜ィて。硝子入レてやらかそふナフい兵。イヤ／＼夫レ方もおらが望ミは。爰なお娘の舟底がくり抜て進ンぜたい地サア／＼お暇其内とフシ皆々打連レ立帰る。地道引ッ違へて走リ來る村の小底がずつと這入リ。詞申シ頓兵衞様。お尋者の事に付ィて。竹澤様から御用が有ル。社長殿迄只今一寸。ム、お尋者とは知レた事。新田方の落人の。御詮ン義であんべい。夫レなら行クにや及ばない。どちから來ても此渡シを渡らにやならぬ一ト筋道。兼て竹澤様としめし合セ。新田方の落人が。若シ此所へ來るが最期。相ィ圖の烽火を上ケると村ミで法螺を吹ケば。竹澤様から捕手が出る。若シもおれが方で搦取ルか討取ルか。加勢に及ばぬといふ知ラせには。アノ亭座敷の上に釣した太皷を打テば。村ミで取リ圍んだが皆ちる約束。社長のべら坊めが大キな面で。どう參つたかふ參つた隣の姥様茶を參つたとむだ計リいふで有ロ。イヤ何か様子は知リませぬが。呼ンでこいとの云付ケ。そんなら一寸ト行てやらふ。ヤイ六藏。若シも落人臭いやつが見へたら。烽火と太皷の手都合を忘スれるなと。地腰に大だらぼつ込ンでフシ小底を連レて出て行。地跡に六藏小聲に成リ申シミお舟様。詞エ、お前はむごいとキンすり寄レば。詞とゝ様の留守に成ルと。又じやら／＼とてんがう計リ。アイヤてんがうじやござりませぬよ。とふからお前に惚て居て。何ぼ口說ても戸板にごろ付豆よ。其豆故に身をつくし。根津音ト羽はいふに及ばず。氷川から補裙樓。朝鮮長カ屋鮫が橋。蘿

荷圃迄はついたれど。笠森リのおせんと。お前程なはどつこにもござりませぬはい。コレ申どふぞ叶へて下さりませ。アレ〳〵。テモ耳の早いやつでは有ル。コリヤたまらぬと抱キ付ク。地放せ〳〵とフシせり合所へ。地表ナ口から日傭の八助コレ六藏殿。詞ちつとの內用が有ル。代に渡シ場頼といふて。おれに任カせて貴樣はコリヤじなじやな〳〵。親玉へ知ると毛氈をかぶる出入リだ。地サア〳〵ござれと引立れば。詞アイヤ少ト仕かけた用が有ル。もちつと待ッて下され。イヤイヤ待ッ事はごんせぬ。貴樣の顏で色事とは唐なすもモウ古ルい。飛ンだ茶銚が西瓜と化たとフシ打連レ舟場へ急ギ行。地娘は跡に獨言。詞けふの髮は上ト村のおみよ樣が。筋立ァてくれなさつた大事の髱を損ふて。此簪の吹廻しの。地紋ン迄なくして仕舞たと。フシつぶやき〳〵入にける。地キン鴛鴦の番離れぬ。フシ二人リ連。地義岑公は漸と道念が忠義故。生麥村を落のびて。新田の方へと志し矢口の。フシ渡シに差かゝり。詞ノウ臺。爰が兄義興殿の御最期有リし矢口の渡し。此水底の恨しやと。地川に向カひて合掌し。南無。幽靈出離生死頓生菩提と。地回向の聲と諸共に。暫し涙にくれ給ふフシ臺も。倶に涙聲。詞ヲ、お歎キは御尤。早ふ新田へお歸り有リ。御一チ門をかたらひて。御矢の詮議兄御樣の敵をお討チ遊ばせと。地諫る詞に義岑公。詞見れば渡リに人もなし。道にて聞ヶば此家が。渡シ守の內とかや。地賴んで見んと門ト口に歩ミ寄リ。詞賴ませふ〳〵との給へば。地奧ゟ走ッて娘のお舟フシ何ンの御用と立チ出れば。地義岑公しとやかに。詞川の向カふへ參る者。舟の無心ンとの給へば。地顏つく〳〵と打守モり。詞イエ〳〵舟はいくらも有ルけれど。落人の詮ン議で日暮レては出しませ

ぬ。其上にお前の樣な美しい殿御には。借事は猶成リませぬと。地顏に見されてうつとりと心の内は燒が
らの。胸をこがせる薄烟。いとしと思ひ懸香のどふぞ留メたきフシ下タ心。地義岑公は氣の毒顏。詞我レヽは
急ぎの道。暮レに及ンで宿屋はなし。差當タつて難ン義なれば。何とぞ渡して下さりませ。イヱ／＼とふ有ツ
ても成リませぬ。宿屋がなくば私の内に。泊りなさつたがよいわいな。スリヤ留メて下されふか。留い
で何と致しませふ。地夫レは近カ比忝い連レの女が持病の痞。幸イのよい足休めフシ臺こちらへと呼ビ入ルれ
ば。詞ムヽスリヤあなたはお連樣かへ。ヱヽ憎らしいと地びんとする臺は會釋し。詞旅づかれの私ら。
お留なさつて下さるとは忝ふござんする。アイお前もお連なら。お泊マりなさんせ。サア申。見苦ルしけ
れどアノ奥の亭座敷がよい見はらし。地あれで緩りとお足休め。然ラらば左樣と義岑公。臺諸共打連レ
て奥の ヲクリ へ一ト間に入給ふ。地跡打ながめ娘のお舟。詞ほんに美しいといはふか。可愛らしいと
いはふか。迚も女に生るゝ。ならあんな殿御と添ツて見たい。夫レはそうとあの女中。兄弟なりやよい
か。若シ夫婦なら。わしや何ンとせふどうせふと。地おほこ娘の一ト筋に思ひ亂るゝ糸芒。キン穗に顯は
れて見へにける。地義岑公は一ト間を立ち出。詞申シヽ女中。連の女が藥たべる。お湯の無心ンと地の給
へは。娘はハツト手をもぢ／＼。詞申シ旅のおかた樣へ。お前に少ツト御無心ンがこさんする。コレハし
たり。かふお世話ニ成ルからは。何成リ共御遠慮なふ。アイアノ連の女中樣は。妹御でござんすか。お内
義樣でござんすかへ。是は扨かはつた事に御念ンが入ル。アイお妹御ならよふござんすが。若シ御夫婦な

ら。こつちに少ット済ぬ譯ヶがござんする。アイ成ル程。あの女は私シの妹。久サゞの病氣故。保養がてら淺草の觀ン音様へ。連レて參ン詣致しまする。ア、嬉しや〳〵。夫レ聞ィたらモフ何もかも入リませぬ。お前どふぞ私が内に。十日も廿日も。十年ンも。百年ンも逗留なされて下さりませ。したが。私らが様な田舎者は。相ィ手に成ルもおいやで有ラふけれど。ヱ、もふつんと。わしに計リ物言ハせ。コレイナ〳〵。こちら向ィて下さんせと。地右キよ左リと付ヶ廻す。琥珀の塵や慈石の針。粋もぶ粋も一チ様に迷ふが上の。フシ迷ひなり、地義岑公は氣の毒さ。詞思ひ懸ヶなきお宿の無心ン。いかいお世話に成リますると。地入ランとし給ふ袂トをひかへ。詞ソリヤ余ンりでござんする。是程思ひ詰た物を。返ン事のないはお胴欲。地なんぼ田舎生マれでも惚たが因果惚レられたが。不肖と思ふて下さんせ。サハリ日影の木ゞも花咲ば岩のはざまの溜り水。清ば住ム世の思ひ出に。叶へてやらふとつい一ト口。詞いふてくれたが。よいわいなと地すがり付ィたる袖袂ト。さはらで落ッる玉笹のフシあられもないが戀路なり。地義岑公も稲舟の否にもあらず。詞ム、夫レ程迄に思ふて下さるお志。さら〳〵仇には。思ひませぬと地じつとしめたる手の内は戀の錠前情ヶの要。互ィに抱キ月キ草の。移ひやすき色糸の濡の糸口綻び口。吸付キ引ッ付キしめ付ヶて離れ方なき風情〳〵。地時に不思儀や義岑公。娘も倶に色替り。ハツト身震ひ忽に。どつかとフシ倒れ息キ絶たり。地音トに驚キかけ出る臺。コリヤ何事と狼狽ながら。柄杓の水を口うつし。介抱しても呼ど生ヶても。其甲斐さらに詮ン方も。思ひ付ィたる氣轉の臺。扨は娘の色香に迷ひ。心の穢御ン旗の咎なるかと手を清

め。義岑公の懐へ手を差入レて件の御籏。さつと開けば忽チに二人は夢の。フシ覺たる心地。地表の方には六藏が戻りかゝつて。窺ひ足。義岑公傍を見廻し。詞此家に泊マりて伺ひ見れば。家業に似ざる普請の結構。樣子といひ場所といひ。旁以ッて心得ずと。娘が戀慕を幸イに問落さんと思ひし故。近カ寄レば今のしだら。子細そ有ラん此家の内と。地御籏を取ッて卷納め。臺來れど引連レてフシ奥の一ト間に入給ふ。地跡にしよんぼりほいなげに何と詞も投ヶ首し。地手著も知ラぬ海中に揖なきお舟が物思ひ。打しほれてぞキンフシ居たりける。地表に扣へし六藏は。木部屋に隱せし一ト腰ぼつ込ミ。詞アノ籏を持ッからは。紛ひなき新田方の落人。相イ圖の狼烟を上ヶふか。イヤ／＼討ッ手を引受ヶ討せては手柄にならず。拔ヶ懸し搦取ッて褒美の金。おれ一ト人でせしめてくれん。うまい／＼と地點き／＼奥を目がけてかけ入ルを。立チ塞つて娘のお舟。詞コレ六藏。そなたは奥の旅人トを。なんとせふと思やるぞ。ヤア何ンとゝは知レた事。さつきにとくと見て置イた。中カ黑の籏持ッからは新田の落人。義岑に違イはない。去年ン親方と相談して。舟底をくり拔イて。義興を殺す時は。命がけの事手傳はせ。御褒美を貰ふ時は親方一人リであたゝまり。此六藏はおちやつぴい。出物に成ッて今に此ざま。其弟の義岑。此度はおれが生捕て。御褒美丸ルであたゝまり。おれも出ッ世をせにやならぬ。邪广なさるりやお主迚用捨はないと。地留メても留マらぬ其勢ひ。一ト間に立チ聞義岑公。娘は一チ圖に戀の邪广。拂はん物とフシ思案を定め。詞ヲヽ無理にそなたをとゞめはせぬカ。何ぼいふても相イ手は武士。若シ仕損じまい物でもない。纔の褒美に目がくれて。わしが

いふ事聞ヵぬからは。是迄何のかのといやつたは。皆謊かやと 地いはれて悧り。詞ソリヤお前本ンの事か。イヤ〳〵アノ。奥の男めに氣か有ル故。おれを留ふといふ謀。そふうまくは參るまい。イヤノフ。そなたの心を見た上と思ふてゐた故。是迄は返ン事もせなんだか。夫共に疑やるなら。そなたの勝手にしたがよいと。地びんとすねられ六藏は。惡寒發熱天窻に湯氣。詞コイツハヱイワイ〳〵。夫ならお前は。此六藏が性根を見た其上では。きまつてくれるといふ腹か。サイノ。そなたがおれと夫婦になりや。とゝ樣ンの爲に子じやないか。親子の間に拔ヶがけして。一人の手柄にするにや及ばぬ。とゝ樣ンは名主シ殿へ行てなれば。とくと相談ンした上で。どふ共したがよからふと。地口へ出任ヵせ間に合をいふて水棹や詞の揖。渡リに舟と六藏は乘かけられてふはと乘リ。詞コリヤ近ン年ンにない能目が出たはい。そんならわしは名主シへ行て。親方を連レて來ふ。奥の奴ッらを逃ヵさぬ樣。氣を付ヶ給へ女房共と地延た鼻毛のとちめんぼう。フシ振廻してぞ出て行。地しすましたりと門トの戸の。懸金ヶかけてとつかはとフシ一ト間の内へ入にける。地フシ斯て時刻もひさ象の。空さへ渡る冬の夜の。本フシ廿日ゐなかの月出て。キン遠寺の鐘のかう〳〵と。常に流ヵるゝ川水も。フシいと物すごき門ト口の。地一ト群茂る藪の中。ぬつと出たる主シの頓兵衞。時分ンはよしと呼ブ子の笛。塀の蔭ヶ下人の六藏　頓兵衞小聲に。詞コリヤ〳〵六藏。娘めが日を覺し邪广ひろげばひち面倒。物音のせぬ樣におれ一人で忍び入ラん。手前は表に氣を付ヶて。若シ逃ヶ出ば討チ取レよヲツト合點と　地點き呵き六藏は元トの小蔭にフシ身を忍ぶ。地　頓兵衞は門トの

戸をキン引ケど。しやくれど明カざれば。大だら引キ抜壁切リ明ケ。這入ば吹キ込ム風に連レ燈火きへて眞の闇。勝ッ手覺し我カ内も慾に心のくら紛れ。忍べばいとゞ身も重く。床はぎち／＼足音トの耳へはいれば立留マり。一ト息ほつと次キの間へ又も踏出す。足の下びつしやり碎る芬盤。ヱ、どんくさいと心では怒ながらもそつと投ケ。襖にばつたりあいたしこなんなく。ヲクリ忍ぶ亭座敷。梯子の上へ二足三足。詞イヤ／＼。きやつも名におふ義興が一チ族なればこは物と。地心で黠きそつと下り。下タ屋へ廻つて探り寄ル。闇にも光るだんびらを抜ィて突込二階の板。上にはワツト玉ぎる聲。してやつたりと刄物引抜血押シのごひ。二階のフシ梯子かけ上り。地障子蹴放し月影に夜着引キまくり見て悔り。詞ヤア／＼わりや娘か。お舟かと。地フシ驚キながら。詞義岑と女めは何國へやつた。有リやうにぬかせ／＼。地と目をむき出し怒の大聲。フシ娘は顏をつれ／＼と。恨しそふに打ながめ。詞申さゝ様。浮キ世に生れた人ト毎に。慾をしらぬはなけれ共。お前の様に凝かたまり。佛ッ共法共辨へず。人トは死ふが倒れふが。我レさへよければ搆はぬと。身勝ッ手計リの强慾非道。有ラふ事か源氏の大將。義興様をたばかつて。むざ／＼と殺したる其天罰ッが我カ子に報ひ。宵に泊マりし旅のお方。義岑様とは露しらず。地可愛らしい殿ぶりに恥しながら心の迷ひ。お傍へ寄ば恐ろしや御旗の咎。詞義興様の御怒にて悶絶せしも。そふとはしらぬ戀路の闇。最前ン六藏を追ィ出し。一ト間へ忍び様ゞと歎きしに。義岑様のおつしやるには。兄を殺せし頓兵衛が娘故。此世で添事ならね共。親と一ッ所でないといふ。一トツの功を立ッるなら。未來で添ふとおつしや

つた。其の一言がわしや嬉しい。此内にお出有てはお身の上も心元なく。委細の譯を打明て。月の出ぬ間を幸に。船にて落し參らせしと。地聞ゟ頓兵衛じたんだ踏。娘が髻引掴。詞ヱ、己は〳〵〳〵大膽千万な。見ず知らぬ男めに惚くさつて。親の大事を他人に打明。手に入た代物を。よふ〳〵も落しおつた。道しらず。罰當り。地悟い奴と拳振上丁〳〵〳〵。手負の上の打擲に。娘は息もたへ〴〵に。詞ヱ、罰當り道知らずといふ事。お前も見事御存か。常〻不埒な勝負好。剰恐しい惡工が仕たらいで。たつた一人の娘の戀人。殺さふといふ惡心から。現在我子を手にかける。余り非道じやどふよくじや。地死る我身はいとはね共。跡に殘つたお前の身の上。案じ過しがせらるゝと恨歎けば。詞ヱ、役にも立ぬよまい事。落人を取逃して此親が立物かと。地突退はね退け行んとす。娘は袖にしがみ付。詞異見いふても歎いても。聞入給はぬ無得心。かゝ様がござるなら。仕様模様も有ふ物地何をいふても身一ツに思ひ詰たる義岑様。此世で添れぬ惡縁と。聞ば聞程猶戀しく。お手にかゝつて死だなら。親と一ツでないといふ。言譯立ば未來にて。いとし殿御に逢れふかと夫を頼二つには。一人の娘が先立ば一念發起もし給ひて。お心も直らふかとはかない事を頼みにて。覺悟極て死まする。娘可愛と思すならお心を飜へし。義岑様を助てたべ。頼まするとくどき立ワツト計に伏沈。血汐に爭ふ血の涙不便と。いふも愚なり。地頓兵衛はせゝら笑ひ。詞此年迄仕込だ根性。釋迦如來が元服して。誤り證文書ふといふても。いつかな〳〵飜へさ

ぬ。相ｲ圖を定めた義岑めを取ﾘ迯ｶしては。竹澤様へ約束の顔が立ﾀぬと。地娘を取ｯて突ｷ飛し。二階をかけおり川端に仕懸し烽火に火打の早業。天を焦せる炎の光ｶり。兼て相ｲ圖の村〻。より。人を集る法螺吹ｷ立。さもフシ物すごき其有ﾘ様。地娘は苦しき身をあせり。詞村々ゟ大勢にて取巻ｶれ給ひなば。何迚お命有ﾙべきと。地天にあこがれ地にひれ伏正躰ｲ。涙の隙よりも。思ひ付ｲたる一ﾄ思案ｼ。上なる太鼓に急ｯ度目を付。詞此太鼓を打ｯ時は生ｹ捕しと心得て。村〻の圍をさくと最前ｼ聞ｲたが天のあたへ。地爰ぞ殿御へ心ｼ中の。女の操と一ﾄ筋にキン思ひ付ｲたる心の詢。よろめく足を踏ﾐしめ〱。漸桴を振ﾘ上ｹて打んとしても手はとゞかず。伸上ｶりてはよろ〱〱。又起直つて飛上ｶり。どんと一ﾄ聲かつぱと伏ｽ。音ﾄに驚ｷかけ來る六藏。夫ﾚ打ﾀせてよい物かと。抱ｷ止るを突ｷ退はね退爭ふ内キン身輕に出ﾃ立ｯ頓兵衛が。繋し舟に飛乘ﾘて。櫓をフシ押ｼ立ﾃて漕出す。地上には娘が身をあせり。コレノフ〱〱と聲限ｷり呼ど。叫べど叶ﾅはねば。又もや桴を振ﾘ上る。おつと任ｶせと後ﾛゟ。桴引ｯたくる六藏が脇差引ｷ拔切ﾘ付られ。欄干より眞逆シフ川へさんぶり水烟。地上には娘が詮ｼ方も。落たる靭を振ﾘ上てめつたむしやうに打太鼓。響に爭ふ頓兵衛は櫓を押ｼ立ﾃてゐいさつさ手疵に痿ぬ六藏が。日比に馴し水練に早瀬の浪を事共せず。拔ｷ手を切ｯて立ﾁおよぎ。娘は死手のだんまつま。夫ﾄを慕ふ執着心ｼ。蛇共成ﾙべき日高の川。領巾麾山の悲しみも是にはいかで増るべき。跡は間遠に鳴太鼓遥に隔たる三重へ川向ふ。地頓兵衛は腕限ｷりなんなく舟を乘ﾘ付ｹて。陸へフシ飛おりかけ出す。地堤の蔭ゟ高聲に。詞ヤア〱新

田小太郎義岑是に有リ。匹夫め待テと呼ビ懸ケられ。地頓兵衛は立チ留れば。すつくと立ッて義岑公。現在の兄の敵見遁すべき奴ッならねど。どふで助ヶぬ己が命。娘が切なる志シにめで暫時の命助ヶしに。追ッかけ來る不敵者。モフ赦されずとフシ拔キ放せば。詞ヤア飛ンで火に入ル夏の蟲。名乘リて出たは百年ジめと。地渡り合て丁〳〵はつし。何とかしけん頓兵衛が。つまづく所を義岑公。付ヶ入て取ッて組ミ伏セ首をかゝんとする所へ。臺を引ッ提六藏が。詞サア義岑。親方殺さば此女たゞ一ト思ひとしめ付ヶる。地ハツト驚ロくたるみを見。持イ返して頓兵衛が。踏やら蹴るやら叩くやら。詞コリヤ六藏娘が敵の二人の奴ッ原。なぶり殺しにしてくれんと。地擢と水桿のからさほ打。無念ン〳〵と義岑公。臺は苦ルしき聲限ヽり。力一ッぱい牛頭馬頭がいつそとゞめの一思ひ。今が最期觀念ンと振リ上る間もあら不思儀や。何國か共白ヶ羽の矢二人が吭射ぬかれて。フシ其儘息は絶果たり。地義岑臺は起キ上り。詞お前にお怪我はなかつたか。そなたは無事なか。去ルにても何者の業なるぞと地引キ拔〳〵。詞ヤア是こそは家の重寶。水破兵破の二タツの御矢と。地驚キ給へば臺は目早く。詞其矢に何か短冊が。ム、實もと月明カり。何ミ二つの矢を奪れては。新田の家名の衰へん事を愁へ。我一チ念の通力キにて敵の手より奪返し。其方へ與る者ゝ。新田小太郎殿義興と。地讀も終らず義岑公。ハ、、、扨は兄上義興公。お命亡び給ひても魂魄はれい〳〵と。家を思ひ。弟を憐給ふ大恩。何を以てか報すべき。詞再び御矢手に入からは。官ン軍をかり集め。朝敵を亡して兄上の恨を散せん代ミ傳はる此御ン矢。家の重寶。武運の守モり。地ハ、、、

有リ難し忝しと跡上て悦び給ふ。末世の今に至タる迄新田の社へ参詣し。守モりの御シ矢頂戴の。フシ因縁斯こそ。しられける。地時に向ふの川岸に。松明挑灯きらめきてフシさなから晝のごとく〳〵。詞ム、扨こそ〳〵。敵方の捕手の人シ數。押シ寄スるを覺たり。此隙に落のびんと。地臺諸共いつさんにフシ漸遁れ落給ふ。地程もあらせず竹澤監物。數多の家來一チ同に船に込乘。詞ヤア〳〵者共。頓兵衛に言。付ヶ置し相イ圖の太皷の聞コへしは。落人を生ヶ捕リしと。待テ共〳〵沙汰せぬは。仕損シぜしと覺たり。追かけて討チ留メめん。急げやつと下知すれば。地櫓を押シ立テてゐいさつさ。川の半に乘リ出す。不思儀や俄に風起り。川波逆立かき曇る。空に雷電霹靂フシすざまし。くも又醜し。數多の家來を始として。水主揖取色違へ。不敵の竹澤少シも痿ず。舷につつ立上り。詞ヤア比興之者共。此川にて去年の冬。義興めを殺せし故。恨ミをなすと覺たり。シャ何程の事有ラんと。地虚空をにらんで立ッたる所に。空中より聲高く。詞ヤア〳〵竹澤監物秀時慥に聞ヶ。汝が術に亡びたる。新田左兵衛ノ佐義興が。一念爰に顯はれて恨をなさん。思ひ知と地呼はる聲の下よりも小山のごとく波立ッて。舟をゆり居ゆりおろせば。廣言吐し竹澤も。五體わな〳〵膽禁色。猶も吹キ來る暴風。船は碎けて飛ちれば。數多の家來一ッ時に。底のフシ藻屑と成リにける。中にも地強氣の竹澤が。波をくゞつて游ぎ行。上より黒雲覆ひかゝり。甲冑を帶したる義興公の御姿。馬上ゆゝ敷ク出立ッて。御手をのべて竹澤が頭を抓と見へけるが。二タツにさつと引キ裂て。今こそ恨ミはれたりといふ聲倶に船シ中にて。亡び失たる十ッ騎の魂魄ハ君を守護してあり〳〵と空

中に顯るれば。雷もしづまり浪風もキン治る御代の末迄も。運を守モりの御神德。十騎の宮と諸共に仰がれ。給ふぞ有リがたき

第五

地 新田左兵衛ノ佐義興公。怒の一チ念ン止時なく。鎌倉六波羅の舘にて雷鳴數度に及びければ。御怒リをなだめんと矢口の村に社を建テけふ遷宮と聞キ傳へフシ參ン詣群集をなしにける。地 華表の方ゟ人拂ひ 勅使のお入リこざンめけば。新田小太郎義岑公。裝束改め出給ふ。兵庫ノ助信忠は德壽丸を傳てフシ禮義 正しく扣へ居る。地 程なく勅使四條ノ大納言隆資卿。儲けの席に昂せ給ひ。詞 ホ、珍し義岑。夫レなるは德壽丸よな。扨も義興が靈魂。鎌倉六波羅の舘にて種ミの恨をなせし故。尊氏義儀恐れをなし。南ン北朝御和睦調ひ。天下太平に治り万ン民安堵の思ひをなすも全く義興か神ン靈の德。古今の類なき忠臣と叡感殊に美しく。新田大明神と崇べし。又忰レ德壽丸は新田の城を給り父が本ン領安堵すべし。義岑は少將に任官し昇殿を許し給ハる。兵庫ノ助が忠勤ンジ。南瀨ノ六郎が節ツ義叡聞に達ツし甚感し思召る。義岑宜しく沙汰有ルべしとの綸命。地 猶も忠勤ン勵べしと 聞て兩人有リ難涙。義岑公 謹で。詞 コハ有がたき勅定此上ながら宜しき樣。地 奏聞願ひ奉ると勅答有レば兵庫ノ助。詞 尊氏公の執權畠山道誓。清忠卿と心を合天下を奪ん工にて。親しき一家の新田足利爭亂に及し段。彼等が惡事顯ハれ兩家御和睦のしるし

迚鎌倉方兩人に繩をかけ引渡されてゐなり。地夫〻と有ければ。ハットいらへて道念が下知に隨ふ守護の武士。二人の繩付引出すフシ折こそ有。地思ひ懸ヶなき後の方鬨をどつと上ヶにける。地コハ何事と見る所に。江田判官景連ラ手の者引ぐし追ッ取卷。詞ソレ遁すなと下知すれば地心得兵庫は若君を道念に抱せて。當るを幸ィなぎちらせば。むら〳〵ばつと迯ちるをフシ遁さじやらじと追て行。地其隙に江田ノ判官二人リの繩付キ助ヶけんと立寄ル所に不思儀やな。華表の笠木落かゝり淸忠景連呂山壓に打れて一ッ時にフシみぢんに成ッて死てげり。地コハ不思儀なる神德と勅使も感涙義岑公兵庫助を始ノとして。有リ合人トミ下部迄ハット計リに三ン拜九拜。實著き靈驗は。響の聲に應ずるごとく。水淸ければ月やどる諸願成就長久の。キン君と神ミとの道直グに榮ふる。御代こそ目出度けれ

明和七年
庚寅正月十六日

福内鬼外戲作
補　吉田冠子
　　玉泉堂
助　吉田二一

跋

樽ぬき澁柿を笑て曰。汝我身の澁きを恥ず。澁柿答て曰。汝も澁を拔ずんば澁く。我も澁をぬかば甘からんと。善惡は本不二なり。一日吉田冠子來りて淨瑠璃の作を請ことしきり也。されば盲は蛇に畏ず。小戸はぼた餅に迯ずと。不稽無上の筆任せ。只初段の切三段目の口のみ予が筆にあらず。其餘は闇雲に綴合せども。今をはじめの作者の巣立。しかも初日の急なれば。引書を閲に遑あらず。校合も足されば其誤多からん。澁のぬけざる澁柿の。澁き所は容したまへ。寅の初春中旬。作者の甲折福内鬼外まじめに成て誌す

右之本頌句音節墨譜等令加筆候師若鍼
弟子如縷冏吾儕所傳泝先師之源幸甚

名代　薩摩屋　小平太
座本　豐竹新太夫

書肆

江戸室町三丁目
須原屋市兵衞梓

源氏大草紙

五段續役割

初段

端　豊竹露太夫

中　豊竹久太夫
　　豊竹麟太夫

切　豊竹志津太夫

奥　豊竹綾瀬太夫

二段目

口　豊竹麟太夫
　　豊竹喜太夫

中　豊竹綱太夫

切　豊竹和佐太夫

三段目

口　豊竹久太夫
　　豊竹綾瀬太夫

中　豊竹麟太夫

切　豊竹喜太夫

四段目

口　[illegible]
　　豊竹和佐太夫
　　豊竹久太夫

中　豊竹麟太夫

　　豊竹和佐太夫

切　豊竹綾瀬太夫

五段目

豊竹露太夫

千秋万歳楽

源氏大草紙

座本豊竹東治

序詞　狡兎死て良狗烹られ。高鳥盡て良弓藏。古今同じき世の常と。張子房は赤松子に詫し。范蠡は五湖に遁る。治亂に達せし智者の譽。爰に傳へて八十二代。後鳥羽院の御宇に當つて武將源の朝臣頼朝卿。六十余州の惣追捕使と。威光輝く。鎌倉山ヨロシへ時キ世ぞ盛り。さかんなる。地 比は建久元年如月下旬。兼て宿願ましませば鶴が岡八幡宮造營有リ。遷宮の義式嚴に。拜殿に幔幕打タせ上檀の間に座し給へば。御座の左右は三老職畠山ノ庄司重忠。和田ノ左衛門義盛。梶原平三景時を始として。御譜代外様の大小名フシ列を。正して伺公有ル。地 頼朝仰出さるゝは。詞 今天シ下一ッ統して四海を掌握する事も。代〻源氏を守りの氏神。八幡シ宮の御シ加護なれば。神恩を報せん爲此御シ社を造營せり。地 夫レに付キ旁に兼て申シ渡せしごとく。奉納有ルべき繪馬の趣向フシ見やうずるはと御諚有ル。地 重忠御意を承はり夫レ〻と有リければ。ハット 答へて扈從達手〻にヲクリへ繪馬を持運びフシ御シ前に並ぶれば。地 大將つく〲御覽有リ。詞ホ、何ヅれも心を込メられて物好キ多き其中カに。景時と記せし繪馬柳の古木の切リ株に。孽の生出ッる傍に斧を画しは。地 心有リげの繪馬の趣向子細いかにと有リければ。したり顔に梶原

平三「詞ハア御尋なく共申上んと存せし所。平家の大敵亡びて後義經の悪工み親兄の禮を忘れ君にさからひ剰へ奥刕へ逃下り秀衡を賴みにして。地旗上せんと計内秀衡病死の虚に乘じ。我君の討手として。是成義盛馳向ひ一戰に討亡し。君の病を除くといへ共。詞靜が腹に出生せし。經若といふ小躮未此世に生存へ。又義經重恩の武士鈴木三郎重家。討死に洩しと聞ば彼是以て心がゝり。地敵の末は根を斷て葉を枯さん。若捨置ば繪馬に画たる柳のごとく再び榮へん義經が余類。詞草を分つて搜し出し。切らん願ひの繪馬の斧。地御賢慮廻らさるべしと肝曲邪智の辯說を重忠引取詞コハ心へぬ景時殿の御評義。義經の事はいふて返らず。漸殘た經若君は現在君の御甥ならずや。御有家知るならば相應の所領を給はり。御連枝の數に加へん事公の政道ぞと。地云せも果ずヤア又しても重忠の仁義立。詞既に我君賴朝卿も。池の禪尼や重盛の。知慧なし共が助し故今源氏の御代と成。眞其ごとく義經が小躮も。助置ば後日の仇。イヽヤ左樣にはいはまじ。平家の亡びし其根ざし君を助し故にはあらず。入道の悪逆天の咎は理の當然。又經若君を助ん事は。昔武王紂を討て其子を報じ。殷の祀を繼しめ給ふ。地ましてや科なき義經の御身。舌三寸の災にかゝり給ひし御落命。詞ム、舌三寸の災とは。此景時が義經を讒言せしとの當言か。ホヽいふ迄もなく逆櫓の遺根。御邊が讒言せし事は童迄も能知たり。まだ其上に經若君迄搜し出して殺さんとは。エヽ見さげ果たる心根と。地一本さゝれてせき立梶原。モフ赦されぬと膝立直し反を打て詰かくれ

ば。重忠騒ず。詞ホヽ悪逆無道の御邊が及。仁義を守る重忠が體にはよも立タじ。地立テて見られよ景時とちつ共痿ぬ優美の詞。ヲヽ其息キの根を留メてくれんと立ナかゝるを。和田ノ義盛リ中に立ッて押シとゞめ。御前ンなるぞと制せられ不肖〴〵にフシ座イ直れば。地頼朝卿御氣色有。詞無益の論に時キ移れり兼て申渡せしごとく此鶴が岡造營イの嘉義。猶も武運祈の爲。源ン家に傳はる蟬折レの名管を以ッて舞樂興行有ルべき爲。當時笛に名を得たる義盛が甥。荏柄平太胤直に。先キ達ッて彼蟬折レの名管を渡し置ク。地笛の調子も調ひつらん是にて一ッ曲聞カまほしと。仰に義盛頭を下ゲ。詞我子同然ンの荏柄ノ平太。此度の御用承はる事家の面目身の冥加。かゝる御用もあらんかと神樂堂迄召シ連レたり。地ソレ〳〵と呼次にぞ。ハット答へてフシ立チ出る。地荏柄ノ平太胤直。笛箱携へ座に直れば義盛リ聲かけ。詞サア〳〵平太御意成ルぞ。急いで笛を仕ッれ。ハヽアこは有リ難き上意の趣。未熟成ルはした藝。此度舞樂第一チの笛の御ン役崇る事。冥加に叶ナひし仕合セと。地帛ほどいて笛箱ハ蓋を開けばコハいかに。重みがはりの木の折レ計リ内には笛のあら不思義と。いふに驚ロく人ゝ彼義盛いらつて。詞ヤア大イ切ッの名イ管ン何として紛失せしと。地面色かはれば胤直は身拵して懸ケ出すを。義盛制してヤア狼狽者何國へ行。詞アイヤ笛の盗人ト詮義して身の云イ譯を仕ッると。地又懸ケ出すを取ッて引ッ伏セ扇を以て丁〳〵。詞ヱヽ儕慴いやつ。並ゝならぬ名イ管故に淨穢レを憚りて常常に事替ハり猥に出サず。箱の儘にて取リ扱ふ程の御ン笛なれば。片時トも身を放さず大事にかけて守モるべきを。疎略にせし彼奪取ラれ。剩狼狽廻ハる盗人ト

の詮義せんとは何を證據何國を當途。ヤア血迷ふたる空氣者。諸大名の見る前義盛迄が恥さらし我ガ君への申シ譯御前ンにて手討チにする。地 そこ動くなと老人ンの心いら立ッいかりの聲。地 頼朝暫しさとどめ給ひ。詞 義盛が立ッ腹尤ながら今平太を殺したり共笛の盗人ト出るにあらず。そも此笛は我ガ先祖六孫王が傳タはる名管紛失有ッては源氏の瑕瑾。地 盗人の出る迄平太は重モき科人ンなれば重忠に預ケ置詮義怠るべからずと。フシしづ〳〵と立チ給へば。還御ぞふと呼はつて警蹕の聲囂。前ン後を圍ふ供奉の面ン〻臺笠。立テ笠大鳥毛。取リ治たる。六十余疋。動かぬ。御代ぞ三重へ豐カなる。地 渡津海のフシ其浪間か。顯はれて。爰に鎮座を江の嶋の神ミに歩の船の足。招く幟のたへ間さへヲクリ渚に群ふ參ン詣は武家町人ンの分カちなき。フシ片瀬の濱ぞ賑はしき。地フシ世を忍ぶ。深編笠の浪人ン妻義經の舊臣鈴木ノ三郎重ケ家が跡に付キ添丸額。一ッ子要之助諸共に磯邊フシ間近カく歩寄リ詞 コリヤ〳〵粉レアノ向カふに見ゆるが江の嶋。こなたの在所が腰越村 亡君義經公御在世の砌梶原が讒言にて此所か追ッ返され給ひしを。思ひ出すも奇怪さ。地 詠やつたる目の内に無念ンの涙はら〳〵と拳を握れば要之助 詞 かく落ぶれし身の上エも皆梶原が業なれば。地 見付ケ次第に差違義經樣の御無念ンを 詞 イヤ〳〵弟龜井ノ六郎を始イ。衣川にて死出の御ン供。此重ケ家は父郡司殿の老病を見廻イの爲。國へ歸りし其跡にて鎌倉かの討ッ手として。地 和田ノ義盛に責寄セられ是非に及ばぬ御生害。重恩の主君ンを先キ立。ながらへ有ルべき謂なければ。詞 和田梶原と差違ェ死スべき命生キながらへ。剰ヱ數代の知行所藤代迄を取リ上られ。有ッ

に甲斐なき身の上ヱも。地静御前ンの御腹に出ッ生有リし若君。都に殘りましませば何こぞ守立テ籏上ケし。亡君ンの御無念を散せんと思ひ立チ。尋れ共お行衛知レず。詞若シや敵の手へ渡りしかと思ひ廻せば安堵ならず。鎌倉へ入込ミなば定メて樣子も知レんかと。思ひ立ッたる俄旅おれは是ゟ鎌倉へ行余所ながら樣子を聞カん。そちは始メての事なれば見物がてら江の嶋へ參ン詣し。人の噂に氣を付ケけよ地必スミ形そぶりを悟られぬが肝要。詞アレアノ磯續か七里が濱。夫レを過キれば極樂寺の切リ通し。通り拔ケればつゐ鎌倉。初瀨の門ン前ンにて待チ受ん。地早く來れと云イ含立別カるれば要之助。フシ船を目當テに急ぎ行。地寒からずフシ又暑からぬ。春の日の小ヲクリ心。うき立ッ海原に。錺立テたる御座船を繋捨てざは〳〵と。數多の女中に取リ卷カれ。上る姿のしどけなき。義盛の乙娘千種の姫はうつとりと。戀に心も沖の方詠めやつたるフシ後ロから。地外ト珍らしき婣共申ミお姫樣。詞何を其樣にうつかりと沖計リ御覽遊ばさずと。こちらの磯へ入ラつしやつて美しい此貝を地サア〳〵お拾ひ遊ばしませと。騷立れど一ッ心ン不亂。キン心引るゝ後ロ髮。お局は心付キ。詞扨はさつきの若カ衆樣に。戀のいろはにほの字なら。地打明ケて御意遊ばせ。詞常ミ大殿樣の仰には。男は姫が望ミ次第との事なれば。お耳立ッても大事ない。殊にマア誰レミも。見とれる程に美しい今のお若カ衆。地賤しい人トでもなさそふな。若シもそふなら私シ等が取リ持チして上ケませふと。せがみ立テられ千種の姫。さつきにちらと見初メてより有ルにあられぬ物思ひ。ヲヽ恥カしと振リ袖に。フシ包ムに餘る靨なり。地婣中はそゝり立テそんならいつそお若衆樣を。爰に待チ受ケ口說

て見やう。詞モフ追ッ付下向で有ラふ。イヤ／＼／＼大勢ィ寄ッて騒いだら取リ逃すまい物でもない。地マア／＼こちへと御局が差圖に是非なく姫君も幕の。フシ内へと入リ給ふ。地かくぞとはフシいざ白砂の、磯傳ひ、父の敎を一ト筋に要之助が下向道。とつかは急く向ふ方。やつす姿は千種ノ姫手籠に小貝携へて。詞サア／＼貝を買しやんせ。貝の名所ロ數々の中カに取リ譯此浦の。浪に寄ルてふ。地しほらしき。キン其俤の鏡貝移る心の色貝や君が目元トの鹽貝を。キンいつの世にかは忘レ貝心うつとり。フシ空蟬貝、我カ身をこがす螢貝、胸に思ひの數々は。蠣つくされぬ。フシ筆貝に。地雁の便リの玉章貝。よいお返事を松河貝、貝めせ／＼と付キ纏ふ。地要之助は急ぎの道イエ／＼わしは急用なれば貝は望ミにござらぬと、行ッんとする間に奴共ばら／＼と立チかゝり。詞姫ごせの身で恥しい。貝を賣ふと押シ付ケ業。仕懸ケた戀をはづそふとはふがいないお若衆樣。何ぼ逃ケても逃カさぬ爲此お羽織を質取と。地手ン々に剝取リ無理無躰フシ幕の内へと伴ふ折から。詞ヲ、其貝はおれが買ハふと。地云ィいゝ出る梶原平次。手持チ無沙汰に千種の姫逃ケんとするを引ッとらへ。詞常々おれが文玉章。口說時キには返ン事もせず。生娘メかと思ふて居れば。どこの牛の骨やら知レもしない若衆めに、胸の惡ルい濡せんさく。ヤイそこな礫若衆め。なくなれば赦ルしてこます。さもなければ目に物見せんと。地いと憎さげの雜言も。望ミ有ル身は堪忍の胸をさすつて要之助フシ鎌倉さして急ぎ行。地跡には平次が鷲鵰。詞あつたら物を若衆めに。すつての事ぱつちりと、初ッ物七十五日とやら。來合ハしたはこつちの仕合せ。フシサア／＼ちやつとゝ抱キ付を。地奴共が後ロから

こそぐるやらつめるやら。ヱヽいま〳〵しいげんさい共と。張退ぶち退騒ぐ中チ。物に馴たるお局が姫君の手を引イて。迯ケて行共尻餅を付キヽは是幸イ。砂を掴んで投ケ付クれば。平次は目口も赤らむ顔。赦ルせ〳〵ともだゆる内。皆ばら〳〵と迯る共。しらぬ盲のめつぼう掴ミ。コリヤしてやつたと抱キ付手隙り。いつの間にかは兄源太。ヱヽたわけめと呵られて。コリヤ〳〵どうじやと狼狽るを。ヱヽ馬鹿つらめが嗜めと。云ハれて元來むしやくしや腹。詞何おれを嗜ナめ所か。こなたも大磯の吾妻野に。首だけ登つても叶ナはぬ筈。荏柄ノ平太に先ン越され。其腹立に蟬折レの。笛を盗ンで其科を シイ ヱヽ。夫レを受でいふ事かい。兼て父景時殿頼朝を亡して。天下を一ト呑ミ謀叛の企。氣にかゝる和田の一チ族。仕廻ふて退ケる笛の紛ン失。ぴいい共云ハさす其盗人を。ぬり付ケる思案ンの段ミ。地コリヤかう〳〵と囁けば。平次ぞく〳〵小踊して。詞兄貴の思案ンは又格別。荏柄を仕廻ふてこなたの望ミ。吾妻野が手に入ルヽ上又。其笛の盗人を。朝比奈にぬり付クれば尻リの來る氣遣イなく。兼ておれが惚て居る。喜瀬川めか是迄は。アノ朝比奈に心ン中立 おれを振ッた意趣返し。何ニも角も成就する。地うまい趣向といきり出万ン事は幕の内にてと ヲクリ 兄弟フシへ打連レ入にけり。地又もこなたへ着船の陸へ上りし乘合の。中に一ト際目に立ッて。フシ粹な姿は。大磯に。小ヲクリならび。名取リの吾妻野が心に深き立願の。フシ江の嶋詣て歸るさを。地やり手禿が取リどに。詞申シミ。さつきに岩本ト院で頼ミなんした願ンがけとやら云なんしたも。大方タは荏柄様の御命乞で有リいせふ。サイノ思ひがけなき主シの災難。蟬折レの笛が見へねばどふ成ル

行も知レぬと聞ク故。地悲しい時の神たゝき天ン女様への立願も。どふぞ主シの明カりが立チなんして。わつちも廓の苦患を遁れ。詞本ンの女夫に成リいす様にと。願ン立テするも身勝手計。地サア〳〵暮レにならぬ内早ふ〳〵とフシ行所へ。詞よふ〳〵見付ケた逃まいぞと。地走リ出たる梶原源太。はづされもせず吾妻野が。詞ヲヽ源太様ンよふ参りなんしたの。イヤおりや辨ン天かそさまが信仰。けふ参ン詣と聞イた故此所に待ッていた。廓へいては度ミ振れ。云イたい事も得云ぬしたら。詰マる所は在柄といふ虫めが付イて居る故じや。其平太めは笛の事で牢屋の住居。頓而の内笠の着られぬ男めに。心ン中は入ラぬ物。コレ馴染をかへるが上分別とフシしなだれかゝれば。詞ホヽヽぬしや馬鹿らしう御ざんす。黴の生るせりふよしなんし。長カくいふには及びンせぬさつぱりと返ン事しやんしよ。わつちや主シは好キいせぬから逢フ事はいやでござりんすアイ置キなんしとフシあちら向ク詞ムヽそふ手強ふ出られてはおれも男の一ト分ン立タぬ。よい〳〵此方も男の意地是から屋敷キへ連歸り。無理やりに抱イて寢ると。地引ッ立て行んとすやり手禿が取リ付を。踏やら蹴るやら擲くやらフシ持テ餘したる向カふから。地誰レ共白ラ聲高カミと。詞待テエイ此源太が仕懸ケた戀を。待チと留メたは何やつだやい。和田が三男ン小林ノ朝比奈がおつ留メた。待上カれやい。地大薩摩かゝる所へ。小林ノ朝比奈は。地鎌倉一チの優男。地雪の顔ばせ緑の髪奇麗で花車ですふわりと女たらしのフシ伊達姿。地裾蹴はらして歩ミ寄吾妻野を引キ分クれば。詞ヲヽよい所へ朝比奈様よふ留イてくんなんしたと。地フシ悦びいさめば。地源太が不興。詞ヤア朝比奈いはれぬ所へ子細

らしう待テと聲かけ留て出て云分ン有ルならいへ聞カんと。地切乃廻せば詞ハ、、、テモ扨もぶ粋なわろでは有ルはいの。おれは荏柄が立願ンに。親父の代參ン江の嶋詣。けふ一チ日は和田ノ義盛。堅い所を贋ふと思ふてカノ芝居の花道から呼ハる樣に。小林ノ朝比奈が留メたと大薩摩と出懸ケても窮屈なが嫌ひ故。烏帽子も素袍もさつきにぬいでコレ此通りの忍び姿。是から直クに大磯へ仕かける思案ン畜生め。おれと一ッ所にいく氣はないかと地背中をとんと叩かれてキン下タ地は好キく御意はよし。詞そんならおれも直クにいこふか。したがけふはおれも代參ンなれば。歸つて親父に逢ハざ成ルまい。ヱ、まだ青いぞよ〳〵。そふ律義では埒明カぬ。おいらは親父と念ン佛はモ身震する程きつい嫌ひじや。や、もすれば二タ親が。部屋へ押シ込出さぬ思案ンも二階の窓からこつそ〳〵。ナコリヤこそ〳〵と。地目遣ヒひを込ムこなたは粋の德。やり手禿に默き合イそつと其場をはづす共。しらぬ源太が圖に乘ッて。詞サアそんならいくはいこふけれ共。何をいふてもお敵めがと振リ向イてコリヤどふじや。咄しの内に放し鳥。いつの間にやら飛ンで仕廻ふた。ヱ、一ッぱい喰ッて腹が立ッ。憎い女め目に物見せんと。地月キ夜に釜の佛頂面跡を。慕ふて追ッかけ行。地朝比奈ふつと吹キ出し。詞ハ、、、いかいたわけと。地つぶやく所へ。地撥鬢天窓に短い羽織。見馴れぬ男がすた〳〵と。朝比奈を見て小腰をかゞめ。詞申シ〳〵。お前樣は朝比奈樣でござりますか。ム、此義秀に何の用事。ハイ左樣なればお文と。地差出す文箱手に取ッて。詞何朝樣へ參喜瀨川ゟム、そちは廓で見馴レぬ男。こゝづかつてゞも來たのか。ジイヱ〳〵私は此間大

阪から下ﾘましたふるなの弁助と申牽頭持。喜瀬川様からお文も上たし次手に御目にかゝつて置ｷ此後ﾁ万ｼ事御頼申せ又云ｲたい事もたんと有ｼは。晩に必お出る様にとくれ〴〵の御口上。ム、そんなら今ｼ夜いて逢ふそちは先ｷへ立歸れ。然ｶらばお先ｷへ　地　おさらばとﾌｼ足早にこそ立歸る。地　朝比奈心も浮ｷ立計ﾘ。封を切ﾗんとする所へ。ぬつと出たる梶原兄弟。ちやつと文箱を懷へ押隱してさあらぬ躰。ヲ、是は〳〵御兄弟共ﾓﾌお歸りか。何さ〳〵是から直ｸに廓へいて。惣仕廻ｲと出かける工面夫ﾚはそふと朝比奈殿。貴様が今懷へ入たは何やら面白ﾛそふな蒔繪の文箱。定ﾒて彼から來たので有ｯふ外の客には肌ふれず。そもじ様と二世かけて夫婦に成ﾗﾝ。起請などゝいふ様な物でかなござらふわやかる爲にちよと拜見。イヤ〳〵是は內證物。どふもお目に懸ｹられぬ。イヤサ見せられぬと有ﾗば猶更見たい。地　ひらに〳〵と兄弟が。兩手を捕へて壓狀ずくめ。非力ｷの朝比奈詮ｼ方も。なんなく文箱引ｷ出し。詞　へエ何じや。朝様ﾗﾝ喜瀬川か。イヤコリヤたまらぬ味い趣向と。地　紐引ｷちぎつて蓋明ｸれば。中ｶ出たる錦の袋。思ひ寄ﾗねば朝比奈が。愕りするを突ｷ飛し。兄弟とつくと見改め。詞　烟管筒かと外ひの外ｶｯ。紛ひなき蜀江の錦。コリヤコレ。紛ｼ失したる蟬折ﾚの笛の袋と。地　聞ｲて仰天ｼ朝比奈が。扨は今の使ｲといふは紛ｷれ者で有ｯたかと。駈出すを引ｯ捕へ。詞　ヤどこへ〳〵。イヤサ夫ﾚが蟬折の袋なれば今來た使は。ハ、、、其使とは何の使。行衛知れぬ蟬折の笛。我ｶ盜んで其科を。云ｲ拔ふとは横着者。四も五もいらぬ繩かゝれと　地　きめ付ｹられて覺へなき。身に降かゝる災難も。云ｲ

譯なければハアハツト無念シ涙にょ くれ居たる。梶原兄弟したり顔。詞笛の盜人知レたる上は。館へ引イて拷問せん。サア泥坊めうせおれと。地追ッ立られてもかよはき朝比奈是非なく。〳〵も 三重へ引カれ行。地梶原兄弟が智略にて朝比奈ノ三郎を無失の罪の落し穴。戀の意恨は押シ隱し、笛の詮シ議を表向キ呂律の合ハぬ評定も一ッ越調の役所の備へ。非常を糺す非道の詮シ議。浮べる雲の上ヱ見ぬ鷲。權威を振ふ羽がい下。番場ノ忠太進出。詞コリヤ〳〵者共ト 兼て申渡した通リ。今日の御詮シ義は平次樣のお引ヵ受。右キの者共參り次第 早速に申シ上よと 地云イも切ラぬに取リ次キ役人罷リ出。詞大磯のくつは屋。松田屋半次と申者。傾城喜瀬川を召シ連。只今是へと詞の下。地フシおめず臆せぬ八文字。タヽキ浮キふししげき川竹の。流れ寄ル身のうたかたや。逢ハれぬ首尾は村雲のキン月を隔し胸の闇。地いつか明ヶなん朝比奈に二世の契りもあぢきなく。別カれし譯ヶも白洲の上フシ覺束なくも畏る。地夫レと見るより忠太聲かけ。詞ヤア聞キ及んだ大磯の傾城喜瀬川とは儕レよな。御詮義の筋有ッて四つ時迄に召連レ來れと親方めに申付しに。遲參の段不屆キ千万シ 地憎ッくいやつと叱られて親方はおづ〳〵尻込ミ。喜瀬川臆せずヲヽこは。詞あの忠太樣のしら〳〵しいしらぬ顏置キなんし。源太樣シや平次樣シ。見へなんす度毎に來なんしての惡ルじやれ。いやがる禿や新シ造衆にしみしつこい濡事。毎度きせるで追イ廻され鐘馗樣に行キ合た。赤カ鬼を見る樣に拜ムミと逃廻り。細目しなんした其顏で。べかこ人シ形か何ぞの樣に、そこら中を睨廻してヲヽ、笑止。やほらしいよしなんしと。地すつかりいはれてしらける忠太。親方は氣の毒がり。詞

アヽコレ〳〵廓の癖が爰へ出て。ずは〳〵と出ほうだい。御役人様へ無禮いやるなハイイヤ物でござります。何か喜瀬川に。御詮義の筋かある。今日四ッ時御役所迄召連來れと仰付られ。畏たと御請申し夜の内からの身支度。朝寐仕初た女郎共擲起して。ソリヤ髪よ白粉よ何じやはかじやと障入り大磯から遙〻と。お屋敷迄參る事。何っておみやでも上たいと喜瀬川の心付き。大そふな物は目立って惡るいと。名方の錦袋圓。忠太様へ一包お下役様方へもお前から能い様に。御配分頼み上ケますと。地扇に乘せし紙包いはぬ色なる山吹のつゝみ包をそつと指出す。地番場忠太手に取上。詞ム、いかにも、コリヤ名方の金袋圓、しかもおれには合ひ藥。流石は商賣がら程有って。氣の付た土産物ハテいはれぬ心遣近か比以って痛入し。地切ッ角の志し無にも成るまい受納致そ。詞いか様大磯からも五六里に餘まつた道。びらしやらした女連じゃ。遲なはつたも無理ではない。万事はおれが呑込だと地忽替はるからくり的。欲の深かみは池の端金袋圓のつゝ利目〻。地してやつたりと親方は。詞とふでも御馴染の忠太様。万事宜しう頼上ます、私が内での立。者御詮義が隙取るは家内の口が未申。地刻限の延ぬ内。早ふお返し下さりませ。詞ム、ソリヤ皆忠太が合點じや、早く濟せて歸す樣に殿へ取りなしてやらふ。汝は先へ立歸れと。地いふに親方飛立っ嬉しさ詞然らば御頼申ます。イヤモ結構な忠太様お氣の短い其かはり。お爪の長かいで算用つく〳〵、地お暇申と口の内つぶやき〳〵。フシ出て行。地かくと聞ク方立出る。梶原平次景高、皆〻はつと頭を下れば。寛〻と打詠かめ。詞コリヤ〳〵者共。此女めは身が詮義する、暫らく次に

控へよと。地云ィ渡す內取次役人あはたゞ敷ク罷リ出。詞雪の下の町人共。何か御訴訟の事有ッと、大勢ゾ連にて參つたり。いかゞ計ラひ申さんやと。地窺へば平次景高。詞ヤアけふはいかふ取リ込なれば。重チて參れと申付地追ッ返せよと下知の內下カりませい〳〵と下モ部が割竹。きほひと見へし大男。物をもいはぬ懷ロ手。何の遠慮も並居る眞ン中。どつかりすはりし不敵者。跡に付キ添町人共白ラ洲の隅にフシ蹲る。地是非に及ばず景高も番場ノ忠太に目くばせし。喜瀨川を一ト間へ追やり。不肖〴〵に威義を繕ひ。詞ヤア何やつなれば慮外千ン万ン呼出すをも待ずして。尾籠の振ル廻。推參至極と。地きめ付クれ共きよろりがみそ。町人共は震ひ聲。詞ハイ〳〵申上まする。私シは雪の下燒物類を商ひます瀨戶物やの彌吉と申ス者でござります。今ン日爰な男めが、瓶を買ィたいと申シますに依て、大キなが八百文小いが四百文どれ〳〵と買ハしやれと申ましたれば。四百の方の小ッいを買て歸つて間タもなふ。小ィさふて役に立ぬ。大キな方と替ヱたいとの事。どれを賣ルも商賣。替ヱて進ンじよと申シて大キな瓶を出しましたれば。小サいを殘して置ィて大なを振リかたげて歸ります。ア、、コレ〳〵〳〵先ンの瓶は八百文まだ四百文。價が不足じや置カしやれと申たれば。大キな目玉をむき出しまして。算ン用しらない大だわけめ先キに四百拂つて有。又四百に買ッた瓶をそつちへ下タにやるからは。四百の錢と四百の瓶合せて二四の八百文。大キな瓶の代は濟ンだとの云ィ分ン。成ル程算用は合ィますれど。どふか錢が足ませぬで色ゝと申ますればめつた無上に張こかします。ソリヤ喧嘩よとそこらから出る程な者生殺しあばれ者よと町內ィが。寄ノ

てたかつて棒ちぎり木。イヤモこいつめが手ひどい働き。片はしから微塵こつぱい。目を廻したが五十二人と。庇を負たが七十八人。鎌倉中の大騒。兎角下では済マされぬ 御月キ番シの梶原様へ申シ上て捕手を向ヶて貰ましよと申シたれば。此男めが申シますは。梶原様なら用も有ル。こつちから御役所へ参シじませふと申てと。地いふを打消。詞ヱ、何シの事ッた馬鹿つらめ。あごた叩上クるな。いつおれが梶原様とゆつたぞい。げぢ〳〵が所なら行クべいとゆつたはい大だわけめと張リ込れ。アレ〳〵あれを御聞キなされませ。御前シ共憚らぬあんなぞんざい申シ上ケます。アイ急ト度御詮シ義下さりませと。地いふに景高首傾け。詞ム、四百の瓶を調へ皈り其瓶を持ッて來て。八百の瓶とかへたとは何シと忠太。ハアいか様四百の錢と四百の瓶で八百文の瓶を持皈ればどふか算用は合た様で。又錢が足ぬ様なと。地主從評議を。彼男くつ〳〵と吹出し。詞ヱ、安本丹シの親玉めら。算用もへちまも入ない 四百の瓶を房して八百文の瓶買ふには。まだ錢が四百行カねば算用は合ないはい 所を四百て済マすとは皆おれが大無理だ。コリヤ能ウ咄し本シにも書イて有芝居でもよふする事た。仰山そふに評義などゝはよい見せもんだと。地嘲る詞忠太居尺高に成。詞ヤア存シ外成下郎め無理と知ッて無理を仕かける大衒め。其上エ多くの人をあやめし段テ 旁以て重罪遁れぬ 地腕を廻ハせきめ付ヶられ 詞何シの事シだい御大イそふに目をむいて乞食の焔魔見る様にコレひこ付ッと虫が出るによ。おらが腕は生海鼠と違つて親父の細工の骨が有ルはい、高か四百の錢出して。元トやすな喧吽の買出し。すたいあいつらが誤りや割を付ヶてくれべいと思つた

がいこつの樣な野良めらがうせあがつていざこざをぬかすから、闇雲に踏のめした、何た人をあやめたか重罪だ。おらは男だによつて腕先で見世付るはい。今時は旦那衆顏してけつかるわろがじうわり〳〵と口先で人を殺す。蜈蚣さやらげち〳〵とやらは重罪は扨置、似合ノた烏帽子狩衣で万ン才になさ出やがれ何ンのこつた咄しの樣なこと。地當こすられて平次が赤面。詞云ハせて置ケば圖ない惡ッ口何にもせよ詮ン義の有やつ牢へふち込ミ拷問せん。ヤア〳〵者共そいつめを引ッ立よと。地せけど騷ぬ大膽者。詞ハヽヽヽコリヤ臍か錢ごま廻すは。ヤア者共。そいつめを引ッ立よとは去リ迚は久サしいもんだよ。そんなでいく男じやないはい。牢へ入たか這入ッてやるべい。ヤイ二合半ン共おれ樣が牢へお入リ遊ばす。地案ン内しろとずつと立チ平次が方を睨付。雜人ン共に取リ卷カれ。牢屋をさして歩み行 町人共は重荷をおろし。先ッ〳〵是でくつろいだ。イサお暇と役人へヲクリフシ一チ禮へいふて立チ歸る 地平次はほつと精つからし。ヱヽ邪魔なやつがうせおつて。大事の詮義遲なはつた。詞コリヤ〳〵忠太 喜瀨川を呼出せ。地畏つて立ッより早く。伴ひ出れば兼ての相イ圖。數多の役人ン番ン場諸共其場をはづせば平次景高。つか〳〵と立寄ッて。詞コレ最前ンから嘸待チ遠。詮ン義といふは別義でない。源氏の重寶蟬折の笛。住柄ノ平太が預カりしを盜んだやつはそさまのふかま。朝比奈三郎め。面に似合ハぬ大泥坊。遲かれとかれ死罪は遁カれず。元トの發りはあいつめが。廓通ひの小尻が詰マりて。せう事なしの出來心。地殊更笛の袋を入レた。文箱の上がそさまの名付ケ夫レ故詮義は表テ向キ。詞爰が一トつの相談づく。そもじが今でも朝

比奈と念比切て。おれがいふ様にさへなれば。ハテ存せぬで事が濟む。夫共にいやといへば。けふから直に牢屋の住居。つまる所は由井が濱で。美しい其首が丸漬瓜を切る様に。ヲヽいやな事。おれを振て手もやらさぬ情所を。鳶烏に揚詰にせられふとは。イヤモ思ひ出すもぞつとする サア〳〵どふじやと フシ 猫なで聲。地 喜瀬川しほるゝ氣を取直し 詞 ホヽヽ平次様の譯もない。朝比奈様は大名のお子。何のさもしい盜など仕なんせふ様はなけれ共。地 どこその誰そが戀の意趣。無実の科も災難も。本の發りは皆私故。詞 何ぼ勤の身じや迚も。世に有時に馴なじみ。難義さんすを振捨て念比切てお前のいふ事。聞やせふといふ様な。喜瀬川じやと思はんすか 地 牢へ入る共死る共二人一所は兼ての覺悟。せめてもの御情に。一所に置て下さんせとおろ〳〵涙糸萩の フシ 露にしほるゝ風情〳〵 地 平次はうつとり有頂天。詞 イヤモいつ見ても〳〵寒ふ成程美しい。顔に似合ぬ心の難面さ。けふ屋敷へ來たを幸そさまさへ合點なりや。親方に相談して直に身請の金渡す 朝比奈めを思ひ切り。應といふて 地 くれ給へと 摺付引付有様は。燒大根に人喰犬 フシ 歯を落すべき身ぶり〳〵 地 喜瀬川は取て突退 詞 エヽいやらしい聞共ない。どんな憂目も夫の爲變せぬが勤の誠。地 水責火責は扨置こ車裂に合迚も。お前に任す體はないと。びんと刎られ釣針に懸つた河豚のふくれ面。詞 ムヽスリヤどふ有てもおれが云ふ事アイ聞く耳は持やんせぬ。そんな永い濡事は正月の二つ有春の彼岸の中日に緩りつと聞やせふと。地 いはれて業腹モウよい〳〵。詞 そんならこつちも仕方有

ヤア〳〵忠太科人を引ｷ出せ。地ハツト答へて奥庭ゟ。地出る姿もおも痩て。本フシ髪も心も取ﾘ亂す。地朝比奈ノ三郎が無失の罪の座敷牢。あらくれ武士に引ッ立られ。フシ心ならずも立チ出る。地夫レと見るゟ喜瀨川が。ノフいとをしのお姿やと縋り付ィて泣出すを。地平次は立寄ﾘ取て引ｴ退。詞ヱ、いま〳〵しい引ｶさかれめ。此ざまに成ﾘ下ｶつても朝比奈めに心ン中だて。おれになびかぬ意趣ばらし目の前で責ﾒてくれん。サア朝比奈。先ｷ達ッてゟ詮ン義の笛我ｶ盜んだとつゐ一ト口。いふて仕廻ば埒が明ｸ。地サア〳〵何ンとゝフシきめ付られ。地義秀ｷン無念ンの顏振ﾘ上ヶ。詞譬幾度責る共いつ迄もしらぬ笛。盜た覺へ毛頭なし。ヤアいふな〳〵。いケ樣ッに陳んじても袋を持ッて居たが證據。よい〳〵どふで口先ｷではぬかすまい。ソレ家來共。地畏つて双方ゟサア〳〵早くまき出せろと。叩き立テたる割竹の。音トに驚ロく喜瀨川が。こたへ兼てかけ寄ルを。平次が捕へて動さず。詞サア最前ンもいふ通り應といへば直ｸに身請いやといへば此泥坊を責殺すがサ何と〳〵と。地忠太諸共牛頭馬頭が。詰メ懸詰メ寄ル呵責の杖。叩き立テられ朝比奈は。小袖も顏も打チ裂れ無念ンとあせる血の涙。傍に見る目の悲しさつらさワツト計ﾘに泣沈む。地平次心地よげに打默き。詞泥坊めにいはれぬ義理立テ。何ぼ泣てももふ叶ナはぬ。其涙を百歩一チおれにこぼしてくれるなら。朝比奈が責を赦ルしそ樣は元ト來活計寛樂。サア〳〵どふじや〳〵と責懸ヶられ。地喜瀨川聲もかき曇。詞アイもふかふ成ル上からは。どふ〳〵共成ﾘませふ。其替ハりにはあの責を。地赦ルして進ッせて下さんせとフシどうど。轉びて泣叫ぶ。地してやつたりと平次が悅び。詞コ

リヤ〳〵忠太暫く責を赦めてこませさ。地 喜瀬川を抱起し。詞 こそふ得心なりや言分ない。是迄朝比奈に義理立て。おれを振た意趣返し。目の前で抱てねるが責てもの腹いせ。けふからおれが奥様なれば。指でも差たやつが有さ。今の通り責てくれるさ。地 朝比奈を尻目に懸 詞 押を強ふしやちばつても兎角物には時節が有物。今の詫しいお返事で腰から佛に成様で。御本尊の不動尊から火焔が立て。地 堪忍ならぬ。サア〳〵寐間へさ取手を挪ひ。平次が差添抜か早く我さ我腹へ突込覺悟の自害。梶原主從朝比奈も倶に。驚く計之 地 喜瀬川苦しき顔を上。ノウ朝比奈様。詞 お前の責苦を助んさ心に思はぬ根なし言。平次様になびかふさいふた時には嘸や嘸。地 水くさい女じやさ思はんしたでござんせふ。譬いか成責を受身は八ツ裂に成迚も。いさはぬ覺悟の上成共可愛お前を目の前で。打るゝつらさは我身をば切るゝよりは百倍の。義理を立れば。私故。地 お前の責に責を重ね。又其責を助んさ思へばお前さ縁を切。平次様に添ねばならぬさにも角にも我身の難義。生て居られぬ女の操。コレ申平次様。あなたをお憎みなさんすも元の起はわたしが有故。モフかふ成た上からは笛を盗だ科人は。此喜瀬川じやさ了簡付。朝比奈様のお命を。どふぞ助て下さんせ。コレ 地 手を合して拜ます。夫故に女の身で世間にない圖な切腹も 笛を盗で云譯なく。腹を切て死だりさ。科を引受死る氣を。不便さ思ふて下さんせ。名殘惜いは朝比奈様。どんな憂目に逢迚も堪忍して生ながらへ。百千年の御壽命過未來へござんす夫迄は。半座を

分ケて待チますと。いふも苦ルしき息キづかひ。刄物を拔て持チ直し。吭かき切リし健氣のこゞめ。盛の花に天ン狗風十八年ンは一チ期の夢覺てはかなく成リにけり。朝比奈は氣もたへ入計フシ人ト目もわかぬ。男泣地梶原主從葬禮の供にはづれしごとくにて。手持チ不沙汰のフシ佛頂面。詞ナント忠太。コリヤマアどふした物で有ふ。どふと申て切角の御趣向も。肝心の佛ケのない堂とやらで。女が死だりや皆むだ事。いつそ次手に朝比奈を。ヲ、サノ＼笛は女が盜ンだと白狀をした上は。こいつも同罪戀の意趣。地叩き殺せと下知より早く又振リ上る下モ部が割竹。既にかふよと見へたる所へ。荒に荒レ立以前ンのきほひ。下部を張退ケ叩き退ケ。朝比奈を後ロに圍ひすつくと立ッたる有リ樣は。危い所で鴻門に高祖を助し樊噲がフシ元服したる。ごとく＼。地梶原主從反打懸ケ。詞ノリヤア存ン外成ルうず虫め。ソレ者共討ッて取レ。地畏つて茅の穗先キ。拔連ノ＼切ッてかゝるを引ッはづし。刄物もぎ取リまくり切。はぢも恥辱も命が物種叶はぬ赦ルせと迯ちれば。梶原主從たまり兼フシ與をさして迯て行。地相イ手なければ朝比奈が塵打はらひ兩手を突キ。詞私シは御知行所金澤の百姓孫作が躮熊藏と申ス者。お前の御難ン義と聞キました故日比好キな喧嘩に事寄で。態科を拵へて此屋敷へ入込しは。御難ン義を救はん爲。私が在所へお供申シおかくまひ申ンませふ。ム、扨はそなたは孫作が躮レよな。志ンは過分ンなれ共盜人トの名が付ば。どふで遁れぬ我身の憂目。そなたに後日チの難義をかけんが。イヤノ＼そんな案ンじはなされずと早く御出とすゝむる内。地數多の人音ト門の音ト扨は表を閉込メて。討ッて取んず方便よな。とやせんかくやと一ト思案。キン見越の

松を幸に。朝比奈を抱上續て上る高塀の外は並木の松原へ ヲクリフシ 倶に、ひらりとおり立て 詞 コレ〳〵中朝比奈様。此道筋を東へ眞直切通し迄落た〳〵。地 我等は追手を防がんと朝比奈を進めやり。見送る後へ番場忠太。大勢引連追取卷 詞ノリ 僣下郎の分際で慮外の段〻其上に。地 詮義有朝比奈を何國へ落した有やうに。フシ 白狀しおれと呼はつたり。詞ホ、、相手ほしい胴ぶくらへお出は近比忝茄子かゝるしぎ焼命の串ざし我等が手料理振廻んと。地 後に高塀並木の松小楯に取て フシ 待懸たり 地 物ないはせそ討取と荒井源八黒塚鬼平。捕たとかゝる一番手引ッはつして二人か髻。兩手に掴んで顔打ながめ。詞ノリ ホ、、揃ひに揃ふ人相は鼻の下より頤の短い命と投飛せば 地 石に頭を打碎れ命は荒井目を白黒塚ぎやつと計に息絶たり 續てかゝる秋山藤内猪熊九郎が突棒さす股兩手に掴んでコリヤ〳〵〳〵 たぢろく所をとんぼう返し一人立ては叶ふまい惣がゝりに討取と忠太か下知に大勢が。右往左往に追取卷討てかゝるを事共せず。當るを幸人礫投出す捕手は棟上のもち餘したる三重へ次第〳〵 地フシ 此勢ひに。氣を呑れ猫に追れし鼠泣ちう共云ぬ忠太が迯足。數多の下部も一同にむら〳〵ぱつと フシ 迯ちつたり。詞ノリ ホ、、相手に成者もふないか。地キン 氣味よし〳〵心地よし。よし〳〵是ゟ熊藏が。朝比奈様の御供し。我家にかくまふ上からは、譬討手が向ふ共かくまひ遂るが男の意地と踏出す足音どう〳〵〳〵。動せず。騷ぬ金剛力龍に羽有虎にキン角。千里の野邊の一足飛。風を起して行道のキン春め〳〵。空にさへ返る キン 袖の

ゝゝ雪吹や玉ちる霰。眼の。光り地に落て氷を結ぶ谷川の、水猶寒き古の燕の荊軻や魯國の朱家。命を塵か輕んずるキン例を爰に夾客の。類ひ稀なる物語り世ゝに傳へていちじるし

第二

地伊豆箱根フシ續く三嶋の。神ミ垣や。石の鳥居の苔むして。最かう〳〵たる常盤木の。キン移る景能。池水も。本フシ清るは神の心かや。地世渡りの種は樣ゝ草原に。駕突キ居て膝頭抱ながらの居眠りも足音ト聞イて目をさまし。詞駕やろ〳〵。峠迄乘しやれぬか。コレ親方小田原迄やりましよかと。地いへ共通りは馬の耳。風に任カする雲助の。フシ爲業さこって見へにけれ。地下タりの方から又一人リ。是も同じく襤褸の脊中カ。臂を廻ハして搔ながら。詞ホ、わいらまだ爰に居るか。けふは通リがなさそふな。ヲ、新シ米の五助か。大イなしけふは明カぬ〳〵。適乘ロさぬかすやつは强氣に安スふ付ケあがる。呑マねばならず喰ねばならず。ごしんで持ってしんどせふか。晩には大方和田樣がお歸りなさるであろふから。長カ持に行ク積りじや。ホンニそふだナ。此間明神ン樣への通夜ごもりけふで七日の願明キ。何ンと思やるお大名の身の上エで。何がつらふて七日の大願ン通夜籠なさるゝぞい。ア、大蛇になりや苦が增だンや。夫レを思へばこちとらは去リ迚は安樂世界。どの宿クでもお定マりの十七文さへ拂へば。屋根代から薪賃。蒲團には生キ佛ケの千ン手觀ン音迄添て借スゞ。其跡は錢がなけりや何喰ッまいと心任カせ。お大名より遙上リ。公家

衆に近ヵい逆雲の上ェ人トをかた取ッて。こちとらが名を雲助とは。上手な作ヶ者が付ヶた物だ。サアこいいつものぼん屋へいて。長半ン組ふじや有ルまいか。そんなら駕は爰に置ヶ。一ト軍仕てこふかと。地蒲團の紐もしまりなき。うさんな形リの三ン幅對。巻た表具の軸を出る。心なき身の雲助は。フシ打連レどやへ走リ行。地和田ノ左エ門義盛が嫡子新左エ門常盛。父義盛の宿願ンもけふで七日の滿ン日ッと　用意の酒肴釣臺に取リ持せ。フシ鳥居の　際に歩ミ寄リ。詞コリャ〳〵家來共。其釣リ臺諸共に。神ン主方に待て居よと。地言ィ付やつてしづ〳〵と歩む社の方ゟも。立出る父義盛　夫レと見るより　ハア親人詞御機嫌の躰ィ恐悦と。地悦ぶ顔を打守モり。にがり切ッて父義盛。詞サレバ〳〵。一族多き其中に譯て作柄ノ平太が事は。兄和田ノ五郎殿遺言といひ。幼少ゟ手鹽に懸ヶて育たれば。我ヵ子同前ンの親しみ不慮の難ン義を救はんと思ふ内に重る難義。平太が預ヵる蟬折の笛。何故に朝比奈が盗ム べき謂なし。見顯はせし梶原兄弟物ぐさしとは思へ共。地證據なければ詮ン義もならず。行衛知レぬ義秀といひ。平太めが牢舎といひ。彼レ是以ッて老の屈託。詞兎角神ン慮の助ヶを受ヶんと。思ひ付ィたる此大願ン七日に滿ンずる今ン日唯今。二つの烏喰ィ合ッて　本ン社の前に落たるは　地甚不吉ッの神の告ヶフシ心ならずと物語る。ハツト思へど常盛は。詞ハアイヤ夫は烏に限らず。都而諸鳥の餌を爭ひ喰ィ合落るは儘有ル事。地神の告にはいましと。詞も未終らぬ所へ。息を切ッたる早使ィ本田ノ次郎近ヵ經。二人ンが前に兩手をつき。詞主人ン重忠申越ャしは。作柄ノ平太殿御事。大ィ切成源氏の重寶蟬折の笛を盗マれしは。甚タ不埒チの至りへと

頼朝卿御ン怒強く。急ぎ斷罪申付ケよと俄の上意是非に及ばず。昨朝未明御首給はる。此趣キを御知ラせ
の爲近經參ン上仕ると。地聞もあへず親子は仰天ン。義盛怒の聲震はし。詞ヤア麁忽成ル重忠か計ラひ譬ヱ
極マる科にもせよ。地此義盛も三ン老職。いかに上意なれば迚一チ應の相談なく。首討しとは奇怪千万ン。
義盛を踏ミ付ケたる重ケ忠に返ン事はない。地早く返れ近經と以テの外の不首尾には。何ンといふべき詞た
く。にが／＼敷クも本田次郎。フシ鎌倉さして引キ返す。地義盛はじだんだ踏。詞譬ヱ平太が重罪々共。
此義盛が是迄の忠義にめでゝ赦免有ル筈。地よし／＼最早此上は。一チ族かたらひ鎌倉御所。踏ミ破つて
目に物見せん扮レ續けとフシ駈出すを。地常盛は引キとゞめ。詞いかなるお恨ミ有レば迚臣ンとして君に敵
對。ヤアいふな／＼。往柄ノ平太を殺されては未來の兄へ云イ譯立ぬ。其上數度の勳功を早くも忘レし馬
鹿大將に。地仁ン義立テは無益の至り。そこ退扮レと又駈ケ出すを。袖に縋つてとゞむれば。ヤア放せ／＼
とフシせちがふ所へ。地何國ガ共白ラ羽の矢二人が中をずつと通り社檀の柱にかつきと立テば　親子は
恟クりコハ何者の仕業ぞと。見やるこなたのしげみの蔭。詞ヲ、其射手は是に有リと。地キン弓やなぐいを
携へて。ゆるぎ出たる梶原平三。思ひ懸ケなき親子が驚キ。コハ何故に梶原殿。詞ホヽ此景時が來りし
譯は。今射付ケたるソレ其矢。折ッて見れば知レる事と。地云に常盛ずつと寄。矢を引キ抜イてぽつきと
折レば。景時ほゝ笑。詞ムヽ然らば此矢を殘らず一チ度に。サ折ッて見られよ常盛と。地やなぐい諸共
差出せば。悟き義盛きつと見て。詞コハ珍らしき梶原殿。一ッ本の矢は折リ安く。數スの矢は折レぬといい

ふ唐土の古ル事を。ヲ、サ其氣の付カぬ義盛殿和田の一チ門廣し共。日本ン國にくらぶれば。只一ツ本の矢ゟも細し。地其一ツ本の矢を以ッて六十餘州を覆がへさんとはハ、、、近カ比以ッて浮雲物。詞ム、スリヤ最前ンゟの始終の樣子。ヲ、サ聞た故にいらざる世話。地此景時が兼ての大イ望。夫故にこつて義經を始イ義仲。範頼清水の冠者。源氏の骨に成ル奴等は口先キで亡して。折を見合せ頼朝を指ン殺し。天下を一ト呑とは思へ共。詞貴樣と重忠が氣に喰ハぬ故。今迄は籏上ケせぬ。地何とぞ邪魔を拂はんと思ふ矢先の通夜ごもり。人なきを幸イに忍び入ッて遠矢にかけんと。思ひの外カなる貴殿の大イ望。いつこそ大事を打明ケて倶ゝ力ラに成ル思案。地得心ンさへ仕召サるれば。重忠一人は叉仕安スい。詞ハテ大望だに成就せば。東ン三十三國は此梶原。西三十三ケ國は貴殿ンの物。何と此相談ンはどふでござろと地燃る火に柴焚付ケられ。義盛殆どフシ笑壺に入。ホ、キン面白し〳〵。詞かふ心の揃ふといふも時節至來神の告。地先ト程鳥の喰イ合て。死せしは則チ友喰イの。頼朝義經討チ亡し。詞日本ン國をせしめんとは。兩虎爭ふ時は一ツ虎其ついゑに乘ルといふ。軍ン慮の奥義ホ、、、天晴〳〵。此義盛が同腹ク中と。地開イて當惱勇をなし。詞今迄父の企も味方なき故不得心ン。和田梶原が一チ味せは。唐天竺が一トつに成共イヤモ手に立ッ者は覺へなし。地我本國ンに立歸り。謀叛のほぞを堅めん。といふに二人が詞シイ音ト高し。地人や聞。万ン事は密ゝ鎌倉にて。イザ同道と暮レ急ぐ時刻も七ツ斑猫に。加へし一チ味。砒霜の毒キンヲクリ傍りをへにらんだ立歸る。地キン落人の身はおのづから。フシ夕日まばゆく菅笠も傾く。ヲクリ運の日影。

地草白ラ川が介抱にて靜御前ニ經若君。同じ出立チの次キ丸が。御手を引ケど便りなく。フシ漸こたどり着キ。詞サア申シ靜樣若君樣。モフ爰が三嶋の社。是からは鎌倉近シ所。必〻悟られぬ樣に遊しませ。地いかに世の末ヱなれば迚かちやはだしの長カの旅。召シもならはぬ杖草鞋。移りかはれる悲しさと涙ぐめば靜御前。ヲ、何から何迄。フシ心づかひ。詞梶原が讒言故。奥州の高舘とやらで御最期。都に殘りし自ラが聞イた時の悲しさつらさ。地同じ道にと幾度か我カ身の覺悟は極メたれど。此若を守立テて何とぞ世にも有ラせんと。詞思ふ計を力ラ草御家來は皆討チ死。たよる方なき身の上を。地漸嵯峨の奥山家鎌倉の詮シ義強けれ共よるへ迚もなき時節。詞せめてな鈴木ノ三郎重ケ家が。生キ殘つて居るとやら聞イた計りを賴にて。紀州とやらへ下らんと思ふ内に重家も。本シ領を召シ放ナされ行衞知レずと云に付ケ。たよる方なき憂身をば。そなたが遙〻尋てくれて出羽とやらんへ下らんと。地思ひ立は立ながら行先キ難義の旅の空。身にかへての世話苦勞死でも忘スれはしませぬと。手を合すれば。詞ヲ、勿體ない。兼〻義經樣の御物語。お前方の御身の上都に殘り給ふよし。夫ト次キ信の父私が爲には舅。佐藤庄司の聞れまして。何とぞ迎へ奉りおかくまひ申さんとは思へ共。次信忠信兄弟共討死の後。引續て奥州の騷動從ふ者も皆討死。今蟄居の庄司なれば人らしい家來もなく。其上鎌倉の詮シ義強ければ。男は目に立ッて結句惡ルい私にお迎カへ申シてこい。まさかの時詮義に合ハば。地經若樣の御身がはりにと稚ナけれ共此次丸。コレ又惡さ仕やらずと若君樣に付イて居や。詞兼〻もいふ通り今でも討ッ手に出合たら。そなたを若君樣じ

やといふ程にの。譬余所の伯父様が來て。殺そふといふ迚も次丸じやとはいやんたや　いつ迄も經若じやとおとなしういふ物ぞと。地 敎へる詞に稚ナ子が。詞アイよふ覺ヱておりまする　誰レでも來テ切ラふといふなら。おれは源氏の大將義經が子。經若といふ者じやといふぶんは安い事じやと。地 いへば若君ぐはんぜなく。スリヤおれはいつ迄も次丸に成ルのかへと。地 聞イて次丸まんがちに。そんならおれが大將じや。サア次丸供せい。ヲ、經若様イザ御出と。地 主と家來の入違ヱ。同じ八ツの稚子が敎を守セる愛らしさ。靜御前も白川も憂をフシ忘スるゝ折からに。地 梶原か郎等醒井新五大勢引キ連レどつと懸ケ付。詞ソレ遁すなと下知すれば。地 心得たりと白川が三人を後ロにかこひ、詞ヤア何者なればやらぬ遁さぬ人違して後悔すなと。地 いはせも立テずイヤ隱しても隱させぬ。詞 經若靜が詮義の爲主人梶原の下知を請ケ。方ミ捜して此所で見付ケたは百年シめ　邪魔せずと渡せばよし。さもなければ倅 女共搦捕て目に物見せんフシ何シと〳〵と訇たり　詞ホ、愚人シに聞カす詞はないと。地 靜御前も諸共に用意の一ト腰拔キ放し。縱横無盡に切リ立られフシ皆ちり〴〵に逃て行。地 跡には二人シの稚ナ子がかゝ様のふとさまよふ内。取て返して白川が　キン眼コを配る傍りの辻駕。是幸イと二タ人を押シ込。必ス物をおつしやるなと。垂をおろして隱す內。又も取リ卷捕リ手の大勢イさしつたりと渡リ合命限りとフシ追ッかけ行。地 小陰に寬ふ以前の駕舁。何シでも味い金設と。走リ寄ッて振リかたげ行方フシしらず成にけり。地 靜御前は漸と討ッ手の圍は遁れても。方角さへもしらぬ道心。どき〳〵足も空見廻す後へ　醒井新五。してやつたりと立

寄ル向カふへ。出合頭に新米の。五助が見るゟ飛かゝり。新五が襟髮かい摑。池へざんぶと投ケ込ンで靜
御前を引だかへ。フシ逸參にこそかけり行。地キンかくとはしらず白川が。數多の敵を切ちらし取て返し
て詞靜樣イノフ。若君樣イのふ。此次丸はどふしたと。地そこよ。爰よと尋チ捜せど人ト影の　詞ヤア扨
は討ッ手に奪れしか。地ヱ、殘念やと齒がみをなし。詞譬ならくの底迄も取リ返さいで置ふかと。地駈
出すこなたの池水ゟ。這出る新五が濡鼠。どつこいやらぬとかけ寄を。振リ返つて拜ミ打。フシ地跡を慕ふ
て三重へ追て行。地爰もフシ名高き。武藏の國。八ッの詠めの風景は和らぐ文字も金澤の。孫作といふ
小百性。產れ付イたる正直の頭にやどる髮筋も。二筋三筋五筋やキンヲクリ六十に。近カき女房が此浦風
の落葉焚煙も細き營の渡世苦にせぬのら息子。名も闇雲の熊藏が。朝比奈ノ三郎を己レが内にかくまひ
て。事もなげ成ル晝寐の夢。傍りに響く高カ鼾不敵にも。又賴もしし。地孫作灰吹キこつち〳〵。詞イヤ
ノウばゞ。ア、又のらめが高カ鼾。夜ルは長カ起朝は長カ寐。まだ其上ヱに晝ル寐しおる。モこまつた物じや
ないかいの。ヲ、日が長カいで退屈の晝寐。吹キすかして風引カふトレ何ぞ裾にと地立母親詞ハテ扨そ
ふそなたが。姑息て育た故に我ガ儘八百。そこら中を相イ手にして喧硴するが商賣同然ン。ならず者に仕
てのけた。ャ夫レはそふと朝比奈樣がお淋しかろ。早ふ御膳ンの拵へ仕やれ。イャ〳〵朝比奈樣も今す
や〳〵。お目が覺たかトレ見て來ませふ。ヲ、そんならおれもお傍へいて口下手な咄しでも地何をが
なお慰。サアお來やれと打連レて奥のフシ一ト間へ入跡へ。地親分ンの内にござるかと。ずつと這入ルなま皮

男。跡から又來るぶう〳〵が天窻をぐる〳〵繩からげ。上り口からどつてう聲。詞ヤア大きな事が發つて來た。コレ尻持を頼に來た。ちやつと起て下され。地フシ早ふ〳〵とゆり起せば。地欠まじくら目を覺し。詞ヱヽ旨ふ寐てゐる胴ぶくら。又はした喧嘩の尻持か。アヽイヤ〳〵ちつとやそつとの事じやごんせぬ。コレ聞て下されと地云へば跡から詞アヽイヤおれがのから。イヤおらが先じや。イヤおれじや〳〵と爭へばコレ〳〵〳〵。ヱヽやかましいわい。跡の先のといはず共。マア喜次六からいふた〳〵。イヤサ是がいはずに置かれふか。立ぬ〳〵モヽ男が立ぬ。じやによつて立て貰はにや。アイ人中へ顔の出されぬ大出入。コレ親方聞て下んせ。わしは一昨年の秋。房州へ鰯網に雇はれ三年ぶりで戻つて見れば。マア〳〵〳〵聞て下され。内のかゝめが二月生れのしかも首玉入つた男の子を引抱てけつかる。密夫めを詮義すれば。隣村の與五八め。モヽ腹が立て〳〵どふも堪忍がならぬから。こなたに尻持頼に來たサ。コレ立て下され親分頼む〳〵と地てつぺいから湯氣を立てフシ腹立聲。詞へヽちつと實の有喧嘩かと思や。ヱヽいま〳〵しい密夫出入。ソリヤおれが尻持迄もなく。其密夫めを引摺寄せ。がきめ共三ツ重ね六ツにして仕廻つしやれと。地いはれて悔り色眞青。詞ハテめつそふな。そんな事が出來るならこなたに尻持や頼んはいの。コレあつちは強し地こつち弱し。詞そこでこなたを頼に來ました。じやといふて外の喧嘩と違つて。おれが行て叩れもすまいし。アヽどふぞよい仕様が有がヲかふさあれ。どふで不埒な女房。添て居て面よごそふ方。いつ

そ密夫めに誤り證文を書カせて。くれてやつたがよかろかいの。ハア成ル程。夫レもそふでござるはいのカ。密夫こそすれ。平生はモずんど氣前ンのよいアノ嬶を。あいつめに只やつてのけるも。アいかにしても。惜いもんで 地ござるはいのさ。迷惑そふに首傾け。詞ヲ、有ルぞ〳〵。サア〳〵モ、、、近ン年の上分ン別ッが出來てきた。ナントかふしてはどふでござろ。二タツにせうにも相ィ手が強し。マ呉てやるには猶惜し。男は當タつて碎いじや。いつそ沙汰なしに堪ン忍してやりましよかい。ヲ、ソリヤ早結構過キた了簡ンじや。ハアテ跡のへる物じやなし。かゝを借た利金ンには。息子をこつちへ引ッたくれば、モ余ンり大な損徳も内證濟ミにしませふ 併世間ンへばつとせぬ様。密夫にはおれが方から鬼殺しの壹二升を買ッてやつて。口留メをして置ケば氣がゝりはちつ共ない事。ム、そんなら夫レはマア濟ンだは。ホ、わりや馬士の權助じやないか。サイノア親分ン聞ィて下され。ほてつ腹の熱かへる程。でかいめに出合ッたから。こんたを頼ンで。敵を取ッて貰はにやならない。昨日小田原から歸りがけ。侍の荷を付たが。ゑらふ貫ン目が有ッた故。酒代を貰ふといふたればの。無躰ィな野良めでくれまいとぬかしあがる。そこで何が聞ぬ氣な此男。ヱ、あたけたいな磔柱め。うぬが腰にきめて居る。節分ンの料理屑がこはふて。五十三次キ胯に引ッ挾んで上ホり下タりが成ル物ンかい。目くさり錢の五十三十。おへない米の糠侍ィ。どぶ漬の壓石にする土左衞門の幽靈め。あたいま〳〵しいぞ。けたいじや〳〵〳〵と手ひどふ張込ンでやりました。ホ、夫レはよい氣味じや。ア、よい氣味じやござらぬ。トいふと彼侍めがはな捻り引キ拔

て。おれが天窓をすこたんぴしやり。西瓜畑へ雷の落た様に。微塵に叩破おつた。ハテナ夫はゑらひめに合たなヤモ夫で。おれもころりと目を廻したが。そこら中が寄てたかつて馬士やおい〳〵と呼聲が幽に聞へると思ふたが。ソリヤ氣付よ人參よ。先天窓が大事の物だと。三尺手拭ひでぐる〳〵。其上をコレ。此繩でくゝつて有ても。當分の合せ物は離れ物。ア、どふで死るでござらふ。息の有内に其侍を。ホ、ソリヤ大な災難で有た。エイハ今夜おれが泊りへ仕懸。仕返してやろ氣遣すなと。地いふに嬉しさ氣もがつくり。涙の顔を。フシ振上て。詞ア、頼もしい親方。モウ其詞で成佛しまする。此様にお世話に成のも前生からの約束事。地未來は一蓮託生半座を分て待ますと。是を最期の詞かと。思へどフシさらにけんによもなし。地熊藏は腹筋より。詞ハ、、、ア、いかいたわけで有はいの。爰迄歩行て來る手疵。高の知た事で有ふと地泣わめくを引のさらへ。繩と手拭引ほどき。詞ヤコリヤ何じや。ちつと計のかすり疵。漸しぶり皮の剝た分と。地いはれて權助人心地。我でに天窓振て見て詞ヤア本に破ぬは。ヲ、コリヤ大な堀出し仕た。天窓一ツ丸設じや。エ、ろくな喧嘩ても仕あがるかと思ば。外聞わるいべら坊め。とつとゝ歸れと地フシ叱られながらへらず口。詞マア爰へ來ればこそ。ひち面倒な二人が出入。さつぱり相濟だ。ヤコレ。貴様は何と思はしやる。ア親方の捌は分な物じや。ア、どふでも餅は餅屋じやの。コレ親方。いかひ世話でごんだ。お禮は重て〳〵と地二人はフシいさみ立歸る。地熊藏䣭れ顔。詞ア、世にはたわけも有物と地

きせる取出しすつぱ〳〵。フシくゆる烟草の煙より。本フシ思ひは晴ぬ日影の身。地朝比奈三郎は孫作夫婦に伴はれ。フシしほ〳〵として立出る。地熊藏見るより畏り。詞ホヽコリヤ朝比奈様。嘸御退屈でござりませふ。イヤノフ熊藏只今奥にて孫作夫婦にもいふ通り。不慮の難義をそなたの蔭で危い命助られ。地まだ其上に世話に成。礼は詞に盡されずと差奠けば。詞エヽ去どはマア御氣の弱い。其様に跡先を案じては。天が落ふか地が破れふかと。モ夜が寐らるゝ物じやござりませぬ。大がい世間は三寸の見直し。エヽ嘸お淋しかろに。何ぞお慰でも有ばよいに。鎌倉と違つて在所は何角が不自由がち。漸畑の牛房や大根。埒の明ぬ詮義。責て手作の喧嘩なとお目に懸ふと思ふても。折悪ふろくな相手もなければ。お淋しいめをさせまする。エヽあたいま〳〵しいと地つかふどに。亭主の好を客へ出すフシ詞も時の。饗應〳〵。地孫作も両手をつき。詞イヤモヽヽお遠慮はずんど御無用。此村は親御義盛様の御知行所お地頭様の若殿をお世話申は。百性冥加と申物。じたい私等は母御巴御前様からお目を戴た者共。お前の御難義と聞て。影ながら氣の毒に思ふ矢先。災も三年と熊藏めが喧嘩好。御難義を救ふといふも因縁と申物。アイ親父殿の申通り。御不自由にはござりましよけれども。お心置なふいつ迄も。地御機嫌よふ御逗留。遊ばしまして下さりませとフシわりなき詞の折からに。地表に見馴ぬ鋲乗物。忍びの附〳〵若黨か門口から。孫作宅は是成か。巴御前忍びのお入りと。地聞て驚く人〳〵より朝比奈は猶恂り。詞おれはどふも母人に。お目にかゝつて詞がない。ハテよご

んすわしが呑込だと。地熊藏に打連立奥へ入跡引立て。孫作夫婦出向へば。フシ乘物の戸を。開かせて。フシ立出る巴御前 詞トレ其品是へと 地帛包手づから携へ 詞コリヤ〳〵者共自は余程の隙入此村境に待て居よと。地附〳〵を追返し。しづ〳〵とフシ座に着給ひ 詞ノウ久しや夫婦の衆。マア〳〵めで目出度と。地親しき詞に頭を摺付。詞ハア、御前様にも御機嫌でと 地挨拶の内巴御前。二つの包を直し置。詞何から礼をいはふやら 躬朝比奈が難義を救ひ。此家にかくまひ呉し由。密に聞て自が嬉しさ。夫に隠して忍びの見舞。夫婦の衆へ一礼何をがなと思へども。地急の事故用意もなふ纔抹ながら此二品。印計の手土産と渡せば夫婦は。押戴き。詞ハア、有難い御褒美のお詞。まだ其上に拝領物ハア、冥加に餘る仕合せ。爰は端近見苦しければ奥の一間で緩つと、何から角からのお物語。ホ、自も密〳〵に 地言たい事もたんと有。イサマアあれへと夫婦が案内奥のヲクリ一間へ入給ふ。地フシかゝる所へ。どや〳〵と庄屋が案内先に立。梶原が郎等沼淵團平 手の者引具し駈來りフシ捕た〳〵と亂入 地数多の家來が鼻の先ぬつと出たる熊藏が 有無をも云せず片はしから膝ぼん〳〵踏飛せば。團平いらつてヤア下郎の手向ひか。詞僭日外身が主人梶原公の舘にて。さま〲の狼藉我儘。剰詮義有朝比奈めを。奪取て歸りし段重々の不屆。召捕て來れよと主人梶原の下知を受。沼淵團平向ふたりサア尋常に縄かゝれ。地手向ひひろかば首にして連行んフシいかに〳〵と髯つたり。地熊藏はふん反返り 空うそ吹て。詞ム、、、イヤ是お侍。余り強く呼ると腮の懸金がはづ

れるぞや。いかにも其朝比奈樣はおれが内にござれ共、貴樣の樣な新五左や盛相めらが　太ィ平樂をほざく迚返す事マアならない。地 一昨日來いとフシひやうまづく。地 短氣の團平拔キ討に眞向みぢんと切リ付るを。腕首摑カんでもんどり打せ腰のつがひを踏ミ付れば。是はと立チ寄ル家來も相伴。ぶち退はり退踏飛し。一人リづゝは間だるしとフシ板戶蹴放し振リ上るを。地 庄屋が見兼てこは／″＼ながら。詞 ア、是ミ熊藏殿樣。梶原樣の御家來を貴樣が今打殺すと。其尻は村中の難ン義。爰は一チ番ン此庄屋にめんじてお役人樣方のお命を助ケてやつて下さるまいか。ハテ高が侍ィ風情。殺した迚手柄にも成ルまい。コリヤヤイ／＼お役人樣めら。モ助ケにくい命なれ共。此庄屋が割に入ッて。お情深カい熊藏樣の。お慈悲を以ッて助ケて貰ふ。サア皆誤つたといふた／＼と。地 いはれてめい／＼手を合せ。御免ン／＼と泣詫れば。詞 ヱ、頭が高い／＼。忝ナくも此庄屋は。わり樣達が命の親。其かはりに年ン貢の未進。手ひどふせつくと。コリヤ罸が當タるぞ覺ヱて居ろと。地 力キむおかしさ熊藏も。はづみを拔カれフシ拍子もなく。詞 ヱ、叩殺す奴ッ等なれど。庄屋殿の挨拶故今は助ケる。此以後共朝比奈樣の詮ン義にうせると。今ン度はうぬら命はないが合點ンか、ア、申シミ何のいの。是に懲いでよい物か。ア、お慈悲深カい結構な氣味の惡ルいお顏付キ。何しに重ネて參りませふ。どふぞ助ケけて下さりませと 地 又さめ／″＼と泣ければ、詞 ヲ、ほへる程悲しくば助てこます早歸れ。うぬらが樣なごてれつに相ィ手に成ル隙がない。長カ居ひろぐさ。叩出すぞと。地フシ 睨ちらして入にけり。團平漸起キ直り。詞 コリヤ／＼家來共。ア、わいらも嘸痛か

らふが。出家侍犬畜生。借た物せつかれるさ。踏れたり叩れたりが術なふては。ナカ〳〵侍さいふ商賣が一日も成物かい。足元明い内。さらばお暇申さふさ。地立上れ共脇腰立ず。提灯で餅ぐにや〳〵〳〵。是はお旦那あぶないさ。立寄家來も文彌フシ又ぐにや〳〵。詞主從一度に顔見合て。ア、扨悲しや腰痛や。かくぐにや〳〵さぐにや付を。女房共が見るならば嘸もどかしくや思ふらん。地それ腰はこんにやくに似て行ばぐにや〳〵す。詞庄屋は挨拶をして立て徘徊す。ア、浦山しの有様やさ。地フシ髭喰そらして男泣。地傍に庄屋は氣の毒顔。いぬにもいなれず立はたかり。詞ア、扨ミ笑止千万な中〳〵其様な足元では。屋敷へは歸られまいさいふて駕はなし。おれが負てもいかれず。ア、どふぞ仕様は有まいか。地ハテどふがなさ首傾け。詞ヲ、そふじや〳〵さ地庄屋が一期の分別聞給へ此様に足腰の立ぬのも。皆宿業のなす所。一引引ば千僧供養。二引引ば万僧供養袋有合戸板持出し。圍平を引摺乗セフシ引繩付て。詞サア〳〵是でよい〳〵イカニ家來のめん〳〵サア〳〵寄て引れよさ。地いへば皆〳〵立かゝり一引引てはひよろ〳〵〳〵。二引引ては又ひよろ〳〵〳〵。庄屋はおかしく鍋引提めつたやたらに打ならしフシ辰巳上りの聲はり上。ナヲス詞捕人の役人足が折自力にては叶ひがたく。他力を以て足代成就致します。お心ざしはござりませぬか。足代の建立〳〵。地奉加〳〵さ聲を上。引ずりヲクリへ廻して出て行。地キン永き日の。まだ暮兼し軒のつま。柵の糸の徐に。動く共なき春風の。はこぶ深山の斧の音丁〳〵さして幽なる。ヲクリ蛙

の。聲も雉子の音も。本フシいとゞわび敷キ黄昏の。フシやゝ時移る。キン田家の春。むざんやな朝比奈は。母の對面叶ハねば覺悟極めし死出立チ。無紋ンの上下モ白小袖腹切リ刀三寶に。携へ出る一ト間の內。しほれながらにフシ座をしむる。地夫レと見るより孫作が。踏所もしらず走リ出。詞ヲヽそふハッふては叶ハぬ筈。よふ覺悟遊ばしたなふ。最前ンちらと申せし通リ。母御樣へ色〳〵とお詫申シて見ますれど。譬笛を盗マぬにもせよ云イ譯立テねば則科人ン。盗賊の名が付てはお家に疵の付ク事。二つには梶原が舘にて未練の振廻なされし迚段〳〵のお腹立。さつきに下されし帛包ミ。明ケて見ればコレ此裝束地どふで助カらぬお前のお命。潔ふお腹召サれて下さりませと涙と倶に。進むれば。地朝比奈顏を振リ上て。詞跡の跡迄心を付ケての世話苦勞。いかなれば某が惰弱に生マれし色好ミ。常〳〵母の御異見を。地用ゐざる天罪にて色より起りし身の誤マり。盗賊の名を付ケられ卑怯未練ンの振ル廻も。非力キに生マれし身の因ン果。詞熊藏が情にて一チ應命は助カりても迚も。武士の交りならねばとく〳〵覺悟極メしが。地兄弟は多けれど母人の子といふは。某一人リの事なれば。男增りの母上でも。跡の歎キを思ひやり是迄は打過キしが。詞どふで遁カれぬ我身の上。親子の對面叶はねどお聲を聞イたを未來へ土産。サア〳〵孫作介錯を賴ミ入と。地三寶取て押シ戴く。腹切リ刀取リ上クれば。モフ今が御最期かと見やるこなたへかけ出る女房。ノフ是待ッてと立チ寄ルを。物をもいはず。孫作が引ッ退ケる内義秀は。刀逆手に取リ直し腹へぐつと突キ立る。ぱつと立ッたる血煙に。我レを忘スれて欠寄孫作。女房もしがみ付キわつと計に。泣出

す。地朝比奈苦しき息をつぎ。詞長松の元に清風有りとは古人の詞。然るに此義秀。父は天下に隠れなき勇將と呼れ給ひし。朝日將軍義仲公。母人は又女ながら音に聞へし巴御前。育られしは和田義盛是以って名高き勇士地其紛たる朝比奈が。いかなれば人並々遙劣し非力者。詞是迄迷ひし酒色の二つ。夫故にこそ數ならぬ梶原が下郎に迄打擲せられし身の恥辱子に持給ふ母人の御顔迄を穢せし段嘸や憎しと思すらん。此世でさへも此通り未來にまします義仲公へ。どの面さげて對面せん。チエ殘念や口惜やな。生ては母へ義理立す。死で行にも行れぬ身の。六ツの街に迷ふ共せめては鬼共蛇共成。詞憎しと思ふ梶原を取殺さいで置べきかと。地身を悔たる無念の涙。孫作夫婦は氣も狂亂お道理樣やとフシ計りにて又さめ〴〵と泣居たる。詞イヤ其迷ひは此巴が晴させで取せふとフシ立出給へは地手負は嬉しくコハ御對面有り難しと悦ふ顏を。つく〴〵と打守り詞ヲ、此母計が對面ならず二親共に對面させふと。地いふに朝比奈悔りし。詞扨は父義盛公にも。イヤ〳〵そなたの實の親といふは夫に居る孫作夫婦と。地聞て手負は又悔り。たまり兼て孫作が。ヲ、、、其跡は此親が直に咄して聞そふ。詞元おれも腹からの百性でもなく。巴樣の親御兼遠樣に譜代の御家來。ア、思ひ出すもフシ二昔。詞義仲樣の御威勢をアノ梶原樣が憎にて。御謀叛の讒言故。鎌倉より討手向ひ。宇治勢田の手も責破られ。地終に粟津の戰ひに。あへなくも討れ給ふ。詞其時に巴樣は。是非討死との御覺悟。おなかには七月のしかも左孕は男のお子。御平產遊ばして父御の敵梶原を。お討せなさる

が討チ死ぬ。増つたる御奉公と。留ても聞入レなく。地 敵陣ンへ駈入ラんと。キン いさめる馬の轡を取ッて引立るをハナセ〳〵。キン 放せ〳〵と鐙の鳩胸で幾度か蹴られながらも其場を立チ退キ。フシ 落延る所を 詞 義盛様に出合って生捕れ給ひしもフシ 御縁ンのはし。詞 程なく若子を御平産。され共梶原が清水の冠者様の様に。又讒言は知レた事。ア、どふがなと思ふ内。此ばゞが同じく平産。後チの爲と取リかへて育たる子はあの熊藏と。地 聞イてキン 手負は起キ直り。詞 扨はわたしはお前の子にて。義仲公の御ン胤は熊藏殿にて有リしよな。地 しらぬ事迚無礼の段ン〳〵。是迄は巴様を親と思ひし身の恐れ。眞平御免ン下 されませと。いふに母親咽返り。産落トしてけふが日迄。我子と得云ハぬお主あしらひ。今はに成ッての名乘リ合。思へば薄き親子の緣。せめて二日か三日成リ共生キながらへて我子じやと。堪納する程云イたいと口說。立ッればフシ 巴御前。地 ヲ、二タ親の歎キを思ひ。そなたの命助ヶたいは山〳〵なれ共 詞 熊藏がいはれぬ腕立テ。そなたの難ン義を救ひし事鎌倉に隱れなければ。そなた計リか熊藏が科人ンと成殺されては。一人リならず二人の命。せつかく是迄心を碎き取リ替置し詮ンもなく。義仲様の血脈が絶果ッる計リか。地 此巴が二張の弓。貞女の道を背たる心盡しも皆むだ事。何とぞして名イ將の胤を此世に殘さんと 忠義あつき孫作夫婦は一ッ生其身を土ほせり。土百性の成リ果ッるも熊藏が身を全せん。心遣イは須彌大海、深ヵき心を汲分ヶて。現在夫婦が血を分し。そなたを死せて下されと死ニ裝束の手土産を。持ッて來た心の內むごい共胴欲共。此身をずだ〳〵に切ラれて成共。義仲様の御胤を此世に殘さん其爲と。了簡付ヶて下されと

わつと計リに泣給へば。孫作はせきくる涙呑込〳〵手負の耳際。詞コリヤやい躮。アヽ有リ難い今のお詞。我レ〻つれが躮レの身で忝ナくも源氏の大將義仲樣のお子樣に成リかはつて死ヌればこそ。誰レ有ふ巴樣の枕本トの御介抱。有リ難いとお礼申せ。地日比美〻敷形容。詞ア鳶が鷹じや。能イ子を持ッたと云イこそせね心の自慢。お屋敷へは遠ン慮して月キ〻の登城日に態〻鎌倉の大手先キにぶら〳〵として居るも。そなたの姿が見たい計リ。地寒い事も暑い事も。ひだるい事も打忘スれ。詞あんげらほんと立ッて居て。幾度か見附から通れ〳〵と叱れても。性懲もなふ立廻れど。地外カの行烈は目に付ず。余所ながらにもそなたを見りや。嬉しうて〳〵歸りは足も地に付カず。親の欲目子故の闇兼ての覺悟も打忘れ。詞アヽ果報負がせねばよいが。冥加に盡キねばよいかと。思ふたが案ンの定。まだしも御身がはりじやと諦りやこそ物もいはるれ。活ても居れ。外の事で死だなら身が碎けるで有ふぞと。地いふ聲胸に塞がれば母は正躰イ泣はらす。目を押シ拭ひ〳〵親子は一ッ世といふからは未來で逢ハれぬ暇乞コレ〳〵せつなく共たつた一言。親父樣か。母人かと。いふて別れて下されとフシ歎く詞が通じてや。地手負は今はの目を見開き。詞ハア有リ難や忝や。隋弱に生マれし我レ故に親〻の名を穢すかと。思ふに違ふ御身がはり。親父樣母樣巴樣へ御礼をと。地いふも苦ルしきだんまつま。照日に向カふ初ッ雪のフシカヽり消るがごとく息キ絶たり人〻死骸に取付イて。前ン後も分カずフシ泣沈むは理リ。キンせめて哀レなり。地かゝる樣子を最前ニゟ。忍んで聞キゐる闇銅の權助物影ゟ踊出。詞ヤア朝比奈を取リ替置キし樣子殘らず聞居ッた

地生ヶ捕て金にするとかけ込一ト間の障子越。取ッて投出す人ト礫くはん共云ハぬ闇銅リの權助フシ此世の鳴は止つたり。地人トミ是はと驚ロく內、後ロの障子さつと開き。すつくと立ッたる熊藏が、キン素袍の袂、のつしりと。雲に羽をのす鶴の丸。刺さげ天窗に烏帽子の懸緒。さもフシ目ざましき其出立。地四方をきつと打守モり。詞田鼠化して鶉と成ル。雀海中に入ッて蛤と成ル。先キ程ゟの物語我こそ朝日將軍。義仲公の忘スれ記念と。地初メて聞イたる我身の上。土產に給ひし帛包。詞此素袍に染込ンたるフシ千代を壽く舞鶴を、今ゟしては我カ身の公着。詞先キ立し朝比奈が恩ンを忘れぬ其爲に、朝比奈ノ三郎義秀と。地改名せんといさみの詞。末世に傳ふる出立はフシ此理りと。しられたり。地三人歎キも打忘れホ、潔し賴もしとフシ仰ぎ立ッれば。地三郎義秀。詞梶原が讒言にて義仲公のあへなき御最期余所事なりと思ひの外。現在父の修羅道の御無念ンの月キ日共。聞で送りし殘ン念さよ。地是ゟ直クに梶原が舘に踏ン込、一チミに首引キ拔父の御無念ン味方の敎養。先キ立し朝比奈が恨ミも倶に晴さんと。怒の眥血をそゝぎ眉毛逆立無念の形相。母人さらばと云イ捨て表をさしてフシかけ出すを。詞ヤレ待テ朝比奈いふ事有リ。義仲公の御胤ながら民家に育チしそなたの力ラ。馬士下郎は手に合ふ共勇士の勝負心元トなし地イテ勇力キを試んと。襠ひらりと脫捨給ひ。庭に生イたる櫟の立チ木。根ごしにぐつと引キ拔て小脇にかい込ミつつ立上り。詞傳へ聞ク獅子の子は。數千ジ丈の岩壁ゟ投落して例見る。我カ子の勇力ござんなれと。地打付給ふを引ッはづし。投クれば宙に飛上る。早足の振ル廻烈しき勇力キ。又打付るを宙にて留コリヤ

〳〵と引ッ力　大地も踏ミ抜計にて。双方互角の根ン限り揉合拍子に解の生木　中ヵゟさゝらと捻切
て。すつくと立ッたる親子の有リ様目さましくもフシ又醜しし。地朝比奈完爾打チ笑。詞ナント母人是でも
梶原は討チますまいかな。ヲヽ夫レで思ひ置ク事なしイテ門出の餞別せんと。地ずつと寄ッて死骸の刀。
取ル手も見せず我レと我。咽にがはと突キ立れば。是はと驚ロく孫作夫婦。遖の朝比奈愕ヶり動轉　何故の
御自害と取付縋れば。詞ヤア何故とは曲もなや。是迄はそなたの身の上ェ人となさんと思ふを力。孫作
夫婦が忠義にてかく迄育チし大恩ンは。産の親ゟ百倍ぞや。地人目を思ひ是迄にしみ〴〵礼もいふ事か
適〳〵来りし今日のしだら。土産と名付ヶし二タ包も我ヵ産の子のそなたには。出ッ世を壽く素袍の舞鶴。
夫婦が産ンだ朝比奈にはキン死出の公着の白ロ小袖　麻上下モに腹切リ刀。夫婦の衆の否共いはず。殺して
くれた心の内。健氣な心に恥入リてどふも生キては居られぬ義理。二ツには朝比奈が逸徹短慮を諫んと
思ひ設け此自害。詞コリヤ義秀。父御の仇を報はんとはさら〳〵無理とは思はね共。天下を呑マんと
計ヵる梶原。そなた一人リが駈入ッて。やはか仕課せらるべきか。匹夫下郎の犬死を血氣の勇迚武士の。
骸の恥辱とする事ぞ。地母が末期の詞を守り随分ン命全ふし。何卒世にも出るならば經陀羅尼にも勝
つた追善。龍は池中に潜つても時を得ては天に登リ。詞韓信が胯漂母の食。皆堪忍ンを守モりし故人の鑑
といはるゝぞや。地いかなる難ン義に逢ッ迚も短氣を出してくれるなと。理を盡したる教訓の。膽に答
へて朝比奈がはら〳〵〳〵とこぼるゝ涙。孫作夫婦は手を合セ。我レ〻への義理立チにお自害を遊ばす

とは。冥加の程も恐ろしいと。いふ聲涙にむせ返り。フシ身もくづおれて伏沈む。地朝比奈ハツト居直りて。詞ハア、有がたし〳〵。母の末期の御一チ言。骨に通つて忘れがたし。是ゟ我レは武者修行。諸國に程能キ城地を見立テ。地軍ン勢を駈催し梶原父子を討チ亡しキン御無念晴し奉らん。詞ヲヽ其合點さへいたならば。モ思ひ置ク事微塵もなし何ッれもさらばと。地聲の下刀を抜ヶばうつぶしにフシカヽりかつぱと伏たる此世の別れ。地ワツト泣出す夫婦ゟ。天ン魔を拉朝比奈が生マれて泣ぬあら涙。淀の川瀬の水車面テにそゝぐごとくにてフシ凄しくも又いた〳〵し。地孫作ハツト心付。迚も悔ンで返らぬ事。かゝる様子の流風せぬ内。詞朝比奈様は是ゟも諸國を廻クる武者修行。地我レヽ夫婦は妾をかへ上ヱ成ル山に庵を結び。お前の出ッ世と此里の風景共に能見るの。文ン字を取ッて能見堂。今に傳へて金澤の實フシ八景の筆の跡。地其名を假の朝比奈が今日を命の瀬戸の月。孫作夫婦は泣ヽも。巴御前の亡骸を。送ヲる乙艫に歸る帆も弘誓の。船に歎乃フシ唱ふる稱名暮レの鐘。迷ひを晴す遺言を守モるもよしや義秀が。追ッ付敵を内チ川の。雪着キ次第の一人リ旅。キン再び運を平潟の。便りを聞カん雁金の。タヽキ羽がいもがれし老イの身の今ゟ何と洲崎の嵐。晴レても晴レぬ別れの涙。随分ン無事で。御機嫌に必ヽ今迄の短氣を出して下さるなと。いと念比に夕日さす。野島の浦に寄ル浪の。浦山しさも身に知リてキン絞る袂トは夜ルの雨。いつかは爰に小泉と心。殘して。出て行

第三

地 海道筋の繁昌はフシ四季にとだへぬ賑ひの。旅人ンを當テに世を渡る藤澤の宿はづれ、葭簀圍ひし茶店ャの軒。ぼんじやり風の品者が。キン汲ンで出す茶の花香より娘の顔に引カされて、誰レも思ひの大和茶はフシ近ン年流行の仕出しく。詞コレ姉樣ン爰へも最一つわしにもと。地口ミ呑ンで何と可内 詞いつ見てもきつい物だよ。ハテ扨名代の茶釜娘笠森おせん此かたの評判。地嵯峨や身延の出開帳で通りの多い此海道。往來の人を釣寄セて犬に掛鯛目の正月ッ。かふいふ格が世間ンにはやる、詞コリヤ宅助手を握るが嬉しい沙。無上に呑ンで腹を下タすなよ。イヤそりやいはれぬ我が燒餅だはい。ほんに其燒キ餅で氣が付ィた、すき腹に茶を呑だら疝氣めか高鳴キしをる。五文餅でもしてこまそ。地サアこい〳〵と打連立。エ、いま〳〵しい俄雨と。つぶやき〳〵そこ〳〵にフシ茶の錢拂ふて立歸る、詞ホ、コリヤ又惡ルい時降ッて來た。コレ娘もふ此雨で通りも有ルまい。店も仕舞て休みやいのと。地いひつゝ出る母親が。床几片付芬盤茶碗ン取リミフシ内に入。詞ノフかゝ樣もふお仕立テ物は濟ミましたか。サレバイノ次第に寒空に成ル故に 旦那殿の袖無羽織新しい物と違ひ、色紙の當タる洗濯物は手間が取レる 漸〳〵と今くけ仕舞イまだしつけ縫も出來ね共もふ飯拵エにかゝらざ成ルまい。夫レはそふとこちの人はもふお歸りで有リそな物。サイナ俄雨故用意もなふ濡なさるでござんしよと。フシ親子が噺しの最中へ、地息キ杖腰にぶら

〳〵さ、身は蓑虫のひよろ〳〵〳〵〳〵〳〵。主ジの五助が門ト口から。詞嗅よ娘よ今還御なされたとフシ舌も廻ハらぬ千鳥足。地ソリヤお歸りと立ッ内に。蓑をも脱す座敷の眞ン中。ヤゑつとこまかせとどつかり居れば親子は立チ寄。詞是はマアけしからぬ酒の醉。ソシテマめつそふな蓑を着ながら座敷の上。どこもかも雫だらけ。地テヱ脱してと立寄レば。詞ア、コレ〳〵お構ひ下されな。寒いによつて給たでゑすは。給たによつて醉たでゑすは。醉ッたによつて脱ヵぬでゑすは。嗅衆お娘微塵も無理では有ルまいがの。じやといふて是がマア脱いでどふ成ル物ぞいのと。地無理に立チ寄親子して。蓑引キまくれば越中の。褌一トつの丸剝男親子は驚き。是はマア興がるさつき着て出た古袷はどこへどふして此お姿。よもや博奕は打チやなされじ。地どふいふ事とおろ〳〵涙。詞ハ、、、コリヤ面白ロいは。男は裸百貫ン刋にかけても五十貫ンが物は慥。けふも鎌倉から荷物が出て。百七十ゑじめたけれど。餅屋と酒屋へ三十日の拂ラひヱイカ〳〵。歸りに大屋樣へ寄ッたれば。三ッ月キの店賃が不足して居る急ッ度よこせとぬかしおる。高が壹分に足ぬ金。何の其憎ッさも憎し。拂ッぺいと思ふても。三文ンもないじやヱイカ〳〵。所で袷をぐる〳〵ヱイカ〳〵。そこで店ナ賃を濟マせた身祝ひ。こんにやくの田樂で廿四文がの引ッかけたじや。所で醉ッたでゑすは。何とヱイカ〳〵何の夫レがゑい事が有ルぞいな。地そしてマアめつそふな。着替のないはしつて居て。裸ヵにならずと斷の云イやうも有リそな物。ひよんな事やとフシ氣を揉所へ。地門ト口から小底がによつこり。詞コレ五助殿庄屋殿から急用じや。地ちやつと御ざれとあせれ

共。イヤ〳〵何ぼ庄屋殿の御託宣でも。いく事は罷リならんじや。ハアテ扨夫レでも嚴しいお尋者の御詮ン義。是非ござらにや濟マぬ事。地サア歩ばつしやれと引ッ立れば。詞ア、コレ〳〵先ン生行ク事はやすけれ共。見らるゝ通り褌一トツ。何ぼ痩ても庄屋殿は村中の束じや。其束殿の内へ白衣ではいかれますまい。ホンニそふじやコレお内義何ぞ着セてやらんせと。地いふに女房氣の毒がり何ぞといふたら着替ヱはなし。せめて是なと風ふせきと。袖無羽織打チ着すれば。差心へて娘が前垂。詞ム、是で裝束相濟ンだ。ハア、こりや阿蘭陀人の夜這に行ク様な形リじや。ハ、、、さらば參ン上。地仕らふと。ひよろ付ク足は小底が役害フシ肩に打懸ケ出て行。フシ跡打ながめ。女房は。娘の手を取リ上座へ直し。遙下カつて。フシ手をつかへ。詞勿躰ない誰レ有ふ源氏の大將。義經様の御臺所も御同前ンの靜様。地御世が御世なら輿車いかに世を忍ぶお身なれば迚。なされも付ケぬ茶店の業。詞往來の人にお顔をさらすも鎌倉の詮義強ければ。隱しだては猶ならずと。地夫ト鈴木ノ三郎が深カい方便。京の御所方に勤メていた。娘の小よしと云イふらし。詞若シ詮義が有ル迚もお顔を見しつた者なければ。いつ迄も五助が娘と云イつのる兼ての思案シ。万ン事にお氣を付ケられて。地悟られてばし給はるなと。語るも聞クもフシ涙なる地いつぞや三嶋の難ン義の時。詞思ひ懸なく重家殿に廻り逢イ。モ様〴〵の介抱。地自ラが身は兎も角も大切ッな經若丸。其時の騒動に敵の手へ渡つたれば。何卒再び取返す賴ミに思ふは夫婦の衆。能キにと計リ打しほれ又も。フシ涙にくれ給ふ。詞ヲ、其義はお氣遣カひ遊はすな。其時ちり〴〵の御身の上。地此

間次信殿の御連合白ラ川殿にも尋チ逢イ、御一ッ所には目に立ッ迚此裏町に忍ばせて置キ。夫トは毎日小揚にかこ付ヶ鎌倉へ入込。詞經若樣の御身の上は義盛が方に御座遊ばすとの。慥な樣子を聞イたれば。白川殿と心を合せ近シミに奪取ル思案シ。必お氣もじ遊ばすな。地マア〳〵奥へとすゝめられ。フシ涙ながらに立て行。地跡に女房只一人。本フシ心も細き物思ひ。詞さつきに庄屋から呼に來たは若シし此事では有ルまいかと。地疵持ッ足の氣あつかひフシ思ひ過コしの折からに。フシいきせき來るは此家の一ッ子。這入ルを見付ヶて。詞ヲ、要之助かよふ來てくれた。二三日は逢ハなんだ。地ほんに貧しい暮ラし故所緣有ル藤澤寺へそなたを預ヶ置キながら。顔見る迄は案シじの種。詞サアこちへ上カりやいの。イヱ〳〵そこ所じやござりませぬ。靜樣を詮シ義する迚。和田ノ義盛梶原平次此宿クへ入込シで村中の騷動と。地聞イて母親胸騷。詞ソリヤマアどふせふ要之助。ア、イヤ申してマアとゝ樣はどこへお出なされました。さればいの。地とゝ樣は庄屋殿から呼に來て。さつきにお出なされたわいの。詞エ、夫レもてつきり此義でござりませふ。地そんならいつそ靜樣を落しまする思案ッはないか。詞イエ〳〵四方八方役人が取卷ヶば。そんな事では濟ミますまい。地じやといふて是がマア。ほんにそふじや。此裏町に白川殿が忍んでござる。そなたちよつて一ト走リ呼で來てたもらぬか。詞アイそんなら私シは參りましよ。靜樣を出さぬ樣。地ヲ、跡氣遣カはずと早ふいきや。アイ〳〵と要之助ヲクリフシ逸足へ出してかけり行。地跡に吐胸をつく計リ。思案にくれて立ッつ居つ。フシ見やる向ふへ立歸る。地鈴木ノ三郎重ヶ家。初メに

かはる衣裝付キ上下モ大小爽かに。フシ昔シに歸るキン錦の袖。跡に引ッ添和田ノ左衞門義盛梶原平次景高フシいかつ。がましく座に着ば。地 撊れ果て女房が夫トの傍にずつと寄り。詞 是はマアけしからぬ。どふした譯と 地 尋チに重家サレバ／＼。詞 先キ程庄屋方へ招き寄セ。ゐれにござる御兩人のお眼鏡にて。賴朝卿へ召シ抱へられ。以前シのごとく紀州の藤代下されんとの嚴命。ム丶スリヤあのお前は義經樣の御恩シを忘れ。賴朝樣へ奉公遊ばす。お心でござりますか。ハテ 扨何事も此重家が胸に有ル。地 だまつて居やれと制してもイヤ／＼／＼。詞 義經樣の御厚恩シ。御最期のお供をすべき筈の身なれ共 折リ惡ふ親御の御病氣。介抱願ふて國へ歸つた跡での御最期。其時には殉死でも切ル樣におつしやつたが 地 いかに貧苦がつらい迚。鈴木の三郎共云ハるゝ武士が。二君シに仕カへてそもやそも 未來にまします義經樣や。親御鈴木ノ郡司樣へ忠孝が立ッ物か。思案仕かへて下さんせと恨ミの。涙せきあへず。詞 ム、こなたが重家の御內證でござるな。拙ッ者和田ノ義盛お近カ付になり申ッそふ。ナニ義經へ義理が立タぬ抔とは。ソリヤ女義の狹い了簡。既に義經親兄の禮を忘れ。賴朝卿を亡さんと 計カる人面獸心シと 天道は正直キ此義盛が討ッ手の切ッ先。衣川の浪ときへ修羅の奴と成ッたる義經。何の義理もへちまも入ぬノフ梶原殿ナントそふではござらぬか 成程謀判人の義經が家來なりや縛り首にもすべき取。本シ領を下されんとは我君の御仁政。地 有難く思ひ召サれと惡口取ミたまり兼。差出る女房重家が引ッ捕へて動せず。詞 ノフ御兩所今日是へ御出有し御用の樣子。仰聞ケられ下されい。ホ丶重家が奉公始メ申付 るは別ノ義でない。

汝が内に靜御前ンかくまひ置ク条紛れなく。、詮義の爲に我ミ兩人向ふたり。地サア首討ッて渡されよといふに重家空とぼけ。詞ハ、、、是は〳〵和田殿のお詞共覺へす。浪々の身の重家親子三人暮ラし兼るあばらや。靜御前をかくまはんとは。ヤアいふな〳〵其親子三人がしれ者。我子と名を付白ばけのかくまひ者。譬余人は欺く共。此義盛を謀からんとは。ハ其手は喰ぬ出直ヲせと。地いはれて重家膽に燒キ鐵。詞イヤとふ有て拙者が娘に違ひござらぬ立ッ身出世も子孫ンの爲。我娘を靜にして首討ッ事能リならぬ。地ヤア詞甘きに付キ上り罷ならぬとは何の膽言。頼朝卿の上意を請義盛殿と此景高が。詮義する靜御前。汝も倶に引ッく〻り拷問するは安スけれ共。詞武士の情二つには義經が家來の汝主殺しにせまい爲。頼朝卿へ召シ出して殺させてやる大恩有かたいと三拜はしおらいで。ひつこしやつこと理窟ばる浪人ンの瘦骨ひしき付ケて討たにや置ぬと。いはれて鈴木も百年め。刀の柄の碎る計握り詰たる無念の顏色。モフかふ成ル上からは娘にして歸ればよし。是非と有レば絶躰絶命。サア返ン答聞んときめ返し。五臟六腑をもみ上ケて額に流る玉の汗。梶原も云が〻りフシ青筋はつてせり合ッ中。地義盛は古ル兵きやつあら立テては事の破れと。眞綿で首のしめく〻り二人リか中カへわつて入リ。詞先ッ梶原殿お待なされ。最前ンから見受ケるに思ひ込ンだ重家が振ル廻。娘といふに違イも有ルまいといふに悔クりヤ、、、義盛殿。ソリヤ何を證據に。イヤサ重家が娘に違イなければ此方にも一トつの所望。ノフ鈴木殿拙者が躮レ新左ヱ門常盛。、未タ婦妻も御ざらねば幸こなたの娘小よしとやら申シ受て。拙者が花嫁常盛に女合ハせたい。此相談ン

はどふでござらふさ。地 物に馴レたる古ル狸。腹に毛のない白ラ化ケのフシ裏へ持チ込一ト工み 地 重家ハットは思へ共。一寸遁カれ卽座の返ン答。詞 コレハ〳〵思ひ懸ケなき義盛殿の御一チ言。スリヤ靜さの御疑は。ハテ晴レいで嫁に取ラるゝ物か。然らば迫ッて日をゑらみ。イヤ〳〵此義盛は老人ン。物事が氣短。日を見る事は大嫌ひ。嫁入リは則チ今晩ン拵へは元ト來入ラず。夫レ共又。其方にいやさ有レば一詮義さ。地 のつ引させぬ釘鎹。打ッてかへたる詮義の手詰メ。梶原一圓呑込ず。詞 詮義仕懸た靜御前。若シ取リ迯さば後日チの難義。アヽイヤ今宵輿を入レる迄は大勢の馳走人ン四方八方付ケ置ケば迯隱るゝ氣遣イなし。輿入レは彌今ン晩ン。イザ御ン出さ立上れば。地 梶原も不肖〴〵挨拶もなく。默禮計。フシ面ふくらして立歸る。地 夫婦は門トの戸はたさ立ナ。小聲に成ッてノフ我夫マ。詞 どふ成かふ成云イ拔ても。跡の難義は靜樣を娘にして義盛へお渡しなされるお心かへ。ハテめつそふな。靜樣を敵の手へ渡す程なりや。いきせきさ今の樣に爭ひはせぬはい。夫レならば又嫁入を。ヲヽサ其嫁入をいやさいふさ首討テさいふ一ッ手透。地 してうに懸ケる詮ン義の手詰メ。是非に及ばず一寸ン遁カれ。請合事は請合しが指當タる嫁入の難義。最早御運も是限キり。一ッ方を切リ拔て我本ン國へお供せん女房用意さフシ氣を揉所へ。詞 ヲヽ其嫁入の人替り是にて用意致せしさ。フシ奥ゟ出る。白川が。地 跡に伴ふ要之助。見かはす計リの嶋田髷。女姿にフシ驚く夫婦。詞ャ 思ひ懸なき白川殿委細の樣子はサレハイノ。最前ン此子が急の知ラせ。思案に盡キし思ひ付キ、さかの時は首討ッてお身がはりに立テん物さ。あの子にも呑ミ込せ俄に似せし髮形。裏道より忍び入リ

靜樣ご入レ替置キ、すはごいはば首討タんと思ひの外に義盛か。地工の裏の裏のうら此子を嫁に拵へて。和田が舘へ伴ナひ行。經若樣を奪取ル方便と。聞イて重ケ家感じ入。詞ホ、適次キ信殿の御內イ方程有て。驚キ入たる卽座の方便テと。地いふに女房待タんせや。詞顏形チは似せたり共肝心ンの床の內。見出されては重ナる難ン義 ノリイヤ〳〵其義は氣遣カひさしやんすな。此白川が乳母の役。傍を離れず付添エば折を伺ひ義盛親子。ム、面白し〳〵。此重家は九ツの。鐘を相イ圖に裏門ンら。忍び入ツて助ケ太刀せん。紛レぬかるな。地キンアイ〳〵譬罔兩鬼神成リ共。忠義に凝たる一チ念力キ。詞ノリ義盛親子が首かき切。經若樣を御供せん。母樣氣遣ひ遊ばすなと。地さしもに。キンはやるキン勇士のフシ二タ葉。地娘姿や姬百合の。心は鬼百合鬼一口迎ひの來るに間も有ルまい。サア〳〵用意と拔ケ目なく取リど急ぐ緣の糸。結ぶの。神や三重二上リ哥キン雉子山鳥。秋鹿も。慕ふは戀の。常ながら。殘るは君が。キン袖の香。

地奥ら洩るゝ爪音トと。フシ見越シの松を。吹ク風と。ヲクリ互イにしらべ扇が谷。和田ノ左衞門義盛が舘には。今宵俄に嫁御の輿入。上下ゲの騷大方カならず美麗をつくすはき掃除。庭に盛砂箒目に武家の フシ行義を顯はせり。地フシ忍ぶれど。色に出にけり我カ戀は。物や思ふと人ト問ば 小ヲクリ何と。答も婳ける。姿の花も義盛の秘藏娘千種の姬。數多の女中に傅れ。出る一ト間の紅葉して。フシ風も色有ル風情〳〵

地しとやかに座に着キ給へば。男はしがる色盛リ御殿ン育の上ハずれに。目口かはきの小笹が手を突キ。詞憚りなからお姬樣へ。皆の者が打揃ふてお尋チ申上ケまする。當春江の嶋詣の時。美しいお若衆樣と不

思義な戀の御趣向も。寸善尺魔と邪魔が入ッてつゐお別れなされてゐ。お心かもちやくちや〳〵夫レから起つた戀煩ひ。地 祈禱よ醫者よ占よ御鬮よ棒よ足は擂槌。鬼子母神ン様や稲荷様へお百度參りも矮狗に伽羅。すつきり應ぬ御病氣が。詞 どふした事か先キ程から物忘スれした様に。さつぱりとお心よいはマどふいふ事で有ラふぞと。地 色〻お次で評義しても濟マぬ故。お尋チ申上ますといふを若葉が引ッ取て詞 ヲヽ皆様はまだ知ラずかへ。其お若衆様にお別れなされてより。お名も所も知レぬ故お姫様の物思ひサア女の念ンは岩通すと、段〻と手を廻ハしてお聞なされた所が其お若カ衆様はの、義經様の御家來鈴木ノ三郎様の御子息。要之助様といふお人トで有ッたといの。地 といふても御有リ家が知レねばいとゞ重る御病氣 さつきに大殿様お歸りの折リ御意遊ばすには。詞 鈴木ノ三郎様のお娘御小よし様といふのを愛な若カ殿。常盛様と御緣ン組が極つて。今宵俄カのお輿入リ。スリヤつながる御家門ン中カ。いつお逢イなされふと自由な事に成ッて來たは、地 結ぶの神の引キ合せと夫レで俄に御病氣が御快氣。久サしぶりでお髮も上カりうき〳〵としたお顔ばせ。目出度イ事じやないかいのと。咄せば皆が手を打て。詞 扨ッもしたり。そんならそふとお姫様とふ御披露の有リそな物。地 お前計リがうき〳〵とひよんな夢でもごろじやるなと、なぶれば姫は顔赤カらめ。聞きやる通りの譯ケなれば自ラか心、嬉しさ。とくにも咄す筈なれど。詞 必ス人トにおつしやるなと。鳴ル瀬がきつう留メた故、地 遲なはつたはこらへてと。フシ 袖打覆へばお局が、詞 コレ皆の衆、余ンりざは〳〵と氣を惡ルがつて貰ふまい。若シ此事が大殿様のお耳へ入

と、大事の時の邪魔に成ル。仕課せる迄必ス汰沙なし悟られぬが肝心ンと。地ひそ〳〵フシ潜ぐ表の方、詞梶原平次景高様御出と告る聲。地スリヤ又例のげぢ〳〵殿。いけ好カない顔しながら。お姫様に惚くさつて。しみしたたるい濡事傍から見ても腹が立。サア〳〵お入リ遊ばせとざゞめき立ッて奥御殿、フシ皆引連て入給ふ。地程なく入來る緩怠面。梶原平次景高のつさ〳〵とフシ打通れば。地立出る和田ノ義盛跡に續て嫡子新左衞門常盛。ひらにあれへのフシ辭義作法。地座に着ケば義盛。詞御存シのごとく今日は。躮レ常盛が妻迎へお取リ持下されんと。地景高殿の御來臨忝ナしと。常盛倶々挨拶すれば。詞イヤサ。拙者今日參る事取リ持計でもござらぬ。貴殿ンの二タ心を詮義せよと。地親景時が下知を受ケ推參ン致し候とにがり。フシ切ッて云イ放せば。地義盛はせゝら笑ひ。詞某に不審とは身に取ッて覺へなし。されば〳〵今日貴殿と同道にて詮義仕懸ケた靜が事、重ケ家めが口車娘〻との云イ廻しを。得心ンするさへ心得ぬに常盛に娶さんと。早速の云約束、是不審ンの第一。又ッ先キ達ッて義經が小躮レ。犬骨折ッて鷹の餌食と貴殿の方へ奪取ながら。我カ館にかくまひ置ク條彼是以ッて心得ず。今宵九ツの鐘を相イ圖首討て渡さるゝか。異義に及はゞ賴朝卿へ申シ上ふか。當時出ッ頭の親景時賴朝卿は立テふと伏セふと親次第。地サ何ンと〳〵と傍若無人。常盛引ッ取。詞コレハ〳〵。何事かと存ぜしにさしてもなき御不審ン。今ン晩婚禮の一チ件は追ッて樣子知レる事、又經若丸が首討ッには、何時でも御用次第何の手間隙入ヲぬ事、別でもない義を仰山ンそふに。地梶原殿には似合ぬと。一ッ本ンさゝれてフシ痛入リ。詞モそふ出られては近カ比ロ迷

惑、實を申さば親景時。爰な親父と大望の企。頼朝を亡して日本を半分分。源氏の餘類を一疋でも生置ては。後日の邪魔と思ふからの心遣ひ。二つには又根が他人故。少した事にも互の疑ひ蟻の穴から堤とやら疑ひは破れの本。其疑ひのない様に。地爰な娘千種の前を手前が妻に申受れば、聟く舅く姫く小舅く。微塵も如在は出來申さぬ。詞サコレ此景高が一生の頼。地是非に千種を申受ると己が得手に帆を上て。戀の湊へ乗かける。地義盛はにが笑ひ。ハヽヽヽ。詞コリヤハヤ似合しき御相談。早速應と申たいが頭ふまへし常盛さへ。未緣邊調のはねば。此義は兎角常盛が祝言等も相濟で緩りつと御相談。地先奥へといふ内に。嫁御のお入とざゝめく聲ゝ三人席を改れば。待女郎は娘の千種衣服改め出向へば。地梅の梢を。柳腰、女出立に要之助。嫁入小袖綿帽子、深い方便は常ならぬ。經若君を奪取ん工と人は白川が跡に。付添乳母役。覺悟はしても敵の中、心細くも座に着ば、地義盛聲かけ、詞ホ、思ひの外早い輿入。後なは乳母成かと。地問れて會釋し詞仰に任せ俄の嫁入、御存の鈴木が身の上乳母にも姥にも。わたし一人の嫁御のお供。地万事ぶ調法の所はお呵なされて下さりませホヽヽヽ。と紛らせても油斷ならざる胸の内薄氷を踏ごとく〱。常盛父に打向ひ。詞申付た用意の吸物、時分いかにといふに義盛、ヤア〱云付置し兼ての馳走早く出せと呼はれば。地ハット答へて切戸口。料理にあらぬ梯子水桶責道具、廣庭狹しと居並んだり、見るに二人は心も空思ひ懸なき景原も、千種も驚く計り〱。詞ノフ景高殿 義盛が嫁への馳走

御らふじて御安堵なされふ。いかにも。ヤモけしからぬ御献立。煤掃の河豚汁より氣味の惡ルい御馳走。アイヤそりや御合點の參らぬ筈。今ン日貴殿も見らるゝ通り鈴木めが一ッ生懸命。是非靜〻さ詮義せば。舊鼠却つて猫を喰んず面魂。誠逸物ッの猫さいふは。牡丹の花に居眠て。爪を隱す義盛が計略。娘さいへは娘にして。いやさ云ハさぬ卽座の緣ン組。地かふ我内へ引キ入たれば。袋の鼠籠の鳥。かけ構はぬ詮義の仕方後學の爲御覽ン有レさ。工ミを顯はす一チ言に。梶原はフシぎつちり閉口。地爰ぞ大事さ白川が胸をすへて近カく摺寄。詞コハ疑ひ深カい御計ラひ。正眞ン正銘紛ひない。鈴木が娘小よし御寮手入ラずの花嫁。靜樣かそでないかはお寢間の内でも知レる事。地仰山ンそふに責メ道具ヲ、きやうこつな義盛樣さ。いはせも立テず。ヤアだまれ女。詞此義盛が眼ン力白ロい黑いを見て置イた。邪魔ひろぐさ儕め共。地拷問ンせんさはつたさ睨どちつ共痿ず。詞成ル程拷問は御勝ッ手次第。嫁御に付キ添乳母の役。是程でも麁相が有ッては親御への言譯ケ立ぬ。誠ト拷問ンなされた上。靜樣でない時は御恥辱に成リませふ。ヤア小しやくな女めソレ常盛。物な云ハせそ拷問せよ。地畏て立チ上るを景高押サへてア、コレせかれまい常盛。詞ヤア景高殿何ンでお留メなされるぞ。されば〳〵。かふ留メたも盗人の晝ル寐。最前ン御親ン父の云ハるゝには。常盛が祝言ンが調ふた其上ヱでは。千種をおれに呉んさの云分ン。味な所へさけて來たさ輿の入ルのを待ッて居たに。思ひがけなき親父のねちみやく。ハテ靜で有ラふが有ルまいが。かふ乘リかゝつた所を拷問などさはイヤモいかひ野暮。四も五もなしに祝言ンして千ン秋萬ン歲其序に。地千

種をおれが女房にすればどこもかも丸ふ治る。譬本ンの靜でも。梶原が呑ミ込ばどんじやくもへちまも入ぬ。詞コレ親父殿。昔シ氣質は西の海へさらり〳〵。地氣を通して千種をおれが女房に。くれる氣は中橋かとしよげにフシ成ッたる得手勝ッ手。地流石の義盛拍子拔ケ。思案ン仕かへていか樣。詞僅女の一人リら二人リ。義盛か手をおろし拷問せんもおとなげなし。ヤコリヤ〳〵千種。此詮義は汝に預ケる。地水喰はせて拷問せよといふに悔ッり。アノマア爺樣のめつそふな。姫ごぜの身で拷問シとは。イヤサ女の詮義は女が相應。若シ其上ヱで白ク狀せずんば。又詮義の仕方もあらん。地しつかりと預ケたぞ。詞サ梶原殿。最前ンからのお氣ばらし。奥の座敷で御酒一トつ。地イザ御出と進られ不肖〳〵に梶原も。常盤諸共打連レて帳臺ヲクリへ深く入にけり。地フシ跡に二タ人リば。胸撫おろし。どふ成ル事ぞと見る内にずんと立ッて千種の姫フシ椽ン先へあゆみ出。詞コリヤ〳〵者共。最早用事は相濟ンだ。皆引〳〵と。地追イ退け。嫁の傍に立寄て。詞最前から取リ紛れ御挨拶も得申さぬ。私は千種と申シて常盤か妹なりや。お前の爲にも妹可愛がつて下さりませと。地いふに少しは落付ケども見出されじと差耻き只フシアイ〳〵と計リりく。詞ヲヽ初〻しいはお道理〳〵。其上マアあられもないとゝ樣の我儘。地片意地なは生マれ付辛抱なされて下さりませ。詞コレ乳母おうつとしかろ帽子も取ッて。くつろがせましたがよいわいの地デエわたしがと立チかゝり。帽子はづして髱押シ直し見れば見る程戀人トの。其面モさしに生キ寫しいと、と思ひは十寸穗の薄。乱るゝ心フシ穗に出て。詞ノフ乳母。御兄弟とは云イながら。あなたのお顔は弟御

の要之助様に。似たとは愚瓜を二つに割ずに其儘。ムヽスリヤお前は。アノ要様を御存なされてござりますか。ヲヽしつてゐる段かいの。其證據はコレ爰にと。地身輕に立て一間ゟ取出す包は天人の。羽衣ならぬ。フシ記念の羽織。地けふ初てお目にかゝりし姉様の手前いき過た女じやとおさげしみも恥しながら。詞當春江の嶋にて見初參らせ。地可愛らしいと思ふゟ。心がひよんな物に成て。うぢかは〳〵してゐるを娍共にせり立られ。漸〳〵お傍へ立寄て兎やかくする内ついお別れ。夫から館へ歸りても常〻お顔が目の先へ。見へる様なも夢現。フシせめてものうさはらし。地片瀬の濱で無理やりに取て置たる此お羽織。詞娍共に着せて要様じやといふて見ても。似ても似付ぬ雪と墨。地タヽキ戀し床しい數〻が。こふじ〳〵と戀煩ひ。死る命を漸とけふあなたのお入と聞ば。縁につながる要様又逢事も成ふかと。悦んだかひもなふ父上の無得心。アヽ云出しなされては片意地に變せぬ御氣質。お前の御縁が切るゝなら要様に逢事も。どふで叶はぬ私が惡縁。死る氣に極てゐれど。お前のお顔を見るに付思ひつゞけてやるかたなさ。せめて添事ならず共。我夫か女房かと。一言いふて死だなら。西の川原へ行もせず。未來で成共添はれふかと思ふにかひなき身の上を。哀れと思ふて給はれとかつはとふして正躰なく。娘心の一筋に思ひ餘りしフシ戀の淵。地深き思案の白川が。何がな鹽に付入て經若君を奪取んと。心で點き抱起し。詞コレハ扨お氣の弱い。夫程要様が戀しくば私が逢せて上ませふ。ムヽソリヤまあほんかいの。何の嘘を申しませふ。其証據は此羽織を。小

よし様にコレかふ着ｾまし。地今宵は要様の名代に夫婦の盃ｷさせましよと。いふに姫は飛立ｯ思ひ。お羽織召ｼた其お姿。似たとは愚やつぱりほんぼの要様。フシわしや嬉しいと抱ｷ付。地要之助も下ﾀ行ｸ水心を汲で白川が目まぜと仕形で呑込せ。詞聟君に振付ｹられ揚丁の嫁御寮。地弟御の名代にお姫様とあの一ﾄ間で。緩りつと御寐なりませ。夫ﾚは嬉しやサアお出と。いはれて要はうぢ〳〵と。詞乳母そふしても大事ないかや。地ハテ今何もかもわたしが合点。お心置ｷなふしつぽりと。詞コレ其かはりにはﾅ彼。大事の〳〵戀路の常別ｶれて。地又逢手引ｷの事が肝心ﾝ要のしくゝり。必おぬかり遊ばすなと、無理に押ｼやる屏風の内。枕は戀の橋柱ｷﾝ渡り逢瀬の天の川。襖ひつしやり立退てほつと溜ﾒ息ｷ次の間へフシ歩ﾐ出。詞テモまあ宵からひあいな事。鰐の口を遁ｶれたれば。地是からは姫をかたらひ經若様を奪ｲ取ﾙ思案。それはそふと娘御が要様の名代。姉御様と思ひの外モフ今比はしつぽりとフシ冷汗かなと獨ﾘ言。地夜もフシしん〳〵と。更渡り。キン夜半ｶを告る鐘の聲。本フシ胸に響て白川が、詞ヲ、今撞たは九ツの。地兼て手筈の重家殿裏門ﾝゟ忍び入ﾙ相ｲ圖の刻限。奥へ忍んで奪ｲ取ﾗんと。用意の懐劔携へてキン指ｼ足拔足一ﾄ間の杉戸。氣轉きかして花生ｹの水を敷ｷ居へ流し懸。體を寄ｾてしめ明ｹに。明ｶり障子や幾間の襖。生ｹるがごとき彩色の繪にも。心を奥の間へ忍び入ﾗんとフシする所に。詞白川待と聲懸ｹられ。地ハツト驚ｷ飛退しが。詞ホ、、。マ思ひ懸ない名に恟り。地こつちの事ではなかつたと又立直りフシ行んとす。詞ヤア佐藤三郎兵衞次信が女房白川待ﾃと呼はる聲。遁れぬ所と振ﾘ返れ

ば。後の襖さつと開き顯はれ出たる義盛景高。見るに仰天ン胸をすへヱ、仕損せしか殘ン念やと懷イ劔
抜て突かゝるをヤアほで轉業をしおるなと。引ッぱづして腕捻上用意の早繩小手縛り。フシ椽柱に猿つ
なぎ。無念〳〵とあせるを見捨てノフ景高殿。詞細工は流〻。義盛が仕上をとくと御らふじたか。成ル
程委細拜見致した。ヤ是は是で相濟ンだり。九つの鐘は最前ン鳴たに。なぜ經若が首お討チなされぬ。サ
レバ其義でござる。先キ達て經若丸召シ捕置イてはござれ共。密に樣子承はれば經若が二人有リとの取沙
汰。一人ンは憷次信が小躮レ次丸と申シて。卽チ此女が產ンだ躮。紛れ者を摑んではと存ズるから色〻と詮
義して。誠の經若と申ス義相イ知レてはござれ共。今一チ應吟味せん爲コレ此女めを縛り繩。地經若を引
出せばこいつめが能本ン阿彌。樣子とくと御覽ンなされ。詞ヤア〳〵誰レか有ル經若を引キ出せ。地畏て家
來共遠慮會釋もフシ追ッ立る。三下リ哀レはかなき稚ナ子の。雲井を慕ふ籠の鳥。敵の擒と形リふりも。小
手を赦めし。フシ羽がいじめ。地白川は氣もきへ〴〵繩を限りに立寄ッて。互イに見合す顏と顏。詞ヤア
そなたは我子の次丸かと。地いはんとせしが待テ暫し。扨は常〻云イ聞せしまさかの時はお身替りと。敎
しを忘れもせず經若樣に成リ課せ死る心の健氣さを思へは胸も。フシ張裂ごとく。地漸心を押シしづめ
詞ノフお久サしや經若樣。いつぞやの騷動以後此家にましませ樣子を聞キ。重ケ家と心を合せ奪取ル方便
も今此時宜。辿も遁カれぬ御命。常〻にも申せし通リ。未練な事おつしやると。鎌倉武士の物笑ひ。源氏
のお名を穢す時は。私が恨ムる計リか。先キ立給ふとゝ樣。コレとゝ樣義經樣迄がお呵なされる。必ス〻

何にも物おつしやらず。教ましたお念ン佛。首差延て潔ふ。切ラれて死ンんで下さりませと、地口にはいへど心には神ミ佛ケのお力ラで。命を助ケて給はれと百千ン無量の物思ひ。キン次丸涙の顔を上 詞 其氣遣カひは仕やんな。おれはよふ覺てゐる。源氏の大將。義經が子じや物。殺されても泣はせねど。そなたがなきやるでおれも悲しい。必泣ィて下さるな。死ンだ跡でも人トが問なら。いふ事をよふ聞ィて、泣すに死だ。強い者じやとたんと譽て下されと。地合點ンはしてもあどなき詞。詞ヲヽよふおつしやつたよふおつしやつて下さつたのふ。コレモフわたしも泣きやしませぬ。〳〵と 地いへ共せきくる涙の熱湯 義盛後ロへ立廻れば。今が此世の別れかと思へば骨も碎る計リ。 いつそ我子といふ事を打明ケて助ふかイヤ〳〵。是程迄には仕課せしお身がはり仕損ンしては世の譏。盡せし忠義も水の泡とはいへ一人リも一人リからと美しう生マれた子を。目の前殺すを何とマア。余所に見て居られふぞとあなたを思ひこなたには。次丸は尋常に西に向ひ眼コを閉 詞南無阿彌陀佛。地〳〵の聲諸共するどき和田が及の光り首は前にぞ落にける。地わつと計リに白川は前ン後深くに取リ亂れフシ身もうく。計に泣しつむ。地 義盛はしづ〳〵と。首を器に取、納め。フシ梶原が手に渡せば。詞ヤコレハ〳〵御苦勞イヤモ疑ひさらりと晴レ申た。親景時も嘸悦び。是ゟ直クにお暇申さふ。然らば万ン事は又重チて。おさらば。地 さらばと梶原は己が館へ義盛はヲクリへ刀引提入にけり。地 跡打ながめ白川は夢共さらに辨へず。死骸の傍に差寄ッて抱上んも縛り繩。落ッる涙をさゞめ兼暫し詞も。なかりしが。やゝ有て顔ふり上。ノウ次丸。思ひも寄ラぬ今宵ィの對面ン。飛

立様に思ひしが忠義の二字にからまれて。親子の名乗も余所になしかゝ様か我子かと。いはれぬ最期の悲しさつらさ。母はまだしも兼ての覺悟。七つや八つの稚氣にお主の爲と合點して。卑怯未練な詞もなくよふお身かはりに立てくれたな。譬丈夫の魂でも振上し刄の下では。亂るゝ物と聞物をまして辨へしらぬ身が。世間の子なら迯隠れ見苦しき目を見せん物。敎た詞を忘れもせず。詞 源氏の大將義經が子じや物。殺されても泣ぬとは可愛そふによふいやつた。地 遖は父の子程有健氣にもよふ死たと。草葉の蔭でとゝ様がお譽めなされてござんせふ思ひ出すも恨めしや。詞 源平晴の八嶋の軍義經様の危いお命。お馬の先に立塞能登殿の大矢を請留。お命にかはりしを古今の忠義と世の人に。譽られ給ふ父御にも 地 おさ／＼劣ぬそなたの最期。お主も二代。家來も二代。世間に稀なる忠臣を夫子に持しは我身の因果。いかなる人が武士の忠義といふ物拵へて。今此憂目を見するぞと譯も涙にフシ取亂し物狂はしき風情く。地 かゝる様子はいさしらぬ鈴木三郎重家は。經若君の御最期と聞と等しく死物狂ひ。フシ 宙を駈つて來るゟ早く。地 白川が禁切ほどき。詞 兼ての相圖を待請んと立忍ぶ内經若君。はかなくならせ給ふとはヱ、。地 しなしたり口惜やとじだんだ踏で無念のはがみ。詞 イヤ／＼／＼。今死んだは我子の次丸じやはいのふ。ム、スリヤ經若様の御身の上。サアお行衞は知ね共お命に氣遣ひない。ム、ヤ何にもせよ憎き義盛。恨の一太刀目に物見せんと。地 すつくと立て大音上。詞 ヤア／＼義盛は何國に有鈴木三郎重家見參せん出合 地 やつと呼は

れ共しづまり。フシ返つて音トもせず。地ヤア風を喰ふて逃たるか。イデ一ト詮ン義とずつと寄リ障子ぐはらりと踏ミひらけばこはいかに。地三ン國一チの聟様と諷ひざゞめく女中の聲ミ千種の姫と要之助かはる。出立チの色直しならぶ。小ヲクリ姿や一ッ對の。妹脊を結ぶ尉と姥。千年を祝ふ嶋臺に。長カ柄の銚子三ミ九度。二度惘りい鈴木三郎白川と顔見合せ呆れ。フシ果たる一間の内。謠千シ秋万ン歳の。千年の玉を奉ると。地謠の聲と諸共に縹の素袍立テ烏帽子。悠々然たる和田義盛何か白ッ木の三方を常盛に取リ持せ。目通りに差置キ。詞娘千種か戀聟。要之助への聟引キ出。地サア披見有レと指シ出す三ン方。いふかしながら重家が一ッ通取ッて押開き。詞何ミ飛札披見シ令候ッ然レば紛レ經若丸遠路の所送クり下され。御厚志過分ンの至りに候。建久元年七月七日。和田ノ左衛門殿へ源トの義經判とッ地讀も終らす膝立直し詞アヽラ不思義や。此世を去せ給ひたる我君の御直キ筆。經若君の御身の上書キ印ルせし年ン月といひ。彼レ是以て心得ずと白川諸共詰メ寄は。詞ホヽ其不審は尤至極。梶原が讒言にて科なき御身を狭られ。地數度の憂目を陸奥に忍ばせ給ふ義經の御難ン義。何卒救ひ奉んと。詞重忠と心を合せ頼朝卿へ諫言も。佞人巷に蔓れば思ふに任ッせぬ世の成リ行。是非に及ばず義經の討手。義盛が乞請てなんなく破りし。フシ衣川。詞ノリ忍びを以ッて内通し。地城に火を掛ヶ義經公。討チ死と披露してキン密に落し奉り。詞日本ンの地は心ならずと蝦夷が嶋へ押シ渡り。嶋の夷を切リ從へ。義經大王と申シ奉るは。即チ判官義經公。地經若君を送りしも某が寸ン志の忠義と。始メて明カす義盛が詞に二人シは三ン拜九拜。餘マりの事に

詞も出す悦ひフシいさむ計りく。地常盛も進出。詞父義盛の心盡し在柄ノ平太が仕落チを幸イ。君を恨ムる躰に持成。梶原が謀叛シに組ミせしも。地佞人原に心を救ルさせ經若丸靜御前の。御命を救はん爲の謀。詞然カれ共邪智深カき梶原が手詰メの詮義。止事を得ず痛はしくも次丸を殺せしと。地語るを引ッ取父義盛。詞ヲ、サ梶原が手へ渡さじと。譜代の家來を雲助に仕立奪取ッたる二人の稚ナ子。其親〻の面ざしに似たる血筋は爭はれぬ。次信が忘れ筐と悟りながらも。幾度問共經若〻と同し返シ答。ハア恥しきは氏育。地末代武士の鑑と成ル。父の忠義を次丸が今日のお役に立課せ。梶原を欺しはホ、健氣の最期。フシ去ながら。詞此義盛が難面も。首討時の心のせつなさ。白川殿の心では鬼畜の様に思すらん。地朝比奈といひ巴が最期。心を痛る老イのいりまへ。又其上に娘が戀病ミ。當分シの病氣でさへ案じるは親の習ひ。似合の縁を結び得し我悦ひに引當テて、心の内のせつなさを。しらぬ鬼でもござらぬとさしもに猛き義盛が五臓を絞る。溜ノ涙。白川有ルにもあられぬ思ひ。詞久サしう別れてゐた内にも。嘸かし日比此母を戀慕ふたでござんせふ。ヲ、晝ルの中は經若に成リ課せた心でも。虫の所爲か折〻は。よふ寢て居ても襲れて。むつくと起キてはかゝ樣。〱なふとかけ廻り。泣キこがるゝむごらしさ。ヲ、尤じや道理じや〱。地可愛の者やさどふど伏又さめ〲と歎くにぞ。思ひやりつゝ人〻も倶に涙に紅イの園に植て隱レなき忠義の葎をちらせしと歎けど返らぬフシあの世の旅。地義盛は涙を拂ラひ。詞コレ〱重家。貴殿親子は是迄も靜御前の御供し。義經公の御跡慕ひ蝦夷が島へ渡海有レ。地長の旅路に足弱の。

娘が事をさ。口ごもる追恩愛。フシ親子の名殘り。詞ヲヽいふにや及ぶ是迄の貴殿ンの大恩ン忘スるべき重ヶ家ならずと詞數。地いはで別カるゝ忠臣ン義士。浮キ木の龜や優曇花の花嫁フシ諸共立出る。地我は無常を悟の種。ちり行柳は綠子の連レなきしやばに。秋の空。世の交りも稻妻に。譬し法リの敎の道。キン消るを待タん露の身の。置キ所さへ白川が淚ながらの暇乞。地同じ浮世の戀無常。跡に焚火も庭火さ門火名は替れ共、武士の。義理はかはらぬ日の本の弓矢の。譽レ義盛が智略は。今に隱なし

第四　道行夢の浮橋

キン戀わびて。哥うち寐る中カに行通ふ。夢かキン現か。現なく。ナヲスこがるゝ袖のフシ淚川。フシ人目づゝみに漸さ。我カ身を竊みいづくぞとヲクリ行ク先キ。とても夏草の。本フシ茂りて深カき吾妻野は。つもる思ひも水に畫く。地侘柄の平太諸共になれし廓を忍び出覺悟極めし死ニ出立。手に持ツ珠數のキン玉の緒も。タヽキみじかき夜半の更渡り。そこ共分カずたど〳〵とフシヲクリ迷ひ。ユリヘ出るぞ是非なけれ。フシ暗きよりくらきに。冷泉迷ふ戀の闇。思ひ有ル身はおのづから。風の音トにも心置キ追ツ手や尋ね小餘綾のいそげばフシ跡に宿河原。今死ヌる身も煩腦の。犬の聲ヾヲヽこはさ。抱タきつく〳〵山寺に消滅。々爲さ鳴鐘は。冥途の旅の力ラ草。あの世は蓮の三つ蒲團。五ゝの菩薩は三絃を彈でさふして高麗寺。こんなゑにしは尋ても。よもや有ルまいキン唐土かキン原に。飛かふ螢火も。若は二人が魂の先

へ。ヲクリ行かうたがはれ。覺悟の上も今更に心細さは山下の。フシ宿打過キて最期場は。浮キ名流さん花水の。橋より右キへフシ在所道。せめて名殘リに顏と顏。互に見まく星明カり。わかる岐は此世やら。死て來たやら南やら。譯も涙にくれなゐの。フシ肌着もひたす計リなり。地平太は胸を押シしづめ思ひ廻せは廻す程。惡ク緣ンちぎりふがいない。おれ故さまぐ憂苦勞。禮は詞につくされずと打しほるれば。吾妻野は。園八フシソリヤ何いはんす平太樣。今更いふも愚痴なれど。わしは漸突キ出しの譯も白ラ歯の初店をふつとお前に見立テられ。好イた客じやと思ふても。まだ物馴ぬキン恥しさ寒いふりして抱キ付キンつい初會から帶紐も。解てかふして深カふなり次第につのる居續にキン一チ座の客も氣がつまり茶屋や牽頭も邪魔に成リ。色が惡ルいの瘦たのと。キン傍輩衆の惡ル口も。人ト目も義理も外聞も。互イにじつと引キしめて。お前の體がわしじややら。わたしが心がお前やらいつそ比翼の鳥となり飛ンで仕舞と。ざれ言を。思ひ當りし今の身の。死ンで未來へキン往た迚も人を助ケる如來樣。よもや野夫では有まいし。物日〳〵の苦勞もなく。やりての呵らぬ極樂で世帶を持ッてやゝ產ンで。ぬしと暮ラすが嬉しいとすがり寄たる袖袂涙の。ナヲスフシ雨や露ふせぐ。フシ菅の小笠の。一ト群も十チから上は五つ六つ。キン七つ立チしていそ〳〵と。子供道者がうたひ連レ。哥無理を夕立聲かきくもり。振つ振ラれつキンおき別れても。思ひ廻せば此胸がハレやくたいもない事じや。面もかぶらず來たわいナ。口舌時雨の袖打しぼり。ほしつ干れつキン立チわかれても。喰付カれたる其あとがハレやくたいもない事じや。面ンもかぶらず來たわいナ。

ナヲス其一トふしもフシ身の上にありし昔シの忍ばしく。うしと見し世ぞ小石原。つまづく度にほら／＼と。裾から先キへあかねさししのゝめ告る鳥の聲。最期をいざや急がんと手に手を取ッて行ク空の。松吹風やなみの音ねふりの。ゆめは三重へさめにけり。地物事の廣き譬に云イ傳ふ。實鎌倉の海道筋フシ往來多き其中カに。よい／＼肩せい靜にまたぎじや合點と。地澁紙體。眞ッ黑な色こほす汗たら／＼。かついで通る駕の內。ワットト泣出す女の聲。是はと驚キ夫レなりに。フシ駕突キおろす間もなく地跡からかけ來るやり手のおくら。垂を明クれば東野が。詞ノフ平太様シ待ッていなと。地走り出るを抱キ留。詞コレ東様嗜んせ。氣が違ふたかと叱れて。地漸に心付キ。詞扨は夢で有ッたそふな。ノウおくら聞イて下され。平太様と連レ立て心シ中に出てそこ爰と。地狼狽ると思ふ內目が覺たれば駕の內。どんなせつないめにあふても。平太様と一ッ所に居たい。やつぱり夢で置キたいとキンもだへ歎けば。詞ヲ、つがもない。花柄様とは深カい中其平太様シは笛の事故。重忠様のお屋敷で。殺されなさつて夫レ方も二年以來のぶら／＼病。さま／＼の療法も應ず親方の了簡シで。保養がてら箱根へ湯治。道〻の風景氣を晴そふとは思ひなんせず。くよ／＼案シじて居なさる故さんだ夢見なんす。病氣が重れば其身の損。コレ死で花實が咲クかいなと。地諫られてフシおろ／＼淚。地夫程の事辨へぬ私でもなけれ共。どふした緣やら花柄様新造の時から相イ惚の。互イにかはるなかはらじと。いひかはせしを情なや。大事の笛を盗れて殺され給ふ其日より。未來の供と思ひ詰イ。覺悟極メて居ながらも死ニおくれたが恥しいと又さめ／＼と。泣けれ

ば。詞ヲ、こな子はわつけもない。夫レでは病氣が猶重らふ。又積の詰メぬ內。地お藥上ヶふと懷さがし。ヱ、さつきの立デ場で上た跡を。床几の上につい置ィて取り急いで忘れて來た。藥がなふでは心細い。つい一ト走ッ取ッて來なんしよ。コレ駕の衆。私は跡の立場へ行て落した藥取て來る其內は。涼しい所で暫ラく待ッつて居さつしやい。若積が發つたら。地押シ上ヶて下されや賴みまするさ云捨てフシとつかはとして走り行。地跡見送つて駕の者。詞コリヤ棒組。どこがよからふ。ヲ、アノ森リ蔭がよかんべい。地おつと任せと夏木立チ。フシ蟬鳴く森へかつぎ込ム。地梶原が郎等番場ノ忠太。家來引キ連汗しづく。詞コリヤ〳〵者共。けふは源太樣のお使ィ。大磯の傾城東野を連レて來れば。地一簾の御褒美隨分シぬかるな油斷すな。心得たんぼの森蔭に。フシ有リ共しらず急ぎ行。地人の子と知ッつてはならぬ商賣や。大磯の女衒手の裏八兵衞。駕を舁せてフシ步ミ來る。地東の方ゟ來る人の商賣も又頰が顏。汗手拭ひでふきながらはたと行合。詞ヲ、八兵衞殿。是は半公。貴樣はどこへ。イヤどこへしやない手前の內へ。ム、わしも又こなたの所へ。約束の踊リ子駕に乘セて行所。幸ィな所で逢た。ナント大方揃ひましたか。サレバ夫レに付ィて大ごまり。此間の閙がしさめくり打隙もござらぬ。聞カしやる通り重忠樣の御下屋敷。三浦の海で涼の趣向。四十八艘の屋根舟船頭に揃ィを着せ。踊リ子を乘る故。百人余の請合。方ミ搜して大方極た。是で丁ど人數が揃ふたア、ヤレ〳〵ちつと落付ィた。貴樣の世話に如在は有ルまい。地ドレ開帳と駕の垂。明ヶて悔ッりぼた餅を。棚から落したおたふくに。蒼い臭のぱつとちる。キン花色染メの白ロあ

がり。梅にとまりし鶯も鼻をつまんで法花經を。ひよけ經と鳴。フシ風情く。地牢六居丈高ヵに成。詞コレ〳〵八兵衞。喰ハせ者にも程が有ルはいの。夜たかに出しても月キ夜には蔭へ廻ハして貢にやいけぬ。替玉にはかならぬ代ロ物こんな玉が踊子で候とお大名へ出さるゝ物かいの。かふいふ代ロ物で濟ムくらひなりや大磯迄頼ミにや來ぬ。大屋の内にも三絃かぢる鼻たれ娘がいくらも有ル。忝ナくもコノ牢六が手先キには。辨ン天の地藏のと美し揃の異名付を。すぐり立テた其中へ。こんな物が出さるゝ物かいの余ンり人を茶にするなど。地せけど騷がず。詞イヤコレ〳〵其樣にいはしやるなわしも如在はちつともない。けれ共踊子の大寄セ。鎌倉で足ぬ故大磯迄騷キあるく。モおれも色ミ世話やけど。因幡は丁子屋の敷キ初メでいく筈。お秀は中ヵ近江へ先ン約。大文ン字屋の子供は片時も隙がない。其外ヵも皆間違イせふ事なしの思ひ付。此娘は田舍から開張參りに來たを幸イ。ハテ踊子の一ッ束も有ル中へ。五疋三疋ねき物を突キ雜ても余ンり目にも立ッまい。濟ミさへすりや此娘にや。朝鮮鼈甲の櫛と。銀流の笄を買てやる約束。コレ花代は貴樣と山割高かろよかろ安かろ惡ルかろといふからは。ハテ扱高が引ヶ物だと了簡ンさつしやれ。ハテめつそふな人じやわいの何ぼ丸設に成ル迚も。相イ手が秩父の重忠樣。上ヶ坪を喰せてしくぢつちや株仕廻イ。そしてマア惡いといふても大がいが有ル物いはずと貴樣の商賣筋。素人目に美しう見へるやつでさへ。鼻のしまりが惡ルいの。ヤ唇が薄いの何のかのと。僅の疵でも廿兩卅兩直段ンの違ふは女の器量。夫レにマアアレ見やしやれ。猫脊中ヵに棚尻。頰高ヵく鼻ひくゝ。出額に猿眼コ。

鳴聲鵺に似たりけり。ハ、、、是を三河屋に見せると兩國へ出して見せ物にせふといひますはいの。ハ、、、こんな者連レて來て金にせふとは太印シとフシかぞへ立テたる惡たいに。地 たまり兼て駕の內。つか／＼と走リ出。半六が胸ぐら取て引キすへ。詞 コレ爰な人だまりなさろ。扨ァても／＼お身様はおやてんこちもない。おらが器量の棚おろしサアをし申されて。犬か猫か鼬サアの様にかうべり申スが。おらァも在所サアでは吉兵衛サアの姉のお菊といッふてや。村の人が天シ人のようがうだァと譽メ申よ。開帳參りに來申シたをお屋敷の踊サアにいつて呉ろとおぎやァリ申。踊リの事シならおらァは在所で二番とは下ガり申さないから。いつてくれべいと思つて駕サアで來申たを。お身サアが種〻さつたのちくをぶん拔ィてさァましめさる。論〻は證據サアだ。さァらば踊つて見せ申べいと。地フシ身拵して立上り。おうわにぶん出せちやかまかそふだぞ。二上リ歌 瀧田川では紅葉を流すナ。ソウダカ／＼。わしは踊で汗流すなまめだアヨヲヱおなまめだんぶつおなまめだんぶつなまめだヨヲヱヱッサラサノサ。芝の車は牛ゆへ廻るナ。わしは踊で目が廻るなまめだアヨヲヱおなまめだんぶつおなまめだんぶつ。なまめだヨヲヱヱッサラサノサ。地ア、草臥たと大肌脱。團遣カひの大ィの字形。乳はぶた／＼古ル川藥師のフシ銀杏の木かとあやしまる。地 半六は鞆れ顔。詞 ゑいかげんが有ル物だ。こんな氣違ィを連レ廻つて。おこはにかける泥坊の相ィ手に成ル隙がないと。地 行カんとするをコリャ／＼待テ半六。氣に入ラにや入ラぬで濟ムゥ泥坊呼はり置キにしろ。おれも手の裏八兵衛といふてや女衒仲カ間で口をきく。湯屋の窓でけむつたい男

だ。うぬらに嘲されるのじやないわい。ヱイかと思つて礫つらめが。ヲヽ口をきくかしらないが人を盲にし上ヵる長太郎坊主じやないはい。ヱヽ此よこつたをしめ。ヤアこいつかうぬがと。地 摑合。互ィに劣ぬ我慢者。打ッつ叩つ蹴つ踏ンづ上を下へと揉合ば。見兼て支る駕の者。お菊も倶〻取リ付を。取ッて刎退踏飛しフシ持テ餘したる折からに。詞 ヲヽ其喧嘩貰いんしよ。わつちが留メたと引分ヮる。地 東野が顔見て悔り。ュ コリヤ飛ンだ所へ東様。ヲヽ八兵衛様半六様。日比念ン比な様にもない嗜んしと。地 いふに半六。詞 イヤ腹が立ッまいか理屈を聞て下さりませ。アイさつきにからの詰メ開き。皆聞ヽて居やんす。明日の藝者が間違ふてはどふもお前が立ぬとは。ガ尤そこを立る私ッが了簡ン。マア／＼下に居て聞キなんし。ぶつた迚叩た迚。足ぬ藝者が出來はすまい。おとなしう了簡ンしなんし。其かはり足ぬといふ明日の藝者のかはりには。わつちが行てやりんしよと。地 聞ィて悔クり。詞 ヱイソリヤ飛ンだ事だ。アイお前方さへ合點なりや。座敷の事はどふなりかふなり間を合しんしよ。イヤそりや早お前なら。三絃ンはなり藝も有リ。雀網で孔雀なれど親方殿が何とでごんしよの。イヱ／＼其氣遣ィはしなんすな。箱根湯治で氣儘の保養。五日三日隙取ッても氣遣ィな事はない。わつちも重忠様ンの屋敷と聞ば行たい事がこざんす故幸ィの相談と。地 いふに二人はフシ安堵の思ひ。詞 ヤレ／＼是でくつろいだ。イヤ八兵衛殿。かふしましよ。今濱の手で名の高ヵいお國じやといふて連て行ふッ。ヲヽ夫レはよい思ひ付ッ、俳踊リ子に仕立ても。廓の詞が出た時は天窓隠して尻尾が出る。すきんせんを止なされ。アイ夫レも合

點でござりんすソレ〳〵モ夫レがさ。地打こけてフシどつと笑ひを催せり。詞ナント半六殿ン是で云分ン有ルまいがの。何さ。間が欠るからのいざこざ。是でさつぱり大の極り。そんなら目出度打ませふヨイ〳〵と手を打てサ、、、駕の衆。早ふやつて下されてと。地悦びいさみ半六は。東マ野が駕急がせて三浦の方へ走リ行。地跡に八兵衛塵打拂ひ。詞ヱ、大キなむだをしてのけた。コレ駕の衆。大イ義ながら此引ケ者。連て歸つて下されと。地お菊を乘セて垂レおろし。フシ昇上ケんとする所へ。地かけ來る番場忠太。駕を見るゟ飛かかり。詞ソレ家來共。地まつかせとかついで行を八兵衛が震ひながらに詫ヒるも聞カず。詞やり手めが白ク状で。吾妻野が此所に。休スんで居る事皆聞た。云イ拔んとは横着者。地其手をたべる忠太ならず。邪魔ひろぐなと突キ飛し飛が。ごとくに三重へ走リ行。一コ四ユ二十八。地奥は酒宴の大騷肴の林酒の海。まん〳〵たる景色を三浦の磯邊に立チ續く。秩父の庄司重忠の物好キしたる下モ屋敷。三絃太鼓高カなしに。晝夜をフシ分カぬ賑ひ〳〵。地濱邊傳ひにうそ〳〵と窺ひ來る梶原源太。相イ圖のしはぶき二つ三つ。籬の蔭ゟ番場忠太御用いかにと立出れば。近カふ〳〵と招き寄。詞ナント忠太。其意得ざる重忠が振ル廻。病氣と云イ立出仕をとゞめ。此三浦の下モ屋敷に引キ籠りやり放しの大騷キ。取分ケけふは揃イ舟にて大趣向との風聞ン。地弟半次と示し合せ。其虚に乘ツて討チ取方便ニ詞ハア御意の通リ物堅き重忠。俄の奢合點ン參らず。此忠太めが存ンずるは。兼て親旦那御謀叛の企。折リを見合せ重忠を闇討チの催し。若シは方便を悟りての。作ク病ではござりますまいか。ヲ、夫レなれば猶更大事。諸大名は過半

味方。重忠さへ仕廻ッてのければ。地大ィ望は成就する必ぬかるな油断ンすな。畏り候と。番場は濱邊へ景季はとある。フシ小蔭に立チ忍ぶ。哥晩に忍ばゝ裏から忍へ。表や八重垣錠がおりる。八重垣キン表や。表や八重垣錠がおりる。ソレカチヤウカ〳〵キンさんまよ。地浮れ。出たる重忠を。キン取廻したるフシ踊リ子共。詞コレお幸様ン其お銚子持ッて來ないナ。イヱ夫レ〻はお豊様ン。殿様マの御烟草入レアイ。御前ンのお烟草入レは。お石様が持じやわいな。ア丶コリヤ〳〵。其様にざは〳〵と。御前ンの。殿様のと。余ンりわいらが勤メ過る故。おれは却て氣が詰マる。若カい時から此重忠。軍サをしたり本ン讀だり角トの取レぬ石部金ン吉。今太ィ平の樂しみを。しらぬも去リとは野夫の至タりと。悟りを開いて大磯通ひ。義藤辨魚としやれのめし。大通の仲カ間へ入リ。勿論きん〳〵と出かけて猪牙乘りずいいき。中の町ぎまりのぐい呑ミ。銀ンぎせるのやにさがり。烟草ぱく〳〵と喰ラはせても。りやんこの堅さがまだ拔ケない。人トは武士、なぜ傾城にいやがられ。といふ附合の通リじやナ所で氣をかへて此遊び。地是からは殿様事をぐつと流しのちよん〳〵幕と。現たわひもフシ中カの間の。地敷キ居隔てゝ本田ノ次郎御窺ひと手を突ケば。詞ヲヽ堅し〳〵御家老の白ロ鼠先ン生。云ィ付たけふの趣向はどふでゑす〳〵。ハア仰付られし揃ィの舟共段々沖へ乘リ出し。夜に入ッては玉屋が花火。申シ付置キ候と。地聞ィて重忠。ヲヽよし〳〵。詞いつの年シでも夏の内は此三浦の沖にて。鎌倉の諸大名を始メ下〻迄も舟涼。分ケて今年シはさま〴〵の思ひ付。サそこを負ぬけふの趣向。コリヤ〳〵わいらも皆見て置〳〵。アイ〳〵モ大ィそうな御趣向が。地

早く見たいお石樣。其ノ障子を殘らずさつと明ヶなよさ。手ン〳〵に障子押シ明れば。夕陽まばゆき海原(うなばら)に。浮べる舟の數〻は屋形。屋根舟猪牙(き)ひらた思ひ〳〵の凉ミ舟。秋の木の葉の散しきて流レもあへぬ景色なり。お豐樣アレ見な。アノ屋根舟はおもと樣あちら向たはおもん樣。アノ醫者樣かゑいかと思ふてしなたれて見さもない。コレ〳〵こちらの屋形に身をして居るは一瓢か如在であろ。詞イヤ〳〵ありや白鬼に富士藏しやはいなヲ、イ〳〵と呼とさゞかぬ海の面次第にさげる船續(つゞき)ヲクリさも花。やかに飭り立。色有藝者取リ乘セて。其數四十八艘の揃の舟に船ン頭も揃ひ衣裝の紅絞り。夕日照(てり)そふ龍田川から紅ィは。千(ち)早(はや)振神ミ代もきかぬ遊びく。磯邊の見ン物取ミの噂も時の慰とフシ暫く興(けう)にぞ入ッにける。地かゝる折節取リ次の侍ィ罷出。詞仰付ヶられし藝者のお國唯今是へ參上と。地詞の下に立出る。女藝者のお國とは。假の姿の吾妻野が。心に望ミ有磯海深き思案ンを押シ隱し。キンやつせはうつる髮卷(かたち)。皆樣ン御免ンと座に着ば重忠見るゟ。詞ホ、聞及んだお國。サ、是へ。〳〵と指招(さしまね)けば。態詞(わざと)もしとやかに。詞アイ御屋敷へは初メて上りましたれば。モ何の勝ッ手も存しませぬ皆樣お引廻をと會釋(ゑしやく)フシこほるゝ挨拶(あいさつ)に。詞兼て能人からさ聞及んだ程有ッて。爪はづれの尋常さ。物いひのやはらかさ。イヤモ格別〳〵。地名代の藝か早く見たい。奥の一ト間で所望〳〵。サア皆來れと騷立打連てこそ入にけり。哥世をうしと忍ふ山路の。花もちりしんき難面(つれな)や同じ身に。同じ思ひの片(かた)し貝。詞わつちや深ヵふはたべぬ物を。殿樣の無理じい。家がくる〳〵舞ィますによさ。地座敷をはづす吾妻野が。そつと傍(あた)りを見廻して。詞

ホンニ思へばあぢきない。主シに別カれて早二タ年セ。有ルにあられぬ胸の内。思ひ廻せば廻ハす程。科がなきお身を重忠にむざ〳〵と殺されし。恨めしさ口惜しさ。二世とかはせし夫トの敵。重忠を恨ミんと姿をかへて入リ込ながら思ふに任カせぬ女の身。ヱヽ馬鹿らしい。ならふ事なら。公平様ンや。辨ン慶様ンを見る様な。強い男に生マれてアノ憎い重忠を切ッてやりたいナ。歌梅を命の春さへも。浮世の夢とちり果て。何ンの事やら袖の露又も此世に初ッ櫻。詞ホンニそふじや。女の念ン力岩通すとやら。なんぼ強い重忠でも。夫トを思ふ一チ念力キ食イ付イても此恨ミ晴さいで置カふか。かふいふ事とは露しらず。國にござんすかゝ様が此中の便りにも。久サヽ煩ふと聞イて心元トない。随分ンと養生して。早ふ年ン明キ歸つてくれ待ッて居るとのお文。わしが死だと聞なんしたらお年寄リの嘸力落し。地勤メの身の夫レ程に。サハリ義理立ず共。濟ミそな物と素人心に。思ひなんしよが。勤の中で一ト筋に思ひ込ンだるいとしさは。勿躰ないが死なんした。とゝ様の事も。年寄リなんしたかゝ様マの事も。死で地獄へ追イやられ焔魔様が呵なんしよが。火の車で責られふが。わしや何ン共思やせぬ。不孝者罸當タり。心が鬼に成たのも殿御故じやと了簡ンして。赦ルして下されかゝ様とわつと計リに聲を上前ン後も。フシわかず泣沈む奥は酒宴もたけなはに。ほろ酔機嫌の重忠は鼓。フシ片手に立チ出て。詞ハヽそこに居るは誰レじやと。地いふに惘り。フシ泣顔隠し。詞アイ私でござります。ムヽお國か。何か思ひ有リげな姿。雨をおびたる芙蓉の顔ハテどうも〳〵。最前ンそもじを見初てよりの物思ひ一チ樹の蔭に立寄て。謠一チ河の流を汲酒をいかで

か見捨給ふべき、地フシカヽリサア〳〵どうじやさまじめ成ル。詞ホヽヽヽ初て參つた私お慰のおなぶりか。イヤ〳〵なぶる杯とは勿ッ躰ない。誓文我等首だけ〳〵謠亂れ心の花かづら。かゝる姿は又世にも。類ひ嵐の山櫻。詞手折ッには置カぬとフシ寄リ添ば。地仕濟したりと吾妻野が用意の懷劍拔ト、そばめ、寄んとすれば脇目もふらず。謠不思議や今迄有リつる女〳〵とり〳〵化生の姿を顯はし或は巖に火焰を放ナし。又は虛空に炎をふらし。地と謠の聲と諸共に。重忠やらぬと突ッかゝるを。引はづして突キ飛し。謠惟茂少シも騷がずして惟茂少も騷キ給はず。地又突懸るを腕首捕へ。何故に此狼藉。子細ぬかせと刎退れば吾妻野無念の聲震ひ。詞ヤア何故とは覺有ラふ。そなたの手にかけ殺したる荏柄ノ平太が所緣の者。敵を討タん其爲に藝者と成ッて入リ込だサア〳〵サヽヽヽ勝負〳〵とフシ身をあせる。詞ムヽ荏柄が敵と狙ふからは聞及ぶ大磯の傾城よな。流レの女に似合ざる健氣者。其志にめで。勝負して取ラせん去ながら荏柄平太は大切ッ成ル源家の重寶蟬折レの笛。君ゟ預ケ給ひしを盜マれし不屆キ。賴朝卿御ン怒強く。首討テと有ル上意に任せ家來に言付ケ討タせたり。是重忠が私ならず。己レが罪己を責ムる天下の政道。誰レを恨ミん樣もなし。地尼法師共さまをかへ。跡懇に弔へと。聞キもあへずイヤそれや御卑怯。詞此場に成ッて言譯とは。重忠樣には似合ませぬ。サア尋常に勝負有レと。地いらつてかゝるを身をかはし。ヱヽ面倒なと急所の當テ身。うんとのつけにフシそり返るを。地見向キもやらず。悠々とヲクリ奥のへ一ト間に入リける。地暑き日も暮レてそよ〳〵かほり來る。キン磯吹風のひいやりと。顏に當タつて吾妻野が。

息吹返しフシ漸に人心地。地むつく起て身拵へ奥を目がけて駈入を地傍へに忍ぶ景季が抱留れば悔りし。詞エヽお前は源太様。フシ爰放してと身をもがく。詞サヽヽさつきにからの様子段々おれに忍んで皆聞た。荏柄が敵を討んとは去迚は心中者。其性根を見込だ故むごふされゝばされる程ぞつこん惚た此源太が。そもじへの心中に。重忠を討てやらふ。ムヽスリヤお前が助太刀して。イヤ〳〵手をおろす迄もない。けふの遊興を幸に軍勢を伏置たれば。重忠は網代の魚　きやつさへ殺せば跡は仕安い。頼朝を討亡し天下をせしめる兼ての工夫。おれに靡けば玉の輿　サア〳〵どふじやと手を取ば。ハアテ地重忠さへ討て仕廻ば荏柄様への義理が立故。其跡ではどふなりと。お前の心に随ひませふ。詞ソリヤ眞實かだまてはないかや。何の嘘を申やせふ。夫は近比忝ない。フシそんならちよつとゝ抱付ば。地何とか仕けん吾妻野は。キンフシ手足がた〳〵身を震ひ　詞アレ〳〵〳〵平太様が　地といふ聲に。源太も悔りうろ〳〵眼。吾妻野は怪氣に五躰苦しむ。くもり聲。詞何と云なんす、修羅の妄執晴がたく。再び娑婆へ來なんしたとか。何わつちに恨が有。サア恨が有ならいひなんせと。地詞つ答つ獨言。目の内すはつてすつくと立。哥アラうらめしや腹立や。一人寝る夜の閨の内。ナヲス云かはしたる睦言も。今は恨の飛鳥川。淵は瀬と成キン床の海八苦の浪風忽に　無明の業火無間の炎。思ひの薪身をこがす。娑婆のキン妄執晴さんと。逆立髪も諸共に亂れ心の正躰なく。フシかつぱと倒れ伏轉ぶ。地源太は驚き立寄て。印籠の蘇香圓。柄杓の水を口うつし様々の介抱に。漸

に起キ直リ。茫然と氣抜ケの躰。詞コレ〱氣が付イたか。モ興がつた今の有リ様。猿の死靈でも有まいし。イヱ〱思ひ出すもぞつと仕やんす。ソレ其お前の懐から。荏柄様が出なさつて。わつちにさま〲の恨ミ言。其跡は覺へやせぬと。地いふに源太が猶不審傍りきよろ〱懐を。そつと覗いて。詞ムヽ聞へた〱。荏柄めが殺されし元トの發りは蟬ミ折の笛。其笛が懐。ヱヽスリヤお前イヤサ。其笛がふと。出たらそなたは嘸嬉しかろ。イヱ〱モフ〱今のであいそが盡キた故。平太様の事はふつつりと。思ひ切リます。そんならおれがいふ事を。アイどふ成リ共と。地抱付ク拍子懐へ手を差入レ。引出す笛を引ッたくり。詞ヱヽしぶときめらうめ。此源太が盗ンだ笛を奪取っんとは及ばぬ事と地突飛す手にしがみ付。夫トの命にかへし笛。取リ返さいで置カふかと。思ひ込だる女の一念ンこけつ轉つ争ふ拍子傍の井戸へ投ケ込だり。時に不思義や井の底より。心耳を澄す笛の音とキン倶に燃立ッ焔の中。顯はれ出し。フシ平太が姿。地ハツト驚ロく吾妻野より。源太も仰天ン底氣味悪ルく。迯ケ行がんづか引ッ摑。フシ二三間ン投付クれば。地ほう〱起て夢心地。詞ヤア推參ンなる幽靈めと。地摑ミかゝるをはつたとねめ付ケ詞我を誠の幽靈と思ふかイヤコナたわけ者めが。去年の春鶴ケ岡にて大切ッの笛を盗れ。お預ケの身と成リしを。汝等親子がさま〲の讒言。既に死罪に極マりしを。重忠の情にて命助カり。此下モ屋敷に身を忍べり。勿論ン笛の盗人トは汝といふ事悟れ共。證據なければ某が身の云譯ケも立チがたく。地空しく月日を送クる内。敵を討タんと吾妻野が入リ込しを幸イ。兼てまさかの便りにと。抜ケ道の此から井戸ゟ

思ひ付ィたる重忠の方便にてしめし合せし今の狂言ン。コリヤ見よ笛は我手に入ッたり。一ッ盃參つてよい氣味〳〵ッ笛を盗ミ其上に。フシ及ばぬ謀判を企つる邪非道の人ン非人ン。フシ腕を廻ハせときめ付ヶれば。地さしもの源太も腮喰ィ違ひフシ𤢖れ。果て居たりしが。詞ヱ、殘ン念ンや口惜や。うらぬが方便にはめられし其返報是見よと。地相ィ圖の呼ブ子吹キ立れば。四方のしげみ谷ミより數多の伏セ勢顯はれ出。弟平次眞ッ先がけ、とつと上ヶたる鬨。フシ潮の湧がごとく〳〵ッ地景季いさんでヤア〳〵者共。詞ノリ智慧自慢する重忠め荏柄くるみに討取レと。地下知に隨ふ雜兵共右往左往に押シ寄る、胤長はちつとも臆せず、吾妻野を奥へ追やり。諸肌脱げば肌には着込ミ小手脛當テ。太刀脇狹みつつ立上り。ヤア詞佞ィ人ン一チ味のうづ蟲めら。何萬ン騎有迚も何程の事有ランと切ッて出んとする所に。地一ト間の内より高聲に。詞ヤア〳〵胤長騒ハがれそ秩父の重忠是に有リと。地障子さつと押シ開き。番場ノ忠太が腕ねぢ上。優美の音ン聲爽に。我ヵ遊興の虚を見込ミあざとき方便の梶原が。謀の裏をかき叛逆を見顯はし。討チ取方便見すべしと。地忠太が首を捻切ッて。投込ム一ト間の陣ン太鼓にどんと當りし谺の響手に取ル様に三重へ聞ゆれば、濱手には兼てより約を定めし本田ノ次郎。仕掛ヶし花火は相ィ圖の狼烟天をこがせば沖の方相圖を合ハす責太鼓亂調に打立〳〵。江戸漕出す船は一チ様の揃ひの藝者引キかへて。松明挑灯旗指物。浪にうつろふ有リ様はさもフシ目ざましき風情なり。地悩クりしながら梶原兄弟死物狂ひと駈向ふ。さしつたりと渡り合フシ火花をちらして責戰ふ。地手を碎ィたる働きにさしもの大勢たまり兼。濱邊をさして

迯行所に。沖の方なる兵船ンゟ。キン射かける矢先キは雨あられ。一チ度に倒れる雜兵共フシ算を亂せるごとく〳〵。地梶原兄弟途を失ひうろ付向カふへ荏柄ノ平太。本田ノ次郎が立向ひ取て引ッ敷ク膝の下。フシ一度に繩をかけにより。地重忠しづ〳〵立出給ひ。詞ノリホヽ手柄〳〵。胤長がけふの働ラき。賴朝卿へ言ン上せば御悅喜あらん。繩付キ引ケと先キに立。地智仁勇備の畠山君ミたれば臣シも又。僞りならぬ本田ノ次郎時を荏柄か會稽の。恥辱をすゝぐ水底は。はかり知ラれぬ智慧の海。

第五

キン三浦の沖の揃ひ船方便を。筆に書殘す。地怪を見て怪ざれば怪自ラ破るとかや。出羽ノ國湯殿山は隱れなき高き大山ンにて峯そはだつて谷深カく。梢は雲に埋て岩に碎る瀧の音トフシいと物凄き風情〳〵。朝比奈ノ三郎義秀は。我カ身を鍛ふ武者修業。深山ン幽谷きらひなく足に任カせて登リしが。ほつと草臥立チ留マり。詞扨思ふたより高い山。此山上には地獄有リと世上の取リ沙汰聞キ及ぶ。見屆ぬも比興の至り。地イサせんじやうして地獄の奴ッ原。十王を始メとし獄卒共を取ッてしめ。味方に付ケんと獨言猶山深カくフシ行ク所に。地髮はおどろに角生たる五色キの鬼共顯れ出。手ンでに得物打振〳〵。詞無緣ンの亡者來リたりかゝれ〳〵と追ッ取卷。地大膽不敵の朝比奈は。少しも騷すせゝら笑ひ。詞ホヽ地獄塞げの糟鬼共。目に物見せんと大手を廣げ。地追ッかけ〳〵追廻し取て投ケ出す鬼礫。末ッ世の今に至る迄朝比奈ノ三郎が

フシ地獄破りと名に高し。地獄卒共はたまり兼。叶はぬ赦ルせと逃て行。ヤア見かけに寄ぬ鬼味噌共と。續て駈ヶ出す峙影より。顯はれ出たる異形の人相。童顔鶴髪古木の杖。木の葉衣のいと氣高ヵくフシ羽扇を以ッて差招く。地義秀急ッ度見。詞ヤアちよこざい成ル化物めと地摑かゝればふうわりと大地を離れて虛空に上りにつこと笑てつつ立ば。さしもの朝比奈フシ茫然。さして詠め入地翁りん〳〵たる聲音にて。詞善哉〳〵。某シこそ義經公の近ン臣常陸坊海存ん。我奥州駒形が嶽の岩窟にて。異人ンに仙術を擧得たり。必怪給ふべからず。抑我君義經公蝦夷が嶋へ渡らせ給ひ。嶋〻を切ッなびけ義經大王と恭れ給ふ。猶又韃靼へ押シ渡り切靡んとの御催し。味方の勇士を招ヵん爲我は再び日本へ渡り　世俗の噂を幸に此山に引キ籠り。家來を獄卒に拵へ立。人の剛臆を例見て味方に付ん謀。先キ達て義盛ガ經若君を送り參らせ。地靜御前鈴木が一チ族皆堅固にて蝦夷に至り。御身の上の噂有　同ジ源氏の血筋なれば何卒して招き寄。一ッ方の大將に賴んと義經公の御懇望　今此所へ來り給ふも我仙ン術のなす所急いで蝦夷へ渡り給へと。フシ始終委しき物語。地朝比奈は心解。詞ホヽ扨は聞及ふ海存仙人よな。思ひ寄ぬ義經の情。忝なし去ッながら。父義仲の仇敵梶原を討タぬ內。日本の地は離れがたし。ホヽ夫レにこそ幸イ有。重忠の智謀にて。梶原が謀叛ニ顯はれ今合ッ戰眞ッ最中。地道は遙に隔る共此海存ンが仙術にて。暫シ時に彼地へ伴ナひ申さん。此杖に取リ付給へといふかと思へば諸共に。雲井遙に三重へ上りける。地重忠が計略にて梶原兄弟擒と成レば。景時は一チ味を從へ鎌倉御所に責メ寄スる　重忠義盛住柄

平太所々の持口差堅め喚叫んで責戰ふ必死と定し謀叛の族。息をも繼ずもみ立れば。さしも多勢の鎌倉勢。少しらけて見へたる所に。小山のごとき武者一騎。敵陣か裏切し。顯はれ出るは三郎義秀。コリヤたまらぬと寄手の軍勢。むら〱ぱつと逊やれ。ー(不明)ーもこたへ兼。フシ逊行馬の尾筒を摑み。コリヤ〱と引戻し。地どつと引居乘かゝり數多のー(不明)ーの仇。思ひ知れと首引拔。謀判の棟梁梶原を朝比奈三郎義秀が討捕たりと。呼はれば義盛重忠。荏柄平太海存も。顯はれ出有りし次第を委しく語り。諸士は凱陣朝比奈は。海存諸共義經の。跡を慕ふて急ぎ行。實や異國の果迄も。日本の勇猛隱れなく。キン源氏の末は萬〻歲。五穀豐饒に民榮へ。動ぬ御代こそ目出度けれ

明和七年

庚寅八月十九日

福内鬼外戲作

弓勢智勇湊

弓勢智勇湊

座本　豊竹利太夫

諷サシ いで其比ハ壽永三ン年如月七日。奢る平家を亡さんと。鎌倉の代官として。九郎判官義經公。古今にハル秀し軍立。詞 一チの谷鵯越の逆落し 平家の大敵追落し。勢ひ竹を破がごとく。勝て兜の緒をしめる。其勢都合一チ萬余騎。どつと上ヶたる勝鬨ハ ヲロシ大地に響て。すざまし〻。地 相伴ふ郎等にハ西塔の武藏坊辨慶。江田ノ源藏廣成片岡八郎經春。各爪牙耳目の臣外樣の武士にハ。梶原平三景時ノ奸曲邪智の眥に何がな見出し義經の權威をくぢかん下タ心ノ其外諸軍士卒迄。勞をいかふ勝チ軍サフシ暫く。息を休めける。地 義經仰出さる〻ハ。詞 要害堅固の一チの谷ノ大手の大將兄範賴ノ生田の方ゟ責れ共待設たる平家の大ィ敵。地 愛をせんど〻攴ゆれば中カ〻容易落チまじと。後へ廻ハり 鵯越ゟ。逆落しに責メ寄ャし我カ謀圖に當り。通盛業盛忠度師盛。經俊敦盛を始ノとして平家の一チ門數多討取。十一分ンの味方の勝チも義經が功ならず。是全く旁が身命を惜まざる働き故とフシ功にほこらぬ御ン詞。地 平三景時しや〻り出。詞 平家は殘らず舟に取乘。ちり〴〵に落たれバ味方も船にて追ッ詰〳〵。地 皆殺しの謀 然カるべしとフシしたり顔に相ィ述れば。義經莞爾と打笑給ひ。詞 固兵は迅速を貴ぶ。いかにも景時申通リ

追討んハ理の前なれ共。義經思ふ子細有ルハ。一ト先ッ軍サをまとめたり。先キ達て次信に委細申含たれば。其音信を相待タんと。地 仰もいまだ終らぬ所へ。佐藤三郎兵衞次信家來に箱を取リ持タせ。息キを切ッて駈來り。詞 仰に任せ此次信落行ク平家の勢イに紛れ。小船に乘ッて待ッ所に。御寶守護の軍ン勢共込乘〳〵。地 押し出す。油斷を見濟し切リちらし。詞 三種の神器の其一トつ。神璽の御箱と平家の重寶 錦の旗を奪ひ取ッて候と。地 二ツの箱を恭々敷。御ン前に並ぶれば。御座を立ッてから手水 手づから御箱を取リ納め。詞 義經が眼鏡に違ハず 天晴成ル次信が働き滿足せり。ヤア〳〵辨慶。事しげきに取リ紛キれ肝心の事延引せり。逆落しの案ン內せし獵人の熊王を早く是へ呼出せ。地 ハット答へて武藏坊夫レ〳〵と呼ヒつくにぞ。フシ 千里の駒の伯樂に藍染どてらに革袴。手にハ半弓山刀。騏尾に月キの輪熊王が遙。下カつて蹲る。地 義經御覽し。詞 ホヽ熊王近カふ〳〵と招かせ給ひ。案內しらぬ嶮岨の山道 汝シなくんハ踏迷ひ 義經始メ多くの命失ん 健氣の働き其上エに。賤しき家業に似合ぬ人品 今ン日ヨリ武士に取リ立召シ使ハん。古郷ハ丹生の山田とやら。則山田を名字とし。義經が一チ字を許し。山田ノ三郎義久と號べしソレ〳〵兩人シ。着替の物具取。せよと。仰の下ヨリ廣成經春。御召シ替の鎧兜太刀熊王に給ければ。時の面目身の冥加。ハヽヽハット飛しさり フシ 悅びいさむ計リ也。地 梶原平三せゝら笑ひ。詞 ハヽ侍イに事を欠で獵人の成リ上り此後チハ藥喰ヒ 野猪の後ロ足。熊の膽も誂へたいと。地 いハれて義久こたへ兼
詞 梶原殿ハ御意の通。拙者ハ元トが獵人なれハ。熊膽は勿論。佞人ンの生膽が御用なら。何時でもくり

拈て進上せんと。云ィ返せハ辨慶引ッ取。詞 漁父で有ラふが獵人で有ふが。器量を見出すが大將の眼鏡渭濱に釣せし太公望は王者の師と成ル。犬を屠し樊噲は漢王を助ケし例。さミするハ愚者の腸。構ふな義久。相ィ手になるな三郎と。立チ板と水辨慶に。云伏せられて景時。顔をしかめて閉口す。地 然カる所へ梶原平次景高。敵の首を提ていかつがましく駈來り。詞 某濱手の戰ひに。さしも鬼ニ神と呼れたる。能登守教經を討チ取。地 實檢に備へ候と首を御前にフシ差置ケハ。地 大將つく〴〵御ゥ覽有リ。詞 能登ノ守教經は武勇とこひ智謀といひ。萬夫不當の英雄なれハ。生死の場所も知レつらん。主上を始メ建禮門院恙なく落行クを。守護の方便こそ有べけれ。踏ミ留マつておめ〳〵と。討チ死すべき謂なし。地 旁いがゞ思はるゝと仰に次信進ミ出。詞 去ル室山千島なんど。所々の軍サの躰たらく。群を秀し能登殿の振ル廻イ。地 類を以ッて集る習ひ。附キ添家の子郎等にも。一ッ騎當千ンの兵多し。然カるに續く勢ィもなくやミ〳〵と討死とハ。甚以て不審の一トつ。得と御吟味然カるべしといハせも果ず。詞 だまれ次信。此景高が手柄を惜ミ。色々の讒言但梶原ハ教リ經を。得討ッまいと思ふか。此首を贋といふ。證據有ルならいへ聞ふ。ホヽいふ迄もなく其首に。正眞といふ證據のないが則チ證據。贋首を以ッて我君を欺かんとハ腹の皮。ヤア推參成一チ言シ。地 其腮切ッて切リ提んと面シ色筋をいら立テて。太刀を手に懸進寄ル。次信も詰メ掛〳〵。スハ事こそフシと見へけれハ。地 アレまづめよと大將の。ハル 詞に隨ふ江田片岡。上意なるハと押シ隔フシ双方を宥れハ。地 にがり切ッて父景時。詞 ハヽヽ、なが〳〵とむだ詮義より。此首が疑しくハヾ生ヶ捕共

を呼ヒ出して見するなら。忽眞僞分るべし。ソレ呼出せとせき立テハ。ヤア麁忽く景時。落行ク敵の其中に。踏ミ留つて手痛く働ラき。生ケ捕るヽ程の者なれバ。何ッれも平家無二の忠臣ン。譬贋首く迚も有リやうにいふべきや。フシ若シ又汝ジ。敵の爲に生ケ捕ラれ。引出されて問るヽ時味方の方便を有リやうに、白ク狀する所存ン成ルや。地近カ比以て覺束なし。疑ハしき此首ながら平家の大將討チ死と。稱させる味方の強ミ。夫レ故詮義は遂ね共。詞褒美の沙汰にハ及ぶまじ。地此旨急度心得よと理非明白なる一チ言に。ハル何と返ン答しかな顔。平次も閉口。高名と。思ふはフシ却て恥の種地イサ凱陣と御大將フシしづ〳〵御座を龍頭。雲を起して諸軍ン勢。一チ度に蹴立ッる砂煙。武庫山嵐に飜翻とハル數の。白ラ旗吹靡く、源氏の威風末ヱ永く。草木も偃。ハル六十餘州動ぬ。御代こそ三重ゆヽしけれ。二上リ哥春の夜に契りぞたへん。ハル十寸鏡。如月過キて。けふを。しらまし。ナヲス昨日ハけふの。物語リ。平大納言時忠卿の御ン娘。卿の君と聞へしハ深窓の内に傅れ。月キ雪花の翫び。ゆふに詫しき雲の上。地殿ン上人の交りも引キかへ梓弓取リの、源家の大將九郎太夫義經公のハル北の方と。長地武家の行義の角菱も流石に殘る御所育和らかに吹ッ春風に。庭に盛カりの。櫻花姿に恥てちら〳〵と。フシ散に色香や增らん。地お傍女中が取リ々に。詞いつにないお姫樣のうき〳〵したお顔持。お琴もちつともお休ミ遊ばせ追ッ付殿樣もお入リの筈。御供には大方カノ。色男の山田殿初ッ音殿ハ嘸嬉しかろア、コレしげミ殿めつそふなお姫樣のお傍しやれいの。何のわしが三郎殿に譬心が有ッた迚。アノきつとした山田殿。そんな事がと地けんによ

ない顔ハ上氣にお座敷の。ない虀捻るがお定り。則チ惚た印シく。地卿の君も御氣嫌能。詞イヤ隱しやんな玄つて居る。此中祇園詣での折から。幕の內から見て置イた山田三郎。田舍育チとは見へぬ。尋常なよい侍イ。初ッ音とハ丁とよい比。お願ひ申シて自ラが媒。コレ皆の者。後方我カ君お入リの時。どふぞ世話して逢せてやりや。地したが余マりざハ付イて堅い兵部に悟られまいぞ。いつも君のお越シなけふハ取リ分待チ急る其譯ハ。詞此如月の初メつかたゞ義經樣に思ハれ參らせ。此舘へ來てモフ二タ月余り。地お通ひなさる度〻に。終に一チ度の御情に預りし事もなふ。お傍に添寢するといふ名計リ。堅くろしい閨の內どふも心の濟メやらず。問も恥しどふせふとく〳〵思ふ心のもつれ。思ひにしづ〻果ふかつとさま〴〵託申せしに。詞先帝都を開き給ふ折から。置キ忘れ結ふ內侍所の神鏡。父上の守リ奉りましませバ。聟引キ手として義經樣へお渡し有ルべき契約成ルに。今迄渡し給ハぬハ若シ疑ひ心もましますか。神シ鏡を得ぬ內ハ。むさと心ハ赦されず。夫レ故枕ハかはさぬときつとしたハ武家の風。地夫レ故に父上へ每イ日チ〳〵お願ひ申シ。けふハ自ラが舘で御鏡を渡し給ふ約束。今宵がほんの夫婦の堅め皆悅コんでたもいのと。わつと笑ひは袖の內フシ恥カしそふに見へ給ふ。詞扨も〳〵上〻樣といふ物ハ。御辛抱の强い物。そんなら是迄お氣の浮カぬも御心。地今夜がほんの喜見城お相伴ハ。初ッ音殿。詞あやかり者じやドレ耳引カふア、コレ。何シぼ姬君樣がお呑ミ込でも。四角四面シな侍イ氣質。マどふいふてゞ有ロふやらエ、氣の細い事計リ。侍イの堅いといふハ。とつと昔シの事。今時の男ハのゞこちから何シとぞ云イかける

と。いやといふのは一人リもない。地堅い顔程ずる〳〵。お前もはづんだずる〳〵。詞そんならどふぞ。皆寄ッて。夫レは氣遣ひちつ共ない。いやといはふがいふまいが。こちらが寄ッて合點さす。ちつ共案ンじる事はないと。地女子同士の傍輩は睦じいのもフシ戀なれや。地裏門ンロに高カヽと。詞交りなしの生ぶしの粉。地長カい引キ聲短い羽織淺黄頭巾も小利口な。一ッ荷に荷ふ石臼の廻ハる洛中町ヽへ。詞御評判の生ぶしの挽賣。お買なされフシと賣聲に。地夫レヽいつもの挽キ粉賣呼ビ込ンで何ぞ面白い事いはして聞カふじや有ルまいか。ヲヽお姫樣のお慰と。男日照の婢共。とつかはおりてフシ小門ンロ詞コレ挽賣。ふしも有リたけ買てやる共かはり。お姫樣のお慰。芝居咄しが聞たいと地ぐるりと取卷婢共。詞コレハ〳〵お得意の女中樣方。毎度申ス事ながら。正眞ンの正銘極上無類。交りなしの生ふしの粉。此ふしの妙といつぱ。第一チロ中をさはやかにし先ッ。歯の艶を出す事黒繻子黒純黒綸子。三十日の青の群烏。草紙の鳥毛やつこらさ。九郎助九郎兵衛九郎左衛門。海士の日燒に始抹な巨燵。人ン形遣ひの黒燒にも。いつかな〳〵叶ナはぬ色艶此ふしを用ユる女中は先ッ。よい男を早く持ッ。しかも氣立チは和らかで外の女は見向キもせず。女房次第に。くる〳〵とコレ。此臼も同然ンに。三下リ君と我レとは今挽キ臼よ。離れぬ中カに粉が出來たハヽヽとフシしやべりける。地表使が手を突て。詞姫君樣に御用有リと。雜掌鳴ル川丹下殿。只今是へと手を突ケバ。地ソリヤ意地惡い丹下つら又何ンのかのと憎て口。見付ケぬ内にふしの粉やちやつと〳〵といふ内に。早次キの間の足音トにうろ〳〵うろ付ク黄昏の薄くらがりの

椽ンの下顔に蜘の巣目にほこりにがり切ッたる頬癖ハ。時忠卿の雜掌鳴川丹下。フシ上下モため付ヶ打通る。地卿の君しこやかに。詞珍らしや丹下今宵父御彌お越シ遊ばすこの。おしらせの使イで有ロイヤ拙ッ者只今參りしハ。少ト密〻に申シ上度キ事有ッて。我君にも知ラせず押シて參ン上。是も我ヵ君姫君を御大切ッの余マり。より〳〵噂承ハれバ。此舘へお入リ有てヵ。義經こ打こけて。枕もかハし給ぬよしイヤサお隱し有ルなよつく〳〵存ておる。スリヤ義經に嫌ハれたこ申ス物。女の一チ分ン立ぬこいふて。此上が御ざらふか。ア、お痛ハしやこ存るから。色々こ思案ンを廻クらし。今ン日拙ッ者が參つた心ハ。お前を嫌ふ義經。憎さも憎し此方ヵ突キ放し。彼レに負ぬ大名へ御縁ン付キがよい面當テ。其大名こいふハ、梶原平次景高殿。親父平三景時殿ハ。頼朝公の大出頭。立ふこ伏セふこ儘な相イ手。景高を聟に取レハ、父君のお爲もよし。嫌ハれた恥も雪ぎ。三方四方よい事だらけ。ナ申爰がお前の魂の居所。色白ロにやハ〳〵こ優しう見へる男は。皆うぬ惚で誠がない。少ッこにがミ走つてこハい様なが當世はやる。ノウ初ッ音。そふじやないか。サア姫君樣。拙シ者が思案ンにお付キなされ。應こさへおつしれバ。直ゲ様拙者が梶原殿へ。ナ申〳〵こ。地我得手へ乘セても乘ラぬ卿の君。返ン事も無益皆の者。こちへこ奥へ入給ふ。地姆共もよい氣味こ挨拶もなくざハ〳〵〳〵。初て初音も立ッて行袖を扣ヵへて。詞コレ待ッてくんな初音女良。此中も祇園で色々こ口説ても。こかくびん〳〵刎廻る。ア、人ハそふした物ぢやないぞよ。いつも〳〵久サしい物ぢやが。我レに。おれが惚レれたのハ。昨日やけふの事かいやい。十四五の時分から。

むつちりとした腰付。テモ扱もマア二三ッ年もしたら。ア、よい女房に成ルしやあろ。ア、どふぞおれが手にかけて。開元がしてやりたいと。侍ィの有ルまじは北野清水祇園さま戀の願ひに願ッかけて細長カふ惚レて居るに。むごいぞよ／＼とフシ抱キ付クを振放し。詞ア、申お嗜なされませ。人の不行義も呵そふな年ばいで。轉業も程が有ル。お館に居る内も。毎晩／＼私が部屋へ來てしやら／＼姫君樣のお供して此館へ移つてから。厄病の神ミ拂ふて。ア、嬉しやと思ふて居るに。付ィて廻ハつてしミしつこい此上無躰なさるゝと。とゝ樣に告げますぞへ。ム、告ケるコリヤ面白い。兵部が知ッたら白ラ化に貰ておれが女房にする。折角よい思案ッしても。いふ事聞カぬ姫君は男に振ラれてアノ通リ。そさまも男に振レれぬ中。おれと談合しめるがよい。幸ィ傍りに人トもなし。ちよつと愛でと。地引たがへ横に寢かけるフシ横槌天窓。詞ア、あたうるさい愛放して。ヱ、誰レもないかと地身をあせり揉合ッ拍子燭臺ばつたり。詞コリヤ有リ難いまつくら闇。地燭臺迄が廻り者。詞モフかふつかまへたら放サしやせぬ。コレ／＼まだ見せて落付カす物が有ル。どつこい／＼迯ゲる迚迯ガす物かと。地片手にハ帶。片手にハ懐から出すフシ鼻紙袋口開く間に椽の下。體ハ見せぬ思案ッのふしの粉鼻の先キ。ぱつと扇の風に連レハアクッサミ地くつさめしても氣も付ガず。詞コレ／＼此樣に一ト切レもハクッサミ。喰ぬ内からハアクッサミ。ヤどつこい迯ケまい／＼。ハテめんよふなハクッサミ。心ッ中見せるこの記請。これでハ憎ふハ有ルまいがなハク、ッサミハテ。めんよふなむしやらやたらにハクッサミハテめんよふな。ヲ、聞へた。是は憎に姫君が

おれを識つてハクツサミ〳〵〳〵コリヤ 地 たまらぬと天窓をかゝへクツサミ〳〵 嚏ぶ間に手を振リ拂ひ。迯るも現たわいの丹下。口を抑ばつたふしの粉屋小蔭へ忍ぶ心の一チ物女中の聲、時忠卿の御ン入リと、聞て悔り鳴川が這入ル次の間奥の間か。姆引キ連卿の君ヲクリ出向ひ給ふ間もなく。地 平大納言時忠卿親子の中の隔なく。略衣ながらに入リ來る。跡に附キ添原田兵部。内侍所の御箱恭ミ敷ク捧持チ。上檀の床に直し置キ遙。扣さつて畏る。詞 ホヽ此程ハ逢ハざりし姫。堅固の躰先ツハ安堵 先ン日か内侍所の神鏡渡しくれよと毎イ度の願カひ。則今宵持せたり義經未越サれずや。イヤまだお入リハ有ラね共。今宵の様子今朝程か申シし上置イたれバ。最早お入に間も有ルまい。ヲヽ兵部 今朝からそなたも老人ンのいかい太義。次へいて休足仕や。ハア是は〳〵有難いお詞。日比のお願ひ相叶ナひ姫君様にハ嘸お悦び。堀川殿へも右キの様子重チて使イを立テ申さんと。地 兵部ハ次へ立上る疊に落チし封じ文、當テ名は胸にきつくりときしる襖を押シ明ケてフシさあらぬ躰イにて入にける。地 九郎判官義經と 武名ハ四海の果迄も。鬼神ミのごとくおぢ恐るゝ。妾は都の引拔キ風ヲクリ忍びの、御供山田ノ三郎、フシ小門口か入り給ふ 地 コハ珍らしゝ時忠卿。詞 兼て約せし内イ侍所。今宵お渡し有ランとの卿の君か知せ故 今晝か此館で貴卿のお越待チ受クべき筈の所。遲參の段ハ幾重にも。何ンの〳〵。一チの谷の合ツ戰勝利といへど軍慮に隙なき御ン身の事。いさゝか無禮と存シ申さず。イサ契約の神寶御受納有レと。地 捧て渡す寶の御箱 ハツと恐れミ義經公押シ戴き〳〵 詞 ヤア三郎、此御寶暫ラく汝シに預ケ置ク。大切に守護仕ツれ。イザ時忠

卿一ト間にて打くつろいで御物語り。ソレ女共九献の用意。地イサ先ツお入と打連て、フシ一ト間の内に入給ふ。地跡に義久寶の御箱、元トの所へ押シ直し座に着隙有ルやなし。キン早咲キたがる室の梅、香を慕ひ來る鶯の、初音ハ長カ柄持チながら拔ケて。來事ハ來ながらも。胸ハさき〲。時キならぬ顔ハ紅葉の下タこがれいつそ儘よと立チ寄レどフシ差付ケ云ハん詞さへ。是幸イの替銚子　酒を加勢の力ラ草　深草燃の筒茶碗是も色故無息キ吞ミ。詞ア、術な。是でも醉た氣に成レバ。どふやら胸が居つて氣が強ふ成ッた樣な　顔計がくハつ〲として、脊からヲ、寒。ヲ、醉ッた〲地醉ッたふりしてフシ抱キ付ク。地三郎恂り飛退て詞ヤ是は〲初音殿、餘ッ程酒に醉機嫌。此義久は大事の役目。ぢやらくらなされな。サア〲奥へと地につこともせぬ皺面顔、すんとした程猶キンよい男、詞ホ、、、ヲ、アノ片くろしい顔わいナ　私ぢや酒に醉たかいナ。醉たによつて爰へ來て。アノナ〲エ、。つんともふ。アノ少トお前にナお尋申事が有ル。ム、お尋なさる事と有レバ。何成リと承ハらん。がそふ傍へ寄ラず共。まちつとそちらへ。サ、、何とでござるヲ、何ぢやいな。人トに物を聞クにぶ躾けな。遠いから聞ク物かいな。アノ〲ヲ、夫レミ。あの掛ケ物の鴛鴦ハ、どふして二つおりますぞ。されバ。鴛鴦の契りなどゝ申せバ、大方番夫婦でかなござろ。ム、二つ居る故夫婦ぢやな。そんならお前とわたしとたつた二人リ。かふして居るを人トが見たら女夫ぢやといふぢや有ロかいな。サアそふ見へては拙ッ者が迷惑。お尋子の事も夫レ切リなら。最早勝ッ手へ御出と、地押退る手に取付イて。詞ソリヤ余ンりぢや三郎樣。地さつきにからの私が胸、云イ兼るのを

大がいハ。推量してくれたがよい。詞そふいふつらいお心なら。よもや知ッてゞ有ルまいけれど 地 我ヵ君のお供してお出なさるる度毎に。キン襖の透間障子から。覗く指窓ひそ／＼も。聞コへる様に云ィかけて。こちら向ヵすを樂しミに。顔合すればバ。恥しく思ふ人ト程。詞 數いハでの山の。岩躑躅色に出つゝ。傍輩に。なぶらるゝのが嬉しうて合ぬ。内から心でハ。一生連添ッ殿御しやと樂んで居る。わたしがフシ心。ちつとハ不便ンと思ひやり可愛といふて下さんせ。キンかたい計リが侍ィか色も情もしるをこそ誠の武士と。フシいふわいなヱ、ナ申コレなあと。心一ッぱい云ィたさも胸のもや／＼身はわな／＼。道おぼこを顯はせり。詞 ヱ、田舎者と思ふて大がいにおなぶりなされ。拙ッ者左様なしだらくな事ハずんど不得手。地 お退キなされと振リ放す。詞 イヱ／＼女の口から恥しい。よく／＼の事なればこそ 是程いふを其様に疑ひ深いもよいかげん。わしや何ぼでものきやせぬ。／＼／＼と。地 しがミ付ィたるキン亂れ髪。さしもに猛き武士もつなぎ留メたる上下の。角トもやハらぐ戀の道。奥からばら／＼娟共。詞 そふしや／＼初ッ音殿。此上ヱに嫌はれては娟仲ヵ間が一チ分立タぬ。地 お姫様も御合點なリや。天井拔ヶのお前の戀。詞 アノ園でしつぼりと。いやでも應でも連レて行。是は迷惑マアこ宵ハ。イヤ／＼ならぬノシ枝折リ殿手を放ナすまい。ヱ、初ッ音殿何うぢ／＼。どこなと持ッて引釣んせ。コレ／＼夫レハ無躰ィ千萬ンマア／＼妥を、いやならぬ。地 お前の手柄ハ一チの谷。嶮岨の山道是ハ又戀の山路の案ン内ハ。こちらが軍ン勢惣がゝり。色は女の謀火花をちらして連レて行。地 始終見濟し鳴川丹下。傍り窺ひ拔キ足差足 床に

飾し内侍所取んとかゝる後方。いつの間にかは黒裝束面を隱せし曲者が。丹下が首筋摑投。御寶小
脇に引たがへフシ飛がごとくにかけり行。地丹下はほう〳〵起上り。詞南無。三寶こつちの工は皆す
かたん。ヨイ〳〵此落度は二人の奴原。地夫よ〳〵と心に點き大聲上。詞神鏡見へさせ給ハぬぞ
出合給へと呼ハれバ。一間の内方御大將追取刀に原田兵部。コハ〳〵いかにと呆るゝ計。三郎初
音ハ出もやらず。鳴川猶も聲高く。詞御寶を守護したる三郎が。爰に居ぬは必定きやつが仕業。地イ
デ一詮義と襖引明。詞ヤア相盜ハ娵初音と。二人を兩手に引摺出し。詞サア眞直に白狀せよと。
地きめ付られて兩人ハ。身の誤りに返答も。フシ泣方外の事ぞなき。地兵部ハ娘をぐつと睨付詞
ヤイ娘。此ざまハ何事。人々の手前。兵部が面へ泥をぬる倅が心一つで。あつたら敷侍迄。捨さ
せる不屆者。倅ハ元由有者の子。譯は日比云聞す。某とは義理有中。血を分ぬ程猶不便と。似
合の縁も有かしと。思ひし甲斐も此場の時宜。エヽ徒者。憎いやつと。地拳振上丁〳〵。打
親の身は慈悲の杖。打るゝ此身は厭ませぬ。義理有中と知りながら。ほんのとゝ樣同前にお慈悲に
あまへて一日も。御孝行もせぬ其上に。こんな苦勞をかけまする。とゝ樣赦して下さんせ。御寶の
紛失も三郎樣に科ハない。皆わたしがさした事わたしを殺して盜賊共。不義者共名を付て三郎樣の身
の難義。お赦しなされて下さんせとわつと計に。泣沈。地覺悟極て義久が刀逆手に取直す。
詞ヤア犬死するか狼狽者と。地仰に三郎振上。詞大切の御寶。紛失せしは我落度。縛り首にも合、

べき體我君の御ン情。切ッ腹願カひ奉ッると。地又取リ直すを、詞ヤア汝が腹何ン百何千切ッたりとて、寶の有リ所知ルべきか。ミ寶の盗賊いづくに隱レ忍ぶ共。天地の間タハ放ナれまじ龜六ヵ足を隱して狐獺の難ンは遁る共。猛虎來タつて全身を食バ。防所なかるべしと。眞ッ其ごく纔成謀計にて竊隱れて汝シ等が。狐獺の難ンハ遁カる共。我カ猛虎の勢にて隱遁レるゝ全ン身ンの。平家の一チ門討亡さバ。三種の神シ寶一ッ時に。取返さんハ手裏に有リ。地一チの谷の合ッ戰ゟ見所有ル汝が所存。不義何どゝハさゝいの義。詞其罪を惡んで其人を惡まずとは古人の詞。今死る命を存命賓の詮義。夫レ迄ハ主でなし家來でなし。早追ッ立よ兩人と。地人を憐む名將の。寛仁大度の御仁ン心フシ御座を。立ッて入給ふ。地二人リはむつと有リ難さ。兵部も心に御跡を。伏シ拜〳〵フシ忝ケ涙押シ包ミ。地鳴川丹下ゑかみ頰。詞ヤア得手勝ッ手な御ン捌義經公の詞ハさも有レ。不義せし者を助ケてハ掟が立タぬ二人共に首ぶち放す。地觀念ひろげと立チ上る。詞ム、成ル程丹下殿の仰の通リ。併シ二人を討タバまだ一人リ成敗する者が有ル。ム、そりや何者を。ホ其相イ手はコレ此一ッ通。ヤア。其一通ハ。ハ、ミ丹下殿何をうろ〳〵。コレ御らふじ。初音樣まいる御存シゟ。上ヱに名ハ書ね共。ちらと見置イた此中カの。名を顯ハさバ今一チ人成イ敗致す者も御ざらふ。サア二人共に覺悟せよ。儕レ等と共に此相イ人三人ならべて縛り首。中カの當テ名がよき證跡と。封を切ラんと手をかける詞ア、コレ〳〵ハテ扨老人シハ氣が短い。ハア、よく〳〵思ひ廻らせバ。一旦大將の御詞もごくもいかゞ。其一ッ通を開いたら。一人リならず二人リ三人シ。人トの損る事を。とやかくいふも

いらざる殺生。命助ケて追ッ拂ふがよからふぞや有ルまいか。ア、イヤ〳〵京家の武士ハなまぬるきといハれんも無念ンの至り。とかく此一ッ通の相イ人めもア、コレサ〳〵去リ迚は兵部殿人トハ情の下タで立ノ何事も隱密の。仕置キが且は身の祈禱。ム、左樣ならば二人共追ッ拂ふても。武士の道は立チませふか。立ッ共〳〵我レ等が受ヶ合ウ。コリヤヤイ二人リの者。丹下殿の詞故命を助追ッ拂ふ。隨分と身を大事に。地必ズ見捨て。詞見捨ふが見捨まいが。親子でなければ構はぬ事。早行キおらふと地にらむ目も。フシくらむハ親の闇深し隨分御無事も口の內。ゑほ〳〵出る後かげ見送る兵部も一ト間のフシ內。ヲクリ涙ぬぐひに入リにける。地一人殘つて鳴川丹下。詞こちの思ふ樣にハ行カぬ。いつそ此どさくさ紛れ卿の君を盜ミ取リ。梶原殿へ手渡しせんと。フシかけ行向カふへ以前ンの商人。立ふさがつてコリヤどこへ。詞ヤアちよこざいな素丁稚め。息キの根留んと拔ヌ打をどつこい合點と身をかはし。地刀もぎ取リ頭轉倒只一ト討チと振リ上れバ。手並にこりし鳴川が。フシほう〳〵表へ迯て行。地奥口見廻ハし尻引ッからげ。もぎ取刀ハさい究竟奥を目がけて駈出す曲セ者待テと原田兵部。ずつと出れバ振リ返りはつしり切リ込腕首捕へ。詞ヤア主馬判官盛久が一ッ子。小金ン吾武里。と云イ聞カす子細有リせかずと地待テと突放す。詞ム、我本ンの名を知、上ハ包ムに及ばず。父盛リ久が不興を受ヶ此度の御ン供にはづれしに。地御一門は無念ンの敗北。詞其根元成ル義經を一ト太刀恨父の勘ン當赦されんと姿を略し入込だり。見遁して通せバよし。留ノ立せバ眞ッ二つサ、、、何ンと、。フシ氣をせいたり。詞ホ、健氣〳〵。我レ迚も平家の侍イ何とぞ九

郎を討取んと。心は逸れど悟き大將。地 折を窺ふ其内に。主君ながらも情なきハ時忠卿二位殿の御兄。平家一門の其内に二番と下らぬ御身にて。おめ〳〵都を落留り。詞 義經に媚諂ひ只一人の姫君迄仇敵の義經が妻となし剰。内侍所の神鏡迄。聟引手として渡されし。長袖ながらも武勇の人と。一門の人々にも心を置れ賜ひし身も。時世に連て心迄主君は臆し給ふ共。いつかな昔は忘れぬ。某。詞 一天の君への忠節と盗取たる内侍所。帝へ捧奉れ。九郎が首は今宵の内。義經とへ討取ば殘る奴原何程の事有ん。地 奥の酒宴もゑづまつたり跡は我に任せ置。早く〳〵と手に渡せバ。詞 ハア、君ミたらねバ臣ミ足驚入たる兵部の心。地 詞に隨ひ某ハ御寶を守奉り、西海へ立越ん必せいて仕損ずまい。ヲ、サ合點。早急げと奥と。口とへ フシ 別るヽ二人。詞 ヤア〳〵兩人暫く待と。地 聲をかけて時忠卿。フシ ゑづ〳〵と立出給ひ。最前よりの物語り某殘らず立聞せり。ホ、賴もしき二人が所存。其心底を見る上ハ。我存念を云聞さん。詞 過つる壽永二年の春。木曾の冠者義仲謀叛を企。宇治。勢田の邊迄打登ると聞へしかバ。廿餘年が其間榮耀榮花に日を送り武道に疎き平家の一門。一戰にも及ばヽこそ。取物も取あへず主上を始大臣以下。内裏を出んと。フシ 立騒げば。地 思ひがけなき官女達。今も天地の覆るやとおめき。叫んで迯出る。玉座を見れバ情なや内侍所御鏡。取忘れ給ひけん。日の本の神寶、やハか。賊徒に渡すまじ。跡を追付奉らんと。取納る間もなく。洛外洛中源氏の軍兵攝政。攝家ハいふに及バず一門の舘ミ打入〳〵。亂妨し。地

既に御殿に火をかくれバ。花麗を盡せし一門の屋形の結講。一時の煙余煙ハ天にミち〳〵て日比の威勢も夢幻。秦の始皇の安房宮。楚人の一炬に燒失し斯やと計の口惜さ。密に其場を遁出北嵯峨の別莊に身を隱し。須磨の内裏へ馳参らんと窺ふ内に是非もなや。烈しき九郎が軍配に鵯越を眞下り。逆落しに懸落され。爰にも須磨の月落て又西海の浪の上。玉躰を供奉し二位殿女院漂給ふ勿躰なや。詞何卒して源氏へ近寄り。心を赦させ變をせうじ。内外方責るならバ軍慮に賢義經成共やハか計らで有べきと。地姫を望を幸に縁組せしもたよらん術。詞二つにハ平家嫡々の時忠と縁を組しと聞へなバ。頼朝九郎を疑ひて兄弟不和を取結バん。其元乱れて末々の家人郎等心〳〵。互に疑念をせうじさせ其虚に乘て討亡し平氏を再び世に立ん。地不便成ハ我娘君の為とハ云ながら。下﨟匹夫同前の。けやけき武士に身を穢させ。嘸や恨ん赦してくれ是皆。帝へ我忠節我子の事も。我身の事も。ちつ共厭ハぬ構ハぬ〳〵。コリヤ二人が魂見抜し故。我心底を打明すと。地始て顯ハす丈夫の骨柄。實も尼公の御兄。平關白と仇名して世に時めきしも。フシ理り〳〵。地兩人はつと頭を下。詞ハヽかゝるゆゝ敷御心底承ハつて大悦至極去りながら。地三種の神器の其一つ。義經へ渡し給ひしハ。御所存ばし候か。詞ヤア愚〳〵。娘を捨て義經を。討取ん我存念。うかつに御寶手渡しせんや。汝が奪ひし内侍所ハ眞赤な贋物。誠の寶ハ肌身も放さず時忠が懐中せりと。錦に包御鏡取出し給へハ詞ホヽ夫を見出さん為計。夫成兵部と心を合せ武里と名乘りし

ハ偽。義經公の家臣。鈴木ノ三郎重成が弟。龜井ノ六郎重淸。サア誠の神ン鏡お渡し有レと。地いふにさゑもの時忠卿驚ロく。フシ襖押シ開き。地立チ出給ふ義經公。詞ヤア驚ロかれそ時忠卿。我レ卿の君に戀慕せしハ貴卿守護し奉ッらる内イ侍所を取ん爲。一ッ子を餌に某を謀からん御ン工。乘ッたる躰イにて内侍所。今宵やす〳〵渡されしハ子細ぞ有ランと思ひし故。兩人に示し合セ誠の寶有リ所。今顯ハれし上エからハ地イサ速にお渡し有レと。方便に乘ッて方便とし。裏の裏行ク大將の。智惠の程こそ。フシ類ひなき。地淚ながらに卿の君過キ去リ給ひし母上の。譬いづくへ行ク迚も。夫婦は義理の有ル物ぞ必ス不義な氣を持ッなと。常〻の御敎訓。我君樣に思ハれて兩夫にハまミへじと心に誓の我夫を。殺そふといふ無得心むごい心を飜し。コレ御寶渡して睦じう緣を。結んで給ハれと。取リ付給ふを。打拂ラひ。無念に凝たる大音聲。詞ヱ丶かく迄心を碎しに不忠不義の老ぼれ故。本意も達ッせぬ。奇怪やと。地兵部を立蹴にはつたと蹴すへ。詞時忠が一チ命只今限り。地切て〳〵切リ死と。太刀拔キき持ッてかけ向ふ。透さず兵部かいくゞり刀持ッ手に手を添て。ぐつと突ッ込我カ脇腹。人〻是ハと仰天ンに。さしもの時忠はつと計リ。兵部ハ。苦ルしき目を開き。主君の顏を。見上見下し。淚をはら〳〵と流し。詞不忠不義の某故御本ン意も遂られずかく手詰メに及びしハ主を責ル。人畜共不忠者思ンゑらず。嘸につくしと思さんが兵部が。不忠は不忠に似て。却てフシ君への忠義ぞや。詞日比我強き御氣質思ひ立ッたる一チ念ハ飜さぬ御氣質。地痛ハしや北の方今ハの際に某を近カく召サれ。詞心にかゝるハ姬の身の上エ。父御は烈しき心バへ。稚いな手鹽に

かけし其方。姫が身の上頼むぞと。本フシ涙ながらの御遺言。ハ、御氣遣イ遊バすな某が付キ添いかなる高位の御方へも御緣ン組取結び。初孫の御顏ばせ。兵部が冥途へ土産。必お心殘されなど。地中シ上れば嬉しげににこ〳〵として御臨終御心根の痛ハしさ。夫レ〳〵某お傍も放ナれず月日の立ッもとけしなく。我身の老イも打忘スれ。お育中ュ其内にはからぬ去年ンの都落チ。詞不思議にも義經公姫君を御懇望ヤレ嬉しや有リ難や。公家と武家とハ隔れど。地淸和天皇の末流。氏も器量も。類なき天晴の御ン聟君。先キ立給ふ北の方嘸や未來の御悅びと。思ふに違ふ主君ンの御所存ン。詞只一人ンの御子を捨。義經公を討チ亡さん御工ミ。内イ大臣ン父子を始メとし。忠度。知盛。敎盛なんど。世に耀し人々さへ。只一ッ戰ンに云イがひなく。地落城有リしも是天命イ。かく迄盡キたる平家の御運。君一人の御力ラに再興は思ひも寄ラず。詞所詮ン我命を捨御大將へ打明て。御寶さへ差上ケなバ。姫君共御中カよく。親しき聟君。舅君。御ン身に恙ハ有ルまいと我身にかへて御企。御大將へ打明ケしも。御命が助ケたい計リ。地とハ云イながら箇程に凝たる御心。やミ〳〵水の泡と成リしハ。此兵部め故。詞逆礫共思さんが。是皆主君の大イ切から。コレ御心を飜され命を全ふなしてたべ。御主君達チの御行ク末。頼ミ上るハ御大將と。地忠義に凝ッたる血の涙。刀を抜ケバ。息キ絕て。きへても消ぬ忠心の誠ハ此世にフシ留まりける。地姫ハ死骸に取縋りスヱ前ン後正体イ。泣沈む。心を不便ンと義經公。御目に余マる感淚に。血氣强氣の六郎も目を摺こするフシ計ん。地流石氣强き時忠卿。兵部が誠肝にしみ。どつかと座して。詞ハア、誤マつたり〳〵。我一人の力ラ

にて源家の一族討亡し再び榮へ見ん物と。思ひ込だる我慢心。現在の娘を餌に計る／＼と思ひしハ。却て先の術に乘る。地入道の積惡非道積り／＼て廿餘年。さも花敷粧ひも。朝の露ときへ失せしも。是。天運のなす所。詞一命を助んと。身を捨し忠義の最期。ホヽ過分なぞよ。此御寶を義經へ。渡すが思ひ留る印。心迷ひを晴てくれ。此上ハ時忠をいヶ様の罪にもしづめ。地姫が身の上いつ迄も。見捨てばし給ハるなと。ヱヽ始てしほる親心。義經御鏡押戴き／＼。詞ハヽ必氣遣し給ふな都にそハ立源氏の軍兵一擧に計ん時忠卿。蜀姜維が一計に三堅を害せしにおさ／＼劣ぬ大丈夫。其家にあらずして武士も及バぬ心の勇氣。詞かゝる烈しき貴卿の姫。武士たる者の妻成ぞや二世も三世も見捨ハせし去りながら。地未穩ならぬ世の中緣に連て義經が。依怙贔負といハれんも口惜し。詞事納る迄能登の國。鈴が岬へ御越有。軍事なく納らバ。地院の御氣色某がよきに計ひ奉らん。詞ヤア／＼六郎。汝は。卿の君を伴ひ直様館へ立歸れ。イサ時忠卿御立と。地打連出る聟舅。昨日の仇ハ卿の君。今宵ぞ結ぶ妻定め悅び有バ父上の遠き別れの愁有。先立兵部ハ忠有。義有仁有大將。勇有龜井。出るも同じ。有明の月の都の。堀川の。御所へとこそハ三重出給ふ。地明方近き。表門人目を包頰かぶり。うそ／＼窺ふ向ふ。同じ出立の竊頭巾。家來も同じ忍び足。夫と互に。忠太殿か。詞示し合した首尾は。さん／＼皆義經がよい事だらけ。内侍所ハ手に入ずと卿の君を盜出し貴殿に渡す我等が工面。ムヽ成程／＼卿の君を奪取主人へ見せるがマア當分の口

塞ぎ我等が顔出しにくい。コリヤ〳〵家來共隨分密に塀をのれと。地ひそやく内に門の。くれつたり開く表門。女中乘物しと〳〵と姆婢附くに、出るハスハヤ卿の君、詞ソレ奪取レと詞の下、物をもいハず腰刀。めい〳〵拔持チ振廻せバ。のふ悲しやと姆共ちり〴〵逃行青侍イ。乘物捨て陸尺七尺大勝に。フシ命大事と飛び行。地番場鳴川したり顔。うまい〳〵骨折ラらず濡手で粟。搗立の卿の君主人の賞翫サア〳〵急げと。大勢イ寄て乘物を。上ゲても〳〵大盤石。扨も重いお姫樣。是ハ憚に太肉。おゐどの重モさと思はるゝ。位イの高いお公家の娘。喰ひぶとりと打。フシ笑ひ。地肩腰入レて舁上る。乘物の戸を。めり〳〵ぐハつたり。踏シざかつたる龜井ノ六郎。詞かふ有ラふと思ふた故姫君と相輿に窮屈な目をして來たもうぬらには相應な。此重ケ淸が出來合イ分シ別顔は隱せど鳴ル川丹下主人シの姫を賣リ物とハ。天罰知ラぬ畜生侍イ御身がはりの此若カ衆。サアどこへ成リ共連て行。女房にしと若衆にしと心シ中にハうぬらが體シ指切。腕もぎ首引キ拔。地覺悟さんせと。フシひやうまづく。地龜井と聞ッ忠太が悔ッり。ちうの聲も上カらばこそ。フシこそ〳〵隱るゝ門の蔭。地痿ぬ丹下が破レかぶれ。ヤアほざき過た小悴レめ。ぶち居よと下知に連レ。地畏つたと殘りし家來。一度におめいて三重へ戰しが、地捕たとかゝるを踏退、蹴倒し、姫を脊にしつかと負。めつほうやたらに踏飛せば。コリヤたまらぬと家來共命有ての武士奉公旦那お先キへ皆こいと。ちり〴〵にこそ迯ゲて行。邊を窺ひ鳴川丹下。詞丁稚やらぬと切リかく、る。かいくゞつてはつたと蹴倒し。頭ひやつしやり鐵跟。文彌むざん鳴川丹下が最期目玉飛出て死て

げり。地見て居る番場が。身ハ。わな〳〵脚腰立ず四つ這に。ほう〳〵逃るを目早き龜井。シヤ曲者と引捕へ見合す顔ハ。ヤアお身ハ番場忠太。あぢな所にへち廻からハ。此狼藉も梶原が計ひな。サア眞直においやれと。地きめ付られて。詞ア、コレ〳〵麁相召るな是には段〻様子の有事。アノ拙者が此前におつたハ。ア、ヲ、夫〳〵。平家都を開くさいへ共。あそこや爰に隠れかゞといか成術計られず。密に是を詮義せよと。洛中を忍の目附。只今の騒動。若や貴殿に弱みも付ば。助太刀せんと最前から門の蔭から窺ひしに。ハア、天晴の御働き。余りの事で某迄。胸ハだく〳〵。目ハくら〳〵。若や御目にかゝつたら。お禮の何のと却て迷惑。夫故そつと歸らふと遠慮ハふ沙汰の我等が寸志。必悪ふ聞ておくれな。又もや敵が來る共。某が居るからハ鬼に鐵棒氣遣なし。ヱ、あハれ取て返せかし。日比の力量太刀打早業龜井殿のお目にかけ。此疑ひを晴さん物。殘念至極と詞數。フシいふ程藁の。むえやくえや武士。地態六郎乘た顔。詞そふとハ存せず慮外申した。御覧のごとく乘物も微塵になれば堀川迄。かち路でハお供も成まいといふて拙者が肩輿でハ。若も敵が取り巻バ御身の上も氣遣なり。近比御苦勞千萬ながら。武士と見込で忠太殿貴殿の脊へ負參らせ堀川御所迄。ヤア何と　拙者に姫を負と　ム、不得心なら此方も今の云譯不得心。骨を挫で。ア、コレ氣の短い。いや様武士ハ相互。フシ左様ならバと差出す脊中。地イサ御召しと重淸が抱乘たる卿の君。義經公の北の方。お輿ゆらすなえとやかにお先振り出す六郎が。武勇は源氏の立道具振れさ〳〵振り

亂す　大前髮の大鳥毛　敵にお徒狹箱。一ッ騎が千騎跡押ッへ。乘物がハりの番場ノ忠太　不肖〳〵の勇ミ足しつさんしさ〳〵　彼在原の豆男。夫レハ戀故我レは又。これい〳〵と一筋に我身思へバかちはだし　引ッ添六郎鬼一ト口。露と消たい忠太が思ひ。晴行心卿の君　妹脊盡せぬ蓬萊山　萬ン々歳も朽ぬ名ハ　實に功有ル龜井六郎堀川御前へと勇ミ行。其名も秀し忠臣ンやと武勇ハ今に耀げり。

第二

地ヲンド名にしおハゞ遲くも暮ん日の岡は。京と大津の間タにて。往來多き街道も夜ルハ人ト音稀にしてヲクリ西に。傾く月キ影は梢に隔つ夏木立。山子規。音信ていとゞ淋しきフシ坂道に。地つく〳〵立ッたすゝけ顔。詞コリヤ小鷹よ。日が暮れぬ中チから此樣に出ばつて居てもねつからよい鳥も來ぬな。サイヤイ夕べも朝サ迄待チぼふけ。今ン夜ハ何でもはした仕事でもせにや。お頭が叉わめゝであろ。マヽ同じ事なら年寄りか女なら仕事が仕よい。ヤコレわしハ生マれが京じやさかい此商賣に物云イが移らぬ。わがみハ大阪のしくじり者聲ハいつかし力ラハ強し。から終出ッ世して追ッ付ヶ追剝の三ン段目語りに成ルるであろ。何いふやらおれじやてゝほんのむちやしやわいの。ゑらひこハい聲でおどそふと思ふと。下手聲が出て一トつも向カふへ答へぬ。ア又お頭ハきつい物ンしや。きめの利やうせりふ廻しのよさ。隨分貴樣もおれも精出して。どいつぞうせたらやつて見よとフシ咄し半バハ半ン合羽大津脚絆の三ン度笠。唐犬

額の上釣に、哥お月様サへ思はせぶりよのん〳〵とせい。見へつ隠れつ雲の中。詞コレ〳〵待んせ酒代せふわい。早ふ出して下さんせ。ヲヽ酒代せふわい遅いとどたま張いがめてゐらひめに合ハすぞや。ヤハヽヽ何のこつたいとつぴよもない。お江戸の水戸の水飲で育た男だよ。うぬらが様なこつぱ野良にゆたぶらるゝ様な野良ではないわい咄しの様な泥坊めと。地額から出る巻キ舌に追剝共ハ氣を呑マれ詞イヤこいつハ〳〵ゑらひたんなやつだやな。そして何じや口早に云ィおる故こつちのこれい聲が儕レが耳へハいらぬか。ヲヽそふだや〳〵其様におどすない〳〵。わしらも男こそ此様にひがいすに見ゆれ共。皆追ィ剝の立テ物だや。われが聲がいつかい故せりふがあちらこちらに成ルはい。わりやおいらがこれふれないか。何シだ強くれないおらかこれい物は。銕火箸の温飩か竹箒のあへ物か四文シ錢のばり〳〵か。鐵炮の玉の座禪豆かまだもこれい物ハ柳原の切リ石飯か百が繻絆に壹貫が糊くつ付ケたら強かんべいおきやがれ咄しの様なと。地めつたやたらの太ィ平樂口早舌早足早に飛がフシどくに急ぎ行。地跡は二人が顔見合せ。詞テモまあたんのゑらひ奴ッと地つぶやく折リから見る目の長八。つくの團助二人連レ。詞ヲヽ小鷹よ屋尻よ早ふ出たな。おいら二人も此張場へ出かけ。コレ見い。此酒樽かたげた親仁めを引ッ剝だ。マア是で一ッ盃せうサア二人リながらやりかけい。ヲヽ機緣直しにもぢりかけよと。地四人シぐるりと道チ中にさいつ押ッへつけたら飲。詞ていりんやい〳〵まつときり〳〵歩きやいのと地在所廻クりの哥比丘尼夜道を急ぐ弟子小尼。跡にさがるをフシ引ッ立て。地くるを見る台詞コリヤ、

待〳〵。幸ィのお比丘肴のない酒でどんな飲メぬ。ちよつと間ィをしてくれんかい。ヱヽ是はしたり。お前方も物好キな。此暗いのにあぢな所で酒カもり。私タしや在所を廻つて。あそこや爰のちよんの間でつい日が暮レて氣ハ急けど。ホヽミ又商ナひが出來まいでもない。ドレちよつとお間しよかいナ。ホヽコリヤ大分シ面白ロなつた。サアお比丘へコツト暗ラふて知レねどこぼれる〳〵。サアお間の上ゲよかいな。ドレ〳〵お戴き申そ。アヽコレ〳〵酒計ッも胸づかへていきにくい何ぞ肴をお比丘様シ。アイといふ合聲揃へ。二上り比丘尼哥申そな〳〵よい事申そな。わしが悴レは今年シ四つで來年五つ袴着でござんす。こはくの羽織に正サ宗の脇差。たりん〳〵。ま一トつたりん何が又たりん袴がたりん袴一トつ計リはさゝの古ル袴をおん直ナしておつ着サてそこでかゝめも利口なやつで納シ戸へはいつて鏡を追ッ立て紅手付ケて。下タにや白ロ無垢中カ着にや黄無垢上ヱには茶縮緬の小袖。花の帽子に花塗笠よそこでさゝめが呵果た顔で。三シ尺程な涎をだらりと流してかゝよ〳〵よんべの事ハしやれ事。今朝ハおどけしや堪忍しゆてたもれ。赦ルしてたもれ。互ィ違ひに納マる御代じや。詞ハヽヨウ〳〵出來た〳〵できた次ィ手に躶になれ。ヱヽ何じや躶カに。ホヽヽめつそふな。わしは一人リお前方は四人。夫レにマア此中で。何とマア躶にホヽミヲヽ恥し。ヱヽ〳〵いま〳〵しい。風藥リの蜜柑見る様などたまでうぬが一ト切レも喰る物カ。小言はかずと脱ギおれと。地惣ど寄ッて帯ぐる〳〵。是がほんの。文彌山中で。剝れる尼が丸躶あたまかゝへてフシ迯て行。地跡に皆々打笑ひ又人ト音を待ッ所へ。雲突様な大男。道具ヤ頭巾まぶかに引かぶりのつか〳〵と。

歩み行。地こなたの松の名げミム。詞ヤイ待ミと呼懸ヶて。地ばら〳〵出る追剥共ミ中に取巻聲ミに
詞酒代せふはい置て行キおれ。イヤ酒代せふわい置て行ヶと地いへ共更に聞ヵぬふり見返りもせず行過ク
る。ヱ、のぶとい野良め目に物見せんと見る目の長八。抓かゝるを禍投續てかゝる屋尻リの久六小鷹
の八ッ八づくの團助三人一所ドッコイやらぬと取リ付を何ンの苦もなくころ〳〵〳〵前ン後左右へ頭顛
倒ッ腰をさすつてほう〳〵起キ立四人ン一度に顔見合せ。詞ヤ思ひの外に手強いやつばらして仕舞ッと
拔キ放せバ。地クッ〳〵〳〵と吹出し頭巾を脱だ顔ハお頭。詞ヤアコリヤ玄海の灘右衛様大キな鹿相と一ッ
同に。地拔イたる刀の銹よりも我ヵ身の銹の面ン目なさ。納り兼し元トの鞘。手持ぶ沙汰に見へにける、詞
ハ、イヤハヤ揃ひも揃ふうつそり共。どいつもこいつも毎イ日毎晩ン方々で挊がせてもろくな仕事は仕お
らず。埒の明ヵぬはした仕事ッ仕内が悪ルいか内證でくすねるか何にもせよ向ふへ廻り。わいらが仕内
の鹽梅を見てこまそと思ひ立た此趣向。働きのないこそ道理去リ迚ハせりふの青さ。力ラの弱さ夫レ
では出ッ世は得せまい少ト土性骨に入レたがよいわい。ア、イヤお頭こんたに逢てや今の様にひどいめに
逢たれど相手が弱けりや何の苦もなくいつでも見事に行キますわい。お頭と立テづくハほんの海月の胤
向ヵひ。大黒柱を相イ手にして腕押シするも同し事ニむごふ負ヶたは我レミが尤かと存られるノフ見る目
よ。屋尻よそふ名やないか。ヲイヤイ。いかにも小鷹がいふ通りニ向ヵふから來る者の足音トで強ヨいか
弱イか金が。有ルかすかかんびんかといふ事此見る目の長八がやる物名やなけれどお頭ハッ一ッ盃喰ふたニ

是がほんの珍事ちうよう。弘法にも筆の誤り。木から落たる去程にお頭の今の手際ハ論な證據土性骨にアイタ、、、地五人が肩腰伊丹諸白。瓢簞酒と出かけふと。面目砂を打振ひしよげに成た計ん。詞ヤイ／＼そふ狼狽る故仕損ずる。惣じて盗賊の働きも軍術に違なく弱きを見て侮どらす強き迚恐れず。前を見てハ後を計右と見せてハ左へかゝるコリヤ早碁將棊でも相撲でも博奕でも同じ道理。此理屈を呑込ねば。異國の盗跖我朝の彼熊坂の長範などゝいふ様な大な株にはなられぬわい。得手臆病な奴ハ。夜道がこはく思ふ故足音に實を入て騒ぬ躰でのつか／＼。又落付た奴ハ。何氣なくあるく故結句弱そふに見ゆる物。夫ハ夫是ハ是と目利してかゝるが功者。そんな未熟な事じやいかぬ。まつと稲荷の鳥居を越ずバろくな仕事は出來まい。地といハれてばつたがへらず口。詞近年は何しても長とはれバ半が出るいま／＼しいへこたりまん目利違で投らりよより。地手を濡さぬ味い仕事お頭是見て下されと木陰に隠せし高札取出し。詞皆も定て見たであろ洛中洛外ハいふに及ハず在所迄辻に立此高札。義經様からお觸の趣安德天皇様が借金に詰つた欠落をして行衞が知ぬ。見付次第注進すれば御褒美をやろといふ此高札と地咄す内な灘右衞門高札取てとつくと見。詞ム、コリヤ耳よりな事ができた。わいらも隨分かんばれ／＼。したが爰にハおれがゐれバ皆ハこれから手分して追分邊と山科邊りを捜いで見い。ホ、そんならお頭そふ仕ましよ地サア皆こいと立。別れ思ひ／＼に歩み行。地跡にハ玄海只一人胴な膽の太羅字に。己が名さへすり火燧。

胸にハ天下九呑ミの。たばこすぱ〳〵フシくゆらする。地京の方からすた〳〵と箱振リかたげ來かゝつて。夫レと見るなどつかとおろし。詞お頭爰にか。ヲヽ新米の九藏か。見れバずつえリ重モたい箱。よい働キが有そふな。サイノ小刀ナ細工ぢや埒明カぬと。分ン別の根を堀川御所。義經様のお館にハ。お能が有ル迚上を下。騒を見込ンで宵紛キれ。寶藏へ忍ヒ込これ見やしやれ。えつかりいがめた千両箱余ンり氣味のよい仕事。早ふお頭に見せたさに。直クに爰迄一ト走リ。ムヽソリヤ近ン年にない能イ仕事。シテそちらの其箱バ。サイノ。此箱の上ハ書キにハ。平家の重寶錦の簱と書イて有ルと。云イつゝ蓋を押シ開き差出せバ。手に取ッてとつくと改メ。詞此簱を盗だ心は。サレバイノ。金計リ取ッて來るとッ跡の詮ン義ハこちとらが仲カ間内へ尻がくる。そこで我等が思ひ付。此簱を取からハ。扨ハ平家の殘ン黨ならんと。詮義が外へこけていて。こちとらが仲カ間内へ尻の來ぬ用心ン。此方に有ッてハ犬に小判ン。役に立タぬ此簱。いつそ焼て仕廻ふと立を押サヘて詞ムヽ〳〵新米の働きにハ。去リ迚ハ氣が付イた。ハテ扨わりや大分仕上ケた。コリヤ此簱ハおれが預る。そちハ早く宿へ歸り。其金をくろめて置ケ。地ヲット合點まつかせと。九藏は金箱振リかたげ。フシ今來し道へ急ぎ行。地やゝ更渡る短夜の。月西山に入跡ハ。目ざすも知ラぬ。五月闇。地次第に近付懸ケ聲の。ヤツサコリヤサ〳〵〳〵〳〵〳〵。體ハひつたり汗えつく。息を計リに雲助共。駕をどつさり突キおろし互イに吐息ホツトつき。詞ヤイ棒組ミ高が女の足なれバモフ追ッ付氣遣イない。ヲイヤイ草津からだんだ走リ。何さして追着ぞい。あのけんさいをまいたから

は。駕の着がへハこつちの物。夫たが此がきめはとふするぞい。サレバ尋常な男のがき。宮川町へ連レていて。治郎種に賣ッてやれバ。五貫ンや拾貫が物ハ慥、サアこい〳〵と振リかたげ舁出すを地棒ばなつかんで引戻せば。二人恟ッりすかし見て。詞コリヤ何を仕上るぞい。ヲヽ何するとハおれを知ラぬか玄ン海の灘右衞門といふや。凡日ッ本ン國中に。大働きでも。小仕事でも。皆おれが支配する。盗人のお頭夫やハやい。ケアわいらが仕事の運上よこせ。ヤコイツハ〳〵〳〵。傷寒の熱に犯され。新しい譫言つくかい。泥坊の惣代。うぬハいつ願ヵふて運ン上せんさく。コリヤヤイ出來合の駕舁かと思ふたらあてが違ふ。雲助の正銘。瘤の九郎助。鬼殺しの勘兵衞といふてや。少トけむッたい男だによ。屁の中ッ落見る様なこつぱ野良めが出あがつて。太ィ平樂をほざき上る。何の事ンだ咄しの様な。たゝんで仕廻ッと双方な。息キ杖振上打ヶかゝるを。兩手につかんで。詞ムヽヽヽハヽヽヽ。モフ遺言は夫レ切か。コリヤヤイ。此灘右衞門様が見込ンでハ。どふしても迯夫やせぬ。観念ンせよと地突飛せバ。二人一度にたぢ〳〵〳〵轉ても。打てもいとハゞこそ。めつた無上の亡目打。兩方の手に引摑。エヽ面倒ゥなとかいくゝり。ぐつと一ト夫め手足をもがき。フシ目玉飛出て死てけり。詞エヽ口程にもないもろい奴ッらと。地死骸を谷へ蹴飛し〳〵。探り寄ッて駕の簾、明ヶて引出す稚ナ子ハ。がんぢからみに猿轡。ほどけばわつと泣出すを。何思ひけん灘右衞門。大だら引キ抜キ稚ナ子の。細首宙に打落し。駕の着がへ、と諸共に。抓集てと一さんに何國共なく走リ行。詞駕の衆やい。待ッてたもいのふ。駕の者やいと地聲か

ぎり。走つまづく旅の女。涙片手に氣も消ヽ。詞是程せいてきたからハ。よもや遠くハ行ッまいし。ヱヽかふいふ事と知ッたなら。夜道も行クまい。辻駕も借ルまい物。夫トが預リの。天にも地にもかへぬあの子に。もしもの事が有ッたなら。何とせふどふせふぞ。何國迄も追かけんと。地足ハ血みどろちが〳〵と心一ぱい。蹈ミえめ〳〵。駈出す。向ふに件の駕ばつたり。狼狽立退足元ト。以前ンの血に蹈ミすべりかつぱとこけて。手に當る。死骸取リ上星明カリ。すかし探れば覺の手障リ。ハア。ハツト計リに氣も散亂。物をも云ハす立ッつ居つ。かけ出しては立留マり轉ては起キ。起ては轉。死骸を抱キえめ〳〵身を震ハし。歯を喰えバり胸先へ。クウ〳〵〳〵クツト差込ム積痞髪も。心も亂れ亂れて眼もすはり。唇の色もかハりて七轉八倒。フシうんと計リに倒れ伏ス。地かヽる時しも。ハイ〳〵〳〵。鐵棒の音高カ挑灯。佐藤三郎兵衛次信供人引ぐし通がけ。夫レと見るが挑灯照させ歩寄。詞旅の女と見へて悶絶の躰イ。殊に稚ナき者の死骸ハいぶかしやさ。地家來に云イ付ン印籠の。藥あたへつ呼生ケつ。さま〴〵の介抱に。息吹キ返し。目を開けバ。詞コリヤ〳〵女察る所此躰イハ。此前にて稚き者を。盗賊に殺されしな。ヱ不便ンの次第。有様に様子語れと問懸ケられ。地漸心や付イたりけん。いと苦ルしげなる聲音にて。詞アヽとなた様かハ存ませぬが辱ナいお尋子。自は由有ル者の妻成ルが。夫の行衞を尋ん迚心せかるヽ此夜道。大事の〳〵。稚子を此所にて殺され。夫トに逢ッて何とマア。地どふ云譯が成ル物ぞ。心の内の悲しさつらさ。推量して下さんせとわつと計に泣えづめバ。心なき身の下部迄。落る涙に挑灯の。火影も曇る計く。次信も

目をしばたゝき。詞ホ、痛はしき有樣。身は義經の御內。佐藤次信といふ者。此處に追剝有て徘徊する條。事の實否を糺せよと。義經公の命を受。只今吟味に來りし所。エ、今一足早くばかくやみ〳〵とは討すまじ殘念至極。コリャ女。して其打たる者。若手がゝりに成べき事はなかりしやと地尋る內に女は懷劍拔放す。其手を次信しつかと取。ヤア狼狽たるか女。ムウ察する所稚き者を殺され。夫に逢て云譯なければ。生てゐられぬと覺悟極しも斷ながら。最前其方が申を聞ば、由有者の妻成よし。おめ〳〵と子を殺され。倶に死れば夫へ云譯立か。サ夫は。さ何と。ハアかくいふ物の道理〳〵。誠女の一念有ば。地の底。雲の上迄も。敵を討ふといふ氣はなく近比以て未練千萬。サイノ。いか程にあせる共。高が女の一人旅。敵の行衞も知ざれば。ア、イヤ夫れは猶僻事。逃隱るゝ共天地の間。此次信が後見して急度敵を討してやらふ。ヤコレ〳〵そつ共氣づかふ事なかれ。詞家來共。幸の其駕隨分勞り館へ伴へ。地サア〳〵早ふと無理やりに。乘ぬ心を是非なくも館を　ユリさして三重へいざなひ行。地爰も都の。片邊り。大原の里の荒家に世渡る業も白波の。名も玄海の灘右衞門迚盜賊の張本有。洛中洛外近國他國。手下の者を手分して。追剝夜盜晝鳶我家に有て上はまへを。鳥なき里の蝙蝠や晝を夜成高鼾。諺にいふ盜人のフシ晝寢とこそはしられたり、地表口かあたふたと立歸るは下手の九藏お頭今歸りました。といふ聲寢耳に目を覺し。欠ま、じくら。詞ホ、九藏戻つたか。ナント首尾はどふだぞやい。サイノお頭の云付の通り堀川の御所へ

行て侍衆を頼ミ。委細の譯を申して所書を渡したれバ追付檢使が見へる筈。シタガ夕べ働いた屋敷故イヤモ餘程氣味たか悪ふごんした。ホヽソリヤいかひ大義で有ッた。扨大分まんが直つたわい。祝ひに一ッ盃もじろかい。ホヽ淸左なら我等も氣有。二三升取ッて來ましよ。夫レは度々大義じやな。次手に肴も買ッてこい。ヲツト合點じや樽引提 地口に使ハる身ハ輕く。酒屋をさしてフシ買イに行。地かゝる折節表の方。義經の近臣佐藤三郎兵衛次信。フシ家來引連峙傳ひ。詞コリヤ〳〵者共。其乘物ハあれ成ル木影に暫ラく待ナと。地云付やつてしづ〳〵と。門口に歩ミ寄。詞盗賊の張本ン玄海ノ灘右衛門とハ此家成ルか。注進によつて義經の家臣ン佐藤次信來つたりと。地呼ハる聲に灘右衛門ゆるぎ出。詞コレハ〳〵遠路所御苦勞千萬ン。イサ先ッあれへと 地フシ内へ伴ひ。地座に着ケば佐藤次信。詞何か注進の事有リ迚手下の者を差越し。子細いかにと尋れバ。ハイヤ別ッ義でもござりませぬ。我レ等は玄海ノ灘右衛門と申してハモ自慢ぢやないが。日ッ本ンの國に隱レない追剝のお頭殿でごんすてや。夕べ日の岡峠に寄リ合て。手下の奴ッ等がぬかすにハ。安德天皇のお行衛が知レぬと引ッ捕へて出たなら御褒美をやるといふ此高札と咄しの後チ。駕舁共が味い仕事犬骨折ッて高が雲助。何の苦もなく〳〵しめ殺し。駕の着替を取んとすればがきめが邪摩に成ル故に。すつぱりとばらして仕舞イ。跡で着替エを改ムればコレ此通り。見馴ぬ裝束。若シ天皇では有ルまいかと心付キ。首を持ッて歸り。御見ン分が請たさに御檢使を願ひましたと。地風呂敷取出し。首に添エたる御衣冠次信が前に差置ケバ。地手に取リ上て見改メ。詞ムヽ外カに類なき哀龍の御衣金ン

巾子の冠。稚けれ共氣高き此首。コリヤ紛ひなき安徳帝の御首。エヽ淺間しや勿躰なや。一天の君
と生れさせ給ひし。果報はいみじくましませ共。地悪逆無道の平家の縁に　繫れさせ給ふ故うき御
艱難の其上に。盗賊の手にかゝり。あへなき御最期。日。月も地に落たるかと非歎の涙にくれ居
たり　地灘右衛門はしたり顔。詞本阿彌のお目利で天皇の首に極れば。コリヤ大な堀り出し仕事　御
褒美宜しう願上ます。ヲヽ最前から窺ひ見るに天晴丈夫の汝が骨柄。盗賊さすあたら者。義經公へ申
上御家來に取立んが奉公ハ望なきやと。地裏問バ灘右衛門。詞お譽に預り近比迷惑　此商賣も能い様
な物の當りはつれの有水物。殊に世間ハひすらこく錢ハ安し米ハ高し、たゞ取でも合ふ物じやご
んせぬお世話なさつて下さるなら。いつそ外聞捨て侍にでも成りませふかい。したが我らハ生れ付て
氣の詰るきつい嫌ひ。酒と轉奕さへお免しなら御奉公致しましよ。ムヽ然らバ其旨申上　追て御
沙汰有べしと。地首と御衣とを押包み家來に持せ立出れバ。近比御苦勞千萬と　門送りして灘右
衛門元の住家に入にけり。地次信ハ傍に立寄。乗物是へと舁出させ。戸を押明れば旅の女。
涙ながらに立出て。地不思議の御縁でさま〴〵の御世話になり。お禮ハ詞につくされず。あてど
なき敵の行衛手がゝり迚も有ざれバ。いつそ死せて下されと又さめ〴〵と　泣居たる。詞アヽ是き
な〳〵と案じまい。敵ハ知レたと地いふ聲に。夫ハ何國に嬉しやと。屹相かはれバ。詞イヤせいて
ハ事を仕損する。こなたの敵ハ此家の主灘右衛門といふ盗賊　併ながらきやつも去者うかつには討

れまい。欺すに手なし地是かう／＼と囁ば。女ハりゝ敷ク身拵へ小褄引キ上立上る。詞ホヽ健氣く頼もしゝ。我等も急の主用有レバ。助ケ太刀共得申さぬ敵を討ッて其後チハ。めで度逢ん。地さらバぞと。家來引連レ次信ヲクリハ心殘して立歸る。地跡に女ハ心せき。フシ用意の一ト腰携て。門ト口フシさん／＼打たゝけば。地何事ならんと灘右衞門ずつと出るを拜ミ打。我子の敵と切付るを身をかハせバ。又切懸ケる腕首つかミ。互ィに見合す顔と顔。詞ヤそちハ奥梓の前。ヤア我カ夫マ敎經樣と。地思ひ懸クなき悔クりにフシ猶も疑ひ。晴やらず。地誰レ有ふ平家の一チ門多き中にも。能登守敎經迚討チ物取ッてハ鬼神ンのごく。弓矢取ッては精兵の手利くと。世に恐れしお前が。かふしたお身に成リ下り給ふとハ。どふいふ譯ぞ聞カせてと淚ながらに尋れバ。詞ホヽ此敎經が身を隱し。盜賊と成リ下りし樣子ハ追ッて。先ッ聞キ度ハ。我子の敵と切懸ケしハ。心元トなき悴レが身の上。敎若カはドヽどふしたゞと地問ハれてわつと泣出しスヱテ暫し。詞もなかりしが。漸に顔を上ケ。去年ンの都落の折から思ふ子細の有なれバ。其方は敎若を連レ母方のよるべ有。三河の國に身を忍べと仰に任カせあまさがる。鄙の住居の詑しさと。夫トを慕ふ悲しさも。我子一人リを力ラ草。敎若を守育再び世にも出るならバ。是こそ平家の大將軍ン能登ノ守敎經の公達と傳せん思ふを頼ミ。我身を忘スれ養育もきのふと立チけふと暮レ。早六歲の其內に一ノ谷をも追落され。一門の人ミハ西ィ海の浪の上。能登ノ守敎經ハ一チの谷にて討死共。又ハお行衞知レぬ共取りミの世の噂。聞クたび事の悲しさつらさ。せめて京迄いたならバお行衞も知レんかと敎若連レて。忍び出なら

ハぬ道の旅労れ。夕べ暮方漸と。草津の宿に着たれど都の雲のなつかしく。一夜も千秋よと心せき。親子一所に乗駕の着替の包に心を懸。駕昇共の悪工わらハを跡に捨置て　敎若一人連て行日の岡といふ峠で。切れたわいのと跡云さし。又も涙に伏沈。咄しの内に敎經ハ。扨ハ夕べ日の岡にて殺したる稚子ハ。敎若で有たか。ハア死したり殘念やと。拳を握り牙をかみ身を震ハして。地 男泣。女房ハ猶せき上〳〵。お前へ云譯立ざれバ自害と覺悟極しを。大信に諌られ敵の助言も我子の爲。敵が討たい計りに。生ながらへて居たわいの。せめてもの念はらし。我子の敵が討してほしい。手がゝり有なら聞してたべと縋り歎ハ。詞 ヲヽ其敵の有所いふて聞さん。ナニお前が知てござんすなら。サア〳〵早ふ討して下さんせ〳〵。ヲヽせくも理り。夕べ日の岡峠にて。闇の夜の暗紛れ。我子と知ず手に懸たハ。此敎經ぢやハやい。地 こらへてくれ女房と　聞妻は狂氣のごとく胸づくしにしがみ付。詞 エヽお前ハ〳〵〳〵〳〵。何ぼ闇でも暗がりでも。血を分た我子の體。一年二年逢ぬ迚手障りでも知る筈ぢやハいな〳〵。天にも地にもたつた一人の　大事の〳〵敎若を。我手に懸て殺すとハ。よもや本性ではござんすまい。コレ〳〵氣が違ふたか敎經殿。そしてマア有ふ事か平家の大將共呼るゝお身が。御一門の難義を見捨。命惜さの切取強盗此有樣は何事ぞ。地 いかに御運の末ぢや迚日比にも似ぬふがいなさ。かふいふさもしい御所存故敎若を手にかけたも。お前の心一つから。詞 コレ〳〵まどふて返しや〳〵。敎若戻しや〳〵。地 返せ戻せ

とむゑやぶり付キ。前ン後不覺に取亂すハ斷せめて哀れ〳〵。詞ホ、其恨尤も〳〵。此敎經が身を捨て盜賊と成リ其上に敎若を手に懸ケし樣子を見よ。地 とずんど立チ。押シ入の戸を引キ明ケれバ。恭ヽ敷玉座を儲け。いとも氣高カき安德帝思ひ懸なき女房ハ。ハツト計リにフシカヽリ飛退て平伏すれバ。敎經も倶に敬ひ奉ツる。地 やゝ有て威儀を改。詞ホ、我カ謀を明カさざれバ恨ムも道理。驚も尤至極。平家世を取ツて廿餘年ン。入道殿の不善ン天の咎ハ理の當前ン。大イ家の倒るゝハ一チ木の力ラにて救ひがたしと古人ンの金ン言。我朝の聖人ンと呼れたる重盛さへ。力ラ及バず身を亡す。地 ましてや德なき敎經が力ラにて。及ぶべしとハ思ハね共。同じく死す共潔く是こそ平家の何某が最期の軍サと。末ツ代に傳へんこそ本意ならめ。然カるに一チ門の人トヽは榮花にほこり武を忘れ。詩歌管絃に身をゆだぬ。惰弱の振舞夫レ故に。富士川の戰ひハ。水鳥の羽音トに驚き叡山ンに責下タる木曾義仲が軍ン勢に。聞おぢして都をひらく。ヱ、末ツ代の笑ひ種。一の谷に籠りしをシヤ小賢き義經が。鵯越の逆落し臆病不覺の味方の勢。誰レ支る者もなく。ヲクリ舟に。取リ乘迯ケ支度。此敎經が諫メも用イず其上に。二位殿始メ女官達の泣叫ぶ聲〴〵に心迷ひ大勢に引立られて敎經も。思ハぬ敗軍ン。地 チヱロ惜やせめて一人ン踏留り。義經に近カ寄ツて差違んと思へ共。崩れ立ツたる大軍の習ひ。さかまく水のどにて夫レさへも叶はぬ故。一トつの思案をめぐらして。詞 家來讃岐の七郎義則を能登ノ守敎經と名乘ラせ。一ノ谷にて討チ死させ我レハ密に。天皇を供奉し此處に身を忍ひ。玄海ノ灘右衞門と名乘リ。盜賊の頭と成平家舊恩の武士を招き。地 或ハ往來の人

を探し。剛臆を試て味方に付ケん謀。詞 然るに夜前ン噂を聞ケバ。安德天皇お行衛知レず。尋出さバ褒美をくれんと義經が高札。扨ハ謀ト洩しかと心を痛る最イ中。鵜昇めらが物語稚ナ子と聞ッかも　鹿追獵師山を見ず。シヤ是こそ天の賜天皇の御首ゝと僞り。義經に近カ寄ッて恨ミを晴ラさん一ト方便と思ひ立ッたが。地 悴レが運。空も五月のやミ〳〵と。只ト一討に切ッたるも傾く平家の運ンの末エと　諦めてくれ女房と天ン魔を欺く敦經の肌骨を絞る。血の涙。女房夢共辨へず。其事譯ケを聞クからば恨ミとハ思ハねどもお前に別れ其後チは脊も伸髮も美ふ敎た事は地獄耳。大學もモフ半ン分ン過キ。晝は物に紛るゝ故。破魔弓に矢を添エて。地 敵を射との遊び事も胤恥しい稚ナ子の。あがき草臥夜に入レれバよふ寐て居ても折リヽハ魘て譯ケなき中カにも。詞 とゝ様〳〵とゝ様 地 なふと駈出すを漸に抱キ留ノ。正氣になれバ恙く〳〵と。詞 とゝ様が鎧着て馬に乗ッてお歸りなされ。切リ合イ人ン形下さつた。夢を見たとの物語。一昨日の夜も旅寐の枕に愛イらしい指を出し。マア是程寐て起キたら。とゝ様に逢れれるかと。片手と一トつの親指を出して見せたハ親の手に。かゝつて死ンで六道の辻へ行ッとの知ラせかや。地 西の川原をそこよ爰父戀し母戀しと內での樣に心得てわやくやんちや云イつのり呵責の鬼に呵られて泣て居やらふかハいやと歎ケバいとゝ敎經ハ悔の八千度身を託つ音トに聞へし強弓も子故に闇に弦ツシ切レて涙の。矢種泣つくす。地 稚心に天皇も哀レとか思しけん。敎若が最期の躰イ。ふ便ンの次第と龍眼にフシ御涙を。浮べ、させ給へバ 地 夫婦ハハツト有リ難涙。詞 コリヤ〳〵女房。悴が命捨たるハ。思ハずも天皇のおン身

替り。一ッ天ンの君に成りかゝり死だ忰レハ手柄者。地泣な〱と制して。涙の車軸夕立ナの夫レかあらぬか。風に連レ。遙に聞ユゆる責メ太皷。谷の谺の音ト添ィて手に取ル様に。聞ユゆれば。詞敦經ハツト耳傾け。アヽラふ思議や。人里遠き此山中カ責太皷の聞ユゆるハ。ムヽ扨ハ。敦經が此所に有ル事を計リ知り。討チ取ラん結構よな。ヲヽ今思ひ合ハすれバ。最前次信が詞のはし〲合點行カぬ。ヲヽサ〱。片時も早く帝を落し奉らん去りながら。折惡ルふ味方の者居合ハさず。地いかゞハせんと思案ン最中。小影に忍びし手下の九藏走り出。詞天皇の御供仰付ケられ下さるべしと手を突ケバ。ムヽ神ン妙〱。下郎ながら只者ならぬ昨日の働き。錦の御籏を我手に渡すハ。必定平家恩顧の武士。コリヤ某シに成かゝり八嶋へ供奉し奉ッれ。ハツア有りがたき御仰。遙下モ様の者なれバ御存ジ有まじ。宗盛公の牛飼舎人友竹と申ス者。拙ッ者が胸中御推量の上ヱハくど〱申上クるに及バず。身は鹽に成ル迚も御先途見屆ケ奉らん。ヲヽ出かした友竹。女房諸共早急げ。ハア委細承知仕ッる。地恐レならと天皇をフシ脊に負奉り。梓御前を先キに立て。峙をフシ傳ひに落て行。地敦經御跡見送りつて。アヽラ今ハ心易し。いざや用意と一ト間の障子オクリ引立。ヘ奥に入にけり。地程なく近カ付源氏の軍ン勢貝鐘ならし時の聲山も崩るゝ計りにて。庵の四方追ッ取卷キ。詞ヤア〱此内に能登ノ守敦經卿おハするよし隠れなく。義經の下知を請ケ討チ取に向カふたり。地出合やつと呼ハつたり。詞ヤアかしましき雑兵めらと。地立出る其形相。江戸赤カ地の錦の直垂に。唐綾威の大鎧いか物作りの太刀を佩。烏帽子引キ立白ラ柄の長刀。小脇にナヲスかい込ミ

つゝ立上カり。詞 遠からん者は音トにも聞ケ。近カき者ハ目にも見よ。能登ノ守教經が手並の程閻魔の廳の土産にせよと。フシ 長刀打振リ立チかゝれバ。地 ソレおますなと取圍火花をちらして。三重 へ戰カひしが地 元來烈しき勇猛力キ。蜘手かくなハ十文ン字。追ッ立られて一チ同に叶ハぬ叔ルせと迯散たり。きたなし返せと呼ハつて。跡を慕ふて馳ケ行所に。詞 ヤアヽヽおとなげなし教經卿雜兵に目なかけ給ひそ 次信是に扣へたり見ン參せんと呼ハつて。地 一ト間の內ゟ佐藤三郎兵衛。跡に隨ふ手下の九藏 同じ出立チの小手脚當チ。見るに悔クり能登ノ守。詞 ムヽ次信ハ左も有リなん。我カ手下の九藏め。裏返つたか賴マれたか。子細ぬかせときめ付ケれバ。ホヽ手下の九藏と名乘り入込しハ謀。又宗盛の舍人友竹と名乘リしも猶以ッて僞り。誠ハ是成ル次信が弟。四郎兵衛忠信〻。ムヽシテ 又其忠信が。錦の籏を我レに與へし所存ンハいかに。ヲヽ夫レこそは次信が義經公と示し合せ。方便の裏をかゝん爲。弟忠信に云イ含手下と成ッて入込マせ。又源氏に有ッて益なき籏。餌となしたる謀。迚も叶ハぬ御敵對といハせも果ず。ヤア舌長カし次信。賢愚得失夫レミに。人ン事を盡して天命イの盡キる所ハ恥ならず。かく迄仕込ミし謀。やミヽヽ見出され終にハ孺子が名をなさん。チヱ 口惜しや腹立チや。地 此教經が死物狂ひ源氏の軍勢皆殺し。血祭ハ汝カ兄弟サアヽヽ勝負と詰寄スる。兄弟左右に立別れ互イに劣ぬ猛將勇士。忿りヽヽ付廻し既にかうよと見へたる所に。地 勅定なりと呼ハる聲實神ン國の王位德。龍虎といどむ三人も恐レて暫し。猶豫の躰イ地 警蹕の聲かまびすくいと花やかなる鳳輦に。召サせ給ひし安ン德帝。六位の姿ハ江田ノ源藏廣成ノ片岡

八郎經春。隨身仕丁に至る迄各々源家譜代の武士。肌に腹卷キ身を堅め君を守護して立チ出れバコハ〳〵いかにと敎經も軻。果たる計リ之。地 廣成經春詞を揃へ。詞 天皇八島へ行幸の。道の警固ハ我々兩人ン承ハると。地 詞の下ゟ梓御前。ゑづ〳〵と立出ノフコレ我夫マ。詞 最前夫レ成る忠信に謀れ擒と成リしほいなさ悲しさ。思ふに違ふ義經の情。平家の由緣ましませ共一ツ天の君を擒とすべき謂なければ。御一チ門のおハします八島へ送クり奉らんと。地 供奉の手配仁ン義有ル義經が情にめで一ト先ツ此場を立去ツて。後日チの勝負といハせも果ず。詞 ヤア普天の下タ率土の濱。王土に有ラず王臣ンならざる者なければ。君ンの恩ンを知義經か。天皇を守護なすハ己レヽが身の冥加。露塵程も敎經が恩ンに着べき謂レなし 地 無益の時を移さんゟ 目ざす相イ手ハ義經一人ンいで見ン參と駈出すを。敎經待テよの勅定に。ハット計リに振り返れバ。君は龍眼うるハしく。詞 母君尼君一チ門の人トヽ戀し。敎經も一ト先此場を立チ去て。八島とやらんへ伴へと 地 いとも賢き詔り。地 ハヽハット ひれ伏セバ次信兄弟先キに立チ。御輿やれと呼ハるにぞ。敎經ハつゝ立チ上り。詞 勅定もだしがければ此場ハ無事に歸る共。地 出合ふ所ハ讃岐の八島此敎經が覺ヱ有ル。五人ン張リに十五束義經に近カ寄ツて。當中を射て落トさん胸板を洗て待テと言イ聞せよ。ヲヽ〳〵其時にハ此次信 御馬の先キに立塞り。唐迄聞コへし能登殿の大鴈股。胸板に請ケ留メて鎧のさねを試ん詞 ホヽ、鯨に鯱能登殿には。此手下の九藏めが付キまとハつてお邪魔致さん。イヤ推參ン之忠信と。又立チかゝるを女房が。中を隔る源平兩家。敵に項羽が勢ひ有レバ。味方に韓信子房が計略。勇有智有リ仁ナヲス

義有り。タヽキありし姿ハ幻に。いとしかハいと撫子を。思ひ出せバいとゞ猶うかぶ涙の玉よばひ。逢の臺に教り若ハ手向ヶの。聲を輿車。供奉の面ン々勇ミ立チ君ハ旅路を雲井の御所。空行ク月の弓張や八島の浦へと別れ行

第三

三下り哥可愛男にすねた顔。いやな男ハ笑ひ顔。よいや〳〵ナヲスよいや〳〵ナ。地奥ハ媚く堀川御所義經公の御館にハ。晝夜の譯ヶも白ラ拍子靜が舞の今様に。三絃胡弓鉦太鞁。取り放したる大騒ぎ。表ナハ夫ヒに引キかへて四角四面ンの廣書院　鎌倉方の御上使を儲けの役ハ武藏坊。素袍のひだも立チ烏帽子。今朝未明方相イ詰メて。奥と口との眞ン中カに瞼もせずつくねんと　眉をしかめて座したるハ作り付ヶたるごとく〳〵。奥方出る舞イ子共。詞小雪様ン早ふお出いの。ヲヽ染松様ンの何しやいのヲせハし待タんせと。地銚子土器取肴フシ辨慶が前に直し置キ。詞殿様のおつしやるにハ。今朝から定メて氣が盡よふ退屈をせぬ様に。酒でモ呑ンで氣を晴させ。さつきから靜様の今様も始マつたれバ。お客クの御用が濟ンだなら奥へ來て拜見せいとの御口上でごぎんする。ムヽ何しや殿から御酒を下された。ヤ有リ難い御存の我ヒ等が好物二三盃引ッかけふかイヤ〳〵。いまた御用も濟マざれバ只今ハ先ッ給まい。そして毎イ日面白ロくもない舞見ン物。モびらしやらに倦果たれど。主命イなれバ是非に及バぬ。役目が濟ンだら行カずば成まい

追ッ付参ッ上仕らふと申シ上て おくりやれ。ヲ、○不明申シ辨慶様ンへお前近ン年世間ンで流行園八ぶし聞カんゑたかへ。辨慶様ンの力でも微塵もゆかぬ石山の。秋の月キ程まん丸な。其首にふ都合な七ツ道具を振リ廻し敵を切ッたり突ィたりゑなさる其お力ラが見たいわいナ小雪様ン。サレバイノ。次手に彼事問て見やんゑよ。申辨様ンへ。アノナ〳〵お前もなアノナ。色をさんした事が有かへ。ム、色とハ何色鳶色か鼠色か。黒い色なら我レらが本ン家。ヱ、何ゑやいナこなお方ハ。脇へ轉さんすな。お前も前方たつた一チ度。女コに抱カれて寐さんしたと。世間ンに噂が有ルわいな。イヤ〳〵夫レハ人の悪ル口。一チ度ハ扨置キ半ン分も。女と寐た覺ヱおやりない。今時世間ンに澤山ンな。なまぐさ坊主や芋堀めらと一トツにされてハきつい迷惑。交りなしの大ィ清僧イヱ〳〵夫レハ悪ルい物好キ大勢入込藝者の内。どれ成リと望ミ次第取リ持て上ケやんゑよ。サア〳〵どれでもより取リ十九文負て上ふと 地 二人して。鵙の囀りちやつちやくちや。辨慶ハもて餘し。詞 又卿の君や女中めらが。おれをなぶりによこしおつたゑい加減にして行キおれヱ、コリヤ耳を引キおるなと。地 くハつと睨し目玉の光り 詞 アレ又睨んだヲ、こハやと 地 奥へ迯込ム 其フシ 跡へ。取次キの侍ィ罷出。詞 申シ上ます。山田ノ三郎義久殿姆初ッ音諸共御勘ン當の御詫。辨慶様迄御意得たしと表に扣へて居られまする返し申さんやと窺へバ、 地 辨慶暫ラく思案ンして。詞 苦しうない是へ通せ 地 畏つて出て行。 地 浪〳〵の我レハ干潟の捨小舟。繫留たる妹と脊も。君の怒に勘ン當の。本フシ 身ハおづ〳〵と越兼る敷居の灘や疊の海山田ノ三郎義久ハ、初音諸共ゑほ〳〵と。遙下つて畏る 地 辨慶見な

詞ホヽ珍しや義久先ハ堅固で重疊〳〵。定て歸參の願ひならん。ハア面目もなき御對面。御存の拙者が誤り。何卒御前の御取成御勘氣御免有樣に。幾重にもお願ひさ。地初音も倶に手をつかへスヱテ誤り入て願ふにぞ。詞ムヽ成程取次ハえてやらふが爰に一の難義が有わい　其方色事で仕くぢつて。まだあたゝまりも覺ざるに。御勘當を免してハ御家の掟手ぬるく聞へ。且ハ我君色にふけるさ世上の取沙汰有なれバ。上を學ぶ下。舘ハ色事の眞晝さ世の譏もいかゞなれバ。どふも急にハ免されまいが。爰に一ツの相談。先非を悔本心に立返つたる證據の爲。相手の女が首を討て。持參仕りましたさ申上れバ。お上も濟世間も立男らしうて面白わい。カウイヤどふかむごい樣な事なれ共。ハテ高が女郎の一疋や二疋我君の片腕に成てなたの身にハ替られぬ此相談に極ろさ地數から坊主の思ひ付。もぎどう成が持前なり、地義久ハなま中に詞なけれバ初音ハ摺寄詞有難い辨慶樣の仰。出世の身をそゝのかし。かふいふ事に成たるも皆わたしが科なれバ。命ハさら〳〵厭ませぬ。地夫で濟なら私を殺し。主の勘當免る樣。宜しう賴上まするさ。夫を思ふ一筋に命惜ぬ貞女の操。打バ答る胸の内邪のなき辨慶ハッシ感じ入て。詞ハテ扨〳〵〳〵去迚ハ貞節心中者。そふ云ハれてハ辨慶も無理に切さハ得云ぬわい。どふした物で有ふ。いつその事かふせろ。殺す事ハ止にして去こくつて仕舞たら。命も取らず願ひも叶ふ。兩方丸ふ納る思案。此相談ハどふであんべいナ。ハア只今の拙者が身の上。いか樣共御意次第。お詞返すでハござらぬ共。御

存の譯にて女が養父原田兵部當春死去致したれバ。只今でハ此女歸し所に當惑致す。此義宜しう御賢慮下され。外に仕方ハござるまいかと 地いハれて辨慶行詰り。詞ハテ扨一生に給付ぬ色事といふ物ハ。いかふひち面倒な物だハいの。ヱヽぶ風雅な事に出合。はいもうに及んだと 地塵を捻つて大づけなく。小首傾け思案の躰。地初音ハえほれし顔を上。戀こがれたる夫に去れ活て居る氣ハござんせぬ。去れたら其足で海川へも身を投て死るが高と心の覺悟。ならふ事なら夫ハおつえやる通り私を殺し。女に心迷ハぬと首を土産に歸參の願ひ。詫の種共成ならバ死でも御用に立道理。譬千年萬年の命をたもつ菊の酒仙家の榮花も我夫に。別れてハ何樂しミ。お前のお爲に成事ならお手にかゝるがわえや本望。殺して下され義久殿。コレノフ申辨慶樣願ひ叶へて下さんせとあなたを頼こなたをせがミ人目もわかず取亂しわつと計に泣沈。地辨慶殆んど感に堪兼横手を打て。詞ハヽア貞女〳〵。よいハ〳〵案じな義久泣な初音。其心底を見るからハ此辨慶が尻持。勘當の願と叶へてやる。ム、スリヤ御得心下されたか。そんならお前のお世話にてヲヽ辨慶が呑込からハ。小僧に成て棚經に追使ハれる法も有。金輪際尻持 えや。若又殿がいざこざいや。旦那の色事から立て卿の君や靜御前。一荷にかたけて連て退。跡でふ自由な目に合せ。思ひ知せてくれんべいと。地おどけに取なす辨慶が心ハ水晶一點も。曇ぬ胸の正直正路。二人は嬉しさ飛立思ひ。地千鳥足なる御大將御手を取ミ數多の舞子。打連御座に着給へバ。地三郎初音ハ飛えさり蹲つたる計〳〵。詞

ホヽ最前からの二人が願ひ一々に聞届た。色事知ぬ辨慶が詫事が珍らしい。一ツの功を立る抔とハとつと昔の色事捌。此マア粋な世の中に戀でなければ誠も見へぬ。今改て義經が媒酌立て夫婦となして召使ハん。夫に付汝が父年寄たれど用に立べき者と聞。是ゟ夫婦古郷へ立越親々作ひ立歸り忠義の仕樣ハ汝が心に有ん早急げと。地仰にハヽヽヽはつと飛立さり。詞御ふ興御免の其上に。身に餘りたる上意の趣。地サイナ有難い共忝い共冥加の程も恐しい。是も偏に辨慶樣お影〳〵と伏拜。二人ハ足もフシ地に付ず。地倶に悦ぶ辨慶。詞有難い君の仰時刻移すな急げハツト御前を立鳥の古巣を慕ひ急行。地俄に騷ぐ表の方上使のお入とひしめきて。入來るハ梶原平三景時虎の威をかる古狐くハん〳〵と打通り。挨拶もなく上座フシに直り。詞ハアヽ取々の噂に違ハず洒淺の奈良漬大將。いまだ靜謐ならぬ世の中。武士めいた者ハ傍にも置ず舞子や藝子のゑやらりくらり。諫言すべき家來迄倶に現の坴頭坊主と。地出る儘の惡口過言。短氣の辨慶ぐつとせき立。詞ヤア頤の明た儘。一言の挨拶もなく我君の御座を乘越。高上りする推參者。其上坴頭坊主なんどヽハ此辨慶へぬかすのか。地腮引裂んと立上る。詞ヱヽさハがしい武藏坊兄頼朝の名代なれバ敬ふべき筈の所。女まじくらの此座席。例のいぶりハ尤々。ヤア女原勝手へ立。イザ御上意の一通り承らんと有ければ。ホヽ上意の趣餘の義ならず義經己が武勇にほこり都に有て我儘の有條。平大納言時忠の聟と成緣者の因に引されて平家八島に楯籠るをも。其儘に捨置剩。安德天皇能登守教經

なんど助ケ歸し。其身ハ白ラ拍子を數多呼寄セ。晝夜を分ケぬ大騒ぎ館の内ハ揚屋同前ン。頼朝を蹈ミ付ケたる仕方。急ッ度曲事に行ふべし。返ン答一チヽ聞來れよと。鎌倉殿の上意サア御返答承ハらんとにがり切ッて相演れバ 地 義經につこと笑ハせ給ひ。詞 ホヽ兄頼朝ゟ事ヽ敷キ上使、ふ審の趣承知せり。時忠の聟と成リしは内侍所の御鏡を取リ返さん謀。ヲヽ然ラバ安徳天皇をなぜ八嶋へ送られし。ホヽ天皇を歸せしハ兄頼朝を代官として事を計カる義經。一ッ天の君を奪取ッ事なさバ。是逆臣ン朝敵謀叛の悪ク名ハヽ今源家の棟梁たる兄頼朝一人に歸し。末ッ代迄源氏の瑕瑾其汚名を請させまじと心を碎く義經が寸ン志。地 且又教經いか程の智勇有リ共。天命イに背く平家の一チ族衆の心服さねバ。魯陽が日を招く勢ひ有レ共取ルに足ざる匹夫の勇。地 何事をか仕出さん。義經軍慮を廻グらさバ西海に迯かゞむ。平家を討タんハ磐石にて玉子を破よりいと安スけれ共 神代ゟ傳ハりし三種の神ン器ギの其中にも神璽の御箱ハ一の谷にて奪取。詞 内イ侍所の御鏡ハ 時忠の手ゟ受ケ取ッて。禁庭へ差上ケしかど十束の御劔ンハ二位の尼、肌身を放ナさず所持なせバ今以ッて手に入ず。若叶ナハぬと見るならバ海底へも沈メやせん。地 然る時ハ日本ンハ暗闇。そこを計つて義經が討ッべき平家をゆるめ置キ。晝夜をわかぬ遊興ハ敵に心ゆるませて奪返さん謀ト。平家の悪逆ク。木曾が我カ儘。教を亂下をゑゑたげ飢かつに迫る民ミ百姓其苦しミを安スんじて。太イ平の世となさんと心を碎ク義經ハ。命を敵の的となし。適ヽ軍サ治つて安スきに居ても危きを忘れず。琴三味線ンの遊興も軍ン慮に苦ルしむ義經が耳へハ。矢叫ひ時の聲。心を痛る我カ計略。汝どきが知ル事なら

ず。兄頼朝へ此通り詞返答せよ景時と。地威有て猛き其有様。蝦夷が千島に押渡り武勇を顯はす其功。凡人ならぬ名將の智略の程ぞたくましき。遉の梶原言伏せられフシ奥歯をならす計なり。地辨慶ずんど立上り梶原が前に蹈ばたかり。詞頼朝卿の上意を傳へ我君の御返答。己が耳へはいつたからは最早上使の役目は濟だ。上使が濟だりや家來の梶原。高上り緩怠さ。地小腕取て突飛せバ面をえかめて起上り。詞ヤア頼朝卿の上意の趣。いまだ詮義も濟ざるに上をなみするづくにうめ。コレ義經公。身勝手の拔句はたべぬ。近い證據は建禮門院。近國に隱居るを知ぬ顔も推量せり。門院と卿の君は現在の從弟同士。其内縁で助置共此梶原が詮義仕出して。頼朝卿へ言上すると。地何がな鹽の當り眼。詞ヲヽ建禮門院忍び有事。聊以て聞及バず。夫と聞ては捨置がたしコリヤ／＼辨慶。汝は是ゟ門院の在家を尋見付次第首討て來るべし。ハア委細承知仕る。是ゟ直に罷越んとフシ立上れバ梶原も。詞ヲヽ手柄は仕勝某も。旅宿に立歸り家來に云付討取さんと。地云つゝ出るを辨慶が首筋つかんで引摺戻し。詞ヤア又しても／＼。人の手柄を云はがす蚰の親玉め。攫殺すれ安けれど。鎌倉の上使だけ助てくれるを有難いと。ちよ／＼こなつてすくんで居よと。云捨出るをどつこいと。腰に取付引戻す。シヤ面倒なと振放せど。我がむえやの梶原放さばこそ。詞エヽえやらくさい力身立。行がけ駄賃旅宿迄。送つてくれんと地首の骨。片手にかゝる／＼提て飛がごとくに三重

道行戀の道草

哥地にあらバ。連理の枝と兼言も。離れぬ中ヵの茂り合ィ。人ト目にそれと立田姫。色に出るてふキン紅葉傘ノ右キと左リの袖と袖ノ手と手とゑつと相ィ合ィの。かさなる思ひ兩方を妻と號しフシ戀衣。地着つゝ馴にし一ッ對の。合羽に雨ハふせげ共。濡にぞぬれし二人連レ。山田ノ三郎義久ハ。初ッ音諸共古郷の。丹生の山田へこゝろざし。キンたどりヲクリへ〳〵て冷泉行空の。降み降ずみ村雨の。表具晴行跡に色まして錦織なす秋の山野邊ハ千草の花くらべ。桔梗かるかや糸芒我レも思ひの穗に出て。地ちよつと寄ッてハ顔と顔。本フシ都を辰の時過キて早鳴鐘も四ッ塚に。月キの桂の里遠く漸爰に狐川。地古郷の空のなつかしく。長地心關戸を跡になし君のふ興をゆりし身ハおのづと道も廣瀬村。再び時に太田の町。父を味方に招き寄セ倶に軍サに勝尾寺。民の手業もぬぎ捨ッる。箕尾の瀧の糸ながく。地藏經結ふ妹脊の中ヵ山に大慈大悲の御ン誓ひ。守らせ給へと伏拜む。あたし心ハ荒蒔の離れ米谷兜山。ふりさけ見ればスエテ峯ミの繪にも及バぬ。風景を。弓ン手の方に指さして。地アレ〳〵あれこそ武庫のコハリ山續き。南ミハ生田一チ二の谷思ひフシ出すも心地よし。江戸嶮岨を賴ミの敵の油斷。はげしき君の軍配に。ひよどり越を眞下タり。思ひ懸ヶなき平家の勢ィあれて。ふためき遠近の。手着も白波舟の上ヱ。サイナおまへの高名手柄。道の案内ハ闇夜の燈火。得たりやおふと味方の勢。我レも〳〵と責メ寄セて。地勝に乘ッたる働き

に。敵の大軍追ちらす。其勳功をおぼしめし御機嫌ますく義經様舅御様へのお使も二人一ッ所のお指圖ハ。粋の上もり情ゑり。天下晴ての夫婦ぞとフシいふも媚く生瀬村。尋ね小劔大劔。君に命を投石と誰實よりいひはじめ。サワリたてゝ寐る夜の。屏風岩爰に來て見よ樫が池。地女の足のぐりはまに登る長坂小石原。旅のつかれを有馬山。湯女の呼聲國の名の。備前のへ。尾張のへ。伊勢や日向や。美濃近江。寐物語りのむつごとに。哥君を松虫いつかうろぎさ。戀こがね虫鳴あかし。心の駒の轡虫。何のいさみがあろぞいな。思ひ山から氣ハいやまし。こうづらくさなき暮し。どふで詰らぬ四十がら。何のいさみがあろぞいな。二上リタ、キその一トふしも身の上に。ありしハ今の語りぐさ。千話のいひぐさ道くさの花をつぶてにうつゝなく。ほれた同士のたハむれハ手引袖引あしナヲスびきの山田の。里にぞ三重へ着にけり
地津の國やフシ丹生の山田の。村はづれ。住古したる離れ庵。正木の垣も己が儘崩れた壁の風ふせぐ蔦の紅葉の色深く本フシ秋ゑり顔の軒のつま。地獵人の五平次迚人に知れしゐせ者有。山鹿山に狩暮し谷共峯共巖共厭ハぬ身にも老の坂。地年が異見か殺生も自とかハる鍬の先。畑せゝりの間引菘も。フシ土氣離れぬ爲業く地山道傳ひ二人連わなの又八寐鳥の文助。牛弓に得物引掛打かたげ詞親父殿精が出ますよ。ホ、コリヤ二人共今戻つたか。けふハ獵が利たそふな。サイノ。けふは又八と云合せ、上の山を駈廻り。コレ見やゑやれ。兎五ッ狸三疋。近年にない獵の利様。こんたも内に計り居やゑ、

やらずと。ちつと山へも往かゐやれぬか。イヤ〳〵おれは今年ハめつきりと年が寄て。腰ハ痛し眼ハ霞む。夫レ故春から獵を止て苦勞なしの畑せゝりゐや。イヤ〳〵〳〵。夫レ計でハござらぬ。此春源氏の大將軍ン義經樣が一ノ谷でゑい〳〵ワアイの折から。嫒な息子の熊王が岡引キで。逆落しとやら逆馬とやら。王手〳〵とてつぺんから王樣を。追イ落した御褒美。侍イに取立テられ。此村名をかた取ッて。山田ノ三郎といふれつき歴〻の武士になられたハ。木兎が鷹を産ンだと村中の取リ沙汰。アヽ其親のこんたが獵では濟ムまいと思ふて。止メたの〳〵。コレ親父殿。頓ての內御隱居樣。鋤鍬に蒔繪置キ。乘リ物で畑せゝりに行ッ樣にならゐやらふ。イヤ〳〵。何ぼ悴が出ッ世しても。子供に養れる樣な五平次ゐやおゐやらぬ。ヤコレ夫レはそふと二人共。はいつて茶でも吞ミやらぬか。アヽイヤ〳〵。早ふいんで狸汁あしらひハ大根と葱。かゝが牛旁ちつくり匂ひ有ッて。地お汁澤山ン暖メながが賞翫と笑ふて。フシ打連レ立歸る、影見へぬ迄見送りて。五平次ハそろ〳〵と。煤氣障子を押シ開けバ。表雲間を出る月の顏。御痛ハしや門院ハ。ゐほ〳〵として。立出給ひ。地ノフ五平次。詞一チの谷落城の折から。彌平兵衛宗淸が。自ラを伴ふてわりない賴。嘸やいぶせく。フシ思ふらん。地我カ君樣を幾度か。お諫申せど聞キ入なぎを憤り。今でハ此山里へ引籠モり。昔シは昔と自ラをそでにする共是非ないに。起キ臥迄も心を付ケての介抱ハ。表カヽリ禮の詞もなきぞ迚お袖の內にて五平次を。スヱテ拜ませ給ふぞいた〳〵し倶に。フシゐほるゝ五平次も。地斯てハ果しといさゝを付ケ。アヽわつけもない事おつしやります。此親父も昔の所緣

おかくまひ申せ共。ヱ玉簾の内でお育なされ。此むさくろしい荒屋で。アッア勿躰ないけれどしよ事がない。ハテ。うき沈ミハ世の習ひと申ますじやござりませぬか、沈瀬が有バこそ浮瀬も有じやござりませぬか。もふ〳〵此五平次が命の内ハ。案じる事は少共ござりませぬ。ヤ頃日も噂を聞バ教經様も帝様を連まして。八島へお出なされたと聞たれバ。お勝軍は知た事　地御艱難も今暫く必氣遣ひなされますな。追付御代に出しますと。いさめ申せバ猶涙　のふ嬉しいハ嬉しいが便りに思ふそなたハ老の身。命の内にといやれ共老ては先立世のならも、若もの事が有はらば跡に殘りし自ハ。いかなる憂目に逢やせん。あぢきなき此身の上。いつそ死たい死せてたも。死たいハいなと聲を上わつと　スヱテ計に泣給ふ。詞ア、コレ〳〵めつそふな。少マアお嗜なされませ其お泣聲人が聞てよい物でござりますか。モサア〳〵奥へござりませ。サ奥へ。地〳〵とすゝめる折から。遙に聞ゆる數多の足音。見付られじと門院を奥へ忍バせ。跡引立さあらぬ躰に三服繼フシたばこ。くゆらす表の方。地梶原が郎等番場忠太。主の威光の鼻高く。門口にのさばり聲ヤア〳〵五平次慥に聞、平家の落人建禮門院。此荒屋にかくまひ置條紛れなし。番場忠太が召捕に向ふたり。サア尋常に渡せバよし。いやだとかぶり振が最後コリヤ。楊枝の様な其腕青細引でくゝし上。大黒柱と女夫事さすが何と　地〳〵。返答フシ聞んと呼ハつたり。地五平次は空とぼけ。詞ハ、、イヤモ是はかハつたお尋に預ります。元手のない此親父。けんねぢハ扨置てめくりを打た覺

もない。夫レハ定て門ト違ひ。外をとつくと御詮義と。地いふも居ながらゐろりの火箸。いろふ詞もかたくな親父。詞ヤア治め過た老ぼれめ。兼て犬を入レ置イたれバ様子とつくと聞届ケた。某が前共憚らず。脚も立タぬがいこつ親父め。ヤアまだ横にふせりおる。ソレ家來共。蹈ン込ンで家捜しせよと。地聲に随ひ立チかゝる。詞ハヽヽ何をざハ〱やかましい。昨日から疝氣で腰が痛さに。かふして居るのが貴様達チの大キな仕合セ。年シこそ寄ッたれまだ〱。こなた衆の手に合ッ様な此親仁じやないぞいな。地足元の明カい内。詞サア〱早ふいなしやませと。びつく共フシせぬ頬魂。詞ヤア重ゝにつくいやつ物な云ハせそ踏ン込ノと。地下知に随ふ家來共。蹈ン込ム目先キへほふり出す。火入に悔クりはいもうし。コリヤねつから目が明れぬと。狼狽廻れバ傍なる。棕梠箒を追ッ取て。なぐり立れバ主従ハ。コリヤ叶ハぬと崩立。表をさして迯て行。何國迄もと追かけしが。詞イヤ〱長カ追はいらぬ物。エヽ何でもないやつらにかゝつて。ホイ。大事の茶碗迄ぶつこハした。モ何で損をせふも知レぬそしてマア泥脚で。地此埃ハと掃出し〱。今の様子をお聞有ッバ嘸かしくよ〱お案じなされふ。ドリヤ。地御機嫌を伺んとヲクリ納戸へ〱こそハ入にけれ。地古ル郷に歸る公服ハ秋の野の。錦争ふ袖袂ト。山田ノ三郎義久ハ妻の初ッ音を伴ひて。いとゞ床しき我カ家の内。フシ門口に立休スらひ。詞ノフ初音。モフ爰がおれが内。都と違ひ草深カい在所住マ居。地屋根に月洩ふせ屋の軒。そなたに見せるが面ン目ない。詞イヽエイナ。義經様のお情で。表晴た夫婦中カ。他人ンがましい何御遠慮。親御様をお味方に付ケよと有ルお使。地片

時も早ふお目にかゝり御一所に伴ふて。御孝行が申たい。詞ヲ、我も左ハ思へ共。生れ付て片意地成親人。御機嫌の損ねぬ様。随分萬事氣を付よと。いひつゝ庵の内に入。詞申親父様。熊王でござります。只今歸宅仕りました。親父様。〳〵と。地いふ聲聞て一間々。立田る親五平次。詞ヲ、熊王か珍しや。當春出世の間もなふ。御勘當と聞た故。くよ〳〵と案じて居たが。御ふ興も御赦免有。妻を連て來るといふ。飛脚の狀が今朝屆。首を長ふ待て居た。マア〳〵豆て目出度と地悦ふ躰に氣も落付。詞ハア。御意の通り此熊王當春一の谷の逆落しの折から。義經公の御目鑑にて御取立。御諱の一字を給ハり。山田ノ三郎。義久と名乘思ハざる身の出世。御恩にあまへし若氣の誤りし。一應御咎の身と成しかど。情深き御大將御勘當御免有。是成女を宿の妻に下されし大恩。御譜代の歷々にも肩を並ぶる此義久。御歡び下さるべしと。地いふに初音も會釋して。ほんに主の申さるゝ通り。水の出ばなの若同士。大事のお身を暫くも埋せしハ私が科。詞徒な女めとお呵も遊ばそふが　長地恥しながら一筋に登詰たる戀の山。堪忍なされて下さりませと。フシ跡ハ詞も。口ごもる。地思の外に父ハほや〳〵。詞イヤ〳〵。思ひ合たが縁の端。田舍育のぶ骨者。かはいがつて下さるとは。親の身でハ百千倍。嬉しうおりやる。コレ嫁女。長道で嘸草臥。サア〳〵拘も取てくつろがしやれと。地顔に似合ぬ愛くろしさ。猛き心の虎狼も。子にハ目のなきならひ〳〵。地時分ハよしと義久摺寄。詞申親父様。今日參りし其子細ハ。私ならぬ主用。平家八嶋に楯籠れバ。近々

出ッ陣の用意。軍ン勢催促真ッ最中。其方が親五平次こそ。並ミならぬ鳴呼の者と聞キ及ぶ。一ッ方を頼たし。味方に付ケよとの上意。御得心ン下されよと。地 いふに初音も詞を添エ。夫レハ／＼殿様のきつい御懇望。いやといはふがどふいハふが無理にすゝめて連レて來いと御念ンもじのお詞。詞 サア／＼早ふ御用意と。地 語る內ウ五平次ハ。大口明イてから／＼と笑ひ。詞 ハヽヽヽ。見ると聞クとは又格別ッ。義經様ハ名將と噂に違ふ大だわけ。數にもたらぬ此親父。一ッ方を頼ミたいの。味方に付ケよと使イの口上。ハヽヽ七十近カき老のいりまへ。榮花も望マず。出ッ世も好マぬ。奉公する事罷リならぬと。立チ歸つて返ン答せよ。早く歸れと地 にべもなく。綿で受ケても投出すハ。やつぱりフシ元トの茶碗なり。地 義久ハ猶も詞を正し。詞 日比の御氣質左有んとハ存ながら。御厚恩の主命もだしがたし。忰レ不便と思すなら。理を非にまげて御味方に。イヤならぬ。夫レでも是非にッ。イヤくどいと。地 親子爭ふ折こそ有。上使〻と呼ハつて。ずつと通るハ武藏坊。思ひ懸ヤなき義久夫婦フシ五平次も倶に驚く計〻。地 辨慶上座に打通り。詞 丹生の山田の獵人。五平次とハ汝よな。此內に建ン禮門院かくまひ置ク條紛キれなく義經公の上意を請ケ。辨慶討ッ手に向カふたり。首討ッて渡すか。但シ蹈ミ込搦捕ふか。いかに。フシ／＼と有リければ義久父に打向カひ。詞 武藏殿の仰の趣キ。承ハつて驚キ入。親人にハ何故に。門院をかくまひ給ふ。御所存ンいかにと尋ヌれ共 地 見向キもやらず五平次ハ。辨慶に打向ひ。詞 少ト致したる譯有ッて。かくまひしハ一旦ンの義理。かく顯ハるゝ上からハ是非に及バず。成ル程門院の御首。討ッてお渡し申さん。地 去リな

がらせめて一ッ遍の經陀羅尼。最期の用意させましたし。詞 間所。もなき荒家、御苦勞ながら下の在所に。暫く御待チ下さるべし。入相イの鐘を相圖。首討てお渡し申さん。ム、其詞に違イなくバ。暮レを相圖に來るべし。コリヤ〳〵義久　親五平次ハ汝に預クる。門院を取逃カすな。えつかりと預ケたぞと。地 詞の釘や鎹の裏を。フシ返して出て行。地 跡に義久膝摺寄。詞 申親父樣。我君の御恩に背き。一ッ旦の御誤マりハ是非もなし。片ン時も早く御首給ハり。誤りを改メて。義經公へ御味方といハせも果ず。ヤアいふな〳〵甲が砂利に成ル迚も。二君ンに仕へる五平次ならず。ム、二君に仕へぬとおつえやるハ。ホ、是迄忰レにも深カく隱せし我本ン名。名乘ッて聞さんよつく聞ケ。平家の御内に一ッ騎當千ンと呼れたる。武藏ノ左衞門有國成ルハと。地 初メて聞たる父の本ン名、初ッ音も倶に顏見合セフシ 呆れ果たる計リ之。詞 ホ、是迄深カく隱したれバ。驚キハ尤至極。淸盛公の惡逆無道。三度諫メて退くハ臣ンの道、武士を捨たる此山中世に望なき身なりしが。當春狩の歸るさに。彌平兵衞宗淸に思ハずも行合イ。我住ミ家を啣せしが。其後一ヲの谷落城の折から。門院樣の御供し。御一チ門ハあてどもなき西イ海の浪の上、明日の命も知ざれバ。何卒其方門院樣をかくまひくれよと。のつ引キならぬ賴の詞。昔の御恩報ずるハ此時節と。人ト知レずかくまひ置しに。天えるる地えるると都へ聞へ。最前ンも討手として。番場ノ忠太が向カひしかど。かれら風情何程の事有ラんと追。ちらせしが。二度の討ッ手ハ武藏坊。きやつあら立チては事の破れと。暫しの猶豫と言延バし。地 追返せしハ返せしが。一ッ方口の此山中。迯んに道なく　身がハりの用意なけれ

バ詮方なし。詞サア親が一ッ生懸命の場。其方に無心ン有。何ンと違背ハ有まいナ。ハアコハ。改りし御詞。譬いか様の事ヘ共。其詞に違ハないナ。嫁の初ッ音が命をくれよと地脇差四五寸ン抜かゝる。透さず其手をえつかと留。詞ム、女房初音が命を貰ひ。ヲ、サ門院の御ン身がハりに立るハやい。ヤア血迷ひ給ふか親人。女房初ッ音ハ卿の君の御召使イ。よつく見知りし辨慶。うまく＼と喰ふべきや。夫レハ兎も有此義久。父ハ平家の浪人ン共。知ラぬ内の主取り。御厚恩の義經公。不義の罪科御免ン有。君ゟ給ハる女房を。敵方の身がハりに立テ。重恩の主を謀らん事存も寄ず此義は御免ンと地いハせも果ず詞ヤアいふな＼。女房の命を惜しと酢の蒟蒻のと拔ケ句はさせぬ。主取りする其體。親が產マいて誰が產ンだ。元トを忘スれしたわけ者。又初音が面躰能ク知ッたる辨慶なれ共。生キ顔と死ニ顔は相顏のかハるを頼若シ顯ハるれバ。百年め。サアいやても應ても初音が命。貰ハにや置ぬ。尋常に渡すか。何と。地＼とせめ懸＼夫トと舅の爭ひを中カに立ッ身の。ハア＼あぶ＼。思案ン極めて押シ直り。詞とゝ様も我夫マも。マア＼待ッて下さりませ。わたしが死で濟ム事なら。成ル程命上ませふ。ヤア馬鹿つくすな女房共。義經公の大恩ン。須彌山低く大海淺し。父ハ平家の家臣ン成しも。浪人ンえたれバ恩ンもなく。義理なき平家へ女房を身がハりに立る事。存シもよらず罷りならぬ。ム、スリヤどふ有ッても得心ンないか。得ク心なければバ。親子でない勘當じや出てうせふ。ヨイ＼モウ此上ハ破れかぶれ。討手を引請討死し思ひ知ラせん。不孝者め。出てうせ上れと睨付ケ。フシ一間の内へ入にけり。地義久ハ云がゝり。忠

義一チ圖の爭ひも。思ひ懸なき勘當と、父の身の上案じ詫ゞ立ッも立タれず居も居られず思案シに暮イて指俯き、フシ胸を痛める計リなり。地女房初音ハ差寄ッて。詞申我夫マ。舅御樣の御立腹。お心をなだめる爲。門院樣のお身がハりに。地わたしを立テて下さりませ。詞ハテめつそふな。さつきにからいふ通り。源氏の恩を戴く夫婦が。平家の爲に命を捨。士の義理が立ッ物か。サイノ其一ト通りハ聞コへましたが。お前ハ一チ圖に義經樣へ。忠を立ッれバ。親御へふ孝。又わたしハ命が惜シさに。忠義〳〵と云立て。舅御樣へあいそづかしと。世の人に笑ハれてハ。却て源氏の御家の瑕。二つには此初音が。平家のお爲と聞ク時ハ。御用に立ッて死ねバならぬ一ト通り。フシ聞てたべ。元わたしハ兵部殿の胤でハなく。東寺四ッ塚の邊に守モりを添ェて捨有リしを。拾ひ上られ成長。時忠樣御宮仕へ。養親にハ死別れ。地いとゞ戀しき産の親尋る便の守り袋。詞鐙を畫き其左リに。平家の門を衞ると計。今日迄知レぬ産の親。逢事ハならず共。門院樣の御身がハり。平家のお爲に死だなら。地養親と産の親へ心計リの恩送り。死せて下されスエテ我夫と思ひ。込だる其風情。詞ム、スリヤ。其守り所持して居るか。産の親の記念じや物。何の肌身を放しませふ。地是見てたべとフシ指出せバ。地義久ハ手に取り上。ム、鐙を畫き、其左リに平家の門を衞るとハ。ム、、、。鐙に名有ハ武藏の國。武藏鐙と歌にも詠。平家の門を衞ると。左の方に書たるハ。是左衞門。平家の士。武藏ノ左衞門といふはんじ物。其上。紛ひなき父の筆ッ跡。扨ハそなたハ父の捨子と、地聞イて胸り。詞ヤアスリヤ。わたしを捨たるハ。あの舅

御。左衛門様でござんすか。そんならそなたハ我妹。お前ハ兄様。ハア。ハアと。地あまりの事に詞もフシ出ず。忙然として居たりしが。地初音ハずつと指寄つて。義久が差添抜取咽にがハと突立れバ。思ひ設し義久が寄も。寄れず身を背け。千々に砕る心の苦しミ。初音ハせつなき息遣ひ。夫の方をつく〴〵と。打守り〳〵フシ暫し。涙に暮けるが。詞ノフ義久様。浮世に何萬何億地共。限り知れぬ人の中。たつた二人の兄弟が夫共知らず廻り合。夫婦に成といふ事ハ。いかなる過去の約束にて。生ながら成畜生道。互にいとしかハいと。云かハしたる睦言を思ひ出すも。耻しやお目にかゝらぬ其先に。兄様共。妹共。地露程成共。しれるなら思ひ。切りよも有ふ物。結ぶの神も恨しい。迚も夫婦にする程なら。一生知らずば知らぬで済む。かふ顕れてハ片時も生て居られぬ此身の上。添れぬ義理の悪縁も死で未來の約束に。半座を分て待ますと。いふには力も有ふサワリ物。結びし縁も切果て心細くもかた糸の。タヽキよる方もなき身の上の今を限りの。フシカヽリうき別れならふ事なら後の世ハ。他人と他人に産れ合。夫婦と成たい退ともない。詞人で添れぬ事ならバ。未來バいつそ畜生道。犬鶏と生をかへ劔の山や火の車。氷の地獄で責られても離れる事ハ。わしやいや〳〵。地いやじや〳〵と取亂しくどき立〳〵わつと計に。泣沈む地義久も身を悔ミ泣。口にハいハで心にハ百千無量の身の懺悔。いかなる過去の報にて。かゝる我身の憂耻辱。何とせん角とせんと五臓六腑を絞り出し悲歎のフシ涙にくれけるが。地迚も悔て返らぬ事。我も覚悟と刀

の柄に手をかける。ばつたばた付物ト音ト人音ト。地父左衛門の聲として詞ヤア比興々番場の忠太。尋常の勝負いせで。武士に似合ぬ欺し討。盗賊同前ンの振ル舞。門院を置イて行ケと。地呼いるこなたの一間ゟ兜頭巾に顔隠し。門院を小脇にかい込。表をさして駈出るい。扨こそ番場ござんなれとやり過して拜ミ打弓手の肩先キ切込マれかつぱと伏スを起コしも立ず留めさゝんと乗ノかゝり。頭巾ンかなぐり見て仰天。ヤア。詞コリヤ親人。左衛門殿。コハ地〳〵いかにと驚ロけば。初音も恟ッり門院もスヱテ倶に。介抱怠らず。地義久は歯がミをなし。チエよつく武運ンに盡キたるか。詞妹と知で枕をかいし。親共知ラて手にかけし。鬼畜に劣る極重悪人ン。三ン途の川の魁と。地刀逆カ手に取上るを。有リ國い取ッて引すへハッタとねめ付。詞ヤア狼狽たか義久。妹とい誰を〳〵。いふに及バず此初音。イヤ初音とは赤カの他人ンと。地聞て手負い起キ直り。詞スリヤお前とわたしとは。ヲヽ血を分ケし我カ娘。然らば此義久い。ホヽ源家譜代の忠臣ンと。鷲尾庄司武久が忰レ。此左衛門い親の敵。ヤア地と恟り三郎が驚キながら詰ノ寄レば。手負も倶に摺リ寄てフシ様子いかゞと氣をいらつ。詞ホヽ始メて聞イて驚キは尤。イデ一ト通り物語らんと。地手疵に屈せず。むんづと座し。詞扨も去る平治元ン年。左馬頭義朝。信頼が謀叛に組ミし。一チ族郎従駈集め。陽明日花郁芳門。数多の持チ口指堅め。おめき叫んで責ノ戰ふ。此有リ國は待賢門。重盛リの御手に属し。陣ン所〳〵を見渡せバ。比しも師走末ヱつかた。吹雪まじりの風烈しく、いと物すごき冬フシ氣色。源氏の方ゟ武者一ッ騎。鷲尾庄司武久と名乗リ。稲麻竹葦と

ならんだる味方の勢を。押破。地 人なき所を行がごとく神變ふ思議の太刀風に。さしもに逸る味方の軍勢。嵐に木の葉の散ごとくむら〳〵はつと。迯ちつて近寄者も。フシ なかりけり。詞 重盛公我を召れ。目ざましき鷲尾が働き。捨置ば味方の大事汝向つて討留よと仰の下ゟ此有國。武久に渡り合。鎬を削つて戰ひしが、互に太刀ハさゝらと打なし。いざや組んと引組で。上になり下に成。半時計もみ合しが。所々の軍に勞れし武久。なんなく組伏乘かゝり。首をかゝんとする所に。待てくれよと庄司が一言。此期にのぞミ未練の振舞。比興至極と耻しむれバ 地 庄司涙をはら〳〵と流し。詞 君辱らるゝ時ハ臣死との本文。討死ハ兼ての覺悟。武士と見込て賴度ハ。我當歳の男子一人。思ひ懸なき敗軍故。妻に抱かせ裏道ゟ落す所に。はかなくも女房ハ流矢に當て最期 死骸を隠すいとまもなく。水子を抱取そこ爰と。ゆぶりすかす間もなく。敵の勢に取圍れし主君義朝を落さんと。門の脇なる榎の木の本に。悴を打捨置けるが。今其方の手にかゝれバ。悴は定めて。犬猫の餌食と成て相果ん。賴といふハ爰の事。何卒其方拾ひ上。育上て出家となし。我菩提を吊ハさバ。生々忘れぬ武士の情。賴度ハ此事と。地 さしもに猛き武久が我を見込で賴ミの詞。心魂に滿渡り。氣遣ひ有なと請合て。なんなく庄司が首搔切。大將の見參に入。夫ゟ漸水子を尋出し。育上たハ則其方。然に主人淸盛公。日ゝに募る惡逆を。諫め兼て身退き。浪ゝの身の其中に女房が懷胎。産落せしハ女の子。跡産のもつれにて。我妻ハあへなき最後。地 渡世の疎き浪人の二人の

子供の養育に、こまり果たる貧苦の中にも。義理有ルそなたハ捨られず。詞我産ミの子の娘をハ守セリて添エて四ツ塚に捨たりしが。扨は初ツ音で有りしよな。親鷲尾を討ツたる有國。潔ふ敵と名乗リ。けふや討タれん。翌日や汝が手に懸らんと思ひしが。捨たる時ハ血氣の一ツ徹。地年シ寄ルに隨ひて。片時忘れぬ娘が身の上。せめて有リ所も聞イた上。討タたれて死んとけふ迄も猶豫せしハ子故のフシ闇。詞思ひも寄ラぬ今日の時宜。名乘間もなき娘が最期。義久迄を殺してハ。未來の庄司へ言イ譯立ず。爰ぞ敵の討タれ時と。番場と見せて切れしハ。地今年シで二十六年の因果ハ廻クる車の輪。親の敵を討ツたる其方。今日なして我子に有ツず。實父の名字を請繼で。鷲尾三郎義久と改名せよとの情の詞。義經公の股肱の臣シ。フシ其名ハ末ツ世に隱レなし。地子細を聞イて義久バ。是迄の御養育親にも増る大恩シ。夫レと知リなバ何故に。敵を狙ハん勿ツ躰なやとスエテ返らぬ。事の悔ミ泣。地初音ハ今ハの目を開ラき。ア、有リ難や忝ナや。詞今迄戀しい床しいと。思ひ暮した甲斐有ツて。悲しき中カに親子の名乘。最前義久樣を兄樣じやと。思ふた時の悲しさも。とゝ樣のお詞で。心の迷ひもさつぱりと。地此苦ルしみも數ならず。嬉しう成佛致します。お名殘リおしい義久樣。地未來ハ必ス夫婦ぞやと。につこと笑ふが暇乞フシもろくも息キハたへ果たり。地夫トハ胸迄くる涙呑込〳〵。喰ゑばる。歎ハ同じ左衛門ハ任せぬ體に娘が死骸。抱イゑめ〳〵。詞可愛や〳〵〳〵な。生マれ落ツると其儘。西も東シもゑらぬ者を。いかに武士の義理じや迚、捨る樣な胴慾心、其慈悲もない此親を。常チミ逢イたい〳〵と慕ふて居たといふたのを。立チ聞キてゐた

おれが心。どの様に有ラふぞやい。誠の親ハ此左衞門と。名乘ラふと思ふたれどナ。門院の御身がハり殺さにやならぬそちが命。なんぼ忠義と諦めても。侍イの魂イも町人ン百姓の魂も。子を思ハぬ者が有ラふかいやい。現在親が手にかけて。どふ首が討れふぞやい。守モりの割符で生キながら。畜生道へ落たと思ひ。自害した間違イも。コリヤお主と親へ大忠孝。二つながら全ふするハ。女ながらも出かしたと。心で譽て居たハいやい。地親子の名乘リが親子の別れ。永い未來で廻グり合。胴欲者と恨ミず共。詞コリヤ〳〵とゝ様。〳〵。地あまへてくれよと取リ亂し。義強き武士も恩ン愛に肉も。フシとろくる溜メ涙。地見るに猶更門院も。難面父の心故。多くの人に難義をかけ。かゝるうき目を見る事よと。袖を絞らせ給ひければ。父も夫トも有リ難さいとゞ涙に暮レ六ツの。鐘も無常や。フシ增るらん。地かゝる歎キの折からに〳〵。一ト間の内ゟ聲カ高く。詞建禮門院自害の様子。辨慶が見屆ケたり。イデ御首を給ハらんと。地ずつと寄て死骸イの首討チ落してつゝ立テバ。義久驚キ。詞思ひがけなき武藏殿。最前ンゟ始終の様子。ヲ、サ〳〵。固拔ケ目なき我カ君。諸方へ犬を入レ置カバ。門院をかくまひしは只者ならぬ五平次と。御存有ッて寛仁大度。しらぬ躰にて打過キ給ふ。然レ共梶原が。尾に葉を付ケて云イふらせバ。鎌倉の聞コへを恐ッれ。我らを討ッ手ハ表テ向。國母建禮門院の御首討タんハ恐れ有リ。まさかの時ハ身がハりと。云ハぬ計リに夫婦の者。歸し給ふハ情の謎。地思へば〳〵左衞門殿。敵の最期の一チ言に。義を金ン鐵と守モりしハ類ひ稀なる勇士の手本ン。遉血筋の初音が貞節。思ひ違イの最期の便なさ。忍んで聞イた辨

慶が。産れて以来覺へぬけむたさ。黒い面のはげる程。溜涙を流したハやい。詞氏位ハ劣る共。心ハ吉粹紛ひなき。此門院の御首を引導するハ天窓役。門院のソレ其死骸も辨慶が預り。八島の内裏へ葬ゝせんと。地事を分たる辨慶が情を籠し云廻し。三搭一の學僧と。フシ世に謳ハれしもとハり〳〵。地有國ハ居直つり刀逆手に取直し。腹に突立引廻す。是ハと立寄門院義久。詞ヤア寄るまい〳〵。ハア心安や嬉しや〳〵。浪々の此有國。草木と倶に朽もせず。聟義久が手にかゝれバ。庄司が恨も晴勝負。地軒端の蔦ハ平家の赤籏。戦場の討死にも。おさ〳〵劣ぬ有國が。此腸を聟引出。くれ〴〵頼むハ武藏殿。詞門院様の御身の上。二つにハ義久が。行末迄を頼入る。地ヲヽいふにや及ぶ辨慶が坊號も武藏坊。詞直に武藏ノ左衛門役。是もふ思議の因縁づく。イサ御出と力を添。地すゝめフシ申せど門院ハ。平家清涼紫宸の。床の上。有し昔に引かへて。是や天上。五衰の苦しミ、地義久ハ親ならぬ親の大恩わぎもこの。ふ便の最期突詰し思ひ違ひの雲霧も晴て眞如の月の霜倶にきへ行有國が三界無安。猶如火宅。さらば。〳〵と聲の下。我と我首掻落し。どうど倒れし此世の別れ。身一つに降涙の雨、亡骸送る野邊の。露余所の。袂や絞るらん

第四

地木強剋ハ折。革固則ハ裂。頼切たる要害の一の谷の落城か。あすの命もしらぬ火の。心づくしの浦

の浪。海まん〳〵たる コハリ 岩角に。能登ノ守敎經卿。一七日の荒行も。滿る疲れの肘枕暫しの憂や忘るらん。地 日をも人ト目を覆ふ身の笠ふか〴〵と顔隱し。ちか〴〵と寄ッて敎經の姿。つく〴〵と打守セり。何か思ひの有ル顔に。フシ 暫し傍に立チ忍ふ。地 何とかしけん敎經卿むつくと起キて。詞 今暫し。〳〵地 と幻の影を抓がごくにて。詞 ハアヽ扨ハ夢にて有リけるな。此程ゟ難行も此度の軍サに勝利を得。再び都へ返し入レ奉らんと。地 弓矢神ミ正八幡へ丹誠をこらせしに。現共なく。神童の我カ枕に立タせ給ひ。詞 世の中カの宇佐にハ神ミもなき物を。何祈らん心づくしに。とくり返したる神ン歌ハ。所詮ひらかぬ平家の運。守らん神ミもなき印。地 アヽ是非もなき次第やと。頼ミも切し弓取の猛き心もかきくれて茫然。としておハせしが。詞 ハアヽ悔むまじ〳〵。地 天のなせる運ン命イ佛ッ神ンの力ラにもいかでか及び給ふべき。必死と極メし我なれバ。今度の一ッ戰に花々敷討チ死して。名を後代に殘さんと。かへりもふしもしほ〳〵と。立歸らんとし給へバ。以前の賤の男走リ出。御袂トに縋り付。詞 此度の戰ひハ必死と極め給ひなバ。最期の供に召シ連られ。勘當御免ン下されよと。いふにふしぎと敎經卿。よく〳〵見れバ。詞 ヤア汝ハ童ハの菊王ならずや思ひ寄ラざる所の對面。別カれしハ早昔シ。かハり果たる姿よと詞にはつと涙ぐミ。幼少の砌ゟ御膝元トに召使ハれ。親にも勝る主君の御恩ン。若カ氣の誤マり傍輩と。詞の論に相イ人をあやめ 御ふ興を受しゟ。父の古郷此浦へ立チ歸り。世渡る業ハ獵漁。地 其日を送ヮる其内にも。先ン非を悔る主君の御ふ興。御赦免ンの御詞の出る迄ハ。何十年ンが其内もやつぱり童ッの菊王丸。

かくのごとく年たける迄。束上たる童髪。此姿にて今一度主君の御役に立ならバ。生ゝ世ゝの御厚恩。と土に頭を摺付〳〵。思ひ入てぞ願ひける。詞ホヽかく傾きし平家の運命。代ゝ舊恩の輩迄源氏へ心を寄る時節。危に臨。頼なき某に勘當の詫。地ホヽ神妙く去ながら。一旦の誤りにて勘當せし其方。是ぞといふ功もなく。勘當ハ赦されず去ながら。詞左程に忠義の魂を見込で頼一大事。此功を立るならバ未來ハ勘當ハ其時に赦すべし。地先ゝ陣所へ來るべしと仰に。ハツト菊王丸。勘氣の願ひハ赦ぬ共。ゆるむ詞に。詞何事も御仰ハ背くまじ。早御供と立上る折から駈來る地遠見の軍兵教經卿へ御使。詞只今源氏の軍兵共。雲を霞の如く押寄。只一揉に潰さんと。息をもつがせず責かゝる。味方も爰を破られじと越中上總を始とし。地諸軍心を一致にし、死を輕んじたる太刀先に。寄手もあぐんで引退き。軍中へ射込だる數の矢先に結びし矢文。詞教經卿へと書たる上書。早く城中へお歸り有て諸軍に力を合させ給へと。地大臣父子の御仰早く御歸城有べしと。息つぎあへず差出す矢文。地ふ審ながらも取上て。逐一に讀終り。ムヽムヽと心一つに卷納め。菊王。來れと引連て何か樣子は白砂を踏立てへこそ歸らるゝ。地常ハ詠も荒磯に立並びたる陣所〳〵。亂杭逆茂木結渡し。梶原が郎等番場忠太。主の威をかる角菱も。矢筈の紋のいかゞ面。己が役所にのさばり入。詞ヤア家來共。何者にても怪しき物ハなかつたか。某も病氣と云立て戰場へは向ハず。此所を守る心ハハテいかな一騎當千の兵でも。陣所へ忍び込ふと思へバ大方一人身。

所を大勢寄て搦捕か討チ取か。夫レも汝等に働かせ褒美ハ身共が頂戴するナ。とかく末ノ世に名を殘すな。當前ン利潤が肝心。汝等も夜ル〳〵ハ少トそこらを尋ネあるき切リ捨の、首でも有バ拾ひ集めておれに見せい。よい堀リ出しが有ふも知レず、鎧甲馬の鞍でも拾ロひ次第に身が買イ取 隨分ンと目を聞せよと 地 欲と惡とハお家がら。太刀先トなハ目先にて。設る智謀フシ計略なり。地 折から駈來る家來共。詞 只今此陣ン所の前を大勢の者共。何かハ知ラず下り〳〵と聲〴〵に騷立。駕に乘セ通り候故。何分ン怪敷者と存是へ召シ連レ候と。地 いふ内かき込ム四ツ手駕。前ン後を取卷キ大勢が。下りゑや〳〵。エイサツサ 宙を飛ハして舁居る。地 番場ノ忠太聲を懸ケ。詞 ヤアうぬら爰をどこだと思ひおる。忝ケくも源氏の大將義經公の陣ン所間近カく。どつひさつぴと騷キ廻り。殊に怪しき駕の内。吟ン味せねバ通されぬ。サア早くそこへ引キずり出せと 地 てつぺい下しにきめフシ付ケられ 詞 ハイ〳〵御陣所の近所共心付ず騷キましたハ私共がぶ調法。又此駕の中なハどふも今ハ人に見せられぬ大事の太夫。追ッ付評判ンも三ケの津に響渡れバ其時ハ相知レます。何にも御さゝハりに成樣なうろんな物でハござりませぬ。地 お赦しなされて下さりませと口ゝ詫れど。詞 ヤア其内が見せられぬとハいよ〳〵合點の行ぬやつ原。何にもせよ駕の内夫レゝ早く引出せ。地 はつとこたへて家來共。簾を上て引キ出す。姿ハはでの袖なしや。禁の繩首筋にぐつとくゝりしわな結スび。長地 天窓かく手も儘なれど繩ハほどけぬ思ひ色形チハ希有にぐにや〳〵と。生ケ捕にあふ河太郎。フシ 水に飢て蹲る。地 番場主從興さめ顏。詞 コリヤなんだ。下りじやの太夫じやのと

ぬす故。何ぞ美しい物かと思へバ骨なしの猿見る様な化者め。ヤイうぬらじたいこいつハマア何じやさ、地問れてぬつと這出るやん兵衞。詞ハイ御存ないハ御尤。是ハ昨日此浦邊で生ケ捕ッた河太郎、東國でハ水虎と申てアレあの通りにくや／＼と致せ共、アノ天窓の月代へ一トしづくでも水が入ルと千ン人力、夫ハ／＼手にあふ物じやござりませぬ。ついど是迄ない、圖な見せ物、幸イ京の者が見て四條河原で見せたいと。直に直が出來て私が付イて登リ大金に致さにやならぬ。夫レで初日を出す迄ハ見せられぬ太夫故怪しい者かとお疑ひ。正躰イを御らふじたらお通しなされ下されと地いふに忠太も打點き、詞いか様珍らしい化者。ガシテ其力ラが強ふ成ル計リが藝か。イエ／＼昨日の朝から急に仕込ンで見ましたが、人を取ッたり化したりする程有ッてソレハ／＼器用はだ。先ツ踊が一チ番参ります。上ミがたで上手な者をあいつハけつじや／＼といふハ此水虎から始マつたと見へまする。ムヽ何じや踊リがゆく。ヤコリヤ面白かろ。サア／＼一トつ踊せて見い。ハイ左様ならバ初日チハ出ねど仕組ミじやと思ふて稽古の爲にやらつしやれ。地ヲヽ合點ンと風呂敷キから。手ン〲に取出す中形の。揃ロへの肩衣三味太鼓。何でも是で金設と。欲の心ハ知ラね共是非なくかゝる衣裝着せ聲も鹽干の沖ならでヲクリびちや／＼、出て座に直る。やん兵衞ハ罷リ出。詞トウザイ／＼。高カふハござりますれど役所の義にござりますれバ、是ゟ御免ン蒙りまして口上を以ッて申シ上ます。扨お目通りに控へましたハ此度御當地初、ての太夫かま崎ちよん之助。是ゟお目見へ御禮を仕ります。則チ爰元トで前藝と申まして。龍神鹽干の戯

に事よせ。いきちよん踊リと名付ヶましして少シ計御覧に入レます。なれ共是迄數多名人ン衆中下られまして。致し置ヵれました義にござりますれバ。定ノてお目だるいがちにござりませふなれ共御名人ン様方の義にござりますれバえよし柳とあしき所ハ捨置れまして。只よいや〳〵のお詞下タしおかれませふ末ヱ〳〵に至りましてハ本藝くゝり所〻ハ口上を以て申上ます。先ッ水ィ中の太夫前藝龍神ン鹽干の戯レにかゝります其爲の口上左様に思し召れませふ。二上リ哥初日十ッ五日廿八日。おらがてゝつぽのうちやる太鼓ハでん〳〵がらりのずい。サアテモえねしめかなえよんがいな。ざるねがはつても。ホ梅の木がふつの様でも。ホ尻がだん〳〵棚ちりでも。妻とさンだめたりやむめこかんヘタヘハアヽざんごつない。御代ハ納る思ふ事ハ叶ナふ。末ハ鶴龜御世の松。ヤレ末ハ鶴龜御世の松。詞扨是ゟ段〻早めて參ります。ハリトウ〳〵御褒美にどつと譽メた〳〵。ハヽコリヤ大分面白ロい。此見せ物を鎌倉の花水橋の川岸の芝居で見せたらバ。錢銀ハつかみ取リ。コレ何と見せ物先ン生。物ハ相談おらも半ン口乘セぬかい。夫レがふ得心ンなら此化物。おれに貢ッてくれまいか。おれに貢ル氣なら何かなしに金廿兩。イヱ〳〵夫レハどふり成リませぬ。是迄ついど出た事のない堀リ出し物。是で設ねバならぬ私ら。ハテ扨そふ云ッなやい。夫レ程大勢が付ィて行。雜用計でもたまらぬぞよ。廿兩が不足なら一向飛ンで五十兩。ハイ五十兩とおつえやるならノウ皆の衆　お侍ィのお頼〻じや負ヶてやれ。サアお金を受ヶ取ませふ。ヲヽ成程〳〵渡さふが今といふてハどふも仕にくい。暮レ方迄に此役所迄取にこい其時急ッ度相渡さふ。ハイ左様ならバ

暮レ方迄　此代ロ物ハ此儘にお前へお預ヶ申ます。サア〳〵何ヅれも、殿様後チ程サアござれと　地打連レてフシこそ歸りける。地跡に忠太が胸算ン用。詞ム、こいつをかふしてかふすれバ。一日に是程の上り。三十日入リ詰メるとヤ味い〳〵。ヤア家來共とつくりとく〳〵つて置ヶと。地いふ内來かゝる商人が。フシ打かたげたる風呂フシ敷包。詞ヤアうぬハ何者何ッれへ通る。ハイ私ハ御存シの餅屋の親父、敵にかちんハ吉ッ左右迚。毎イ日賣に胡桃餅、御贔員に小豆きなこ餅。フシカヽリ甘い砂糖の　御陣所へフシ參りますると通りけり。地次に天窓も撫付にいハねど見ゆる按摩取リ。直が安スふて長カい迚　梶原様の御氣に入。お逃ヶ足の早いのも下拙ッが療治のふじ三里。脚氣でお膝サが痛時。一チ度も二度も揉故に、今世間シでは梶原が二度の脚氣の高名と。申ますると口上を捻るも己がフシ商賣から。地跡へ出るハ、つまはづれ賤しからざるフシ女房盛り。地手に持荷箱りゝしげに。通りかゝるを。詞ヤア終に見付ぬ女商人。己レは先ッ何賣じや眞ッ直にぬかしあがれ。ヲヽこれや其様にとが〳〵ゑふおつゑやらいでも申ます、私ハ鐵磨モみぢんもくもりのない商人。地いかに軍サの最イ中じや迚お前もマア其様に。お髭も髪もぼう〳〵と。少トマア髭でも拔カゑやんせ。髭を拔カすが私が商賣陣所へ入込ム傾城は。延さすのが又商賣。四角鏡なお前でも、色にあふてハ丸鏡角トが有ッてハ悪ルいぞへ。詞次信様の奥方から御用で參る女商人地お通しなされて下さんせと。寫すフシ姿見鏡磨。行を透ず引とらへ。詞ハヽヽうぬ太いやつじやな、コリヤ知ルまいと思ふか建禮門院を奪ひ取んと姿を替ェて入リ込女。察る所敎經が女房ならん。ソレ家來

共搦取。地承はつて大勢が女一人を追ッ取卷。既に危き後から。ぬつと出たる以前ンの水ッ虎。當るを幸ィ投退〳〵。蹈ンぢかつたる有リ樣はふしぎにも又。潔ぎよし。地忠太が悔り家來共。ヤア化ヶ物めが何知ッて女の肩を持チだて。すつ込やつと呼はれど。通せぬ詞に大音上ヶ。詞ほうとをじのまつしはゑんべしこゝへ。かちのまつしはこつぱりにつなけ。たらこのちうのゑやうかくにせける。玄關番かつぱ。地べれんすたん〳〵とぞ呼はつたり。詞何ぬかすやらあちやも知レぬ畜生め。きやつめ共にぶち殺せと。地一チ度にかゝるを張退ぶち退。宙につかんで打ちらせば。立ッ足もなく迯ヶ行く家來。コリヤ叶はぬとかけ出す忠太。首筋つかんで引ッくり返し。ふミ付〳〵はがいじめ。梓が嬉しさふしぎさに。これさも交る胸どき〳〵。詞ホヽ御ふしんは御尤。地いで正躰を見せ申さんと。傍へに有合ッ手桶の水。顔のくまどりさつぱりと。フシ洗ひ落せば。詞ヤアそなたは菊王じやないかいの。ハア成ル程若年の時分ン御勘氣を受ヶ。先ン此主君の御ン目にかゝり。我ヵ魂を見込給ひ死後に此功立テよと有。御仰は受ヶながら地建禮門院擒と成給へば おのづと味方の鉾先キなまり。勝利の程も覺束なく忍び込んと思へ共。此處を通るに悒しが。詞陣所を守る此忠太強欲者と聞ュし故。姿を替て里人の手に渡り此所へ來りしが。案ンのごく陣所に留る最究竟地何卒今宵義經が元トへ入込。門院樣を奪取んと。悦ぶ内にお前の御難ン義。詞救ふも主從三ン世の緣。ガマタ奥樣には何故に。姿を替て敵方へ入込給ふ御所存は。ヲヽわらは迚もそなたの通り。何卒門院樣に逢參らせ。お供申さん其爲にかゝる姿も夫トの爲。ムヽ然らば某御供申俱

に守リ立奉らん。イヤ〳〵そなたハ夫の願ひの品。一トつの功。必身をバ大切ッに、わらハヽ是ゟ忍込何卒女院を御供せん。又逢事ハふ定の世の中。地随分ン無事フシでと立給へバ。地詮方涙に菊王も詞ハア、然らバ御意に随ひ某ハ。是ゟ密に身を忍バん。随分ン御身を大切に首尾よふ女院を。ヲ、合點。地さらバ〳〵と梓御前。陣中さして忍ヒ行。地様子聞キ居る番場ノ忠太ヤア門院を奪ハんとはのぶとい女と駈出しても。身動きならぬ。縛り繩。ヤア無念やと大音上。詞ヤア家來共〳〵參れ〳〵地のどんきよ聲。透ず口を菊王が。詞エ、やかましい腮骨。留る仕様ハさい究竟。主人の方便の此荷箱。地取出す水銀手に一ぱい。飲じと塞口こぢ明。ぐつと呑マせバ身をあせり。ヤア家來共何ッ國におる。出合〳〵といふスヱテ聲も、次第〳〵にきん〳〵と、詞エ、口惜しやと。地云たさもうん共すん共出バこそ。じたんだふんだるフシ計リにて涙。計が先立テり。地菊王ハ打笑ひ。詞サア是で口利氣遣イなし。是からハ又己をおれが身替り。水虎に仕立ッる幸イの。地伸た月代小刀でもまぬ冷泉剃毛の首筋へ。痛さも知レるは顔計。詞ハア、中カ剃ハマアできた。シタガ家來が見知ッた己が面。かへる仕様の細工ハ流〻地殘る水銀切リわらで。みがく忠太がコハリ銅面。すり付〳〵。すり付れバ。ヲクリ傍り。かゞやく顔の艶、ぬがす衣服を我體着かへるあたまも異形の二人。地迯ちる家來が方々から。歸るを菊王聲を懸。詞ヤア〳〵皆〻歸つたか。某ハ忠太が別腹の弟水虎の久治といふ者。十日計以前ンゟ夢見惡ルきが氣にかゝり。國元トゟ駈付ケしに無慙成ルかな兄忠太。河太郎に喰イ烝まハれ。是見よ衣服大小何もかも。地

殘つた物ハなきぞよ。兄の敵の此畜生。得たりやおふと取て伏。劣と思へ共マア汝らに見せた上。仕様摸様も阿波座の烏。泣ずと思案してくれと。いふに皆々悔りし。ヤア扨ハ左様で侍ふかや。其御咄しを聞に付。詞今の今迄あひもなふ。呵つにらそつにくていな。地お面をやつぱり見る様なと。各目と目見合て。水虎に喰はれし悔ミ泣。水虎と伏スといふ事ハ此時ゟも云イつらん。地我カ身の上を我カ前で。我と云たさ知ラせたさ。口をおしへて家來が傍いとなつかしげに立寄レバ。詞ヤア御主人を喰た其味で。また我レミをせしめんとや。につくい水虎め。お主の敵地惣ど寄ッてなぶり殺しと。家來が合點手ンミに棒ちぎり木。振リ上ノ\脚腰分カず擲のめせと何事もいハれぬ口の恨めしく。歌哥現在敵ハ夫レそこに。連レの女ハ陣ン中へ。忍んでゐたといふ身ぶり。いたい體で去て見せても。すいの通らぬ家來共が。顔見てハ泣ないてハ見。身ぶりもほつと草臥て。通せぬ同士の主従が。神ミならぬフシ身ぞ是非もなき。文彌地早暮レ合の約束と。やん兵衛先キに見せ物仕。お約束の五十兩。サアノ\早ふナヲスお渡しといふに。菊王尤ミ。詞金渡さんと思へ共現ン在兄の敵の畜生。金設の種にも成まじ。直ク様汝に渡す間。諸人ンに見せて耻面をさらすが兄へ追善供養。ソレ家來共國境迄送クつてとらせい。ハア、畏つて立チ上。詞ホイ金受ケ取らふと思ふたに。ア、儘よ併シ四條で見せたらバ又何程設ふも知レぬ。道ミ評判取ル爲なればはやし立て行ふじやないか。地是ハよかろと笛太鞁。こなたハ家來が主人ンの仇。兄の敵の其水虎早追ッ立よと菊王が。下知に割竹擲立。打立ノ\追イまくられて去ほノ\と。立はに迷ふ

濡鷺の。いづくをさして行ぞ共。云ハれぬ事も知ラざる家來。にらむ菊王泣ク忠太。中に立ッたる口上がこぢ付ケながら押シつよふ。躰ハうき物つたい物取リ付所を知ラせのむち。口でいハれず目でおしへ仕形ハルフシですれど。悟らぬハ フシカヽリ 暫しの内に中カ剃リの顔はびか〳〵箔だらけ化鳥の別れ。取リ濟マすふてきの鑑菊王が。思案シて呑マす水銀の。聲を留られ出行水虎。いとしかハいの子を取リし。報ひしられて見せ物に。いづくをあてにうられ行。しるべの方ハ定めなき。萬ン年橋も己が淵。己レをせむる見せ物に賣ッれ。行こそ三重

隙行ク駒の足早く元暦二年シ彌生の空。フシ春めく野邊の。花曇飛かふ蝶の。牟禮高松長閑き景色引キかへて源平互イに立別れ。今日矢合セの八島の戰ヒ。入リ江を隔一ト構へ要害の地を瓜生が岡ッ。義經公の陣シ所にハ去年の秋ゟ人質の。建禮門院傅て饗應愚もなかりけり。地 宿直の局下女婢一トつ所へ寄リ集り。詞 ナント皆樣。門院樣のお伽の役目。都から遙々と四國の果迄お供申。剩軍サの中カ。大勢の殿達チが。拔ヤ身振リ立て居る中カへ。無用心シな事でハ有ルぞ。サイノ。軍がせハしう有ッても詰マる所ハ色の世の中。次信殿の奥方も御亭主の跡追って。都迄見へてゞ有たを。幸イ門院樣のお伽に迚。此八島へ來てなれバ。定イて夜ハ亂レ軍サ。地 時の聲が上るであろとフシ噂半バへ一ト間ゟ。女房盛りのぼつとり風誰レが子持チと陸奥の　佐藤次信が宿の妻信夫といふて才發者。しとやかに立チ出。詞 ヲヽ皆樣。又例の浮ハ氣咄しか。門院樣の御用が有ル。サア〳〵奥へといふ聲に。地 譏つた事の氣味悪ルく。アイ

と一チ度に立て行。地取り次の侍イ罷り出。詞門院様へ用事有迚。能登ノ守敎經と名乘り。女中一人ン參られたり。いかゞ仕らんと伺へば。ム、何じや。門院樣に用有りと。女中が能登ノ守と名乘ッて來たか。ム、我君の御留守なれ共。苦ふない是へ通せと。地云付ケやつて手ばしかく一ト間の内へ入にけり。地色大紋ン烏帽子引ッ立て腰にハ刀流石實。能登ノ守敎經と。名乘りハ月の俤を。水に移して弓張りの。梓御前ハ敵の陣ン所。おめす臆せずフシ打通り。詞誰ッ頼もふといふ聲に。フシ襖押シ明信夫の前。何とか思ひ懸ケ烏帽子。素袍袴いため付。ゑとやかに出向カひ。詞ム、あなたが能登ノ守敎經樣でござりますか。私シハ義經の御内佐藤三郎兵衛次信と申て。一ッ騎當千の侍イ。門院様へ御用の趣キ、仰聞ケられ下さりませと。地夫レと見懸て白化ハ。實呼ヒ聲に。應聲鸚鵡返フシと見へにけり。地梓御前も惡ルびれず。詞ム、こなたが佐藤次信よな。此敎經參る事餘の義ならず。義經が爲に建ン禮門院囚れの御身。然ルに此度此處へ。御供申來タられしハ。返し給ハる心ン底と。思ふに違ふ義經の所存しいまだお歸し申されねハ御迎の爲夫ト敎經が來る筈なれ共。けふが軍の矢合セにて取込ミの中なれバ。名代の此梓。サア門院様を歸さるゝか。但シ御迎ひの軍ン勢差向ケふや。サ返ン答次第といふハ夫トの口移し。異義なくお渡し有レかしと。地つぼ〳〵口の皺面ハ男共見へ女共いづれ劣らぬ山吹の。フシ咲ならびたる風情〳〵。地信夫の前も會釋して。詞何かと存ずれバ。門院様の御事。成程〳〵。お返し申スすはお安い事。したが義經様の御了簡かよハき御ン身を浪の上。あすを知ラぬ平家の一チ門と。倶に朽果給ハんハ。御痛ハしと思ふ故。お

留め申スもあなたのお爲、お歸り有て御一門へ。此趣キを御披露こいハせも果ず ヤア舌長ヵしお內義軍ハ時の運次第。何ッれが勝ッ共負ヶる共、まだ定マらぬ軍サ半バ。明日をも知ぬ平家こハ、何を目當テ何を證據。そふ聞てハ猶更に。お供して歸らにや置ヵぬさ。地 奥を目懸ヶて駈入を、立塞つてコリヤどこへ詞 門院様を預ヵり申ス 守護の役目ハ身ふ背ながら次信が女房信夫 奥へ踏ン込奪取んこはコリヤおかしい。ならバ手柄にこ ヲ、精兵の聞ヨへ有ル敎經が女房梓。敵の陣所へ只一人リ來るからハ覺悟の前 邪魔する逆すご〳〵さ。歸りそふな女さ見たか、サ退て通せバ其通り 妨仕やれバ手ハ見せぬさ 地 行ヵを押サへてどつこへどこへ。詞 強い自慢の張弓で 詞ににべの內義様 筈の違ふた尖矢もがり矢 地 夫トの威勢を雁股で奥へ行ヶさはめつた的ちつさ早氣でござんしよさ 指込ム 手先キ振リはらひ、詞 いハれぬ意地を立、髮尾髮 口のこれいは奥州駒 輪乗に丸ふ納メんさ 地道で行ヶバ付キ上り、鐙踏ンばり支ても、かくの違ふた駻馬じや〳〵馬 踏ミ馬御免ンさ云捨て又駈ヶ出すを後ロか。コリヤ〳〵〳〵さ引、戻

地 顏ハ上氣に白粉の色も變じて紅梅や、盛り爭ふ糸櫻 風にもまるゝ風情なり 詞 ヤレしづまれ兩人いふ事有リさ一ト間か、地 障子押シ明建禮門院、せり合ふ中を隔の垣二人ハハット。猶豫の躰イ 地 色門院御聲されやかに。詞 ヲ、今に始メぬ敎經が深切 軍サ中のせハしき中ヵに、さま〴〵の心遣ヵひヲ、嬉しいぞや。フジ去ながら。詞 敵ながらも情ヶ有義經、心を付ヶての介抱。少シも案ンじる事ハない。地 わらハが事ハ苦にせず共。天皇母上始メさして一チ門の成リ行を、よきに賴さ傳へよやさ、胸迄滿くる御淚 スエテ

包兼させ給ふにぞ。夫レと悟つて梓御前。詞仰を返すハ恐れながら。かゝる時節に片時も。敵の手に置ましてハ。イヤ〳〵。何事も胸に有。兎や角いふ程思ひの種。そなたハ早ふ立歸り 無事な樣子をしらせてたもと。地重き仰を是非に共。岩に碎くる瀧川の我レも涙を押シぬぐひ心を殘してフシ立歸る。地心細くも門院ハ涙に。くれてフシおハせしが地足手まとひの自ラ故一ッ門の人〳〵の心遣ひ。少心をゆるめんと氣強ふいふてハ歸せしが。思へバ佛ッ神ト三寶にも見放されたる身の行衞。いつか昔シに立歸り。雲井の月を詠んと。御身をかこつ御述懐。空にしられぬ春の雨 絞る袂の潦 御心根を察しやり。信夫の前も諸共に。フシ涙果しハなかりけり。地濱手ハ軍サ眞最イ中 遙に聞ゆるフシ時の聲ハソト地驚く信夫が 門院猶も心せき。詞軍サの樣子ハいかゞぞと伸上れ共地八重霞信夫心得申シヽ。詞あれなる樓に物見の用意 地沖を見晴す遠目鑑ヲクリいざさせ給へとすゝむれバ。夫は幸イ餘所ながら見るも心痛共。見ねバ猶更胸苦ルし。いざ迚御座を立給ひ。上る梯子や高樓に千里トを握る遠目鑑ヲクリ遙の先もあり〳〵と手に取ルごとく三重へ見へにけり

春霞八嶋ノ磯

謡一セイ舟と陸との戰ひに。矢叫びの音ト鯨波。物すさまじき。氣色かな。比ハ彌生の春風に。江戸赤籏白ラ籏吹キ流し 霞彩る大空や。鎧の金ナ物きらめきて。照日まばゆき八嶋の磯。源平互イに矢先キを揃

へ。船を組ミ駒を並て打入〳〵。足なミに鑣浸して責メ戦ふ。地何とかしけん義經公。持ッたる弓を取リ落し。浪にゆられつ引ヵ汐に連レてフシ遙に流れ行。地敵に弓を取ラれじと駒を波間に游せてヲクリ敵船近ヵくなりければ。平家の軍兵是を見て。我レおとらじと船を寄セ。熊手に掛ヶんと取圍既に危く見へにける。信夫はこなたに身をあせり。譬千金ンの御シ弓とても御命に替ユべきや。捨させ給へとつぶやく內。なんなく熊手を切リ拂ひ。終に弓を取返し本トの渚に打上れバ。地平家の方ガ小船一ッ漕寄セ。浪打際におり立て。陸の敵を待チ懸しハ。あれこそ平家の侍イ大將。惡七兵衛景清ぞと。門院御シ目も放ナし給ハず。源氏の陣ンガ駈向ふ武者ハ慥に覺へ有ル。箕尾谷ノ四郎國俊殿と。贔負〳〵に氣をもミ上ゲ堅唾を呑ミて箕尾谷ハ。太刀打折て力ラなく少シ。汀にフシ引キ退く。詞景清追ッ駈國俊が。着たる兜の錣を抓で後ロへ引ヶバ。箕尾谷も。身を遁れんと前へ引ク。互にゑいやと引ク力ラに。地アレ〳〵鉢着の板ガ引ちぎつて左右へぱつとぞ退たるは。勝負分ヵたぬフシ互角の軍サ。地門院信夫ハ一心ふ亂。詠めやつたる沖の方ッシさも花やかに。餝り立。縵幕打ッたる御座舟に。いとも氣高き。緋の袴。半太夫腰も柳の五ツ衣年ハいざよふ月の顔。雲のびんづら。霞の眉。日の丸書たる陣ン扇。杖にはさミて舳先に立テ。陸を招いてフシ入にける。地アレこそハ自ラか后に立チし其時に。千人ンの中ガも。撰出せし玉虫迚美人の聞へッシ隱レなし。詞源氏の方にアノ扇、射へき人の有ルやらん。地されバ候。武士の家に産れて駈鳥。的矢、皆ッシカヽリ覺エへ有ッ去ながら。源平両家の晴業ハ誰レなるならんと見る內に。軍サにかちんの直

垂に。詞アレ緋威の鎧着て。地廿四指たる截生の矢。重籐の弓の眞中握り手綱かいくり。遠淺にしんづ〳〵とフシ打入る。地兜を脱だる武者ぶりハ。江戸詞下野の國の住人。那須ノ與市宗高殿。地軍の勝負の試と。兩陣互に詠め居る。こなたの二人も心の祈念。矢比になれバ宗高が。きり〳〵と引絞り。切て放せばあやまたず。要ハ船にとゞまりて地紙は風に。へんぽんと。空に流るゝ龍田川 詞イヤ〳〵どつと譽る聞。地風にさそひて聞ゆれバ。心〻の門院信夫。ハット計りに遠目鑑。落せバ忽雲霞ありし。姿ハきへうせけり。地サア〳〵軍ハ源氏の勝と。信夫がいさめば門院ハ。傾く運の知せぞと。胸に答へてほいなげに。樓おり立しほ〳〵と。奥のヲクリへ一間へ入給ふ。地信夫ハ御跡見送りて。女の情の跡や先案じ。詫たる折からに。又も聞ゆる鯨波猶も様子の見まほしく落たる目鑑取上て。かけ上らんフシとする所へ。地物見の軍兵一ッさんに駒を早めて馳來り。詞ノリ今日の戰ひハ味方十分勝軍。死物狂ひと平家の大將能登ノ守教經。音に聞へし矢續早。義經に見參と彼強弓に大矢を番味方の陣へかけ入れバ。大將お命危き所に。後に扣へし次信殿。お馬の先に駈塞り眞逆樣に射落され。地其跡ハ亂軍と云捨フシ駒を。引返す。地信夫ハ夢共辨へず。其儘そこに倒伏前後。ふ覺に見へけるが。漸心取直し。長刀かい込足も空。駈出んずと向ふ所。御凱陣と呼つて。御大將義經公手負の次信楯に乘せ。跡に隨ふ佐藤忠信。諸軍一度に立歸れバ。長刀投捨信夫の前。夫の傍に走り寄さま〴〵。いたハり介抱す。地判官涙に呉ながら。枕の元に立寄り給ひ。ヤアい

かに次信、詞そも奥州を出るな。活るも死スるも一ッ所とこそは契りしに。義經が命にかはりて先ヘ立
事の、フシ便ンなさよ。地何事にても思ひ置ヶ事有ルならバ申し置ヶよとの給へバ、次信は目を開き、君の
姿を見上見おろし。詞いなくてフシはら〳〵涙 地忠信立テ寄コレ兄者人有リ難い君の仰なせお請申さ
れぬ 權五郎景正ハ敵に左リの眼コを射られ。其矢も拔カかず當の矢を射返し 末ッ代武勇の名を殘す。
いかに深ヵ手なれバ迚 君の諚意に返ン答の。ならぬ事はよもあらじと態とフシ勵す詞のはし。地次信
は起直り 詞ホヽ我レも奥州五十四郡に、弓矢を取ッてハ私なし 何ン條其景正ごときに劣べきにはあらね
共 君の上意の有難さ 胸に涙の込ミ上て御ン返答も遲なはる。地古郷を出ッるな命は君に差上ゲたれバ
露塵程も惜シからず 詞心がゝりは十束の御劔ンニ 再び都へ入レ奉らんと我君と心を合せ、御劔ンを渡し
給はらば 天皇門院の御行ッ末身にかへて守護なさんと。能登ノ守の當テ名にて數通の矢みを送りしに。
返ン事はなくて此恙だられ。ならぬと云イ切ル返答か。地御劔も返らず我君の 御行末の繁榮を見奉らで
死ヌる事。黄泉の障りフシ是一トつ。詞コリヤ女房國へ歸つて兩親に、次信が最期の様子委細語らバ嘸悦
び、幼少の悴次丸隨分守リ立人トさなし。君の御用に立テてくれ 地といふ聲涙に噎返り忠義一チ圖の武士
も道恩と愛妹脊の名殘 女房はせき上〳〵 國に居る內夢見の惡ルさ、心にかゝり遙々と跡追ッて來たかひ
もなふ、けふ別るゝと知ルならバ祖父様のお呵リ受る共、次丸を連レて來て親子の別レもさせふ物、成人
の後チ此母を嘸や恨ミんふ便ンやな。せめて我子の智恵付迄活ながらへて下さりませ。詞コレ申忠信様

地どうぞ仕様ハ有ルまいか耆婆扁鵲ハ今の世にない事かいのと取リ亂し泣涕こがれ伏シ沈めバ。有リ合ッ軍ン勢雜兵迄鎧の。カヽリ袖をひたしける。地大將御聲かきくもり。妻の歎キを見るに付ケかくと傳へ聞ヵならバ。父母の愁傷思ひやる。詞出ッ陣ンの折からも。くれぐヽ頼ミし庄司夫婦へ。何と云譯有ルべきぞや。地汝ジなくんば義經ハ敎經が矢先に當タり。泉下の鬼と成べきに能ャ家來ハ持ッべき物。我爲の命の親。立身出ッ世高名も命有ッての上ェの事。其身を捨ッる忠義にハ何を以て報ぜんと。御手をのべて次信が額を撫させ給ふにぞ。骨にこたゆる有がた涙。身の苦しミも打忘スれ御手を取ッて押戴きくヽハア有がたや本ン望や。詞泣な女房。軍サに立て討チ死する者數も限キらぬ其中カに。次信一人我君の。御膝元トにて有がたき。御介抱に預カるは。弓矢の冥加武士の譽レ。此上の有ルべきか。コリャ忠信返すぐヽも我君の御身に添て忠義をつくし。十束御劔を取リ返し君の御心休メてくれ。云イ置クは是計リと。地いふを最後の詞にて。三十二歲を一チ期としフシカヽリあへなく息キはたへ果たり。ワット泣出す信夫が泣ぬ顏する忠信が。拳を握キる溜メ涙餘所の見る目も哀レ也。地御大將も諸共に。ふ覺の涙にくれけるが。詞コリャくヽ忠信　汝ハ信夫諸共に。次信が野邊の送り。主從別れの寸志ぞと。地御召シ料の駒引出させ。詞そも此馬ハ大黑とて秀衡が祕藏なりしを。義經へ送りしより宇治川。一の谷を始メとして一チ度もふ覺取ッざる名イ馬。義經五位に至る時此馬に乘たる故。太夫黑と號しを次信兼て望しかど。朋輩の憚を思ひ是迄ハあたへざりしが。冥途の旅の餞別と地引せ給へば。ハヽハット忠信信夫が有がた涙。

並居る軍兵此君に。命を捨るハ惜からじと感じ入たる御仁徳。讃州牟禮の大墓に、タヽキ石の印の朽やらぬ。ナヲス 勇士の塚に並だる馬の墓迚隠なし。御大將ハしほ〳〵と入せ給へバ忠信は、信夫と倶に諸軍勢楯を。手がきの野邊送り洲崎の。寺へと急行。地 其日も暮て照もせず。曇もやらぬ春の夜の。本フシ 朧月夜も世に連て。いと物すごき。フシ 浦景色。地 能登ノ守敎經ハ弓矢手挾只一人。義經の陣屋を目懸しんづ ヲクリ 〳〵と。步しハふ敵にも又 フシ すさまじゝ。地 内の様子を窺へバしづまり返つて音もせず。ハテ 合點行ずと。蹈ふ内。奥ゟ洩くる管絃の。音心意を すます計り、敎經ふ審晴やらず。詞 ム、義經が軍勢ハ武藏相模。出羽奥州。皆東國の荒夷。管絃に達せし者あらじ 然るに今聞ノアノ樂の。呂律程よく調ひしハ。扨ハ京家の士共。源氏へ降參なせし者少からずと覺たり昔。漢楚の戰ひにさしもの項羽討負て。漢の軍中楚の歌を諷ふを聞。楚の軍勢悉高祖に降りしを計たり。討死せしと。記したり。所詮叶ハぬ戰ひと天の知せか但又。詞 義經が計略成か。アラ快からずやと 地 持たる弓を杖に突後の方を。見返れバ。爰の コハリ 山〻かしこの谷〻。一度に燈す松明ハ。宇治の川邊の螢火もかくやと計り義經の。敵の英氣を取挫智謀ハ今に云傳へ。八栗が嶽の山續源氏が峯と。名に高し。地 敎經ハ少も動せず。詞 小勢と侮る源氏の軍兵。跡ゟ加勢の來るよな。何萬騎寄る共シヤ何程の事有んと。地 奥を目懸て行所に。一間の内ゟ高聲に。詞 ヤア〳〵能登ノ守敎經卿義經がいふ事有暫し〳〵と呼はつて。烏帽子狩衣爽に。儼然と立出給ひ。義經が擒となせし建

禮門院。世を見限キつて御自害。御書キ置キの此一ッ通。サ拜見有と 地 恭〻敷。手づから指出す白ラ木の三寶。敦經は狂氣のごとくチエ死したり口惜シや。かく迄心を碎たる我ガ存ン念ンも水の泡。恨〻の及バ請取と。火雷神の荒レたるごとく。切ッて掛れバ義經公奥の間さして迯入たり。ヤア比興之義經迯ゲる迚迯そふかと。駈入一ト間の御簾卷キ上。立出給ふ建禮門院見るゟ敦經二度恟クり。ハアハット飛去さり。詞 扨は御安ン躰にてましますか。地 去ルにても義經が與へし一ッ通。合點行カずと押シ開き。詞 何々院宣の事。安ン德天皇建禮門院。義經が願カひに任せ。赤間が關キにて入水と披露し密に御命助くべし。者ハ萬ン事義經が。心任カに計ラふべき者之。仍て。院宣件の如し。元ン暦二年二月五日。地 と讀ミも終らず能登ノ守。詞 扨は義經兼てゟ法皇へ奏問し。御二タ方の御命助ケ參らす所存成ルかと。詞の内に義經公。悠々と立出給ひ、詞 ホ、敦經卿能キ推量源平互イの意恨に依て。天皇國母の御ン身を苦しめ。神代ゟ傳ハりし御寶を失ハん事。歎イても猶餘マり有。地 天下の爲にハ義經が命一トつは塵芥。詞 イザ敦經卿。此義經が首を討チ、意恨を晴ラし其上にて。寶劍を事故なく。禁庭へ納メ給ハらバ。死後の本ン望此上なしと 地 首差延てフシ座し給へバ。地 門院涙にくれながら禮義即き義經。天皇始メ自ラが身の上迄。さまぐ\の世話苦勞。私の意恨ン捨。和睦をなして寶劍をスエ渡して。たべとの給へバ。仁ン義の鑪鞴に金ン鐵の。勇氣もとろけ敦經卿。詞 ホ、敵ながらも健氣なる義經。我も智勇ハおさらじとはかりごとをめぐらせ共。入道のあくぎやく宗盛リ父子が惰弱の振ル舞。地 天の惡む平家の一チ門。なす事する事左リまへ。鬼神の助を祈らんと

たんせい無二の大願ンも。宇佐八幡ンの神勅に。詞何祈るらん心づくしにとの御歌な。叶ナハぬ事ぞ知ッたれば。とくな思ひ切ッたれ共。地縁に繋がる安徳帝。十ッ束の御劍ン諸共に海ミの水屑となさん事。一チ門の罪を重るなれバ。教經固得心ンならず。詞其上に次信が数通の矢し。マッタ義經の神ン文を見る上ハ。天皇門院の御ン身の上頼んとハ思ひしかど。意趣有ル中をおめ〳〵と十束の御劍を賄賂で。降參せしといハれてハ末ッ代迄の恥なれバ。頼ミハ頼仇ハ仇。次信を矢先キに懸。是迄の意趣を晴ラした上と。一チ圖に思ひ極メしなあつたらおしき侍イを殺せしも武の勵我憤り立たれバ義經に對面遂。打明ケて頼マんと。思ひて陣ン屋へ入リ込ながら。地謀トハ軍の常僞リも有ランかと。兎も角と狐疑せしが。詞只今の心ン底見る上ハ。イザヤ御劍を請取よと。箙に隱せし十束の御劍ン差出せバ義經。ハット飛しさり。源平両家の受ケ取渡し。劍ハフシ袋に治る世の中。詞此上は義經が命にかへて天皇門院。能キに計らひ奉らん。ム、併しながら頼リ朝が。得心ンせずば何と〳〵。ホ、能御咎去リながら。地日ッ本計リに日ハ照ず。得心なくバ唐高麗。韃靼しやがたらしやむ阿蘭陀切リ隨て天皇を。天子と仰ぎ奉らん。教經卿も倶々に力ラを添エて給ハらんや。詞イヤトヨ教經存命バ。命措との降參ンと世の人口の口惜し。地是な我は海ミ手に歸り一チ門の人〴〵の。自害を見屆ケ我レも又。快く生害せん。詞天皇ハ兼てな童の菊王に申付ケ。アレなるしげミに忍ハせ置ク。其寶劍を割符としてお迎へ申されよ。教經さらはおさらバと。地出る英雄見送る名イ將。歎かせ給ふ門院を傳フシ奥に入リ給ふ　地教經卿ハしづ〳〵と立歸るフシ向ふな。地梶原平次景

高家來引連どつさ駈寄。詞 敎經を助返すハ義經迄が合點行ぬ。一の谷にて贋首の。耻を雪がん家來共。かゝれ〳〵さ取卷バ。物をもいハず能登守大手をひろげ立向ひ。當るを幸人礫。ばらり〳〵さ投ちらし。濱手をさして三重へ追て行。地 海まん〳〵たる八島の磯。江戸追つまりくりつ戰へバ。さしもの大勢たまり兼四方へはつさ落て行。地色景高も途を失ひ。迯行がんづか引摑。七八間投付れバ。磯邊の岩に打付られ。みぢんに碎。飛ちつたり。地 梶原が郎等安藝太郎同次郎腕に覺の百人力我ゝ兄弟組付バやハか仕留で置べきやさ。廣言吐て立かゝり。兩方ら組付バ敎經につと嘲笑ひホヽ志ほらしき力自慢。修羅の衢の案内に。うぬら二人を召連んさ。地 兩手に總角ひつ摑、向ふを急度見渡せバ。判官始源氏の勢。天皇門院守護參らせ。餝り立たる籏差物。龍頭鷁首の艤。君の御座舟余所ながら見奉るも此の世の名殘。我は冥途の門出さ二人を小脇に引挾。海の深みの飛入って名のミぞ殘る八島の浦。ウタイ 鯨波さ聞へしハ浦風〳〵けり高松の〳〵朝嵐さぞナヲス 成にけり。地 跡はいづこの舟歌や。舟哥 舟がヤンラ目出度イナ、御代ハ目出たのノンヱイソレ。若松様よ。枝もヱイ〳〵榮る。ヨウヱイ葉も志げる。ナヲス 地 千年の蔭や君が代の。源氏の武功いち志るく都の。方へさ漕出す。

第五

地 夫レ形は百年の奇舘たり。名ハ萬シ代の嘉賓なり。能登守教經の童菊王丸。主君の詞に隨ひて寳劍シの劄リ符にて天皇を義經に渡し。敎經卿も其後チに海中に身をしづめ。はかなく失セさせ給ひしと聞ッよ都に立越ヱて。源氏ノ士イ一人く共討留メ其上ハ自害して。冥途の主君に仕へんと思ひを碎く粟田口。平家一チ門の生捕リの人〻。けふ鎌倉へ送るよし街の風聞シ。是幸イ死物狂ひに切死せんと、フシ小蔭に忍ぶ間もなく。地 梶原平三景時馬上ゆかつに打通る。身がるに出立ッ菊王丸。太刀拔そばめ踊リ出。詞 能登守が郎等菊王丸。主君の最期の御供に。源氏の奴ッ原一人成共切リ死にして冥途の供。地 覺悟ひろげと切まくれバ。思ひがけなき臆病侍イ立ッ足もなく逃て行。流石名を得し梶原平三。詞 ヤア推參く小童め 相ト手には不足なれ共。刄向カひ立チの志ほらしさ。イデ某シが手にかけて此世の暇取ラせんと。地 廣言はいて打込ム太刀。身をしづんで丁ど受ヶ。はらへバ付ヶ込。上段下段。手練の梶原。血ッ氣の菊王。踏ミ込〻打太刀に肩先。四五寸切下げられ。さしもの梶原たまり兼。逸足出して逃ヶ出る。地色 ヤアいづく迄もと菊王丸。太刀拔キフシかざして追ッて行。詞 暫し〻と聲をかけ。地 御大將義經公。御シ供は武藏坊。龜井片岡江田ノ源藏引連レて立出給ひ。詞 敎經の弔ひ軍サ。討チ死せん志シ神妙く去リながら。汝が死せば敎經の奥方。梓御前誰レか育給仕せん。最期の供をせんよハ命存命敎經の。跡問弔ふが此世の忠義 天皇女院諸共に。北嵯峨にて御出ッ家有レバ。梓御前を伴ナひて。姿をかへて一チ門の追善供養怠るなと。地 道理の詞に菊王丸 詞ハ、仰に任せ惜からぬ命。存命へさまをかへ。主君を始メ亡人の。菩提を問も問はる

ゝも。討ナうたるゝも善知識と。地髻ふつつと押シ切て。早フシお暇と出て行。地いざや人〴〵鎌倉へ立越ヱて。勝チ軍の樣兄賴朝へ訴へんと。先キに立て打タせ給へれ人〴〵。ハット御シ供の引キ馬弓鑓耀かす。源氏の威風福は內。納メたる御大將鬼をも拉武勇の鑑。閾の外の國迄も隨ひ靡く白ラ旗の。其源トの末ヱ永く流レつきせぬ御代の春。筆に留てなか仲に治る。國こそ目出度けれ

明和八年辛卯正月廿日

福內鬼外戲作

補助　吉田仲治

右之本頌句音節墨譜等令加筆候
師若鍼弟子如縷曰吾儕所傳泝先
師之源幸甚

名代　薩摩屋小平太
座本　豐竹新太夫

江戸書肆
本石町三丁目
山崎金兵衛

九段續役割

第壱
口　豊竹加賀太夫
中　豊竹要太夫
切　豊竹綱太夫

第弐
口　豊竹蔦太夫
切　豊竹那賀太夫

第三
口　豊竹浅太夫
切　豊竹麓太夫

第巳
口　豊竹鶴太夫
中　豊竹住太夫
奥　豊竹音太夫

第又
口　豊竹綱太夫
奥　豊竹那賀太夫
[illegible]　豊竹音太夫
　　豊竹杉太夫

第六
口　豊竹桐太夫
切　豊竹住太夫

第七
豊竹杉太夫

第八
口　豊竹桐太夫
切　豊竹鱸太夫

第九
口　豊竹浅太夫
切　豊竹要太夫

三弦　鶴沢吾八

千秋萬歳楽

嫩窠葉相生源氏

座本 豊竹東治

第壹 鞍馬山の段

詞 抑是は。鞍馬の奥僧正が谷に。年經てすめる。大天狗なり。先御ン供の天狗は。誰々ぞ築紫には彦山の豐前坊。四州には。白峯の相摸坊。大山の伯耆坊。いづなの三郎富士太郎大峯の善鬼が一ッ黨葛城高間。よそ迄も有ルまじ。邊土においては比羅横川。如意が嶽。我慢高雄の峯に住で。人トの爲にはあたご山。霞とたなびき雲と成ッて月は鞍馬の僧正が 谷にみち〳〵峯を動かし嵐木枯瀧の音天狗倒しはおびたゝし。詞 山ン河も一チ同に動搖すヲロシヘ魔界の習ひぞ。醜しき。地 夫レ若作障碍卽有一チ佛ッ魔境。杉の梢や直ならぬ。我慢增上慢心ンの異なる相は顯はせ共。固魔佛一チ如にて。是ぞ勸善懲惡のフシ教の。道ぞ奥床し。地 僧正坊仰出さるゝは。詞 平家の輩威勢にほこり。惡逆日々に增長すれば。亡さずんは有ルべからず。旁いかゞ思はるゝと。地 聞ョもあへず白ロ峰の相摸坊つゝと出。詞 仰の通り平家の我ヵ儘。源氏の武士に力ラを添て亡さんが。大將なくては叶ふまじ。今漂泊の兵衛ノ佐賴朝。此鞍馬の牛若丸を取リ立テ。平家を亡ぼし給はんは。地 いかゞあらんと申シける。僧正坊打點き。詞 ホ、其義は兼て存ジ付。其用意申シ付ヶたり。得と世上の有リ樣を。見聞の上ュの事と。地 仰もいまだ終らぬ所へ。溝飛天

狗泥田坊。一ッ散にかけ來り。詞仰に任せ京六波羅、宗盛が舘を窺候所。晝夜を分ヵぬ我ヵ儘おごり、酒宴遊興に身をゆだね、取ル所もなき仕合せと。フシ一チ々言上申ス折から、地又注進と呼はり〳〵、風に任ヵせてへう〳〵と。木の葉天狗の散安坊御ン前ンに罷出。詞源トの牛若丸追付ヶ是へ見へ候と地申ン上ヮれば僧正坊。詞ホヽ、幸ィ々ヤア〳〵何ッれも、牛若が武藝の程を試ん。地早く〳〵と下知すれば、畏つて突棒莘股、てん手に長ヵ柄を携て。各木陰に身を隱し。フシ今やおそしと待チ居たる。地爰に源ン家の大將軍ン左馬ノ頭義朝の末の子牛若丸と聞ヘしは。平治の亂に父義朝討れさせ給ひしより、からき命を助ヶられ鞍馬の山に追ィ登され有ルるにかいなき日影の身何卒平家を亡ボさんと思ひ立ッたる一ト筋にフシ夜毎に通ふ、僧正が。谷の岩角相ィ手取リ劔術稽古手の內を樣す心の直燒刄、小太刀を拔て立チ向ひ詞父の敵平家の一チ門。地思ひ知レと切付ヶれば。さしもの岩角眞二つ。物の見事に切割しは。凡人ンの業とは見へざりし。詞ホヽ、今こそ本望達せしと。地悅び給ふ御顏ばせ。石に殘りし刀跡末世の今に至る迄鞍馬の奥にフシ隱ーなし。時しも俄に風發り、山谷一チ度に鳴渡り、天狗礫のばら〳〵と物凄しき。フシ次第々。地其時牛若少シも騷ず。詞ム、狐狸の所爲成ルか。又は天狗の業にもせよシャ何程の事ヵらんと地嘲笑て立ッたる所に。待チ設たる天狗共八ッ方ゟ突かゝるを。詞小太刀を拔ィて渡リ合ィ飛こへ、地刎こへ切立ッるは。不敵といふも。フシ愚なり。地さしもの天狗も叶ヮはじと一チ度にはつと逃ヶ失れば詞ヤ、ア卑怯成ル天狗共。鼻を挫でくれんずと。地追ッかけ行ヵんとする所に。詞ヤア〳〵牛若暫し〳〵僧正坊

が見參ンせんと。地顯はれ出ッれば牛若丸。小太刀打ふりかけ向ヵふ。僧正坊は脇目もふらず唱る秘文に
さしもの牛若。五躰すくんで動れず。チヱ無念ン〳〵と氣をあせる。詞ホヽ善哉〳〵奢る平家を亡し
て。再び源氏を起さんと頼もしき志を感し。地我レ其方に敎へき事有。近ヵふ〳〵と招き寄。詞イ
ヵニ牛若。汝平家を亡ホさんと。劍術輕業手練する志シは健氣なれ共。是皆匹夫の勇にして。善ンの善た
る物にはあらず。戰はずして勝利を知ルこそ。大將たる身の覺悟なれ。地イサ其證據能近ヵく譬を取ッて敎
へんと。牛若の手を引ィて。地傍成ル小川に歩寄リ水面に指さして。アレ見よ牛若。詞此谷川に清水の鏡
のごとく見ゆるこそ人トの心の虚靈不昧。一ッ點隱さず物として。移らずといふ事なし。地今移りしは
此山の木々の梢の春氣色散も初ず。咲も殘らぬ。フシ花盛皆。水ィ中にフシ顯はれたり。詞汝シが心一ト筋
に。父の仇を報はんとの。志シは此の水の淸るがごとく。地是迄に學し武藝は梢のごとく。技藝の數々
殘りなく。汝ジが心に移れ共アレあの空の月出テぬ。闇夜には陰もなく。詞うつろふ梢も見へわかず。
いか程劍ン術鍛練す共。軍慮の奧旨を極めされば。劍ン術早業輕業も。地月なき木々の梢にて有リても移
らずフシ用立タず。詞眞如の月の影淸く。心ン術明キらかなる時は。森羅萬象心に有リ。合點いたか牛若小道
も見つべきあり。なづむは君子の心にあらず。小技を捨て大業を思ひ立テよ牛若丸。地天狗は元來山
の精。惡を誡善ンをすゝむ。我レは汝が影身に添。ウタイ猶行末を守るべし〳〵。地さらば〳〵といふ聲
は三重霞をはらふ。木々の風眠りの夢は三重覺にけり。地むつくと起て牛若君。ハアハアハット飛踏り傍

見廻し漸に心付キ。扨は夢にて有リしよな。詞父の仇を報はんと。此毘沙門へ參シ詣し、たんせいを凝し思はすも、とろ／＼と睡内。僧正坊に見へしと。見し夢は實夢か虚夢か。何にもせよ牛若が、心を勵す天の教。ハア有リがたし忝ナしと。地三拜九拜悦び給ふ折からに。遙向ふの。岨傳ヽひ、三條通に隱なき金賣橘治信高、跡に從ふ町風は。地一人リ娘の言の葉が年シは二八のすうわりと枝も撓の糸櫻、ヲクリ綻びかゝる其風情。外トめづらしく。いそ／＼と。姆共が取リ卷イて、牛若樣の御顏が、見たや逢フシたや小石道、地遠目に見付ヶ父信高。詞コレハ／＼思ひがけなき若カ君樣、地と地に鼻付クれば言の葉は。じつと見かはす目の内も恥しいのか戀路なり。地牛若君はゑとやかに。詞ホヽ、珍らしや橘治。去年の冬ヵ奧州へ下タり。暫くは遠ざかりしが。無事で歸つて目出たいと。地他事なき詞に詞ハア御意の通リ。私シ家業の商ひ筋に付イて。奧州に逗留。三日以前に京着。君にも益々御機嫌能。お嬉しう存ジます。まだ旅づかれも直りませねど。お前樣へ密々に申シ上ヶ度キ事有ツて。參ると申せば娘めも。立願の事が有ル參シ詣したいと申故、連レ立ツて參ンじました。コリヤ娘、おれはあなたへ申シ上る用事有リ、其内にそこらを見ン物、姆共もソレ一ツ所に行ヶ。アイ／＼そんなら一寸いて參シしませふと。地父の詞に隨へ共、戀しい君に離れ際流石もぢ／＼目と心跡に殘して。フシ連レ立行、地橘治は傍に心を付フシ小聲に成リて詞申若君樣、私數年シ奧州に下タり彼地の案内能存じ。志シをもゑられし故、鎭守府の將軍シ藤原の秀衡殿。、密に御前へ招き給ひ。故左馬ノ頭義朝公の公達牛若君、鞍馬に忍びまします由。風の便りに聞ヽ及ぶ、何

卒其方お勧め中。奥州へ御供申ンなば、秀衡が手に付キし五十四部の軍ン勢を駈催し。君を守立テ旗上ケせん。我ヵ先ン祖藤原の清衡は。八幡太郎義家公に従ひ。此奥州の賊徒を平げ。其勳功に依て給りたる國なれば。譜代重恩の源ン家の公ン達。聊以ッて麁略はあらしご。自筆の神ン文此書翰ご。地 懷ゟ取リ出し御ン手に渡せば若君は。ごつくご讀で懷中し。詞 ホ、兼てゟ其方が志を能知ル上。秀衡が此神ン文相違は有ルまじ去ながら。世を憚る牛若。地 天知ル地知ル我レ知ル人知。身の愼が肝要ぞや。あれにて密に物語らん。橘治來れご引連てヲクリ山道さして歩ミ行。地 下戸ならぬこそ男はよけれご。地 商賣も己が身勝ッ手參ン詣を。當テに仕出しの荷ひ賣リ上かん／＼諸白／＼ご。呼はり／＼爰らがよかろご荷をフシおろせば。地 參り下向が立留マり。詞 ヤよい所で上かん屋。息休にコリヤよかろ。地 爰へも一ぱいおいらもご茶碗でぐい呑ミぐい拂ひ。坂をぐいおりぐい登皆ぐいフシいきご別れける。詞 ホ、思ひの外によふ賣レたご。地 又參ン詣を待ッ所に。下モ部がわり竹聲々に 詞 宗盛樣のお通り。片寄ませい／＼ご。地 天窓がちなる平家の威光に往來も。皆片寄レば上かん屋。ヱ、面倒なご 地 荷をふりかたげごあるフシ小蔭に立チ忍ぶ。地 用ゆれば鼠も虎の威を震ふ。己レが智惠は內イ大臣ンの宗盛。くはん／＼ご入來れば。跡に從ふ出頭顏飛騨ノ左衞門景家。長田ノ庄司忠宗同じく一子太郎景宗各フシ御前ンに伺候する。地 宗盛左右を打詠。詞 アイ忠宗景家。今日此所へ來りしは。强參ン詣計リにあらず。義朝が小悴レ牛若め。頓にも殺して仕舞へきを父入道殿。ア、よい年をして常盤に惚。鼻毛を讀れて命を助ケ。坊主にせんご此鞍馬へ登せ置キ

しに。地 經陀羅尼は習はず夜な〳〵僧正が谷に行 劍術の稽古するよし風聞有ば、助置は強もの討殺して仕廻んと。地 仰を待ず長田庄司 詞 ハア、何條其牛若ごときを。高の知た手てんごう 地 何程の事か仕出さんと。云ほぐせば飛騨左衛門。詞 イヤ長田殿そふでない。蟻の穴から堤とやら 殊に義朝が胤なれば猶以て油斷ならず。地 敵の末は根を斷て葉を枯すが用心の第一と。聞て長田はせゝら笑ひ。詞 ハ、、左衛門殿少い了簡 既に彼等が父左馬頭義朝 右衛門頭信頼と心を合せ、平家を惧謀反を起せど只一戦に討負。此長田を頼にして命から〳〵、我生國野間の內海へ來れ共 主ながら大だわけ 賴少なふ思ふた故湯殿にて詰腹切せ。地 首討て差上し此長田平家の威光を頭に戴けば唐天竺が一ッに成ても物の數とは存ぜぬ。まして況あくちも切ぬ牛若。地 貴殿や我等が口にかけ評議するもおとなけない。詞 コリヤ〳〵悴。牛若が討手には我相應。引くゝつて差上よと。地 いはれて悴り長田太郎。詞 ヤア親父様ソリヤ惡いお指圖。我等軍は大嫌ひ。宗盛様のお側に居て 能囃子のお相手。チツポウ〳〵タウぽう〳〵鳴は瀧の水たへずとうたり〳〵などゝやるか 又は近年 はやりの曲馬立駈一さん下り藤。敵隱蟬どまり鶴の餌拾ひゑめく〳〵り。只今でもお目にかけふと。地 左衛門が肩を踏へて立上るを 詞 エ、たわけめと景家に。地 突落されてへらず口。詞 此馬めはかんが強い。地 こちらの馬に致さふと。庄司にかゝるを突飛し。詞 ヤイ悴め。御前も共憚らずゑい、かげんに盡し上れと 地 反打てきめ付れば。太郎はがた〳〵色青ざめて 尻込す飛騨左衛門にが笑

ひ。詞ヤア名代の長田震ひ。又拜見致いたさ嘲哢すれば宗盛公。詞ヲヽなんぼ太郎めが臆病でも。堅
い親父や左衞門より。氣が晴れて面白い。牛若を搦捕は左衞門に云付るさ。地評議半へ遠見の侍
一さんに駈來り。詞君御心を懸られし金賣橘治が娘言の葉今日此鞍馬山へ參詣致し候故御注進
を申上候さ。地聞ば宗盛さろ〳〵目。詞ナニ言の葉が來りしさや。兼て宗盛心を懸。差上よさ申付
ても。何のかのさ埒明ぬ。地參詣さはさい究竟結ぶの神の引合せ詞左衞門ぬかるな。何事も宿坊に
て云合さん。地イサ皆來れさ引返し宿フシ坊さして急行。地橘治に萬事云合せ立歸る牛若君。是
も神の御加護さ賽の禮拜に心を。フシこらしおはします。フシいつの間にやら。言の葉が。後に立
てうぢかはさ物云たげに。フシ見さるゝ内。地拜も終れば若君はふり返る顏さ顏。詞ヤ是は〳〵言の
葉どの。モフ御下向かさ地先取れアイ〳〵さ振袖の濡ぬを絞る計。詞ホヽ我らは急な用有
ば先へ參るさ出給ふ。地袖をひかへてコレ申。願ふてもないよい首尾を。はづそふさはお胴欲。ち
らさお姿見初しより。有にあられぬ物思ひ。姆共に云合せ千束の文を差上ても。一度もお返事な
い事は。余りむごい胴欲さ恨託てフシ取すがる詞ホ其志は忘れね共。いかなる緣にや父の橘治。一
トかたならぬ親切。少も猥な事有て見限られては身の大事さ。地是迄返事もせざりしさ聞て娘は
イヱ〳〵。詞其御遠慮には及ませぬ。常々の父の詞にも。只一人の娘なれば。夫はそちが望
次第さの事。殊にマア勿躰ない。お前樣のお傍へよるは。冥加に餘るさ父上が。譽こそ致せ何のマア

地そんな御遠慮御無用さじつさしめたる手の内に。ヲ、嬉しいを塩にして互にひしさ抱付離れフシがたなき風情なり 地思ひ懸なき木蔭より。ウタイ千秋萬歳の千箱の玉を奉るさ 地茶碗さ徳利両手にさげ立出る上かん屋。二人は恟り飛退て逃んさするを 詞ア、コレ〳〵野夫な逃るに及ませぬ 肝心の婚禮に。酒がなふては濟ぬ故。上かん屋が持合せの。長柄の銚子は此徳利。我等は直に仲人役さ。地頬かぶりかなくれば内の内り丶敷角前髪遙下つて頭を下。詞君には御存ぜられまじ。私こそお家譜代、安達藤九郎盛長さ申者。何卒平家を亡さんさ諸國の武士に示し合せ。君を守立旗上せんさ思ひ立御目見へさ思へ共平家へ聞へを憚りて。存付たる此出立、委細つど〳〵申に及ばず。片時も早く此所を落させ給ひ。大望の御企然るべう候さ。申上れば牛若君。詞ホ、聞及ぶ盛長か。志は過分なれ共。有にかいなき身を以て。勢ひ壯んの平家に敵對。思ひも寄ず醜しさ。地態さ情弱の御詞。虫に障つて若氣の成長。詞ム、何さおつしやる牛若様。勢ひ壯んの平家に敵對軍するが醜しさや。ム、聞へた。最前が見請し所に此女さ濡ぜんさく。一天下を敵に持大望有身の有ふ事か。エ、ふがいなき御所在。コレ申若君様。地御心を飜へし。大義を思ひ立てたべ。詞申し〳〵さ地いへ共さらに返答なく言の葉が振袖の模様をフシかぞへおはします。地血氣の盛長腹にすへ兼。詞エ、淺間しや。かく迄源家は末に成しか。コレ此徳利の諸白も。割の入ぬ上酒はいつ迄置ても損ぜねど。露程にても水氣が入ば忽殘らずくさる道理 言の葉さいふ水が入くさつた性根の牛若様。

どぶ酒にも劣つた根性。 エ、主でなくば仕様もあらふ。 見るも穢の腹いせさ。 岩角に投付ヶて德利微塵に打碎き。 いづく共なく フシ 出て行。地 間ィもあらせず飛驒ノ左衞門家來引キ連かけ來り。詞 牛若に言の葉兩人共に引ッく〵れ。 地 畏つて立チかゝる。 先キに進し家來が素頭拜ミ打ッつゞいてかゝるを無二無三多勢を相ィ手に渡り合。 地 騷に驚金賣橘治。 言の葉も顯はれ出。 ハア〵あぶ〵氣を揉所へ。 取ッてをやらじさ追ッて行。 地 祕術をつくして切結ぶ。 さしもの大勢叶ナはじさ麓をさして一ッさんに迯る フシ 返す牛若君。 詞 此間に早く落たく〵。 我レは敵を防がんさ。地 又かけ出すを橘治は呼留。詞 お怪我が有ッては一チ大事私次第さ 地 のた打し フシ 家來が上着。手早に剝で引キまさひ上かん屋が捨たる荷箱ふりかたげ手拭にて頰かぶり。 牛若君さ言の葉を小蔭 フシ に忍ばせ待ッ所に。 地 取ッて返す家來共。 夫レさ見るよりヤア上かん屋、詞 牛若めが行衞はしらぬかどうじや〵さ フシ 口々わめけば、詞 アイ其牛若はたつた今貴船の方へ迯ケましたさ。 地 皆まで聞カずサアこい〵さ一ッさんに フシ 打連レてこそはしり行。 地 やり過ゴして金賣橘治サア申若君樣。 詞 此間に早ふさ 地 聲張上ケ上かん〵上諸白跡をくらまし三重 落て行

第二　五條ノ橋の段

地 長橋の波に伏は雲あらざるに。 いかなる龍ぞさ見立テしは夫レは唐土爰も又。 フシ 花の都に。名も高き。 五條の橋の橋詰メに誰植捨て年シふりし。 ヲクリ 柳の。 糸の己が葉に引キ下ケられて影移す。 卯月半バ

の宵月は、いとフシ面白き景色〳〵。地向ふの方からちりりん〳〵鋏棒引せくはん〳〵と、折日高なる野袴の飛驒ノ左衞門景家。柳の本に床几直させフシ腰打。かくれば、地町の宿老五人組、土にひれ伏ひらた蜘、左衞門傍をねめ廻し　詞先達ても申渡いた通、義朝が八男牛若といふ童子め、鞍馬山に追登せ置たるに。當春宗盛公御入の節かかいくれに行方知ず。然るに此間此五條の橋において千人切と稱し。往來の人を惱す由實否を糺し來れよと六波羅殿の上意。世上の噂に違ひなきやと尋れば。地宿老善兵衞おづ〳〵這出。詞お聞及下された通毎夜〳〵往來を惱し去迚は迷惑千萬。則右、證據の爲。出合たる者共を召集候と。地申上れば飛驒ノ左衞門。詞ヲ　一々直に吟味せんサ、早く是へ呼出せ。地畏つて宿老がサア皆出て一々に申上よと聲の下、先一番に立出る形も天窓もいかつげに。ヲント宮川町に隱なき白船の長右衞門といふ男作。道具仲間喧嘩の尻持に、詞ちよと橋詰迄出ましたれば。彼若衆めに出つくはせ。地命限りに働いても日比の手際どこへやら。どふで若衆の太刀先には。叶ひ安全無事息災逃て戻つてけふ迄も生て居るのは仕合せとフシ申に違ひナイ〳〵。地奴の角助角鍔に。かゝ迄不覺とり毛か延た鼻毛の色狂ひ。詞旦那のお使買物の、錢をかすつて川岸端で、夜鷹をたらふく取のめし地拔身、打ふる向ふに拔身、コリヤ叶はぬと逃しまに尻を切れて其上に大屋樣へ預られ難儀至フシ極と訴へる。フシ次は鹿嶋の事觸が。詞當年は癸巳天下泰平五穀成就商ひ繁昌悪事災難吹秡ひ世上にめいわく是なしと。鹿嶋の神の御神詫でござりや

申スと見通しに。地中せど本ンの陰陽師我カ身の上ヱはゑらにぎて。御幣に刀が留マりしも。鹿嶋の神ミのおかげにて。ござりや申スとフシ扣へゐる。地次へ出るは顔付ヤもからふは見へぬ按摩のフシかす市。アラ痛はしや私は得意廻りの歸りがけうか〳〵五條の橋の上。詞往來の人トの提灯はと。拍子に乘ツて若衆めが。有リ共ゑらず突ツかゝり。拳でくはつしり張のめされ。天窓は胴へにへ込ンで。尻へすぽんと拔ケたかと。地思ふて迯クる悲しさこはさモフ此道が冥途かと十町斗リ迯延て。詞初めて漸人心地。首が有ルかさふつて見りや。兩方の耳がじやう〳〵と。首の有ルよな音トがする地そこで我レ等が智恵を出し。天窓をなでゝ見て有レば。元トの所に御座なさる。アヽ嬉しや有リ難や。思ひの外カに堀出し仕事。地天窓を一トつ設たと。せめてもの身祝ひに。詞强飯をして長カ屋中くばりました其代が壹貫三百十六文。地思ひ懸なき損したも。若衆め故の事なれば。どふぞおかげで赤飯の。敵を取ツてほし飯と。願ふ詞の胡麻鹽に。赤小豆の樣な泪を流し。むし〳〵。として。フシかゞみ居る。地跡へ出たる撥鬢あたま。名さへ目高の八藏が。寒の師走も火の六月も。馬の手綱で日をくらす。ほてつぱらめうせあがれと。大津から荷を付ケ込ンでフシ歸る道筋態々と。音ドに聞イたる天狗の若衆。ゐらいめに合ハしてくれんと手ごろの棒を引ツ提て。微塵になれと打ければ。ゑたゝか手こたへ扨こそと。思ふに違ふて打ツたは欄干。後ロ弱腰つかんで眞倒。水の深カみへ投ケ込れ。爪茄子の流れる樣に。どんぶりこ。〳〵。どんぶり〳〵〳〵こア、どんぶりこ。地漸流れ川岸に。游月毛の馬一ツ疋。行衞もゑらず損金ン物。いま〳〵しい咄

しの様なほてつ腹めと聲高に。馬の嚙合ごとくにて。人ト溜りにぞ。フシうづくまる。地其外カ仕事師車引キ職人商人僧山伏シ或は切ラれ或イは打タれ。其數都合八十五人ン。もより〳〵の組々は。限りもなき仕合せと。一チ々帳にぞフシ記しける。地飛驒ノ左衛門打點き。詞ホヽ聞しに增る牛若めが狼藉。今宵も定イて來タるへし。大勢の家來を伏セ置キ。搦捕て手柄にせん。何ツレも其旨用意〳〵地ヤ是は俄に夕立チ雲。早ばら〳〵と降て來た。サア皆來れと先に立チヲクリとつかはとして急行地猶降まさる。夕立や。フシ初雷に出ッるてふ。蛇は一寸ンにして其氣を得る。雨もいとはず牛若丸。フシ人目憚る御出立チ薄衣まぶかに引ッかづき。手には傘高カ足駄橋の。こなたに差かゝり。樣子有リげにそこ爰と。フシ見廻ハ給ふ。後ゥな。地いきせき來タる金賣橋治。透し見るより立チ寄ッて。物をもいはず牛若の。御手を取ッて行カんとす。ふり放して牛若君、何故に來りしといはせも立テず。詞コレ申シ牛若樣。おまへは天魔が見入レましたか。大事のお身を持チながら。マア〳〵どふいふ御所存ンでござります。當春鞍馬で宗盛が狼藉。危い所へ參り合せ。密に御供仕り。私方におかくまひ申シ置キ。近ン々奥州へ旅立チと。心がける其内も。若や平家へ知はせまいか討ッ手は來ぬかと。夜の目も合ず案じて居ますに。五條の橋で牛若が千ン人切。ヤレ切たソレ突たとモ毎イ日の評判。よもやおまへが出はなされまいと。打やつて置ましたが、今ン夜ので手目が知レた。是迄は此橋治に。隱レて出ての惡あがき。コレ君子は危きに近カ付カず。暴虎馮河して死ヌ共、杭とやら棒とやらの學問沙汰は釋迦に經。私シ共が聞取法聞ではいけぬ事商ン人の商賣筋で

いはふなら。代物を買込ンで。ふつと下りを請ヶた時。賣ラふと無理にもがく時キは。段々と損をして。あげくの果テにや身ン代を仕廻ハふてのけます。又思案の有ル商ン人は。下りを請ると猶落付。じつと藏へ入て置相場の出た時出して賣レは。骨折ラずに德を取ます。今おまへのお身の上ェは下カりを請ヶた代ロ物同然。こんな時にもがヽずと。奥州の秀衡といふ結構な藏へ入レて置キ。天の時といふ上カりを請。能イ時節に賣ッて仕舞イ。コレ平家を討ッて取ラしやりますれば。身ン代に有リ付。清和源氏といふ結構な家の株を引起し。天下に名を上ヶふとは思召サず。千ン人切とやらいふあぶない狂言。都而世の中カといふ物は上に上といふが有ッて。近カい證據は銀杏のお藤といふよい器量が有レば。笠森おせんが出て押サへる。里見山ほど大い男は有ルまいと思へば。釋迦が嶽といふ上が有ル。なんぼおまへが日本ン一チじや。古今獨歩じやと思召シても。世界は廣い。又おまへほど上を行。劔術手練のやつが有ッて。萬ン々一の事が有ッたら。秀衡樣に賴まれた。此橘治が言譯もなく。大事の〳〵源トの名字を穢し。御先ン祖樣へ云イ譯がござりますか。賴に思ふて時を待ッ。國々の御家來衆が。お恨を申スまいか。コレ申若君樣。よふ御思案をなされませ。殊に娘の言の葉めがおまへ樣をいとしぼがる。譯ヶをしらぬではなけれ共。母のない一人リ娘。見ぬ顏するも子が可愛さ。詞 勿躰ない誰レ有ふ。清和源氏のお大將樣を。町人ン風情の此橘治が。聟と思ふも冥加なけれど。おまへ樣をまんざらの他人の樣にも存ジませぬ。若もの事でも有ッた時は。あれ程思ひ詰メた娘めも。生キては居まいと存じますれば。猶更悲しうござります。地 思案ンなされ下さ

りませさ。心一ばい云ィつくす。眞實のフシ異見こて賴もしゝ。地牛若御ン目もうるませ給ひ。ホヽ過分なぞよ嬉しいぞよ。詞父義朝に別レてより。世に捨られし牛若は。母の常盤が懷にて地雪に凍雨に濡様ぐの憂艱難。漸命助ヶられ。日影くらまに成長。俱に天を戴ぬ父の敵の平家にも。媚諂ふ無念ンさ悔しさ譜代恩護の家來さへ或は平家の奴さ成リ。又國々に引籠事さふ者もなき中ヵに。町人ンの身の命にかへかばふてくれる志シ。忘れは置ヵぬ。フシ恭ナい。詞去リながら此牛若。外トへ出しは今宵初メ正八幡ゞも照覽有レ。人をあやめし覺なしさ。地聞ィて愕り。詞ム、そんなら又京中で。牛若が千ン人切さ噂は何ンで致します。サア其ふしんは我レも同然。意趣有ル者の云ィ觸すか。但は又我ヵ名を衒盜賊の仕業成ルか。身不肖ながら牛若は。多くの書籍に眼をさらし。物の道理もえらぬにあらず。楚の項羽が詞にも、劍ンは一人ンの敵學ぶに足ずさいふごさく。譬劍ン術萬ン人に秀たり共。一人ンの刀ナにて天下の敵が切ヮるべきか。計を帷幕の内に廻らし。勝ッ事を千ン里の外ヵに計こそ。張良が骨髓。詞左程の事を辨へぬ。短慮不才の牛若ならずさ。地聞ィて橘治は横手を打。ハヽア承つて驚入ル。詞ム、スリヤ、其牛若さ名乘ルやつは。御ン名を衒て人トをおどす。追ィ落しめでござりまゑよ。ヤレ〳〵嬉しや。ア、夫レで積が納りました。サア〳〵早ふお歸りなされませ。イヤ〳〵思ふ子細の有ルなれば、實否を糺し歸りたし。ハア夫レ程に思召スなら兎も角も。今のお詞でモフ安堵。シタガ物騷な世の中ヵ。京にござるはあぶな物、夫レ故兼て用意致し。今ン夜の夜半立チに致しまして。奥州へ御供仕ッりませふ。夫レ迄に早くお歸

り遊しませ。ヲ、然らば夜半の旅支度。ハイ私も心せく。地 後に〳〵と云捨て。橘治は我家へ
牛若は柳の。フシ 陰に立忍ぶ。地 時しも往來騷しく。例の童が又出たは。フシ 迯よ〳〵と老若男女
蜘の子ちらすごとくにて。フシ 行方しらず成にけり。フシ 跡へしづ〳〵立出る。紅裾濃の着ながに。
ヲクリ 糸笠織の大口や金作りの太刀を佩。薄衣かづき。フシ 歩來る。地 夫と見るゟ牛若君。ずつと寄
て衣引まくり見合す顔は。詞 ヤア藤九郎盛長ならずや。地 ハア思ひ懸なき牛若樣とスヱ下る頭を若君
は扇ふり上丁〳〵。御怒の聲高く。詞 ヤア盛長の人でなし。此牛若が名を衒。人をたぶらし世
を欺く。表裏不忠の犬侍。刀の穢と思へ共。手計にするそこ動くなと。地 御ゐかせに手をかけ給へ
ば盛長が。ハア御尤成御咎。まだ〳〵云譯致さんゟ。是を御覧と差出す一巻。牛若取て押開き
詞 何々平家追討一味の連判。四國中國九州に。名高き兵自筆の血判。スリヤ其方が志は。ハ、ア仰
にや及ぶべき元來源家譜代の盛長。父安達十郎盛吉は。平治の亂に討死。我は母が介抱にて。
かく迄生立候へば。地 何卒平家を亡さんと。思ひ立たる武者修行。詞 四國九州大半お味方。君をす
ゝめて旗上せんと。當春鞍馬で御目にかゝり。さま〳〵お勸め申せ共。御得心の躰とも見へず。惰
弱未練の御振廻。我を疑ひ底心を。引見給ふと氣も付ず。取にたらざる腰抜と。惡口をして
歸りしが。跡にて聞ば其砌。鞍馬を落させ給ふよし。ハア扨は謀叛の御志。定て奥州秀衡が關八州
の御家人を。かたらひ給ふに違ひなし。スリヤ日外此盛長にの給ひし御詞は。心を引見る御智謀。

情弱にてはなかりしと。地 悔どすべき様もなく。追ッかけんにもお行衛知レず。詞 ハア悔しや御心ン底をさぐり損ひ。重て何ンと申上ケん詞もなしと。地 能ク々思案ンを廻ゲらせば。詞 牛若鞍馬を落たりと平家の吟味強ければ。御ン行ク先キに闕チをすへ捜し討タば御ン大事。スハ爰こゝぞ盛長が誤りを補ふ一ト忠義と牛若君と見へるよふ態作クりし此出立チ。此橋にて人をおどし。牛若丸の千ン人切と街の風説。其内には君は落させ給はんと。存付イたる我カ寸ン志。地 御疑ひを晴ラさせ給へと心を砕く忠義の方便。詞 扨こそ末世に牛若が。五條の橋の千ン人切と云イ誤りしも。フシ 斷なり。地 ホヽ驚キ入ッたる盛長が志ミ。詞 汝が推量に違はず奥州へ下タり籏上ケせんと鞍馬は一ト度立退たれ共。追人掛ラんは必定。却て燈臺元ト暗しと 態橋治が内に忍び。時過キて此時節。下タらんとの心用意 我カ名を銜しせ者を其方ゥとは露しらず引ッとらへ味方に付ケんと。思ひ立ッたる今宵の時宜。地 ケ程迄主従の志シも合ふ物か。そふとはしらいで今の打擲。互イに心疑カふも時キに合ざるひがみぞと。無念ンの涙はら〳〵。盛長も諸共に拳を握り牙をかみ。同じ月キ日の下タに生れ。平家の奴ッ等は下タ々迄威をふるひ臂をはり 源氏方タはケ程迄心をいため身をこらす。天道はなき物か。コレ申牛若様。ヲヽ悔しい無念な盛長と。主従手に手を取りかはし五臟を絞る。血の涙斷と。フシ こそ聞へけれ。地 盛長はつと心付キ。詞 私シ毎イ夜此所にて。往來イを採せ共。手に立ッ者もなき所に。夜前ン來タりし異形の法師。一トくせ有ル面魂。生ケ捕て味方に付ケんと。手を砕き戰へ共。きやつも去ル者手に余マり。勝負付カねば又明晩と約束し。立チ別れ候へば。地 今

宵中ゥに來るは必定。引ッこらへ味方に付ヶば。天晴の御家來ならん。詞ハ、其方が手に余マるとは。ハレ好もしきゑせ者かな。イヤ〳〵何分ン今ン晩は。搦捕て差上ヶん。ヲ、頼もし去リながら。其ゑせ者は牛若が慰に引ックヽらん。鞍馬に有リし某シさへ。殺さんといふ宗盛なれば伊豆にまします兄頼朝の御ン身の上が覺束なし。地我は木曾路を行クなれば。汝ジは是より伊豆へ立チ越。佐殿の御ン身の上宜敷守護し奉れ。フシ早ミ行との給へば。詞ハア仰に任カせ盛長は。是ゟ伊豆へ立越ヱん。君には隨分ン御機嫌能ク。ヲ、其方も息災でと。地見送る名殘リ主從はヲクリ左右へ。こそは別レけれ。地爰に西塔の武藏坊辨慶といふ法師有。奢る平家を亡して天下の愁を救はんと。思ひ立ッたるおこの者其頃都に有リけるが。江戸五條の橋には人を悩す曲者有リと聞キしかば。夫レを隨へ召シ使んと。昨夜鎬を削れ共。終に勝負も付カざれば。今宵は是非に味方に付ヶんと。心も空も晴る夜の。月も音ト羽の山の端に。出立ッ鎧は黑革威。道具好む所の道具には。熊手なは鎌鉄の棒。さい槌鋸斧差股指ス儘に。鍛に鍛ふ大長刀。眞ン中取ッて打かづき。ゆらり〳〵と出たる有リ樣。我カ身ながらも物頼もしく。手に立ッ者のア、ほしやと。一人リごとして打渡り。地向カふをきつと見て有レば。橋の邊の靑柳の。糸より細き腰付キにて。すつくと立ッたる女姿。笠傾けてフシおもはゆぶり。地辨ン慶元ト來法師の身女に何と云イかけん。詞も媚く氣色に恥。フシ橋の傍を過キ行ヶば。地若君彼をなぶつて見んと右へよくれば右キに立。左リへ行ば左に行キ。違イさまに長刀の柄を。はつしと蹴上れば。スハ知レ者よ物見せんと。長刀柄長カく追ッ取のべ。切ッ

てかゝれば若君は。薄衣取リ退打寄スる。劔キを欺く傘の。六十間ンの橋の上ひらり。ひら〳〵くる〳〵〳〵。車にもまるゝ牛若丸。辨慶いらつて早足を踏。遁さし物と切リ込ムを。丁と受ケたる勢ひは雨を起せる蛇の目の傘。風吹キ拂へば飛かはし。ひらりと拔イたる小太刀のかげ。星の光りと水車　所は名におふ加茂川の。流レに立波どう〳〵〳〵どふと寄スれば白鷺の。芦邊にあさる片足立ト。姿はつくばね羽子板の柏子は砧の音ト。むさう返しうつゝの太刀。ふたつの鍔音から〳〵〳〵。ウタヒ　欄干傳ふさゝがにの　蜘の振廻イ木傳ふ猿。姿をしたふ長刀の。得たりやおふとしつかと取リ。ゑいやと引ケば　ゑいやと引ヽ橋の蕊花玉の汗。鎬を削て三重戰ひける。地　辨慶秘術をつくせ共終に長刀打落され。組マんと寄ルを牛若君。走リかゝつて急所の當テ身。さしもの辨慶目くるめき。たぢ〳〵〳〵とする所を。むつしと蹴倒し膝に引ツ敷キ。兩の腕を捻上れば。辨慶はフシ夢見た心地。詞　今一ツ天下に此辨慶に。斯迄不覺を與へん者覺へなし。名を名乗レよと有ければ。ヲ、我レこそ鞍馬の　牛若丸。汝ジャが骨柄只者ならず。家來となして召仕カはんと。地　聞もあへず。詞　ナニ源の牛若様とや。ハア道理〳〵。此辨慶を組伏給ふは大ていの人でないと思ふて居た。今ゟ後は御家來。かはいがつて下はんせと頭を。フシ　橋にぞ付にける。地　扨は聞及ぶ辨慶よな。我レも汝を慕ひしに嬉しゝ〳〵。今ゟ三世の主從ぞと。約束長カき五條の橋。橋辨慶と末の世にフシ語り傳タへて。著るし。地　始終を窺ふ金賣橘治。フシ　小蔭を立チ出仰ぎ立チヽ　詞　アヽ目の寄ル所へ玉が寄ル、一ツ騎當千ンの辨慶様。牛若様のよい後ロ楯。此以後は御心安スふと。地　互イに挨拶

フシ事終り。詞サア中シ若君様。平家方がひそ付ヶば。都に足は留ィられず。兼て今宵の出ッ立ッと。荷物は先キへ付ヶ出せば。是ゟ直に御出と。地聞ィて辨慶。然カらば。拙者も御ン供と。いさむを橋治押シ留め。詞町ン人の道連レには。只さへ目立ッ若君に。大イてふな其體。道々人トがふしんの種。ヲ、此牛若は信高が。連レに紛れて下向すれば。道々の氣遣イなし。其方は都に殘り。平家の様子窺ふべし。スハ籏上ヶの其節は。早速に駈付よ。ハアお詞背くも却てぶ禮。何をするのも御奉公。仰に任せ都に殘らん。ホ、我レは東マの鹿島立チ。橋治地來タれと引連レて。フシ都の名殘りふり返り。フシ見返り〳〵出給ふ。地一人リ留マる辨慶は。御跡見送り立ッたる所へ。飛驒ノ左衛門景家。家來引連どつとかけ寄セ。詞ヤ、只今の注進に。牛若と此坊主が。出合っていたとの事なれば。童が行衛知ッつらん。地ぬかせ〳〵ときめ付クれば。辨慶は嘲り笑ひ。詞ヲ、たつた今奉公した。大事の旦ン那のお行衛を。うぬらにゆつてたまる物かい地うつそめらとにらまれて。恂り驚キフシふり向拍子。地七つ道具に急ッ度目を付ヶ。ヤア家來共。詞こいつが脊中カに脊負たは鋸。さい槌。斧なんど。屋尻切の道具と見へた。地油斷するなと下知すれば。家來も倶〳〵すかし見て。詞ほんに悟有けげんな形リだ。ム、聞コへた〳〵きんこへた。作料が上カつた故。儕めも坊主を止て。大工に成ルもくろみか。地おらゝが屋敷キのお長カ屋が。吹キ倒されてまだ出來ねば。こいつを頼ンで建させふ。サア。うせフシ上れとフシ罵れば。地辨慶カンラハ、、、カラと打笑ひ。詞大工とはよい見立テ。うぬらが推量違ガひなく。源氏の棟梁取リ立テて。平家追討請ヶ負普請。謀反の地形味方

の礎へ軍備への柱立。新初の血祭に儕が名は飛驒左衛門、飛驒材木の根切して、欄干からさで落し、地 此加茂川へくだ流し。體は尺〆二間物。家來も一ッ所の大筏、がぶ〳〵水を鑿と槌 うぬらが命で作料の算用墨壺墨曲の。手際フシ見せんと呼れば。詞 ヤア大工盡しのつらねにて。につくい惡たい月夜には。あたまがぶらりしやらくさいづくにうめ。地 打て取んと拔連〳〵。切てかゝるをかいくゞり、兩手につかんで人礫ばらり三重カヽリ〳〵と棟上の、餅をなぐるに異ならず。口程にもない飛驒左衛門。かい打ふつて迯行ば家來は人並口々に。あいつに枘を折れぬ内サアこい〳〵と一同に吹ちらさるゝ鉋屑。こつぱ侍おが屑武士ちつて。フシ 行衛はなかりけり。地 ホヽさもそふず〳〵。是ぞ軍の手配にフシ轄を〆て内雜作。しらげ鉋も初りの。地形の堅め第一と踏出す足はどう〳〵〳〵。どう〳〵どうつき石突のくり石。げんば大磯砂利。敵は。命のもとな石。味方は御代に伊豆御影、時に青石さゞれ石。巖と成りて苔のむす迄、盡せぬ源氏の礎と其名は。末世に隱れなし

第三　平塚原の段

地 木曾海道に隱なくフシ旅人も宿をかるい澤。沓掛村の中程に廣〳〵たる平原有。所の名さへ平塚原晝も淋しく夜は猶。いと物凄きフシ松原を。詞 エイサツサエイ〳〵〳〵エイサツサ。地 差荷ふて來る長持の。棒ばなつかんで持上れと。聲を懸けたる大男ワアイと怐り長持捨フシ御免〳〵と迯て行。エヽ

去迚は憶病な奴ノらシタガ骨折ラぬもましかいと地立チ寄て長持の蓋押シ明ケて。詞へヱコリヤ中カには何にもない。大キなむだ骨手間つぶしと。地つぶやき〳〵摺火燧。たばこフシくゆらす向カふ方。地いきせき來タる足音トは何ンでもちくとは有リそふなと。待ッ間程なくとつぱかは行ク先キ塞で。詞コリヤ待チおれ酒カ手せふはい置ィて行ケと。地いへど騒ず。詞ム、此原の追剝か目利違ィで後悔すなと地行キ過ルるを待上れと。肩口つかんで引戻し互ィに見合す顔と顔。詞ホ、コリヤ旅籠やの十助様か。ホ、狼の洞七殿かコレハ〳〵と地手を打ッて。詞ハレひよんな人に出ックはして。地面目もなき仕合セと氣の毒がればこなたも粋人。詞ハレめつそふな。貴様の商賣を初ヨ手からしらずに付キ合ふたら。悔クりも見限りもせふけれど。誰レしらぬ者もない狼の洞七といふてや。隠レないおぬすのお頭。しつた同士はすゞしいと地いふに洞七。詞シテ又夜ル夜中カ何用有ッてあるかゑやます。ヲイノ知ル通り此十助輕井澤では指折リの旅籠や商賣。殊に此信濃路は蕎麥切リと同じ事で。女の味が格別よい迚。ふんばり共が大分ンはやる。おらが内にも知ル通り七八人ン。置ィて有レど能奉公人ンが有ルならば二三人ン抱ゑふと思ふて。追ィ分ケ迄いて見ますとフシ咄し半バへ又一人リ。きやつも曲セ者大脇差。指シこはらせし懐手。夫レと見る方兩人は。詞ヤア庄八殿寐鳥殿と地呼かけられて詞ホ、旅籠やの十助様ャ洞七殿。コリヤあぢな所で。サイノおらは奉公人ンの事で追ィ分へ行キしま此洞七殿に出合ィ。既の事剝れふとゑました。本ンに篭相をやりました。イヤコリヤおかしいたまらぬと。地三人ン一所に高カ笑ひ虎溪には似ずフシ物すごし。詞ヤ十助様、洞七殿も

思ひ懸ヶない所の出合。アレ一二町先キのアノ離れ家に。松本ト酒ヶの小賣リが有ルごサアいて一ぱい呑かけ
ふ。アイヤ此十助は追イ分ヶ迄奉公人の相談に。ハテよごんすは此洞七もまん直し。地一ぱいもじろさ
打連レてヲクリ酒やを。さして歩ミ行。地戀せずば。人トの誠はしられまじ。物の哀は是なぞしる。橘治
が娘言の葉は。地牛若君の御跡を。したひこがれていつしかに。踏もならはぬ旅はゞき。フシ杖さわら
ぢを力にてヲクリいろ〳〵難儀信濃路の。フシ平塚原にさしかゝり。地ほつと一ト息ト立チ留マり牛若様
に別レてより有ルにあられぬ物思ひ。お跡をしたひうか〳〵と來事は來ても果しなき。長の旅路其上に
心せかれて此夜道。追剝は出まいかと思ひ出せば猶醜しく。そつとこはげにぞゞがみの。忽聞ゆる。フシ
數多の足音ト。詞コハ何事と驚キて。逃ヶんとする間もあらばこそ。飛驒ノ左衞門が家來荒木丹平。家來
引キ連とつとかけ付ヶ。詞御大將宗盛公御心を懸られし。橘治が娘言の葉めやるな〳〵と呼バはれば。地
遁れぬ所と身をかため懷劔抜イて突ッかゝる。詞ヤア小しやく成げんさいめと。地おとなげなくも主從
が追ッ取卷イて切結び松原さして亂レ入ル勝ッ手をしらぬ夏小立チ。そつちへ逃た遁すなと。騷の物音フシ
幽に聞ヘ。地何事やらんと立出る寐鳥の庄八。出合頭に言の葉が。詞追人に合ッて身の難ン義と地半ン
分聞ヵず詞呑ミ込だ。助ヶて進ンじよこつちへござれとフシ松のしげみに。忍ばせてうろ〳〵見廻し最前ン
の。長ヵ持見付ヶ一ト思案。手比の大石投込ンで。言の葉が抱帶。ヲクリ手早にほどき狹ませて。蓋をぐはつ
たりフシとたんの拍子。地取ッてかへす荒木丹平夫レと見るな立チかゝり蓋を明ヶんとする所を取ッて突キ

退庄八が長持に飛上り。腕まくりして。フシ大あぐら。詞ヤアなめ過た貰人め。今己が隠せし女は。橘治が娘言の葉迚宗盛公御執心。討手に向ふた某は飛驒ノ左衛門が家來。荒木丹平迚一騎當千の兵。己めが言の葉を。長持へ隠せしに違ない。コレ見よ引しごき拘帯が狹まつてゐるが證據と地己が手盛としらはの娘。渡せ〳〵と家來共。フシ反打てひしめけば。詞ハ、、、ア、咽の痛いにゑいかげんにわめかしやれ。コレおらは寐鳥の庄八といふて人買。ヤモずんど詫しい商賣。聞た所が此女は六はらのお尋者。成程夫を勾引すかかくまふたら尻も來よふが私が思案は。此長持に入て直に京へ持て行六はらへ差上て御褒美を戴く工面委細御尋有時は。追手の侍飛驒左衛門様の御家來。荒木丹平様といふ人が。道でぶら〳〵のらをかはき此女を取迯されて候故。私が召捕て差上まするど。申上れば我等は御褒美。こなはんはよい分であほう拂ひ。イカニモ。但は切腹。ホイ事に寄たら討首と。地いふ度〳〵に悔りびくり。首の廻りを撫廻し。詞ハアそふいへば一々尤。我身じやないが。思ひなしか衿首がこそぐつたいかい。コリヤ〳〵若い者物は相談。ナント其長持をおれに貰てたもらぬか。いやでごんす。マ見た所が餘程大身なお侍。貴様の身代ふるふても高の知た目くさり金。六波羅へ差出せば少なふても四五十兩はさらまへる。マア〳〵よしにしませふと。地けんによもなければ猶手を下。詞コレサ〳〵拜む〳〵。其女を取迯し外の手から上げられては。おれ斗か旦那殿も冷飯だ。おらはどふで命がない。いはゞ侍の命助る善根功德。是じや〳〵と地手を合

せ。誤り入ッてフシ頼ムにぞ。詞ム、いか様譬大金子に成ル迚も京迄の運送入リ用。殊に生ナ物。手短に金子にするも面白。直がよか相談しましよかい。ム、夫レは近カ頃忝ナい。大切ッの代ロ物塩鮪買フ様に直切リはせぬ。路用の殘リが十兩壹分。地有リ切渡そと紙入レの底をたゝいて十兩壹分。詞不足に有ッ、ふがどふぞ了簡。ハテ扨氣作なお侍イ。かけごのないが面白ロい。そんなら負ましよシャン〳〵〳〵コレ家來衆。此女めはきついやつ。最前シも懐劔で。すつての事に突カふとした道中怪我のない様にと。地繩切レ拾ふて卽座の錠前。手早に棒をフシ差通せば。丹平はしたり顔。詞若カい者大義で有ッたさらば〳〵中シ旦ン那。長持チと荷作り代は負てやりますサアござれ。地ヲットまかせと家來共。跡先キかついて。エイサツサエイサア〳〵エイサツ〳〵と。地いさみすゝんでフシ立チ歸る。地跡に庄八一人リ笑。詞イヤモ仕合セのよい時は。明キ長持チが十兩壹分。地うまい〳〵と悦ぶ所へ。十助がうろ〳〵目玉。夫レと見るより地コレ庄八。押サへられた盃を。打やつてなぜはづした。ア、手が惡ルいぞよ〳〵。イヤそんな所じやないコレ金の蔓に取付イた。よい玉を見せふかと。地連レて出たる言の葉が。スヱテどふ成ル事かと。物案じ、地十助は見て悔り。詞ハアコリヤ途方もない上代ロ物。地ちよと相談と傍へに招き。詞ナントおれに貢ッてくれぬか。ハテめつそふな。ふんばりにする代ロ物ぢやないわいの。イヤ〳〵そふでない。おれが手へはいると。突キ出しの大夫に仕立テる。ム、何ンで有ふと直さへよけりや。地ヲ、そんならこふかと袖の内うなづき囁くはしぐ〳〵の。ほの聞コゆれば言の葉が。悲しさつらさあぢきなさ。相談極め

て庄八が。詞サアそんならばコレお娘。追ッ人のやつらが又來てはたまらぬ。此十助樣を賴ンでこなたをかくまふて貰ます。地サア行カしやれと手を取ッて。引キ渡せば言の葉は。思はずわつと聲立テてフシとかふ詞も。ないしやくり。詞自は殿御をしたひ。遙々爰迄來タりしぞや。地つらい相談止にして。奥州とやらいふ所へ。連レていて下さんせ。情しや。慈悲しやと手を合せスヱ拜ミつ泣つ。さま〲に。詫るも聞カず詞エ、めろ〱とやかましい。そんな事を悲しがつて此商賣が成ル物か。サアうせあがれと引ッ立ッれば。イヤ〱。わしや何ンぼでも。あの人トといく事はいやしや〱。ヤアしぶといめろめと庄八が。地なぐり情も杖追ッ取りりう〱〱とフシ打のめすを。詞ハテモフよいはと十助が。地押シとゞめたる仕組の狂言。詞コレお娘ス。アノ庄八は氣が短い。おらが内へござれば大事に。かけてかくまひ。戀しい人トに逢せてやると。地欺しすかせどイヤ〱うそしや僞りしや。詞情しらず人トてなし共殿御をしたふてきた物を。君傾城に賣ラふとは。ソリヤあんまりしや胴欲じや。地唐天竺にも有ルまいと思ひこがれてお跡をしたふ。大事の殿御に引キ別れ外カの人に肌ふれて。どふ云イ譯が立ッ物ぞ。うき恥を見せんより一ト思ひに殺してたべと。大地にかつぱとひれふしてフシきへ入ル。斗リに見へにける。地邪見の兩人ン腹にすへ兼。詞ヲ、望ミなら殺してやらふ。いか樣マあま口ではいけぬやつと。地二人が棒を追ッ取ッて。詞サア行クか。いやといへばぶち殺すが。地どうじや〱と牛頭馬頭が眼ひからせフシどつてう聲。詞ヲ、殺さば殺せ何ぼでも傾城にはならぬ〱。地エ、面倒なと双方ゟ。はつしと打タ

れ。フシ玉ぎる聲。地戻りかゝつて洞七が。マア〱待ととゝめる程。拍子にかゝつてふり上る。腕首両手に突飛し。言の葉を小脇にかい込。かけ出す洞七両人が。詞ヤア大金になる大事の代物。己にやつてよい物か。返さにやかふぞやと抜放し。双方ら切懸る。身をかはせば地互の眉間相討に。のた打廻るを起しも立ず。ぐつ〱とフシとゞめの刀。地相手向ひの討果し。尻の來る氣遣なしと懐の。金引たくり言の葉を小脇にかい込飛が。ごとくに三重走行

第四　板鼻の段

地上野の板鼻といふ里の名の。今は賑ふ宿なれど其頃は猶田舍にも。住ば都と住中に。主は何を渡世共志らぬ藁屋の軒のつま。ふくや五月の菖蒲草端午の節句壽も心。ヲクリ計の紙幟。餝り兜や餝り太刀。鎗長刀も箔の付。男子のフシ光りと見へにけり、地折しも表にどつたくた子供喧嘩の惡あがき。山の大將時松が。餝り兜を猪首に着。江戸右に拔持菖蒲太刀左に摑鑓長刀いさみすゝんでフシ來る跡から。地數多の子供が聲々に。詞時松の泥坊め。おいらが物をなぜ取た。わしが鑓も盗みやつた。地聞ぬ〱と泣聲に時松は立留り。詞ワアイ泣はい〱。弱いやつらの寄り合だ。ほしか軍に勝たがよい。地笑へ〱と嘲りに。殘りの子供猶逆立。詞おいらの物を取ながら惡たいをつき上る。あの惡太郎め赦すなと。地聲でわめき取圍。何事やらんと主の女房。立出て押分れば。殘りの子

供口々に。詞コレおば様。爰な坊と皆寄て。軍サ事を始メたら。アノ太刀でほんまに打て。私等が物を皆取ッた。地いたい〳〵聞ヵん〳〵。詞ヲ、コリヤ皆のが道理〳〵。コレ時松ゑいかげんに惡ルさ仕や。地サア其取ッて來た物を余所の坊に返ゑや〳〵。イヤ〳〵軍サに勝ッて取ッた物。何ンの返そふ様がない。地いやゑや〳〵とわんぱくに。母親も待テあまし。詞ヲ、返さにやと丶様に云付ヶて。つめ〳〵さすが合點かと。地おどせばちやく鑓リ長刀。子供の中ヵへ投ゲ出し詞ソレ返してやるぞ。今ン度から云ッつきやると。どだまをぶちこはしてくれるぞと。地いふ口押サへて詞まだ惡クたいをつきやるか。こレ坊達チや。此惡ル者には此おばが灸をすへてやる程に。堪忍して歸らゑやれと。地すかせば皆々嬉しがり。詞おば様や。爰な坊に灸すへるなら。大きふしてすへて下され。おいらは灸は地嫌ひゑやとフシ一チ度に打連レ立歸る。地母は我ヵ子を引廻し。詞ヲ、此着ル物の汚た事はいのそしてマア此鍮裂。モ何を着セてもたまる物ではない。ヲあがき草臥寐むそふな。地サア〳〵こちへと手を引イて。奥の一ト間にフシ入にけり。地折節表テへどや〳〵と同じ様なる荒ゑこ共。道具腰に大だら指荷ふ莚包をずつゑりと庭におろして。詞サアお家様ンお勝様。皆來ましたと。地いふ聲聞イて一ト間々。暖簾押明ヶ女房が。詞ホ、皆様ンけふは様子が能イかして。いそ〳〵とした顔付キ。サ代ロ物を出さんせと。地帳面扣へ懸硯のフシ墨する内に包をほどき。てんでに取リわけ持ッて出。詞アイ布子二ツ帶一ト筋。熊手の長兵衞。脇差一ト腰印籠一トつ。宵寐の九助と付ヶて下タんせ。蒲團一チ枚藥鑵一トつくゞりの小平。アイお序に頼ミます。財布一トつ金一両二分と二朱

銀一つ。窓子の權七。アイ夫で仕舞。コレお家樣慥に渡して下さんせ。ヲヽ皆樣大分仕事に實が入つた。定てぬしも機嫌であろ。茶でも呑でア、イヤ〳〵。いんでかゝが顏見ましよ。お頭が歸つてならよい樣に賴ますさ 地 つき鹽フシもなく立歸る。地 女房は表を見やり。モ日が暮たにこちの人は何して遲い事ぞいのさ 地 云つゝ立て佛檀へ御明し上て花生に樒の花や線香に。フシくゆる煙もほそ〴〵さ。地 口に讀誦の。普門品。タヽキ 何の譯やら淚ぐみ。りんさ音さへ打しめる黃昏時の看經は。フシ樣子有げに見へにける。フシ物うしさ。地 誰云初めし長旅に。しらぬ道さへ英雄の隣あるきさ見下して。供をも連ず牛若丸。奧州下り道すがら程よき城地國々の。地理人物も試んさ金賣橘治に引別れ。遙々爰に板鼻の賤がフシ軒端に立休らひ。詞 行暮したる一人旅。宿の無心さの給へは。地 内に女房經讀さし。詞 ヲヽお安い事ながら、宿屋ではござりませぬ。外をお賴なされませ。ホヽこなたも左樣さ見請し故御無心さは申之。流石心もあまさがる鄙に住身はおのづから。人の詞の手示於葉も。辨へざれば力なしさ 地 つぶやきながらフシ行過る。地 詞に恥て女房は。表の方に走り出。詞 ノウ〳〵旅の御方申度事の候 地 待せ給へさフシ呼聲に。地 牛若君は立戾る姿見るより女房は。賤しからざる都人詫しき兒の只一人。合點行ざる有樣さいぶかしそふに詠め居る。牛若君はしさやかに。詞 呼返させ給ひしは御得心下されしか。忝しさ有ければ。女房は會釋して。最前仰込れし、時御痛はしくは存せしが。私が夫は人にこへ物荒き生れ付。筋惡敷渡世を致せば却て御身の爲な

らずと。態すげなく申せしが、地手爾於葉さへも弁マへぬ田舎者よとさげしみの御詞の恥しさにお呼ヒ返しは申せしが。夫が歸りし其上にて若もの事の候ては。お留申せし申妻もなし、見苦しけれど裏の木部屋今宵一チ夜を明カさせ給ひ。夜の内にお立チ有レ。フシノウ都人こそ申シける。詞ヲ、お志シ忝ナし去リながら。御シ身の夫トはあら〳〵敷ク筋惡敷渡世イとは。譬切リ取強盗をなし世を營む者にもせよ。貯へなき一人リ旅意趣なき我レをいかゝせん。若又不時の事有リ共鬼ニ神にてもよもあらじ。化生變化鬼ニ山姥の。住家に宿トるも咄しの種。地魑魅魍魎も醜しからず。案シ内有レと打連レてヲクリ木部屋の。方へ歩ミ行。地されば赤子の井に入ルを見て助クるは。おのづからなる性善の道で見付ケし言の葉が。難儀を救ふ洞七が人ト目ヲ憚る古ルつゞら背負て歸る。フシ我カ家の門口。詞ヤア女房共歸つたぞと。地いへど答へも有ラざれば。傍見廻しつゞらをおろし。蓋を明クれば言の葉が。フシ打しほれたる其風情。詞ア、コレこはい事も何シにもない。人買イに見付ケられ。難シ儀さしやるが笑止さに。連レて來て進シぜた。コレおれが商賣もろくでなけれど。人ト勾引はしませぬ。必氣遣ヒさしやるな。いつ迄もおれが内にかくまひますと。地いふに漸顔ふり上ケ。ふしぎな御緣シでお世話になる。迚もの事のお情に。尋る人に逢せてたべとフシ打涙ぐむ計く。詞ヱ、きな〳〵と泣カしやるな。何も角もおれが呑ミ込。ソレハそふと女房にこなたを見せると。色事かと燒餅を燒キおれば。云譯するが面倒な。引キ合ハすには折リが有ラふ。幸イと留守なればば。アノ納シ戸に忍んでござれ。呼ヒ出す迄は出やししやるなと。地フシ深カく忍ばせあらぬ躰イ。詞女房共

〳〵。歸つたぞ〳〵と地夫トの聲に立チ出る。片手に小鍋片手には。米かし桶の水いらず。詞ヲ、こちの人お戻りか。ヲ、留守にかはる事はないか。坊主めは息災なか。アイ〳〵又ゑても留守に成ルと。隣の子供を相イ手にして。喧嘩にはこまりまあす。ハテ打チやつて置イたがよい。がきの時分にはおとなしう見へるやつは。大きふなつて埒明カぬ。あの様にわんばくなは。マア第一チ息災イなと。生マれ付イて根性に意地が張て居る故じやと。地我カ子自慢にほた〳〵と機嫌よければ女房がつ詞申しこちの人。お前にちつと咄したい事がござんす。是は改ツた御意の趣我レ等も又北の方タへちつと計リ申度キ事の候。ホ、、、女房に何遠慮。何ン成リと云イなされ。先ツ其元のから承はらふ。アノ別の事でもござんせぬが。都方の公達と見へて。賤しからぬお兒が行暮レた。宿が借たいと有ツたれど。お前の留守故斷いふてもナ。行暮レて難義と有ル故いとをしさに留メました。ム、何じや。賤しからぬ旅の兒を。いとをしさに留メたとは。ム、コリヤ少ト氣が揉るはい。亭主の留守に人をとめる。マア其いとをしさにが氣にくはぬ。コレおれが顏を汚すまいぞや。ホ、、、。何譯もない事計リ。おまへの聞キ様が惡ルいから。子迄なした女房のわしが心を。地知ラぬかフシ何ンぞの様に。詞ム、そふいへばそんな物でも有リ。シテ又お前の咄したい事とはへム、其咄したいといふ譯ヶは。別ツの事でもないが。美しい都の女中が。道に迷ふて居る所を。人ト買めが惡ル工み。危い所へ行キ合せ。難ン義を救ふて連レて歸つた。ム、何と云ハゑやんす。美しい都の女中を。内へ連レて來なざつたかへ。人トの難ン義を救ふはよけれど。美クしい都の女中と二人連レて歸る道。おま

へが只はおきやせまい。わしといふ女房持ちながら。餘り人を踏付けたと。地詞に戀の角文字は。フシ女の情と知られたり。詞ハ、、、コリヤおかしい。子迄なした夫の心そなたはまだしらないか。口先でじやら／＼いふても底の堅さは石部金吉。かたふて／＼。ぼき／＼折る様な。ナニ。ゑいかげんな嘘計。都の女中の噂が出たりや。大方折る様に成ったで有らふ。夫はそふと彼のお兒の事に付て。おまへに地咄したい事あれど。詞ヲ、おれも彼の女中の事。そなたに云聞す事が有る。夫は緩りと後に咄そふ。私も後に寐所で。ム緩りと承はらふ。ガシテ其兒はどこにござる。アノ留ゐることは留めたれど。おまへの心を計り兼。アノ裏の木部屋に。ホ、夫は蚊が喰ふ。アイ幸ぼんが枕蚊屋。そんならよし／＼。おれは手下の奴等が内へ用が有る。一寸と行てこふ。本に先に皆見へて。代物も預つて置きました。ヲツトよし／＼。ツイいてこふと立上れば。地そんならお飯上つて行んせ。詞イヤ／＼道で支度もしてきた。とかふいふ内もふ四つ。扨夜は短いぞ。おれは歸りの程が知れぬ。用心が悪い能しめて。寐て待ちやれと。地云捨出れば女房は。せど門しめてそこ爰に心を。フシ付て入にけり。地フシ早更渡る短夜の。遠寺の鐘こう／＼と庭の。千草もフシ寐入ばな。地表の方に忍びの足音。主の洞七先に立。くゞりの小平宵寐の九助窓子の權七熊手の長兵衛。身輕に出立黒裝束。手々に得物を引提／＼。勝手覺し門の戸の懸金はづしずつと入。せどの戸明て一文字に。フシ木部屋の内へ押入れば。謠兼て期したる牛若君。江戸小太刀を拔てかけ出給ひ。ヤア身の程しらぬ

盗賊共。目に物見せんと渡り合ィ火花をフシちらして戦ひしが。地さしもの盗賊たまり兼ネ叶ハはぬ赦せと逃ヶて行。ヤアきたなし返せと追駈る。後ロの方ゟ洞七聲かけ。詞ヤア〱お若衆。逃ヶる者を相ィ手にせずと此洞七がお相ィ手と。地手をこまぬきしフシのふずの詞。地牛若君は立歸り。詞己レ迚も助ヶはせじと。地小太刀打ふり飛かゝるを。庭に有りあふ俵追ッ取小口をつかんで横なぐりひらりと飛ンで牛若丸。又切付るを俵返し。微塵になれと投ヶ付ッる　俵の上に片足立チ。早速の早業こなたの知レ者　又切付ヶるを俵追取受ヶ留メて　詞ハア天晴の御働き　源ン家の公ン達牛若君と見しはひが目か。中上ヶ度ヽ一ィ言ン有増くお捨へ下されよと　地詞に猶豫の牛若君　小太刀を引ヶば洞七は。大だらからりと投ヶ出し土に頭を摺付ヶて　御器量の程揉見んと只今の仕合セ。眞平御免ン下さるべしと恐レッ　フシ入ッたる計く

詞ホヽヽヽ世を忍ぶ我レなれ共、推量の上は何をか包マん。義朝が八男ン牛若とは我ヵ事なり　シテ其方は何者なれば　ハア私シこそは源ン家譜代の郎等。伊勢ノ左衛門義連が忰レ。伊勢ノ三郎義盛と申ス者父にて候左衛門義連、御ン父義朝公に仕へしが　或時北山茸狩の折から。法皇の御幸先ヽ　乗打せし科に依て　縛り首にも逢ッべきを、義朝公の御情ヶにて此上野へ流罪せられ。浪々の中チに生マれし某何卒源家の公ン達を見立　御官へと存ズれ共。平家の一ィ門世に漫、御一ィ族ちり〲の中ヵにも鞍馬の牛若君　衆に勝し御才智と兼て委しく承り　ハア是こそは義盛が、主人シと頼ミ奉らんと存ンせしかど、有ィたに甲斐なき卑賤の身　スハ御ン大事に及ばん時　一方を防べき人ン數なくては叶はじど　思ひ立ッた

る切リ取強盗 山ン家を家とし、國々の惡黨原を味方に付ヶ、かたのごとく用意せしに。此日世上の風聞に 奥州秀衡を頼ミ下ダらせ給ふと聞ヶ今も今やと〳〵と待チ居し所 はからずも我ヵ内へ來タらせ給ふも宿世の機縁ン 義盛が志シを惠せ給ふ天の加護 ハア有リがたや忝ヶや、此上願ヵひ奉ッるは、父義連が御勘當 御免ンのお詞成シ下され、義盛めを奥州へ召シ連られ下さらば。生々世々の御厚恩と思ひ入ッ フシ てぞ願ヵふにぞ。 地 ホヽ聞キ及びし物語リ。虚言はあらじ去リながら、詞 父義朝御在世に汝が親の義連を御勘ン當なされしは私シの沙汰ならず。公の御捌キ 月日は移りかはる共。功もなき其方 牛若が私に勘當は赦しがたし。ハア御尤の御ン詞と 地 すんど立ッて納ン戸ヵ伴ひ出る言の葉が。ナウなつかしの牛若樣とと縋り歎ヶくを突キ退て。詞もかけず牛若君、詞 ヤア義盛。委細の樣子聞ヶに及ばず。此牛若が跡をゑたひ こがれ來る言の葉を 汝が介抱せし故に。一トつの功と思はんが。言の葉を介抱は牛若が身の私シにて、源ン家へ對する功ならず。かく狼狽たる汝ジが魂。源氏再興の牛若が 味方には頼マぬ〳〵。言の葉も別ヵるゝ時 女を供して奥州へ下タらば秀衡に嘲られ、大イ望の妨と云イ聞せしを用イぬ不所存ン。夫婦の縁ンも是限りと 地 以ッての外ヵの不機嫌にて フシ 奥をさして入給ふ。地 御跡見やり言の葉はワット計リにフシ伏沈暫し。詞もなかりしが。地 漸涙の顔を上ヶ。難面ぞや牛若樣。長ヵの旅路を遙〳〵と御跡 ゑたひきた物を 詞 あいそふらしい詞もなく。何の仕落チもない物に夫婦の縁を切ラふとは。地 餘り難面胴欲と 恨託てふしまろび身もうく計リに。フシ 見へにける。地 義盛も差眞き。默然として

ゐたりしが。詞ハア其お歎は御尤去りながら、若君の御詞一々道理至極せり。ハア末頼もしき御大將。今漂泊の御身にて、随ふ者も有らざれば。手下の人數引まとひ、御味方と申さば御悦喜あらんと存じの外か。義盛ごとき蠅虫共思召されぬ大膽不敵。ハア天晴の御大將、彌以て慕はしゝ御機嫌伺ひ幾重にもお願ひ申さん。地こなたへと歎きに沉言の葉をヲクリいたはり。奥へ入にけりフシ猶更渡り、しん/\と。本フシ有明の灯もほのぐらく。消んと思ひ極たる言の葉はしほ/\と、奥より出る忍び足、一間の方を打ながめ。いかんとすれどせぐりくる、涙果しも、フシなかりしが、ノウ申し牛若様、詞御跡を慕ひ來りしを。女のざいに大膽なと。思召も無理ならねど。地よふ思ふても見やしやんせ、鞍馬詣の、かいま見よりお姿は目に。ちら/\と、思ひ忘るゝ隙迚は泣て明して。さまざ/\と、神に祈しかい有て。枕かはせし嬉しさは。世界の女の水上と、悦ぶ間もなふ奥州へ旅立給ふ其日より有にあられぬ物思ひ。つい逢るゝと假初に。歩ならはぬ長の旅、其憂苦勞は厭はねどお目にかゝるを樂しみと。命にかけて來た物を縁を切とは何事ぞ。詞謀叛を起し軍して平家の一門責亡し、大將軍に成た迚。わたしと夫婦になられねば地夫が何に成物ぞ。詞モウ大望も止にして、夫婦になつて下さらば。地たとへ野の末山の奥水仕奉公かつぎの海士。女夫ぐらしの橋の下、乞食非人に成迚もわたしやさら/\いとやせぬ。思案仕かへて下さんせと、娘心の一筋に思ひ亂れて。フシ居たりしが、詞ヲゝそふしや。地何ぼ泣ても返らぬ事、詞コレ申し牛若様。私しや自害して、

死ニまする。死だ跡では一ッ遍の。御回向なされて下さりませ。夫レが未來の樂しみと。地 傍なる硯引キ寄せて冷泉思ひの。たけを。のべ紙に筆の。立テどもしどけなく。涙ににじむ。墨よりも。薄きゑにしと身を託スエ又さめ〴〵と泣居たる。時にせど口めつぎ〴〵。俄に聞コゆる物音トは。風かあらぬか怪しくも。忍び入ッたる其出立チ。黒革威の腹巻キにいか物作りの太刀を佩。ちよつぺい頭巾に目計出し。長刀小脇にかい込ンで奥を目がけて。フシ歩ミ寄ル。地 泣しづみたる言の葉が。涙拂ふてすつくと立チ。守り刀を拔ヽ放し。曲者待と。呼かくる。返答もなくふり返り。長刀打ふり立チ向ふ。こなたはかよはき言の葉が女力ラも覺悟の死身。打テばひらきなぐれば請。命限りと戰へ共。終には懷劍打落し長刀投捨飛かゝり膝に引ッ敷ッ後ロ手。地 拔キ身引提義盛が。弓ン手の脇腹右手へ通れと突込メば。突れてどつかと倒れ伏ス。音トに驚キ牛若君。手燭携へかけ出給ひ。差出す火影頭巾は取レて顔と顔。詞 ヤアわりや女房の勝ッではないか。地 是は〳〵と二度愡り。牛若君も言の葉も樣子いかゞと。フシ守モり居る。地 女房は起直り。詞 ヲ、自が此出立チ。嘸やふしんに思されん。あいそも盡んと是迄は。連レそふ夫にも隱せしが。元ト自ニは隱レなき。盜賊の張本熊坂の長範が娘ぞや。生マれ付イたる惡黨故。親ながらあいそつき。八年ン以前ンに家出して。さまよひ來タり緣ンがなして。義盛殿と夫婦と成リ。地 子迄設し此年シ月シ。父の惡ク事は止しかと餘所に聞ども情なや。年シ月増る惡事の取り沙汰。夫レに引キかへ我カ夫マの。あらぬ渡世もお主の爲。上べは同じ盜賊も心の底は雪と墨。詞 昨日の曉譜代の家來。燒下タ小六といふ者。遙々と尋來て咄

しを聞ば情なや。十日以前に父長範、美濃の國青墓にて。金商橘治が荷物を目がけ　一味の惡黨與力して　時分は能ぞ早入と。皆我先にと松明を投込〳〵　地 亂れ入る。詞 ホ、覺有物語。其時に此牛若　地 小太刀を拔て渡り合飛鳥のかけりの手を碎表にすゝむ十三人、同じ枕に切伏せたり。詞 其時父の思ふ樣熊坂秘術を、地 ふるふならばいかなる天魔鬼神成共、宙につかんで微塵になさんと。地 人もなげなる我慢心。詞 ヲ、此牛若は物間を、少し隔て待かけたり 謡 熊坂は早足を跡踵壁も通れと突長刀を。地 はつしと打て弓手へこせば 謡 追かけ透さず込長刀に。地 ひらりと乘は刃向になししさつて引ば。地 右手へ越し思ひも寄ぬ後ろな。具足の透間を丁ど切る。詞 元來我づよき父長範、コハいかにあの冠者に。切るゝ事の腹立さよと、地 いへ共天命の運の極 謡 次第〳〵に重手は負ぬ　次第〳〵に重手は負ぬ。猛き心も力も弱り　流石血筋の我なれば　亡跡の筐に見よ迚、最期に着せし此裝束　詞 家來に持せ送りしが。牛若樣とは夢にもしらず　敵を打て手向んと　思ふ矢先の兒姿　噺しに聞し年恰好、シヤ待設たる親の敵、すかし寄て討ん爲、此内にとゞめしが、地 よく〳〵聞ば我夫の三代相恩の御主人に。討に討れず剩一つの功のなき故に。舅君や我夫の御勘當も赦されず。花咲ぬ身の　埋木と、朽果るのみならず。生先有時松も、盗賊夜盗の餘類と呼れ　人交りも成まいと思へば身もよもあられぬ思ひ。あなたこなたを思ひやり覺悟極しフシ 最期ぞや、詞 熊坂が余類の自。牛若樣へ敵對しを、伊勢三郎義盛が。突殺せしを一つの功に、

地夫トの勘當お赦し有ラば未來も成佛ッ致します詞コレ申ン言の葉様我君様へお執成。地頼ミまするこせき上クる脊撫さすり言の葉が。夢にもそふと知ルならばこゞめ様も有ルべきにいぢらしの此有リ様。詞コレ申牛若様。義盛殿の御勘ン當地赦して進ンぜて下さりませといふ聲俱にむせ返る涙の車軸身にかゝる。義盛始メ牛若君。ひたんの涙にフシくれけるが詞ホヽ天晴成ル女が貞節。義盛親子が勘ン當。牛若が赦ルせしぞと地聞ッゟ。ハヽヽハット飛しさり。天にも上るフシ身の悦び。詞コリヤ／＼女房。そちが命を捨し故。勘ン當御免ン蒙りしぞ。草葉の影で親人の嘸や悦び給ふらん地さは去リながら女房共しらであへなく手に懸ケし。義盛が心の内コリヤ。思ひやつてくれいやいとこらへ／＼し溜涙妻は苦しき目を見ひらき。詞ノウ我カ夫マ最早此世の暇乞。時松に只一ト目。ヲヽ尤モと一ト間にかけ入リ。地伏シたる我カ子を抱出れば。わやく交りの目をすり／＼夫と見るゟかけ寄ッて。かゝ様をだが切ッた。聞カぬ／＼と泣出せば詞ヲヽ尤じや／＼／＼道理じや／＼わいやい。コリヤかゝはな。遠い所へいく程にナ。今生の暇乞。よふ顔を見て置ケと。地手負の傍へ押シやれば。苦ルしき體に女房が。我カ子を膝に抱キかゝへ。詞コリヤ時松。かゝはモフ死ヌる程に。必々死ンだ跡でも。悪ルあがきをふつつり止。手習學文精出して。よい侍イに成ッてたも。地毒な物杯喰やるなや。詞けふも端午の祝義迚。餝り置イたる太刀兜。子供同士の切リ合にも。外カの子供の太刀長刀。奪取ッたる腹立チに。時松の盗人トよ。泥坊といはれた時は。父熊坂の血筋を引ヒ。悪ル性根は付クまいかと。地何ぼう悲しかりつるが。母が死ヌれば盗人トの。血筋は切レ

て源氏の御家來。詞コレ申若君樣。お頼申シ上ケますぞ。地いふ聲も早四苦八苦あへなく息ゝはたへ果たり。跡や枕に人〴〵の歎キの中カに時松は母の死骸を押シうごかし。詞コレかゝ樣いのふ。〳〵どふぞ死ンで下さるなやモフ惡ルあかきもせぬ程に、こらへて下されこらへてと地立ッたり居たり身のだへにヲ、尤モじや〳〵〳〵〳〵と二人一ッ所に打倒れ泣音血をはく。フシ時鳥ちのとめ近カき横雲に。フシ牛若君は旅支度義盛は泣目をはらひ、奉公初の御ン供と立をせいして。詞イヤ〳〵我は覺悟の一人リ旅汝ジは妻の亡骸を能キに葬れ其中イには秀衡方タへ便リせん。地先ッ夫ト迄は言の葉を汝ジに頼ムさらば〳〵と出ッるは君が出世の門ト出。殘るはせつなき戀路の義理先キ立ッ妻の有爲轉變。恩愛の夫婦主從の盡ぬ名殘リのうき別れ

第五　湯ノ山の段

地爰も名高き伊豆の國。靈驗殊に現なる湯山權現の鳥居先キ。前は海水まん〳〵と磯に玉ちる浪の音ト。地何ッれの緒より松風のたらべ爭ふ琴の音も神々フシ敷ぞ聞コへける。地あたり邊の百姓共手ン々にさゝへ竹箒。鋤鍬持ッて追イ々にこゝなり寄ッてナント万作。詞お地頭の伊藤入道樣へ六波羅から御上使が御出なさる。道作り掃除の役、村々へお觸が有ッて百石に十人ン宛の割付ケ。迷惑な事ンではないかい。ヲイノ又六のいふ通リ目の出る程手ひどいお地頭。お定マりの年ン貢の外に。さま〳〵な運上諸かゝり

百姓はさゝほうさ。其上に今ン度の御上使。殊に此邊は海道筋と違ふて。問屋場もなく助郷迚もなければ。イヤモ百姓のきつい迷惑。いふ様にすりやほうずがない掃除もよいかげんにゑて置ィたがよいさ。地いへば年ン倍あたみの九郎助。詞イヤ〳〵ソリヤ悪い了簡。ハテめん〳〵が安樂にくらすも。皆お地頭様のおかげ。麁末に思ふと罰が當る。イヤコレ親父殿そふでないかいの。同じ並のお地頭でも。北條様は御慈悲深ふてお知行の取りかゞゆるひ。二三年ンの大旱魃先ン年ンの大風にも撿見がゆるく。其上に餓死扶持迄追ィ〳〵にお借なさる。おらゝが方のお地頭と競ては。上白の生飯と。糝水程違ふてゐると地咄し半バへ又一人リ巻ィたる蓑と辨當の。風呂敷キ包肩に打かけフシ立チ出れば詞ホヽ土肥村の五兵衛かヲイノ何ニ貴様達は。役にも立ないくり言ト。夫レ〳〵は此中の敵討ナ始メふでは有ルまいか。ヲヽソリヤよかんべい。始メべいは始メべいが。爰には道具が有ルまい。ヲヽ夫レはぬからぬ此五兵衛と地フシ風呂敷キ包。こて〳〵と。解て取リ出す賽坪皿。蓑をほどけば中には上ハ敷。詞コレ盆茣蓙迄持ッて來た。コレハ出來たと地取リ廣げ。詞胴は此五兵衛が取ル。いつもの通リ四割半ンだ。サア張た〳〵ヲヽ合點と車座に。地文彌並んだ形リも梅の花。ナヲス謀反勝負の魁に。受ヶつ受られ死ニ身に成リ軍サは花をぞフシちらしける。地道具磯邊傳ひにきよろ〳〵目玉夫レと見るゟ庄屋の栃兵衛。傍に闇雷聲。詞ヤイ〳〵わり様達チは〳〵。御上使のお通り。大切ッな道は作クらず。御法度の博奕を打か。シカモ此道端で。鳥の町だと思ふてか。わり様達は〳〵。途方とてつもない者だと。地いはれて惣々蛭に鹽。張ッたる錢も壺皿も手

持不沙汰の盆莚に氷付たるごとく〵　地　中に漸そろ〳〵と首を延して這出る龜の甲より年の功九郎助が追蹤笑ひ　詞ハヽヽヽホヽヽヽ　詞庄屋様のお堅いお心から。仰山に思召も御尤でござりますれど博奕といへばいふ様な物の。是は本の慰み手業。見ぬふりなされて下さりませと　地いはせも立ず目をむき出し　詞イヤコレ九郎助年の程共ない馬鹿つくしやるな　二文四文の讀か。十壹文ぐらいのめくりならば慰共いふべいが。大それた壺皿。道成寺と出かけて置て何の慰み　惣躰村の風儀が悪ふ成り。博奕打たり隠し遊女を置たり。是を名付てばくへき逆きつい御法度　其御法度を背き皆がのらをかはく故。御年貢の皆濟が出來ないで毎度庄屋に役害かける。言語同斷珍事ちうやうな者共　近村への見せしめ　一々に繩をかけ御地頭様へ連て行　覺悟ひろげと　地　脣はへの字　體は大の字にふんばたかつてフシわめくにぞ。百姓共はにがり入持て立たる大しくじり　互に點き呵合　惣々割の錢三百修善寺漉の塵紙に。包で五兵衛が袂に入。庄屋が傍に　立寄て木綿布子の袖口へそつと投込耳に口。呵く點く忽に心容も。文彌カヽリぐにや〳〵と土砂をかけたるごとくにて　者婆遍鵲が藥な驗の早い袖の下　詞ホヤ〳〵ニコ〳〵ヘヽヽヽ此庄屋を庄屋と思ふて。わり様達が敬へば。おれも又惜ふは思はぬ。いふといはぬとでこそ有。何ぼ堅い顔しても。慰せぬと女嫌ひは余り澤山にはない物。此庄屋やぼではないはい。今の様にいふたのは畢竟が表向。見りや胴へ大分引たそふな。片身恨が有ては氣の毒。コレ五兵萬作番子はまだ何番有ぞい。モウ十四五番殘つておりま

す。ムヽ何じや十四五ばん。仕かけて止りや痳病に成ル。いつそやつて仕廻ハしやれ。人ニが見りややかましい。おれが張番ンしてやらふ。ソレハ有リがた茄子漬庄屋様のお赦しで。樗蒲一張ルといふ事は本ンの藪に香の物。地きをひかヽつてサア受ケた。結句今の採合から。此九郎助まんが直つた。又六も又受ケた。おれは八百一貫と。地聲くフシいさめば浦山しく庄屋は見とれて居たりしが。そろ〳〵傍へ立寄ッて。詞ハアハアそんじよ夫レからそんじよ夫レ。五びん三の五と出たれば。今ン度は丈夫に往目。さつきに貰ふた此三百。棒にふるか但又。一〆三百五十に成ルか運は天に有リぼた餅は棚に有。一チかばちかのして見もの。びんだ〳〵と地投出せば。詞サア庄屋様抜キますと地壺皿明ヶれば。詞南無三ン六た。思ひ掛ヶない豆腐箱が出たはい。ヱ、悔しい。六に張レば取ッた物　此庄屋が一ッ生の誤り。よい〳〵今マ道で年ン貢の未進取ッて来た。四文錢が二本ン有ル。今ン度は戻りの五に張ルぞヲツト地明クるを見て恟り　詞なめら三ン寶二が出たは。ヱ、大事の所を張損ふた。コレ胴取リ二三貫ンかしてたもれ。イヱ〳〵借かりは一ッ向に致しませぬ　何ン成リと出さしやりませ。ヱ、五兵衛ヤ其様にいはない物ンだ。何ンぼ負てもおれは庄屋だ。夫レでも成リませぬ。ヱ、けちな胴取リだ。そんならば此羽織で七八百かしてくれい。アイツレ七百口の子が廿八文引ヶます。よし〳〵濡ぬ先キこそ露をもいとへ。今度は三つに張ッて見る。大屋が戻りの六。引ッ切リが五三だぞ。ヲツト合點と地明クれば又二。詞ヱ、二のつらが出た。大事のつらを張リ損ふた。此庄屋が一人リ負ヶ。破れかぶれと帶ぐる〳〵。詞サア此布子に壹貫二百かしてた

もれ。アイコリヤ水に入たればどふもそふは踏ませねよ。庄屋様だけかして進じよ。ソシテ見れば丸裸ずぶにもされまい。下馬の古じばん百に踏でおまへにかす。殘壹貫百の口 地 たらぬ庄屋が無てんばち。詞 此度が一生懸命。天下分めの晴勝負。南無博奕大明神。なめならつらの二を張ります。形なら戻の六を張。ハア二を張との御神託。思ひ切て一點張 地 願以此功徳明れは三 詞 ハア悲しや臺座後光してやられた。地 エ、無念やと裸身に、汗を流して悔しがり 地 羽織も布子も張込て何と 庄屋が投首に。胴取は能首尾とそろ／＼仕廻ふて 詞 コレ庄屋様此二品は質屋へ下る。壹貫八百七十二文持てござれば引かへ サア 地 皆ござれともぎどふに打連 フシ 立て走行。フシ 跡にとほんと。庄屋栃兵衛。次第／＼に元氣もめいり 氣抜になれば秋風のいとゞ。フシ 身にしみ寒氣立。詞 エ、うらめしや腹立や。貰ふた錢の三百に。年貢の未進の八百文。七百と壹貫二百合て丁ど三貫文。余りほいのふせしめられた。ハア思ひ出せば先年も硝子の壺皿で。負させた例も有ば。あいつらが云合せ奴賽でいかさまにかけはせぬか。エ、口惜や。村のたばねもする此栃兵衛じばん一つの此仕合せ 栃兵衛棒をふるといふは扨はおれから始つたか。何をいふても三貫といふ錢を今宵中に調へねば。布子も戻らず羽織も流れる。錢ならたつた三貫文で。庄屋が外聞失ふか。ア、錢がほしいな。最早日本の國に此庄屋が祈る神も佛もないか。ハア、チ、チン／＼ 地 寒さ紛らす口三味線しよ。げに成たるつゝ折からに。地 所の代官秋山官藏。家来引連かけ来り。夫と見る方取て突退。詞 ヤイ庄

屋のうつそりめ、今日は六波羅ゟ御上使の御入と、主人伊藤入道殿ゟ先達ての申付。然るに御用は相構はずうぬが形はそりや何だ。サア夫へ出ろ。ハイつゝと出ろッ。ハ、イサア出おらぬかと呵れてハイ〳〵〳〵白衣でおりまへす御赦されませふと。地まじめに成てはい出る手なら足なら蟇。官藏はおかしさこらへヤイ〳〵。詞何だ何の眞似だ。ハイ〳〵アノモノデござりやす。京から大切な御上使様のお出故。御馳走に此海の鮑でも取て上ふと存じやして。夫故に此通り眞裸に成やしてござりやす。何だたわけめ。シテうぬが着物羽織は。ハイ〳〵夫にこそ因縁譚古事來歴がござりやす。サア其譯をぬかしおらふ。ハイ〳〵アノ。物でござりやす。爰に脱で置やしたを。ひいひよろりつと鳶めが。引さらへて參りやしてござりやす。エヽ馬鹿め相手に成隙がない。京都ゟ主人方へ時付村繼の御用箱。うぬか内へ申付ても人足が一人もない故。身が家來に持せて來た。人足を早く出せ。ハイ〳〵其人足めらは。大勢呼で置やしたが。皆勝迯を致しやして。一人もおりやせぬ。エヽむごい奴等でござりやす。ヤアべら坊め。おらぬといふて濟そふか。急御用が間違ふと首が飛ぞ。ワアイくはばら〳〵〳〵。人足がなくば御用箱うぬ持て行おらふ。ハイ〳〵お安い事でござりやすが。何ほ裸でおりやしても。庄屋は庄屋でござりやすれば。持て參りにくふござりやす。エヽじれつたい家來共。そいつめに其箱持せろ。畏つて大勢が庄屋にかつがす御用箱早うせ上れとフシ突飛せば。地庄屋は鼻をすゝり込。遁れぬ所と思案を極。箱ふりかたげ拍子取。初に三百賄はれ夫

故三貫張込ンだ　羽織や布子もぶち殺し　裸で道中成ル物か　成ッてもならいでもお地頭の　お代官〳〵
緩怠で振込〳〵御用箱　奴ヨが尻は寒ざらし　高野六十那智八十宮地〳〵の色若衆　我ト等が尻も一ト切ト
は。壹分自慢の棚尻ひよつこり〳〵ひよこ〳〵〳〵振リ込ミ〳〵〳〵　さ足を早めてフシふつて行　地
跡に官藏家來を招き　詞上使のお出に間も有ルまいゝ　主人ンへ此旨申上ゲん。地サア皆來ッれと一さんに
ヲクリ家來引連れ急ギ行。フシ跡へ一ト群。ざは〳〵と所目馴ぬだて風は　伊藤入道が乙娘器量人ト目に
辰姫とならび名取の品容　いつの比か人ト忘れず　頼リ朝卿に馴初メて。二人リが中の朝若君　乳母に抱
せいそ〳〵と忍び詣の御ン歩路。ヲクリ子持チと　見へぬ振袖に　誰レも見とがめぬ計リ也。地鳥居の本に
立休らひ。詞ノウ皆の者。心せかるゝ忍びの道　嘸追ヒ付ケ兼たで有ふ　地アヽえんどやと媚かし。
詞イエ〳〵私共がお姫様の　お足がお痛遊ばしませふ。地誰有ふ伊藤入道様のお姫様　戀なればこ
そ御歩路　詞ヲヽ早瀬殿のいはんす通リ。お預りの頼朝様　お姫様と深い中。此和子様のお出來なさる
は。大抵の御縁ンではない。去リながら爺御様は。お姫様を意地惡ルの。アノ八牧の判ン官兼高様へ遣カ
はされんとおつしやるを。こちらが寄ッて漸と云イくろめて居る最中。和子様の事聞ッすが否や大ノ事ト
サイノ。地爺様のお詞を背いて嫁入リを言延すも。頼朝様へ心ン中。殊に此子を隱して育る皆の者の
いかい世話　詞けふは此子が百日參り　お客の騷の聞し紛れ。漸と忍び出此御宮へ參詣。地頼朝様も
お出有ル様〳〵れ〴〵と申シ上ゲしが　お首尾が惡ッいか出にくいか。若や跡からお出も有ルか。皆氣を付ケ

て見てたもいのふ。詞アイ〱裏路次からこつそりとゝくれ〱と申上。合鍵上て置たれば。大方お出遊ばしませふ。地アレ〱あそこへ忍び姿の深編笠。頼朝様に違ひはない。ヲヽイ〱。と姉中。姫は嬉しさ飛立思ひ。早ふフシ〱と差招く。地罪なくて。フシ配所の月や。浦々の。風景さへも思ひ有身にはさながら目に付ぬ。前の兵衛佐頼朝卿。過し平治の亂に伊藤が舘に預られ。左迁の身の漸と忍びて。爰に参詣も姫の戀路に引さるゝ。水の出端や。湯の山の鳥居の。元に歩る地待設たる姫君は頓てお傍に走り寄。アヽ嬉しやと手を取て。人目も分ず縋り付嬉し涙ぞフシわりなけれ。地ヲヽ待兼しも斷。詞我も心はせいたれ共。知通りの事なれば。中々出られる首尾ではなけれど。そなたの方からおこされし。合鍵を便りにて。そつと路次から忍び出。此宮へ参詣も。此者がかはいさ。ドレ乳母フシ爰へと。抱取。詞コレ見や。ぼんが見えつてか。にこ〱と笑ひ顔。コリヤとゝ爰や〱。ハヽヽヽドレかゝ様が抱てやらふか。地ホヽよい子やと餘念なく。子には目のなきフシ親心。地哀昔の頼朝ならば。一門の持てやし百日参りの行列も。花々敷有べきに。漸乳母が懐に抱かゝへし此有様。果報拙き我々が身の成果やと計りにて。スヱ打涙ぐみ給ふにぞ。詞ヲヽ又ひよんな御述懐。きな〱思召ず共。地沖の舟でも御らふじてお心を慰給へ。詞ほんに同じ舘に居ても。父上兄上。家中の者へ遠慮有ば。いつえみ〱とお物語りも申上ず。けふ一日の喜見城とフシ寄り添給へば。詞イヤ〱〱只さへ情なき父入道。此事が露顯せばどんなめに合ふも知ず。爰は人目も

遠ン慮有リ。殊に此日様子を聞ケば。八牧キの判官が方に貰たい迚。親々の相談も出來たと聞ば猶さら互の身の愼み。所詮添ハれぬ惡ク縁ンと。おりや諦てゐるはいノ。おれが事は思ひ切リ父の詞に隨ひて。判官が方へいてたもれ。夫レが却て心ン中と。聞クに姫はせき上ケて。詞ソリヤ胴欲しや。賴朝樣。地おまへとかふなる其中カはついした。事ではござんせぬ。清和源氏の御公ン達。誰レに劣ぬお身なれど。平家の威勢に。狹られ鄙の配所の御ン住居。生マれ付イたる父上の難面仕方タ嘸や嘸。お心苦しかるらんと何かに付て心付。私が誠が通じたか。お前も詫しいお詞がッ。身にしみ〴〵と有リ難く。夜に口に增るいとしさを。人にもいはれずお前にはお目にかゝれば恥しく心計リで戀こがれ。目顏で物をいは躑躅いはねばこそ有レ戀しさの。かふし〳〵て物思ひ。こがれて死ュん埋火の。お居間の巨燵の火は有ルかと。火箸取ふり。ついちよつと。お手に障つた其手をば。しつと握つて下さんした。夫レから段々深ふ成リや。ゝ迄產だ二人か中。父の心を知リながら。命かばふて成ル物か。夫レに何ぞや思ひ切。アノ憎らしい判官へ嫁入リせよとは何事ぞ。そりや。余りじや。胴欲ナ。田舍育のふつゝか故。おまへの心に秋風が。立ッたら私しや生イては居ぬ。むごい事いふ其手間でいつそ殺して下さんせと縋り付イたる。フシ恨泣。地賴朝卿も淚ぐみ。心に思はぬ根なしごと。氣に障つたらこらへてたも。詞世になき我を左程迄。思ふて下さる志シ。死でも忘れはしませぬと地じつと引キ寄せしめ寄セて。動ぬ中の要石。わりなき戀路とフシ見へにけり。地折節向カふの磯邊にいきせき來る人ト影に。ちやつと飛退フシさあらぬ躰イ。地程なく來る

角前髪御座を見るも恐れ入。頭を砂に摺付れば。頼朝御覧じ。ホ、珍らしや江馬小四郎。詞父時政もかはりなく。汝も無事で珍重〳〵。ハア君にも益御機嫌宜しく。イヤ是は〳〵辰姫殿。私に何御遠慮。お隠なさる事はないと。地いはれてハット手をもち〳〵。詞ヲ、義時様よふ御出。頼朝様と來た事を。必沙汰して下さりますな。何が扨。君にも兼て御存の拙者が所存。其御遠慮には及ませぬ。夫はそうと我君へ。急に申上度御密談。ム、何急用とは心がゝり。ハアイヤ爰は人目も有。幸あれ成拜殿にて。御物語仕らん。ホ、然らは一所にイサ來れと。地姫君姆諸共に。神前フシさして歩行。地折しも濱手騒立上使の御出と先拂ひ。白砂蹴立る行烈は。長田ノ庄司忠宗。夫と知せに出向ふ伊藤入道祐親。詞御上使御勞苦千萬と地地に鼻付れば長田庄司。詞コレハ〳〵御老人の遙々と御出向ひ。近比以て痛入。ハアイヤ私ならぬ六はらの御上使。せめてもの身の冥加。イヤ夫はそふと長田殿。御上使とござれば何か氣がゝり。入道は老人早ふ安堵致したい。ホ、然らば是にて上使の趣申聞さん。ナニ家來共控へよと。地互に家來を遠ざけて。詞上使の趣余の義ならず。先達て此長田が警固致し。預置たる兵衛ノ佐頼朝が事。ヱ、承れば貴殿の娘辰姫に娶せ。男子出生迄致させ。伊豆相摸の大小名を方ひ。謀反の企有由。宗盛公御怒つよく。實否を糺し紛れなくば。頼朝始伊藤が一族首を打。悴めは此海へ。ふしづけの刑に行へよとの嚴命。御返答承はらんと。詞にべなく。フシ云放せば。地伊藤入道せゝら笑。詞ハ、、、ゝコハげう〳〵敷上使の趣。頼朝を守

立て謀反などゝは。跡かたもなき偽。成程頼朝。娘めとくされ合男のがきを産せた事。能存て罷有。吟味致さず打捨置は。大切の預り人と足をくゝつて動せぬ入道が謀。何の流人や小伜ごとき。切ふと突ふと心任せ。拙者が手際お目に掛ん。ヤア〳〵誰か有。頼朝が小伜。幸宮参りと聞及ぶ。引立来れと　地下知すれば。畏つて秋山官藏宮居の方へ　走行　地引違ふて一さんにかけくる下部が息つぎあへず。詞江間小四郎義時頼朝を奪取峠の方へ逃る故。味方の者共十余人追かけて候所。義時めが手づよき働き。寄くる者を人礫さん〴〵に投ちらし　地行方しれず候と。聞より入道騒立　ソレ家来共追かけよ急げ〳〵と下知すれば　長田庄司しと押留　詞アヽイヤ騒れな入道殿。イヤサ頼朝を取逃いては此入道が言譯立ず。ハヽヽヽイヤ小い〳〵。よもや翅は有まいし　逃隠るゝ共日本の内。今平家の威勢を以て。尋出さんはいと安し。殊に江間小四郎が連退たと有からは。行先知し詮義の手がゝり。地サナ騒れそと鎮る所へ　朝若君を小脇にかい込　かけ来る秋山官藏　仰に任せ頼朝が小伜。召連て候と。地忠宗が手に渡せば。ホヽ是にて疑ひ晴申た。詞申付たる船の用意。ソレ早く〳〵と呼はれば。地畏つて官藏は。舟手をさして急行。地跡をしたふて長姫が足を計にかけ来り。イヤ〳〵其子は渡さじと。縋り付を入道が。エヽ面倒なと突飛す。心の荒波荒海を。押切つてくる早舟に。長田庄司飛のれば。ノフコレ待てと取縋る姫を礒邊へはつたと蹴倒し父入道　詞エヽ性懲もなき大膽者めと　地用意の早縄手ばしかく。濱邊の

松にくゝし付ケ。同じくフシ舟に飛のれば。地 早押シ出す舟ナ小供。姫は身もよもあられぬ思ひ。行カんとすれど縛り繩。ノフコレ〳〵と呼叫ぶ。聲を揃て舟子供。ヱイサツサエイサア〳〵エイサツサと。沖を目當テに漕出し其間イ遥に。遠ざかれば。姫は目もくれ心きへ。ヱヽ情なの父上。難面人トの心やな。西も東シも辨へぬ。其子に罪は有ルまいし。殺さで叶はぬ事ならば我レをも一ッ所に乏づめてたべ。生キながらへて頼朝樣へ何シと云イ譯有べきぞ。神ミ佛のお力ラで沖の方ゟ風おこり。あの舟を吹戻し。我カ子助ケて給はれと。もたへこがるゝ有り樣は。フシ 目も當られぬ風情なり。地 舟は次第に遠ざかりおぼろ〳〵と見へ分カぬ。霧の間に〳〵長田庄司。簀巻キに乏たる若君を。海の深カみへ投ケ込メば。消る思ひの辰姫は七轉八倒氣も散亂。悶苦しみ泣叫ぶ。女の一チ念根限り。さしもに太き大イ木のみきはゆす〳〵。松葉はばら〳〵ばら〳〵と。髪も心も亂レ〳〵て手の皮に。切レ込繩も厭なく。跡上り飛上りもがく拍子に縛り繩。ふつつと切レてころ〳〵〳〵かつぱと。三重カカリ 轉びフシ 伏沈

道行千草の狂咲

秋風に亂れ亂るゝ糸薄。いとしかはいと抱キしめし。其みどり子はフシはかなくも。きへ行ク浪のうたかたや。哀レをしらぬたらちねの。心からこそ。フシ 狂はすれ。フシ 狂ひ亂て。身一つにヲクリ 便リなく〳〵鳴鹿の。地 夫マの行ク衞と子の行衞二つの道にふみまよふ。我カ名はまだき辰姫は。人トの譏も思は

くもそゞろ心の。うつゝなく夢路をたどる濱傳ひヲクリ思へば。岸によるなみも。我ヵ子のあたみ打過て遥の フシカヽリ西に傾きし。日金峠の山坂を。フシたどり〳〵て行なやむ。實やはつぼく。丁々として。山さらに幽なる。虫のこへ〴〵物わびて。いとゞ思ひや。增らん。うきこゝのかづ〳〵を見給へや人〴〵。春は梢の花にのみ。心をよせてみじか夜の。時鳥雪見草淺澤の杜若あやめ卯の花かれ〴〵に螢もうすく。かこち顔なる我ヵ涙落葉。しぐれに。濡初メて。我レながらはづかしや 哥百夜しのぶのかよひぢは。雨のふる夜もふらぬ夜も。まして雪しもいとひなく。こがれし夫マさきへうせし我ヵ子故に物狂ひ。あなたへ走りこなたへ走。詞ホヽ〳〵。ホヽヽヽ。姆共が取りまいて。だいじのぼんがくるは〳〵。ヲヽじやうだん仕やんなあぶない〳〵コリヤ誰レが手車。和子様の手車。てうちかふり鹽の目。つむりてん〳〵よ。ぶり〳〵だいこふり皷地ふりみふらずみわかちなき。涙の雨のばら〳〵とおぎの。下々露はぎの風狂ひ亂レて正躰ィなく。フシ氣を取り失ふ計りく。三下り哥醫者のいの字は命のいの字。下手のへの字はへぼくたのへの字。風にさはぐはやぶ醫者殿と。目利に違の長ヵ羽織。野道あせ道まかりくねつてそつくり。ひよつくり。だつくりがつくりちつくりびつくり足曳の。山の山なる山里よりも。療治歸りの道の中ヵ足にけもつれ恂りくるりと飛返り。詞フワアヽ悲しや。此山中の山ッ中に。晝寐か但生酔か。すつての事に蛙の様に踏つぶそふとしたれ共。さそくのきいた計りにけがゝなふてマアお互ィにおめでたいこと。地よく〳〵ながめ詞ハアコリヤ目を廻ハしたそふな。卽中風でも有ラふか。イヤ〳〵よく〳〵醫案を廻ヮ

らせば。十七八な娘なれば。中風てもあんまいかい。食傷かはくらんか。疝氣寸白或は又。頭痛めまひ立チくらみ。四百四病の其中で。我レらが見立テ寸分シも違イなふ何シそて有ラふ。先ツ脈を伺はんと。地 勿躰らしく立チ寄ッて。詞 浮沈遅數ちんぷんかん。肺脾命門文盲醫者。ム、、、と一人合點 地 夫レ。脈論にけん脈びん／＼する時は。詞 其時ぴち／＼すといへり。まだ死切ラぬ此病人シ。サラバ氣付ケと思へ共印籠も持チ合さず。こんな急な時分ンには醫者ではすつきり間に合ハぬ。素療治でやりかけふ。灸をすへふか水呑マそか。呼生ケふかこそくろか。天道ゑたいと有リ合す。地 竹切レ追ッ取ゑやにかまへ。詞 今立る此竹が。東へ轉べば水呑マす。西ならば灸すへる。南は呼ヒ生ケ北ならばこそくるそ。無量靈法神シ道加持と。放せば東。ハア水だと。傍なる清水手にすくい口に入れば。漸と。息キ吹かへしきよろ／＼と。醫者の胸くらゑつかと取。詞 コレノウ 中頼朝樣。地 おまへ 計リが。立チのいて跡難義を構はぬとは。つれなやむごや胴欲と。恨託て泣く涙。醫者はうろ／＼きよろ／＼と。詞 コレ おらアは頼朝の何シのかのと。そんなうさんな者ではない。昌伯ゑや。／＼。ゑかも山下昌伯じや。地 はくじや／＼とちぎれしざうりはき直して。行カんとするを引とゞめ。地 コレ馴初メし其日合まれに逢瀬の戀中に。涙の露の。玉のをはたへぬも。つらきちぎりとけり。思ひはすべくと書てはやぶり。やぶりては筆の命毛書キつくす。文車の文。ちりづかのちりがつもつて山々の戀しくも。あすか川。淵は瀨と成ル人心何とて海ミは瀨となられ。床しの我カ子やなつかしの我夫マと。又取すがりさめ／＼と草木も。フシ ゑめる計リと。醫

者は殆持餘し。詞ム、何ほいふても合點せぬ。こいつ氣違に極つた。なつかしの我夫やとおれをと
らへて去なつくは。どふでも戀病に違ない。夫つら〳〵おもん見れば。藥師如來の素問靈樞にとか
れていはく。詞思や氣と成氣は積と成。積は病の元と成。お醫者樣でも地神樣でもほれた病
は直りやせぬ醫者も。匕をぞフシ捨にけり。詞ヲ、直らぬ〳〵直りやせぬ。ホ、直らざ療治も打やつ
て。これからいつそ踊にせい。ヲ、合點じや。歌竹に雪降やナア。雀がちうとさへづる。そこで雪め
が。はつとちりおる。アレハエ、チヤラ〳〵エ。まだほいほらほいほらほ。本にうはきなことじやいな。松に雨降
りやナア。めじろがちうとさへつる。そこで雨めが。はつとちりおる。アレハエ、チヤラ〳〵エ。まだほいほらほ
いほらほ。本にうはきなことじやいな。それで松坂こへたヱ行つ戻つ踏去たく。ちくさの花のちり
亂裙も裳もほら〳〵〳〵。さら〳〵さつと吹おくる。みねの松風谷川の水の流と人の身の行衞
三重定ぬ。

第六　北條館の段

地文武を兼し武士と其名は四方に伊豆の國。北條四郎時政の美麗をつくす一構。富士を見越の庭の
景、フシ秋の梢の色々に。ヲクリ彩る中に植込の。フシ常盤の松の色かへぬ。己か氣なりの深緑。フシ奥
床敷ぞ見へにける。地潜りて時待龍の佐殿は。義時が情にて。虎口の難を漸と遁れて爰に假の宿。

心ならねば一ト間の内。フシ引キ籠たる物思ひ。地 お氣の結れ慰んと心を付ケて立チ出る。時政の秘藏娘政子の前。手づから持チし三方にヲクリ土器。乘セて目八分ニ。江馬ノ小四郎義時が長カ柄の銚子長廊下。なをざりならぬ兄弟のフシ心づかひそフシ殊勝なる。地 お次キの一ト間に手をつかへ。詞 お氣晴しに酒一トつ。召シ上ケられ下されよと。地 申シ上れば一ト間の内障子開いて頼朝卿。詞 ホヽ兼てゟ二タ心なき義時が志シ。分ケて昨日の働といひ。政子の前の深切。忘レは置カぬ去リながら。六波羅の計ひ。長田伊藤が惡心シ故。朝若を殺され辰姫は狂氣と聞ク。地 有ルにかいなき我カ命とスヱ打涙ぐみおはします。詞 ヲヽ共お案じは御尤様ながら。一寸シ延れば尋延ビるとやら。地 殊に弟小四郎が様々の心つかひ。心お氣もじ遊ばしますな。詞 ハアいかにも姉の申ス通リ。若年シながら此義時。命を君に奉ッり御奉公仕ッらんと。伊豆相模の大小名。密に御シ味方に招き置。スハトいはゞ御シ旗上と。兼て用意は仕ッれと。物かたき父時政。折リにふれてうら問共。若輩者の知レ事ならずと一トロにやり込メて。有無の境は分カられね共。地 敵對申ス躰共見へねば。是以ッて氣づかひなし。詞 何シの長田伊藤ごとき。取ルに足ざる老ぼれ共。御心に掛ケさせ給ふなと血氣にはやるフシ諫の聲。地 洩聞コへてや一間ゟ咳ばらひして立チ出る父時政。御座を見るゟハヽハツト頭を下ケ。詞 コハ端近カき御有リ様。ナニ義時。只今あれにて承はれば様々の讒言。當時勢ひ壯んなる平家へ聞コへを憚らぬ若氣の麁忽。壁に耳岩の言ふ世の中カに。身の程えらぬたわけ者。以來を急ッ度嗜おらふ。ナニコリヤ政子。君を一ト間へ御供申せ。ソレ義時も御一ッ所に。地 身も一ト間にて御物

語リ仕ッらんいざゝせ給へとフシ打連レ。奥へ入にける。狂ふとは。狂はぬ人トの目に見へて。我レは狂ふと白ラ糸の。亂れ心ぞ。フシ是非なけれ。地夫トを亡たひ子を託ち居るも居られず辰姫は。そゞろ心の一ト筋に我子を返せ。我夫マ戻せ。返せ戻せと泣叫びかつぱと倒れ伏シ轉ぶ。夫レと見るゟ政子の前。ノウいとをしの有樣やと。抱起して樣々に藥よ水よといたはれば。辰姫漸々心付。傍見廻し。ノウ思ひがけなや政子樣。詞父入道の惡心ン。大事の若ヵを殺されし。其悲しみ故狂氣と成リ。狂ひさまよひ來りしがコ地亂タれ心の其中にも賴朝樣のおはします。此舘へ尋來て。ア丶嬉しやと思ふより漸心は納りしが。逆もの事に我ヵ君へお目にかゝつて只一ト言。申シ上ヶた其跡は。自害と覺悟極めたる。あぢきなき身のうへを。哀レと思ふて下さんせと。フシ跡は涙にくれ居たる。地政子の前も貰泣いたはしゝとは思へ共。父の心を計リ兼、態詞もあら／＼敷ク。詞ム丶何賴朝樣が此内にとは。そりや跡かたもない間違ひ。エまだ御心が定らぬか。コレ氣をとつくりとお志づめなされホ丶丶、フシと云イけせば。地父の心さがなき故お隱しなさるも尤モながら。私が心は君の御存シ。詞どふぞおまへのお引キ合せ。イヤ知リませぬ。云にくい事ながら。親の詞を背ても殿御に付ヶは女の道。おめ／＼と若君を惡ク人ンの手へ渡す樣な。ふがいなし人トでなしと。賴朝樣がおつ志やつたらおまへは猶更恥のうはぬり。サ早ふお歸りなされませ。ム丶成ル程其おさげしみも尤モながら。いか程に思ふても女の力に叶ぬ筈と。地了簡付ヶて政子樣賴朝樣へ此譯ヶを。御詫申シて下さりませ。詞イエ／＼そんな未練な詫言いふ口は持チませぬ。舘に置クも穢はしい。

サ、、早ふいんで下さんせと。地手強詞にくはつさせき上。詞事を譯ヶて云ィ聞すを。無理無躰ィに返したがるは。ム、聞へた。頼朝様の色香にめで。殿御をねとる下タ心。マそふいふ事なら猶以ッて。頼朝様を置カれはせぬ。御供して立歸るとフシ奥をめがけて駈入ルを。押シ隔て政子の前。詞ヤア推参く辰姫殿。ならば手柄に留メて見よと。地行ヶば引キ留とヾむれば。又ふり切ッて駈出タす。どつこいやらぬと抓合ふ。娘同士の意地づくに顔の上氣は振袖の紅にフシ爭ふ風情く。詞ヤレはしたなし鎮り給へと。地聲をかけて小四郎義時。二人を左右に押シとヾめ。詞委細の樣子は承る何は兎も有レ辰姫殿。歎キの上に氣をもんでは。又も狂亂心元トない。姉人トもはしたない。サアく奥へと地義時が。詞に恥て詞なくヲクリ伴ひ一ト間に入にける。地フシ折節表テに聲高カく。詞長田の太郎景宗殿御出くと呼はる内。地長田震ひと名にうてし憶病風に吹キちらす。鬢髪ぼうく忙然と一ト抜ヶぬけしフシ男ぶり。地疊障りもどつたくた。上座に通つて押柄に。詞ヤア北條が悴レ江間ノ小四郎義時とはお手前か。我レ等は長田が御惣領親父は頼朝が首切リに遙々と下タられた。所をぼいとこかしおつた。地そこで親父が腹を立。地名代にいて詮義えてこい。畏つて罷向ふたれば。忝ナくも親玉の名代。安スいのじやないぞよく。サア頼朝を爰へ出せ早く。地くとフシ高カゆすり。地義時態兩手をつき。詞コハ存シ寄ぬ御難題。何故に頼朝卿かくまひ申さん樣はなし。イヤ其云ィ譯くらいく。是非いはねば拷門にかけ。骨を挫いで云ハせると。地習ふて來たる口眞似を。憎さも憎しと小四郎義時。詞イヤ云ハせて置ヶば圖ない惡口。頼朝の行

衛どこ迄も知ぬ〱今一言いふて見よ手は見せぬと。地反打て詰かくれば長田は俄にがた〱〱。色眞青に胴ぶるひ。齒の根も合ず。詞ア、、、これ〱〱。去迚は短氣千萬知らねばしらぬで濟事。おれも又親父の手まへ云譯さへ立や構はぬ事。シタガ早速に歸つては又親父の目玉を貰ふ。爰な座敷で晝寐して。よいかげんに起て歸り。親父の前へによつと出て。先達ての仰に任せ。北條が舘に向ひ。玄關長屋侍部屋。水門物置柴部屋迄。委しく尋候へ共。頼朝のよの字は扨置き。との字もの字も見へ申さずと。いふて仕廻へば役目は濟。先夫迄は奥の一間。茶がほしければ手をたゝく。何にもお搆ひ下されなと。地己が強さの追蹤を。請つ答つ足早に跡をもフシ見すして迯て入。地義時はおかしさの。ふつと吹出す秋風に。フシちるは木の葉か。渡り鳥植込。めかけ來りしが。ばら〱〱と散亂し思ひ〱にフシ飛失たり。地義時梢に急度目を付。詞ア、ラ怪しや。しげみを目當に來りし小鳥。故なく騷ぎ飛去しは。ム、野に伏勢有時は。行鴈行を亂すといふ兵書の詞。扨は是成植込に。忍びの者ごさんなれと。地有合弓矢追取て。きり〱〱と引絞り。切て放す矢よりも早くヲクリひらりと。飛だる忍びの曲者。ユ仕損ぜし殘念と。射かける二の矢に身をかはし。椽より上に飛上る。透さず義時弓取のべ。打てかゝるをかいくゞり。片手に抓片手にて。頭巾かなぐる面魂同じ年ばい角髮の。すつくと立たる有樣は。紅白二りん芍藥の。咲ならびたるごとくなり。地義時いらつて。詞ヤア小ざかしき盜賊めといはせも果ず。ヤア盜賊とは吾長

し源ン家譜代の忠臣シ。安達藤九郎盛リ長とは我カ事〱。我レ故有ッて諸國を廻グり。頼リ朝卿に見へんと。當國に來て樣子を聞ケば。此家に忍びまします由。委細の譯は追ッての事。地 先ッ我カ君へ御ン目見と。奥をさしてかけ行クを、義時取ッて突キ戻し、詞 イヤ虚實知レざる其方。猥に奥へは叶ナはぬと 地 せり合ふ拍子に盛長が、懷より落チたる一チ卷ン。左右へさつと押シ聞と。詞 何々平家追討一イ味の連ン判。ホ、此盛長が源ン家へ忠義。五畿内イはいふに及ばず。四國ク九州大イ半ンお味方。ム、驚キ入ッたる盛長の働き。此義時も兼てな。伊豆相摸の大小名。過半お味方申させ置ク。スリヤお手前も。御自分もと。地 互イに解合ふ忠義と忠義。絕たる源氏再興の。所存ンの程ぞフシたくましき。地 義時傍見廻して。詞 我レ密に頼朝卿を御ン供申。我カ内にかくまへ共。父の所存ン知レがたければ。貴殿ンの見へしを幸イに。何ッ方へも忍ばせ申さん。夫レに付キ種々相談。我内は却て遠慮。裏の亭にて熟談仕たし。ホ、仰に任カせ兎も角も。地 イサ御一ッ所にと兩人はヲクリ打連。へ立て出て行。地 程もあらせず表テの方。上使の御入リとひしめけば。舘の主ジ四郎時政。衣服改め出向ふ。入リ來る上使は長田ノ庄司忠宗。己レが意地を立テ烏帽子。素袍の袂トのつしのし。儲の。席に打通り。詞 ハイヤ何ニ時政殿。くどふ申に及ばず。頼朝流人ンの身を以ッて。伊藤が娘と不義放埒。剰 謀叛の企 有ル由。六波羅殿の御機嫌さん〴〵。去ルに依て拙者が上使。がきめは昨日海にしづめ。頼朝が首討タんと存スる中チ。貴殿ンの子息小四郎義時。頼朝を連レ歸りし由。いか程隱し忍ぶ共。頼朝は天下の科人ン。異議に及べば身の破滅。サア引ッくゝつて出さるゝか。但首

討ッて渡さるゝや。返答いかにとにがり切ッて。フシ云ィ放せば。地時政態空とぼけ。コハ存シがけなき上使の趣。詞頼朝を此内にかくまひしなどゝは跡かたもなき僞り。夫レは定めて入道か頼朝を取り逃カし云ィ譯なさの逃ヶ詞。扨はそふかと此内へ。詮義に來たる長田殿の智恵の程。去り迚は淺はか〳〵。但シ又此内に有りといふ證據ばしござるかと地びつく共せず云ィ返せば。詞ヤア何ンの角のと理屈くさき時政。かくまふたかかくまはぬか。家捜しすればつい知レること。地奥を目がけてかけ行を。立チ塞つてどこへ〳〵。詞身不肖ながら時政が舘。家捜しせんとは推參シ至極。一ト足でも踏込マば。兩足切ッて切りおらんと。地切及廻せばこなたもしれ者。詞イヤサ見せぬといふ迚おめ〳〵と歸らふや。意地ばらば汝が細首。討チ落すが通さぬか。ヲ、サならぬといふては金輪際。甲が舍利に成ル迚もいつかな〳〵。ならば手柄にサア拔ヶ〳〵。地サア〳〵〳〵と詰合〳〵。既にかうよとフシ見へたる所に。詞ヤア長田殿爭ひ無用頼朝は手に入ッたりと地聲をかけて伊藤入道。佐ヶ殿を引ッ立出れば。ハット計りに時政が立チ寄ルを入道押シ留く。詞かくあらんと存せし故。密に此内へ忍び込ンで此したら。サア長田殿。此入道が預りの頼朝渡し申。御勝ッ手次第に首打ッて歸られよ。地ヲ、合點ンと忠宗が。後ロへ廻れば四郎時政。そふはさせぬと支るを。エ、面倒なと入道が引キ退突キ退ヶ爭ふ内。刀するりと長田ノ庄司。フシ頼朝の首打チ落せば、地ハット計りに時政は齒をスエテ食。ゑばる無念シの躰。長田は用意の首桶に首を入レんとする所へ。妻も亂れ辰姫が。詞ヤア夫トの敵我ヵ子の敵。長田やらぬと突ッかゝるを。地入道寄ッて腕捻上。詞氣違ひ

めを何ひろぐさ。地懐劔もぎ取脇腹へぐつさ突ッ込血煙に。物に動ぜぬ時政も長田も悔り立寄レば。入道怒の聲高く。詞エヽ己レにつくいやつ。頼朝さ不義ひろぐのみならず。上使に敵對ふ不敵者。生ケ置イては親兄弟の首に報ふ大膽女。早くたばれさ突キ飛す。地フシ姫は苦しき。目をひらき。詞チエヽうらめしや淺間しや。鳥類畜類虫けらさへ。子を悲しまぬはなき物を。欲に目がくれ主殺しの。長田めさ點き合。聟や孫を目の前で。殺してもまだ飽たらず。現在我カ子を手にかける。又さ世にない大悪人シ。人トではない。鬼よ蛇よ。地わらはが命は惜まねど。大事の〳〵頼朝樣。淺ましい此お首さ。這寄〳〵。抱上ゲ詞コレ申シ我夫マヽ。悪ク人シの親故に。望ミ有ル大事のお身をやみ〳〵さ殺されし。嘸御無念シでござんせふ。かふなる事さは露しらず。地きのふ産すな詣の時。心のたけを云イつくし。蝶よ花よさ抱キかゝへかはいがつたる朝若は。人ト並な死もする事か。ふしつけにしづめられ。玉の樣なるあのはだへを。詞鮫や鯨の餌食さ成リ。地浮ム瀬もなき身の因果。かはいの我カ子や。いさをしの我カ夫マやさ。くどき立〳〵。深カ手の上に氣をもみ上ケ。今を限りのだんまつま。もろくも息キはたへ果たり。地見るに忍ビず時政は。瞼で涙紛らせば。長田ノ庄司佛頂面。詞エヽさま〳〵の事に手間取ル上エ。役にも立ぬ無成敗。イヤ此入道が面晴。六波羅への申譯ケ。娘が首もお土産さ。地首はつしさ打落し。袖引ッちぎつて押シ包。詞イザ御上使御立チなされ。ヲヽいかにも長田が役目は濟シだ。ナニ時政殿。頼朝が首討ッたれば最早申分シもおりない。お暇申スさ立上れば。地時政も不肖〳〵。互イに御苦勞〳〵さ。式禮目禮入道

は。己が館へ時政はフシ帳臺。深く入にけり。詞ヤイ長田が家來共。直に歸洛の供仕度参れ〳〵。地と呼はる所へ。立歸る盛長義時。合點行ざる内の躰と。心せき立長田にはたと行當れば。詞ヤア推參なる丁稚めらと。地いはれてこらへぬ二人の若者。詞シテ其方は何者なれば。ホヽ。六波羅の上使長田庄司忠宗と聞もあへず。ヤア人非人の長田庄司。軍神の血祭り頼朝卿への御土産と云も切せず長田庄司。大口明てカンラハヽヽカラと笑ひ。詞ム、スリヤ頼朝が脚かぢりの丁稚共。己等が大事に思ふ頼朝は爰にけつかる。地逢してやらふと首桶の。蓋を明れば二人は恟り詞ナント見たか。頼朝はもふ首に成た。笑止〳〵と。フシあざ笑ふ。地兩人は物をいはずに切てかゝるを引ばづし叶ひもせぬ事仕上るなと。手練のあしらひ血氣の兩人。突出す刀庄司が高股ぐずと突れてたぢ〳〵〳〵。かつぱと伏を双方より。留め指んとフシ立寄所に。地一間の中ゟ高聲に。詞ヤア〳〵兩人暫く待。兵衛佐頼朝。對面せんと呼はつて地襖開けばコハいかに。長田太郎景宗。烏帽子裝束。花やかに初にかはる人相骨柄。左右に従ふ時政政子。二人は恟り飛しさり顔を。フシ詠めて居たりしが。詞ヤア心得ぬ長田太郎。頼朝と名乗子細はいかに。ム、其様子は此庄司が一通り物語らんと。地手疵もいとはず起直り扨も。詞平治の戰ひは。右衛門督信頼が臆病未練の振廻故。左馬頭義朝公。是非に及ばぬ負軍。數多の公達ちり〴〵ばら〳〵。義朝公も漸と鎌田一人召具して。詞我本國尾張の國。野間の内海へ落給ふ。固我は源氏の家臣。譜代相恩の御主といひ。鎌田

は舞の事なれば。彼是他事なく御介抱。程なく暮て明れば早。平治二年にあら玉の。地フシ春のことぶき。事終らば。我一族を招き寄殘黨を語ひて。都の空に責登平家の一門討亡し御無念。晴し奉らんと用意に暇フシなき折から情なや御大將。數ケ所の矢疵に長途の寒風。破傷風の病と成。醫療さま〴〵手をつくせ共驗なく。頼少なく見へ給ふ。大將我を招かせ給ひ。詞我命は惜からず。數多有子供の中。兵衛佐頼朝こそ武將に備はる器量骨柄。此度の戰ひに若氣の至り深入し。敵の擒と成たるが若。殺されば誰有て。某が志をつぎ恨有平家を亡し。地いつか源氏の世となさん。黃泉の障り是計。其方が魂を見込頼み度一方便。荊軻を頼みし。太子丹が計を學ぶにはあらね共。此義朝が首を討長田庄司二心。平家へ無二の忠臣と見せ其虚に乘じ方便を廻らし頼朝を助くれば此上もなき大恩と。地泪を流しの給へ共。譬計にもせよ三代相恩の御主人を。討奉らん樣なしと達て御辭退申せしに。御湯に召され給はん迚御自身湯殿にかけ入給ふ。コハ心得ぬ御振廻と跡をかけ付見て有は。地御身を清め湯殿にて。情なくも御生害。見るに目もくれ心も散亂惘れ。果て居たりしが。地御大將は覺悟の生害。ヤヨ庄司。詞最前頼し方便のごとく。我首討て都へ持と直にとゞめの御刀。地大將討れ給はんに續郎等なかりせば。源氏の瑕瑾と正清も。續て生害詮方なく。主君と舞の二つの首。平家方へ持參の折しも。詞六波羅の御前には勝軍の恩賞。地或は生捕罪の輕重。評議區々。成中に詞天の助と頼朝卿。池の禪尼の命乞にて伊豆の配所へ流罪の沙汰。スハ爰こそと色々

と詞を工に言ひ廻し。警固の役を乞請しに。義朝公を討たりと。心赦せし平家の一門。まんまと我に頼朝卿の警固の役を赦せしより。地牢輿に付添ていたはり申下りしが。詞國に殘せし伜太郎が年恰好の似たるを幸。鳴海の宿へ招き寄せ。頼朝卿と入かへて。伊藤が方へ渡し置。佐殿と見せたるはコレ此庄司が伜の太郎。頼朝公は我子と名乘せ。地猶も平家へ悟られまじと憶病不覺に拵へて。長田ぶるひと世の諺にいはせしも。智恵をふるひし方便ぞと。初て明す長田が計略有合ふ人〲一同に。はつとフシ感ずる計なり。地時政御前に打向ひ。詞長田殿とは年來の交り。此計の抑より。天地の間に此事を知たる者は時政一人。此上迚も事穩便。盛長。伜心を合せ。一味の手配揃ひなば。地院宣を乞請て奢る平家を討亡し頭殿の御無念味方の恨はらし申さん。御心安かるべしと申上れば頼朝卿。長田が傍に歩寄。年月我を介抱の心遣ひは須彌大海。武士の高名忠義も或は名の爲家の爲子孫の爲と思へばこそ。捨る命も惜からね。夫に引かへ其方は天晴忠義をなしながら。世上の人に後指。主殺し二心と笑ひ譏られ剰。只一人の伜をも頼朝が身替りに。殺して子孫の斷絶も。厭ぬ忠義は唐天竺。又と世にない大忠臣。禮をいふべき詞もなく。家來とさら〲思はぬぞや。源家再興の守り神と。合す兩手に血の涙政子の前も時政も。血氣壯んの兩人も。主從せつなる心根を。思ひ計つて一同にフシ涙果しはなかりけり。地長田は泣々にじり寄。二つの首を膝に乘せ。詞コリヤヤイ。伜。十三歳で別てより。立月日は十六年。無事なと餘所に聞計。便りも

ならず剰。此度の上使の役目。我子を殺しに遙々と。長旅の寐覺〳〵。夫はまだしも。悪人の伊藤に遠慮有故に。顔見た計り詞もかはさず。現在我子を手にかけて。首討時の悲しみは骨身も砕る様に有たはやい。幼少にて云敎た詞を守り。頼朝卿に成り課せ。よふ潔ふ討れてくれた。頼朝卿一人の御身がはり計りじやない。源氏再興の其基。奢平家を亡ぼせば。萬民の爲。天下の爲。出かいた悴。よふ死だ。コリヤ親が禮いふぞよ。コレ。〳〵嫁女。源氏のお爲を思へばこそ。たつた一人の嫁のこなたが。目の前死るをそしらぬ顔。其上にまだコレ。朝若は我初孫。わつと泣をもぎ取て。沖中へ乘出し。簀巻にせんと抱直せば。難面祖父とは露しらす。辨へなき稚子のにた〳〵と笑ひ顔。流石血筋といふ事を。おのづと虫が知したかと。思へば目もくれ手もしびれ。震ふ足を踏しめて。舩へ持て出。浪間へさんぶり投込だ。其時の悲しさせつなさ。コリヤ。どの様に有ふと思ふぞやい〳〵。一人の悴。一人の嫁。一人の孫を二日の内に。殺して仕舞老のいりまい。是といふも方便ながら。主を殺せし見せしめ。天罰冥罰因果のかたまり。此世でさへ逢れぬ親子。未來では猶逢れまい。夫婦は二世といふからは。こなたは悴といつ迄も。中よふ添て下され。舅の心が難面迚。コレ必々あいそつかして下さるなと。地さしもに猛き武士も。子故の闇に取亂し。正體も。なく泣しづむ。地かくては果じと時政聲かけヤア〳〵兩人。詞源氏再興の籏上軍の手配何と〳〵と。地聞ゟ兩人つゝ立上り。詞此盛長が存るには。急に都を攻んより。源氏一味の關東武士一致にほぞを堅め

置キ。平家の勢をおびき寄セシ。ヲ、義時も其思案シ。地 今にも平家攻來らば。富士川を前に當邊に應じて方便をなさんと。聞イて時政ゑつぼに入。ホ、、、面白し〳〵。詞 其時こそ川々に。地 群居る水鳥一ヶ同に追ッ立ッる物ならば。夜討ナと心得平家の勢イあはて。ふためき逃ゲんは必定。詞 ヲ、此頼朝は鎌倉に城を築て引キ籠り 地 北辰動かず衆星の向カふ術はいかに〳〵 詞 ヲ、此政子が存ズるには。地 平家の勢ひくじけなば國々の源氏起。手をぬらさずして亡ボさんと。揃ひにフシ揃ふ聰明叡智。地 長田は愁も打忘レヲ、頼もし〳〵。詞 殘る方なき旁の軍シ慮。我レは是ゟ此首を六波羅へ差出して。一ト先ッ事を納ムべし。其内兵糧萬事の用意。地 政子の前の發明は頼朝卿へ似合イの緣シ。此長田が仲人役。詞 仲人は宵ノ能イ様に跡で、婚禮結ばれよ。地 さらば〳〵と持チ出る二つの首は極樂世界。彌陀の淨土へ嫁入リの。其乗リ物は蓮葉の 濁りに染ぬ忠臣シの。玉と欺く露の身の消る覺悟も親心。フシ 悲しみは讀盡されぬ。地 政子の前ハはからずも結ぶゑにしの新枕。身につまされていとゞ猶袖に。涙のおやみなく。降てかたまる天が下握る武將の掌合ハはす法の賜と有がた涙ふり返り。見送る君の御仁德。授る天の時政親子榮る、君を盛長と 貴賤上下押シなへて皆感せぬ。者こそなかりけれ

後序

古語に曰寸も長きことあり尺も短きことありとされば木綿を買者は價少ふして其丈長しこいへどもながしさせず錦を買ものは價多して其丈短しこいへどもみじかしこせず予か戯に作れる嫩窓葉相生源氏九段續なるを東都の芝居の習なれば末の三幕を殘し置評判しだひにて猶追〻に出さんこ先六段目まで取組けるに當正月二日より如月下旬の今に至るまで引續ての大入棧敷切落はいふもさらなり二の手をのけて見物雲のごとく集り舞臺の後人の山を築く〳〵入るにあまへ勝に乘て末三段は趣向のみにていまだ筆をさへ採らずしかるを淨瑠璃をこのむ人〻しきりに正本を望こ本屋か錢を欲かるこにうがにうに止ことを得す物足らぬ正本を出しぬ手織木綿の地太にしてしかも丈の足らざるをも最負の目には蜀江の錦こも見違て跡の出るを持玉へかし

安永二年癸巳二月二十日

福内鬼外誌

右之本頌句音節墨譜等令加筆候師若鍼
弟子如縷囘吾儕所傳泝先師之源幸甚

元祖　豐竹肥前椽清正
座本　豐　竹　東　治

書肆
江戸本石町三丁目
山崎金兵衛梓

前太平記古跡鑑

前太平記古跡鑑

座本 吉田専蔵

序詞山に猛獸あれば藜藿これが爲に採らず。國に忠臣あれば姦邪これが爲に起らず。神の敎の道直に治りなびく君子國。いともかしこき皇の御代傳りて六十四代。圓融院のしろしめすヲロシ「四海の浪も。おだやかなる。比は天祿元年如月中旬。御評定の事有と 時の攝政九條關白。藤原ノ實頼公紫宸殿西ノ宮左大臣高明。兼て朝家を我ヵ物と。飽迄憍慢の心をいだき。左リの薗に着座ある。武官には攝津ノ守源の頼光朝臣。文ン武兼備の名將の威勢を憎奸佞邪智。相摸ノ介田原ノ千晴。高明と心を合せ天ン下を奪ふ下タ心。階下には相馬ノ六郎公連。千晴が家來黒塚玄蕃。源家の荒武者坂田ノ公時。其外ヵ公卿天殿人ト列を。正して參内有ル。關ン白仰出さるゝハ。詞 此砌打チ續御ン風の心地迚。龍顏うるはしからざる上ヱ夜毎に彗星顯はれ月キよりも明らかなる故。天ン文の博士阿部晴明に占せけるに。夫レ我ヵ朝に彗星出る事。皇極天ン皇の御宇蘇我ノ入鹿が亂の時。始メて顯はれしより以來。一チ度も祥瑞なる事はなく。臣として王命に叛き。遠からずして兵革おこり。國費民苦むべき天の告。捨置ば御ン大事早く吟味し。地 謀叛人の根を斷べしとの勘文。旁々いかゞ思はるゝと仰にハツト人〴〵は。互ィに心探り合詞を。

出すフシ人トもなし。胸に覺への左大臣千晴に急度目くばせし。したり顔に進出。詞往承平七年。將門が謀叛の時彗星顯はれ又此度顯ラはるゝ事外カを詮議する迄もなし。夫レに居る六郎公ン連。將門トとは一ッ家といふ文ン武の聞コへも有ル者なりしが。將門討死の砌思ひの外カに降參し。今では源氏の被官同前。主の無念ンを晴さんと。謀叛發すに違ひはなし。地撿非違使の手に渡し拷問有ッて然るべしといへ共公ン連少シも動ぜず。詞コハ詞思ひ寄ラざる左府公の御ン詞　將門ト亡びて其後は。源家へ隨ふ公ン連。謀叛などゝは何を證據と。地云ハせも立テず田原ノ千晴。詞ヲヽ左府公の御詞。艫先キへ答へる故。ひつこしやつことロごたへ。我レが謀叛の其證據は。將門が一ッ子將軍太郎良門。相馬の家沒落以來。生死の所分明ならず。わぬしが密に取リ立テて。謀叛ン發すと見た目は違はぬ。地論より證據ソレ玄蕃公ン連を引ッ立て。拷問せよと無法の下知。ハット心得黒塚玄ン蕃何ンの思慮なく立チ寄ッて。引ッ立んとする所を公時たまらず立チ上り。玄蕃が腕利むずと取。詞ヤイべら坊め。お歴々の仰も待マず云いれぬ己が出しやばり面。コリヤヤイ。源氏へ降參の公ン連なれば。罪科が有レば主人ン賴光が取ッて出すわい。ヤ何ンの事だい　御大イそうにコナ。とうへんぼくめ置キ上カれと地片手に抓んで狗投ケ目口しかめて起キ上り。詞ヤアうぬは玄ニ蕃を投たぞよ。外カの者なら此所で一チ番ンせり合ふ所なれど。相イ手がうぬで氣に喰ぬから。おとなしうだまつて居る。其代どこぞで逢た時。投ケられた意趣返し地ヤ覺へていろとへらず口。詞エけれんけつの土左衛門め。今の様に投ケられてもまだ脉が通ふ故。譫言ぬかしてやかまし

い。投ケた上を踏碎き。土器往生さしてくれんと立チ寄ルを。頼光制してヤア尾籠な公時ゑづまれやつと押シしづめ。地 實賴公に打チ向ひ。詞 彗星の天變に依て。高明ラ公千晴なんどが評義の趣。地 其謂なきにしもあらず。詞 コリヤ〳〵公ン連。汝は我カ祖父經基へ。降參ンゑたる者なれば。疑ふにはあらね共。將軍ン太郎良門が行ク衞知レずと旁の御ン疑ひ請ケし上は。得と思案をめぐらし將軍太郎が行衞を尋。搦取ッて出しなば。地 御疑ひを散し將門が舊地。下總一ッ國申下タして得さすべし心得たるかと優美の詞。公連はハヽヽヽハツトお受申せば左大臣。詞 君久サ々の御腦捨置カれず。內イ侍所の御鏡を御 かたしろとして。天滿宮の寶前にて御祈禱有ッて然カるべし。守護の役は賴光。地 其旨急ッ度心得よと己が工を押シ隱し。猥に奪ふ時の權。實ネ賴公は何氣なくしづ〳〵 ヲクリ。菌をおり給へば。我慢の鼻も高明。諸卿一チ度に退出の袖を連ぬる大內山。林茂りて鳥やどり。淵深ふして魚集る。流レは絕へぬ。源ト氏。末の榮へぞ三重「久かたの

第二

地キン 天滿神ミの蔭賴む。老若男女我レ先キと ヲクリ 爰に。北野の御ン社松の葉色も時キめきて。十かへり深き若緑いと神々たる鳥居前。地色 葭簀圍ひし茶店の賑ひ。意氣な男の四五人レ連通り違ひに色 立チ留マり。詞 コレ貴樣達けふは此北野の社で。禁裏樣の御祈禱が有ル迚大勢イの參り下向。サイノ美しいやつが通

る中に。アレあの茶店の女を見たか。頬高く鼻低く。いけもせぬあの顔へ白粉を塗おつてすべたの癖に眞のふり。お定りの名はおふく。サレバイノ同し茶店の女でも。惡いやつが汲で出りや宇治の上茶も花香がない。又能代ロ物が汲ンでくりや番茶でも味ふ呑るで。三文ニ置イて能イ所へ四五十も置ク氣に成ル。夫レにマアあんなおたふくどんな虫のゑい者でも茶を呑者は有まい。イヤ〳〵そふでない。アノおたふくの茶店へは女中客が取レるてや其心はハテ參りの女中がおたふくの所へ寄レば。あちらが惡いでこちらが能なり。下々の器量が上に見へ中位なやつめが上々吉の美人に見へる丁ど黑繻子の半襟で首筋の黑いを紛らかし。帶の中カじんを太ふして尻の大きいを隱す道理と眞顔て云へば。詞ム、夫レで讀た。おれが隣の息子めが女郎買に行ク時は。いつでもおれを誘ひにおこす聲は惡ルし藝はいかねどおれが座持チが能イ故に。夫レで連に乞たがると思ふて居たが。今の理屈で考がふればおれが男ぶりが惡ルいのであつちの男ぶりがよふ見へるそこでおれを見せ男にして。女郎に惚られるといふ謀に乘られたか。地ハ、無念ン口惜やさ。拳を握れば。一チ同にどつと笑ふてフシ歩み行。跡へフシざは〳〵一ト群は。相馬六郎公連が獨娘呉服の前。跡押サへは若黨の環新吾が當世姿。地色娘共口々に申ス々御寮人ン樣。詞けふは俄の御參ン詣お氣に入の新吾殿のお供。おまへ樣計リのお樂しみ。わたしらは大きなてれ坊。ノウ枝折殿、サイノお氣に入リの新吾殿。漸と取リ持ツて上ケても御屋敷キでは人ト目が有てほつこりとした首尾がないア、地ゑんきなと思ふた所。詞けふは御祈禱云立に。天神樣へ御參詣。抑此御神ミと申

奉るは。菅丞相の其昔。時平の大臣の讒言で。筑紫へ流され給ひたる。其御恨を晴さんと鳴雷となら
せ給ひ。時平の大臣を引摑んだ。御利生新の御神様。其御神様の御引合せ。おまへ様は新吾殿にど
こもかも存分に。地摑んでお貰遊しませと。なぶれば呉服は赤らむ顔。そなた衆の云廻しで漸内を
出て來たは。天神様のお引合せ、ヲ、耻しと振袖に包むに余るゑくぼ詞ア、コレ娗中。道草で隙
入ず。早ふ天神様へ御參詣と。地新吾が差圖に。詞ヲ、あの人の參り急ぎ。お歸りがけは此茶店と。
地物に馴たる娗共。おふくを招いて呼けば。色アレ合點呑込だ。地奥の座敷を明て置ます。早ふ
御下向遊しませ。サア〳〵お出と打連立社の方へヲクリざゞめき行。地往來も多き其中に左大臣高
明忍び詣の供廻り。社の方より歩み來る。相摸介田原千晴。家來黑塚玄蕃を連、夫と見るより
地に色鼻付。詞コレハ〳〵左府公には輕々敷御參詣。ヲ、密に談ずる事有と。地傍りの人目憚る躰
千晴心得ソレ玄蕃色茶店の者共追退よと、地詞に玄蕃が人拂ひ。互の家來も遠ざけて。詞ノウ
千晴。兼てより云合思ひ立たる大望。此高明が天子と成ば其方を將軍職ハアいかにも。兼てより
色々と工夫を廻らし候へ共。兎角邪魔に成は源家の一族。比日も大内で占の彼一義を。公連めにぬ
らふさしても。四も五も喰ぬ賴光、所詮きやつらが有内は。イヤ〳〵、夫故の思ひ付　內侍所の御鏡
を御かたしろとして、天子御腦の御祈と云立此北野の內陣へ御鏡を持出し。守護の役は賴光。此所
へ來るを禁裏より。俄の御召と呼立させ。若けどつて行ざれば違勅の科。行ば其跡を考て御鏡を

盗取。其科を云立て源氏の奴原仕舞ふてのけるさ。聞て千晴がハア天晴の御方便、去りながら其御鏡の盗様はコレそこはぬからぬ高明さ。地 兼て相圖の扇笛。夫乞鹿の夫ならで茶店の垣を押破り、ぬつと出たる大男。頭巾を脱だる面魂。フシ 只者ならず見へにける。地 近ふ〳〵と差招き。詞 ノウ千晴、是こそ兼て音に聞へし。袴垂保輔といふ盗賊の張本。我味方へ招き寄せ、幸けふの鏡の盗人、コレハ〳〵聞及んだ保輔殿。身は田原千晴以後は別して御懇意と、地 互の挨拶事終り。詞 御聞及ひの此保輔生れ付たるどうらく者。兄保昌に勘當請切取強盗は常の渡世。のめ〳〵と朽果んよりせめては、國の十も廿も切取て我物と思ふ矢先に。高明公御謀叛一味の御招き。スハといへは手下を引連。一方はいつでも請取。先御奉公の手始に。地 御鏡を盗取て御目にかけんと手に取フシ様に請合ば。詞 ホヽ、面白し〳〵。猶委しくは松原にて。とくと示し合さん。ナニ千晴、此高明が、兼て心を掛たる公連が娘の呉服。けふ此所へ參詣、迚もの次手にこいつめも、手に入る思案して見よと。慾と悪とに取交て。濡手で抓あはび貝。叶はぬ戀の片思ひ。フシ 打連立て歩行。地 お福は店へ立歸り。詞 ホンニマア密談とやらが有迚。權柄らしう追退て。商ひの邪魔を杢て一文も置はせず。茶の錢をかはかしたあたしけない御公家様と。フシ つぶやく所へ若黨新吾詞 コレ〳〵茶店の女中、さつきに姆が頼んだ事と 地 半分聞す。詞 ヲヽ、呑込でおります。アノ一間を立切て、屏風も立て置ましたと。地 聞て新吾は氣もそゝろ。コレハ〳〵いかい御世話と。笑を

ふくみし顔付キに。お福は見とれ手に持チし。キン茶碗ぐはつたり取リ落し。飛退拍子傍に寄リ。詞アノナ。コレ申。最前見へたお娘御と。出合イするとはサハリ妬しや。氣は張詰し茶袋のキン胸の煎じ茶にへ返り。わしは有ルにも霰釜。お前の心の茶柄杓で汲でくれたがよいわいな。しんゐの炎火吹竹割て見せたい我カ心。よい御返事を聞迄はわしやなんぼでもコレナ〳〵はなしやせぬと取リ付ク身ぶりはお染猿。鴨の足取蹴返しに。木綿ゆもじの鼠色ぱつと散しは干鰯舟。南風にフシ合し匂ひ〳〵。地新吾もほつと持テ餘し。逃出テんとする所へ。呉服の前の下向道。お福はどふやら氣味惡ルく。ちやつと飛退さあらぬ躰。呉服は遉おもはゆく。新吾が方タを見ぬ様で又。見る様の目の内に。キン世界のフシ戀や籠るらん。地娵共は氣を通し。何かの事はサア奥で。詞コレ〳〵茶店セの女中様。枕を二ツ鵲の。渡せる裾に置下モ々の蒲團成リ共星祭り。地けふを逢瀬の天の川。打連レて入ル一ト間の内。思ひのたけや晴すらん。地跡にお福はほいなげ首。詞ヱヽ妬しや腹立チや。どふやら氣が遠ふ成ツて來たと。地ぴんとやんと立上り。襖の際に耳を寄セ。詞ヱヽ憎らしい。二世も三世もかはらぬと云イおつた。アレだき付イたか鼻息が。ムヽ。コリヤたまらぬと。柱にぴつたり身をふるはして居る所へ。地様子窺ふ左大臣。ずつと這入レば。お福は見るより抱キ付。詞急な時には誰レでもよい。ちよつとごんせと引ツ立れば。ヱヽ氣違ヒめと突飛し。地一ト間の内へかけ込ンんでフシ二人ンを左右に引ツ立出。詞ヤア不義者めら動きあがるな。此高明ラが心を掛し呉服。家來の身として不義ひろぐ重々の科人ン。地討ツて捨んとひしめけば。二人は何

と云譯もあさる雉子の妻乞を鷲の見入しごとくにてフシ遁れがたなく見へにけり。地折から來かゝる供廻り。源の頼光朝臣。跡に隨ふ美女御前。御供はお家の舊臣。卜部次官季國。夫と見るよりコハ輕々敷御有樣と。云へ共屈ぬせ左大臣。詞ホヽ頼光。此女は公連が娘こいつめは若黨主の娘と不義ひろぐ徒者。身が見付たは百年め。重て置て成敗と。地御はかせに手をかけ給へば頼光騷がず。詞コハ左府公の御詞共存せず。不義者を成敗とは。大なる御了簡違ひ。御麁相に存ると。地いふにせき立左大臣。詞ヤア頼光。不義者を成敗する。高明が麁忽とは。主の娘と不義しても見赦すが源氏の家風か但又。公連は源氏へ降參の侍にて。家來同前の者故贔負するか頼光。其のごとく理にくらくて。天下の武將は勤まるまいと。地何がな鹽の當り眼ハヽハヽ。詞贔負などとは存もよらず。又其罪を糺すべきは政道の第一ながら皆。夫々の筋道有り。前漢の丙吉が牛の喘は尋れ共市に死するを問ざるは。長安令京兆尹。其職を司る者有る故なり。若黨娘の不義ごときは公連が家内の小事にて。若も訟へ出る共。其職有て取捌は。左大臣の御身にて取り扱ふ事にあらず。御麁相と申せしが頼光が誤りか。政の筋道を得と正して取り捌が。源氏の家風に候と地理非明白の御詞今迄力身し左大臣。言句も出ず閉口す。地頼光は二人を色遠ざけ。詞コリヤ／＼兩人斯る群集のせまき所。男女席を同じうすれば必脇目の疑ひ有り。地早く歸れと大よふに。夫と知てもしらぬふり。二人は嬉しさ有難さ。毒蛇の口をフシ遁れ行。地頼光重て。詞ナニ左府公。追付御祈禱の刻限イザ。

本ン社へとの給ふ所へ。地六位の官ン人かけ來り。詞頼光樣へ申シ上ケます。急御用候へば只今直に御參ン内イ有べしと。關ン白實頼公仰出され候と。地フシ息つきあへず申スにぞ、詞ム、今日御祈禱の役目を承はつたる頼光。急の御召シは心得ず。イヤコレ頼光。御用がゝり知リつゝも禁庭より召サるゝは。よく〱の急御用。跡は此高明が倶々宜しう取計へば。少シも氣遣ひお仕やるなハア然カらば是より參ン内イせん。ナニ美女丸。季國。萬ン事隨分氣を付ケよ。然カらば兄上何卒お早ふ。ハアお跡の義は美女樣と此季國が承はれば。お氣遣イ遊ばされず禁ン庭の御用向キ。ヲ、必油斷致すなよ。左府公頼奉ッると。地云捨て引ッ返せば。したり顏に左大臣美女丸季國諸共に。フシ本ン社の方へ急ぎ行。フシ既に其日も。暮レ過て。フシ目ざすもしらぬ宵闇の。往來もとだへし透間を考へ。家來玄蕃を引連レて。キンうそ〱窺ふ田原ノ千晴、向ふに怪しき足音トに。松と。梅との相イ詞。互イに近寄ル探り足。聲を潜て。詞千晴殿。保輔殿。首尾は何と。ホ、約束の御鏡　内イ陣の敷板に穴をくり明ケ。イヤモ何ンの苦もなく盗ミ取ッた。地お渡し申スと色差出せば。詞ホ、天晴〱。此通り左大臣殿へ申シ上なば嘸悦び。お頼の御用相イ濟ンだれば。此保輔は罷リ歸る。ム、扨々御苦勞〱と。地いふもひそ〱保輔は。フシ宿所をさして立歸る。詞コリヤ〱玄蕃。御鏡が手に入ルからは。片時も急いで立チ歸らん。いか樣上首尾此上は。イサ御歸りといふ折から。地何國よりかは忍びの者、思ひ掛なき後ロより。千晴を取ッて頭轉倒。御鏡奪ふてつゝ立テば。詞ノリスハしれ者と主從が。拔キ連て切ッてかゝるをかいくゞり。地闇はあやなし松原を。足に任カ

せて一ッ散にフシ行方しらずかけ行けば。遁さじ遣らじと主従が跡を。したふて三重ノ行雲の。

第　三

地 九重にフシ隠れ名高カき千本ン通リ。卜部ノ次官季國が屋敷には。上を恐るゝ身の愼門戸を閉て引き籠る。フシ時しも降やキン二月の雪庭の。ヲクリ梢の白妙も。消ると悟る老のフシ身の。詠に物や思ふらん。地 さへ返る透間の風や雪嵐。心を付ケて女房園木ノフ旦那殿。詞 けしからぬ此雪寒さ防ぎの玉子酒。地 一トつ參れと差出せば。詞 ヲヽ是は氣が付イた。したが御鏡を奪取ラれ取リ返す方便もと。地 晝夜心を痛むれば酒機嫌でも色 おりない。詞 ヲヽ年シ寄ての此災難。心細いはお道理〳〵。夫レに付ケても悴季武若氣の至りの廓通ひ。勘當してモフ五年ン。地 行衞知ぬで苦はたへぬ。こんな時にあれが居るなら。倶々に相談の。詞 ハテ扨毎イ日〳〵。勘當した悴レの事聞キ飽た。只た二人リの子供。姉の小夜衣は仕合せと渡邊綱にめあはせ。弟めは不所存ン故追イ出したれば。家を繼べき子迚もなけれど。ハテ 地 前キ生からの約束と。色 諦めて居るはいのとフシ夫婦咄しの折からに。表テの方に咳ばらひ。詞 坂田ノ公時お見舞イと。地 案内もなくずつと通れば夫婦は悦び。詞 コレハ〳〵公時殿。度ビ々のお見舞イ忝ナい。ほんにマア此雪降に。イヤ〳〵おれは伊豆の足柄產れ。深山ンで育つた故。こんな雪は何ン共思はぬ。夫レはそふとこなた、衆に見せる物が有ルと。地 表の方に打向カひ。詞 コリヤ季武。おれが居るこはい事はない。ずつと這入レ

〳〵と。地 呼立られてしほ〳〵と。卜部七郎季武が勘當の身のよるべなく。立歸る我家の內。敷居も高く越兼て。次の一間に畏り差伏て。詞なし。地 母は嬉しく傍に寄り。詞 ヲヽ季武かなつかしや。よふまめで居てたもつた。公時様いかいお世話。ヤコレお袋。久しぶりで逢て嘸嬉しかろ。おれは御用で出かけた所。道ではつたり行合。段々と様子を聞ば。勘當が身にこたへ。夫から諸國武者修行。けふ都へ歸つたとの事。親父の身の上咄したれば。涙を流して氣の毒がり。どふぞ勘當の詫をしてくれと頼む故。大事の御用の出がけなれど。ちよつと連て來ました。元のおこりは傾城ぐるひ。全躰女郎は皆嘘つき。おれも一二度誘はれて遊びにもいて見たが。おれが面をつく〴〵見て。申公時様へ。ぬしの顔の赤いのを。私やしみ〴〵好んしたと。ぬかしおる。餘り當じまいな事ほざきおると。いま〳〵しくて蹴飛して迯て歸つた。ハテ小歌にも。女郎の誠と。ハア其跡は何とやら。ヲヽ夫よ。四角なぼた餅はない物じやと。古事來歴を引て。異見して呑込せた。勘當赦してやらつしやれ。大事の御用が遅なはる。又歸りに寄りませふと。地 一人呑込む早合點。云たい事を皆いふて。お暇申すと出て行。地 母はいそ〳〵公時が。跡ふし拜むも我子のかはいさ。詞 コリヤ七郎。爰へ〳〵と。地 差圖に季武顔を上。詞 申譯なき我身の科。何分にも御免下され倶々に御鏡の。ヤア此季國がぶ調法で紛失の御鏡。勘當の己にや頼まぬ。かゝる難義を今日迄。しらぬ顔する不孝者め。赦す事は扨置て。七生迄の勘當と。地 いふに恟り母季武。詞 サア御難義の様子承つたは

今日。ヲヽ親の事を思はぬ故。かゝる大事が耳にもはいらぬ。胴性骨に覺へよと。地有合ふ鞭を追ッ取て脊骨も折レよと打すゆれば。母は涙にくれながら。公ン時殿の手前も有リ。どふぞ勘當赦してやつてヱ　ヱ色やかましい。詞公時は扨置キ。主命でも。綸言でも。心に入ラねば勘當は赦ルさぬが親のかうけ、まだ出おらぬか。不孝者と。地いかりの聲に是非なくも。すご立て柴垣の陰にフシ忍んで、窺ひ居る。地かゝる所へ表テの方。色上使のお入リと告る聲、思ひがけなき夫婦が色驚キ。詞ソレ。女房。上下モ持チ。アイといふ間もてつ取早くきつゝ馴にし上ミ下のヲクリ折目正しく出向カふ。地上使といへど媚る。フシ素袍にあらぬ、襠や。キシ烏帽子がはりの櫛笄縫の。模樣の當世は。地渡邊が宿の妻親の內でもキンどこやらが。御用に心改マりフシしとやかに打通れば。地母は見るより。詞ヲヽ上使〳〵と大そふに。誰レかと思へば娘ノ小夜衣。何ンの御用。サアどふいふ譯ケと。地尋に娘は手をつかへ詞一チ兩日はお見舞イも申シ上ず。時ならぬきつい寒さ。御二人リ樣共御機嫌でと。地いふを打消父季國詞ヤア親子の因は私シ事、御上使の趣承はらんと。地慇懃にあしらへば。娘はもぢ〳〵。詞アイ。今ン日夫ト綱が御鏡の義に付イて。上使に參る筈なりしを。賴光樣の御意遊ばすには。イヤ〳〵綱がいては表テ立ッて惡ルからふ。是には小夜衣がよからふと。わらはを召サれて上意の趣キ。御鏡を奪れしは季國が科ではない。是には譯ケの有ル事にて。賴光を謀り其跡で。盜だる盜賊も知ッて居る。兼て夫レと氣も付イたれど。禁庭の御用と有ル故違背ならず大事の場を、立チ去しは賴光が誤り季國に科はない　遠からぬ內御鏡は取リ返

す。老人ンの氣を痛めず。出ッ仕したらよからふ。地 その御上意で御坐りますと。聞ィて夫婦は有リがた涙。詞 ハア左程迄此老人ンを御憐愍の御ン詞。冥加に餘マる仕合せ。然カらば我レは出ッ仕の用意と。地 云ィ捨奥にフシ入リにけり。地 母は悦び。詞 ヤレ／＼ちつと顔の皺が延た。イヤコレ姉さつきに七郎が見へての。フウアノ弟が歸りましたか。サイノ公時殿の御世話で。勘當の詫てても。例の片意地合點なされぬ。よい時分に來合せた。そなたも口を添てたも。地 夫レでいかずば聟殿へ頼んで。詫事して貰をと。親子ひそ／＼フシ咄しの最中。地 御使者の御入リと呼ビ次中チ。のつか／＼と入來クるは千晴が家來黒塚玄蕃 色 我レは。顔に上座に通り。詞 ヤア女原。御鏡の義に付ィて。左大臣高明ラ公の命ィを請 黒塚玄蕃來タつたり。季國に對面せん。地 早呼ビ出せとフシ 權柄面。地 女房は會釋して。詞 夫ト季國義は。主人ン頼光より召シに依て出ッ仕の支度。取込で居ますれば。暫くお扣へ下されよと。地 云ィも切ラ 色 せず。詞 ヤア何シじや。頼光／＼と胸の悪ルい。左大臣殿の仰は勅定同前ン。殊に大ィ切ッな御鏡の詮義。踏込ンんで對面と。地 立ッを小夜衣 色 押シ隔。詞 是は御使者の御無躰。親季國は頼光の家來。禁ン裏より御用有ば。頼光へ仰付ケられそふな物。直ャ付ケに何のかのは。其意を得ぬ御口上。ヤア 理屈くさい女め。己レに構ぬ 季國に逢ェば知レると。地 突退刎退駈行クをどこへ／＼。詞 身不肖なれ共渡邊が女房小夜衣。狼藉は爲せぬ／＼。ヲヽならば手柄に。留メて見よと。地 行ケば引キ留メとゞむれば又かけ出す互ヒの足音ト。根太はゆす／＼戸はぐはた／＼。蹴しらす裾の紅裏にこなたは毛だらけ向カふ脚。牡丹の際に鬼へフシ

ごと。並べて植しごとく也。地色一間を出る季國が玄蕃をはたと。フシ蹴飛せば 詞テモひどい女めさ。地夢見た樣に起上り。詞ヤア季國 おれを投たはわぬしで有たか。イヽヤ此季國投は致さぬ。そんならおれはどふしてこけた。イヤそりやお手前で蹈すべつて。ハヽアそんならソレハ夫にしてやらふ。ヤイ季國。いつぞや北野で御祈禱の御。御かたしろの御鏡。紛失せしとの噂。實否を糺さん其爲に。此玄蕃が向ふたり。サア有樣にいへ。若陳ずるにおては。骨を挫いで云せると 地手強き仕かけに。詞ハヽヽ何の事かと存せしに。御鏡の詮義とな。紛失とは世上の虚説。其砌頼光より、禁裏へ納て事濟た。ヤアいふな〳〵。禁庭へ納たら。左大臣殿の御存有筈。其上に御鏡は、北野の社の内陣の敷板に穴をくり明。夫より忍んで盜取。行方知ずといふ。慥な證據聞て置た。サ其云譯は御前でお仕やれ。引ずつて連て行と。地差出す腕首 色むずと取り 詞ヤア蛙は口から呑れると。人しらず紛失の御鏡。盜樣を知てゐるは。扨は己が盜だナ。白狀させんとうと投付 地すらりと拔て刀の背打。りう〳〵はつしと打のめされ。一向目先も黒塚玄蕃 襖にぐはたひし行當り。命から〴〵逃歸る 地比興者めと追かくるを。親子はとゞめて。逃たらよしになされませ 詞今おつしやつた。御鏡どちがどふやら紛らはしい。サア有樣に。いふて聞して下さんせと。地時に季國 色打點き。詞心安いは親子夫婦。包に及ず有やうにいふて聞そふ。御鏡は季國が。肌身放さず持て居る 地拜見せよと諸肌ぬけば。腹一文字にかき切て。卷たる絹より女房娘。ハヽ

ツと目先キも紅の血汐に驚ロく襖のこなた。有ルにもあられず季武も。コハそもいかにと走リ寄呆れ。フシ果たる計ク。地ホヽ驚キは尤ながら。詞御鏡失せし其時より。かくなるは兼ての覺悟。地老人ンが命助ケ給はんと。娘を以ッて有リがたい上意の趣。詞御ン情をもどくに似たれど。左大臣高明ラ。田原ノ千晴と心を合せ。天下を奪ふ下タ工み。邪魔に成ルは源氏の御家門ン。何がな罪に落さんと。工ミに工ミし此方便。地美女御前の御ン身の落度。季國が身一トつに。引キ請て切ッ腹し。詞闕ン白實頼公へ罷リ出。惡ク人ンの工ミの次第一々に申シ上。御主人ン達チの御明カりを。立テん爲め生害ぞと。地聞ッにたへ兼女房が。御じひ深いお上ミのお詞。聟渡邊にも相談せば死ナずと濟ム仕方も有ラふ。日比から突詰メた。一徹短慮な御所存ンと。母が悔ば色小夜衣は。詞かゝ樣のおつしやる通リ。夫ト綱にも相談有ラば。仕樣もやうも有ラふ物地何をいふても御切ッ腹。悲しい事をなされしと。歎ば父は。目をむき出タし。詞聟の智惠を借リて。死スべき命助ケて貰ふ。狼狽たる季國ならず。武士の家に生マれ。切ッ腹が珍らしいか。めろ〳〵とほへづら。泣クな女房。アイ〳〵。娘ほへな。アイ〳〵。申さゝ樣。どふぞ弟が勘當を。ヤア弟とは誰レを〳〵。アイ爰に居る季武。イヤ此季國は男ン子は持タぬ。悴レも一人ン有ッたれど。不所存ン故勘當した。勘當仕たれば悴レでない。悴でなければ御鏡を。盗まれた科人ンの。親の罪はかゝらぬはやい。一チ應の腹立チで。勘當して追イ出したれど。地雨の夕雪のあした。悴レめはどふしたぞ。飢凍へはしおらぬか。流行病ヒは請ケはせぬか。詞ハア思へば主人ンの物を掠たといふでもなく。戰場の後れを取リしといふにもあ

らず。若ヵいやつの廓通ひ。御門ン限の時切レ。いはゞ纔の仕落。勘當せず共濟ンだ物と。地年シ寄リに隨ひ後悔先キに只一人リ。くよ〳〵と案ンじて居た。詞最前ン公時が。連レてきた時の其嬉しさ　飛立ツ程に思ひしが。イヤ〳〵。勘當を赦ルしては。科人ンの忰レに成リ。どんな目に逢ふも知れぬと。赦ルさぬはミナあいつがかはいさ。甘い詞もかけられず。地傍へも寄ラれぬしぎ故に。打擲せんと近ヵ寄ッて。達者そふに肉付た。腕先キ肩先キを見た時は。色聟の綱や公時に。劣ぬ樣に成リおつたと。フシ嬉し淚がこぼれたはい。詞己レも早ふ女房持ッて。孫を産せて其時に。子の可愛といふ事を。コリヤ思ひ知ノて。地くれいやいとこたへにこたへし溜淚。骨身に通つて季武が。重々深ヵき親の慈悲。是迄の不孝の罪科御赦。されてと計リにて。疊に喰付キ噎び泣。母も娘も取リ亂し。一チ度にわつと泣淚四方のキン梢の雪解て水かさフシ增る計也。地季國は色立チ上り。詞袴垂ノ保輔。惡ク人ン一チ味と兼て聞ク。御鏡の盜賊もきやつが仕業と覺ゆれば　方便を以ッて取リ返し。地親の敵を討ッならば勘當は其時に。未來から赦シしてやる。詞片時も早く爰立チ去レ。地我レは是より實賴公の色館へ立チ越へ。詞惡人ン共の計略を一チ々に申上。御鏡の紛失を我ヵ身に引受ヶ。地御主人ン達チの御ン身の上申ひらかんさらば〳〵と立チ出る。ノウソレ其手でおひろひなされては。イヤ〳〵〳〵。數度の軍サの矢疵太刀疵鍛ふて置ィた此體。詞そんな未熟な事じやないと。地蹈とめ〳〵立チ出れば心元トなく兄弟が。見へ隱れの御ン供と。跡をフシ慕ふて出行。ば。地母ハしよんぼり只一人リ。正躰ィ淚にキンしほ〳〵とヲクリ佛ッ間をさして入リにけり。地色我ヵ身の恥

は白ラ雪を。踏ミ立て蹴立テ黒塚玄蕃。大勢引キ具し色どつと込ミ入。詞ヤア〳〵季國。科人ンの分際でひどいめ見せた意趣返し。出テ合つて勝負せよと呼ハつたり。地家内イはひつそとしずまつて。返答なければ。詞ヤア風を喰つて逃ケたるか。せめてもの腹いせに。此屋敷キ打こぼつて立退ケと。地無法不敵の主從が。落花みぢんと荒レ出す所へ。御用仕舞て立歸る坂田ノ公時。夫レと見るよりずつとかけ寄リ家來を投ケ退はり飛し。フシ仁王立チにつゝ立たり。地家來は元來黒塚も。悔り之ながら騒ぬ顔。詞ヤア怪有な奴ツが突ん出たは。譬公時なれば迚。鬼神にてはよもあらじ。地かゝれ〳〵と下知すれば。多勢を頼ミに家來共。打ツてかゝればあざ笑ひ。詞ホヽ之ほらしきうづ虫めら。一人リづゝはまだるしと。色庭の大イ石引キおこし。ずつと差上ケ投付クれば。壓に打タれて五六人ン。命の早鮓こけら鮓。手並にこりぬ大勢が。又ばら〳〵と立チかゝるを。片はし抓んで人ト礫。叶ハぬ赦ルせと主從が。むら〳〵ぱつと逃ちつて指差者もフシなかりけり。地ホヽ氣味よし〳〵心地よし。謀叛に組ミする惡人ン原。人トは扨置キ狼でも。鬼でも蛇でも天ン狗でもかたつぱしに引ツさらへ捻首。搔首皆殺し眠りさましの慰仕事。母山姥が懷で稚遊びの古を。思ひ出したる雪なぶり雪やこん〳〵霰やこん〳〵金剛力キ士の力ラ足。どう〳〵どつと蹈ならす。音トに聞コへし源氏の荒者。立ツ子這子乳母かゝ迄。顔の赤いは公時と知ぬ者こそなかりけれ

第四

フシ爰ぞ名高き攝津國の。多田の御館と聞ヘしは源滿仲公。威勢旭の昇が如く美麗を盡す殿造り。けふ稀人トの御ン入と庭に盛砂箒目もいつにフシ勝て見へにけり。地御用の透間に腰元はした一トつ所へ色寄リ集り。詞ナント皆様ン。京都から左大臣ン高明ラ様田原ノの千晴様といふお方が。けふ此館へお入リなさるゝと昨日俄の知らせ故。地お館はどつたくたお料理拵へ座敷キの錺り御馳走に呼ビ寄セた舞子の支度も皆出來たに。思ひの外色遲いお入リ。詞サイノけふのお客は京育定ノてよい男であろ。せめてわしらが目の正月御簾の透から覗かふと。地いへば早月がヲ、笑止。詞わしやいつぞや京參リの折から見て置た。高明様も千晴様も。地赤面で頬骨高カく可愛氣のない殿ぶり屑な所は色鼻計。詞サレバイノ其不男がわしや望ミ。能イ男は方々で惚手が多いで氣が揉る。ハテつまる所は暗り仕事首を退れば同じ味はひ。矢繼早に達者なが。わしや見込ミじやと地目を細め。男ほしかる女護の島咄しにフシ余念媚く所へ。地キンそこ薫りくるフシ衣の香や。滿仲公の御臺所雲井御ン前。立チフシ出給へば婢共。味い咄しの腰折てフシ手持ブ不沙汰に手をつけば。御臺所はしとやかに。詞ノウ皆の者こ仲光ッはまだ歸らぬか。昨日俄に殿の云イ付ケ美女丸を出ッ家させよと。いやがる者を無理無躰仲光に伴はせ中山寺へやつたれバ。歸らぬ内は心がゝり。案じ過しがせらるゝと打しほれ給ふ折から。立チ歸る左衛門尉藤原ノ仲光。御座を見る

よりハアハットフシ恐れ。入ッてひれ伏セバ。詞ノフ仲光そなたの歸りを待兼た美女丸が機嫌はよいか。出ッ家得道仕やつたかサ早ふ様子が聞キたいと。地仰に仲光。詞ハア成ル程美女御前を出ッ家させよと。昨日俄に大殿の上意。仲光ごときが諫言は御用ゐなき故に。中山寺へ御供申善観律師に右の譯ケ、委しく演説仕ッり。倶々お勸め申せ共中ヵ々御得道は扨置。達ッて申さバ御生害にも及ぶべき様子故。是非なく一ッ宿仕り。色々とお心を慰め。仲光一ト先ッ立歸り。大殿様の御機嫌を窺ひ。御ン迎ひに参らんと間に合ィを申シ置立歸り候と。地聞ィて御臺は御目に涙。可愛そふに左程迄いやがる物を出ッ家とは。我夫の御無躰ィと御諫申せど御承知ない。どふぞ仕方タは有ルまいかと思案ンにフシ次キの一ト間より。表使ィの女中が立出、詞左大臣高明ラ公田原ノ千晴ル殿同道にて御出也と。地聞ィて皆々立騒御臺は奥へ仲光はヲクリ表をさしていそぎ行。地夫レと聞クより滿仲公立出給ふこなたより。仲光に案内させ左大臣高明。田原ノ千晴諸共にフシくはん〳〵と打通れバ。地滿仲はつと色平伏し。詞冥加に餘マる仕合セと。地挨拶有レば座に直り。詞ホ、珍らしや滿仲。是なる千晴を伴ひ談じ度キ旨有ッて頓より來タらんと思ひしかど。政務に隙なき高明ラ漸々透間考て。此多田の溫泉へ。入湯と云ィふらし來りし事別ッ義ならず。是なる千晴が娘唐糸。美女丸とは似合ハしき年恰好。此高明が媒にて一ッ家の因を結ばんと內々奏問せし所。双方縁談極め置キ。表立ッて兩願ひに致すべしとの內勅にて。綸言請ヶたる縁ン組媒は高明ラ〱。地不足に有ルまいと。天窓ごなしの請ン合に。千晴は膝を色摺寄セて。詞御自分は誰レ有ふ清和天皇の御ン孫。此千晴は俵

藤太秀郷が悴レ。龍宮城迄名を上し家柄たり。不足なき一ッ家の因。ハテ両家が合躰すれば。天下に恐るゝ者はない。ソレ仲光。地美女丸を呼ビ出せ聟舅盃キせんと、日頃爆き源、家の一族悪逆一チ味に招き込ムフシ工の程ぞ醜しき。地滿仲公取リあへず。詞某シは兼てより。佛ッ法に寄依致し出ッ家の立願有リながら禁ン庭より許し給はねばせめて悴レの内也共。一人ン出ッ家させん物と日比大願ン有ル故に　美女丸は中山寺へ登せ置キ近シ々に剃髪致せば。滿仲が子で子にあらず。地近カ比殘ン念ン千萬ンと聞キもあへず色左大臣。詞ム、何美女丸は出ッ家させんと。中山寺へ遣カハせしとな。ソリヤならぬ。内イ奏をへし縁ン組綸言は汗のごとし。地坊主にならふがどふ成ラふが是非呼ヒ戻して婚禮さすと。かさにかゝれど少シも色騒がず。詞ハア御意を返スに似たれ共。内勅を承はつた上違背致さば違勅の科。今日御ン入有ル迄は。勅定共縁ン談共曾て存ぜぬ以前より出ッ家と定めし美女丸なれバ。勅を背ムくの道理にあらずヤア何の角のと理屈にかこ付ケ此千晴と縁ン組が不足な故のぬけ詞。理非は兎も有レ云かゝり。是非いやといへばお相イ手と切ッ及廻せばハ、、、。詞事を分て云聞カすに理に暗き田原ノ千晴。横神破りの高ゆすり。相イ手が違ふ出直せと。地いはれてこなたは猶逆立チ。サア拔勝負と詰メ寄レば。地仲光は色押隙。詞恐れながら千晴公。そふ氣短に御意有ッては成ル相談もならぬの道理。爰は仲光にお預下され。一ト先ッ奥へお出有ッて幾重にも御相談ンと。地和らぐ詞に色左大臣。詞ム、コリヤ尤な仲光が計ひ。然らバ奥へ通るべし。何滿仲殿。千晴が今の如く申せしも。どうぞ縁ン談が調へ度イと思ふから。イカニモ。高明公御意

の通り。イヤモ此千晴惡ル氣はおりない。コレハ〳〵痛入ッたる御挨拶。今日は適のお入り何をがな御馳走にと。江口神崎の舞ィ子共を呼寄セ置ク。今様をお肴に奥の殿ンにて御酒一トつ。夫レは千萬忝ケないと。地互ィにぬつぺら上はすべり。うんげん縁の上ケ疊ミ折りに觸たる饗と。フシ打連奥に入給ふ。地フシ晴のお客の御馳走に。櫛の歯を挽給仕人。奥は媚く今様に。三味のねじめも高カ々と。哥つもられて。夫共しらず。白梅の。春は。いづこと。問ても見れどまだ尋こん鶯の聲をつゝむや暮のナヲス雪。地奥の騒ぎに引キかへて我は心もすめやらず。稚心の一ト筋に。何ンの坊主に成ル物と中山寺を忍び出。舘に歸る美女御前ン。地奥の様子を窺ひ足聲を潜て誰居ぬか。美女丸が歸りしと母上に申てくれと。の給ふ聲は自。風がゞ取次親ご子の。椽側傳ひに母上は。詞ノフ美女丸かなつかしや。地母上様と縋り付キ。親子手に手を取合て先キ立ッ物は涙〳〵母はおくれの髮かき撫ノフ美女丸。詞思ひもよらぬ父様の仰ッ。美しひ此黑髮を剃落し。出ッ家せよとはあられもない無得心ンのお詞と仲光と云ィ合せさま〴〵お諫申ても お聞入レない故に。地せう事なしに中山寺へやる事はやつたれと。あれ程出ッ家をいやがるそなた。短氣な事はせまいかと今の今迄案ンじて居たに。詞ヲ、よふ顔見せてたもつたのふ。ゑたがそなたの歸つた事。父上のお聞有ラば御腹立チは必定。何事も此母と仲光に任せておきや。コレいやな出ッ家に何のせふ。地母が居間に隱して置ィて仕様仕方はいくらも有ラふ。必ズきな〳〵思やんなといさめすかせば美女御前。今に始ぬ母上のお情お有がたうござります。此美女丸が生マれ付坊主嫌ひな其上に。出ッ家

になられぬ其譯ヶは詞日外北野の社にて。兄頼光の云ィ付にて內侍所の御鏡守護の役目は美女丸なるに。盗まれし其科は季國が身に引ゥ受ヶて切腹。志シを感じ給ひ關白實頼公の御計ひにて。一ト先ッ事は納マれども。兄頼光の名代守護の役目の美女丸が。詮義もせすおめ〳〵と坊主に成ッた腰拔ヶと。地人トの嘲り請ヶんより潔ふ腹切ッて。死ンで仕廻と思ひしが。寺で死ヌるは穢はしい。館へ歸つて切ッ腹と覺悟極メてフシ歸りました。詞ヱ、こな子は突詰メた理屈計リ。とゝ樣への面當ッなら死ニなりとどふなと仕や。母に恨は有ルまいぞや。尤モそなたは妾腹で。腹は借ねど藁の上から自ラが育上ヶ。微塵隔る心なく。地そなたも日比何角に付ヶ孝行にしてたもる。其志シに引キかへて。短氣をおこし腹ラ切ッて。死ンで母に物思へか。こがれ死ニに死ナんよりそなたが死ヌれば其刀で。母も直ヶに冥途の供。コレ思案してたも美女丸 さはいふ物のそなたより。無理の發りは我ヵ夫マ。王位を出て遠からずと人トのうらやむ氏系圖。頼光は天下の武將。そなたの器量は萬ン人ンにも勝れし故に美女御前ンと。自慢で付ヶた此黑髪何ニが不足で剃落し。坊主にせよとは情ヶない氣が違ふたか我夫と。あなたこなたを恨わび聲をも立チぬ忍ひ音は。傍りに心沖のフシ石かはく間もなき袖袂。地かゝる歎の折からに。一ト間の內より御聲高く。詞ヤア不孝者ソコ動くなと。地立チ出給ふ滿仲公美女御前ンの襟がみ摑。どうど投付怒の大聲。詞出ッ家せよと云ィ付ヶし親の詞を背き立歸る不所存ニ者と。地御はかせを拔キ放ナし振上ヶ給へば御臺所。我ヵ身を惜ず押隔マア〳〵待ッて下さりませ。コレ美女丸早ふ迯ヶてたもいのと心あせれば滿仲公。ヤア放ナせ〳〵とせち

がふ所へ。一ト間をかけ出る仲光が。滿仲公の利腕をしつかと取ッてコハ御短慮〱我カ君。詞天下の武將と仰がれ。萬ン民の善ン惡を正し給ふ御ン身にて。地匹夫匹ぷの爭ふごとく見苦しき御有樣。詞其發りを尋ヌれば。我カ神ン國の掟に背ムき佛ッ法を寄依ましまし。多くもなき公ン達チを出ッ家させんとの御迷ひ。主親の命イなれば。一チ應御詞に隨ひ中山寺迄御供は仕つたれ共。能々お嫌ひなればこそ迯ケ歸る美女御前。地鳧の脚鴿の脛出ッ家を嫌ふも御性質。何の仕落科なき御ン身を御ン手討チとは餘りの御ン事。此仲光ッが有ル内は御手討チ存ジもよらずとこたへにこたへし存ン念を。歯に衣着せぬ仲光か忠義の程ぞフシ潔ぎよし。地滿仲公猶せき立チ。詞ヤア過言〱仲光。出ッ家を嫌ふ美女丸。何ンの仕落科なしとは大なる汝ジが僻言。是にもせよ非にもせよ詞を背ムく不孝者。天下の善ン惡を糺すべき武將の身故捨置カれず。地手討チにするが誤りか滿仲が仕落かとしつぺい返し理の當然。ハット計リに仲光も。御臺所も諸共に返す。フシ詞もなき所に。地一ト間の内より左大臣ン千晴諸共立チ出で。詞ホヽ美女丸がひたすらに。出ッ家嫌ラふは幸イなれば。先キ程申せし緣ン談と。地云ハせも立テず滿仲公。詞ヤア嫌ラふが嫌ラふまいが某シが詞反古には致さぬ。達ッて諫る者ならば。仲光にもせよ誰レにもせよ。此座は立タせぬ手は見せぬと地太刀引キそばめし勇氣に恐れ。詞も長カ袖左大臣ン。千晴も倶に。尻込ミす。地仲光は頭を色擡げ。詞ハアヽ不孝と有ル御一チ言ン。磐石よりも重ければ申上クべき詞なし。此上エは美女御前仲光預カり奉り。地幾重にもお諫め申御出ッ家勸奉んと。申上れば色滿仲公。ヲヽ然カらば汝に預クべし。意見をくはへ其上に。出

家得道致さずは首討ッて差出せ。地急度申シ渡したぞといとも烈しき御シ詞。二人シは歸洛の供觸もキン手持チ不沙汰の暇乞。御臺所は詞さへ涙ながらに見送り給へば。美女御前は仲光に誘はれ。てぞ三重「立出る。

第五

詞ヨミクセ身躰髮膚これを父母に受ケたり。敢て毀傷ざるは孝の始なり。身をたて道を行ひ名を後世に揚て以て。父母を顯はすは孝の終なり。地讀書の聲もフシしめやかなる。地滿仲公の末子美女御前シ。父の不興を漸と。仲光が介抱にて影を隱せし下モ屋敷。本フシ畦野の里の春の花庭の景色も目に付カず引キ籠り。てぞおはします。地お傍さらずの御氣に入リ仲光が一ッ子幸壽丸。同じ十五の丸額年シよりもおとなしく。詞申シ〳〵美女御前樣。今御讀遊した孝經は。何ニによらず父母の心に背ぬが孝行の第一チ。夫レにマアおまへ樣は何故に。大殿樣のお詞にお隨ひ遊ハしませぬ。サイノ佛ケの道は異端寂滅の教迚。高カい樣でも低い道。坊主に成ルは腰拔役。何シぼとゝ樣の仰でも。是計ッはおりやいやじやと。地年シはも行カぬ主從が。咄しの中カ戸押シ明ケて。地仲光が妻の藤浪しづ色〳〵と立チ出。詞うらゝかな春の日も暮レ兼るで嘸御退屈。ノウ幸壽丸。いかにてなたが好た事迚詩を作つたり歌讀だり。其透間が子曰ゥ美女御前ニ樣のお氣が盡ふ。奧座敷キへお供して。あつさりとお氣ばらしに。酒でもおすゝめ申さやい

のと。母の詞に幸壽丸。詞そんなら美女樣奥座敷へ。ヲ、幸壽來れと地引連レて。奥の一ト間に入給ふ。フシ跡に藤浪只一人リ。夫トの歸りの遲ひのは心がゝりや氣遣カひと。フシ案じ煩ふ表テの方。お歸りと告る聲。としや遲しと出向カへば。立チ歸る主ジの仲光何か思案のフシ屈托顔。地女房は立チ寄て。詞いつ〱よりも遲ひお歸り。そしてお顔持チも常ならず。御前ンの首尾はいかゞぞと。地尋チに仲光されバ〱。詞けふも替ハらず御前ンにて。さま〲御諫申ても。御聞キ入レなきのみならず。暮レ六ツの時計を相圖。美女御前の御ン首討テよと有ル上意。押シ返し操返し諫言申せば猶逆立チ。日比に似ざる無法のお詞。是非に及ばず美女御前の御首。討チ奉らんと。請合ッて歸つたはヤイ女房と。地聞イて悔り藤浪が返す詞も口どまくれ。傍りうろ〱フシ見廻ハす所へ。地滿仲公の御臺所雲井御前。かちはだしにてかけ付ケ給へば。夫婦は驚キコハ輕々敷御有リ樣。何故の御入リと恐れ。フシ敬ひ奉ッれば。地御臺は漸胸撫おろし。詞ヲ、自ラが此躰驚は尤モ。人ト目もいとはす來ルル事外カならず。地最前連合滿仲殿。美女丸が首討テと主命力ラ及ばねば。請合ッて歸つたるそなたの心はしらね共。自ラが一トつの賴ミ。詞知ル通リ賴光は。わらはが産の子なれ共。美女丸は妾腹。なさぬ中迚露聊。隔てる心はなけれ共。世上の人トの口の端に産の子ならば殺さすまい。繼子憎んで繼母が殺させたといはれては。わらは女の道立タず。夫レのみならず常々に孝行なあの子。命に替エても助ケにやならぬ。思案してたも仲光。コレ手を合ハして拜ッぞとスヱ眞實見へし御ン涙。フシ藤浪も。貰ひ泣。詞ヲ、お道理御尤。私シ迚も御存ジの通リ。幸壽丸とはな

さぬ中。腹は借ねど隔なく。孝行にしてくれれば。地 恩愛と云義理と云。一方ならぬ大切さ。身につまされておいとしい。詞 コレ申仲光殿。勿躰ない御臺様のお頼。ツイアイ。と申上。地 お心休めて下さんせと倶に心をあせれ共。仲光は差俯き默然として居たりしが。詞 ハア お頼なく共主君の御事。麁略に存る仲光ならねば。此事の抑より。寢食を忘工夫致せど。何をいふても滿仲公。諫を容ぬ御片意地。地 無理と知ても主君の仰御詞は背かれず。又御臺様の御仰。是以て違背ならずとくと思案仕り。後程御返事申上ん。詞 夫迄は奥の一間に。暫く御待下さるべしソレ女房。御案内イヤ／＼春の花秋の紅葉。度々入りし此屋敷。案内は知てゐる。自が事構はずと藤浪倶々相談して。能返事聞かしてたも。詞 仲光しかと頼んだぞ。地 内義能にと打しほれ。キン奥をさして。入給ふ。地 女房猶も心ならず。詞 ノウ我夫。どちら付ずの今のお返事。御臺様の御詞を立。御助申お心か。又滿仲様の御意を守り。討奉るお心か。聞して下さんせと。地 夫の顔を守り詰。手にフシ汗握る計り。詞 エ、かしましい何を女の小差出た。何事も此仲光が胸に有。ソレ御臺様へ九献の用意。御傍へいて御慰申せ。地 我は暫く休息せんとヲクリ云捨立て入にけり。地 藤浪は跡先を思ひ廻せば廻す程。ハツト吐胸をつく／＼と小首。傾け一思案。ハアそふじやとずんと立て一間に向ひ。詞 幸壽丸。地 ／＼せはしなく母の呼聲何事と。アイといらへて立出れば。近ふ／＼と招き寄。詞 ノウ幸壽。そなたに母が改て尋たい事が有。何と父と母と二人の内。何れの親が大切な。サ有

やうにいふて聞カしや。地コハ改りし母様のお詞。常ネ々とゝ様のおつしやるには。詞父は天ン母は地。須彌大ィ海にも譬たれば。何レに愚はござりませぬ。ムヽ、産の親は其通リ。なさぬ中カはどふで有ラふぞ。アイ。後の親を親とするが聖人の敎。地殊に二ツの年シから御養育。仇おろそかに存ジませぬ。詞ヲヽよふいふてたもつた。そんなら何ンで有ラふ共。此母がいふ事背ぬか。アイ。何ンの背キは致しませぬ。ムヽ、しかとそふなら誓言で聞キたい。アイ何々の誓ィ言。お詞は背キませぬ。地母は跡先キ見廻して小聲に成リて。詞サア自ラは此間タ打續夢見の惡さ。占せて見たれば。殊の外カ惡ルい夢にて身の上に祟りが有ル。此災難を遁れるには。伊勢大神宮様へ。拔參リをすれば能との事なれど。女の身にて家出しては。夫トの思はく世の人ンロ。地心に任カせずくし／＼と案ンじ暮して居るはいの。賴ムと云ふは爰の事。どふぞそなた名代に拔ケ參リをしてたも。母が一生に一チ度の賴ミ。フシやいの／＼と有リければ。幸壽丸おとなしく。詞母様の災難除。私が參りて濟ム事なら。成ル程拔參り致しませふ地去リながら。先キ程あれにて承ハりますれば。美女丸様の御ン身の大事。一生懸命と聞キながら。お傍をはなれ外カへ出ては何ふも義理が立チませぬ。詞美女様の御先途を見屆る迄。お延なされて下さらば。隨分拔ケ參り致しまふと。地いふに母は氣色をかへ。詞ムヽ、なさぬ中カの自ラが賴み故。美女様にかこ付。おれがいふ事聞きやらぬか。何ぼいふても繼子根生。どふなと勝手にしたがよいと。地顏赤カらめし腹立チ聲。幸壽丸氣の毒がり。詞母様誤りました。地堪忍して下さりませ。詞ムヽ、そんなら拔ケ參り仕やる氣か。地アイお詞は

背ませぬ。詞ヲヽ嬉しやいてたもるか。地又も詞の替らぬ内と。杖よ笠よと氣を付て。詞是から池田の町へ出て。大坂迄いきやる内に。路金を持せて誰ぞやらふ。サア一ツ時も早ふ／＼。そんなら隨分御機嫌でと暇乞さへそこ／＼に。見返り。／＼出行ば。フシ影見へぬ迄見送りて。ホツト吐息を次の間へ。胸撫おろし入りにけり。地春風爲に愁を吹去ず。春日偏に能恨を惹て長し。八重霞たなびく空の春景色。庭の櫻の咲亂れ。花に木傳ふ鶯もフシ栖。求る黄昏時。地むざんなるかな仲光は。討なと有もお主人。討奉るもお主人。討なと有もお主人。本フシ三の巷に蹈迷ひ。しほ／＼と立出て。地櫻の梢打詠め。詞ハア咲も殘らず。散も初ぬ此花も。今にも風の吹來らば終には散ん無情の道。地實々盛者必滅の。佛の敎へと諦めて心もめいる入相の。フシ遠寺の鐘のかう／＼と。寂滅ゐらくの響にや風なき花のばら／＼／＼。ちると覺悟の仲光も今更。心驚きて謠入相の鐘に花やちるらん。地／＼とヲクリカヽルつぶやき／＼フシ奥に入。地夫のそぶりに心を付跡をしたふて女房が。廊下傳ひに差足拔足。フシ窺ふあなたに御臺所。仲光に賴んだる返事の遲ひはいぶかし。是も窺ふ忍足襖隔て主從が。互に怪しむ足音に息を詰て踉ふ內。地程なく時も暮六つの時計の響と諸共に。奥にばつさり首討音。二人は顚倒胸は板。フシかけ入らんとする所に。地首桶携へ仲光が。涙ながらに立出る御臺は聲かけ。詞ヤア仲光。最前賴んだ返事は何とゝ。地問詰られて。詞ハア是非に及ばず美女御前の御首。討奉りて候と。地聞より御臺は氣も狂亂。用意の懷劒拔放し。詞我

子の敵と突ッかゝる。地マア〳〵待ッてと女房が留める内に一ト間より。詞ヤレ待チ給へ母様と。地立チ出給ふ美女御前。詞ヤアそなたは無事なか生キてかと。地御臺の鷲キ藤浪は。夫トの傍に走リ寄首桶の蓋取ッて。詞ヤア是は幸壽丸。コレ。かう成ル事が悲しさに。切角落トした甲斐もなふ。覺悟で死んだか。無理殺しか。地情なの我夫マと。あへなき首をいだきしめ恨歎ば二タ方もスエテひたんの。涙にくれ給ふ。地仲光は目を忩ばたゝき。詞今日滿仲公の仰を受ケし其時より。幸壽丸を御ン身がはりと心の覺悟去リながら。まだ若年ンの者なれば。云イ聞カさば未練や出ん。欺し討チにやせんと。ちゞに心を碎く內。女房。そなたの胸にもこたへ。命を助ケんとの心遣カひ。しかるを最前ン幸壽丸が。美女様の一ッ生懸命。御先ン途を見屆ケんとの。一チ言ン。御身がはりと覺悟の躰。密に樣子窺ふ內。裏道より立チ歸り。母の仰默止がたく。一チ應は落チたれ共。兼て覺悟の我カ命。サア御ン身替りに立テたべと。首差延し健氣さと。地語れば妻はせき上〳〵。扨はさつきに無理やりに呵つて落した自ラが。志シを背くまいと此內を立チ出て。裏門ンより忍び入リ。死ヌると云ふ事知ッたなら。いつそ落トさず。此母が付キ添ふて居たならば。かういふ悲しき目は見まい。何をいふても皆跡事。コレ我カ夫マ。幸壽丸が最後に云イ置ク事はなかりしか聞カせてたべと取リすがれば。詞ヲ、死ヌる今はの際迄も。おいとしいは母様。地嘸や恨ミ給ふらん。云イ譯は此書キ置キ。渡してくれよと末期の賴ミと差出せば。手に取ッてスエテ淚と。倶に押シひらき。詞書キ置の事。五刑の屬三千ンにして。罪不孝より大なるはなしと。孝經の本ン文。母樣の御志シをもどき先キ立テ候不孝

の罪。嘸やほいなく思し召サるべく候へ共、主君ニの爲に命を捨ツるは武士の道にて候まゝ。御歎キも顧ず相ィ果候。兼てよりまさかの時は御ン身がはりと覺悟極め居候故、最前ンお詞を背き御怒を受ヶし段。是のみ黄泉の障りにて候。コレ幸壽。日頃から其方の心母はよふ知つてゐる。何の腹が立トふぞ片時も早く此内を落トさんと思ふ故。僞りのそら腹立チ。かはいさ余マて呵たのじや。何しに如才が有ラふぞいの。〳〵。ヤイ女房。くど〳〵と諄言いはずと。其跡を早く讀。アイ。サ早ヮ讀アイ此上ッ〳〵〳〵迚も。ヱ、埒の明カぬと引ッたくり。ヨミ詞是のみ黄泉の障りにて候　此上迚も美女御前様の御ニ身の上能様にと〳〵様の、能ャ様にと〳〵様のニ　地ヱ、左程まで美女丸を大事に思ふてたもるか。詞此子が爲には命の親　いぢらしい　其書キ置。夫婦の衆の讀メぬも尤。地チヱ自ラがと引ッ取て。詞ヨミ此上迚も美女御前ニ様の御身の上。能ャ様にと〳〵様の御思案ンを廻クらされ大殿様の御機嫌直チり　御臺様の御安堵〳〵コレ、美女丸おれはどふも目が明カぬ、跡はそなた讀でたも。御臺様の御安ン堵遊バし候様ッくれ〳〵も願ひ上ヶ候、母様まいる。幸壽丸、コレ〳〵奥に一ッ首の歌。君が爲。命に替る後の世の。闇路をてらす山の端の月　地讀も終らず一チ同にワット計リに聲立テて。正躰もなくふししづむ。フシ哀といふもおろかなり。地歎キの内に女房が夫トの差添拔キ放し。自害と見ゆれば御臺は押シとめ乃物もぎ取リ自こそと取リ直すを、女房其手に縋り付キ、詞わたしこそ幸壽を殺し。生キて居てなさぬ中の義理が立チませぬ、地イヤわらはこそなさぬ中カの義理を立テんと。美女丸をかばひし故、幸壽丸が身の災難ッ。スリヤ自ラが

手をおろし殺せしも同前ン。我レは繼母の道を立テそなたに義理を失せどふも生キては居られぬわいの。イヤ／＼私シこそと爭ふ中へ美女丸仲光。留メても留マらぬフシ二人ンが覺悟。地ヤレ早まるなと聲かけて立チ出給ふ滿仲公。思ひがけなく人々はハツトフシ驚ロく計なり。地仲光は少シも騒がず美女御前を後に圍ひ。首桶の蓋取リ繕ひ。詞愚臣仲光。仰に任カせ美女御前ンの御ン首。討チ奉りて候。御實撿下されよと御ン前に差置ケば。地滿仲御ン目うるませ給ひ。詞其方が討ツたる首。美女丸に相違有ルまじ。實撿に及ばず。地ヤイ美女丸が魂魄能ク聞ケ。詞此滿仲朝家に仕へ奉ツり。弓矢を取ツて私シなし。然カるに謀叛一チ味の佞人ン。左大臣ン高明ラ田原ノ千晴ルと心を合せ。源ン家の勢ひをくじかんとさま／＼の奸佞。我カ子ながらも悟き頼光。彼レ等が手に合ハざれば。いつそ味方へ招き入レんと内イ々方便をめぐらして。千晴が娘を美女丸に娶せんと内奏し。いやといはさぬ緣ン組ミ。謀叛ン人ンと緣を組ンでは末代イ源氏の耻のみならず。地上一人ンより下モ萬民若やと源ン家を疑はゞ。天下の心區にて。詞スハ御大事に及ばん時。天子の御爲宜しからず。此計略を遁れん爲。出ツ家にするると云イつのりし。折惡く歸りし故殺さんといひしは武士の意地。我カ子を捨て天ン子へ忠義滿仲が心の潔白。仲光は又主の爲。我カ子を殺す大忠臣ン。地蘭麝の室に入ものは自香しきと。幸壽丸が志シ女房が振舞。忠臣ン烈女を家來に持ツは。我カ家計リの幸イならず朝家の御ン爲國の寶。とは云イながら。老先キ有ル幸壽丸があへなき最後。不便の次第イと計リにて。御感の涙に仲光夫婦。有がた涙血の涙御臺所美女御前フシ倶に涙の淵なせり。地滿仲愁に堪兼給ひ。計略

ながら美女丸を出ッ家させんと云イしも因縁。幸壽丸が菩提の爲と。差添抜イて美女御前の御髻を切リはらひ。惠心僧都の弟子と成リ名を源賢と改め此所に一チ宇を建幸壽丸が跡吊へと。仰は攝津國多田の庄。西畔野に隠れなき忠孝山小童寺と古跡は今に。殘りけり　地夫婦はハツト三拜イ九拜。野邊の送りの營や。タヽキ御臺はなく〳〵亡骸にかける。上着の御賜ヽ滿仲公は燒香に心を込メし名香のヲクリ煙は直に紫の。雲井を余所に。する墨の。美女御前は筐ぞと。又くり返す筆の跡。君が爲命にかはる後の世の。闇路をてらせ。山の端の盡キぬ。歎キの。ユリ物語リ三重

第　六

鹿ヲドリ商賣の。氣取リも時に大坂の。地高津の町に隠レなき名代イは櫛屋庄作が。仕出しの朱塗淺黄櫛。買イ人は爰に木地蠟色。賣ルは渡世のため塗と精は出せ共細元ト手。いつか咲べき花塗の細工貧乏すりはがし。萬に事をかき合せ。世帶の銹地漸と。フシくろめ漆と見へにけり。地折ふし表テへわちやくちやと田舎道者の四五人シ連店の代ロ物見廻して。詞コレ何ッれも爰が名代イの櫛屋の庄作。朱塗の櫛の根元根本。おらが國では今にはやる。さればいの。又去年シから岩井櫛とやらいふ。珍らしい塗が有ルげな。地見たい物じやといふ聲に。庄作は仕事押シやりフシ箱取リ出し。詞アイ是が仕出しの岩井櫛。お土産にお求なされませ。ハア是は面白い色じやは。又此櫛をどふした謂で岩井櫛と云イますぞ。アイ是は日の

出の江戸役者。岩井半四郎と云ふが差始メた故。そこで此名を岩井櫛。ハア夫レで聞ヘた、マアいはゐといへば名からしてめでたい。狂言が當タる筈じや。わしも内の嬶へみやげに。一チ枚買ふて歸らふと。地 いへば一人リがコレ五助。詞 上品な此櫛。美しい奴ツがさせば隨分とよからふが我レが嬶がアノあばた面。鹿子餅の化物。淺黄櫛に生醬油付ケて。めり／＼と喰そふな顏付キ。地 よしに仕やれと一チ同にフシどつと笑ふて立チ歸る。詞 ヱヽ買もせぬ癖何のかのと。仕事の邪魔を仕おつたと。地 又細工場に差かゝれば。フシ奥より出る娘のおりせ。ぼんじやり風の振リ袖に。前垂襷どこやらが。賤しからざる爪はづれ心の花香。汲持ッて。詞 とゝ樣お茶とフシ差出せば。詞 ムヽ是は氣が付イた。我が其樣に朝も晩も。物事に氣を付て孝行にしてくれるで。まだしも苦勞を忘れるわい。サイノ兄樣は四五日以來。どこへいてやら歸りなさらぬ。とゝ樣の嘸お案ンじ。私シも夫レが苦に成ッて。ハテ扨モアノのらめが事構やるな。おれも永々の浪人シ。一ッ生外で主取リはせぬ積り故此ざませめて倅レがまんぞくなら歸參シの方便も有ふけれど。何をいふてもアノのら。殊にそなたに言イ號の聟は行ク衞知レず。不仕合な老の入まい。おれが身は厭ぬが。地 盛リのそなたを其樣に。埋れ木にして置が悲しうおりやると胸せまり涙ぐめば。詞 ヱヽひよんな事云イ出して。又とゝ樣のお歎キ。モウ仕事も取リ置イていつもの樣にお肩でも。地 揉で上ふと細工場を取リ片付ケる折からに。紺の大イなし角鍔のすり下ケ奴がフシぬつと這入リ。詞 コレ櫛屋殿。おらが屋敷キに櫛の誂へがござり申す。おれと一所にサアござれとせり立テられて。アイそんなら御一ッ所に

參りませふ。コリヤ娘。三日月に郭公の櫛十枚紅五から取に來たら渡せ。橘屋から岩井櫛の代金持て來たら請取て置。地 隨分留守を大事にせよと。フシ 打連立て出て行。地 引違ふて入來るは江口の里のくつはや。大黑屋五郎兵衞。駕を持せて差覗き。詞 釋迦八殿の內は爰かと。地 いふに娘が、詞 アイ兄樣には何の御用がござります。アイヤちつと逢ねばならぬ事で江口の里から遙々來ました。留守ならば待ませふ。アイ兄樣はけふで四五日留守なれば歸りの程は知ね共。待なさるならアノ一間で。そんならアレデ待ませふと 地 駕舁諸共路次口より ヲクリ 引連てこそ入にけり。地 跡へのか〳〵立歸る。此家の惣領だいばの フシ 釋迦八。地 夫と見るより 詞 ヲヽ兄樣お歸りなさんしたかム、親父は留守か アノ櫛の誂へで御屋敷方へ。ム、よし〳〵。コレ兄樣 たつた今江口の里から人が來て 奧におまへを待て居ます。ム、夫もよし〳〵。中 兄樣。常々からいふ通り。地 おまへの事を苦にやんで年寄る炁やんしたとゝ樣の心遣ひ。モ 惡る者付合止にして。おとなしうして下さんせ、箸折かゞみの兄弟惡ふ思ふて云はせぬ。コレ聞分て下さんせと心一ぱい。諫の詞。地 思ひの外に打點き、詞 ム、我が異見身にこたへた。初にひよつと欺された。元金を取返さふと。負博奕の炁こり打 全躰慰といふ物は 負る高程勝人はない。場で朽る故博奕。上手に成程粹が身を、悔て返らぬ我身の炁だら。地 モ 是からはふつゝり止ると。聞て妹が嬉しさの。そゞろに フシ 悅ぶ表より。地 捕た〳〵と大勢が。十手打振り亂入。コハ何事と驚兄弟。ソレ遁すなと折重なり。釋迦八を高

手小手。サアうせ上ヵれとフシ引ッ立る。地涙片手に妹が。マア〳〵待ッて下さんせと。押隔つれば捕手の頭。詞身は當所の代官。斎藤軍ン藏と云ふ者。京都へ上納の年ン貢金ン百兩。此釋迦八が飛脚と僞り。衒り取たる事顯はれ。召シ捕リに向ふたりと。地聞て妹はハット計。釋迦八は打しほれ。詞おれもそなたの異見で。ほんまの人ン間ンに成ッたれど。廿日以前の。仕事の尻が來ては。どふで首を切ラるゝで有ふ。地死だ跡では回向を頼む。親父様が歎かえやろと。夫レが悲しい〳〵と。えやくりフシ上ヶてぞ泣居たる。地妹は手をつかへ。詞申お代官様。どうぞ兄様の身の科を。御赦免なされて下さりませと。地願へば軍藏打うなづき。詞ム、赦しがたき科人ンなれ共。妹が歎キ不便なれば。百兩の金返しなば。助ヶてくれんと。地いふに妹が飛立ッ嬉しさ。詞サア〳〵兄様。其金はどこにござんすへ。ヲ、其金は。其時に。博奕に負て仕廻たわいと。地いふにフシ悔クり途方にくれ。詞ヱ、おまへもマア嗜まんせ。イヤ申シお代官様。お聞キの通りの金の行ク衛。外で才覺致す迄。どふぞ四五日。お待チなされて下さりませ。イヤソリヤならぬ。金がなくば引ッ立よと。地絶躰絶命難義の最中。奥より出るくつはやが。詞マア〳〵お待チ下さりませ。コレ〳〵お娘。こなたの難ン義氣の毒さ。いはれぬわしが差出口。こなたの體を書キ入レに。其金を借て進じよと地懐よりフシ包ミ取出し。地渡せばおりせは跡先の。合點行ヵねど當座の難ン義。一寸ン遁れと差シ出せば。軍藏は請取ッて。詞ム、妹が働きにて。百兩の金チ返すからは。此度は赦ルしてくれる。以來を急度嗜めと。地頭でおどして立チ歸る。地くつはやはしたり顔。詞コレ釋迦八殿。

百両の金渡したからは。いやおうなしの奉公人。苦界八年の證文サア認て下され。ム丶スリヤアノ今の百両で。ヲ丶こなたを買て連ていく。地ヱ丶ハア。はつと計に呆れ果スエテ何と、詞も泣居たる。地釋迦八は證文認め。掛硯の引出し明け。親判兄の印形を。しつかと押てフシ手に渡せば。詞サアノ\是でさらりと濟だ。コレ駕の衆と呼出し。地歎娘を引立て。無理無躰に駕に乗舁上んとする所へ。立歸る庄作をちらと見るより釋迦八が。やつちや強しとフシ逃込共。しらぬが佛。フシ親庄作。何心なく立歸り。此躰見るより。ヤア娘コリヤどふじや、様子はいかにと尋れば。くつはやは落付顔。詞ホ丶こな様が親父殿か。コレわしは江口のくつはや。爰の娘と相對で。抱へて行奉公人。様子は跡で息子に聞しやれ。サア駕やれとフシせり立れは。詞マアノ\待て下され。コリヤノ\娘泣て居ては譯が知ぬはい。子細はどふじや地氣をせけば。娘は駕を轉び出。詞コレノ\と丶様さつきに所のお代官が兄様を縛つていく故。様子を聞ば御年貢の金百両兄様が衒取た其金返さば助んとの事。詮方盡たる其所へ。コレ此お方が金百両立替て下さる。ア丶嬉しやと後先しらず。渡した金は私が身の代。地苦界八年。勤奉公。悲しい事が仕ましたとスエ歎ば。親父は齒ぎしみ。詞ヱ丶夫はてつきり悪者の。兄めが衒のおこはで有ふ。コレ爰な相盗殿。そんなあまいおこはにかゝる様な。庄作じやと思ふたら當が違ふ。コリヤ娘泣事はない。違やお代官所へ願ふ、て。悪者共のあらひざらひ。詮義仕ぬいてくれふぞと地腹立涙くつは屋は。詞ハ丶丶丶コレ論より

證據證文ンに。親判ン兄の判ンが有ルからは。女郎屋御免の江口の里。外カの岡場町とは違カひます。御代官所へ出るなら出やしやれ。こなたの息子が謀判と。一番に首が飛と弱身付ヶ込ムと。フシきめ壓狀。地理詰メに何ンと庄作が。夫レでも娘を女郎に賣ッては。云號の聟へ立タず。立テ替る金はなし。詞アノ外道め。惡魔め。惡ルい事が仕たらひで。妹を欺して賣ルとは。余マりといへばむごいやつ。おれはモフ思ひ切ッた。日比ロから孝行なそちにはかへぬ。首が飛ふがモフ搆はぬ。代官所へ訴ゆると。地口にはいへど心には。倚人な子が猶かはいさの。胸にせまりしフシうき涙。地娘は顏を泣キはらし。お腹立チは無理ならねどどの樣な惡人ンでも。神ミ佛のお力でひよつと心もなをらふか。出ッ世せふかと思ふて居ればまだも賴の心の樂しみ。詞お代官所へ訴へて。若もの事が有ル時は。取リ返しが成リませぬ。地ちいさいから云イ號の殿御の行ク衛もしらぬ此身。又かふいふ難ン義に合ふは。よく〳〵因果な生れ性。まだ此上にとゝ樣や。兄樣の爲にわしや。生キながらカン地獄へ落ると。諦れば事は濟ム。お代官所へ訴タへて。兄樣を殺す事は。堪忍して下さんせ。拜みますると手を合せ歎ヶば親は堪へ兼。詞ヲヽ惡ル物の妹に。我が樣な孝行な者もフシ有レば有ル。詞其心を。耳搔にかける程でも。兄めに分ヶてやつたなら。こんな難ン義はできまい。あの樣な獄卒でも。可愛が親の因果。惡ル者をかばふて。そちが難ン義を顧ぬと。地コリヤ思ふてばしくれるなと。しやくり上〳〵歎ヶば娘も取リ亂し前後。フシ不覺にふしゝづむ。地くつは屋は太欠。詞こんな事を哀レがつて。此商賣が成ル物しやない。サア〳〵駕にのらしやれと。地又引ッ立て

フシ打乗れば。詞ヲ、そんならそなたはモフいきやるか。世間しらぬ懐子。地嘸便りが有まい。詞随分無事に勤てくれ。せつない譯が有迚も。心中などしてくれるな。必指切爪を切り、まんぞくな其體に、疵付てくれるな。地アイ〳〵。おまへも隨分御機嫌よふ。詞ヲ、何の機嫌よふゐられふぞ。いつそ道迄送つてやろさ。悲しさ余つて腰も拔。枝にすがつてやう〳〵さ。よろめく足を蹈しめ〳〵傷に、引そひフシあゆみゆく。地あたり見廻し釋迦八が。そつさ立出る表の方。うさんな男の頰かぶりフシうそ〳〵窺ひ。詞ヤ、釋迦八殿。ヲ、權兵衛殿待兼た。扨手味ふいきました。遊女街商賣する程有て。さつきに貴樣の贋代官。せりふの極りけうさい物じや。イヤわしも前方旅芝居では。敵役の立者。何でも五色にかはる權兵衛が商賣。こんな事は茶の子〳〵。ソレさつきの百兩さ。地渡せば取て見改め。肌にフシしつかさ納た顔。詞コレ釋迦殿。約束の廿兩渡さつしやれさ地いへど耳にも聞入ず。行んさするを引留め。詞イヤコレ。コリヤどふするのじや。百兩の仕事が出來たら廿兩くれる約束。日雇人から損料から。おれに計り骨折らせ。我一人であたゝまり。おれをおちやひいにするのか。コリヤにしりかすり喰ふ男じやない。サア廿兩請取わい。ハ、、、犬骨折て鷹の餌食。我にやつてたまる物かい。ム、スリヤ彌おれを蹈氣か。そんならおれも仕樣が有。いつその事破れかぶれ。己を代官所へ引ずつて。何も角もぶちまける。地サアうせ上れさ引立れば。釋迦八は高笑ひ。詞ハ、、、。テモ味いやつが有はい。コリヤ代官所へ訴ても。おれは妹を賣た分。わりや贋

役人ンの拵ヘ事。おれよりは罪が重い。サア代官所へ出よはいさ。地いはれて權兵衛フシあたま搔。詞ハヽアそふいへばそんな物ンじや。エイハ。そんなら拾兩で了簡せふはい。イヤならぬ。ハテそふ氣短ふの給ふな。理屈をいへば腹が立ツ。たゞくれたと思ふて。骨折リ賃にそんなら五兩。まだぬかすか。壹歩もならぬと地突倒し。蹈のめして一さんに。跡をもフシ見ずして。走リ行。地跡に女衒は口あんごり。スヱカヽリ立チ上れ共。脚腰立タずフシよろめく所へ。どや／＼と。日雇の者共落重り。詞コレ權兵衛殿。捕手の日雇に賴マれた。約ク束の賃ン錢。受ケ取リに來ましたと。地いはれていとゞ氣もぐんにやり。うたての事の仰やな。けふの仕事の割前ヱに廿兩物せんと。思ひし事も。ぬか悅び。皆釋迦八めに物せられあげくの果に蹈ミのめされ。詞御覽の如く脚腰立タず。地權兵衛ごんにやくしんどが利。各方の日雇代イも。願以此功德。そんしやうぼだいさ。諦めてくれ給へとしよげに成ツてぞ。フシ居たりける。地日雇の者共口々に。詞イヤ何ンの事ンだ。駕昇してさへ設かる時節。損をして成ル物かい。割リ前取ふが取ルまいがこつちは構ぬ。約ク束の日雇代イは是非受ケ取ロ。ヲヽそふじや／＼。今いふ通りなら。錢金は有ルまい。着てゐる袷と此羽織。千貫ンに編笠。サア／＼剝と地大勢イが。寄ツてたかつて帶ぐる／＼。手早に引ッ剝突キ飛し。どつとフシ笑ふふて立チ歸る。爰に。哀レをとどめしは。此權兵衛にとどめたり。元來此身は女衒にて。人を責ッたる報にや。かゝるうきめに袷迄引ッたくられて丸裸此形リては歸られまいと。繩切レ取て鉢卷しめ。落たる鍵を當錫の錫枝。振リ立チ／＼女衒の願立テ。チヨンガレ奇妙頂禮こり果

た。詞抑私が國は下總。博奕に打チ負せう事なしの女衒ンの商賣。自然と覺へし目利の仕様は。鼻筋生際手の筋親指刀豆臭橋。是からふつゝりのらもかはかずめくりも打ッまい。無筆の親父に年ン季をふやして證文書まい。手前へ抱へて出居衆にやるまい。下ガつて居る内色事致さず。くらがへする時足駄を履まい。身請ケの女郎に無心ンをいふまい。うるさいこんだにホヽヽ。地足を早めて。三重立歸る

第七

サワキ歌爰に一トつの悪所がござる。二ッ一タ親に見捨てすさんと捨られて。三ッ見あかぬ女郎禿を集て拳酒。無理酒。口舌事ワイ〳〵ノワイトサ。詞志コレおきよ殿。奥座敷キの掃除はよいか。猶アイよふ掃て置キました。志ソンナラ亭座敷も頼みんす。モフお客衆がお出で有ッふ。新八殿ンや。松山様ン呼ゼ申して下され。猶アイそんなら此煎酒に氣を付ケて下され。志ヤレ〳〵〳〵鬧かしいぞ。此鬧がしいに旦那様は又誹諧に往てそふな。徂モノモ。〳〵志ホヽヽ。揚屋の内へモノモとは。コリヤおかしい。正月がきたそふな。ホヽヽ轉業いはずとお這入りなんせ。徂イヤおれは奥筋の者故不案内で我折申江口の里の揚屋三市とは爰サアでござり申スか。志アイ三國屋市藏は是でござります。徂しかれば夫レいつてねまつて莨でも吹キ申すべい。チヤやくばんを借シてくやれ。コレサ女中。がいに頼度ヤ事が有ル、聞てくれべいか。自分は初メて上ミ方サ出はり申た。國元トサへ咄しの種に。上方の御ン女郎衆を調へて

見申シたい。取リ持ッてけるなら。金子は不足にないから何やうにも構申さない。立テ切の上物を誂へ申べい。志アイ〳〵お安スい事でござります。今此里での全盛は。玉菊様千山様菅原様三ツの津様ッ錦木様初ッ風様牛ン太夫様若松様。徂ア、コレ〳〵。そふ口早ャにいぎやりては。からこびんから汗計リでき申シて。なじやうにもかしやうにも分カり申さナイで。途中で聞ば松山といふがあらくめんごいと聞キ申た。志アイ成ル程其松山様と申スは此夏からの突キ出し。是は此方のお客ク。助様ンと申お方の揚詰メ同前。又外カからも言イ込ミがござんすれば。是はお悪ルふござります。其上にどの客衆でも。ふり付ケて逢イなさらぬ。御無用になされませ。徂ヲヤ〳〵〳〵おつかない。適〳〵調へて振れ申シてや。國元トサ聞コへても一族の耻になり申ス。そん女郎は我折リ申。細見とやらが有ルなら借てくれなさろ。よさそふな名を書ぬいてお伊勢様へいのつて。ふらないやつをお秡ひ鬮に仕申さふ。サ苦しうなくば奥サアへ通るべい。志アイ〳〵。サア〳〵。かふお出なされませ。徂かう參るカ申シ。何失念申シた。家來共が大勢おり申す。あいつらにも河岸とやら引ッぱりとやらでも買してくれなさろ。志アイ〳〵。徂ハア扨よい普請だ。此壁サアは物好だ。白樂天の謠サアの様だ。謠牡丹は帯に似て壁の腰をめぐる。ヤア。ハア。村歌憂勤。うきが中カなるうき事を。誰レにか明ケて。いは躑躅。いはぬ思ひを引キしめて。抓からげの八文ン字。對の禿に。ナオス日傘さして。オクリ行ク衛を三國やにつと。笑ふて内に入ル。詞志ヲ、山様お早かつた。村ヲ、おりん殿。夕部は嘸眠からふ。志イヱ私よりはお前。モアノ助様の無理じいにはこまり

んす。村夫でもアノ大盃で。いつでも能呑なんす。志イエ〳〵ほんの勤酒。花貰ふが面白さに。村内損仕なんすな。志サア餘り酒たべる故か。太にはこまりんす。村ほんに浦山しい太り。冬暖に有しよ。猶申おいらがのへ。おりん殿の臀には。前垂が合せんノウ若葉殿。浅ヲイノ。おゐどのはゝが疊の目。卅八有りんす。志置上れ。若葉も重野も店へ出て。壓がかゝると。大きふ成ぞ。ホヽヽほんに山様。禿の時から馴てさへつらい勤。おまへはほんの懐子。そしてマア突出しからどふした譯かお客を振迚。親方様の不機嫌。今では夫が株に成て。其振は面白い。おれは得振まいとうぬ惚の客様が。みいら取迚又みいら。振れるに懲もせず。助様を始さして。ぜひ逢ねば開ぬ迚こけ云んすが揚屋の仕合せ。こちの亭主がお前の事を。五月雨の傘店じや。心はふるではやると申されます。ほんにお前の御全盛。御贔負の私なれば。ホヽヽお嬉しうござんす。村ヲヽおりん殿のあいそらしふいふて下さる。突出しの此身。意氣の。張のといふ譯は知ね共　地　心に深い願が有。故どんな憂目に逢迚も男に肌はふれまいと。覺悟極めての勤。悪い所は引廻して下さんせ。詞志アイ〳〵お前のそふかはいらしうおつしやるで。女同士でさへほれ〴〵と致すによ。ほんに夫よ。お前の事を聞及んで。お盃がしたいといふ客衆が有迚。幇頭持の萬里七がくれ〴〵の頼。見へたらお頼申ます。モフ助様がお出で有ふ。ちよつと裏の亭座敷。片付て参りませふ。歌人志れず。思ひはいとゞ涙より、外に誠はなき物と。村ヤとゝ様和ヲ、娘。久しぶりで逢てマア何から咄そふやら。よ

ふ息災で居てくれた。地村お前も御機嫌でお嬉しうござんする。和詞ヲヽおれも久サしう逢ハぬ故。逢イに來たいと思ふても。アヽいつも貧乏閙がしい。漸店を人に頼ンで。ちよと逢イに來るさへ。櫛屋の庄作が娘を。女郎に賣ッたと云はれては。近ン所隣へ濟ぬ故。中山參りと嘘ついて。親方の内にいたれば。爰へ揚ヶられてきたとの事。逢イたいが一ッぱいで。こぱかはと來はきたが。こんな形をつん出して。松山が親じやといふたら。外カの女郎衆や客衆に。見侮どられはせまいかと。暖簾のかげに隱れて人トの透間を待ッて居たわい。村イヱ〳〵我レも人トも女郎に賣ル身。榮耀榮花で賣ルのは。廓に一人リもなければ。其御遠慮には及ヒませぬ。譬恥に成ル迚も今では親一人リ子一人リ。地便リがなけりや氣にかゝる。一寸〳〵と逢イに來て下さんせ。和詞ヲヽよふいふてくれた。表を餝るが女郎の常ぢやに。恥に成ッても逢イたがる。地我レが其孝行を。兄めが百分一チ思ふてくれりや。此苦勞はせぬはやい。村詞そして兄様シは。どふゑなんしたヱ。和ヲヽ夫レからは音信もない。一向便リのないもまし。妹を欺して女郎に賣リ。そなたにこんな憂目を見せる。アノ鬼め。畜生め。地あいつが事いや胸が塞る。モウ云イ出してたもるな。村詞アイ〳〵子供や。とゝ様にお茶上ケてくりや。猶アイ。和コリヤ娘。我レに聞たい事が有ル。助大臣ンといふ客知ッてか。村アイ日外から此内で度ヒ々の騒。あいそつかしてもしたゝるく。けふも私を約束で。和ムヽアノ客の本ン名知ッてか。村イヱ〳〵助様と計で。本ン名は聞キませぬ。和ムヽ何ンと娘。親が頼ミたい事が有ル。其助大臣に身を仕カせ。逢ッてやつてくれぬか。村ヱヽとゝ様何ンと云イなんす。

助大臣に身を任ｶせ逢てやれとおつしやるには。何ﾝぞ様子がござんすか。和村ム、様子も有ﾚ共爰では云ﾊれぬ。村ム、聞ｺへたそんならお前は慾徳で。助大臣が襟に付ｷ。逢ｯてやれと云はんすのか。ソリヤとゝ様ｺ聞へませぬ。地常々にもおつしやるには。忠臣は二君に仕ｶへず貞女兩夫にまみへずじや。詞一度ﾋ浪人ﾝしたからは。どんな宜敷事が有ｯても二君ﾝには仕へぬ。夫ﾄ故賤しい櫛商賣でも。心は結句潔いとおつしやつたではござんせぬか。地おまへは道を立ﾃ通し私に道を背とは。ソリヤ胴慾でござんする。突ｷ出しの其日から一ﾁ度も客に帶解ぬは。云ｲ號の殿御へ義理。繻子の袴のひだ取ﾘよりも客の機嫌は取ﾘにくいと。小歌にも有ﾙ通り。手に手を盡し勤ﾒても客の少ない此時節。任ｶせる此身を帶解ずに。水を濁して勤ﾒるは。なみ大抵の辛抱じやと思はんすか。呑れぬ酒の無理じいは熱湯を呑ﾑ苦み。客ｯと添寐の三つ蒲團は劔の山に寐る心地。おまへの事を思ふ故。死ﾅずに勤ﾒて居る物をむごいとゝ様胴慾で。ござんすわいの〳〵。和詞ヲ、尤じや道理じや〳〵。人ﾄの聞ｸを遠慮して。跡先ｷをいはぬ故恨は理り。其聟の事に付ｨても。段々の咄しが有ﾚど。氣が揉た其上に癪でも起りや悪ﾙい。今ﾝ夜は勝手に迫つていく。後に透間に緩りる咄そふ。村アイ〳〵仕度は能ござんすか。和ヲ、支度は今親方ﾀの内でして來た。村そんなら後ﾁに。子供來や。猶アイ。歌かはいい男に逢坂の關ｷより。つらい世のならひ。伊ヤ旦ﾅ那。是が三市でござります。住ホ、身共は此里初ﾒてなれば何ﾆ事も宜しう賴ﾑ。伊そこは此萬里七ｶﾞ呑ﾐ込ﾐ山ャおりん殿。お客のお供して來たぞ。志ホ、お出なんせ。マア〳〵こちら

へ。伊コレおりん殿。今朝頼んだお客。宇内様とは此お方じや。佳ナニ女中。萬里七方から云入た。松山太夫が事何とでござる。志アイ〳〵。能様に云て置きました。頃日中から助様の毎日御通ひ。ちよつとお逢も成にくい所なれど。此萬里七様のお頼故。私が大きふ骨折て。拵へて置ました。家猶淺 柳よ柳直なる柳。無理な風にもなびかんせ。ヒヨウシきたさのさの讃岐の金比羅 家詞サア〳〵旦那のお入たぞ。〳〵。志ヲヽ助様お出なんせ。雷次様皆様御苦勞。猶ヤおりん。けふは夕部の敵討。武藏野で息なしだぞ。淺夫より大平がよかろふ。袖ヤイ〳〵やかましい。來ると早々呑たがる。意地のきたない末社共。コリヤ雷次。おれと我は爰に居て。あいつらは亭座敷 先へやつて喰はせい。家ハイコレ何れも。おりんを連て亭座敷へ。猶淺ヲツト任せて置さのさのさの讃岐の金昆羅。旦那お先へ。袖何雷次、おれが揚詰同前の松山に。逢たいといふすかんぴん客が有げな。太い奴が有物だ。家いか様 臭い物の身しらずと。出過たがる風の神。打遣てお置なされませ。袖イヤ〳〵。見れば目の毒座敷の穢。そこらに箒が有なら。中居に云付掃出せろ。佳アイヤ何助殿とやら。お近付に成申そふ。身は深津宇内と申そと致した浪人者。シテ助殿の御本名はナ。袖イヤ本名を申に及ばず。凡そ助とお聞なさるれば。廓中に隠れはござらぬ。ムヽ彼お手前が松山を執心の深津宇内殿でござるよの。佳御自分が助殿。袖宇内殿。佳助殿。佳袖ハヽヽ。伊コリヤ雷次。わりやさつきにから此萬里七がお供した。お客の事を耳こすり。胸の悪い當言云はずと。云分

有ラば日の前でいふて見ろ。家ヲ、夫レか我レ習ふかい。こつちの旦那が。金チせきにしてさへ手に入ラぬ松山太夫。所詮いけもせぬ事を。見てゐるが笑止なわい。伊ハ、、、強女郎が金計リで。いけると思ふが大たわけ。ばち〳〵と口計リで。光りを喰す稲妻雷次。世間の事は水雷。人トの事は構はずと。うぬが臍の用心ンしろ。家ヤこいついかに腮から地代イが出ぬ迚。出る儘の撥当イり。破太鼓の萬里七とは。皮に縁ン有ル厚皮生皮。面の皮を蹴て〳〵〳〵〳〵蹴上グるぞよ。伊ヤこいつが。家〳〵。〳〵伊家〳〵袖ヤイ〳〵〳〵。わいらは幇頭持チでなふて喧嘩師か。伊家ソレテモ余マり。佐アイカニモ。云イがかり引カれはせまい。併幇頭相應なら。腕づくより藝道の。立テ引キが見たいわい。伊ホ、コリヤ面白。いお捌。ヤイ雷次。是からは藝競。おれが勝たら松山様を。こちの旦那に逢ハせるぞ。家ハ、、、我レが藝に負る物かい。伊サア初メろ。家我レから初メろ伊辭義なしにマア初メろ。家ム、先ツ某シが諸藝といつぱ。一チに聲色二に身ぶり。三に酒は底抜ケ。扨又博奕諸勝負はめくり。長半ン引ッぺがし。其外カ一チ々算るにいとまあらず。汝が藝は扨いかに。伊ヲ、やつがれが藝能は。端歌めりやす琴の組ミ。扨所作事に取リては路考慶子もはだし〳〵。家ム、我レが所作がいければ。おれも昔シは所作事で花をふらせし梅村花之丞といふて。引ク手数多の色若カ衆。伊ハ、、、何ンじや我レが其面で花之丞コリヤおかしいハ、、、。家ヤイたわけめ。投長半ンじや有ルまいし。面を見て名を付ケる者かい。何ンぼうぬが藝自慢しても。江戸半太夫ぶしはいくまい。後學の爲聞イて置ケ。あれ見給へやめうが屋の。ふり出し薬リ袖の梅。

サアかふ雲上に聲を鼻で廻して見ろ。伊何ンじや聲を鼻で廻せ。象の化物じや有ルまいし。家ヤこいつおれが藝は一ト口いふても金に成ルわい伊何ンじや金チに成ル。金に成とはテトグワン。鐘に恨が數々ござる。まづ初ヨ夜の鐘を聞ク時は。ナント面モ白ロいか。家面白くも何ン共ない。立チ藝ならサア参ろ。尾上梅イ幸凄しいか。伊ム、我レが尾上ならおれは市紅じや。ナントきつい物か。家おれが藝はいくらも有レば。めつたに負ケる事じやないわい。伊ヲ、我レが方に藝が多けりや。おれが方にもまだ有ル〳〵。コン〳〵コンコ、ン〳〵。家ソリヤ何の眞似だ。伊伊久太夫が狐の眞似じや。家ム、我レは近ン年ン大分ンちやるナ。伊おれじや迚ちやるまい物か。家我レがちやればおれもちやる。伊おれもちやる。伊家ヒヤウシちやる程にヒヤウシ〳〵。山王の櫻の木に。猿が三萬ン三千ン三ン百三十三疋とまつた。伊何の事だ家〳〵伊家ハ、、、。家何ンぼちやつてもおれ程には舌が廻ハるまい。小米の生がみ小米の生マがみこん〳〵小米の小生マがみ。サアいふて見ろ。伊ヲ、向カふの鶴は白ロ鶴首が黒鶴首が眞黒黒の黒鶴よ。家あの客はよふ柿を喰客じや。あの客はよふ柿を喰客じや。伊摘たでつぶ豆つぶ山椒〳〵。伊家加賀の午房毛ごんぼう〳〵さんげ〳〵六根清淨。お左めにはつたい金剛童子。大山大聖不動明王〳〵〳〵。住袖ヤイ〳〵〳〵ソリヤ何ンの眞似だ。二人共次キへ立テ。伊家南無三ン寶しくじつた。伊然カらば雷次家萬里七伊家後チに逢ふ。袖何字内殿とやら。貴殿ンは見事松山を買イ遂る所存ンかな。住イヤ遂ゲる遂ゲぬは相イ縁ン奇縁ン。水清ければ月舍るコリヤ早互イの胸と胸。人トのならぬと云ふ事を。して見たいが我レらが持病夫レ故望

む松山太夫。袖イヤおかれい〳〵。拙者が様に金銀を蒔ちらし。廓を家と入り込で、通り者に成ってさへ。女郎は手に入れにくい。見りや紙子一貫の身代。家々の門に立て。四海浪しづかにて。アイ。永々の浪人ぐさ。一錢二錢貰ひ溜たはした錢で全盛の女郎を買はんとは雁が飛ば石亀のじだんだ。近頃以って腹筋〳〵。住ハヽヽヽ良禽は木を擇。不義の富貴は望ぬ某。又傾城は戀慰物。分限相應に遊ぶが樂しみ。得手青い奴めらが。いけもせぬうぬ惚で。死金を遣ひちらし。身代は棒ふり虫蚊の脚程も智惠はなくて。粹とやら通り者とやら。仲間いんかのちよん極り見せかけ計のきん〳〵組。人を非に見るうつけの大將。錦に包む泥坊侍。袖ヤアこいつ武士を捕へて泥坊とは地モフ赦されぬさずばと拔いて切かける。住得たりとこなたも拔合せ。住袖互に手練の上段下段。傍りにひゞく鍔音太刀音。フシ家内は騒ぐ計〳〵。村地様子見兼て松山が。一間の内より走り出。留ても住袖留らぬ二人が勢ひ。村有合屏風追取って刄物を中に隔の垣。裾蹈ちらす裏摸様。住袖挑む龍虎も村紅梅に住袖耻て爪をや隠すらん。詞村此喧嘩留いした。松山が貰した住袖ヤア武士と〳〵の此爭ひ。女の知った事でない留だてして怪我まくるな。村イヽエ喧嘩の元は此松山。お二人の爭ひを見捨て置かれぬ此場の時宜。白刄と白刄の眞中へ。女の身で出るからは。お二人共立。様の。思案がなふては出やんせぬ。夫共に堪忍ならすはお二人の腹いせに。私を切りなと突なりと地御存分に成ませ、ふ。住袖詞ムヽ其思案は何と〳〵。村ハテマア其刄物を納めなんせ。住袖地ムヽ實尤もと兩人はフシ拔身

を。鞘に納むれば。村詞サアいかに心願か有ば迚。情を商ふ此身にて。客を振とは私が無理帯紐とかぬを御合點で。御執心が有ばこそお二人共に大切の。命にかへてのせり合。此松山が身に取ては有難い共忝い共。地口ていはねど心のお禮。詞夫に今目の前で。討果ふとなされるを見ぬふりをして居ては。私が女郎の道立ず。夫故にお二人りを留ておいて地跡での捌。袖住詞サ、、雨人共立樣の捌が見たい。村サイナ女郎一人に客二人。此身が伽羅の燒さしならねば。半分づゝ共扮れぬ體今宵一夜を二つに分。九ッの鐘を境宵と夜中をお二人で。お遊びなされて下さんせ地ム、コリヤ面白い去ながら。何れを宵住何れを夜中。住袖其所が聞たい。村サ其所は宇內樣とやらを宵。助樣は夜半跡へ廻つて下さんせ。袖ソリヤならない。此助が先約二つにするさへ氣に喰ぬに。跡へ廻るは存もよらず。村サア〳〵。其譯を聞なんせおまへは名高き助大臣樣。此お方けふ初て。夫におまへを先にしてはアノ女郎は襟に付金に廻ると云れては。私が顏が立ませぬ。地爰はおまへの顏だけに御不肖なされて下さんせ。詞袖イヤ顏々と立のめされあの客にこつてりと。旨みを吸れておれ一人出物に成てや猶立ない。村ホ、、どんな客でも勤の內。帶解ぬが私が楯やぼな事云なんすな。袖ム、夫なら了簡してくれふが。コリヤ宇內。夜半の鐘がごんと鳴と松山を連にやるぞ。一寸ても遲いと命はないと覺悟しろ。住いふにや及ふ九つ迄はこつちの物鐘のならぬ其內に。松山が閨の內。是程でも踏込と。諸脚切て切折ぞ。袖ヲ、夫迄はさらば。住〳〵

村ハテマアお二人リ共に行キなんせ。歌樂しむ中を。吹ク風が心の程を。知もせで。ほんにしんきな。亂
がみ。住村地縁シならぬフシ一チ河の流れ。汲かはす酒も納る闇の内。二階はひつそとしづまりて餘所の。
騷ぎ下駄のヲクリ音トあんま。けんびき犬の聲フシ風も身にしむ秋の夜の。地格子に移る月影も互イに何
かおもはゆく。輪を吹烟灰吹のフシふちもそゝける計リ〳〵。村地松山につこと笑顔して。不思議な御縁でお
目にかゝり。兎や角と宵からのしだら。ふつゝかな女じやとおさげしみも耻しい。住詞イヤ〳〵最イ前
からの一チ部始終　容儀と云イ氣象と云並々ならぬ取リ廻し。殊に情を商ふ身にて志シを立テ通し。男に肌
をふれぬとは。驚キ入たる胸の内。地故有ル人トの娘にてせつなき譯ケの勤メ奉公。親の爲に身を捨る杯と
いふ様な事ならん。ふしぎな出合イも他生の縁ン。身に應じたる事ならばお力ラに成リ申そふ。必ズ遠慮し
給ふなと。心の箱の蓋取ッて底意微塵フシも。かけごなき。村地詞に松山涙ぐみ。長地傍なる硯引キ寄セて
墨摺ながし喰しめす筆の命毛。打付ケに。タ、キとへど答へず口なしの。いはぬ色なる短冊に心を。フシ
こめて差出せば。住地宇内は取ッて打詠め。詞數ならぬ。身を問人トの心こそ。誠トに深き情なりけれ。
〳〵。ハア目に見へぬ鬼ニ神ミをも哀と思はせ。地猛き武士の心を和らぐるは。日の本の歌の徳。せつ
なる心の筆ずさみ一ト入哀レを催せりと。スヱ胸は涙に紅の。短ン冊を取リ出し。さら〳〵と認めて差出せ
ば。村押戴。吟じ返し讀返し。詞數ならぬ。身にしあらぬを數ならぬ。數に入ルこそ悲しかりけれ。
ム、スリヤ私が身の上の。故有ル事を推量有。數ならぬ身にしあらぬを數ならぬ。數に入ルこそ悲しか

りけれどは　武士の娘が君傾城の。數に入ルのが悲しいと。身に引キ受し御ン詞。地色をも香をも知ル人に何か包まん我カ身の上。詞私が親は。筋目正しき侍なるが。故有ッて浪人シし。さもしき暮しの其中に。兄樣の不人ト柄私を欺して此勤。譬形は君傾城と成リ下カる共。云イ號ケの主シ有ル此身。せめて心は穢さじと。思ひ詰メたるうき勤メやりてに呵られ親方の。折檻受ケしは數限り泣イて明ガしてまんじりと。夜の目も合ず明ケからすかはいと思ふて下さんせと。くどき立〳〵。膝にかつぱと打ふして　スヱテ身もうく計リに見へにける。住地宇内も倶にフシ絞る袖。春撫おろしいたはれば。村地松山は嬉しさの。住たが。村ひ住に。村と。け住る。心村と。住心。二人實がかふして戀衣。濡ぬ先キから露落て。フシ下タ行水の通じ合。村地松山はおもはゆげに。ほんに私とした事があられもない。我レを忘レて取リ亂し。詞ホ、、夫レはそふと。宵にお前のお詞に。水清ければ月やどる。胸と胸とゝおつしやつた　私が胸はコレかふと。地ゑつと抱付キ引キゑむれば。住こなたは元來渡りに舟。村惚たほの字の帆をかけて。住いつこそ乘リ出す戀の灘。村奥聞ふより住口と村口。吸付。住引村付。住夜着の內。住村オクル思はぬ村夢をや結ぶてふフシ出雲の神ミの心にも。廓のゑにしはいかにせん。スヱきのふにかはる仇枕。けふの行ク衞は定メなきうきふしオクリ。しげき川竹の中に心の色かへず。何を賴みに松山が。こらへ袋の男山。髮も所躰もゑどけなく。寐亂姿。フシ一重帶。そつと屛風を押シ明ケて。そろ〳〵あゆむ次の間に。寐まきの留木綻びて。扇がはりのみす紙に。フシ顏の上氣や覺ぬらん。詞ホンニ浮キ世はおかしい物。ちいさい時から言イ

號ヶの。殿御にめぐり逢ッ迄は。どんな事が有ル迚も。男に肌はふれまいと。胸に封じ目心に錠。思ひ詰メし居た物が、どふした縁ンやらアノお方と、一ト口二口物いふ内。男らしい頼もしい。心の優しい人様ゑやと。思ふた跡は夢幻し。心があぢに成ッて來て。大事の誓ひも打忘スれ。つい帯解て寢てのけた。地ヲ、恥しと袖覆ふ。粋な姿のどこやらにおぼこ育の殘りしは。紅葉の枝に紅葉せぬ青葉の交る風情イにてフシ奥床しくもかはゆらし。猶地折から來る禿の重野。詞申〳〵おいらがのへ。お前のとゝ様のおつゑやるには。咄したい事が有レどきつふ隙がなさそふな。透間に是を届ケてくれと。此ふくさ包を。渡しなさつてゞこごりいす。村ヲ、かふしておきや。まそつとしてお目にかゝらふ。そなたも嘸眠からふ。用が有レばおこすによ。小座敷キに寐て居や猶地アイと返ン事も長カ廊下。いそ〳〵とフシして。あゆみ行。村詞ヲ、とゝ様のお心遣カひ。大方タおみやで有リそな物。地お志が有りがたいと押シ戴キ〳〵。ふくさほどいて中カなる手箱ゞ。蓋押シ明ケて。詞ヤア是は白ラ木の位牌と。地驚ながらいぶかしく燈かゝげ。詞ム、何々雲生院空山ン信士俗名卜部ノ七郎季武。地讀も終らず。詞ヤアスリヤ言イ號の季武様は、死ナゑやつたか。地ハツト計リに呆れスエテ果暫し詞もなかりしが。地漸に心付キ。互イの親の約束で。七つと二つの言イ號とゝ様は御浪人。所隔る侘住居。成人しての物語リに。詞そちに言イ號の男は、源氏方では誰レ有ふ。卜部ノ次官ン季國が。一人リ息子の七郎季武。何卒歸參するならば。地添せてやらふのお詞を頼みに思ふて居る内に。お前は親御の御勘ン當と。風の便リに聞しより。いぶせく思ひ暮せしに兄様

の悪心ン故、君傾城の此勤メ。お前に廻り逢ッ迄は。どんなうき目に逢迚も男に。男に肌はハア悲しや、詞わしや何ンと狼狽て。アノ客に帯解た。地ハアハツト身をスヱテ投ゲふしきへ入る計泣けるが。コレ申季武様。貞女の道を守り詰メ、お前に逢ッてあまよふと。楽しんで居た物を。みの便りもしてくれず剰、沙汰なしに死ンで仕廻といふ様な。馬鹿らしい事が有リんすか。千ン日に刈た萱が一チ日に亡ると是迄操を立テ通し今宵初メてアノ客に。どふした事やら抱れて寐て。貞女の道を背いたからは。お前に逢ッて面目ない。位牌に顔が合されぬ朱に交れば赤カいとやら。勤メの身となつた故自然と心も穢れたか。是を思へば猶更に。兄様が恨めしいと又さめ〴〵と泣けるが。詞ハアそふじや、生キて居てはまだ此上ヱに。どんなめに逢ふも知レぬ。地せめて此身を潔ふ、死ンで仕廻が言イ譯とスヱテ落ッる涙は秋の野の蒔繪の。冷泉露や櫛箱の、剃刀を取リ出し。詞わしが死だらとゝ様が。嘸お力ラも有ルまいけれど、生イて居られぬ此譯と。了簡して下さんせ。地南無あみだ佛と取直す。和ヤレ待テ娘早まるなと。飛ンで出たる親庄作。持ッたる剃刀引ッたくたば、村ノフとゝ様死ナせてたべと取リすがる。和詞ヲヽ浪人ンしてもおれも侍イ、義理にせまつて自害するを。無理には留メぬ。同じ様に死ヌる共、夫トの敵を討ッて死、村ムヽスリヤアノ。季武様を殺したやつがござんすか。和ヲヽ兼て咄して聞カした通り、此おれもなみだ氏方では、碓井の庄司貞員迚、人トに知ラれた侍イ。季武が父季國とは。分て親しき中カなる故。まだ幼少の言イ號、しかるに此貞員は。傍輩の讒に依て。滿仲公の御勘ン當、浪人の身の爲業に、思ひ付イたる

櫛商賣。せめて悴を御奉公と。思へ共あの不埒。我が夫の季武も。若氣の至り親の勘當。彼是心を痛める中。よい事は重ならず。御鏡の紛失　季國は當春切腹。其御鏡を盗んだは袴垂の保輔迚保昌が弟ながら名にふれたる大盗人。季國が切腹も。其保輔めが業なれば。親の敵を討ん迚。そちが夫季武は。再び他國したと聞たが。一昨日の暮方。六十六部がふらりと見へて。こなたの聟の季武は。袴垂保輔に。返り討に討れ。此六部が葬し戒名は此位牌、最期の詞にこなたの噂。言號の女房に。どうぞ知せて下されとの。遺言〳〵との物語。又日外から此廓へ。入込し助大盡は保輔といふ噂も有ば。實否を正し搦取。頼光様へ差上御鏡の詮義。聟の敵を討んと。心はやたけに逸れ共。年寄た此身。血氣壯んの保輔に敵對はならぬ故。最前そなたに跡先いはず。相談仕かけたも娶の事。大事の聟を殺した保輔。喰付ても本意を遂る。そなたも夫の敵を討と。村地聞て松山涙を拂ひ。詞扨はアノ助大盡は。夫の敵でござんすか。地討て亡者へ言譯といさみすゝめば。和詞アヽせいては事を仕損ぜん。隨分密に地〳〵と。和村しめし合する後より。家地始終立聞稲妻雷次。詞ヤアお頭をねらふ親子の奴原。生置ては後日の邪魔と。地だんびら引拔切かゝる。佳襖の影より宇内が早業。ひらりと刀の稲妻雷次首はフシ前にぞ落にける。和村地親子はハット驚けば。佳詞ヤア〳〵女房舅殿。季武が御意得んと。地ずつと出たる宇内が顔。和庄作は打詠め。詞ヤアこなたは一昨日の六部殿。佳ホヽ、幼少にてお目にかゝり其後御浪人。中絶たる七郎季武。御見覺は是なき筈。若氣

の至ﾀりの廓通ひ。親の勘ﾝ當詫せんと。當春宿ｸ所へ歸りしに。御鏡の紛ﾝ失故。父季國は生害。親の敵は保輔と。廻國に身を略し方々行衛を尋ﾇる所に。此廓へ入込ﾑ樣子能ｸ々聞ｹば相ｲ方の。松山といふ傾城は。此季武に云ｲ號の。こなたの娘と聞ｸよりも。合點ﾝ行ｶずと疑ふて。心ﾝ底を引ｷ見んと。死せしといひしは謀。誠有ﾙ男殿。女房が貞節。とはしらずして疑し。拙者が心の面ﾝ目なさ。地 眞平御免ﾝ下さるべしと。スヱテ 低頭平身へり下る。實も源家の補佐の臣。卜部ﾉ七郎季武とフシ 末ｯ世に其名は隱れなし。和村 地 親子は夢に夢見し心地。和詞 ヤレ／＼嬉しや。そふとは知ﾗいで今迄も。さま／＼の案じ事。マア／＼お手上られい。娘嘸嬉しかろ。我ﾚが心中が屆いた。地 天道樣に御無理はない。ア、有がたやとフシ 伏ｼ拜ｶむ。村地 松山は立ﾁ寄ｯて夫ﾄの差添拔ｷ放ﾅし。佳 自害と見ゆるを季武が。狂氣せしかともぎ取ﾚば。枕村詞 何の心が亂ﾚませふ。ぬしにめぐり逢ｯ迄は。身は穢さじと心の誓ｲ。おまへをおまへとしらずして。かはせし徒者。地 不埒なやつと思し召お心根が耻しい。佳詞 イヤ／＼始終をためせしそなたの心ﾝ底。女の吉粹貞女の操。此季武としらずして。我ﾚに心の移りしは。結ぶの神の引ｷ合せ。天の赦ﾙせる我ｶﾞ女房。未來永々女夫ぞと。村地 聞ｨて松山につこと笑ひ。ア、有ﾘがたい今のお詞。かふいふ事に成ﾘ行ｸもよく／＼深い緣ﾝで有ろ。モフ どつちへもやりやゑませぬ。物思はせた其かはりと。跡は詞もどぎまぎと胸はだく／＼氣はそゞろ。抱付ｷたふても親の前。じつと堪へる辛抱は。皮切ﾘ炙新枕思フシ ひやらるゝ計へ。佳地 季武は勇をなし。是迄ねらひし保輔を。討ｯて亡父へ手向ｹんと勢ひこんでかけ出すを。

和詞ヤレ待タれよ聟殿。悪黨一チ味の保輔に。獨身にて向カはん事。危し／＼思案シもあらん。住愚く聟殿。倶に天を戴ぬ。父の敵を一ッ時も見遁すべき法や有ルと。地又かけ出すを。村松山が。詞イヤ／＼大勢を相イ手にして。若シもの事が有ル時は　悔で返らぬ麁忽の嘲り。地得と御思案シなされよと。フシ地いさむる内に。猶淺捕手地の人シ數數十人シ。十ッ手早繩突棒差股　廊下狹しと居ならんで御加勢と呼れば　猶和村思ひ懸なく三シ人がコハ何。事と驚ロく所に。徂道具や身輕に出立ッ田舍客。妹聟へ聟引出に　些少ながら捕手の人シ數とハズミフシ呼はり出れば。村詞松山か。ヤアおまへは兄様釋迦八様と。和地聞ヵより庄司が。詞ヤア畜生めにつくいやつと。徂立チ寄ルを飛ゑさり。詞其御怒御尤　妹が身の代を博奕の元ト手と衒取。一ト間に隱れて聞居る内。地親父様の御慈悲心シ妹が孝行　骨身にこたへ一チ念シ發起　悪シ者付キ合思ひ切。詞直に妹が身の代にて衣服大小拵へて。傳てを求て賴リ光公へ御シ願ヒ申シ上しに早速に召シ出され。父が仕落は讒者の業。尋まほしく思ひし所。能クぞ名乘て出し迚。父が昔の知行を下され。忝ナくも大將の。御諱の一チ字を給り。碓井ノ荒次郎貞光と召サれ。地お傍さらずの綱公時にも肩をならぶる身の幸。是も偏に妹が孝行のかげなれば。廓を出し其上に。親父様の御シ迎と。詞田舍客の躰に見せ。此廓へ入リ込ム所に。宵よりの一チ部始終　是幸と召シ連し。家來を直に加勢の人シ數。是迄の不行跡　幾重にも御了簡シ。コリヤ／＼妹。親人トへ能様に。地御詫言申てくれと。辨舌さつぱり爽に打ッてかへたる人ト柄は。欲の鵰隼に生マれかはりしごとくにて。和村親子が悦び。住季武も

ハットフシ感ずる計り〱。和地父は勇の聲高かく。詞出かした倅れ是迄の。不行跡きは赦るしてくれると。徂詞にハ、、、ハット飛しさり。地悦ぶ貞光。住季武が。住徂名乗り合ッたる聟小舅。詞保輔めを逃さぬ様。亭座敷きを取り圍と。地捕り手の掛引き拔け目なく。二階をかけ下り。猶淺立ち向ふ。三重地裏は植込み亭座敷。追ッ取り巻ィたる捕り手の人ン數。袖遁れぬ所と保輔は。障子蹴放し拔キ刀。すつくと立ッたる後ロより。詞猶取ッたとかゝる一チ番ン手。頭はころり山椒味噌。猶淺地敵に味噌を上ヶさすなと。二人ン一度に組付クを。袖右キと左リへ頭轉倒。猶淺詞一ッ騎打チには叶ナふまい。廣庭へ追ィ出せと。地手々に得物を引ッ提て。右往左往に駈立ッる。固一チ味の末社共。俱に加勢と拔キ連レて。徂切ッてかゝるを貞光が胴切。撫切車切。逃クるをやらじと。袖三重追て行。地保輔は大わらは數多の捕り手を切りちらし。四方をにらんで立ッたる所に。住詞ト部ノ季武是に有り。天下の科人ン親の敵。生ヶ捕ッて御鏡の。詮義を遂んと立チ向へば。袖保輔も渡り合ィ。秘術をつくし。住三重揉合しが。地季武力ニや勝りけん。取て引ッ伏セ乘ッかゝり。詞袴垂保輔をト部ノ季武生ヶ捕ッたりとくゝしフシ上たる三寸繩　和徂村地貞光親子三人が手柄〳〵といさみの聲。袖天下に羽打ッ保輔も羽がいもがれし籠の鳥。村我トは遁れて松山が。直に。嫁入和舅入。住徂思ひ合たる聟小舅。和村徂いさみすゝんで。住詞繩付引ヶ。

第八道行花野の笈摺

フシはる〴〵と。歩を運ぶ足曳の。山より山の寺々に。スエテ納て通るふだらくや。キン大慈大悲の御
オクリ誓枯たる。木にも花ぞ咲てふ花咲ぬ。身の上祈るフシ為なるか。世話を逃るか慰か。人目にそれ
としらま弓　やたけ心を引かへて。笈摺姿竹の杖管の小笠の陰法師も。見なれぬ我は我が身に。相馬
六郎公連は。妻の長地棚娘の呉服跡にさがりし若黨の。環新吾と諸共に。ホンフシ都を出て四人連。
タヽキ秩父順禮山坂を。フシたどりヲクリ〳〵て行めぐる。表具月日も今は隔りし。東の空のなつかし
く。古郷へ歸る袂より。野山の錦フシはぢ紅葉。キン赤きは家の籏の手に。なびく草木もいつしかに。スエテ
歸らぬ昔忍ばしく。人こそしらね道の邊の草葉にキン置る。フシ露よりも。おかぬ心の露ふかき。思ひ
をかくす順禮歌。ありがたや。一まきならぬ。法の花。数は四萬部の。フシ寺の古。妻や娘は一筋
にかゝる。冷泉御法に。大棚と。悦ぶ程は岩本や。荒木を。フシ過ていつか又。フシかゝる所へ。こが
の堂　松有山はキン自。オクリ萬松山と名に呼ど。はらぬ時にも坂氷景色は無量林寺。西陽山の秋
の暮峯の松風。フシ調合ふ。公連弓手に指ざして。アレ〳〵向ふに見ゆる高山は。往昔日本武尊
東夷征伐ましまして。地御武具を納めしより武甲山迚いちじるき。峯に白雲白山や。久那の岩屋を
ふし拜み。是も佛の。蔭森と渡る橋立法性寺。いそぐとなしに公連夫婦山路。はるかに行過て姿
をかくす。九折。跡に殘りて娘の呉服。ノフ新吾此花を折内に。とゝ様かゝ様いつの間にやら　先
へ行過遊した。次手にアレアノ敗醤を折ってたも。はて花さへ見ればほしがりなさる。モフよしにな

されませ。詞イヱ〳〵。外ヵの花ならいらね共。地かはいらしい男良花そなたがふつとほうこ草。あり月草のはじめより。好た目元トの貌よ花。われもかふした男には。そふて見たいと。一ト筋に。なづむ心の。深見草。思ひ十寸穂の芒より。人ト目のせきをしのぶ草。口に得いはず。くよ〳〵と。胸の痞や芍薬の。つもる思ひを。あいのはな。いつの世にかは忘れ草。いつそ女夫と父母の。百合の花ぞと聞ヵならばギン嬉しからふとフシ寄リそふて。フシ面モ白ロざかり。戀ざかり道がよいやら悪いやら。我レを忘れて行先キに里の子供の聲々に。三下リ歌花が悪性か吹風が。そゝのかすのじやないかいな。たとへ吹ヵ共。何ンの其。何ンの誠の花がキンちろ〳〵。ナヲス諷ふ一トふし。めづらかに。いさむ心の足かろく。二人は跡をヲ、イ〳〵。よべばこなたも待チかねて木陰を出る二親タが。おそかりしぞと夕日さす。森のしげみの渡り鳥。とまり定めぬ。旅まくら足にまかせて。三重「たどり行

第九

地其比は。通りもフシ稀の。東マ路や。戸田の渡の川端に生茂リたる小松原。秋しり顔に咲亂す。ギン千草の花も徒に。踏荒したる非人ンの小屋。かゝる景色も歌に讀ミ。繪に畫く時キは殊更に。フシ風情有ルべき詠なり。地下タりの方からのつか〳〵髭喰そらして歩くる。いかつがましき侍ィ二人ン。跡から大勢どや〳〵と。どうぞ御免ンと口々に袖に縋つて留むれば。慮外なやつめと。杖振上ゲ。あたまをぴしやと叩

かれて。板橋の百姓共誤り入りたる折からに。地かけつて來る庄屋宅兵衛二人が前にかつつくばい。詞只今知らせで承りました。人足共が大きな僞相お腹立は御尤千萬。何事も此庄屋が年にめんじて御宥免。ヤイ／＼／＼やかましいわい我々を誰とか思ふ。忝くもあなたは左大臣高明公の御家來轟平馬殿。身は田原千晴が御内において。一騎當千と呼ばれたる早川丹下といふ者。將門が悴將軍太郎良門を詮議の爲。方々尋ぬる御用先きで。己が村で駕を云付け我々兩人乘つて出しに。人足めらが取り落しあなたもおれも腰の骨を打ち折つた。去るに依てこいつら殘らず京都迄引きずつて行。地庄屋め共にうせ上れと。切り刄廻せば百姓共口々に。詞イヱ／＼私等は落しませねど。御酒でも上てござつたか。お二人共駕の內から態お落なされましてと。地いふを庄屋が詞ア、コレ／＼僞相いふまい。何のあなた方が態とお落なさるる物で。そふいふては猶濟まない。幾重にもお詫言　イヤ聞かぬ先き程から丹下殿の申の通り。あいつらがぞんざい故大事の腰の骨打折り。一寸も動かれぬと　地ねちかゝれば百姓共。詞夫でも是迄御達者におあるきなされてゝござりますと。地いふに二人は顏見合せ。詞ム、何物じやは。當分はあるかても。土用や寒や八專には此疵が再發する。しかも卯腹辰股寅脊中か迚。方々から痛出し動かれぬ様に成る。動かれねば御用が辨せぬ　怪我をさせた其上に何の角のと詞咎。地重々につくい奴。一々首をならべんと。兩人一度に反打かけ權威をつし見せてきめ付れば。地百姓共は震ひ出し。庄屋様。能い様に御訴訟なされて下さりませと。頼めば點く古狸。下腹

にも鬢先にも。毛のない天窓掻ながら。丹下が袖をそつさ引キ。フシ傍へに寄ッてひそ〳〵聲。詞ケ様に申さば猶お腹でござりませふかも存ジじませねど。正眞の膝共談合申さば本ンの珍事ちうやう。其所は御了簡下さりまして。是から蕨宿迄の間。町駕に召シて下さりませ。其駕代三百づゝあなた方へ差上ケますさ。地懐から取リ出すッ庄屋が智惠の長カ短生鐵錢交りフシ二三が六百。地丹下ほく〳〵打點き詞ム、コリヤ尤な云ィ分ン。扨々我レは才覺者。赦しにくい所なれ共庄屋が智惠の有ルが珍らしい。ナント平馬殿いかゞ致さふ。サレバ慈悲は上ミからさ申せば赦ルしてやるが能ッござらふ。去リながら我レ々が權威にてゆすつた様に思はれては濟マぬ。ナニ庄屋此方無理は申さぬぞ。何が扨〳〵　將軍ン太郎を御詮ン議のお役人ン様が。御無理おつしろ様がない。譬御無理おつしやつてもおまへ様の御無理は御尤さ承ります。ム、夫レなれば赦るしてこます。併二人ンへ三百づゝコリヤ三々さいふ數が惡い。もちつさ智惠を出して見ろ。ハア是は御尤な様の御尤。そんなら四百　イヤ我レ々は眞言宗で物忌い四の字は嫌ひ。然らば五百上ケませふ。イヤ〳〵ごねる共いふから五の字にも油斷がならぬ。そんならいつそ思ひ切ッてすさんさ六百づゝ上ケませふ。ヤこいつおいらを品川の女郎かさ思ふか。よい赦ルしにくい奴ッ等なれど庄屋が志シにめんじて赦してくれるさ。地いふにフシ皆々安堵の思ひ。地然ラばお暇庄屋様いかいお世話。人ン足に出て叩かれた其賃が壹貫二百。身の油を絞られたさつぶやき〳〵立歸れば　二人ンも連ノ者にフシ歩行。地草深き田舎道では一しほに。美しいのは美しく目立ッ姿の旅合羽　相馬ノ六郎

公ン連が一人リ娘呉服の前。伴はれたる母上や秩父順禮打仕舞二人リの親に驅拔ケてオクリ先キへ。歩むも詠ミ歌。譯有ル中の若黨新吾。首に風呂敷キフシわいがけて。詞申シ々呉服レ様。めつたに道をお急イなされて。足が痛いとおつしやりますな。少トお休なされませ。ノフ新吾とゝ様の御立願が有ル迠ッ京都からはる〴〵と思ひ立ッた秩父順禮。來がけは木曾路。是からは江戸とやらいふ所へ出て東海道を歸る迠、毎イ日〴〵連レ立ッてもとゝ様かゝ様御一ッ所故、地しみ〴〵と咄ナしもならず。ちつと云イたい事も有リ、お二人のお出チない内爰で咄そじや有ルまいか。ア、しんどやと草原にフシ腰打かくれば、詞ア、申シそれ〴〵そこに毛蟲が。地ヲ、こはやを塩にして抱キ付ケば。詞ハテめつそうな爰は往還。アノ非人ン小屋から覗いております。夫レ計か親旦那奥様がアレ〴〵あそこへ御ン出と。地いふ間程なく六郎公連ッ、妻の柵諸共に。同じ出立チの杖草鞋夫レと見るより。詞ヲ、娘思ひの外達ッ者なはい。かゝは結句道下手でおれが厄害。サイノ。そなたは新吾と二人連で閙しそふにあるきやる。旦那殿は達ッ者くおれ計リ埒明カぬ。アイそんなら駕に召シませいで。イヤ〳〵是から江戸へも近いげな。道々の風景そろ〳〵あるくも慰さ。地心置キなき親と子の咄しにフシうさや忘スるらん。地公連は傍に指差、詞此川が荒川迠。彼業平中將の。いざ事問ん都鳥と詠せられし隅田川の川上ミ。此川を向カふへ渡り板橋から江戸へは近カい。何ニ新吾。其方は親子の者を伴ひ。江戸の入リ口。巣鴨といふ在所に待チ合せよ。地おれは少用事有レば跡から行カふ。此海道は馬士共の悪ルい所。隨分ンと氣を付ケよとつど〳〵にフシ云渡せば。

詞ハア然らばお二人様のお供申私はお先へ 地そんならわらはゝ新吾を連てアイとゝ様お早ふこ
三人打連別れ行。地公連跡を打詠め。そこら見廻し打點きとある小蔭にフシ立忍ぶ。地跡は往來も
とだへして。フシ松吹風に。虫の聲。つゞれさせてふ裸虫。身は簑虫の菰かぶり。酒樽提てとつばかは
立歸る小屋の前。詞お頭今戻りました。酒も肴も買つて來ましたと。地いふ聲聞て立出る仲間の小
頭ばつたの權。詞ヲヽすべたの八歸つた。ヲイノ云付つた酒肴コレ四百が鮪ねぎ十把。油の樣な酒
五升。此小屋初つてない圖な買物。お頭の身祝ひとやらじや迚仰山な奢り樣。おごる乞食久しから
ずじや。ムヽ我はまだお頭の祝ひの譯知まい。けふは下手を呼寄せて。御即位をなされるわい。ヤ
何だそくいだ。そく位に酒肴は入まい。おれがめんつに飯が有つい押てやるべい。ハヽヽ飯糊
の事ではないわい。けふは日柄が能故にお頭が天子に成。位に卽を御卽位とやらいふげな。夫で手
下を呼寄せて。皆公家にする筈。差詰小頭のおれは關白。我も何なと位を望めと 地聞てすべたが
詞ハヽヽコリヤ臍が茶を涌すわい。いかに新しい事を思ひ付たい迚。乞食が天子に成とはどら燒
が小判に化る同前。そしてわいらやおらゝがお公家樣か。此形でがハヽヽコリヤ面黑い。こんな
お公家が唐にもあろか。地とんだ茶釜が藥鑵じやと腹筋よつてフシ笑ふ折から。地同じ仲間の四人
連。フシ手々に藁苞菰包。小屋の前に居並んで。詞お目出度の御祝義に皆連立て來やした。お頭は
天子我々は公家に成。身祝ひの献上物取次で下あれと。地こて／＼明る藁苞は寸志計の御祝義

を申ス詞の鹽鰯。鰯の頭お頭を信仰したる一チの筆。付ケ木に記す消炭にこつぱの松とフシ書付、たり次キへ出るは蛙の市。反古に包糟百目。詞 糟といふ名の目出度さは。かるよりも先ツ。借がよし。地 敵を負すたぶらかす天下の耳を驚かす。前表也とフシ差出す。地 手長カの長がぶら〳〵と。提て出たる干鮭は。ウタヒ 君が千歳を壽て。志賀からさけの一トつ松。地 いけぬ地口も時キの興 焔魔の六が上ケ物にねりま大根の淺漬は、日本ン一チのかうの者と一寸祝してフシ蹲る 地 すべたの八も劣じと持ッて出たる菰包。内は何ぞと唐なす二つ、されば浮ヒ世の譬にも菜虫が變じて蝶と成リ。嫁が變じて姑と成ル、それは扱置、此度には。乞食のお頭天子と成ル。地 道理でかぼちやが唐なすと祝ひ、納てフシ差置ケば。地 ばつたは時、の關ン白職一チ々に見改メ。詞 ホ、いづれも念ンの入ッたる貢。此旨奏問致しなば。地 定て龍顏うるはしからん。詞 最早出御に間も有ルまい。何ッれも裝束改メられ然カるべう候と、地 詞の內に我レがちと、暖簾の破蚊屋の切。スクリ 或は、萬才カ、リとぶ紙莚七と、つゝり合せし袍直垂。地 すべたも俄の思ひ付、茄子の冠傾けて。摺子木の笏とやにかまへ。ばつたの關ン白始メとして。こつぱの大臣ン手長カの中將。諸卿殘らず參ン內とこそかつ。べらしく襟かき撫ヲクリ威義を正して待チ居たる。地 暫ラく有ッて小屋の內より非人ンの頭坂東太郎。ゆるぎ出たる大男。どてら布子の垢付キて。髭ぼう〳〵たる顏ン色も。一ト曲有ル其骨柄。小高カき岸根にフシむんづと座し。地 緩々と打詠め。詞 ホ、何レも約を違へず過分ン、〳〵。我レも裝束改ん。地 ソレ〳〵と詞の下。ばつたの關白差心得。小屋の內より恭敷ク。捧げ出たる

柳骨籠。蓋を開いて取リ出すは。傍もかゝやく金ン巾子の冠。衮龍の御衣、手早に粧ひ。フシ威儀を改メて詞ハア時成ルかな今ン月今ン日。此裝束を着し。天ン子の位に即事。大イ望成統の其基。地ハ、、、快や悦ばしやと。いふ聲自然に威有ッて猛く。手下タの面ン々一チ同に。ハツト頭を地に付ケて。御即位の御祝義。お目出たふ存ジ奉ると敬ひ。傅くフシ計く。詞ホ、今日の此催し。何レも怪しく思はんが。父將門の志シを。請繼だる某ンなれば。片時も忘ヘれぬ心の大願ン。當今をぼつ下し。十善ンの大床に座んと。心はやたけに逸れども。源氏に世を狹られ。有ルに甲斐なき日影の某シ。天地廣しといへ共。身を容るに所なく。地乞食非人の此境界。せめては父の修羅道の。迷ひを晴さん其爲に。詞相馬の内裏に準へて。心計リの此催し。去リながら。即位といふも名計リにて。地南殿の高御座の。茵にあらぬ此草原。色々の鉾。日ッ月ッの幢に擬ふ物もなく。譜代相傳の汝ジ等迄。干鮭鰯の献上物。關ン八州に威を震はし平親王將門トが一ッ子。將軍太郎良門共有ラふ身が。此有リ樣は何事ぞ。父が讓の此裝束。冠の手前も面ン目なやと。或はいかり或は憂へ。鏡の樣なる兩眼に。はら〳〵と流るゝ涙。雹をふらすがごとくにて哀にも。フシ又凄しき。地ばつたの權進出。詞ハアお心弱き御述懷。斯由ス某は父權頭興世より。此權太郎久サ世迄。三代相恩の御主人ン。附キ隨ふ人ト々も。皆御譜代の家の子郎等。地必死と定め戰はゞ。やはか本ン意を遂ざらんや。詞兼て是なる人ト々と。調じ合せし方便有リ。軍サ評定然カるべしと。地申ス詞に笑を含。詞ホ、、、面モ白し〳〵。人や咎ん夫レ〳〵と。地互ヒに裝束フシかなぐり捨。地是より元トの

乞食の出合ィ。詞 權よ。松よ。皆の者どら云ィ合せ。一天ン四海の手の内を。地 貰ふ方便はいかに〳〵。ハット計りにこつぱの松。蛙の市が立上カり。されば候我レ々兩人。關ン八州を駈廻り地理を計カつて小屋拵へ。兵粮運送手配に。心春駒春袋。乞食袋にゑつかと納め。博奕の元ト手用意せん。然ラば手長カと此焔魔は。奥州に立チ越て。一チ味の世話を厄拂ひ。詞 アヽラ目出たや。旦那の御壽命申さふなら。鶴は千年ン龜は萬年ン。東北朔が齢にかたどり。其勢九千ン騎一チ萬騎。諸國一チ度に蜂起せばいかなる敵も時キの間に西の海へさらり。地 さつさと追ちらさん。ホヽばつたとすべたは是よりも。伊豫の國へ押ン渡り純友が喰殘りの。お餘り共を貰ため。東西より立チ挾み。付な〳〵とおつゑやる樣な御仁躰ではごんざりませぬ。天子の位ィを御報謝に下ダありませいと責メ掛ん。ヲヽ潔よし心地よし、時刻移さず早急げ。ハヽハットいふ間もなく。六人三つに立別れ。フシ 勢込ンんでぞかけり行。地 始終とつくと見すまして立チ出る六郎公連。坂ン東太郎はさあら躰。詞 下ありませ〳〵と。地 いふをつく〴〵と打まもり。遙下つて兩手をつき。詞 若君樣へ申上ケます。御父將門ト公に仕カへし六郎公連。是迄さま〴〵お行ァ衛を尋捜せし甲斐有ッて。御機嫌の躰拜し奉ッり。恐悦至極此上ェなしと。地 いふ顔ゑろりきよろりが味噌 詞 ハヽヽ変なお侍ィは。晝ル中カに夢を見て。起ュて居て寐言いはつゑやる、ヤ我ト等も小屋で一ト寐りと、地 入ラらんとするを。詞 ハア暫ラく〳〵。一チ應にては御ン明カしなきも御尤。相違なき其證據。地 御覽に入レんと包ミ取出し押シ開き。是こそはお家の御籏。詞 是を證據に御明カし下さるべしと。

地渡せばさつくさ打詠め、詞ホヽ外に類なき繋馬の籏。此籏を所持するからは。ムヽ扨は六郎公連な
公連なればいふ事有。サア近ふ〳〵。地ハツト答へて立寄を。籏振上て丁〳〵。はつしと打
すへ聲あらゝげ。詞己我家の一族といひ。重恩の身を以て。父將門最期の節。潔く討死はせで。
源氏へ降し不所存者。どの面さげて。良門に對面せんと願ふぞ。比輿未練の不忠者と。地以ての
外の憤り、公連は少も痿ず。詞先君討死の砌。君漸當歳の嬰子。敵へ降りし公連が。志は御存な
き筈。又此時宜に至り。まだ〳〵云譯立たり共。御承引はよもあらじ。地只今是にて腹かつさば
き。二心なき魂を御目にかけんと座をかため。差添に手をかくれば。詞ヤレ待て公連疑ひ晴た。今よ
り元の主従ぞと。地聞て遙に飛しさり。扨は御疑ひ散ぜしか。地ハヽヽ有難し忝なしと。フシ踊上
つて悦べば。地良門重て。詞父將門最後の砌譜代の家來は皆討死。我は乳母が介抱にて。此世に
殘る甲斐もなく。かく成下る運の末。地夏は照日に。身をこがし。冬は寒氣も漸と。防ぎ兼たる小
屋住居。雪をなめ。氷をかみ。飢かつを凌ぐ艱難も。せめて一度旗上し。詞未來の父へ手向んと。
思ふに付て其方が。存命有と聞し故。床しく思ひ。フシ暮せしぞや。詞最前名乘て出し時。飛立程
に思ひしかど。木にも萱にも心置。良門が心の僻。地我を尋て遙々の。辛苦もいとはぬ其方が。忠
臣を疑ふて打擲したる麁忽の段。こらへてくれよと計にて。厚き涙に公連は。コハ勿躰なき御詞
詞所隔つと云ながら。申さば纔日本の内。捜し當らぬ不調法。地是迄憂目に逢給ふも。皆公連が誤

り。未來にまします父君の。我を恨給ふらん。何を申スもかく迄に。傾く運の恨めしやと主從顏を見合せて。拳を握り齒を喰しめ涙肌骨を絞りしが。地 公連は目を押ぬぐひ 詞 君此所に在事誰カいふと
なく世上の取汰沙。最前より此木陰に窺しも右の譯。我レしれば人トも知ル 此地に長カ居は然カるべからず。地 都へ御供仕り謀反の臍を堅むべし。ホヽ兎もかくもと主從が。フシ 立上る折こそ有レ 地 轟平馬早川丹下。土手の陰より顯はれ出。詞 委細の樣子皆聞イた。お尋ネの將軍太郎公連共に遁すなと。地 一ト度に拔て切てかゝるをかいくゞり。腕首捻上ヤ双方一ト度に首、ふつつと捻切ッて跡をくらまし三重

第十

歌 二上り 八重霞。君が粧ひ。思へば幾重。花が負たさいふたが無理か。露にくだけて濡るは袖よ。琴の音色も奧深き。東山の片邊り所に目立ッ一ト構へ。本フシ 庭に古木の苔むして巖を疊む泉水に筧の水も住馴し。相馬ノ六郎公ン連が旅の歸りの身祝に。菊の節句を取リ交て。奧口共にどや／＼と。家内賑ひさゞめけり。地 追イ々出る婢共。詞 サア／＼お客樣の是へお出と。地 手ン々に。お菓子。莨盆。銚子の盃取リ々に。運ぶフシ 菌の綾錦。地 非人ンの姿引キかへて立チ出る將軍ン太郎。悠々と座に着ば。公ン連が女房柵娘の吳ト服諸共に。次キの一ト間にフシ 手をつかへ。地 ほんに盡せぬ御縁ン迚ふしぎにお目にかゝりしも。神ミ佛ケのお引キ合せと。夫トが悅び私シ等迄。此上もなき身の冥加去リながら。昔シにかはり有ルに甲斐

なき此住居。何かに付て御不自由ながら御世にお出遊ばす迄は暫の御隱レ家。萬ン事お心置キのない様
に。詞ノフ娘。アイ／＼いつ迄も御機嫌よふ。御逗留遊して下さりませと。地 他事なき親子が饗に。
詞ム、等閑ならぬ心遣カひ過分／＼。父將門トに別レてより。孤の良門。非人ンと成ッてさまよひしを不
思議にも廻クり逢かく尊敬せらるゝは。昔シを忘れぬ公連が忠義。此上の一チ大事。頼ミに思ふは汝等計、
地よきに計ラひ得させよと互ヒの心打明ケて フシ隔ぬ奥の一ト間より。立チ出る主ジの公ン連。夫レと見るより
頭を下。詞ハ、ア我カ君是に御ン渡り。ナニ女房娘。爰は端近人ト目も有リ。奥座敷キへお供申せ。幸けふは
菊の節句。不調法な娘が琴をお肴に。一献召シ上られて下さりませ。ソレ／＼奥へと 地氣を配ル。主ジ
が指圖に良門トは。女房娘に傅れフシ奥を。さして歩み行。地 折から表へ立歸る 此家の若カ黨環新吾。
夫レと見るより。詞ホ、早かりし新吾。館の首尾は何ンと／＼。さん候頼光様の御館にて。御書翰を差
上ケし所。御首尾宜敷と相ィ見へ。追付ヶ上使の御ン出なされるとの。御事なりと地聞ィて六郎打點き 詞ム、
よし／＼。上使の來るには間も有ラふ。身は一間にて休息せん。其方は何かの用意。萬ン事麁抹のない
様にと。地 云ィ捨フシ一ト間に入にける。地 新吾はそこら取リ片付ヶ菊の一ト本龍膽。ちよとあしらふ 投入レ
も。水際のフシ立ッ男ぶり。地 忍ぶれど。フシ色に出にけり戀人の。歸り待ッ間もとけしなく。呉レ服はそ
つと忍び足菊の 英 襟筋へ。戀の手裏劔ひいやりに。新吾は。ハット振リ返り。詞 誰かと思へば呉服
様。ゑい加減に轉業なされませ。お前の心がつめたい故。此菊迄がつめたふて。愕リしたと 地仕かけ

ゑ口舌。詞ヲヽわしが心がつめたいか。そなたの心がつめたいか。つめたい競せふわいの。そなたは昨日婢の梢が楊枝指に。歌を書ィてやりやつたげなの。ナントよふゑつて居よふが。ハテめつそうな三五郎では有ルまいし。誰レが私に楊枝指。ヲヽあのゑらゞしい顔わいの。地證據を見せふと懐より。取リ出すを引ッたくり。逃んとするを引キとゞめ。詞マアいやらしいこの戀歌そなたの手に違ヒはない。サアどふした譯で書ィてやりやつた。有リやうにいはさにや置カぬと。地戀のいろはもいつの間に思ひうゞべくの。悋氣に師匠はいらざりし。地新吾は態と持タせぶり。詞アノモノデござります若黨風情の私と。御主人シのお娘御とは。下駄と燒味噌提灯に釣鐘。釣リ合ハぬ色事。知レたれば首が宿がへあぶない事は止にして。破鍋にとぢ蓋。お婢が相應。おまへと御縁シも是切リと。地いはれてくはつとせき上し詞ソリヤ餘シりじや胴慾ゑや戀に上下の隔はない。地忍ぶと思へど穂に顯はれ此中もかゝ樣が詞獨娘の事なれば。聟はそなたの望次第。定メて好た人トが有ラふ。譬若黨小者でも大事ないとのお詞は。粹なかゝ樣戀ゑりと心で拜んで居たわいな。わゑや家來とは。思やせぬ殿御と思ふて居る物を難面の心胴欲と娘心の一ト筋に。涙の雨や振リ袖の縫の小男鹿聲立ッて倶にフシ妻乞風情なり。詞ハテめつそうな。夫レ程思ふて下さる物。私に何シの如在が有ラふ。今のはほんのじやうだん。ムヽスリヤ心は替ハらぬか。何シのかはつてたまる物か。夫レが定なら嬉しいと。地手を取レば引キ寄セて互ィにひしといだき付離れがたなく久サかたの。天の岩戸を闇にして。枕のフシほしき計なり。地折ふし表に聲高く。

詞 上使のお入リと告るにぞ。地 二人はハツト飛退て。心を殘す瞼に笑をこぼして フシ 別レ行。地 かくと知ラせに一ト間より。館の主ジ六郎公連衣服改め出向カふ。程もあらせすづつか〳〵。入來る上使は坂田公時。儲の席にフシ打通り。詞 上使の趣餘の義ならず。當春主君賴光。禁庭にて申渡されし將軍ン太郎良門ト。貴殿ン東マより欺寄セ。かくまひ置クとの言ン上。請取リ來タれよとの命イに依て。公時が向カふたり。又兼て約束の將門が舊地。下總一ツ國クの御教書は。科人ンと引キ替。サア良門はいづくに居る。引ツく〳〵つて歸らんと。地 立ツを暫しと押しとゞめ。詞 ハア委細は先キ程家來をもつて申シ上し通リ。將軍太郎良門ト義坂ン東太郎と改名し。武州戸田の渡シ場に。非人ンと成ツて居たりしを。すかし寄セてかくまい置。去リながら若あら立テ取リ逊さば互イの越度。けふの節句の壽を幸イ。酒を強させ置イたれば。だますに手なし搦捕てお渡し申さん。暫ラくお扣へ下されい。ム、是は尤。然カらば是にて待チ申さん。地 早く〳〵とさせり立テられ。ハツとフシ計リに立ツて行。地 公時は傍を見廻し。そよと吹ク風物音トに。心を付クれば一ト間の內。いとも優しき爪琴の。歌二上リ比翼連理の。かたらひも。替ハればかはる世のならひ。去リ迚は。恨ましや昔シは情。有リしを。地 公時は佛頂面。詞 じれつたい琴三味線。踏込ンで搦んと。地 立寄ル一ト間さはがしく。ばつたばたつく物音トに。女の泣聲とゞむる聲。扨てこそと見る中に。將軍太郎に繩をかけ。引ッ立出る公連が。袂にすがる女房娘。取ツて突退にらみ付上使の前に謹で。詞 將軍太郎良門ト。御請取リ下さるべし。ヲ、天晴〳〵出來た〳〵。約ク束の通リ。下モ總一ツ國の御教書と。地 渡

せば取ッて押シ戴き。歡の眉。怒の眉。良門トは齒がみをなし。詞セエ主を賣ル人ン非人ン。蹴殺してくれんずと。地立チ寄ルをどこへ〱。詞公時が請取ルからは。貧乏ゆるぎもさせはせぬ。御亭主さらばハア此上迚も御前ン宜しく。ヲ、呑込んだ合點ンさ。地繩付宙に引立て。飛がごとくにフシ立チ歸る。地ノフコレ待ッてと追ッかくる。妻子を取て引キ戻せば。涙ながらに女房は。夫トの傍に立寄ッて。詞申我夫ッお前は天魔が見入レしか。三代相恩のお主樣に繩かけて。渡すとは。よもや本ン性ではござんすまい。神ミの祟りか亂ン心か。コレとつくりと氣をしづめ。本ン心ンに成ッてたべと。地すがれば娘もおろ〱涙。見る目いぶせき縛り繩。お心根がおいとしい。どふぞ良門樣を取返す。御思案ンなされて下さりませと眞ン身の詞公連は。耳にもかけずあざ笑ひ。ハ、、女の少い心から。跡先キきしらぬ忠義だて天下を望む良門が。肩を持ッは身の破滅。主の爲に命を捨ッるなんどは。ソリヤ五百年ンも昔シの了簡其上エ親の將門トは。關ン八州を隨へてさへいけない大望。めんつの食の貰溜。喰ひたらぬ痩腹へ一ト天下を呑マんとは。蛞蝓が足駄履て。富士の山へ登るも同前ン。及ばぬ事と知リつゝも。一チ味するは大だわけ。遲かれとかれ助スからぬ良門。手にかけて搦たは。主從のよしみだけ。謀反人ンのお蔭で。下モ總一國の主になるけふからは國家の大名。出ッ世を樂しむ老のいりまい。直クに下國の旅用意。此樣に世話やくも。そち達チがかはいさ。是から奧樣お姫樣。今迄とは違ふ悦べ〱と。地けんもほろゝに云イちらしッゝ奧をさして入にける。地跡に親子は顔見合せ呆れ果て居たりしが。詞ノフコレ娘。日比に似ぬ

比興なお詞。お呵請ヶても大事ない。倶々お諫申てくりや。サア〳〵こちへと打連て。地主ジの心ゑら張のオクリ障子引立テ入にけり。地思ひもよらず恩賞に給はる國に趣んと。旅の調度を認る。内の騒にいとゞ猶。秋の日脚の傾きて。フシやゝ時移る計りなり。地蓮葉のフシ濁に濟ぬ心より。露の玉の緒きゆる共。何か惜ん貞女の操。夫トの悪事諫メ兼。長地我カ身の覺悟柵はゑほ〳〵と立チ出て。一ト間の方に打向カひ。いはんとすれどせぐりフシ來る涙に。むせび居たりしが。地思ひ直して合掌しッ天ン道様。佛ッ神ン様。諫の爲に身を捨ッる。心を不便と思すなら。夫トの悪ク心ン翻し。善ン心ンになして給はれと身を投ケ。ふして泣ゑづむ。フシ同じ歎キに。跡や先。何ンと思案に呉服の前。詞かゝ様地申シと立ち出れば。母は涙をフシ押シ隱し。詞ヲヽ娘。そなたはどこに居やつたぞ。アイ。とゝ様にさま〴〵と御異見ン申上ヶましてもお聞入レない故に。新吾にいふて貰ふと。頼んで見てもいつかな事同じ様にすげない返ン事　そして旅立チを嬉しそふにとゝ様とひそ〳〵咄し頼に思ふた新吾迄が良門ト様を訴人ンした悪相談の腰押シ。地どふでお心は直ヲるまいと。悲しうて〳〵いつそ死たふござりますと。いふ顔つれ〴〵打守り。詞ヲヽそなたと新吾が譯有ル事もとくより知ッて居るけれど。地夫レ程好た男ならどふなりと仕様もあろ。殊に氣立テちも能者と今の今迄思ふて居たに。悪ル相談ンの腰押スとは。見限り果た悪人ン。詞コレ娘。いか程御異見ン申シても。お聞レない故に思ひ切ッておりや死ヌる。地死だ跡でとゝ様に。とつくと御異見申てたも。詞イヱ〳〵わたしも覺悟極めております。ムヽそなたも死にやる心か。ヘヱ聞へま

せぬ我夫。地道ならぬ悪心故自計かたつた一人の娘迄。殺す様な無得心。詞そなたも因果。おまへも因果。地いかなる過去の報ぞと親子手に手を取合て。聲も得立ぬ。忍び泣し断せめて哀なり。地迚もいふても返らぬ事。詞娘。母様地と互いに懐劔抜放し咽にがばと突立て。わつと玉ぎる聲に驚き立出る公連が。コハ早まりし生害と抱起せば。苦しげに。詞早まりしとは曲がない。昔が今に至る迄悪人も多けれど。お主を訴人し搦捕。天命ゑらぬ悪逆が又と世に有べきか。地剰其褒美に、貰ふた國はお主の御領地。古郷へ錦着餝つて。國入りを仕たり共。心有人々は。詞主を賣人でなし、犬侍の女房娘と。地後指さゝれても我身の耻は忍ぶが。相馬の家の一門家老公連と呼れては。唐の倭の書に通じ。文武を兼し武士と世に謳はれしおまへが。敵に降其上にお主を搦し悪人と。末世の記録に記されて耻を子孫に殘すといふ。それ程の事辨へぬおまへではなけれ共　年寄ば氣力も衰へ妻子の愛に引されて。わたしら故に悪念發り。御主人に憂目を見せ。おまへに悪名取らせては。天の咎も恐しく。何とながらへ居られふぞ。詞夫故親子云合せ、死で仕舞へば榮花もいらず。二人が回向追善には。頼光様へ御願申。良門様を取返し。御代に地立て下さりませと。母がくどけば諸共に。申とゝ様。地おまへを善人に仕たい計で自害して死まする。娘不便と思すなら本心になつて給はれと。手疵も厭はず取すがれば、公連は目をゑばたゝき。詞ハア驚き入たる二、人が心底、汝等が冥途の土産にいで／＼見する物有と。地ずんと立て一間なる襖さつと押ひらけ

ばコハいかに。若ヵ黨新吾が其出立チ。金巾子の冠。袞龍の御衣。假に粧ふ天子の装束。手負は惱り公連は遙。フシ末ッ座に飛えさり。詞ホ、不審は尤。是こそ平親王將門ト公の御ン忘れ筐。將軍ン太郎良門公にてましますぞ。ホ、驚きは尤。我ヵ内に御かくまひ申せし一ト通り物語らんコリヤッ地苦しく共聞ィてくれ。詞相馬の家の御先祖は。忝ナくも人ン皇五十代の帝。桓武天皇第二の王子。葛原の親王と申シ奉ッるは。聰明叡智にましませば。太子に立タせ給ふべきを。繼母弘徽殿の讒に依て。下總の國へ御左迁。空しき月日立ッ内に。御兄弟の宮々は平城嵯峨淳和帝と引キ續ての御位譲り。地ヱ、いかなれば親ン王一人ン。鄙の住居のいぶせきに。世を憤り果給ふ。御臨終の御砌。詞子孫天ン子とならずんば。我レは宙宇に迷はんと御遺言は。有リながら。詞御ン子高望の王より。良將公二代の間は勢ひ微にして力ラ足ずこ將門ト公に至て關ン八州を切リ靡こ。手に立ッ者も有ラざれば。先ン祖の御無念ン晴さんと思ひ立ッたるフシ謀反の企。詞自平親ン王と尊號し。相馬の内裏の其結構。地四方に十二の門ンを建。紫宸清涼溫明日花。鳳の甍虹の梁。大臣ン納言ン八座七辨フシ文ン武の官。詞まだ當歳の此若ヵ君を。將軍太郎と名付ヶ勢ひ天下に隱レなければ。地スハ御ン大事と都より。討ッ手の大將六孫王經基。秀郷貞盛始ノとして。諸國クの軍ン勢雲霞のごとく。もみにもふで責れ共。味方の兵事共せず火花をちらし戰へば。勝負もさらに。付カざりしが。思ひ出すもヱ、口惜や。俵藤太が射かくる矢。將門ト公の米嚙にかつきと忽遠近の味方の軍ン勢騒立チ。すべき様なき亂れ軍サ。將門公は急所の深手。某シを近くめされ。詞其方。我レに成リかはり。

悴將軍ン太郎を守リ立。先ン祖の恨晴してくれよと。地是を最期の御詞。終にはかなく。フシ成リ給ふ御遺言を守らんと。詞若君を乳母に抱せ密に落し奉ッり。我レは源ン家へ降參し。此所へ引キ越て。乳母を貢て若君の人トとならせ給ひてより我カ內へ引キ取リて。若カ黨環新吾と名乘ラせ。汝ジらにさへ深カく隱し。晝は家來。夜は御主人シ。地密々軍ン學武藝の御指南。南國の殘黨かたらひて。謀反の臍を堅むる所に。詞當春參內の折リから。左大臣高明ラ田原ノ千晴に云イ立テられ。とやかくと爭ふ內賴光の計ヒ。將軍太郎を搦出せとのつ引キさせぬ云イ付ケ。是幸ヒに東マへ下タり。猶も一チ味を招かんと。秩父順ン禮に身を略し。妻子を連レしも一ト方便。そこ爰とへめぐる內。武州戶田の渡シ場にて將軍太郎と名乘ル非人シ。シャこいつ。我カ君の御名を衒。世を欺く盜賊地天のあたへと謀リ寄せ。賴光へ渡せし故。下モ總一國ク下に入ルからは。片時も早く古鄕へ歸り。軍ン勢催促旗上ケの時節到來ハア有リがたしと。心の悅び去リながら。詞私シならぬお家の機密。そち達チにも深く包露程も知ラさぬ故此時宜に及びしは。地お主の爲と諦めて了簡し成佛せよと。初メて明カす物語。手負はフシ呆るゝ計ん。地良門は立チ寄リて。是迄の志シ親にも增る夫婦の大恩。取リ分て吳服が深切。禮は詞につくされず不便の次第いたはしやと。涙の早瀨柵は。ア、有リがたいお詞。深カい方便と氣も付カず女の淺い心から。恨いふたが恥しい。詞夫レ計リか是迄は。新吾〳〵と澤山そふに勿躰ない御赦されてフシ下さりませ。詞ノフ吳レ服。花やかなお姿、そなたは嘸嬉しかろ母も嬉しい〳〵と地いふもせつなき息キづかひ。娘は漸目をひらき。今のお咄し

聞クに付ケ。嬉しいは山々なれど。是からはお主様なりやモフ未來では添れまいと。夫レが悲しい〱と歎ば父はこたへ兼。詞コリヤヤイ娘。日比の譯も知ッて居れど。御宮仕へと思ふから態見ぬふり。ゑらぬふり。夫婦は二世。主從三世といふからは。お主也。夫ト〻。五世も七世も。まだ其上ヱも添イとげてくれいやいと。地鬼を欺く公連も子故の闇に取亂し。涙の限り泣つくすは目もフシ當テ。られぬ次第なり。地今はの手負は嬉しげに。につこ笑ふが暇乞。刀を拔ケば一ッ時にあへなく息キはたへ果たり。主從死骸に取リ付て前ン後。ふかくに泣けるが。地公連は氣を取リ直し。詞迚も泣イても返らぬ事。御教書が手に入ルからは本ン國に立歸り。一チ味をかたらひ籏上ケせん。君は我レに先キ立チて大津の方迄立チ退給へ地我レは死骸を片付ケて跡より追付キ奉らん。早く。〱といさめられ手早に。フシ裝束取リ納め。詞然カらばお旦那お先キへ參るヲ、いそげ〱。地ハツト諸へて一ッさんにフシ表をさして走リ行フシ跡見送りてゑほ〱と。せめて妻子の亡骸を取リ納んとフシ立チ寄ル所に遙に聞コゆる責太鼓。亂調に打立〱さも物すごき其有リ樣。地公連ハツト肝に徹し。詞ア、ラ不思義や。かく太イ平の世の中カに。責太鼓の聞コゆるは合點行カずと地庭に飛おり。築山の小高カき巖にかけ上カり。四方を急度見て有レば。此家を取リ卷諸軍ン勢。鎧の金ナ物きらめき渡り。いろ〱の籏差物へんぽんと吹キ靡け。フシ關をどつとぞ上ケにける。地公連巖を飛ンでおり。詞アラ夥しの軍勢や。扨は謀叛事顯はれ討ッ手向カふと覺へたり。何にもせよ御主人ンの御ン身の上が氣遣ひと。地かけ出んとするフシ所に一ト間の内より高聲に　詞ヤア〱公連

暫ラく待テ。頼光の御内四天王の其一人リ渡邊ノ源次綱見ン参ンやつと呼はつて。地 道具カヽリ素袍の袂爽に。立チ出る坂ン東太郎。公連は二度悔クり 詞 ヤアおこがましき非人ンめが出立チ。己レ先キ達て將軍太郎と僞り。今又渡邊ノ綱と名乘ル重々胡亂の紛れ者。そこ動くなとはつたとにらめば。地 渡邊かんらハヽヽからと打笑ひ。詞 唐土東海に靑衛といふ鳥有リ。芥を含んで浪に入レ。海を塡んと計る由己レが身の芥を去らず。四海を塡まんとの企は。鳥に等しき六郎公連。汝僞つて源ン家へ降レ將軍ン太郎を守立テ謀叛の與力ヽをかたらふ事。頼光得より御存シなれ共何程の事有ラんと。見赦し給ふ寛仁大度。然カに當春禁庭にて。佞人共の申シ條聞キ捨られぬ公の御沙汰。將軍太郎を搦出さば。將門が舊地給はらんと有リしは。汝が内にかくまひ置ク。良門が身の上を有様に申シ上ケなば。能キに計ひ得させんと情をこめし御ン詞の謎。汝愚にして悟り得ず。東マ下タりの企シヤ事おかしや。我レは武州箕田に育。東國クの案ン内能知ル上。汝ジと面會せざるを幸ヒ。先キ々へ廻つて落し穴。謀の裏をかゝんと譜代の家來と云イ合せ。釋迦でも喰す仕組の狂言。此内へ入リ込しは先キ達ッて紛失せし。内イ侍所の詮ン義の手懸り。案ンに違はず其方が。肌身を放さず所持なす事とつくりと見屆たり。遁れぬ所尋常に御鏡を渡せ 地〳〵と四相を悟る詞の鎹。須彌の四州に擬へし四天王の隨一チとフシ呼バれしも實 理なり。地 公連は氣を込テ上ゲ。眼血ばしり髮逆立チ、獅子奮迅の怒の大聲。詞 ヒヱかく迄計リし大イ望見出されしか口惜や。いかにも内イ侍所の御鏡は當春北野の社にて。千晴が手より奪取ッて某シが所持なせ共。おめ〳〵と渡さふや。よし本ン意を達せず

ば御鏡を打碎き。大六天ンの魔王と成ッて。日ッ本を魔界となさん血祭は渡邊。サア〳〵。勝負と 地詰メ寄せ〳〵双方武勇隱レなき。萬夫不當の英雄豪傑。既にかうよと見へたる所に。間近カく聞コゆる轡の音ト。馬上ゆゝ敷キ賴光公。詞ヤア〳〵兩人ン爭ひ無用。公連に見する物有リソレ公時。地ハツトいらへの聲より早く將軍太郎を宙に引ッ立サア公連。詞御鏡を渡さねば公ン時が荒療治。良門トを一トゑぐりなんと 地〳〵と氷の刄胸先キに突キ付クれば。遉の公連氣も散亂どつかと座して無念泣。大將優美の御ン聲にて。詞彼蒯徹が詞に。我レは韓信を知ッて陛下を知ルにあらずとは皆それ〴〵の主君ンへ忠義。地今公連が企も天下の爲には逆心ながら。相馬の家に仕カへては。妻子を捨。身を忘スれ命惜ぬ大忠臣。強是を罪しなば世に忠臣は絶果ん。詞御鏡を差上ケて今より心を改メなば。良門が罪を赦し一ッケの庄園を申シ下タさんいかに〳〵と 地仁ン義の詞。公連はたまり兼。差添拔イて腹に突キ込ミ。きり〳〵と引キ廻し。苦しき息キをほつとつき。詞善ンにもせよ惡クにもせよ。思ひ立ッたる一チ念變ぜぬが武士の意地。甲が砂利に成ル迚も。仕課せんと思ひしが。大將の仁心ンには。春ル日に向カふ氷のごとく心の劒ギも。フシとけしぞや。地叛逆謀叛の惡人ンを。相馬の家に仕カへては。妻子を捨身を忘スれ。命惜ぬ忠臣ンとは。有リがたし共忝し共。申シ上べき詞もなく。詞死ンだ妻子が草葉の蔭で。嘸悦びおるでござりませふ。〳〵。地惡に染たる此腸。くり出すが。罪亡し。此上の御情良門が身の上を偏に賴ミ奉る。詞コレ渡邊殿。坂田殿、御前ン宜しく御取リ成。コレ。首にかけたる此御鏡。大將へ捧げてたべと。地詞の下タより渡邊が御

鏡を守奉り、大將へ捧れば。ホ、神妙〳〵。紛失せし御鏡は、將軍太郎が働きにて千晴が手より奪取、差上しと申上賴光宜に取計ひ。陸奥の國にて所領をあたへ。相馬の名字を繼すべし、又將門が叛逆は先祖へ對し孝行の、其謂有なれば。武州江戸に靈地を見立。神田大明神と崇。年々祭禮怠るまじと、仰は今に傳りて源氏の御代を守りの御神。靈驗四方に隱なし。公連は苦痛も忘只。ハア、、、ハツト計伏拜ば、良門は頭を地に付。重々の御厚恩何と御禮申べき、是といふも公連が厚き忠義のなす所。長き別れの暇乞と立寄を振はらひ、ア、寄まい〳〵、我は天下の科人なれば、世上の見せしめ是見よと、刀を首に押當てゑい〳〵〳〵と掻落し。どうと倒れし勇士の鑑、妻や娘は日の本の、貞女の鑑と御落涙、せめて親子が亡骸を能に葬得させよと。御大將の仁德に、源氏の威光十寸鏡、內侍所の御鏡は再び。歸る雲の上、龍に翅の綱公時、倶に力を合せ鏡と良門が勇詞の、はし高や、野守の鏡水鏡、神田の社の御正躰、神と鏡の言の葉や古跡の鑑末の世に武名を長くてらしける

第十一

神は人の敬ふに依て威を增とかや。平親王の靈を祭り。神田大明神と尊號し。今日祭禮の催し、と、攝津守源賴光朝臣。祭の仕出し練物を御上覽有べしと、御棧敷を掛渡し中央に座し給へば、

近習扈從の若侍威義を正して伺候有。地 頼光仰出さるゝは。詞 我下總任國の序。將門が靈を慰ん爲祭禮を催し。近郷の者共に神諫申付たり。用意いかにと御錠の下。地 ソレ〳〵と呼次にオクリ ぞ追々。出る祭りの役人。地 どん〳〵〳〵の太鼓の音。道を清むる幣帛に。道具ヤ 榊神馬を始として吹貫小旗出し練物諫皷の鷄も驚ず。江戸眞猿目出度末廣がり。武藏野の月。フシ 松梅櫻牡丹に獅子や コハリ 大象も。花を餝てさま〴〵の。碁磐人形所作踊フシ めざまし。かりける見物々。地 大將御機嫌斜ならず輿に入らせ給ふ折から。唐人仕立の一群が。冠装束かなぐれば。皆一樣の小手脚當先に進むは田原の千晴。詞 ヤア〳〵頼光。けふの祭の虚を窺。かく計りし上からは。袋の鼠籠の鳥。覺悟ひろげと呼て。地 御棧敷を追取卷。スハ御大事と見へたる所に。傍に立つたる大象の。四足の内より綱公時。季武貞光。四天王。顯はれ出て無二無三。數多の軍勢人礫。叶はぬ赦せと千晴主從迯るをやらじと三重「追て行。地 かゝる所へ藤原仲光。左大臣に繩をかけ。息を切て引立來り。詞 仲光君の命に任せ御後を堅むる所に。左大臣高明惡黨原をかたらひ。切てかゝるを皆殺し。謀叛の張本左大臣。生捕て候と。地 申詞も終らぬ所へ。千晴を搦て一同に。立歸る四天王。頼光怡悦在して。詞 けふの祭りを幸に。謀叛の奴原搦んと。弶をかけしと知ざる兩人。地 都へ引て兎も角も勅定に任すべし。惡人退治吉例の祭禮なれば。末世末代怠るまじと。殘る方なき御詞。神德益々神田の社。氏子繁昌長久の。恩澤盡せぬ源氏。天下泰平五穀成就千秋萬歳。萬

々歳動ぬ。御代こそ。目出度けれ

安永三年

甲午正月十二日

福内鬼外戯作

右之本頌句音節墨譜等令加筆候
師若鍼弟子如縷目吾儕所傳泝先師
之源幸甚

名代　結城孫三郎
座本　吉田專藏
後見　竹本むら太夫

江戸書肆

本石町三町目
山崎金兵衛梓

忠臣伊呂波實記

續十一段役割

第壹
端 豊竹杉太夫

第二
口 豊竹浅太夫
切 豊竹志摩太夫

第三
口 豊竹氏太夫
切 豊竹折太夫

第四
豊竹伊勢太夫

第五
口 豊竹万儀太夫
切 豊竹志摩太夫

第六
口 豊竹久太夫
奥 豊竹但太夫

第七
口 豊竹役太夫
中 豊竹折太夫
切 豊竹今宮太夫

第八
乃竹じ 豊竹伊勢太夫
豊竹杉太夫

第九
惣太夫掛合

第十
口 豊竹伊勢太夫
切 豊竹但太夫

第十一
豊竹[illegible]太夫

千秋万歳楽

忠臣伊呂波實記

座本　豐本東治

第一

序詞歳寒して然後。松栢の後に凋ことを知。されば君子治世に在ては。或は小人と異なし。惟利害に臨。事變に遇て。忠臣節義見るゝ。例を爰に日の本のヲロシへ治りなびく。君が代や。比は康永元年三月二日。足利將軍源の尊氏公。握る四海の御ン片腕。關八州の管領。御舍弟足利左兵衛督直義公。美麗を盡す鎌倉御所。大廣間に出給へば。執事高武藏守師直。威勢にほこる奸佞邪智。伯州の城主塩冶判官高定。仁義を守る優美の相。其外ヵ在鎌倉の大小名威儀を。正して相詰れば。師直が郎等大須賀團八宗門。塩冶の家來久松牛ン六時重。遙末座に扣へ居る。直義公仰出さるゝは。例年の通り年始の嘉儀として。近々勅使下向に付キ。饗應の一チ件は塩冶判ン官に申シ付ク。其旨兼て心得よと。仰にハツト頭をさげ。詞ハア身不肖の判ン官。勅ク使御馳走の大役。仰を蒙り奉ッる事。冥加に叶ナふ仕合せ去リながら。元來不才の判官なれば。公家堂上の饗應其故實を知ラざれば。近ヵ比以ッて覺束なく候と。卑下の詞の圖に乘ッて。横から差出る大須賀團八。詞イヤコレ判官樣。假初ならぬ雲の上人ト。禮儀作法を御存ジなく。ふつゝかな御取リ扱ひ有ル時は。將軍の御恥辱に成ル事。左樣の故實は主人シ師直よつく心得罷有ル。篤と御稽古なされよと。主の威光を鼻に懸。人トを見下す高慢を。堪へ兼て久サ松牛六進

出。詞ヤア團八。人もなげなる故實呼り。主人がおとなしく御謙退なさるれば。御存ないと思ふが淺はか。文武に達する主人判官。夫式の事何の稽古。汝どきが知る事ならずすつこんでお居やれと。やり込ればこらへぬ團八。詞ヤアお爲を存て云と聞すを。いやなれば否で濟。武士に向つて慮外の雜言。今一言ゆつて見よ手は見せぬと。切刄廻せば詞ハ、、、こけおどしの刄物ざんまい。汝どきのへろ〳〵武士に。輙く切るゝ半六ならず。サア拔勝負と双方がつのめ立てせり合ふを。師直塩冶聲を掛。詞ヤ尾籠也しづまれやつと。主の詞に兩人は。無念を堪扣へ居る。判官師直に打向ひ。詞家來めが麁忽無禮御前は固。師直公の思召恐れ入る。いかにも團八申の通り。御馳走の役目は私ならぬ公の大禮。万に一つも間違ひ有ては相濟ず。師直公には御老功。斯樣の事に馴給へば万端宜しく御差圖下さるべしと。慇懃に述給へば。詞コレ〳〵痛入た御挨拶。今列國の諸候の內。文武の達人と呼れ給ふ判官殿。師直なんどが差圖とは。おこがましし去りながら。物には得失得手不得手も有り內の事。身に應じたる事有は何に寄ず御相談。詞夫に付明々後日拙者弟師泰が別莊の。咲かゝる初櫻御覽に入奉らんと。直義公へ申上しに。御入有べきこと有がたき上意。何と貴公も。御苦勞ながら御出有て。御取持下されまいか。コレハ〳〵。君御入來ましますに付、御取持仰付られ下されんとは。冥加に余る仕合せ。頓々參つて灑掃の御手傳夫は近比忝い。然らば彌明々後日と。示し合する折からに。鶴が岡の神主大伴豐前。何か怪敷一品を、

携て御前に出。詞是こそは鶴が岡八幡宮の。本社の軒に掛置たる蜂房。今朝社壇へ上りし所。此蜂房の上へ。外ゟ大蟬のごとき山蜂一つ飛來る。房の中ゟは小蜂數多飛出て。暫時が間戰ひしが。多勢に一つの彼山蜂。終に殺され地に落たり。暫く有て空中ゟ。鞠のごとき一塊りさもすさまじく鳴渡る。詞あはやと見る内彼塊り碎散ば。數千の山蜂飛散て。此蜂房を取り圍聲をなす事雷のごとし。小蜂は殘らず房を出て。互に四方に群散して。列を分ち陣をつらね。上を下へと喰合ふ事二時計に及びしが。詞終に山蜂勝利を得小蜂を殘らずたいらげて。凱哥のごとく鳴り渡り空中に飛去ったり。詞奇怪の事に候故言上仕りしと。申上れば君を始。一座の人々一同に奇異の。思ひをなしにけり。師直はせゝら笑ひ。詞都て巫神子山伏祈禱料をせしめんと。さしてもなき事にても仰山そふに云立。物の知せ前表なんど。觸あるくはまゝ有ならひ。何のたわいもない事と。いひほぐせば塩冶判官。詞ハイヤ夫は憚りながら一概の御詞。王元之が蜂記に。蜂王迚蜂の中に王有り。衆の蜂毒有共彼王には毒もなく。多くの蜂房を作る時。別に一ツの臺をなして王を居しめ。王の子は悉く王と成って。年毎に其族を分つ。詞王死すれば衆の蜂。一つも殘らす潰死す。若王を殺すもの有ば必其仇を報ふ。節義を守ると兼てより。承りしが目の當り。見しと聞しは始なり。ハテ扨不思議千万と。互の評議身の上と。しらぬが佛神主も。お暇申立出る。直義公は奥御殿。しづ〳〵と入御成給へば。各ハット退出の袖を連る鎌倉山。萠は物に顯はれて。敵を討し蟲の名もいろ

はのはの字。ちりぬるのちの字の讀も清濁。はぢを恥共思はねば。切ラるゝ事は夢にだにしらぬ師直工有ル。塩ン冶の家の忠臣ン義士。末世の手本ン假名文字の。動ぬ御代こそ大三重「久サしけれ

第二

歌今も昔シも。そこもあそこも戀の里。サヨヱ。ヱスリヨ。テイキンリヨ〳〵。スイヤ〳〵。昔シ男も奈良の都も色勝りサヨヱ、ヱスリヨ。テイキンリヨ〳〵。スイヤ〳〵。梅は咲ねど鶯の。折リ々通ふ心いき。そふじやさいナ。花の盛はちら。ちら〳〵ちりくる我ヵ思ひ。眞實そふじやさいナ　それじや夫レかさ夕間暮。詞ホ、、、ほんにマアつがもない。けふは師泰様の此お屋敷キへ直義様お入リ遊ばす。今様を御覧に入レよさ殿様の御意で奥女中は固。御家中の娘御達を呼ヒ出して此間〻俄の稽古。女鳴神はお吉チ様。劔ゑぼしはおみね様。此玉章は今様亂拍子。若菜殿さ青柳殿の白雲黒雲の役は下地が有ルで苦勞はない。わたしは今ン度が初メて故モ大イ抵案ンじる事ではない。イヱ〳〵奥様のお慰。此青柳を始メお狂言ンの度ヒ々に。稽古してさへいつでもろくな役は付ヶぬに。玉章様は初ッ舞臺の大役やらず遁さず一チ事が万ン事。驚ロき入ッた御器用さ譽そやされて顔赤らめ。詞イ、ヱイナ習ふより馴るさやら。皆様は不斷の事、御存ジの通リ私が兄ニ速水一學殿は物堅い生れ付キ。琴を彈ても組計リで端哥や流行哥は彈な、家老を勤る一學が妹が。はすはなさいはれては一ッ家中の示しが聞ヵぬ。芝居も度ヒ々は見るなさ夫レ

は〱堅い云付ヶ。夫レ故ふりもろくに覺へずほんのあてじまいにして置ク計リ。まだ稽古もかたまらねど御客のお入リに間も有ルまい。是切リにしてお出を待タふじやござんせぬか。ほんに夫レがよかろぞへ。けふのお客直義様は御器量よし。こちらもわつさり目の正月と跡は打付ヶ色咄し。媚き渡る折からに。立チ出る高ノ師直。跡に從ふ越後ノ守師泰。昵近藥師寺次郎左ヱ門引キ連レて立チ出れば。玉章始メ女中達ハツト敬ひ手を突ヶは。師直心地よげに打點き。詞ホヽどれ〱も精が出るよ。兼て老女共を以て云付ヶた通リ今ン日直義公此別莊へ御入リ。男の給仕は堅くろしい故女計リの御饗應。コリヤ〱玉章そちは一學が妹程有ッて哥の道香茶の湯。万ン事心掛ヶが能イと聞ク。けふの御馳走の司役。何に寄ラず直義公の御意遊ばす事は。隨分と背ぬ様にナソレ御機嫌取レ。若シもお目に留マれば仕合せといふ物。ナント師泰そふでないか。ハア御意の通リ。女は氏なふして玉の輿隨イ分ンと氣を付ヶよと。顔に似合ハぬほや〱は爪を隱してのら猫の牡丹に遊ふも斯やらん。かゝる折リしも表ゟ息キをはかりに立チ歸る遠見の役人ン。程なく二番ン手三番ン手。最早あれへと注進に。師直兄弟藥師寺諸共表の方タに出向カへば。足利左兵衞ノ督直義公。お供廻りは表テに殘し。歩路も結句お慰。跡に隨ふ塩ン冶判官高カ定。ゑつ〱と入リ給ひ。夫レと見るより直義公。詞ホヽ定メて何か心遣カひ過分ン〱との給へば。ハア冥加に余マる仕合せと。師直兄弟地に鼻付クれば。判官も差寄ッて。詞今ン日はお成リの所天ン氣宜しく恐悦至極。万ン事嘸御取リ込。コレハ〱塩冶殿能クぞ御ン入忝ナしと。互ヒの挨拶事終り案ン内に連レて入給へば。御馳走掛りの女中達チ上

を下へと立騷。奥は御酒宴今樣の。鼓の調へ太鼓の音。三線胡弓取々に暫く時をぞ移しける、いとゞ興有。饗應に。御酒の機嫌も直義公。一間の方に出給へば。跡に隨ふ數多の女中。詞コリヤ〱女共直義が酔醒し庭の氣色を見るが樂しみ。そふ大勢が付て來ては。氣が詰つて興がさめる。用が有ば呼ぶ次へ〱と上意にハット女中達皆ばら〱と立て行。圍の間ゟ玉章が。濃茶の手元しとやかに。君を見る目のどこやらに。色と情を熊川の茶碗を御手に直義公。快氣上られ。詞ム、器量がよければ服加減迄格別〱。師直兄弟が馳走ぶり。大勢の女共の內勝れたる艶色。外の女は氣に入ぬ故殘らず次へ追やつてそなたの來るを待て居た。所へ君が濃茶とは結ぶの神の挽茶の加減と手を取て寄添給へば嬉しさも又。恥しくそゞろふるふて跡じさり。詞有がたいお詞去りながら。私ら風情が勿躰ない赦させ給へと袖覆ふ。靨の渦に魂を吸込るゝ心地にて。直義公は心も空昔用明天皇は。草刈山路の略し事。戀に上下の隔はないと。じつと引寄せしめ給へば。こなたも固渡りに舟。惚たほの字の帆をおろす。戀の湊や圍の內手を引。合ふて入給ふ夢や人目を忍ぶらん。表の方ゟ聲高く。詞塩冶判官高定樣ゟお使者也と呼次げば。師直が長臣早水一學春親出向へば。入來る使者は塩冶の家の子片岡傳吾高久。進物の白臺を。所せく迄ならべさせ。互におれそれ上下の。折目正しく手をつかへ。詞今日は直義公御入遊ばさるゝに付。主人判官御取持仰付られ下さる段。其身は勿論一家中此上もなき歡び。別して近々勅使御下向御馳走の役目承

りの主人ン判官。此上共師直公万ン事宜しく御差圖希奉ッる。是は近カ比些少ながら。今ン日主人ン此所
へ參ン上の土産の印シ。目錄の通り。宜しく御披露下さるべしと相イ述れば。一ッ學もしとやかに 詞 是は
〳〵御念ン入たるお使者と申。御懇志の御ン賜。此旨主人ンへ申聞ケんと一ト間へこそは入にける。跡には
使者を饗應の。御菓子よお茶よ芬盆。手都合殘る方もなし。程もあらせず高ノ師直。逸水藥師寺引キ連
て立出ッれば傳吾はハツト飛しさり恐れ入ッたる計なり。師直緩々と打詠め。詞 塩冶殿の御使者大義
〳〵。一ト間へと申さんがお客にて甚取り込。扨又御念ンの入ッた御音物ツ。近カ比以て痛入。猶委しくは
お直ヤにお禮申さん。ナニ一ッ學爰は手狹。表の物見で饗應〳〵。ハア御懇命を蒙り冥加至極。此上共
主人ンの身の上。万事御前の御ン差圖。何が扨〳〵。當時若カ手の英雄。師直が方タからお頼申。ハア重
〳〵有りがたき御意の趣。何ン分ンにも宜しく賴ミ奉ッる。イザお暇と立チ上れば 詞 ソレ一學敷キ臺迄送れ〳〵
ハア夫レには決してイヤサお出と謙退辭讓。使者を見送クる一學は。玄關さして行ク跡に。機嫌極上
師直が。お髭の塵取ル次郎左ヱ門。 詞 扨々若カけれ共諸事に氣の付塩冶殿。殊更思ひ切ッた此進ン物。黃
金ン百枚。縮緬五十卷ン。主が主なりや使者に來た。傳吾迄が人品骨柄。イヤモ格別違ふた仕こなしと
譽そやすれば師直は大口明ィてから〳〵と笑ひ。 詞 蟹は甲に似せて穴を堀ルと。黃金卷物の音物ッを嬉
しがる根性の。師直と思ふか。弟師泰スと心を合せ。尊氏公をぽつ下しッ。天下を一ト呑ミと思へ共。東國
には石堂が一チ族。中國には仁木左京ノ介。分ケて心がゝりは塩冶判ン官大身ンなる一チ門多く。文ン武を兼

し強者。めつたに籏は上られずと。いろ〱と工夫を廻グらし。直義公を此別莊に招き入レ。酒色を以ッて心を蕩し。そろ〱と馬鹿者に仕立テ。謀反を勸め尊氏公と兄弟軍サを始メさせ。其虚に乘ッて討ッて出んと思ひ立テ。幸ヒ塩冶を取リ持チにと。今ン日此所へ招キきしも。味方に付クか付カざるかと心を引キ見る所。念ンの入ッた此進ン物は我レに心を寄スると見へたり。夫故の我カ悦びと。聞イて我を折次郎左ヱ門、詞ハア驚キ入たる御方便。直義公もすつぱりと。玉章が落穴に落入ッたれば。是から立テふと伏セふと儘。旨い〱と點く所へ。立出ッる逸水一ッ擧。白ラ木の折リを目通リに直し置キ。詞仰付られし御饗應の御ン菓子。御内覽と差出せば。次郎左ヱ門にじり寄リ。蓋をひらけばなま〱敷キ女の切リ首。さしも不敵の師直も。悔りしながら打詠め。詞ヤアコリヤ玉章が首。誰レが切ッた誰カ討ッたと。藥師寺諸共驚けば。一擧は色も變せず。詞今日の御ン賓直義公へ不義働き。天下騷亂の根ざしと成女故。妹とて用捨ならず。此一擧が手に掛ケて首討ッたり。コレ殿。何が不足で謀反を企。君に敵對のみならず、酒色クを以ッて直義公を馬鹿者に仕立テ。御兄弟の御中カを裂んとは。取ル所もなき惡逆無道。天魔が見入レ候か、欲と惡クとに御ン目もくらみ塩ン冶をたらし。御味方に付ケんとの御計ラひ、事おかしや。仁ン義を守る判官殿。甲が舍利に成ル迚も。惡ク事に合躰有べきや。詰マる所は責一人。御ン身の難ン義遠かるまじ。是なる藥師寺を始メ。お傍に諂ふ愚蒙の佞人。御前ン能イ儘惡事の腰押シ。御家を亡す惡魔外道。假令いか程に思召ス共、此一擧が目の黑ロい内はいつかな〱思ひも寄ラずと。齒に絹着せぬ諫の詞。懸河の辯舌逸水が忠義。凉

しくも又潔よし。師直は不興げに。物をもいはず立上り。行んとするをどつこへどこへ。詞悪心を翻へし。思ひ止るといふ御一言。承らぬ其内は。御主人でも此座は立せぬ。動せぬと。過言申も御前が大切。お家長久繁昌を。思ふての御諫言。憎しと思召ならば此一學。命は惜ぬ。切なりと突なりと。御存分に遊ばされ。悪事を思ひ止つてたべと。忠義の涙はら／＼。○く所を師直が。無法の刃抜討に。肩先ずつぱと切込しが。詞ヱヽ眞二つにと思ひしに。仕損せし残念と。又切付るを引ぱつし。刀の鍔元しつかと取り。詞チヱヽ見さげ果たる御所存。幼少から御氣質を。存て諫る一學命惜んで申されふか。死なら死と御意有ば。忠臣の腸を切裂て。佞人共の生面へ。ぶち付てお目にかけんに。欺し討とは比興千万。三度諫て退くとは。唐人のまだるき了簡。善にもせよ悪にもせよ。お家譜代の此一學。御恩に育つた體なれば。まさかの時は死る分と。我身の覺悟は武士の本心。不便なは妹玉章。詞ひよんな道具に遣はれて。助置れぬ時宜故に。お主の悪事を諫る種。命をくれよと頼しに。流石一學が妹程有て。悪びれもせず首差のべて。討れたる今はの際の一言。父母もなき此身なれば。外に心は残らね共直義様の。お顔が只一目。見て死たいといふたる時の。可愛さ不便さ男女の情を辨へしらぬ一學ではなけれ共。ナお主の爲には替られずと。たつた一人の妹を首討た其時の心。コリヤどの様に有ふと思ふぞやい。そなたの首が御主人へ忠義の種と云聞した。詞も今では反古に成り。御用ひなければ兄弟共。犬死するも厭はねど。段々

の惡事が募。主人のお家滅亡せん。夫が悲しい。殘念な。コレ殿。思し止まり給はれと。又取付を振放しひらりと見へし刀の下　首はどつさり此世の暇　殘念限りなかりけり。師直はぶつてう面詞エ、ひよんな奴めが邪魔をして。お客の御馳走怠つたり。ソレ次郎左ヱ門見苦しき其死骸。取り捨させよ。畏つて立折から。直義公御立と。知する間もなくしづ〳〵と。塩冶師泰召連て立出給へば。師直は動轉閉口。直義公は何氣なく。御饗應の御挨拶。判官もしとやかに。詞御念の入たる御饗應　君にも殊ない御滿悦。拙者においても忝く。御禮中〻言語には述がたし。ハア今暫くと存せし所　早々の御歸館殘念至極と。師泰倶々はいもうを。さあらぬ躰に立出給へば。藥師寺が先拂ひ。兄弟お跡に付添て御門に送り奉る。奥ゟ出る青柳若菜。詞ほんにマアどふした事か思ひの外早いお立。そしてマアさつきにから合點の行ぬ館の樣子と見る目先の死骸に恂り。詞ヲヽこはコリヤ一學樣。玉章樣のお首。どふして殺されさしやんした。サレハイノ。何ぞ御意に背いてお手討に合なさつたか。アヽおいとしや假令仕落が有にもせよ。結構なお二人樣。モアノ殿樣の手荒いには。表も奥も皆難義と。二人が評議最中に立歸る師直兄弟。夫と見るゟ走り寄。双方一度に二人が首。水もたまらず討落し。詞コリヤ〳〵次郎左ヱ門。外に見付た奴等はないか。兄弟の奴等が死ざま。露顯しては事の破れと。いふに師泰サレバ〳〵。詞今日は夜に入迄御慰と存の外俄のお立。察る所此躰を塩冶めが悟り知。お立を急しと覺へたりと。聞て師直歯がみをなし。詞ヘエ

役にも立タぬがらくためらにかゝつて。大切ッの密事をけどられ。工んだ事も皆むだ事ニヱ、憎や腹立チやと。皆も死骸も蹴飛しく〵。詞 一學めがいつしごく仁義立テする判官め。所詮味方に付カぬと見へて。今日の座敷キを立チ破りしは憎い奴ツ。よしく〵追付ケ勅使御馳走の折から。しくじらせて目に物見せん。ヲ實尤と師泰藥師寺。惡ッ事の腰押ス天の邪鬼座敷を。蹴立テて三重「音數

第三

勅使大納言藤原資方卿。鎌倉に着せ給ひ。御對顔事終り御馳走のお能を初め。諸事事故なく相イ調ひ。けふぞ彌生中カの四日。御白ロ書院において。勅答の式行るべしと。御用掛りの御役人ン。夜明ケぬ内より登城有ル武家の。行粧花々し。御饗應の承ハり塩冶判官高カ定。供廻りを下乘に殘し登城の裝束爽に。近ン習の役は大星力彌。跡に隨ひ行キ過ケる。何とかしけん見越の松が枝一ト枝折レて判官の。額の上ヱに落かゝるを。ぬからぬ早足身のひらき。落ッるを見屆ケ梢を詠め。詞 ハア風も吹カぬに此松が枝已レと折レて落たるはム、、、と首傾け。思ひ有リげな御ン顏ばせ。聰明力彌が差寄ッて。詞 松は常盤の色かへず。千代の例の若緑。目出度ヾ驗に候と。祝し申せば打笑ミ給ひ。詞 千歳經此松の枝。葉榮へて天地の惠を請ケる若緑リも。折レての末はいかならん。老少不定の世の中カと。しほ〳〵として入給ふ後チにぞ思ひ合せたり。程もあらせず入來るは高ノ武藏ノ守師直。人トを翅の下タに見る大紋ンの袖立テ烏帽子。是

も家來を殘し置昵近藥師寺次郎左ヱ門。大順賀團八引連て人なき折を幸と。詞コリヤ〳〵兩人塩冶めを味方に付んとあつたらむだ骨一學めが異見立故謀反の次第。けどられたりと覺ゆれば。判官めを仕舞ぬ内は夜は寢られず。今日の勅使の御馳走役を間違はせ。仕くじらせてくれんずと底工みして置たり。隨分ぬかるな〳〵と。示し合して急ぎ行。御門前には供廻り。馬竹輿沓籠鋏箱侍中間入亂れ何のわかちもなき中へ。いそいで舁來る女乘物。小陰におろし戸をひらき。内方出る襠の。縫も目に立當世の屋敷模樣のはで姿あたる旭に雪の膚。解もやすべき其風情。向ふの方用有げに。うろ〳〵見廻す紺の大なし。互に近寄顏と顏。詞ヤアそちは妹お元でないか。ヤア兄樣元助樣不思議な所でお目にかゝつた。お前もわたしも傳吾樣の御家來ながら。親旦那樣のお世話にて私は。奧樣かほよ樣へ御見出しのお直の奉公。段々出世の此身分。同じ屋敷に有ながら奧と長屋と隔たれば。お目にかゝるは久しぶり。詞おせき樣はお替りないかへ。コリヤ妹。けふは旦那のお供先。そんな事聞て居る隙がない。ソシテそなたはどふして爰へ。サイナ奧樣から殿樣へ申上る急御用。そなた急いて跡から往てお側の衆迄申上よ。畏つたと乘物を急せて參つたれと。殿樣にはモフ御登城。どふぞ近習衆へちよつとお目にかゝりたい。ムヽおれも急の旦那のお供でたつた今爰へ來たれば。けふのお供番のお側衆はとなたかろくに覺へぬが。よい〳〵おらが旦那傳吾樣へ其譯を申上ふ。そこらに待よと云捨ていきせきとして。走り行。お元は心いそ〳〵と。戀し床しの傳吾

様。爰でお目にかゝるとは結ぶの神の引合せと。つぶやく折から片岡傳吾。奥方の急の御使。何事やらんと心せき。夫と見るより。詞ホヽ味な所へお元殿。お出の様子元助に承つた。奥様の御用は何事。承はらんと挨拶に。お元はハツト手をもち〳〵。詞お前の御譜代元助が妹のわたし。奥様へ御奉公。かういふ身分に成つたもお蔭。やつぱり前の様に元よどふせい。かふせいと。おつしやつて下されず。物慇懃なで氣後れし。思ふ事が口へ出ぬ。お前の事をうか〳〵と。暫しも忘れかた糸の夜晝分ぬ物思ひ。兼ゞのわたしが願ひ。叶へてやいのも口の内氣は通つてもとこやらが。通らぬぞ猶奥床し。詞ハテ扨埒もない。奥様の御使御用の筋は何とでござる。サイナ奥様の御意遊ばすは。此間は打續て夢見の悪さ取分今朝の烏鳴。殊に殿様お館をお出の時。にこやかには遊ばしてもどふやら済ぬお心持。思ひ廻せば氣にかゝる。夫故所々へ御祈禱もいひ付しが。分て御身の慎が第一と。兼々聞ば随分と。お慎遊ばす様。そなた跡から追付て。お側の衆迄申上よとのお差圖。お前に申せば猶慥此趣を殿様へ。ヲヽ委細畏り奉ると奥様へ申上られよ。我も殿へ其事を申上んと來つたり。サア〳〵早くといひ捨て御門内へと行過る影見ゆる迄見送つて。漸と乗乗物の　簾を上て目は跡に體は先へ六尺共足を　三重早めて立歸る　御玄關には諸士の往來。人なき透間。奥よりも。出給ふ塩冶判官。用有げに傍を見廻し。詞判官が家來は居ぬか。塩冶が家來と呼給ふ　御聲聞て片岡傳吾御用いかにと立出れば。判官見給ひ。詞供番ならぬ其方何故に來りしぞ。ハア傳吾めが

來る事僚の儀ならず。今ン朝御登城の御ン出かけ。いつもの躰にて御ン出有リしが　何とやらん其意得ざる御顏色　御樣子心元トなく御跡ゟ參りし所。只今奥かほよ樣ゟもお側の女中をお使イとして、此間御夢見烏鳴も宜しからず。お顏持チも勝れねば　何ぞお心の濟マぬ事有リ共　隨分　御堪忍遊さる樣。御異見申上よとの御使　思ひ内に有レば色外カに顯るゝ。女中のお目にさへ其通リ　詞傳吾めが存スるは。此度ヒの御大役に付キ。何か思召シに叶ハぬ事を堪忍び給ふと見へたり。釋迦に心經恐レ入候へ共少しく忍ばざれば大謀を亂る譬。いケ樣の事有リ共堪忍の二字を守り詰メ御愼の程肝要に存シ奉りなと。諫の詞身にこたへハツト思へどさあらぬ躰イ。詞ハ、、、發明な樣でも流石は女。大イそふ成ル奥が案ンじ。夢は五臟の煩ひ。烏は空を飛あるき一人ンの爲に鳴ざれは。是以ッて當テにならず。又顏色ロの惡ルきは此間勅使ゟ下されし御哥の返ン哥。雲の上ヱ人トに笑はれまいと毎夜夜を寐ず案ジせし故。定メて色も惡かりつらん。其方迄が同樣に役にも立タぬ物案じ。べつしてもない事大イそふらしく人トが聞ば笑ひ種早く歸れ。コレハ又國家老由良ノ助方へ内用有て竹輿の内にて認め、只今一ト間で封じたり。隨分ン急キの飛脚にて。國元トへ遣カはすべしと投ゲ出し給ひ早く歸れと。何氣なき詞に傳吾も少シは安堵。然カらばお暇　詞此御狀は。飛脚を仕立テ五日半ンにて伯州迄。遣ハすべしと心を殘し立歸る。主從一ッ世の名殘共しらぬ別レぞ是非もなき。判官跡を打ながめ。奥へ入ラんとし給ふ所へ。立チ出る藥師寺次郎左ヱ門。詞中ン判官樣。、先キ程ゟ御目附ケ中のお尋テ御前ニゟ急キの御召シ。御座の間迄早く〳〵。ハツト答へて判官は御座の間さし

て急キ行。師直が工にて諸事の手都合延ちゞめ。一チ度にせまる御用の品々。判官殿塩冶殿と呼立ッる。諸役人左こそあらめと師直薬師寺。人トの仕落を松の間に。ほくそづいて居る所へ。立チ出給ふ塩冶判官師直聲掛ケて詞ヤ判官殿。勅使御馳走の御用を捨さつきからどれへござつた。ハア御前ンの御用とござつた故たつた今お次キへ。ハ、、、勅使御馳走の取リ込は御上ミにも能ク御存。何ンで貴殿ンを召ス物ぞイヤ其取次キは則御家來次郎左ヱ門。ヤコレ判官様めつそうな。御前ンの御用有ルかないを陪臣の此薬師寺。どふして存ぜふ様がない。ヲ、然らば先キ程御目附ケ中のお尋チ御前ンの御用。御座の間迄早申た詞忘スれしか。イヤ〳〵左様な事此薬師寺申シたる覺なし。誓文くつされ闇の夜に金チ拾ふ法も有レ曾て覺ヘ御座なくれと。ひやうまづいたる詞のはし〴〵扱はきやつらが云ヒ合せ。我レに恥辱をあたへんず。工みと心で心を納め。詞なければ師直が。詞コリヤ〳〵薬師寺。構ふな〳〵。仕付ケぬ大イ役氣がのぼし亂心したと覺へたり。其様なうてんつで大事の御用勤まらねば此通り申シ上。今ン日の御用は外カへふり替。其過怠には押込メ隱居。じたいいけもせぬざまをして。口比から賢人立は畑水練巨燵兵法。是式の御用さへ勤らぬたわけ者。見かけ計リで内證は氣ぬけ大名張ぬき武士。正眞の猿が人ト眞似。大イ切ッのけふの御用間違つてもきよろりくはん。蛙の面に水かけた様にましくしとしたアノ面付キ。泥に灸糖に釘。相イ手に成ルは倶にたわけハ、、、と雜言過言シ主従は。のさばり返つて入にけり。判官も一チ期の浮沈迚も赦さぬやつながら。せめて御儀式濟ム迄と堪にこたへる辛抱も。胸に餘マつてはら〳〵涙。奥を

見やりて。無念泣。折から勅使の御立と呼はる聲に諸大名追々に立出る。袴の裾も長廊下。權威を高ノ師直主從肩臂いからし行過るを。やり過して塩冶判官。師直待と呼かくる。ふり返つて詞ムヽ何用有つて此師直を呼留しぞ。ヲヽ愚人に聞す詞はなし。汝が胸に覺有ん。觀念せよと切付る刀の切先　烏帽子を切割眉間の大疵。血は瀧津瀨。又ふり上るを藥師寺が後抱にしつかと抱。音に驚き大小名八方より落重り判官を引立れば。師直は命が物種藥師寺に助られ。ほう／＼一間へ迯込ば。ソリヤ喧嘩よと諸方の門々さしかため。上を下へと立さはぐは鼎の沸が　三重「どく也。早速御評議極つて塩冶判官高定。石堂右馬之丞へ御預ケと。舁出す網乘物御門をひらき急ぎ行。かくと聞力大星力彌御跡したひ一さんに。御門前へかけ出れば。出合頭に大須賀團八。師直が供廻り主人の仇の鹽冶が家來ソレ。遁すなと追取卷。ホヽヽ　詞事おかしや。若年者と侮つて。ほへ面かはくが笑止千萬。腕に覺への大星力彌。ならば手柄に寄て見よと高塀を小楯に取すつくと立て待かけたり。物な云せそ打殺せと。息杖ふり上ケ双方より。一度に打を身をかはせば。互の天窻打くだき。八の字形りにのたれ伏。　詞ノリ　扨も健氣なお若衆樣さらば大屋へ預けんと後抱にしつかりと抱。物々しやとふりほどき向ふへどつさり車投。　詞ノリ　一人立ては叶ふまい惣がゝりにと立かゝるを。片端摑んで人礫。ばらり／＼と　三重　投付るは板屋の霰棟上の餅を投る、に異ならず。團八はじめ下部共むら／＼ばつと迯ちつて指差者も並木の陰。幽に見ゆる提灯の跡を。

したふて。三重「追て行

第四

其本亂れて末治る事あらじ。塩冶判官高定。一朝の怒にて殿中の騒動隠れなく。分ヶて封國伯州へは早打チ敷キ浪を打て告ければ。家中の騒大方ならず。執權大星由良ノ助吉金。同席沖田將監斧九太夫を始メとして。家中の面々晝夜を分カず城内イに詰メ切ッて。又の知ラせも待チ遠く堅唾を呑ンで並居たる。由良ノ助左右を見廻し。詞我カ君不慮の御災難。殿ン中騒動の注進は是なる早野勘平。二番ン手は矢間十太郎。各早打チにて馳着キ我カ君は石堂右馬之丞殿へ御ン預ヶの様子迄は知レしかど。其後チの飛脚到來せず。心元トなや氣遣ヒと。各眉を顰る折から。遠見の役目佐藤與茂七。十七歳の血氣の勇者。振亂す大前髮。韋駄天走リ息キつぎあへず。詞ノリ只今東の城外へ人ン歩數多(ノ)早駕は。御注進ンと相イ見へたりと申ス詞も終らぬ所へ。ヱイサッサ。ヱイサア。〳〵ヱイサッサ。多勢の人ン歩足も空。宙を飛來る早駕を置クに座敷キへ舁込メば。木綿に腹をしつかと巻キ。駕より出ッる大星力彌。長途に屈せぬ勇氣の若カ者。夫レと見るより由良ノ助。詞ヤア力彌。主君ンの様子何ンと〳〵とせり立れば。列座の諸士は一チ同に顔を守つて控へ。居る。力彌は居直チり。詞扨も去る十四日いかなる意趣にや我カ君様。殿ン中の松の間にて。執事高ノ師直を眞ッ二つにと切リ付ヶ給ふ。コリヤ〳〵力彌。お預ヶに成リ給ふ迄は早野矢間マに委しく聞ク。

シテ其後の様子はサ、、いかに。さん候我君は網乗物にて石堂殿へお預と。詞聞と等しく南無三寶せめて。追付奉らんとお跡をしたふ道筋に。師直が雑兵共手込にせんと取圍む。詞シヤ何程の事あらんと。片はし摑んで投退〳〵。追ちらし。眞一文字に石堂殿の。館をさして馳着しに。表は警固諸士の往來。詞様子を問ば御評議極り。切腹仰付られて最早検使も御入と。聞たる時の悲しさせつなさ。主従一世の別れ際咎られなば夫迄と。紛れて奥へ忍び込。詞兼て主君と無二の御中。力彌が顔も御存にて。情深き石堂殿。余所ながらの暇乞と襖の陰に我を忍はせ。待間程なく。御切腹の用意。詞かたのごく検使介錯座をしむれば。情なや我君様。無紋の上下白小袖屠所の羊の歩にて立出給ふ御顔ばせ。詞見奉りし力彌が心中。推量してたべ親人様とワツト計に伏轉ぶ。心も暗む由良助ヤア狼狽たるか悴。詞シテ其跡は何と〳〵。我君少も悪びれ給はず心しづかに肩衣刎退座を堅め。三方取て押戴き。検使の方に向はせ給ひ。殿中を憚らす忍傷に及びし上は。斯有べきとは兼ての覺悟。詞只恨らくは師直を。討もらせし無念。骨髄に徹して忘れがたし。鬱憤を晴させよと。我を尻目に見給ひて。九寸五分取直し。腹にがはと突立給へば。太刀振上る介錯に。お首は前にと跡云さしかつぱと倒れ泣しづめば。由良助を始として。一座の諸士は齒を喰しばり拳を握りこぼす涙と。つく息は。野分の空と。夕立を一つに寄しもかくやらん。、かゝる所へ表方取次の役人罷出。詞只今隣國雲州の大守。仁木左京介様方御使者を以て仰越

れいは。將軍家御評議の上鹽冶公には御切ッ腹。去ルに依て城地。並に國郡召シ上ケられ則チ左京ノ介へお預ケ。今ン日中に城を請ケ取リ申べき旨鎌倉ゟ早打の嚴命。是非に及はず追ッ付ケ人シ數を差向ケれ間ッ一ッ家中の面シ々。速に立退るべしと申シ置て立チ歸り候と云捨て引ッ返す。重る難儀人〴〵は互に目と目を見合て覩れ。果たる計リなり。由良ノ助頭をもたげ。是非に及ばぬ御運の末ヱ。此上の成リ行キ各の御了簡承はらんと有リければ。沖田將監取リあへず。詞イヤサ評定もへちまも入ラず。じたい殿ン中を騷せしは殿の短慮不覺といふ物。智惠なしの主人ンにかゝつて我レゝ迄難義せんより。殿の貯へ置キし金ン銀ン財寶を分ケて取リ。此城を明ケ渡すゟ外カはない。何シとそふではござらぬかと。詞の尾に付ク斧九太夫。詞イカニモ將監殿の思召シ尤至極。併殿の貯へ置キし金シ銀を一ッ家中へ配分しては。我レ々一ッ生安樂に暮す程は有ルまいなれば。何ンと致そふ。殿の御切ッ腹を深カく隱し。此度勅使御馳走の御用金と名付ケ。在々の百姓共へは高カ割。城下の町人シ共へは面割にして。國ク中の金を集め。一ッ家中へ配分シするが上分ン別でござらふと。欲惡ぶ道の評定を聞キ流して由良助。詞ハア御兩所の思召シ一チ理有リ去ながら。此由良ノ助が了簡は。各方とは少ト相違ニ 殿シ中の騷動と注進の初めよりかく有ラんと存ぜし故。殿の貯へ置カれし御用金ンの内。奥方かほよ御前ンへ差上クると 殿の御菩提所へ寄附は格別。其外の金ン銀諸道具は。是迄年ンゝ御用金ンを差上ケし國ク中の百姓町人ン。京鎌倉堺大坂の御用達の町人シ共。其外カ日チ用の買掛り等迄殘らず返濟致す樣。兼て掛りの役人ン共へ竊に申シ渡し置キ。其通り計ラふたりと。いふに兩人ンせ

き立って。詞ム、同席の我々へ一應の相談なくなせ一存で計はれた。イヤ相談致せば只今の樣に手前勝手の欲心をかはき。末代迄御主人の御名を穢すが氣の毒さに。一存で取計ふた由良の助が誤りかと。きめ付られて猶逆立。詞シテ一家中の者共明日ゟ知行に離れ何を以って妻子を育む其思案といふてお見やれ。ハ、、、事新しき各の云分。罪なき主人の御生害譬尊氏公の命なり共おめ／＼と此城を渡そふや。一家中の者共此城に楯籠り。討手を引受一軍して叶はぬ時は妻子を殺し。城を枕に討死して。主人の冥途の御供と覺悟極し由良の助。金銀に望なし。旁いかにと詞を待ず。力彌を始め竹森矢間早野千崎原佐藤。慓悍の兵共口々に主君に別れ奉り。いつの時をか期すべきぞ。倶に討死／＼と思ひ。込たる其勢ひ。將監九太夫へらず口。詞上意を背くは上への恐れ。今一評議して見られよと云捨て。こそ／＼／＼と逃て入ヤア比興未練の犬侍追駈て討留んと。立を押へて由良の助。詞論に及ばぬ知行盜人。きやつらに構はず各は。籠城の用意有。我も一間で討死の最期の支度とそこ／＼に。心を配入ければ。家中の面々立別れ詰所。／＼へ行折から。城請取の刻限と八方ゟ仁木が手勢。城外に馳違ひ異義に及ばゞ責崩せと。手々に長柄飛道具事嚴重に見へにける。兼て期したる義心の輩。思ひ／＼の物の具堅め追々に駈來り。詞ヤア／＼由良の助殿寄手城内へ入込ざる内。門の堅め。軍の手配御下知を承はらんと。せきにせいて呼はれば。一間の、障子さつと開き立出る由良の助。鎧兜に引かへて花田の熨斗目長上下。何かは白木の三方に。一

通取リ乘ガ恭々敷ク。捧け出るを見て恟り。詞ヤア眉に火の付ク此時節。合點ン行カざる大星殿の出立チ。子細いかにと詰メ寄ば。ホヽ樣子いはねば不審は尤。城を枕に討チ死とは各の志シを試さん爲の謀。早野矢間が來らざる以前ンより。殿ン中の騷動は兼て知ッたる由良ノ助。其子細は此一ッ通。殿登城の折リから片岡傳吾に渡し給ひ。五日半ンの早飛脚にて頓に屆イて拜見ンせり。我カ君師直を討チ給ふ謂を記ルせし御書キ置。謹で拜聽。有レと押シ開けば人々はハッと計リに飛去さり。息キを詰メて聞キ居たる。詞書キ殘す一ッ通の事我レ賤しくも一ッ國の諸侯と生マれ。君に仕へて二心ンなく弓矢を取ッて私シなし。然カるに執事高ノ師直其身の奢增長し。弟師泰と心を合せ尊氏公を亡し天下を奪ふ企。御若年ンの直義公を別莊に招き酒色を以ッて御心を蕩し。御謀叛を進申シ御兄弟の御中を裂。兩虎爭ひの敝に乘リ事を計ラんとの工。知ッたる者は我レ計此事竊に尊氏公へ申シ上んは安スけれ共。直義公に御不審かゝり。御連枝鎬を削り給はば。かく太イ平に治りし一ッ天ン下の亂レとならんは。歎ても猶歎はしく。事穩便に計ラはんと思へ共。奢りに募師直止るへき勢ひならねば。心一トつに取リ納め。勅使御馳走の遺恨に事寄セ。師直を討チ留メて天下の憂を除くべし去リながら。殿ン中を騷がし勅使への無禮短慮不才の高カ定と。世上の嘲り家中の難ン義。思はざるにはあらね共。天下萬ン民の歎キには替ヱがたし。若シも武運拙くして師直を討チもらさば。忠義を思ふ家中の面ン々心を合セ。師直を討チ取リ天下の病ヒを除くべき者也。三ン月十四日。鹽冶判官大星由良助へと聞クがハット列座の人々。扨は我カ君殿ン中にて刃傷に及ヒ給ひしは。御短ン慮にては有ラざり

しと驚入たる計り也。由良助は件の一通巻納め。傍なる火鉢へ打込ば一座の諸士は色を失ひ、詞コハ心得ぬ大星殿、我君師直を切付給ふは場所を知ざる麁忽の仕業と、世上の譏黙止がたし其一通こそ亡君の汚名を清むる證據なるを。火鉢に入て焼捨られしは血迷ふてか但又狂氣ばしせられしかと席を。打て詰寄ば。詞ホヽ其咎尤ながら、御遺書に有ごとく尊氏公へ言上せば、謀叛を工む師直一家亡さんは安けれ共、直義公へ御不審かゝり、御兄弟確執に及び干戈起らば。一天下の民の歎を思召御身一つに引請て、四海を恵御仁心。有がたし共。忝し共。我々式が了簡には及びがたき事ながら。主君の心を請繼が。則臣下の心なり。詞右の御遺書世に傳らば扨は、鹽冶判官は短慮にては有ざりしと。主人の汚名は濯共。將軍のお耳に入ば。再び天下の亂となさらん、然らば却て我君のお志も水の泡、詞去によつて御遺書を焼捨、各と心を合せ師直をさへ討取ば、亡君の御宿意は御存分に立道理。サそこを思ふて焼捨しは。由良の助が誤り共いふべからずさは去りながら世の人は、名利の二つにからまれて繕ひ餝る其中に。天下の民を救はん迚金を泥に塗隠し文武兼備の名將の短慮麁忽の汚名を請、國家を失ひ御命を亡し給ふ隱徳を、みす〳〵佛神三寶の力にも及はぬは。天の命數限り有。鹽冶のお家滅亡の時節到來淺間しやと。五臓を絞る血の涙、有合ふ諸士は一同に涙、汲出すごとく也。由良助は懐中ゟ。一巻を取出し。詞聞るゝ通りの、譯なれば、亡君の御志を繼んと思ふ人々は、此城を明渡し、時節を待て師直を討捕より外他

事あらじ。是こそは敵討一味徒黨の連判状。サア何れも血判と差出せば。我先きと姓名を書記し。指をつんざく誓ひの血判。動ぬ忠義の要石巖とならん礩礒。諸士の歴や大石の。美名は末世に隠れなし。折から早野勘平は後れ馳に駈來り。某も連判に御加へ下されよと。立寄るを由良ノ助詞イヤ／＼。貴殿は三年以前御抱への新參なれば。譜代相傳の。一家中と。一様には成がたしと聞もあへず膝立直し。詞コハ由良ノ助殿のお詞共覺へず。君臣の道を論ずるに。年數にはよるべからず。譬ば名作の古身たり共燒刃なければ用立ず。又は名もなき新刃たり共切るゝを以って鏌邪が釼。沖田將監斧九太夫はお家譜代の生くら物。新參なれ共勘平が。心はゆがまぬ直燒刃。亡君の切りかけ給ひし師直が烏帽子首。さらへ落して。御目にかけん。詞去ながら。密事を漏さんかとの御疑ひ去る事なれば。假令親子兄弟たり共他言せまじき別紙の神文認め置く。お目に掛んと取り出すは。日本國中大小の神祇。驚し奉る熊野の牛王に誓ひの文言。由良ノ助感じ入。詞ホヽ神妙／＼。いざ血判。ハツト計りに勘平は。差添の小刀抜出し指に突立。連判状にしつかと押し。忠臣一味に加はる事。生前の大慶と。踊上つて悦ぶ折しも。詞城請取りの御役人御入りなりと騒ぐ聲々由良ノ助打點き。詞上使の御入りに甲冑の其躰は恐れ有り。何れも暫く忍ばれよと詞に隨ひ家中の面々一間をさして行跡へ。城請取りの上使の役目。仁木左京ノ介頼章。家來引連上座に通れば由良ノ助。御苦勞至極と平伏す。詞ホヽ不慮の災難御家の騒動心中左こそとさつし入る。城請取りの嚴命は表向き隣國の

左京介何に寄ず用事有ば承らん。少も心置るゝなと。慈愛の詞身に餘り。詞ハヽヽヽ有がたき御詞。只此上は家中の者共異義なく立退候趣き。宜しく言上願ひ上奉ると。挨拶半へ沖田將監斧九太夫。遠慮もなくのさばり出。詞アレ由良助めがざま見たか。最前はさも立派に城を枕に討死とは。口は達者な影辨慶。骨なしの腕ずんばい。上使の前へ出た時は塗盆に蟇、ましくししたあの面付。能見せ物だべら坊めと。一度にどつと打笑ふ。たまり兼て一味の義士。一間の内お顯はれ出。腮引裂んと飛かゝるを。由良助押しづめ。ヤア麁忽也旁。詞いか程にいへば迚大の長ぼへ相手に成はおとなげなし。上使へ無禮。しづまられよと。押留られて是非もなく。刀の柄を握り詰。齒を切りこたへ居る。兩人猶も勝に乘。詞人そばへの手轉業して見おらぬかハヽヽヽと嘲る所へ佐藤與茂七矢間十太郎。長持をかき荷はせ。息を切てかけ來り。詞御寶藏の錠捻切長持舁出す不敵の曲者。引とらへ詮議致せば。沖田將監斧九太夫が家來。兩人の言付にて盜出しれ由。白狀に及びし故一々に搦置。此長持持參致しれと。詞の内より將監九太夫羽繕ひして迯出すを。おり重り高手小手にしめ上く。重々の極惡人と寄てたかつてさいなむと。制し留めて由良助。上使に向ひ。詞御覽の通りの科人共いかゞ計ひれはん。ム、念の入たる由良助の詞。此左京介は城請取の役目ながら。各退參なき内は此城は塩冶の居城。塩冶の家の盜賊なれば。塩冶の家法に行はれよと。仰は得たりと一味の若者。なぶり殺しの刀の淺疵。將監九太夫手を合せ命計

は助てたべと泣侘るを起しも立ず。佐藤矢間が太刀先に。頭はころり山椒味噌。からきめを見て死たりし。悪の報ひぞ心地よき。左京ノ介諸士に向ひ詞城相違なく請取上は勝手次第に立退れよと。仰にハット由良ノ助。詞サア何れも退參有としづ〳〵と立出しが。詞御先祖代々傳つて。壘高く堀深く。楼の構へ兵粮の用意迄殘る方なき此城廓。譬韓信孔明が數百万騎にて責る共。忠臣無二の此勢にて。防戰ふ物ならば容易は落まじければ。花々敷軍して討死せんは安けれ共。主人の敵討ん爲すご〳〵城を明渡す。是非もなき世の有樣と。思へば張さく胸の內。一味の諸士も一同に昨日迄もけさ迄も。旭に曜。夕日に映ずる御殿〳〵の結構も。今を限りの見納と。名殘り惜げに見返り〳〵。淚ながらに出て行世の盛衰ぞ「あぢきなき

第五

空山寂歷として道心生ず。虛谷迢遙たり野鳥の聲。浮世離れし山寺の。日の目も見へぬ夏木立。岩にしたゞる水の音。いとも淋しき三昧に。見る目いぶせき草の庵。早野勘平重次は。主君の國を立去て。一先歸る古鄕の空。母の別れを悲しみて。墓所の傍を立さらず。喪に入日數假初に。脇目もふらぬ五十日。奇特といふも愚なり。墓所預る西念坊。靈供香花携へて。庵の內に直し置。詞アイ勘平樣。お賴の品々上ます。ほんにマアお前樣は。當春お家の騷動故御浪人。伯州からお歸

りなさると其儘此墓所へ引籠り。喪に入ルとやらいふ儒者の教。麻上下を着詰メにして。しやちばり返つてござらしやる。其上朝夕の上カり物は粥計り。イヤモ一日チも眞似はならぬ。常精進のわしらでも。折リ〳〵里へ出た時は。鰻鱺魚の樺焼煮抜鶏卵。沙汰はない事してやらねば腹持チがたまりませぬ。坊主と蒟蒻は田舎がよいと世の諺。此山寺に住居するわしらでさへ其通リ。繁花に住居の和尚達イは猶以ッてと思召ッ。お前様も内證で。ちつとは大事ござりますまいと。口も心もひよすか坊主。詞イヤ〳〵父母の喪に入ル時は。口に甘きを喰はず。樂を聞イて樂ぬが聖人ンの掟なりと。堅ふ出られて天窻をかき。詞旨い物が有ッても参らず。毎日仕掛ケる娘御を。けんもほろゝに追ッ歸す。扨〳〵在イ家方といふ物は。辛抱の強い物。わしらも今から還俗しては。結句身持チか六ケ敷イ。炭の折レか木の端かといふ此坊主。詞先キが近カいと思ふ故。却つて未練ンナ心が起る。落チそふで落ぬ物は。廿坊主に牛の睾丸落そむなふて落る物は。五十坊主に鹿の角とは。テモよふいふた譬じやとつぶやき〳〵立イ歸る。勘平は立イ寄ッて。墓に手向の香花や。靈供の膳を目八分ン。石碑の前に備へ置キ。遙下カつて兩手をつき。暫し涙にくれけるが。やゝ有ッて顔を上ゲ。詞ハア母人様へ申シ上奉ッる。主君ンの供の鎌倉詰メし。留守の間の急の御病氣。しらせの御状の屆カぬ内。お家の騒動早打チの使イ。夜を日について歸りしが。道中ゟの胸さはぎ。通り筋の事なれば我カ内へ立チ寄りしに。棺を舁出す我カ門ン前ン。何ンノ人トの葬送成ルぞと。聞クも悲しき母上は。三日以前に御死去のよし。又鎌倉の物語リ。取リ亂したる心の當惑。烈しき父に諫ら

れ。御葬送のお供も叶はず。旗天蓋を余所に見て。胸も轟く火急の使。夢路をたどる心地なりしぞや。剰お國にて御代々仕馴し。御城を明渡し。一家中は皆ちり〴〵。我も故郷へ歸りしが。詞御病中の御看病。御葬送の御供も叶はざる身の申譯。せめてもの罪亡しと。此所へ引越して。寸志計の御奉公　祭ること在が如しと。本文は有りながら。かはり果たる石塔の。文字に殘る贈名を　母と拜する計にて。お顔も拜まず我子かと。只一聲のお詞を。聞事さへならずるは親に縁なき勘平が。武運に盡きたる不孝の罪科。御赦されて下さりませと活たる人にいふごとく。石壇に兩手を掛。悲歎の涙にくれ居たる心の。ユリ「内ぞ便なけれ。行水に數かくよりもはかなきは。思はぬ人を思ふなりけり玉ぼこの野道。山道たどり來る。びらりしやらりの振袖の。所に目立。風俗はお春といふて勘平に。親の赦せし言號。下紐はまだ解やらぬ思ひを包む帛物。下女のお龜に取持せ。お顔が見たさ逢たさに。急がぬ道も墓參り。勘平が後姿。物いひたげに。うぢかはをお龜が傍からもどかしがり。走りつく眞似。抱付眞似。打たり舞たり耳に口。詞かういふてそふいふて。コレ其跡はかふしてと。氣をいらつ程。猶おぼこ氣の顔は上氣のはぢ紅葉。詞ヱ埒の明ぬと突やれば。ヲヽあぶなやを鹽にしてつまづく拍子勘平に。抱付ばふり返り。詞ホヲお春けふも又墓參り。雨上りで道が惡い。すべつて怪我は仕やらぬかと。何氣なくいふ顔付に。急に詞も出そゝくれ。アイといふさへ唇の。動き兼るを年のかうお龜は傍からもどかしく。詞ヱヽいかにおぼこ育じやてゝ。知たせりふを

埒チの明カぬ。お春様の名代に。わしが替ハつていひせんせふ。詞コレ勘平様お果なされたお袋様の爲には。現在姪御のお春様。お前とは從弟同士。悤ヒてござるを幸ヒに。お留守の間に呼ヒ取ッて、鎌倉からお歸りを待ッてござる其内に。お袋は急の御病氣。ついあの世へござらしやつた。今はの際にもコリヤお春、勘平が歸つたら精進も回向もいらぬ。一ッ時も早ふ婚禮して。玉の樣な初孫を産でくれとおつしやつたは。親旦ン那樣が證據。手入ラずの箱入リ娘。初ッ物は七十五日。留守の内からかげの膳。蒸立チの腰高饅頭。お前がお歸りなされたら夜ル晝なしに引ッ付イて詞フウスウを聞クならば近所隣のわたしらへ。難義が掛ろと思ひの外カ。詞金魚では有ルまいし。喪に入ルとやら堅くろしい。此小屋に上ミ下モ着て。參りのない開帳場の。世話やきを見る樣にしやちこばつてござらしやるとは。去リ迚は惡ルい物好。かふいふ事を子細らしう。物の本ンに書キ殘し末世の女ゴをこまらせる。唐の孔子が聞コへぬと。お春樣の恨言。是から丁簡切リかへて抱て寐て上なされ。詞ア、余ンりつべこべしやべつたら息キがはづむ。サア此跡はお春樣、直キ〳〵におつしやれと。突キやられて漸に。恥しいやらこはいやら。だくつく胸を押シしづめ。ほんに浮キ世はあぢな物。お留主の時に思ふには。お歸リ有ッたらどうかうと。待テに待チたる甲斐もなふ喪に入ル日數も五十日。お墓參りの度ビ毎につい一ト通りの挨拶で。情ケらしいお詞のないは私がふつゞか。お氣に入ラぬかお嫌ひか。詞お前は土性。わたしは金夫婦中カよく子も多く。萬心の儘なりと。よふ見て置イた三世相。よもやうそでは有ルまいと。樂しんだもむだ事か詞おば樣ンがござるな

ら。今迄捨て置やなされぬ。いつ何ン時でもお歸り次第。婚禮ィせよとおつしやつたに。違ひのないは此石塔。ならふ事なら只一ト口。お詞そへて下さんせ。伯母樣のふと石キ塔にすがり付ィたるあどなさは。おぼこにも又。かはゆらし。勘平も心根を察しやつたる折りからに。西念ンが案内にて尋チ來タる佐藤與茂七。夫レと見るゟ勘平は。コレハ〳〵と手を打ッて飛立ッ程のなつかしさも。互ィに包む傍りの人ト目。詞コリヤ〳〵お春。樣子有ッてあのお方と。密〻咄す事が有ル。サア〳〵歸れの差圖に是非なく。いひ殘したる數々を殘り多げにうぢかはと立チ兼るをお龜が引ッ取。詞ソレ御らふじませ。鬼の來ぬ間に洗濯せぬと。いつでも邪魔がはいる物。けふも又むだ足。ほんに夫レ〳〵。おみやのお菓子忘スれたと。帛包を庵へ投ヶ込ミ浮ヵぬお春を伴ふて元ト來し道へ立歸れば。西念ン坊も一チ禮し。寺内をさして別れ行。勘平傍り見廻ハして。詞ハア珍らしや與茂七殿。此方ゟこそお尋チ申筈なれ共。御存シの拙ッ者が身の上。せめて母への申シ譯と。かゝる時宜故御無沙汰計り。大星殿にも御堅勝。一チ味の衆どれ〳〵も。替ハりし事もござらずや。されば〳〵。此與茂七は當春ゟ。しるべ有ッて大坂住居。ヱヽ情なきは世上の取リ沙汰。鹽冶の家來吝嗇にて。賂賄をせぬ故に。師直に恥かゝされ。殿ン中を憚らず。切懸しは短慮の至タりと。聞ィたる時の無念ンさ悔しさ。そふでないとの云ィ譯ならねば。胸をさすつて堪へるせつなさ。天下の爲に御ン身を捨。仁ン義を守る御主人ンを。凡俗共の口の端に。かゝる例も有事かなと。鬼を欺く與茂七が。拳を握る目に涙。勘平も跡先キを。思ひ廻ハせは廻す程。時の不肖と云ヒなが

ら。文武兼備の御主人の。ほいなき御最期お家の斷絕。暴惡無道の師直は。權勢强き日々の奢り。天道は是か非か。エ、悔しい無念な與茂七殿。詞ヲ、冥途にござる我君の。嘸や無念の御胸中。思ひやられておいとしいと。互に手を取り合ふて無念涙に。くれけるか。勘平は目をしばたゝき。詞此上は片時も早く敵を討用意が肝要、シテ出立の時候はいかに。ヲ、其爲に來りし與茂七大星殿も國を立て都。山科に假住居。申談ずる事有て先月の末夜船にて大坂へ下られ。某が旅宿に逗留。又先達て鎌倉に居を構へたる。堀尾嘉兵衞を始として。一味の者方頻りの催促。未時節は至らねど。鎌倉行延引せば。一味の者共待兼て。不慮の事有んも知ず。一先下つて兎も角も計はんと。大星殿にも明日は大坂を出立。貴殿をも御同道。右の御知せ申さんと。御宿所へ參りし所未母公の朦中故。寺にと聞て取りあへず。直樣是迄參つたり。ハアお使がらといひ。忝い御知せ。母の喪を勤るも今日で五十日。幸忌も明なれば。明日はお供せん。ヲ、然らば由良殿同道にて。明日御宅迄お誘ひ申さん。併世を憚る我なれば。普化僧に出立て。參る時刻は九ッ過。笛を相圖に出立有と。いふに勘平いさみ立。詞ヲ、面白し〳〵。兼て約せし一味の人數。忠義の二字を頭に戴、無念の鍬の刃と研立て。必死と定て責寄ば。讐敵は鐵洞に籠る共。やはか助て置べきか。詞ホ、、、いふにや及ぶ。樊噲項羽阿修羅王。鬼でも蛇でも一挫。師直めが素頭は一味の者の手裡、に有り、詞シイ音高し人や聞。萬事は明日〳〵と。互に劣ぬ忠臣義士。引別れてぞ三重「立歸る

前栽の榎の幹も世をすねて。所に目立ッ衛門。播州早野芝村に數代ィ絕さぬ弓矢の道。早野七太夫重吉といふ鄕士有リ。書の道にもくらからず仕官の傳も公の。祿は其身の錠にて彼犧の世をうしと莊子が跡を老の坂。妻に別ヵれて。便なく。暮すも夢の五十日一ッ子勘ン平が忌明キを待チ儲たる言號心お春がいそ／＼と今宵祝義の下ヶ下地。うちは同士も一ッ生に。一チ度のはれと花餝る座敷キの。掃除嶋臺も千年を。祝ふ竹に鶴下女のお龜も首延し日暮レを松の若綠。俱にうかれて申シお春様、詞 親旦ン那様のおつしやり付ヶなされた通り。是で何も角も皆揃ふた。是から勘平様がお歸りなされ御祝言のお盃キ。三々九度が濟ムと其跡が色直し。其跡がお床入リ。其跡が／＼ホヽヽ嘸お嬉しかろお浦山しいと。脊中をとんと擲かれて。又お龜のしやら／＼と。詞 大キな聲してとゝ様に叱られふぞや。嬉しうなふて何ンとせふ。勘ン平様とは從弟同士幼少から知リ合ッた中。アヽよい殿御じやどうぞ夫婦に成リたいと思ふ内。三年ン以前に塩谷様へ御奉公。間もなふ鎌倉へお供故がつくりと力ラを落し。神ミ様や佛ヶ様へ様々の立願祈願ン。月キに三日の火の物斷。思ふた念ンが屆いたか。詞 お果なされた伯母様が。夫レ程に思ふなら添せてやらふと此内へ引取ッて。鎌倉からお歸りなさると其儘。塩ン冶様のお國へ嫁入リする積りで有ッたが。此三ン月ッ伯母様はお果なされる能事は重ならず。鹽ン冶様のお家は騷動。どふせふと思ふて居る

内。勘平様はお國から歸ると其儘。喪に入ルとやらで御墓所へ詰、切。昨日迄で五十日。詞今日忌明てお歸り。直に婚禮させふと有難い伯父様のお指圖。嬉しいに付ても伯母様の御存命なら。嘸お悦びなさるで有ふし。わしも又何角に付て心細い。そしてけふもモフ八つ下り。此勘平様はどふしてお歸りなされぬと。戀と無常を取交て待ツ間もとけし投首に。お龜はフット吹出し。詞ホヽ、とつけもない。いかに待チ兼なさる迚まだ四つ過にはかならぬ物。八つ下りとはモめつそふな。併待に待つて戀聟様お心せくも御尤。勘平様は今朝お寺でお髪月代なされ。御葬送のお供にござつた。庄屋殿始村中を禮にお廻りなされる筈と。さつきに五助が申ました。追付お歸りでござんしよと咄し半へ三人連。近所隣の百姓共。手々に酒樽肴臺椽先に並べ置。詞アイお春様夫にござりますか。けふは勘平様のお忌明。殊に晩には御祝言彼是のお悦びに。次郎助茂七權九郎が參りましたと。旦那へおつしやつて下さりませ。モコレハ近比輕少の至りながら寸志計の御祝儀でござります。是からふなをり出。世鯉。目出度鯛の進上物。宜しう賴上ますと。いふも律義の百姓氣質。詞ヲヽ、どなたも御念もじの御進物。此通り伯父様へと。立んとする一間より。詞ヲヽ、身が夫へ出て挨拶と立出る七太夫。昔作りの堅親父鮫鞘の大脇差をさしこはらし。悠々と座に直れば。お龜が心得進物を。目通りに並ぶれば。にこやかに打ながめ。詞ムヽ、何れも聞がしい時分打揃ふて來るさへ有に。いはれぬ進、物過分至極に存ると挨拶すれば詞ハイ是は〳〵お禮に痛入りまする。けふはお袋様のお忌明。勘平様

がお歸りなされ。御婚禮が有と承りまして。日比。お世話に成私共迄お嬉しう存ます。夫に付て彼今の事。お尋中て見よふかいノ茂七。ヲイノイヤモ別の事でもござりませぬが。勘平樣は此在所へお歸りなさるゝと其儘。お袋樣のお墓所に小けな小家懸して。忌明のけふの日迄只一人。つゝくりとしてござらしやるは。合點のいかぬ事じやと此中も此次郎助が。鳥渡お尋申たれば。喪に入とやらいふ事で。唐には不斷する事じやと計おつしやつたげなが。どふも理窟がわかりませぬ。マどふした事でござりますと。尋にほゝ笑。詞ヲ、譯をしらねば不審は尤。都て聖人の敎には。三年の喪は天下の通喪なり。人産れて三年の内は父母の懷を離れず。抱拘の大恩を忘れぬ爲。父母死すれば三年の喪に入が唐の掟。幼少から學問の端くれを敎た悴。おれは奉公嫌ひなれど。若い者の一度は主取さするもよからふと。主人を見立塩冶殿へ奉公に遣はし置しが。當春の騷動早打の注進。鎌倉ゟ伯州迄二百里の行程を。七日の早追急の道。此早野村は海道筋の事なれば。其譯を我に知さん爲に立寄しに。三日以前に母が往生。葬禮の出る所此門前にて行逢し其時の悴が心、思ひ出すも胸ふさがる。歎の中に鎌倉の樣子聞ば火急のお家の大事。母が葬送所ではないと。直に追立お國へやりしが。其後悴は歸つたれど一方ならぬ母の別れ。殘念に思ふかして。墓所の傍を離れぬは彼喪に入といふ敎の道。去ながら唐では三年。日本では五十日が定る忌中。國風に從ふが則聖人の敎と思ふかして。けふ歸らふといふを幸。死だ母が遺言なれば此春と今宵の祝言。人間

萬事塞翁が馬迚。善も悪いも様々に移り替るが世の中と。口にはいへど心には。思ひ出したる妻の事紛らす芬の火入さへ涙にしめる計なり。ひよんな事言出して百姓共は手持なく。詞ハイ夫で謂がぐはらりと知れた。親孝行な勘平様。廿四孝の數がふへて。廿ごかうの光りがさし。立身出世は今の事。モフお暇申ます。ヲヽ皆お行きやるか過分〳〵。アイお春様おさらばと打連〳〵立て出て行。跡打ながめ七太夫。詞コリヤ〳〵亀よ。モフ勘平も歸る時分。歸らば直に精進落。膳の拵云付ろ。アイと諾もせはしなく勝。手へ立て。行川の流れはたへずして。しかも元の水にあらず。昨日と替りけふと暮。つらき月日の五十日。移るは早き光陰の。矢たけ心もしほ〳〵と。立歸る勘平が。禮義崩さぬ麻上下。夫と見るよりお春は嬉しく。詞アレ勘平様がお歸りと。心いそ〳〵出向へば。しづ〳〵と打通り。父が前に両手をつき。詞先以て御機嫌の躰。大悦至極と相述れば。ヲヽ其方こそはお主の災難。千辛万苦又は。母の別に心を痛。其上久々の閑居。いかゞ有んと案ぜしに。無事で歸つて嬉しいと親しき詞に。詞ハア御存の主君の成行。剰へ幼少より一人子と姑息され。寵しみ深き母人の。御病中の介抱は扨置き。纔の日數で死目に後れ。御葬送を余所に見し。又と世になき不孝の罪。是非もなき身の上やと涙に。むせぶ計なり。父は態勵を付。詞ホヽ其歎は去事ながら。塩冶殿の滅亡は。假初ならぬ大家の興廢。天の命ずる所なれば。思ふに任せぬ世の成行。又母へ不孝と思は、んが仕官の身は。主の爲に親しきを忘るゝ習ひ。是以て不孝にあらず。死で生れて生れて死ぬ環

のはしなきがごとく。家の血脉連綿と。子孫を殘すが先祖へ孝行。夫に付此お春へしる通り姥が姪にて。兩親もなき孤。其方に嫁さんと留守の内に呼取置しが。母が病中にも此事計。息有内に勘平と婚禮させ。ならふ事なら初孫の顔が見て死たいと。病苦も厭はぬよまい言。死る今はの際迄も。明日にも勘平が戻つたなら。忌の内で有ふと儘。祝言させて下されと。くれ〴〵との遺言なれど。詞世間躰も有物故。五十日は遠慮したが。最早忌も明たれば。誰に遠慮の筋もない。幸けふは日も能ければ。今宵直に婚禮させんと。用意して待て居た。其通り心得よと他事なき父の詞に恟り。兼ての大望其上に。けふ出立の契約。暇乞をと思ふ矢先。のつ引ならぬ父の云付。ハツト吐胸をつくねんと。暫し詞もなかりしが。心弱くて叶はじと。詞ハア今日は改て親人へ御願ひ餘の義ならず。主君塩冶公に別れてより。かく浪々の我身の上。唯今在所へ引込で土ほぜりと成此儘に朽果んも殘念なれば。古朋輩と申合せ鎌倉へ立越。今一挊致さんと則昨日言堅め。今日旅立の約束。存立たる事なれば。今暫く婚禮を御延下され。出立の御暇偏に願ひ奉ると。約束かたき密事の神文。夫とは明て岩本の。神に願ひをかけまくも。忝い伯父様のお免しの出たけふの婚禮。振捨て旅立とは。むごや難面胴欲と。胸に餘れど口へ出ぬ。娘心のうぢかはと心遣ひぞやるせなき。父はもく〳〵打點き。詞ム丶若き時は血氣強く。人に負まい劣まい。立身出世をかきたくる樣にと思へ共。俗にいふ悪方果報。求ていかざる物は富貴。去に依て昔より。賢人君子も世に

合ハす。山林に遁れ市に隱る。仕官ンの望ミ無用〳〵。と。止る詞を押シ返し。詞コハ父のお詞共覺へず。君に仕リへて用ゐられず。其上の隱遁は格別。我レは時に逢まいと。初メより見破るは却て異端自暴自棄。思ひ立ッたる念ン願ンなれば。是非鎌倉へ立チ越エて。今一稼仕らんと詞をつくし。いひ廻せばずんど立ッて七太夫。進ン物の肴臺兩手に持チ。勘平が前に並へ置キ。詞コリヤ悴レ。最前村の百姓共がつけふの祝義と持參せし此肴は。三つ子も知ッた鯛と鯉鮒。鯛は大海の洋中に育。鯉鮒は淵川或は又。堀溝の泥水に育ツ。譬ば堀溝は此早野村にて。鎌倉は大海のごく。云ハねどしれし大小上下。大海イの其中カには。鱶鯨の大イ魚多ければ。諸國ゟ集る人ト其大イ魚を羨め共。貧福貴賤は夫レ々に。皆天ン道ゟ產分ケて。ぎやつといふより定マる運命。いか程廣き大イ海の中に育ても。鯷はやはり鯷にて。たなごは一ッ生たなごなり。又溝川の泥水に。撮千魚や。泥鰌と同じ様に育ッたる鯉なれ共。時節來タれば自。龍門の瀧に逆上り。龍と變じて天ンに至れば。雲を起し雨を降す。詞鎌倉に乞食も有レば。强人トの立ッ身ン出ッ世。場所がらにもよるべからず。六十余州の諸侯の內。撰に撰で仕へたる。塩ン冶のお家滅亡し母が葬禮に行ト逢ながら。供する事さへ叶ナはぬは。能クミ運の甲斐なき其方。現世の果を見て過古未來を知ルといふ佛ッの教。鎌倉行を思ひ切リ。老イたる親を養ふが順の道。合點ンがいたか勘平と。拔キ差ならぬ理の當然。何ンといふべき詞もなく。差俯て。思案顏。お春は氣の毒コレ申シ。詞あれ程におつしやる事。一ト、つとして無理はない。ツイアイといふて下さんせと。心をあせればアイヤお春。詞得心しても一チ應

で。アツトいはぬは若氣のならひ。奥で緩りと思案ンせよ。我レも休息いざ來れと。詞に是非なく打連レて奥の間へ「さして入リにけり。勝ッ手は兼て云ヒ付ケの。料理拵へどつたくた。味噌摺音トも賑はしく。やや時キ移る計リなり。梓弓引キは返さぬ武士の。忠義一チ圖に勘平は。旅の用意もそこ〳〵に。一ト間をそつと忍び出。傍り見廻しいつこかは。かけ出せしが立チ留マり。とつつ置イつの胸の中チ。お主の敵討ッ事は。假初ならぬ大事なれば。譬親子兄弟たり共。口外せましといひ堅め。神ン文ンの密事故夫レと明カさず立チ退共。御存なければ嘸や嘸親人トの御怒。二つには又。云號の女氣に我レを恨ん不便やナ。出ては再び歸らねば。今ぞ親子一ッ世の別れ。育し我カ家の見納め。先キ立ッ母の顏迄が目にちらつきて後髮。勇氣もたゆみ茫然と。暫し涙にくれ居たる。由良の戸を。渡らぬ先キに楫たへて。行ク衞も浪のうたかたや逢ハば。どふして。かういふても尋ヌる目先キにお春は目早く。ちらと見るより。詞ヤ勘平樣。そこに何ニしてござんすと。寄ルを突キ退一ッさんに。物をもいはずかけ出す。袂にすがつてコレ申シ。詞たつた一ト言聞てたべ。わたしを嫌ふて此内を。立チ退程の御心ン底。何をいふても空吹風。むごい共不便な共。思す心は露塵程も。有ルまいけれど。詞又わたしが身にも成リかはり。思ひやつて下さんせ。一トつに育つた從弟同士。子供遊びの飯事に。何ンの譯ケなき女夫事。嫁入リ事の戲れにも外カの者とは。詞いや〳〵と。お前も。わたしもいふたのは。結ぶの神ミの帳面には。とふに記して有ルそうなと。智惠付ク程猶いろ〳〵に。案ンじ過ゴしの數々は。物の云ヒ樣。詞そぶりでも。お前も。覺へがござんせふ。

東の留守の氣あつかひ。祈た念が届いたか。伯父様や伯母様が。添せてやらふと引取て。悦ぶ内に様々の障りも漸日數立。けふ婚禮と指を折。待に待たる甲斐もなふ。嫌ふて家出さしやんすは。東の空は色所。定て深い約束の。女中へ心中立なさる。お前は夫で立ふけれど、わたしが體は置去りの。谷の梢の木守りと。人に指ざし笑はれて何と。ながらへ居られふぞ。いつそ殺して下さんせ。死でもお前の手にかゝれば。詞わしや本望でござんすと。積り〳〵し恨の數々くどき立〳〵。どうど轉びて。泣しつむ。勘平も諸共にしほるゝ心取り直し。詞イヤ〳〵夫は惡い呑込。全くそなたを嫌ふでなし。一先鎌倉へ行ざれば。朋輩共と云合したる約束濟ず。つい立歸りの道中。長ふて廿日か三十日。戻つて緩りと婚禮せふ。親人が見付りや惡い。機嫌能やつてたもと。振り切て行んとするを。詞イヤ〳〵〳〵何ぼでも放しはせぬ。行いでならぬ事ならばサア〳〵殺して下さんせと戀の晝天情のわな詮方つきたる折からに。詞ヤア不孝者めそこ動くなと立出る七太夫杖ふり上て勘平が。脊骨も折よと打すへ〳〵。怒に涙嚙せて。詞ヤイ。人でなしの畜生め。年寄た親を捨。かはいそふにあれ程迄戀慕ふ女房を。置去りにして家出するからは。扨は己東の在番中。君傾城にたぶらかされ。末は夫婦にならふ抔と。くさり合ふたやつへ心中立。親の添せる女房の顏見るもいやに成り。寺へいたとは夢にもしらず。母の別れを悲しみて。喪に入るとはア、、若い者の奇特な事。學問させた一徳と。心で思ひ折節は。人にも咄して悦んだが今ではくやし

い面目ない。六十に余る親迄をたわけにする。論語読の論語しらずめ。忠孝は車の両輪。親に孝なき者は。必君に忠なき本文。最前もまだ／＼と鎌倉へ出て奉公稼。出世がしたいとぬかしおる。コリヤヤイ。忠臣は二君に仕へず。心有侍は追腹さへ切ではないか。主と頼んだ塩冶殿。殊に新参の様には思召ず。格別の御厚恩お取立に預つた。其大恩の御主人に。別れて三月に成ならず。御恩を忘れた道しらずめ。おいとしや塩冶殿。短慮といふはいふ物の。能々立ぬ譯有ばこそ。殿中での御鬱憤。詞其鬱憤も晴し給はず。あへない御最期お家の斷絶。目ざす敵の師直は。れい／＼と徘徊するを。うぬらは無念な共何共思はぬか。塩冶の家來も數百人。榮耀榮花に育置は。まさかの御用に立ん爲。飼かふ犬も主の爲には恩を知仇を報ふ。城渡しの折からも。よもやすご／＼とは立退まいと思ひの外。由良ノ助を始として。侍らしい根性を持たやつらは一人もなく。牛旁程な尾を振て逃かゞむ。犬に劣つた蠅蟲めら。朱に交れば赤ふ成と。己も性根が朽たか。コリヤ同じ旅立でも。お主の敵が討たい。鎌倉へ行たいと願ふなら。此家屋敷田畑を賣はらひ。乞食非人に成迄も。貢で敵討せてやる。形は産ど心は産ぬ。己が様な人でなしを子に持て。年寄の業さらすより。死だ姥は仕合者。チヱ、憎や無念や腹立やと。髭抓んでにじり付。怒の顔色朱をそゝぎ。こぼす涙は夕やけに。雹を降すがごとくなり。勘平が身はしめ木にて。油ぬかるゝ苦しさせつなさ。由良ノ助と言合せし敵討の計略を。明して怒を宥めふか。イヤ／＼／＼一旦武士が云堅し。

詞は金鐵金輪際。天が崩れ地が裂ても。密事は口へ出さじと。堪ゆる辛抱は丈夫にも又。いちらしし。早刻限も晝下り兼て約せし由良ノ助。跡に從ふ佐藤與茂七。人目を忍ぶ薦僧出立。門前に佇て。吹そらす。相圖の尺八。肝に答へて勘平がかけ出さんと身繕ひ。詞ヤどこへ〱、此親が目の黒い内動そふか。己が意地を立ておれば。此親は六十年。云出した事變せぬ片意地。サア一寸も動いて見よと。親子の愛も鮫ざやの。鯉口くつろげ奥齒をならし。詰寄り詰寄る怒りの涙。夫としらねば表には。猶吹立る尺八に。勘平はたまり兼。差添拔手も見せばこそ。腹にがはと突立れば。あはてふためくお春が介抱。我づよき父もハツト顛倒。手負は屈せず聲はり上。詞表にござる御兩所樣。御入有て勘平が。身のなる果御見屆下さるべしと。いふ聲不審と兩人は。笠脱捨て内に入。此躰見るゟヤア。何故の生害。なるぞと驚けば。手疵も厭はず身をへり下り。詞ハヽヽ面目もなき御對面。御存の拙者が身の上。母の喪を相勤。昨日迄寺に有しを。與茂七殿の御出にて、けふ鎌倉の御出立。御同道仕らんとの契約。あれなるは父。是なるは云號の女房ながら、神文の密事なれば聊口外せざる故。夫とはしらぬ父の怒り。お主の敵討もせで。奉公稼剩親女房を捨ると有ての打擲。密事を明せば神文に背き。明さねば鎌倉へ。出立叶はぬ身の因果。詞一味の衆へ言譯の此切腹と。血汐に爭ふ無念の涙。聞て驚く由良ノ助。詞亡君の敵討は假初ならぬ大、義といひ。譜代相恩の家の子さへ。恩を忘るゝ此時節。まして新參の貴殿なればと。念に念を

入過せし。由良助が詞を守り。道を立義を立る。御親父へ深く隠し。此時宜に及びしは由良助が一生の誤り。あつたら武士を殺せしは殘念至極と後悔涙。七太夫は飛しさり。詞 扨は承り及びし大星殿にておはするよな。某こそ勘平が。親と名乘も面目ない。只今の詞の端々察する所。一應敵に油斷させ。一味の臍を堅め置。不意討んず謀。か丶る大事は親子の中でも。明さぬ筈といふ所へ。氣の付ざりしは我愚昧。片意地に云募。腹切せたは此親が手をおろして殺した同前。無調法共。誤り共。云譯もなき老の命。御兩所の手に掛て。殺してたべとかきくどく。勘平苦しき息をつぎ。詞 親父様の御得心。今のお詞聞たるは。此上もなき身の歡び。コリヤお春。我迚も岩木ならねば。慕ふてくれる志。嬉しうなふて何とさせふ。去りながら。大事をか丶へし身の上なれば。執着を殘さじと。心で心を誡て。態靜面持なせしは。主人に仕ゆる武士の義理と。諦めて了簡せよ。といふに猶更しやくり上。其お詞も聞からは。恨はさら／＼なけれ共。何をいふても此深手。譬難面お心でも。豆でござればどふぞして。添れる様にもならふかと。心の賴み佛神を。祈る力も有物を。嬉しいお詞今聞て。今別れるとは何事ぞ。詞 最前も村の衆が。親孝行な勘平様。廿四孝の數がふへて。廿ごかうの光がさそと。いふた詞が何とやら。氣に掛たも今思へば。物のしらせで有たかと。譯も涙に取乱し身もうく。計に見へにける。倶に不便と由良ノ助。手負の傍に立寄て。詞 其元の切腹。犬死とばし思ふべからず。數百人の家中の內。高祿を穢したる沖田將監。斧九太

夫を始。手の裏返す不義表裏。漸殘る四十余人も。首尾能敵討迄の艱難を忍び兼。心替りもあらんかと。是迄心安からざりしが、貴殿の義心を聞傳へば。一味の者の心魂にしみ渡り氣を引立る良藥妙劑。夜討の先駈高名には遙勝りし手柄なれば。詞今迄の馬廻り。百石の知行に。二百石加増して。殿の近習に立身させん、せめてもの思ひ出と。鶴の一聲身に餘り。三人アットひれ伏ば。與茂七は手負の耳際。詞コリヤ勘平。敵を討んと樣々に。骨を折ても離れ物。若も敵が病死するか運盡て返り討に討るれば。末代迄の業さらしと。思へば夜の目も合ぬぞや。こなたは先へ腹切たて。大星殿の御褒美に預り、立身加増は尸の譽。人は一代名は末代。ヱ、浦山しいあやかりたいと勇猛血氣の兩眼にはら／＼／＼と。こぼるゝ涙。勘平は目を見ひらき。詞イヤ／＼體は存命ても、亡君の御恩を忘れ。敵を討志のなき奴原は。死だも同前。勘平が身は死る共魂は死ぬ／＼、彼唐土の伯有は。死ても敵を取殺し。我朝の菅丞相は鳴雷となつて恨を晴す。見よ／＼勘平が魂魄は、東の方へ飛去て。主君の敵高師直夜討の時節を待べしと。にうはの相貌引替り、眦さけて髪逆立、腹十文字にかき切って。臓腑を一つに抓出し。すつくと立て眼も閉ず、目にこそ見へぬ魂魄の、虚空に上れば亡骸は。どつさり倒るゝ武士の。最期の念ぞ。醜しし。父は人目を恥らひて。泣ぬ顏する氣はくら闇。二人の義士は心根を。思ひやつたる涙の熱湯。お春は有にあられぬ思ひ。死骸の刄物取直し、自害と見ゆるを七太夫が。押留ればイヤ／＼。詞せめて跡から追付て。

未來で夫婦に成が樂しみ。死せてたべと身をあせれば。七太夫はこたへ兼。詞ヲ、死にたいも道理じや。日比恋しい〳〵と待に待た勘平。適歸つてさつきには。鎌倉への旅立さへ。ほいながつて留た身が。死で退たりや猶更に。付て行たいと思やるは尤じやが。コリヤ。よふ物を合點せよ。直な様でも生れ付。意地のはつた悴め。今の最期の詞では。死でも未來へ行はせぬ。敵討が濟迄は。魂は此世を去ねば。そなたが今死にやつても。三途の川や死出の山で。一人うろ〳〵迷ふで有ふ。思ひ留つてくれやいと。強きはけつくむづ折の。泣出してはとめどなく。涙。淵なす計なり。見る目にたへ兼由良助。落たる刄物取上て。詞長松の本に淸風有。御親父の育ながら故。類ひ稀なる忠臣烈女せめて一人は存命て。舅をはごくみ亡夫の跡吊へよと。お春が黒髪。切て添たる亡骸を。野邊の送りの營と。心をこめし一包。先立も又。後るゝも何れ殘らぬ。死出の旅立。詞さらば。おさらば。おさらば。さらば。人目を忍ぶ。天蓋や涙にしめる歌口も。鶴の巣籠子を思ふ。親の心は東西分ぬ。虚空の闇。添れぬ妹脊の　戀慕流し。袖の乾ぬ。五月雨。空にも聲の。山子規。鳴音も若や魂の我を呼かとふり返り。倶に血を吐。うき思ひ。なく〳〵別れ三重「行空の

第七

實鎌倉の眞中に。金銀融通名にしおふ兩替町の。裏店に。元手も細き元助が。凌兼たる盆節季雨

や霰と降かゝる諸方の書出し懸乞に。内をもぬけのから衣。氣の毒顏に女房おせき。聖靈棚の拵に。蓮の葉苧がら索麪を佛へ豇豆瓜茄子。我のみ世話を燒米や。思へばつらき溝萩の。いつかは時に靑梨子林檎。取ちらし門口より。によつと這入る大屋太郎兵衞お内義樣嘸取込。詞ホヽ大屋樣能こそお出マア〱是へ。詞イヤ上つて居られぬ物節季　元助殿はまだ歸らずかと。いふに女房淚ぐみ　詞アイ御存の内のしだら。宿に居ては詰らぬ迚。今朝出て今に歸りませぬ。日比から小氣な人と。無分別でも出やせぬかと。案じ過しがせらるゝとおろ〱淚に貰ひ泣。詞アヽそふ思はしやるも道理〱。世に有時は。塩冶判官樣の御用人片岡傳吾樣の御家來の元助殿。不自由な目には合ぬ人一昨年の騷動に。お家が潰れてお主の御難義。身に引受ての世話苦勞。奇特な人じやと思ふに付。わしも若い時から傳吾樣に御奉公。年寄て武家の奉公は氣苦勞にござります。町方へ引込で靑菜小菜でも賣たいと。お暇を願ふたれば。久々律義に勤た御褒美迚。お金を戴き其上に。お世話を以て七年前から此大屋役。家内がどふなれかふなれ暮して行も皆御蔭。寐た間も忘れぬお主の大恩。所に降てわいたお家の災難。御浪人の憂世渡り。鎌倉上方とかけ廻りいろ〱とお物入を。爰な亭主が工面才覺皆手前の身に引受詰り〱し此節季。俱々に世話せにやならぬ。ソシテ出拔ても濟まいがシテマアどこへ行てゞ有。アイ大方旦那のござらつしやる奧町の貸座敷へいかれて居るでござりましよ。そんなら往て連て來ましよ。アヽ近年の陽氣の惡さ。世間一統ぎつちかは。借金

負ぬ者はない。コレかならずきな〳〵思はしやるなと口にはいへど跡先を案じながらに出て行。女房跡をふしおがみ。昔のよしみと私らを。此所へ呼取っていろ〳〵との心付。店賃の事は云出さずまだ其上にいかい世話。忝ふござんする。詞ほんにソレハそふと最前から。閙しさに取紛れて樣子も聞ぬ。此妹御はどふなされたさ。一間に向ひ申お元樣。詞寐て計りござつては。猶更病氣に障りませふサア〳〵是へと呼立られ。アイと返事もしほ〳〵と思ひ有身の面瘦て心も濟ず座に着ば。女房態いさみを付。詞ヲヽお心持も能かして。思ふたよりお色もよい。殊に明日は大事の中元。手水つかふて六ケ敷ば櫛巻にでも取上なされ。私も髪を片付て手傳ふて上ましよと。諫められても諫ぬ顏いろ〳〵と御深切に氣を引立て下さんすれど。どふでわたしはこがれ死と覺悟極ておりまする。今更いふではなけれ共。詞兄樣は傳吾樣には譜代の御家來。其妹のわたしなれど。お過なされた親旦那樣のお世話にて。塩冶樣の部屋方へ。初は輕い奉公も。奥樣のお目にとまり有がたいお傍の勤。どふした緣か傳吾樣。詞侍らしう。急度して頼もしいお人じやと思ひ付たが癪の種。人目を忍びたまさかに。耻しながら打明て。思ひのたけをいふ度に。ふ義は屋敷の御法度。詞重ていふなと取合ず。とかふする内お家の災難。今御浪人のお身なれば。當り障りも有まいと。度ゝ送る文玉章。色よい返事も有事か。詞前とは違ひ元助が世話に成流浪の身。時節を待との事故に。うか〳〵暮すもモフ三年。一昨日上た文のお返事。奉公稼の口もなく。主從貧苦にせ

まる此身。緣がないと諦めて。さつはりと思ひ切。似合の方へ嫁入せよと。コレ細々との此お返事。見るとわたしは胸の痞。まだも頼みに是迄は。兎や角思ふた綱も切。思ひ切とは胴慾な　むごたらしい此御返事　あぢきなき世と一筋に胸を極ておりまする。つらい世帯に兄様もお前もいかい苦勞の中。榮耀らしいと思召恥も人目も外聞も。惚たが因果と諦めて。了簡して下さんせとワツト計に泣しづむ　おせきは脊を。撫おろし。詞正直なお心からそふ思召も無理ならねど。木折に行ぬは戀路のならひ。必ずきな〳〵思はんすな。マア〳〵奧へとすゝめられ淚へながらに立て行。おせきは跡を打詠め。ひよんな事言出して病氣の障りにならねばよいがとつふやきながら取片付座敷のごみは。拂へ共拂はぬ懸に。呵責の鬼味噌。ちよこ〳〵通ふ足豆はみそやの又作門口から。齒のない齦喰しばり。詞コレかみ様。御亭主はまだ戻らずか。アイ〳〵請取金が間違ふて夫でまだ歸りませぬ。歸り次第此方から急度持せてコレ〳〵〳〵其口上も聞飽た。必違へて下さるな。いき廻つて來ませふと。云捨て出て行。引違ふて仕事師長藏。おせきは見るより。詞ヲヽ長藏様度ゝ御苦勞。イヤお前樣の前でござりやすが。慮外ながら其日過のわつちらが身の上。そこの使かしこの飛脚。使のめされ踏れてや立ない。立ない〳〵じうわりと立て貰やすべい何の事だ呻しの樣なこわめきちらせば。詞ヲヽ皆こな樣のが尤拂ふまいといふにこそ此方も懸を取集て晩迄には急度差引。いき廻つて來て下さんせ。ヲイそんなら後に來た時に。コレいざこざはいはせぬぞと一寸遁れ

に三寸釘。裏を返して出て行。又も跡から二人連レ。米屋の四郎九郎薪屋の才八。財布かたげて内に入リ。詞アイおかみ樣ン御取リ込でござりませふが。段々のたゝまり委細は通に記した通リ。何ン分ンにも此節ッ季はアイ此薪キ屋もお頼み申シます。ハテお拂ひさへ濟ミますれば。又九月か惠美須講前迄は。隨分御用に立テませふと眞綿で出るを笑顏で受ケ。詞アイ〳〵主シもまだ歸りませぬ後チにござつて下さりませ。ハイそんならお頼ミ申ますと打連レ立ッて出て行。跡へ入リ來る小紋の羽織。いはねど見ゆる世利呉服。平野屋の清兵衞がすつと這入ッて。詞ヤレ〳〵けふは蒸くるぞ。おゑ樣慮外ィながら茶でも水でも一トつおくれ。アイと答へて女房が。汲で出す手をじつととらへ。詞ほんにゑらじやきよといもんじや。これおゑ樣ン お前の樣なト一の代ロ物は。氵にも丁にもまの女ナ形にもすつきりと口印シ。ほんに付ケ上しに成ル迚もお前故なら厭やせぬと目を細めて寄リ添ば。ホヽヽマア清公樣ン久サしいもんだよ。そしてマア何ンの事やら大ィなし譯が知レぬぞへ。知レぬとはヱヽやぼな。爰な内へは折リ々仲ヵ間の者も見へれば。大方タ覺へて居なさりそうな物。コレわしらが店の相ィ詞。ト一とは上といふ事。氵は深川丁は丁といふ字にて是吉原の替詞。まとは堺町口印シとはないといふ事。上ヱから次第に云ィつゞくれば。お前の樣な上代ロ物は。深川にも吉原にも堺町の女形にもすつきりないとの譽詞。日比ロからわしがゑらふ惚て居る故。吹ヶばちる樣な爰の内へ不相應な代ロ物。縮緬羽二重紗綾綸子。隨分利口に付ヶよふに引ヶ物分ンにしてよこしたも盜人トの晝寐。こなんをせしめる軍法智略ヶ合點しておくれるなら此上廿兩

や卅兩の代物は貸てあけるハテ帳合はどうなりとゑい加減にやる分の事。是程氣を揉心中男余り惜ふもごんすまいさしなだれかゝれば。詞ヱ、めつそふな。主の有身に轉業許りとふり放せば。詞イヱおゑ様。ソリヤお前上總木綿で情がないぞへ。主の有身といはんすりやこつちの體が秩父絹惚た事を打明て。いふき紬の上ヱ田嶋からは是非に首尾して青梅嶋と夢中に成て抱付女房は持おまし。詞アレ〳〵〳〵。こちの人が歸られたソレ〳〵そこへアイ〳〵〳〵と獨狂言請こたへに。底氣味悪くうろ〳〵きよろ〳〵。狼狽廻つて迯歸る。女房吐息ほつとつき。詞ヱ、氣の揉て居る中へ榮耀らしいあたひつこい。大事の日を暮してのけたと云つゝ火打こつちこち。詞此方の人も大屋様も戻らぬ内は何をどふ聖靈棚へ御明しを。てらす生掛の老足に。走りあるいてゑいやつと尋大屋と主の元助。差荷ひたる棺桶に。くゝり付たる二升樽。蒔草の花に經帷子。どつさりおろすお上の眞中。女房はけでん顔。詞ヱ、明日は大事の祝ひ日に。いま〳〵しい此棺桶ヲ、かみ様。様子いはねば合點が行ぬ筈だ。段々と詰らぬ物前氣の毒に思ふから。わしもいろ〳〵思案しても詮方つきた折に幸ひ隣町の女衒の源六が爰の妹御お元殿を見て。勤奉公に遣ならば三年切て五十兩は出そふといふ故。ハテ差かゝつた難義の場。さつきにから元助殿にいろ〳〵と談合しても。イヤ〳〵武士の飯喰た元助聟士をかみ飢死共妹は賣ぬとの片意地。其片意地は聞へたが。借金はどふするとやつつ返しつ理詰の内に風と思ひ付た趣向といつぱ。迚も今夜は懸乞がひどくせつくはしれた事。外に

云ヒ譯ケの仕方がない故。御亭主を此棺桶へ入レて置イて死だといふて斷いはふコリャ出來たよからふと。買ツつて戻つた葬禮道具と。聞イて女房がとつけもない。詞いま〱しいそんな事がコリャかゝよ極て我レがそふいふで有ラふとは思ふた。おれも猶好キはせねど。絶躰絶命千ン番ンに一チ番といふかね合の場じや。夫レでいかねばコリャかう〱じやサア大屋樣。油斷して懸ケ乞めらに樂屋を見られてや水の泡。併素機嫌では出來まいと。酒カ樽はつして茶碗でぐい呑ミ。大屋も倶ダ引キ受〱。詞此勢ひにやつてくれふと棺ン桶を佛ツ間の内へかき込ンで。襖びつしやりさし當タる。金の才覺當惑に。心ならねど女房も。是非なく一ト間へ入リにけり。表口から懸ケ乞共仕事師長藏。味噌屋の又作。薪屋の才八。米屋の四郎九郎。平野屋清兵衞。追〻に來重り。欲にはたはむ弓張の。挑灯並べて上り口。詞いつ來ても取レぬ懸ケサア是からはめつきしやつき。留守遣カはずと出やしやれ〱と口々わめけば一ト間より。涙片手に。女房おせき。詞ヲヽ皆樣折角お出なされたに。こちの亭主は諸方の懸ケを苦にやんで。持病の癪が取リつめ。歸ると其儘つい頓死。悲しい事をしましたと。ワツトはいへと出ぬ涙。袖で隱して紛らせば。懸乞共は口々に。詞ヤ何ンといはしやる御亭主が死ナれたとや。ハアヽ、南無三寶とは云イながら。いふかしそふに見廻せば。女房猶もしやくり上。詞お馴染のお前方。御回向なされて下さりませと。一間の襖押明れば。聖靈棚の正面ンに。帷子掛ケし棺桶突居蒔草の枝の一本ン花ぷん〱匂ふ。五種香に。大屋は鼻をぴこつかせ。りん打ならし哀げに。詞夫レ人ン間ンは老少不定にして無常轉變の界なれば。何ツれ

か是を遁るべし譬金持たりといふ共、誰か百年の形體を持んや。樂は又苦しみと成り、借金或はむちやと成り。切金と成り年賦と成る。誠に此理り眼前也といへ共。人皆是を辨へず、故に佛道に心を入れず。徒に惡業のみ作つて、ない金を取らんとせがむ。歎の中の歎なり。然るに彌陀如來十方衆生の爲に德生往生の願を立て、借金の手詰なる人を、淨土に引攝し給ふなり。穴賢々々と引入樣に稱れば懸乞共は氣もめいり、詞ア、扨いとしや氣の毒や南無幽靈出離生死頓生菩提。我々が爲には損しやうぼだい。南無あみだ佛、南無妙法蓮花經、南無あみだ佛南無妙法蓮花經と宗旨々々の手向草。長藏一圓合點せず、詞エ、馬鹿々々しい何の事だ咄しを繪に書た樣な途法もない手合じやないか。借りた物を拂はず死ぬるなら前廣に死だがよい。明日のないけふに成つてごねるといふべら坊が有るもんかい。おいらが懸を踏のめし極樂へ店替へして、御大そうに閻魔樣を親分に持つた迚こはがる樣な手合じやないぞよ。水虎の屁を見る樣ないま々々しい何の事だ。エ咄しの樣なおへねいとんちきじやないか。シタガ五貫や十貫で跡から付てもゐいばれまい。百貫に編笠鍋釜疊を付立て分散して取らにや置ない々々。と欲の角鷹又作始め。皆が其氣になりわめくを、清兵衛押へてア、騷まい々々、詞シテお前方の懸は。メ高でどれ程ごんすと十露盤をしやに構ゆれば、詞アイ此長藏は日雇代飛脚賃、押くるめて九貫八百。わしは味噌代壹兩二ぶ二朱。薪代炭代廿三貫五百八十四文、此四郎九郎が米代、三年以來の不足、八兩三分六百廿四文ヲツトよし々々。皆押くるめて金にすれば。

両に五貫二百卅二文の、銭相場にして。ヱ、十六両三分と六十五文其上ェへわしは又。爰な亭主が旦那の着料にする／＼と都合。三十二両三分十三匁八分六リン。両口合して四十九両三分六匁三分六リン。マ、五十両といふ金高、分散してもとこの端へも届まい。わしが相談に乗て下ダんすりや。お前方タの懸ヶの分ンは。此清兵衛が立ァ替ェるといふは耳より膝すり寄セ。詞 コリヤ面白ロい談合。シテこな様ンが其金を立テ替る謂はどふです。ナアいはれといふて高カがかうじや。爰のかみ様に我レら首だけ。是迄口説ど鷹と雉。けん／＼とふられたれど主シの有ル身と辛抱したが。待テば甘露の日和有リ。亭主が死だは物怪の幸。是から我らが妾宅にして。囲ひ者と出掛ヶふと聞ィて皆〻コリヤ尤。詞 互ィに妻なし夫トなし。譬の通り明ィた口へ勿論直クに祝言して。懸ヶを拂ラふて貰ィたい。善ンは急げじやサア／＼と。味噌屋の親父が懐中肩衣。着セてやつたる当座の花聟浮ぬ女房を。無理やりに帽子代リの。置キ手拭。傍に有リ合ッ酒樽茶碗。仲人役は米屋の四郎九郎呑だ茶碗を女房へ。さすが心も濟メやらず。いやがる物を跡先キから寄ッてたかつて手を持チそへ。詞 サア其盃キ聟君へと皆一チ同に聲はり上ヶ。謠 御子孫も繁昌御壽命もながくいきの松千代かけて。御歓の神酒をいざやすゝめん。是で祝義は納つた。仲人は宵の程。草臥直ナしに一盃とさいつ押サへつ有頂天。清兵衛はにこ／＼ほや／＼。詞 出る船有レば入ル船。亭主が死ンでも我レらが居れば。今迄の様に貧苦は見せぬ。イヤモ日比から寐ても覺ても覺メても寐ても。歌 わしが思ひは仙臺河岸の、立ァし行馬の數よりもサッサおせ／＼。どふもならぬと抱キ付ヶば。焼餅交りに惣ゝが、詞

イヨ〳〵抱付たのめ味い事頬ずりじや。ホウホウ三國一じや聟に成り濟ました。懸も濟してほしいナ。打て置しやん〳〵。最一つせいしやん〳〵。祝ふて三度しやしやんのしやん、騒ちらする物音に。桶の內には元助が兼て覺悟も遉は人情。嗔恚の炎むつしやくしや。思はず力めばがた〳〵〳〵。大屋はりんを打ならし。紛らす內に清兵衞は堪兼たる鼻息あらく。さなきたに薄きが上の帷子をつゝぱり返るに持扱ひ。詞イヤモフコリヤ〳〵どふも堪忍ならぬ。皆樣御免と女房を。引立一間へ入んとすれば。大屋心得身を背け。兼て用意の袂から笛と太鼓のヒウドロ〳〵。香爐にくべる鹽硝のハツト立たる煙の中。棺桶の蓋押明て。ぬつと出たる經帷子。額に胡麻鹽さばき髮。亭からの杖をつくりと元助が幽靈姿。見る方皆々ワア、悲しや。詞くはばら〳〵、南無あみだ佛〳〵。稱へる聲も胴ぶるひ。活た心地はなかりけり。元助は歩み寄りいとゑん〳〵たる聲音にて。歌アラ恨めしや腹立や。されば佛の敎にも電光石火の如しとは。兼ては聞ど死手の旅昨日けふとは思はざりし烏羽玉の闇より闇に迷ふ身は娑婆の愛着煩惱の。罪障深き身の上に。夫婦が中の。かね言も金故しづむうき命。詞アラうたての娑婆世界金ならたつた五十兩でかはい女房を引たくられるか。ア、金がほしいナ。歌金に恨が數々ござる。先初夜に金をせがむには諸方無沙汰といびるなり。後夜に金をせつくには是生めつたになりわめき。晨鐘の云譯は。生滅々已の懸乞は。寂滅爲樂と腹を立。嗔恚の業火火の車くるり。〳〵。くるり〳〵。くる〳〵〳〵廻る高利の座頭金。かりのうき世

に日濟貸。貪欲無慙の懸ヶ乞のせつけど呉ん大ぐれん。叫喚焦熱大ィ焦熱。無間等活黑繩の地獄の。呵責思ひしらさんと思ひ知レとしもく振リ上ヶ丁〳〵。コリヤたまらぬと淸兵衞始メ。懸ヶ乞共は一チ同に跡をも見ずして三重ヒウドロ〳〵ワア、迯歸る。時分はよしと大屋は立チ出。詞ヤレ〳〵案ンじるより產が安スいと拍子能クいきました。イヤモ是といふもお前の御蔭。シタガ一ッ生に覺へぬせつなさ。芝居でちよこ〳〵見た身振をあてずつぽうにやらかしたが。思ひの外ヵ味ふ喰て歸つたて今ン夜のせと際は越シました。サイノかう濟メば濟ム物のひよつと半バで崩れたら。どふせふぞと苦に成ッて未に癪が納マらぬといひつゝ脫す經帷子汗をふくやら着替ェるやら其間に大屋は立上り。詞わしはまだ店ナ賃ンも取リ立ず。地主シ樣から呼ビに來たれば。向ヵひ町へも行ヵねばならぬ。更ぬ內往て來ませふ今ン夜は緩りと寢やしやれ。必ス外トへ出まいぞや。お內ィ儀さらば。アイ段々とお世話樣其禮には及バぬ事とつかはとして出て行。詞コリヤ嗅よ。髮が襟へ這入ッて氣味が惡ルい。取上ヶてたもらぬかと。いふに女房がつい立ッて。押シ入明ヶて。たとふ紙。重る辛苦黑髮の。胸のもつれをとき櫛や末の。案じに元結のよりも。戾つて。氣も細く。詞申シ元助殿。いかに貧苦にせまれば迚。あられもないもくらみ事。天ン道樣が醜しい。詞ハテ役にも立ぬ諄。僞りいふもお主の爲。此上どんな目に逢ッても主人ンのお名を出さぬ樣。高ヵが死ヌると兼ての覺悟。ぐど〳〵と案じずと早ふ束てたもいの。アイと諾へて三櫛半ン。詞ヤ此髮で思ひ出した。妹めはどふしたぞい。ほんに夫レよ何やかやで取リ紛ギれ先キから忘れておりましたと。

云ィつゝ這入一ト間の内。そこ爰さがして走リ出。詞コレ〳〵お元ト様が居なさらぬ。ソシテ針箱に此書キ置キと。開イて惘り。詞ヤ何ンじや妹が見へぬか。書キ置キとは氣遣ヒな。サア〳〵讀ご氣をいらてば。行燈の傍に差寄ッて　詞此世の名殘と書キ殘しまいらせ候。及バぬ戀に心をつくし。傳吾様へいろ〳〵と申シ上候へ共。ふつゝかな私故お心に叶ナはず。思ひ切レとのお返ン事。さま〴〵心を取リ直し諦めまいらせ候へ共いかなる過去の惡緣ンにや思ひ切ラれぬ戀路の闇。生キて心を苦ルしめんよりと。覺悟極めまいらせて川へ身を投ゲ相ィ果候。ヤア〳〵〳〵と驚ロく元助。詞定メて兄様のお呵。ヤア其跡を聞クに及ばぬ。捨置カれぬ一ッ大事と。かけ出すをコレ〳〵〳〵。詞何ぼお前が追ッ駈てもどこをあてどに。ヤア知レた事。七德橋から二段橋イエ〳〵〳〵。たつた一人リでそこ爰と。尋ヌる内にはお命が有ルまいぞへ。其上お前の顔出して見付ケられては猶濟マぬ。大屋様へ早ふ知ラして長カ屋の衆を賴ミましよ。詞オヽ出かした女房早く行ケ。心へましたと出る門ト口。隱レ聞イたる懸ケ乞共。長藏を先キに立淸兵衞又作才八四郎九郎どや〳〵とわゝり込ミうぬらに旨ふだまされて。道迄歸りは歸つたが。いかにしても不思議な事と取ッて返して立聞イした。贋幽靈の化の皮。おこはに掛ケた大衒め。擲くゝれと取リ卷ば。難ン義の上に重る難義。何ンといふべき詞さへ泣女房を押シ退ケて。元助は座を堅め。詞皆様のお腹立チ尤じや道理じや。身の欲にせぬ心の潔白。去ながら白地にはいはれぬ身の上。分ンに過キたる諸方の引ッ込ミ。一ッ寸ン遁れのけふの方便。顯はれたれば百年ンめ。云ヽ譯ケもせず恨ミもなし。サア存分ンに計ラはれよと。忠義一圖に身を惜ぬ

所存の程ぞ健氣なる。五人の者共口々に。詞ヲ、よい覺悟繩掛て代官所へ引ずれと。ばら／＼と立寄所へ。待た／＼と聲掛て。息を計に大屋太郎兵衛。元助圍ふてづつ立ば。詞ヤア一つ穴の狢親父め。逢たかつたによふうせた。きやつも一所に連行と。立かゝる鼻の先。投出す五十兩。包ほどけてばら／＼／＼。ヤアコリヤ金じや小判じやと。手々に集て。詞コリヤ早速お拂ひが出ました。しかし御念入られ惣うを皆濟。ヲイノ。じたい爰の御亭主様がお正直で。サレバサ。お内儀様が物和らかで。イヤモ別して大屋様が結構で。ヘ、、、、、。ハ、、、、、。お有がたふおござりおます。サア皆ござれと追從たら／＼。誤り入て立歸る金の威光としられたり。夫婦は夢に夢見し心地。合點の行ぬ今の金。サイノどふした事で急に才覺。いかにも此大屋が才覺の。品玉の種見せませふと。表へ出て連來るば。詞ヤわりや妹のお元。ほんに豆で居さしやんしたは。どふした譯と尋に太郎兵衛。詞最前爰を出てとつぱかはと向ひ町へ行ふと二段橋を通り掛つたれば。若い女が橋の上から身を投んとする所。不便な事と引留て。顏見れば爰の妹御。どふした事と樣子を聞ば。叶はぬ戀に身を捨て。心中を立るとは尤な樣なれど。死で花實が咲でも有まいと。樣々に異見しても。書置を殘して出たれば。内へは二度歸られぬ。死せてくれとのくどきど。イヤ／＼。夫ゟは差當つてお主故に兄貴の難義。いつそこなたの身を賣て。借金を濟してやれば。こなたの思ふ傳吾樣へ。猶心中に成ではないかと。いろ／＼と異見して漸と呑込せ。兼て頼んだ

女衒の方へ其譯咄して金請取り。火急な間を合しました。詞此子は直に廓へやるを暇乞させふと思ひ、女衒に譯を呑込せちよと連て來ましたと。聞て驚く元助夫婦、お元は涙の。顏を上ヶ兄様の御難義おせき様のお心遣ひ、大屋様迄さま〴〵に。詞心を碎く其中で榮耀らしいいき過た大膽者と嘸や嘸。お憎しみもござんしよが。跡先忘れ一筋に夫を思ふ一念は大蛇共成り石共なる佐用姫様や清姫様に。姿容は及ばず共心は。おさ〳〵劣らじと思ひ。請たが女の一念。詞やたけに思へどお主筋。恨の數も打付には。いはでの山のくちなしの朽果る共魂は、生替り死に替り添通さんと思ひ詰。詞橋の上から一ト思ひに飛込む所を留められ、死も死れぬ身の因果大屋様のお世話故。身の代の金が御用に立は嬉しけれど。聞も悲しき君傾城。多くの人に肌ふれて身を穢しなば此世は扨置あの世でも。傳吾様が女房によもや持ては下さるまい。花に鳴鳥藻に住蟲も定る夫は有磯海。深き歎に身をしづむ。我は鮑の片思ひ思ふ殿御に添れぬは。神の咎か前の世に作つた罪の報ひかと。思へは身もよもあられぬとくどき立〳〵。かつぱとふして託泣いた〳〵。しくも不便なり。おせきはいたはり抱起し。詞ヲ、日比からく〳〵と思ふ心が届ぬ迚。突詰た戀煩ひ。夫さへ有にあられもない。思ひ設ぬ勤奉公。悲しうなふて何とせふ。道理じや〳〵尤でござんすわいの。コレ申元助殿。あまり見る目がいぢらしい。替りに往て濟む事ならわしをやつて下されと。縋り歎ば元助は。默然として居たりしが脇差取り出し拔放すを。皆々あはてとゞむれば涙をはら〳〵〳〵と

流し。詞女房や妹を。傾城に賣根性なら貧乏はせぬはやい。輕ふても武士の家來。我恥は主人の恥。主人の恥は殿様のお家の恥と思へば。我身で我身が麁略にならず。非道な金は設まい。お主にひけは取すまいと痩我慢張通し。身は賤しき陪臣でも忠義は誰にも負まいと。心で自慢して居たが。詞借金負ふて業さらし箸折かゞみの妹を。勤奉公さす様に。成下つたも下司の智恵。ふがいない我故にひよんな難義を掛ると思へば。現在の妹にも。どふも顔が合されぬ。放して死せて下されと。義を立通す男泣。妹は目を泣はらし。イヱ〳〵〳〵。詞不仕合せな我身の上ヱ。死る道なら私か先へ。イヤ〳〵おれがイヤ私と。死をあらそふ兄弟を。太郎兵衛中へ割て入り。詞ヱ、役にも立ぬ未練の覺悟。師直故に亡びたお家。陪臣のこちとらさへ。己やれ喰付て成共と思ふて居るに。御主人の傳吾様。下郎の我々に打明て。おつしやりはなされねど。お主の敵をあんかんと。余所に見てござらふか。本望遂た其上は。存命ぬお身の上と諦めてござる故。お元殿の戀を叶へぬも。跡の歎を掛まい爲の。深い思案と見た目は違はぬ。生ながらへて二人共。身を粉に砕いて一方の大事の御用に。立ふと思ふ心はなく。犬死するが武士の家來か。忠義になるか。譬ていへばアレ。あの佛壇にとぼした燈籠。油と燈心の持合で。燈る内は明るい。今の身分でいふて見れば。傳吾様は油こなたは燈心。主人の油のあらん限り。家來の燈心は。燈されるが持前。所を暗いといふてはは燈心をかき立。埒が明ぬといふてはかき立。段々とかき立て。燈心がなくなれば。油が有て

も眞暗闇。高が浪人の身の上。元手の細い燈心一本。世に有る人の蠟燭程には光らぬ筈と諦めて。じつとこたへてかき立てず。敵をお討なさるゝ迄。こなたの體を有り明行燈。御主人のお身の明りを。立て上るか忠義といふ物。よふ思案して見やしやれと。眞身の異見いや大屋。いはさぬ理詰。町内で。口利親父としられたり。元助ハット氣を取り直し。詞ハア誤つた太郎兵衛殿。貧苦にせまる身の落目。武士の奉公した者があられもない界業と。思ふたは皆愚痴。大星様を始めとして御家中のお歴々。さま〴〵に身を略し難行苦行なされるも。こなたやわしが幽靈の狂言仕たり妹に。勤奉公さすも皆。それ〳〵のお主のお爲。詞火に入り水に入る苦しみも。御本望お遂なされる爲の足代。敵の首を見る迄の辛抱と思へば。悲しうも何共ない妹泣くな。アイ〳〵〳〵。今のお咄し聞ましては。つれないのもやつぱりお情。お情序のお情に。わしが賣られて行先へ尋てござつて下さる様。傳吾様のお出の時。おせき様のお執成。くれ〴〵お賴申ます。それが此世の思ひ出と跡は詞もないじやくり。果しなければ太郎兵衛が。サア〳〵ござれと引立る。そんなら兄様おせき様。詞ヲヽ得心して往てくれるか。隨分御無事でおさらばと。おせきが涙村雨に余所の。袂を。三重しぼりけり

第八　道行月夜の浮涙姿

謡實や浮世の業ながら。殊につたなき海士小舟。二人渡り兼たる夢の世に。住むとやいはんうたか

たの。汐汲車よるべなき。身は蜑人の袖倶に。思ひをほさぬ。心かな。かく計へがたく見ゆる世の中に浦山しくも澄月の出汐をいざや汲ふよ〳〵。夜汐をはこぶ。蜑乙女。思ひ思はれ兄弟の。折にふれたる名なれや迚。松風村雨と召されしより月にも。馴るゝ須磨の蜑の。鹽燒衣色替て。かとりの衣の空だきや。袖を結んで肩にかけ汐汲爲とは思へ共よし夫迚も女車。寄せては返る片男浪。芦邊の田鶴こそは立さはげ四方の嵐も。音そへて。夜寒何と。すごさん。更行月こそはさやかなれ。汲は影なれや。燒鹽煙心せよ。さのみなど蜑人の。うき秋のみを過さん。罪なくて。配所の月を。身の上に。隙行駒の足早く。行平の中納言三年は爰に須磨の浦。汐汲業を遊覧と。御立烏帽子狩衣の。所に目立風俗は。月夜烏のうかれ聲。酒のさの字は酒屋のさの字。呑でゆらるゝ由良の助。大磯通ひ道草にそゝり立たる俄の出立。おふさおさのが汐汲は藝子姿のしどけなく。倶に圖に乘る牽頭の松八。人の譏も白張の。袖も露けき仕丁の姿。揚屋の亭主清助も。同し出立に長柄の傘。さしも故有る武士の思案も智惠も長なはて。さまよひ出るぞ是非もなき。其大磯の。故事も。譬ていへば今戸橋。堀の船宿聲〴〵に。舟か〳〵と呼立て。客の歸りを待乳山。金龍山とは其昔。里に名高き大盡の。遣ひ捨たる金の精龍と變じて此山に登し故の名なりとかや。道哲の鉦音に聞。其名高雄の名にめでゝ。しるしの紅葉色深く。松の翠の一群に。アレ淺草の地藏經とうとくも。大慈の誓ひ蔭頼む。枯たる木にも花咲す六つの花びら白たへの。富士の高根も。見へ渡り。妻手をはるかに詠むれば。

あだしのゝ露消る時なく。鳥部山の煙立さらてのみ住はつる。例を爰に古塚原。されば男女の変りは。互に白骨をいだくとあつちの東坡かしかれ共。其身も迷ふ色の道。土手先稲荷茶屋町の竹輿屋を過て見渡せば。最中の月の影清く。置もかへぬをいろ〳〵の。花に染なす野路の露。人の心もうつり氣のうはき大盡ぞめき客。繕ふ襟の衣紋坂。大門口の人群集。外に類ひは中の町。茶屋の門並賑はしく。客待君の出立ばへ。物いふ花の花くらべ。目出度内の行燈に。丁字頭の千山といはねどしるき品容。客松嶋の情しり。見るからぞつと戀風の身にしみ渡る初風や　實此里の指折の。數は一二三ツのつと心もととく胸の內。すき通りたる玉菊にゑびらの梅の先がけて　勝色見せる花の顔。すんとずはへの繕はぬ。其物好を菅原の。神ならぬ身は待宵に。簪抜て畳算。思ふ誠の一筋に。當るは長か半太夫。客の氣象とはからひて。四十八手の手をくだき。じつと靜が仕こなしに。かはらぬ色や若松の。春めく姿名山の。器量よし野の山櫻。花も實も有花扇　きやしや風流のたしなみは。若手につゞくせいもなし。谷の戸出る鶯の鳴音ゆかしき此春の。千代を壽く雛鶴や。其鶴の尾のはで姿。往來の人も三ツ花の。餝る錦戸七綾に。花紫の雪の膚。見るも嬉し野通ひ路に。人待顔のかたらひは。和國唐土隠れなく。直江し門の突出しは。瀬川瀧川塩衣と。勝れし君の全盛を松坂こへた。エ藝子牽頭がそゝり立て。人目構はぬ浮拍子。由良大盡の揚屋入り。目覺しかりける三重へ次第也。

第九

歎京の女良に長ヵ崎衣裝。江戸の張を持タせて。大坂の揚屋で遊びたいとは僻事よ。江戸の女良に江戸衣裝。江戸の揚屋に江戸のはりツイツイノツイトサ。[久]詞イヤ〳〵御亭主押サへた〳〵。さつきから此松八が獨かぶり。貴様は大ィなし色に出ない。[猶]ハテめつそふな。けふは由良大盡様ノ月見の約束アレアノ奥庭には雪の山を拵へ。此所には一チ面ンに櫻の木の作り花。けふの名月を取リ合せて雪月花の思ひ付キ。神武以來ない圖御趣向。取リ付キ揚屋の此尾張屋清助が。大磯中への外聞と氣を揉だ其上に。貴様とおふさ様におだてられて俄のお供。素面ではいけまいと内を出るから下地が有。色には出ねどよつ程來て居る。アレ〳〵モフ旦那もとろ〳〵なされる酒事は置ィたがよい。そこらは貴様も野夫では有ルまい。[住]コリヤ松八亭主めが粋ごかし。此由良ノ助を盛潰して置ィて。はづそふとは横着者。其手は喰ぬ呑せろい〳〵。[久]サア旦那の御上意。呑ムか呑マぬか返答はド、どふだやい。[住]コレハ術ない。そんならおさの様ちよと頼ましよ。[琴]お間ィならお手元ト見いんしよ。[猶]コリヤたまらぬ。まだ太夫様も見へない内潰れては濟ませぬ。[琴]ほんに太夫様はどふして遲ひお房様。[夏]サイノ方々茶屋揚屋に思ひ付キのけふの趣向。ちよつと御らふじて下さりませと。中ヵの町で呼れなんして大方ヵ松屋か駿河屋にで有リんしよ。[琴]アレ〳〵人事いはゞ目代置ヶと。太夫様が見へるは〳〵。[民]天津風雲の通ひ路。吹キとぢて。

乙女の姿さゞめしかイヤ（半太夫）此里の太夫職。名も薄雲の全盛に。並ぶ方なき。品容、對の禿に新造の。蹴はらす裾は龍田山、錦吹キしく道中に　笑顔こぼして内に入。〔猶〕詞ヲ、太夫様さつきにから旦那の待チ兼。お出の遅ヒ計リで此清助きついかぶりのちんころさ。〔民〕ヲ、定めし呵なんしたで有リんしよ。中カの町で呼ヒ掛ケられ思はぬ隙入。お房様ンおさの様。さつきの俄の評判。きつい物で有リんすによ。〔琴〕ヲ、恥かし。中の町へいたならば万ン里や宇八がなぶりんしよ。〔久〕リンショ〳〵りんしよ濱松廣い様でせまい。〔猶〕せまいの四郎兼平は〔久〕ア、コレいけぬ地口取リ置イて。さらば是から吞掛ケ山。〔住〕コリャ〳〵松八。おれはモフ一ッ滴もいかぬ〳〵。遅い過代に太夫に吞マせろ。〔久〕ソンナラかふさ。此盃キでは埒明カない。幸イ亭主が思ひ付キ。臺の芒に武藏野の月さ見せたる大盃。ちよつきりちよさ是をかふ持ッて太夫様から順廻し。此御趣向はさでこんしよ。〔琴〕コレ松八様笠の様な大盃キおいらがにはよしなんせ〔久〕又小ひつちよかやかましい。太夫様に上ゲふさいふさ新ン造衆や禿めらが。いつでもろくに次ない。いや應のならぬ様。いつそ氣をかへ獅子に致そ。〔猶〕コレハよかろ〔久〕サア始メましよ。太夫様マでも旦那でもいやさいはさぬ。サア新ン造衆も並んだ〳〵。笛太皷大皷小皷三絃胡弓サアよいか〳〵。ヤア獅子は爰じや〳〵。〔三人〕油断は致さぬ〳〵。〔琴〕ソリヤ由良様が間違た。〔住〕ヲットト〳〵何ンさ見事かサア始メろ〔猶〕獅子はどこじや。〔住〕獅子は爰じや〳〵。〔三人〕油断致さぬ〳〵。〔夏〕騒ぎ半ハに下女が立チ出。詞中シ、〳〵天河屋義平様さいふお方が。勝ッ手迄お出なされ。由良大盡様にお目にかゝりたい。取リ次イでくれ

いといふてゞござりんすと。〔住〕聞て悔り由良ノ助。詞何ンだ天河屋義平が來たとな。コリヤたまらぬ爰には居られぬ。コリヤ〳〵玉よ。其天河屋にナ由良ノ助は先キ程歸つたと云イ聞カせ。必ズ共爰へよこすな。おれはアノ亭座敷キに隱れて居よ。薄雲は爰に居て。若も義平が來たならば。云イくろめて歸してくれ。サア皆こい〔五人〕ハアまづお入リなされませふ。歌世にも因果な者ならわしが身じや。可愛男に。幾瀨の思ひ。ヱ、何ンじやいな置カしやんせ。〔民〕詞子供や。其天河屋とやらいふお方タはまだ勝ッ手に居なさるか。ちよつと見て來や。〔琴〕アイ。〔折〕こなたの襖押シ明ケて立チ出る野夫大盡。詞ノフ薄雲殿太夫殿と。〔民〕いふに悔クり迯ケんとするを。〔折〕引ッとらへ。詞コレ君はづそふとは胴欲な。我レらもつて樣に首だけ惚て。爰な内へ度ヒ々通ひ。幾度ヒ呼でもふり付ケられ座敷キはてれぼう。寐所では情所へ手やかさず。蟲がかぶるとあちら向キ。むごいめ見ても懲もせず。此月見も云ヒ込ンだれど。由良太盡ンが先ンじやといふておれが方を變替。面白ロくない仕内チなれど。内にはどふも居たゝまられず。牽頭や藝者を相イ手にして。隣座敷キで呑ンで居たも。そ樣の顏が見たい計リ。かふいふ首尾は大イほり出し。サア〳〵叶ナへて暮レの鐘と抱付クを押シ退て。〔民〕詞ホ、、、お前のせりふも久サしい物。幾度でも同じお返ン事。好ねばふるが勤メのならひ。〔折〕へ、夫レは餘ンり胴欲だと。無理に抱キ付ク闇雲惚持テ餘したる折からに。〔志〕詞サア〳〵召シませ〳〵。〔伊〕蟲買しやんせ〳〵。〔志〕蟲の名所好キ人トの尋チくるす野三室山〔伊〕袖をかたしく手枕に。〔志〕伏見。〔伊〕深草。〔志〕野嶋が崎。〔伊〕嵯峨野宮城野。〔志〕高カ津の宮。〔伊〕數々多き其中カに〔志〕限りも見へ

ぬ武藏野の〔伊〕桔梗かるかや女郎花〔二人〕葉に置ク露の玉蟲や野邊の錦の機織蟲。招く薄の穗に出て。人ト松蟲の夕暮は。〔伊〕心の駒の轡蟲。〔志〕我レのみいさむ。〔伊〕鈴蟲のなるか。〔志〕ならぬを〔伊〕餘所目にはどうかかうろぎ秋津蟲思ひ亂れて鳴蟬よりも。鳴かぬ螢の身をこがね蟲まかぬは〔志〕里の油蟲〔伊〕びん／＼ひぞる。〔志〕毛蟲には〔伊〕女良様方も持テ餘し。胸の痞や〔志〕尺蠖〔伊〕いなごといふてふるならば。さらりと思ひきり／＼す〔志〕召シませいとぞ〔伊〕しやべりける。〔折〕ヤ何シだ色事の最中に邪魔をひろぐのみならず。緣機の悪ルい蟲づくし憎いうづ蟲蠅蟲めら棒ふり蟲を振舞んとはつたとにらめば。〔伊〕詞ホヽヽ先、からあれで聞キますれば。いやがりなさる太夫様へ無器用な口說様。成ル戀もならぬとは餘ンり笑止に存シますから女良様ン方のなびかんす大切ッなる祕事口傳御傳授致そと存まして。夫婦連レの蟲賣りお氣に入ラねば歸るぶん。サアこちの人トござんせ。〔志〕ヲヽ。緣ない衆生は度しがたし。さらばお暇申ましよと立タんとすれば。〔折〕アヽコレ／＼／＼氣の短い。そふいふ事とは露いさゝか存ジ申さず。無禮いふたは我レらが誤り。女良をなびかす祕事口傳ンとは耳より。コレサ先生。賴む／＼。〔伊〕そんなら夫婦が馴初の咄しが直ッにお前の後學。恥しながら私も大坂の新町で。扇屋のあげ巻キ逆花をふらせし勤の身、〔折〕ハテノウ／＼。〔志〕拙者めも又二才の時から。女良は勿論後家娘。妾お物師乳母婢。色一道の譯知リ自慢、こいつめに首切ッ。上る程に蹴る程に。親父に隠れてうかれ出〔折〕すばいきり／＼。〔伊〕初メて出、合ふ揚屋の二階。〔折〕ムヽ定めて二人が相イ惚レにて互ちん／＼逢ひのお手枕。しつほりと寐たか／＼。

〔伊〕イヽエイナ初對面から粹自慢。しこなしふりが氣に障り。座敷キを明ケてついと立。〔志〕跡には我レら只一人リ。モフ來るか〳〵と蒲團の上に長あくび。〔伊〕そう〳〵捨ても置カれねば。〔折〕ツイ誤つて虎少將といふ氣に成ッたか。〔伊〕ナンノイナ。床入リして身を堅め癪が痛いと嘘ついて。〔志〕サア我レらをむごく。〔折〕ハヽふりのめしたか。ハテノフ世には似た事も有レは有ル物、〔伊〕夫レ程惡ルふした故に、よもや二タ度來なんすまいと思ひの外カ。〔志〕惚レたか因果毎イ日毎夜。〔伊〕來なんす程猶こちつも意地。ふつて〳〵振つゝけ。〔折〕ムヽ定て腹が立ッたで有ロ。おれが身に覺へが有ル。〔志〕腹の立ッといふ段か。どこもかしこも立ッても居ても。ゐられぬ程にせき登しいま〳〵しい賣女めと 屛風の外トへ踏出せば。〔伊〕客に踏マれて女良が立ッかと胸ぐらをかふ取ッて。夫レからが口舌の初。〔志〕我らも引カれぬ云イかゝり。五月雨では有ルまいし 振ルといふにも程が有ル。積る恨を覺よと。みどりの黑髮手にからまき。打ッつ。〔伊〕打タれつ嚙付キつ〔志〕くんづ。〔伊〕亂れつ〔二人〕爭ひに。〔志〕二階はめき〳〵。〔伊〕疊はばた〳〵。〔志〕屋根はゆす〳〵。〔伊〕戸はぐはた〳〵。こぼるゝ淚は下タ屋へはら〳〵。〔志〕ソリャ大夕立チ大雷。屋鳴震動大地震と。家內イの大勢イ立チ騷ぐ膳棚が倒るれば。〔伊〕酒樽の吸口が。一チ度に拔ケてどぶ〳〵〳〵。ソリャ津波よといふ程こそ有レ。〔志〕さはちに入レた〔伊〕濱燒が〔志〕鰭もつ立テて〔伊〕游やら樺燒キがぬめくり出る。煮拔キ卵子に羽がはへ。內チ中を飛廻れば〔志〕聾が聞付ケ。〔伊〕座頭が見付ケ。〔二人〕上を下タへと。さはきしが。〔伊〕漸しづまる夜明ケ前。花車やりて手が挨拶で。〔折〕詞中カ直りすりや明ケの鐘か。〔伊〕イヽエイナ表テ向キは濟ミながら。じたいこつちも惚ては

居れど。つい一通りの上氣にて末の遂ぬは面白からず。誠わたしに逢んす氣なら。二世も三世も替るまいさ。心中を見た其上でさ。[志]いはれて我らも熊野の牛王に[伊]サイナ毎日おくる起請の數が、三十三億三万三千三百三十三枚。起請に押した血計りも。壹石六斗二升八合八勺五才。[折]詞ハテ上根なわろでは有。[伊]サア雨降て地塊るさ。夫から深ふ成る程に。[志]餘り深ふ成り過て。我らは親父に勘當請。[伊]わたしも廓を欠落して。かういふ身に成ったれど。夫婦暮すが何ぼう樂しみお前も誠薄雲樣に。心中立るお心なら。是から五年も。十年も。一心不亂に通はんせ。[折]詞ム、其内には年が明てくい逃のチヨン〳〵幕。むざんなるかな此大盡。おちやつひいになりやしよまいか。[伊]サアそふ算用をさんすが野夫。たとへ千年万年でも。通ふ氣にならんすりや眞實な氣に惚て。あつちから持かけさすか。戀の祕傳の大奥の手。[志]いかにも嬶がいふ通り。短氣は損氣と申は爰。[折]ハ、アそふいへばそこも有わい。然らば此戀二人に頼む。取り持てくれる氣は中橋か〳〵。[伊]夫は何ぼうお安い事。智惠をふるなの辯舌で。お手に入るは今の間。太夫樣も底心から。いやといふでもござんすまいさ。[民]粹な詞を呑込で。サレバイノ。詞わつちも折る拍子がなさにどこやら味な云廻しに。[折]詞へ、、、ホ、、サアモウお口か和らいだ先生は又格別。是といふもお蔭〳〵。此祝ひに奥の座敷で一つ給ふ。鎰は我らが皆買った植込へ放してやれ。[伊]薄雲樣にはマア奥へ。[民]後に逢んしよ、二人の衆。[折]兩人參れ。[二人]ハア。歌じつは心に。思ひはせいでヱあだな。惚た〳〵の口先はいか

ひ。つやでは有ルわいな。〔伊〕人トなき折に天河屋の。義平はそつと立チ出て。奥の騒を打守り。暫し惘れて居たりしが。詞ヱヽ情なや。忠義一チ圖のお侍イと思ひの外カ。由良ノ助は腰が抜ケた。女良に魂奪はれたと上ミ方迄の評判ン。定メて敵に油斷させん方便になされる事で有ラふと。打チやつて置ク内にモフ三年ンの月日は立テど。未に何ンの汰沙もない故。堺から遙々と下タつて直樣是迄來たれば。ヤレ義平かなつかしや久サしやとお逢イなされて下さる筈を。最早歸つて居ぬ抔と。武士に似合ハぬ嘘つくは。彌世上の噂の通り。心のくさつたに違ひはない。いつそ一ト間へ踏ミ込ンで存分ンに異見せふか。イヤ／＼。あら立テは事の破れ。ハテ何ンとせふ。深カき思ひの淵となる。〔志〕申シ／＼義平殿。〔伊〕ヤア貴樣は最前ンちらと見た蟲賣リ殿。終に逢イも見もせぬ人トが。拙ッ者が名をどふして御存。〔志〕ハア幼少にては度ヒ々御意得たれ共。久サ々中絶したればお見忘スれも御尤。諏訪數右ヱ門が悴レ。數八でござるはいの。〔伊〕ほんにそふおつしやれば覺有ル幼顔。先ン年ン親御數右ヱ門樣には御勘定司を御勤メなされ。御國の御用承はる此義平。度ヒ々のお懸合。格別の御懇意。不慮の事にて御浪人ン。お行ク衞を存ませねば。御不沙汰を致しました。シテ何ッ方にお出なされます。〔志〕サレバ／＼。親數右ヱ門は。七年ッ以前ン浪人ンして大坂の住居。我レは若カ氣の廓通ひ。最前是へ召シ連レし。女房故に勘ン當請ケ。此鎌倉へ來タりしが先ン非を悔何卒して古主へ歸參ンと存る内。思ひ掛ケなきお家の斷絶。頼ミも力ラも落果。せめて敵討一味連ン判に加はりたいと願ふ折から大星殿。此廓へ通ふよし是幸イと身を略し。入込ミは入込ながら我カ身の上を顧りみてむさ

と出兼て居たりしが。義平殿にお目に掛るは天道の引合せ宜しくお取成下され。何卒一味連判に御加へ下さる様。偏に頼存ると身をへり下り願ふにぞ。詞ハア一旦若氣の誤りにて。そふいふお身に迄成下つても。古主の敵が討たいと思召。さま〳〵お心をおつくしなされる。花は三芳野人は武士。ハヽヽ。驚入た御心底。夫に付ても由良助様。お主へ忠義世の譏。忘れ果たるアレアノさま。そふしたお人ではなかつたが。いかなる天魔が見入しぞ。三代相恩の御主人様。大事のお家の潰れた事も。科なき御身をやみ〳〵と御生害なされた事も。思ひ出しもなされぬか。殊に今宵はお主の逮夜。身の慎も有べきを。遊びに性根を奪れ。義平が遙々下つても。逢てさへ下されぬ見さげ果たるたわひなし。數多の御家中に異見する人一人もないとは。能々不運な殿様。草葉のかげの御無念が。思ひやられておいとしいと。肌骨を絞る眞身の涙。〔志〕詞ム、取放したる遊興も敵をたばかる謀と。思ひの外本心を取失ひ。敵を討事忘れしか。〔伊〕忘れた段ではござりませぬ。いつそあれへ踏込で一かばちかを正して見ませふ。〔志〕實尤と立上る。〔猶〕ヤレ暫くと主の清助。お二人様のお腹立御尤ではござりますれど。そふ木折におつしやつては聞御異見も聞ぬ物。譬ば此手水鉢の水清ば。アレ月の形がまん丸く。有體に移りますれどコレかふ柄杓でかき廻せば。月の形が見定められぬ。憚りながらお前方の心の水を。とつくりとしづめさしやつて。由良ノ助様の月影の照か曇るを御らふじませ。〔志〕ム、面白い亭主が譬。然らば暫く例て見ん。〔猶〕義平様は

奥の小座敷。お前様はあの一間。お内儀様が待つてござればサア／＼あれへ。[志]然らば夫迄義平殿。[伊]後程お目にかゝりませふ。歌父よ母よとなく聲聞ば。夫に鸚鵡の。うつせし言の葉。ヱ、何じやいなおかしやんせ。[久]月毎に。見る月なれど此月の。今宵の月を名月と唐も。倭も持はやし。分て廓の大紋日。身振り聲色淨瑠璃小哥。茶番狂言拳踊座敷／＼の賑ひに。門は往來の人群集實大磯の月見なり。[民]成事は面白からず。成り兼る。事こそ戀の命ぞと。客を醉せて寐入せて。我身を盜む薄雲が。寐姿のしどけなく。廊下通ひの足音を。[久]兼て小陰に松八か。そつと立出薄雲様か。[民]ヲ、松八様かとすがり付。[三人]一度にほつと溜息は忍ぶ戀路の氣あつかひ。[久]松八は聲を潜詞今宵の月見幸に由良助を盛潰したれば。本望遂る時節到來。サア／＼早く案内と。[民]せく／＼を押留。詞由良様はよふ寐てなれど。新造禿が寐入ねば。忍び入にはまだ早い。ほんにマア毎日毎夜。お顔は見れどいつしみ／＼と打とけて。咄す隙さへなまなかに適首尾して嬉しやと私が思ふ様にはなく。身勝手計り胴欲な。心づよやとかきくどく。恨の果は素人も。それ者も同じ涙なり。[久]詞ホ、心せく儘跡先へ氣の付なんだは赦してたも。命に替て一大事。世話してたもるそなたじや物。何の如在が有ぞいのと。じつと手を取引寄て。[三人]互に抱月影のさすが傍りの氣あつかひ。[夏][琴]隣座敷は踊の拍子そつちでせい。ヤツトサ。トチテン／＼三絃に[久]こつちは合の手ちよんの間の。屏風ぐるりの手枕に粋を通して照月も雲に隱るゝ風情なり。[折]一間を出る野夫大盡。差足拔足

屏風の隱レ息を詰メて窺へば。久民内に二人がさゝめごと。民詞未來も夫婦でござんすぞへ。久何ンの替ハつてよい物かと。折聞クにたまらず野夫大盡。直に飛込ム屏風の内。松八を引立出れば民薄雲が。コレノフ待ッてととゞむるを折取て突退はり飛し。詞牽頭の分際で言語道斷不屆キやつ。民イエ〳〵胡亂な事は有リいせん。船宿のかみ樣ンから金チの無心ンの言傳。斷いふて下されと松八殿を賴む中チ。お前が見付ケて氣の廻り。折ヤアいふな〳〵。未來も夫婦とたつた今言イ替ハした迄聞イて居る。是迄おれをむごくした意趣がへし。二人共一トに討と切及廻せば民押シ隔レ。詞うき川竹の流れの身は。親方に叱られまい。朋輩衆に負まいと。思ふ計リを力ラにて。つらい勤メの辛抱も。年ンが明ケて添ふと思ふ。間夫の有ルのが樂しみで。客衆は本ンの表テ向キ。心づくしの數々も賴ミをかくるさゝがにのいとしと思ふは唐天竺。三千ン世界の其中に此松八殿只一人リ。どんな事が有ル迚も客衆に肌は。ふれまいと思ひ詰たが女の一念ン。是迄お前を振ッたのも皆あの人トへ立ッる義理。嘸お腹が立トふけれどそこが勤メのせつない場と。思ひやつて下さんせと。侘るも聞ず折詞エやかましい。其言イ譯は未來でしろと。ずはと拔イて打かゝるを。引ッはづして松八が。腕首をしつかと握り。詞成程忍び逢たは落度なれど。けふは由良大盡の約束隣の痛氣を頭痛とやら。いはれぬお構ひおせゝの樺燒。そふ旨ふは參るまいと突飛されて折詞ヤこいつが〳〵〳〵。しやらなしやんぷくりんな理屈をこねる。コリヤヤイうぬらを殺して某が助からふと思ふ了簡なれば。成ル程今の理屈も入ど。ふられたる意趣ばらし。うぬらを切ッて切殺し。跡で腹切ル覺

悟なれば。死だ跡では譽られても譏られても構ひはない。業腹たから切て仕舞ふ觀念せよと又切付るを[久]有合ふ臺にてはつしと請。詞ハア遁るゝだけはと詞をつくし。申ス程猶お腹立御尤千万ン。誠拙ッ者は親の敵をねらふ者。敵を討ッ迄暫くの命。御延なされ下さらば生々世々の御厚恩と[折]侘るも聞ずハ、、、、。敵討チとさへいへば陣の小口も遁るゝならひと。其手は喰ぬ出直せ〳〵。[久]ハア御疑ひ御尤。何を隱そふ拙ッ者めは。塩冶判ン官か家來斧九太夫が悴レ定九郎と申ス者。心惡黨故若年にて勘當請ノ方々とさまよふ內。去々年國元城渡しの折から。情なや親九太夫由良助に殺されしと。聞ィたる時の其無念さ。敵を討て未來の父へ勘當の侘せんと思へ共。我レは東マで人トと成リ。由良助は國ニ家老。面テをしらねば色々と心を碎く折に幸イッ此廓へ入込ム樣子、牽頭と身をやつし附ケねらふ其內に。緣ンがなして此女心。通ふは天ンのあたへと。待チに待ッたるけふの月見。僞りならぬ拙ッ者が心ン底。御推察有ッて敵を討せて下されよと[折]願へばうなづき傍りを見廻し詞ヲ、そふ聞ばこつちも安堵ッ何を隱そふ身は高ノ師直が家來藥師寺次郎左ヱ門といふ者。由良ノ助が廓通ひの虛を窺ひ討チ殺せよとの云ィ付にて。其支度はして居れ共。後難を思ふ故是迄は延引せしが。親の敵を其方が討ッたいといへば言ィ譯立。此次郎左ヱ門が助太刀して討タせてやる。[久]ハ、然らばアノ亭座敷へ。[折]我は一ト間で騷を始め物音トに紛らさん。[久]ハ、、、重々の御厚恩薄雲來れといさみ立チ。押シ入レに隱したる。用意の業物かいこんで亭ン座敷へ急ぎ行。[折]跡に藥師寺一人リ笑。詞皆こい〳〵氣をかへてアノ座敷で一ト踊リ初めろと[二人]いふに心得

新ン造禿或は藝子牽頭。かねて仕組の三絃太鼓。千代の初めの一踊リ夫レで松坂こへた、ヱこなたは踊の大騒ぎ。〔琴〕かしこは修羅の劔キの刃音ト。〔折〕物音ト紛らす藥師寺がソリヤ早めてこい〔住〕ヤツトサ、本ン性違ぬ大星が。烈しき刃に切立テられ、抜キ身打ふり兩人が懸出るを見るよりも。〔夏〕〔琴〕ソリヤ喧嘩よと驚キ騒ぎ踊リは破れ逃ケ散たり。〔住〕跡より追ツ來る由良ノ助。〔民〕〔久〕遁カれぬ所と左右方〻〔住〕切付クるを引ツぱづし膝に引ツしく後ろ。〔折〕ねらひ濟して藥師寺が　火蓋を切ツたる種が嶋。〔住〕日當テはどつさり由良ノ助。膽のたばねを打ぬかれ。ぎやつと計リに倒るれば。〔久〕定九郎は起キ上り。詞ハ、、、、有難し忝ナし今ぞ本ン望遂たりと。首はつしと討チ落す〔折〕詞ホ、、、、でかいた〳〵片ン時も早く立退カれよ。我レも直ケに歸らんと。底氣味惡ルく藥師寺は、こつそ〳〵と立チ歸れば。〔久〕定九郎は首引ツさげ。〔民〕薄雲諸共一さんにせど口さして走リ行。〔志〕音トに驚キかけ出る數八。跡に隨ふ女房お浪。首なき死骸打詠め。詞二つ巴の定紋は紛ふ方なき由良ノ助。何者の仕業なるぞ。ヱ、しなしたり。殘ン念やイデ追かけて一詮義。女房續と駈出す〔住〕後の方〻高聲に。詞ヤア〳〵諏訪ノ數八暫ラく待テ。大星由良ノ助對面せんと。呼はる聲〔志〕ハット驚キふり返れば、〔住〕襖押シ明ケ立出る。〔志〕詞ヤア大星殿は御存ン命、シテ此死骸は。〔久〕ホ、其譯ケ拙者がお咄しと。衣服改め牽頭の松八。〔三人〕薄雲諸共立チ出る。〔志〕詞ヤアこなたは片岡傳吾殿。〔久〕ホ、珍らしや數八殿　牽頭持チ松八と成リ又斧定九郎と僞りしも。敵を欺る謀。由良ノ助殿始メ一チ味の者共。さま〴〵心をつくせ共。敵の用心ン嚴しくて中〳〵近カ寄ル事叶はず。いかゞはせんと思案取リ〻、幸ヒ是

なる薄雲は我ヵ家來元ト助といふ者の妹にて。我レ故かゝるうき勤メ。不便に思ひ折々の里通ひも思ひ付キ大星殿と示し合セて此しだら〔住〕ホヽ、邪智深ヵき師直。さま〴〵に犬を入。此由良助を探る故。謀の裏をかゝんと。思ひ立ッたる此狂言。〔志〕ムヽ、シテ又由良助と名乘ッて殺されし此死骸は。〔住〕ホヽ、夫レこそは汝が父。諏訪數右ヱ門正親。親子の對面致されよと。包し首を取出せば〔志〕夢見し心地數八夫婦あへなき首に抱付キ前後涙にくれゐたる。〔住〕詞ホヽ、樣子知ラねば驚ャは尤。汝が父數右ヱ門。勘定司勤ムる內。下タ役共の引キ込ミに。殿の金ン銀不足に及び。役目の油斷と御怒。御勘シ當の身と成しが。お家の騷動聞クと等しく。本シ國へかけ付ケ。倶に籠城討死との願ひ去ながら。御勘當の身なれば。一トつの功なき其內は。城內イへは叶ナはずと。すご〳〵と追ッ返せしが。其後チ又山科に來り。武運拙き數右ヱ門。一つの功も立チがたければ。腹切ッて相果ん。せめて悴レ數八を連シ判シに加へ下されよと。覺悟極し一チ圖の願ひ。幸イなるかな數右ヱ門。面躰恰好此由良助に生キ寫し。敵を欺る一ト方便と思ひ立チ。むだ腹を切ラんより。ケ樣〳〵と得心させ。由良ノ助と名乘ラせて。都嶋原祇園町。或は伏見の撞木町にて。遊里にひたりし放蕩は。皆是誠トの由良ノ助ならず。汝が父の數右ヱ門にて有リしぞや。又鎌倉へ來タりても。此大磯へ入込マせ。人トの目に立ッ放埓も。邪智深ヵき師直。却て用心シ嚴しき故。由良助は殺されしと。油斷シさせん其爲に。相談づくの父が最期。ほいなき死を遂させしも。お主の爲と諦めて。了簡せよと計リにて淚。呑込ムくもり聲。〔志〕子細を聞イて數八は。ハア、重々深ヵき親の慈悲。勘當の某を一チ味

連判に加へん迚御命を捨給ふ、夫レに引キかへ數八は若カ氣の至りの不行跡。親子主從ちり〴〵ばら〳〵、御心を苦しめし不孝の罪科。御赦ルされて下さりませと、首を兩手に押シ戴き不覺の涙にくれければ、〔伊〕女房は猶せき上ケ〳〵。わたし故に主の勘當、親子の中を遠ざけし。憎いやつめと嘸や嘸、日比のお呵思ひやる。退にのかれぬ惡縁シで夫婦となりは成リながら。息キ有ル内にお顔も拜まず、けふはたまさか此内へ親子夫婦が寄リ合ながら。夫レとしらねば詞さへ。かはさぬ此世の暇乞、御首になつた舅御へお目にかゝつて何とマア。云ィ譯した迚歎ケいた迚何シの役に立ッ物ぞと〔伊〕〔志〕夫婦は首にしがみ付キき八入ル。計リに泣しづむ。〔住〕哀いやます由良助〔民〕薄雲は猶もらひ泣。〔久〕傳吾も涙押シぬぐひ。詞夫婦の歎尤至極謀とは云ィながら。敵の家來藥師寺が鐵砲にて見す〳〵御親シ父を討タせ。古朋輩の首討ッた其時の心の内。コリヤどの樣に有ラふと思ふぞやい。是といふも亡君の敵を討タん爲計。〔志〕ハア親數右ヱ門を始メ某が御勘シ當。何卒御赦免有ル樣に。大星殿の御憐愍。傳吾殿の御取リ成。偏に願カひ奉ッる。〔住〕ム、尤の願ひなれ共。最前シもいふ通り。殿御在世の御勘シ當。由良助が私シには赦されずと。手水鉢に差シかゝり。とつくと手洗ひ嗽ぎ。一ト間の内ゟ恭々敷ク。一つの位牌を取出し。詞是こそは。亡君シ塩冶公の御位牌。御シ目見へ仕ッれと。〔四人〕呼はる聲に人ト々はハ、、、ハット飛退ひれ伏ば。〔住〕詞清光院殿前ノ少府朝散太夫水泡遠理大居士へ。申シ上奉ッる。諏訪數右ヱ門正親が忠死に免じ。御勘シ當御免シ有リ。一ッ子數八正サ種。父が名跡下タし置カれ。今シ日ゟ父が名に改メ。諏訪數右ヱ衞門と名乘ッせ。敵

討一チ味連ン判に加へる者也と[久]詞の內ら片岡傳吾連判ン狀を差出せば。[志]ハ、、、、ハット數右ヱ門姓名を書キ記し。我カ指の血に父の首の血。一トつに合ハしてしつかと血判。未來の悅び我ガ本ン望。ハ、、、、有リがたし忝ナしと悅ぶも又淚なり。[伊]始終とつくと聞キすまし。一ト間を出ツる天河屋詞ヤレ〳〵及ばぬ町人ンの了簡で。案じたり恨ミいふたは大な僻事こイヤ驚キ入たは由良助殿。[住]ホ、珍らしや義平殿。遙々とお出の樣子存ながら。敵へ聞カす其爲には。明カさぬも一ト方便と。お心を痛めし段。眞平御免ンと挨拶に。[伊]詞コレハ〳〵痛入ッたお詞。拔ヶ目なき御方便去リながら。入リ込ミの此廓かゝる密事が敵へ洩ては一チ大事と。見廻す襖のこなたら。[猶]かけ出る主ジ淸助。詞其義はちつ共御氣遣カひあられますな。亭主と成ッたる拙ッ者めは。足輕寺岡平右ヱ門めでござります。由良助樣のお差圖で。幸イ揚屋の賣リ居株。敵の犬を客にして。內通の裏を掻。一ぱい喰せた此方便。お悅びなされて下さりませと。忠義に凝たる寺岡が。末ッ世に其名を揚屋の亭主。[伊]義平は猶も感じ入ル。詞殘る方なき御手都合。お前方はまだしも。驚キ入たは此女中、廓に置はあたら事。殊に御家來筋と有ルからは猶以ッてお家の名折レ傳吾樣。お請出しなされませ。金は私シ差上ヶますと。義を見ていさむ。義平が深切。[民]聞クに嬉しき薄雲が。そゞろによろこぶ後より。[猶]ぬつと出たる忍びの曲者。詞樣子は聞イた此趣師直樣へ注進と。[志][久]かけ出すを諏訪片岡はつしと蹴倒し兩足つかみ。二つにさつと引キ裂て。敵討チの門ト出の血祭り
[住]詞シイ

第十

薪こる鎌倉山の繁榮を。花のお江戸に譬れば谷七郷の八百八町。大川通り滑川武藏相模の兩國へ。渡せる橋の片邊り。鹽冶判官高定の舊臣。久松半六時重が。浮世を忍ぶ侘住居。寡暮しに稚子を育兼ね其上に去比より母親の。明日をもしらぬ病の床。醫者の加減の煎藥に漸入る人参も。三厘五厘七りんをあをぐも破し澁團扇。貧乏神の氏子かや。半六藥せんじ上ケ。詞コリヤ坊よ。祖母樣のお目が覺たらお藥上る見てこいよ。アイと諾へて卯之助が。惡さ盛りもおとなしく。明る一ト間の障子の内。夜着と巨燵を前後。床に付ねど老と病の。古木の枝葉霜枯て生氣少き顏色も氣は岩疊に目を開き詞ヲヽ坊か。さつきから寐入りはせぬ。けふは取り分ケ寒いと思ひ。巨燵の火を強くした故咽が乾く。ドレ藥といふを幸イ半六が。孝行深きりん形りの。茶碗の蓋は兀たれど昔の木地は顯るヽ親子の中の辭宜作法。恭々敷ク差出せば。母は手に取り押シ戴き。靜に呑ンで下に置半六は嬉しげに。詞ホヽいつにない事快お上りなされ歡敷存ます。ヲヽけふはお醫者樣加減のお藥。少シ苦いで呑ミ心が能クおりやる。是なれば氣遣ひない。そなたは定メし用事も有ラふ。孫はおれが預るからは跡案ンじずと出たがよい。ハイイヤモ少シでもお快御樣子を見ますれば。大キに安堵致します。少ト據ない急用がござりますれば。鳥渡出てさんじませふ。コリヤ坊よ。惡ルあがきをせず共ばヾ樣のお傍に居て。何ンでも御用聞イたがよい

アイ〳〵其代土産を下されや。ヲヽ土平を買て來てやろと。先へねぶらす糖よりも我子に甘き親心とつかはさして出て行。卯之助は差寄て。詞祖母様や。頭痛がするなら揉で上ふと。夜着の後。へ立廻り。とゞかぬ腕を伸上り見るを見眞似の指遣ひ。通せぬ力も氣に通し。祖母はほろりと涙をこぼし。詞ヲヽ可愛や。小身なれ共塩冶様の家來久松半六が惣領。母のない一人子。世が世の時で有ならば。お乳よ傅と大切に育ん物。貧苦にせまる此ざま。祖母が病氣を爺親が。一人して苦労がるを。四つや。五つの子心にも。氣の毒に思ふかして。詞外の子供と遊びもせず傍に居て小間遣ひ。毎晩とゝが揉でくれるを見ならふて。按摩迄取ふと思ふ。稚心がいぢらしい。可愛の者や不便やと。そゞろ涙に。くれけるが。詞ホヽヽ未練な事云出して半六が聞たら呵らふ。サア坊も寐むからふ。アイそんなら後に揉で上ふと。云つゝころり轉寐の。巨燵へ足を差延す手先に有合ふ古布子。風ばし引なと打着するけんぼ小紋も年經ては。あかしの裏の淺黄より。嶋隠れ行染直し。祖母の仕立の中入は。小豆枕にすや〳〵と念比ぶりの空鞘を遺二物の仲間共。紺の大なし物相天窓。三人連にてずつと這入。詞ホヽ祖母様けふは逢ませなんだ。少加減は能ござるか。ヲヽ折助様角内様宅平様。今朝からどふしてござらなんだ。サレバイノこちの旦那師直様は茶の湯好故。今夜も又お客が有迚屋敷中は大騒。今朝七つからお庭の掃除漸と今仕舞ぐつたりと草臥た。ヲイ折助がいふ通り度々のお客にはほつとする。夫はそふとこなたが屋敷へ糊賣に來たが縁と成て。大

部屋一統爰な内を宿よりも心易く思ひ。洗濯物頼んだり。色の中宿して貰たり。來る度々に飛だ馳走。重寶な姥様煩らふてきつい不自由。早ふ能ならしやれやと己が勝手の深切ぶり。詞ヲヽ皆の衆が其様に。詫しういふて下さるで力が有る。ヲヽほんに夫よ。棚な重箱に芋と油上の煮たのも有り。長屋の引越に貰た豆煎も有た。茶でもわかして參りませ。頭痛がするからわしや寢ます。中し折助様。慮外ながら其障子をさして下さりませヲヽ。合點とさもぎどふに。障子立れば角内が。まかせて桶の水さして。茶釜の下を吹付る火吹竹さへ燒ぬけて。尻の詰らぬかせ世帶。焚もせはしき鉋屑竹の火箸も片々は折て短し流し本。尋て事の欠茶碗手ン々に呑で。詞ヲヽ是でちつとあたゝまつた。暮に成と猶寒い。夫はそふと彼めらが見へる時分と。門をみぞれのちら付てはげしき風を苦にもせず。歌花のお江戸の兩國橋をば。白い手拭横町にかぶつて。一ト山四文のどぎつい松川たばこでござる。鼻哥諷ふ三人連。夜鷹仲間の立者は鳥なき里の蝙蝠や。日暮を待て出來る　夫と見るゟ折助が。詞ホヽ此寒いに皆よふ出た。出掛の口切隱山の初物。賞翫すべいとしなだれかゝるを。おこんは振切折助が。胸ぐら取て。詞コレ爰な嘘つきめ。私を女房にするからは外の女に肌ふれぬと。いふたはちよ〳〵らすつとの皮。掃だめおさんと云かはし。此こんを突出し物おちやぴいにして退た。エヽ欺されて腹が立と。恨の涙時しらぬ。顔は富士の根白粉の鹿子。まだらと成にける。折助は押つよく。詞何だ掃ためおさんと色をしたとは。何を目當何を證據。ヲヽ證據コレ見やさ。

懐より文取出し詞よふぞやはる〴〵御文下され詠入候。扨は我ヵ身事。此間野へ出候せつ。床にて犬に足を喰れ。四五日勤〆も引居候所。よふぞ〴〵御見舞さして。どら焼キ三十さつま芋七つ送り下され。誠トに厚御心ンの程。山々嬉しく存候。何事も御げんのふしと申シ殘し候めで度かしこ。折助様ゝいるさんゟ。テモあつかましう書キくさつた。サア一言もござんすまいときめられて我を。折助が。詞夫見られてやおたまりやない。併おれが大事にかけて天ン德寺の間イへ入レ。隠して置キた其文。わりやどふして持ッて居る。ハテめんよふなとまじめに成リ。ふしん立れば。詞ホヽおかし。女子見るとびろ〳〵と余ンりざらじや氣が多い。異見せよ迚角内様。宅平様が此文を下さつた。ヱヽいけすかないアノ顔わいのさせたげられ。折助くはつとせき登し。詞ヤイ〳〵うぬらはおれが事をよふ讒奏ひろいだな。モフ此上はわいらが身のあらひざらい云ッてのける。コレ小よし。角内めは此間舟饅頭のおちよに惚て。裏に行た時床花に四文錢丸で一本ン。そしておれに咄すには。遉名代イ程有ッておちよめは味がよい。小よしも器量は大抵なれど。口が臭いでこまるといふた。又宅平めは蘿蔔畑の五十造に喰込ミ。どふでも阿彌陀も錢程光ヵる。おきちが鮫膚に競ぶれば。殿様のお頭巾と乞食の褌程違たとぬかした。口が臭いの鮫膚のと云イさがされては立ッまいと。たき付ヶられて起出す。顔は眞赤の消炭悋氣。二人は二人リが胸くら取レば。こなたにおこんが泣聲に。詞ヱヽいま〳〵しい。掃だめおさんに見かへられ此こんが立ッ物か。詞夫レよりは此小よし口ヵ臭いと能ッいやつた。イヤ鮫肌とはむこたらしいと。打つ擲つ喰付つ。

涙はら／＼泣聲に。ほうどこまつてしよげ出す。鯨に鯱海參に藁。奴に夜鷹は。禁物なり。折しも表に賣聲高く 詞 上かん／＼上諸白と云つゝ來かゝる酒屋の八兵衛。夫と見るより荷をおろし 詞 ヤ此いさこさおれか買た八兵衛が留た／＼とあちらこちらを引分／＼。ハアコリヤ能中の小いさかい。ゑい加減なら置たかよい。コレ八兵衛様聞て下んせ。イヤわつちからイヤわしと取付をア、これ／＼。理屈を聞ば尾に葉が付。そこらだらけが喧嘩だらけ。何も角も引くるめて八兵衛が買からは今爰で中直り。サア／＼ちやつとサア早ふと。目まぜ仕方を呑込三人。笑顔作つて傍に寄。詞 何の角のといふたのも。お前がいとしいから。悪ふ思ふて下さんすなと。三人一所にくつすりとだき付ばしめ返す。を見て居る酒屋はこたへ兼。コリヤたまらぬと荷箱にほうどだき付ば。茶碗徳利かぐはつたりとたり。一同にどつと打とけて。跡は笑ひにしどけなし。折助は立寄て 詞 ヲ、八兵衛。さつきから取込でろく／＼咄しもせなんだが。毎日／＼來た手前此間は遠々しいナ。されば候夫にこそ。因縁譚故事來歴。我らもきつい貧乏樽。身代みりんこはいと成。どふで此世に霰酒と。くよ／＼思ひ山川の。胸はもちやくちやにごり酒。兎や輿福寺の富の札。詞 たつた四百で一の富。金子百兩あたゝめ酒。借金残らず隅田川。不思議にすゝぐ四方のあか。祝ふて諸白末廣や。諸願成就滿願寺と。ホ、敬白としやべるにぞ。聞て皆々横手を打。詞 富で百兩取たとは。ハテ浦山しい能事したナ。サア、思ひの外の堀出し仕事。モフ此商賣止にして。日なしでも貸ふかとの思ひ付。シタガ是迄お前方の

世話に成たお禮の爲。此一荷の酒は大部屋中へ進上。今持て參りがけ。私も内が氣にかゝる爰でお渡し申ます皆樣へ能樣に。ホヽコリヤ飛だ事が出來た。サア折助宅平いつその事彼めらも連て長屋で呑掛山の寒がらす。アヽ忝茄子のなら漬と。呑ぬ先からヱイさつさ。ざゞめき合て。連立行。跡打詠め八兵衛が笑を含んで居る所へ。立歸る此家の主。詞ホヽ半六殿お歸りか。コレハ〳〵矢間十太郎殿どふして今比。されば〳〵兼て申合せし通り。今宵九つの鐘を相圖。敵師直が舘へ夜討の手都合。夫に付御存の通此十太郎。敵の案内知ん爲酒賣と身を略し。入込しは幸と。大星殿のお差圖にて。大部屋の中間めら役に立ねど足手まとひ。脚腰立ず死もせぬ毒酒を拵へ持參して。富の祝ひさたばかり中間共へ渡したれば。是も先片付たり。ハア殘る方なき由良ノ助殿の謀。此半六比日中も一味の衆へ相詰て。万事申合す筈なれ共。折り惡しき老母の大病。今も知ぬ老病。殊に母のなき幼少の悴。彼是と取紛れ心外の御無沙汰。詞アイヤ最早夜討の手都合万事云合せ濟だからは。必夫には及ばず。今宵九つの鐘を相圖出向ひさへすりや事は濟。御母公へとつくりと暇乞してお出有と。いふに半六目をしばたゝき。詞イヤノウ十太郎殿。御存のごとく我母は。亡君塩冶公へお乳を上し因迚。我々迄一方ならぬ御厚恩。夫故母が工夫にて此所に住居するも。敵の屋敷へ入込方便。心を碎き老人の糊賣り姥と身を略し。仕付も馴ぬ賤の業。恥を忍び辛苦を厭はず。夏は照日に身を焦し。冬は烈しき雪氷。見る目いぶせきひゞあかぎれ。詞内へ戻れば師直屋敷の中間

小者を引込で追從輕薄樣々に屋敷の樣子裏問んと。後生菩提も打忘れ三年以來の心遣。積り〳〵しアノ病。詞 每日〳〵一味の衆の敵討はどふするこ待に待たる母人の。おも湯もいかぬ大病に夜討の日限云聞さば。嬉しさ餘つてがつくりと。取詰はせまいかと一日〳〵云おくれ。けふ迄隱しおほせしが。詞 最早せまりし今宵なれば。是非に及ばず云聞せ親子別れの盃せんと今買て來た酒肴。いかなれば此半六生れ付たる貧究に。老母の病氣一人の忰。何角に付て一味の衆へ無沙汰の段宜しう賴む矢間殿と。顏をそむけてせぐりくる淚。呑込計なり。十太郞も諸共に。しほるゝ心取直し。詞 ハテ扨半六氣の狹い。お袋や子息の事はどうか仕方も有そな物。跡案じずと相圖の刻限。必々違へまいぞ。後刻〳〵と云捨て足を早めて別れ行。半六は立上り。門の戶引寄行燈に。こぼす附木も竈に。漸殘る埋火の有か。無かの世渡りに。けふの煙も立兼る。まして明日よりたらちねのいかゞ成行給ふらんと。我子の事も取ませて。一方二方三方は。流石昔に土器や。心計の熨斗昆布。敵にかち栗打鮑。障子のこなたに並べ置。聲をひそめて詞 申母人。漸只今歸りましたと。障子をそつと押明れば。詞 ヲヽ半六。御主人の敵。師直を討門出の盃。待兼て居たわいのと。先を取れて。詞 ハア母人には能御存。頓にも申上る筈なれ共。御大病の障りにもと只今迄も延引。イヤノフ。養君の敵。憎しと思ふ師直を。討て本望遂させんと。一心は凝塊り。風の吹にも氣を付て。一味の衆の相談。頓ら知てもしらぬ顏。そなたは又此母が。大病故にがつくりと。

取詰るとの心遣ひ。去迯は僻事ぞや。養君の敵討其相談を聞届往生すれば直に成佛。千部万部の經陀羅尼。名僧知識の引導も何かは以て及ぶべき。そなたを産だ此母が。心をしらぬは恨しい去ながら。詞常から孝行なそなた。一日も此世に逗留がさせたいと。思やるも子の身では。無理とはさら〳〵。思はぬぞや。詞サア何かいふ内時移る。どれ盃。ハット差出す三方の。土器取ば半六が。つぐも涙の露雫。漸しめす唇の。又改る帳つけに。サア。半六と差置ば。三方取て押戴。詞ハヽヽ有がたき母人のお盃。いつはたべずと半盞と。手酌についで呑干ば。詞ヤレ待母が肴せふと。胸押明れば乳の下を。我と覺悟の刀疵。巻たる絹をしたゞりて。肌着をつとふ紅に。半六は氣も轉動。コハ何故の御自害と。取付歎ば突退。刎退。詞イヤ〳〵騒ぐな狼狽な。まだ〳〵見する物有と。巨燵の蒲團引まくれば。卯之助をぐる〳〵巻。聲立させぬ猿轡。詞コリヤ半六。凡天地の間に。お主に上越大切の物はない。まして況塩冶様は。此母がお乳を上。お育申た因迯。幼少からはお傍に育。御膳のお下お小袖の拝領。人も羨御したしみ。御厚恩請たそなた。敵討も人並の働きでは釣合ぬ。人に勝れた手柄をさせ。責て御恩の百分一。報ぜん物と年寄の。心つくしたかひ有て。今宵夜討の云合せ。詞智謀勝れし由良助殿に。一味の人〴〵金鉄と。心をかためし上からは。討損しは有まいなれど。心がゝりはそなたの身の上。貧苦にせまる其上に。折悪い我老病母のないアノ卯之助。苦にならいで何とせふ。敵陣へ踏込では。親を忘子を忘。

身を忘スるゝとは云イながら。空をかける翅。地を走る獸も。親子の中カは切なるに。まして人界。殊更に。詞實情なそなた。此母や悴レが事を思ひ出さば自。心も後に鋒先キなまり。若シも不覺を取ル時は。塩冶の家來何某こそ。比興未練の腰拔ケと。末ッ世に汚名を殘しなば。そなた一人リの恥ならず。先ン祖の名おれ御主人シの。御家に疵迄付る道理。そこを思へば此母や。孫が命は大海の一滴。大イ山ンの塊。そなたのほたしにならぬ樣。此子を殺して其跡で。潔ふ自害せんと。聲立テさせぬ猿轡。幾度セか胸先、へ。刄を當テは。當テながら。詞日比祖母樣〳〵と。其愛らしさ幼氣さ。最前ンもそなたの留守に。頭痛がするなら揉でやらふと楓の樣な手を出して。捻つてくれたを思ひ出せば。どふもおれは得殺さぬ。そなたの手に掛ケ殺してたも。お主の敵計リでなく。母の敵。我カ子の敵と思やらば。日比ロの力ラに百倍增。高名手柄仕やらふかと。夫レ計リが樂しみぞや。とはいふ物の。いかにお主へ忠義じや迚。跡にも先キにも只ッ一人の此孫を。祖母が手づから猿轡。縛りからけて殺させるは。情をしらぬ鬼か蛇か。三途川の姥でも。おれ程むごふは有ルまいと。こたへ〳〵し溜淚わつと。計リに伏しづむ。半六は有ルにもあられず。いかなる過去の業因にや。住ム甲斐もなき貧苦の責メ。御老躰イの憂艱難。お氣の休る隙もなく剰此有リ樣。勿體なやと計リにて疊に喰付キ居たりしが。漸に顏を上ケ。詞仰一チ々承はる。忠義に捻ッる悴レが命と。脇差追ッ取拔キ放ナし。突キ通さんと立チ寄レば。聲立テられぬ猿轡。物云イたげにうこめくを、見るに氣もきへ魂とろけ。心の刄金も亂れ燒拔キ身をからりと投ケ捨てかつぱとふして血の淚。母は聲

かけ。詞ヲヽ殺されぬ筈道理じや〳〵尤じや。家の世繼の一人子を。犬貓か何ぞの樣に。がんちがらみの其上に。親と祖母とが相談で。殺すといふむごい事は廣い世界に又と有まい。敵と敵の寄り合か。此春の疱瘡。並の惡い其中で。輕ふ濟だは仕合せと。近所隣へ浦山れ。神佛のお蔭そと。悦んだも皆むだ事。是を思へはいつその事。疱瘡で死でくれたなら。今の思ひは有まいと。親子手に手を取り合て。涙の限り泣つくすは目も當。られぬ次第なり。半六心取直し。詞ハア後れたり誤つたり。今が最期觀念と。既にかうよと見へたる所へ。ヤレ待れよと聲をかけ。戸を引放し飛込で。拔身もぎ取十太郎。續いて飛入稚子の。禁めほとくは。詞ヤアこなたは。天河屋義平殿と。驚けば十太郎。詞宵に貴殿の物語。老母の事子息の事。聞に忍びず夫より直。義平殿の旅宿へ參り。委細の譯相談して只今連立來りし所。思ひがけなき御母公の御生害。エヽ是非もなき次第やと。歎は倶に天河屋。詞十太郎樣のお咄し。お笑止に存ますから。お袋樣も。御子息樣も。私方へ引取て。お世話致しまする積りで。お供致して參りし所。エヽ殘念なお自害。したが此お子は私が請取からは。少もお氣遣下されますなと。聞て悦ぶ半六より。老母は苦痛も打忘れ。詞孫が命助て下さる。忝ない共嬉しい共。お禮の申樣はござりませぬ。兎角する内夜が更る。サア出立の用意仕やれ。十太郎樣も身を略し。敵地の樣子は知てござれど。又姥が骨を折て。認め置たる師直が。屋敷の案内は此繪圖と。渡せば半六押戴。壁にかくれば分間に。東西南北。有の儘。長屋裏門表門書院

高樓居間圍。炭部屋馬屋に至る迄。事細やかの筆の跡。十太郎つゝ立チ上り。詞ケ程に心を碎かれし老母を始メ義平殿。安堵の爲の物語リ。兼て夜討の懸引キは。一チ味の人ン數二タ手に分ケ。大星殿を先キとして、堀尾富森原片岡。廿四人ンは表門ン、ヲ、搦手方は。子息力キ彌。吉田小野寺諏訪潮田。東西イ方一ッ時に枚を含んで。ひた／＼／＼と前ン後の門ン方。忍び込ホ、、、面白し／＼。詞義平もそこ迄聞ェはつる。いろはの文字の合印シ。山か谷かの相イ詞。隊伍を亂さぬ奇正の術。此兩人ンを始メとして四十餘人が手を碎きこ。迯ヶる敵は射て落し。歯向カふ奴ッ原かたつぱし。大げさ立テ割車切リ。組ンて押サへて掻首。捻首破竹の勢ひ皆殺し。目ざす敵は。師直一人ン。コレ。此居間を取リ圍。八方方かり立ツれば。袋の鼠籠の鳥。討チ取ランは案ンの內と。手に取ルとき物語リ。老母かぶりを打チふつて、詞イヤ／＼夫レは心元トない。一ッ家中の大勢を。敵に持ッたる師直。油斷してよい物か。コレ此居間の巨燵から土中をくゞる拔ヶ道有。サア其行先存シかと思ひ掛なき一言に三人ハット顏見合セ。返す詞もなかりけり。詞ヲ、其拔道を御存シなく。大事の敵を討チもらさは。末の世迄の笑ひ種。そこを思ふて此ばゞが。糊賣リと迄成リ下り。師直屋敷キの仲間小者。大工日庸に至る迄。欺しなつけて漸と、聞出し置イたるは。悴に手柄させん爲。今宵出ッ立ッの餞別に。云聞カさんと兼てより。思ひ設し密事なれ共。詞孫を助ヶて下さつた。十太郎樣へお禮の爲に。半六が手柄を讓り。大事をおしらせ申ますと。手疵も厭すにじり寄。詞彼地をくゞる拔ヶ道は。コレ此廊下の下通り。馬屋の脇へ筋違に。炭部屋の奥の方に。拵へ置キ、

し二重壁。此内に隱るれば天眼通はいさしらず。しる事ならぬ隱家と。聞ばハツト十太郎。飛しさつて三拜九拜。老母の神策妙計は。我身の大慶一味の仕合せ。かゝる教に大身の鑓。炭部屋の壁越に。ぐすと突留首取つて。亡君に手向奉らんは。偏に老母の御厚情。ハヽヽ。ヽヽヽ。有がたし忝し。天にも上る悦び涙。末世末代隱れなき十太郎が高名の。因緣かくとぞしられたり。既に其夜も九ツの。耳驚かす鐘の聲。心せき立十太郎。詞サア〳〵半六。用意〳〵と。云つゝ上張脫捨れば。肌には着込火事裝束。包ほどいて用意の頭巾。忍び挑灯夜討の調度。一間の内ゟ半六が。同じ出立の嗜は。貧苦の外の綾錦。枯野の中に冬牡丹。咲しもかくやと。花々し。老母の悦び。天河屋が仰ぎ立ればノフ矢間殿。詞一味の者の出立を迚の事に母人へ。ホヽ尤と立かゝり。後の戶障子引明れば。裏は名高き大川に。掛渡したる橋桁や。實長橋の波に伏は。雲なき龍に雪も晴寒夜の月の影さへていと物。すこき向ふゟ。遙に見ゆる徒黨の人數。皆一樣の火事裝束。傍りも暉高挑燈。階子斧玄翁掛屋。或は半弓鑓長刀。得物〳〵を引提〳〵。威風は鷹の揚がごとく。凛々然たる其勢ひ。目覺しかりける 三重「次第也。けふぞ念願成就と。いさむ老母の顏付も。此世の名殘り半六が暇乞して立出れば。とゝ樣おれもいきたいと。跡を追ふ子にも。後ろ髮。果しはあらしと十太郎が。引放して。詞サア半六。ヲヽ合點とかけ出す。此母にして此子を產。彼王陵が母親にも。遙勝りし老女の節義日本の。譽と書殘す

第十一

柔能剛をせいし弱能強をせいするとは。張良に石公が傳へし祕法なり。亡君塩冶判官の敵高武藏守師直を。今宵夜討の相圖の刻限。先一番に立出るは。大星由良助義金　二番目は原郷右ヱ門。三番目は大星力彌。跡に續て片岡傳吾八瀨忠太夫。堀尾嘉兵衛竹森喜多八。着たる羽織の合印いろはにほへとと立並ぶ。勝田早見遠の森。音に聞へて大鷲文吾。佐藤與茂七かけやの大槌引提〱。詞吉田岡崎ちりぬるを若手は小寺立川甚兵衛。諏訪數右ヱ門久松半六。得たる半弓手挾で。出るは菅見藤左ヱ門空にかゝやく。大星瀨平。よたれ。そつねならむうゐの奥村矢嶋。深川彌二郎やまけふこゑて。朝霧の立並ひたる蘆野や早野。詞千葉に村松村橋傳治　潮田赤根は長刀構へ中にも磯川十文字。木村は用意の繼梯子。千崎彌五郎堀井の彌惣。同彌九郎門出の洒にゑひもせす。後陣は矢間十太郎。遙跡より身を卑下し出るは寺岡平右ヱ門。假名實名袖印其數四十六人なり。鎖袴に黑羽織忠義の胸當打揃ふ。實忠臣のいろは文字。目ざましかりける次第也。由良助聲を掛。詞怜力彌を始として。廿四人の人々は表門ゟ入〱。郷右ヱ門と某は。裏門ゟ込入て。相圖の笛を吹ならば時分はよしと乘込よ。取べき首は只一つと。由良助に下知せられ怒の眼一時に。館を遙に睨付表と裏へ三重別れ行。用心嚴しき高師直。さし堅めたる裏門を。押せどしやくれ

ど大盤石。明べき樣も見へざれば。大鷲文吾佐藤與茂七。件のかけや引提て打碎んと立寄を押止て由良助。詞音して目覺ば事六敷。此高塀を乘越て。内方明よと詞の下。はやりをの若者共塀を越んと立寄所に。不思議やな此世を去りし勘平が。忠義に凝たる魂魄に同じ。出立の白裝束。陰のごとくに顯はれて。人〳〵を差招き門の扉を押よと見へしが。錠前ぴんと貫の木はづれ。扉左右へ押開き神通力に力を得。我おとらじと込入ば。由良助が遊所の計略死せしと油斷の師直方。寐耳に水の家中の面々。スハヤ夜討の入たるぞとあはてふためき切結ぶ。諸方の太刀音さはがしく。天地も崩るゝ三重へ計りなり。一時計の戰ひに寄手はわづか二三人。薄手を負たる計りにて敵の手負數知ず。され共大將師直と思しき者もなき所に。足輕寺岡平右ヱ門。館の内を飛廻り。詞部屋〳〵は勿論上は天井下は簀子。井の内迄鑓を入てさかせ共師直が行衞知ず。寐間と思しき所を見れば夜着蒲團のあたゝまり。此寒夜にさめざるは迯て間なしと覺へたり。表の方が氣遣はしとかけ行を。ヤレ平右ヱ門待〳〵と。矢間十太郎光興。一つの首を引提てかけ來り。詞久松半六が老母の賜。敎へのごとく敵師直。土中をくゞる拔道より。炭部屋に隱れしを突とめて首討たりと。聞より人〳〵寄り集り四十餘人が聲々に。浮木にあへる盲龜は是。三千年の優曇花の花を見たりや嬉しやと。踊上り飛上り妻を捨子に別れ。老たる親を失ひしも。此首一つ見ん爲よけふはいかなる吉日ぞと。首をたゝいつ喰付つ一同にわつと嬉し泣理り過て哀なり。由良助はいさみ立。詞首尾

能ク敵を討ッ上は。片時も早く御菩提所。光明寺へ立チ越ん。ホヽ尤と一チ同に勢ひ込ンで立ッ所に。いづくに忍び居たりけん。藥師寺次郎左ヱ門大須賀團八、おのれ大星遁さじと右往左往に討ッてかゝる、力彌透さず請流し〳〵。詞ノリ暫時が内は討チ合しが。はづみを打ッてうつ太刀に袈裟に掛ヶられ藥師寺最期。かはす二の太刀大須賀團ン八　其儘息キはたへにける。ヲヽ手柄〳〵と稱美の詞　末ッ世末ッ代傳ふる義臣ン是も偏に君が代の、久しき例竹の葉の榮へを　又も書殘す

安永四年

未七月十五日

福内鬼外戲作

右之本頌句音節墨譜等令加筆候師若鋮
弟子如縷曰吾儕所傳泝先師之源幸甚

座本

元祖豐竹肥前掾淸正

豐竹東治

江戸通り本石町十軒店

山崎金兵衞

同　新材木町烟草河岸

松本屋万吉梓

同　通り本石町十軒店

並河善六

香台
淺口

荒御霊新田神徳

見返しの配役を附するのが例ではあるが、松平伯爵家本にも帝國圖書館本にも散逸してゐるし、他にも一寸探し當らないから、止を得ず省略するここにした。但し第七段になつて、伊久太夫、家太夫、岨太夫、伊太夫、喜太夫、百合太夫、淺太夫、村太夫の掛合となつてるから他の段も是等の太夫が配られてゐたことだけは朧氣ながらも推知される。

矢口後日 荒御靈新田神德　　結城座

第一　鎌倉御所の段

抑南の朝の將軍。新田左兵衞ノ佐義興。無邪志の國矢口の渡シに死給ひければ、詞土人等其丘に宮柱太敷建て新田大明神と稱へ奉り。御稜を畏奉りければ。和享給へる御神德ヲロシヘ世々に傳へて。著き。人皇九十九代の帝。御光嚴院の御宇に當つて、我日の本の外迄も。皆掌の内に握り。武威は四海に跨て、踏治たる足利や。二代の武將征夷大將軍源義詮公。大廣間に出御有ければ。御座のかたへハ當時の官領畠山尾張ノ守義深。我威を表に立烏帽子。大紋の袖いかめ敷、角菱立し面がまへ。次の席にハ竹澤監物が弟同苗修理ノ亮宗時。胸に惡事の相談を江田の判官が弟彈正興連。其外昵近譜代の面々綺羅を餝て參列有。頃ハ貞治二ッの年三月上の九日や。何か上意の旨有と。召に應じて近江の國守。佐々木判官秀詮の名代として。嫡子衣紋之介秀頼。年ハ十五の角髮も二葉に。ゑるき生立や古實を正し入來れば。後に隨ふ家老職多賀ノ將監輝門遙。末座に平伏す。義詮仰出さるゝハ。詞汝を召ス事餘の義に有ラず。佐々木の家には先祖より傳ハりし。雨降の王といへる名玉有。いか程の旱魃にも水に入ルれバ忽に雲起雨降事。其かくれ有ラざれバ。汝が領分一ヶ國の旱魃を救ハんより。一ッ天下の救ひとなさバ民

の悦び、去ルによつて彼雨降の名玉を差上させん其爲に。召寄セたりと有リければ。衣紋之介猶もひれ伏シ　詞ハア上意の趣委細承知仕る、此儀ハ兼テて官領畠山義深殿より、御内意仰聞ヶられ、早速國元へ申遣し候、幸ヒ父判官秀詮參ン勤の節に候得バ。程なく持參仕るべしと。お請申せハ大將重ねて。詞新田義興が一子德壽丸。幷に弟小太郎義岑等を守リ立、新田の城に楯籠る由良兵庫ノ介を責落さんと。亡父尊氏公御在世の砌。度々討手を向ヶられたれ共。中途に置ィて雷火に打れ、味方の軍兵多くの死亡。夫ヒよりして引續鎌倉近郷種〻の妖怪。是ぞ正サ敷ク義興がッ怒の靈のなす所。詞打捨置バ民の歎。兼テて信心なすと聞ハ衣紋之介を差遣ハし。神すゞしめの祈をなさせん秀頼其旨心得よと。仰にハツト衣紋之介　委細畏り奉ると、お請を打消畠山。詞イヤ君の仰去事ながら。討手の勢の死亡せしハ時の天變夫ヒを新田の祟などと。罸も利生も神ン德も。有ルかなきかの新田の社へ御使を遣ハされんハ世上の嘲、お家の名をれ。且ハ武威の薄きに似たり。御賢慮有て然るべう候と。したり顔に相演れバ。詞イヤトヨ義深。新田の社の神ン德ハ普人の知ル所。靈驗なしとハ云ハれまじ。眼前寄特ハ義興の靈を込メたる廟所の上。はえたる竹ハ枝葉なく眞直に立延て。はるか梢に少しの枝葉。是を名付て旗竿竹と見る目驚ふ思議の一つ扨ハ又空飛鳥廟所の上を過る時ハ。二つにさけて落ると聞ク。斯神罸のはげ敷事ハ旁も存じの前。又、一心に祈る時ハ。運を守り災を拂ふ事。響の聲に應ずるごとし。必ズさとする事なかれ、と。仰にひるまぬ尾張ノ守。詞上意を返すハ憚なれ共。神ハ和光同塵とて。本地垂跡兩部の神ン道。心

なき鳥翅。飛バ飛なり夫レなりに。赦して置が天ンの道。又竹とても其通。天然自然の形チを變せず。常の儘にて生立こそ。直成神の心ならずや。空飛鳥の命を斷。性に違し旗竿竹。詞一つとして神道の誠の道に叶ハねバ。罸も利生も荒振神。夫レを兩段再拜して。御信仰とハいかゞなり。詞夫レにおる衣紋之介。あくちも切レぬ形をしていハれざる神だゝきと。傍若無人にいひほぐせバ。詞ホヽ理なる汝が一言ン去ながら。高良の神ンの湯起請も。湯ハ湯の性を其儘に。燒爛るべき筈なるを。燒ぬが卽神國の。奇瑞を顯ハす神變不思義又ハ一チ夜に千本の松を生せし北野の神ン德。是等も天地自然に有ずと。悉くぬき捨んや。サ返答聞カん義深と。問詰られてイヤ夫ハサアノヽ何とに尾張ノ守口を。つぐんで閉口す。大將ウ猶も衣紋之介を近く召れ。詞幸成ルかな明日ハ新田の社の緣日なれバ。此御敎書を奉納し。武州荏原の一郡を寄附すべしと。仰にはつと領掌の。衣紋之介が喜悅のまゆ、燒づら仲間の竹澤宗時。憚リもなくしやらり出。詞義深殿の云ハるゝ通。心もとなき新田の神ン德。罸が當る物ならば。最前から譏はしる。尾張守殿の頰がまち。ゆがむかすじるか仕そふな物。夫レをしゝらの神德ハ。勇者に勝れぬ新田のやしろ。拙者も佐々木殿同道し。拜んで歸るかふみ潰すか。罸と利生を吟味の役目。仰付られ下されよと。いふに大將打うなづき給ひ。詞いかにも信ぜぬ旁が。疑心をはらす爲なれバ。のぞみの役目ゆるすぞと。御氣色殊に麗敷。御前ンの首尾合よきをりと江田ノ彈正すゝみ出。詞イヤ何衣紋之介殿。貴殿の姉初花

姫に、畠山殿のきつい執心。われら媒介致さんと前もつて申入ルれど。今に返答熱切ラず。君の御前でともかふも、腰の切レた挨拶聞んと。いひかけられて衣紋之助。返答あぐめバ白砂より。多賀將監引とつて。詞 ア、いや其義ハお氣づかひ御無用、承引あらふが有ルまいが、是非拙者がうけ合て、初花姫を差上んと。いふをおさへる衣紋之助。詞 コリヤ〳〵將監。姉上の御緣邊ハ。思ふ人へ心まかせと。祖父君の御遺言。夫レを知リつゝ其一言 申なほせといふをも聞カず。詞 イヤサ 腹這出の若旦那。御存知ある事でない。兎角拙者に御まかせといふも平おし彈正興連。詞 主人の名代仕る將監が請合ッからハ。いやでも應ひも初花姫ハ。畠山へ婚合よと。君の仰が 即 結納。お詞願ヒ奉ると無理押つけの横ぐるま。よらずされらぬ御大將。詞 イヤ 緣組の事ばかりハ婦人の心に任するならひ。强て結ぶハ不緣の元ト、此義ハ追ッて差當る。翌の役目をおこたるな。ヤヨ 兩人さしづ〳〵と帳臺。深く入給へバ。お請申て各ハ早退出ッの八ッ下り、連ぬる。袖もきらゝかに。輝く神の御像、虚靈不昧を象りて。敬ふに威を白銅鏡。曇ぬ君が御治世ハ。風に偃民草や。天の八重雲吹拂ひ。しげきが本トを切拂ふ。鎌倉山の。星月夜榮る。御代ぞ三重へ寬成ル

第二　矢口村神前の段

君と神との道直に。治る春ぞ目出たき〳〵。鎌倉殿の命を請佐ゝ木衣紋之介秀賴。相役にハ竹澤修理ノ

亮宗時。武藏の國矢口村新田の社の鳥居先床几。直させ並ゐたる。懸る折しも向ふより木綿衣の道心者。二人が前に手をつかへ。詞 私めハ道念と申て此社の世話役坊主。先以テ今日ハ將軍樣よりの御代參。御苦勞千万お有難ふ存ますると。ありべかゝりの挨拶を竹澤ぐつとにらミ付。詞 ヤイ〳〵腐願人め。貴人の前共憚らずのし上たる慮外者。ムヽ 我〻が參詣をかぎ付ヶてうせおつた。コリヤ お餘り貰のはつち坊主な。アレ 家來共引ずり退よと。かさにかゝれバ。詞 へヽヽ コレ そんなにけなすまいてや。慮外ながら此坊主元來新田の御内に置ィて。身ハ輕けれど譜代の家來。新田の社建立と所〻方〻を勸化して。此社を建たのハ誰知ラない者ハない。いはゞ別當同然の此坊主。挨拶したが誤かと。やり込られてさか立竹澤。ヤア 推參なるづくにうめと。切及廻すを衣紋ノ介おしとゞめ。詞 ナニ 其方が聞キ及ぶ道念よな。余當社を信仰なし。每度差越代參ンにて我君ハ定て知リつらん。近江の國主佐々木判官が扮レ衣紋介。扮改めていふ事有。今日我〻參詣の子細といつぱ。義興公の怒止時なく。樣々の御祟。其神靈をなぐさめん爲征夷大將軍足利の義詮公ゟ。寄附なし給ふ社領の御敎書。謹で請取よとうや〳〵敷差出せバ。ハヽヽハツと押戴き悅びいさむ斗く。秀賴重ねて家來に云ヒ付一ッの包取リ出させ。詞 此黃金一包ハヽ衣紋介が寸志の奉納。弓矢を守りの御祈禱よしなに賴ムと有ければ。宗時ハせゝら笑。詞 イヤモ 聞バ聞程馬鹿なせんさく。卑怯至極の神ぜゝりなせとおいやれ。其業に達しなバ百發百中ゥ心の儘。すりや 神力ハ借ずと濟ム事。殊更神も神による大馬鹿者の新田義興。我等が兄の監物に一盃喰され。矢口の渡しで

頓兵衛が。穴をくり明ヶ待共知ラず。船に取乗りづぶ〳〵。古今無双の大べら坊、夫レを神じやの佛じやのと。信心召るゝ衣紋介殿 若輩千萬淺はか〳〵。詞 昨日御前でも申た通 神徳が有ルかないか吟味に參つた修理ノ亮、先ッ見た所が格別に罰も利生もなさそうな。新田じやなうて似た山明神、かう云ハれるが悔しくバ罰を當ぬか義興と、無法の雜言こらへぬ道念イヤ申。竹澤様。詞 おらが旦那の罰利生。お前は能知ラしやる筈。防門の宰相淸忠殿。畠山入道江田の判官。笠木の壓でびつしやりとこけら鮓にならしやつたれ。取りも直さず此鳥居。こな様も所縁の有人めつたな事をいれしやつたらぐれんといふめに逢つしやろ。ヤアやかましいれ。コリヤヤイ其笠木の落たのはれ。珍事ちうやう時のあやまち。すさりおらふときめ付る。詞 ハヽヽヽ口利根に云消ても靈驗寄瑞はまだ有〳〵。お前の兄御の監物様。義岑様をからめんと家來諸共船に飛乘。艪を押切ッてヱイサッサ。川の半に乘り出す。此御ミ神の御罰にて不思議や俄に風起川浪。逆立かき曇空に雷電霹靂。空中ゟ聲高く。詞 ヤア〳〵監物慥に聞ケ。新田左兵衞ノ佐義興が一念ン爰に顯れれて。恨をなさん思ひ知レと。呼れる聲の下よりも小山のごく波立て船を。ゆりすへゆりおろせバ。廣言吐た監物殿。がた〳〵わな〳〵膽礬色。猶も吹くる暴風船ハ碎て羽子板。屋根板ばら〳〵〳〵。詞 お前の兄御の水練自慢れこさをやつても叶ハヾこそ。浮つ沈んづ、どんぶりこ〳〵どんぶり〳〵〳〵こ。水を喰ふてがぶ〳〵〳〵。上より黑雲覆かゝり。甲冑を帶たる義興様の御、姿。馬上ゆゝしく出立て、御手をのべて監物殿の頭を摑むと見へけるが、さくり竹澤から竹割。是も

珍事かちうようか。サア〳〵何とゝ問詰られ。返答しかなの宗時ハ面ふくらし居たりける。仕廻付カね
バ衣紋介イヤ何道念。詞詮なき論義ハ無益の沙汰。急ぎ神前シヘ罷越天下泰平武運長久の御祈。丹精
ぬきんで奉れ。早とく〳〵に道念ハ一禮演て入にけり。後見送つて燃杭に火を竹澤が燒半シ分。眞赤に
成て立上り。につくい坊主がぬかしざま。思へバ新田の社こそ兄監物が敵なれ。宮も鳥居も踏碎き
修羅の妄執晴さんと。行んとするを衣紋ノ介押留。詞神慮をすゞしめ奉れと君の仰を請ながら麁忽成振
廻と。いふをも聞ぬ刎袴持餘したる其所へ。ぬつと出たる道念坊。詞ヤレめつそうな竹澤樣。足手か
いさまに駈步行。他力をかりて漸〳〵成就した此お宮を。これされて此坊主が立ッ物か。やらぬ〳〵と
支ゆれば。ヤアめんだうなと突退蹴退。家來つゞけと無法の主從。あれに荒出す其折しも。不思義や
社檀鳴動して。踏出す儘に立ずくみ。宗時始め家來共すくばり返る大の字なり。しづかな風に能ノのし
たやつこ凧見るごとくなり。道念ハ氣味よがり。詞ヒヤア少ッとそうも御ざるまい。しつかいそうした身
鹽梅水銀人シ形七段返り。ヤアテン〳〵ナントカラ〳〵〳〵旦那の御神罰。首尾よふ參つてお慰どつと譽たり。
イヨ〳〵すくばつたのめ。イヨ飛魚の干物めと。てうらふされて修理ノ亮。エヽにつくい栃坊主め。イデ物
見せんも口斗り。働く目玉ハ手遊のべかこ人形に異成ラす。思へバ無念と氣をいらち。エヽ僞したるか
家來共。身にかまハずと踏込と。いふに家來ハ口を揃。詞アレ旦那はんの無理斗。踏込ふにも。行ふ
にも。五體ハ襦袢に百が糊。天日に干たるごとくにてしやちばり返る板天神。はした錢を落してもひろ

ハれもせぬ此しだらワコリヤマア何シたる事だぞとすゝり上たる家來共。手鼻かむにもかまれねバ。こぼす泪と二本棒口へ。じよろ〳〵むせび泣。詞ナント見られたか竹澤殿。押におされぬ神の咎。此上ハ兎に角にお詫申にしくハなしと。いふに我慢の角も折。詞イヤモこれに懲ぬ者ハない。お詫を賴む道念坊。是じや〳〵と拜む氣も。はだかつた儘手ハ寄ず。漸々動指の先キ。家來の面々口々に私共ハ露塵程も曲た心ハ御ざりませぬど。此お旦那のいひ付故主命是非なく斯の次第。御免シなされて下さりませとじぎの替りに目をぱち〳〵。詞ムヽ、そんなら此以後此お宮を打こハそうとハ云ハぬか。何が扨〳〵。ムヽ夫レならお詫申してやらふ隨分信を取おらふと。律義一ツ遍正直の。頭を土に摺付て。詞南無新田大明神樣。惡人めらが誤ますするお赦しなされ下さりませ。南無新田樣〳〵サアおらが通リにして見おれといふに主從聲揃へ。詞てうち〳〵あハゝ。つふりてん〳〵よ。かいぐり〳〵〳〵よ。あんよハ上手轉ぶハお下手。ハア有リがたやと一同に下る頭も身も自由。こいつハ動ハ〳〵。コリヤ奇妙だと主從が。腕振て見つ足振つ悅び合ぞおかしけれ。衣紋ノ介ハいとゞ猶肝にめいずる矢口の神德。有リあふ家來も諸共にハツト感ずる斗り。衣紋ノ介ハさし寄て。詞かゝる不思議を見る上ハよもや疑ひ候まじ。お立なされい宗時殿と。いふに默きイカニモ〳〵詞罰が當るか當らぬか。吟味に參つた某が役目。規模が顯ハれいか斗大慶至極。イサ罷ふと立上れバ。いハれぬ毒の試ハ。相伴人の迷惑だと家來が小言も聞カぬ、ふり。見送る道念衣紋ノ介。かへりもうしの柏掌や打連てこそ立歸る。後見送つて道念ハ。詞ヤレ〳〵

とんだわろが有物だ。有手になつてせり合たで。ぐつたりと沓入。ドリヤ草臥直し一ぷくせふと。きせる取出し吹煙。されバ呉の太伯ハ弟季歴に世を讓。身しりぞきたる古ル事を思ひ合ハせて今爰に。新田小太郎義岑公世を忍びたる目せき笠。供をも連ず只一人。鳥居の元に歩ミ寄ル。夫レと見るより道念が。詞アヽヤヽ。お前樣ハ義岑樣じや御ざりませぬか。ヤレ〳〵〳〵お久しやと。いふにこなたも笠かなぐり。詞ヤレ道念か久しやと。一つ所へ寄リこぞり。詞本ンに何から申ませふやら。台樣にも御機嫌で。モフお子樣でも出來ましたかと。いふにほろりと泪ぐミ。詞ヲヽ其台も去年の秋。持病の癪のしもつれで老少不定の世の習。不便ンな事をしたハいのと。聞イてこなたも悔りし。詞スリヤアノ台樣ハ。ハアアおいとしや。わしらが内に御ざました時分。不思義な緣ンで世話に成。親兄弟もない身じやさかい。そなたを親と思ふて居る。死る時の末期の水も。おれが取ふとおつしやつた。其有難さ忝さ。逆に流れぬ物ながら。此死水の約束ハ。あちらこちらに成リましたとすゝり上るぞ殊勝なる。詞ア、埒のない。泣が亡者の爲にハ成ぬ。アヽ南無阿ミだ佛〳〵。イヤ申こんな事ハさし置て。心得ぬハ只お獨どふした譯でござりますと。いふにうなづく義岑公。詞余が躰不審ハ尤。我甥の德壽丸。いまだ年も行ざれバ。此義岑に新田の家名を繼せんと。兵庫ノ介が達ツての進め。去ながら今足利の天下と成レ共。南朝へ手ざしせず。新田の城へも責寄ざるハ。兄義興の武威神德。幼少なれ共德壽丸ハ現在の嫡子なれば。德壽丸をさし置イて。身ふ肖の義岑が。家を繼べき謂なしと國遠したる了簡ハ。潛

に鎌倉方へ近寄って南朝へ志をはこぶ武士味方に招き。和田楠と示し合せ両方よりたてはさミ。鎌倉を責亡し。兄義興のしゆらの亡執晴さん爲。思ひ立たる此姿と。聞ィて道念横手を打　詞ヲヽ適な思し召。鎌倉方へ取入ルにハ。能ゥ手懸りもござりませふ。何を申スも爰ハ往還。アレ向ふの茶店ハ私がなじミの内。あれで緩と御物語。ヲヽともかうもと義岑公打連レ立て歩ミ行。我ハ物にハ狂ハねど〳〵。物こそ我を狂ハすれ。狂ひ亂れて。現なく折て。かざしの一枝も。あたら櫻のとがハ散ぞ恨なる。花もうし。風もつらし散バぞさそふさそへバ。ぞちる。花の姿の亂れ咲。髪も所躰もほら〳〵と。冷泉下着の。褄の八重一重。蹴返すすその緋櫻や。紅梅櫻樺櫻此世の緣ハ薄櫻。淺黄櫻とちる花の。彼岸櫻と後の世をむすぶゑにしの絲櫻。又逢ッ事も有明の夫レを頼ミに鹽竈や。煙と成又雲と成。其忘執の晴やらず。初花姫の。身を借りて。戀しき人に逢たや見たや。我夫のふと狂つ舞つ花のしもとの亂咲狂ひ。つかれて伏轉ぶ。後を追々婢共。乳母狹衣も走り寄。ノフ現なやお姫様。正氣を付て給はれと。さま〴〵いたはり參らする。何事やらんと義岑公。道念諸共立出給ふ。姿見るより狂ひ人ハ。ノフなつかしや義岑様と。すがり付バこなたも恟り。詞ムヽ見ればやん事なき上﨟の。物狂ハしきハ。ムヽエー扨ハ。戀人をしたひこがれし狂亂か。又は物の見入レ成か。去ながら終に逢たる事なければ。知人ならぬ某を。義岑と呼懸しハ。ハレ心得ずとふ審の躰。ノフ恨めしの姿やな。君に思ひをかけしより。詞いつそ命を。捨小舟。心ハ千船百船や。棚なし小舟ゆらのとを。渡る船人揖をたへ。行衛もしらぬ

物思ひ、父の心の荒浪に身ハ浮舟のとも綱も、切てめいどへ出船の宙有の旅に。うかれ船。弘誓の舟に乗も得ず。浮ミもやらず。うか／＼とあこがれこがれ來りたり。親と一ッ所でないといふ。一つの功を立るなら未來で添ふとおつしやつた。詞ハ嘘かいつわりか。むごい難面どうよくと。前後もわかず抱き付かつぱと臥て泣ゐたる。義岑公ハ人しらぬ其かねどの覺有。胸にせまりて忙然と。詞も泪にくれ給ふ。乳母狹衣もふしん顏。コレ申道念樣。詞先程から取紛れ。御挨拶も申ませぬ。ヲイノわしも先から遠慮して。態控へておりました。こなたがお供と見へたれば。アイ是成ハ私が御主人。佐々木近江判官樣の御息女初花姬。今日弟御衣紋介ノ樣。此お宮へ御代參。兼チて御信仰の御神ゆへ。姬にも參詣。道よりも不慮の病氣、どなた樣かハ存ませぬが、あなた樣へひよんな御世話。御免なされて下さりませ。詞申道念樣。先キ程矢口の渡場から。寒け立しと申されしが。夫レから俄の此狂氣。どふした事でござりませふと。聞ィて道念。思案顏。詞ム、ハ、夫レで聞へた。夫レなれば譯の有事。ハア若ひ娘の一筋に。思ひ込だ一念。うかミもやらず姬君に乘移り戀慕ふ。ア、いとしや。南無阿彌陀佛／＼と。回向の聲に皆惘り。詞スリヤ姬君の物の怪ハ。ヲイノ渡し守の頓兵衛が娘。お船が死靈に極まつた。ハ、きやつもやぼでハないかいのと。いふに猶しも。あきれゐる。道念さハがす。詞イヤ是お乳母殿。是ハ只でハ直るまい。何と。いつそかうしてハ。義岑様にお願申。假に婚禮事の盃でも取かハしたら。死靈の亡者が堪納して。つい退くハ定の物。義岑樣も御ふ肖ながら初物ハ七十五日大事の

はこ入りわれ物の。損じぬ様に賴ミますと。いふに吹出す娵共。乳母もおかしさ笑ひをふくミ。そんならお前よい様に。詞幸に持タせのさゝえ。爰ハ人目も遠慮有。アノ茶店へと進むれば。姫ハいそ〳〵いさミ立。義岑公ハ今更に何と挨拶おもはゆき。お手をとり〳〵乳母娵。亡者の婚禮媒ハ詞此道念があたま役。是が本ンの戀無常と打つれ立て急き行。道引違へのつか〳〵忍び出立の江田彈正直ッにハ行ぬ蟹侍。主の權威を甲に着る。同じ穴成岸本新吾。聲もひそ〳〵差寄て。詞イヤノフ新吾殿。貴殿の御主人品山殿。御執心の初花姫。某が仲人で。家老の將監ハ合點なれど。埒の明ぬがめんだうさに。今日御同道申たハ。幸當社の緣日とて。參詣する初花姫。待伏して引さらへ。直クに貴殿へ手渡しと。拙者が家來の鷹介を。とくより犬に入置イたりと。聞イて新吾が出來た〳〵。猶も委敷御相談。イザお先へと打連て。宮居の蔭へ入日さす。春の夕暮。まバゆげに。義岑公は茶店より。そつと出るも思ひの種。詞ハア物ハうたがハれぬ。こがれ死シたるおふねが魂。初花姫が姿をかり。我レに枕をかハすとハ。よく〳〵ふかき志。不便の者やいぢらしやと。過し事共思ひ出し。ひたんのなミだにくれゐたる。後を慕ふて初花姫。詞エヽ手の悪ひ義岑様。本ンに不思義な御緣にて。恥かしい物の怪も。二人リが中の結ぶの神去ながら。婚禮の盃して。お前にだかれて寐た事も一向覺ず漸と。正氣に成たハ可愛と。後でお前が抱しめし其むつ言から氣が付て。詞どういふ譯で此お人と。爰で寐て居る事やらと案じて見れバ始終のわけ。夢幻のおろ覺へ。嬉しい亡者の引合。必見捨て下さんすなともつれ寄しハ、

蝶々の花の露吸ふぜい〳〵。義岑公ハふり放し。詞物の怪の直るまで。一旦の事ハ格別。こなたハ誰有ふ佐々木家の祕藏姫。我レも望の有身なれバ。うき名が立バ互の難義。思ひ切て下されと。いハれてハットせきのぼし。詞ソリヤ曲がない義岑樣。そんならさつきにかあいひの。忘れハせぬとのおつしやつたハ。お船へ立る心中で。わたしハお嫌ひなされるか。死靈のわざでも物の怪でも。抱れて寐たハわたしがからだ。お船とお前に慰れ亡者の退た拔がらの。そなたハいやじやと突出され。世間の人にゆびさゝれ。生キてゐらるゝ物かいなと。さしぞへを拔はなし。すでに自害と見へければ。義岑あハて抑とゞめ。詞サア〳〵どう共成ませふと。漸刃物もぎ取て。鞘に納むる胸と胸二世も三世もかハりハせじ。必見捨給ふなと互にひしといだき付。わりなき中と成にけり。樣子伺ふ江田ノ彈正。僕鴈介諸共に。面を隱せし頬かぶり。二人ハはつと逃出す。先キをふさいでヤア逃まい〳〵。詞あやかり者のお相伴。すそ分ケしろと無二無三。初花姫を引立る。コハ狼藉と義岑公。するりと拔たる刀の稻妻。仕組の狂言ソリヤ拔た。叶ハぬ赦せと逃行をいづく迄もと追て行。後にひや〳〵初花姫。怪我遊ハすなと氣をもむ所へ。あハてふためきかけ來る狹衣。此間に早ふと立出る。向ふへぬつと岸本新吾。詞サアしてやつたりと引立る。そふハさせぬと狹衣が。懷劍ぬいてつつかくる。ヱヽめんだうなと取て引ふせ。今がさいごと振上る。姫ハ詮方後からこハ〴〵つつこむ懷劍の。かよハき腕も急所の痛手。かつぱと伏間に起上り。見てびつくりの狹衣がこハさひあいさ諸共に。夢路をたどるごくにてこけつまろびつ落

て行。後に新吾が血みどろちんがい。起ては倒れ。こけては這。もだへ苦しむ其所へ。とつて返す江田ノ彈正。かくと見るより。詞ヤア／＼／＼新吾殿手を負れしか。初花姫が行衛は何と／＼。とへど苦しき。聲音にて。詞ヲ、其姫を何の苦もなく引とらえんと。思ひの外に此深手。外の醫者ではなほるまい。玄白老を頼んで。おらんだ流の膏藥を。付てもらふて。下されといふも。せつなき息ずかひ。彈正疵口あらためて。詞わづか斗の疵なれども。首の骨より咽ぶえへかゝつたれバ玄白でももう叶はぬ。いひ置事はサ御ざらぬかと。いはれていとゞ氣もめいり。ハア悲しや口おしや。詞花は三吉野人は武士主人の爲に討死するは。疊の上ののたれ死にはまさつたりとはいひながら。ふぐり持たる甲斐もなく女につかれて此ざまは。尸の恥辱其上に。近年旦那の儉約で。五人扶持に八石の切米の其内を。三石貳斗の借米にてたつた四石八斗の正味。其上相場の安い米。いかに忠義といへばとて。詞討死するとはあはれぬ者。やすい命と思ふ程。よしぢのさはり修羅道の。まよひの種にて候と。是を最期の言葉にてあへなく。いきはたへ果たり。彈正は目を摺あかめ。ゑかうせんにも何宗やら。知ラぬがほとけに打むかひ。詞南無妙法蓮陀佛／＼と。唱へる所へ義岑公。姫の身の上氣づかはしく。とつて返せバ彈正は。コリヤたまらぬとにげ行を遁さじやらじと追懸るを。後の方より僕の鴈助。どうこいやらぬとつかみ付。折よく來かゝる道念が。あたりにあり合茶店の手桶。あたまへざつぷり水けぶり。おさらバさらばといつさんにとぶがごとくに　三重行雲も

第三　京極館乃段

をさまるあめもほど／＼に御代の春こそ春なれや。佐々木近江の判官秀詮卿の一構。けふ參勤の鎌倉入上下賑ふ大書院。御一家御家門ン待受の使者悦びの使者の口上長々と。太刀折紙の折目高。或は卷物干鯛箱數の進物格式の。銘々主人の申付禮義亂さぬ受取渡し武家の。風義ぞ正しけれ。詰所より立出るハ執權多賀ノ將監輝門。骨柄衣服勿體も。奏者の上座に押直り。詞先以御使者御苦勞千萬。先刻よりの御口上衣紋之介へ達せし所。嘉例を欠さず御使者の趣き祝着致す。しかし大殿判官秀詮。只今に着致さず。遠見の者も歸らされバ夜に入も計リがたし。各樣にハ御歸下さるべし。御挨拶ハ是よりとの義。此旨宜敷御執達と。いんぎんに相演れバ各ハツト領掌に。詞ソレ取次中お敷臺迄送られよと。將監が差圖につれ互に式禮目禮の使者ハ館へ立歸る。奥ゟざハ／＼娵中將監が側に出。詞殿樣の御着。毎ィ年よりハきつい遲さ。御前ン樣若殿樣にも御待兼。お心ゆかしに此所へ。お出なりと案内の。表の座敷。いつになき秀詮の奥方久賢御前。後に隨ふ衣紋之介しづ／＼と立出給ひ。詞ノフ將監毎年夕邊ハ小田原のお泊。夫レなればバ早いはづ。どふして遲い事じやいのと。尋る内も兎や角と案じハ女義の常なれや。詞ハアいかさま餘程の御隙入去ながら。アレ御覽遊バせ御庭の樹々も春めき。又御道中の遠山など。ちら／＼と見ゆるも能お慰み。昨今のうららかさ。定て梅澤大磯あたりで所々の御遊覽。御供司ハ縣ノ

三郎ぬけめなき萬事の差配。憚りながら。御心遣ひは御無用と申上れバ衣紋之介詞ホ、將監が申通、程なふ御着でござりませふ。お氣遣遊ばしますなと共〻なだめ給ふにぞ。詞ヲ、いやれぞそふも思ハれる。シタガ。殿のお着の遲ひも氣がゝり。又自が此間。心遣ハ初花姫過去給ひし男君。わけて日頃の御不便がり。女子なれ共惣領。必ス他家へ緣組無用。領分の内田上郡七百町の地を分ヶて。姫が氣に入リ筋目も正しき者あらバ。呼入てめあハせよと。おとゞしの冬。御逝去の御遺言にも此ヿと斗ッ。夫レ故ほしがる方が有ッても。緣組の沙汰もなふ是迄も打過しに。官領畠山殿より達ての所望。江田ノ彈正が取持チにて。則將監の承ハり。斷いへば當時の勢ひ。此方の爲にならぬと。もだされぬ今度の所望。何事もお着の上でと思ふ中。日外矢口へ參詣の砌。新田小太郎義岑殿。見初しが緣と成。互の出會折惡敷。江田ノ彈正が行合せ口論に及び剩へ。畠山の家來岸本新吾を姫が手にかけ。うば狹衣諸共に行方知ず。殿樣のお着のうへどう云譯の有べきと。あなたこなたを思ひやり御目も。うるみましませバ。衣紋ノ介も將監も。何といふべき詞なくさしうつ。むいて居たりけり。奥方重ねて。詞ノフ將監けふ改てそなたに相談。もう一ト昔殿のお妾お筆の方。御寵愛にほこつての我まゝ折しも懷妊。彌と身の高ぶり。我君もあいそが盡そなたへお預け。間もなうお筆は産後に病死し。誕生ハ男の子。呼取が本意なれど。物堅き秀詮卿。お筆の方の我儘をにくみ給ひ。館へも寄せられず。自や衣紋ノ介も對面叶ハず。ツヽ光陰も十二年。腹はかさねど大切な殿の血筋。けふこそ親子の名乘を願ひ。直クに引取リ置つもり。

詞名も爲丸逆發明な。生れと聞ィてわられが樂しみ。衣紋之介の大きな便り。ほんにお着の遲いも幸。呼迎へてまづ逢たい。イザ早ふと。仰ハ實も貞女の操。奥床しくぞ見へにける。將監は感し入。詞ハヽア遖の御賢慮、爲丸君の御悅び。育上たる拙者が大慶此上の有べきや、御連枝多きハ御家の繁榮。兼てハ願ひ奉らんと今日ハ爲丸君。表の一ト間へ御供申。イサ御誘引申さんと。いひつゝ立て一間より。伴ひ出る爲丸君。公服の小袖上下の。ゆきたけ迄も作法有ル席を隔ておハします。奥方見るゟ餘念なく。詞ヲ、聞たより猶よいおいたち。ノフ衣紋之介。ハヽア私も此樣な悅びハござりませぬ。コレ爲丸。噂斗で逢ざりしが。まづ〳〵無事で互の珍重。サア〳〵近ふと親兄の。重き仰に威義繕ひ。詞ハア母樣の御機嫌。兄上のうるハしい御樣子。初ての御對面。お嬉しう存ます。幼少より將監が所にゐて、とゝ樣ハ勿論。御二人リ樣へもどうぞ御目にかゝりたいと。明ヶ暮願ふておりましたに。母樣のお情にて。兄樣へもおめにかゝり。又とゝ樣のお着の上。お願ひなされて御一所におかれんとハ。有リ難ふ存ますと。親しき中のうやまひハ。利發にも又あひらしし。母上いとゞ不便ンさの。詞ヲ、是かられ母が祕藏します。サア〳〵ずつと爰へよりやと。仰に共ゝ衣紋之介。詞遠慮せずと母樣のお側へよりや。ひらに〳〵とおとなしく。御親ン子兄弟御中も。一ト方ならぬ御因。將監も手を取てイザ御出とすゝめやり共に傅き奉る。追ゝ歸る遠見の足輕。詞只今殿樣御着なりと。申上れは人々ハ御座をもふけて待給ふ。御行烈ハ表に殘し眤近斗付添て。しと〳〵かき込旅乘物。川田甚平引添てすぐに書院ンへ昇上さ

せ。いづれも御太義。イサ休息召れよと詞にハットお供の面〻。いそ〳〵長屋へ退出す。奥方若殿待兼の。御乘物にさし寄て。手づから戶を明悅びの。秀詮卿ハ常成ラぬ。刀にすがり出給ふ體ふしんにハット御顏を。守リ詰たる其內に設の。褥に座し給ふ。衣服を見ればば流るゝ血汐。コハ〳〵いかにコハいかにと。皆〻あきれ介抱の先だつ物ハ泪ゝ。判官くるしき御聲にて。詞ヲヽ驚キハ尤至極。某がコヽ此有樣。知ッたる者ハ。アレアノ甚平一人シ。外へハもらさぬ家の大事コリヤ甚平。着する迄ハおのれやれ。奥を初め躮へ對面。後目の事此世の名殘り。云イ聞して相果んと心の張弓苦敷を隱し堪へしが。詞コリヤ此介抱に心氣のゆるみ急所の惱。我レにかハつて昨夜の次第。ソレ早く〳〵と氣をもみ氣をもむいき切レの。血汐ハ瀧を爭へり。奥方有ルにもあられぬ思ひコレ甚平。詞殿樣のアノ御深手。何とお咄しなる物ぞ。早ふ樣子をサア〳〵とせき立給へバ。甚平ハ。諸肌ぬいで脇腹へ差添。がハとつき立る。人〻是ハと又驚キ。氣丈の老人這寄て。詞イヤ〳〵おさハぎ下さるな。申上る一通。昨夜小田原の御泊リいつものごとく御寢所へ入參らせ。お次にとのゐ致せしに。刻限も丑みつ頃頻りに殿の御聲にて。詞甚平參れ只一人。早く〳〵と召るゝ故。何事かと駈つくれバ。アノ御手疵。次第ハいかゞと窺へば。臥所の下よりねらひのわざ物、シヤうぬ召捕んと立騷げバさすがは御主人。ヤア甚平。かゝる狼藉身のふ運、世上へもれてハ氏の穢家の斷絕。近習の者へも深く隱せと。丈夫の仰も拙者めが。無念さ何と申べき、詞只穩便に取リ斗ラへと。御諚を守つてすご〳〵と。御供したる甚平が申譯ハコヽ此切腹。奥

様申若殿様。御供しながら此しだら嘸御さげしミ。せめてめいどの御先がけ。後で宜しく御取成。ノフ將監殿。御頼ミ申モフ是切さ。握り詰たる刀の柄きり〳〵と引廻し。あへなき最期ぞむざん成。將監ハ眉をしかめ、心へぬハ縣ノ三郎。詞供司の身分ンとして、此場へ參らぬ不審さと。詞もいまだ終らぬ次の間。つまづき〳〵駈來る。縣ノ三郎行春。此體見るより猶てんどう。いづれも御免と秀詮の御膝元にかけ寄て。詞申々三郎めで御ざります。御心底御なやミ。申上べき樣もなし、奧樣申若殿樣嘸御歎。ノフ將監殿。昨夜小田原の宿迄御供申。御本陣へ入ル間もなく。後より早打。某預り奉る御家の重寶雨降の玉。御後荷の長持へ入レ置しに。箱根の坂の切所にて。何物共知ラず。奪取て立退しと急キの注進。すハ御大事とさつて返し詮義すれ共、盜賊ハ行方なし。三嶋の方へ迯行しと少シの手懸りを頼ミにして。追ッかけて詮義最中。かゝる大事と甚平がひそかの知ラせ。玉の詮義も夫レなりに。息を切ッて駈付たり。ヤハア甚平も相果たり。エ、我君樣何をいふも此御深手。ヘエ殘ン念やと拳を握り齒をくひしばり。千ミに碎くる心の悔思ひやるさへあぢきなき。大息ほつと秀詮卿。詞ヲ、待チ兼た三郎。スリヤ玉は奪れ。盜賊は知レぬとな。エ、口惜や腹立や。そも雨降の玉といへるハ。いか成旱魃ひでりにも。水に入ルれバ其儘に。降雨しやぢくを流す故。國を治る希代の名玉。先祖佐々木の太郎定綱より代々傳ハる家の重寶。將軍家へ差上んと。國元トより持參せしに。參勤の日に紛失。我レは犬死。よつく武運に盡果たるか。詞コリヤ三郎將監。急病と披露して、衣紋之介を後目の願ひ。力ラを合せ玉の詮義もおこたるな。

只何事も頼むぞよ。コレ久方初花姫ハなぜ見へね。そちらハ誰レと見廻し給ふ。奥方猶も介抱の泪片手にコレ申。詞爲丸で御ざります。けふ御着の悦びに、親子名乘の御願ひと。母の詞に爲丸君。泣めを拂ひ申さゝ様。詞是迄は將監が屋敷に居て。一日もお傍に居ず。おかゝ様のお取成で。お目見へを致さふと。御着を待て居ましたに。こんな悲しい御對面。申兄様。どこのやつか此様に。とゝ様を突おつた。敵を取て下されさしやくり上たる弟が歎キの中にもけなげの詞。胸にこたへて衣紋ノ介。此事世上へ聞へてハ。氏の穢家の斷絶。深く隱せと父上のお詞が重きゆへ。倶に天を戴かぬ父の敵を尋出し。討事ならぬ我ゝハ。弓矢神にも天道にも。見はなされたか淺ましやと。兄弟顔を見合て。歯を喰しバる無念泣奥方始一同に泪果しハなかりけり。判官苦しき目を見開キ。詞ノフ奥。兄弟揃ふて今の對面。身に取て過分なぞや。衣紋之介は何事も。と穩便に取斗ひ。家を立るが先祖へ孝行。コリヤ爲丸。今逢て今別れる。父が心を推量せよ。此上ハ母兄を。大事にするが我への追善。衣紋之介も不便シをくれへ。兄弟中よふ成ィ人せよ。敵の行衞は縣ノ三郎。時節を待ッて討せてくれ。いひ置ク事も是切と。息も絶ゝ四苦八苦終に。此世を去給ふ。人ゝわつと聲を上ヶ正體泪に伏沈む。久方御前ハむせ返り。御機嫌よいお顔を見。爲丸も引あハせ初花ハいやらず共。親子四人祝ひの盃。願ひし甲斐も淺ましい御別れあんまりほいない情ない。又殘り多いハ初花姫。親子ハ一世と聞ク物を暇乞さへせぬ不孝。不孝な子が可愛と後で此事聞ィたなら。歎キの程を思ひやる。御着の祝ひと此様にかずの進物取リはやし賑やかな

座敷へ出て。待ッていたのハ冥途への參勤を。見立る爲で有ッたかと。思へば〳〵いまハしやと。三人寄て秀詮の死骸の顏を。打詠〳〵コレ我夫。申父上。とゝ樣と。泪の雫白雨に霰たばしるごとくにて目もあて。られぬ風情なり。將監三郎詞を揃へ。詞御後目濟迄ハ御尊骸の殯。萬事の用意仕らん。イザ先奧の御殿ンへと。兩人寄ッて亡骸をしとねと共にかき上れバ。奧方始め衣紋之介爲丸君もかきくもる。泪ながらに御手をかけ。奧の殿へぞ入給ふ。暫く時を寫し繪の。左右の襖押明て立出る兩執權。席を改め多賀ノ將監。詞ノフ三郎殿。見らるゝ通の此しだら。後目の願ひハ若殿にて諸事ハ相濟すまぬハ貴殿。察する所日頃の出頭。奢に長じて廓通ひ。揚代等にさしつかへサ得て有ルならひ。玉を以テ金銀を借請召れたか。サ其云譯立がたく道中より引返して。後での狼藉サアよもや貴殿のわざでも有ルまい。カ折が惡い。此將監疑ひ申。サア一旦の若氣に其身を忘れ。或ハ家國を押領などゝ思ひ立。惡にそミたる五體でも。水責火責天坪責。背筋をたち割鉛の熱湯。手を盡し責るならサ其工ミをいふハ治定。さすれバ其儘鋸引。さか磔ハ天下の大法。其身の破滅ハいふに及バず。主人の家迄斷絕するナ合點か。そこを存じて將監が日頃の好身すゝめ申。イザ介錯と手練の鍔元ト。しつかと押へコハ狂氣せしか將監と。云ハせも立ず。詞ヤア首討ハまだ仕合せ。尋常に覺悟せよと。又切懸れバ側成台にてはつしと請イヤサ是おせきなれな將監殿。詞年ンばいといひ職義に似合ぬ。ナ、何とサア縣三郎行春。切腹の式法よつく存じておる。殿の横死玉の紛失。イヤサ是あれてゝ腹は切申さぬ。ヤア卑怯至極。疑ひか

ゝる其方命を捨るが申譯。甚平が能キ手本へゝ。へゝゝ、へゝゝ、イヤ此三郎甚平と一ト口には申されぬ。某が所存奥方若殿へ申上。其上にて兎も角もお引キなされとはねかへし。白眼合たる家老と家老。物音ト聞付ケ久方御前衣紋ノ介もかけ出給ひ二人が中に立並び。詞 將監が疑も理の當然 又三郎が常々の忠節。ふ所存あらふ樣もないとしづめる奥方衣紋ノ介。詞 ハア 母人の御意のごとく。双方共に忠義の論ひ併。死をゝしむべき三郎ならず將監ひかへよと三郎も。所存の程申聞カせよと。理非明白の衣紋ノ介。實梅檀の二葉之。將監いふ宵〳〵納る刀三郎は飛しさつて頭を下。詞 疑ひを受たる上。申譯の切腹ならバモ一命はちり芥。然れ共大殿の御最後玉の紛失。彼レといひ是といひ當家に望をかくる族。サ 是有に極つたり。詞 マツタ 身に覺なき證據は則チ殿の御遺言。御後目と玉の詮義賴むと有末期の一句。イヤモ むさと切ツ腹は得仕らぬ。しかしながら。苟にも疑ひ受たる某。御暇を給はりなバ。敵の有家玉の行衞。手便を以て尋ネ出さん。此旨願ひ奉ると懸河の辨舌忠臣の。誠は鬼神も感じけん。將監も理に伏し返答なければ久方御前。詞 ヲヽ 尤の願心便りのない此時。衣紋ノ介の力ラにもとかた〴〵留る筈なれど。道理を盡したそなたの心底。見所あれバ暇をやる。隨分無事で。何角の詮義と。後は詞も口ごもれバ衣紋介も聲曇。堅固で。早ふ歸參せよ待てゐるぞの有難さ骨身にこたへ三郎はハヽ、ヽハツト ひれふせば。將監も此場の時宜。ノフ三郎殿。詞 何を申も忠義より今のとゝ刀ざんまい。ハア 御念に及バずと。とまるも出るも互の胸と胸ヲヽいかにもと兩人が。善か惡かは白洲の上。おつ立三郎しほ〳〵と館の。名

殘振返り。見る目も泪見送るも泪。ながらに。二方ハ。將監にかしづかれ心細くも入給ふ。はてしなき。泪の雫水晶の殊數の玉の緒堪兼て。いづくに心奥方ハ。二階の佛間御明の。影細〻と誦經の聲。思ひのきづな鈴の音もしめる。斗に哀く。花ハ根に。歸るを歸り兼たるハ。あだな嵐の吹すさミ。何となり行身の果と。思へバいとゞなつかしく。せめて最一度母上の。お顏を見たや逢たやと。まよひ出たる初花姫。乳母が手引を杖柱。塀の外面に休らひて。詞ノフ狹衣。矢口參りの騷動より義岑樣のお行衛しれず。館へハ猶返られず知べの方にかくまハれ。世にあぢきなき我身の上。よそながら母樣へお暇乞を申上。其上ハ兎も角もと胸を定めてやう〳〵と。爰迄ハ來れ共。詞うかつに屋敷へはいりもならず。是といふも何故ぞ我身の戀に親ミの。案じも忘れ家出したふ孝のつミ。モウ罰が當つたかと聲も得立ぬ忍び泣。乳母も目をすり。詞ヲヽ其お悔は御尤。私とても同じ罰。奥樣のさぞお叱。あんまり大事に思ひすぎて。御異見も仕そふな物が戀の取持。返つてお身の仇となる。アヽ移りかハるは世のならひ。花見御遊山物詣。假初のお出にもおそばの女中供まハり。大勢つれて出たお屋敷。今宵ハ乳母が只一人ㇼお供申て塀のそと。爰に居るのも氣がおくれ。こハい〳〵で肩身もすぼり。身すぼらしい此おすがた。大名の姫君のあられふ物かおいとしやと。乳母がしんミの氣のあつかひ。詞コレ申姫君樣。けふは慥に殿樣のお着。いつもの御祝義謠はやしで今頃まで。賑かな筈なるに打しめたハ合點がいかぬ。ヲヽそれ〳〵。アレあの二階でお經の聲の聞へるハ。アイ奥樣そふにござります。アレ〳〵鈴

がなりまする。ほんにアノ影ハ母様の後姿。申初花で御ざります。餘りお目に懸りたさ乳母をたよりに參じました。嘸憎いやつ不孝者と。お呵なされてござりませふが。とても事のお情にたつた一目おあいなされて下されませ。詞申〻コレ申と。見上見やりつ足つま立。いへ共とゞかぬ塀の上。思ハずしらず聲を上わつとばかりに泣給ふ。おとに二階も障子をあけ。詞ハテ心得ぬ今の泣聲。まがひもなき初花姬。どふして爰へ來た事ぞ。ムウ判官様に非業の別れ。ほいなさに。姬が事迄くよ〱と思ふての此看經。讀誦もそゞろ心のまよひ。詞おもひなしであつたかとの給ふ母の獨言。下には姬が聞取て。詞エヽ非業のわかれとおつしやるハ。スリヤとゝ様はお果なされましたな。ハア。ハツトばかりにあきれ果。コリヤマア何とどうせふぞ。どうせふぞいのと身を震はし堪入消入さけび泣。奥方も飛立ばかり。ヤア姬かといひたさも後さき思ひ押しづめ。詞ムウ今泣たのハ子規。夏に先たつ不遠慮者。深山に巣をくふ鶯が夫婦の中に育ても。成人してハ其親を振すてゝ己が儘。子で子にならぬ杜鵑と世の諺も今身の上。とハいふ物のそれハ鳥類人間ハ又格別。子ハふり捨て出行共。親ハわすれず朝夕にいか成所に居る事ぞと。夜の眼も合ハぬうき苦勞。詞又父御の別れと聞。ヲヽ驚きハ尤もじや。道理じや〱。コレ道理じやハいの。譯を聞ヶ程歎きがます。ソレデモいふぞ。ハテいふもかなしい心がせく。呼歸したいハ山〻なれど。此中へ戻りてハ。思ひ合た雄鳥との。比翼の中を引分て。すぐにかの畠山時鳥と鳴すがいやさ。詞此譯をきゝわけて。里のしるべに時を待。コリヤ。傍に付そふ乳母鳥も

介抱さこそ。おもひやる。暫しの間としんぼうさせ。夜の臥所は狹衣の一ト重をわけて大切に。詞風も引すな息災で。やがて戻つてたもる樣に。賴む〳〵と恩愛の。慈悲の敎へハ看經の經の。外カなる功德なり。初花姬も狹衣も兩手をあハせ立つ居つ。有難泪果しなき。奥方ハ心付暇乞にと佛間の手しよく。內外。見廻し欄干に。指出す明ガり。詞ヤア母樣。娘。かならず短氣を出さぬやうに隨分無事で。母樣にも御機嫌よふ。申奥樣。ヲヽ。さらバと立切ル二階の障子心づよくも入給ふ二人ハ御後打ながめ〳〵。コハそも何と詮方も前後。ふ覺に伏沈む。折から來かゝる江田彈正。僕の鳫介先キに立うそ〳〵窺ふ提灯の。あかりにきよろ付。蚤取眼。かくと見るゟつつと寄リ。詞ヤア初花姬。狹衣。爰で逢たは幸ヽ。サアうせあがれと引立る。乳母ハふり切後にかこひ。詞ヤア一度ならず付まとひ。姬君をどうしやる。らうぜきすれバ赦さぬと。口にハいへど心ハあぶ〳〵。彈正主従吹キ出し。詞イヤモいハれぬ乳母めがほざき言。將監としめし合せ。畠山へ連レ行バ。其褒義に出ッ世すると引立ればふり放す。ヤア めんだうなとちめらうめ。ソレ引ッくゝれと下知すれバ。心得鳫介無理無體姬を引立彈正ハ乳母を手ごめの其折から。縣ノ三郞行春がやつこの浪平。主人の供のおくればせ夫レと見るより鳫介が羽腰摑んでゑのころ投。彈正を張退蹴退かたへにかこひつつ立ば。二人ハ ハット 嬉しさも。鷲に追れし枯野の小鳥。懷見付し心地なり。彈正主従 アイタ 痛い脚腰踏しめ〳〵ヤア夢見たかと思ひの外三郞が家來のかすやつこめ コリヤ うぬ〳〵。〳〵〳〵〳〵手ひどいめに合せたな。アイタ〳〵〳〵一ッ體どい

つも盆なし共。一つ繩にくゝし上。初花姫ハ畠山への進上物。やつこめハ豆腐切。乳母めハ鮨のおもしにするこ。强い顔して長口上。其間に手早く。二人を落しふんぢかつて打笑ひ。ヘヽハヽヽヽヽお暇の出た縣が家來。彈正でも鳫介でも唯一ひしぎ。コリヤ此浪平を搦んこは。焰魔に敵たふ有罪餓鬼。おがらのすねぼしほつき〳〵ひしいで吳んこ嘲たり。ソレこ聲懸鳫介が捕たこかゝるを眼つぶし詞コリヤ させぬハこ彈正か後矢筈にしつかこ抱。ほぐれて前へ片手投。すかさず襟じめ肘落し。右から入り身のゑり首こらへ引ャ寄る。間もあらせずむしやぶり付。雙方あたまをくれつち〳〵。突飛されてコリヤ叶ハぬ。赦せ〳〵こ迯吼をヤアのがさじ物こ駈行浪平。せちがふ鳫介シヤ。面倒なこ引かづき二三間投付れバ腰をさすつて一ッさんに。御めん〳〵こ迯て行。イデ彈正めを。詞イヤ〳〵〳〵やがて主人の出世迄。暫しが内のかくれ笠。隱れミの德わざハいハ。ナイ〳〵〳〵ほどなく歸參花かいらぎ。鞘も目に立大脇差。角鍔しやんこ伊達やつこ。ヤツコノ此にやつこが忠義。しるしハ大紋ふり出す袂。振り返り見返る名殘ハ京極の館を。後に　三重へ立出る。

第四　四谷新宿菊田屋乃段

四ッ谷新宿馬草の中に。紫羅傘咲こハしほらしや。甲府海道秩父道。二つにわかる、追ィ分や。通路自由に何ふ足內藤宿の室の梅。食はもらねど食盛に腹はれ客の喰ひ込。山の大將。登り坂。新ン日暮の

繁昌を皆見に北をまかす氣の男女の藝者茶屋煮賣數の。商人諸職人すぎハひ多き其中に。稽古上るり連ン中の最負を賴む張札ハ。菊田屋の宗兵衞が語る長地の其中につまらぬ事に相の山其日。暮しのにヲクリもからき。浮世の胡麻鹽に氣を取フシと見へにけり。折節表をいつこかハうさんな形りの大男小鬧がしげに行後より。ヲヽイ／＼とさまたの十兵衞萬八待と呼止め。詞イヤ是手が惡いはづすない／＼。此さまたが見入てハはづしてもはづさせぬ。コリヤヤイ日外貸た五兩の金ハどうするのだ。大森迄はる／＼といつ往ても大方留守。たま／＼內に居る時ハ酢の蒟蒻のと拔ケ上手。所詮當のない金なら。證文に書キ入た質物を請取べいかい。イヤ質物渡す迄もない心當ハ大分ン有。イヤ何の事ンだい。今時わいらが懷で五兩といふ金。びん付でハ有ルまいし。イヤ出來まいと思ふがせつかい。ずんど慥な心當しかも三口有ハい。ムヽ何だ金の當が三口有ルか。ソリヤ耳寄リ夫レで少と落付た。イヤ少トそふも御ざるまい。シテ其心當ハどうだ。サ其三口有中で。第一番の心あてといつぱ。ムヽいつぱ。サア此磐花な江戶なれバ。五兩や七兩ハツイ落して有ふかと思ふて。毎日おれハ拾ひに步行。ハテめつそふな男だ。そんな雲つかむやうな事いはずと。後の二口が聞キたいハい。シテ其次な。心當ハ。第二番めの心當ハ。おれが方からやつて置イた質物書入の證文を。どふぞ貴樣が落してくれバ。おれハとんとうけに入。ヱヽベら坊め相手に成ル隙がないハい。ア、イヤ今一口殘つたが至極慥な心當。ムヽ至極慥なこ有レば面白い。アイヤ慥は慥なれど。貴樣の前でハ少遠慮でいひにくい。イヤソリヤ惡い合點。慥に手に

入心當なりや。借人の仕合貸人の悦。何の遠慮に及バぬ事。おれも聞て落付たい。ソンナラいふて見よふか。ずんど慥な心當といふハ。食傷か疫病で貴様がころりとやつてくれれバ。借た金ハ濟でハないか。エヽいめ〳〵しいごてれつめ。金戻さない其上に人を茶にする土左エ門め。何の事。だい咄しの様なとかミ付やうな腹立聲。詞エヽ素人らしい事いふなやい。惣じておいらが仲間でハ勝た時ハ拂まけた時ハ踏のめす正直正路な付合。シタガ今のハじやうだん。本ンの心當といふハコレかう〳〵じやハと耳に口。詞ムヽコリヤちつと雲に汁そんなら往て相談せふとうなづき囁き打連立て行後へ。棧留嶋にお納戸茶の裏もちつくり青ざめし病後の顔も漸〳〵と太織の羽織に短き。冬の日脚も八つ下り。閑がしそふに菊田屋宗兵エ。取るゝ物のない内は戸さゝぬ御代と掛ケがねも。かけぬ門の戸ぐハらつと明ヶ、ずつとはいる我家の内。思ひも寄ぬ寢返りの大欠。廻らぬ舌で詞ムヽ宗兵衞殿お歸りか。ヤア人の留守へ來て寐て居るハ何者だと。差覗いて。詞ホ誰かと思や林右エ門様。どこで上たかよいお色。つむりはしつかい鮹のゆで立。サアおひなりませ。ムク〳〵と起る片手に目をすり〳〵。しどろもどろの足元トハ。ぜんまい人形のぜんまいに損じの出來た身ぶりん。漸取付ヶながし元。柄杓で水をがぶ〳〵〳〵。詞ハアゑい氣味だ。エツフウホヽ此寒いにゑい御元氣で御ざります。イヤモフゑいか惡いか知ラねいが。けふハ見番へ呼れて馳走。大勢の藝者の中で。式部めがおつをやる。あいつハどうでも氣が有ルそふなとおれも十分ン乘が來て。吸物椀でぐい呑。其勢ひで三光院へ往たれば。此宿での先生。松坂や

の扇野。山城屋の明石。橋本の元町。三幅對の掛物に。我ら布袋の置キ物としやれころばして又呑だ。ナント新ン宿もきつい物に成ッたでハござらぬか。貴樣が來てまだ間もなけれど。アレあの通月會の床迄がりつぱに出來た。サア一段聞ィて下され。愛護の客に二世迄と。いふて別れて其後ハ文も屆かず顔も見ず。夫レさへ今ハ其人に。詞コウ／＼／＼申ミ淨瑠璃を語ながら鼾が出ます。少ト元ン氣をお出しなされませ。ヲツト合點だ虎も半分ン毛をむしられ。雨戸に合栓合くろゝ。さつと佐々木が打渡つて詞申ミ。ソリヤやくたいでござります。やくたいか何だか。此家ハぐる／＼と廻る。／＼にしてハ壹歩二百の店賃ハ高いもんだ。ヤそれハそふと市の丞や茂四郎仁兵衞。モウ見へさふな時分ンだと。噂半へ三人づれ。中にもきん／＼市の丞。詞林右先ン生早いお出。やつかれけふハ此邊の羽織の内にすこ氣有。しめこの兎ちよん／＼幕大の極りと出懸山の所。茂四郎仁兵衞におだてられ。深川でしやれのめし。此二人がいちや付を。我ら引立ぐい歸りと。本田天窓のやに下り。天に向カつて吹煙。鐵拐仙や出ぬらん。茂四郎仁兵衞口々に。詞ハテ扨夫レハ大キな鐵砲。けふ爰へ來るはづなれと。ぐい流しと云ハれたを。無理に連立ッて歸りました。夫レハとも有レ。けふハ稽古をよしにして。少めくらふでハ有ルまいか。おつとよかろと毛氈ひろげ。手ンでに用意四文錢。座取も時の運次第。めぐる浮世ハ車座に。つらりとならぶ慰も。樂ハ苦の元ト九と六を。折角踏だ大引が。めくつて渡すハヱ、どんな。どん／＼太鼓で二百の負。勝て兜の鬼に。鐵棒坊青二。青十青高きり／＼と。一打てしるばんこの數暫く時をぞ移しけ

る。折もこそ有レ門口より。爰じや〳〵と菰包の。半櫃を差荷いずつとはいつて少ト頼ミましよ。詞菊田屋の宗兵衛様ハ爰で御ざりますか。新地からの届ヶ荷物。アイ慥に渡しました。鳴子の方へ參ります。受とりや歸りに貰ましよ。棒も預けて置ますとつかハとして出て行。詞ホヽ身代が直つたか。大そふな代物が來るの。イヤコレ〳〵ちよつと待ッて下されませ。新地から荷のくる覺ハないが。門ト違へで有ルまいかと立寄リ見れば差札に。詞四ッ谷新宿菊田屋宗兵衛様。ハテおれが名は書ィてハ有ルが何で有ふと棒引拔。菰切リ解き明ヶんとすればバ不思義やな。ひしぎの笛の音太鼓の音ト。ヒウドロ〳〵に皆恟り。コリヤ幽靈の箱入か。雷の捨子かと取ミ評義の其内に。又トロ〳〵の拍子に連。あたまでふたを押明ヶて。ぬつと出たる異形の相。有合人ミあら肝。取ラれ眺ゐる。異形の物ハゆう〳〵と。お上に上つて上座につつ立。さも陰々たる聲音にて。詞善哉〳〵我ハ是。貧乏神の正體なり。色事朝寢勝負好親の讓の商賣や百性する事まだるく思ひ。地道な事をいやがりて。智惠もなくして山事請負一度に金を設たがる。是皆我らが氏子ヽ。我レ其昔年久敷ク曾我の家に逗留し。近年段ミ氏子もふえ。近頃新地へいて。菊田屋とハなじミ成に我をふり捨此所へ出張をなし。仕合がよいと聞ィたゆへ。後を慕ふて來たり此家に永く逗留し隨分守つてさらすべし。宗兵衛大キにおそれ入。額を疊にすり付〳〵。詞ハア御神託の趣委細承知仕てハ御ざりますが。御覽のごとく私も新地から此宿へ出張致し。やう〳〵渡世の稽古淨るり。御町内のお影にて少ト息を致す所。只今お出下されてハ。去とてハめいわく千萬。どうぞ

お歸り下さりませ。詞南無貧乏神大明神〳〵と。合掌すれバ。詞ム、かういふ形で居るからハ我身ながらも人間共がいやがるも尤至極。夫レ程うるさく思ふなら。詞初穗を上ゲ歸つて取ラせふ。ハア但しハいやか。ハイ。否なら守る。モ何のいやで御ざりましよと。有合錢を十二銅紙に包で差出せバ。かぶり打ふりイヤ慮外者。詞此貧乏神をあなどつて目くさり錢の十二銅。新地から是迄來てハ日用代にも釣合ぬ。神ハ非禮を請ぬといふをしらざるかと。かたひぢいからし目をむき出し。澁團を差のばしあふぎ立れバ。詞ハア是ハ誤奉る。お初穗と有ッた故。いつものかくで十二銅。本ンに常の神樣とハ違ふ筈じや。思ひ切て四文錢二本で二四の八百文。どうぞ是で御了簡。氏子をはぶいて下さりませと。差出せバ手に取ッて。詞ム、せつかく汝が心ざしふ足なれ共ちやくぶくするぞ。是からハ林右エ門方へ鎮座致さふ。ハア悲しや夫レハ去リとハお情ない。私は段々の不の字盡し。お前樣が御ざつても何一つ備へる物も御ざりませぬ。其ないがおれが好物なり。其上におれが往たら水も呑れぬ樣に守つてやらふ。ハアコリヤたまらぬ。そんなら負てハ居ますれど。私もお初穗と懷さがして南鐐一片。殘りの三人顔見合。詞何と思やるぞ是からこちとらが内にござらふと。御託宣が出れば仕廻じや。いつその事前廣にお初穗上て仕廻ふと。三人前で壹歩二朱、惣々合して貳百八百しぶ〳〵に打うなづき。詞是で一應歸つてござらす。又見合てくるで有ふと。いふに五人が口を揃へ。詞イヤモウ〳〵〳〵どふぞお出ならぬ樣。遠い所へ御遷宮を願上ます。ムヽそんならわいらおれを祭る眞言が有。眼を閉て一ッ心に鉦太鼓

ではやし立バ。再び此地へ來るまし。ハア夫レハ何よりお安い事。シテ其眞言ハどう申ます。ヲ、得心なら敎へてやらふ。おんびんぼろ〳〵すかんびんそハか。〳〵。サア眞言ハ覺た〳〵サア目をねむつて一心不亂。やつてくりやうと鉦太鼓拍子揃へて。おんびんぼろ〳〵すかんびんそハか〳〵〳〵〳〵。拍子取内取ちらす錢を殘らず盆ござの。毛氈ぐるミ引かゝえ逸足出して駈出す。一間の内より高聲に。

詞ヤアノヽ貧乏神暫く待テ。忝クも此内に大黑天がひかへたり。止れやつと呼ハつて。かゝる所に鎭座とは。いかでか思ひ月會の。床の御簾をさつと巻上ゲ色黑々と。福々敷。くゝり頭巾や打出の小槌シ。まがふ。方なき大黑天。皆々ハツトひれ伏バ。貧乏神ハ身の毛立ふるひ。おのゝきうつくまる。大黑天ハ勇ミ出。大黑舞を見さいな〳〵。大黑と申ハ摩訶迦羅天のてん〳〵〳〵。天下泰平國土安全。五穀成就と守るゆへ。家のおもりの大黑柱。信心堅固の其ゆへ。きのえ子待チの備へ物。二股大根好故に。大根喰夫と浮名立。扱又お寺の大黑黑ハ大あなむちの命より。ひよんなる異名を付けられて。そこのうら店かしこの新道。柿の暖簾に豆屋と書イて松茸賣ならはいらしやんせの天に、天人地に踊子おいらが仲間に辨財天。妙音てんつるつる〳〵〳〵。てんつる〳〵チツテツトン神祇釋放戀無常。士農工商おしなべて己が後世に油斷とず。稼に追付貧乏なく磨いて光らぬ玉ハなし心だに。誠の道に叶ヒなバ祈らず迚も神や守らん〳〵と神宅あれば人々ハ。ハツトかつがうなしにける。大黑重チて神シ託にハ。

詞ヤア皆の者。アノ貧乏神といふやつこそ。かたりに來りし不屆者。あいつが面を洗ふて見よ。畏たと

立懸り迯んとするを無理無體。流しの水を懸るやら。たハしでこすられくま取リの。繪の具ハ落て見合す顔。詞ヤア脩レハぶつたくりの万八め。太いやつめと蹴つ踏づ。詞ア、コレ待ッて下され。ありやうは打負て。十兵衛に借た金。毎日せつかれせつなさに。彼其以前生麦村で。道念にだまされた。コンコン〳〵のおつかぶせ。貧乏神に焼直し破帷子濫團。菓子袋の古ル頭巾。笛太鼓の元ト入してかたる手段をしくぢつて。かふばれた上からハ。モウ破かぶれ。只ハ歸らぬ。てらをしてくれたと思ふて。此金ハおれが貰ふ。もし又いやといふがさいごの介。お代官所へ訴て博奕の尻わり。サアどふだ〳〵と腰をすへのさばりかへる不敵者。大黒天は立寄て。小槌をもつて万八が天窓をたゝかれ。詞アイタ、、うろ拍子惣〻が。以前の錢金取かへし。にくさもにくしとぶちのめせば。コリヤたまらぬと一さんに後をも見ずして迯て行。人〻信心肝にめいじ。ハア有がたやとうとやと禮拜すれば林右衛門。詞日頃苦勞致しますも。お前のお目に懸り度斗。數年の大願成就致し。ふ思議にお目にかゝりました。モフ金持に成ッたやうな心持が致します。かゝや息子が嘸悅ぶで御ざりましよ。是からお供致しましよ。後かまハずと私方へ。早ふ御出下さりませと。いふを押サへる市の丞。詞イヤ是人にハじぎの有ル物だ。まんがちな事云ハしやるな。申大黒様。私方せまふハ御ざりますれど。さつぱりといたして置ました。どふぞ御出下さりませ。イヤ茂四郎がお供致そ。イヤ仁兵衛方へ御來臨。イヤ我らが先じや。イヤおれと。互にせりあふ大慾心。宗兵衛大に腹を立。詞コレめつさふな。おらが内へゑいやつとお出なされた大

黒様を。そゝのかして貰ふまい。去ッさは横着千万な、罷成ラぬさつき飛せバ。詞イヤ遠慮するも事に寄ルッ。是が本の寶の山。淺草市でもぬすんで來るいハんや腸持の大黒様の奪取がち。サア是からハ腕づくだぞ。そつちへやつて能物か。イヤうぬが。儕レがさ後ハ互に大肌ぬぎ。五人が一つにからミ合上を下へさ大騒ぎ。見兼てさゝへる大黒天。引ッぱるはづミ面頭巾。ぬげたる顏を見付る宗兵衞。詞ヤ、、こな様ハ道念様さいふに皆ゝ悔りし手持ふ沙汰にながめゐる。道念ハにこ〳〵さ。詞ヤレ久しぶりで宗兵衞様にお目に懸りました。私も先ン年生麦村に居た時ハ。いかいお世話に成リましておかげで名を上ゲました。今ハ大森へ引越て。相應な庵を持。新田の社建立さ所々方々勸化して。お宮も日にまし御繁昌。此間万八が博奕に負て悪仕事。貧乏神に化て。爰な内へ來るさいふ趣向をちらさ聞ィた故。おなしミの宗兵衞様をかたらせてハ濟まいさ。貧乏神を取ひしぐ大黒の思ひ付、裏口からそつさ這入、アノ月會の床の内に隠れて居て。思ひ入をやらかしました。が首尾能いて仕合しましたさ。いふに皆ゝ肝を潰しコレハ出來たさ悦ぶ所へずつさはいる万八が。詞ヤア何も角も。皆聞ィた。ヤイづくにうめ。一度ならず又おれをだましたな。目に物見せんさ摑懸るを惣ゝが。寄てたかつて引しバり。有合菰でぐる〳〵巻。聲立させなさ口へねぢ藁。宗兵衞俄の思ひ付。イヤコリヤこいつをかうせよさ。手足もぐる〳〵菰じこミ。かふ見た所が藁人形。元トの頭巾を引かぶせ庭にありあふ半櫃の。棒にしつかさくゝし、付、幸町内祈禱の爲。詞風の神を送つてやろ。サア道念様御大儀ながら。音頭〳〵。ヨツト心得ごみ

拂。追取て先ャに立。昔の通やつてくりよ。つかミ頬はる此万八が。ヨイ〱。欲の深い事ハ糀町の井戸よ。ヨイノ〱ヨイノ〱〱。アリヤリヤコリヤリヤ ねりま大根で太いの根と來た万八が。瓜の長さが三十三間三尺三寸。三分三厘三毛三拂、今度ハ大黒腹を立。ここらハ若ひ衆たのミます。コレ此万八めを。しめろやい ヨイサヨイコレハノサヨヤ サア、詞これからひやうしでおくりましよ。風の神おくつた〱。〱風の神おくつたとおし立てこそ 三重へおくり行。

第五　道行枕屏夢路の蝶双

うたゝ寐に。戀しき人を見てしより。夢てふ。物は頼そめてき。夢か現かまぼろしか。我レも知ねバ人ハ猶。知ラぬ旅路をそこ爰と。賤が手業に。薪こる。鎌倉山を餘所に見て。海道筋も冬空ハ人目も。草も枯尾花招くも若や追手かと。逍遥持あしびきの山のあなたの横雲ハまだ夜深きに有明ヶの。月を田面の薄氷うつり。替れる品容やつせバひなの人。がらに。新田小太郎義岑公。初花姫と諸共にうかれへ出るぞわりなけれ。踏もならハぬ玉鉾の道も覺へぬ樂しミはしつと手と手をしめ合って。人目堤の小蔭でハ。だき月影を闇にして枕二つを星明り。落葉のふとんをむつ言の。よぎなき事ぞ恨めしき。アレ〱〱。そら飛鳥も生し立。木にも妹背の有レバにぞ。比翼連理の浮名立たつきも知ラぬ山の奥。虎伏野邊の果迄も見捨じのかじ。離れまじ。おくれハせじと十塚ハと姫ハ漸。走りつく。姿タも吉田はした

なふ所體亂るゝ。上柏尾。見るに付ても後先を。思ひつゞけて義岑公。世になき我を左程迄。慕ふて下さる志。わすれハせし去りながら。執心深き畠山いか成仇をか信濃坂。燒餅坂は善ン惡の境木村と隔たらハ。詞武藏相模の苦に苦をかける。親へのふ孝をかえり見バ、是より鎌倉へ立歸り。兼てほしかる畠山へ嫁入するが夫レ々に。身の程ヶ谷を知ル道理。思案しかへて下されと。いふもせつなき詞のはし。聞ゟ詞ハ。せきのぼし。今更それハどうよくな。國を隔て見ず知ラぬお前とつひした轉び寐ハ。味なゑにしも何の其。科を此身に追分と。起請誓紙ハ互の胸に云て置イたる神奈川や。子安と聞バやゝ產で。千代万代の壽を我は松竹鶴見村。女夫橋ぞとの給ひし詞も。うその。川崎か。あつたら疵は玉川の。流レの末ハ六郷の。わたしが胸の苦しさを思ひやつてと斗りにてすがり付てぞ泣ゐたる。義岑公は漸くとすかしなだめて行さきに。里の子供の聲に。恨ミかこつもナ。じつからしんぞ。氣にあたろとハ夢々知なんだ。起請誓紙ハ。疑ひはらしヲ、よい事の〳〵かあい〳〵とだまして置イて。にくやくだかけまだ宵ながら。思ひ立身もナ。兼てはしんぞ。旅のつらさハ夢々知なんだ。二人行身ハ。後先わすれヲ、よい事の〳〵。晴る〳〵とだまして置イて。にくや村雨まだ宵ながら。うたふ一トふし身の上に。思ひ當りの。遠慮なく手に手を取ッて行後より。頭巾まぶかに來かゝる兩人。それと見るゟ聲をかけ。ヤアノヽ義岑我々ハ畠山より初花姬が討手の者。わたせ〳〵と呼ハつたり。おどろきながら義岑公。忠、人に聞す詞ハなしと。拔合して丁々はつし。コリヤたまらぬと迯出す兩人。やらじと追ッも轉寐の枕さ

ハがしへ夢ごゝろ

第六　大森村庵室の段

むつくと起て義岑公。やらぬ遁さぬ返せ〳〵と呼ハりながら。刀追ッ取駈出す。コリヤ何事と主の道念走り出て抱き留。詞コレ氣が違ふたか義岑様と。いふに漸心付。傍見廻し扨ハ夢にて有りけるか。詞歌の趣向に案じ入。枕に懸り目睡内。初花姫と連立ッて鎌倉を忍び出。此傍へと吟ふ内追ッ手に出合戰しと。夢に見た故今のしだら必案じてたもるなと。聞ィて落付道念が。詞是ハしたり。日頃戀しい〳〵と。思ひ暮して御ざるゆへ。そんな夢御覧じます。佐々木のお家も當春のもちやくちや。又お前様も此大森にお忍びなされ。初花姫の縁にたより。佐々木の一族を宮方へ招き寄る。軍法やら色事やら。私ハ生麥村から此所へ引ッ越方ミ勸化して。詞矢口の社を建たれバ。浮世に望のない坊主。世に捨られの氣さんじ。けふハ取譯今年シの初雪。詞アレ庭の景色御覧しませ。散殘る蔦紅葉に。雪の積た所ハ。アどふもいへぬじや御ざりませぬか。シタガ雪めも腹の能時見てハ。面白い様な物のさむいにハこまりますてや。ドリヤ火鉢上ましよと。勝手へ立てこて〳〵と茶釜の下の焚落し。火鉢の灰は淺けれどもてなす心深草燒。詞イヤモウお腹がおすきなされふが。ア何にもおかずが有ルまいハい。本ンに夫レよ。此中名主の息子殿に。手本を書ィておやりなされたで親父がほた〳〵嬉しがつて。お客様へ上て下されと。

今朝程大きな蓋茶碗に。煮豆を入ておこしました。中にハ生姜椎茸銀杏乾瓢氷蒟蒻ハアまだ詞何やらモ一ト色。ム、夫レよ錦麩お客様に笑ハれまいと。マ、大分張込でよこしましたドリヤ茶を入レて上ましよと立をおさへて。詞アイヤお坊ンまだ給たふハ御ざらぬ。ハアそんならすいてから上りませ。料理のないお食ハ腹をへらして上ヶるが御馳走。扨先程の夢咄しに付。兼てお咄し申た通。はつ花様の乳母狭衣ハ。元生麥ヶ村の者で。宿下りの時折〻逢て。私も知ル人。村に子供も有事ゆへ。お前ハ爰に御ざるなり。是非尋ねて。見へませふ。さつきの夢が心元ない。村はづれ迄往て見ませう。詞ハテ扨いらざる此雪ふりに。イエ／＼そんな事ハ構ひませぬ。夫レ斗でもなく。隣村の五郎作に念佛講の懸錢預ヶて置イたも取て來たし。次手に廻ハつて參リませふと。ばつてう笠を打かぶり。年は寄ッてもがんでう作り。いさむ心の駒下駄に。足本へ輕く出て行。後見送つて義岑公。四方の景色を打詠。詞誠や謝恵連が雪の賦に。紈袖冶に慙。玉顔嫮を掩と。書キしも雪の譽詞と。夫レに付ても初花姫。われゆへ再舘へは。歸られぬ首尾と聞つるが。いか成所に吟いて。我を慕んふ便やと暫し泪にくれけるが。詞君や來し我や行けん思ほへず。夢か現か寐てか覺てかとハ。ハ、昔男の戀しりに。女の元トよりおこせし歌。夫トハ逢しを夢かと詠。我ハ久敷ヶよすがさへ。聞カぬ思ひを夢に見る。薄きゑにしのはかなさと。忘れ兼たる戀衣。落る泪も雪しぶき。袖の氷柱と成リぬらん。ハア迷ふたり／＼夏の梢の冬枯ハ。天地自然の世の盛衰。悔まし歎まし。木〻に積れる雪の景色。せめて一首の口号と。墨摺流し筆を染机に

臂を打持せ。案じ入たる好の道。さらに餘念ハなかりけり。雪降は。冬籠せる草も木も。春に知ラれぬ。花ぞ咲姿の。花や白妙の六つの。花びらちらほらと。吹返したる。紅うらへ。早咲椿火を焼す燈籠鬢のあでやかに戀の。重荷や傘の行つ戻りつ庵の外。てんほの皮と聲張上。ノフ〳〵夫成御方に申べき事の候。義岑はつとふりあをのき。見れハ襟筋しろ〴〵と雪にも恥ぬ顔容在所にまれなぼつとり者狐狸の化たるか。又雪女とやらいふものか。何にもせよ能キ慰と落付顔。詞イカニ女中。申すべき事の候とハ。そも何事を仰らるゝにて候ぞ。女ハハツト袖覆ふ。顔ハ上氣のはぢ紅葉だく付胸を押しづめしづ〳〵側へ歩ミ寄。じつと見かはす晢波のめもとの愛の矢先にハ。いかな男も魂を。射て落さるゝ風情なり。色好ミの義岑公。首筋元トからひいやりと背筋へ。こたへる戀風をじつとしづめてさあらぬ體。女ハ猶も手をもぢ〳〵。詞本ンに私とした事が。お近付でもないあなたの内へ。押付がましうあられもない。大膽者と嘸お呵。堪忍なされて下さりませと後ハ詞も口の内。詞ハアテ其云譯にハ及ませぬ。シテ御用の其品は。アイお前さんにわりない御無心が御ざんする。お聞キなされて下さんしよか。ハテ身に應じた事ならバ。アヽ嬉しや〳〵。モヽ夫レ聞て。モとんと落付きました。お頼ミ申其譯ハ。詞お前樣ハアノ。お歌がお上手と聞まし。詠でお貰申たさ。おし付てマア參じました。ハテノウ。夫は何より安い御用にて候。シテお頼ミの歌の題ハ。アイ私のお頼ミ申す其歌の題ハ。歌の題ハ。サアアノ。マア思ふていまだ逢ざる戀。詞ムヽ、扨これはよつ程六かしいお望にて候。シテ其戀歌を。詠で貰ふ其心ハさ

ればいな。わたし迚も岩木ならねバ好たと思ふ殿御が有て。こつちに惚ても。あつちが好ねバ云出しても恥さらし。殿御の惚る戀の歌お詠なされて下さんせ。詞ム、こりや六かしいお好ミ。去ながら其美しい御器量。未熟なる我らが歌にハ。心餘りて詞足ず御免〳〵と有ければ。詞ム、そんなら外に先達ッて。いひかハしたお方があるかへ。イヤ有ルでもなしないでもなし。元トより拙者は嫌でハなをなけれど。我らも度〻懲た物。浮名が立てハ互にわるい。我らハ急の用事有又重ねてと立上る。女ハちやつと引留め。詞義岑様いかに賤しいわたしじやとて。そふつれなふハなされぬもの。ふつと此家へお出の時ちらとお姿見初しより。可愛らしい殿御じやと思ひ詰ても人目の關。今日幸イと此雪で通りの少い透間を見て。來よふと思へど恥かしく。酒を過して漸と。詞思ひ切て來た物をはづさふとハお情ない。餘り難面どうよくな。田舍育の賤の女が。及ばぬ殿御に惚るとハ。繻子の小袖に木綿裏。そぐハぬ緣もせふ事がないと。思ふて下さんせ。難面心持程なら。可愛らしい殿ぶりに。生れて來ぬが能ハいな。思ひ思ふた甲斐有ッて。けふといふけふ邂逅に。盲の龜の優曇花の放れる事ハわしやいや〳〵。いつそ殺して下さんせと。すがり付たる戀の淵深き思ひに義岑も。氣ハ空蟬の脫にて互にひしと抱付。思ひ餘りて今更に、何と岩間の苔清水下行ク水の中〻に。しめ合しめ寄口と口。奥の一ト間へいざ〳〵と。手を引。合て入後を。立切襖は岩戸の扉常闇の世と。成ぬらん。裏の細道横筋違ぶつたくりの万八が。さまたの十兵衛諸共に立とゞまつて潛〻聲。詞コリヤ〳〵万八。日外から促ける金。此庵室で渡

さふと。堅〻手前ハ詰合て。引ずり廻ハるが必定渡すか。わがいふ事ハ當にならないッ此中も新宿で。手に取様な魂膽事。どうかいけそふに思ふた故。おれもふれと乗が來て。道具衣裝の仕入に。小一貫又たをれた。正眞の盗ス人においた。けふの金も呑込ぬぞい。イヤ是十兵衞。大事の門出先キ折て貰ふまい握拳で大地を打ハはづるゝ共。けふの金に違ハない。カ貴様が居てハ邪魔に成。ちよつとそこらへ。ヲ、任せと早合點。藪の小蔭に立忍ぶ。後に殘つて万八が一人呑込。したり顔、點頭く澤邊の鷺の小鮎をねらふ。指足拔足窺ひ寄て一間へ踏込。伏たる二人が襟がミ摑ミ。傍に響くどつてう聲。詞 密夫見付ヶた許さぬと。呼ハリ〳〵兩手に二人リを引摺出。詞 儕はマア何處の馬の骨やら牛の骨やらなまぬるけたしやつ面で。忝もぶつたくりの万八が女房を。晝中に引ずり込ミ。よふムウスウをやりおつたナ。代官所へ引ずつて。直クに笠の臺座が宿替。又首代ハ天下の定法。烏渡障りが三百匁。帶紐解てゆつくりと。隣しらずの氣儘の餅搗。少うても三〻の九百匁。金に直して十五兩サア出すか。但し代官所へ引立ふか。どうだ〳〵と咽筋引張。いがみ懸りしぶつたくり。理の當然に義峯公、あたりの聞へ面ン目なさ。どう成ル事か白糸の。染てくやしき胸の內。女は元トよりさしうつむき兎角の。應へもなかりけり。万八は猶聲高。詞 ヤイべら坊め。おれが方からわりを付て。お慈悲なお捌。云ィ聞しても有共無共ぬかさぬかられ。代官所へ連て行。サアうせ上れと肩口摑ミ。引立行かんとする所を。女ハ中に立隔り。手をもぎ放して。詞 コレ兄様。ゐい加減ならおかんせと。いハれて悔り。詞 コリヤノヽ

女房共。其筈ではなかつたぞ。コリヤ飽相いふな。われは女房おれは亭主。ナコリヤ万八が女房。女房だぞ〳〵。急度女房箱入のお内義様ぞと目まぜと仕方で呑込す。詞ホヽ何じやら一人合點。日頃からお前の放埒。女郎狂ひや博奕の元ト手。合點もさせず無理無體。わしを證文に書入て十兵衛が方で借た金。催促せられ仕方がなさに。樣々の惡工ミ。頃日四谷の新宿で。しくぢつたのも聞てゐる。そんな目に逢ても懲ず。忍んで御ざる此お方。金の有りそな風體。かう〳〵してゆすらふと。おこはとやら。筒持せとやら恐ろしい工ミ事。いやといへバ十兵衛が證文に入て有。渡して女郎屋へ賣ふといふ。夫レがいやさに一寸のがれ。詞又此方にも下地から。好イたお人と思ふを幸。恥かしい事いふて。手が入ば足がいると。どうやらかうやらあなたも得心。日頃の望ミわしや嬉しい。詞何のマア めつそうな。いとし可愛いあのお方を。ゆすらせて能イものか。申義父様。アリヤ 夫トでは御ざんせぬ。ぶつたくりの万八といふちや。モヽ そこらあたりの込り物。兄樣なれど惡者なりや他人も同然。おかまいなされて下さりますなと。いふに落付義父公。万八は三五の十八。結句あきれて物も得いはずまじめに成たるこなたには。樣子いかゞと十兵衛が。藪の間から顏差出し。詞コリヤ〳〵万八。首尾はどうだ音せぬは。物に成たか早ふ渡せ。サ請取ふといはれるせつなさ。折リが惡いまちつと待てと。いふに云れぬ身ぶりの可笑さ。おりくは所體改めて万八が側に寄。詞コレ兄樣。常ゞわしが異見でも聞キ入ぬ惡者附合。まや事おこはの惡仕事。他人は固現在の。妹でさへあいそが盡る。鎌倉にござる嬶樣から。文の來る

度お前の事。箸折かゞミの子供の身の上苦にさしやんすも尤。どうぞ性根を改ノて。惡者付合ふつつり止。何成りと商賣をおもひ付て下さんせ。頼ますると眞身の異見。万八ハぶつてう面。詞 へ、何の事だい談義坊主が鞆れるハい。利口そふな異見だて。置ィてくれい。コリヤおのりや他人とうなづき合。此兄をつき出し者にしてむごたらしうおこハに懸。まだ其上に。おれが身持の店おろしまでし上つて。よふひどいめに合せたな。覺へておれと怒の大聲。聞へる外トから十兵衞がつ。堪へ兼てずつと出。詞 どうだ万八。鹽梅ハ。イヤあんばいやら三盃やらどうといふたら又しくじつた。ヱヽ口おしや是非もなや。智謀計略兼備へし此万八が軍ッ法なれ共。妹めが裏返り敵に勢が加ハつた故。謀の裏をかゝれ約束した五両の金。棒にふるなの辯説でもモウ物にハ成そもない。晴の博奕にくら塞を押キ破れた同然だとしよげに成たる計く。詞 ヱヽいめ〳〵しい。所詮われが仕事じやいくまい。サア妹を請取。ハい。サア渡セ。コレ見ろ。われが印形の證文。一札の事。一ッ金五両借用申所實正く。若シ遅滞に及候ハヾ質物として妹おりくを相渡スべきものく。と印形が有からハ。しやつとでもいひ人ハない。質物のおりくハおれが方へ流れ込ム。サア〳〵來やれと手を取レバ。つき飛して コレ 十兵衞殿。詞 置ィて下され。わしや此お方といふ。急度した主の有ル身。アイ慮外ながら奥様で御ざんす。憎な夫トの有身なれバ。兄様の儘にも成ませぬ。何じややら。ゑいかと思ふてあつかましい。置ィてくりやれと云れて二人ハ又ぐんにやり。詞 コリヤハヽ 酒買ッて尻切ラるゝととんだ事に成ッたハ。此仕廻ハどう付ふ。ハテモフ是からハ破

れかぶれ。二人ながら引ずつて。代官所で譯立る、夫がよかろ。サアうせ上れと。取付二人を義岑公。右と左りへずでんどう。拔手も見せずむね打に。りう／＼はつしと打のめされ。アイタ／＼／＼御免／＼／＼とすね腰さすり。後をも見ずして迯歸る。おりくはほつと溜息つき。最前からひよんな事でお心遣ひ。本ンに不思義な御縁にて。モウかう成た上からハ。お見捨なされて下さんすな。詞ハテ袖振合も他生の縁。何の見捨てよい物か。シタガ、今のもやくやで氣がもめた。ヤ幸ィ庵主が嗜酒。奥へ往て一つ呑ふ。サア／＼こちへと伴ひて。一間の内へ入給ふ。戀路にハ。憂事多しうき事ハ。戀路の中の道具にて。月に村雲世の人の。心の嵐つれなくも吹ちらされて初花姫。乳母狹衣が介抱にてならハぬ。道の旅づかれ。漸とたどり付。詞中お姫様。是が今道で逢ました。道念の庵室でござります。ヲ嬉しや。早ふ義岑様に逢してたも。アノお待遊しませや若誰ぞ遠慮な人が來て居まい物でもない。お前ハ暫しお忍びと。小陰に忍ばせ門の口　詞頼まふ／＼といふ聲の。出合頭におりくが顔。詞ヤアそなたは娘のおりくじやないか。ヲ、本ンにか丶様。テモ扨も／＼マア／＼お久しう御ざんす。ヲ、そなたも息才で嬉しい。本ンに何からいハふやらアノ兄めも無事なかの。アイお前もおまめで嬉しう御ざんす。したが。今時分どういふ譯で。ヲ、様子咄せバ長い事。其咄しハ縱りつと。シテ又そなたハどうして爰へと。問かけられて當座の間に合。詞わしハ爰な道念殿に。仕立物頼まれて。ム、そんなら知つて居やらふ。新田太郎義岑様といふお方が。お出なされてござらふがのと。いハれて娘ハ瓶持足。詞アノか

ゝ様の。そんな事誰がいふて。ヲイノ、今道で道念殿に逢て。いつぞやから爰に御ざる様子とつくり聞ィて來た。ムヽスリヤあなたお近付かへ。ヲヽ近付の段かいの。夫にハ段ゝ譯有事。ヤ何かハさし置ィて。サア〱申お姫様。是へお入遊ばしませと。上座かしづき參らせて。詞コリヤ娘。あなたが佐々木のお姫様。此母がお乳を上た。初花姫様じや。ソレお目見申しや。イヤ申お姫様。是が兼ゝ申上ました。娘のりくで御ざりますと。いふに娘ハ手をつかへ。詞コレハ〱思ひも寄ぬ輕ゝしいお出。段々母が御厚恩の。お禮ハ詞に盡ませぬ。どういふ譯で此お姿と。不審立れば姫君ハ。詞ヲヽ乳母の娘おりく。兼ネて様子は聞キました。賴ミ少き自。能キに賴と計にて打しほ。れてぞおはします。詞ヲヽ勿體ない。私が娘に何の御遠慮。コリヤ娘。義岑様ハお留守かの。イエ〱。今奥でおうたゝ寐。ムヽそんならそなた奥へいて。お姫様が遙ゝと。尋ねてお出遊しましたと。申てたもといふ顏を。しけ〱と打守り。詞ムヽスリヤ。あなたと義岑様ハ。ヲイヤイ。義岑様の奥様じやハいやい。エヽ。ヲヽ合點が行まい。當春からのもやくや。ヤそなたが聞ィて入ぬ事。苦にさせまいと思ふてわざと便リもせなんだが。コリヤお姫様ハな。義岑様故。親御様の御勘當お請遊ばし。此母と只二人。しるべの方にお忍び。頻におしたひ遊ばすゆへ義岑様の御有所ハ。此村と聞キ届。詞ひそかに御供申たハいのと。咄す内ゟ娘は。ハット胸へ差込嫉妬の炎。詞申かか様。お前もマめつそうな結構な雪が降て。面白い最中に。モ無遠慮千万な。お姫様のお供して來るといふ様な。とほうもない事が有ル事でござんすか。義岑様に逢せます事は成ませ

ぬ。とつとゝいんで下さりませと。つゝけりいふに姫君も。扨ハと悟り角ぐむ声。詞ム、さつきにから詞のはし〴〵なりそぶり。合點がいかぬと思ふたれど。乳母の娘のそなたなれバ。よもやと了簡付ヶて居たが。今の詞でさらりと知レた。扨ハそなたは。義岑様を寐とりやつたの。アイ私やけふ約束して。義岑様のアイ。奥様でござりますと。いふを押へる母親が。詞コリヤ〳〵慮外者。だまつて居よと引すへても。詞イエ〳〵〳〵。かまふて下さんすな。兄様とやつつ返しつ。命に替た大事の殿様。何ぼ親のかうけでも。是計ハ聞ませぬ。サアお姫様。一ッ時も此内に。置キます事ハ成リませぬ。サヽヽ早ふいんで下さんせ。イヤ推参な。自ラハ先約。何のそなたに負ふぞ。ヲヽ、お姫様でも是計ハは。見事そなたが。イヤお前がと。つのめ立たる姫薊。一ト間の内にハ義岑公。初にひよつと出そゝくれ。今更出るに出るに出られもせず。少こそう成ッて聞居たる。乳母ハ娘を取てねぢ伏。こぶし振上丁〳〵。怒りの泪聲ふるひ。詞エ、倅ハ〳〵。コリヤヤイ。あなたをどなたと思ふ。此母が御主人ゝ倅が爲にもお主でないか。コリヤわれが爺様ハな。十八年ン以前に死しやつた。兄ハ七つ。倅ハ二つ。養育仕兼ネて居た所不思議な御縁で。御屋敷へ乳母奉公。おあてがいをつゞけて。ソレ倅レも兄めも人となした。スリヤお屋敷の御恩で育つた。一筋ならぬ大恩。兄めといひ。倅レ迄が氣儘者。コリヤ。よう物を合點せい。母もそちらが爺御を。男に持ッて來た身なれバ。殿御の大事大切な。離レにくい譯も知ッてハゐれど。お主にハかへられぬ。愛の道理を聞分ヶて。どうぞ思ひ切てくれヨ。よい子じや。コリヤ親が手を合す。

思ひ切レ。切ッてくれと。おどしつすかしつ様〻に。詞を盡し宛れバ。おりくれせき上〳〵て。詞かゝ様
堪忍して下さんせ。外の事なら何成共。お詞ハ背くまい。是計はどふも。〳〵思ひ切れぬ得きらぬ。
せめて一ト月半月共。添た上ならどう有ふか。日外ちらと見初メてゟ。戀こがれたる義岑様。漸〻思議
な御縁にてけふといふけふ新枕。願ひ叶ふてア、嬉しや。内へ歸れバ兄様が無理の有條いぢられる。
幸外に人ハなし。道念殿が歸つてなら。様子打明相談し。此内に隠れてゐて。義岑様の朝夕の御膳の
拵への小袖の洗ひ濯もして上ふと。わしやさつきにから女房の心に。成ている物を。悪い時分ンのお姫
様。あた胴欲なかゝ様。身は八ッさきにさかれてもはなれる事はわしやいや〳〵。いやじや〳〵と取亂
し物狂ハしき風情く。母もふ便ンと思へ共。わざと聲をはげまして。詞ム、スリヤどう有ても義岑様を。
思ひ切事ならぬじやな。アイ夫レがお氣に入ラずバ。手にかけ殺して下さりませ。サア〳〵〳〵。
殺さしやんせ〳〵〳〵。いつそ殺して下さんせいのふ。ヲ、望なら殺してやらふと。懐劔拔てつ
つ懸る。姫君ハ押隔て。コレ乳母。麁相しやんなと。押留られて母親ハ。わつと計に聲を上暫し。詞
もなかりしが。詞ヱ、コリヤ。上々様のお心ハ又格別。戀の敵の倅レでさへ。命をかバふて下さるに。
恩も情も知ラぬ畜生。勘當じや出てうせふ。ヱ、夫レハ。ヲ、おれも年ハ寄ル。兄めは有ッてもない同然。
頼ミに思ふ倅レめを。勘當するもお主へ義理。義岑様の事思ひ切りや。何ン時でも赦してやる。サア一時
も爰にハ置カぬ。出て行キおれ。アイ。サア行ケやい。アイ。ヱ、行キおらぬかと門トさきへ。無理につき

出す。これいけん。おりくハしほ〳〵。立上る。夫トに引るゝ後髮。泪ながらに出て行後の哀レさしられたり。詞サアお姫様。奥へお入遊バしませ。夫レでもあんまり。イヱ〳〵何シのおかまい遊バしますなと。心のこれど姫君を。伴ひ一ト間へ入にけり。しすましたりと万八十兵衛。小陰より踊出 詞コレ〳〵十兵衛。今の女がおたづねの。佐々木家の姫君初花姫。代官所へ注進すれバ褒美ハしたゝか急げ〳〵。ヲヽ万八ハ爰に居て。にがさぬ様にがんばれ〳〵。合點〳〵と默き合。出て行十兵衛万八ハ又も小陰に忍び居。すでに其日も入相の。遠寺の鐘のかう〳〵と。野風に雪を吹おろし。きらめく星の空寒き。すき間の風ハ防げ共。ふせぎ兼たる恩愛の。さすがに乳母ハ目も合ず。一ト間を出るも子故のやみ。詞お主大事と一筋に。可愛や娘を無理無體。しかり付て追出せしが。あれが身に成ッてハ。思ひ思ふた殿御に別れ。此母にハ勘當請。さぞ悲しかろ口惜かろ。アヽ短氣な事などしてくれねばよいが。道念殿の歸つてなら。ちよい一ト走り行て貰たい。是ハマアどふして戻りが遲いぞと。表の方を打ながめ〳〵泪にくるゝ折からに。すた〳〵歸る主の道念。おりくが死骸を戸板に乘せ。村の者共付そふて。詞コレ〳〵お乳母殿狭衣殿。今おれが戻りがけ。こなたの娘のおりくが。村はづれの土手の松に首くゝつて居た故。村の衆を頼んで。死がいを持ッて戻りましたと。聞よりあハてかけ寄狭衣。義岑公も姫君も。斯と聞より走出。後や枕に取すがり前後もわかず泣居たる。村の者共笑止がり。詞アイ坊様。わしらハモウ歸ります。アヽいかいお力落しやと。年と氣象で色々の泪こぼして立歸る。乳母

くは正體泣はらす。目をおし拭ひ〳〵。詞コリヤ〳〵〳〵おりくよ。扨ハ最前の母が異見。腹立て死ンだかコリヤ譬鳥類畜類でも。子を思はぬ物が有ふか。まして國所を隔て。久しぶりで逢た娘。かあゆふなうて何とせう。お主へ義理を思ふ故。むごういふたハこらへてくれ。可愛ィの最期といだき付。人めも恥ず泣入バ。姫ハ死骸をおしうごかし。詞コレ〳〵おりく。最前の互ィの腹立まぎれ。はしたなふいふたのが。今更悔しい恥かしい。嘸自ラが憎からふ。堪忍して下されと歎しづめバ義岑公。ねむるがごとき死顔に共むつごとの笑顔。今目の先キにちらつきて口にハいはで心にハ。百千無量の物思ひ。斷責て哀〳〵道念泪のめをすり赤め。ハア花の盛を散せて退たコレ〳〵しがいの懐に有ッた書置。コレ讀で見やしやませと。差出すを姫君ハ。泪ながらに押開き。詞何々此世の名殘と書殘しまいらせ。けふ母様に久〻にてお目に懸り。山〻嬉しく存まいらせ候。ヲヽ道理じや〳〵。二つの年から殘して置ィて。お屋敷へ御奉公。漸〳〵二年か三年に一度宿下りして逢た斗。けふ久しぶりで逢たのが。嬉しうなふて何とせう。私事不思議なる御縁にて。義岑様に馴そめまいらせ候へ共。お姫様の御事は。夢にも存せぬ先の事ゆへ。さら〳〵寐取申心にてハ御座なく候。ヲヽ夫レをもつとも知ラぬ筈じやハいの。ヱヽ何。思ひ思ふた殿御ゆへ義理も作法も打忘れ。お姫様へ慮外の段。宜しうお詫頼上まいらせ。コレ乳母。ソリヤ自ラも同じ事段〻母様の御異見。無理とハさら〳〵存せず候へ共。内へ歸り候へば。兄様の金のかたに。十兵衛方へ参り女郎に賣れまいらせ。ヱヽまだ兄めが根性が直りおらぬか。テモ扨も情ない。ヱヽ親

兄のためには。勤するもいとひ申さず候へ共。一旦義岑様のお情受。外の男に肌ふれ候てハ。女の道にそむき候ゆへ。母様の御歎もいとハず相果まゐらせ候。去ながら義岑様お姫様とハ二世三世の御中ゆへ。死行先キも頼ミなく候へ共。お姫様の御縁つき候後にてハ。私に御そハせ下され度。是のミ幾重にも／＼願上まゐらせ候。夫レ迄ハ未來にて千年でも萬年でも寡暮しにて相待まゐらせ候かしこ。コレ／＼猶々書に隨分母様御機嫌よく。兄様の御心直り候様に御異見頼上まゐらせ候と。讀も終らず一同にわつと斗に泣ゐたる。かゝる折しも。表の方に數多の人音。何事やらんと人〻ハ。死骸を奥へかき込で。二方忍バせ待所へ。多賀將監が家來洲股丹平。家來引つれどつと込入。詞ヤア／＼此内に佐々木家の姫君初花姫。忍び居るよし訴人あつて慥に聞。此姫君ハ兼てより主人將監斗いにて。官領畠山へ遣ハす筈の所に。義岑とチヱ／＼くり合イ欠落して行衞知レず。畠山へ渡さねバ主人將監顏が立ぬ。去によつて方々さがし。聞付ヶたれバ百年め。からめ取て渡すか。異義に及ハゝ首討て立歸る何ンと／＼と詈つたり。叶ハぬ所と狹衣道念。詞ハ、ア御存の上ハ隱すに及バず。成程首討てお渡し申ませふと請合内に裏口より。詞ヤア／＼御檢使。御油斷有ルなと。聲をかけてずつと出。ハイ私ハ万八と申して先程御注進に遣ハした十兵衞が仲間の者で御ざります。此母や坊主めが。首討ふと請合たハ。私が妹めが首くゝつて死ました其死首を渡さふといふ。謀で御ざりまするといハせも立ず狹衣が。詞エ、儕ハ／＼につくいやつと。摑ミ懸るをはつしと蹴倒し。是ハと立寄道念を。同じく蹴倒し足下に踏へ。懷より早繩

取出し二人ﾘ一所に椽柱へくる〳〵巻キにしめ付られ。ヱ、親を縛る悪人めと。怒りの聲に。ヱ、やかましい娑婆ふさげと。手拭にて猿轡。檢使の前に立はたかり。詞サア是で邪魔する氣遣ハ御ざりませぬ。扨お前方ハ姫の首討て行ふとおつしやるハ。悪い了簡じやぞへ。畠山へ嫁にやるにハ。腰より下が猶大切。其上首で請取ルと。得手贋首を掴物。何の高がめらう一疋。私に仰付らるれば。引ッくゝつて上ませうが。御用意ハよござりますか。ホ、ういやつ〳〵。ソレ家來共。用意の乗物。ハット心へ舁すゆる。其隙に万八は奥へ踏込ばつた〳〵。見るもいぶせき初花姫。がんぢがらみの猿轡。小脇にかい込ずつと出。駕籠へねぢ込細引で。手早にくゝりし網乗物。丹平ほとんど感じ入。詞扨〻氣轉のきいたやつ。ソレ褒美くれると投出す拾兩。ハア、コリヤ有がたいと載く内、いさみに勇む丹平主従乗物ぼつ立急ぎ行。後打詠万八が。詞母者人。道念殿。嘸痛からふと猿轡。早縄共に引解けば。乳母ハ怒の歯をかみしめ。詞ヱ、能ッも〳〵お姫様を。敵の手へ渡したなァと。掴みかゝるを。詞ア、これ〳〵〳〵夫には言譯。イヤ何の云譯聞ッ事ないと。又立掛る一ト間ゟ。ヤア〳〵狭衣。初花姫ハ是に有リ。れうじなせそと義岑公。姫を誘ひ出給ふ。顔ハ姫君體ハおりく。ヤアと驚く狭衣道念。詞スリヤ最前渡したハ。ヲイノ。妹のおりくが死骸に姫君のお小袖を。スリヤわがみハ善心に成りやつたか。コレ母者人。さつきにから姫君を迯すまいと縁の下に隠れてゐた故。おりくが様子聞キました。可愛や義岑様へ心中立。十兵衛が手へ行をいやがり。死だといふ書キ置。おれが人並な人間なら。死る氣にも成ルまい。

スリヤ兄が手をおろして殺したも同然。おりやさつきにから椽柱に。かぢり付て泣て計居ました。おれが性根もこんな時直らずバ。直る時節ハ有ルまいと。一念發起しましたハいの。こなたの思ひ付た通。首切ッて渡してハ。贋首の吟味が六かしい。猿轡で顔隱し。體くるミに渡した故。まんまと一盃食せました。したが。どこでも心中や縊ハ。親兄弟からお願申して。死骸貰ふて分相應の間弔ひする物を。わしハ妹が死骸を。コレむごたらしい猿轡。がんぢからミにした時ハ。此手がしびれる様にござつた。よく〳〵おれハ悪人に生れ付たかと思や。コレ骨身が砕て。悲しいと一ッ生にない万八が。大聲上て泣出バ。ヲヽ尤じや。道理じやと乳母は固義岑公。初花姫も道念も。一度にわつと取亂し身も浮計に見へにけり。いつの間にかハ十兵衛が。詞身代りの手め見付た。此通り注進と。駈出すを万八が。飛かゝつて引捕へ。だんびら引抜芋ざしゑぐり。椽柱に突付られ。もだへ苦しむ有様ハひらた蜘見るごとく。詞コレ〳〵〳〵道念殿。母者人。さつきのやつらが歸らぬ内。お二方のお供して。銚子の方迄落たく。おれハ後から夫レ路金と。投出すハほうびの金。詞そんなら先キへ。ヲヽ後かまハずと御ざりませ。ぱつと立たる血煙を見捨て。こそハ三重へ急ぎ行

第七　大磯揚屋段

戀に通ハヾ大磯小磯けわい坂。時酒拳酒朝酒無理酒わかれさけわい〳〵のツイトサ 伊久 詞罷出たる者

ハ。此大磯の廓にかくれもない峯頭次郎吉。[家]同平治と申者で御ざる。[伊][家]此度多賀大盡樣。扇屋の花扇樣と中大夫樣を揚詰の今宵の趣向。身ぶり聲色も古めかしけれバ。此所で大阪生玉万歳を相勤まする。〽サア琴野樣。相方を賴ミます。[組]アイ／＼合點で御ざんする。あいけう有ッける新玉の。年立返る朝より通ひ／＼て揚詰され。誠に目出たふ侍ける。[伊]中大夫樣。長事は御退屈。是から早ふ相の山。[家]いか樣よからふ。汝ハさゝら我等ハ四ッ竹。サア其さゝらすれ／＼。[伊]イヤ大夫樣。れこさをどうするのじやへ。[家]右にさゝら左ッに相口。トしやにかまへてごし／＼。[伊]ム、込だ／＼。何にも文言ハ入ラぬかへ。[伊]ハテだまつてすれ。[伊]アイ死だ樣にして居よかい。[家]エ、いま／＼しい。いひ度バ合間／＼にいへ。[伊]本ンにそふじや。面〻の事ハむけ／＼じや。爛れよと儘よこすりさへすりやよござんしよごし／＼／＼。合此樣にこすつても。ゑい時キにはゑいといハんせにや拍子がない。[家]ア、コリヤじやうだんいハずと相の山始めい／＼。[組]相山中夕部朝の。鐘の聲。[伊]、アコリヤ／＼。アリヤ／＼サア／＼埒もない物に成ッた。さゝらと相口とが引ッ付たハいな。どうせうぞいの／＼／＼。犬なら水をかける所じや。[家]エ、ぐつと引キはなせ。[伊]無理に引はなしたら心中に出やしよまいかな。[家]たわけめが。[伊]ハアコリヤさゝらと相口じやハいな。[家]エ、口合所か。力に任せてぐつと拔。[伊]拔たらかゝが本意ながらふ。ヤツトコナーヨイ[組]諸行無常と響け共聞ィて驚く人もなし。[伊]ヤレコリヤ／＼／＼。[家]どふじや／＼／＼目が舞たか氣付をやらふか。[伊]ア、苦しやたへがたや。氣付より茶漬が一ぱい給たいなり。[家]ハ、、、

〔伊〕是〻太夫樣、大キな事が出來たハいナ。おれが事を笑ハんすけれど。お前も目ハひとつはかないぞへ。〔家〕又たわけを盡しおる。〔伊〕本ンじやハいな。〔家〕是がどこに。〔伊〕ヱ、聞へた。中カの土手で見へなんだ。〔家〕ハ、、、〔伊〕イャ大夫樣。〔家〕又かいやい。〔伊〕謎〻が有が何と解て見さんせんか。〔家〕何じや謎が有ルといて見やうマアいふて見い。〔伊〕隱居の水揚ナアニ〔家〕ム、隱居の水揚〱。ム、コリヤ解ぬ流さふハい〔伊〕サア隱居の水揚とかけて。結城座の芝居と解。〔家〕心ハ。〔伊〕ハテ出來てつい出來て這入そむなふてぐつと這入た。〔家〕こいつハ出來た〔伊〕是といふも町中樣御贔負の御取立。大八車に御祝義の樽を乘て。小歌ぶしでお出なされた。〔家〕其小歌ハ何と。〔伊〕物と。酒に亂れて人の女房の尻つめる。〔伊〕何じやいな。〔家〕よしな。〔伊〕おかし。兎角うき世は色と酒とにどらめう鉢もすぺらほんと打こんだ。戯れ遊べヱ〔丹〕詞コリヤヤイ〱。騷ぎもゑい加減なら置キ上れ。誰レ有ふ此洲股丹平が御主人。多賀將監樣といつちやちとけむつたい旦那だ。戀なればこそ花扇に。度〻通へどふり付て逢ぬ故。立引づくの揚詰居續け。身仕廻に歸つてモウ二〻時に成が。間夫狂ひでもして居るか。わいらが騷ぎでまぎらしても。肝心の旦那が浮ねバ付イて來たおれが立ない。どいつもこいつも人を茶にするいけすかないやつらだと。虎の威を借狐客。〔組〕稻荷の鳥居越て來た。琴野が氣轉の笑ひ顏。詞ホ、、、丹平樣のせかんすも無理ならねど大夫樣も身仕舞で。手間の取レるも尤じやハいな。ノフ次郎吉樣平治樣。〔伊〕成程琴野樣のおつしやる通。如才のない其證據お出なさる先キへ立ッて御進物の此臺の物。約束かたき石臺へ松に櫻

の取合ハ。早ふ來てべた付より。松が花じやといふ心か。[家]いかにも數有者の中。腎藥とのお氣付ハ。千秋万歳の。千話此玉子を肴にして。一つ上れと浮拍子。そゝり上ても[喜]騒がぬ將監。詞ハ、、、がや〳〵とかしましい。遲ても早ふても。揚詰にしたからハ手生の花。近い內身受すれバ。間夫が有ラふが虫が有ふが。來る事成ラぬ屋敷の內。丹平が少い了簡構ハずとさハげ〳〵。[伊][家]ソリヤ結構な旦那のおさバき祝ふてしめろヨイ〳〵〳〵。〳〵〳〵〳〵祝ふて三度シヤ〳〵ンノシヤン。酒になつたとさハぐ內。[組]琴野が引出す。三絃の。無理もいふたり云譯したり。本に心のやるせがなふて。ねても丸寢か一ト重がよいに。二重三重帶解にもしんき。[伊][家]歌の牛ハに牽頭か聲々。詞アレ〳〵〳〵大夫樣が見へるハ〳〵。[百合]風流と意氣地とはでの。三ツ道具。揃ふ姿ハ。梅が香を。柳の枝に取リませて。咲や櫻の花扇。戀の要のしめくゝり。虛と實を手の內に掴ミからげの八文字。對の禿に定紋の。挑灯目立朧夜や。月宮殿の戸を明て乙女の姿今爰に。しばしとゞむる。揚屋入[伊][家]詞夫レ大夫樣の御入と。[丹]賑ふ中に丹平が。詞コレ大夫主。お出の遲いで旦那の不機嫌。かう申せバ味噌らしいが。今佐々木の家ハ立ふと伏ふと。自由自在の旦那の勢。我らを始一家中。はむきの面ゝ少からず。いかに張がつよひ迚いらひどい振やう。何ぼ惚てござつても。あまり面白ふハござるまい。少立て貰ましよと。又おこり出す消炭せりふ。[石]ホヽヽ其樣に腹立さんすも。本トをいへば不勤の私が惡ひ誤ませふ。[組]アレ丹平樣。太夫樣が誤なされたといな。旦那も是で御了簡と。なだむる琴野。[喜]ハヽヽヽだま

つて居れど此將監。ぞつこん大夫に惚たが高。誤らせても又氣の毒。〔亘〕イ、ヱイナア。誤る事ハ誤つて。いやなお客は振付て逢ぬも勤の又意氣地と。〔喜〕つつけついハれてさしもの將監。をすきつさう〔組〕見て取琴野。ソリヤ大夫樣出來過ます。〔亘〕詞何でいな。〔組〕ハテ今の樣におつしやつてハ此座が濟ぬ。ナコレ濟ませぬぞへ。客樣を立て下んせ。粋なお前を粋ごかしにいふと思ふておくれなヱ粋ごかし〳〵と此場を散す目と仕形。〔亘〕ヲ、琴野樣のけうこつな。どういふ心でいやじややらわしが心を見ぬいてか。知レまいがな。何ぼ粋じやといハしやんしても見せたい心が見せられねバ、やつぱり野夫で御ざんする。コレ彌生煙草つぎや。〔伊〕アイと差出す烟筒の煙。〔亘〕匂ひを含む請答。實も常盤の泣とて。いふも更成しこなしなり。〔組〕琴野ハ手を打さつても我折。勤メ氣去て實で逢ふと。云ハぬ計の今の謎々。誤りましたと相槌を。〔喜〕打バ響の將監が。詞ム、コリヤ琴野呑ミ込だ。おれが心を疑ふ大夫。身請して連歸る。ソレ丹平。亭主にあふて金渡せ。〔丹〕ハツト心得丹平ハ二階をおりるいさミ足〔伊〕〔家〕後ハ賑ふ大騒。數々廻る盃に〔喜〕めれんの將監居眠が。直に裡に入高鼾何の樣子も白川夜船〔伊〕〔家〕牽頭末社が口々に。詞今おこしたら叱られふ。お枕お蒲團我々は奥二階で呑懸ふ。サア〳〵あれへと騒立お客寐かして一ト間へはづす。〔組〕してやんしてどしたな〔伊〕〔家〕呑で騒で。あんけらこんけらあんけらしくじるなやつさもつさそつちでせい。ペンヘコ〳〵ペン。琴野樣かいな〔組〕アイナ〳〵〔伊〕〔家〕打連てこそ入にけれしめてぬる夜のながかれやつらい勤めもうき世ハ車。廻るもん日のしなもよく人なき折を幸と面を

隱せし忍びの曲者伺ひ寄ッて將監を眞二つと切リ付る[喜]さしつたりと身をかはし[淺]又切付る[喜]腕首捕へ見合す顔は[喜]詞ヤア汝は我組下の守山軍八何故に切掛し所存ぬかせと突飛せバ[淺]少しもひるまず詞コレ將監殿。兼ネて思ひ立たる大望。佐々木の家國押領せん爲。江田ノ彈正殿と示し合せ。箱根の切所で佐々木の重寶雨降の玉を奪取。縣ノ三郎を出し拔。其夜小田原の本陣へは此軍八が忍び込。椽の下より大殿秀詮ねらひ濟してぐすとやつたも。こなたが國を押領すれば此軍八家老になさんと兼ての約束ゞ大望成就今や〳〵と待てゐる其内に。大事を忘れた女郎狂ひ。此廓に居續。こなたがそうした心では大望成就せぬのミか。大事がもれては此軍八主殺しの竹鋸いつそこなたを仕廻て退後の難義を防がんと忍び入たる今宵の時宜。覺悟召れと又切付る[喜]及物をはつしと踏落し。詞ハヽヽヽ燕雀何ぞ鴻鵠の志を知ん。コリヤ此將監が廓通の智謀計略汝らごときの知ル事ならず[淺]ムヽ廓通ひが計略とは[喜]ホヽ大殿は殺し玉ひ一味の手へ入たれば。此上は衣紋ノ介ひねり殺すは安けれ共。只けむ度は縣ノ三郎。先達て罪に落し。詰腹切せんと思ひの外。暇を乞請立出る胸に一物ッ油斷ならず。何卒して打殺さんと。樣々心を盡せ共かけを隱して近寄ず。兼て傾城花扇とは深く契りしと聞ル及ぶ故。我此廓へ入込て。彼傾城を揚詰にせは。三郎が來るは必定。見付次第に打殺さんと夫ゞ故に此廓通ひ。疑ひを晴されよと。[淺]聞て軍八横手を打。詞ハア左樣とは夢にも存ぜず。無禮の段眞平御免[喜]イヤ〳〵油斷なき志感心致いた。不思議な參會廓酒。打くつろいで一献汲ん。[イ]イヤ〳〵其思召承はる上は。立歸つ

て屋敷の手都合。然らバ後刻。[淺]おさらバとさつかハとして立歸る。[伊]江田彈正が僕鳫介。文箱手に持うそ〳〵と伺ひ來る二階の廊下。夫レと見るより。詞ハア將監様へ申上まり。主人彈正申まするハ今朝の御狀の趣。委細承知仕ました。お預りの品後刻持參。[喜]シイ。[伊]ハア猶くハしくハ御返書に申上ます。[喜]ヲヽモウ能〻。立歸つて彈正殿へ御返書慥に請取ました。彌後刻相待すると申シてくりやれ。使太義。露の身も。いつか廓に。住馴て。爰程。本ンに能とハ。ないと思ふも。こんな男故。[百]早かう〳〵と。迎來寺の。寐よとの鐘ハ色里の睦言。口舌しめやかに。しつまる物音折よしと忍び出たる花扇あたり。見廻し台のそば。立寄てほと〳〵[村]叩く相圖に石台より。ぬつと出たる縣三郎。[百]物をも云ず抱付。泪に誠をあらハせり。[村]ホヽ危き所へ忍び込しを。女心の兎や角と氣遣ハ尤〻。思ひ寄ぬお家の災難。流浪せし此三郎。玉の行衞敵の詮義と。心を配りし甲斐有ッて。そなたの蔭でけふといふけふ。此石台に隱れゐて。委細聞イたハ天の助。弓矢神の御加護是といふもそなたのかけ。忝いと。手を合せバ。[百]アヽ女房に何の禮。若や顯ハれもしよふかと。最前から幾世の案じ。[団]ムヽ密事は殘らず聞イたりしか證據になるハ彈正より。僕が持參ッせし書狀。奪取思案ハ有まいか。[百]アイそんなら後に奥へ往て。首尾見合てだまして見ませふ。マア夫レ迄ハアノ一ト間で。まだ咄たい事も有サア御ざんせと手を取レバ。[団]ハテ扱そこ所じやない爰放しやと。立上るを引とゞめ。詞ヱヽ人の思ふやうにもない。いかに男のくせじや迚。あんまり氣强い三郎様。お前とわたしが其中はつい假初の事かい

な。末ェはどふしてかうしてと。云ヒかはゝしたる言の葉を。若やおいやと思ふてか。たとへ心にそまず共すいなお前の事なれバ工界する身を立る迚義理一ぺんの付合ゝけつく心のもめる種。しんきな上にいつぞやから。詞アノ將監が揚詰に二人が中を隔られ。しミ〴〵腹も。立田山夜ゝ曉の夢ならで。はれて逢れぬ身のうさを。神や佛のめぐミにて。まれに逢瀨の今宵の首尾。ねた迚罰もあたるまい。夫レにつれない男氣ゝ。あんまりむごいとすがり付放れがたなき折からに。[喜]大夫〳〵と將監が[百]聲に恟り石台へ。そつと忍バせさあらぬ體。[喜]詞ヤ何是大夫。[百]ヲヽ將監樣まだおよらずかへ。[喜]およらずかとはどうよくな。是迄樣ミ口說共。帶を解ぬのミならず。我らを打やり爰へ來て。何してお出なされるぞ。[百]アイあのわたしゝ。ヲヽ本ンに夫レ々。此間習ふた琴歌。忘れぬ樣に稽古して見よふと思ふて。[喜]ムヽいか樣夫レは嘸面白からふ。少ト爪音を承らふかいと[百]いゝれて是非なく側に有琴引寄セて。かきならす。いつしかに我寐覺をもさそい來て。妻乞鹿の聲上枯て。秋に逢てふあさじ原。淺い心と思ふゝうそか枕に問しやんせ。[喜]ムヽ歌の唱歌ゝ閨の露淺い心と思ふゝ嘘か。枕に問しやんせとゝ。スリヤまだ疑は晴ぬじや迄。ホヽヽ惚た顏するお前の心身請といふも。[喜]イヤうそでゝない。[百]イヽヌ嘘じや。[喜]イヤ本ンじや。[百]本ンにいらへも空吹風よ。風に亂れし玉巖器。[喜]將監は石キ台に眼を付て立寄ジバ[百]思ハず知ラず立上る。[喜]詞ハテ扨何をうろたゆる。シテ今の歌の後。サア〳〵〳〵とせつかれて。[百]はらげ髮して。逢夜も有リしうつりなつかしゆかしや袖に袖に障なき閨の露。透をうか

ゞふ將監ハ拔手も見せず石台へ。ぐつて突込刀の光り。[百]ノフ悲しやとすがり付。胸は轉動身ハわな〳〵。[喜]取てつき退[詞]コレ太夫何を悔り。ハテ扨そもじハ風流な琴の稽古。我らハ家業の武藝の稽古と。拔身とつくと打ながめ、[詞]血も付ず。手ごたへもせざりしハ。ハレいぶかしと又ぐつすり。[百]我行先キを突るゝ苦しミ。わつと計と打伏て前後正體泣ゐたる。[喜][詞]ハテ扨與がる。何故に其歎キ。ハテあやしやと刀の切ッ先。守り詰たる。氣配目配拔キ身を鞘にをさめた顏。[詞]ム、互の稽古もモフ是切。何太夫後に逢ふと云捨て奥の一ト間へ歩ミ行。[百]後にハ夢共辯へずあハてふためき石台を。開けど内にハあら不思義と[村]見廻す後の襖の陰より。立出る縣ノ三郎。[詞]ム、驚キハ尤。邪智深き將監。油斷ならずと兼てよりコレ此通。石台の後に穴を拵へ置。我家に傳ハりし。忍の術ッにて一ト間に隱れ。若將監が探しに懸らバ。只一討と待チ懸しに。きやつも去者けどりしにや。一ト間の詮義仕殘して奥へ往たゆへ互の無事。去ながら此處に長居ハならず。そなたハ彼一ッ通を何卒奪取ぬけ出よ。[詞]浪平を迎におこさふ[百]そんなら早ふ[村]ヲ、合點といふもひそ〳〵出て行。[百]後には獨。とつ置つ思案にくれてゐたりしが。[詞]先のそぶりを見られし上ハ。たらしてもすかしても。どふで一通ハ渡すまい。證據なうてハ三郎樣の出ッ世もならず。ヲ、夫レよ。高が死ると覺悟して。命限りと帶引しめ。かけ行廊下のこなたより。[組]コレ待んせと立復へバ。[百][詞]ム、惡い所へ琴野樣。留だてして怪我さんすなと。つき退行を[組]押とゞめ。[詞]イヤ留ハせぬ。お前の望ミの彼一通ハコレ爰にと。[百]渡すを取ッて見改め。[詞]ム

、此一通どふしてお前が。組サイノ何とぞして奪取んと。じやうだん交りに惚たふり。懐へ手を入れて。奪取しハわたしが寸志。三郎様歸參有ラバ、佐々木のお家の能錘。亘ム、其わけ知ッつたおまへハ何人組聞れて琴野ハむせ返り暫しいらへもなかりしが。身の上かたるも面目ない。父は佐々木家譜代の家來 詞川田甚平と申者。去年の春大殿様御參勤の御とまり。小田原の本陣にて不慮の御事。お供申せし身のいひ譯。舘へお著の上。腹切てあへなき最期。詞 玉の行衛も。殿の横死も。將監がわざならんと。推量しても時の勢。外に子もなき父の後目潰されしも將監が。忠義をそねむ邪非道。父の無念母の歎き。おのれやれ喰付て成り共と。思へど甲斐なき女わざ。詞 流浪の身を幸に。藝子となつて廓へ入込。將監が惡事の段々。見出す方便の三郎様へ。御加勢申も古主へ忠義。父が未來へ追善と。思ふもはかなき身の上を。哀れと思ふて下さんせと聲も得立ぬ忍びなき。亘様子を聞ィて貰泣。組た亘が組い亘に組狀亘をしぼりけり。組見咎められてハ互の難義。盡せし心も水の泡。詞 お前ハ今の一ッ通といひ。殊に身請の相談あれバ。此廓をぬけ出て。三郎様の隱家迄。落す方便ハコレかうと。琴野が氣轉廓下の揚板。人の來ぬ間と心ハ散亂欄檻より。塀に渡せる歩みの板。見越の松に此拘打懸て飛んせと渡して。とらゆる板の端。亘雲の。梯虹の橋。組厄さ。亘ひあいさ身ハわなく。漸取付松枝へ。拘引掛一ト思ひと。思へど心おくれはせ。丼夫レと見るより洲股丹平。有無をもいはずあゆみの板。半ハ渡るを組琴野が早業。丼打かへされてずでん倒。眞逆に即死の丹平。組此間に早ふおさらバの。亘

聲を力に飛おりて闇ハ。あやなし 三重ヘ四方の空。亘世間もひつそと靜て。稍も暗く入月の。道のあいろも見へわかず心覺ハ花水の。橋をあてどに花扇。廓を漸々遠近の。往來を伺ふ向ふより。家いきせき來る挑灯に。亘見付られじと身を忍ぶ。家兼ての手筈三郎が。下知を請たる僕の浪平。歩むも氣配挑灯の。火影にちらと見付る人陰。詞ヤアそこに御ざるは大夫樣亘ヤアこなたは浪平殿。。ア、嬉しやと計りにて。覺へずほつと溜息ハ地獄で佛に逢たる嬉しさ。家最前旦那のお咄しで。委しく聞ィた今宵の時宜、詞シテ彼狀ハ。亘サレハイノ。三郎樣に約束せし。密事の一通奪取思案に盡たる所に藝子の琴野といふ人ハ。元トがお家の御家來筋。樣子咄せバ長ひこと。樣々と世話に成。狀を貰て漸と。爰迄逃て來れ共。今に震が納らぬと。けなげなやうでも女氣の心遣ィぞやるせなき。家浪平ぞく〳〵勇立。一ッ通開き挑灯の。火かげにとつくと讀終。詞ホ流石ハ旦那の思はく樣。ヱ、有がたいおでかしなされた。斯いふ内も追手が氣遣。お供申さん去ながら。コレ此書面の通りなれバ。彈正めが此所へ。玉を持てくるは必定。爰に待請引ッさらへ。めつきしやつきした上で。玉を請取お後から。お前は直に旦那の方迄。お先キへお出なされませ。平塚の町はづれ。亘ヲ、二三度もいたゆへに。よう知ッて居る主の隱れ家、こなたハ後から怪我せぬ樣。家イヤちつ共氣遣ごハりませぬ。アレ〳〵向ふへくる挑灯幟に彈正。お前ハこちらのあせ道から。サア〳〵早ふを力草。亘氣を弓張の挑灯の。明りを賴ミに落て行。家後見送て浪平は。ヘヱ、忝い〳〵。詞是さへ有レバ否應なし。追ッ付旦那の出世の種。ヱ、

嬉しや悦ばしやと。天にも上る心地して待間もとけし長ヵ繩手。[喜]箱挑灯の光ッより惡にきろ付眼付。のさばり返つて江田ノ彈正。[伊]主に劣ぬやつこ鴈介。いかつがま敷立留り。詞兎角する内モフ八ッ過。埒もなう夜が更ました。[喜]ハテナア急いで來れど遲なれつた。しかし將監密事の出會。更たもましだと行過る。[家]待もうけたる浪平が思案取〻。何でも下がる取ッ入んと小腰をかゞめ立寄て。詞申彈正樣。憚りながら縣ノ三郎が家來。浪平でごれります。ちとお願の筋有ッて。最前からこれに相待おりました。暫くおひかへ下されと。[喜]いふを彈正打詠メ。詞ムヽ三郎が家來浪平な。此彈正に何の用。[家]ハア御願と申れ。別儀でもごれりませぬ。詞先キ達て大殿樣御參勤の砌。お家の重寶雨降の玉。紛失せしと箱根よりの早打。お供ながらも主人三郎。本陣より取て返し右の詮義。情なや其夜の御泊。大殿樣に不慮の御最期御供司の身分ンとして。其場所に居合さず剩。預りの寶ラも奪れ申譯立がたく。御暇下され身退き。玉の行衞お主の仇を詮義ながら身の漂泊と。[喜]悔ム咄しを打消て。詞ヤイ〳〵去ッとてれやかましい。われが主人の漂泊。長物語ッ聞キにれ來ぬナア鴈介。[伊]左樣共〳〵。扶持放されの彼等が身の上。何のおかまい。早く揚屋へ御入と先に立を[家]成程〳〵。畢竟本意あさの。長口上御退屈。お呵れ御尤。さしあたつて御願。[喜]フウ願れ何と。早くいへ。[家]サア短ふ申せば主人三郎。流浪の基となりし。御家の名玉只今爰で僕めに。お渡しなされて下されと。[喜]思ひ懸なき詞にぎつくり胸にあたれど空とぼけ。詞ホヽ何事かと思つたち夫レが願か。玉とやら寶とやら。此方に覺へない。こいつれ

起てゐて寐言をぬかすか。但し熱におかされか。ハヽヽヽ行過る。[家]袂にすがつてサア一應でハ。御承知もござりますまい。シタガ慥に今宵御懐中に有ル事をとくと存じて。願ミすのでナこハります。[喜]ヤイ〳〵いや早こいつ氣違ィそうだ。ヱヽ聞へた。三郎めも扶持はなされ。破れ編笠破レ扇。門ト々に立て。御子孫も繁昌。アイ永ヵ々の浪人御合力を頼上ますと。稼でもいけないから。合力の壁訴訟か。夫レなれば一錢二錢。ほうり出しくれまい物でもない。何じや。三郎が流浪の基と成し名ィ玉を渡せとハ。ハヽヽ何の事だ。イヤモウ取ル所もない空氣やつ。潔白な彈正そんな事聞きや。耳が穢れる。アヽ不便ンな野郎めだナアと又行ャ過るを立ふさがり。詞スリヤどう申ても。御承引ハ下されぬじやな。[喜]ヲヽくどい〳〵。[家]然らバ是をと以前の一通。[喜]はつと仰天ヤア夫レは。[家]サア是でも御存じないじや迄。うごきの取レぬ自筆の御狀。じやによつて達ておねがひ。[喜]フヽン謀書謀判も世に有ルならひ。身に覺へハなけれ共。其手蹟を見改め。證據をもつて共ミ詮義。ナ合點か。夜がふけると身ハ眼病嶌介。挑灯是へ[伊][喜]ヤイ浪平。サア〳〵近ふと招き寄。詞イヤ此明りでハしかと別らぬ嶌介。蠟燭の心を切レ。サどれ〳〵と見るふりに火先へずつと差付る。[喜]コハたばかられしと取ル間もなく。[喜]野風につれてもえ散たり。[家]浪平ハじだんだふミ。ヱヽしなしたり殘念と拳を握り齒がミをなし。土べにどうど座を組ンで暫し詞もなかりけり。[喜]彈正ハしたり顏。詞へヽヽヽ今ぬかした證據は。ドヽどこに。[家]ハア夫ハあなたが挑灯で。[喜]ヤア大がたりの下主僕め喰物に餲へしかさま〴〵の工ミ事。

鳫介存分ンにぶちのめせ。[伊]ハア御意なく共其つもり。最前から色〻と。とはうもない事ぬかし上る。コリヤヤイ證據がないとて今も成リハア〳〵で濟されふか。仕置の仕組はまつかうと振リ上る。[家]腕首取ッてヤア何ひろぐ。コリヤ主從して遣仕事に懸さらしたなア。モウ赦されぬと出かけふなれど。サア何を申も大切な主人が身の上。燒失しても慥な證據。申〻彈正樣。願の通其重寶。お渡しなされ下さればれば。佐々木のお家も長久主人が歸參叉。物數ならね共僕めが。モ生々世々の悦び。憚りながら下世話話に申。蚤の息が天ンとやら。コレ申首尾ようお渡し下されなバ。事穩便に濟した上。彈正樣のお身分ンハ。浪平めがどこ迄も。ハアかう申ハ過言の至リ御免ン下され。サア申高いも低も奉公忠義は同じ事。コレサ鳫介お身も主人を思ふハ互。唯幾重にも取リなし賴む。コレサ〳〵鳫介。夫レハむごい。申彈正樣。御慈悲に。サヽ是ひとへに願ひ奉ると。あちらを賴ミ。こちらを拜ミ。頭ラをさげつ手をすりつ主人を思ふ眞實の。泪は袖にばら〳〵〳〵。忠義ハ外にだいなしの。流石に男一疋なり。[喜]彈正猶もせゝら笑ひ。詞アレ鳫介見苦しうほえるハ〳〵。ハア哀な事を見るとかな。コリヤヤイ有樣ハ彈正。玉はほつぽに納てゐる。渡してくりやうか。[家]ハヽア有難い。[喜]マアならない。コリヤ浪平當春佐々木の門前ンで。むごく投たを覺へておるか。[家]ハツア其義ハ本の時の拍子思ハず知ラず。[喜]イヤ〳〵いふな〳〵。じたい三郎めが出頭だで。夫レにつれて儕迄。身に過た手轉業。罰があたつて主從共。狼狽廻ハるハ其身のさび。マア夫レハ格別。まへかどぶたれた其返報。今爰で意趣をはらし。玉は儕レに渡

さふか。【家】ヱヽ。【喜】ぶちかへされるハいやか。【家】ハア。【喜】いやなら渡さぬ。マツタわるく手向ひひろぐと。玉を打わり三郎めが、出ッ世の種。立所にしまつて退るナア返答。【家】【喜】【家】【喜】二人サアサササア〵【喜】どうだと無理無体。【家】無念と思へど此場の手詰。あらだてゝハ寶といひ。主人の流浪今此時。爰ぞと思案おしきれめ。詞過さりし事なれ共。下郎の身として。お歴々の彈正様へ。手向ひせしはモウ重々のふ調法。御打擲に預かりませふ。サア手向ひ致さぬ印ハ是と。投出す。脇指。骸も共になげ出す丈夫。強ふていとゞ不便なり。【喜】詞ヲヽよい覺悟。腹いた上で渡してくりやう。サア雁介われから。踏【伊】イヤ〵初足ハお旦那。【喜】ホウ辭義なしに賞翫と。脊骨をぐつと踏とべす。【伊】拙者は爰をと肩先どつさり。【喜】【伊】蹴だり踏だり右左りなぐり情も二人が打擲。【家】髮も衣類も砂まぶれ。手向ひならぬ忍び泣。主人の爲と堪へる難義。心ぞ思ひやられたり。【喜】【伊】モウよいかげんと双方が。目くばせするどき劍の下。【家】さそくの浪平かいくゞつてすつくと立。詞ホウさこそ〵。儕等二人りねぢ殺すハ安けれ共、玉をせしめた其後でと。虫を死してしたいがい。是から手柄の大序の始り。覺悟ひろげと尻引からげ身づくろひ。【喜】ヤアのび過キた毛野郎め。たゝんで仕まへとねらひ寄。【家】詞ヲヽこつちの望は先づ是とさし込懷。手先キの包引出す名玉。【喜】渡さじ物とおさえる彈正。【伊】さゝえる雁介ばつた〵。【喜】急所のあて身倒るゝ拍子名玉ハ。前なる溝へころ〵〵。【家】是ハと立寄ル其内に。怪しや水氣いん〵と立のぼり。一天忽かきくもり。頻りに雷電はたゝがミ。ふり出す雨は車軸のごとく山河も一同に動搖せり。

[家]浪平ハとつくと見濟し。ヱヽ有難し〳〵。ふしぎは元より雨降の玉。イテ取り上んとさがせ共。雨にあいろも見へばこそ。[喜][伊]こなたの二人もおき立て[喜]詞ヤア鳫介聞しにまさる玉の寄特。たやすく彼めに渡さふか。ぬかるな。[伊]合點と切付る。[家]マカセテおけろと身の捫。[喜]又切付る彈正が。[家]柄先沈んではねかへし。捨たる脇指取ル間も遲しと切りあふ刄。二人を相手に眞の闇。めざましかりける三重へ有樣なり。强氣の浪平ひるまばこそ。こゑをしるべに付入て。ばつさり鳫介横車。[喜]手並に恟り迯出す彈正[家]飛かゝつてゑり髮摑ミ。拔身をかた手にどうどのめらせ下に引ッ敷。詞ヤイ極惡の人非人。サア玉ハ目前身が手の物。是からうぬをしたいまゝ。最前のしかへし。かうして腹を。イヤかうして主人の恨ミ身の恨。一度にむくふ儕が天罰。思ひ知レと土に摺付泥にねぢ込。モウ一ト思ひと胸板を芋刺ゑぐり。[喜]七轉八倒もがき死。惡ッの報ひぞこゝちよき。[家]早告渡る鐘の聲。夜はほの〴〵とあけにけり、浪平いさんでハヽヽヽ、有がたし〳〵と。おどり上つて立寄レバ。不淨を拂ふ名玉の水氣に。又も篠つく雨。流るゝ泥水赫〻と。光りを放つ寄代の寶、手に取り上ておしいたゞき。是さへあればバ主人のむしつ。はれ行そらに鳴神の。心のいさミ稲妻より足を。はやめて 三重へはしり行

第八　松葉谷下屋浦乃段

佐々木近江ノ判官秀詮卿不慮の横死も密々に。事をはからふ表向後目の願ヒ立月日。嫡子衣紋ノ介秀頼

卿家に根繼の礎や。松葉が谷の下屋敷お庭の樹々も春めきし。花の盛りも余所に見て。新田大明神へ御立願。上段の間にしめ引はへとぢ籠たる御齋。神々敷も殊勝なり。お次の間にハ婢共。掃除仕廻つて寄集。詞ナント皆の衆。去年の春お姫樣ハ義岑樣との色事でお行衞が知れぬ故。ア、ひよんな事じやと思ふ間もなく大殿樣の御不幸。上々樣のお歎に御家老の縣三郎行春樣。雨降の玉の紛失何やかやで御浪人。お屋敷ハひそ／＼計り漸此頃大殿樣の御一周忌も濟だれど。當殿樣ハどふした事か此お下屋へ引籠。どつちへもお出ないハどういふ事で御ざんしよと。尋ぬに照葉がしやゝり出。詞さればいの。新田樣へ御立願一七日のお齋。けふが滿ずる御願明故。母御樣や弟御樣の爲丸樣もお入の筈。モウお出に間も有まい。皆のらかハいて呵られまいと咄半へ道念坊。とパかハ立出。詞へ丶女中方又例の色咄しか。けふが七日の御願明。頃日中毎日／＼イヤお三寸でいの。イヤお備でいのと。おれ計り追遣い。こなた方ハのらかハく。ちとたしなんだがよござるハい。イヱ／＼無精でハなけれ共。お齋の注連の內。靈驗あらたな新田樣。女の身でハ勿體ない故夫でわざと參りませぬ。イヤ／＼夫レハ惡い了簡。何の神樣が女お嫌ひなされふぞ。きついお好の其證據。北野淸水祇園樣。大坂でハ高津生玉。神樣の邊にハ得手女郎屋が澤山な。近い所は根津音羽赤木。神明稻荷前。一ケ谷お旅富ケ岡。尊い神々のお山にハ。どこでも女郎が有ル故に。女郎の名をお山と申因緣斯の通なり。こな樣方の內宮にハ。朱の玉垣眞中に。ちよつぼりと高間が原、上エの方にハむしやくしやと鬢附付て結程な。髮とゝま

りまします故。是を號て地者とも。又本肉共申く。我らが天のさか鉾で。海原をかきさがしてやりたけれど。出ッ家の身なれば是非なくも。あつたら痣の持殺し無念類ハなかりけりと。生れ付たる瓢金者。女中は一度に吹出し。本ンにいつでも氣作な坊樣。後室や爲丸樣お入リ有た其上でハ。久しぶりの藝盡し彼得手物のコン／＼コン狐の物眞似が聞キたいハいの。ヲツト呑ミ込そこらにぬかりハ中村の仲藏でも親王でも。お望次第と走り行。程なく表へ先キ走り後室樣御入と。知ラせにハツト娰中。ソリヤこそお入と立騒ぎ打連表へ出向ふ。花散て。匂ひハ殘る。梅がえの。すんと遉に取リなりも目立ぬ。風の折曲や。神に祈の日數さへ我子持ッ間の久方御前。爲丸君誘ふてしづ／＼と入リ給ヘ。後に隨ふ執權職多賀ノ將監輝門。女房關の戸諸共に禮儀。正しく座に直り 將監は謹で詞今日ハ後室樣爲丸樣。久ミにて此お屋敷へ入せられしに。天氣も宜敷恐悅と。申上れば久方御前。詞ヲヽ將監のいやる通リ。去年大殿樣に別れ參らせあるにあられぬ物思ひ此屋敷へも打絶しが。衣紋ノ介が重き祈願けふが滿ずる七日といひ庭の櫻も咲たればとそなたのすゝめ。久しぶりで能イ氣ばらし積も大分快い。詞コレ爲丸。氣がつきやう女共に案内させ庭の花でも詠めておじや。イヱ／＼兄君樣の御齋久しうおめに懸りませねバおなつかしう御ざります お目に懸つて御一所にお庭へも參ンじませふと 兄慕ふ稚氣に。關の戸も感じ入。詞本ンに／＼常ミから御兄弟お中がよふて。片時お側をおはなれ遊バさねバおなつかしいハお道理と。申詞に後室ハ。ほろりと浮む御泪。詞爲丸とハなさぬ中。腹ハかさねど產の子の衣紋ノ介に替ら

ぬ不便さ。殊に兄弟むつまじく學問武藝も共はげミ。精出しやるを見るに付。大殿此世にましまさバ嘸や悦び給ハんと。忘るゝ隙ハないハいのと又思ひ出す御歎き。お側の女中一同に。御道理様やと計にて。共に袂をしぼりけり。一間の内ゟ道念坊。立出て兩手をつき。後室様爲丸様へ殿様ゟのお使今日ハようお入遊バしました。早速お目に懸りまする筈なれ共。八ツの時計の鳴迄ハ齋の内なれば後程お目に懸りませふ。御機嫌宜ふ夕方迄御遊山遊ハしまする様。私にもお伽仕りませとの御意の趣相述れバ。ヲヽ念シの入た使の口上。そんならみな亭座敷で久しぶりのうさ晴し。ハアいか様にも御尤。此將監ハ據なき要用有レバ暫ク是にソレ女房共お供申せ。アイ〱サア〱お出遊バしませと案内に心關の戸が詞に隨ひ久方御ぜん皆々引連レ入給ふ。後見送つて將監は何か工ミの一ト思案。時分シハよしとお次より立出る守山軍八三方に對の瓶子土器添て差置バ將監ハ一ト間に向ひ。詞先キ達て後室様より新田の社へ御代參シ神前へ備へし御酒差上よとの仰に任せ。則持參ッ仕ると。申上れバ一間ゟ齋姿其儘に立出給ふ衣紋介。詞ホヽ將監太義〱。母様のお心付矢口の社へ備へし御酒。頂戴せんと有ッければ。將監ハ三方引寄セ。手づから三寸をつぎ合せ。ソレ軍八おしやく仕れと詞の内に衣紋ノ介。土器取上一つ受。武運長久安全と。三度載ずつとほし將監も頂戴せよと御土器を差給へば。ハアハツト押戴請んとすれバ軍八が。瓶子ぐハらりと打落し。コレハとあハて立退内。衣紋介は惣身の熱。次第〱に色替りもだへ苦しむ毒酒の驗刀を杖にたぢ〱〱立んとすれど足すくミ。舌强つて聲出ず眼つり上こくうを掴ミ

ぎやつと血を吐倒れ伏折から來懸る女中の驚ノフ悲しや殿様のお最期と。呼ハる聲に屋敷の男女スハヤ大事と驚されぎ上を下へと返しける。將監ハ眼を配り透を伺ひ軍八が。首をはつしと打落し血押拭ふて居所へ。こけつ轉びつ久方御前。爲丸闘の戶諸共に。あハてふためき様〻に。良藥秘術を盡せ共早脈もたへ事切て。臓腑とろける希代の毒藥。コレモフ手足ハ冷切たお顏の色も紫に。モフ御療治も叶ハぬか。コレ〳〵母しや衣紋介。兄様のふ〳〵。殿様申と三人が。死骸にひしと抱き付前後不覺に取ミだすハ目も當られぬ次第〻。將監もしほれ顏。詞軍八めが惡工ミ、殿を毒がい致せし科。首討て候と。己が惡事を押隱す工ミの程ぞ。恐ろしし。後室ハ漸と泪の顏を振上て。詞いか成過去の報ひぞや。去年の春大殿様思ひも寄ラぬ御最期。浮世にあきし悲しミも。どうぞあの子を守育此家を繼せんと。思ふ計を力にて、おしからぬ命をながらへ公の事世間の沙汰國の仕置キの事迄もいハれぬ女の世話苦勞夜の目の合ハぬも若年な衣紋介を世の人に。笑ハせまいと一ト筋に心を盡せし甲斐有て。年よりハおとなしく器量發明打揃へバ。今年シハ十六來年ンの春ハ早々元服させ。筋目の家ゟ嫁を取何ハどふしてかうしてと思ひし事も皆むだ事。日頃信ずる新田様靈驗あらたな神様の。お力にさへ叶ハぬハ。能〻因果の寄合と口說立〳〵かつぱと臥て泣給ふハ斷せめて哀也。泪の隙より爲丸君ャイ將監。詞先程聞ヶバ兄様へ毒を上たハ軍八とな。主殺しの大罪人拷問にかけ白狀させ。同類を顯ハして刑罰するが國の法。せめて兄様への申譯なぜ首討た早まつたと。さか敷詞に闘の戶も。ヲ、コリヤよいお氣の付ヶ所

と。つか／＼と立寄ッて夫トの膝にひざつき付。詞コレ中將監殿。今爲丸樣のおつしやる通、詮義すべきを其儘に首討たされ合點が行ぬ。うろたへてか血迷ふてかと。問ど騒がずム、コリヤ尤の御不審。夫レ式の事に氣が付いで佐々木の家の家老職一國の政務が成ラふか。軍八めを拷問し同類を明カす時ハ。此事世上の沙汰になり佐々木のお家斷絶。事穩便に取計ひお國を立る將監が計策。女童の知ル事成ラずと。詞の工のいひ廻し。スリヤ敵の同類を詮義さへ。叶ハぬと又も涙にくれ給ふ。詞御歎キハ御尤去ながら。所詮返らぬ御悔。ソレ女房奥へ御供仕れ。此上迚も將監が万事悪敷ハ計ふまじ。姒共ハ殿の亡骸一ト間の内へ守奉れ早く／＼。ハツト答へて姒中。一ト間へかき込亡骸の。コレノウ今が見納かと歎カかせ給ふ二方を。やう／＼痛ハる將監夫婦帳臺深く入にけり。常に替らぬ。日影さへ。唯何となく物詫て。おもむろに吹春風も無常の。風と吹かハり。甲斐なき魂を呼子鳥植込に鳴鶯のホ、法花經も自法リの手向といまハしき。爲丸君を先キに立奥より出る多賀將監。小袖上下廣蓋に手づからたづさへ座に直り。詞改て爲丸樣へ申上奉る。兄君ふ慮の御遠行。表向キハ御病氣御大切と申立。お前樣を後目の願ヒ。是より直に官領職の館へお供仕らん。イサ御服召替られよと。袴の紐に手をかくれば。振放して爲丸君。詞イヤ／＼兄樣の後目に立ハおりや否じや。ム、是ハ興がる。外カに御兄弟迚もなく。差詰お前が御後目、大名にお成なされるが。どふしていやで御ざります。ヲ、不審ならいふて聞カさふ。とゝ樣といひ兄樣、皆不慮の御最期。スリヤ我國を望謀叛人が有ハ必定。おれもうか／＼後めに

に立。又むざ〳〵と殺されてハ。先祖へふ孝母様のお歎き。イヤ〳〵夫レハ悪い御了簡。此將監が居るからハ。指も差す事じや御ざりませぬ。ムヽそんならとゝ様兄様を。なぜ見殺しにしやつたぞと。利發の詞にさしもの將監。返す詞もなかりけり。詞ヲヽ何をいふても返らぬ事。おれハ是より世を捨て。高野山にて出ッ家と成。とゝ様や兄様の。御菩提をとふ覺悟。國の事ハかゝ様と。よい様に相談してたも。かゝ様が戀しけれどおめに懸れバお留なされる。宜しう申上てくれと。稚心の一筋に思ひ切て立出る。將監ハ傍を見廻し。躮待ァ。詞。爲丸待と呼ハる聲。思ひ懸なく恟りし。つか〳〵と立歸り詞ヤア推參なり將監。此爲丸を我子とハ。ヲヽ事成就する迄は。口外せまじと思ひしかど。小賢き其方。却て間違と成ゆへに一ト通いひ聞カす。先ン殿の妾。お筆の方といへるハ。殿のお胤を身にやどし。寵愛にほこり様々の我儘。世上の聞へもいかゞ〳〵と。一家中評議の上。此將監が預り。當る十月に男子出ッ生お筆ハ血の上にてくたばる。其節女房閨の戸ハ。まだ妾宅のかこひ者折能是も男子平產。人知ラぬを幸に。お筆が產だ水子を殺し。我子を殿の胤々と。披露せしハ則其方。主あしらひに育置しハ。大殿始め衣紋介。手便を以て仕廻て退。其方を國の守になさん爲。忠義だてする三郎めハ。兼チて一味の江田竹澤と示し合。玉を盜んでしくじらせ。邪魔を拂ふて漸と。主人の根を斷たれバ差當る遺後は汝。世話やくも我子のかあいさ。疑しくバ證據を見せんと。爲丸が弓手の腕小袖をまくり我も又同じく腕をさし寄スれば。所もかハらぬ讓のほくろ。詞是計でハ疑ひ晴まじ。猶も證據と椽先キの。手

水鉢に差かゝり。二人の小指つんざいて落る血汐は水の面。流れて一所に混じあふ。實や同根同姓の親子のしるしぞ不思議成。詞ナント見たか。まがいもない我子のしるし。佐々木の家を奪取べき時節到來。コリヤ親が惡い事はせぬ　早ふ衣類をあらためよと。小袖ぬがせて着かへさす。妾の花や。花色の。慰斗目のたけも長上下。大小しやんと。詞ム、よい〳〵。天晴國取出かす〳〵と。大欲ふ道の惡人ンも。子には目のなき親心。爲丸はすき間を見て。指添拔て我腹へ。ぐつとつゝ込覺悟の切腹。さしもの將監惘りの。こなたの障子押ひらき駈出る閨の戸が。詞ヲ、爲丸出かしやつた〳〵。よふ死でたもつたとすがり付を取ッて突退。詞エ、聞へませぬかゝ樣。何ぼとゝ樣が惡人でも。お前が側に付ていて、御異見をなさるなら。かういふ事も有ルまいに。お前迄が一つに成。水子のわたしを取替て。大殿樣の胤と僞りあまつさへ。三代相恩のお主樣。御二方迄殺すとは。人ではない鬼か蛇か。鬼の女房の鬼神とやら。揃ひに揃ふ大惡人。あいそがつきてわしや死ます。必〻死だ後で。廻向して下さりますな。詞お前方回向い請ぬ。未來へ往ても。大殿樣や。可愛がつて下さつた。後室樣をいつ迄も親と思ふておりまする。取譯て衣紋ノ介樣わたしを本ンの弟と思ひ。武藝のけいこ物讀も。片時お傍をはなされず。一ッ所に起伏のお顏をやつぱり見るやうな。此世計かあの世でも。惡人の子といふ事が知レたなら弟にして下さるまいかと。死行ク先も便がない。詞ふたつにはお前方は。親でなければかまはねど。段〻の惡事が顯はれ。ろくな死はなされまいと。思へば夫レも悲しいと。身をもとあせり疵口の。

血汐に爭ふ血の泪。せき上〳〵せくり出す稚心ぞいぢらしき。母は狂亂シ身もよもあられず。詞ヲ、尤じや〳〵。我子ながらもけなげの心。今更のいひわけならねど。そなたを產だ其時ハ本シ妻ならぬひかげの身。其上に初產。前後も覺へぬ其中で取かへられ。後で聞ても仕樣もなく。生れ付たる片意地を。おりにふれて諫ても。今でさへあの通。血氣の時は猶氣强。女の知ッた事でないと一ト口にやり込られ。其後は內へ入リ奧樣と呼れても。我子と得いハでそなたを養育。段〻成人するに付。冥加の程も恐ろしく十三年の今日の日まで。案じぬ日とても。なかりしぞや。詞コレ爲丸。爺御と一所でないといふ疑を晴してたも。ヱ、是我夫。是程泣が耳へ入ぬか。聞へぬか。あの子ハかあいふないかいの。どふぞ本シ心に立歸り。殿樣の毒藥を。直す藥ハない事かとすがり歎けバ。詞ヱ、やかましい。思ひ込だ大望。釋迦孔子の異見でも。いつかな〳〵變せぬ性根。役にも立ぬ仁義だて。身の欲しらぬたわけめと。つき退られて閾の戶ハ。爲丸が刀拔取て。咽にがバとつき通し。詞コレ爲丸何ぼいふても變せぬ惡心。思ひ切ておれも死ると。這寄はいよる手負と手負。爲丸今ハの目を開き。詞樣子一チ〻聞ました。そふとハ知いで最前から。恨いふたハ赦して下され。お前はやつぱりかゝ樣ぞや。詞ヲ、よふいふてたもつた。モフ何シにも物いやんな南無あみだ佛。〳〵と双方一度。けなげにつらぬくとゞめの刀むざんと。いふもおろかなり。惡にこつたる將監ハ少しも屈せず。詞數年の工ミ皆むだ事。よい〳〵。これからは直付に。佐々木の家國押領せんと。奧を目懸てかけ入所に。長刀小脇に久方御前。ヤアヤ

ア將監　惡事の段〻皆聞た。夫の敵我子の敵覺悟せよと詰懸る。ヤア家國を望む此將監　女の手ぎれに行べきかと。拔合せて丁々はつし。終には長刀打落し飛かゝつて膝に引しき。已にかうよと見へたる所に。矢一つ來つて將監が妻手の肩先ずつぱと立。さしもの強氣もこたへ兼尻居にどうど倒れ伏。一ト間の内より高聲に。詞ヤアヽヽ將監慥に聞ケ。衣紋介秀賴公。縣ノ三郎行春が守護せしぞと弓矢たづさへゆうヽヽと君をかしづき立出れば。これヽヽいかにコハいかにと呆れ。果たる計なり。共に驚く久方御前。詞ヤア最前死にやつた衣紋介。コソリマア夢ではないかいの。ハア有難や嬉しやと悦ぶも又泪なり。將監は膝立直し。詞アラふしぎや。我家に持傳へし。鴆毒を以て殺したれバ。耆婆扁鵲が藥にても。蘇生すべき謂れハなし。ホヽ其疑ハ尤至極。最前汝が毒害せし。殿の死骸を改め見せんと。一間の障子押開き。上なる絹を引退れバコハいかに。神の心ハ白幣さもいさぎよき幣帛に。勿體なくも穢れし毒酒ハ、ハツト人々は思ハず知らず飛しさり。扨ハ新田大明神の急難救ハせ給ひしか。ハア、、有難や尊やと感涙肝にめいずる神德。武藏の國荏原郡矢口の村にかくれなき。新田大明神の靈驗ハ末世の今に著き。後室いさゝの御聲にて。詞神の奇瑞ハ申も恐れ。又不思義なれ三郎が身の上。いつの間に此館へ。ハア其御ふ審は御尤。大殿の御最期。雨降の玉の紛失。皆將監が惡心とにらミし故。手傳を以て廓へ入込。奸佞邪智の者共が密事の段々聞届。其上家來浪平か働に て。玉は我手に入たれ共。惡人はびこる御館。表向より差上なバ。又災を招く基と。道念が生れつ

き。正直なるを見込し故。潜に内談仕り。此所へ忍び込。我君を守護し參らせ。兼て信仰の御神の
へ七日の間齋にて新田の神ゝを祈しに。詞主從共時夜の靈夢。將監が惡事の御告。彌深く閉籠。眠る共
なき其内に。右の次第に候と始終くれしき物語。衣紋介はしやとやかに後室に打向ひ。詞謀もれん
かと。三郎道念が密談。深く包隱せし故。最前よりも兎や角と御心を痛めし不孝。御免なされて下さ
りませ。詞ヲヽ此母が案じより。不便なれ爲丸が。雅心に義を守り。死たる事のいぢらしやと。御親ゝ
子死骸の側に寄り。未來永く我子ぞや。我弟ぞよ快く成佛せよと計にて後は泪にむせ返る。三郎は進
ミ出。詞ヤア將監謀計は一旦の利潤たりといへ共。終に神明の御罰を蒙る。身の程しらぬ惡逆無道。
主人を弑せし人面獸心。天罰思ひ知たかと。するどき詞の釘鎚。がうあくぶさうの將監は。痛手に屈
せず立上り。斯迄仕込し我計略。いか成奇瑞を見ればとて。此まゝにて置べきが。手並を見せんと立
寄って。庭に仕かけし相圖の狼煙。ぱつともへ立煙と共に四方を取卷鐘太鼓時をどつとぞ上にける。
驚く後室衣紋ノ介。制し留めて縣ノ三郎。眼を配立たる所へ小手脚當に身を堅かけ來る僕の浪平。詞主
人三郎が計略にて。御譜代恩顧の御家中を潜にかたらひ手筈を定め。君を守護し候所に。相圖の狼煙
に一ヶ味ノの惡黨數百人ゝ御門前迄押寄しを。兼て期したる味方の勢。仕懸おいたる弩を一度に放せばた
まり兼迯るを。追懸追詰て殘らず討取候と勢ひ込で呼はれば。御二タ方は三郎が智謀計略ぬけめなき忠
義を感ずる計なり將監刀拔放し。ぐつと突込左りの脇腹。右へきりゝと引廻し。ヘヱヽ口惜や腹立や

三郎に支られ我望ミ達せず共。思ひ込ンだる初一念ン。大六天の魔王と成ッて。生キ替り死替リ。佐々木の家を奪んと。無念の顔ン色血をそゝぎ。眼釣上髮逆立。悪ッに根強き其形相すさまじくも又。不敵なり。三郎ハあざ笑ヒ。詞ヤア及バぬ望ミハ蟷螂が已レと報ふ身の破滅。大殿様へ御手向。いざといふ間も衣紋介。刀の稲妻將監が首ハ前にぞ落にける。三郎ハ一間ヵ雨降の玉をさゝげ出。詞名ィ玉再び御手に入しハ。倍臣ながら浪平が忠義の働。御ほうびの御詞下さるべしと。有リし次第を物語れバ感ずる後室衣紋ノ介武士に取立得さすべし。當座のほうびと御手づから下し給ハる御一腰。ハ、、、ハット頂戴ハ冥加に余る身の歡。君ミたれバ臣ミたる。聖の教目のあたり。歡善懲悪淨頗梨の鏡を照ス佛の道。神の敎への道直ッに。歩ミをはこぶ武藏の國。矢口の村に後垂し。新田大明神の靈驗を傳へる昔物語今の。世迄も 三重 へかくれなし

第九　山口觀音乃段

次第 佛の誓今爰に〱。迷ひをいさや晴さん。詞抑ミ是ハ武州入間の郡山口觀音利生の道場。此吾菴の窟に禪居を占。瑜伽の門派に濫吹せる。求道の沙門上生とハ我事なり。扨も此度新田小太郎義宗公。初花姫と諸共にお船が菩提を弔んと。我寺に來り給ひ三日三夜の大法事。今日滿願の日にあたりてハ。又是成一樹の櫻ハ。義宗公の御父。新田左中將義貞公の。誓の櫻と申習ハし。名ィ木といひ所縁とい

ひ。一枝手向ケ度いへ共かゝる名木を手折んも。落花狼藉心なく候へば手折ラで直クに手向ケの花。南無幽靈出離生死。頓證菩提と回向有り。見渡せば古きなところ様〻に。有りといふなら迯水の。迯隠れても世を渡る民の。手業の何故に。掘難の井の水底を今も原て久米川や。青梅も餘所に人見山。關戸もさゝぬ所澤。水ハ流れて入間川岸村山の里つゝき限りも。知ラぬ武藏野ハ。けふハなやきそ若草の妻も籠れり我レも籠れり。此寺のゆかりも。よしや義岑公。しつ〳〵と立出給へハ。夫レと見るより上生阿闍梨。ハツト敬ひ奉る。義岑御二人うるハしく。詞いかに阿闍梨。今足利の天下となれ共。官領畠山義深が非道の政務萬民ンの歎き。此虚に乘て計らんと。表をだしやくに氣をゆるさせ。關分きの武士を。忍び〳〵宮方に招き寄セ。和田楠にも内通し不日に籏を上んつ手都合。夫レ迄暫し身の隠れ家。父義貞の所縁有とて段〻の深切。いつの世にかハ忘るべき其上此程打續お船が菩提を追福の晝夜の勤行忝しと。仰に阿闍梨ハ猶もひれふし。詞有縁無縁の差別なく。回向をするハ。出ッ家の役。況や當寺ハ御父君。義貞公御歸依有し大旦那。お船が菩提弔ふも身に應じたる事なれば。お禮を受る筈なしと。木を切ッて投出したる出家かたぎぞ殊勝なる。義岑重ねて。由緒有此寺なれ共我レハ都に人となり。委しく様子知ラざれバ。詞寺の由來二ツにハ。此櫻を父義貞の誓の櫻と名に呼因縁。物語られよと有りければ。阿闍梨ハハツト袖かき合せ。夫レ我寺の本尊千手薩埵の靈像ハ。人皇四十五代聖武帝の御宇。神龜五年行基菩薩。此地に來りて觀音の影向を。寫し彫める尊像なり。其後我祖師弘法大師。是も不思義の告有

て一宇の堂を草創有或時。國に疫癘はやり。諸人のなやミ人種も盡る計の事なりしを。一人の老僧有て吾庵の觀音に。祈を懸ヶよと教へに任せ人々。爰に來りつゝ。祈れバ忽チ平愈せり。民の歡大方ならず。彼老僧の吾庵と。教へ給ひし詞により吾庵山とハ號たり。扨又誓ひの櫻とハ。去ル元弘三年に御父君義貞公。相模入道を亡ぼさんと。上州より義兵を發し。分梅河原の一戰に。利を失ひて引退き。此寺に御通夜有。一紙の願書を捧らる。其夜の夢に觀世音御手の弓矢を授給ふ。義貞公ハ夢覺て心に。誓庭前の。櫻の枝を鞭となし鎌倉に馳向ひ。詞 相模入道一家を亡ぼし。震襟休め奉る。去ルに依て此一ト木を。義貞公の誓の櫻と申事。此謂れにてはさいとも。委しき物語。義岑感涙せきあへず大悲の奇瑞親人の。忠臣無二の誠より感應有しもひがとならず。さハ去ながら左程迄智仁勇備の親人も。傾く御運是非なくも尊氏に世をせバめられ。詞 終に越路の雪と消。萬夫不當の義興公も淵に投打玉川の底の水屑と失ャ給ふ。當家の運の拙き上ふかいなき義岑が。斯成行し身の上をさぞや父上兄上の。さげしミ給ハん面ッ目なやとひたんの泪にくれ給へバ。詞 ハア御歎きハ去事ながら。顏回孔子も時に合ず。殊に南朝の御衰へ。大厦の倒るゝハ一木の力を以救ひがたし。只何事も過去よりの約束事と思し召せ。敵となり味方となるも蝸牛の角の爭ひにて。編照す毘盧遮那佛。草木國土悉皆成佛。猶も亡者の手向草いざさせ給へとすゝむれバ。義岑公ハしほ〳〵と。上生阿闍梨にいざなハれ。本ッ堂へさして入船と。又出る船の戀の海。深き妹脊の中〳〵に。今ハ一ト入增花の。初花姫も諸共にお船が。菩提亡靈へ手

づから手向の花籠にすミれ。補公英九輪草。弔ふ法の庭櫻。目には涙の玉椿。雨を帯たる海棠の。花の物いふ脣に。稱る經ハ亡人の。苦海を渡る棹の歌。お船が姿寫繪ハ花と。花との下枝に懸る。手品も。たほやかに。取り出す振の袖香爐。手向ヶの花や阿伽の水。涙と共に合掌し暫く詞も。なかりしが。

詞ノフお船殿。過し頃矢口詣の折りからに。道よりぞつと寒け立。氣ハ忙然と夢幻。義岑様に妹脊のかたらひ。此世を去し魂が。我身を假の新枕。思ひを晴し立退し。後の我身ハ義岑様に。何のゆかりもなけれ共。一人の心ハ千萬人。可愛らしいいとしらしい殿ぶりハ誰目で見ても違なく。詞惚たが因果こな様を。戀の媒氏神と。手前勝手な理を付て。逢夜重なりいつかしに。永き妹脊のかたらひを。草葉の陰より嘸やさぞ。大事の殿御を寐取ラれし。にくひ女じや恨めしいと。愼恚の炎苦しミを。思ひ廻せバ廻す程。わしや徒者道しらず。いつそ此身を墨染の尼法師共さまをかへ。菩提を問が道なれ共。思ひ切れぬ心の迷ひ。どんな恨ミを身に受て。詞此世の災難あの世でハ阿鼻焦熱の苦しミも。八寒地獄劍の山。くげんに苦患を重る共。義岑様に片時も。得離れハせぬ退ハせぬ。赦して下されお船殿と。繪像に取付すがり付。聲の限りを泣盡すハいた〳〵しくも哀なり。もゆる火の薪ハ假の容にて。空より出て又空に。歸り籠たる、輪囘の紲。お船が姿あり〳〵と影のごとくに顯ハるれば。夫レと見るより初花姫。これさ悲しさ身ハわな〳〵。恐れおのゝき振ひゐる。アヽヲ閻浮戀しやなつかしや。さなきだに。女は五障三從の罪ミ深き身をいかなれバ。父の惡逆邪より。さしも名高き名將の。義興様を害した

る。悪の報ひハ針の先。夫レとハ知ず義岑様の。お姿を見初メしより。迚も女に生るゝなら。あんな殿御に添たいと。思ひ餘りてやう〳〵と。やさしいお詞聞嬉しさ。お側へ寄レハ淺ましや。御ン旗のとがめにて正氣を失ふ悶絶も。恐れずこりづ附まとへど。兄を殺せし敵の娘。此世で添事ならね共。親と一ッ所でないといふ。一つの功を立るなら。詞未來で添ふのお詞を。せめて此世の思ひ出と。御身替りと覺悟して。刃に懸り死たりし。邪婬の悪鬼ハ身を責て。其念ン力の。道もさかしき劔の山の上に戀しき人ハおハすれ嬉しやとて。よぢ登れバ劔は身を通し盤石ハ骨を碎く。鉄杖ふり立牛頭馬頭の。呵責の聲ハ天地に響き。百千萬の雷の。一度に落る苦しさこハさ。猶其中にも魂のしたふ一圖に漸と。お前の姿を假初に義岑様にま見へしより心の迷ひいやまして益〻つのる地獄の責。母は先立父ハ猶。同しく地獄の奴となり。兄弟迚もあらかねの土に印の塚もなく。唯一ト口の念佛を手向る人も有ざれハ。億万劫をふる迚も浮む世更に有ざりしを。義岑様の御情尊きお僧の御追善。お前の心のやさしくも恨みしつとの念もなく。眞實心の御手向ヶに地獄の苦しみやう〳〵と。暫くまぬがれ來りたり。今ハ妬も春の夜の夢の間の暇さえ。冥途の使しげけれバ暇申さんさらバぞと。いふ間も嵐の吹きたり。ぱつと燃立火の車。無明の猛火身をせむれバ。アラたへかたや苦しやと。七轉八倒さんらんを。見るにたへ兼初花姫心計ハあせれとも。寄に寄ラれぬ業火のほのほ。身を切りくたく劔の山。せん方泪こなたより走り出たる上生阿闍梨。數珠押揉で立向ひ。聲を限りの普門品。一心讀誦の祈りの印。不思義やこくふ

に音樂聞へ〳〵花降異香四方に薫じ。紫雲たなびく其中に千手薩埵の御姿光りを。放ち顯ハれ給ふ。實や火阬變成地。念彼觀音の力ラによつて。お船が姿　忽に蓮花の上に立よと見へしが。いと嬉しけ成聲を上。有難御弔。此山口の觀ン世音の功力に依て忽天ン上の果を得たり。猶も佛力擁護の印。衆生にしめす羽衣の曲狂言綺語も讃佛乘。報恩謝徳と夕月の影も目さまし　三重へ春霞

天津空誓ひの櫻　此段いまだ書不申フシ付相定らず候 追て相改取替差上可申候

古寺のみぎりの櫻年經ても猶あらたなる誓かな有がたや千々に手向る染紙にそみし輪囘の罪消て天上の果を請たるぞや此歡にいざさらバ人間の御遊のかたどの舞さすや桂の宮人の天の羽袖や小忌衣一つにかなつる名殘の袂返す〳〵も面白や抑廣寒宮中には玉斧のしゆりあさやかに瑠璃の　梁　瑪瑙の階白衣黑衣の天人の數も珊瑚の珠の笛笙ちやく琴鼓今爰に花降て妙なりや靈香四方に薫ず面白の今の音樂の音天の原ふりさけ見れハ霞立空にもいつしか行春の浦山しけに打なかめ迦陵頻伽の馴〻し聲さらに鴈金の歸り行天路と聞バなつかしや實乙女子の霓裳羽衣の曲をなし天の羽風のひら〳〵〳〵とあめに潤ふ花の袖吾妻遊びの駿河舞此時や始なるらん花の色香も能姥櫻姿艶しやほら〳〵〳〵と二重の帶をきりゝとしやんと縁結びお乳や乳母の癖として春に子を負寐させておいていんのこ〳〵といふた物なめなかけそふよかあゆらしさにな愛盛あすれバかふり〳〵手打鹽の目扱もそなたハ誰人の子なれば定家かづらか放れかたやの〳〵手車にのせて參ろの東山や西山北嵯峨の踊ハ對の帽子をしやんと着て踊

るふりが見事へ花見て戻ろ〳〵花にハうさを打忘れ面白や九重の都に恥ぬ江戸櫻千代のためしと菊櫻匂ひ櫻や八重一ト重君がゑくぼのうず櫻そん夫ハ誠に能いふた忍ぶ夜の〳〵月も少しハ遲櫻有明櫻戀の邪魔闇に照すは緋櫻に濱で見事な鹽竈やそん夫レハ誠に能いふたたとへ〳〵野の末山櫻虎の尾住し奥までも二人誓の伊勢櫻起請誓紙を墨染やそん夫レハ誠に能いふた吉野初瀨の花よりも紅葉よりも戀しき人ハどれ〳〵見たい物じやところ〴〵お參りやつてとうげこめされよ科をバいちやがおい參らしよしほらしや見れバ五色の綾の竹綾のしとねもへ君と我ふたり緣の結ぶの常陸帶天津乙女は誰袖ふれし姿よし驛路の鈴ふれバなりもよしエイ〳〵〳〵ナ一の子寶揃て〳〵さつさ時雨か鈴の音か日本めで度春の山ハ三笠待バ甘露の日傘月の笠程開た〳〵秋ハ猶紅葉文字笠それへ〳〵夫レじやいの誠に鵲の橋を渡した〳〵とけぬ思ひの戀にも有ルに數々の文にわしやたまされて忍ぶその夜は闇こそよけれこん〳〵來ぬ夜ハつん〳〵面にく我獨枕かたしき夜もすがらほんに憎いじやないかいなうやつらや空もなつかし雲の波花鳥飛かふ雲の袖かけめぐり返す乙女子の舞も妙なりや東歌去程に〳〵時移つて天の羽衣はるかせにたなびきたなびく武藏野のひろき惠ともすゑ遠く山口しるき源トのさかえを舞にしらべの音色四の緒の琵琶嶋も外ならず靈香薫ずるはなの夕ばえ草のゆかりやむらさきの雲にまぎれてうせにけりかゝる所へ、竹澤修理亮宗時。手の者引具しどつと駈着。詞義岑と初花姫、此所に忍び居るよし聞キ出したり。踏込で搦捕と　奥を目掛て駈入所に。堂の陰より万八が。そふハさせぬと踊リ出。

忠義始の手並を見よと。縱横無盡に切リ立れば。さしもの大勢たまり兼。三重迯るをやらじと追て行。透を窺ひ竹澤が。只一人取ッて返し。奥を目懸て駈入所に。待もうけたる義岑公。兄の敵の片破と。首宙に討落し。四方を白眼で立たる所へ。しばし〳〵と呼ハつて。衣紋ノ介秀頼。後に隨ふ縣ノ三郎。官領畠山義深に繩をかけ。浪平に引立させ。御目通りに愼んで。詞 主人足利義詮より。義岑公へ使者の趣き。固り新田足利ハ。同じ清和の源氏と源氏。矛盾に及ぶ筈ならねど。惡逆無道の畠山。江田竹澤が讒言にて、心ならずも敵味方。今より水魚の因をなし。南朝北朝御和睦ノ誓の印畠山を御勝手次第。御刑罰下さるべしとの。申付にて候と相演れば義岑完爾と打笑給ひ。詞 私の意趣ならねば。君と〳〵の御和睦。四海の靜謐民の歡。何しに否申べし。惡ク の張本畠山夫レ首討といふ所へ。敵の首を引提て。取て返す万八が。立寄ッて義深が首をはつしと討落し。歡いさむ勝鬨を。聞クに嬉しき初花姫。一ト間の内より走リ出。兄弟主從聟小舅ノ語合たる身の上や。五輪の道も明らけく。五穀豐饒の秋津國治る。御代こそめでたけれ

安永八年
己亥二月八日

東都　福内鬼外戲作
同　門人森羅万象作
浪花　二一天作

後序

近松老翁世を戯場に擗て數の淨瑠璃を作けるに筑後播摩の名人有ッて普世上に行渡り觀善懲惡世を敎類の一助たる事是近松氏の本心なり中頃千前軒文耕堂が類も亦近松氏の意を請て作れる所正しければ此道甚盛なりしがいつの頃よりか衰て今時の作者ハ固そこ所でハなく文法をしらず手尓於葉を辨ず嘲を遠近に傳へ恥を千歳に殘す讀ぬ同士書ぬ同士金聾雷をこハがらず盲蛇物におぢずされども五年か三年に一度犬も歩行バ棒に逢ふ闇夜の鐵炮まぐれ當りはくらんの藥ハはくらん病が買に來る遲牛も淀早牛も淀それも作者是も作者鳫が飛バ飛で見たがる石龜仲間のじだんだ組すつへらぱんの鼈作者泥水に足を踏込首をすつこめ敬白

亥乃とし卯月上旬　　福内鬼外書

右之本頌句音節墨譜等令加筆候
師若針弟子如縷目吾儕所傳泝先
師之源幸甚

名代 結城孫三郎
座本 吉田専蔵

江戸通本石町十軒店
山崎金兵衛
伏見屋善六 板

靈驗宣門

靈驗宮戸川

座本豐竹東治

序詞 經に曰。十方諸國土無刹不現身と。佛の利益いちじるき。頃は人王三十四代。推古帝の御宇に當て。武州宮戸川に漁し檜熊兄弟。網裏に出現ましませし。末代不思儀の靈像は。誠なるかな孝悌忠義の殺生は。菩薩万行に越るといふ。たとへにもれぬ大悲の救世。妙花の盛なる。往昔を爰に藜堂。淺草寺のはじめ成ルヲロシ 御代の光りぞ長閑なる。地 比は彌生の春の空。櫻ほころぶ南面の常の御座に出御なる。玉座のあたへは曾我の大臣蝦夷公。胸の一チ物押かくすうはべばかりの空勿體。階下には二代の老臣秦の川勝。面テにしるき正直の頭における年の霜。次キに並ゐる大臣の家臣土師の連。其外百官百司の面ン々威義を正して參列有。腋門の方タよりも遠慮白砂をどいや／＼。木綿どてらの百性共初て登る雲の上。居所しらずうろたゆれば。むらじは眼に角ト立テ。詞ヤア見苦敷きりうち共。玉座ちかく尾籠の振廻。地すされやつとねめ付れば。秦の川勝しとやかにさな云イそ連ジ殿。詞見れば賤敷土民共。定メて訴訟有ッての義申せ地聞んと有リければ。庄屋の杢兵衛おづ／＼這出。詞私共は武藏の國淺草の百性共。聖徳太子樣御在世の砌。觀音樣の御堂が立てゝ仕切ッて

有ル反甫中。荒地に致すも費な物。伺ふた上ヱ畠にしやうさ村中が寄リ合イ付ケ。お伺ひの爲參りましたさ。地辰巳あがりの關東なまり蝦夷公ほく〳〵打默頭。詞ホ、ウ尤成ル願イの趣キ蝦夷の大臣が聞キ屆ケた。いかやう共はからへさ地いふをしばしさ川勝押留。詞イヤノウ蝦夷公の仰に候へ共。觀音堂建立は聖德太子の御心願。無足に致すはいかゞなりさ。いひも切ラせずそふでない。大切成ル本ン尊。太子の姫君綾歌姫の言号の進中臣。取リ失ひし落度によつて當時勅勘の日蔭者。スリヤ御堂を建立しても世俗にいふ佛の無堂。近比無益の義。イヤさやうには申されまい。紛失の本ン尊を尋出さん故にこそ。心をつくす進中臣。此義は追ッてさた有ルべし能リ立地さ有ければ。ハット答へて立チ上る。實淺くさの百性さて。どさくさとして出て行。地御帳臺の内よりも典侍の局立出て。詞蝦夷樣川勝樣。主上此程の綸言には。女皇の御ン身として萬機をすぶる政。甚タ宸襟を惱し給ひ。聖德太子の若宮山背の宮へ。御位を讓られんさの内勅。かた〴〵評義有べしさ。地仰は重き國家の大事。善共惡カさも誰レ有て。詞を出す人はなし。地土師の連しや〳〵り出。詞憚りなる事ながら山背の宮樣は母御のお腹に三年ンやどる。イヤモ法量もない長カ逗留。申て見れば人間ンはづれ日の御繼には成リますまいさ。地恐げもなく言放せばこらへかねて末座より。宮の舍人調子丸連が前へつつさ寄。詞イヤコレむらじ殿さやらむら氣殿さやら。只今あれで聞てゐれば。身が御主君ンの若宮樣を人間ンはづれさゑらひ雜言。過キ行キ給ふ主君ンに聞キはつつた此舍人。天竺の釋迦如來は母の脇腹を破つて生れた。出口しらずの生れ損ひ。唐土の老子はお袋

の腹に八十年宿つたれど。生れた所が大聖人。よしや夫レは兎も角も。まんろくな十月めに産聲上た連シ殿。鑓おとがいの猿眼。人間ンはづれのしかみ頬。しつかい九百九十の鼻欠ざるが一ッ疋の猿を笑ふも同前。地飛どすさつてお居やれとやり込メられてぐつとせき上。詞ヤア牛扶持喰が圖ない腮骨。今一チ言ゆつて見よおとがひ切て切さげるぞ。地切及廻せばクッ〳〵と吹キ出し。詞ハ、、、猿殿が赤ふなられた。生れ損いといふたのを今一ッ遍聞キたいとな。安い事いふて聞カそ。猿眼〳〵生損ひの鑓頤。地モウゆるされぬと鯉口四五寸。蝦夷聲かけ。詞コリヤ待テむらじ下郎をとらへて論は無益。調子丸もしづまれと。地せいするゞ詞に是非なくもにらみ殘して扣へ居る。地大臣しとやかに正笏し。詞人氣和せざれば亂ンを生ず。地假初にも若宮の卽位を難する者有ルは。人を以ていはしむる天照神の神勅ならん。され共是は凡慮の至。明日三輪の神ン前ンにて神ン慮に任す二の御鬮。宮御參詣まし〳〵て吉凶を定め給ひ。其上にて御位定め。是に越たる事あらじと。地阿波の鳴門になみ風のなきは工の有リ磯海。詞實尤なる大臣の了簡。いなむ人トやは有ルべきと。地直に玉座へ奏問の。折も正午の時告早退參と各は。立ッや日あしも。長き代の君がめぐみの寛やかに。四海のなみも。豐浦の宮宮居久サしき　三重へ御代なれや

第二

鹿ヲトリカヽリ　あし引の。地大和は爰ぞ。杉立テる神ミ代のまゝのとこしへに糸筋。長きおだまきの三輪明

神の鳥居前。葭簀圍の水茶屋も。春風わたる往かへり。休まぬ人トに休む人。價千金茶の錢も今を春邊と賑はへり。地茶見世の噂は空打チながめ、詞ヲヽとやかふいふ中チ最早晝前。けふは宮様のお成リとやら御幸とやら。今に雜式の鐵棒のと人ばらひドリヤ。地此間に晝餉したゝめて來ませうと。取リなりしやんご水茶屋の。葭簀引キ寄セ出て行。地きぬつらき。其衣の香は。梅香ほる。色と情の蕾の花。被まばゆき御所風は。聖德太子の姫君に。名も綾歌の綾錦。包ム笑顔の細眉に。殿御ほしさのぼんじやりは繕はぬ程あでやかさ。地お供の娵下女婢。かしづきゆくは調子丸。詞扨々お早いお御足。外ト珍ら敷姫君様、娵しうもとつかはと地急ぎに急ぐ三輪もうで。春めきわたる鳥居前。又かふした風景はどふもくさ。いへばこしもと口々に。詞お姫様のおかげにて。けふは思はぬよいのん氣。道すがらも夫レはくよい男の見あき。イヤホンニ其男で思ひ出した。お姫様のお言なづけ進ノ中臣様勅勘の身とやらで。御婚禮も御延引。さぞ姫君様にもお待チ兼。大かた其願ン込の御參ン詣。此明神様は取リ分て。夫婦妹脊を守らせ給ふと聞ば。地こちらもすへによい殿御あてがふて下さる様に。お願申ておこぞやと。何の苦もなき下女婢の。詞に姫も打笑給ひ。詞皆の者が言通り。定マる夫マは有ながら。勅勘の御身の中臣様マ何所にどふとの便リもなし地けふの祈は夫レならず弟宮と。申スも勿躰ない。詞山背の宮様御位定めの御參籠。よいが上にもよい様にと。自ラ歩みをはこぶ。其守り目の次手には。地殿御の事もとにつこりはゑくぼこぼるゝ恥しみ。地調子丸引ッ取て。詞成程御意の通り。今日若宮様には御大切の御社參ン。

姫君様も倶々に御願ン込メは御尤。先ッ々宮居へ御參詣。地神主方にて御待チ請入ラせ給へと附々も倶に。袖振ル神樂の鈴。打つれてこそ入給ふ。地我レ獨澄と思へど濁る世の。いつしか露も打晴レて朝日待チゐし浪人の深編笠も雲の上。歸る鳫金音をぞ鳴尾羽のかれたる跡からは。角前髮の屑有リ氣。さしよつて袖を扣へ。詞卒爾ながらお笠でお顔は見へね共お姿に覺へ有リ。まがふ方なき進中臣樣。友成リめでござりますと。地いふにこなたも邊りを見廻し。編笠取ッて是は〳〵。詞たへて久敷キ主從の世を忍ぶ某を。アイヤ三代相恩の主君ン。何とて見違へ奉らん。今更申もいかゞなれ共。其身すぼらしき御すがたも。我レ々親子がなす所。親にて候檜熊郡領。聖德太子樣より御預りの閻浮檀金の觀世音。何者共しらず寶藏へ忍び入リ。奪ひ取て行衞知レず。申譯ケに父は切腹。其咎とてかやうに勅勘の御身とならせられ剩御浪々のお身の上。所々方々御有リ家を尋求しに。今ン日ふしぎに此所にて。御目にかゝるも主從のつきせぬ御ゑん。地御壯健の御有リ樣。拜し申て恐悦と目に持ッ涙。はら〳〵と。昔を忍ぶしほらしさ。地中臣公も御落涙。詞ヲ、尤々。是も偏に明神の御加護。我レも再び其尊像を尋出し。太子樣御遺言の通り。一字を建て安置申さぬ其中は。人に面テは合さじと。見るごとく日蔭の身。世は聖德に治るといへ共。佞人讒者時を窺ふ此時節。尊像さへ手に入ラば。山背の宮の隨臣秦ノ川勝。是を力ラに勅勘のお詫申さんと思へ共。地何をいふも肝心の尊像の何國にわたらせ給ふやら。今以行方知ラず。ぜひもなき世の有リ樣と。仰に友成謹で。詞御氣遣イ遊ばすな。我レ々兄弟三人。女でこそ有レ妹も一人ン有。唐天竺へわたら

ば格別此日の本トの中チならば身を粉にはたいて成リと尊像を尋出し奉らん。先キ達て兄濱成は。東のかた。武成と拙者めは五畿七道。捜し出して御手に入れん。武成リと申シ合せ。川勝様へも近日伺公仕。御勅勘の詫の綱萬事宜敷計ひ申さん御心やすく思し召せと。地諫申せば中臣公詞ヲ、末頼もしき汝が心シ底イ随分ンと油断なく心付クるが肝要〳〵。地人ト目も有レばいざ〳〵と。宣ふ詞に友成は。名残おしげに見返り〳〵。お別れ申てへ急ぎ行。地折もこそ有レ御社参そふと警蹕の聲かまびすく。御先キをはらふ御車は。聖徳太子の忘れ筐山背の宮御位定メ。きしる音さへいさぎよき。御車添は御随身秦の川勝非常を正す役めの素袍侍イ烏帽子年シばいも。しらが交りの勿體に異儀を。改め歩ミ来る。地かくと見るより進中臣。はるか傍に平伏す。川勝は一チゆうし。詞コハ珍らしゝ中臣公。先ツ以御勇健の躰重畳と。挨拶有レば進中臣。詞今更改メ申さず共某が罪。お預りの尊像を失ひ奉りしは。家来檜熊郡領が越度とは申ながら我カ誤リ。勅勘の身を持チながら今日是迄参りしも。若宮の愛らしさ嘸御成人ましまさん。地餘所ながら御顔も拜したし。一トつには尊像再び我手に入ルならば。其時こそ御赦免の御願ひ御執成給はれ川勝殿と低頭平身身を愼み思ひ入ッてぞ。地見へにけり。地川勝は取リあへず。詞御念ンの入ッたる御願ひ。綾歌姫の御言イ号聟かねと申。何とて如才の有ルべきぞ。地紛失の御佛ケさへ御手に入ラば。勅勘御めんは眼のあたり必々氣遣イしたまふな。いまだ有リ所も知レぬとな。随分ンと御詮議有レ追付ケ目出度御對面申さんと。地力を付る老人の殘るかたなき慈愛の詞。地ハアハツト領掌あたりに人音ト。見付られじと

中臣公。編笠手ばやに身を忍ぶ。宮居のかたより。つき〴〵随ひ。地心かたちも綾歌姫。君の迎に出給へば。川勝は手をつかへ。詞是は〳〵姫君様早御社參相濟御下向か。イヤ〳〵左にあらず。自もお願ィ申神もうで地一トつには若宮様を御待請。わざ〳〵是迄。詞是は〳〵御苦勞しごく。君にも御機嫌うるはしく只今社參。シテ御供は調子丸太義〳〵。ハア今日は別して。御太切成ル御社參と承はる。川勝様にも御苦勞と。地互ィの挨拶とり〴〵に御車に引添て。皆々宮居へ詣で有。地邊り見廻し進中臣。立出て見送リ〳〵。詞正敷言ィ號有ル綾歌姫。婚禮延引さぞ女心に恨ミあらん。勅勘さへ御赦免有レば追付ヶ目出度迎い取ラん。地夫レを力ラに待チ給へ心に任せぬ世のさまと。しばし涙にくれ給ふ。連レにはぐれて。友なしの鴛の思ひ羽片はがい。十五六成ル娘盛リ。見そめし戀人ト夫ぞとはいふにいはれぬ思はくの。はづかしいのが戀なれや。地人なき茶見世を幸に。心を汲出す茶の花香。さし出す茶碗のくつきりはおむろ燒キより割レやすき。思ひ切ッてすか〳〵と。お茶上ませうと差出す。地うきをなぐさむ色このみ。ふり返つて是は〳〵。詞お茶とは手づから忝い。さて見事此茶見世の主なるや。ムンかぶり振のはそふでもなく。ハテ合點の行ぬ御女中。ハア、やさしいお志。御馳走のお茶賞翫そと。茶碗片手にしめる手をしめかへすさへこは〴〵に。赤顔むの袖屛風。合點行ぬとおつゑやれど。女御后も賤の女も。惚るといふ字に二タつはない。情に隔は有リ明ヶの。伏屋の月キ日も玉簾も影は一つの長枕いとし可愛は戀の戀。詞歌をよまねば返シ歌もなく。文玉章を打越シて。地姫ごぜの身の。はづかしいまんざら夫レと打付ヶ

は。よく／＼惚ﾚたと思し召。あはれみ給へとひたすらにやいの／＼もおもはゆげ。もたれかゝりし藤かづら。眞實見へて。かはゆらし。中臣邊りを見廻し。詞切ッ成ル心忝い何迚むげになすべきぞ。幸ィ葭簀に人ﾄもなし二世の。かためは簾の中と地心時めくあだ心。打連ﾚおくへぞ入ッにけり。まだ青柳の。糸長き。地春の日脚も斜なる。歩路。下向の綾歌姫。女房達は待兼顔。イヤ申。詞お姫様お下向のお次手に。地帯解の地藏様安齋の文珠か岡寺か。初瀬へちよつと結ぶの神。姫君様と中臣様つい御祝言有ル様に。ずら／＼ずつと御參詣と。すゝめ申せば姫君も倶に浮立チ給ふ折から。地神主方より急使ィ詞調子丸様是にお出なさるゝかと。地差出す一ッ通手に取リ上。詞何々。今日社參の義に付密に申談ず子細有ば。拜殿の南。一チの杉迄只今參らるべし早々以上。調子丸殿へ川勝よりと。地よみ終て打うなづき。しからば姫君様幸ィの茶屋が床几しばし御待チ下さるべし。一ﾄ走リいて參らんと。使ィに連ﾚ立とつかはと一チの杉へと引ッかへす、地跡にざは／＼女中連。何をいふやらかしましき。中を窺ふ曲者が。黒裝束に大だらぼつ込。目計リ出したる頭巾の角々。數多の女はり退踏退。姫君のよは腰引ッ抱へて仁王立。のふかなしやと宣ふ聲。耳へも入ラず欠出すどつこいやらぬと葭簀の內。飛出る中臣公がんづか取ッて引キ戻せば。心へたりと振リほどき。手練の當テ身にさしもの中臣。うんと悶絶其隙に。姫君拘曲者は何國共なく遁れ行。地騷に連ﾚて葭簀の內驚出たる以前の娘。見れば男は氣絶の體。あはてふためきコリヤどうしやうと立たり居たりしばし。とほうにくれけるが。やう／＼に心つき柄杓の水を口から口。抱き拘て。

詞ヱヽどんな呼かへそうにもお名はしらず。コレナウ旅のお侍ィ樣と。地いふに氣の付進中臣。むつくと起キて。詞ヤアそなたは。最前の娘曲者は取逃したか。何。遠くは行まじ追欠んと。地欠出す裾をひかへる袖。振リ切〳〵欠行を。はなれはせじと帶引キしめ。小褄引上かい〳〵敷。同じく跡をしたい行。地すでに其日も未の刻還御の時刻御車を。東頭にきしらする。隨身シ舍人しと〳〵と列を亂さぬ鳥居前。賽の其所へ。地並木のしげみ主は誰レ共白ラ羽の尖矢。御車にあやまたずはつしと立テば乳母の聲。わつと叫ぶに驚ク川勝。走リ寄ッて翠簾引ちぎり見れば玉體恙もなし。抱キ傅奉る乳母のしがらみ朱に成ッて事切レたり。ハツト仰天川勝が。玉體抱き奉り四方へ吃度眼を配リ。詞アヽラ心得ぬ今の尖矢。正敷逆徒の奴等有ッて。君をしいし奉らんとは。恐ろし〳〵。ソレ仕丁共狩出せ畏つたと雜人原。並木のくま〴〵驅廻る。地川勝は天地を拜し。ハア有難き宮の御運。天照御神御力を添給ふか。神シ力おうごのなす所。ハア忝し〳〵と。地宮居の方を伏拜〳〵。悦びいさむ小かけより。地又も飛ビ來る尖矢の川勝が脇腹よりあばらをかけてはつと立。うんとはいへど大丈夫振リ返つて。邊りを見廻し。詞ヱヽ是程のへろ〳〵矢に命は捨ぬと。片手に若宮急所の痛手に屈せぬ老人。翠簾の出しきぬ引ちぎり。矢をかなぐつて疵の口しつかと引キしめ力足踏しめ〳〵一度ならず二度迄も。御運目出度若宮の命の長柄。片手押。さはがず。御所へと三重。

第三

行空の。地春も半に立チわたる。霞が外におぼろ敷。列々椿火をともす花も。木の芽も程々に。君が恵に青丹よし。寧樂の宮居の春の景。ながめにあかぬ風情なり。地聖德太子の御忌記念山背の宮の御舘。三輪明神へ御社參の御留守居迚。未明より川勝が嫡子秦ノ豊勝非常を。守り相詰る。地時しも如月、中空や。御簾の追イ風もて來るは。長地梅が薫か夫レならで衣の留木の。端手ならず。又じみならぬ御所風は、豊勝が妻浮橋。二人が中の久サ丸を。乳人に抱せ立出る。襠捌のつしりと。跡に從い官女達。料具花形御酒洗米。手々に捧ゲ座に直る。地浮橋はしとやかに。詞イヤノウ我ヵ夫マ。今日は日柄もよふ。三輪明神の神前シにて。神シ慮に任す御位定め。善か。悪かの注進はまだなけれ共大吉と。御鬮の上ヵるは知レた事。綾歌樣にも宮樣の。よいが上にもよかれかしと。明神樣へ御參詣、なをも神シ慮を仰ん爲。かよふに神の備へもの取ッしたゝめて候と。聞て豊勝打默き。詞ヲ、よくこそ心付たりし。きつと御鬮は大吉と思へどそこが天道次第。兎に角三輪の神シ力を。祈申スにしくはなしと。夫婦が合す拍手も。陰陽和合神ミ明の加被力祈る其折から。地さがれ〳〵と仕丁が割竹。打タれながらもいとひなく。おづおづ入來る二人の浪人。どふぞお願イ。詞イヤさがれ〳〵地とせちがう聲〳〵。ヤレかしましと立寄ル豊勝。見合す顔は。詞ヤ武成友成、ハ、、、、豊勝公にてましますかと。敬い白ラ砂にうづくまる。詞イヤ仕

丁共。此兩人には用事有リ皆立テ。地ノヽと追退け。詞ハレ珍らしや檜熊兄弟。願イとは何の子細。地物かたられよと尋れば。武成ハツト恐れ入リ。今更申スもくりことながら。我レ々が主人進中臣。過キ去リ給ひし聖徳太子様より。御預りの觀世音。武州淺草に一宇を建。金龍山淺草寺と號し。安置なすべき尊像を。奪取ラれし落度とて㊁勅勘の身と成リ。世を見限つて行衞知レず。其尊像を奪れしは。我レ々が父檜熊郡領腹切ッて相果たれど。地言譯立タぬ主人の落度。思ひまはせば廻す程。其殘念さ口惜さ。御察し下されよと兄が悔を引取ル友成。詞只今武成が申ス通り。失させ給ひし尊像を。兄にて候濱成諸共。所々方々と尋れど行衞知レざる御佛ケの再び出させ給ふ迄我レ々兄弟三人を。いか成ル罪にも行給ひ。主人中臣の勅勘を。何卒御赦免有ル樣に。禁庭への御取リ成シ地偏に願い奉ると。兄弟額を地に摺付ケ涙に。くれて願ふにぞ。豐勝大きにかんじ入。詞ハ、ア尤成ル兄弟が願い。こなたにても綾歌姫に。言號有ル中臣卿。中カ々疏略に存ぜざる故。潛に御行衞をさがせ共。今以有リ家も知レず。勿論勅勘の身と成リ給へば。假初ならぬ禁裏の御沙汰。若宮還御の其上にて。父川勝にも物語リよしなにはからひ申べし。地人目立テば返つてさまたげ先ッ今日は歸られよと。仰に少しは安堵の思ひ。詞なを此上にもお見捨なく。偏に願ひ奉る。仰に任せイザ退參。おさらば。さらばと兄弟は。すご〳〵。へ表へ出て行。地跡見おくつてイヤノウ浮橋。詞春の日あしもはや八つ過キ。宮姫君の今以。おかへりなきは心得ず。サレバイナ。最前から自も夫レが心かゝります。お迎ながらそこら迄。ヲ、某も其了簡と。地身づくろいする折こそ有。地姫君

の御ン輿添片タ息に成ッて立チ歸り。詞今日姫君三輪明神へ御參ン詣の其折から。面を隱せし曲者共。どつさ押込無法の狼藉。お供の面々皆ちり〴〵に迯失て。姫君のお行衞知レずさ。地聞てせき立ッ豐勝が。詞シテ〳〵お供の調子丸は。されば候調子丸。神主方に用有リ迯立チ越たるは夫レより以前ン。調子丸だに居合さば姫君様も御安體。地我等も天窓はぶたれじさ瘤をさすつて迯込メば。地聞人々は驚キの餘りの、事に詞も出ず。豐勝はつつ立上り。詞かゝる狼藉有ルからは。宮の御安ン否心元トなし。地イテ一ト走りさ欠出す折から。還御ぞふこしらせの間もなく。御庭先キへきしらす御車。乳母にかはつて川勝が。宮を守護して車より。おりる膝節がつくりは。痛手のわざさ知ラぬ嫁。詞ヲゝおしびれかあぶなやさ。地豐勝諸共いたはれ共。詞アゝいやしびれも切レ申さぬ。小石につまづ付キ。ついがつくりさ地いふもさぎれの聲音さいひ。父の顏色常ならぬは。唯事ならずさ豐勝がイヤ何親人ト。詞御供の行列ふ揃イさ言。殊更乳母の柵も見へぬは。いかにさ尋れば。ムゝ其しがらみは何ヲゝ夫レ々。持病の癪が指込ンで。神主方にしばらく養生。宮様にもおひもじからん。嫁女お乳さ抱かせ參らせ。詞コリヤ乳母。久サ丸は夫レへねせ付ケ次キへ立チ。官女達も休足有レさ地追立テやり。跡先キ見廻しコリヤ〳〵妢。ゆるかせならぬ大變有リ。某宮の供奉なし參らせ。三輪明神より還御有。宮の御車目當テにて。何國より共白羽の矢。天照神の御加護にや。矢先キはそれて御乳母。急所に當つてあへなき最期。ヤ何者のわざ成ルか詮義せんさ欠出す所に。口惜や又も飛ビくる尖矢。我ガ脇腹にまつ此ごさくさ。地上ハ着をぬげば流るゝ血汐。コハ何者の

仕業ぞと。驚ク豊勝浮橋が。ノウかなしやと欠寄ても聲立られぬないじやくり。詞ヤア泣てゐる所でなし。未練地〳〵と押退〳〵。詞何紛。姫君の御事聞イたか。ハア只今夫レと靑侍が注進。欠付て一トせんぎと踏出す所へ宮の還御。夫レ故しばし猶豫せり。地遠くは行じ曲者共。からめ取ッて父の敵。詞女房よきに御介抱と。言捨て欠出す。ヤレ待テ紛と呼留め。詞かゝる工みをする族。なにべん〳〵としておらん。取分ケて心へぬは。我手に入リしコレ此書翰と。地指出す一ッ通。取より早く押開き。詞何々。兼々御懇望の綾歌姫。今日三輪へ社參ンに付。則チ某供奉致せば。方便を以て御手に入レ申べく間。御人ン數御用意なさるべく候。名は記さね共見覺有ル。調子丸が此書翰。ヲ、サ成程。調子丸が手跡ながら。忠義一チ圖の彼レが性質。二タ心をいだく若者ならず。正敷姫君を奪し奴原。贋筆を以て調子丸に。罪を負せん計略と。心に納め歸りしと。地父が詞に眉をひそめ。詞仰の通り調子丸が日比の忠節。よもやとは思へ共。そこが下郎の淺ましさ。金銀に眼くれ。姫君を奪はせしと思ひ合する靑侍が注進。大切の御供先キ。神主方に所用有と其場をはづすは合點行カず。書翰と言樣子言イ。きやつが所爲に極つたりと。地聞て川勝じだんだふみ。詞日比より如在なき賴母敷キ若者。よもやと猶豫は我カ誤り。臍をかんでもかへらぬ後悔。詞姫君は女義と言。戀慕の者のわざと見ゆれば。お命には別條有ルまじ。地去ルにても天にも地にも。かけがへなき宮の御無難。まだしも此上の悅びぞや。詞佞人はびこる都の內。置奉るは危し〳〵。我レに替つて汝等夫婦。人知レぬ片山里へ一ト先供奉し奉り。時節を待ッて御位に卽奉るが良計

ぞや。サ、、、一寸ッも早く心せく早立退よとせき立川勝。地夫婦は夢共辨へず。詞コハ△がけなき御詞。父を見捨て我レ々夫婦何國へ立退キ申べき。存じも寄ラずといふを打消詞ヤア愚々。のぶかに射込し此尖矢。婆婆の名殘も今しばし。終焉ちかき某に。心殘さず疾落よ。イヱ〳〵縦どの様に仰有ルとても。大事の〳〵舅御様。地何と見捨ていかれませふせめて今はの際迄も。御介抱をと打伏て身も浮橋が血の涙。夫婦歎キにくれ〴〵も。落んず氣色はなかりけり。地川勝わざと聲荒らげ。詞ヤア不所存成ル汝が詞。君に仕へて親を忘るゝは。臣たる者の道成ルをうろたへたるたわけ者。末期カも近き某に。氣をもますが面白イか。是非に落ずば勘當ぞと。地するどき詞に豊勝が。涙に重き額を上ケ。コハ勿體なき御詞。成ル程仰に随つて。一ト先此場を落申さんと地いふにほやりと。詞ヲヽ出かした〳〵。嫁女も泣ずに早用意と。地せり立られて泣々も。夫婦が急の旅支度。今の今迄若宮の。御世にとこそは祈しに。かゝる事とは得ぞしらぬ。水の流と人トの身のせき留メられぬ夫婦が涙。用意そこ〳〵わか宮を。夫トが抱き。地浮橋は寢入ル久丸抱キ上て。しほ〳〵庭に。詞コレぼんち。祖父様へお暇乞をとゆり起され。イヤジヤ〳〵。かゝ様いやじや。祖父様だつことやんちや聲思ひ切ても川勝が。孫が寐覺に思はずも我レを忘れて椽先キへ。詞ヲヽ坊よ久丸よ。コリヤ此祖父はな。遠ひ所へ行程に。早ふ成人して。秦の家名を請ケ繼よ。さらば地〳〵と目に涙。辨へしらぬ久丸が。だつこ〳〵とせちがふて。泣ケばぽつちり目さます若宮。ゆふりすかして豊勝が。君故心をつくす父。せめて此世のお暇乞と。教へ申せばぐはんせ

なく。いたいけ盛リの手を上て。さらばよ。〳〵は主従が此世のさらば。川勝が肉もとろくる有難なみだ。詞御運全ふまし〳〵て。追付御世に出給ふを。草葉のかげより悦ばん。時刻うつれば早落よ。〳〵〳〵。地と落入ル聲音。是今ンン生の。別れぞと五體を絞る。うき涙一ト足。行ては振歸り。二足行ては。立戻り。見歸る夫婦。川勝が。影見ゆる迄延上り。見送り見歸り出て行。詞コリヤ宮様の御事を。くれ〴〵も大事にせよ。賴ム。地〳〵と死る今はの際迄も。忠義に砕く心の涙。詞ア、モヲいたか。習はぬ旅に足弱連レ。急いで道で怪我するなよ。アおいとしや若宮様。畢竟御幼稚なればこそ。御歎キもましまさね。地賴みすくなき世の中に。何國の誰をあてど共。行衛定メぬ御身の上。夫婦の者の心遣イ。嘸や苦勞に身も勞れん。不便ンの者やと。跡先キを思ひ廻せば胸せまり。覺へずわつと聲立テて。こたへ〳〵し溜涙。深山の奥の雪解てみなぎり。へ落るごとくなり。地永き日も。早暮近カく。胸もくらやみ調子丸。息もすた〳〵立戻り。詞ヤアそこにおはすは川勝公にてましますか。何故に其深手と。いはせも果ず。詞ヤア待ッて居た調子丸。牛におとりし牛飼の人ン畜生天罰思ひ知ラさんと。地いふもいら立川勝が。無念ンにこつたるするどき太刀筋。無刀のあしらい調子丸。ヤレ待チ給へも聞カばこそ。あばらをかけて肩先キよりばらりずんと切下られ。ウントのめるをたゝみかけ。ふみ込〳〵數ケ所の深手。ヤレしばらくお赦し有レといふもいはさず付ケ廻ハされ。是非に及ばず調子丸。一ト腰投出し兩手を上。詞ヤア筋によつては一命をさら〳〵おしむ某ならず。何故の御手討子細をお聞せ下されよと。地いふ顏ハッタト怒り

の面色。詞ヤア何故とはしら〴〵しい。サア何奴に頼まれて姫君を盗せた。眞直に白狀せよと。地たぶさを取ッて捻伏れど。身に覺へなき調子丸。コハ情なき御詞。姫君を奪はれしはいかにも拙者が落度なれ共。佞人ン原に頼まれしとは何を以の御一言。ヤアいふな〳〵。汝が佞人ン合體は證跡有ッて能ク知ッたり。ムヽ其せうことは。ホヽヲ左程潔白成ル調子丸。佞人原へ内イ通の。此一ッ通はなぜ書たと。地投出す書翰押開き。讀も終らず仰天し。詞ムヽ我カ手に見まかふ此贋筆。是にて思ひ合せたる某が身の申譯。地一ト通り御聞キ有レ。詞今日姫の御供なし。三輪の社へまふずる折リしも神ン主方よりコレ此一ッ通。手跡はまがはぬ川勝公。何か御用の子細有。神主方へ參るべしと見覺有ル御直筆。取ル物も取リあへず神主方へ立越れば。跡方もなき僞り事。コハ心へずと立チ戻れば。早姫君はましまさず。南無三寶と心も空そこよ、爰よと尋れ共。かいくれ見へさせ給はぬ故。地生頬さげてかへりしは委細の譯を申上。腹かつさばかん拙者が覺悟。詞我筆跡に贋たる。此一ッ通を見るに付ヶ扨は。川勝公の書翰といひしも曲者共の仕業かと。地聞より川勝。詞ヤア〳〵ナヽ何といふ。スリヤ神主方へ參るべしと我カ手を寫す此一ッ通扨は。〳〵と地兩人が手に取リ上て無念の吐息。詞エヽ仕なしたり〳〵。誤つて疑ふ時は。人と倶に亡ぶとかや。我手に入リし其密書僞筆の程も計リがたしと。一應決着せざりしかど。其場をはづすは二タ心と。思ひ込ンだは川勝が一ッ生の誤リぞや。地あつたら敷キ若者をむざ〳〵殺す殘ン念さよと。悔歎けば摺寄て。詞スリヤお疑い晴レましたか。ハア嬉しや忝や。ヲヽ我レも宮の供なし。歸りもふしの

其折リから。相イ手は知レぬ二つの矢。乳母といひ我カ脇腹。ム、夫レで聞ゴへし御痛手。シテ宮様のお行衛は。ヲ、夥夫婦に御供させ。とくに落し參らせたり。ハ、ア御尤成ル御分ン別ッ。若宮の御安ン泰。せめて今はの。悦びぞや。地サハ去リながら川勝公。今御最期有ル時は世は常闇の天が下。萬民の歎キいか計リ。取リ分ケていたはしき宮姫君の御身の末。何と成リ行キ給ふべき。國柱の川勝公すくふ醫療はなき事か。耆婆扁鵲が藥もがなと。歎きも切成ル忠義の詞。川勝涙にかきくれて。詞イヤ／＼我は老人といひ。所詮遁れぬ急所の痛手。存ン命イ思ひも寄ず。かへす／＼も某が。思慮薄き老の一徹。地花の盛リの調子丸。末賴み有ルわか者を。討ッたる我レは天下の科人ン。サア存ン分に切リさいなみ。せめて恨を晴シてたべ。詞ヤレ勿體なし某こそ。有ルに甲斐なき牛飼づれ。冥加にあまる御詞。地死出の山道。三ン途の川瀨御供し。せめて御恩を報ぜんと。いふも苦敷キ息遣い。地去ルにても川勝公。詞我レ々をたばかりて。斯迄不覺を取ラせしは。ヲ、並々ならぬ反間の謀。たばかられたる口惜さよ。地そも何者の所爲成ルぞとうめきのゝしる後ロの方。詞ヲ、其曲者爰に有。尊顏拜し奉れと。御簾引キちぎつて蝦夷の大臣傍を。にらんでつつ立ッたり。地兩人血走る眼を見開き。詞ヤア扨は是迄忠臣無二と見せかけしは。天下を望謀計成ルよな。ハ、、、、田氏たらんと狐鳴して民の心をまどはせしは。毛唐人のまどろひ計略。夫レよりは近道に。金銭を以て心をとらかし。町人ン百性はいふに及ばず。公家武家迄も大半味方。けふ小びつちよめを一ト矢にてと。思ふ矢先キはそれたれど。二の矢ははづれぬ脩が胸板。へ、、、悔し

いか〳〵。もがいてもモウ叶はぬ。コリヤ牛飼の素丁稚め。儕レが供した綾歌は。まろが后に立ん爲。まつた一ト色の拵へ狀は。儕等二人同士討させん我ヵ計略。一ッぱいくらつてよいざま〳〵。序に宮めを捻り殺さんと來りしに。思ひの外先キへ廻つて。豐勝めが連レて退しは殘ン念なれど。我勢を以尋出さんは。袋の鼠籠の鳥。ナント肝が潰れたかと。地初てあかす謀計は。往昔守屋大臣に遙上越ス。逆臣也。地聞ヶ兩人ンは無念の齒がみ。詞エ、たばかられしか奇怪や。かゝる佞人と知ルならば。とくに仕樣も有ルべきに。今更いふて詮なき事。地強惡ク不敵の蝦夷大臣。思ひしれやと詰寄ればかんらハ、、、からと笑い。詞べら坊共がもがく〳〵。是より不日ッに旗上して。帝を取ッて押込メ。我レ一ッ天の主と成。人王三十五代の帝蝦夷天王。一ッ天萬乘の高御座に押上る此尊體。切ラれたいがマアならぬ。馬鹿つくすなとあざ笑ふ。詞ヤア聞ヶば聞ク程悒雜言。王位を犯す叛逆人ン。地觀念せよと切リ付るを。はつしと蹴倒す早足の蝦夷。川勝すかさず打かくる。刄をもぎつて切リ下られ。無念〳〵のもだへ死。其間に起たつ調子丸。切ッてかゝるをひつはづし。よろぼふ所を踏倒し。起しも立テず留めの刀。哀れはかなき二人が最期無慚。成リける次第也。地蝦夷はゑつぼに入相の兼て用意の家來共。召シの黑駒引立させ。先キにすゝんで土師の連。イサ。御歸舘と椽先キに。馬引直せば。地其儘ひらりと馬の脊も。たはむ計リに打またがり。四つの蹄に四夷八荒。ふみしたがへん手始メ吉いそふれヤツト追立テていさみ。すゝんで立歸る。地館の騷動聞よりも。取ッてかへす武成リ。友成欠込ム書院に二

人の死骸。詞ヤア川勝公には早御最期。地願の綱も切レ果しと兄弟白洲にどうど伏しばし。涙にむせびしが。地思ひ直してイヤ何弟。詞今更悔で甲斐なき事。地一ト先此場を立さつて濱成殿に談合し。時節を待タん尤と。立歸らんとする所へ。地蝦夷が家の子久留嶋團六。大勢引キ連レどつと込ミ入。ヤア／＼者共舘の奴原皆殺しと。我カ君の御差圖。手柄は仕勝働けと。地下知に從ひ荒しこ共。欠入ル先キに兄弟が。立チふさがつてどつこいどこい。蝦夷が家來と聞クからは。川勝公の追善供養。弟合點か。合點と尻引ッからげて二王立。團六いらつて。ヤア靑嘴も切ぬ毛二歲が。支だてとは片はら／＼。ふるいやつだが家來共。かたつはしから打て取レ。地畏つたと無二無三。得物／＼を引ッ提／＼。打てかゝるを渡り合。火花をちらして三重へ戰ふたり。地强力キ無双の兄弟が。神變ふしぎの働キに叶ぬ赦せと皆ちり／＼。こらへ兼て團六が。切ッてかゝるを踏倒し。詞足は武成手は友成エイヤ／＼と引ク力に。地胴よりさつと引キ切て。完爾と笑つて立たりしは。凡人業とは見へざりける。地こそはり成ルかな末の世に神と崇る兄弟が。踏出す足音どう／＼。友成龍の勢ひ有レば。武成虎の勇猛力。御所をにらんではら／＼／＼と流すなみだは誠なり。死行秦の川勝は適君に忠義なり。舍人が最期はむざんなり。二人は。古今の勇士なりと貴賤上下おしなべてかんせぬ。ものこそなかりけり。

第四

地苟も義を後にして利を先とせば。奪ずんば饜ずと孟子の金ン言宜かな。蘇我大臣蝦夷公王位を奪ふ謀叛の企。一天四海を一ト呑と我慢の鼻も高ヵ圓山。岨陰に幔幕打タせ。金巾子の冠衮龍の御衣。天子にかはらぬ其出立。雲に羽をのす両翅。阿曇ノ雲貫土師連。其外一チ味徒黨の公卿。所せき迄居ならんで廻る。盃酒の海うたてかゝりける催しなり。地大臣寛々と左右を見廻し。詞當今推古天皇をぼつくだし。我レ天ン子の位に即んと兼てより望しかど。聖徳太子進中臣なんど佛法を以人をなづけ。我ヵ大望の妨と成ル故。是非なく是迄猶豫せしが、聖徳太子が死だを幸イ。中臣めが預りし閻浮檀金の觀音の像。先キ達て忍びを入て盜ミ取ラせ。中臣を科に落し勅勘の身となしたれ共、地太子が小紛レ山背宮を守リ立。當今の太子に立チ御位を讓らんと。秦ノ川勝調子丸なんど。邪魔に成ル奴原方便を以て殺し。山背の宮中臣なんど行キがたさへも知レず誰憚る者もなく。詞謀反一チ味の連判をなさん爲。今日是へ招いたり。地ソレ〳〵と有リければ。畏て土師連一トつの箱を携出。蓋を開いて取リ出すは。傍も輝く觀世音。手に携て詞コレ見られよ。是こそは先キ達て太子中臣相談し。武州豐嶋郡淺草村に安ン置せんと謀たる。閻浮檀金の觀世音。我ヵ君密奪取リ置れしが。今日謀反一味の連ばん。熊野の牛王も若輩らしく。湯起請も古ければ。彌佛ッ法に寄依せず。太子方へ心を寄セぬといふ證據の爲。此佛ヶを足にかけ踏せん爲に持參ンせり。何れも是をふみ給はんや。但し御辭退有ルべきやいかに。〳〵と有リければ。地皆一同に詞を揃へ、詞姥かゝたらしの佛ヶの教へ固信ずるにたらざれば。觀音も塊同然。是を踏んに何の事と。地事

もなげ成ル顔色に。蝦夷ほく〳〵打默き。詞ム、其詞を聞クからは踏ずするにも及ばね共。假初ならぬ大義の企。心をためすが第一なれば。我ガ目の前で踏せて見んソレ〳〵地といふ所へ。取リ次の諸大夫罷出。詞佐伯の國村參上せり通し申さんやと伺へば。地大臣眉に皺を寄。詞ヤア旁〳〵。其佐伯の國村は我普代の家來なれ共。日比片意地成ル生れ付。やゝもすれば仁義立テ。此度の謀反きやつに知ラさば諫るは必定と。是迄色にも出さゞれ共。地頓にけどりしと覺ゆれば。今日の連判を聞付ケ異見シに來りしに違イなし。詞コリヤ〳〵雲貫。ソレゐいかげんに云イ紛らして追返せと。地流石底氣味惡工み。雲貫かぶり打振て。詞コハ我君の御諚ながら。譬普代の御家來にもせよ。心合ねば御大望の妨。是へ呼寄セ心シ底をさぐり見て彌御心に背くならば軍の血祭り。打殺すが近道と。地詞の尾に付ク土師ノ連。詞コハ尤成雲貫の御計ひ。御主人の御心に背國村。御招もなきに參りしは。御推量の通りちんぷんかんの長カ談義。諫言せん爲來つたと覺へたり。しよせん邪魔な國村。某參り三寸繩にくゝし上。御前シへ引ツ立申べし。地ゐぎに及ばゝ討ッてすてん者共。つゞけと先キに立チ。砂ふみ蹴立テ。かけり行。地蝦夷跡を打チ詠め。詞コリヤコリヤ雲貫。追付ヶ國村參るべし。其方は爰に有ッて。渠めが心シ底虛實を伺ひ。いよ〳〵一味同心シならずば。只一ト刀に打てすてよ。隨分シぬかるな油斷すな。地汝等はしばらく休足仕れと。差圖に隨ひ一チ味の銘々幕の内へぞ入リにける。地程もあらせず。佐伯眞人國村。長カ袴の裾ふみしたし折目。正敷ク入リ來れば。地連が下知に荒しこどもばら〳〵と追ッ取リ卷キ。とつたとかゝるをじろりと見やり。詞ハテ心へ

ぬ。何故に此國村。繩かゝる覺へなし。扣へられよと突キはなし。さあらぬ體に行キ過る。地又もとつたと組付を。右手左手へ取ッて投。なをもしづ〱打チ通り。御座を見るよりハ、、、ハツト計リ恐れ入て。ひれ伏セは地蝦夷はわざとやはらかに。詞ぎやう〱しい皆引〱。ム、國村。わざ共呼ヒ寄んと思ひし所能ぞ來りし太義〱。地サ、是へ。〱と差招き。詞我兼々大望を思ひ立ッ。幸イけふは日柄もよければ。一ッ天萬乘の位に卽んとコレ見よ。天子に替らぬ此出立チ其方は何とか思ふ。サ所存の程をいへ聞んと裏問詞國村は猶もひれ伏手をつかへ。詞コハ新しき御諚かな。君に仕ゆる家來の身で。御主人の御出世を歡ばざる者や候べき。君天子の御位に卽キ給ふは。此上もなき御悅び。恐悅至極に存奉り候と。地何氣もなく相のぶる。案ンに相異の雲貫は横合よりしやゝり出。詞イヤコレ國村。座なりの間に合いはず共。心ン底殘らず有樣に申上られよと。地いふ顏尻目に打チ詠め。詞コハ雲つら殿のお詞共存ぜぬ。國村は武士でござるぞ。生れて以來座なりの間に合イ追從申た覺はなし。心ン底を殘りなく有リ樣にいへなんどとはそりや貴人匹夫の詞武士の上には入ぬ事ハ、、、地と苦笑ひ。一本ンさゝれて引込雲貫。大臣詞をあららげ。詞ヤア國村。汝常々書籍を好キ。道立テする所存ンにて我謀反と聞クならば唐の大和の引キ事にて嘸諫んと存の外。上ハぬんめりの間に合イ。ヤ其手はくはぬ。サア汝が腸を洗い本ン心を顯はせと。地烈敷キ詞ちつ共動せず。詞コハ存ジ寄ラざる御疑。和漢の書籍に眼を晒し。仁義を守る此國村故此度の思し召立。恐悅至極と申上奉りましてござる。彼般紂王無道なりしかば周の武王こ

れをうつ。臣下の身として主君ンを討ッは非道には似たれ共。其例なきにしもあらず。當今推古天皇。聖德太子がすゝめによつて佛法を歸依し。日本神國の敎をなみす。其無道の天子をぼつ下タし。君萬乘の大床に座し。天下の 政を取リ行イ。太平の世となし給はんは文武の敎へ聖人の道なるを。理にくらき輩の非道と思ひ猶豫するは彼。伯夷叔齊が首陽の下タに饑たりし。大海を耳かきではかるイヤモ少さい了簡腹の皮ハ、、、、地 とあざけり笑ふ。懸河の辯舌。大臣雲貫口あんごり。顏と顏とを見合せて。しばしあきれて。居たりしが。詞 ナント聞たか雲貫。申ス詞に僞りもなさそうな。ハ、アいかにもさやう。馬には乘て見よ人には添て見よと申通り。仁義立テする腐學者。役に立ずの國村と思ひの外成ル掘出し。一味連判に加へしかるべうと相のぶれば。ヲ、我も滿足皆の者にも引合せあれにて一ッ献イサ來れと。地 寛々として大臣は二人を。へ引キ連。入にけり。地 時もこそ有レ雲貫が郎等栗隈軍次。繩網かけし乘物釣らせ息を切ッて欠來り。旦那〳〵と呼聲に。立出る阿曇の雲貫。詞 ヲ、軍治首尾は何ンとじや。されば候綾歌姫。去ル三輪の騷動の砌リ。姒が介抱にて都を落延ヒ。父聖德太子の所緣有ル攝津の國天王寺社家の方に忍び居るよし承り。踏込ンで奪取リアノ乘物へ連レ來り候と。地 聞て雲貫大きに悅び。詞 ホ、手柄〳〵。嘸我ヵ君の御 歡 褒美は追ッて御沙汰有ラん。休足せよと追ッ立やり。地 イテ我君へ申上んと。行んとする幕の內より立出る蝦夷大臣。詞 ホ、戀こがれた姫が來たとな。早く逢たい是へ〳〵。地 ハツトいらへて雲貫が掛し繩網てつとり早く。駕の戸明クれば轉び出。何のわかちも夢現。あやめも

知ッぬ綾歌姫泣より。外の事ぞなき。地 蝦夷つれ〳〵と打チ守り。詞 ホヽ、兼て美人と聞キ及び。見ぬ戀にあこがれた綾歌姫。テモ扨も見事〳〵我レ萬乘の位に卽共定マれる后もなし。そちは聖德太子が娘なれば。筋目と云器量と云。后に立チて不足なし。今日より寐屋の伽。サア〳〵爰へと摺リ寄て。地 無理に手を取リ引キ寄る。かなしさこはさおづ〳〵と。身も振はれて後じさり。地 自ラは中臣様に。親々からの言イ号。外の人になびいては。女の道に背くといひ。殿様に逢ッて言イ譯立ず。どうぞ赦して中臣様の。おはする所へやつて下されコレ。情じや。慈悲じやと手を合せ。わつと計に泣叫ぶ。詞 ムヽ、何じや。云イ号の中臣に逢たいさな。コリヤヤイ。中臣めは觀音を失ふて。禁庭へ言イ譯立タず勅勘の身と成。行衞知レずの宿なし。大方乞食に成ッて居るか。但しはどこぞでくたばつたか。世になし者を慕んより。おれになびけばお后様。日本ンの國の女の司コレ。氣をもませずとサア〳〵寐間へ 地 手入ラずの初ッ物七十五日身の祈禱。我らもどうやら武者震ひ。詞 コリヤ雲貫、氣轉をきかして寐所の用意。どうもならぬと 地 しなだるゝは。雨にしほれし萩の花。敷イて臥猪の床の內思ひやるさへ。いた〳〵し。姫は正體なき倒れ。浮世の中に住ム人の數も限りもなけれ共。有ルが中にも自ラ程。かなしい物はよもあらじ。二親にはおくれ參らせ。云イ号の我ッ夫はお行衞知レず剩。詞 賴みに思ふ川勝や。調子丸はあへない最期 地 弟宮には生キ別れ。便りなぎさの捨小船。よる方もなき身の上を。哀レと思ひ見赦して。中臣様に逢して下され。いか成うき目に。あふ迚も靡事はいやじや〳〵。いやじや〳〵とすきを見て。迯んとするを引

捕へ。詞ヤしぶとい女﨟め。天下を奪ふ蝦夷が勢。空飛鳥もにらみ落す。こしやくな道立テ。詞を背き是非。否とぬかしや切リ殺す。サア〳〵どふじやと。地短氣短ン慮の亂れ燒。じりゝ〳〵と付ケ廻され。詞アレへ。〳〵地と逃廻るを。追詰〳〵。詞サア靡か。ヱ、。但しいやか。ヱ、サ。どふじや〳〵とひらめく刄。姫は心もきへ入ル思ひ。詞どんな責に合ふとても。なびく事はいやじや〳〵。死ンで仕舞へば中臣様へ言ィ譯立。いつそ殺して下さんせ。ヲ、望ミに任せ一ト討と。振上る刀の腕首。詞ヤア國村。様子も知ラずなぜ留た。ハアイヤ。あれにて委細承はる。此姫を殺されんとは。憚りながら我君の御麁相かと存じ奉ります。ヤア我心に隨はざる女。殺すが麁相か誤か。ハアイヤ。御麁相と申はそこの事。拙者めは又意地強く。なびかぬ女が面白ク。うまみが有ルかと存ます。ヤア言ハせて置ケば種々のたはこと。なびかぬ女が面白ィとは。蝦夷をなぶるか嘲弄するか。ハアコハ恐れ多き御一チ言。靡かぬが面白ィと申ス譯は。さはらば落ん玉笹の霰。どなたでもござれ〳〵心よしは餘なし子を産むとやら。俗に申ス助べいは靡かせて面白ロからず。此姫君は言ィ号けでまだ。寐ぬ男に心ン中立は。イヤモ女のきつすい戀の氏神。なびかせてお手に入ラば。今いや〳〵とはる意地が。外へ廻つてこつちのうまみ。爰を口説が戀のこんたん。夫レ共お世話なしにアイ〳〵と。御意に隨ふがお好キならば。モ世に澤山な君傾城。ころび藝者を。召シ寄セられて事相濟。御麁相と申せし國村めが誤か地と花も實も有詞にぎつちり。詞ム、そういへば聞へたが。此女は中臣に云ィ号。主シ有女に不義放埒。決て御無用なぞと サ意見ンしそうな

其方が。我にすゝむる心ン底は。ハア此姫は聖德太子の姫君。王位を出て遠からね共。人臣の中臣へ言イ号せし其譯は。佛ッ法好キの信心仲間。太子の物好キ禁庭へ。申立ての云イ号。然るに中臣。觀音をうしなふて勅勘の身と成。天上の札削られ行衞知レねばサ死だも同前。いはゞ主シなきやもめ女。后キに立て苦しからず。此國村にお預有ラば姫君を。口說落してお手に入んと。地いふをさし出る阿曇雲貫。詞イヤそりや成ラぬ。御自分ンが內方は秦ノ川勝が娘にて。此姫が家來なれば。女房の內イ緣罷リならぬ。ハヽヽヽ女房の緣に引カれ。君の大事を麁略にする。國村ではござらぬと。地二人が爭ひ蝦夷は目くばせソレ觀音。ヲット心へ雲貫が以前の佛像差出せば。詞サア國村。申ス詞に僞りなくば。此觀音を足にかけ。踏で見よと手詰の詞。何の猶豫も立寄てさん〴〵に踏にぢり。詞いま〳〵しい此佛像。見るも穢れと引掴み、谷底深く。投込メば地蝦夷ほく〳〵打點き。詞疑イ晴レた。此上は。姫を汝に預ケるぞ。口說落して我手に入レよ。けふの參ン會是迄〳〵。地いざ歸らんと立出れば。御立ぞふと呼ばる聲。連を始メ一味の公卿。前ン後左右を取巻て。步路を。たどり立歸る。地御跡見送り國村は。詞家來參れ地と呼出し。姫君の御手を取リ我乘リ物へ乘參らせ。立歸らんとする所に。不思義や以前の谷底より。パットかゞやく光明に。國村は急度目を付。詞アヽラ不思義や。最前捨たる觀音の尊像より。アレ〳〵〳〵。光明の輝は。アラ〳〵ふしぎと地兩手を組まだたきもせず守り居る。猶も光明かゞやきて。觀世音の尊像は東マをさして飛去レば。地身の毛もよだつてさしもの國村。正法に奇特なしとは聞キつれど。目前かゝ

る奇瑞を見る事ア、ラ。恐しやとこくうに目を付忙然。として詠め居る。地小蔭に隠れし栗隈軍次踊出。詞イデ観音を追ッ欠て。落る所を見届んと勢ィ込で欠出すを。國村すかさず小柄の手裏劍。詞乗物ヤレ

第五

地奈良の都の八重一ト重實九重の。花盛見越シの。木々も年經てわざと。ならざる枝ぶりは。心床しき一構へ佐伯眞人國村が舘には。綾歌姫を預りてお氣の結ぼれ御病氣の出もやせんと様々にいたり傅き参らする。心遣いぞ頼もしき。地御用の隙を樂しみに心に苦のない婢共。一トつ所へ寄リ集り。詞ナント思やる皆の衆。どんな内でも長ふ勤りやあらの見へる物なれど。こなたの様に旦那様奥様のお氣が揃ふて。情ヶ深いけつこふな御夫婦中の睦まじいは。どつこにもありやせまい。ヲイノ。似た者が女夫に成ルといふて。梅に鶯牡丹に蝶。柳に燕卯の花に子規お定の取リ合セ。アイヤ〳〵。そふもいはれぬぞや。アノ美しいお姫様に。蝦夷様が惚るとは不相應な事でないかいの。ア、イヱ〳〵あれも繪に有ル事。まだ手入ラずのお姫様の。地牡丹の莟を念ジかける獅子鼻の蝦夷様。柳に梟梅に烏。アノ鼻でつゝいたら今で流行の玄伯様の。膏薬もらはざ成ルまい。わしらが様な不自由な身でも。あんな男はいやじや〳〵。詞そんならいつそ雲貫様に仕やらぬか。ヱ、めつそうな。しかみ火鉢が鞆れると。一度に

どつと打笑ふ。地 そこかほり來る、衣の香や。國村が妻の曙。しとやかに立出。詞 ヲ、皆の者わざ〳〵と。浮世咄しも姫君のお慰みによかろふが。誰レぞおそばへ居てゐるかや。アイ。さつきにお姫樣の御意遊ばしますは。お經を書寫す其内は氣が散レば惡い。皆次キへいて休めとおつしやつてヾござりますヲ、マお氣のつきるにと。地 言イつゝ襖押開けば。囚の身の置キ所。定めなき世の飛鳥川きのふに、かはる經机。寫すは普門凡人の。御種ならぬ綾歌姫。時の不肖に命毛も切るゝ。計の物思ひ。詞 コレノゥ曙。毎日毎夜の心遣イ。川勝が娘のそなたなれ共。夫トに隨ふは女の道。今は蝦夷が譜代の家來。國村の妻なれば分ヶ隔も有ルべきを。昔のよしみと自を身にかへての世話苦勞。ヲ、嬉しいぞや。地 川勝が死にやつてよりちり〳〵の身の上。中臣樣のお行衛を。尋る事は扨置。詞 そなたの弟豐勝夫婦は。弟宮を作ひ都を立チ退し。行衛も知レず。そなたも又父にはおくれ。弟には生キ別れ。心にあまるかなしみを。自ラに氣を落さすまいと。歎を隱す心根が。一倍いとしい〳〵と身を知ル雨に御袖を絞り。給へば諸共に。胸迄せきくる涙をば。呑ミ込〳〵。詞 ホ、、、。又お姫樣のきな〳〵とおむつかり。有爲轉變の世のならい。跡先キをくよ〳〵と御案じ遊ばし。大事のお身に御病氣でも出れば惡い。幸イ夫トも出仕の留守何をがなお慰さ。今洛中で專ら流行。浮世藝者やおかしい物賣リ。御覽に入レよと申付ヶて置キました。サア〳〵女共。用意が能ヮば是へ通せと。地 差圖にざはつく婢婢襖。立テ切御簾おろす上を下へと立騷ぐ。地 程なく入リ來る切リ戸口、鉦打ならし二人連。拍子とり〳〵噂の飴賣リ。形リも揃への聲高

く。歌 扨若ィ衆の色通ひ。紋日日柄とくる珠數の。藝者女郎を買集。ひく三味の。わけもしらはのあどけなくびんしやん。すねてひぞる程かはいだア。かはいだアかはいだ。扨當世の立テ者は。仲藏幸四郎三津五郎。又坂東のきゝ者は。時キに大谷友右衛門。最負市川團十は。木場についでの親父分。其くせ年は若いだ。わかいだ〳〵。詞 サア〳〵御買ィなされ名物飴。女中方のお上リなされて紅かねのはげぬ事。又おなかへ入て其鹽梅。すいた男と雨の夜にしつぽり抱カれてゐた心地。御召な地 されとしやべりける。地 次へ出るはだいなしの。奴姿に挾箱京より來る與勘平膏藥。奈良の都は漸と。此頃爰にしのだなる〳〵社へあゆみをはこびて。七日なん〳〵なゝよさ、ざいもくにけつまづかずに。むさい物ふまずに。ヤレコリヤ錢やろきたないお方と地 なんよへ。詞 ハ、〳〵此踊お望みなら添へまするが與勘平。先ッ功能をしらないか。聞クべいだかいふべいか。ねぶとやはれ物。肩や腰の痛む所へ張たら與勘平。みぢんもいつわり。ナイ〳〵〳〵と。地 かつつくばふ。地 甚タ興に入ラせ給へば奴共はざは〳〵と。詞 ヲ、どれ〳〵も太義〳〵。御褒美御酒はお次キで下さる。地 サア〳〵こちへと案ン内に連レ。皆々一ト間へ入にける。地 程なく旦那お歸りと呼次クこゑに妻の曙。娵引キ連レ出向ふ。佐伯の眞ン人國村は。日々の出仕も事繁く。漸御前の申の刻日闌て歸る上下も行義。正敷我家の内。詞 奥。留守に替る事もなく歌君も御機嫌よいか。ハアお留守の内お姫様さま〴〵御慰め申ても。固うき〳〵共遊ばさず。お前へはいつ〳〵より遲いお歸り。御前ンの様子氣遣はしう存じます。サレハ〳〵。戀はしあんの外とやら。主人蝦夷公姬

君に戀慕深く。是非口說落せよとけふもかはらず阿曇の雲貫。追付ヶ口說に見へる笑。若靡ずば今日中。首討ッて立チかへれよとの嚴敷仰と。地聞ィて驚ク女房が。詞スリヤアノお姬樣の御命。ヤアめろ〳〵と未練の落淚。とくと奥にて云聞さん。イサ。地〳〵來れと打連て常の。居間へぞ入にける。人なき折を幸ィとうそ〳〵伺ふかうやく賣。廣庭傳ひ前栽の。蔭に身を寄セ忍び足息を。詰メたる落椽先。心を配リ氣を配る。地一ト間の内に主の聲。詞御得心なき上は是非に及ばず。姬君の御首討奉らんと。地聞て恟り。詞ヤ何姬君の御首とや。夫レでは折角心を盡し。忍び入たる甲斐もなし。一ト間へ踏込ミ命限り。イヤ〳〵。せいては事を仕損ぜん。とくと樣子を伺んと。地鯉口くつろげ身を堅め。差足拔キ足猶奥深く。忍び行。地思ひがけなき後ロより。下郎め待テと呼かけられ。ハツト驚キふり返れば。すつくと立ッたる主の國村。すかさぬ氣轉のかう藥賣。詞ねぶとやはれ物に付ヶたら與勘平。我らも早く歸つたが。與勘平と言捨て立出る。詞武成待テと地いふに恟り振返りしが。詞ハヽヽヽハレヤレ〳〵。ヤモ聞なれぬ名に恟り。何の事だとつぶやきて又立出る。詞ヤア〳〵進中臣が家來檜熊の郡領が躮。武州淺草にて人となりし檜熊の次郎武成。地遁んとは卑怯者と。地聲かけられて武成。つか〳〵と立歸り。詞主人中臣卿に言号の姬君を。奪取んと姿をやつし入リ込しに。斯見顯はされし上からは絕對絕命。サア尋常に姬君を渡すか。異義に及はヾ撫切リと反打て詰かゝれば。ハヽヽヽ此國村が預りの綾歌姬。汝ごときが奪取んとは猫の額に有ル物を。鼴鼠が念ジがける。身の程知ラぬ大膽者。ヤ及ばぬ望み腹の皮。追

付首討姫が死骸。望ミならばとらせんと。地あく迄雜言たまり兼。椽先へ欠上り。地たゝみかけて切ッ付るを。心得たりと手練のあしらい。なんなく刄物打チ落し。取ッて引伏用意の早繩高手小手無念〳〵と歯がみをなせば。詞下郎めがいはれぬ手向ィ。コリヤ追付ヶ姫はナ。此世の暇。ヤ儕レも冥途の供させんと地繩付キ宙に引ッ立て一ト間のへ内へぞ入にける。地時しも表テ騒敷ク入來る阿曇の雲貫上使のけんぺいのつさ〳〵いかつ。がましく打通り。詞ヤア毎日〳〵來ると思ひ出向ひもせぬ眞ン人國村。上使を安あしらふなと地わめきちらするこなたより一ト間の障子曙が。ほろ醉きげんの千鳥足銚子盃キ携へ出。詞コレハア〳〵雲貫樣。御役目とは申ながら毎日〳〵御苦勞樣。ア、イヤ是奥方。苦勞は身共がやくめ。姫を預カる國村上使の來るになぜ出ませぬ。近カ比ぶ躾千萬と地役目を甲にきめ付れば。詞ホ、、、其御咎は御尤。夫トも毎日の出ッ仕いつ迚もさがりは遲く。どふやらコウ勞た樣に見へます故マア酒一つさすゝめても。いや〳〵大事の御用が有ル。よしにせうの呑ムまいのと。モウ〳〵生れ付の堅くろしさ。命が有ッての御奉公でござんすと。私が酌で無理無體地寐酒一トつに和らいで。詞そんならそなた一トつ呑みやちよつと押へを間ィの手をしめて其儘轉び寐の。詞ホ、、、。本ッにあられもない事迄。お咄し申スも雲貫樣。御心安いに何事も。お赦しなされてお前もマア。お氣ばらしに酒一トつとほのめかしたるほろ醉のきげん上戸と見へにけり。詞ア、コレサコレ。酒所ではござらぬ。主人蝦夷公の御心かけられし綾歌姫。口說落して手に入レよと太切の役目承リ張良陳平が智惠をふるひ。毎日〳〵口說て見れ共合

點せぬ情張娘此云貫が足は摺子木。旦那殿は摺鉢程な目をむき出し。是非けふ中に合点せずばくび討ッて立歸れとの仰。今日が絶體絶命。手短に口説ィて見んと。地立上るを押留メ。詞ヤモそふ氣短におつしやつては色事は出來ませぬ。本ンにマアお前は。生れて色事といふ事を。なされた事はないそふな。ヤコレ奥方。餘り人を茶になされな。拙者迚も岩木ならねば。色事も存しておる。毎晩宿で女房共を抱て寐申ス。ホヽヽ内方の奥様か。そりやお定リの御夫婦中。朝夕の御膳も同前ン色事とは申されませぬ女郎藝子後家娘。妼婢囲ひ者。互ィに思ひ思はれて忍び合のが本の色事。其下地の稽古がなふて。アノ生娘のお姫様。口説落そふと思し召スは。憚リながら少ト御麁相と存じまする。ムヽ。コリヤ餘程六ケ敷ィ物でござるノ成程身共も折リ々の付ャ合ィに女郎を求めに參つてもいつ迚もふられまする。又宿元トの召使ィに小見めのよいやつが有レば。湯殿や人の見ぬ所でちよびと手を握つて見れば。あぢな身をして笑ふ故シヤこいつ承知の助と。女房共が寐息を伺ひ。れこさをやつて仕かければ。むく／＼と起キ上つて。コレ申旦那様。慢な事遊ばすと。奥様へ告ますと突そこなふた海鼠見る樣に。かたく成ッては埒明ヵず。毎度すご／＼歸つて。とくとしあん仕れば。いか樣色事の出來ぬも尤と存るは。某が顔を。瓦師がどふぞ鬼瓦の手本ンにしたいと申た。夫レ故さつぱり思ひ切リ悟道致して罷リ有ル。夫レ御らふじませの。そふ言事でお姫様を口説ふと思し召スは。ソリヤ三甫右衛門に十郎をさす樣な物。蝦夷様も腹立紛れ。合點せずば首討ァとおつしやる事はおつしやつても。根が惚レでござるお姫様。首にしてお歸り

なされた時。首討テといふたはおどし。夫レ程の事得さごらぬアノ雲貫の不屆キ者あいつが首を切ツ。て
仕廻へとたゝりのくるは定の物。ヤコレハサテぶ氣味千萬。サアそんならマア色事のこんたんを稽古
して。口説落すがよさそふな。物の樣に存ますと言イ廻されてふはと乘リ 詞ハア、コリヤ尤モな樣に存
じられます。シテどふ致せば其稽古が。そんなら私が弟子に成ッて。色事の秘事口傳習ふお氣なら敎て
上ふ。夫レは近カ比忝い。今日より色事の先ン生と仰願イ奉る。シテ先ツいかゞ仕らん。ヱ、モそふ四角
四面ンではどふもけいこが成ませぬ。マア其上下モや大小を。ヲツト合點といふより早く。地 袴肩衣大小
も取て投ケやる丸腰白衣。詞ヲ、夫々。これからが稽古始メ。色と酒とははなれぬ中。マア〳〵一トつ上
つてから。ア、イヤ拙者深ふは下されぬ。此大盃ではヱ、埒の明カぬ。夫レではけいこは成ませぬ。ア
、コレしからば一トつおつぎなされ。ヲツト、、。地 ぐつと我のみのむいき酒。詞 憚りながら先ン生
へ。イヱ〳〵そふ堅くろしい盃キは請取ル事は成リませぬ。そんなら最一トつ改てと。地 早二つめは酒が
酒。吞ミほして下タに置。詞 サア〳〵上ふ〳〵。アイわたしや下地が有ルによつて。御酒は御免ンな
されませ。イヤ〳〵夫レは御無理と 地 だぶ〳〵〳〵。詞 どふも急には給にくい。私が付ケざし憚リな
がらお助ケなさつて下さんせ。ソレハ千萬忝いが。御亭主が見たら呵らふぞや。何のマア醉倒て奥にね
て居られます。ヤ夫レはうまいとぐつとほす。詞 助八盃と申ます。サア〳〵上ふ。イヤモそふ〳〵は給
られぬ御免〳〵。ヲ、本ンにわたしが酌はお氣に入ラぬ故。上カらぬ筈と 地 氣をもたされ。詞 ヤそんならた

べるど引受ヶ地〳〵現たわいの。どろ〳〵目。詞申先ッ生へ。何ど身共などが様な無男にも惚てくれてがござらふかな。なくて何ど致しませふ。色事は氣でするど。きりやうには寄ませぬアノもたせぶりが憎らしいど。地太股ふつつり。詞アイタ、、、。イヤモいたふても能いたい。首筋元トからぞつどして。生れて合ハぬさんだめに。逢ッた時には笠ぬげじや。是がかんにん成物かど地ひつたり抱ト付ヮ後ロより。ずつど出たる主シの國村。襟がみ抓んで二三間。投付られたも有頂天。地漸ど起キ上り顔見て恟り。エ、南無三ど逃んどするをヤどこへ〳〵詞主有ル女に不義ひらぐ。脩レ動な眞一つさせり詰られて詞ア、コレ〳〵〳〵。今のは本の出來心。眞平〳〵。コレ男が手を合して拜ミ申ス。斯申せば某が。命惜ムに似たれ共。密夫して切れたど申ては。餘り外聞宜ふもなし。盗まれた貴様も立タぬ。殊に寐たど申ではなし。本ンのさはり三百目。金ンに直して五兩箇。地お暇申スどしよげに成。逃んどせしが。詞待テ〳〵〳〵。大事の事を忘レてゐた。おれは慥上使に來たのじや。イヤ〳〵此儘では歸られまいど。肩衣取ッて肩に打ッ懸、詞エヘン〳〵。上使の趣キ餘の義にあらずど地りきんで見ても氣味惡く。大小袴一トくるめ引拘へて立上り。詞只今の御花。負相撲へ下タさるどこそ〳〵ど逃歸る。地跡打詠め女房は夫トの傍擂寄。て。詞イヤ中國村殿。お前の敎の通リにして。マア雲貫は歸したれど。案じられるは姫君のお身の上。マどふしやうど思し召ど。地問ハれて國村詞を正し。詞イヤ何女房。改て其方に尋たい子細有リどいふは外の事でもない。何ど連レ添夫トが大切なか。又女ながらも相恩の。御主人が大切なか夫レ聞さい。

是は又かはつたお尋。尤御主人は大切なれ共女の身は三界に家なし。親を捨ても連添おつとにしたがうはてい女の道。スリヤ夫トより大切な物はよもや外にはござんすまい。ムウ 地さこそ有んと聲を上。詞ヤア〳〵家來共。言ィ付ヶ置し科人を是へ引。地ハットいらへて引出す。むざん成かな姫君は。見るめいぶせき縛り繩。かゝるためしは又世にも。あらしこ共に引立られ。涙にわかち正體も。なく〳〵庭に出給ふ。夫レと見るより女房はいとおしの御有り樣と欠寄ルを引とゞめ。詞ヤア者共 皆引。地〳〵と追立テやり。詞コリヤ女房。今更言ッに及ばねど。そちは川勝が娘なれば。汝が爲にも主君ンの姫。又某は蝦夷公譜代の家來。主君ンの心に隨はざる綾歌姫。今宵中に首討テてとの主命。某が討ッは安スけれ共。汝が爲には古主の姫君。人手に掛るも殘ン念ンならん。最期の稱名おすゝめ申。心よく首討ッて相渡せ。サ是にて討テと 地腰刀。すらりと拔ィて投出せば。悔り仰天詰メ寄ッて。詞是國村殿。私が爲にもお主といふ事。知ッて居ながら姫君の。お首討テとは勿體ない。胴欲な事言ハず共。どうぞあなたを助ヶます。了簡はないかいなといふもおろ〳〵涙聲。詞ヲヽそふ有ふ得討ッまい。左いふそちが心と知ッて。認置たる此一ッ通。サ是を見よと 地指出す。手に取ッて押開き。詞ヤア〳〵〳〵是は去り狀暇の狀。何科有て私をば。ヤア何科とは狼狽者。たつた今そちが詞。主君ンより親よりも。連レ添夫トが大切といふたでないか。其大切な某が詞を背く不屆キ者。但シ又首討ッか。離縁するかサア〳〵何とゝ 地きめ付られ。妻は身もよもあられぬ思ひ。詞今おつしやつた入り譯ヶに。一トつも無理はなけれ共。地十五の秋嫁入ッてよりけ

ふが日迄一言の詞咎ぶきげんな。お顔も見ねば。見られもせず人もうらやむ夫婦中。仕落が有ッて去るゝなら。あきらめ様も有ル物をあきもあかれもせぬ中で。義理にせまつて暇の狀。夫レがかなしい。つらひ迚現在お主の姫君の。お首が討タるゝ物かいな。姫君様も御きげん能。お前とゑんも切レぬ様思案工夫はない事かとくどき歎ヶば姫君も。神佛にも見放され果報拙き自ラ故。あかぬ夫婦の中をさく未來の罪も恐しいとても遁ぬ我命。そなたの手にかけ首討ッて夫婦中よふ添ふてたべと。白洲にかつばと打伏て身も浮。計リに見へにける。地國村は物をもいはず。ずんと立ッて泣沈。妻を引立庭におり。詞所詮首は得討ッまい。夫婦でないぞ縁切ッた。此家に置ヶ事片時も叶はぬ。去リながら武士が女房を去ルに暇の印なくては叶はじ。ハテ何をがな。ヲ、夫レよと。地姫のいましめ引ほどき。詞サア暇の印。御供申せと地思ひがけなき一チ言シに。二人は呆れて詞も出ず。夫トの心はしらね共只伏拜ム計リ也。詞サア時うつつて人目に立テば。我カ志シも水の泡。サア〱行ヶ〱。スリヤ姫君をお助ヶ申シ。私を去ッて立退せヲ、サそこらへ出ればまだ外に。力ラに成ル道連レも有ふ。サ早く〱とせり立ッ折から。地始終聞イたる二人の飴賣リ小かげより踊出。詞蝦夷公の命イを受ヶ稲目兵太石塚郷內。飴賣リと身をやつし忍び入ッて皆聞た。此趣キを注進と地欠行向ふへ武成が。そふはさせぬと顯はれ出。二人シを相手に切ッ付れば。まつかせ合點と兩人が。拔キ合たる後ロより。さそくの國村手練の手裏劍。ウント計リに郷內は其儘仆はたへにけり。地見るに驚ッ稲目ノ兵太迯しは立じと武成が。切リ込ム太刀先キ受留る。飴の荷箱も眞ッ二つ

餘る刄に兵太が肩先。けさにすつぱと切ﾘ下ｹれば。ぱつと血煙諸共に。箱の中より相圖の狼煙焔々として立ﾁのぼればかすかに聞ゆる。鐘太鼓。コハ〳〵いかにと驚ｸ人々。國村は騒がぬ面ﾝ色。詞斯有んと期したる故。茨萱原切ﾘ開き。兼て付ｹ置山手の拔道。夫ﾚをしるべに御供申。早立退ｹと地情の詞。武成ハツト感じ入。詞最前奥にて承はる重々厚き志。仰に隨い立退ん。地たとへ伏勢ｲ有ﾙ迚も。切破つて通らんに何條事のかたかるべしサヽヽイサ御立とすゝむるにぞ。地女房曙心も空。詞我ﾚ々御供申た跡蝦夷樣への言ｲ譯を。お前は何となされます。夫ﾚ計が氣がかりと。地縁は切ｯても引ｶさるゝ夫思ひぞやるせなき。詞ヲヽ其言ｲ譯はマツ斯と地いふより早く拔ｷはなす刀をぐつと弓手の脇。突込ﾑ血汐に目も紅ｲﾉ。妻は元ﾄより姫君もコハ〳〵いかにと呆るゝ武成ﾘ。曙は氣も狂亂。詞姫君の御ﾝ命。助ｹ給ふが嬉しさに蝦夷樣への言ｲ譯に。腹遊ばすといふ事を露芥程も氣の付ぬは。私が鈍な生れから斯いふ覺悟といふ事を。なぜ明ｶしては下さんせぬ。地聞ｺへぬ夫ﾄと姫諸共取ﾘ付ｷすがれば。詞アヽイヤ〳〵。此國村は蝦夷が家來。姫君の爲に切ｯ腹はせぬ。主人の爲に命を捨る。國村が所存ﾝ一ﾄ通り聞てたべ。情なや蝦夷公。悪ｸ逆日々に增長し。王位を奪謀反の企。我ﾚに隱して一味連ﾝ判。勿體なや觀世音の尊像を。土足にかけさせ誓を立る御催し。聞ｷ捨られぬ御大事。御諌言申ても。ひるがへさぬ御振舞。其上主ｼ有ﾙ此姫君に不義放埒。揃に揃ふ大悪無道。地頓て報はん天の責。主君のうきめを見んよりも腹。かき切んと幾度か。思ひ立ﾁは立ｯたれど。詞某空敷成ﾙならば。佞人共の謀に落入ｯて。犬死せんも口惜しと。

詞を工ミに言イ廻し。姫君を預る其時より。何卒落し參らせて。責て主君ンの惡名を一つ成共すゝぎなば。寸ン志の忠義と思へ共。詞女房の縁ンに引カれ。助ヶしと言ハれては。屍の恥辱と思ふより。あかぬ夫婦の縁の切。コリヤ他人ンと成て助しぞや。詞かゝる術をなさん爲。勿體なくも御佛ヶを。土足にかけし我身の罪。地未來は焦熱八寒ンの。苦しみ請るも主君の爲。推量有レ。武成と忠義にこつたる武士の涙に血汐を爭へり。地妻は正體泣くづおれ。詞常々からも御主人を大事〳〵と一筋に。地誠を照ラす天道樣鏡も見へぬかくもつたか。神や佛も恨めしいいか成ル人トが武士の。忠義と言物拵へてかゝるうきめを見するぞと譯ヶも涙に取リ亂し前後不覺に泣沈理り。責て哀也。詞ヤア未練成女房。アレ〳〵近付鐘太鼓無益の歎キに隙取ッて。姫君を奪取ラれ。某が志シ無足にするかヤアたわけ者。武ヶ成も何猶豫。早早姫の御供と地詞に。ハット心付。詞ハア、誤つたり實誠。觀世音の尊像を捜し出して御主人の再び世に出給ふ迄。我古郷の武藏野の。淺草村の隱レ家へ。奥方諸共御供と二人を伴ひ立出る。地此世の別れ今しばしと。すがる瞽明やらぬ心の。やみに綾歌姫果し。涙に呉竹の臥シ所定ぬ旅の空。手負は西方極樂世界。爰を去ル事遠からぬ砌に。響ヶ鐘太鼓夫レかあらぬか法の聲。無常の風と諸共に別て。こそは三重へ出て行

第六　道行夢路新枕

サハリ戀しさの。つもり〳〵てねやの戸を。もれて胡蝶の夢にさへ。わすれも。やらぬ。俤の。見しやそれぞとわかぬ間に。雲井を出し。落人の。心づくしはより糸の。もつれてとけぬ綾歌姫。思ひあふたる中臣に。長地ふしぎに廻りおふ鳥のはがひかさねし妹脊鶴。かすむ外山やあきしのゝ。里はねよげの若くさに休らふ。袖の朝ぼらけ東路。へさして。鳥がなく。なれにし奈良の七重八重。つい九重も隔りてふりさけ見れば伊勢の海。浪間を分る蜑小船。磯はうない小松の葉。ちらりちらり〳〵ちりひぢの。麓は廣き春の野に。すみれたんぽゝもへ出る。つくしの筆のちらし書。ちらす白ゆふ神かけて。本ンの女夫に鳴見潟。もしや心のふた川と。あんじすごしの花ぐもり。日影の御身をいつしかに。尋求る御佛の色は。ちり行山吹の下行。水の。眞砂原。濱松風の。音さへもあはや追人と見返れば。心にかゝる山の端へ入相。近き旅人の。やどりあらそふ村すゞめ。泊り〳〵のうかれ女が。引三味線のこゑ〳〵に。歌さまよ。戀人せど口に。立てさゝやく。月の影。思はせぶりのにくらしや。ほんにかへ。そふじやゑ〳〵。さまよ。娘の門口に。立てまいたるはたの糸。うかぬ顔つきにくらしや。本ンにかへ。そふじやゑ〳〵。うたふも一夜流の身夫トに引キかへ自は言イ号有ル殿御さへ。ふみの便リも音信も。泣てくらせし一とせの。花も紅葉も目に付ず。いつ咲たやら。散たやら。胸に思ひは有明の。つきぬゑにしを憎らしや。仇成ル雲におほはれて。かゝるうき身の旅の空。ふ便共可愛共。思ふて給はれ我夫と。膝にもたれてかこちごと。恨ミ歎ケかせ給ふにぞ。地中臣卿も打しほれ。世になき我レをさほど迄思ふて下さる志。忘れ

は置じ。去リながら。地勅勘御免ンなき内は 添れぬゑんと諦て。詞蝦夷の公に身を任せ。御身うきめをのがれてたべ。さら〱恨ミと思はじと。宣ふ顔をつれ〴〵と。姫は見る目に涙ぐみ。詞エ、うたての仰胴欲な。姫ごぜの身のたしなみは親の赦した殿御より。仇し枕はかはさじと。心に誓いつ迄も。立テ通す氣を情ない。蝦夷の公に身を任せ。何とながらへゐられふぞ。むごいつれない中臣様。千鳥を友に浪こゆる。あら磯嶋も悔しらぬ國の果でもいとやせぬ。連て退ィてと一筋に。思ひ詰メたる花に蝶。 はなれがたなき夕日影 地ヲヽことはりながら我迚も世を忍ぶ身に行先キの人目の關は赦すまじ。さらばと計振切ル袖。コレのふしばしとすがれ共。すがる甲斐なき山かづら明ヶ行そらに三保の松。富士の雪風さら〱〱。ひるがへしたるくれないの 裾もほら〱しどけなき。草の枕に旅寐の夢覺て。 跡なき 三重へはかなさよ地所の名さへ境木と武藏相模の兩國を。分ル印の辻堂に。御いたはしや。綾歌姫。喈一人が傅きて。嵐をふせぐ菅の笠。顔を隱して夢結ぶ。世の成行ぞ是非なけれ。詞のふコレ我カ夫マ〱と。地おそはれ走リ出給へば喈驚キ抱留。詞コレ〱中お姫様〱。御心か付キましたか。中々と地御脊中カを撫つ。さすりついたはれば。地漸心押しづめ。邊り見廻し〱て。詞扨は夢にて有しよな。地戀し〱と思ひ寐の中臣様に廻クり合イ。倶に東マの旅の空。うきが中にも嬉しさは明くれ思ふかづ〱の。其言のはも胴欲に。振リ捨給ふ我夫の跡をしたふと思ひしが夢で有ッたかなつかしや 最一度見たい御顔ばせ。 なぜ夢ならばいつ迄も。覺ずに有ッてはくれぬぞと。 返らぬ事をかきくどきこがれ歎かせ。 給ふにぞ。お道理様やと喈も。倶に涙に

くれけるが。夫トの最期もどふぞして中臣様にお前をば。添せましたい志。詞夫レ故に私も武成殿と倶々に。東マへ御供申シますも。御夫婦にさせましたい計リ。必氣遣イ遊ばしますなへ。去リながらきのふ馬入とやらの川端で。蝦夷の追手に取リ巻れ。武成殿は敵をふせぎ跡より追付。姫君をお供して落延よと詞に随い。爰迄は來れ共。地ならはせ給はぬうき旅路。御身足もいたみませうと此辻堂にやすらひて。詞待合す内お前様も。私も倶にねむけのきたは。旅の勞れに日比から。戀し〳〵と思召ス。中臣様を御らふじたも。御尤でござります。地とは言ッ物のおいたわしや。屏風襖の繪ならではしろし召サれぬ山坂の。風さへよけぬ辻堂にお召シの儘の旅枕。草のしとねに御寐なるとは。扨も〳〵あぢきなき世の有様やと計リにて御手を取ッてさめ〴〵と果し涙は春の雨いとゞ。哀をそへぬらん。地折から同勢引キ具して。蝦夷が家來市倉宇惣太。斯と見るより辻堂を。追ッ取巻イて大音シ上。詞ヤア主人の心懸られたる綾歌姫を連退イたは。不忠者の國村が女房よな。追ッ欠て打チ殺し姫を奪取連レかへれと我君の仰を受ケ。此街道を追欠しに。武成めが手强イ働き相役兵馬にきやつめを渡し。路を慕ふて此所。出合ふたは百年目サア姫を渡して繩かゝれ。何と〳〵と呼つたり。ヤア事おかしい毛才六。おのらが様なへろ〳〵武士。幾人有ても人形も同然。微塵もこつちの苦に成ラぬ。曙がお供した姫君様。ほしくば首から置イて行きや。ヤア延ビ過キためろさいめ。地息の根留んと一時に切ッてかゝるを事共せず。弓ッ手にはらひ馬手に受ケ。飛ビ違へ切開き男まさりのかい〳〵敷。忠義にこつたる太刀先キ乃先キ切リ立〳〵。へ追

て行地跡に姫君ハア／＼と詞長追イしやんな戻つてたも、ア、あぶない。ア、あぶない。エ、此武成はなせ遅い。曙一人にあの大勢。もしもの事が有ッたらば自ラは何とせう。コレ地のふこれと身をあせり叫び給へど甲斐も。地あらしに聞ゆる太刀音ト人音。聞ク度々に身をひやす千々の。思ひも紅の。血汐に染る曙が。數ケ所の手疵刀を杖。よろぼひ／＼立歸れば。姫は見るより氣もきへ／＼。のふいとおしやかなしやと取付すがり。泣給ふ地手負イは息をほつとつき。詞お姫様かお身にお怪我はござりませぬか。ハア、嬉しや忝や。コレ中泣イてござる所じやない。又も敵のこぬ内に。片時も早ふ此道を。一足も落延ビて。情有ル家を頼んで御身を忍び。武成殿の見へるのをお待合せなされませ。私が御供したけれど。此深手では叶ふまじ。爰に殘つて敵をふせぎ。命が有ばどふぞして。又もやお目にかゝりませふとは思へ共大方是が今ジ生の。お暇乞でござりませふ。地随分ジお命つゝがなふ。中臣様に廻り合イ。目出たふ祝言ヲ遊ばしませ。死る命は惜からねど。唯さへ物うき旅の空。傅く者もちり／＼に。生キ別れ死別れ。嘸お便リが有ルまいと。思ひ廻せは死共ない。詞死ともないと思へ共。最早心がきへ／＼と。引入ルやうに成たれば。せめて息キ有ル其内に。片時も爰を落延てたべ。早ふ／＼と言聲も地頼みすくなき其有様。姫は有ルにもあられぬ思ひ。のふいとをしや淺ましや。詞連レ添夫トに死別れ。便リなき身に自ラを介抱してのうき旅路。心づくしの其上に。又にかゝりおちこちの。地知ル人もなき道野邊の土と成身のいぢらしや。國村と言てなたと言。二人が二人で自ラ故。命を捨る恩の程いつの

世にかは報ずべき。詞中臣樣と諸共に。世にも出なばそなたの菩提。此辻堂の地藏尊。一宇の堂を供養せん。及にかゝり死る身の。迷ィを晴レて死でたも。地藏經くげんを導き給はれと。地佛を賴み手負にすがり。地藏經只ねがはくは地藏尊。地ならふ事ならどふぞして。命を助てたび給へ。詞コレ〳〵曙そなたに別れてあてどさへ地何所をせうどに行べきと。我身のうさと別れ路の涙々の境木や今に殘りて曙が菩提の。爲といちじるき。燒餅坂の。地山傳ひ伺ィ寄ッたる市倉字惣太。サアしてやつたと引ッ立れば。のふかなしやと姫君の。聲に驚ク曙がくらむ心を取リ直し切てかゝるもよろ〳〵。面倒なと市倉が。片手なぐりも請ヶはづし。かつぱと伏セば姫君を宙に引ッ立欠行向ふへ。敵を切リ拔武ヶ成が心もそらに欠來りッ飛かゝつて姫君奪取リがんづか摑んで引くり返し。大地へどうど打付れば。手負のあけぼの乘かゝり恨ミの太刀先キずだ〳〵切。ぐつとゞめをさすがにも。武士の妻なる健氣のはたらき。詞ホヲヲ出かされたと武成が、地こゝろに落付心のたるみ。アヽ嬉しやと地一ト言が此世の名殘あだしの〻露と。きへ行三重へうき身かや。

第七

地世をうらむ。氣は播磨瀉。斑鳩のッ村はまばらの町並にッ透間の。風の。やゝ寒き。秦ノ豐勝が埴生の住居。聖德太子の忘れ記念山背の宮を傅て。種々の難シ義に相ィ生の。双子とは言ィくろめても。くろめ兼

たるかせ世帶。地わけて女房浮橋がしつけもなれぬ賤の業。さいつ比より若宮の御不例何さ病身より。見るめ刈てふ蜑ならで。鹽たれ衣。前垂の。日もくれかゝる秋の野の。蟲も貧苦を悔りて。襤褸させさや。鳴ならん。豐勝傍へさし寄て。詞ヤコレ女房共。さつきに上ヶた加減の御藥。御容體はどふじやの。サイナア。あのお藥を上てから。大分おあしも暖り。すや〳〵さ御寝成ます。ムウ夫レは重疊。そんならお乳を上て見や。地アイさいらへて女房が。乳房を含め參ィらすれば。詞ヲヽ大分ンお乳の上りぶりが能よふな。アヽソレ〳〵。又坊主めが邪魔しおる。地おれが抱ふさ手を出せば。久丸はやんちや聲詞坊が大事のうまく〳〵を。呑す事はいやじや〳〵。地きかん〳〵さ足摺に。詞エヽこいつ意地のはつた坊主め。こつちへこいさ手を取レば。詞アヽコレイナア。其様にあらけなふさしやんすさ。猶逆立ッてやかましい。コレ坊ン。ちつさの間此坊様に。お乳をお貸申しやいの。其替りそなたには。地能ィ物やらふさ針箱より。でんぐ〳〵太鼓ふりつゞみ。起上り小法師。詞ヤころ〳〵〳〵。地遊びに餘念ン七轉び。八起キさいへる世の中の。諺は有ながら誰レ有ふ。聖徳太子の御若宮お乳姆の氏系圖も。撰にゑらむ御身なるに。蝦夷が爲に世をせばめられ。斯淺間敷あばら家にて。躬レが乳の呑殘り。ハヽア勿體なや。恐れおほやさそゞろ涙にくれけるが。詞ハヽヽヽ。又ひよんな事を思ひ出した。ヤ是女房共。吾儕も聞ィて居やつた通。最前の醫者の詞。段々さおもる御病氣。此儘では直るまい。仕方が有ふさ言ハれたは人ン參を入ふさいふ事で有ふさサ推量はしたれ共。買べき方便もなければ。押だまつて居は居たが。

重ﾓつては取返しがならぬ。夫婦の者が身を賣て成共。人ｼ參を調へ上て見たい。サイナ。私もそう思ふた故。地心用意と納戸より。取出す風呂敷包。詞ム、都を立退其時も。心せかれて用意も薄く。永の流浪の其内に。何も角も皆賣喰。地三つ四つ殘る古着迄ひろい集て沖の石。乾く間を待洗濯さへする事ならぬ身の上にて。心用意の一ﾄ包とは合點行ずと引ほどき。詞ヤコリヤ是そなたの下着。だん／＼寒ふ成時節。是脱でたまる物か。テモマアめつそふなわろでは有ﾙはいの。イ、ヱイナ。若宮樣の御病氣。捨ﾃ置ｲて若も重ﾓつた其時は悔んで返らぬ跡の歎。地お主の爲には我身を捨。子を殺しても忠義を立るが武士の習。まして一ﾄ重の。此小袖脱ｲでも。跡に御主人の。御恩を厚く着てゐると。思へば寒ふもござりませぬ。詞片時も早く人ｼ參を。調へて來て。地下さんせとお主思ひの。烈女の操。夫ﾄはほろりと涙をこぼし。ヲ、可愛や／＼ナア。詞不運ｼな夫に連ﾚ添ｯ故いかゐ苦勞をしやるのふ。そんならいて來ふ。ソレ隨分ｯと若宮樣に氣を付きやと。地思ひを包む風呂敷に。かゝる涙の玉鉾の。道を急ｲで出て行。ヲ、地主とした事がモウ日がくれたに小提燈。地ともしてはいかしやんせず。詞くらふて道でこまりなさろと地言ｲつゝ立て戸を引立。地灯燈す比を商賣の。夜明ｹと思ふ荷ｲ賣ﾘ。詞溫飩蕎麥切。入麪やそうめん地呼はり／＼此家の門口。地ぐはらりと明ｹて。詞ホ、お家樣。坊樣の氣色は能ｲかな。一人ﾘでさへ世話な子供。双子を育るはﾓ大抵な事では有まい。今出がけで暖な。蕎麥でも溫飩でも上りませんか。錢はいつでもようごんす。ヲ、惣兵衞樣のいつも／＼深切に忝ふござんすが。地飯も焚て置ｷきましたれ

は。今ン夜はよしに致しませふ。詞ヤそんならモウ參りませふ。モほんに〳〵わしらが商賣も。風鈴組の何の迚だん〳〵と仲間がふへて。ヤ盛が惡ィの。下地が能ないの。何の角の迚小言いふ癖。やゝ共すれば喰ィ迯ゲに合ます。油斷のならぬ世の中。そしてマア御亭主樣はお留守そふな。夜ルよなか迄御精がやんすの。イイエイナ。此坊が煩ふ故。稼も止て醫者樣へ。藥の相談に參られました。夫レはいかゐお心遣ィ。宜ふ心得て下さりませ。歸りに又寄リませふと。地いひつゝ出て門口から。詞温飩蕎麥切リ〳〵地次の町へと賣て行。地跡に女房獨言。詞ほんに浮世に鬼はないと。馴染も薄いに惣兵衛殿。ちよつちよと寄て深ン切ぶり。地ソレハそふとこちの人もうお歸りで有リそな物と。見やる表ナへいきせきと小首傾け立歸る。豐勝が。くつたく顔。詞ヲヽ待チ兼て居ましたはいの。地人參は調ふたかへ。詞サレハサレハ。彼品を代なして人參を調へ。醫者の方へ往て相談をして見たれば。仕方が有ふといふたのは。人參の事ではない。全體アノ病根は。一人リの乳を二人で呑ム。一人リの子は丈夫にて乳の吸も強故。能ィ所を皆吸出し肥て息才な。今一人リは生レ質の虛弱な上。麻疹後の弱が直らず。乳の吸がかいなく。すいからした跡を呑ム故段々と衰てアノ病ィ。これが募て疳に成レば療治はない。二人の子を別ッ々に。育さへすりや快氣する。仕方といふは此事と存の外成醫者の詞。折角吾儕が心を盡しやつた。人參も無に成たと。地聞て女房當惑し。そんならどふがよござんしよ。詞サレバサ。おれは道々とつくとしあんを極メて歸つた。ヤコレ女房。何で有ふとおれがいふ事。背まい。驚クまいと誓言が聞たい。ヱヽ是は

又改つたお詞。夫トに隨ふは女の道。地誓言を立ぬ迚も。詞いやさ、どふで有ふと誓言立ちやれと。地言ッにふしんは晴ね共。アイ。何々の誓文、詞ム、そんならかうと地脇差引キ拔。我子胸先突付る。女房驚キッ詞コレ氣が違ふたかこちの人ト。何科有て久丸を。サ、、。誓言立テはサ爰の事。二つや三つの此粉。科の有ふ樣もなく、假令科が有たり共。身にかへても助ヶるが親の慈悲。最前醫者の言ッ通リ。一人の乳を二人で呑ムに。若宮はひがいす。此坊主めは丈夫な生れ。乳の吸ィ樣が違ふによつて若宮のコレ此御病氣。元ン來乳母を置ヶ力ラはなく。里子に賴ムあてもなし所詮。此粉を殺して仕廻イッ宮樣一人リに成時は。乳を十分ンに上る故。御病氣が直らふかと、サ思ひ付ィて殺のじや。お主の爲には我身を捨子を殺しても忠義を立るが。武士の習とソレ最前も言ッたじやないか。まさかの時は卑怯の留メざま。夫レでも武士の女房かと思ひ詰メたる。夫トの魂。詞アイ成程〳〵其お呵は。地無理ならねど、よふ思ふても見やしやんせ。舅御樣はお果遊ばす。只タ一人リの姉御樣は。日外道にて別れし跡にて。あへなくならせ給ふと聞ヶば。殘る血筋は。詞コレ〳〵コレイナ此子計。地蝶よ花よと明くれに。貧苦を忘れてくらすのも。此子一人リが有故ぞや。何ぼお主の爲じや迚。殺すといふは無得心ン。外に仕樣はない事かコレ。しあん仕替て下さんせ。やいの。〳〵と取縋れば。夫トも道恩愛に。乃金もなまり。手も痿千々に碎る胸の內。しばし。猶豫居たりしが。詞ハア、そふじや。一チ圖にせまる心より殺そふと迄思い詰メたは。我ながらそこつ〳〵。ム、子を捨る藪とやらいふ世の譬。今一ト思ひに殺さんより。捨子となさ

ば運に叶ひ。命助リ萬に一つ。廻り逢まい物でもない。ヲヽ、そふじやさ　地納戸より。反古の入たるみかん籠。責て是をさ。羽織打敷すかし乘。人の見ぬ間さ欠出すを。女房頓て押さゞめ。親子一世の暇乞名殘に乳を呑せたい。私をやつて下さんせ。詞ヲヽ、夫レはどふ成リ共。じやがつい近ン所へ捨ては。跡の詮義がやかましい。村はづれの辻堂に捨て置て。思い切て早くかへりやれ。地アイ。アイさ。いらへてみかんかご。請取手先キもふるはれて。わつさ計に取亂す。詞エヽ、埒の明ぬさ門口へ。突出して跡びつしやり。詞サア〱行きやれ。アイ。地〱さ歩むも夢の。心地にて。二足。三足夜嵐の。身にしみ綿も薄布子。うすき親子の契りぞさ。思へば夫マも諸共に。泣たい所を。喰イしばり。詞エヽ、まだ行ぬかさ地聲に門の戸そつさ明ケ。呵るふりして差覗く。地妻は漸。氣を取直し。詞ヲヽ、そふじや。お主様にはかへられぬさ。地思ひ切ッても。行キ惱む。子故のやみの後髮。引るゝ恩愛。すゝむは忠義。心は二筋一筋道。行かふ人聲。物音トも若や夫トが呼さゞめ。よしにさいふかさ振返り見れば。我家も遠ざかり。次第〱に。町並も。跡ははるかに鳴子引。秋の田面の。假初に。歩共なく。行共なく。袖に涙の露寒き。冬を隣の村境。紫苑龍腦。女郎花。萩も。あらはに。ほら〱さ。つまづく道の玉柏。二つ。三つ四つ辻堂に漸。たどり着にけり。地母は邊りを見廻して我子をそつさ抱キ上。心も闇の星明り。顔打守リ打守。しばし。涙にくれけるが。詞ノウ久丸。親子一世の別れじや程にの。やんちやいはずさとつくりさ。能、乳を呑ンでたもや。そなたが有ッては此乳が。若宮様へ思ふ様に上られず。御病氣が直らぬ故。

夫レで捨子にするのじやはいの。うきよの義理にからまれて。西も地東も知ラらぬ子を。捨るも忠義御主人の。詞お命助ん其爲と。地稚心に聞譯ケけてコレ。此母やとゝ様を恨んでばしたもるなや。とはいへ鳥類畜類さへ。啄あたへ乳を含。其身をいとはず子をかばい。養育するが天の道。詞いかに忠義といへばとて。一人リの我子を捨るとは鳥獸にもおとつたか地世が世の時の綾錦。金ン襴緞子に引かへて。見る目いぶせきみかん籠。木綿物さへ肌薄キ。乞食非人ンの此けふがい。これが太子の御傅キ。川勝樣の孫君の有ふ姿か淺ましやと抱キしめ／＼かつぱと伏て。泣ゐたる。只さへ我は悲しきに。物思へとや秋の夜の。蟲の聲々物さびて。紅葉ばさそふ風の音。いとゞ心も細道の。はるか向ふの松原に星か、あらぬか提灯の。火かげ幽に鉦太鼓。詞迷子の乙吉ヤアイ／＼。地餘所の哀レを催してあてどもなしに尋行。地母は身もよもあられぬ思ひ。詞何國の誰レかは知ラらね共。見へぬ我子を苦にやんで。近ン所邊りの人頼ミ。尋歩行は親のじひ。同じ親でも我レ々はわざ／＼捨る難面さを。世間ンの親にくらぶれば魔王か。外道か鬼か蛇か地敵と／＼が親子と成。今うきめを見するかと口說立／＼又さめ／＼と泣けるが。思ひ直してハアそふじや。詞いつ迄泣イても盡キぬ名殘。若や人トに見付られては宮樣のお爲にならず。幸イすや／＼ね入ばなと。そつとねさする籠の內。南無天道樣佛神ン樣。とふぞ情有ル人に拾はせてたび給へと。行ては。もどり戻りては。盡ぬ名殘を漸と思い切ッてぞ立出る。地同じ歎キに豊勝は。我子の名殘女房の。遅きもいかゞと若宮を。抱キ參らせそこ爰と。尋搜ど烏羽玉の。くらきより。暗に迷ふ親心。

思い切ても堪兼て又。立戻る女房も。互ィにしたい夜ルの道。思はずはたと行當り。詞ヤア誰じや。ムウそふ言聲は女房共。おれも粉に今一度。サイナ私も捨ては歸りしが最一度顏が。ムヽシテ捨た所は。アイアレアノ辻堂と。さぐり寄り心覺へのみかんかご。詞ヤアコリヤ内に久丸は。ハア悲しやといふに夫トも仰天し。そこか爰かとくらまぎれ。捜廻れど何國にも犬。狼にも喰れしか。ハアしなしたり不便やと夫婦はどふど。倒伏正體も。なき折からに。遙に聞ゆる。數多の足音高提灯。コハ何事と驚ク夫婦は疵持足。詞宮様の御身の上が氣遣し。地イザ歸らんと心も空泣々。我家へ三重へ立歸る

第八

詞ヤアいか程に働く共。多勢を以て取りかこめば迚も叶はぬ汝が手向ィ。聖德太子が小紛山背の宮。此内に闔ひ置ィ條訴人有ッて明白。討取ッて來れよと蝦夷公の命を請ケ。土師の連が向ふからは遁れぬ所と覺悟して首討ッて渡さばかくまふた科赦してくれん。あらかはゞ目に物見せん。サいかに地〳〵と手詰の詞地詮方ナ盡て豐勝はどつかと座し。詞ハア是非に及ばぬ此場の時宜。いかにも御ン首討ッてお渡し申さん。ガ去りながら。人ン間ンの種ならぬ若宮の御ン首。むざ〳〵討タんも恐れおほし。御ン召物も改め。責て末期の香花暫時の猶豫村はづれ迄御引キ取下されふや。夫レ共に御承知なくば。太刀の刄金のつゞかんだけ切ッて〳〵切り死、サア御返答承らんと地覺悟の詞。連シほく〳〵打點き。詞ムヽ舊鼠却て猫をか

む。あら立テて我組子。一人ンでも討ッすは費。コリヤ。ヤイ蝦夷公の御威勢を以て。十重廿重に取リかこめば迯隠れは猶ならぬ。暫シ時の用捨してくれん夜半の鐘の鳴ルを相イ圖に首請取リに來るべし。家來。地參れと引キ連て心を殘し立歸る。地跡見送つて。妻の浮橋夫トの傍へにじり寄リ。詞コレ申お前はマア今の討ッ手に。若宮樣の御首討てお渡し申さふとお請合なされたが。眞實若宮樣を討チ奉るお心でござんすかへ。ナニ馬鹿な。若宮を討ッ程なら。是程辛苦はせぬはやい。そんなら今アノ連とやらに。サアいやさいへば多勢に無勢據なく。一寸ン遁れ請合イは受合しが。地まさかの時はお身代リと。兼て覺悟の躮さへ。今宵に限つて捨テたるは。若宮樣の御運ノの末。積善の家には餘慶有リと聞ク物を。いか成レば聖德太子。國ッ家ガ安シじ民を憐み御佛ケの再來と。呼ハれ給ひし御身成に。現在お子の若宮樣。是迄の御かんなん。まだ其上に今宵の時宜。詞サイナ。わづか一ト時半時の違イで。捨て仕廻ッて今の後悔。ヲヽ過去の因緣定る業。神ミ佛ケのお力ッにも。叶はぬ事かと身をふるはし。夫婦は顏を見合せて泣より外の。事ぞなき。折しも表テに聲高く。詞身代リや〳〵。身代リは御用にないかの。身代を賣リましよかさ。地荷箱かたげてずつとはいるけんどん屋の惣兵衞。思ひがけなく夫婦驚キ。惣兵衞は落付キ顏。詞珍らしい商賣故。恂りは尤じやが。わしも是迄の商イ。每晩〳〵所々方々。溫飩蕎麥切リし入麪や素麪と聲の有リたけ精一ッぱい。二六時中賣リ歩行。足の裏はわさびおろし。大根限リかせいでも、地ねぶかい設もないさかいで。詞內證ちんひんすかんびん。こうからしあん仕直して。商賣をかへてこまそと。思

ふ矢先キの身代リ賣リ。智惠をふるふた。上手がごんすよ。大事の命のつなぎにして。こなたの手打チにしなの蕎麥ゑいかげんな出しを遣イ。討ッ手のかたへぶつかけて濟す工夫の下地拵へ。詞買氣はないかと。平氣な詞。地合點行カねどこなたは耳より。詞ムヽ。スリヤ此方の譯ヶ知ッて。身代リ賣ッて下さるとや。ヲイノ。代物見せずは落付クまいと。地行燈引提荷箱の上。蒲團をそつとすや〳〵寐顏。詞ヤアコリヤさつきに捨た我子久丸。地ノウなつかしやと立寄ル女房アヽコレ〳〵。詞拾ふたからはこつちの物。めつたにそばへ寄ラしやますな。サアほしくば賣ッて進ぜんしよ。ハア成程。心有リげな惣兵衛殿。いかにも其代ロ物買ィませふ。シテマア値段はいくらでござる。サレバサ不景氣な時節がら。高ばつては商いが出來やすまい。殊に向キ口のすくない代ロ物。こんな口が有レば掘出し。常はこつちから里扶持やらにや請取リ人のない此代ロ物。隨分ンと負て進ぜう。ヲヽ忝い惣兵衛樣。地此御恩は忘れませぬ。そんならおあしはいくら計。詞アイ。ずんとまけて進ぜんしよ。カフト。鐙ふんばり元ト直限り引キ下て。一文も懸直言ハず。引ヶぬ。所が金千兩と。地聞て驚ク。女房を。引退ヶてすゝみ出。詞ハアヽ成程。千兩といはしやるも高くはない。十萬兩百萬兩は扨置。天地と釣がへの大事の代ロ物。世が世の時で有ならば。價は望ミに任さんが。地御存じの今の身の上。そこの所を汲譯ヶて。了簡付ヶて下されかし。再び世にも出るならば。金銀の山を築。お禮申さん惣兵衛殿アヽコレ〳〵。詞明日鹽のからい物喰ふか迚。宵から水を呑でも居られやせぬてや貴樣の出世がいつの事やらハテ來年の事いや鬼が笑ィやす。先の千兩

より今の十兩。あぶつて擲たやうなこなたの身ｼ代。千兩は扨置キ。壹歩も金は出來やしよまい。金がなくばない樣のハテ又。相談が有ふかいの。ナント代ロ物替にする氣はごんせんかい。ハア代ロ物がへと申てからが。だん〱と貧苦にせまり。地 衣類手道具腰の物賣代なして此體たらく。詞 イヤ有ルてや〱ずんと能イ代ロ物が有ルてや。彼こなたの大事がる。アレアノ奥にねて居るアノ代ロ物。同じ位の年シ恰好。ふとつたと瘦たと掛て見たら。五百目か三百匁目かたの違有ふけれど。紙屑を買樣に秤目もせゝられまい。よごんす引かへにして進ぜんしよ。イヱ〱あのお子は譯有ッて。地 どふも人手へ渡されませぬ。詞 イヤお內義樣。ソリヤ惡イ了簡じやそんならこなはんの內に置イて。討ッ手に首を切ラすが能イか。忠義とやらが立ますかと。地 のつ引ならぬ利の當然。豐勝はしあんを極め。詞 ハテ誤つた惣兵衞殿成ル程代物がへにして貰ひませふ。合點が參りましたか。ムヽソリヤ能イ了簡。マヽそんなら商が出來たといふ物。祝ふて一つ打ませふ。シャン〱〱と。手を打ッ內に女房は是非も納戸へ行ながら。地 どふ成事共若宮の。お目が覺たらむつがらんと。そつと抱キ上惣兵衞に。渡す心も心ならず荷箱の上の久丸を。抱キ取たる內懷。可愛や宵から寒からふと。溫めた迚間もなふ。御身代リに殺すかと思へば。身もよもあられぬくるしみ。惣兵衞は若宮を。懷ロへ捻込ンで。詞 わしが爲にはどちらでも。同じ心の拾イ子。地 腹もいためぬ子に鼻も嘸悅ぶでござりませふ。詞 我らが內は仲町の裏店。路次は四つ切。夫レより內なら何時でも逢イにごんせ。地 お暇申と荷を振かたげ。詞 溫飩蕎麥切。〱しやんと歩み行。やゝ

更ヶ渡る秋の夜や長キ別れに後の世を。頼は佛紙さへも破し行燈も。ちらつきて。風の前成ル灯の。消ると知ッで稚子の乳房くわへて餘念ッなき顔も。此世の見納めと。夫婦は覺へずむせ返り。わつと計に泣沈む。聲も遠寺の鐘てより。夜半と限る約束。に。手勢引キ具し土師の連。此家の前ッ後を追ッ取卷。詞ヤア／＼豐勝。約束の刻限山背の宮が首請取ラん。早く渡せと呼つたり。詞ホ、契約せし宮の御首。渡し申さん請取れよと。地涙はらふて女房が。抱く我子をもぎ放し。詞忝も人王三十二代の帝。用明天皇の御孫。聖徳太子の御子。山背の宮の御首討奉る。これ見よと地脇指するりと拔放し。すでにかうよと見へける所。ヤア／＼御検使。其小躮レは贋物。實の宮は爰に有と。地小蔭を出るけんどんや。詞連樣のお頼み故。此内へ犬に入て。見定メた若宮の贋と本ッ手。あの小躮レはあいつが子で。宵に捨たを拾ふて來て。樣々の口車でちよろまかして。取リ替た正眞ッの若宮。ほへ廻つてやかましさかいで。猿轡でくゝし上。荷箱へ入レて置ました。討てお渡し申さんと。地聞より夫婦は狂氣のごとく。詞エ、たばかられしか殘念やと。地飛ッでかゝるを。ソレ動かすなと連シが下知。數多の家來が落チ重サなり。多勢を頼みに腕捻上ヶ。手込の内にけんどん屋は。荷箱の中より若宮引出し首。はつしと討落し。連が前に差置ば。ういやつ出かいた／＼汝が魂を見込ミし故。一チ大事を賴し所健氣の働キ。いさい蝦夷公へ申上。武士に取リ立ヶ得させん。ソレ。當座の褒美と投出す百兩。詞是は有リ難茄子漬。剛の者と譽られたより。此百兩暖まれば商賣に實を入レて。天秤棒に蒔繪を置キ。地荷箱を堆朱。金貝の大平を搾て。

詞夜鷹蕎麥の惣代に。仰付られ下さるべしと。一人ッほた〳〵悦べば。詞ヤア〳〵家來共。宮が首さへ請取ば此連が役目は濟だ。そいつらにお構ひなしと。地首を家來に取ッ持タせ。いかつがましく立歸る。跡にはつもる夫婦が恨。宮の敵と切ッ付るを。飛しさつてけんどん屋。詞是にこそ申譯ヶ。ヤア何の言ィ譯聞ヶ事ないと。地又切付るを荷箱を小楯。詞ヤ早まり給ふな御夫婦 若宮は御安體にてましますぞと荷箱の内より傳奉り。猿轡引ほどけばわつと泣出す宮の御聲。詞ヤア御存命にて在すかと。地抱キ取ッて女房が乳房を含御顔を差覗〳〵。悦ビ合ッぞ道理成。地豊勝は惣兵衛に打向ィ。詞最前のしだらに引かへ。思ひがけなき若宮の御存ン命。討ッ手に渡せし首と言ィ。彼レ是以て不審晴レずと。地尋る表テに女の聲。詞ヤアこちの人は爰にそふなと。地すつと這入女房おさぢ 詞コレ惣兵衛殿。こなたは〳〵の。宵からこちの音吉が。迷子に成て行衛が知レず。長屋衆を頼んで。音吉返せの太鼓鉦。夜がな夜ひと尋てゐるに。爰に何してござるぞ。地聞へぬ人やと恨ミの詞。詞ヲヽ息子が事なら尋るにや及ばぬ。爰に居るはいやい。ヤア何音吉はどれどこに。ヲヽ。地あはしてやらふと最前の。首なき死骸差出せば。一目見るより。詞ヤア。こりや音吉を誰切ッた。何者が殺したぞ。地可愛の者やと抱キ付。歎く女房に目もやらず飛しさつて兩手をつき。詞御幼少にてお別れ申せし故。御見覺へは御座なき筈。私こそはお家譜代の御家來。久米の平内兵衛照景と申者。若氣の至ッ是成ル女と不義の科。縛り首にもあふべき所。御父川勝公のお情にて。何ンとなふお暇給はり。方々と流浪の身。何卒古主へ歸參ンの願ひと。思ひながらも

心に任せず。年月を重ぬる其内に。川勝公は蝦夷が爲に御身を亡し。御家もぼつらくと。聞より無念さ骨髓にてつし。蝦夷が館へ欠込んで指違へ。大殿様の修羅の鬱憤晴らさんと思ひしが。イヤ〳〵。夫れよりはお前様のお行衛尋。お力らに成るが死にまさつたる忠義ぞと。方々捜す其内に。此所の御隱れ家。慥に夫れ共知れがたく。うかつに名乘つて出られもせず。忍び〳〵御様子伺ふ内。土師連我れを招き。犬に入れよの頼は幸ひ。若宮様のお命にかはらせ給ふ若殿。久丸君の御爲に。紛れ音吉を殺せしは。平内兵衛が寸志の忠義ぞと。地 我子を手盛にけんどん屋が打て替へたる忠臣は。末世に輝く金龍山淺草寺の境内に。石の印に朽やらず。地 豐勝夫婦は感じ入り。詞 扨は平内兵衛にて有りけるよな。屋敷を出て廿餘年。恩しも見せざる我れ々を。主と敬ひ子を殺し。難義を救ふ志。いつの世にかは報ぜんと。地 夫トの詞に浮橋は若宮様や久丸が。助りて嬉しい程夫婦の心根思ひやる。取分てお内義は思ひもふけぬ親子の別れ。嘸本意なからふかなしかろ。いとをしの有り様やと身につまされしかこち泣。おさぢはいらへの詞さへ。しやくり上〳〵。胸へさし込む癪つかへ。疊に喰付くるしめば。涙まぎらす平内兵衛。詞 コリヤ女房。どうぞお家へ歸參しして。御奉公が申たいと言ひくらした念しが屆き。けふといふけふ御用に立。若宮様若君様のお命目出度御壽き。何ほゆる事が有る夫程お身代りを悲しかるは日比御主人が大切なと。いふた詞は皆空言か。地 狼狽者めとしかられて。女房は猶せき上。詞 武家に育た私じや物。お主の爲の御身代り。夫れ悔ではなけれ共。かふいふ譯けじやと得心しさせ。暇乞して殺すなら。是程にも有る

まい物。地 さもしきくらしの裏屋住。あの子を寐さして夜食の拵へ。詞 井戸ばたから歸つて見れば。かいくれに見へぬ故。狐狸がかどはかしたか。神隱しといふ物か。若人買の業ではないかと。案じくらして太鼓地鉦。手足は血みどろ泥まぶれ。日比はこはいと晝でさへ。得行ぬ野はづれ山坂を。尋ネ步行も子故の闇。詞 現在親のこな樣が。盗ミ出して殺ふとはコレ。是程も氣が付ぬ故。地 あらぬ苦勞をしたはいの。詞 お主の爲にかう〳〵すると。いふて聞して下さつた迚。めつたに人に言ッ樣な。女子でないといふ事も。是迄連レ添女房の地心。知ッて居ながら胴欲なむごい仕方と。身を投伏きゑ入。〳〵泣沈む。夫トも胸迄みちくる淚呑ミ込み。詞 ヲ、其恨尤じや、大事の〳〵御身代りと。案じ過して隱した故。氣をもませたは堪忍してくれ。去りながら。そなたの苦勞は尋る內にも。どこぞに居よかとまだも賴み。おれは我子を盗ミ出し抱イては行どお身代りと。覺悟極ノた心からは。生キた躰レの樣には思はず。石塔を抱たと思へば。手足もしびれてあるかれぬ。そふとは知ラず坊主めは。鼻へいこふと泣故に。道でコレ。此風車と白せつかう。買てやつたらきげんも直り。ほた〳〵と悅んで。たい〳〵すると押戴き。爺も喰とて喰かけを。おれが口へ押込ンだは。親子一ッ世の暇乞。水盃のかはりじやと。思へば骨身も碎る樣に有ッたはやい。〳〵。コリヤ夫レはまだしも其後は。泣せてはならぬ故。可愛そふに猿轡。うん〳〵とうごめくを。荷箱へ入レてかつぎ廻り。若殿樣の御身代りと。思ひ切ッて一ト思ひに。首切時の心の內コリヤ。どの樣に有ふと思ふぞやい。〳〵。推量してくれ女房と。地 いふにおさちはかぶりふり

詞聞ヶば聞ヶ程胸がさける。モウいふて下さるな。地死たいわいのと打伏て聲の限りを。なきつくすは目もあてられぬ次第なり。地豐勝立て一ト間より。持出るは宮の御裝束。詞汝が心は主思ひ。久丸が身代りなれ共。誠は宮の御身代り。地せめて冥途の公服にと死骸に懸れば平内夫婦。ハアめうがなや勿體なや。詞命一つ捨ずんば。陪臣の紛レ風情。御ン裝束をきる事も。地ないてかへらぬ野邊のいとなみ寶祚の。御すへぞと世上へしらすも一トつの方便。心ばかりの輿車廻り逢たる主從が。追付ヶ朝敵打ほろぼし君は歸洛の御所車。御身代りとかくごせしわが子の無事を見るに付思ひ。廻せば廻す程。心細さの糸車。賤のをだまきくり返し。女同士のくど。〳〵。〳〵。片輪車のよるべなき。さいの河原の石の數一重つんでは。父戀し。二重積ンでは母戀しこひし。〳〵の石車。つもる思ひは稚子の。かたみに殘る風車。何に付てもいぢらしく。我は二目と水車。心を久米の平内夫婦野邊の。おくりと　三重へ　立出る

第九

平家往昔は。草ぼう〳〵たる。武藏野や。地人もまばらに隅田川。こなたの岸は海道の。往來の足におのづから草の。淺きを名に呼て淺草　村と著き。文彌　詞爰に檜熊の濱成同武成。友成といふ三人の兄弟有。父は檜熊。郡領迚豐嶋郡の領主なりしが。地觀世音の尊像を。紛失なしたる罪に伏し。世を去り領地も沒收せられ。有ルに甲斐なき。身馴棹小船に打乘尊像の。有所求る網の目に。風もたまらぬ彌生

の空。そこか爰かと一心ン不亂。南ン無観世音菩薩。南無観世音ぼさつと。口に佛ヶの水底をさがし。歩行ぞ奇特成。地兄弟岸に船差寄。詞イカニ武成友成。おことらも知ル通り此隅田川と申は。當國秩父の奥より流れ出。上にては荒川と呼近キ邊りを隅田川。又は淺草川共いひ。川末に至りては宮戸川と呼習はし。利根につゞける大河にて底深く水つよし。然るに宮戸川の沖に當つて。地夜な〳〵光明輝くは。詞観世音の尊像水中にまします故と。誰レいふとなく云ィ習はせしは。天に口なし人トを以ていはしむるの道理。地何卒さがし奉り。詞御主人ン中臣様へ差上なば。未來にござる親父様への追善供養。是に過たる事あらじと人目には獵師と見せ。地毎夜網を入れ共、詞今に尊像の有ッ所。地知レざるは是非もなき次第やと。打涙くみ語るにぞ、地武成友成詞を揃へ。詞いかにも兄者人の仰の通り。御主人中臣様聖徳太子様より預り給ひし。閻浮檀金の觀世音の尊像を盗れ。親人檜熊ノ郡領殿は。守護の役目の言譯なしと。腹切て果られし其時の御無念はいか計。思ひ出すも胸ふさがる。御主人は世を見限りてお行衞知ず。我々は此體たらく何卒尊像を尋出し。太子様御遺言の通り此淺草に一宇を建。主人の御家を取立。親人の迷ひ晴さんと思へ共。今に尊像出給はず。先達て蝦夷が手へ奪取置しかど。光りを放ち飛去給ふ程靈驗あらたの御佛成ば。我レ々が志通せぬ事はよも有ルまし。觀世音の妙智力には。枯たる木にも花さかせ。向ふ刄も段々壞。水火の難も救はんと。御誓願は有ながら拙き運の主從は。御佛のお力にも及ばぬ事かと世を恨み身をかこちたる。悔泣斷。とこそ聞へけれ。濱成涙押拭ひ。詞我々こそ身の欲で

主人ッへ忠義信心ッおこたらずと思へ共。佛のお目で御らふじては忠義は薄く信心がたらぬ故。水底に隱れ給ひ。出現なきと覺へたり。地今日より心一決して尊像出させ給ふ迄は。此所を立去ルまじと。大願おこしさがして見ん。詞ヲ、望所の御差圖是非〳〵出させ給はずは。地此川浪に身を捨て再び宿へはかへるまじと思ひ詰メたる捨身の行。詞斯いふ内も手間つぶし川下より片端から。さがして見るが念晴し。此世の名殘暇乞。地サア〳〵やらふところを取リ直し。漕出さんとする所へ。詞ヲ、イ〳〵。と聲懸來るゑせ者は並木村に隱れなき通リ者の秋九郎。詞コレ〳〵兄弟の衆。逢たが幸イ噺したい其譯ヶは。こなた衆の妹お藤が事。第一器量が吉野山。其上氣たてがわつさり者。そこで我ら大に氣有リ。ナントおれが女房にくれる氣は。中町か〳〵。尤こなた衆の氏系圖。昔は殿樣今では其ざま。地我レ々が商賣は長と半とのいきさつで。一チ夜けんぎやうつかみ取。詞貴樣達のお爲にもなら柴々。地呑込山かと一人リして受ヶつ。答へつ早合點濱成詞をやはらげて。詞イヤモ秋九郎樣のお詞忝ふはござりますが。親兄弟のまゝにもならぬ物は緣ッ邊。急にどふとのお返ッ事も成ませぬ。其上貧乏閙がしい我レ々が此拵。相イ手に成てゐられませぬ。又其中チと言イ捨て地舟押出せは秋九郎。詞アイヤコレ〳〵そふもぎどうにはいはねへものだよ。ヲ、イ〳〵と地呼ど。わめけど其甲斐もはるかに。隔たる船と陸。跡に殘つて只獨。あつたら口の秋九郎詞エ、いま〳〵しいと地つぶやき〳〵行過る。思ひがけなき小かげより。詞申々遊んで行な地と聲かけて引とゞむるを腹立まぎれ。取て突退月影に。すかし詠てア、ラあやしや。詞申

々と留た故。夜鷹かと思ふて見れは怪有化鳥な形。ム、聞へた〳〵。扨は狐の化ぞこない。コリヤ誰じやと思ふ忝くも並木の大通秋九郎様といつてや。湯屋の窻でけむつたい男だによ。うぬらに化されてたまる物かい不景氣な畜生め。ぶち殺て藥喰と地掴みかゝればア、申々そんな者じやござりませぬ。詞コレ私でござりますと地ちやくとはづせし前髪かづら。下は白髪のばち鬢僕。天窻は藥鑵。顔には白粉。體は振袖。ウタイ鳴聲のろまに。似たりけり。地二度悔りの秋九郎。詞ヤ、、わり様は一つ長屋の佐次兵衛ではねへか。どふした事でソレ其形はと。地問かけられてサレハサ。詞わつちや若時から小器用で。藝一道は何でもござれ。前もさぬきの金比羅で。猿のかるわざ大當をした故。に一つと一つ長屋の佐次兵衛殿。四國を廻りて猿と成の〳〵と。前も歌に迄うたはれたわつちなれど。年寄ては埒明ずわざはしろゑず元手はなし。そこで思ひ付た此形。前髪かづら大振袖此河岸端に立て居て。若衆の通るを見かけ。申〳〵遊んで行なと可愛らしい聲色で若衆の夜鷹を始たがサテ思ひの外の大當り。元手の入はおしろい計。折には須磨の地浦千鳥。といふ奥の手をくらはせて。毎晩二百か三百宛。しめこの兎月影にお前を見ちがへ呼かけて化のかは顯はして退ました。是が本の月夜に釜。ぬかれるはわしが商賣。コレかう前髪かづらかぶつた形は。昔駒込吉祥院の小性吉三郎と言代物を、廿四文で遊ぶとは。廿四地孝の郭巨とやらで。詞金の釜の掘出し若衆。お前へも一切ちよん極りちよつきり遊んで行なよ。コレ秋九様地氣はねへかへと。しなだれかゝれば。

詞アヽらつちもねへおれはきうくつな事はきついきらいだ。高野六十那智八十と譬にやいへど。神武天皇以來親仁の若衆は是が見始。そして貝酌子の口雨した樣な其しやつつら。蓼酢でもいけはしねへモ誤つた是だ〳〵。本ンに商賣は草の種とやら去リとてはけしからねへ。とんだ思ひ付をやらかしたが毎晩〳〵遊ぶやつらがうまふ喰ていけばよいが。てんねき黒イやつに見付られて化が顯はれた其時は。マアどふちやらかすぞ。へヽ夫レこそ味噌じやねへが智惠まん〳〵たる此佐次兵衞。すでに此中も去ルお屋敷の中間ン衆に馴染が出來て。六百で泊に往て。夜の明る迄寐忘れて狼狽て起るとて。此かづらを此樣におつことしたを見付られ。大かたり。どろぼう其分ンではすまされぬと。どうつかれた其跡をすでに大屋へ地預んと上を下へと大騷ぎ。尻のわれるといふ事は此時よりぞ始りける。ムヽソリヤとんだ大事。シテ仕廻はどう付た。サアそこが床がけの傳授事。何をいふても返ン事せず。地しやくり上〳〵。只さめ〳〵と泣居たれば。詞きやくもあくたいつき草臥。すこし氣のめいつた時分ン。涙と倶にかき口説。詞私じやとて能イ年しで。若衆に成は其じゆつなさせつくろしさ。あんまり氣味の能イ物じや地ござりませねば何のマア。好キこのんでしはしませねどひとりの孫が疱瘡。なみの惡イが不仕合。たゝきはづしや喰はづす。粉レも嫁も挊を止看病にかゝつてゐる故。けふの煙も立兼るそばで見る目のいぢらしさしやう事なしの此商賣。あはれと思ふて下さんせと。膝にもたれて正體なくかつぱと伏て泣ければ。詞さすが鬼神に横道なし。こけめらが哀がつて六百の約束を。二朱銀一枚投出してアヽいはれ

を聞ば氣の毒千萬。随分ン孫を大事にせよと。何ぼ世間ンが世智辛ても。迷い安キは色の道。金のとれるは此商賣地と咄すも欲の歌川邊の螢。己が尻の光りより。きんか天窩と目の玉の光り爭ふ。計也。詞ムヽソリヤとんだ事つかもねへ能イ株に有リ付イたと地咄しの最中。りん〳〵とりんの音。秋九郎耳そば立テ。詞アレあのりんの音は。鐵炮和尚が奉加から歸りがけ。此中おれに賴んで置イた事が有ル。コレかう地〳〵と呼て佐次兵衛を物蔭へ。隱す間もなくりん打ならし、詞相州小田原相談寺鐵炮和尚しやれ塔建立と地いふも口癖長繩手。歩み來るを秋九郎。詞コレハ〳〵和尚様夜ルよなか御精が出ます。ホコリヤ秋九郎殿何方へござらしやる。ハイ此中おめへのお賴の品ほう〴〵さがせどあやにくと。出來兼たをゑんやらやつとめつけた故。只今お寺へ參りがけ。能イ所でお目にかゝりました。サア和尚様。大の極りちよ〳〵らでやござりませぬよ。御賴の彼若衆よい代物が出ましたと地。聞て和尚は打點き。詞夫レは近カ比忝い。アイ幸イの月明ガりお目見へを致させませふと地佐次兵衛を連レて出れば和尚は老眼。懐中より目がね取出し。ためつすがめつ差覗き。詞ホヽ色白。なよい生れつき。年はいくつ名は何といふぞ。アイ年は明て十三。名は猿之助と申ます。ハテノウ猿之助とはおつかない名でござるの。アイ夫レは此秋九郎が能ク存じております。此若衆の親は元ン來が四國生れ。佐次兵衛の緣を取て此子を猿之助と付ケました。ム、先ッ猿といふ字の目出度さは。ム、器量が十人なみにもまさる。ム、。彼所が女にまさる。ム、。こつちはいはざる。ム、。お前はしらざる。ム、昔まつかう去ル所から掘出しの此若

衆。ム、成程〳〵随分ン脊格好は能そふなが老眼で委には見へ兼ると月あかりへ立チ廻ハれば、コリヤたまらぬと秋九郎。我身をちやくと。隔の垣。詞イヤモお目利には及ませぬ。私が能見て置キましたからは本ン阿彌の極メ同前。先ツ脊はすらりつとして。高からずひくからず。ム、腰もかゞまず。ム、。成程〳〵そふ見へます。肌はぬんめりやは〳〵ぼちや〳〵として渡りじゆすのごとし。ム、。痩ぼつちの鮫肌にては御座なく候。成程〳〵そふ見へます。鼻筋通つて顔は丸顔。ム、。皺少しもなし。成程〳〵そふ見へます。歯並よく。ム、。少々抜ても目に立ず。成程〳〵そふ見へます。はへ際薄からず濃からず。ム、。白髪一本ンもなし。成程〳〵そふ見へます。大極上々吉無類飛切リ札廻し安賣。得度夫レから御らふじませふ。成程〳〵こなたの肝煎程有ツて殘る所もない上臂。拘へませふか嘸給金ンが高ふござらふ。いくら計でござる。アイ。五年切て百五十兩。ワア、コレコレ〳〵〳〵和尚様〳〵〳〵。ア、イヤ氣が付ました。あんまり高さに悔りをして目を廻しました。サ、、、そこが拙者が働キ。ちつとこちらに急に金の入ル譯合故。ぎり〳〵の所をぶんまけて申ます。今三兩お渡しなさりや五年は扨置。十年でも百年でも。ム、。千年でも萬年でも。ム、。年季なしにお寺へ上ゲ切に上まするとの。地聞て和尚はゑつぼに入。詞夫レはきつく安イ代物。あんまり安スすぎて合點が參らぬ。盗ミ物ではごさらぬか。ヤ和尚様ついぞねへ。そんならよしになされませ。いつそ連レて歸りましよ。サア若衆あゆばねへか。地と氣を持タされてア、コレ〳〵今のはおれが出そこない。疑の心ンさいふて佛ケのおきらひなされる

事。いざこざなしに拘へましよ。是が則チ安シ心シ決定。直クに給金シ渡しませう地と觧くり金を小粒で十三。詞壹歩は貴樣へ骨折賃と。地請取渡しを見て居る若衆シ羨しげに立寄ルを。秋九郎は咳ばらい。詞ヱヘン／＼此若衆はずんと氣の奇麗な產れ。錢金の中に置イてもお氣遣はござりませぬ。そして又踊が名イ人鳥渡お目に掛ケませふ。そんなら向ふ嶋の大黑屋孫兵衞が所で座敷借リませふ。イヤ孫兵衞が所はきついはんじやうで皆ふさがつてゐる。取リあへず是で致ませう。是太夫ソレお染といはゞ立たりな。

歌嫁入リ姿でころりとせいコレころりとせいコノヲ、ヲ、、／＼あろかいな。今宵はしつぽり聟樣と新枕コレ新枕。ヲ、ヲ、、／＼嬉しかろ。鹽屋女房衆は能イ女房じやへ。コレヤツトセイ能イ女房じやへ。ヲ、ヲ、、／＼外カに有かいな。ソリヤ／＼／＼そこらでちよつこり日和見や／＼。ヲ、ヲ、、／＼有かいな早めてこい。そつこでせいと秋九郎。こそ／＼／＼と歸る共。知で圖に乘リ踊リの拍子。かつらのぬげたを見付ケる和尙。ヲヤ／＼／＼／＼。若衆の天窓が藥罐と化たは。是か本のとんだ茶釜。地狸か狐か天狗かと呵れた顏に佐次兵衞は。破れ。かぶれと聲張リ上ゲノリ詞相州小田原相談寺鐵炮和尙憐に聞ケ己レ坊主め其鼻で多くの若衆を。せつなからせし報により。地獄へ連レ行釜。煮にせん其爲に。愛宕山の次郎坊若衆と化て來つたりと。地荒にあれ出す忿怒の形相。和尙がた／＼歯の根も合ず。助ケ給へ南無阿彌陀／＼と跡をも見ずして迯歸れば。ヤア迯るとて迯そふかと。跡を慕ふて追かけしが。立歸つて夫レよ／＼。詞秋九郎三兩壹歩。追付て割前取んかイヤ／＼人シ間シ業ではおこすまい。

ヲ、夫レより日比信ずる大山不動へ誓をかけ。天狗のついでに天狗となし。秋九郎が三兩一歩の割前を
さらしめ給へ。南無奇妙頂禮。さんけ〳〵大山大聖不動明王どふよく三兩まんざらせんから相談せなん
だらよかつた。今更うんと言ッておこすまいのふまくさまんだきめうてうらいと飛がごとくに三重へ走リ
行。やゝ更ヶ渡る短か夜や往來もとだゆる川端傳ひ。家來引キ連レ歩み來る所の代官蛇塚五太夫。追々
來るは近郷ノ庄屋年寄。御前にひれ伏は 地 床几直させくはん〳〵と腰打かけ。詞 ホヽ何れも大義〳〵。
夜更て此所へ呼寄し子細といつぱ。天竺より渡りたる閻浮檀金の觀音の像。聖德太子の思付にて鎌中
臣としめし合せ。此淺草に安置して金龍山淺草寺といふ伽藍を建んと催す中。太子のてこねたはこつ
ちの仕合。主人蝦夷公大望の思ひ立。彼觀音が世に有ッては諸人が佛ッ法に歸依し。道の法のと譯ヶ隔を
ぬかし。謀反の邪魔に成ル故に佛ッ法を破却せん爲。密に彼觀音を奪取。太子方の奴原ぞろ〳〵と仕舞
て退ヶ。大望の旗上ヶ一味連判のどさくさまぎれ。彼觀音がなく成た故方々さがせど今に知レず。しかる
に此淺草川の川下。宮戸川の浪間に夜な〳〵ふしぎの光リさすは。觀音の所爲なりとの取リさた。又濱
成兄弟三人の奴等は。親檜熊郡領が觀音を盜まれ。腹切てくたばつた故知行に放れ。今は獵師と成下
つたを悔しがつて。毎夜〳〵網を入レ彼觀音をさがすよし。若もきやつらが手に入ッて中臣が世に出れ
ば。蝦夷公大望の妨。見付ヶ次第引ッたくりてさし上よ。サア汝等は此川端に隱れ居て。法螺を相ィ圖に
欠付ヶよ。いそげ〳〵。 地 ハツト心へ庄屋年寄川下さして別れ行。比は彌生の。十七夜。照もせず。くも

りもやらぬと詠じたる。おぼろ月夜も武藏野は。かげもなく叉。隈もなく流れ。はるけき隅田川。水に映じてありく。さながら。晝のごとく也。詞濱成兄弟三人は。地そこよ爰よと打ッ網の。袖の雫や腰簑も氷る計の川風も。詞いとわで命捨小舟。地弘誓の舟と一筋に覺悟極メし胸の內。殊勝にも叉いぢらしゝ。地遠目に見付る五太夫がヤアく家來共詞アレアノ川下へ舟こぎ出し網を打ッ三人は。慥濱成兄弟の奴原。いかにも左樣でござりますと。地家來諸共目も放さず。見る共知ラず兄弟は。たぐり寄セては叉掛る。臂は睫の身鹽梅。拍子取リ楫おも楫に水と。船との退キかげん。心に念ン彼觀音力キ。一心ン凝たる網の中。月の光か夫レならで。あたりまばゆき光明を。見付る此方もともに恟り。詞ヤアく者共、今の光リアリヤ何だ。イカニモアレく叉光るは。扨ッてもふしぎといふ內に猶赫奕たる光明に。兄弟いさんで引上る網に懸りし尊像は。まがふ方タなきゑんぶだごん。ハア、、、有がたし忝しと押戴き。三拜九拜天にも上る悦び淚。地五太夫いらつてアレ觀音を引上たは。サアくつゞけと用意の舟に飛乘飛乘。相圖の法螺を吹立く。こぎ出す。兄弟は陸の騷ぎゆだんならずと沖の方。船をはるかにこぎ退れば。方々手分ヶの庄屋年寄思ひくにこぎ出しく。物騷敷ク聞へける。地尊像大事と濱成は只一人小船に乘。櫓を押切て陸に上り欠出す向ふより。數多の足音立戻れば。こなたも人ト聲とやせんかくやと尊像を。草むらに隱す間もなくばらくと追取卷。詞ノリヤアく濱成觀音を渡せくとせちがへば。ヤア愚人ッに聞す詞はなしと。地拔合して丁々はつし叶はぬゆるせと迯行を。遁さじやらじと三重へ追て

行ッ地實や短き春の夜のしのゝめ告る明ヶ烏。夜はほの〴〵と明にけり。歌里の子供の打連立て。籠を脊
中にきりゝしやんと脊負て。鎌腰につんざして。賤の。手業の名も朝草を。輕ひ足取ちよこ〳〵走り
松もこい八もこい誘連レたる草刈童。詞サヽ皆こい〳〵。コレ〳〵爰によい草が有。サヽ〳〵刈ふと
立ならび。手々に鎌を振リ廻し。刈や白茅の穗に出る。わるさ盛リの。鬼薊ちよつと。手を出す早蕨を。
じやうだん間荊と年かさがはづす棘や。葎。ノウヲツト虎杖赤地利。蕣蒲公英つぼ紫花地丁。ごぎや
う黃瓜菜佛の座。地思ひがけなき目先キの尊像。ハツト飛退キコリヤ何だと。驚ク子供の其中に山の大將
長之助。詞イヤ〳〵おつかない物ではない。是は彼お觸の有ッた觀音樣。かうして置クは勿體ない。ヲ
ヽ觀音樣なら捨ては置れぬ。お堂を拵へ入レたが能イ。ヲヽ夫レがよかろと地そこら見廻し立枯の。藜の
莖を切リ取て心計の四足厚。尊像をすへ奉り。一度に合掌禮拜す稚心のしほらしさ。藜堂とて今の世
迄其名は隱なかりけり。地かゝる時しも五太夫主從濱成を見失ひ。船を早めて著間を待チ乘飛上り〳〵。
きよろ〳〵目玉尊像見付てヤア〳〵觀音が爰に有ル。してやつたりと立寄ルを。草刈共は押隔。此尊像
はわしらか拾ふたやる事はならない〳〵。ヤア推參ンな小びつちめら。一チ々首をならべんと。切ッてか
ゝるを事共せず。手々に鎌を打ふり〳〵。右往左往に 三重へ戰ひしが。地佛ッ力加る草刈に切リ立られて
五太夫主從　かいふつて逃出す所へ。取てかへす兄弟がかくと見るより五太夫が。首筋つかんでぐつ
とさし上。ざんぶと打込川の中。水を喰ふてあつぷ〳〵。天罪佛ッ罪まのあたり。こゝち能クこそ見へ

にけり。ホヲ、出かした弟兄者人。ハア有難しと尊像を守リ奉逸散に跡を見ずして三重へ立歸る

第十

地檜熊鹿ヲトリカヘリ野邊近く。家居しおれば鶯の。鳴なる。聲は。朝な〳〵聞淺草の草の庵うつれば。替る詫住居。濱成兄弟が留守を預る妹は。元ト手も細き楊枝見せ五倍子の粉を挽臼さへも。まはらぬ渡世くろもじの。磨楊枝やふさ楊枝かざる表の目印は。銀杏の古木下枝を。かた取軒の藤の棚春知リ顔に咲亂す情盛リや戀盛。銀杏のお藤と名にしおふ。地奥海道の通筋田舍道者の四五人連。店先キに立留り。詞是が銀杏のお藤サアが楊枝店。本ト宮八町の日のふんばり共とは違つてアレ見なさろ。さいた藤より生た藤サアがあらくめんごい。今朝の立チが早いでまだ店は出はるまい。顔見る事は成まいかとあんじ申たがッ思ひの外早く店をつん出し申された。自分ンは旦方達への土産に名物の楊枝サアを調べい。うん共は宿の嚊へふしの粉を土産にすべい。おれにもけなろ爰へもと。地買むくつけにフシ商イ上手。詞たつた今夜が明ケたにお前方は早いお立でござんすなア。夕部は千住泊かへ。サレハサ聞イてくれなさろ。草加から日が暮レ申たを御女郎を調へべいと。がいに急いで千住サアに泊り申たが。運の悪ルさと自分は狐臭の有ル女郎サアに取當リ。なじやうにもかじやうにも夜中臭て我折レ申た。コリヤハアいけない事だとまだ東シもしらまないに。千住サアを立チ申たと。地聞て殘りの道者共。詞ヲ、夫レで聞ッへ申た。いつも

しつぶかなお身様が。むせうに早く起なされてかしましくいぎやり申て。樂しんでゐる自分ッ共をたゝき起し。ねむいあげくに小塚原で犬サァニ取リ巻カれてたまげ申た。夕部の勤メはお身サァ一人リではらひなさろ。ヲヤ〳〵〳〵おつかないソリヤあちらこちらだんべい。皆がめんごいを取ッて おれに狐臭を抱せ申たからは。おれが勤メは何やうにも惣々からはらいなさろ。思ひなしか體サァがまだに臭い。然れば脊中ヵがうぢ〳〵と千手觀音サァがうつりやし申さないか。イヤ其せんじゆ觀音で思ひ付キ申た彼天竺から渡つた閻浮團子とやらぼた餅とやらの觀音サァを。此所へ建立し申さたの有ッたは久しい事だが。まだ明キ地でござり申。サレハサ其觀音サァが借金にせつかれ申たが。欠落をしていまだに行衛サァが知レ申さぬ。コリヤハアこちらがしら子ヱ事だ。サア〳〵急いで參るべい。ソレ姉ッ様錢子を取リなさろ。ヲヽ皆様よふお召シなさんした。又お下向にお寄リなさんせへ。アイおさらばでござり申と。地つい言事も尻ばりに訛ちらして急ぎ行。地お藤はあたり見廻して。一間の方タに打向イ詞中々お姫様。朝の内は人ト通りもなければ。誰レに遠慮もござりませぬ。是へお出遊ばして。藤でも御覽遊はせと。呼れて障子押開き。立出給ふ綾歌姫。忍ぶ此身は久サかたの。天津乙女の地に落ていつか歸らん雲の上。我夫戀しと。明ヶ暮に。したふ餘りにおも痩て。見る目いぶせき御風情。詞イヤノウお藤。中臣様や弟宮のお身の上。あんじ續けて夜の目も合ず。地かなしいうきよにながらへて。うき思ひをせふよりも。いつそ死たい〳〵とかこち。給へば。詞ヲヽ又きな〳〵と。お心弱い事おつしやります。譬の

ふしのうきよは車。又廻り逢とやら申ます。したがお言号の聟君中臣様。御婚禮もなされぬ内。ちりぐ／＼のお身の上。戀しいは御尤。私が身にも覺へ有ル。おはもじい。事ながら。地思ひ出すとやるせがない咄して成とうさはらし。お聞なされて下さりませ。詞日外兄様達に連レられて。大和廻りから京參り。三輪のお山へ參詣の時。どふ間違ふてか道におくれましてな。私一人りうろ／＼と。茶見世の内をそこか爰かと。一ッぺん尋る其内に。深編笠の浪人姿。立派なお侍ィ様がござんした故。申／＼私は連レにはぐれて難ン義致しまする者でござります。ケ様／＼な風俗の人トを。お見請ヶはなされませぬかへと。編笠の内を覗た所が。其美しさ可愛らしさ。年の比は廿三四で。さんと生キた雛様見る様なお顔。テモマアあの様な御奇麗ないとらしい殿御も有ル物かと。思ひ付クとサア身中チが震ふて來ましてな。夫レからモウ何にも物がいはれぬと思ひなされませ。夫レからうぢ／＼として居たればな。あつちもちつと計リ氣が有ッたかしてな。ヲヽ夫レは嘸難ン義で有ふのふと。手を握られた其時は。私はとつといつそ夢中に成ましてな。夫レから手が入リば足が入。茶店の座敷で終轉び寐。互ィに名所聞キ置ィて。又の逢瀨と思ふ間も。にくらしい邪魔が入リ。別れ／＼に成たれど。地其俤を片時も。忘るゝ隙はござんせぬ終した縁も好ィた同士、忘れられぬが戀路の習ひ。詞ましてお言ィ号の殿御の事。明ヶ暮おしたひ遊ばすは。地お道理様やと諸共に。身につまされし貰い泣。思い出しては猶更にいとゞ床しさ小石道アレ／＼誰レやら來る足音 マア／＼奥へと姫君を。一間へ忍ばせさあらぬ體。詞コリヤコリヤ／＼／＼お藤迯な／＼

と地わめきちらして秋九郎店の先に。大あぐら。詞お藤コリヤマどふしてくれるぞいやい〱。日にお百度參りする程來て。頤のかいだるい程口說のに。酢のこんにやくのとぬらくら返事。いつそけじやうでやらかそふと。夕部も兄貴に相談すりやこいつも同じくぬらくら〱。ずる〱べつたりにするのか。そふ茶にしられてはおれも立ぬ。けふは又腰をすへて得心する迄居催促。借金口說に口說つもりじや。コリヤヤイ〱お藤。あんまりじやぞよ〱。此様にもがかす事はないわい大がいなら聞てくれいやい。一體貴様悪い合點じや。何ぞ色事といふ物は貴様やわしらが初めじや有まいし。百人首の中に有小野小町を見い。日本中はおろか。唐天竺にも又と有まい程の美人。時に公家の。ア、てきが名は何とやらいふたはい。ア、アレハ何でもちつと計といふ様な名じや有たはい。ア、ヲ、夫少將よ。其少將が九十九夜サ通ふたとサ。とふ〱百日めに小町を蹴倒した。夫でさへ今仰山そふにいふが。又おれはそんな事じやない。百ケ日や三百ケ日や三年や七年や十年や廿年の事じやない吾儕が腹の内に居やる時分から惚て居るわしじや。何でもけふはよい返事と。地しなだれかゝれど。こなたは構はず引臼の。音に紛す計也。詞テモマアじやうのこはいおちやつぴいじや。是程にいふのに。責てやかましいとなと思はぬかい。イ、ヱ何共思はぬはいなア。初の内はうるさかつたけれど。毎日〱の事じや物役じやと思ふて聞てゐる。モウ耳がたこに成たはいなア。ヤたこさは別して有難い。たもじと聞てはたまらぬ〱。地逆縁ながらと後から。むりにべつたり抱付。詞ヱ、何じやいな

あたあはらしい。店の先キで外聞が悪いわいな。放さんせいなア〳〵と。地いへ共聞ぬ無體無體振放せば向ふ抱。ちよつと口〳〵顔背け。せんかたつきて有合五倍子の粉。摑んで顔はふしだらけ。コリヤむごいめに合したと目顔しかめて。狼狽る。其間にちやつと飛退ィて。詞夫レ々見やしやんせ。あんまりひつかうじやうだんさしやんすによつて。其様なめに合ハしやんす。今ン度からひつこいと。又ふしの粉じや忘れさしやんすな。ヲヽよいざまじやと門口へ。地突出して跡ぴつしやり。方角忘れさぐり廻るコリヤゑらい目に合した。目の中へふしの粉とは餘ンりじや。目の玉がびんろうじに成たかしてそこら邊りが眞黑じや。コリヤモいくぢはないはいと。地さぐり廻れど俄カ盲。柱で天窓。アイタヽヽ表へ來かゝる虚無僧の。笛も耳へは入ラばこそ。詞コリヤいま〳〵しい目にあふた。目が明カぬはい〳〵。どふすりや此目が秋九郎。おへないとんちきむごたらしい。コリヤマどふした物で有ふ。ヤ思ひ付ィた事が有ルと。袂から出す淺黄頭巾。地さぐり當つて竹切レ取リ上。詞叶ひませぬめく〳〵〳〵。盲には。何も後生と思し召。娘のたこを。どふぞとらして下さりませ。めく〳〵〳〵と地しやれちらし野郎の蜘を見るごとくはい廻つてぞ歸りけり。地跡は門の戸そつと明ケ。詞ても憎てらしいあの形リはいの。夫レはそふと。能ィ所へ虚無僧様がござんして。惡ク魔を拂ふて下さんした。マアはいつてお茶でも上りませ。夫は近比忝い。然らば御免ン成ませうと。地しづ〳〵はいる形リ恰好お藤は始終心を付ケ指覗たる笠の內。詞ヤアお前は。こなはと。地互ィに恟り天蓋を。ぬげば猶更違ィない。詞日外三輪の茶見せにて。初メてお

目にかゝつた娘御。お前の事を明暮に思ふてくらす此月日所も有ふに私か内でふしぎに逢ふたは深い縁夢ではないかヲヽ嬉しさ地すがり付ば抱寄じつとしむればしめかへし。口と口とはなま中にいはぬ色なる山吹のはなれがたなきふぜいにて嬉し。涙ぞ道理なる一間の襖あらけなく姫君は走出二人が中を引わくる。詞ヤアそなたは綾歌爰へはどふして〳〵とふしぎ立とふに。娘のお藤詞ムヽ綾歌様を御存しの。お前はそんなら。ヲヽ中臣様じやはいの。エヽ。そなたの爲にもお主様。しらぬ事とは言ながら恨めしい我君様。お前のお行衞方々と。尋兼たる其内に。頼に思ふ川勝や調子丸はあゑない最期自らは蝦夷公にとらはれ。かなしい上に無體の戀慕。地ふしぎに命助りしは。様子を啣せば長事武成の介抱にて此内に身を忍び。辛苦苦勞のうき身の上。不便な共可愛共思し召れぬお心から。假に出合ふた人にさへお心多いたわむれ事。餘り氣強い胴欲なとくどき立たるすがり泣。お膝にさんと打伏て。さけてなかれは谷川の下行水にさそふらん地娘はむつと中押わけ。詞エヽお姫様あたいやらしい何じやいな戀に上下の隔はない。中臣様やらどなたやら知ぬ先なりや是非がない何ぼお言ふ号でもあなたさねたのはわしが先。お慮外ながらお前様に◐添せます事は成ませぬと。御手を取て引退る。詞イヤ〳〵何ぼ其様に言やつても。親々からの約束で天下晴た我殿御。イエ〳〵夫程大事の御殿なら。なせ吸付て居やしやんせぬ。手放して置しやんしたが。お前の誤り私が先イヽヤ自イヤわたしと。地引つ。引れつ今更に。何と詞も中に立。梅と櫻を両の手に。

持餘したる折からに。いきせき歸る武成が。何の心も我家の門口。夫レと見るより走リ入。コハ思ひがけなき我君様。存じ寄ラざる御對面としさつて。頭を下にける。三人ながら手持チなく。じつとしづまる計也。地中臣卿詞を正し。詞ヲヽ珍らしや武成。はる〴〵尋下つたる樣子は追て。何角指置キあはたゞ敷體。ハアヽさん候。觀世音の尊像をさがし奉らんと。兄弟三人心を合ヤ。此曉隅田川の川裾成。宮戸川の沖において。網にて引上奉りしを。敵方より奪取んと。多勢を以取リかこみしを。漸切リ拔ケ尊像を。守リ奉り歸りし所。ふしぎに是へ御入リ有しは。觀音薩埵の御引合。ハヽヽ有リ難し忝しと。地懷中の包より尊像を取出し。愼んで捧ぐれば。塵結んでから手水押戴〳〵。是も偏に兄弟が。厚き忠義のなす所と御悦びは限りなし。地武成いさんで。詞委細の事は追てお咄し。地爰は端近人ト目も有。アノ一間にて姫君と。つもる事共御物語。地ヲヽ兎も角もと姫君伴ひ心殘れど奥の。へ一間へ入リ給ふ。地跡にうつとり妹は。思ひ亂るゝもつれ糸。ほどけ兼たる。胸の内。地しらぬ武成飛立ツ嬉。詞サア〳〵妹悦べ〳〵。觀音様は手に入ル。御主人は御出遊ばす。モ此様な嬉しい事はない。ヤそれよ。我君にお姫様は。お言イ号計リで。御祝言ンはまだなかつた。幸イのよい折リから。ソレお盃の用意しや妹。コリヤヤイ。何をうつかりとして居るぞい。ソレ何ニ成リ共お肴。ハアかうと。あわびは有レ共片思ひ祝言ンには忌物。ヤほんに夫レよ御夫婦の睦しい様にむつの煮たが有ロ。又お子様もたんと出來る樣に。かずの子もよかろかいなア。ヤコリヤ妹そりやまあ何の眞似じややい。ヱヽ恨めしい聞へませぬ。ヤヽヽ何ニいふのじや。

エ、聞へた。さては旦那の男ぶりに。むだに惚の岡やきかエ、たわけめがたしなみおれさ。地呵れてわつと泣。詞モ兄様の手前。はづかしい。事ながら。地今更の事ではなく。思ひそめしは過し春お主様共露しらず。初メて三輪の神かけて。二世三世共心では。契りをこめし戀人様。詞何ぼ言イ号の姫君じや迚。目の前での祝言を。モどふ見て居らるゝ地物ぞいな。詞エヽ〳〵恨めしい綾歌姫。聞へませぬは中臣様。地と一間を目がけ欠行を。引戻して。詞コリヤ妹。ムヽすりや、先キ達て御主人に。アイ御主様やらどなたやら。知ラぬ先キ惚たお方。いかにお前が兄様じや迚。譯ケもしらずにしからしやんすは。ソリヤお前のが無理じや〳〵コレイナ〳〵はなしてやつて下さんせ〳〵〳〵。ヲ成程そふ聞ば尤じやがよふ物を合點せい。コリヤヤイ。牛は牛連といふてな。マ色事も相應が有物じや。アレアノ表の藤の花を見よたとへ松でも銀杏でもすいた木にまとひ付が。本シの木と木の仲間同士。どの様にはびこる藤でも天へのぼつてお日様に。からみ付イた様はないわい。コリヤ中臣様は誰有ふ。御主様成雲の上人夫ゞに賤しい我レ々ふぜいが。戀こがれるは今いふた。カノ藤のつるが御日様にまとい付ふとするも同前じやわい。及ばぬ戀とあきらめて。ふつつりと思ひ切レ。ヨヽコレ妹。よい物じや。どふぞ思ひ切てたも。ヤヤ思ひ切てくれやいと詞をつくし理をつくす。異見シも兄が眞シ身成。詞イエ〳〵どふ思い廻してもわしや何ンぼでも思ひ切れぬわいな。モ思ひ切らふ地と思ふても。儘にならぬが戀路の因果。面難は男氣のくせかうは氣かしらね共深キ心は。湖の底の底迄連添ふと。思ひし事も。淺はかな女心のやる

せなさ。戀こがれたる我殿御。詞人トにねこられおめ〳〵と。どふまあ何と見て居らりよ。兄様のお詞でも。是計は背きます。いやでござんす。わしやいやじや。いやじや〳〵地いや/じやはいなと一筋に思ひ詰たる心根を。地不便とは思へ共。忠義に心取直し。詞ア夫レ程に思ふ物。とふぞしてとは思へ共。モ此事計リは所詮叶はぬ。コリヤ此兄が一ッ生の頼じや。さつぱりと思ひ切れ。ヨ思ひ切レと。地いへ共更に聞キ入レず。又欠行を取て引すへ。ヤこいつが〳〵若イ者の有ならひと了簡すれば方圖もない。コリヤあそこへやつてはな。御主人シ達へどふも言譯がないはいやい。是非とぬかせば。手は見せぬと。地おどしの刄扱はなせば。詞サア切ラしやんせ生キてゐる内は思ひ切ラれぬ。お前の手にかけさつぱりと。サア殺して下さんせ切ラしやんせ〳〵。ム、スリヤ。命捨ても。思ひ切事はならぬナ。アイ。ヱ、淺ましい心じやなア。モ是非に及ばぬ。觀シ念シと。地振上は上ながら。いかにお主の爲じや迚。現在眞シ身の妹を。兄が手にかけ殺すとは。前世の業か因果か。と思ひ廻せば可愛やなア。詞渡世もさもしき楊枝見世。往來の人に顔さらし。兄貴を始メ弟諸共。獵師迄落ぶれて。心を盡せし甲斐有ッて。詞尋當りし觀世音。ヱ嬉しや長の憂苦勞。昔語リと思いしにふつてわいたる此しだら。地マ能々不運な生れ性詞草葉のかげで二親が嘸や恨におほすらんと。地思へば不便さいじらしさ。思はず刀をがはと捨どうど座して。ぞ泣居たる。地時しも表へどや〳〵と。草刈童二人連。門口より聲高に。詞濱成樣友成樣。二人の衆が大勢に取巻れ。危故に知ラせに來た。早ふ加勢に地いかしやれさ。言イ捨又も引返す。南無三寶

と武成は。欠出せしがいや〳〵。詞此儘にて出て行れず。地跡も氣遣ィ先も危し。さやせんかくやとしあんを極め地有合ッ細引キたぐり寄。泣入妹を小手縛り。藤のみきにからみ付。詞コリヤ必恨と思いおるな。地といふ間も氣遣ふ心も空飛がごとくに走リ行。地跡に。お藤は打しほれしばし。思ひにくれけるが心で心取直し。詞眞ンは泣寄リ兄様の。忝い御意見。皆私が徒から。お心いためる勿體なさ。堪忍して下さんせ〳〵。エ、、モヲ〳〵〳〵ふつつりと思ひ切ました。必あんじて下さんすなエ。さつぱりと思ひ切てはナ。モヲ〳〵あつちの方を見るもいや。わしや見やせぬ〳〵と。地立派にいへど、娘氣の。心引るゝ奥の間は。琴のしらべのしめやかに。歌明ヶわたる。そらの景色も。うららかに。ム、ウあの爪音はお姫様。ハテナア。さま〴〵のけふの逢瀬。何かなしにしつぽりと。御寐成ルで有ふと。思ふたは下タ々の心。アうへつかたと言ッ物は。本ンにゆるりくはんとした物。めつそふな琴所かいなア歌上みどりのまゆか。あさねのかみか。すいたゑだぶり。したいてかほる。詞ム、ウ聞へた。お姫様の初ッ戀。打ッ付ヶには恥しい故。歌によそへてぬれの仕かけか。ア、うらやましい。歌すかいでこれが梅の花。やどる。鶯と。のあふたどし。あふてうれしき。にいまくら。詞今の唱歌は。あふて嬉しき新ィ枕。〳〵。ム、スリや。さつきにから間取ルうち。モヲ御婚禮はとふに濟ンで跡の慰。是聞ヶがしのアノ琴歌。エ、見ゑらしい。あつかましい。いま〳〵しい。はらが立ッ。何ンの事じやいなア〳〵〳〵俤一ト間へ踏ミ込ンで。にくしと思ふ綾歌姫。恨をいはで置クべきかと。地又も逆立ッ嗔恚の炎。行んとす

れど縛リ縄。命限り根限り。引カれて棚はゆさ〳〵〳〵。我名も藤も。ちり〴〵に。花も心も亂れ。亂るる。亂れ髪。思ひ詰メたる嫉妬の一念鬼共成。蛇共成。姿のうろこ心の角。氣を紅うらのひら〳〵〳〵引ど。しやくれど縛リなは。ヱヽ恨めしい此なは目といてほしいと身もだへしかつぱと伏て。泣居たる。かゝる様子を最前より。見たか聞たかうそ〳〵と。伺寄て秋九郎。詞コリヤお藤。ヤアこな様は地と迯んとする。詞コリヤヤイ〳〵。何ぼ迯ても。ソレ其縄。さつきにおれをむごたらしい。めく〳〵〳〵〳〵の其報ひ。へヽヽ天ン人のはごに付ィた様な其形リ。どふせうとこふせふと自由なれど。得心せにや面白ない。さあ〳〵どふぞ。きまつてくれのかね。コレサどふじや〳〵と猫撫聲。詞ハテどふ成とならふ程に。マア此なは解て下さんせいな。ヲット合點。と言ィたいがマアならぬ。おれになはとかして置て。奥へほいとやらかして。すいた男に逢坂の。ハヽヽ。マアそふはなら漬〳〵。サア應といやよいめに合ハす。又いやとぬかしや。此だん平ラが。どてつぱらへ御見廻ィ申。サアいやか。おうか。サ返ン事せい。成程切ラれて死ませふが。責て此世の思ひ出に。おくにござる姫君や。中臣様にたつた一ト言。恨を言ッた其上で。死でも思ひはござんせぬ。コレ〳〵後生じや。地慈悲じやとかきくどく。詞ムヽすりや此なはをほどいてやれば。おくにゐる幻妻や。中臣に逢ッた上で。アイ。ヲヽ夫レ聞ふ爲計リと。地尻引ッからげ身拵へ。奥の一間へ欠入ッたり。ハツト驚キ身をあせり。いかゞと見やる間もなく。ばつたり太刀音ト諸共に。首引ッ提て秋九郎。すつくと立たる有リ様に。地娘は見るより詞ヤア其首は中臣

様。コリヤもがくな〳〵。こいつを殺すこ始メに言ては。有リ様にぬかすまいこ、ぬれに事寄白狀させ一ぱいかいたおれが狂言。コリヤ此首を代官所へ持ッて行ば。御ほうびはしつかり物。エヽいけすかないさち女らう。うぬらにけじめくはされてたまる物かい。ナンノ事だ地こ取ッて突キ退ケ逸參に行がた知レず成にけり。詞コレ兄様いのふ〳〵〳〵。秋九郎めが中臣様のお首を切て迯たはいの〳〵〳〵〳〵。エヽ悲しや情なや。さつきの御異見シ聞入レず。及ばぬ戀の妬故。秋九郎めにだまされ。大事の〳〵お主様。私が口から訴人シして殺させましたも同じここ。嘸や憎しこ思し召。此世で添ハれず未來でも。所詮添ては下さるまい。最早お顔を見る事も、叶はぬかいの〳〵。地何の因果でこんなめに、合ッ事ぞいのこ身をもだへ。立たり居たりうろ〳〵こ取亂したる。叫び泣餘所の。見る目もいぢらしき。地漸かほを振リ上て。詞思へば憎ひ秋九郎。喰イ付て成リ共敵を討。其跡にていさぎよふ。死で仕廻ふが我君や。兄様達へ身の言イ譯ケ。アどふぞ此繩の。こき様はない事か。エこどふせふぞいなア。ヲヽそふじや。引イては切レぬ此いましめ。明ケくれ賴む觀音様。此なはこいてたび給へこ。地心の誓。見世先の。臼に身を寄セ後ロ手に。摺付〳〵摺付る。女の一念シ佛ケの功力キ。ねんなふ切レるしばりなは。ハアア有リ難しこ逸ッ參にこけつ轉びつ走行。かくこは知ラず濱成兄弟。漸切リ拔我カ內へ。歸るも忍ぶ廻り道。詞コレ〳〵兄者人ト。一先御主人中臣様を。都の方へ御供せん。イヤ〳〵此友成が存ずるには。密に船にて、安房上總の方へ立退時節を待ん。ホヲ尤去リながら。先ッ御主人へ兩人共御目見へ申た其上

でと。地評義まち〳〵成ル所へ。道が違ふて半ン途より引返す妹のお藤。詞コレ〳〵〳〵兄様達。秋九郎めが私をだまし。中臣様のお首を切ッて立チ退ましたと。地皆迄聞ず三人は勢ひ込ンで欠出す。詞ヤア〳〵兄弟しばらく待。中臣は是に有リと障子さつと。押開き立出給ふ中臣卿。跡にしたがふ綾歌姫各装束改て。悠然として立給へば。コハ〳〵いかにと兄弟は。輌れ果たる計也。詞ホヽ驚キは尤。しばしまどろむ夢のうち。汝が急難を救はんと佛ヶの御告。夢覺て邊りを見れば。最前の尊像はましまさず。是は正敷觀世音。身替に立せ給ひしは。ハヽア恐れ多や勿體なやと。地聞よりはつと人々は奇異の思をなす折リしも。はるかに聞ゆる鐘太鼓。ときをどつとぞ。上にける。兄弟はつつ立上り。詞ノリ敵の寄スると覺たり。イデ地一ト當テと欠出す所へ。草刈童の十八連。秋九郎を高手にいましめ。山の大將長之助。尊像を指上で眞先に進ミ出。詞代官の下知によつて。近郷の百性共。此内へ押寄せんと計しを。太子の御恩を請し諸職人ン觸廻し。惡人共を討チ取しに。秋九郎めが中臣様の御首を討たりと。持ッて歩行は觀音様。ハツア、、勿體ないと我レ々が。寄ッてたかつて縛り上。尊像を取返せしと指出せば。地濱成請取リ謹で中臣公へ捧ぐれば。上段にすへ奉り各。ハット渇仰す。斷リ成かな今の世迄。金龍山淺草寺日本ン一の靈佛ッと拜れ給ふぞ。有難き。地お藤は立寄リ濱成が脇指抜取リ。自害と見ゆれば中臣卿及物もぎ取。詞ホヽ身の言ィ譯は尤ながら。悋氣嫉妬も正道の。心よりおこるといひ。兄弟が忠義にて本ン知に返れば我も又。今迄の中臣ならず。姫は本ン妻其ほうは妾として召仕んと。地仰嬉しき濱成も。詞ハア有リ

難き御惠みと。捨たる脇指振リ上て。秋九郎が細首を水もたまらず打落す。勸善懲惡御佛ヶは。すぐに此地へ安ン置せん。一味の職人ン呼びあつめけふは三月十八日。最上吉日釿初め。本ン堂。山門。隨身門。其名も。響く雷神門。五重の塔の尊くも。天下泰平參詣群集。お藤が名代楊枝見せ。兄弟は實隱なき。三社權現草刈は十ッ社の神と。末の世に。其名は。隱レ中臣の由來を。筆に書殘す

第十一

地弱能ヶ強を制する事。是天のなす所とかや。されば智勇の進中臣。檜熊兄弟が忠臣によつて。再び手に入觀世音。太子の遺敎いちじるく。武州淺草金龍山に安ン置有リ。地堂塔伽藍成就して。衆人の渴仰いやましにあゆみをはこぶ人ト群集。妙なる靈地ぞ有リがたき。猶近ン在近國都鄙遠近ン日參ン。講中つどひ寄リ思ひ〳〵のはた幟。地内は柳桃さくら。賑はふ春の松かさね。地裝束正しく進中臣 詞何と思はるゝ檜熊兄弟。かゝる靈地となりしより。日每參ン詣引キもきらず信心の。講中を軍卒として。都へのぼり朝敵蝦夷をほろぼさんと 地の給ふ詞の引ざるうち。蝦夷の大臣に大繩かけ。山背の宮をもり奉り。久米平内奉ノ豐勝。大いきついてかけ來り。ノリ詞尊ざうふたゝび御手に入。大伽藍成就のおもむきを傳へ聞。あづまへ向ふ蝦夷の大臣。途中に出合一ッ戰ンに打ほろぼし。雲貫連シかくのごとく。首にして持參仕候と。地中もおはらずヲ、目出たし〳〵。詞山背の宮の御即位都をさして登るべし。佛ッ敵ほろ

び國安全。地弓は袋に太刀は鞘。四海浪風鬼は外。福は內込大入の。とふから／＼太鼓の音。鷄驚ぬ豊竹の。代々に傳へし一節を。國萬歳と祝しけり

安永九子年三月三日

故人

福內鬼外作

右之本頌句音節墨譜等令加筆候師若針弟子如縷因吾儕所傳泝先師之源幸甚

元祖　豊竹肥前掾

座本　豊竹東治

江戸　本石町通十軒店　伏見屋善六

京　寺町松原上ル町　菱屋治兵衛

江戸　本石町通十軒店　山崎金兵衛

大坂　西横堀船町　天満屋源治郎

江戸　新材木町　松本屋萬吉

實生源氏金王櫻

浄瑠璃太夫役割

初段

弐段目

三段目

四段目

實生源氏金王櫻

故人 福内鬼外 遺作

序詞 兩雄並んで立ッ事なしと古人の詞目下。時は平治元年臘月中旬義朝追討の院宣蒙。安藝ノ守平ノ淸盛一門を指向はせ。其身はとゞまる六波羅の。帷幕の中にめぐらするヲロシヘ謀こそ。ゆゝしけれ。地 殊更寒夜の軍迚。御殿間毎の銀燭は星と輝。築地〳〵は大篝三秋の月明也。評定の間の中央には淸盛公出ッ座在せば。左右ゥには譜代の郎等伊藤武者景綱難波ノ八郎爲末。其外諸武士嚴重に威義を正して並居たる。地 淸盛仰出さるゝは。詞 やをれ旁。此度勅命に依て逆徒征伐せん事我レ向ふ迄もなく。重盛を始めとして一門の兵士等指向ヶたれば。義朝一ッ家の奴原今霄の一ッ戰に討チ亡さんは。一指をもつて鷄卵を押破よりもいと安し。誠や世俗の諺取ルにはたらね共。今年ン平治と年ン號改マりしも。世は平氏に治るといふ天の告。地 アラ心地よや悅ばしやと高慢。我慢の其有さま。地 兩人一度に頭を下。詞 君の仰に違ひなく。早速吉左右告來らん御心安かるべしと。地 いまだ詞も終らぬ所へ。院の御所ゟ知ラせの使。息を切ッてかけ來り。詞 扨も郁芳陽明待賢門の攻口は。重盛賴盛敎盛の三公に。從ふ軍勢ひた〳〵と攻寄スる。敵キにも兼て用意の備へ。輙く勝負も見へざる所 地に。惣大將信賴が臆病未練の

行跡に持口捨て敗軍ンす。是に乘じて味方の勢。喚き叫んで責立ッれば。詞敵は散亂惣崩れ大半討ォ取候へ共。待賢門をかためたる惡源太義平が。古今無双の勇猛に。少しあぐみて候へ共。十が九ッ味方の勝チ。地追々注進御座有べしとフシ申捨てぞ。引かへす。地清盛開く悦喜の眉。烈ッ座の士卒いさみをなし。フシ勢ひこんだる折も折。地又も馳來る垂井ノ軍治。御前ン間近く畏り。詞御悦び候へ軍は十分ン味方の勝利義朝始め朝長頼朝皆ちり〳〵に落行を。我レくいとめんと追ッ詰る。踏とゞまつて金子ノ十郎取分ヶわつぱの金王丸。魔利支天のあれたるごとく。彼レをあしらふ其隙に。義朝親子は迯延たり。地かゝる中にも舘ノ十郎仰を受し常盤御ぜん。尋出して奪取所。詞鎌田が女房總角が。さゝへる及に舘は討タるゝ共内に。常盤親子も行方知レず。され共なんなく彼女召捕て候と。地さもいかめしくフシ相のぶる。詞ホ、ウいしくもしたり去リながら。常盤の前を迯せしは殘念。併思ふ子細の有レば。其女目通リへ連來れ。地はつと立行程もなく。引キ出さるゝ總角が、何と解べきむすぼれに。しんくふさがる胸の内。フシみすぼらしげに蹲る。地清盛くはん〳〵と打見やり。詞源氏の錄をはむ鎌田兵衛政家が女房。殊に我ヵ郎等舘ノ十郎を討チし罪。憎きやつと思へ共。味方に取ッて推時はやさしき女。其志をかんじ清盛が申付ッる一条有。ソレ繩を赦し近ふ〳〵と。地仰に隨ひ繩取がいましめ解て介抱す。伊藤武者暫しとゞめ、詞コハ君の御意共覺ず。女なれ共鳴呼の者眼前舘が當の敵。傍近く召るゝは危ふきに近寄の理り。此義はきつと御無用地と。諫めに清盛高笑ひ。詞ハヽヽヽ譬彼レが惣身に劒を植共。我身に當らば燈

心同前恐るゝに事たらず。サ赦す地近ふと頤に招く底意は戀したふ。常盤の前にかけ橋は丸ふ見せてもふしくれし。フシ荒氣を包み柔和を粧。詞コレサ女其方は常盤をかばひ落せしとな。適々。が爰を能ク辨へよ、向後源氏滅亡の上は日本國中我手の下。いづくに隠れ忍ぶ共袋の鼠。捜し出して憂目を見する。今其方が一命を助ヶかへすは常盤を迎へる一ッの役目。招きに應じ來りなば。其身全き基ひとならんといふも色。色かへぬ常盤の松も緑子も。枝葉枯すも榮ふるも。善惡二ッは心に有べし。是ゟ常盤に尋逢此心を能ク傳へよ。地合點がいたか總角と。詞にはつと吐胸つき三世のお主を手引とは。聞も恐ろし忌はしや。己清盛一トさしとふりあをのきしが待暫ハし。仕損じて我命捨るは露塵いとはねど。此場を遁れ親子御の力ラと成が忠義ぞと。思案を極め面に會釋し。詞長ふ申も恐レ有。事を分ヶての御仰。罪有此身を助ヶ給はる此上は。常盤御前に逢奉り御情の數々を申上。せひ共親子御伴ひ來るはけふの御恩をほうずる印。地早お暇とフシ立上る。詞ヤレ待女。卽時の領掌呑込ね共。違背せば重罪たるべし。心を定めて立歸れ。ヤア〳〵者共總角を門外へ送り得させよ。必卒爾致すなよと。地戀は曲者清盛が。入リ日をにらむ兩の目も。女に細き命をも。つなぐ糸筋くみ分ヶて。心にしめて行總角。上る凱歌。夜嵐の谺に。ひゞき三重へ上かまびすし。地只賴め。大悲の誓ひ。有がたき。枯たる木にも花ならでヲクリ紅葉の。錦照はへし。本フシ地主の木どの秋の色。フシ春にもまさる氣色なり。地参指群集の其中に人目つゝめどくつきりと。水際の立女中連。歩路をたどる手いらずは。彌平兵衛宗清が獨娘の玉笹迚。年もいざよふ

月の顔、ぼんじやり風フシの品形。地お常小さのが口々に。詞イヤ申御寮人様。いかに戀が叶ふた迚。いつもさ違ふて浮々さ。お嬉しそふなおひろい振。地余シりさばかはお急キなされお怯我でも遊ばすなさ、なぶられて娘は顔にフシちる紅葉。詞サレバイノそなた衆も知通り。太夫、進朝長様。思ひ初たが因果にて。地浪人の娘づれ及ばぬ戀さ諦めても。諦められぬ胸のやみ。せつない時は神佛。観音様へ願シかけて。百日参りの印。にや義朝様のお傍去ず。詞澁谷金王丸さいふお人に。手がゝりが出來た故。心のたけを書くどき、地千束の文に一ト言の。色よきお返事なかりしが。きのふの文のお返事に。詞左程に思ふてたもるなら翌清水で直ャ々に。逢ッて委しう語らふ地さ。細々さした御すさみ。有がたいやら嬉しいやら夕へはちつ共まどろまず。けさ夜の明るを待兼し。是も偏に観音様の御利益。ア、有がたやさ合す手の。フシしさけ形ふりかはゆらし。地婢共氣をあせり。最早お出に間も有まい。幸ィなじみの茶やの座敷さ。浮氣盛りが倶々に。戀の出端や水茶やの。下女を招いて呼けば。物に馴たる出合ィのこんたん。稀の逢瀬は鵲の。はしからはし迄呑込ださ。ぴんしやんさして入跡は。猶もうき〳〵婢共。爰らへ何シぞ目印をさ　いふに玉簾懐ろ取出す麻紵門口の。見付の柱へ懸ておきや。アイさてん手に婢共、印の松の夫ーならで結ぶゑにしの糸筋を。爰らがよかろさ門の口サア〳〵お入さ打連レて。フシ一間の内へ入にける。地武士の八十氏川に勝れたる。清き流れの源トや。、義朝公の御公達太夫、進朝長公。戀に寄ル身はさゝがにのいさふ人目のめせき笠。身せば角袖着流して。色さ情の掴ミ指。丹前様ッのたはれ男さやつ

す。妾も曲者の。戀といふ字の言葉の糸はしめて。結んで其下心。フシ奴來れと立給ふ。地ネイと答へてやつこの此々。紺のだいなし金王丸。目先キ八分シふり出ダす。手先キの力ラが千人力。跟をしつかと万人力キ。ふれ〱振こめさ。詞奴に物問べい。下馬といふ字はしらないか。一チして棒してちよいとして。棒して〱。三ッして。くるりと廻つてちよ〱ちよん〱。旦那御用とフシかつつくばふ。地朝長公しとやかに。詞イヤ何金王丸。今日此所にて出合んと云イ送りたる逢瀬の手筈。定めて先キへと思ひの外。夫レと見當る人もなし。地もしや障りの有しやと。仰に實もと金王丸。詞成程君の仰の通り。待てござらばてうど此邊。地ハテゐな事と見廻す門口。何やら爰にと印の糸。是御らんぜと差出せば。朝長つく〲詠給ひ。詞ム、卷子の紡麻をあやどりて。三勾に組で懸たるは。地糸の從尋行キし。彼ノ綜麻形の故事を。爰にうつして玉笹が此家に有との印の糸。ハテフシ優しやとの玉へば。地金王丸打消て詞イヤ拙者めが存るには。此麻糸は則チ釣糸。釣ル針もない殼糸で男を釣ッて慰む心。地こんな所に長居は恐レ。サアお歸りなされませ。詞いか樣そちがいふ通り。よしなき事にまどひ來て。甲斐なく立ん名も惜し。地金王丸供せよと。フシ立歸らんと仕給ふを。地ノフコレ暫しと玉笹が。娵引連走リ出。其儘縋り引止メ。ノフ聞へませぬ朝長樣。いつぞやふつと見初メたが縁と。因果の始にて。此清水の觀音樣を祈たかひが有たやら。仰嬉しい水ぐきの。けふの逢瀬を月よ星。蝶よ花よとたのしんで。待兼て居る私が心。譬お氣にそまず共。せめて一度の御情。夫レも叶はぬ物ならば。いつそ殺して下さんせ。わし

や何ぼでも放しやせぬ。やいの／＼もフシおろ／＼涙。地朝長公持ッあつかひ。詞今の樣にいふたのは有樣ッがもたせぶり。左程に思ふて下さる心底。仇にうけふ樣ッはなしと。地手を取かはし引寄せて。じつとしむれば戀風のいとゞ。身にしむフシ風情也。地金王丸引取て。詞ア、どふやらこふやら直が成た。迚もの事に媒衆ノ氣轉きかせてソレ／＼早ふ。地我等は腰の瓢簞酒。おさへた鱠の蒲燒で。三々九度を一人前。臺所へと入にける。後に女中はそゝり立。詞サア／＼今がよい首尾あい。地ちやつと／＼とすゝめても。互にうぢ／＼ヱ、しんきと。押やり突やる一間の內。襖立切其後は。帶と／＼の。しやらほどけ嬉しきゑにしや三重へ結ぶらん。地扨も太夫ノ進朝長は都の空を落人の。あすをも知ぬ美濃ノ國憂を此身に追ィ分ヶや。とある木陰に行勞れ。暫しまどろむ小手枕。フシ痛しかりし次第也。地頃しも極月。末つかたはだへを。おかす寒風にふつと目さまし傍りを詠め。詞ム、扨は夢にて有けるよな。兼て心を通はせし。宗清が娘玉笹に。正しく逢ィしは都淸水。去る秋の初ッ戀に。地出合ィし躰をまざ／＼と見しは一しほ思ひの種。父を始め兄弟も別れ／＼の敗軍。つゞく味方の勢もなく。詞云ィがひなくも只一人。此所迄落延て覺ェずまどろむ夢の中。地互に慕ふ愛着の。地心通ひし正夢かと思へはそゞろなつかしく。吾討死と聞ならば嘸や歎かん不便やと。氣を張弓の弦切レてやたけ。心も忙然と。立上りたるフシ其折りしも。地むらがり來る平家の軍兵。落武者かへせと呼はつて。右往左往に追取まく。詞ヤア物數ならぬ假武者共。目に物見せんと渡り合。地するどき手練の太刀風に吹立られて木の葉武者。むら／＼ぱつ

と迯行をきたなし返せフシと追て行。地敵を四方へ追ちらし取ッてかへす朝長公。傍りをにらんで立たる所に。こなたの森の木蔭ゟ主シは誰レ共白羽の流レ矢。膝の口にはつしと立。シャ物々敷へろ〳〵矢何程の事有んと。諸手をかけて引抜ば矢の根は殘つて血に染矢がら。なむ三寶と氣後れし。立上れ共よろ〳〵。骨にこたゆる急所の痛み。眼くらんでどうと座し。詞チエロ惜や腹立や。是式の矢と思ひの外。行歩心に任せねば。又も追ッ手に取込られ。雜兵の手に死ん事。我身一ッの恥のみか。末代源氏の加僅なれば潔く生害せんと。地短刀妻手に引そばめ。既にかうよと見へたる所に。詞ヤア犬死なせそ朝長と。地呼はり〳〵御父義朝。後につゞいて頼朝公鎌田兵衛政家。追々馳付押止め。詞難義の手とは云イながら生害とは早まつたり。後三年ンの戰ひ權五郎景政は。敵に眼を射られながら。三ッ日三夜其矢も拔ず。當の敵鳥海彌三郎を只一矢に射て落す。譽れはおとも知つらん。何それしきの流れ矢に氣を屈するは後たりと。地恥しめられて朝長公誤り。フシ入ッたる御有樣。地義朝公はつく〴〵と見やる御目もうるませ給ひ。詞此度の合戰。右衞門ノ頭信頼が臆病不覺の振舞故。思ふ軍の圖をはづし。斯落人の身と成しも。全く當家の運の末。地弓箭神にも捨られし云イがひなき我レ故に。嫡子義平討死しおとら迄が身の難義。せひもなき世の成行やと眶を滿る御涙。御二方も政家も。道理にふくし詞なく。フシ何といらへもなかりける。地義朝涙を拂せ玉ひ。詞ハア不覺の歎キにくれ。覺エず落涙恥しや。我レは是ゟ尾張ノ國野間の內海へ立越て。源氏譜代の長田ノ庄司。殊に鎌田が舅なれば彼レを賴ノんで勞を厭ひ

關東へ馳下り。軍勢を催ふして不日に都へ攻上らん。地朝長は木曾路に趣き。甲斐信濃の源氏をかたらひ。頼朝は北國に立越て越後越前の軍勢を驅集め。手筈を合せ相圖を待。都の方へ攻上れ。早行ヶさらばとの給へは。兄弟は詞を揃へ。詞仰を背くにあらね共弓手も妻手も敵の中。かゝる時節に臨んでこそ一ッ寸もお傍をさらず。道にて敵勢取巻ばまつ先に切て出。討死して父上を安々落し奉らんこそ。子たる者の道ならめ。別れ〳〵に落よとは情なき御詞。但シ手負の朝長や。年たらぬ頼朝。足手まといと思ゝ召ての御意なるか。父に離れて何思ひ出何樂しみにながらへん。地せめてもの御情に御手にかけてさつぱりと此世の暇玉はれと覺悟極ハめし有さまは。フシ健氣にも又潔よし地義朝公も感心有いかにも汝等兄弟が恨むは尤去りながら。爰の道理を聞分よ。詞斯傾きし我運命行先迚も頼ならず汝等迄も伴ひて親子一所に討れんは。謀なきに似たり。地我レは死ス共生長有。源氏の實生を殘しなば花咲ヶ春にも逢ッべしと。そこを思ひし我計略。詞親が手元トを放しやるは谷に投打獅子の子の。勇士の器量備はらばいかなるうきめにあふ迚も。命全ふながらへて再び靡く白旗の。源氏の世と刎かへせ合点が地いたか兄弟と殘る方なき庭訓は。骨身に通る御兄弟政家も目に餘マる。有がた涙諸共にフシ鎧の。袖をぞひたしける。地兄弟は頭を上。詞御諚遂一承ハる。此上辭退は恐レ有。地早おさらばと諸共に勇立たる有様に。政家はあふぎ立。詞ハヽ、適なる御振舞。榮へを見せん栴檀の。地まだうら若き。御兄弟。二葉の内おかんばしき。源氏の生長頼ミ有。早御立と進められ。御大將も兄弟も。若シや此世の別

れかと　思へば足もしどろにてさらばよ。おさらば／＼と。互に見かへる顔と顔。いつかは迴ッり靑墓もッフシ末賴なき。美濃尾張かくとは思ひ梯や木曾と越後は降つもる。行ては歸り歸りては盡ぬ名殘は。親と子の。血筋の緣も追分や思ひ。／＼に　三重へ別れ行。地　跡は落葉も。今更に吹送ッりたる山嵐。霰たばしる松風の音か有ぬかゑい／＼聲。多勢の追人を切ちらし宙をかけつて金王丸。一ト息ついたる其所へ。程なく近付雜兵共。どつとフシ一度に取かこめば。地　金王丸嘲笑ひ。詞　ヤア討手とは事おかしや。平家にて名有武士かと思ひの外。戒名もなき亡者共。一人づゝはまだるしと。地　小高き所へ欠上り丈にひとしき大石を。引つかんで投付れば先キにすゝみし五六人。一度にひしげる人の鮓。又もつかんで投付／＼牖内に死がいの山。此勢ひに殘りの軍兵ふるひフシ噫き逃ちるを。地　御跡したふ討ッ手のやつばら何ン万騎有迚も。一々首を切ならべ安々落し奉らんと。太刀抜かざし逸散に跡を慕ふて　三重上へ行月日

地　治まらぬ世たゞ夫なりに年號は。平治二年に新玉の春の壽神國のならひ。賑はふ松竹に千代の。例を錺藁。かざる伊勢蝦囘靑橙の所願目出度尾張。國野間の內海に隱レなき。長田庄司忠致が舘には。左馬頭義朝公蜜に忍ばせ參らせて。御馳走殘る方もなし給仕の隙に奴共。一ッ所へ寄集り。詞　けふは正月三ケ日。いつもなら寶引ひいたり羽子ついたり。地　新板の道中双六面白い最中。ひよんなお客で上を下。髪さへ思ふ樣には結れぬ。詞　ヲヽそりや知レた事。恭くも源氏の大將義朝樣旦那樣の爲には大切な御主人樣。假令都の軍にお負なされたればこそ。此內海迄お出もなされる。殊にお供の鎌田樣は。

聟君の事なれば一通ならぬお客。隨分麁末のない樣にさきつさした仰渡され。又のらかわいてしくだらしやんすな。地こちらも隨分精出てさフシ咄し半へ。取次の侍罷出。仰付られし万才春駒の役人。地追々是へと知せに間もなく入來る。實初春の壽きはいとも興有次第也二上り万歳德若に御万才とはお家も榮へてましますー愛敬有ける新玉の年取初の朝には。りいしやうかふうが玉の冠を頭に召。あやんが太刀をはいてはこんべやの。ゆずりはを口にくはへ五葉の松を手に持て、清涼殿のこなたには綾の緣が五百疊　錦の緣が五百疊。高麗緣が五百疊合せて。千五百疊の疊をさらりさつさしかせ。南に當つて白かねの山をつかせ。給ひければ鳳凰が舞遊ぶ。西に三十丈にして金の。山をつかせ。給ひければ鶴と龜とが舞遊ぶ。みろく十年辰の年諸神の建たる家なれば。雨はふれ共雨もりせず風は吹共寶風。ホヽウイヤ千百八十年の御祝ひと。日出度所を是からそろ〳〵まつちやらこに〳〵。當年の惠方な金ざあが參つた金さや申さばな黃金に長金ヾに砂金ヾに短冊金ヾが參る。黃金さや申さばなそこら変らの子供達やめかいざるでかつこんでもつこうを持て取込や。一歩二歩はさつくれべいぞ。あめでもかつてかつちやぶれ。ころりこつとお花ごまでもまはすかや。又々參る。何が又參る。參るさや申さばな御女郎が參る。先きに立お鶴殿は形もよいが風もよいが。跡に立お龜女は出臍で頰が高く鼻がひくゝ。春がちくたでたなつ尻でふとつてうで曲しつて。色が(マヽ)つ黑くお大黑の惣領娘が。扨も〳〵方ウ々揃たお福女でおんじやり申。ホヽヤレホヽ。いけまい通るまいぞかまのまへの三助なんそはお龜女の尻こびた

を。玄翁持てふつ込。なた持てぶつかいて南蠻味噌くつ付たらびりゝやびつと心持やよかんべい。ホヽヤレ〳〵。又々參る。何が。又參る。參るとや申さばな祝ふて參る。大黑の米藏に毘沙門の金藏。これ樣の御門なんどはおつぴらいてがらり〳〵と。百間計おつぱたけて寶を殘らず納めける。詞鶴は千年龜は万年壽命長久。地目出度万年の万歲と舞納む三下りへ目出たや〳〵。春の初メの春駒なんとは夢に見てさへよいとや申。花のやナ。盛りはナ色〳〵らべ。品よきふりのおゝん〳〵太鼓の拍子てサ打連彈連て。いさむ笑顔や形よし振よし。せめて一夜はなびけと。申々。ヲヽ〳〵夫レよ夫よサ。筆に計りは文とは讀ぬ。詞の返事をよいとや申〳〵。ヲヽ〳〵去リとはよいてサ。九十九よ〳〵くどかば落ふか。情ないぞやあた胴欲や。どふぞ暫しはなびかんせ。眞實誓文でのござんすか。マヲヽ嬉し。せんどだまされた。人の心と川の瀨は。定めなや。袖打拂ひ裾吹上の。そら色もほの〴〵と。明ヶ行春の山見へて。千代の梢も面白や。地騷ぎの中へ。一間ゟ。立出る鎌田兵衞政家。詞ヤア大切なるお客の有に。奧近くざは〳〵と姦い。女共あの者共も門前ンへ早く出せと呵られて地じり〳〵まい〳〵万才が。鼓の無調子。春駒も。こまつた顏で立出れば。手持ぶ沙汰に婢共。そつとはづして立て行。詞アヽイヤ聟殿。其心遣ィは御無用と。地聲をかけて立出る。館の主長田庄司忠致。跡に隨ふ太郎景致。地しづ〳〵と立出て。詞ホヽ主君頭殿。蜜ヵに我内に忍び給へば。今のごとく物騷ヵしき人出入。いかゞとの咎め尤ながら。いつも元日と此三ヶ日は。万歲と春駒種々のわざおぎ。祝ひ壽く加例なるを。今ン

年々に限り無用いへは。却て人が不審を立君。忍びまします事平家へもれては一大事と、思ひ廻ハして今のしだら殊に。右の者共は身が領分の百性。スハといへば防ぎの人數と。彼是呼寄置たれは心遣イ御無用と。地詞にはつと鎌田政家。詞ハア殘る方なき舅殿のお心遣イ。斯落人の身となれば。木にも萱にも心を置比興の先ぐり面目なし。地信賴が臆病より崩れ立たる負軍、主君の危急を御救ひ下さる段。恭き仕合せと兩手をついて相述れば、アイヤ聟殿我等が爲にも三代相恩の御主人樣、御禮受る筈はおりない。ノフ粉。いか樣御意の通り忠義は仕勝。夫レはそふと我君には御晝寐。モフお目覺の時分ならんノフ鎌田殿、いか樣暫く間も有レば、イサ御前へ御同道と地打解合し聟舅。一間の襖押ひらけば往事か夢か今見るか夢現共定めなく、義朝公は脇息にいと餘念なくおはせしが。御目を覺しヤヨ勞し近ふ。〳〵と招かせ給ひ、詞吾謀拙ふして見苦敷負軍。六孫王より傳はつて。代々絕せぬ弓矢の道源氏の家名に疵を付、地名有一族郎等迄或ひは討れ或ひは手負て引退き。有にかひなき今の身の上。破鏡再び照さゞる家の滅亡後と末代臆病未練の身の恥を。雪期もなく朽果る。弓箭神にも天道にも見放されしか淺間しやと御身をかこつ御述懷聞人々も無念の齒がみ。スヱテ倶に淚にくれけるが、地政家は顏を上、詞ハアコハ我君の仰共存せず勝ッも負るも軍のならひ。文王は羑里にとらはれ。漢の高祖の七十餘戰一旦の負を以て始終の勝負は論しがたし。源氏恩顧の武士は東國北國に滿〳〵たれは不日に軍勢催促仕て平家を亡し地源氏一統の御代となさん。御心安かるべしと、フシ力ラを付て諫れば。詞イヤ

とよ夫レは聖人賢王に天の惠みの勝軍。我レは夫レには事かはり。地去リし保元の戰ひに院の御所方天皇方。親子別れし敵味方。詞淸盛が謀計に落入ッて勿體なくも父爲義を討奉り。地多くの弟家の子迄。はかなく殺害なしたる故詞脣亡びて齒寒しと此度の負軍。我を亡し世の人に不孝の報ひを見せしめ給ふ。地天の咎メを蒙る義朝。我レは固覺悟の身。詞不便シなるは子供が行衞。義平は討死し。朝長。頼朝兩人には。道にて別れ取分ケて。地都に殘る常盤腹。詞今若乙若牛若が東西分カぬ稚子も。地源氏の胤と捜されていかなる憂目に逢やせんと。さしもに猛き大將も忘れ兼たる恩愛父子。鎌田も倶に公達の。御身の上を案じわび。フシ何と詞も涙成。地長田ノ庄司引取て。詞ハア其お案じ去ル事ながら。朝長公頼朝公御若年ンとは申せ共。一方ならぬ御發明。御氣遣イ候まじ。又三人の御公達。常盤樣には娘の總角。御傍に付置しと。聟鎌田の物語。女ながらぬからぬ娘。御氣遣遊ばすなと。地諫め申せば太郎景致。詞アノ奥の一間にて御氣ばらしの御酒一ッ。イサ御案内仕らんと。地申上れば義朝公。詞酒は憂ひを忘るゝ良藥。一献汲んと。フシ座を立給ひ。詞ヤア政家。金王丸はまだ來らずや。もしや道にて討死せしか。アいか樣マ御着有ッてもモウ四五日。御跡より來るべきか。道にて敵に取卷れ延引とは覺ゆれ共。おめ〳〵討るゝ若者成ラず。地御氣遣有べからず。いざ先ッあれへと傳れヲクリ帳臺へ深く入給ふ。地鎌田が妻の總角は夫トの跡を一筋に。慕ひ來りし親の內。ア、しんどやと息をつぎ。詞君を始め政家殿。御無事で此家におはする由。聞て心は飛立計り。地八年ぶりで戾たる生レ古鄉の座舖の體。さのみかはらぬ前栽

の。木々の枝ぶり飛石も有し昔のなつかしく。先キ立給ふ母樣の寵愛有しアノ紅梅。昔の人の袖の香と。スヱテ覺ずしほれ詠メゐる。奥より出る政家が。思ひがけなく。詞ヤアそちは女房總角。ヤアこちの人地なつかしやと其儘ひしと抱き付跡は。涙にフシやるせなき。地取て突退聲あらゝげ。詞ヤア日頃に似合ハぬ未練の振舞。見さげ果たる女めと。地はつたと睨めば女房は。詞おまへの跡をしたふて來たが。夫レ程お腹が立ますか。地お腹が立なら詫言と又立寄を突飛し。詞女房去ッた縁切たと。地怒りの聲に氣も狂亂。詞コレイナアコレ私には何誤り。何科有ッて去ラしやんす。地譯を聞して下さんせと云せも立ずヤア狼狽者。詞我レ出陣の折から云ィ渡したを何と聞た。源平曠の軍故用立者は皆御供。御舘には女計リ。すはといはゞ常盤御前公達の御供し。東國方へ落延よとくれ〳〵も云付しに。預り申せし御親子を捨置。夫トを慕ひうか〳〵と。尋來る不屆者。コリヤヤイ最前も我ガ君樣。御公達や常盤御前の御身の上を御案じ有し故。總角を付置ば。女ながらもぬからぬ娘。お氣遣遊ばすなと申上し親や夫トに。面恥かゝせる不忠者。縁切ッたが誤りかと。地以ての外の腹立に。女房はせき上〳〵。委細の譯を御存ジなければお腹立は御尤。詞味方の負と聞しより。常盤樣や御公達を蜜にお供し落行道。平家の侍舘ノ十郎を先キとして大勢にて取かこむ。敵を防いで御親子は。念なふ落し參らせしが。地多勢の中に女一人。終には敵に生捕れ清盛が前へ引出され。いか成ルうきめにあふやらんと。心の覺悟極めしに。天道樣の惠みにや。ふしぎに助り落延て行も歸るも敵の中。都に足は留られず。美濃路をさして落け

るが。詞又も敵に取まかれ。危い所へ金王丸殿來かゝつて。おまへは君の御供し。此内へと聞たを便リ。地關所〳〵を云ィ拔て慕ひ來りしうき艱難。殿達でさへ敵の勢に隔られては思ふに任せず。まして女の只一人。心は鬼神とはやれ共。親子御様のお行衛知レねばいづくを當に行べきぞ。爰の所を聞分て。了簡して下さんせとわつと計に泣しづむ。地氣づよふは云ィながら。女房がうき苦勞我身の上に思ひ當。不便と胸迄せきくる涙とゞめ兼て。フシ居たりしが。地心弱くて叶はじと。詞ム、其云ヒ譯は聞へたれ共。預り申せし常盤御前御公達を見捨ては。御主人へ云譯なし。誠某に添ィたくば。是ゟ都へ取てかへし。御親子の御先途を見屆ヶさへすりや元トの夫婦。サコリヤ合点がいたか。ハツア御尤の御詞。是ゟ都へ立歸り。親子御様のお供申さん我夫。地さらばと欠出せしが。詞久しぶりで翁様や。弟にもちよつと一ト目。イヤ逢ェば互に未練がおこる。一時延れは一時の不忠。早く。地〳〵とせり立られ。フシ命だに心に叶ふ物ならば。何か別れの悲しかるらん。敵キの中へ行からは。迚も生キては歸られまじ。地是が此世の暇乞。コレよふ顏見せて下さんせ。詞ヱ、未練千萬。早行ヶといふに詮方なく〳〵も思ひ。切ッてぞフシ立出る。詞ヤレ待テ娘と呼かへし。地一間を出る長田の庄司。詞扨々驚キ入たる聟殿の忠義。あれにて聞て感心致いた。去リながら今娘がいふ通リ。女の身にて敵の中。とふで生キては歸られまじ。せめて夫婦此世の別れ。未來の緣は切ラぬといふ。暇乞の盃して。堪納させてやつて下され。地年寄レば愚痴に成リ。子故に迷ふ未練の心。必笑ふて下さるなとほろりとこぼす。フシ一しづく。地道理至極

に政家が。詞ハア舅殿のお心休め。兎も角も仕らん。ムヽ親か願ひ聞入て下さつてヱヽ恭いく〳〵。コリヤ娘悦べ〳〵。誰ッ銚子持てこよ。早く〳〵ャ此親が居ては差合後に逢ふと地云ィ捨てフシ襖引立入にけり地娘は跡を伏拜み詞扨も粹なとゝ様と。地悦ぶ内に婢共ヲクリ銚子。土器取肴。追ィ々に持出れば。詞ヲヽ皆の者いかゐ世話。主と二人の盃に酌は入ぬ。まだ咄したい事もたんと有。皆氣を通してたもいのふ地アイ〳〵と婢共フシ打連レ次へ立て行。地女房は三寶指寄せ詞サアこちの人一ッ上つてくださんせと。地いふに政家土器取上。丁ど受てすつとほし。サア女房。アイと嬉しく押戴き手酌に半盞。詞ノフ我夫。婚禮の盃には。戻すといふが忌事なれど。それに引かへ是は又。親子御様の御供して。戻ると言ッは目出たい事。地お前へお戻し申ましよ。詞打つゞいての御苦勞休め。一ッ上つて下さんせ。地そして一ッ時半時にめかりは有まい。つゐ暇乞しても。誰ヵ呵人もござんすまい。詞ほんに思ひ出すも一昔。義朝様から御上使にお出有たは表座敷。其夜は此方に御逗留。婢共にこそやされて。障子の透の垣間見地いとしらしいと思ひ初。文でくどいて漸と首尾して逢ったは此座敷詞此疊のコレ爰で夫ゝから後は表向。親の赦しの夫婦中。地今別れるも因縁づく。おまへは何共ないかいなと。もたれかゝれば政家も。岩木ならねば氣もそゝろ。さいつさゝれつ盃の。數も重なり。下紐の綻びかゝる。フシカヽリ折からに。相圖と思しき。太鼓の音物騷しく。フシ聞ゆれば。地政家が胸に釘主人の身の上氣遣ィ、と。立上ればコハいかに五體しびれて足立ず。かつぱとこけるを見て恟り。立寄ル妻も頭轉倒。起上れ共

よろ〳〵。奥の方に聲立て。詞 左馬頭義朝を風呂の内にて組留たりおり合ヤッと呼はる聲。地 聞より夫婦は七轉八倒。もがくこなたの一間より。長田親子は顯れ出。詞 ハヽよいざま〳〵。どふで遁れぬ義朝。人の手柄にせんよりと。我々親子言合ハせ手もぬらさず討取レば。恩賞は少くても二ケ國か三ケ國。娘に緣を組ンだる政家。一味せば一命は助ケてくれんと思ひし故。さま〳〵心を試し見れば。忠義一圖に凝かたまり。時世を知ラぬ大馬鹿者。娘め迄同じ様に役にも立ぬ忠義立。生ケ置ては邪魔に成故。娘ぐるみに仕廻ふて退んと。毒酒をもつて盛リつぶしたればモウ叶はぬ。ハヽヽヽと 地 大惡ぶ道の。フシ 其有さま。地 政家無念の眦をくはつと見開き親子を目がけ欠よらんと。心計リはあせれ共。五體も腕も叶はねば無念〳〵と齒がみをなし。スヱテ 拳を握 怒の涙 總角苦しき聲を上。詞 ヱヽお主と言イ聟や娘。殺して出世の身の欲心。天魔か鬼か畜生かいのふ。主を殺せし天罰で。そも安穩に有べきか。地 惡人でも親は親。どうぞ善心に成ッてたべと云ッた迚願ふた迚。今に成ては皆むだ言。ほゐないは我夫ひよんな緣につながれ心を赦して嘸や嘸口惜かろ無念に有。堪忍して下さんせと。くどき立たる身の苦痛。覺悟極めて政家は。指添ずはと拔放し腹にぐつと突立れは。太郎景致したり顏。詞 毒酒をくらはせた計ではまだしも心にかゝつたれ共。あれを見れはもふ安堵。サア親父様。ムヽ奥の様子が氣遣イな。うぬらはそこでくたばれと 地 睨迴してフシ 入にけり 地 女房息も絶々に。詞 あんな親とは夢にも知ラず。暇乞の盃とは有がたい恭い。地 酒をすゝめて醉紛れとひよんな所へ氣が引ケて。深ふならぬを知リなが

らさいつ押へつ無理じいに。毒酒と知らぬ此銚子。私が酌で盛殺すこんな因果が又と世に。有物かいのと取付て歎き。しつめば政家は。苦しき息をほつとつき。詞何事も定る業。聟舅の縁に引れ。心ゆるせし故にこそ。地政家程の武士があざとき術に欺かられ。御主人を殺されしは。よつく武運に盡たるか。せめて冥途の御供死出三途の魁せん。サア女房。アイ〳〵〳〵未來へ往て殿様のお目にかゝつた其時に。親と一ッでないといふ。云譯をして下さんせといふ詞さへ舌こはばり。眼引付苦痛の最期。政家は漸と吭のくさりをかき切て。かつぱと倒死たりし。無念類は。フシなかりけり。地かゝる様子は夢にだにいさ白砂を踏立蹴立。かけ來る金王丸。夫婦が死骸を見るよりも。詞ヒヤア南無三寶。扨は長田が心かはり。地主人の身の上氣遣ィと奥を。さしてぞ駈り行。地俄に騒ぐ奥の方。追々迯出る家來共。長田親子もがた〳〵ふるひ。詞コリヤ〳〵騒。金王丸めが荒出しては。迚も我々手向ひならず。コリヤマア何としたがよからうぞ。何シといふて迯るが奥の手。怪我せぬ様にサアござれと。地口は達者に脚がた〳〵。行方知らず落て行。長田震ひと末の世に。フシ云ィ傳へしは是ならん。地荒に荒たる金王丸。取巻多勢を事共せず。取て投出す人礫。コリヤたまらぬと雑兵共。フシむら〳〵ばつと迯ちつたり。地小影に忍びし萬才春駒。向ふにすつくと立ふさがり。詞かゝる用意の其爲に。橘七郎濱田ノ三郎彌七兵衛鳴海藤太地腕に覺の有顔に。詞長田公の仰を受伏勢として待受たりと。地追ッ取巻ば金王丸。大口明ィてかんらハヽヽヽからと打笑ひ。詞人シ非人シの長田めが氣を春駒のもてなしは。御萬才でも五萬騎

でも。御辭退申さず賞翫と。地大手をひろげて待かけたり。萬オ德若に御萬才とは主人を討れまじめにて。早立歸る若衆めを誠に討たふ侍けると。フシ左右にしつかと組付たり。歌目出たや〳〵春の初メの春駒なんぞは。夢に見てさへ。よいとや申。器量自慢のお若衆様。花の盛はナ。色くらべ。おゝん太鼓の拍子でサ打連拔連三重上へ戰ひしが。地金王丸が勇力に。水もたまらず切立られ。フシ四人一度に死てけり。地イデ此上は長田親子士を穿て捜さんと。欠出せしがイヤ〳〵。是ゟ都に引かへし。御公達を守奉り。會稽山の項羽にならひ。平家の一門燒討。追ィ討。討亡し。再び白旗ひるがへす。軍勢一味の催促は。千里も行。萬里も行。脚は韋駄天金王丸。踏出す廣庭どう〳〵。野間の内海の磯打浪。音にひゞきて名に高き其功。ぞ類ひなき

第二

地數多の賣物見世物を。フシ我レ劣らじと美濃ノ國。小平村の阿彌陀寺に。信濃國善光寺出開帳迚老若男女。引も切レざる其中に己が身代ふり擔。ぶら〳〵來る覗きの彌助。詞サア〳〵〳〵來たり覗いたり。〳〵サア〳〵是は日本一の御覽物。先ッ最初お目に懸ますするは。お江戸本所五百羅漢の體でござります。次は武藏下總の國境ソレ。長いは〳〵兩國橋は長い〳〵おかごでやろかお馬でやろか。十六七に手を引ヵれ渡りまする體にござりまする。ソレ向ふに見へまするはあは雪の見世數多群集致しまする體。是

も夜分の景色と御覧に入レますれば。ソレ邊りの茶店屋形船數多の小船迄殘らず火をてんじまする。何と御らふじませよい細工でござりませふがな。あなたには玉屋が花火ほん〳〵〳〵と燈しまする。此義お目にとまりますれば先ッせんの方はおかはりでござりまする。ヤ寄妙じや。コリヤふしぎじや。こちの在所でこんな物見るといふも。皆善光寺の如來様のおかげ。ア、有リ難タやなむあみだ。地 仇口々にフシ立歸る。地 彌介は跡を片付て。又人寄を待所へ。とばかは來タる投頭巾。それと見るより。詞ホ、十兵衞様どこへお出なされまする。ホ、彌助。ナント錢がもふかるかい。イヱ〳〵御存ジの通り漸此間お村へ參り。春先で日雇はなし。ぶらついて居よふよりと。覗きの箱を損料借。きのふから出て見まするが。イヤモ埒の明ぬせんさく。ヤ夫レはそふとお前の方の彼趣向は。ヲイノ善光寺の如來様。當春は上方へ出開帳にお出に付。此小平村のあみだ寺は譯の有ル寺故に。御請待申て五十日の開帳。何ッぞよい事思ひ付ふと。皆の者が精出しててん手にたゝく智慧袋。そこらはぬからぬ此十兵衞。面白い事聞出した。ふしぎな事も有レば有ル。上州高崎の在所で山のいもが鰻に成ッた。半分はやっぱり山の芋。こいつを見せるとぶつさらへと。金廿兩持せて五助と又藏を取リにやつた。ガ程なく太夫の乘込。追ッ付鰻に成かゝりの。山の芋の太夫殿が着れる。そこでコレお見やつたか。此通り小屋が出來た。かけ衆も仕合せこつちも仕合せ。モウ追ッ付乘込じや。行まはつて呑にござれ。ハア夫レは珍らしい見せ物。前代未聞の咄しの種。後ニに覗ひに參リませふと。地 彌介は箱をふり擔ヲクリ門内へさして歩み行。地 遙向ふへ

さつ〳〵さ詞太夫樣の乘り込みじや。山の芋鰻の乘り込みじや。さつ〳〵〳〵と地かけ聲に詞ノリ一トつの箱をさし荷ふ。人足共は汗しづく、跡と先キとに宰領の。五助又藏フシしたり顔。地十兵衞出迎喜悦の眉。開き直つて二タ人が高慢。詞サア親方。こんだ太夫が手に入ッた。錢金のさらへ取。目出度しめましよ。シャン〳〵。最一つせい。シャン〳〵。祝ふて三度シャ シャンノ シャン。さらば太夫をお目にかけふと。地くゝりし細引とく内チも。十兵衞が氣はわくせく。近年ンの掘出し代呂物おらが居屋敷書キ入レの。家質も今度は請返す此太夫樣のおかげじやと。勢ひこんで箱の蓋。ひらけば中からぬら〳〵と。半太夫のめくり出たる。大鰻。二人は恟りコリヤどうじやと。いふに十兵衞目も放さず見れ共。〳〵山の芋のやの字も見へずやつぱり鰻。三人は顔見合ハせ。只忙然と呆れ果吐息をついたる計也。地十兵へはせきにせき立。コレ五介。又藏。粋方の此十兵衞を廿兩衒て。高で四十か五十する鰻一ッ疋で、濟さふとは横着者。此分ンでは堪忍ならぬ。代官所へ引キずつて。めつきしやつきの譯立テると。地立を押へて。詞ア、コレ待ッて下され親方。お腹立チの所一言もござりませぬ。廿兩に此鰻一疋。蒲燒にすりや三串か四串。憎しと思ふは御尤。誰レ有ふ見世物仕の十兵衞といふてや隱れのないこな樣。どうして四も五もくふ物ぞいの。サくはぬ者になぜつかませた。鰻よりはうぬらがぬらくら。背骨をわつて白狀させる。地覺エて居ろと廿兩損した腹の立上り。行んとするを。詞ア、コレ親方、今又藏がいふ通りお前を欺してたまる物か。マア氣をしつめてとつくりと。樣ッ子を聞ィて下さりませサ〳〵と。地まじ

めに成て語りける。詞去程に。半分鰻に成かけし山の芋を取り寄せて。したゝか金を儲んと十兵衛殿の下知を請。物に馴たる我々兩人廿兩を首に懸。上州さして。フシ發向有。地彼高崎へいて見れば。半分鰻半分は山の芋にフシ違ひなし フシ寄妙頂禮ごんめうふしぎ。十八兩に直が成て。コレ江戸此箱に水を溜。詞何でも掘出し金の蔓。夜晝なしにぼつ立ろ。酒代をくれるぞ人足衆。隨分ゆらすなヱイサッサ。地ヱイサアく\ヱイサッサ。箱根八里はナ。馬でも越が。越にサ越れぬナ。大井川ナアヨ。詞千里一トはねいちもくさん。地夢中に成て。フシ登りける。詞いかにも五助がいふ通り。地急いで歸る道すがら成かゝつたる彼ノ鰻。詞一寸ン延二寸ン延。三寸ン四寸ンいつの間にぐにやと成たる鰻の振舞。コリヤたまらぬと氣がへつて。地夫レから箱を細引キでからげ迴ハして其後チは。水に入てうなく\と鰻を持ッて歸りしは恥辱の蒲燒世話やきの。無調法にて候としよげに。フシ成たる計り也。地十兵衛は月夜に釜。ぬか悦びの口あんごり。二人は手持チなげ首に胸はだくフシぼく山道つたひ。地風呂敷包ミわいがけてぶらく\來タる源七が。詞ヲ、十兵衛殿。彼ノ太夫着たげな。仲間の身祝ひに一ぱい呑かけ山の芋とフシしやれるげんきの上ハ調子。こなたはめいる水調子。詞イヤ酒所ではごんせぬ。マア聞イて下され。其太夫が半分づゝと思ひの外。皆鰻に成た故。今もあいらとやつさもつさいまだに詮義が極りませぬ。よい所へ來て下さつた。コレ、此鰻が山の芋から成ッたのか。但シ生れの鰻で有ふか。目利を仕て下されと。地いはれて智惠も傳七が、しかつべらしく。詞ム、夫レは何より安い事。さらば目利と鰻をつかみ。地南頭に捻向ケ

て。兩手を組てつくねんと。盼もせず守りコハリ居る。鰻は無氣にぬらくらと。しの字。への字折々はらの字のの字とのたくれば。地傳七横手を丁ど打ハア見へたり〱。詞此鰻元來水より出たらば。同氣相求るの道理にて。アレ。アノ川の方へ向クべきに左はなくして。アレ。〱。〱。山手の方へのめくるは。誠や古郷忘じ難し。山の山なる山の芋より變じたるに極まつたり。二人の衆に僞なし。コレ疑ひはれよ十兵衛殿と。地いはれてぐにやと。氣もめいり。詞ハア夫レなればぜひもなし。しかもひどい工面仕て嗅が小袖や息子が衣類。道具ひやうしぎ家財かざい。たゝき集めてぶち殺し。地漸〱出來た廿兩。殘りし物は鰻一ッ疋。詞コリヤうなよ。やつぱり半分山印。しやつきりしやつきとしやちばつて。何ン番も〱入レ替〱。見せ付てくれゝば大金に成物を。地肝心の所へ行ず。門外で取はづし。皆うなのくにや〱物に成といふは。山の芋の功能を。忘れたか早まつたり。我等は大きな損せふ菩提願以至功徳つまらぬを。貴様は何共思はぬやらぬらりくらりとのたくるは上總木綿で情がない。あんまりむごい廿兩棒にふる雨降霰。こぼす涙の熱湯にフシ鰻もにへる。斗也。地兩人は氣の毒顏。詞こんなせつない事はない。去りながら常の鰻と違ふて。元か山の芋なれば。善光寺の和尚様へ精進の蒲燒を揃へて上たらば半金ぐらいにや成そな物。コレ氣を落して下さるなと。地力を付れは傳七が。詞ハテ扱役にも立ぬ諄。鰻でいけずはコレ爰に。よい太夫を持ッて來たと。地聞て三人蘇生。詞それは耳より其太夫。早ふ見せて下されい。地おつと紛ひの更紗の風呂敷。ほといて出すは。詞コレ見やしやれ。是は

かの鬼娘のおつかぶせ。名古屋の甚平といふ名人の細工。去年關東て大當りと聞た故。傳を求めて借寄た。こいつを誰ぞにかぶらせて。コレ。此振袖の小袖を着せ。幸ィの此小屋で。鬼娘の看板を。出して見る氣はごんせんかい。ム、夫は何より面白い。此十兵衛が甘雨の敵討。コリヤわいらも隨分精出せと。地機嫌直れば二人も嬉しく。詞時に口上はどふ云ます。夫は此傳七が覺ェて居る。こなた衆は囃子方。サア〳〵あれで云ィ合ハさふと。地一度でこりぬ厚皮の。鬼娘の面ン引さげて打連フシ小屋へ入にけり。地折しも邊り騒がしくやらぬ〳〵追ッ立來る。多勢を相手に頼朝卿太刀拔かざし渡り合。爰をせんどゝ戰へはさしもの大勢たまり兼むら〳〵はつと迯行を遁さしやらしとフシ追て行。地小屋から出る十兵衛が。くはへぎせるの懷手。詞ハテ扨。年端も行ぬ若衆一ト人リに大勢が迯ヶるとは。比興なやつらとつぶやく所へ。地多くの敵を追ちらし取て返す頼朝卿。十兵衛聲かけコレ〳〵お若衆。詞一チ應は勝ッにもせよ。相手は大勢こなたは一ト人始終の勝チは心元トない。夫レよりわしを頼んすりや。隱し様フが有ふにと。地いふ一言は渡りに船。詞ハア御覽の通リ。大勢に取まかれ難義最中。頼もしき今のお詞。然らば我等を。ヲ、もふよごんす呑込ンだ。隱す仕樣はコレ。地こふ〳〵と囁き伴ふ小屋の内。取てかへす討ッ手の大勢。どつちへうせたと見迴ハし〳〵。ノリ此小屋が物ぐさし家來共ぶちこはせ。地畏つて立かゝり手々に葭簀フシ引まくれば地隱るゝだけはと頼朝卿。すつぽりかづく鬼女の面。橦木追ッ取怒のコハリ形相。わつとわなゝき追手の大勢フシ皆我レ先キにと迯歸る。地後に四人が吹出し。頼朝卿を小陰に忍ばせ。傍へに

寄ッて默き呼き。詞大切な源氏の落人搦め捕て平家へ渡せば。褒美はしつかり去ながら。ノリ今の討手に渡しては三文にもならぬゆへ。鬼娘にしおふせて隱して置ィて注進せん。傳七は庄屋の方タ此通リいふて下され。二タ人はそこら欠迴ハつて駕を一挺借てこい。落人めは此十兵衛が請取た。地後かまはずと急げ〳〵。おつと任せと三人ンは勢ひこんでぞフシ走行。地十兵衛は默きフシ〳〵欠入ル間もなく〳〵。地頼朝卿鬼娘の姿の儘欺して生捕羽がいじめ。小屋の柱にフシ猿つなぎ。地最前より物陰に忍んで窺ふ覗の彌介。それと見るより飛かゝり十兵衛ががんづか摑んで投飛し。腰骨ぽん〳〵踏のめせど。詞手並にこりぬ我武者の十兵衛。つかみかゝるを眞の當テフシうんとのつけに倒れ伏ス。地見向キもやらず彌介は立寄リ。いましめほどき鬼娘の。面引退ケて見合ハす顔。詞ヤアそなたはシイ。傍りの聞へ其上に。さつきのやつらが歸れば邪魔。ム、何とがな。ホ夫レよと。フシ上ハ着をぬがせ。奉りのたれ伏シたる十兵衛にヲクリ着せる。面テは鬼フシ娘。地活を入ルればうんと計リ。息キ吹返すを縛り上。以前の柱にくゝし付。頼朝卿の手を引てフシ行がた知ラず成にけり。地後に。むざんや十兵衛は。文彌損した上に踏のめされしばり付ケられ手は叶はず。エヽ悔しや無念やと。りきんで見てもにらんでも骨折損シの面ンの内。涙と鼻をすゝり込うめく斗外フシなかりけり。地傳七が注進にて庄屋年寄リ五人組　又藏五介は四ッ手かご。どつさりおろせば庄屋の宅兵衛。詞ノリ今傳吉が訴へた。源氏の落人頼朝め。鬼娘の面をかぶせ生ケ捕しとの事なれば。此儘受取代官様へ差上る。ソレ〳〵〳〵と詞の内。地皆立寄ッて十兵衛を無體に駕へ押込ムば。詞コレ〳〵わしは十兵

衞じや十兵衞でござる地と叫べ共面を隔て聲かはれば。惣々は合點せず詞何ニ十兵衞とは太いやつ。動かぬ樣ッにしばつて置ヶ地と。體を簀にしめ付ヶれば、働く物は首斗リ。詞イヤ〳〵十兵衞じや〳〵と地いへ共聞すいつさんに簀をば。詞イヤ〳〵十兵へじや〳〵や詞イヤ〳〵十兵じや〳〵め。詞イヤ〳〵十兵へじや〳〵て。イヤ〳〵十兵へじや工。十兵へじや工。十兵へじや工三重ギサハ歌へ柿は美濃路が名代ィでござる。どんな酒でも醉さます。夫レでも退ぬ中じややら。いづれ熟しといふはいなワイ〳〵ワイ。地諷ひさゞめく奥座敷、フシ都も鄙も。おしなへて小ヲクリぬれの。世の中旅人ト共。ふる日も通へ美濃ノ國。青墓に隱レなき。長が仕にせのよねの數ゞ入リ込ム客のどや〳〵とフシ奥口共に賑はしき。地折しも來タる所の代官垂井軍治。いかつがましく門口ゟ。亭主出ませい〳〵と。家來が聲に主シの長。走リ出て地に鼻付ヶれば。軍治くはん〳〵と打眺め。詞ムヽ此宿ッの長とは汝よな。呼出す事別義にあらず。源氏の落人義朝は長田が方にて討チ取しが。其躮太夫ノ進朝長。兵衞ノ佐賴朝。明ヶて十七と十四才の。小躮共が行衞知レず。見付次第搦捕て差出せよ。若シ隱し置ば同罪との仰。ナント心當リの事はなきかと。地尋に長は猶もひれ伏。イヱ〳〵御存シの商賣なれば。いかにも諸人シの入リ込ますれど。高が慰み遊興の場所。平氏でも是持樣なら。後かまはずと御相談もござりませふが。皆元手のない落人達チ。此方の客には致しませぬ。外を御ぎんみ下さりませと。地眞顏でいへはムヽこりや尤。詞併ながら諸人シの入リ込。隨分と氣を付よ。もしも見付て注進すれば御褒美を下さるゝ。きつと申渡したと地頰で。おどしてフシ立

歸れば。地近頃御苦勞千萬と、送りかへして主の長詞ヤレ〳〵お代くはんたいづらにあたまくだしにかみ付られ。目の玉がとび抜ケた。ヤこいつを直クに吸物地と。戯ながら料理場に。つかふまな箸庖丁のきり〳〵てつだふ早わざに。馴レればなれる其稼。奥ゟ出る女房おかね、客の金から鳥の毛も。むしるが得手と鴨一羽。盆にのせ持て出。詞コレ旦那殿。こなたやわしが夜食にせふと。退て置たコレ此鳥。毛を引カせたら思ひの外古ふ成ッてくさみが出た。コリヤ夜食には成りますまい。お客まへにつかはつしやれ。ア、又あの人のいな事いやる。こちとらがくはれぬ物。お客まへとは勿體ない。すべて此商賣筋は錢金が廻ハる故。めん〳〵の身を高ぶり。お客様を麁末にしたり。女郎をむごくせめつかひ。茶屋や藝者を下目に見くだし。大政太臣の氣に成ッて。じや〳〵踏ゆへ昔から。轡屋と名を付られた。身のほど顧て。邪見な心を持タぬがよいわいの。ア、又旦那殿の長談義。こなたがそふいふ心から。内チ中がまかぶら見て。若イ者はのらをかはき。女郎めらはどいつもこいつも。間夫や色客計り大事がり。金に成ル客麁末にする。夫レを見まねにいけもせぬ。新造迄が客衆をふつたり。間がなすきがな二階の隅へ寄リこぞつて。小鍋立して茶碗酒。めくりに負ケは二布迄、むかふへ質に置キますはいの。氣のよいも程が有ルと。地夫婦の氣象羽二重と。木綿布子も垢付て。おはをからせどどこやらが。賤しからざる女房の。長地跡に付添めのわらはたけの短い振袖に。田舍もやうの白上り。牡丹の花にあしらいの長がフシ表に立寄て、詞ハアどなたぞお頼申たい。長樣はお宿にお出なされますか。ヲ、どれからござつた地と。立ッ

間に這入上り口。身すぼらしフシげに手をつかへ。詞私は次の宿に。貧な暮しの親子三人ン。私が夫ト此子が爲には爺親。去年ンの春から長煩ひ。せつない中カで様々の。療治代人參代。せんし詰つて相談づく。いつそ此子を傾城奉公。どこがよかろと聞合ハせましたれば。お内方がお情ふかいと。人の噂を頼ミにして。遙々連レて參りました。地ほんに聲にいふ通リ。子を捨る藪とやら。せつなさ余つて一人の娘。賣親々の心の内。推量有てよい様に。お買なされて下さりませと。涙と共にかきくどく。娘は顔をふり上て。詞コレかゝ様其様に泣事はござりませぬ。貧しい暮しせふよりは。お傾城になればうつくしい小袖きて。出世するがわしや嬉しい。必泣て下さんすないなア。ヲヽ物の辨へ有故に。母に歎をかけまいと。そふいふそなたの心の内。推量して猶可愛ひはいのふ〳〵。地空を飛地を走る。鳥獸さへ身を捨て。子をかはふは天の道。まして况や人間の。しんく苦勞も子孫の爲。譬億千萬兩の。金の山を築ば迚。賣といふ氣で始メから子の養育か成ル物か。早ふ成人させたいと思ふ一圖に我カ年の。寄も厭はず漸と。育上たる此とし月本に一人も一人から心立なら器量なら。誰レにおとらぬほんそ子を。うらねばならぬけふの時宜。貧苦は何ンの因果ぞと。すがり付たる親と子が涙に。フシ果しなかりける。地倶に袂をしぼりしが。思ひ直して主の長。詞コレあの子や爰へ來やれと傍近く。年ンはいくつ名は何と。アイ明ケて十三。名は霜と申ます。ムヽ鼻筋通つてはへぎはよし。目元恰好云ィぶんのない此娘。ノフかゝ。どの位でよからふかい。サレバ十年切ッて。五両か十両。高くばよしにしたがよい。イヤ〳〵

夫レはわるい合點。來年ンは店へ出される。此位の代ロ物。女衒の手から買って見やれ。十七八兩詰から上エさいはふ。ア、イヤ〳〵こんな時に掘出しせにや。此商賣も合イませぬ。ハテ扨惡ヾい了簡。人のなんぎを見捨ぬが善根功德。よふござる此長が見所有奉公人。百兩に買てしんぜふ。判も持ッて來てヾ有ロ。奥で證文認めませふ。もう日暮で無用心。今夜はこちにとまらしやれ。地サア〳〵こざれと商賣に似合ぬ長が佛顏。女房が不肖顏。親子が泣顏ちぐはぐにヲクリ打連。宮へ奥に入にけり。文彌詞爰に此頃名に高く人の喧嘩をかいあるき。相手に向ふ劒さきや破軍の星藏と言男達。腰に尺八草履下駄。詞障ば取て投頭巾。地大道一はいのし〳〵と。長が内へとフシ歩み來る。筆地それと見るより主の女房走出。詞ヲ、星藏樣。二三日はお見限り。宮ホ、かはる事もごんせぬか。女郎買ばふり付ヶられる錢なしの殼さはぎ。夫で二三日はふら付やせぬ。筆ヲ、又惡口をおつしやらずと。離れ座敷が明て有。サア〳〵あれで御酒一つ。宮フシいか樣。こなんに逢ってとつくりと頼たい事もごんす。筆サア〳〵あれへと地女房が案内宮肩ふり迴して入にけり。佳地又も表にぐはつた〳〵同じ出立の草履下駄。男一疋立ヶ引ヒも。跡へはよらずぬれ事は。こひのぼるてふ名にしおふ。龍門の瀧八が。外ヵの逢瀨を關川にヲクリ馴染ミて小ヲクリ爰に。フシ通ひくる。要地主の長はさんで出。詞ホ、瀧八樣。サア〳〵あれへ。佳ム、關川はとふでごんす。要ハイ關川殿は明神樣へ御參詣。佳シテ禿の岸野は。要ハイこれも一ッ所にもふお歸りでごさりましよ 幸今夜はお客もなければ。佳そんならおれが仕舞ふかい。要然らば二かいへ。お出なされ

ませと。筆地咄しの内に女房立出。詞コレ旦那殿。奥にござる星藏樣か。今宵は闇川を仕廻ふと。たつた今私と約束瀧八樣の方は斷言って。要アイヤ／＼／＼そりやならぬ。おれが今約束して直に變替成もんかい。筆イエ／＼それでもこつちが先のお客。奥で約束して置きました要イヤ夫ならそふとおれにいやれば。あゝたへお約束申さぬはい。筆夫じやてゝ奥から爰迄。出てくる間も有物じや。どふ言ってもこつちが先。要イヤこいつが／＼／＼／＼。男を差置まんがちぬかすな。筆イエ／＼そりやこな樣のが無理でござると筆要地つのめ立ったる。夫婦が爭ひ。宮詞ヲ、其立引は此星藏が。それへ出て聞ふかい地とあゆみ出たる懷手。詞ハ、後の先のと夫婦が爭ひ。客は誰ぞと思ふたれば見たくもないなまじらけたしやつ頬で。傾城をたらし込。間夫とやら色とやら。うぬ惚客のすかんぴん。腹筋が撚るは／＼住ハ、、、奥の客と大そふに聞たはこつちのくりてこない。破軍とやら星とやら。忌々しい夜這星。男づくの立引は仕もせいで。耳こすりの當口上胸が惡い。言分あらば聞ふかい。宮ハ、、、何のわれに遠慮せふ。此星藏も闇川にうつぼれて。毎日毎夜通へ共。われへ立ぬと心中立。ふつて／＼振付られ。星藏が男が立ぬ。出くはしたは三條小橋。サア闇川を貰はふかい。住こりや面白い。見事われが貰ふか。宮ヲ、貰て見せふ。住イヤ是御亭主。爰で二人が立引しては商賣の妨サア星藏何とと表へ出よふかい。宮ホ、こりやよい了簡イサこいと宮住地互にはいたる草履下駄。筆要イヤ／＼ひらに御了簡と。宮留る夫婦を突飛し。フシ表の方へあゆみ出。住詞ム、見事闇川を貰

ふか。[宮]ヲ、男がこふ云ィ出すからは。金輪際もらはにや置ぬ。[住]ム、どふして貰ふ。[宮]ヲ、こふして貰ふとふり上る。[住]地拳を受たる身梅塩[宮][住]双方おさらぬ強氣者しばしが程は打合しが。勝負付ねば氣をいらち。互にだんひら抜キ放し。受つ流しつ上段下段。一息ほつとついたる所へ。[河]詞暫ラく。/\/\。[宮]ヤア男づくの立引にて。しのぎをけづる最中に。暫ラくと聲をかけたは何やつじやヤイ。[河]筑波根の。峯より落るみなの川。戀ぞつもりし立テ引は。命を塵か芥川。我カ身の上を白川と。浮名取川立田川。折に短氣も出水川。堪忍奈良の小川でも心を糸川闇川が。それへ行迄マ、、、待んせいなア。地フシつなぐ心の。駒下駄は。嘘に誠をかさねづま。つかみからけの八もんじ。對の禿に日傘さしかゝりては猶さらに。戀の闇路に定紋の。提燈てらしあゆみ寄。争ふ二タ人が眞中へ。立チし姿は紅白の莇のそばに。芍藥を。一りん生しごく也。[宮]地闇川が姿を見て。猶も逆立ッ破軍の星藏。[住]引ぬ意氣地に瀧八か。又立かゝるを[要][筆]長夫婦フシ中を押シ分押シ隔。[要]詞コレハ又聞分のないお二人様暫ラくの親玉は闇川殿。お留なさるには定めて深い御思案がござりませふ。ハテおいらんでござりますはいな。コリヤお二人のお顔の立樣。面白ふわかれが付ませふ。マア/\/\。せかず共お待チなされませい。[筆]ヲ、こちの人のいはしやんす通リ。瀧八様もマアお待なされませ。コレハマア闇川殿早いお下向。モウ見なさる通リおまへの事で。もらふやらぬの立テ引。わたし女夫が中々手には及びませぬ。どふぞお前のお捌きで。お顔の立ます樣に。ナア申お二人様。[宮]ム、闇川二人が勝負をわりや留に出た

のか。河イ、ヱ立引とやら出入りとやら。男づくの切り合を。留る心はござんせん。佳ム、留る心のない者が。二人が中へはなぜつん出た。河サレバイナ私はちつと心願が有ル故。岸野を連レて明神參り。下向すりやお前方の切合。樣ッ子を聞ば私故。たつた一ト言いひたい事が有て。宮ム、一言いふて濟事なら。サきり／＼いふて仕まへ。河ホ、、、其樣にせはしなふ。喧嘩を急ぐおまへ方。討果して死しやんすりや。此闇川に添れますか。ソリヤ心ン中でも何でもない。ほんに惚たが定なら。恥をしのきうきめを見ても。おのれやれ千年ンも万年ンも。添ふと思ふか誠の心ン中。ちつとの事をいひ募。命を捨ふとなされるは。皆うは氣人とそばへ。そふ言ッ野暮な客衆には。アイ慮外ながら逢樣な。闇川じやござんせぬ。サアお二人共切成と突成と。御勝手次第。高みて見物致しませふ。子供やたばこ盆持ッておじやと地床几の傍に立チ寄ッて我ヵ身を横に襠の。姿やさしく。吹きせる。煙に湯となるフシ風情也。宮詞ム、今の一言ン面白い。ナニ瀧八。夫レ共われは討果すか。佳ホ、いか樣。いはヾ互の腹立紛れ。死ふとするもやぼの至り。此立引はよしにもせふ。ガ夫レ共われが了簡次第。宮ヲ、おれじや迚相手なし。一人物にも狂はれまいかい。佳そんなら勝負は折が有ふ。サア宮サア宮佳サア地と互に納める。宮フシ拔身と佳拔身。宮佳地主夫婦はいさみ立。詞太夫殿のお捌きで。こふ丸ふ納るからは迚もの事に御一座で。宮ア、イヤそりやならぬ。色と名の立瀧八に。一座を仕てはおれが出物。なびかふがなびくまいが。通ひ詰るが男の意地。佳そんなら見事闇川をくどき落すか。宮落して見せふ地ともへ杌に又も火の付居合

腰。[河]詞くどき落すも落さぬも。皆關川が胸に有ル。[要]いか樣マ是は御尤。こふもめた上からは。今宵一夜太夫樣こちらへも出しませぬ。星藏樣は離れ座敷。瀧八樣は二かい座敷[宮]いかにも今宵は新造で。一ぱい呑ンで歸らふかい。[住]ム、夫レはよい了簡。[宮]そんなら瀧八。[住]星藏。[河]サアござんせ[住][宮]後に逢ハふ。三下リ歌初手は。客衆さ。つい假初に。逢ッて勤て。なじめばいつか。實をあかしてつま結ひ。夫レも浮世じやないかいな。ナヲスフシあたりの首尾を。窺ひて出る心も關川が。フシ寐巻姿の。しどけなく。どふぞ忍びて其人に。間の襖をそつと明。吹消手燭ぼんのうの。闇は。あやなし梅が香に。うかれて出る鶯の。梢にフシうつる風情にて。地廊下傳ひの人影は。ノフ瀧八樣か嬉しやと。抱付を振放し。詞ヱ、愛な古狸め。外の客には帶とかぬといふた詞が誠なら。星藏めも一チ度か二度では通はぬ筈。表向キはふつた分ン内證でこつてりと。いひかはせが有ばこそ命がけのもらひ引。よふおれを化したな。ヱ、見さげ果た。賣女めとフシ蹴ちらかしたる腹立聲。詞ヱ、胴欲な瀧八殿。ソリヤあんまりでござんする。地おまへと私が其中は。つい假初の事かいな。娘子達チや奥向キの。お女中方の。たまさかに。殿珍らしいはづみには絶句。浮氣も有リ明ヶの。月夜も闇も。二人寐の。枕に飽た其中で。惚たが本ンの惚たにて縁を結ぶの神樣の。仕業か又は因果かと。氣の逈ハる程いとしうて。粋がこふじて愚痴に成愚痴がこふじて何の其。親方樣や傍輩衆世間の義理もおもはくも。いつそてんぽの川竹の。浮名を流す覺悟にて。どんな客にも解まいと寐巻のつまや此帶に。ぴんとおろした蝦老錠の。ふかい心を疑ひは。あんまりむご

い胴欲とこんともたれて抱しめて。こぼす涙の極印に。フシ實と。いふ字やすはるらん。地瀧八も涙ぐみ。詞大事を賴ムってなた故。若シやと思ふ心の疑ひ。今のはおれが誤つた。コレ堪忍仕やと手を取ば。地何のマア誤るの堪忍するのといふ樣ッな。分ヶ隔た中かいな。お疑ひさへ晴レたれば。わしや嬉しいと抱き付。離れがたフシなき風情也。地瀧八傍ら見廻して。詞夫レはそふと岸野はどふした。アイ私が座敷に寐轉んで居リまする。コレ岸野や。瀧八樣か來てじやぞや。アイ地と一間を走リ出。詞コレ中太夫樣。わたしやつい眠りました。堪忍して下さんせ。地といふ手を取て。フシ上座に直し。地二人遙に飛しさり。詞いかに世を忍ぶお身なれば迚。誰レ有ふ。源氏の公達兵衛ノ佐賴朝樣。禿仕立のさもしきお姿。此金子ノ十郎家忠は。御父義朝樣マ都落の其折から。敵キに跡を追ハせしと只一人踏止まり。地追くるやつ原切ちらし安く落し奉り。力を盡せしかひもなく。人ニ非人の長田が爲にはかなくも討れ給ひ。詞チエせひもなし。直に冥途の御供と刀に手はかけたれ共。地よく〳〵思へば數多有御公達を守奉り旗上し。義朝公の修羅の御無念晴さんと。詞ノリ覗きの彌助と迄さまをかへ心を碎きし天の惠。君に廻り逢イ奉リ本國へ御供と。心は矢猛にはやれ共。地平家の詮義きびしくて國々に關をすゆれば。行事叶はぬ籠の鳥。詞是成女は故有て由縁の者。心底を能知ッたるも一つの幸。雇ひ禿の體にもてなし蜜に忍ばせ奉り。地餘所ながら守護せん爲。男達と身をやつし晝夜を分たす入込共。地人目を憚りしみ〳〵とおいさめ申隙もなし。いぶせく思し召れんが。父君の御シ敵。平家の一門討亡し。源氏の御代と飜さん其爲

と。思し召れて御堪忍とは云ッ物の。廣き天地の其中に。御身一つの置所是が武門の棟梁たる。清和源氏の御公達といはるゝ姿か淺ましやと胸迄せきくる無念の涙。忠と武勇と計略を金子ノ十郎家忠がフシ心の。内ぞ。健氣なる。地頼朝卿も打霑れ給ひ。詞源氏譜代の郎等の有が中にも家忠一人。地斯迄深き志シ死ンでも忘れ置ぬぞよ。父に後れて兄弟はちり〴〵と成孤の。世に便リなき身の上を。哀レと思ふてくれよ迚ンかこち給へば闕川も。勿體ない御世が御代ならお側へも。寄ル事叶はぬ賤しい此身。岸野どふせいこふせいとは。冥加の程も恐ろしい。御赦されて下さりませと。互に思ふ數々を泣て胸フシをぞはらしける。地折ふしフシ廊下の。人音に物に馴たる闕川が。家忠をふかく忍ばせて襖ンを引立フシさあらぬ體。地夫レと見るゟ星藏が。のつさ〳〵と立出。詞コリヤ闕川。最前もそさま故命がけの貰引。ぞつこん惚た心ンの中男。ぜひにかなへて貰はにや置ぬ。サ、、どうじや〳〵フシとしなだれかゝるを。詞エ、いつも〳〵同じせりふ。いやでござんす置しやんせと。地突退て逃んとするを引とらへ。詞ム、そふ出やれば仕方が有。サア隱した。間夫めを爰へ出せ。ホ、、、間夫を出せとはソリヤ何の事。とぼけなやい。瀧八めが見へぬからは。われが座敷へ引ずり込ンだに違イはない。瀧八めを引込マれちや。此星藏男が立ぬ。カ隱し所も合點地と。欠行を押隔。詞證據もない事云募。家搜しするなら仕て見やんせ。女郎の座敷は武士の城廓。一寸もならぬ〳〵。アイ成ませぬぞ。ヘ、テモ強いおいらんじやの。ハ、、、盗人たけ〴〵しいと。そふ意地ばればコリヤこふ地と。傍なる岸野ひんだかへ。詞瀧八めが隱れ所。

此禿めが知ッた筈。白狀させる仕様はヤこふと。地握り拳をふり上る。闕川あはて走り寄。詞ア、コレ勿體ない。ヤ何しや。こいつをくらはすが勿體ないとは。サア夫レは。サアなぜ岸野が勿體ない。サア〳〵〳〵〳〵と地問詰られ詞イ、ヱイナ其子はアノ大事の精進日。打擲するは勿體ない。と云たのでござんすはいな。イヤ合點の行ぬ詞のてん〴〵。詮義仕詰りや金になるうまい仕事。何でもこいつを一責と。地又ふり上る其手に縋り。詞ア、コレ申誤りました星藏樣。お前の詞背くまい。お心に隨ひませふ。ハ、、、ちつとそふもござるまい。そんならおれに抱れて寐るか。アイ。どう成り共成ませふ。地其子を赦して下さんせ詞ム、そふ出れば云ィ分ンないと。地岸野を突やり闕川を引ッ立てこそあゆみ行地家忠一ト間を飛ンで出。詞只今の惡口雜言。ヲ、よつ〳〵御堪忍遊ばした。私ももふ出よふか〳〵と。幾度か存せしか。爰へ出ては事の破れと。じつとこたへて居りました。夫レに付ても星藏めが。樣子けどつた詞のはし〴〵。今宵の中チに何方へも御供せん。カ支度を致す夫レ迄は。暫く奥に御忍び。ヲ、兎も角も指圖次第。ハア地然らばあれへと一間に忍ばせそこ爰に。心を配り逸さんに旅の用意と。馳り行。フシ既に其夜も。更渡る。頃は睦月の廿日餘り。山の端に出る朧月。遠寺のかねもかうフシ〴〵と。地示合せし子の刻限。所の代官垂井、軍次。相圖の呼子吹キ立れば。ぬつと出たる破軍の星藏軍次小聲に首尾は何とサレバ〳〵。詞蜜々に仰を受し賴朝が詮義。ぬれに事寄セ禿めをとくと吟味致せし所。相違なき男のがき。賴朝に極まつたり地と。聞より軍次身がまへし。奥をめがけて欠行

を。星藏やがて押とゞめ。詞イヤ〳〵あら立ては風をくらい。落すまい物でもなし。爰は我等にお任せフシといひ捨て走り行。詞ハテ扨氣味のよいやつと。地獨言して待ツ間もなく。聲立させぬ猿轡。見る目いぶせきしばり繩。小脇にかい込すつと出。渡せば受取詞ノリホ、手柄〳〵去ながら。頼朝といふ證據が有か。ナヲスハア夫レにこそ此紛が。コレ首に掛たる守袋。疑ひもなき源家の景圖。ノリホ、、、出かいた〳〵汝がかげにて我レも出世。褒美は重子てさらば〳〵とフシ立歸らんとする所へ。地取てかへす金子ノ十郎。夫ト見るゟ狂氣のごく奪返さんと飛かゝるを。そふはさせぬと星藏が。後ロ抱にしつかと抱。しづんで拂ふ其隙に。頼朝を引シだかへいづく共なく迯行軍次やらしとあせるを邪魔する星藏。シヤ面倒なと扱放し。たゝみかみて切付るを。飛しさつてヤ待瀧八。いふ事有と。いへ共聞す無二無三。又切付る一ト間ゟ。コレのふ待てと欠出る關川。後ゟ出るは。詞ヤアお前は若君様。マア御存命にてましますかと二度悔りのこなたより。詞御身代の賣子の母。若君様へ御目見へと。地泣々一間を轉び出。人目も分す伏しづめば。星藏聲かけ。詞ヤア御前シ共憚らぬ見苦しき女房。しさりおらふと呵付。地遙下つて頭を下ケ。詞君は元トより。家忠殿にも御見覺ヱなき某こそ。源家譜代の御家來。猪股金平六範綱と申者。十年以前酒興の上天子御幸の御車先。人をあやめし科によつて。縛り首討るべきを。義朝公の御情にて禁裡の取成漸と。命計リは助られ家國を沒收せられ。武州猪股を立退信濃ノ國に流浪の身。去シる冬都には源平の軍起ると聞しゆへ。妻子を引連レ夜を日についで上りしに。地早我君は討れ給ひ。

御公達もお行衛知れず。御大事にはづれしは。能々武運につきたるかと悔め共詮方なく。詞此上は御公達を守り立て旗上せん。軍用金をと思ひ立。どうらく者の仲間へ入。博奕諸勝負けんくはの腰押強惡ふてきを見込しにや。垂井の軍次我を招き。青墓の宿内に頼朝忍び居るとの風聞　片端に家捜しせん手引せよとの云渡し。ナヲス爰ぞ忠義の立所と辯舌をもつていひ迦し。犬に入てお命を助けん物と。様々に心を盡し　躬小六が年恰好。ヤ是究竟の御身代りと。女に仕立此内へ貰子として入込せ。お役に立しは範綱か寸志と申もおこがまし。地先非を悔し身の冥加勘氣御免有様に。御前宜しく御取成偏に願ひ奉ると。抵頭平身血の涙忠義は朽ぬ丸かせの。金平六範綱と　フシ其名は隠れなかりけり。

地家忠大きに感じ入。詞御恩を忘れぬ猪股殿。君の御難を救ひし忠臣。御勘氣御免御褒美の御詞下さるべしと。地　申上れば頼朝卿。詞汝が忠義に有ずんば。我は敵の擒と成。終に命を失はんに嬉し共過分共　禮は地詞に述がたし不便なるは小六が身の上。我に等しき年恰好。共に成人するならば片腕共成べきに。拙き運の我故に擒と成し不便やと。こぼす涙の天が下しろし召れんフシ頻伽の一聲。地夫婦はハヽヽはつと有がた涙。詞躬が命捨ずんば一生埋れ木と成果んに。御勘氣御免蒙るは先祖への申譯。金平六が武士道を立てくれたは躬が大恩。コリヤ女房泣ず共ソレ。若君へお禮申せ。お禮を地といへ共とかういらへさへ泣くづおるれば關川も。最前ちよつとあふた時わたしや貰れて參つた者。お願申上ますと年端も行で。人あいそにつこ笑ふた面ざしが。今見る様でいぢらしいと歎けば母

はむせ返り。流浪の中で育ても。遉は武士の胤程有ッて。かう〳〵した譯でお身がはりと言ィ聞すれば呑込で。敵の擒と成ルからは。水責火責は愚な事。たとへ背筋を斷わられ。鉛の熱湯を流されても。賴朝様に成りおふせ。立派に首を討れます必案じて下さるなと。コレ健氣な事を云ィましたわいの〳〵。最前もあの一間で禿風ッに髪結直し。つむりの餝小袖も着かへ。此世の名殘りに我ヵ顔が。見て死たいと思ふたやら。鏡に向ひつく〴〵見て。詞 申かゝ様。此度の軍に手柄仕て。譽られふと思ふたに。手柄はせいて此様ッに女の姿に成て。敵の手にかゝるはふがひない。いま〳〵しいと。思へ共。お身代りに立て死ヌれば。とゝ様の勘氣も赦。元トの武士に立かへる。手柄に成とおつしやる故。わしや勘忍して行ます 地 と泣ぬ顔してほろりつと。涙こぼした其時の傍で見て居る心の內。思ひやつて下さんせ。詞 ヲヽ、道理じや〳〵〳〵。おれは又さとられまいと。手拭ひて目鼻もわかず。ぐる〳〵巻の猿轡。たつた〳〵獨の躮が一ッ生の別れにッ。詞もかはさず顔も見ず。縛つてやつた其時は我ながら。此腕打折て捨たい程。うらめしかつたはやい〳〵。地 思ひ廻せば今頃は牢欒へ這入ッて居るか。拷問にかゝつて種々のうきめを見よふより。いつそ一ト思ひに討タれて死ンでくれたが増じや物と。はかない事を祈つて居る心の內の苦しさを。思ひやつて下さんせと夫婦はどうど打伏シて倶に消なんうたかたの阿波のフシ鳴戸に。滿汐の涙。わき出るごとくなり。地 斯ては果じと金子ノ十郎。詞 夫婦の歎き尤ながら。かゝる様子を悟られては小六も犬死。我君の御爲ならずと勵され。地 實尤と金平六。涙拂ふてつつ立上り。詞ノリ 家忠

殿と諸共に我は君の御供して。人知ぬ片山里にふかく忍ばせ奉らん。地そんなら私はけふの日を。小六が命日脱捨しコレ、此小袖を塚に築フシ印シを立て亡後の。詞ヲ、其弔ひを營まんフシと。立出る主の長。詞コレ此百兩は小六殿の身の代。地旅の御用に立るも忠義元。詞ノリ私も御家來筋と。名乘ルは却て身の恥地と。いはぬ心の一包。金子が袖に山ぶきの身の一つだにとゞまらぬ後の筐と御落涙。御機嫌様ーでと關川が君と。夫へ二タかわの。目に持涙。戀無常。哀別離苦の世の習ひ泣々別れ出て行。

第三

地諺の京に田舍の荒家は下モの。醍醐の片邊り。猿引の德作が。本ブシ立る煙も幽なる。ヲクリ世帶の たしにさし艾さしも。白地の看板に。名代御灸すへ所。蓬が宿の草ふかくはやらぬ。店はたまさかに。くる人さへも不時三里十四。十六打過て。廿の上は二つ三つ。ぼつとり風の品者が。箒片手に表の方。破れ屏風を引廻し。フシ心を配り一間なる。地障子をそつと押明クれば。人目を忍ぶ常盤御前 忘れ筐の涙の種。中にも乳呑子牛若を。抱くもせばき。フシ日かげの身。地いたはしや今若は。父に別れの涙のひま。竹馬取て打乘。詞歎き給ふな母上樣。此今若も成人して。父の敵清盛を討取は今の事。源氏の大將今若が武者ぶり御覽候へと。地疊を蹴立二三べん。乘迴して立給へば。乙若は破魔弓追ッ取。赤き絹をしもとにかけ。おれこそ平家餘さじと。よつぴいてひやうど放ち。嬉しや平家を射留しと。いさみ給へば

牛若は。母の膝より這イおりて。彼ノ赤絹をずん〲に引さき喰さき。兄弟三人打悦び。詞平家の赤旗打取たり。勝チどき上よゑい〱おふ地と。手を叩てぞ笑はるゝ。實栴檀はふたばの末。フシ思ひやられて頼もしき。地常盤夢共辨へず。詞ノフ恐しや壁に耳。弓手も妻手も平家方。源氏の一ツ家は皆亡び。有ルにかひなき世の中に。若シも平家へ洩聞へば。いかなるつらさか重ぬらん。地此後そんなわるさせば。コレつめ〱するぞとたいじやうも。いとをしや。淺ましや。頭の殿のましまして。世が世の時で有ならば。健氣な御意よと一ツ家中。敬ひ傅き父上も嘸や悦び給ふらん。是が源氏の公達の。なれる果かと計リにて。伏しづみてぞ歎かるゝ。皐月は背を撫さすり。御尤共お道理共。かへす詞もないじやくり。公達も諸共に。フシ袂をしぼる表の方。地おのが渡世と仕なれたる。猿を背中にひよかすかとヲクリ歸る。主ジの德作がッヲ、娘戻つた。〱と。ずつと這入て。詞是はしたり又泣しやりますか。何ぼいふても聞分ケない。泣てござつて濟物でござりますかとは云ッ物のお道理樣。源氏の大將義朝樣の。お妾樣とは表向キッ。四五年以前奥樣が死ナしやましては。奥樣同前ンの常盤樣。いかに時代なれば迚。平家の詮義がつよい故。一チ夜の宿さへ借人がない。此娘の皐月めは。お屋敷におすへの奉公。冬年ンの騷動から内へ戻つて夜ルのねざめもお前樣方のお身の上。どふぞお行衛尋てと案じくらして頼ム故。方々さがして漸と。清水でお目にかゝりましたも。觀音樣のお引合せ。夫レからお匿ひ申ても。人が氣を付れば惡ルいと。私はやはり仕付た通り。猿を引イて出てあるく留主には。アレあの通り看板出して。娘には

炙屋の商賣。勿體ない五十三十。稼いだ錢や貰ふた手の内。袋に入たコレ此米を差上る。ふがひない身の上と。地思へば涙がこぼれますと。しやくり上たる眞實心。姿は賤しい業も。健氣な所は侍に。増る心ぞしほらしき。地娘はしほるゝ氣を取なをし。詞とゝ樣とした事が。御異見申た舌も引ヵず。ソレおまへが泣しやんす故。お上にもおむつかる。ちつと嗜んだがよいわいの。何おれが泣ヵ物で。是は嬉し涙でおりやる。泣きやせぬ。〱ハヽヽヽホヽヽヽ。コレとゝ樣。お子樣方が御退屈。何ぞおみやはござんせぬか。ハアけふは何ンにも買ッてこなんだ。ヲヽ夫レよお慰みに此猿。祝ひに一ッ舞さふ。ヲヽ夫レはよふござんせふ。サア〱御覽遊ばしませと。地娘が會釋に公達は。きげんほた〱德作が。仕馴し業の一トふしや。有田歌お猿は目出たやな。聟入リ姿ものつしりと〱。詞コレ去リとは〱地ノウ有ロかいな。中さんな又有かいな。ヒヤウシ詞コレ嫁御のひるねもころりとせい。〱。ナ。コレ。地エ有かいな。中さんな又有かいな。ヒヤウシ詞コレくるりと返つて立ッたりな。次手にそこらで日和見や。よい女房じやに〱。地ノウ有かいな。中さんな又有かいな。ヒヤウシ詞日和を見たらばお辭義しや。〱。ヲヽそふじや〱。地お猿は目出たやめでたやな。ナヲス詞ハヽヽヽ若子樣達御きげんに入ましたか。トリヤ親仁めも一やすみ。地サア〱あれへに娘も倶に。フシ打連立て入給ふ。舞されば女の髮筋にて。よれる綱には大象も。能つながれ。ナヲス地女のはける足駄にて。作りたる笛の音に寄ルてふ。秋の鹿ならで。娘の顏に引されてフシ二タ人。連レたる田舍侍。地表間近く立留り。詞ナニ新五右衛門殿。是が

お咄し申た灸すへのぼつとり者の内でござる。いか様。ハァ權太兵衛殿のお噂に承ハつた彼ノ女。國元への咄しのたね。どふぞ一ッ見致したいと。地門口ゟおさないて。詞誰ッ頼もふ〳〵と云ッ聲に。地アイといらへて出る娘。二人は顔を打ながめ。詞テモ見事。御無心ながら灸かすへて貰ひたい。ヲ、夫レは何よりお安い事。マア〳〵内へとフシ伴ひ入詞申お侍様へ。どこがお望ミでござります。サァ我等は此程痰氣にござるから。七九にすへてもらひたい。身ハ痃癖と風門が望ミ。アイそんならお二人様一ッ所に。サァ〳〵お肌を。地おつと任せと諸肌ぬぎ。背中を向ヶて居並べば。硯引キ寄筆の軸。ひいやり恂り。詞ア、あつい〳〵〳〵〳〵。マ、中今のは墨でござります。まだ灸はすへませぬ。ム、そんならそふと云たがよい。サァ是からが皮切地と。仕なれし手つき線香の。フシてつとりばやにすへる内。娘の膝が尻べたへ。さはる度々きいやきや。むほんのきざしそろ〳〵と。肩をよぢつて後ロ手に。一人が出せば又一人。出す手と手の同士軍。とはしらずして双方が。娘と思ふうてんつ共。じつとしめ合ふ嬉しさは。首筋元トからぞつとして。是は夢かや夢ならば。覺な〳〵と兩方が。つぶやきつぶやく口の内。互イに隱す身塩梅。見るおかしさをこたへ兼。有リ合ッ艾一ッに寄。二ッに分ヶて身柱もとでつかりすへたる大灸。ふすぼり返つて通る火に。二人は恂り。アイタ、、、タ飛退ながら放さぬ手と手。互に顔を見合セて。詞コレハ〳〵權太兵衛殿。新五右殿。ハレふしぎな所で御對面とフシしかつべらしくも馬鹿らしき。詞ナニ權太兵衛殿。ケ樣に手と手のつながる御緣。以後は尚もつて御別懇。ヲ

、サ〱新五右衛門。爰の娘のナンナ顔が見たさにヤレコリヤサ。あついめこらへて灸すやるヤレコリヤサ。ヲ、サ〱しんぐい〱。歌 娘と見へたは權太兵衛じやないかの。しめた二人の中の此手がヤレコリヤサ。氣にかゝるしんぐい〱。ヲ、サ〱しんぐい〱。詞 新五右衛門。イザ權太兵へとナヲス地 手を引つれてフシ行後へ。文彌詞 爰にも通ふ深草の。少將ならでうるさくも。歌 幾日。限らずぶら〱と。地 娘をはりに。フシ きまぐれ奴。地 門口から聲高に。詞 コレ娘又すへに來申た。ヲ、駄太平様お出なさんせ。毎日〱よふおすへなされます。ナニよくすへるとはコレお娘。お身様につつぼれ申たで。何共ねェ此體。毎日〱灸は付ヶたり。有様ァは顔が見たさ。サア〱どふだとフシ寄添ば 詞 ヲ、じやうだんせずと サアおすへなされませ。おつとまかせと立上り。地 紺の大なしぐるりつと帶を、中冷泉廻ハして。まへ後。詞 けふは十六といのめとを。一どにやらかして貰ふべいと。地 尻もつ立れば。詞 アイ合點でござります。爰は取分ヶあつい所。辛抱してすへなされ。地 ヲツト覺悟の歯をくいしばり拳を握。アツイ〱〱〱とほへ頰は。寠たばしる鬼瓦鼻は氷柱と。フシ 見紛へり。地 すへる間に親德作。立出て小手招き。かたへに寄ッてひそ〱聲。詞 若子様達がきげんが損ねて。おれではいけぬ、地 ちよつと奥へもあたりの遠慮。アイと默き奴に指ざし。娘は奥へ德作は。中 差心得て奴が後。すへるは娘と心得て、駄太平はあたまをもたげ。詞 アヽ皮切りさへ仕廻ば。モフよつ程受よく成ッた。コレお娘、きのふこなたにいふ通女房に成ッて下さりや。くらいつぶしのアノ親仁。おれが引取て養ふべい。サア

〳〵どふたと。地 云ハれて德作ぎつちかは。返事もならず正體を。見付られじと背中に顏。恥しがると氣が付て。奴は猶も夢中に成。詞 コレ寐ても起ても起ても寐ても。地 忘られず。詞 コレ作る草鞋迄がこな樣の顏に見へるはいの。ヱヽじれつたい。灸もモ是切。いつっそ殺せとふり返り。ほうど抱付引しめて顏打詠め。ワア、コリヤどふだとフシ呆レ果て。居たりしが。地 やら腹立の破かぶれ。胸ぐら取て。詞 ヤイ爰な水虎親仁め。だますにも程が有はい。毎日〳〵五十七十持ッてすへにくるも何ンの爲だ。アノ娘を手に入レべいとの下心。いつの間にやらくろめてしまい。よふかへ玉をくはせたな。いめ〳〵しいどう腹だはいと。地 わめくを聞付かけ出る娘。詞 サア〳〵皆お前のが御尤。私が手水にいた内を。ちよつとかはつて貰ふた斗。悪ル氣では致しませぬ。堪忍して下さんせと。地 せなかを擲かれなまこに藁。ぐにやりととろけて。詞 へ、、、そもじがそふ云ッ心なら。何ンの如在が有もんだ。コレ〳〵わしはいつぞや爰へ來て。始めて見たのが緣のはし。地 サハリ 抱てねたなら。面白そふな女子じやとわしや。見て惚た。夫レがいやなら其樣に。コレナ〳〵生れ付ぬがよいはいの。詞 ハイ〳〵舅は親の親仁樣。心に思はぬ只今の悪たい。御了簡なされて下さりませ。ナ申コレサ〳〵。マ、折が悪い。出直さふ。コレお娘や。親仁樣の機嫌直し。酒でも買て進ンぜてと。地 袂さがして有切。よつ程拔たさしの口。己が智惠も長短。日本一の大だはけ。コレ晩に。〳〵〳〵と前ヱ後ロ。迴した事も打忘レ。歌 腰をしなへておどりまふて逝ふよ。我古鄕へ歸らんと。足もしどろにナヨス立歸る。地 後に親子は胸撫おろし。吐息ついたる

折からに。平家の侍難波ノ八郎。手の者引具しどつと押寄。有無をも云ハず欠込を。親子はやがて立塞り。押とゞむれば難波ノ八郎。詞ヤア推參なるうづ虫めら。此內に常盤親子隱置條。訴人有ッて向ふたからは。うぬらも同罪遁れぬ所。覺悟ひろげときめ付る。地兼て覺悟の德作親子。用意の刄物拔放して切かくる。詞ヱ、ちよこざいな死損ひと。地家來も一度に拔連レて。追ッ取卷を事共せず。忠義一圖の親子が働き。叶はぬゆるせと逃出すを。フシいづく迄もと追て行。地音に驚キ常盤御前。公達諸共うろ〳〵きよろ〳〵。取て歸す德作が。詞コレ〳〵〳〵お身の上が氣遣イさに。多勢を相手に防で居る。娘を見捨て歸りました。此隙に裏道から。サア〳〵早ふ。地〳〵にぜひなくもこけつ。轉びつ常盤御前。公達諸共步はだし。フシ漸遁れ落給ふ。地間もなく歸る難波ノ八郎。詞ヤア親仁め。常盤親子をどつちへ落した。有樣ッにぬかさねば。眞ッ二つにぶち放すと。地切てかゝれば渡リ合。心は矢猛にはやれ共。太刀筋しどろに受はづし。急所の深手にどつかと伏。とゞめさゝんと立寄所へ。奥ゟかけ出る手飼の猿。フシ難波をめがけこみかゝれば。地ヤア畜生めが味をやると。打てかゝればひらりとはづし。飛も走るも自在の輕業右を打ば左へくるり。陽炎稻妻水の月。秘術をつくして。三重へ爭ひしが。地なんなく難波に飛かゝる。深手の德作むつくと起。恨ミの刀ぐつ〳〵と。其身も倒れ息絕れバ。猿も身を揉叫び死。實腸を斷といふ人も及ばぬ最期の體。フシむざんといふも愚也。地皐月ハ慚切拔ヶても。體は朱に數ヶ所の疵。詞常盤樣イのふ。とゝ樣のふと。地呼はり〳〵立戻り。此體見るゟノフ悲しや。爺樣と云イ此

猿迄、及にかゝり死るとは、けふはいかなる悪日ぞや。せめて一言娘かと。物云ッて下さんせ、コレコヾ
とゝ様のふく〳〵と取付て血汐に争ふ血の涙きへフシ入。斗リに歎きしが。地漸に顔を上。詞父の最期はせひ
もなし。太切の常盤様敵の手へ渡つたか、いづく迄も追ッかけて。奪かへさいで置ふか地と。立上れ共よ
ろ〳〵〳〵、抜身を杖に二足三足、行ては叫叫ては。手疵の上に氣をもみ上。あせる向ふへコリヤやらぬ
と。立寄討ッ手を眞ッ二ッ、力ラも弱りがつくりと哀。はかなき三重へ浮世也 地 呉竹の。伏見のフシ里の。宿
はづれ。世を諂はぬ衡門。曲らぬ杉の生垣もキシヲクリ見越の。松も降うづみ。フシ空さへ返る。二月の雪。
本フシ軒の垂氷に風當テて。フシ春の詠メはなかりけり。地 主シ彌平兵衛宗清は。浪人ンの身の氣さんじに近
所あるきの留主の内、表座敷もお氣ばらしと娵共にすゝめられ、獨娘の玉笹が。出る姿も面やせて。浮カぬ
心を漸と。フシ思ひ有げに座に着ヶば、地 娵小さのが立寄ッて。詞ほんに御寮人様の御病氣は御尤、誰レ有ふ
源氏の公達太夫ノ進朝長様。地 思ひ思ふた初ッ戀の叶ふて間もなふ軍が發り。お行衛が知レぬ故夫レからの
ぶら〳〵病イ。お藥では直るまい。どふぞ仕方は有まいかいのふお常殿。詞 サレバイノ思ふ様ッなら平
家が負て。源氏の勝チにしてほしい。アノ憎い清盛が頓死でもすればよい地と。しどなき咄し媚くもフシ
お主思ひの。女心。地 玉笹は涙ぐみ。皆もよふ知ッての通リ及ばぬ戀の朝長様。ふつと見初メて身も世も有
れず。勿體ないとゝ様へは外の願じやと嘘ついて。詞 清水の觀音様へ。百日參りの念がとゞき地 茶や
の座敷の新枕。二世も三世もかはらじと。云イかはせし間もなふ。侍賢門の軍なちり〴〵のお身の上。

風の便り音信も涙のかはく隙もなく。こがれ明ヵし泣暮し夫レからおこる此病。いづくの浦何國の里朝長樣の討死を聞と其儘冥途の供と覺悟極めし蜉蝣の。夕待ッ間のはかない命。推量してと斗にて詫。涙に娵共。お道理樣やと諸共に。袂をしぼる折からに。地平家の侍伊藤武者景綱。案内もなくずつと通れば。娘はちやつと泣顔かくし。娵共もたばこ盆フシお茶よお菓子と紛らせば。地景綱は打通り。詞ホヽ玉笹殿御病氣はいかゞでござる。宗淸殿はお留主でござるか。アイこゝ樣はつい近所へ。追ッ付お歸りでござりませふ。ムヽ然らば是で待申さふ。イヱ〳〵爰はきつう冷まする。お心安い景綱樣。奥の一間で酒でもあがつて。ムヽ夫レはよからふ。酒と有レば拙者が好物。イサ參らふ。地サア〳〵お出と娘が案内ヲクリ打連へ一間に入相の。地鐘の音さへ氷るかと。思ふ計リの雪しぶき。そこはかとなく。降つもり。地タヽキ道なき浮世にせばめられ。都離れし深山木の。常盤御前は世のうさも。フシいつかは思ひ。大和路のフシヲクリしるべの方へ遠近の。キンヲクリならはぬ。旅路其上に。長地八つと六つの今若丸乙若丸の手を引て。まだ三歲の牛若を。浮房含める懷に。地タヽキつゝむ涙も道の邊の家居を當に。フシあゆみ寄。詞行暮したる旅の女。稚き者を伴ふて。雪にこゞへし身の難義。地一ッチ夜の情と給へ共。折ふし人も答へもなく。フシ行も得やらず。彳み給ひ。詞アヽ是非もなや。今宵は爰に明さんと。地少し風除軒かけに小袖の。つまの上がへを。敷寐の床のかたし風。笠をならべて屛風さし。文彌詞昔は翠帳紅閨に。地透キ間の風もさむかりし。身はならはしと身を捨て。兄弟に降

雪を。打拂ひ〳〵。哀さふらふ小夜衞鳴て其夜を更さるゝ。間なく隙なく心なく。雪はこぼすがコハリどくにて。尖き寒風及のどくハツミ軒の。氷柱のきらつきて。人の肌骨にしみ渡る。八寒地獄劍の山。此世からなる呵責の苦患。いたはしや常盤御前。つかれたる身を寒氣に破られ。惡寒五體を苦しむればア、絕がたやと伏フシまろび前後。不覺に見へたまふ。地ぐはんぜもなき兄弟も。コハいかにせん悲しやと。うろたへ騒ぎ。詞コレ乙若。かゝ樣はおさむい故。夫レでお氣合が惡いそふな。ヲ、そんならおいらが此べゝをぬいで。かゝ樣に着せたがよい。ヲ、夫レがよからふ地と。兄弟帶解。身せばなる。小袖をぬいで母上の。裾や枕に打きせ。〳〵。我身厭はぬ稚子の雪に。うづもる裸身はフシしほらし。くも又。いた〳〵し。地母上苦しき枕を上。ノフいたはしの子供やな。詞かばかり母を太切に。いかに孝行なれば迚。そち達をこゞへさせ。何と見て居られふぞ、地風ばし引なべゝ着よと。着すればぬいで母に着せ。詞イヤ〳〵〳〵。寒ふてもつめたふても。堪忍するが侍じやと。地兄の詞に乙若丸。おいらは寒ふも。何共ないと。フシ齒を喰イしばる震ひ聲。牛若目覺し這出て。見るを見まねに小袖をぬぎ。同じく母にきせ參らせ。手足もふるひ。こゞゆれど其色見せすこたゆる體母は氣もたへ目もくらみ。ア、情なや淺ましや。詞源氏の大將左馬ノ頭義朝公の御公達。百万騎の大將軍と。仰がるべき子供等に。地ひとへの衣を着せ兼て。雪にこゞゆる軒の下。詞乞食非人におとつたる。此有樣マは何事ぞ、地いかなる神の崇ぞや。不便の者よこち寄レと地三人一所にかき寄セて抱きふして。

泣給ふはフシ理り。さこそ聞へけれ。地彌平兵衛宗清は我家へ歸る高足駄。手には傘小提灯ヲクリ合羽の袖も白妙の雪にうつらふ人影は。何者やらんと能ク見れば。賤しからざる人々の軒に臥たる其風情。詞ム、扨は源氏の落人よな。後難もいかゝなれば追ッ立てやるべきか。イヤ〳〵。夫も邪見の至り地と善悪二つを決し兼暫しフシためらふ奥の間より。詞宗清殿お歸りか地と。ほろ酔きけんの伊藤武者。提灯吹消宗清は。フシ内に入詞ホ、景綱殿にはいつからお出。昨日の負腹打返しにござつたか。迚も互先ては參るまい。イヤ何さ昨日は酔て見損い。併シけふもお娘の馳走で又くだされた。こふ酔ては心元ないと。地詞の前ヱ置負おしみ。傍への碁盤引寄て。向ふ心も白黒の。夜晝分カぬフシ好の道。下手の横飛桂馬飛地無理が。通ればよけて打。されば人間一ッ生の喜怒哀樂は一局の。碁盤の上の戯れと。悟るも又。悟らぬもフシ更ラに餘念はなかりけり。詞ハア我等が知行の此白地へ。檢地を入ふとは御無體千萬。ヤ何宗清殿。其知行で思ひ出した貴殿の身の上。清盛公聞コし召れ。あつたらしき侍浪人で置クは惜シい事。奉公するなら知行は望ミ次第との仰。ナント出る氣はござらぬかと。地味方に招く目算で。ちよつと中手をフシカ、リ入て見る。地宗清は一心不亂。詞何知行。知行は入ラぬ。ム、此石ぐるみ下さるか。奉公仕ては腰膝がフシ曲り四ッ目で氣が詰る。詞浪人なればこふ延て。押へらるればこふ小角。仕官は叐らて覗ふと。地詞の隅に目を持て。あたりをじつと刎おさへ。身の負恥を伊藤武者。嘲しもとぎれ裡に入て。手段を盡す責合は。四鳥にかゝる身の上や。鶴の巣籠子を思ふ。母の苦しみ子供の聲もれ聞ゆれば聞咎メ。詞宗

清殿。アリヤ何でござる。ハ何。アレハ雀でござる。〳〵。ハレめつそふな。聞た所が子供の泣聲女の聲。雀とは思はれぬ。察する所源家の落人。常盤親子が行衛知レねば。若シ此邊ンにへちまふまい物でもない。今の泣聲。地合点が行ぬと刀提つつ立ば。詞ア、コレ騒がれな景綱殿。デモ。ハテ。扨あれは雀でござる。雀々。謠カヽル軒に巣をくふむら雀。ヤア。ハア。御酒きげんの空耳。今のは雀。〳〵。ハヽヽヽフシと紛らかす。詞ハアスリヤ雀でござる。ハテ扨。酔が出てやくたいに成申た。碁は是切リで打やつて。さらばお暇申さふ地と。立ッ足元トもひよろ〳〵。詞お歸りなば（マヽ）傘足駄。ア、イヤイヤ。こふ酔ッては足駄はあぶない。傘も邪魔になる。此雪のひや〳〵するが心よい。ハア降たる雪かな。いかに酔ッたる人の嘸面白ふ見給ふらん。ヤアあの松が二本に成ッた。コリヤこりや面白い。こいつを肴に又呑る地と。譯もたわいも千鳥足。フシひよろ付ながら出て行。地後見送つて宗清は走リおりたる軒の下。常盤御前は手を合せ。詞先ッにからの御情。地お禮は詞に盡されぬ。詞アイヤ〳〵お禮を受る覺ェはなし。見ればやんごとなき上﨟の稚きを連られて。雪にこゞへし難義の體。焚火に當參らせん。地こなたへ入ラせ給へやと。二人リの若の手を引ば。親子はうさも打忘れヲクリ伴ひ。へ奥に入給ふ。地春の野の。求食雉子の夫レならで。フシ妻故。したひ夜の道。地太夫ノ進朝長は去年の矢疵の膝の口。痛手に足の踏どさへ雪に苦しむ旅づかれ。鎧の上に蓑笠打かけ。危い命漸と。フシ伏見の里にたどり着キ。地内の様子を窺ふも傍りに心奥の間ゟ思ひ。合たる誠と誠。むしが知ラして玉笹は手燭携へフシ椽がは傳ひ。地

火影に透す夜目遠目。笠の内でも見紛はぬ。ノフなつかしの朝長様と。やがて表へ走り出。詞はなくて抱き付。フシ嬉し涙は果しなし。地朝長卿は跡先を。思ひ續けて胸スヱテせまり。暫し詞もなかりしが。詞命ながらへふしぎにも。逢ふも悲しき我身の上。地長田が爲に父義朝あへなく成らせ給ひたれば。再都へ立歸り。六はらへ踏込んで。詞父義朝の弔ひ軍と。思ふ中でもそなたの事。夢現にも懐しく。地せめて名殘に今一目。顔が見て死たいと。未練に慕ひ來りしぞや。詞是が此世の暇乞。玉笹。さらばと欠出す。地ノフ是暫しと引とゞめ。詞エ、胴欲な朝長様。軍がおこると聞しゟ。地夜の目も合ず佛神へ。祈しかひも情なや。詞負軍と聞た時は。氣違ひの様に成て。幾度か欠出すを。嫂共に止められ地つれない。命ながらへて。おまへの御最期聞次第。直くにお供と思ひ詰覺悟極めて居る物を。逢ふて其儘別れることは。あんまりつれない胴欲な。上キシ死ぬる計りが侍でもござんすまい。詞數ならね共私が爺様。味方に頼んで國々の源氏をかたらひ旗上し。無念をはらして末長ふ。地添ふと思ふて下されぬ。ふがひないみづくさいと。心の有たけかきくどき。しがみ付たるフシ恨み泣。詞ホ、健氣成るそなたの意見。我迚も其心の付ざるにはあらね共。草木もなびく平家の勢ひ。うかつにも頼まれずと。コレ疑ふたは堪忍しや地と。抱しめ給へは飛立思ひ。詞モウどつちへもやりやしませぬ。地私が部屋にお隱し申折を見合せ。詞爺様へ願ふて見ん。地マア／＼こちへと手を引てフシ奥へ伴ふ次の間ゟ。娘。／＼。地玉笹と父の呼聲悔り。あたふた隱す一間の内。出合頭に宗清がちらりと見れ共。フシさあらぬ體。詞ム、此冷るに何して居やつ

た。アイ。わたしや先にから此座敷で。地雪を詠メて居ました詞ハテ扨病人の惡ルい物好キ。其上冷ては猶重らふ。イヱ〳〵。アノ申。わたしや雪がきつい好キ。お前も好に。地お成なされて下さりませ。詞ハテノフ。そちが好ク雪を。おれに迄好キになれとは。アイ。此雪といふ物はナ。眞白で潔く。物に譬て申さふならば。アノナ。〳〵。源氏の白旗。私はきつい好でござんす。アノもふ椿や。海紅の赤い花は見るも憎い。お前も今から此雪を。好キに成て下さんせ。ム丶いか樣マ。雪月花。又は豐年の貢なんどゝ。詩人シ歌人シの翫び。夫レ迚も所を知リ。時節を知ッて降時は。三國無双の不二の雪。いつ迄も消ね共。時を知ラぬ春の雪。此よふに冷る樣でも。日が當ればしみ〳〵と消安い。ナコリヤ。そちが好キのアレアノ雪をば。地日陰に隱して置がよいと。夫レと悟りし詞の謎。詞ア丶有かたいと丶樣。そんなら私が好キの雪に。お逢なされて下さんせ。ア丶コリヤ娘。其障子を明て春風が當れは惡い。何事も見ぬが佛。聞カぬが花。サア〳〵奥へ。イヱ〳〵私はやつぱり爰に。ハテ扨地奥へとすゝめられ。後に心は殘れ共。フシ親子打連入後は。地猶おやみなき四方の空。雪に紛へるコハリ白裝束。面を隱せし曲者が。見越の松が枝する〳〵〳〵。ヲクリひらりと。飛で庭傳ひ。見付る主の宗清が、曲者待と聲かけて、指出す火影に見合す顔。詞ヤアこなたは伊藤武者。何故に其出立。ヲ丶何故とはまが〳〵しい。常盤親子匿ひあらん。召捕爲に來つたり。サア何と〳〵。ハ丶丶丶何事かと存シたれば。女童の詮義にイヤモ仰山なる景綱殿。常盤親子を搦め捕て。六はらへ差上んと。宗清用意仕る。ヤ其云イ譯くらい〳〵。

其所存なら此景綱に。雀〱となせ隱した。ヲ、隱した譯はコレ。かう。地〱と耳に口。詞ム、其詞に相違ないか。何が扨。然らば後程。合點地と。默き呑き景綱は。フシ表をさして引かへす。地宗清は用意の早繩。欠入向ふに娘の玉笹。詞コレとゝ樣。今の相談聞ました。ヱ、情ない。親子御を搦め捕て出さふとは。地胴欲なお心と恨み歎けば。詞ム、そふ一圖に思ふは尤。究鳥懷に入ル時は狩人も是を取ず。まして平家に緣なき宗清。常盤親子を助けんと御介抱は申せしが。景綱に見咎められし折からナコリヤ。吾がソレ。命にかへて大事がる。彼ノ雪が隱して有レば。差當る難 は二つ。此方ゟ搦め捕て出ば。助かる事も有んかと。思ひ付ての此しだら。コリヤ非道と思ふてくれるなと。地事を分ヶたる詞も聞ずイヤ〱〱。詞一ト通りは聞へましたが。あなた方を生どらせ。朝長樣がどふして添ッて下されふ。地思案なされて下さんせとわつと斗リに泣しづむ。詞ヤア此場に成ッて思案所か。邪魔ひろぐなと地娘を突退。奥を目がけて欠出す。こなたの一ト間に聲高く。詞ヤア〱彌平兵衛宗清待。太夫、進朝長見參せんと。地呼はる聲に立戻り。親子は障子押ひらけば。鎧ぬき捨朝長は。腹一文字にかき切て朱に染たる其有樣。娘はあはて走リ寄。天にあこがれ泣しつめば。常盤御前も公達も一間の内ゟまろび出。詞コハ何故の御生害。おまへを先キ立テ稚き者や此常盤。地何ッと成ルべき身の行衞と前ッ後左右にすがりフシ付先立。物は淚也。地朝長苦しき息をつき。詞人の正に死んとする時其いふ事よしといへば。此朝長があへなくも命を捨る物語。地常盤御前も宗清も。一通リ聞てたべ。詞扨も去る平治元年。父

左馬ノ頭義朝。右衛門ノ督信頼と心を合せ。平家の一族亡さんと。大内に楯籠り。陽明郁芳待賢門。數多の門々差かため。梅壺。桐壺籬が壺。紫宸殿の前後。東光殿の脇の壺迄。兵ひしと居並んで。地白旗風に吹なびけ。寄セ手遅しとフシ待居たる。詞清盛が下知として。ナヲス左衛門ノ佐重盛。三河守頼盛。淡路守敎盛隨ふ。軍勢雲霞のごとく。三方ゟ立向ひ。源平互に入亂れ。おめきさけんで攻戰ふ。地頃しも。極月末の七日。霰交の一むら雨。烈しき寒風事共せずまくり立たる味方の英氣。平家の軍勢たまり兼。むら〳〵ばつと。引退く。詞コレ〳〵申朝長樣。深手の上に氣をもんで地お命がつゞくまいと留る。常盤を突退はね退。詞チヱ口惜や。惣大將と頼たる。信頼が臆病不覺。地鯨波に驚てふるひわなゝき逃行ば。士卒の心一致せず八方ゟ崩立。詞逃る味方の其中に。地父を始め一族郎等踏とゞまつて戰へ共。馬なづみ人つかれ。詞シヤ詮方なくも落て行。コレ〳〵申。其負軍と聞た時。地私が心の悲しさつらさ。サイノ。詞まだ其上に我君樣。お二タ人ながら此樣ッな果報拙き御身の上。ヲ、此頼長も只一人。地心細くもすご〳〵と。美濃路をさして落行道。追ィくる敵を切ちらし。一ッ旦は遁れしが、傾く運の拙さは。いづくゟ共白羽の尖矢。膝の口をのぶかに射られし。無念さ。ほゐなさ口惜さ。詞自害と覺悟極めしを。後ゟつゞく鎌田政家。父義朝の諫めに從ひ。つれなき命生延て此家へ慕ひ來りしに。地玉笹が深切。宗清が志シ。我ヵ命をかばはん迚。なさぬ中の母常盤。三人の弟共を殺させては。未來の父へ云ィ譯立ず。我レは元よりなき者と覺悟極めしフシ殺害ぞや。コリヤヤア玉笹。詞是迄のよしみを思は

ぃ。此朝長を討取しと。夫レを功に母上や。稚き者の助かる樣。父宗清に取成シ。〳〵地といふも苦しき其風情。娘は始終せき上〳〵。けふのお出は優曇花と悦ふ上にとゝ樣の。お赦しの出た本ンの女夫。二ッ枕のさゝめごと何から。いはふどふせふと思ふて居たも皆むだ事。詞コレとゝ樣〳〵。どうぞお命助ケて下さんせと地身も浮斗リに見へければ。常盤御前も漸と涙の顏をふり上て。詞數ならぬ自やそなた衆を助ん迚朝長樣は御切ッ腹。コレ〳〵兄樣と計リ思やるな。命の親共。守り神共いふに云ハれぬ此大恩。コレよふお禮〳〵申しやいのと。地いふに二人は傍ハに寄。詞コレ兄樣マ。爺樣がござらぬ故。おいらもせつないめに逢ッても。堪忍するが侍じや。おまへもどふぞ堪忍して。必死ンで下さるな地と這血筋の眞實の詞。牛若後ロへ立廻り袖の下から。詞兄樣バア地といふを抱取母常盤今別れる共辨へぬ。ぐはんせのないが不便なと。抱きしめ伏轉びフシ泣より外の事ぞなき。地娘は居直り懐の守刀を抜はなし。咽にがはと突キ立る。父は驚キ。詞コリヤ娘。こふ有ふと思ふた故。色々と心を碎いた甲斐もなふ。可愛や〳〵可愛やなア。アコレ。とゝ樣。歎いて下さんすな。好イたお方と手に手を取。わたしや未來へ参ります。地去リながら。獨娘と御寵愛。御恩も送らず此儘に。先立不孝は赦してたべ。詞香花よりお經ガ。コレどうぞ源氏へ一味仕て。常盤樣や御公達の地お命助ケて下さんせヱ。詞サア朝長樣。未來は必。ヲ、夫婦ぞや地と。互に手に手を取合ッて刀を抜はフシカヽル一時に。あへなく息は。絶果たり。辨マへ知ラぬ稚子も常盤御前も宗清も。死骸にひしと抱き付。聲も惜まずフシ取亂すは目も當。られぬ次第也。

地かゝる様子を最前ゟ。忍びて窺ふ伊藤武者。物影ゟつつと出。詞何も角も皆聞た。繩打て御前へ引覺悟ひろげと立かゝる。地宗清は朝長の御はかせ拔放し。切てかゝれば景綱もさしつたりと渡り合暫し勝負も付ざりしが。いらつて切ﾘ込宗清が尖及受はづし。フシ二つに成て息絶たり。地常盤御前は御驚キ。詞平家の侍伊藤武者を手にかけしは。ヲヽ夫レにこそ卽座の手便。景綱は朝長卿の御手にかゝりし其後にて。朝長卿に詰腹切せ首取しと。申ひらかん其爲に御はかせにて仕留しと。御首はつしと討落し。詞太夫ノ進を討取しと此御首を土產にして。今より平家に奉公する共。地心は源氏の大忠臣。池の禪尼をたらし込。常盤御前や幼き御公達を始とし。賴朝卿の御座所尋搜して諸共に。お命助ヶ參らせん。詞コリヤ娘よ。氏なふて玉の輿。よい殿持ッたなア。出かした〳〵出かしおつた。地迚もの事に双方が。無事て祝言するならばいか計ﾘ悅ばん。せめて未來へ聟引出に。此親が名を捨て。詞平家の爲の祿盜人。源氏方へ內通しアレアノ。雪の樣な白旗を。天地の間に吹靡かし。源氏一統の御代となさん。コリヤ。地草葉の陰で悅んで成佛せよと。子故に迷ふ親心。彌平兵衞宗清が。源氏へ心をはこびたる。フシ因緣斯と。知ラれたり。地常盤御前は立寄て。積りし雪を手に捧。詞譬られしも譬しも倶に無常の淡雪と。地消し命のはかなやと死がいに手向の六ッの花。六ッの衢に諸共と。歎くを諫る宗清が。胸に二張の弓張月。うつる心の影淸き水の流れの源を濁て。松の。色ふかく。終には得たる常盤木や。扨こそ後に今若ハ禪師隆超。乙若は卿ノ公圓濟と。隱れ名高き法師武者ッ中に秀る牛若丸。九郎

判官義經と智勇を殘す源氏の實生。むざんや枯し一枝の朝長卿は死出の旅。なき玉笹の霰が目には涙の雪解や。わつと一度に聲立て。伏見の里の物語余所の。袂を絞りけり。

補遺

病名補遺序

司馬子長有言。曰、醫方諸食技術之人、焦神極能、爲重糈也。夫醫人無恒也。自古既然矣。予觀本邦近世之醫。又有甚焉者矣。多貴其價爲鬻、罕能精心於其術藥物。惟聽市人、而不辨尤眞僞美惡。盛衣服宮室之飾、以衒世逞新奇怪誕之辨而欺人。賄貴戚權門、近富人豪家、餌以圍棋御杯釣、金帛來祿位。視貧賤人如土芥。或爽來治、則託以他辭、不與藥。世人只尚聲譽、不審其實、爭迎而求治。揚揚駕肩輿、從者數十人、藥籠光可鑑。既到病家、便安坐美食。不辨寒熱、不察虛實、孟浪妄投、幸而偶中、庶乎取効。遂自矜能以爲足以治無窮之病矣。或雖未識其病、爲淋勢所迫、強治之。逡巡便致困危。若病久之未瘳、更使他人治之。欲其死也。猶矢人唯恐不傷人。謂之仁術可乎。其及筮仕公侯也、欲固寵增祿、故讒諂面諛、無所不至。如此之輩、不焦神不極能、而賄貨山積、崇侈極欲。醫云醫云、重糈云乎哉。夫賣藥者不害人。業醫者、暗殺賊。雖隱慝非法所得在幽、則將貽譴責。悲夫獨哉。

旭山先生則異於是。先生少好學、尤喜於醫。博通經史百家之言、該治諸家之說。左本草、右方書、其於藥物也、手自植之園中。不待至乎深山幽壑、而百卉品類森在目前矣。親辨眞僞、試良毒、考取之之早晚。可謂其用心詳且盡矣。凡療疾也、日以十人爲限。曰、才力有限。多則煩、煩則不審。我不療焉、則人療矣。若多多益辨、則吾非其人也。其來告者、無貴賤、無貧富、皆竭力救之。沉痾痼疾、凡所救治、以千百數。若必死不治之症、其子弟不忍止藥、坐待其斃、固請其治者、不得已而與之藥。曰、治人者醫之功也。無功而待其報、則吾豈敢。抑吾之術未精、殺于藥誤亦未可知。

也矣忍受此餬口乎一以救病人之疾苦爲務故諸侯雖有善其辞名而至者皆不屑就已於獻若哉　先生所謂通古今守仁義絶鶩于顯貴之心專博施保救之意與良相並稱者非斯人而誰居其術度越於人寔萬萬不亦宜乎醫有非藥選之作既行于世今又収拾群書以補病名彙解遺逸且訂正其訛謬益備而加察焉名曰病名補遺將彫諸梓而布之四方命予以序

予曰

皇朝貴人序既備矣予言奚贅乎然辨物品之眞僞者固吾之所好也姑論醫人之眞僞以冠其首云

寶暦十一年辛巳人日

讃州志度　　平賀國倫謹撰

昭和八年七月以松浦正一氏藏本縮寫畢

物類品隲

鳩溪平賀國倫選

○番椒 李東璧食物本中

釋名 秦椒 農政全書 地珊瑚 花史左編 海瘋藤 同 辣茄 秘傳花鏡

徐光啓曰 番椒亦名秦椒白花子如禿筆頭色紅鮮可觀味甚辣 王仲遵曰 地珊瑚産鳳陽諸郡中其子紅亮克肖珊瑚狀若筆尖下懸不畏霜雪初青後紅子可俚又名海瘋藤 陳淏子曰 番椒一名海瘋藤俗名辣 國倫曰 番椒始出番國故以名之其色紅鮮而如珊瑚樹色故得地珊瑚名其狀頗似茄子而味辛辣故有辣茄名海瘋藤名義未詳大椒亦名秦椒同名異物也 ○和名篤烏楷樂施 貝原先生曰

此ハ日本ニ無之、秀吉公伐朝鮮時彼國ヨリ種子ヲ取來ル
故ニ俗ニ高麗胡椒ト云 向井元升曰 南京胡椒

集解 李東璧曰 番椒出蜀中今處處有之
盆中以作玩 好結實如鈴内子極細研入食品極
茄辣 高濂曰 番椒叢生白花子儼禿筆頭味辣色紅
甚可觀子種 按畫譜有禿字上如字 石巖遺叟曰 番椒叢生花似
禿筆頭紅如血味辣可充花椒用 陳淏子曰 本高一
二尺叢生白花秋深結子儼如禿筆頭倒垂初綠後朱
紅懸挂可觀其味最辣人多採用研極細冬月取以代
胡椒收子待來春再種 釋傳澣曰 泊瓶藻ト於テ細目譜

能ホシヨクカハキタル時細ニ末シテ糊ニ和シ紙或 爲珍
絹布ニヒロゲ凡人身疼痛ノ處ニ貼ヘシ能ク忍ユ腹痛ニ 澹無
ハ腹ニ貼頭痛ニハ頭ニ貼手足痛ニハ其處ニツケ甚效 見聞
アリ時氣感冒ニハ三四ノ椎ノ間ニ貼テ被ヲアツクス 椒隆
有海瓶藤之名其實非藤類也食物本草爲木本亦誤
又子味極辛辣其莖蘇乃氣味微辛所謂澹無耶猛之
私若是也

野必大曰

番椒叢生類蓼葉亦略類蓼四月開小白花
結子如藤實或如禿筆頭或如胡頽子此呼蕃胡
淑番椒俱生青熟紅其色深滑有光可愛味甚辣

甚烈青時亦毒凍可食紅者不乾用越年亦佳
其似筆頭胡頽者最辣烈也莢中有小白子二月
種之性易生故家園田圃多種之本邦用番椒者
不過百年與煙草相先後倶番人傳種從海西移
栽四方有之初爲民間之賞近時爲上僕之具此
北開胸膈利欝滯之故乎冬月壁土凍落者用番
椒數升研之爲泥合土而塗則不凍落或燒之熏
鼠穴鼠盡逃去然煙及人家則必害人傳聞中華
亦近代多栽而用之

貝原先生曰其子有大小長短尖圓之數種有向上者
有下垂者有聚實者種人家庭除食之堪寒節人最
自蕃園移植於中夏

香川太冲曰

此物近年盛行種藝至廣品類殆有數十種其小、自長者短者大者小者圓者方者長至五寸餘短不及一寸大如拳小如麥圓有大中小色有丹者黄者黄赤者有直上指天者攢簇聚頭者愈出愈奇變異無窮結成盆景賣收畝利乃間人之清玩民家之餘産也

△

正誤

陳藏器又云竹葉椒成峯山中比蜀椒毒熱可著飲食子

長而不圓按丸所今番椒大如小指頭上尖下平正赤嗣宗謂卽胡椒非也續漢書天竺出胡椒異域志入不國出胡椒段柯古云胡椒蔓生兩兩相對乎澄茄其類也今虞翁有玉椒色白

稲先生曰按竹葉椒自是木本與番椒大異

香川太冲曰辣茄始名番椒其以辛物出番地故名爾然椒元蜀椒為首其後白胡國來者謂之胡椒圓實稍似椒形其名不遠但辣茄雖辛異椒形狀命名欠當若以辛物為椒乎則芥蓼非辛物乎何獨在椒也一名瀉瘋藤一名竹葉椒俱非正名故今定從辣茄之稱

國倫曰按陸璣所謂之竹葉椒者蜀椒之別種而即爾雅稱檓大椒者是也而本邦所在有之國俗呼和椒叔冬山椒是也與番椒絶異也通雅辨物明而至此誤實千慮之一失也藥選以異椒形狀命名欠當亦誤也夫物之同名也非一般或有以主療為之名弘景所謂五参其形不盡相類而主療類同故皆有参名是也或有以香氣名之者草麝香蕙花之類是也或有雖形狀不同以其味相似名之如呉普本草木橘山芥邵武府志鶩呼水鶏之類又有一物而二名者虎杖蓖麻子是也其外鰱

錢也、地椒以葉形名之、蜘蛛香山慈姑以根形名之、燈籠草以角実形名之、馬鞭草鹿尾以穗形名之、牛膝以莖形名之鉤藤以刺形名之木鼈子以核形名之、三白草以葉色以之高良姜蜀葵以所出之地名名之、藾不可勝數辣茄有椒名者亦以其味辛辣也、又不類椒形狀而何獨為之嘗哉、香川子動有此辟焉

回倫曰番椒生瘠地者味極辛辣熟而色紅鮮者枇瓣尖味不香辣或市中爲末若賣者日久而氣味已變不佳須自采製也

味　辛熱無毒　李東璧曰辛温無毒野必大曰大熱有毒　王仲遵曰子有毒甚辣不可入下　多食發血損眼動瘡毒

撰　凡撰辣茄以味辛氣烈者爲佳此物氣味有厚薄之不同若常用助餐宜寬薄者至治痼疾者猛烈者則不能或直喫或煮食或雜和他物或粗末

糊丸服或為末豆油煮煉如膏用各適所好用求當可〔

寒濕痃気殺蟲開胃進食多食則助火昏目損血生瘡腫墮胎 貝原先生

除寒痃気殺虫鄙人之嗜食也 脾胃虚弱人不可食多食久服暗目破血墮胎解西瓜毒 香月牛山 巻懐食鏡

開胃口進飲食除心胸痞悶祛癥痃運気温體徤痼排滞破悪血解凝氣驅痰止喘 香川太沖 薬選

摩積聚発汗殺魚毒麺毒 國俑

明 番椒之辛熱峻烈最甚似山椒胡椒芥薑之類若過食則遇害者急捷可知矣然近時上下好食者多而受害者少此據其峻利迅走不住能下

達發散而遺毒於鮮之故耶其積年經月者不覺
暗耗元氣竭真血爾豈不可戒懼哉　野必大云

便血ヲ患ル人是ヲ食メ甚效アリト云

ルヘシ瘡疥腫物痔アル人不可食　貝原先生　大和本草中

裕年中朝鮮人来朝多患痢者其醫鄭東里飲番椒
煎湯悉痊ヌ　其故鄭氏曰朝鮮人来日本驛舘食西
瓜過多畜濕熱爲痢番椒解西瓜毒故用之是彼國風
俗治病人多用單方其意見東醫寶鑑可知　香月牛山　老愼全書

世人謂食辣茄必破血發瘡腫其毒可知而又
謂若食之已久習慣成常則不復發出矣醫者亦與
曾向言如出于一口意其始醫者唱之而世人之有

才小智者自喜以為合其黙見遂乃畏怖忌悪擯毀謗董図糞土紛紛非一實非世人之罪乃醫者之惑之也何無見識如斯乎凡食辣茄破血發瘡腫乙乃斯物之良能最可賞奨之士耳蓋人身之元氣復可驅出之悪血屢食之瘡終不出何更釀成瘀滯乎若無瘀血之人食之亦生瘡瘍則可謂此物生悪血而有毒矣辣茄果有毒乎則絶無瘀血之人食之亦當生瘡瘍矣若其不然則其生瘡瘍即向之所謂瘀汁結滞之人而此物之良能也果無毒乎則可觀

絶無瘀血之人食之未曾生瘡癤則其無毒也不須言而明矣若夫結滯已久深痼癖成熟路而草藥固不能破大毒恐難多長灸火苦熱不堪千萬壯温泉地方僻遠不可到無可奈之何矣筭安出乎當是時也多服辣茄抵排攘作入死地求生路間有得瘥者此亦不得已之策非尋常所為也古云馭駑馬者利其銜索不入虎穴不得虎子况辣茄固非有毒者故不瘥則止耳矣未嘗見有害也則此非以人為孤注矣若得賴之治痼癖則何幸如之毎多覩是良驗豈無見識而如此之為乎固非為奇貨可居矣奈何世

鞋ノ後傷

之娼嫉者、即謗所謂以針為棒、一人唱之、萬人和之、三轉市虎以虛為實、遂乃矮人觀場、夏蟲語氷、皆是不見不知、漫言悲笑寒熱、甚而癡人之前說夢、騃童之傍談鬼、全是道聽塗說、何辨有無虛實、吾門用辣茄也、一片婆心、和盤托出、敢扎衆試、徵是一得愚者千慮、止切濟救、賢人廣采、緬期後世、記播州一閒人、自壯患哮、轉發轉劇、自分身係廢疾、無復望于世上、遂投散而漫遊、有人教食辣茄、初畏其辛而不從、及纔喫、開膈驅痰、隨食隨快、日啖數枚、積至千萬、宿患月減日少、忽大發頭瘡、膿水淋漓者半年、比瘡愈、哮

證全止饗鉄系人又尾州一〻人病痔十年苦楚極矣自以為食祿而不務職素餐可愧縱君優之獨奈天譴不如自盡而恐刀傷惹恥於父祖沈思〻〻決或云多食辣茄下血而死儻萬一僥倖久患除治〻〻未可知也然未晩矣其人下士薄俸無幾遂〻頓產買辣茄食之夥矣滞患頓治彌健倍舊又浪華人病疝疼痛拘攣多年萬變不可除治一日喫丸藥世佚聞之則辣茄丸也遂乃自製服之一年舊疾如失如此之類不可勝舉臨編此書偶談及此事故聊記一二諭示子弟此皆因變處變用毒攻毒非平時所為乃

無已則有一者也世之誹謗者舉此希有之事以為常常若斯強人多食吹毛求疵洗垢摘瘢衆口所移毋翼而飛誣枉媢嫉無所不至嗚呼人心不同譬如面焉好惡各異聖人不撤薑食此其所予之不多食此其所慎無復容議矣後人嗜薑乎則謂人必可以為聖人乎忌薑乎則謂此人必終不可為聖人乎上知下愚元自天性何在乎斯甲好辣茄乙惡之亦是天性不同如面不可奪焉不可強焉亦泥任人薑與辣茄何別既慈于生薑條此是然物固不以愛大論唯欲破世之大惑故評說焉◯

正誤

附方　丹拍用蕃椒草羅之類方論來 蕃椒散 治虚積痃、婦人血積於瘧等之症主胸膈痞氣蕃椒、研ノ細末加金將墨少許 蕃椒泥糊丸如梧桐子大白湯下

キテ汗ヲ出ス　大和本草

寒濕泄瀉 用蕃椒數枚合味噌研酒作泥塗糯糕炙食則愈　本艸[illegible]

極寒塗壁 極寒ノ時壁ヲ塗ニ泥凝堅ニシテ不可塗蕃椒ノ末ヲ泥土ニ加ヘ又之ヲ[illegible]　大和本草

同上

長之類

赤十三
黄二

一
錦木
二
梅山
三
秋の夜

第一

四

〇

五

又鷹ノ爪

又一名

天つ鷹爪

此種コトノク天ニ向ヒ形甚小クシテ愛スヘキ風情ナレハ衆人盆ニ植テ翫トス其形雁鳥爪ニ似タレハトテ名トス味至香辣尤ナカラノ分良スルニハ是ヲ以テ第一トスヘシ

六
七
標
八

九
一〇

短之類

赤十

黄四五

一
二
三ノ一
三ノ二
四
五ノ一
五ノ二

六
一寸法師
七
八
九
一〇

くちなし
三ノ二
二
四

方之類

赤七
黃二

一
二
三
四
五
六
七

トツハイ
二
万年

圓之類

赤九
黄六

一
二
三
四
五ノ一
五ノ二
其形公丸瓣ニワカレテ頗菊花ニトシ實辣茄ノ異品ナリ

六
七
八
九

一
二
三
此種黄ニシテ
甚小コトコトク
下ニ向テサナ
カラ星ノ降ニ
似タリ故名ク
味中

玉川

四

金橘ヨリ少シハクシテ色黄ナリヤマアキノ花ノ露ソラトモ云ヘキ風情ナレハトテ玉川トハ名付シニヤ

附畫

甜番椒　一種

番椒ノ形種々ニ變シテ其味厚薄アリトイヘトモ皆辛辣ヲ離レス然ルニ此種味甘クメ棗ヲ食スカ如シ實ニ變ノ甚シキモノ也形状至テ肥大色甚美ハシクメイカニモ辛カルヘキ風情ナレハ不知者初ハ不信試ニ少キヲ嚼テ大ニ驚ク勿論番椒ノ功能アルニアラストイヘトモ好事ノ者植テ弄トス

諷諫二十様
全

狂言(キヤウゲン)するも猿(サル)まはしの職(シヨク)也

世の中を藝させ角まも猿(サル)ればのどかに渡世し人も。大かたそのごとし。さるくせあれば。かならず移し。我がみにも。なかぬものじやといふものを。論まへてあるらし。如泉(ジヨセン)何事も自由にならぬとなまいは見ざる。聞ざる。いはざるがよしともいふに。隠者気質(インジヤカタギ)なりし男。なとい。猿田彦(サルタヒコ)の末葉。猿丸太夫九代の後胤(コウイン)猿冠者(クハンジヤ)の子孫にて。三河(ミカハ)も若くもじ刀(カタナ)を中の町ぎらひにすまひ。去事さしになり。町人がちまましいはく。猿屋町辺(ヘン)にて。お店を家はるつぶし。近所隣(トナリ)酒屋餅屋のつき合ならもうまれ人といはましが

生き渡いはく商ひが不得手なれば。ほどなく貧乏になるり。
さるかたに立退かし去年一年家に居て屯と。店へとする事。
二万三千三百軒ぞうり。店借山王町きくやの木綿も通き
まそおまへ孝子曰もすめるさうなが。扨く錢金がまうかる
事は大文盲じや。今時は。なすやをみるぞ。口を喰るとのでう
おぼえませぬ。と去れ。技能切の武士は家がつまるといふ。
百性はどみがありにするがいや。商ひは下手あり職人を隣が
なんとく何でもある業がないもし。此掟をされでは。ゆるく
ましが尼如さうとにやひまくなけれはおまへの商賣によるらう
このみ事をおめひ耕さ。ましが異見をつうしやまていふ。此の男を

鍋ハ煮ッで備しけり。釜のうちにおしくら茶鑵で食焚ど。おもてむきハ何くはぬ顔をして菴をしづ。或衣を移しく と
ちまる咽ふ。ソづおともすし太鼓乃響トンドントン。カチカチカチ。ドドドトン。カチカチ。と鳴て猪磨が
杙乃上に赤髪なる形顕を。右の手に白き幣を持。左の手に
剣の柄を携へ善哉善哉すれば是。青面金剛乃垂跡
まちらといふものなり。汝等比ぶものあるまじ。いまじんを
かり倒さんとする作る者。御も不便に思ひ。昔ゟせよと之謹で
因べし。そちが生まれハ申の年申乃月申の日申の刻に誕生
あろく。毛が三本ハ人間と成て苦労をする。其三本の毛を
抜たらハ生涯安穏なるべし。その毛といふハ第一だんに味噌毛。

若手合ガきあひの藪醫者殿ハおとなしい顔して人乃
頬杖ついておとしかくまに。とのさまが長を説しておれど文選モンセンあると
いるでもなんでもいなきハ。息ムス子コ達ダチ口くせ。何ナニ野ヤ暮ボらしい
お人衆を庚申待。人じゝみても八つすぎ

作者

止笑

昭和八年卯の霜月

獸小ぎつくりして。通を失ひし狂言の後日名題看板。遅八
刻莫ゝ摺小木と申また。蓄合より。忽いちはやく此作獨庵座元。
とらふ。ふしぎんちやに及ぞ。此役者いひけ 言組 を口上のないうち
ちやく役者の評判が出さい 五九 此評判は役者庵の巻頭巻軸
此位付もしらしやせぬ。考へましたら。格まへて此藝ほて定も
いたしませうが 考人組 をまかいしらぬ事。只さうし 尚た狂言で 評判
さるゝ事を 五九 ますげ 初篇。房宗丈の出揃ひ 新旅殿に足本席乃
五所巾 文刻堂へ登り。古人乃教をうけまかれり。雪おろしと
いふ獸を取て押へ。摺小木御捨て。九刀をさしたりましし鶏の
逸にあちきての仕舞。大ま出来ました。田舎芝居を勤らず

芸評も出来ました［田金但］あまさきやうに。江戸役者評判せんさく。
からくが方の。周午丈ハどふぶさな［六五］あるれど周午丈も技合文字こ助
の役。唐人男沖巽が書産を除ける而ました。ちと切席へおちてこぬ
而をかれど。文言天晴出来ました［大宮］進おしやうげよ役者へ伝ン
ぶま［六九］進おおい技合家の連技縄儒人義しとなり。一小冊を拌に
かゝる歎孝りの仕方よし。押付上上の二字ゑゝり罷くなりませう
［千枝但］こちの色役をおせ程やく出さぬで［六五］寂初にますます進みぐ此評判よ
其後及ひつきひへおぶろませぬ［一三七但］どふでもよしさ［六九］色役丈。進八判
鳥つとりよ男立の定りのコレ詰てめしひませうる。上ぐるぬるりとうちすて。
江戸のきはみよめかる声色。あやや又ちんのらんだ、おきやアがれといふ。

ざる不手しりなり。冬は日の花色。猿蓑乃実色へるごとく。
炭俵続猿蓑の撰あり。今日芭蕉流は俳諧さらどのハ
よし芭蕉乃骨髄よりつねださまぬとのなり とハ繁が
出らし。花が咲て。実が生てといふしとにさ町ちろ。只俳諧の
よん不尽さうして。花といふらの事。俳言深く是も尤なり
此不八両八斤双方勝劣なし
利屈位 只俳諧はよん不とさうして。花といふなる。雪おろしは難
言のとまき。書事がつるん 位 雪おろしの時ハ。季吟子山夕の序跋
ある事ハ蓼太ちろんぞ。我笈又ハ板へ上て置く。延享廿欤
仙は序去賤人と延宝延享乃字のかゝみで。對句小弟

天満橋下稀らしや難波橋　秋風

此二人ハ一派乃門の同調古調なきにしもあらずと

引句

「寒菊乃後ハ多仙枝つぶれ　芭蕉

遅八

言菊は素段の句ハ満節乃うつりゆく所ニて

世角のるの二ッ四ッなるべからずかりに[堅]家ハ遅八との也鑑

すました

此ハ遅八ニ吉　葵摺ニ吉

葵摺　侥五色墨よ「砧やら志形板やら手縫仕事

漢楚やら三國志やら咲まつり

とかう廿人ハ巻乃同調と雑なる人々ハ各々五人つ五巻乃

同調といふに

遅八　　五巻とは五人の点取なり。いづれにも甲乙をつけなぞ。よつの集とは格別の一巻なるべし。やうもならんとる。きりしをを二字仮名三字仮名のさうし合せ通達すれが。巻くあとまつきなり［利屈］それならば廿歌仙も廿人の見るなり。味方呼子鳥の句は生類。天満橋の句はまる鳥。ぜさうし合さへなくば。巻くまでまとべし［三ッ組］あれば返答は大の遠吼じや。雪おろしに。蓼太人の句の同調を難しあぐる。近比蓼太の俳諧本に。同調といふもある。所夜どのはちうしやらぬ［誤だ］をべて我一人をとらえて。人の一寸の眼にかゝるとやで手前のまうんと。

同なし〔九十九〕その附句は

前句　〽韮の栅干　鳶はかゞみて

附句　〽鶯の居る花の後家とよまりまり

あまハ莱薗集に俳諧名　蒜の籬よ鶯の居る世なかめ

侍りて　〽鶯の居る花の後家の狩りより手代る斧の情を笑ふる

此抄存すて二十五条とぼ人もにも　〽前句せ前の事とえ

つるより狩は　〽よ光り書りと附るなりとあり句論

證書にもきよぞにあてたまふるらしるなれど

此不甃捞大勝　　遅八は大貞

甃捐　　蕉流甚嵐の流を七名八躰等ハ敢て不ㇾ取

遊八　十五躰乃附方其角嵐雪等になしとの答

誹に天を仰て唾をはくといふべし［利屈 但］コレハ愚拙に其角嵐雪

等になしといふもの七名八躰等は捨て不取とある［大笑］あらあら

聞ずじや［評］されどやましても。切磋好乃方へは聞え。の其

ません。上残変の頂上でなきまれで聞えませぬ［尤 但］猶聞たい

［評］さやうなあらおろしやまんろ。其拙に捨てよろしといへども

むなり。附合の事は。其変万化ありて俳諧乃奥旨に至ては

十五体とも百五十体ともて窮究しがたし。遊八に十五体

十七ヶ條附方あれ。初心をみちびくとて何は道に誘り

せんといふてあまとむなり［評 但］その十七ヶ條とやらかれとも

仍じて遠国一面乃原松に侻を継の秘書とあるに
べきや。なまり不意なる説なり

遅八　　用汁雪中庵乃号をつぐ庵といづる是所に
附属なれど嵐雪用汁吏登蓼太と四世雪中庵連綿
たる事なるぞ私といふもんや［追伍］嵐雪が用汁に雪中庵と号
庵号をつけといふなれど。用汁も点印をうけ吏登に伝り
しまゝ。雪中庵といふを譲りともいふなれど蓼太翁抔に私を
しかるにとゞのき［追伍］すべて名家の称号などはその人没去の後そ
の名乃たえんことを惜みし。お続ある事なれば。四世雪中
庵とおつゞいてといふても能ござりません［追伍］雪中庵と

支考が説く／＼と支考を悪(ワロ)くいふ。實は評判八なの［次丁］支考が
説が悪いとなり。蕪ゞ猶どの。ちと過言(クハゴン)出來ませぬやて支考うら
まさらし挂持切等はとうに。贔屓(ヒイキ)にいうしませぬが。芭蕉流
の俳諧。圓く／＼とゆけてよかれど。支考が説(トキ)初の發さで拵く
居ませね。去うし。蕪ゞ猶どの十二丁めれ文讀ふ。七名八躰でらと。
支考も亀圓を數(ルヒ)るに止事を拵ずるに起りふるなり。虚元
皆に悪く考が老を及を唯吟味鑿崇にのゝ費(ツイヘ)ふるが多
流となりていよ／＼今は偏(ヘン)枯(コ)となりまり。蕪ゞも是を確とする
ところふると。まさたち悪く／＼ゆむよそれどもまを。又遅八
どの返答。支考ふうぼうを。古人の風調取て學(マナ)ばといふと

此示葱〻摺ハ上上吉　遅八々上止

葱〻摺　　吾妻かゝ主馬尻乃夜半の秋　　湖十

源氏伊勢物語等乃宮中 顔面の不義ハ人倫を以咎ず。文章詠歌乃風流を以和国の至宝とす。吾妻がゝ乃白不忠不義なりと難するもの。みげゝ境界に加ふるべき。悪句ある集に上らさまほしきなり

　　猿乃つまみ喰　　葱太

遅八　　雪掃乃貞婦を九十九髪の好色も。これ勧善懲悪乃こゝろ迄て。世人の治教なりと講せらる文章なり。何ぞ吾妻がゝ張形の講釈がきかんや。雪上此句を主馬尻とりき

俳かしては句になるまい［隠］何も合点でござりますれ［利屈組］雪
をろしに。画賛。俳諧の地名を出し、まとよの事と
申すれば。書事でさへつまらぬとおりやるよ。獎之摺板本に出し。
其の返答とく。避八板本に地名三ヶ所出し。花ゆて
など申まして事。其の外非礼（ひれい）云諧同所。頼朝公の御前へ
引出す事。此僉議（せんぎ）にゆきは。罪ぶかくなるまじ［隠］ゆきりく
智恵がなれと。人物くても申さすれ［二字組］例ないじやろ。吾妻
形といふても。つまみ喰といふても。よいはさ［隠］サア そこでござり
まする。なんといふてもよいことなれんが。けしの起（おこ）り。吾妻形とは
尾花などの。つまを喰といふ句もござんす。吉原の形りじや乃と

和歌まで　「らけそむり気下伊ハさくれ乃当に辞むきひき所

ちまりますん　ひころの口合点なきまいうた佗びなれハとて。

いひやういひ示をかりきうなきの。昔書所乃つまみ喰のとき

いうにも拙かし。佗びより又一等下りし浮遊理でさへ

「枕とちぎと浅おかさねハ。とききまかし「まくらハとこの

かちかねうちせい人でまうし風雅めく御や。まんじ行や

角やの理請が並べく。吾妻がるをとが然る熟太。つまみ

喰といふ句をいじし。其返答も手前勝手な返答なれハ。

遅八どの罪とみてすまし。罪にして地獄と知らせ。業乃

痒よくみませうなるれ

いはしませうが。時雨が一句につきませぬ。附ましてこそある句よ
ろしくハなりませぬ。古人の云葉に。附合のこゝろ。上手のは
親疎の遠く疎がおもしろし。下手のは。作人の志さしきが
ぢりしとなり。家の附ました句ハ。作人の志をしくする
ものとの。蒸太も下手でござりますに扨又胴人形の句も
あまり附ませぬ。道八どの返答に。田坊が誉る不の買が句と
申ましたが。蒸太揃どのも誉ハいたさ遣ませぬ本の句ハよかろぬよ
もせよ。出づるものゝ七ツ乃うちを殊よ◯るるともいふべきことなり。
人乃句ヲ雑じて附ましうるに又雑なる罪太よ皆。
閻魔乃前へいゝましてあろ。大なる舌をぬかれませう

此本　蕉〻摺ハ上上吉　遅八ゟ上

蕉〻摺　唱俳了〻しかハ角ばらつきまり　木髪

此発句不切とくへ見切らせハ花も紅葉もなかりけり。此方

ふかく判して見すとなじつていつ了。何ぞ切字といはん

遅八　俳文切字ハ秘すべきの師説なきに論じゝく

益なし［ころ口 但］古実を引。切字ハ秘すべき乃師説なきぞ。切

字といふ事知らぬやうにいふが。蕉〻太が発句集に〻記す事の

一所切てぬ庭もなしといふ発句がある。是ハどふぞ［利屈 但］

蕉〻太発句集乃うち四五十句。古句や手尓葉（テニハ）せぬ

句など討論（トクロン）して書本。雨夜随筆（ズイヒツ）といふすて。その発句

〔一三三〕十二条といふ嘘往云に出しさが又出したり〔藤〕遂八との
あけのこひほけのちとこひ足りませぬまで返答此仕りがたう
さうなるの
此両 葵挂は 黒上 遅八は 白上
葵挂 凡むかぬ人の日比や網代守 紀逸
葵太雑して云此句うかきて発句となるに
我家ら酒に貴てや網代守
今ようし老入ふし婦てき
深き山へとうは去まで火や念仏
衣笠又月東去る夜奥川

書を著せり。耳底記を擬す。更登を出斎候に誂し著
ゑがける光廣卿に比す。過當驕慢偽忌なる書といふ。
遅八乃返答に。此書ハ我師宝暦のはじめあらはし時乃
麁忽なりしを今再版のこゝろなり。又七部捜。同答の
詞が耳底記に似たるといふ事なれや。是ハ俗流に人の笑
よからんためにおもむきをうつて来るまゝハ何で託をせ比を
のとかべきやといへり。所被さん家の評とるものとすれば［所見］芭蕉
句解ハ私もこまりしたい。つれも杜撰がらくさん又七部捜も。
耳底記に擬してもだいどうせん事。返答に熟を借く
来るまゝハ何で託をの比をのとかべきやとつまらぬ返答。

風雅侘く心事しもいふべく。戯訛乃文宮さへなつかしきハ。机文
臺まものせくろうて事あり。逆八どの序。中川宮初。
雪をあしといふその本ありが批と申評判のうへ。又上ぬり
としてが物のせんのとこ俄にちるがたまり。むろとして
本書てさとえ。ぱうにも腐文俗中に俗まで。机にかより
小歪つきそのきしで。いそゆる糟味噌桶で。露のおはせ
でおざりまた。そして表題がどうか表題。莫々楞どのゝや
きうて事が逆まきといふぞ。手まへ乃甚で。本にいはず
逆八刺とぞ。さりとはく。あまりな事。序文よ。よまき哉く
莫楞小本乃巻に逆八刺ハ題号並にへりとよ侍こそで

近きうちにさら〳〵と見へしもやうさましたが。惣て揃ども。
かなづかしく容の番男になすきつけたて初きの段取が費
にてさきますぽんどの評判也で。大笑小笑てのきますし。
殿に和睦なされし敵討じやらく二代かなりまいめで
多くは趣向の夜組しく [illegible] とてその筆又役者は見立と
たのむ〳〵 [illegible] えらそればかりよせてやりません 狂言は名題が
揃ひ本ぎやふよれて是不道具がよからう
　惣役者足立兼不道具没くし
揃がよく売つく〳〵身代も日まし〳〵おとさ　於釜あしむう
一冊の文面初りよりてぬどをでうらの素りはかつる　水瓶居宮

書句ハしらぬなりても腹が立く胸ぐらハ承る
いらぬしる後をくみてやりましい書乃さ侍
釈乃いひ訳けあり板木をきりきざみした
板行料を出しくく人の尻をもちハしつりと言さい
返答乃拍子定規ハ二つなまで味噌なり付る

あひぐ句を引出さまで岩手屋へまれてもらひけら言ハ哉

中洞童　蓼太
破摺鉢　周千
小俎板　進歩
土曲突　松隣
折箟　魚汶

片口
存義
買明
木髪
旨原

ぎりいちまく〳〵をくまりぬ極楽(ゴクラク)にあて南無

細偶

渭北　秋風　湖十　紀逸

めん〳〵なみだあまりが口につく〳〵おつくへなまぬ

切左臣

秋瓜　烏酔　涼袋

商(アキナイ)が上まぐ〳〵ぶん〳〵金銀とかに請まる

火吹竹(ヒフキダケ)とらう

千秋万歳　シヤン〳〵ぱちぱち売りませ。
シヤンシヤンシヤンシヤンノシヤン

既にふけゆく夜は已。西南の隅。申の方に忽然として声あり
人々耳をすまして居たれば。あゝの人間よくきけ。我を
是庚申の本立なんとおもひおとれ猿といふものゝ汝等背より乃
嗁人どもおすひをゆるんば。かまへて急度謹べし。ひはても
三十棒のひはひ猿も三十棒

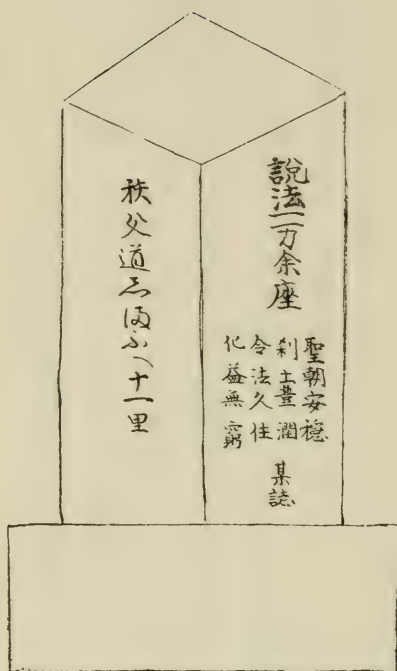
時ハ明和八年卯の霜月のへ申乃夜
真赤庵に於て牛房焼太郎
おつはまて書

渡裏徳兵衛版

石の枝折

石の枝折

タンベラボウを多く説て世の人にも志らしめせめてたべらぼうにもせんとくちせぬ石に功を揚し找汝等無益の筆墨找ついやし外物に轉しらるゝ事なかれ汝ハ汝か欲する所に随ふて鳥類の多くひと群を同ふせすんハ可ならん何そ街路の瓦石を見て怪とせハ是汝ハ諒乃たべらぼうなるへしあなかしこ

戊子初秋　　　　武埜道人稿

かくのごとく誌せるを或人のいへるハ秩父に通行せる道しるへならハ石の表の方見安きに有べし又

中仙道於津たへ行て妙義榛名白岩水澤なんとへ道志るへ乃石ならハ志ほふへ十一里と斗記してハ枝折にも成まし何用そや

聖朝安穏等のため説法一万余座修業祈念せる誌しならハ驛路のかたむらに建貴賤となく馬駕籠乘折多き所に塵芥乃せかれ恐れ多しと思はさるハ實に安穏豊潤於祈奉るにハなかるへし道志るへのためならハ事足りぬとハなしかたし又安穏祈れ誌ませんとならハ人家不淨をさけて山林不月乃寸地を求致へき事にや　公の仰にも道路新規に石地藏供養石塔の類を建て大功成田圃のついへもなからん様にこそやいはんや　聖主の御祈りも申せしための説法ならハ人倫遠き清淨の地を撰て可建事そかし又碑を以テ後代に至り雅とせハ日本三碑の如く思よらハ古しへ於志たまふともいふへし

説法一万余は凡一ヶ年十二ヶ月晝夜六十座にして七百二十座也年數十四五年もみたされハ一万余にハ及かたし志かし都て春二月より四月比又ハ九月より十一月の間回向万日と稱し説法まふけぬる事多し但十五年も晝夜間斷なく説法して一万に及やいふかし三百六十餘日説といふ共聞得る人なかるへしされハ大聖世尊四十九年乃説教有といへとも末期に至りて一字不説とのたまふ然るに一万余座の説法ハ何そ佛の心に叶とせん或ハ一郡一邑も利益を得たる村も有哉其志るしも未聞へす接得(せつとく)によつて万に一ツも悟道發明の人有哉曾て聞す若名達乃人有ハ是等をこそ碑銘に揚て　都鄙遠近乃人にも知しめハおのつから勸善乃助とも成へしされハ説法に依て阿難迦葉(アナンカシヤウ)のごとき權化もなくんハ二万三

万乃説法何の用歟ある池中乃蛙聲成へし

今世説法上手乃名代あれハ妓藝者の心持よて名も役者の異名を取法會乃高座を舞臺のことくせりふこわ色をつかひ或ハきよらか成女人を見てハなまめきある十念の聲やかて高座より落ぬへしさるハ説法せぬ沙門乃生天し金仙ニ成たる沙汰も終に聞す只名聞を好めるよや

寒郷に回向万日と稱し説者抜雁市町をなす有様みな利勘算盤へ置きて衆生濟度利益をとなふ利益思もよらぬ事也せめて愚痴無智成姥かから様娘をせかみ惡たを暫ハ忘れて空念佛よても折節ハ思付く様よ可成事なから軍談又は利口よあきおとし噺よて法會を一座一興にや説法勸進元ハ唯損徳を考朝夕れ經を所割昆布に揚豆腐十夜の比の寒さに酒蕎麥呑喰夫レが百味飮食にて蓮花供養燈明錢あんど集る柄杓ゝ先へ蠟燭を立一人りも殘さぬ錢の取方つら〳〵おもん見て文句は百錢宛の定り駄賃のことし悉皆佛法商流行して損徳よ手を廻し足を空たてることいとおかし

百日れ説法よりも屁抜ひとつ　とほとく思ふ世の中そうき

戊子初秋　放屁散人評

（昭和八年五月五日以中島國作氏藏本書寫並校合畢）

米麥種子撰の傳

稲ハ毎年十分み穂を
三ッかけて中元の種ハ
株みえ候しく枯れ
穂も出ぬものなり

麦ハ穂のまん中あたり
水肥を十分ふりかけたる
至細かく十分に上る穂とな
ある此種ハ少く実多く生る
三四年試て百の違なし

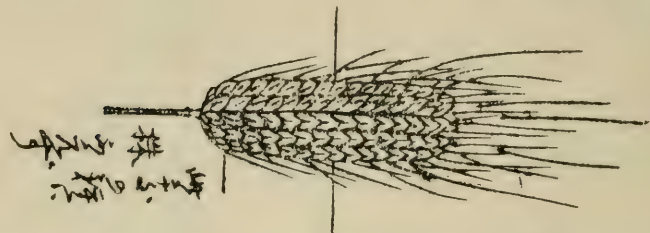
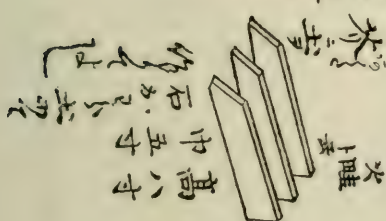
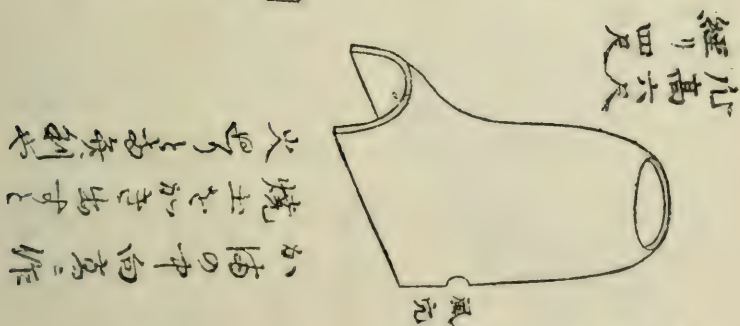
耕農の益ハ速束ニ弘むへからずかし

不出庵

田畑肥土焼竈雛形圖

かまの中向高ニ作
焼土をかき出すと
火出りとある便利や

風穴

凡高六尺
經リ四尺

一竈の中火畦の上ニ
古木古竹木の根
竹の根家居のちり芥ニ
交て其余雜物も土を交て
山芝ハ土附のまゝ日ニ干て焼

火畦ト云
高八寸
巾五寸
石かこれ土ニて
作りてよし

一市中辻々村里の巷ニ積重ある芥朽くさりたるを
内焼て益多し

一赤土ハ芥ニ交テ焼ハ肥のきゝめ多く田畑の地味
直も事神妙也

一世上の芥焼掃よせのゝ土を多ク交て焼ヲ發明ス

一山腰又ハ野原の芝をおこしとりて田畑又ハ川
筋ヘ土砂の流込ぬよふ氣をつけ玉ふべし

不咄菴

書　翰　拾壹通

高安六郎氏藏書翰

大阪市西區京町堀上通五丁目九九番地

江戸ゟ此地へ御出之御役人中皆々如此之あしらひニ御座候只今ニ而も御旗本と持碁ニ御座候故寂早事足り申候其上智惠の有物と思はせて置ハやもり奥深く御座候出れハ小草出ねハ遠志今時ほしがらせて出ぬも珍しく古人之仲間入に而御座候つまる所も陶朱公之仲間へもいり申候張子坊ハンレイハ古今之智者に御座候私共ニ和漢三人ニ而御座候御一笑〳〵　以上

廿八日　鳩溪

一錫鉎丹山色之儀ハ日本ニ存する者無之私數十年骨ヲ折取出候故容易ニ進上仕かたく御座候産物御志御座候ハヽ追々此度之如被成産所御書付被遣次第私存寄可申上候錫鉎丹等御見出被成候得ハ割合ニ而稼掛候樣可仕候間必々御出精可被成候　以上

七月廿六日　平賀源内

德田泰造氏藏書翰　（竪五寸八分、長三尺五寸二分、本文三十七行）

高松市鹽屋町

愈御堅勝被成御座珍重ミ御儀ニ奉存候先御禮申上候ハ宅元ゟの書狀御屆被降每ミ御世話ミ至不淺千萬忝憾ニ落手仕候

一其後參上と奉存候處甚取込御無沙汰仕候誠に先夜ハ御來駕被成下候處甚麁末ミ御儀且花火も遲其上沙汰程ニも無御座御退屈奉恐入候其夜の事故行先々ふさかり散ミミ次第勿論兼而任御差圖御馳走ハ不仕此以後月ニ二三度宛も御保養ニ御來駕被下候樣仕度此間中參上仕此段可申上奉存候處追ミ新宅客來大取込尤廿四日迄ニ而大抵相濟申候間何卒追て御來駕被遊被下候樣呉ミ奉賴上候此段御序ニ宜被仰上可被下候先夜ハ大不都合ミ段何分宜御取成奉賴上候　以上

八月廿二日

平賀源內

宮脇又右衞門樣

猶ミ近日新蕎麥差上度奉存候御來駕奉待候近邊名妓なとも御座候萬ミ可顧可申上候　以上

（竪五寸四分、長二尺六寸四分、本文三十五行）

此間ハ御物遠ニ奉存候不正ミ天氣秋冷相增候得共　御父子樣益御勇健ニ被爲入奉恐悅候次ニ貴所樣御安泰奉珍賀候私儀甚取込大ニ御無沙汰仕候扨ハ此新蕎麥不珍品ニ御座候得共信州川上と申而就中信州一ミ名產ニ御座候故奉差上候粉ニ仕可差上奉存候共粉ニ仕日ヲ重候へハ惡敷相成候願ハ御遣被候程ツヽ粉ニ被仰付候方宜御座候故其儘奉差上候乍憚宜奉賴上候　以上

九月四日

猶ミ信濃蕎麥と申ハ澤山御座候得共佐久郡川上鄕と申か第一之由申習候左程ニ違も有御座間敷候得共申習候故味噌ヲ上奉差上候外之產と被召上くらべ勝劣御遠慮被仰下度御內ミ奉賴上候

一此間不意ニ御來駕奉待候御馳走ハ不申上候何卒月ニ兩三度宛も御來駕下候樣奉賴候天氣ニ成候へハまだ別莊も宜御座候御馳走不仕御咄被遊候樣奉願上候　以上

平賀源內

宮脇又右衞門樣

（竪五寸六分、長一尺八寸、本文二十三行）

其後ハ御物遠ニ奉存候愈御莊健奉恐喜候誠ニ先日ハ御來駕被下御苦勞千万ニ奉存候然ハ一昨日渡邊助殿占御肴被下千萬忝奉存候乍憚御序之砌宜樣奉賴上候貫治樣占も御加筆被下忝奉存候是亦宜奉賴上候

一渡邊助殿へ返書遣度尤其日留守ニ而昨日認候得御屋敷不奉存候貫治樣へ御序御座候ハヽ御賴被下度奉賴候近日少し御來駕奉待候萬〻拜顏可申上候　以上

九月廿日

猶〻此間松峯老御出ニ而得貴意候

可樣近日潛ニ御來駕被下候樣吳〻奉賴上候　以上

宮脇又右衞門樣　平賀源内

（竪五寸五分、長一尺三寸、本文十二行）

先刻御來駕被下候處(二三字缺)不得貴意殘念奉存候扨ハ明日別莊御見分彌御來駕被下候哉承知仕度奉存候

且又御人數御書記可被下奉賴上候

一被仰置候趣一〻奉承知候萬〻宜御取斗奉賴上候　以上

九月廿八日

宮脇又右衞門樣　平賀源内

（竪五寸五分、長三尺、本文三十七行）

扨〻昨日ハ留守ニ而不得拜顏殘念千万ニ奉存候昨晚人上候得共御留守尤其後半藏君方御手紙被下今朝五ッ時御出宅ニ而私本宅迄御來駕並ニ御相談も有之候趣外ニ御老人御同道之由被仰下御人數等ハ相分

ゟ申候別莊へ御出御見分ハ勿論之儀ニ奉存候若ハ直ニ竹田狂言下御見分も被下候ハヽ北國迄御供可仕候左樣なれハ淸住町ニ而御饗意むだニ而御座候故本宅ニ而御酒ニ而も差上船ニ而淸住町御見分直に北國さして乘出候樣手都合可仕候若又北國御見分ニ不及と有之候ハヽ淸住町ニ而えつほこニ而も差上候樣可仕候此所御內意承知仕度奉伺候極御內〻被仰下度候賴奉何レニも貴公樣にも御出被下候樣奉賴上候　　以上

九月廿九日

猶〻旦樣御來駕無之故竹田ヲ北國迄御見分の御積かと奉存候何レニも御內意承知仕度急早に申上候

以上

宮脇又右衛門樣　　平賀源內

急用

（竪五寸三分、長二尺三寸四分、本文二十四行）

今日仲藏方懸合晩方參上可仕と御約束仕候今早朝仲藏方へ人遣候處昨日ゟ別莊へ參歸り不申由仍之又〻手紙認遣候尤深川ニ而遠方故今以使歸り不申候仍之仲藏相談相濟不申候故今夕參上不仕候明日參上仕委細可申上所此段皆樣へ宜被仰上可被下候萬〻明日可申上候　以上

十月三日

猶〻段〻承候處仲藏顏見セ狂言作ニ致掛候趣に相聞候羽左衛門方大分都合宜相成候猶又明日可申上候

以上

宮脇又右衛門樣　平賀源內

（竪五寸三分、長一尺一寸三分、本文十一行）

夜前ハ參上仕御馳走頂戴難有奉存候一件大抵相極り奉大慶候今朝も段〻懸合罷在候追〻可申上候

以上

一夜　前

右樣ヘ御約束申上候新酒一樽奉差上候宜被仰上可被下候奉賴上候　以上

十月三日

宮脇又右衛門樣　平賀源內

（竪五寸三分、長一尺一寸六分、本文十二行）

汗藥之儀被仰下則奉差上候隨分御相應之御症と奉存候見候ニ及不申功能書之通御用御覽可被成候但し功能書下書惡筆御劣署と奉存候取込早〻申上度候　以上

十一月十一日

南大曹氏藏玄廣宛書翰　（本集　補遺の部參照）

各段　竪　五寸三分五厘
　　　長　一尺六寸六分五厘

この書翰の年代は恐らく明和八年なるべく、宛名玄廣については同書幅の張紙に「玄廣トアルハ清水家ノ醫者服部玄廣ナルベシ、服部玄廣ハ本艸學者ナリ」とある。

猶々先日之儀萬々拜顏可申上候　以上

宮脇又右衛門様　　　　　　平賀源内

南大曹氏藏書翰　（各段竪五寸三分六厘　長一尺六寸六分五厘）　東京市赤坂區檜町一番地

〔註〕同書幅の貼紙に云「此尺牘ノ宛名玄廣トアルハ清水家ノ醫者服部玄廣ナルベシ服部玄廣ハ本草學者なり」口繪參照

廿二日之貴札早速相達忝拜見仕候其後ハ御疎遠ニ打過候愈御安全ニ被成御座奉珍賀候私儀四年以前長崎へ參去秋罷歸候又々此度鐵山之儀ニ付中津川へ參逗留仕候御聞及被下候通古今無双之鐵山ニ御座候被仰下候通數年之大願成就仕雀躍仕候段御察可被降候被掛御心頭預貴札御懇志之至不淺千万忝奉存候乍未筆御家内々へ呉々宜奉賴上候且來月中旬頃參上仕候樣被仰下不淺忝奉存候いまた此元取掛り故諸事甚混雜ニ御座候少々も隙ニ相成候ハヽ參上仕萬々拜顏可申上候三郎兵衛へ御加筆申聞候千万忝何分私ゟ宜申上度由ニ御座候先ハ右貴報申上度如此御座候　以上

卯月廿五日

猶々鐵山之儀ハ和漢蠻國古今未曾有之珍事ニ御座候乍去いまた吹方手ニ入不申大ニ苦ミ罷在候吹方さへ

成就仕候へハ永久之寶山ニ御座候成就さへ仕候へハ是迄存立之著述等も仕度相樂居申候且又四年以前田沼侯御世話ニ而阿蘭陀本草飜譯ミため長崎へ罷越候段〻珍書共手ニ入且蠻國珍事共承出御國益ニも相成候事共數多御座候此度も江戸之火災ヲ恐レ少ハ此方へ持条も仕候折ヲ以掛御目度奉存候是亦大珍物共ニ御座候　以上

口玄廣樣　平賀源內

宮內省圖書寮本百草露卷九頭書所載

和歌一首

津輕舟東風吹かせよ心せよ　ゑぞの千嶋よ浪たゝすとも

七言絕句一首

（竪二尺〇三分　橫九寸一分插繪參照）　京都市上京區田中大堰町一二番地　藤井乙男氏藏

烁陽凄冷異春陽　黃菊婀娜獨傲霜　造物有情何委曲　爲吾幽賞產斯芳

風來山人

七言絶句

京都市　藤井乙男氏藏

紙本　竪一尺〇三分、横九寸五厘

源内の詩賦は珍奇のものであり、特に風來山人とある唯一の遺品である。源内の遺墨の多くが書翰であるに比べて一層尊重すべきである。

秋陽凄冷異春陽　黃菊婀那獨傲霜
造物有情何委曲　爲吾幽賞產斯芳

風來山人

東都藥品會

會日壬午歲
閏四月十日

我
大日本。神區奥域。山川秀麗。人淳俗美。是以其草本鳥獸魚介昆蟲金玉土石之類。資焉以攝生者。大抵比之外國。亦爲尤美矣。蓋古者有採藥使巡行天下。隨唐爲貢於是乎品物大賅矣。中古其事廢。以故世人以爲
本邦所產不足以備悉藥物。縱令有之不中用也。徒貴耳賤目。恝焉不加意常仰給於海舶。所齎載乃從其所題竝。蓄。曾不辨其眞僞。嗟乎其不傷人者幸也。若夫洋海遇颶。商舶失期不至。前日所藏又已盡則其治疾也投棋類者。而庶幾其奇中。其亦不思之甚也。甚矣。本草學之不可不講也。始以欺人終以欺已夫藥用之品。無則已。有而不知之。以至欺人欺已。謂之何哉。元祿中。稻生先生始唱此學于 京師。而貝原松岡二先生繼出。此學大行于海內。其所著書亦大益于後進。於是嚮所待於商舶者頗減且所在產物。寖知可以備藥用也。三子之功不亦鉅乎。近東都有藍水田村先生。余所師事也。先生嘗曰。夫珍奇異品不探深窮幽則不易得也。況乎我東方。以神區奥域山川秀麗。豈止于此哉。方今本草學雖盛行于世。而深好之者蓋少矣。故諸國產物未盡出也。若盡出則不待漢蠻商舶所齎載而足矣。丁丑歲

約諸友持藥物來會者爲是故也而社友松田氏及不佞又繼學此會爲會前後四次……………………昔所無而今有之昔所不知而今知之如肥前仙茅出羽理石僅十數種耳末足以酬吾黨之夙志也不佞間竊謀於同社又將以明年首夏會庶幾益知其所不知也伏請海內同好諸君子以所在產物及固所藏蓄驛遞送致不佞之願也非所敢望也唯是同好之故敢布雅志品名已定則急遞奉返萬祈垂照

寶曆辛巳歲冬十月

平賀國倫頓首拜 ［印］

主品

五十種　藍水田村先生具之

五十種　不佞國倫具之

右百種草木金石鳥獸魚蟲皆珍品奇種但除前會所出七百餘種其品名事繁故不開列于此

○序にしるすかことく此會の主意ハ只今まで漢渡のミにて我國ニなき品も深山幽谷尋求る時ハ又なきにしもあらずまたハあれど道遠き國々を一々尋んとするも煩しく又こと／＼ハ至るべきニもあらされハ其國々の人ニたよりて產する處のものを得て是を考る時ハ諸本草並ニごゝニゆうをころいとぼつくこいへる阿蘭陀の本草等ニ出るところ大體ハ外國より渡らずとも日本產物ニて事足りなん然る時ハ內治外療の器少ナからすと思ひ立しより前々四會七百餘種ニ及ひ且他國ニも此會の催し有ニよつて此度の會は遠國同志の人の助をこふ

○產物御出し被成候にハ草木金石鳥獸魚蟲介類或は無名の異物ニても思召寄ニ御出シ可被下候遠

國の方御出席不被成候ても左に記し候取次所
迄御出し被成候得ハ無間違相達申候
○前々四會に出る處の産物七百餘種に及び候社
中の□□□餘種に漏候品□□残被成御出シ
可被成候遠國ゟ御出シ被成候品ハ前會に出候物
までも産所侍り候得ば珎敷御座候何ニても御出シ可被下
候□□品物産し□□の郡村名或ハ山澤の名
方言等又は深山希にある品所在多く産する
譯等くわしく御書志るし被遣可被下候
○近邊より御出シ被成候品當日に至り俄に御出し
被成候てハ大に混雜いたし候間閏四月朔日までま
私宅まて可被遣候兼て御案内なく俄に御出シ被成
候ては會席へ出シ不申ハ遠國は三月中に到着
いたし候樣に御差出し可被下候
○御出席御望の方ハ當日雨天までも早朝より
御出可被下候尤先達而御姓名御書付御出席の段

可被仰聞候兼て案御内なき方ハ一切入不申候
○前々の通飲食の類出シ不申候遠方の方も
食物御用意可被成候會席まて酒宴等堅く是を禁す

會主　平賀源内

寓居　江戸神田鍛冶町二町目不動新道

世話人
湯島二丁目　植木屋義右衛門
本所三笠町　植木屋藤兵衛

着座世話人
本所二丁目　相模屋藤四郎
同四丁目　中村屋彦兵衛

會席
江戸湯島天神前　京屋九兵衛

○大阪までは戸田齋先生より諸方産物取
集相送り候約束ニ御座候
○京都まてハ直海元周老并門人衆ゟも
産物取揃差越候筈ま御座候

遠國より參候産物請取所

江戸　本所四丁目　藥肆　中村屋伊兵衛
京　八幡町柳馬場東ヘ入北側　千切屋次郎兵衛
　　二條新地　藝種家　藥草屋勘兵衛
大坂　今橋通尼崎町　本朝人參座　天王寺屋勘兵衛
　　天滿天神裏門前　藝種家　豐後屋喜右衛門

諸國產物取次所

長崎　大村町　齋藤丈右衛門
同　江戸町　山本利源次
南部　藤田七兵衛
大和　宇陀松山　森野藤助
近江　山田　木內小半
攝津　伊丹　武田三廸
河內　中野村　重目見昌
播磨　明石　藤田養菴
紀伊　若山東田中町　山瀨次右衛門
同　湯淺　橋本仙志津
美濃　須賀村　今井田三右衛門
尾張　津島　堀田源次郎
讚岐　古高松　久保桑閑
同　陶村　三好喜右衛門
越中　北野村　逸見喜右衛
信濃　善光寺下町　青山仲菴
遠江　金谷驛　本目隆菴
同　同所十五新町　河合小才次
駿河　沼津驛川郭　清野玄一
伊豆　北條四日町　鎭惣七
鎌倉　雪之下　大澤小平太
下總　佐倉新町　關谷甚三郎
下野　鹽屋郡矢板村　坂卷小左右衛門
同　那須郡佐久山　白石松立
武藏　八幡山　糟尾利仲

右諸國取次所方角御勝手次第ニ御出シ被成候得ハ取次所より請取所ヘ相達申候會相濟候筋を御出被成候品早速それ〳〵ヘ御返進いたし候

尤道中運送ハ往來共此方ゟ取斗いたし候
御狀其外包紙等ニ賃錢江戸拂ニ御書付可被遣候
但シ中國西國ハ京大坂まて御出シ被成候得ハ夫より直

飛脚ニ而江戸ヘ取越候故道中十二三日ニハ江戸到着
いたし候生草木にても括不申樣ニ取斗いたし候

高松藩祿仕拜辭願　新撰洋學年表寶曆十一年條所載

乍恐御暇頂戴仕我儘よ一出精仕度奉存候尤只今迄仕掛候御用等被仰付候へも浪人よて隨分御用達仕度
奉存候何卒私御取立ニ被爲思召御慈悲を以て御暇頂載仕候樣被爲仰付被下候はゝ千万難有仕合奉存右
之段宜樣被仰上可被下奉願上候　以上

阿蘭陀

セイキゼイ

エレキテル

京寺町たこやくし下ル丁 阿波屋定次郎板

阿蘭陀
エレキテル
讃州産

附錄

そしり草

目次

そしり草

一　守屋

守屋姓は物部、氏は弓削、名は守屋といふ。父は物部の大連尾輿といふ。大連と云事は、昔大臣の別稱なり。人王二十九代欽明天皇十三年十月、百濟國の聖明王より使を遣し、釋迦佛の像幷に幡天蓋等、其外經論を奉る、天皇悅び給ふ。大臣蘇我稻目、是を拜し給へと勸めけるに、物部大連尾輿、中臣の連鎌子共に奏して曰く、本朝は神國なれば、異國の佛像を拜せんや、恐らくは我朝の神の忿を請けんと奏す。是に依て天皇拜し給はず、其像を稻目に給はる。稻目悅びて則小墾田の家に安置し、向原の家を淸めて寺を作り、則ち向原寺と號す。是日本に佛法の渡りて、伽藍を作りし始なり。斯て幾程なく、諸國疫癘流行しければ、物部尾輿、中臣鎌子、是偏に佛の祟りなりと申に依て、佛像を大和國高市郡難波堀江に投じて寺を燒亡したり。欽明天皇在位三十二年にして崩じ給ひ、太子卽位有て在位十四年、敏達天皇と號し、卽位の始め、物部守屋を大連として、蘇我稻目が子馬子を大臣とす。此時亦、百濟國と新羅國より佛像經論を奉る。しかれ共、天皇は文史を好て佛道を信じ給はず。天皇の御甥太子、蘇我馬子等甚だ好みて崇敬して、馬子が石川の宅に於て佛殿を修治す。此時又諸國に疫病流行、民死るもの多し。守屋奏聞しけるは、是偏に馬子が佛法を信ずるの祟りなり、早々佛法を斷絕すべしと申。天皇然るべしと宣ふ故、守屋自分にて寺に趣き、堂塔を破却し、佛像を燒捨て、其灰を難波の堀江に流し、僧尼の衣を剝て追放す、馬子涕泣す。其後馬子病氣に侵され奏聞しけるは、臣が病は佛力にあらずんば、命助り難しと申。天皇聞召て、汝一人佛法を信ずべしと許し給ふ。馬子爰に於て、また佛法を再興し、（此處闕文あり）三十一代用

明天皇、在位二年にして崩じ給ふ。守屋計て、天皇の御弟穴穂の皇子を位に卽んとす。馬子隨はずして、穴穂の皇子を殺して聖德太子を語らひ、軍を起して終に守屋を亡しけり。或說に、守屋は地藏菩薩の化身にて、日本へ佛法を弘むべき方便に、態と佛敵と成り、聖德太子に亡され、佛法の威德を輝しけると。此事既に聖德太子傳にも見えたり。此說實正ならば、地藏菩薩には似合ざる始末なり。日本に佛法を弘めたく思ひ給ふに於ては、菩薩の妙智力を以て、外にいくらも能き手便(てだて)も有べきに、守屋に生れて聖德太子と軍して、數多の人を殺し、大慈薩埵の御身として、殺生戒を犯し給ふはいかにぞや。然るに源平盛衰記に、守屋大臣死しても佛法を破滅させんと、一念鳥と化し、寺々をつゝき壞らんとせし故、此鳥を寺つゝきと名付しとかや。守屋さばかり佛法を破滅させんと思はゞ、太子に生れて佛法を禁斷すれば、さのみ骨を折らずして、忽ち埒明くべきに、鳥類に生れて寺々をつゝき壞(こは)さんなどとは、若輩なる振舞、守屋には似合ず。但し守屋は地藏菩薩の化身にて、日本へ佛法を弘めん爲、佛敵と生れて亡給ふとあれば、誓願の如く佛法繁昌する故、喜ぶべきに、又鳥と化生して、佛法を破滅せんと寺々をつゝくと云は、前後相違の振舞なり。地藏尊には物に狂ひ給ふか。貝原好古が和事始(わじし)に、世俗妄に佛氏の誣誑(あざむき)を信じ、終に守屋をして逆臣とす。守屋は是君の非を諫める忠臣にして、正を崇ぶ端士成事を知らずと書るもむべなる哉。去ば清輔朝臣の袋草紙に、雲井寺の上人贍西(せんせい)、或所にて說法の間、雨降りて袂にかゝりければ、高座より下るとて、袂を打拂ふて詠ず、

　いにしへも今も傳へて語るにも守屋は法の敵なりけり

嗚呼守屋、時の不祥にあへり。さしもに直明の譽れ有て、世俗の爲に佛敵とやらん、いとあやしき名を呼ばるゝこそ悲しけれ。

六　眞　濟

柿本紀僧正眞濟は、空海阿闍梨の弟子にして、有驗の高僧と呼れしが、五十五代文德天皇の后、染殿の后と密通し、露顯して伊豆の國へ流されしが、后を戀慕ひ、手自ら松を栽て、后に准らへ愛しけるが、枝葉都の方へなびきけるゆゑ、都松とも云ひ、或は染殿松とも號して、後世に殘れり。眞濟死して、執心紺青鬼と云る鬼に成たる由、然れども此說定かならず。清和天皇の御后も、東光寺の善祐法師と密通し、顯れて后は位をすべり、善祐は伊豆の國に流されしを、染殿と眞濟密通せしと誤り傳へたる由、されども眞濟が斯る浮名立しは、行跡正しからざる故と見えければ、虛實を論ぜず、兩僧ともに無賴の惡僧なれ。

七　朝　觀

志賀寺の朝觀は、行學勤修の聖才有りと云る名僧なりしが、或時京極御息所、志賀花園の春の景色を見給ひて歸るさ、車の物見を明けられたるに、朝觀上人計らず目を見合せ、覺えず心迷ひ魂うかれ、戀慕の情頻にして止事を得ず。御息所の御前に行き、鞠の坪の掛りの許に、一日半夜イみければ、御息所御簾の內より遙に見給ひ、哀れとや思しけん、彼心を慰めんと御所へ召て、御簾の內より御手を出し給ひければ、上人則御手を取て、

　はつ春の初子のけふの玉箒手にとるからにゆらぐ玉の緒

と云る古歌を吟じければ、御息所とりあへたまはず、

　極樂の玉の臺のはちすはにわれをいざなへゆらぐ玉の緒

と返歌し給ひて、上人を慰め給ふとかや。さばかり行學勤修の老僧、人目も恥ず御息所の御手を取て、あつかましく古歌を吟じたる心を、思ひやられていと淺ましき振舞、言語に絶たる惡僧なり。女の手より物をとれば、五百生の間手のなき者に生るゝと、釋迦めがぬかし置いたと佛語に在り。去ば古の禮にも、男女親ら授けず。もつと（原本ノマヽ）利を遠くすと云り。御息所も又、朝觀と手を取かはし返歌有しは、甚だ貞に違へり。此御息所は、本院の大臣藤原時平の女褒子といふ。宇多天皇に愛せられ、雅明親王載明親王を生む。主有身として斯る不貞の振舞は、父時平に似て、正しからざる性質と見えたり。去ば時平は、菅公を讒言しけるは言ふに及ばず、叔父大納言國經の室を奪ひ取たる事、舊記に見えたり。斯る暴惡無道の時平が娘なれば、婦の道に違ひ、元良親王と密通して顯れしとき、元良親王がわびぬればの歌を讀て、御息所へ遣したるよし、多く書に見えたり。斯る淫婦なる故にや、朝觀上人不義を仕懸たるにて有るべし。手を取かはせし計にはあるまじ。

八　淨藏

淨藏は貴所といふ。又大德といふは、淨藏を貴ぶ稱名なり。三好朝臣淸行が八男にして、日藏が兄なり。洛陽の人、母は嵯峨天皇の皇孫女なり。淨藏四歳の時千字文を讀む、一を聞て二を知る、聰明絶倫なり。十二歳にして叡山に登り、出家して玄照の弟子と成り、中齡にして雲居寺を草創し、後年平中興が娘を妻として双子を生り。布施伊能の兩氏今に子孫あり。墮落の後行力衰へず、加茂川の水を祈りて逆樣に流し、八坂の塔を祈りて傾かす、奇靈甚敷事數へがたし。學は內外を兼ね顯密をわたり、悉く天文易經醫卜管絃音律技藝文章、皆貫攝拔萃して、康保元年雲居寺に於て、七十四歳にして死す。誠に古今未曾有の惡僧なり。出家の身として、邪淫戒を犯して佛罰を受けず、却て行法尙おとろへずと

はいといぶかし。佛何ぞや墮落の僧に加護あらんや。誠に淨藏は世俗を惑するの大惡僧なり。かたもなき妄語を云置しを、一ツ穴の賣僧ども世に云傳へしを、後世の芋掘坊主ども、道理に闇くして書に著し、末世の坊主を、彌惡道へ引入るゝこそ淺間しけれ。されば今の世に、女犯肉食せざる僧を、淸僧とて用るもをかしけれ。思ふに淫佚の僧法師の、眠藏に梵嫗を安置する濫觴は淨藏ならん。

九　道命

天王寺の別當道命阿闍梨は、法興院攝政道綱の息男なり。僧として色に耽る事俗に過ぎたり。兼て平井保昌が妻和泉式部が密夫なり。其外うるはしく讀經するに、妙なる音聲あり。或夜和泉式部が許に宿し、目覺て經を讀み、八軸讀終て側を見れば、八十計の老夫、感を催ふして讀經を聞居たり。道命、如何成人ぞと問ひけるに、我は五條西洞院の邊に住ものなるが、此御經を今宵承りし事、生々世々わすれがたく候と云ければ、道命、法華經を讀誦するは常の事なり、など今宵ばかり左は云るゝやと尋ねければ、老人答て曰、御身潔齋して讀み給ふ時は、梵天帝釋を始めとして、諸菩薩影向して聽聞せさせ給へば、我々抔は中々近付事叶はざるに、今宵女人を犯して、沐浴もなく穢れ給ふ、諸菩薩も影向し給はず、依てゆる〳〵聽聞し侍ると云て歸りぬ。後に考へ見れば、此老人は道命が父に仕へしものなるが、道命惡名あまり沙汰あるによつて、道命が幼稚の時別れし故、顏も覺えずなれば、氣毒さにかやう計らひしならん。古より名僧智識と聞えしは、千人に千ながら、女淫を犯す事は、表向愼しむふりにて、少々餘人が聞知りたりとても、少しもひるまず、俗といふものはやぼなものじやと嘲るなり。女犯は少しも穢れたるものに非ず、故に我々も此世に生じて、俗を誑り金銀を貪り女を犯す事、俗のたはけは却て少しなどと、世人を笑ひ誹る事、皆僧の今日にする所なり。又和泉式部と同じ

車に乘り、往來しけるとかや。保昌はくそだはけ、今の武士ならば、道命と式部を一刀に四ッにすべきに、保昌は鼻の下の長き男と見えたり。式部が淫佚も詞及ばず。惣じて女ほど油斷のなり難きものはなし。去によつて昔より諺に、七人の子を持とも、女に心をゆるすべからずとなり。兎角夫が通人と云れ善人と云れたがる故、女はのし上るものなり。今の女などは別て邪なり。遊女賣女の類、世間に多くかた付て、人の妻となるゆゑ、外の女も自然と斯亂らになり、五人や六人に肌をふるゝは、何の物かはとも覺えず。式部などは大内に仕へし官女ながら、賤しき遊女賣女に劣りたる淫亂、公卿も又遊女賣女と云ものゝ如く、猥りに出會して君を恐れず、世をも憚らず放埒の事、帝も是を咎めざるゆゑ、互に取替したる戀歌を、撰集に入れらるゝなどは、寛仁大度危政とや云ん（落字あるべし）忽死刑遠流は免るまじ。中にも出家たる身にて、人の妻に密通するを、俗におち坊主と呼ぶ。道命を權輿とすべし、唐土にては、妻を持たる僧を火宅と云よし。去ば道命が、式部と一車に乘りてあるきけるも、火宅とやいはん。

十　業平

右近衛權中將在原業平（なりひら）、平城天皇の御子、彈正尹阿保親王の五男。母は桓武天皇の皇女伊登（いと）内親王、姓在原にして五男故、在五中將といふ。容貌嫻雅なる故、閑麗翁とも云り。三代實錄に、業平朝臣は容貌閑麗にして（脫文あるべし）學才はなき人にや。其行跡正しからず、生涯好色に耽り、淫佚亂行の人なり。委細は伊勢物語に顯然たり。今の世に、業平如きの不行跡ものあらば、忽罪科に行るべし。然るに世俗、業平は神明の化身などと尊み、佛の再來と崇敬するは如何ぞや。或說に天安元年正月二十八日、文德天皇住吉に御幸あり。業平供奉して和歌をよめり、

我見ても久しくなりぬ住吉のきしの姫松いく世經ぬらん

此時に住吉大明神、宮の扉をひらき、出現ありて詠じ玉ふ、

　むつまじと君はしらずや瑞籬の久しき世より契りそめけん

此歌伊勢物語に見えたり。古今集にも雜歌の部にあれども、讀人知らずと見えたり、子細有る事にや。元より神は非禮をうけ給はず、何ぞ淫亂不義の業平の歌に、神明愛給ひ、出現し給はんや、いぶかし〻。世に業平は死せずして、神仙に成りしといふ說あり。神社考にいはく、世に傳ふ、業平は容貌嫺雅にして和歌を善くし、一日吉野の川上に入て、終る所を知らずと云り。又本朝地理志にも、業平は和歌の仙なり、吉野川上に入て、行方を知らずと見えたり。然れども三代實錄に、元慶四年五月五日病を發し、同二十八日子の刻に、生年五十六歲にして卒す。滋春遺詞に任せ、東山吉田の奧に送り納めて廟を建つ。同九月十三日、宇治中納言藤原朝政熊野詣の時、和泉國大鳥郡を通りしに、業平靑地衣を著し、黑き馬に乘り、供奉の人十人計前後に隨へ見えたり。朝政夢の如く覺て、いかに亡人と聞けるものをといひければ、業平答て、當時は住吉にこそと云て、かきけす如く失にけりと。中納言行平此事を傳へ聞き、もしや業平に逢ふ事もやと、住吉に行て、爰かしこと步行しかども、岸打つ波の音、松の音のみにて面影もなく、空しく歸らんとせしに、其夜の夢に業平打笑て、

　おもひ出し神代の事も忘じな昔しながらの我身なりせば

夫よりして、世俗皆業平を住吉明神なりと思ひけり。業平在世の時、住吉にて歌を讀み、明神感納ありて神詠有しとあれば、業平を住吉大明神といふ事いぶかし。豈神明業平に化現して、淫亂不義の振舞し給はんや。元來業平神仙にならざると見えて、伊勢物語に辭世の歌など見えたり。大和國石山の在原寺は、業平の菩提所にて、業平の墓、業平の像有

りといへり。從三位爲子在原寺にて讀める歌、玉葉集に見えたり、

　影ばかりその名殘りて在原のむかしの跡を見るもなつかし

加茂岩本の社は、神體業平といへども、業平神に成りしにはあらず、後人の馬鹿共が神に祝ひたりとなり。慈鎭和尚の歌に、

　月を愛で花を詠めしいにしへのやさしき人はこゝに在りはら

俗說に、業平は東に下りて身まかり、下總牛島といふ所に、業平塚といへる古塚あり。業平は隅田川にて、舟より落て空しくなれりとて、船の形に塚を築きたりと云ひならはせり。則歌に、

　なきあとのしるしは爰に在原や塚のかたちは船のなりひら

今神に祝ひて、業平天神と號するは此所なり。賣僧の所爲成るべし。去ば雜の拾遺に曰く、伊勢物語の注に、都木といふあり。此書の中に、業平一代の内に戯るゝ女、三千餘人有りとあり。其上諸國を廻りしとは非なり。東山に籠居して、都の事を他國になぞらへし故、都木と云ふとなり。但此書は異說なり。普通の歌道者は嫌ひ侍れど、本文をあげて注せし間、さのみ捨べきにもあらずと見えたり。或說に、業平は極樂世界歌舞の菩薩、正觀音の化身なり。凡三千三百三十三人の女に契りて、一人も犯さず。則業平の歌に、

　知るらめや我にあふみの世の人のくらきにゆかぬたよりあるとは

是我に契りたる所の女を、悉く佛果に至らせんとの詠歌なりと云へり。觀音衆生を濟度せんと思はゞ、則ち釋迦の如き道德の出家に生れ、凡夫を善道に引入るゝがよし。色々ばけらるゝ身で、淫亂不義なりし業平と化し、佛の身にて邪淫

を犯して、たとひ三千人と契りて一人も犯さずと、へらず口を云はるゝとも、何も慥な證據人なければ、急度した證據は猶なし。いかなれば、さばかり非義非禮の淫亂たる業平を、神よ佛よと有られぬ僞りを傳へけるにや。實観音の化身ならば、業平死して辭世の歌とて、終に行道へゆくべきに、住吉明神となりて此世に止りしは、色道に輪廻したるや。淺ましき觀音の心ぞや。

十一　紫式部

紫式部、父は越前守藤原爲時といふ。母は攝津守爲信の娘賢子。其始め御堂關白の御女彰子に仕ふ。彰子入內有て一條院の后と成り、上東門院と號す。式部も相續て上東門院に陪侍す。後右衞門佐宣孝に嫁して、大貳三位辨內侍を生めり。式部始は藤式部と云しが、源氏物語の內、若紫の卷、殊に勝れて書きなしたる故、藤式部の名を改て、紫式部と呼べり。又一說に、道長の北の方、式部を上東門院へまいらるゝに、我由緣のものなり、哀れと思召せと申さしめ給ふ故、紫式部と申。是に依て古歌に、

紫の一もとゆゑに武藏野のくさはみながら哀れとぞ見る

此歌によりての名なりとかや。又一說に、藤式部の名幽玄ならずとて、藤の花のゆかりをかりて、紫の字に改めしと云へり。又日本紀の局と呼ぶは、一條院源氏物語を御覽有て、式部は日本紀をよくこそ見たりと宣ふ時、左衞門內侍此綸言を妬しと思ひ、日本紀の局と號しけると云へり。式部源氏物語を作りし起りは、大齋院選子內親王より上東門院へ、珍らかなる物語や侍るかと、御所望有りしゆゑに、うつぼ竹とり様の物語は目なれたれば、新しく撰び奉るべき由、式部に仰付られ、式部石山寺に通夜して此事を祈しに、折しも八月十五日の夜、月湖水に映りて澄み渡る儘に、物語の風

情心に浮みければ、まづ須磨明石の兩卷を書留たり。是によりて須磨の卷に、今宵は十五夜なりとおぼし出てと書たり。其後次第に書加へ、五十四帖となれり。大概莊子が寓言に本づきて、書作る物語なり。式部は博學廣才にして、儒學も史記漢書に通じ、佛道も天台一心三觀の血脉を繼たる由、最凡人にあらず、觀音の化身なりといへり。物語の詞の花、歌道の助と成り、騷人墨客の翫の種と成るといへども、國を治め家を齊へ身を脩る益には成らず、是を讀む者却て好色のいたづらものと成る。去ば源氏一部、悉く好色妖艶の事のみにして、人倫の道に違ふ事甚し。まづ光源氏は、桐壺の帝更衣を寵愛して設け給ふ若宮なり。母の更衣病によりて身まかりし後、又藤壺の女御を愛し給ふ。然るに源氏藤壺に戀慕し給ひ、命婦を賴て密通し、藤壺源氏のたねを懷姙して若宮を生めり。藤壺は源氏の爲には繼母なり。父帝の御目を掠めて、繼母と密通する事、人倫の道には有まじき事なり。又源氏の方違(かたたがひ)の爲に、紀伊守中川の家に宿し、渠の親伊豫守の妻に、一夜の契り有しとかや。人の妻に奸淫する事、甚しき不義なり。朧月夜の內侍は、源氏の御先帝寵愛有りしに、源氏內侍と密通したり。是等は人倫の行跡にあらず、又女三の宮は、源氏の御先帝の姬君なれば、源氏の爲には姪なりしに、源氏是と契りしは、淫亂絕倫なり。此類は親子兄弟の中にて、語るに忍びざる草紙なり。斯の類を始として、五倫五常の道に違ひたる事のみ多く見えたり。然ども源氏物語を見る者、能く味ひぬれば、好色淫風の事より、仁義の道に便(たよ)りありと云へり。去れども善に移る事は難く、惡には進み易し。殊に好色の欲は、老いたるも若きも智も愚も、迷ふ時は亂に及び、命に及ぶなり。源氏物語の意味深き事は悟り難く、好色淫亂にばかり心移り、道ならぬ行跡をするもの多かるべし。然るに觀音の化身たる紫式部、斯る淫亂不義の作り物語を書て、佛の身には似合ざる邪淫妄語の戒を破り、衆生を色道に導き給ふは、いと淺ましき觀音の志にこそあれ。

十二　神崎遊女

十訓抄に曰く、書寫山の性空上人、生身の普賢菩薩を見奉るべきよしを、祈誓し給ひけるに、或夜讀經に疲れて、經を握りながら脇息に寄掛り、しばしまごろみける夢に、生身の普賢菩薩を見奉り度こ思はゞ、神崎の遊女長者を見るべきよしにて夢覺ぬ。上人奇異の思ひをなして彼所に至り、長者が家に著き給ひ見給へば、遊女亂舞の躰なり。長者は横座に居て、鼓を打て亂拍子に次第を取り、其詞に曰く、周防むろづみの中なるみだり井に、風は吹ねごもさゞ波立こなり。上人感涙を押へ難くして、眼をひらき見れば、又元の如く女人の姿に成て、周防むろづみの言葉を出す。眼を閉る時は、又菩薩の形こ變じ、法問を演給ふ。形の如く度々敬禮して、なく〳〵歸り給ふ時、長者俄に座を立て、間道より上人の許へ來て、此事口外に出すべからずこ云終て、則ち俄に死す。異香空に充滿して甚だ香ばしく、長者頓滅のあひだ、遊宴興さめて悲泣する事限りなく、上人益悲涙に溺れ、歸路に迷ひけりこなん。彼長者女人は好色の類なれば、誰か是を權者の化作こ知らん。佛菩薩の悲願、衆生濟度の方便によつて、形を樣々に化て樂しみ給ふ道までも、貴き賤きには寄らざる事を、か樣の例にて心得べしこ見えたり。此事西行撰集抄に書り。普賢菩薩衆生濟度の方便ならば、遊女こ生れ給はずこも、いか程も能き方便も有べきに、菩薩の御身こして、畜生同前の遊女川竹の女こ生れ給ひ、餘多の凡夫に枕をかはし、佛躰を穢し、多くの衆生を色に迷はせ給ふはいかにぞや。普賢も遊女に生れ給ふは、よからぬ事こ思ひ給ひてや、性空上人に、此事必ず口外へ出すべからずこ口留し給ひしに、上人口さがなくして、諸人に漏らしけるこ見えたり。

此事猿樂の謠ひ物には、西行法師江口の君が許に宿りし時、江口の君普賢菩薩と現じ、船は白象と成て白雲に打乘り、西の空へ飛び給ふと謠に諷へり。大慈大悲の佛菩薩の御身として、情なくもいまだ年も明けざるに、普賢菩薩に成りて西の空へ飛行き、親方までも大きに損をかけ給ふは、甚むごき仕方なるべし。

十三　玄賓

玄賓僧都は弓削氏にして、阿州の人なり。山階寺に住せり。性世塵を厭ひ、法師の僧官に營みするを愁ひて、更に寺院の交りを好まず、密に伯耆國の山に隱れたり。然るに桓武天皇御惱に依て、召して冥助を乞しめ給ふ。玄賓遁れ難く又都に入りて、帝の御惱平愈し給ひ、辭して山に歸るといへり。又或説に、玄賓世をいとひ、三輪川の邊に幽かなる庵を結びて住せり。平城帝の御時、僧正に成し給ひしを辭して、

三輪川の清き流れにすゝぎてしころもの袖を又は穢さじ

斯く詠ぜられしと云へり。一説に、嵯峨帝玄賓の道德を尊給ひ、僧都に成し給ひしを辭して、位記を木の枝に挾み、和歌を書付置て、

外つ國の水草清し事しげきみやこの内はすまぬまされり

斯く潛に遁れて、備中湯川と云る所の山寺に行て、德を隱し、賤き僧の躰にて土民に身をよせ、夜は山田を守り鹿を驚かし、晝は稻抔を苅りて日月を過し、秋も過て業もなかりしかば、

山田守僧都の身こそ悲しけれ秋はてぬれば問ふ人もなし

と詠せり。是よりして鹿おどしを僧都といへるよし。然れば元亨釋書に、玄賓の跡を民家の奴にくらまし、田にある稻

を守り烏雀を追ふを勤とす。日域今に至て、烏雀を驚せる芻靈、僧都を以て名に銘するものは、玄賓に起れりといへり。芻靈は草をくゝり人の形を作り、田の邊に置て鹿鳥を驚すものなり。山田の案山子と云ふもの是なり。玄賓の傳委しくは扶桑隱逸傳に見えたり。その濫猥不軌を縄を以なり。此事は扶桑隱逸傳の賛にあり。推古帝始めて觀勤を僧正とし、徳積を僧都とし給ふ、蓋止事を得ず。澆季の緇侶、徳を立ず虚名をもつて自ら奢る。賓公是を愁ひて心を石泉に凝し、跡を烟霞に晦すといへり。誠に玄賓の如き道德の僧は、古今稀成べし、誰か是を譏らんや。然しながら山田を守りて鹿鳥を驚すは、殺生戒を犯さゞれども、いさゝか忍ばざる心やあらんと、いと疑しく、そゞろに袖を濡しけり。

十四　遍照

僧正遍照は、大納言良岑安世の子なり。俗名を良岑宗貞といふ。仁明天皇の寵臣にして、少將藏人頭也、故に良少將と呼ぶ。仁明帝崩じ給ひて、御葬の夜より世を厭ひ、叡山に登て、慈惠僧正の室に於て薙髪し、遍照と號す。仁明帝崩御次の年、皆人御服脱ぎ、官位を賜はり悦びけるを聞て詠ず、

みな人は花の衣に成にけり苔の袂よかはきだにせよ

斯て元慶三年權僧正となり、仁和元年僧正と成り、同二年封百戸を給ひて、則元慶寺の座主と成りて、輦を免され、仁王殿に於て賀を賜ふ。元慶寺は花山にある故、花山僧正とも號し、或は視中院の僧正とも呼ぶとかや。甚だ世に時めける有樣、玄賓が見ば爪彈をして憚るべし。元より俗にて有し時、名におふ好色ゆゑ、僧になりても色情止ざるなり。嵯峨野にて落馬して詠ず、

名にめでて折れるばかりぞ女郎花我落にきと人にかたるな

又小野小町清水寺に詣でける時に、遍照此寺にありと聞て、いと寒きとて、衣一ッ暫し借し給へとて、

　岩の上に旅寝をすればいと寒しこけの衣をわれにかさなん

斯云やりければ、遍照返歌に、

　世をそむく苔の衣は只一重かさねば疎しいざふたりねん

と詠り　是等の二首俗にまさり、詞に破戒の罪あらんか。去ば、僧の身として戀歌を詠じ、戀の情を能く云ひ叶へ、秀歌に譽を得て、撰集に入れし歌人の馬鹿共、此僧と同じ罪なり。戯れといへども、思ひ内に有れば色外に顯ると云へり恥べき事ならんか。彼慈悳僧正は、官女の歌の返歌して、浮名立ちたる例有れば、恐るべし愼むべし。或説に、遍照が遁世は、仁明帝に別れ奉り出家せしにはあらず、嵯峨帝の后に浮名立て、世を遁れしと云り。是尤俗説なるべきか。元來色道に溺れぬれば、斯る虚名もおのづから受るなり。兎角此坊主、心は俗の上手を越すならん。

十五　喜撰

喜撰法師は、世系定かならず。佐々木高秀古今抄に、喜撰は橘諸兄公の孫、奈良麻呂の子、醍醐法師といへり。古今集雅抄に見えしは、奈良麻呂の子周防守良德の子なりと云へり。窺仙と稱しけるが、古今撰集に入られしを悦て、喜撰法師と改けるなり。光孝天皇の勅に依て和歌を作り、世を遁れて醍醐山へ登りける故、醍醐法師といふ。後に宇治山に隱れて密咒を持し、穀を辭し松葉を喰ひ仙道を得、一日一峯に登りて、雲に乘じて去れり。御室戸の奧の喜撰の舊跡に、後人庵を結て喜撰庵と號す。喜撰嶽あり、此所にて登仙したりと云へり。僧の身として厭離穢土欣求淨土の本意にあらず、長生を願ひ仙人と成しは、釋氏の罪人たるべし。然れども此法師、名利には耽らざるか。其頃も宇治の螢兒は有りけ

ん。借し座敷の思ひ付なきは殊勝なり。

十六　能因

能因は橘諸兄公十代の孫にて、肥後守元愷が子なり。永愷と號し、文章生に補し、肥後進士と號し、後に世を遁れ能因と改む。古曾部入道とも號す。昔より和歌の師匠なし、能因始て長能を師とすと云へり。去ば歌道に名譽有て、一首の歌にて雨を降せし巧、古今の美談なり。帶刀節信と云者、能因に逢ふて互に感緒あり。能因が曰く、見參の引出物に見すべきもの侍りとて、懐中より錢の袋を取り出しけるに、其中に鉋屑一筋あり曰く、是は吾重寳なり、長柄の橋を作る時の鉋屑といひければ、節信甚喜悦して、懐中より紙に包みし物を取出し、是をひらき見るに、かはきたる蛙なり。是は井出の蛙なりと云て、倶に感歎して、各懐中し退散せしとかや。是を以て見れば、能因は强て風雅の名譽を賣らんと欲する、浮世者と見えたり。古語に、物を翫べば志を亂ると云り。況や法師の身として、斯る振舞甚だ見苦し。其上能因或時の歌に、

みやこをば霞とともに立しかど秋風ぞふく白川のせき

此歌を秀歌なりと自讃して、是を都に居ながら披露せんもいと口惜しと、潛に片田舍に籠り居て、面を日に照し色を黑くし、陸奥の方へ久しく修行の序に讀たる由、披露せしとかや。歌に著するさへ、法師に似氣なき振舞成るに、佛の戒め給ふ妄語戒を犯して、强て名聲を求る事甚だ罪深し。歌人は歌道に甚だ志深しと歎美すべきが、佛者は嘸憎がるべし。

十七　日藏

和州笙窟の日藏上人は、承平四年八月朔日午の刻に頓死して、十三日を經たり。其間夢現ともなく、金剛藏王の善行方

使にて、三界流轉の間、六道死生の栖を見けるに、等活地獄の別所鐵堀地獄と云所に、火焔うづまき黒雲掩ひ、鐵の嘴の鳥罪人の眼をつゝき、又鐵の牙の犬罪人を喰付き、獄卒聲をいからし、振ふ事雷の如く、虎狼罪人の肉を裂き、其中に燒炭の如く成る罪人四人有り、其叫ぶ聲を聞けば、忝なくも延喜帝にておはしましける。日藏ふしぎに思ひ、立寄て子細を尋ぬれば、獄卒答て曰く、一人は是延喜帝なり、殘り三人は臣下なりと云て、鉾に貫き焰の中へ投入ける有樣は、業果法の現とは云ながら、餘りに心うく思ひ、日藏頓て立寄り龍顏を拜し、本國へ歸り給へと度々云ければ、獄卒聞て痛はしきかなと、鉾に貫き焰の中より投出し、十丈計り差上げ地へ打付れば、燒炭の如き御形散々に碎て、其形見え給はず。獄卒又走り寄て、是を投て一所に蹴集る。樣々にして活々と云ければ、又帝の御姿顯れ給ふ。帝宣ひけるは、汝必ず我を敬ふ事なかれ、冥途にては貴賤上下を論ぜず、罪業なきを以て尊しとす。朕元來民を痛はり、私の道を用ひざれども、今五種の科により地獄に墮たり。第一には父寬平法皇の命を背き、久しく庭上に見下せし科、二ッには讒言に迷ひ、罪なき道眞を流罪せし科、三ッには自ら怨敵と號して、他の衆生を損害したる科、四ッには月中の齋日に本尊を開かぬ科、五ッには日本の帝位をいみじき事と思ひて、人間執心の深き科、此五ッを根元として、自餘の罪業無量なり。是を以て苦しみを受る事盡きず、願はくは上人朕が爲に善根を修し、諸國に壹萬本の卒都婆を建て、大極殿にて仙名懺悔の法を修すべしと宣ひければ、日藏泪と倶に歸ると覺て蘇りけり。誠に掌を打て一笑するに堪へたり。斯る妄言を吐きしを、愚盲の族傳へて書に記し、さしも聖主の譽有し延喜帝に、無實の汚名を蒙らしむる事、日藏こそ憎むに絕えたる、以の外の惡僧なれ。渠が云る延喜帝五種の科、第一御父寬平法皇の命を背き、久しく庭上に見下せし科とは、菅丞相を遠流の時、寬平法皇は遠流の罪を宥んとて參內有りしに、衛士門を開かず、終夜禁門の外に彳み給ふと云へり。奏聞する人なければ、法皇

空しく還幸有ける由。元來は法帝皇の參内し給ふをば、曾てしろしめされず。是は讒臣時平が威に恐れて、衞士ども禁門を開かず、奏聞する人なければ也と、舊記に見えたれば、強ち帝の御科とも云べからず。第二讒言に迷はせ給ひ、罪なき菅公を流し給ふは、不明の謗り有りといへども、帝其時はいまだ十七歲に成らせ給はず、時平が浸潤の譖膚受の愬に迷はせ給ふも道理也。孔子も吾言を以て人を取るに、是を宰予に失すと宣へり。大聖孔子すら、人を見違ふの失あり。況や延喜帝、德孔子に及給はず、殊に幼弱にましませば、菅丞相の賢德を見違ひ、佞臣時平が讒を信じ、罪の實否を糺させ給はず、是又尤なり。然ども讒臣に迷はせ給ふ、一事の御誤りを以て、日藏の悪僧めが妖言の爲に、末代に至るまで、悪人の口舌に御名を汚し給へば、主たる人、讒臣に極らば遠く避べきもの也。第三の怨敵と號して、他の衆生を損害し給ふ科とは心得ず、惣じて天下を知る人は、逆臣有て國を亂す時は、早速退治して民の患を救ひ、國法を犯す者をば罪科に當行ひ、諸人の見懲しにして、天下を靜謐に治るは、國王の職なれば、曾て科にあらず。第四の月中の齋日に本尊を開かぬ科とは、其意を得ず。日本神國にして、神武天皇より代々、天子神明を拜し給ひ、民百姓も神を敬ひ、國安泰に治り、元より佛法の沙汰もなければ、本尊など云ものは古鐵店にも見えず。去ども世々天皇を始め、萬民死して冥途と云所へ行き、月中の齋日に本尊を開かざる科とて、鬼にせめられたる沙汰もなければ、舊記にも見えず。聖德太子日本へ佛法を流行せしめ、内裏にも佛像を安置せられ、二間の本尊抔と稱せらるれども、元來佛像は西戎の人の像なれば、天照太神の御末たる天子の御身には、穢らはしきものなれば、本尊もなければ、開かぬとても科もなし。第五の科とは、日本の正法をいみじき事に思ひて、人間に執心深き科とは何の囈言。日本の正法をいみじきと云を咎とせば、佛も我法をいみじきと思ひ、我を信ずる輩は、現世にては福を授け、來世は必成佛させんとは、高慢の言葉にあらずや。

元來日本の王位をいみじく思ふは、足る事を知るゆゑなり。足る事を知らずして、此上にも天帝に成度などゝ思はゞ、咎ともいはん。勿論人間に執著心の深き科ならば、孔子は仁義に執心して聖人となり、釋迦は佛道に執著して佛と稱せられ、凡士農工商の四民ともに、皆夫々に家業に執心せざれば、身を修め家を齊ふる事能はず。況天子として人間に著心せず、今の世は假の宿などゝ捨鞭を打ち、政道に怠りては國治り難し。隨分人間に執著心深く、津々浦々までも政道行はるる樣に思慮を廻らさねばならぬ天子の職分なれば、延喜帝も別して人間に執著心深く、寒夜の民の寒からん事を思召やらせ給ひ、重ねの御衣を脱せられ、民の寒苦を御身に思し知られ、一向萬民法樂の政事を行ひ給ひ、天下泰平によつて、在位三十三年にして崩じ給ふ故、其年數の久敷に依て、延喜帝と稱せられ、醍醐邊に葬り奉るによつて、醍醐天皇と號し奉れり。今の世までも豐成る世の例には、延喜帝の御代と稱し、或は延喜聖主と仰ぎ奉るなり。さほど帝德尊き賢主を、妄言を以て辱しめ奉る、是偏に日藏鐵堀地獄に墮なば、獄卒に命じて、釘貫を以て舌を拔せ度き惡僧なり。

十八　慈心

攝津國清澄寺と云山寺に、慈心坊尊慶と云老僧あり。本は叡山の學院にて、多年法華の持者なりしが、住山を厭ひ此山に來りて住けり。或時法華經を讀けるに、夢現ともなく白張の立烏帽子を著たる男、草鞋をはきけるが、竪文を持來れり。慈心坊いかなる人ぞと尋ぬれば、閻魔王宮よりの御使なりと答ふ。則竪文を開き見るに、來る十八日閻魔の廳において、十萬人の持經を以、十萬部の法華經を轉讀せらるべき間、參勤すべきとの召狀なり。慈心いなみ難く、領掌の文を書て奉ると見て夢覺ける。十八日酉の刻息絶て、閻魔の廳に行けるに、閻魔樣々の物語有て曰く、日本の將軍太政入道清盛は凡人にはあらず、慈惠僧正の化身なり、依之我每日三度咒を誦して、淸盛を禮拜す、其文に曰、

敬禮慈惠大僧正　天台佛法擁護者

示現最勝將軍身　惡業衆生同利益

汝此文を淸盛に參らすべしと宣ひけり。案ずるに慈惠僧正は觀音の垂跡なり。去ば大權者の化現法便を廻らして、實業の衆生を利益せん爲に、造罪招苦の旨を示し、盛者必滅の理を顯し給ふにやと、源平盛衰記著聞集等に見えたり。さばかり尊き慈惠僧正、淸盛に生れて萬乘の天子を惱し奉り、萬民を苦しめ多くの人を殺し、無益の暴惡をなしたるは、觀音の垂跡には請合がたし。たとへ淸盛慈惠僧正の再生にもせよ、古今無雙の惡人を、閻王いかなれば日に三度禮せらるゝか、笑止なり。さばかり慈惠僧正を尊敬せば、慈惠僧正にて有りし時禮拜すべきを、曾て御沙汰なし。惡人淸盛に生れたるを拜するは、閻王には物好成事なり。思ふに此慈心坊尊慶といふ法師、己が名に慈惠の二字を顯したるは、慈惠僧正の德をあげて、世に名を照さんと思ひ、あらぬ虛言を言觸して、さしも名高き慈惠僧正に汚名を蒙らしめたるは、俗にいふ贔負の引倒しなるべし。但圓融の御時、慈惠僧正大內へ參り給ひ、宮女に五濟の證文を、いと尊ふ講じ給ふ折から、御簾の內より或女房の申出されしは、

有漏地より無漏地に通ふ釋迦だにも羅喉羅が母のありとこそきけ

と讀し時、僧正返歌に、

いなやいなむきても見べきいがぐりの笑めば一度落もこそすれ

と詠じ給ふ故にや、僧正浮名立て、山門に勸鐘の起請を書初給へり。此時僧正の影障子に移りて、忿怒の相を顯したり。今の世に角大師是なりとかや。僧として女に浮名立ち、忿怒して鬼の姿を顯しぬれば、慈惠僧正は佛に成まじと慈

心坊了簡して、淸盛に生れたりと、平家へ追從に言ふらしたる妄言を書記し、佛法の本意に違ふ振舞、嘸や釋迦も悄み給ふらん。

十九　賴豪

白川院御在位の時、后の御腹に皇子おはしまさず。仍て貴僧の聞えある、三井寺の實相坊賴豪阿闍梨を召れ、汝皇子の誕生を祈らんや、驗あらば賞は乞に依るべしと仰有ければ、賴豪畏て、年來深き望あり、勅定相違なくば、皇子誕生勿論の事なりと奏しければ、主上大に悅び思召て、賞は乞に任すべしと、重て勅定あり。賴豪悅で退出し、肝膽を碎て祈りければ、中宮御懐妊有りて、月滿ければ皇子御誕生あり。主上叡感斜ならずして、恩賞の御沙汰有ければ、賴豪願ひけるは、此度の賞は、三井寺に戒壇を立て、寺門年來の本意を遂んと奏しける。此事叡慮にも任せず、園城寺に戒壇を許しなば、山門憤りて合戰に及ぶべし、然る時は天台の佛法も亡ぶべしと、賴豪が望勅定なければ、賴豪大に怒り、勅約變じ給ふ上は、皇子は我參らせたれば、取返し奉るべし迚、飮食を斷て祈死に死しければ、終に皇子も取殺され給ひしとかや。僧として佛戒法嗔恚殺生を犯しけるなり、無賴の惡僧なり。去ば終に憤死して、一念鐵鼠と成て、佛像佛閣經論書籍を喰破りけるとかや。□□□、大切にしける經論書籍を喰破て迷惑させしは、うろたへたる仕方なり。鐵鼠は猫に喰るゝ氣遣ひは有まじけれども、手足の働は出來ぬ筈、迚もなるならば、坊主に似合しき牛になればよいに、鼠とは餘り小さき思ひ付なり。

二十　西行

西行法師は藤原秀郷の末葉にして、左衛門尉康清が子なり。母は監物源清經の女なり。俗名佐藤左衛門尉憲清といふて、鳥羽院の北面なり。若くして書を讀み管絃を習ひ、弓馬に委しく和歌に達せり。元來籠出の心あり。保延三年終に志を遂げ、法名圓位大賓坊、或は大法坊、又西行と號す。諸人其德を尊んで上人と稱しけり。天下に周遊して、至らずと云ふ所なく、常に佛涅槃の日、花の下において、死なん事を願ひて和歌を詠ず、

願はくば花の下にて春死なんそのきさらぎの望月のころ

果して建久九年二月十五日に卒す。平日自分の和歌を記して山家集と云。又は西行歌集。草紙九卷を著して撰集抄と號す。又御裳濯川歌合、色川歌合貳卷、皆世に行はれり。生涯の行狀普く都鄙の口碑にあり。或は其の形を畵彫刻し、或は型の像にしてあれば、嬰兒も其形を見て其名を知る。誠に古今桑門多しといへども、西行如きの有德の法師は稀成べし。西行の和歌は禪定の修行なり。我歌に仍て佛法を行ひたりと、專ら翫びしが、東國にありけるを、大内に和歌撰集の事有と聞き、我和歌も入りぬべしと、都へ赴きける路次、登蓮法師に行逢ひ、此度撰集に、我和歌の鴫立澤の歌入れしやと問ひけるに、登蓮聞て、其歌は撰者失念しけるにや、撰に入らざる由答へければ、西行聞て、然らば其撰集見るに足らずとて都へ行ず、直に東國へ趣きけりと云り。是兼て鴫立澤の詠歌自讃成りしが、此度撰集に入らざるゆゑ、不興して歸りしと見えたり。僧の身としてさばかり和歌に執心し、殊に自讃の行跡何事ぞや。是を以て見れば、此法師も一向の桑門にはあらず。或説に、西行法師が遁世は、鳥羽院の后に執心深く、浮名立て世を遁れしと云へり。其時渠が歌に、

おもひきや不二の高根に一夜寐て雲のうへなる月を見んとは

是其時讀る歌なりと云へり。尤俗說なれども、一躰歌の樣は左もあらんやと疑はし。又或說に、西行或時長月の頃、江口と云所を過けるに、折しも時雨しければ、遊女の家に立寄晴間を待程に、宿かりける主の遊女いなみければ、只何となく、

　世の中をいとふまでこそかたからめかりの宿りををしむ君かな

と詠ければ、あるじの遊女うち笑ふて、

　世をいとふ人ぞと聞ばかりの宿にこゝろとむなと思ふばかりぞ

斯返歌して急ぎ内に入けり。唯村雨のほど、暫しの宿と思ひしに、此返歌のいと面白きに、一夜臥所(ふしど)させり。遊女は四十計にもや成らん、姥ながらもさもあてやかに艶しく侍りき。終夜何となき事ども語りて、夜明ぬれば、名殘は惜けれども、再逢ふ事を契りて別れけり。其後約束の月尋べくと思ひしに、打紛るゝ事有て過ける夜に、便りの人有て、消息を認めて送りける、

　假初の世には思ひを殘すかなきゝし言の葉わすれをもせず

遊女が方よりも、便りに付て返事有、

　忘れじとまづ聞からに袖ぬれてわが身もいとふ夢の世の中

と書て、奧にさまを杜(こゝ)と書侍れ。然れども心はつれなくと書侍り。見るに泪そゞろに袂をしほり、さもいみじき遊女にも侍りけると云へり。尙西行撰集抄に委しく見えたり。法師の身として遊女の宿に宿れるは、甚だ不屆なる振舞なり。又其後も消息を取りかはしけるこそ猶罪深し。瓜田に沓を納れず、李下に冠を正さずとは、文選の詞に非ずや。西行が媾

疑は避難からんか。嗚呼惜ひかな。さしも道心の聞えありし西行、此事に至て玉の瑕とや云ん。

廿一　文覺

文覺は渡邊黨、遠藤左近將監成光が子なり。遠藤武者盛遠と號し、上西門院の北面の士なり。十八歳の時、一族源左衞門尉亘が妻袈裟御前に思ひを懸け、あやまりて殺害し、忽發心して盛阿彌と號し、後改て文覺といふ。諸國を修行して至らざる靈地なし。兼て高尾の神護寺を修造すべき願望に依て、熊野山那智の瀧に七箇日打れ、斷食して荒行を修しけり。比しも臘月半の事成に、三重百丈の瀧、氷柱と成て膚を裂き、惣身破れて紅と成り、誠に紅蓮地獄も斯やと知られて、堪べくもあらず見えけるが、三日に當る日既に息絶え、死人の如く成けるに、不動明王の使として、こんがらせいたか二童子來現して、文覺が左右の手を取て助しとかや。文覺は不動尊と入魂と見えたり。但例の賣僧の妄言ならんか。大聖不動明王、何ぞ文覺如きの惡僧に加護あらんや、不審。然るに文覺、神護寺修造勸進として、仙洞御所へ推參しけるに、御遊の折節成に依て奏聞せざれば、文覺大きに忿て、甚惡口狼藉に及ぶ。懐劍を以て狂ひ廻り、安藤右馬大夫祐宗に搦捕られしが、猶も惡口しければ、平家の沙汰として、伊豆國へ流されけるが、船路の間も放逸の我儘は狂人の如し。然るに平家の計として流罪せられしを憤り、いかにもして平家を亡し、思ふ儘に神護寺を修造せんと思ひ立ち、蛭が小島の流人右兵衞佐源頼朝へ、頻に平家追討の義兵を勸めて、終に平家の一族を亡させ、願の如く神護寺を再興して住し、世に高雄の文覺上人と稱せられけり。佛は殺生を戒め給ふに、僧の身として私の宿意にて餘多の人を亡させけるは、極惡心の罪人なり。然るに平家亡て後に、小松中將維盛の公達、鎌倉へ虜と成て、既に誅せらるべき所に、文覺命を乞請し助る事は、せめて衣を著したる甲斐有りと云べきか。一旦平家を恨て、頼朝に亡させし心とは、裏腹の仕か

た。察するに六代御前の男色に愛(めで)て、斯る前後相違の振舞をしけるにや、いぶかし。惣て此法師は始終心定らず、腹悪く物狂はしき我儘者こ云へり。壇光坊こ途中に於て角力を取しは、上人こも云るゝ人品には似合ず。且文覺、日比西行が和歌を嗜みけるを、遁世者には似合ざる振舞なりこ悪み謗り、渠に出合なば撃破らんこ云けるが、或時西行高雄山に來て、文覺が房に一宿を乞ひければ、文覺日來の素懐を遂んこ、拳を握りて待けるが、西行をつくづく見て。拳を隠し上座に請じ、久敷貴僧の芳名を承り、唯今面會を遂る事甚だ祝著せりこ、終夜物語りして、翌朝齋を進めて歸しけり。文覺が弟子、日來の詞に相違したりこ不審しければ、文覺答て、汝らは西行が眼光を見ずや、渠豈我に撃れんや。返て我を打べき者なりこ云しこかや。是等は人を知り己を知るの智こ云ふべし。六代御前に謀反を進めて鎌倉を亡し、再び平家の世に成さんこの企をなせしは、時を知らざる無分別にして、一生の行曾て出家の振舞にあらず。尤譏るに足らざる族なれども、女童(わらべ)も其名を知りて、世に隠れなき悪僧なれば、誘草の園に植るのみ。すべて出家は俗人に後世を勧るを本意こすべきに、頼朝に義兵を勧め、六代御前に謀反を勧め、世を覆して修羅の巷こ成さんこ計りしは、誠に天魔ならん。

廿二　蓮生

蓮生(れんしやう)は俗名熊谷次郎直實こいふ。桓武天皇の末流、平直貞が子なり。直貞は武州大里郡の生なり。其住する邑に猛き熊有て、多くの人を害せり。直貞少(わか)くして勇氣あり、弓を携へて熊を射る。熊は矢を負ながら直貞に飛かゝる、直貞刀を抜て終に熊を切殺す、一族幷郷民等大に感嘆し且喜けり。爰に於て其所を熊谷こいふ、則熊谷を姓こせり。直實二歳の時、父直貞大番こして在京しけるが、違勅の罪に依て誅せられ、直實も誅せらるべきを、忠盛潜に助けて、直實が伯父督久

下權頭直光が方へ遣しけり。斯て彼の養育に依て成長し、熊谷次郎直實と名乘ける。左馬頭義朝に屬し、平治の亂に惡源太義平に從て郁芳門を守る、十六騎の一人なり。義朝亡て後平家に屬し、中納言知盛に隨て多年を送りしが、賴朝義兵を揚る時、平家の味方として敵しけるが、頓て賴朝に屬して、常州佐竹の役に武勇を振ひ、攝州一の谷の合戰に先がけし、敦盛を討て軍功を顯し、賴朝日本の功の者と稱せられ、武名を天下に輝かせり。然るに世俗、直實は敦盛を手に掛、無常を觀じて出家せしと云へるは非なり。實は久下權頭の所領の堺を論じ、理の立ざるを憤り、遁世しけると見えたり。則東鑑に、建久三年十一月廿五日早旦に、熊谷次郎直實、久下權頭直光と御所において一決を遂る。是武州熊谷久下の堺相論の事なり。直實武勇に於ては壹人當千の名を顯すといへども、對決に至りては再往知計の方に足らず、頗る御不審を蒙るによつて、將軍度々尋問し給ふ事あり。時に直實申して曰く、此事梶原平三景時、直光を引援するの間、兼日道理を申入る故か、今直實頻に下問に預るものなり。御成敗の所、直光定て眉を開くべし。其上に理運の文章要なし。左右に不能と稱し、尋決いまだ終らざるに、調度文書等を卷て御壺中へ投入れ、座を立ち、忽ち忿怒に堪ず、遠侍において、自ら刀を取髮を拂ひ、南門より走出、歸宅に不及逐電す。將軍殊に驚き給ひけり。或說に、彼京都の方へ赴くべしとて、則雜色等を遣し、伊豆箱根走湯山等において、直實が前途を遮り留て、遁世の事を止むべきの由、御家人及衆徒等へ仰遣しける云々。斯て直實は洛陽東黑谷の法然上人を賴み、弟子となりて、法名は法力坊蓮生と號しける。又一說に、直實が法名蓮生にはあらず、蓮西と唱べし。祕傳抄漢語燈錄親鸞上人傳記に見えたり。舊書には蓮西と書しもあり。此法師法然上人へ遣したる手紙共數通、今に嵯峨の棲霞寺にあり、假名文にて皆蓮せいと書たり。粟津の光明寺の一世道空上人の夢に、我は熊谷蓮西と召れしと、夢の記に見えたり。蓮生とは宇都宮彌三郎朝綱入道の法名なり、熊谷蓮生と云習は

せしは誤りなりと云り。又世に、蓮生は武州熊谷にて卒去せしと云は非なり。則東鑑に、承元二年戊辰の歲九月三日、熊谷小次郎直家上洛す。是は父入道、來る十四日東山の麓に於て、執終すべしと示し下す間、是を見訪はんが爲といふ。進發の後、此事御所中に披露す、珍重の由沙汰有り。然るに大江廣元曰く、兼て死期を知る事、權化のものにあらずんば、疑ひあるに似たりといへども、彼蓮生は、塵世を遁るゝの後淨土を欣求し、願所堅固にして修行を薫修す、よつて信ずべきと云り。同十月一日、東平太重胤京都より歸參して、則御所に召る。洛中の事共を申。先熊谷次郎直實入道、九月十四日未の刻を、終焉の期たるべきよし相觸るの間、當日に至て、結緣の通(道)俗東山を圍繞す。時刻に袈裟を著し禮盤に昇り、端座して合掌し、高聲に念佛を唱へて執終す。兼て聊も病氣なしと云へり。果して廣元が詞の如し。然ば蓮生は權化者か、尊べし。然るに往古尾陽の太守、武州熊谷の驛を通り給ふ時、熊谷寺に立寄給ひ、蓮生の木像を見給ひ、汝戰國に生れ、武を捨て遁世す、勇士の本意にあらず、卑怯者なりと、扇を持て木像の頭を打給ひしとかや。日本一の者と賴朝公の稱美に預りし熊谷が、死後の恥辱是非もなし。誠に直實遁世逐電の節、走湯山の住持專光坊、海道に於て直實に行逢ひ、書狀を以て諫言しける、其略に曰く、貴殿出家の後、道を起し遁世あるべきよし其聞あり、此條冥慮を道するに似たりといへども、頗主命に背く。凡そ武の家たる、弓馬にたづさはる身の習、身を殺す事を痛まず、偏に死に就ん事を思ふは勇士の取所なり。今入道せしめば、仁義禮に違ひ、累年の本意を失はんが如し。出家遁世の義有といふとも、元の如く本性に還らしめんか、君然らずんば物議に背かず、天意に叶べきならん。是をせん事いかがやと書たり。此狀則東鑑に見えたり。是を以見れば、尾陽公の蓮生が木像を辱しめ給ふも理なり。元來直實は、一朝の忿に忍びずして遁世しければ、誠の道心にはあらず。去共生得律義にて、西方阿彌陀佛の居る事とだまされて一生

くらしつ。則歌に、

淨土にも剛のものとや沙汰しけんにしに向ひて後ろ見せねば

斯讀て、馬上にても西をいとひ、逆馬に乘て往來せし馬鹿なり。逆馬は左もあれ、步行には嘸をかしからん。又蓮生歌に、

いにしへの鎧に勝る紙ごろも風の射る矢も通らざりけり

誠に殊勝なる歌なり。されども此法師は、やゝもすれば昔の勇氣を出し、物あらき振舞ありしとかや。大原問答の時、鉈を引提出しは、殺生戒を犯す覺悟、いと淺ましと思へども、木樵り水汲み師に仕し、雪山童子の例に傚ひ、薪水の勤に携へし鉈ならん、罪ゆるすべし。

廿三　長　明

長明は加茂の禰宜長繼が子なり。南太夫或は菊太夫と號す。和歌管絃の道に長じ、世に稱揚せられける。一旦加茂の社務職を望し所に、勅免なきゆゑ、恨み憤りて薙髮し、蓮胤と稱して、洛外大原に退遁す　土御門院の御宇建仁元年、後鳥羽院上皇和歌所を置れ、寄人に辟れしが、幾程もなく辭して退去す。其後、又舊職に復すべしと勅ありしに、辭して出でず。和歌を詠じ志を述べ、東南北越の間にさすらひ、建永承元の間、幽居を日野の外山に移して一室を造る、縱橫僅十笏、高サ七尺に盈たず。鈎鎖自在にして、東西南北意の適ふ所に隨ふて移す。其具纔に兩車に載る計なり。外山に石床あり、方丈石と名く、或は仙人石といふ。高サ貳丈計、其上平にして十八人座するに易しといふ。凡長明著す所の書、無名抄四季物語伊勢紀行、鎌倉道の記は仁治三年の秋、郢曲の好士關東へ下向せし路次の紀なり。海道記も貞應二年

の集にて、長明が遺稿に非ず。或説に、海道の記は藤原光行が作書にして、此記の歌ども、夫木集彼此數首、皆光行が東行の歌なりと云へり。彼外山の石床には、後鳥羽上皇二度御幸有しとかや。誠に稀有の事に覺ゆるなり。然しながら長明、社務職を望で、叶ざるを憤り遁世せしは、公を非とし己を是とし、世を謗るの振舞、不義非道の罪ならんか。殊に神職の身として佛道に入りしは、神明を蔑にするの罪、且先祖數代の家職を捨る不孝の罪、又後鳥羽上皇和歌所の寄人に居られしを、程なく辭して去り、重て舊職に復されしを諾せざるは、違勅の罪に非ずや。渠一朝の憤りに因て遁世せしは、眞實の發心にあらず、元より佛も嗔恚を戒め置たれば、佛意にも叶はず。日野の方丈室の巧なる所爲も、桑門の本意にはあらず。むかし佛頂和尚、野州雲寺の奥に庵を結て、

　竪横の九尺にたらぬ草の庵むすぶもくやし雨なかりせば

誠に桑門の栖は、雨だに漏らずば足りぬべし。何ぞやむつかしき室を作りて、彼是持運は煩しかるべし。元より一所不住の境涯なれば、心の止まらざる所をば、庵を捨てゝ去るべきに、持運ぶとは桑門には似合はぬ所行なり。渠の方丈記に、籠に柴の戸有り、則是山守の居所なり。彼に小童あり、時々來りて訪ふ。然る時は渠を友として遊び步行く。渠は十六歳我は六十歳なり。齢は殊の外なれども、心を慰むる事は相同じと云り。或説に、此小童は長明が若衆なりと云り。是又俗説にて取に足らず。然ども諺に、灰にならねば止ざるは色欲なりと云り。渠元來一旦の憤りに仍て世を捨ぬれば、成道堅固覺束なし。いはれざる名聞の望に仍て、公を恨て山籠りするといへども、苔の色替松風の音を讃せし、（脫字あるべし）古歌の風情にやありけん。

廿四　圓觀

後醍醐天皇、北條相模守平高時入道宗鑑を、御征伐の御隱謀露顯しける折ふし、法性寺の圓觀上人勅を承りて、高時を調伏せし罪に依て召捕れ、鎌倉へ引れて、水火の責に及ぶべき所を、圓觀の影ぼふし障子に移りしに、不動明王の尊影を顯しけるを、人々奇異の思ひをなし、其旨斯と申ければ、高時も前夜の夢想に示現有し故、感歎して拷問を宥めしとかや。高時入道が闇愚は論ずるに足らず、圓觀誠に不動の化身ならば、高時を調伏するに及ばず、明王と顯れ降魔の利劍を以て、高時を始め敵の衆類を、悉く鏖(みなごろし)にして成とも、天子の宸襟を安じ、萬民の愁ひを救んこそ、神佛の大慈成べきに、調伏と云は祈て人を亡すには非ず、其心を調伏するといふて、人の惡き意をよく教戒して、我に隨はしむるを云なり。元より佛は殺生を戒め、神は非禮を請給はず、さればこそ不動の化身たる利生なり。圓觀囚(とらはれ)となり、曾て佛力も顯れず、影ぼふしを見せて拷問を遁しは、不動には言甲斐なき心なり。彼圓觀上人の影ぼふしの事、太平記の評にいへるは、圓觀鼻高く頰骨高く瘦て口廣し。灯の影にて障子にうつりしは、誠に怖しく見えつらん。但不動と言しはいぶかし。按ずるに、圓觀上人めが影ぼふしを障子に移せしは、愚者を欺く手づまならずや。

廿五　兼好

兼好(けんかう)姓はト部、吉田兼顯が子なり。左衞門督兼好(かねよし)と號す。後宇多院の北面にして、文才有り和歌を能す。往昔頓阿慶運淨辨兼好を、和歌の四天王と稱す。後宇多院崩御の後遁世して、法名を直に兼好と號す。洛陽東山吉田に閑居し、今に其舊跡殘れり。兼好元來神道は其家に習ひ、歌の道は二條の門弟にて詠歌多く、代々撰集に入れり。且天台の學に達し儒經を學び、殊に老莊の道を好めり。唯の日、和語の双紙を作りて徒然草と名付。和文の好書成に依て、世々の才人註解して稱美せり。誠に兼好が歿後の幸と云べし。併兼好神道の家にして佛道に入るは、長明と同じき白癡者(たはけもの)なり。たとひ世

を遁るゝとも、家風の神道を守て、其道の教となるべき書を著し、或は天下國家の政道に益ある事を記し置ば、誠に大功成るべきに、詞花言葉を飾り、無常變易の理をのみ旨とする書は、神國の罪人なり。或説に、徒然草は人の心持を能く列ねたるものなり。但し兼好時代は亂世にして、自然の句の中に述懐を含めり、長明が書にも然り。常に翫ぶ人、自然と述懐の心を生ぜり、惜むべしと云り。實に人の心は、白絲の染むれば染るものにして、彼草紙の、萬いみじくとも、色好ざる男はいとそう〴〵敷て、玉の巵(さかづき)にそこなき心地ぞせらるゝと書るは、人をして好色に導く詞にあらずや。尤末に至て、色を能く戒て書たれども、凡貴きも賤きも、色を好まざるは稀にして、人情惣て好む方には染り易きものなれば、斯く色欲妖艶の詞を書る事は、甚人の害なり。思ふに兼好は、元來好色淫風の士と見えたり。去ば高師直(かうのもろなほ)が、鹽屋高貞(えんやたかさだ)の妻の許へおくる不義の艶書を、兼好師直に代りて書し事、太平記に見えたり。此事を林子の本朝遯史に、信に一生の過端なり、慨惜すべしと云り。此一事をさへ一生の過ちと惜れしに、或説に、兼好遁世の後、從弟の伊賀守成忠に招れ、伊賀國へ立越住ひしける比、成忠が妻に密書をおくりしと云へり。此事駿臺雜話にも見えたり。又兼好物語といふ双紙には、勢州桑名の住人伊賀守保古が女、辨の君と云るに密通せし事を記せり。薙染(うぜん)の身として、破戒無慙の罪人成べし。是を以て見れば、兼好も正しき法師にては有べからず。誠に沙門も飲食男女の大慾には忍び難きものにや。兼好東山に遁れて、松丸に命じ花莚を織り、閑居の便としけるは、内證逼迫と見えし。頓阿法師の許へ時借の無心に、米給へ、錢もほしと云事を、句に讀て遣しける、

　夜もすゞし寢ざめのかりほ手枕もま袖も秋にへだてなき風

頓阿返事に、米はなし錢少しといふ事を讀り、

夜もうしねたるわがせこはてはこずなほざりにだにしばしさはませ

是等の振舞、風雅なる所爲と云ん。たゞし口上にても濟べきを、好む事の仕かたといはん。頓阿が使を待せて返歌をあんじけるも、いとわづらはしからめ。

廿六　頼　政

頼政は兵庫頭源仲正の男なり。射藝に達し和歌を能す。保元平治の亂に軍功有りしかども、させる恩賞にも預らず。仍て怨を含みながら、大内守護にて年久しく勤仕ありけれども、昇殿を許されざりし故、述懷の和歌を詠ず、

人知らぬ大内山のやまもりはこがくれてのみ月を見るかな

此歌によりて昇殿を許され、正四位の下にて有しが、猶三位を心がけて、

登るべきたよりなき身の木の元にしひをひろひて世をわたるかな

斯詠じて、七十五歳にして三位に敍せられ、專途を遂ぬとて、薙髮して源三位入道頼圓と名乘。其外和歌の擧數多にて計るべからず、誠に文武兼備の良將といふべし。然しながら、述懷の歌を讀て昇殿をゆるされ、或は三位に進たるは、和歌の功は去る事なれども、我身の功を、君の御見だしなき事を恨み述懷し、歌を以て君の御誤りを糺して、官位に進みしは、上を犯すの罪に似て、武臣の本意にあらざるべし。保元平治の忠戰といへども、天下の耳目を驚す程の功もなし。然るを僅の功に便りて、恨述懷の歌を以て、官位を貪りしはいと拙なし。彼九郎義經　朝敵退治の大功によつて、昇殿を許され、官位昇進しけることは、武門の名譽と云べし。和歌を只よみて己の欲をなす、歌の上手は骨折ずして、願望心の儘に成べきや。頼政武將として、武を以て稱せられず、詞花言葉のもて遊びを以て賞を遂しは、歌道にてはほまれ

ならめ、武道においては本意にあるまじきか。仁平應保には、天子を惱し奉る化鳥を、鳴弦を以て退けしは、先祖に恥ざる功、是ぞ武門の眉目たるべし。然るに賴政の嫡子伊豆守仲綱が秘藏しける、木の下鹿毛といふ名馬の事に依て、平宗盛に憤りを挾み、平家を亡さんとの志を起し、高倉の宮に御謀反をすゝめ參らせ、卒爾に大義を思ひ立て、其志をとげず、皆世の煩ひ諸人の歎、身の爲には家を失ひ、宮にも生害なさしめ、身を亡したるは本意なるまじ。仲綱彼の馬をおしみけるによつて、宗盛に恥しめられしとかや。昔漢の文帝の時、一日に千里づつ行馬を獻ずるもの有りしに、文帝笑て、我吉行には三十里、凶行には五十里にして、鸞輿前にあり、屬車後にあり、我獨り千里の騎馬に乘て、何國へか行んやと云て、其馬を返されしと云り。吉に行とは巡行祭禮をいふ、凶に行とは兵を出す事をいふ。實や名馬に乘つて我獨り先驅したりとも、續く兵なければ危し。但し迯るには調法なるべし。周の穆王八疋の駿馬を愛して、王業衰へたりと云へば、仲綱木の下鹿毛も、房星の精成るか。賴政私の宿意に仍て、高倉宮に御謀反を勸めしは、元より忠義に非らず。其上云がひなき僧法師を味方に賴て、强敵の平家を討んとしけるは、迂濶とや云ん。去ばこそ山門の衆徒心替て軍利なく、終に宮をも失ひ、家をも亡しけるこそ口惜しけれ。然れども最期の有樣勇にして、辭世に、

うもれ木の花咲事もなかりしに身のなる果は哀れなりけり

斯詠ぜしは、流石日頃嗜みし道とて、斯る時節秀歌を讀は、哀れに優なる振舞なり。或說に、賴政辭世に、身のなる果は哀れなりけるとつらねしは、哀にあらず天晴なり。賴政は源家の正統にして時に遇ず、一生涯空しく埋れ居たるに、今高倉の宮の爲に討死するは、天晴勇士の本意なりといへる心にて、詠じたる歌なりと云り。我元より歌道にくらければ、そしるべき言葉もあらず。

廿七　重盛

小松内大臣重盛は、相國入道清盛の嫡男なり。其性寛仁にして、文武忠孝の朝臣なり。依て此人を尊び、日本の賢人と稱しけり。併我が誘草の偏見を以て論ぜば、重盛を日本の賢人とは、甚褒過たる詞なり。去は平治の亂に、平家へ賴朝を生捕、誅せず東國へ流せし事は、重盛の誤りなり。縱令池の禪尼の仁心に、默止がたく助ると、重盛彼吳王夫差が、越王勾踐に亡されし例を顧み、清盛を諫て、速に賴朝を誅せざるは智なし。諺にも、敵の末は根を斷て葉を枯すといへば、誅すべきに、果して賴朝、平家追討の義兵を揚し時、大庭三郎景能、早馬を以て福原へ注進しければ、清盛大に驚き、東國の諸士賴朝に附屬すべし、元來家人なり、いかでか昔の好みを忘るべきか。然るに賴朝を東國へ流しけるは、八ヶ國の家人に賴朝を守護し、清盛を亡せと云が如し。盗人に鍵を預け、千里の野に虎を放せしが如しと、座にもたまらず踊り上り〳〵、悔まれしとかや。か樣の事、是偏に重盛遠き慮りなき過失なり。然るに或說に、平家にて賴朝を助しは、重盛の誤りにあらず、却て深き賢慮なり。其子細は、東國の諸士は皆源氏舊好の家人なれば、平家賴朝を殺して、源氏の根葉を絕なば、東國の諸士憤り深く、天下の亂を成さんは必定なりと。爰を以て賴朝を助け、然も國も多きに、態と伊豆の國へ流せしは、關東武士の憤りを宥める謀なり。然して重盛仁德を以て、東國の武士に恩を施し、平家へ歸伏させ、能時節を計て、賴朝をば失ふべきとの密計なり。去に依て、東國の諸武士、追々に平家へ歸伏し、伊東祐親長井實盛等、平家無二の忠臣となれり。然れ共重盛短命にして、此謀略空しく成りしと云り。此說强て重盛の非を防ぐに似たり、恐らくは妄說ならん。重盛下知して賴朝を殺せば、東國の士憤りて亂に及ぶ事を思はゞ、初より東國の方へ流人の沙汰有べきや。朝敵義朝の子なれば、助べき道理にあらず。死罪に決したるを、池の禪尼の歎き默止がたくして、

助けし事あきらけし。若重盛斯の如きの謀あらば、頼朝數年流人の間、祐親に示し合せて、不意闇討毒殺抔の秘計有べきに、其事なきは重盛の忘りか。せめては病中に此謀を、嫡子維盛を始、一族郎從にむかひ遺言して、死後に成りとも、謀成就なさしむべき也。然るに其沙汰なきはいかにぞや。然る時は此說妄說成る事必せり。以前治承の始、後白川法皇の寵臣新大納言成親、淸盛が逆意を憎んで黨を催し、平家を討んと計りしに露顯して、成親を始め數十人、或は死刑又は流罪せしが、尙法皇を駭かし奉らんと、淸盛甲冑を帶し軍兵を催す由、重盛聞て入來り、淸盛を諫めけれども聞入ず。依て重盛急て家に歸り、兵を集め法皇を守護せんとて、淸盛を驚かしければ、淸盛恐れて怒を解き、忽ち騷動鎭り、法皇危難を遁れ給ふは、重盛の謀畧にして、淸盛が暴逆を押へ、朝廷を安じ奉る、誠に日本の賢人なるべし。しかしながら、忠義の爲に謀とは云ながら、兵を集て父に敵すべき體を見せ駭かし、威を以て父に勝しは、勝母の里を過らざる孝子の心にはあらず。然れば忠孝全く成し得たるとは云れまじ。又重盛は後世の苦を悲しみて、來世の營み他事なく、常に住ける所に、四方十二間の家を建て、四方に四十八體の十二光佛あり、其前每に常燈を點じければ、四十八の燈籠星の如く、年十七より二十歲迄の美女四十八人、常燈一ッに壹人宛付て、油をそへ燈をかゝげさせ、日沒に成ぬれば、衣裳花を飾り蘭麝を薰じて、禮讚念佛して、鈸銅拍子を囃し今樣を諷ひ、四十八間を廻らしけり。重盛は中段に座して是を聽聞す。依て重盛の異名を、燈籠の大臣と云しとかや。是又賢人に似ざる花美風流の振舞はいかなるぞや。今の世に日蓮宗の僧俗會式、又一向宗の御講とやらの如し。戲れたる事にて諸人寄集る、大たはけなり。心ある人は爪彈をせり。況や賢人と呼るゝ重盛、文盲無智の所業は何事ぞや。元より聖賢甚だ好色を惡み、佛も尙戒しむ。重盛後世の營に、美女を集め今樣を唄ひ、人の心を蕩かせ、色欲を媒としけるは、善事には有らで惡種なるべし。殊に三公の位に昇り、

日本朝臣の重職を汚し、其上に燈籠の大臣と異名を呼るゝは、博奕打又は山師の類に劣りし大たはけ、甚歎しき事にあらずや。又重盛の老父清盛、頼朝の爲に首討たるゝぞと夢見て、平家の末覺束なしと、今生の事を思ひ、偏に後世の事を祈り、紀州熊野山に參籠して祈けるは、父清盛の惡逆を飜して、天下安全を得せしめ給へ。若平家の榮耀一期を限り、後日恥を得ば、重盛が運命を縮て、來世の苦患を助け給へと、丹精を碎き、祈念再拜して下向しける。歸京の後、幾程もなく惡疾を病て、追々頼なきよし聞えければ、清盛甚だ歎き、越中次郎兵衞盛次を使として申けるは、何とて今迄療治なきぞや、老たる父母に先立つは不孝なり。此頃もろこしより名醫渡りて、今津にあり、召寄て療治すべしと有ければ、重盛は盛次に對面して、我此病を受る事は、熊野權現宿願納受疑なし、親に先立つは重盛一人に限らず、必歎き給ふべきにあらず。若異國の醫師の治術にて存命せば、本朝醫道なきに似たり、若又彼が醫術驗なくば、面謁詮なし。殊に我三公の位に居て、異國浮遊の來客に見えん事、且は國の恥辱を顧ざらんや。彼是以て其義に及べからずと返事有て、頓て出家を遂て後世の勤他事無りしが、程なく終に四十三歳にて去り給ふとかや。是又賢人には似氣なき振舞なるべし。重盛父の惡逆によつて、平家の滅亡遠からぬを悟り、慫じひに永らへて成行を見んよりは、熊野權現へ命を縮る祈誓しけるは、孝道の本意にて有まじ。既に虞舜は、父の瞽叟頑に、母嚚しくて然も繼母なり、腹替りの弟象は奢りて無禮なり、舜よく是に仕へて至孝なりと云り。然るにやゝもすれば、舜を殺んと計りしを、舜又方便を以て危難を遁れ、身を全して爲孝を盡し、終に父母共に善に化せしめけるとかや。清盛惡人と云ども、瞽叟の如く重盛を憎まず、子ながらも恥ぢて、惡行を思ひ止る事有之と見えたり。然らば重盛身を全して父を諫め、舜の如く父清盛を善に化せしめ、朝家を安んじ奉り、平家長久の謀をなさば、是誠に忠孝全き賢人なるべし。平家の後榮たのみなきを見限て、主上

を始め奉り、父母妻子兄弟一族郎等を見捨て先だち、親族の歎きを顧ず、跡は野となれ山となれと思て顧著なきは、昔臣父子夫婦兄弟の實義は微塵もなく、不忠不孝不仁不義の甚しきにあらずや。其上清盛の慈愛の志に背き、異國醫師の治術にて存命せば、本朝に醫道なきに似たりと云しは心得ず。日本の醫道は、神代には大己貴命と少彦名命と、醫業を民に施し給ふといへども、醫書は傳らず、二神の醫術を傳へたる人もなし。今世行るゝ醫道は、欽明帝の御宇に、百濟國より醫の博士幷採藥師來朝して、醫師を日本へ傳授す。此時欽明帝、異國の醫術を用ひ給へば、日本の醫道なきに似たりと恥給はゞ、用ひ給ふべからず。然れども恥給はねばこそ、今に至るまで、唐の良醫の著したる醫書を以て療治し、藥種も唐物を貴とす。其外諸道具よろづの物、多く異國より來るなり。然れば重盛、異國の醫の療治なりとて、存命したればとて、何の日本の恥ならんや。既に昔唐の帝の后、惡瘡を病て諸醫の力に及ばず、日本の典藥の頭雅忠を、名醫と聞傳へて招きける由、是唐にても、醫なきに似たりと恥ぢずと見えたり。重盛三公の位に居て、異國浮遊の來客を見ん事、國の恥家の疵と云しは其意を得ず。凡三公の職は、世に埋れ居る人にても、賢能さへ有ば、たとへ下賤の者たりとも、其德を尊て君に吹擧し、國家の寶とすと見えたり。況や醫師は、假令異國のものにもせよ、良醫ならば擧て用ひ、君に進め奉りて、日本の寶とすべきを、却て渠に見ゆるを國の恥辱なりといふは、三公の職を忘れたるなり。但必死の覺悟ゆゑ、療治を辭せられしか、當座遁れにせしか。去ばこそ重盛は、異國より來りし妙典といふ船頭を賴、唐へ砂金三千兩を渡して、宋朝の帝幷育王山の衆徒に送り、我爲に育王山に堂を建て、供米所を寄進し、永く重盛が菩提を弔ひ給はるべしと、檜の良材一艘を運送せり。妙典歸國して、重盛の詞の如く計ひければ、宋帝幷育王山の僧侶甚だ隨喜して、彼山に堂を建て供米所を寄進し、永く重盛の冥福を修しけるとかや。是偏に愚夫愚婦の所行にして、國の恥身の恥を唐

へ顯す振舞、歎くに堪たり。彼遊客の醫師に見ゆるを恥べき程にて、此恥を思はざるや。察するに重盛は、平家亡びて源氏の代とならば、跡弔ふものも有まじと、唐へ黄金を贈り、まさなき事をせしと見えしが、せめて父母親族の菩提の爲にと云ば、孝の端とも云べきに、父母には曾て頓著なく、我身計り永く菩提を弔はれんとは、不孝不義の志憎むに堪たり。凡菩提を弔ふ人は、此世にて善根なく、地獄の苦しみを受るを、追善の功德によつて免れ、佛に成事と見えたり。然らば賢人と云れし重盛も、地獄の苦を受べき覺有て、罪を遁れん爲に、育王山にて永く菩提を弔らはれんと計りしか。實に重盛命を縮め祈願をなして、親に先立し不孝の罪によつて、地獄の苦を遁れまじ。文盲無智の者さへ、親に先立事を悲しみ、身を全ふして父母の終を見屆度と平生心懸するは、自然の恩愛の情なり。去ば往昔、小式部内侍病重く、人の面を見分難き程になりて、賴なく見えければ、母の和泉式部、額をおさへ涙を流しけるに、小式部目を少しひらきて、母の顏つく〴〵と見て息の下に、

いかにせん行べき方もおもほえず親に先立道をしらねば

斯弱りたる聲にて吟じければ、天井の上に聲して、あら哀れと云けるが、夫より病心よく本服しけるとかや。是偏に小式部が親に先立事を悲しみ詠歌せしを、神明感應ありて、應護ありしと見えたり。本より神は非禮を受ず、熊野權現何ぞ親に先立つ不孝の祈願を納受し給ふべきや。然るに重盛惡瘡を病み、權現の納受と思ひしは甚だ愚なり。淸盛が賴朝の爲に、首を討れたる夢を見て、平家の滅亡せん事を考へ、賴朝を早速に亡すべきを、却て我命を縮め、父母兄弟親族を、悉く賴朝に殺さるゝを顧ざるは、豺狼の類にして、妄を信じけるは小人なり。然るに重盛は日本の賢人なりと稱して、源平盛衰記に褒美したるは、其行を見るに、相國入道が、法皇を犯し奉らんとせしを諫たる外には、皆寂滅の教に

迷ひて、婦人愚夫の振舞にひとしく、夫が中に燈籠の大臣と、拙き異名を呼るゝこそ、末代の恥辱なれ。古語に聲色の慎むべきを謂ひて、名は體を顯すの德ありと云り、宜なる哉。見ぬ世の人の異名を聞き、其顏かたち志も、推量なす心地せり。去ば關白道長は御堂を建立して、御堂の關白と呼るゝ事は、名聞苦しき後世を願ひて、金銀を無量に費したる奢(おごり)ものと思はれて、いと淺まし。空海が左右の手と足と口とに筆を採りて、曲書(きよくがき)して五筆和尚と呼るゝは、先年見せ物に出たる、島金太夫といふかたはものが、足手に筆を持て、文字を書たるに同じ。名僧には似氣なき事なり。永縁和尚がほとゝぎすの秀歌に仍て、初音の僧正と呼るゝはいとやさし。返す〲も、重盛が燈籠の大臣と拙き異名を取て、一生の德を失ひけるぞ恨なれと、歎息。

廿八　賴朝

賴朝は左馬頭義朝の三男にして、母は尾州熱田の大宮司、散位藤原季範(すゑのり)が女也。然るに賴朝稚名を鬼武者と號し、又同國幡屋(はたや)と云處にて生れし故、幡屋の武者王とも云り。稚かりし時より凡人に非ず。其頃出羽郡に源高能(たかよし)と云者、武者王が容貌を見て、其氣相尋常ならず、此幼童必天下の權を取べしと云し事有。然るに武者王丸六歲に成しとき、佐々木源三秀義見參せし折から、若君に持遊(もてあそび)を參らせんが、御望の物あらば宣ふべしと云けるに、武者王聞て、いやとよ、もて遊びは望にあらず、能家人(よきけにん)こそほしけれと、答へられければ、秀義大きに感じて、此若公は天晴武將の器なり、末賴母しと悅びけるとかや。誠に松は寸にして棟梁の機ありと云へり。去ば子を見る事父にしかず、義朝も牛を食氣有(くらふきある)を見て、生長して武家の棟梁と成べきものなりとて、武者王と名付、源家累代の重寶、源太が產衣(うぶぎ)の鎧と、髭切といふ名劍を、嫡子源太義平には讓らずして、武者王に與へ、元服して則右兵衛佐に任じ、賴朝と號せり。然るに平治合戰の時十

三歳にて出陣し、義朝にむかひて、平家は早向ひ候はん、人に先をせられんより、先づ六波羅へ押寄べしと云しは、先んずる時は人を制すといふ兵法に叶ひ、自然と元帥の器なり。既に合戰に及び、敵二騎打取、壹騎に手を負せ、進んで斬けるが、終に軍利なくして、義朝に隨ひて東國へ落けるに、終日の軍に疲れて、馬疲れて義朝におくれ、唯一騎落ける所に、江州守山の驛にて、雜人數多落人を生捕らんと、大勢にて取込しに、源内兵衛と云もの、賴朝を馬より引下さんとする所を、眞向二つに割付、猶も近寄る雜人ばらを切散しける、勇猛の振舞感ずべし。斯て爰かしこ漂泊して、江州淺井郡の民家に隱れ、身を全ふしけるは、誠に賢き振舞なり。然れども、終に平家の侍彌平兵衛宗清に生捕られ、誅せらるべき所に、淸盛の繼母池の禪尼、愛子家盛を先立て常に歎きしが、賴朝の容貌を見て、家盛の稚立に能似たるよしにて、哀に思ひ、淸盛へ命乞せらるゝ由、賴朝聞て、先立たる父母兄弟の爲と稱して、手づから卒都婆を作りし事を、禪尼聞及びて、いよ〱あわれに思はれしとかや。是偏に池の禪尼の心を取る謀とかや、恐しゝ。案のごとく禪尼此よしを聞、哀憐いやまして、頻に命乞有ければ、淸盛止事を得ずして死罪を宥、伊豆の國へ流しけり。然るに東國へ下向の路次に於て、近江國建部明神へ通夜しけるに、都より從ひ來りし上野源吾盛安、其夜あらたなる靈夢を蒙りしは、賴朝天下の主將と成べき瑞夢なりければ、甚だ悅びて、翌朝賴朝へ夢物語しけるに、賴朝心中には悅ぶといへども、何の返答もせざりしは、我身の吉夢を沙汰し、平家へ聞えば身の爲惡しかりなんとの遠慮と見えたり。賴朝此時十四歲、いまだ幼弱の身として斯る賢慮、誠に凡人にあらず。然れ共伊東次郎祐親入道が舘に在し時、祐親が娘と密通して、男子を設たるは、平家の後聞を恐れざる振舞、以前の遠慮とは大に違なり。去ば社、果して身の大事に成しを、伊東九郎祐淸が情によつて危難を遁れ、北條時政に身を寄せけるが、爰にても時政が娘と密通しけるは、前非に懲ざる危き振舞なりし

が、深き奸計有て、僥倖にして禍を免れたる成べし。思ふに頼朝は、甚だ好色淫風の人と見えたり。されば頼朝、兄悪源太義平の妻は、新田大炊介義重の娘なり。義平落命の後は、父義重の許に有しを、頼朝懸想して、伏見冠者廣綱を以て、艶書を贈りけるに、許容せざれば、父義重に申入らるゝ。義重元来思慮深きゆゑ、頼朝の御臺の後聞を憚り、俄に彼娘を帥六郎に嫁しけり。是に依て義重は、頼朝の氣色を傷りける由、東鑑に見えたり。頼朝の心に、兄嫁をもとつて我妻にせんと欲するは、親兄の禮を失ひ、兄を辱め、骨肉同胞の因を絶しけるは、人倫の振舞に非ず。此一事を以頼朝の心中を知るべし。斯る無道の心より、舎弟範頼義經を始め、親き一族を亡して、事を欺き天下の權を奪ひ、讒を信じて、忠臣を罪し、譏を後代に殘せり。去ば頼朝の不仁不義の行跡、算ふるに暇なし。頼朝が奸計を以て、天下を掌握するといへども、纔か二十年にして薨じ、嫡子頼家武將に任じ、僅か五年にして、時政が奸計を以て、伊豆の修善寺において害せられ、次男實朝世を取て、十七年にして、悪禪師公曉の爲に、鶴ヶ岡において横死す、是また北條が奸計なり。斯て頼朝父子三人、僅か四十餘年にして家名斷絶して、天下の權は北條の掌に落たり。是偏に頼朝の積悪の宿報にあらずや。林氏七武に云く、頼朝口に蜜あり腹に劍あり、而して忍ぶ人なり、其功清盛より大にして、其罪清盛より重しと云り。頼朝口に蜜あり腹に劍あるは、唐の林甫の類也。蜂飼のものが見ば甚だ愛すべし。

廿九　義經

義經は左馬頭義朝の末男にして、母は九條院の雜色の女常盤也。義經は稚名は牛若と號し、平治の亂に義朝敗軍して、長田忠致が爲に生害して、一族悉く亡び、牛若いまだ襁褓の内に有て、母の常盤容色勝れし故、清盛に寵せられ、是によつて牛若刑戮を免れ、漸成長し鞍馬山東光坊に身を寓て勤學せしが、常に報讎の志しありて出家を厭ひ、兵術に心を

委ね、十六歳にして潜に鞍馬を出で、奥州に至り藤原秀衡を頼み、首服して九郎義經と號し、治承四年、舍兄頼朝平家追討の義兵を上ると聞て、奥州より發向して、駿州黄瀬川において頼朝に謁す。頼朝甚だ悦び、則軍將として木曾義仲を誅し、次に平家を討しむ。元來義經武略に長じて、奇計妙術を廻らし、大敵を亡し、其勢普く天下の口實にあり。依て元暦元年五月六日、從五位下左衞門尉に敍し、即ち平家追討使の宣旨を蒙り、九郎判官と號す。是一の谷の戰功の賞と聞えり。同十一月十一日院參の節、昇殿を許さる。同二年平家悉く滅亡して、四月廿五日神鏡神璽西海より還幸、朝廷に入御し給ふ。則義經供奉有て、同廿七日院の御厩別當に補し、同八月伊豫守に任ぜらる。段々の昇進は朝敵退治の忠賞と聞えけり。宜なる哉、さしもの平家の强敵を、二年の間に鏖になし、天子の宸襟を安んじ奉り、父の仇を報じ、廢れたる源氏の家名を起し、忠孝を全くし功を遂しは、誠に古今無雙の英雄と云べし。舍兄頼朝は、居ながら日本の惣追捕使と成て、天下の權を執しも、全くは義經の軍功によれり。然るにさばかり朝家に忠有て兄に孝なる義經、讒者の爲に亡しは命なる哉、かなしむに絕たり。奸臣は梶原景時なり。去ば末代の今に至り、兒女幼童に至るまで、梶原が讒言を憎て、既に景時々々と嘲る。一向義經を哀悼して、諺に判官贔負と稱するも、理義の仁心を感ぜしむる所にして、是則義經の陰德ならずや。嗚呼痛ましい哉義經、狡兎盡て良犬煮られ、敵國定て謀臣亡る例を顧ず、身を保つの謀なきは如何ぞや。客四友先生不覺の落涙しければ、是を見て油煙公から〳〵と笑て、先生も諺の判官贔負にや、豈義經古今無雙の英雄ならんや。世擧て梶原が逆櫓の遺恨によつて、義經を讒言せしを憎といへ共、逆櫓の論も景時が道理にして、義經の僻事也。されば駈べき時にかけ、引べき時に引退き、身命を全して敵を亡すこそ良將成るべけれ、一己の高名せんと危を顧ずば、暴虎馮河の類ひ也。去によつて梶原は、舟軍の駈引自由を得ん爲に、逆櫓を立る工夫を廻らし、適

能智惠なりと、定て自讃心にて談じけるを、義經は古老の異見を無にして、逆支度と嘲りしは甚だ無道なり。平三景時辱られ、爭でか怨り思はざらんや。然し敵計(原本ノマヽ)を以討取んと、隙を知らざるは猪武者と嘲りて、非禮の詞を放ゆゑ、既に珍事に及ぶべき所、三浦畠山等無事に納めたり。元より平家追討の宣旨を蒙りたる義經、無益の論に大義を忘れ、梶原を討果して犬死せば、天子に不忠と云、兄頼朝に不義と云、敵味方の笑草と成て、尸の上の恥辱たるべし。其上檀浦にて、梶原景季と先陣を爭ひしは、是又大將の器にあらず。思ふに義經は其身の武勇にほこり、梶原を侮りて、先陣の望を片腹痛く思ひしが、梶原元來尋常の侍にあらず、既に生田(いくた)の森の一軍に、梶原父子三人、武勇を振ひし有樣は鬼神の如し。又平次景高一陣に進んで、大將範頼の下知をも顧ず、さしもはげしき軍中にて、取あへず一首の秀歌を詠じ、猶も進んで戰ひしは、文武二道の勇士にあらずや。兄源太景季、一枝の梅花を箙にさし、三十餘騎に取籠られて事ともせず、落花微塵に切ちらし、菊池三郎と組で首取たる武勇は猶更、箙の梅の風流を、平家方にも梶原が花箙と感賞しけるとかや。父の平三景時五百餘人にて、平家の二千餘人と戰ひしが、無勢なれば、下手へ廻りて颯々と引けるが、源太が生死如何と、又二百餘騎にて敵中へ駈け入、大きに武勇を震ひ、梶原が生田の森の二度がけと、末代に譽れを殘せり。是を以て見る時は、何とて梶原が義經の勇猛に劣るべき、誠に一人當千の剛の者と稱すべし。然れども世人は、義經を譏しけるを憐て其美を擧ず、彼を毒蟲に比して忌憎む。義經も亦罪なきにあらず、頼朝元より口に蜜あり腹に劍あり、兼て義經武略に長ぜしを、心中に忌憎む所に、朝敵亡びて京都靜謐に治り、天下安堵の思ひをなして、義經の武德を稱し、殊に後白川法皇御寵いみじく、殿上人を始として、洛中の老若男女、哀れ判官殿の世にて有れかしと云あへる由、頼朝傳へ聞て心中快よからず。其上義經は、平家の一族平大納言時忠の聟と成りしは、世を憚らざる振舞、存じの外也と憤り深かり

しに、伊豫守に任ぜし事猶安からず。伊豫守は、源家の先祖頼義朝臣是に任ぜられしより以來、源氏代々是を重んじて、任ぜらるゝ人なし。然るに義經一應の辭退もなく、伊豫守に成しは、頼朝に憚らず、天下を我儘に計ふ事、自立の志疑なしと、甚だ忿り強かりし折から、梶原讒言して燃る火に薪を添ければ、終に連枝の因(ちなみ)を絕(たち)て、衣川の泡と消しは、淺ましき事なり。然しながら或說に、義經は實は生害せず、秀衡存生の内示し置たる密事に任せ、潛に國を遁れ蝦夷(えぞ)へ落行、身を全うせしと云へり。是正說ならばいさかしこき謀なり。□□□斯る絕倫のふるまひ有しぞや。尤も此說取るに足らずといへども、義經は牛若丸といふ時より、好色淫風の聞えなきにしもあらず、又更に妄說にもあらざらん。義經才智有ながら、斯る無道を行ひしは、諺の猿智惠にて、信(まこと)の智はなき人にや。俗に義經は向ふ齒反(そ)りて猿眼といへば、自立して天下を執んと欲せしは、正眞の猿猴が月ならん。

三十　時政

時政は桓武天皇の後胤、上野介直方より五代の孫、北條四郎太夫時家が嫡男にして、北條四郎と號し、後遠江守に任ず。其性甚だ奸佞にして惡行多し。然るに世俗、時政は頼朝を聟にせしを以て、頼朝に忠有と稱して、時政を善士と唱ふ。伊東次郎祐親は、頼朝へ敵對しけるゆゑ、祐親を惡人と云ふは甚だ非なり。尤祐親はむかし舊好の源氏と云共、平治の亂に義朝亡びて、時政を始として源家恩顧の關東武士、悉く平家に隨へり。中にも祐親殊に平家の恩深き故、無二の忠臣と成りけり。是に依て頼朝が娘と密通し、男子を一人設しを、平家の聞えを憚り、彼(かの)男子を殺して、頼朝を計らんとし

けるは、曾て祐親が僻事に非ず。賴朝流人の身として世を憚らず、渠が娘と密通せしは、甚だ義に背けり。縦令尋常の者なりとも、密通罪すべきにあらずや。況賴朝は、祐親平家より預りたる囚人なり。娘と不義せしを穩便に差置ては、平家へ不忠なり。是によつて彼兒を殺し、賴朝を謀らんとせしは至極道理なり。元來祐親は義士也。治承の亂に、小松中將維盛に屬して、賴朝を襲んと計しが、豆州鯉名の浦において、天野藤内遠景に生捕られて、聟三浦義澄に預けらる。義澄忠實に代て祐親が命乞しければ、賴朝彼を免して謁見せんと有しに、祐親則義を守りて自殺せり。其頃關東武士の有樣を見るに、源平兩家の色を見て、運を兩端に伺ひ、朝に味方と成り夕に敵となれり。其中に祐親一人、一旦平家に隨ひ恩を受たれば、始終心ざしを變ぜずして、賴朝に降らずして自殺しけるは義士也。世俗強て惡人と云ふは非なり。古今絶類の惡人は時政なり。既に賴朝伊東が難を避て、時政を賴みて居たりけるが、又彼が娘政子と密通せり。然るに時政在京して歸國の折から、路次にて此事を聞くといへども、知らざる體にもてなし、兼て政子を伊豆の目代八牧判官義隆に嫁すべき兼約なりしゆゑ、急ぎ婚禮を整けるに、政子は賴朝に志深して、八牧が館を遁出、賴朝の許に隱れ居けるを、時政是を知りながら、穩便にして差置ける。八牧に對して不義といひ、平家の後聞を憚らざる振舞、甚だ無道なり。是偏に時政兼て賴朝の潛龍の氣有を見て、源氏の世を興すべき器量ぞと末を思て、娘が不義を幸として聟にして、平家追討の兵をすゝめ、力を合て專ら志を盡しけるは、賴朝の驥尾に付て、己が家を興すべき佞謀にして、曾て眞實の忠義にあらず。されば賴朝薨じて、賴家武將に備るといへ共、僅か五年にして、時政奸計を以て殺害し、二男實朝を副としける。時に時政が後妻牧方、腹に出生しける娘が聟、平賀右衛門佐を武將にせんと謀反を企て、既に實朝を殺んと計り、忽ち露顯して、せんかたなく俄に落髮して、牧方と共に豆州北條へ行て蟄居せり。凡賴朝薨じて時政天下の權を奪ひ、

恣に振舞ひ、慈愛深かるべき孫頼家を殺し、其已前御臺若君、幷外戚比企判官能員を殺し、其上牧方が讒を信じて、時政前妻の腹に出生したる娘の聟、畠山重忠父子を殺たる、獸心の所行を始として、大惡十四ヶ條、太平記の評に見えたり。其外侫奸邪曲の振舞計るべからず、誠に前代未聞の逆臣たり。始め頼朝を聟にして、頼朝といふ良犬に平家の狡兎を獵し盡させて、終に時政天下の權を奪ひ取べき奸謀を深く胸中に祕し、口に甜言を吐き、腹に劒を研きけるは、牡丹花下の睡猫の、意舞蝶に有りと聯ねし詩の風情、いと怖ろし。

卅一 泰時

泰時は北條遠江守時政が嫡孫にして、北條右京太夫江馬小四郎義時が長男なり。武藏守と號す。時政蟄居して義時執權たり。元來父時政に似て、兩面二舌の侫臣にして、不善の行ひ多き中にも、頼家の子鶴ヶ岡の別當公曉を謀て、實朝を殺させ、又公曉をば卽時に殺して、其上頼朝の弟阿野法橋全盛の子、阿野冠者時元をも誅戮せり。時元の母は時政が女なり。然れば義時には子に同じき甥を亡し、頼朝父子三代にして、源氏の根を斷ち葉を枯しけるは、禽獸の所行なり。實朝横死の後は、既に頼朝の後室政子、法名二位の禪尼如實、簾中に政事を聽り。是に因て世俗尼將軍と號す。義時益武威を振ひて、天下の事大小となく恣に計ひけり。是によつて後鳥羽院御在位の時より、北條が天下の權を取て恣の振舞、王位の衰ふるをも憚らず、よつて主上逆鱗まし〳〵、鎌倉をおとし給はんと思召立れ、北面の士の外に西面の士を置、勇士を召集給ひしに、其頃信州の住人仁科次郎盛遠父子、宿願ありて紀州の熊野へ詣でける折から、後鳥羽院も御參籠有て、盛遠父子を叡覽有て、西面の士に成れしを、義時傳へ聞、關東恩顧の者として、許されもなく院中に仕ふる事心得ずと、大に忿て仁科が所領を悉く沒收せり。盛遠迷惑して甚だ歎しかば、院より義時方へ院宣を以て、返し與

べき由仰下さるゝといへども、義時曾て承諾せず。是偏に己が理窟を立て、君を蔑にする違勅の罪人也。其上攝州長江(ながえ)倉橋(くらはし)等二ヶ庄を召仕はるゝ龜菊といふ白拍子に賜はりけるを、彼庄の地頭是を渡さず。院又義時方へ院宣を以て、相渡すべき由を兩度迄仰下されける所に、義時申けるは、諸國庄園地頭の事、上代はなかりしを、後白河法皇、頼朝平家追討の軍賞に、日本總追捕使に成れし時、諸軍勢其功によつて得たる懸命の地を、さして科(とが)なきに、今義時が計ひとして、開退(ひらけの)けとは得こそ申まじ迚、更に聞入ざりければ、院益逆鱗有て、終に北條退治の御企に及び、承久の亂と成れり。尤院妓女に所領を賜はるは、甚だ僻事にして、義時が申所理ありといへども、是唯己が爲に諸士を謀る奸曲にして、益君を蔑にしたる再三違勅の逆臣なり。普天の下何れ王土にあらずと云事なし。縱令頼朝軍功の賞に與へられし所領成り共、夫は私なり、勅命あらば先渡すべき事勿論なり。義時が暴惡は論ずるに足らずといへども、泰時世に賢人と稱せり、何ぞ父を諫て主命に隨はしめざるや。若故なく長江倉橋の地頭を去らしむるに忍ずんば、先達て和田畠山が所領、其外仁田梶原等の功臣を亡して、其領地闕所の地と號して、義時父子是を領す。然らば其領地の内を配分して龜菊に與へて、院の叡慮を宥(なだめ)奉り、父の逆意を鎭めなば、忠孝全き賢人たるべきに、爰に至て賢人の振舞を知らず。剰父義時が逆意に隨ひ、院の討手として上洛し、大軍を以て官軍を亡し、其上一院後鳥羽院を隱岐國へ流し、土御門院を土佐國へ移し、新院順德院を佐渡國へ配し、一院の御子雅成親王を但馬國へ流し、頼仁親王を備前國へ流し、其外公卿數多、或は誅し或は流し、當今順德院の御子懷成親王の御位を下し、高倉院の御孫守貞親王の御子、茂仁(もちひと)親王を即位せしめしなり。是義時が計ひなり。斯る惡逆無道の振舞は、上古末代其例を聞ず。其むかし平相國清盛惡逆といへ共、後白河法皇を鳥羽の離宮へ押籠奉るのみにて、遠島にはうつさず。元より後鳥羽院を始奉り、何れも桀紂が如きの惡逆にもあら

ず、何ぞ武臣として斯る悪逆の振舞せしぞや。然るに此節生捕多き中に、清水寺の住侶曉月法師、官軍に屬して宇治の手へむかひ、生捕れて既に誅せらるべき所に、

勅なれば身を捨べきは武士の八十宇治川の瀬にはたゝねど

斯詠じければ、泰時大きに感じ、死罪を宥て遠島に流しけり。然れば歌にて罪を遁るべくば、歌人は何程も詠ずべし。殊に彼は僧の身として戰場に趣しは、破戒の惡僧なり、何ぞ速に誅せざらんや。是偏に泰時世俗の耳を感ぜしめ、慈仁の名を賣る手段と見えたり。實に泰時和歌を感じて惻隱の心有ば、何ぞ後鳥羽院の御歌に感ぜざるや。院配所へ趣き給ふ折から、雲州大濱湊に著御し給ひ、供奉の勇士に御暇賜はり、歸路の折から、御歌を國母七條院、并女院修明門院へ贈らせ給ふ、

たらち女の消やらでまつ露の身を風よりさきにいかでとはまし

知るらめやうきめを三穂の浦千鳥なく／＼しぼる袖のけしきを

誠にいと哀なる御歌なり。いきとし生るもの、親子夫婦の間程わりなきものはあらじ。況や一天の君として、御母御后に別れ給ひ、萬里の波濤にさすらひ給ふ、御心の内思ひやられて、恐れながら御いたましく、感涙を止め難し。泰時御歌に感ぜざるは、誠に鬼畜木石也。又後鳥羽院配所より郭公の御歌に、

なけば聞くきけば都の戀しさに此里出よやまほとゝぎす

斯御製有しより、此所には郭公鳴ざるよし、又勝田の池の邊に御遊の折から、松風吹て蛙の聲かしましければ、

蛙なく勝田の池の夕たゝみ聞くまじものは松風の音

斯詠じさせ給ひけるより、此所蛙の聲も發せずと云り。情なき鳥蟲すら、天子の御歌に感じて聲を發せず。泰時御歌に感ぜざるは、鳥蟲にだにも劣れり。是をもつて曉月が歌に感じて、命を助しといふは、慈仁の意を賣る佞謀たる事明らかなり。實朝横死の後、義時が計にて、左大臣道家の三男頼經を鎌倉へ請じ、將軍と仰ぎけるが、頼經少か二歳なれば、政子名代として政事を聽と云へども、天下の大小の事共、皆義時が心の儘に計りけり。是よりして北條代々、儲王攝家の幼主を以て將軍とし、成長に及では、事を左右に寄て是を廢し、又幼弱成を代として、北條一人威を恣にせり。斯て義時積惡の餘殃終に身に報ひ、近臣深見三郎といふ者に刺殺されたりとかや。泰時は父に似ず、其性無欲にて專ら善政を行しかば、世人賢人と稱す。去ば義時横死して、家督を配分しけるに、舍弟朝時重時以下に、多く所領を與へて、泰時は僅に末子の分限程領せり。其後寛元元年天下飢饉の時、諸人借書を調へ判形を書き、富有の者に米を借るに、泰時法を出しけるは、來年世上豐年ならば、本物計を借し主に返納すべし、利分は我添て返すべしと定め、面々の借狀を取置て、所領有る人には約束の如く本物を返させ、我方より利分を添て遣し、貧者又病人には皆免して、我所領の米にて借し主へ返しけるとかや。是を以て世俗は泰時を賢人と稱しけるとかや。然共過讃なるべし。兄弟家督配分するに、惣領少し取り舍弟に多く與ふるは、民間にまゝあり、是を成すに何ぞ難からんや。又飢饉の時、富家の米穀を貧者に借させ、泰時利分を出し、或は本物共に我方より返し遣したる事も、凶年に飢民を救ふは、國主領主の常なり。若し泰時己が所爲の善事を、將軍家の仁德より出たりと披露して、諸人に君恩を忝うさせば、誠に賢人成べきが、將軍家を蔑にして、己が慈仁の名を顯して諸人の心を取り、其恩を感じさせて我に歸伏させ、益威を强うし家を榮ぇさすべき爲に、小利を捨て大利を得る方便にして、君の爲に成す善事にあらず。豈泰時賢人ならんや、佞人と云べし。又或時泰時

が弟朝時が舘に、悪黨押入て騷動しけるよし、泰時聞くとひとしく、評定の座より直に彼所に走向ひし所に、朝時は他行して、留守居の士悪黨を搦捕て、無事に鎭りければ、泰時路次より歸りたる時に、盛綱諫て曰く、重職を帶し給ふ身なり、たとひ敵國たりとも、まづ使を以て其左右を聞計り給ふべき事か、盛綱を遣され、防禦の方便致すべきに、信僞を問はず向ひ給ふは甚だ不可なり。以來如斯の事有におゐては、殆ど亂世の基なるべし。又世の誹を招べしと申ければ、泰時答て曰く、申處然るべし。但し人の世に有は親類を思ふが故なり。眼前に兄弟を殺害せられん事、豈人の誹を招にあらずや、其時には定て重職詮なからん。武道には爭か人品に寄らんや。唯今朝時敵に圍れん事を聞、他人は小事に處するが、兄の思所は建暦承久の大敵に違ふべからずと云ければ、是を聞者皆感涙を流し、盛綱が諫言泰時が陳謝、其理何れの方にかあらんやのよし、是を決せずと云へり。是又我僻見を以て論ぜば、盛綱が諫言理ならんか。泰時が執政の重き身として、兄弟の小事にあわたゞしく評定所を明て、卒爾に馳行しは輕忽なり。泰時斯る非常の事あらん時は、柳營を守護し、諸士の騷動を鎭て、下知を致べき身なり。何ぞや弟の小事に公の事を忘るゝは不忠なり。盛綱に諫られて、人の世に有は親類を思ふ故なりと云しは、私を重んじ君の事を思はざる不忠の志、既に詞に顯れたり。是を以て泰時が日頃の善行は、皆私の爲にして、聊も君に忠なき表裏の佞人と知るべし。然るに古今著聞集に云く、誰と聞侍しやらん名を忘れたれど、一人八幡に參りて通夜しけるに、夢中に御殿の御戸帳を押ひらかせ給ひて、誠にけだかき御聲にて、武内と召れしかば、畏て參り給ふ御體を見れば、高年の白髮の俗形にまします、御裝束は分明ならず、御前に畏て侍り給ひしに、御髮長く白くして、御丈長と同じかりけり。又御殿の內よりも前の御聲にて、世の中亂なんとす、暫く時政が子と成て、世を治べしと仰出されければ、唯と稱して御座ぞと思枕に、夢は覺にけり。此事を思ふに、義時

は彼の化身にや、其子泰時までも凡人に非ずといへり。是一笑するに堪たり。元來八幡大神は應仁天皇におはしませば、御子孫の皇祚をこそ守らせ給ふべけれ、何ぞ武内大臣をして、御子孫の天子を惱し奉る、逆臣義時に再生なさしめんや、論ずるに足らず。妄言を吐しは、北條に媚諂ふ奸愚の族の所行と見えたり。然るに著聞の作者是を記して、後世を迷す僞を傳ふるはいかにぞや。又泰時が歌に、

世の中に麻は跡なく成にけりこゝろのまゝに蓬のみして

是荀子勸學の篇、蓬麻中に生れば扶けずして直しと云る詞に因て詠じたる歌なり。泰時己が心を麻として、世人を蓬と見しはいとをかし。誠に巧言德を亂すの聖言なるべし。

卅二　時賴

時賴は泰時が二男、北條修理亮時氏の二男にして、相模守に任じて、賴嗣宗尊二代の將軍の執權たり。母松下禪尼は賢女の譽あり。時賴若かりし時、禪尼の許へ招るゝ事有しに、禪尼は煤けたりし明障子の、破れたる所計を自ら切張して、則時賴に儉約を示されし事、北條時賴記徒然草等に見えたり。去ば母の賢德を受繼、專ら儉約を元とし奢を禁じ、善道を行ひければ、世舉て賢人なりと稱せり。建長八年十一月廿三日、最明寺において落飾して、法名覺了坊道崇と號す。戒師は宋朝の道隆禪師なり。時に三十歲。此時剃髮の者多し。是時賴に無二の志を顯す成べし。時賴の子幼稚ゆゑ、北條武藏守長時名代として、執權の事を勤め、北條左馬頭政村連判す。然りといへども、皆時賴が旨を請ずと云事なし。斯て弘長三年十一月廿二日未の刻、時賴最明寺の北亭において卒す、時に三十七歲。此時にも哀傷止がたく、髮を切除しもの多し。是に依て國々の口々へも出家制止の觸あり。時賴執權十一年、落髮の後七年、都て十八年、政道正

しく天下無爲也。誠に世に類なき賢佐なり。然しながら徒然草にいへるは、時賴宵の間に大佛宣時を招けるに、武藏守參りぬ。時賴手自銚子杯を持出て、此酒を獨飮んも殘念なれば招きたり。肴こそなけれ、他人は靜に寢たらん、さりぬべき物や有、尋給へと有りければ、宣時紙燭を燈し尋ねけるに、臺所の棚に小土器に、味噌少し有しを見出し、是ぞ尋得たると申ければ、事足りなんと、心よく數獻に及び興じけるとかや。質素儉約を專ら行ふとはいへ共、天下の執權たる身には、過不及の振舞なるべし。此とき時賴致仕の身といへ共、政務に口入し、將軍家も最明寺の亭へ度々渡御有りし事、東鑑に見ゆれば、さばかりかすかなる住居とも見えず、元より夫々の役を勤る家人もあまた有べし。然らば時賴自ら銚子土器携ず共、近臣に命ずべき事にや。殊に宣時を呼に遣したる下部あり、何ぞ夫に命じて肴を求めさせざるや。宵の間にも有れば、下々の熟睡すべき時分にもあらず。平日は兎もあれ、今宵は主人の方へ客來あれば、各起て用事を承るべき事なり。皆々寢て構はざるは、主人を蔑にせし不屆ものなり。夫を時賴返て彼等を痛はり、呼起さゞるは、慈仁と云んか婦人の仁と云んか。當時武家は勿論町家にても、人を召仕ふ程の者は、夫々主從の禮は亂さず。時賴の家風の如き不作法なる振舞は有まじ。且又其節、時賴隱居といへ共、政事に拘る重き身なり。夜陰の折とて、客と差向に有んは、安に居て危を忘るゝとや云ん。宣時無二の心友たりとも、義時が近臣の爲に橫死しける事、近くに北條光明、三浦光村が如きの變儘あり、愼べき事ならずや。諸人に儉約を示す爲にもあれ、天下の執權北條時賴、斯る振舞はいかにぞや。其上諸國を廻り、隱れたる惡を尋ね、埋たる善を糺し、理世安民の政を行んと、廻國修行を思ひ立ち、二階堂信濃前司壹人連れて、三年の間諸國を廻ると云へり。去ども此事東鑑には見えず。然るに北條時賴記、太平記等に記して、婦人兒童の能知りて世の美談とす、勿論正說成べし。誠にさばかり政事に心を委しは、類希成賢臣なり。然しなが

ら大學に、君子は家を出ずして、教を國になすこ有れば、時頼賢德あらば、自然こ其德四海に及ぶべし。何ぞ執權の重職を負ひながら、遠山波濤を只二人步行しは危し、是も又過不及の振舞なるべし。

卅三 藤綱

藤綱は上總の國青砥の鄕主、大場十郎近鄕が末孫、青砥左衞門藤満が末子にして、妾腹の子なれば、父の寵愛も兄に劣りしかば、出家にせんこ、十一歲の時眞言宗の寺に遣し、弟子こ成しけるが、如何なる旨にや在けん、二十歲の年還俗して、青砥孫三郎藤綱こ號し、行印法印こ云けるを師こし學問しける。斯て藤綱二十八歲の時、北條相模守時頼、豆州三島神社へ參詣せし折から、彼藤綱、片瀨川にて牛の水中に尿しけるを見て、哀れおのれ、守殿の御法事の風情したる牛かなこ笑けるを、時頼の士是を聞て、いかにさは申さるゝやこ尋れば、青砥答ていはく、比日は數日雨降らず、田畑枯て百姓のかなしむ折からなれば、あの田畑の邊にて尿をせば、少し成り共潤ふべきに、水の餘りて流るゝ川中にて尿せしは無益なり。去れば先日守殿の御法事に、鎌倉中の智德備りたる名僧、身貧にして飢寒に苦しむ輩數多有しに、彼等には供養し給はず、無智無德にして、金銀米錢に飽滿たる、破戒の坊主共に供養有しは、眞實の佛事に非ず、川中にて尿せし牛に同じからずやこ申ければ、各感じて時頼に達しければ、申所道理なり、奥床しき男也こて、頓て召出して、評定所の引付の列こし、青砥左衞門こ申ける。或時藤綱夜中に出仕しけるに、火打袋に入たる錢十文を滑川へ取落し、大きに周章て、其邊の土民を雇ひ、五十文の錢を出し、松明十把求て是を燈して、終に十文の錢を尋得たり。後日に是を聞く人、十文の錢を尋んこて、又五十文の錢にて松明を買しは、小利大損なりこ笑ければ、藤綱聞て夫ぞ愚也、世の費を知らず民を惠むの心なき人々なり。墜所の錢十文は、只今尋ずば、滑川の底にて朽物こ成べし。某が松明を買し

五十文の錢は、永く民の家に留りて失ふ事なし。我が損は民の利なり、彼と我と何ぞ差別が有らんや。彼此六十文の錢を一をも失はず、豈是天下の利ならずやと云ければ、始笑し面々、舌を屈めて感じけるとかや。又或時時頼鶴ヶ岡八幡に通夜したる曉の夢に、衣冠正しき老翁枕に立て、政道を直くして世を久敷保んと思はゞ、心私なく理に闇らざる青砥左衛門を賞翫すべしと示さるゝと見て夢覺たり。時頼則近國の大庄園八ヶ所、自筆に補任を書て青砥に與ふ。藤綱見て大に驚き、今何事も無して、萬貫に及ぶ大庄園を給はりけるやと問ければ、夢想によつて宛行ふ由を答へしかば、青砥聞て、然らば一所をも得こそ給るべからず、且は御意の所歎入候。若し某が首を刎よと云夢を御覽候はゞ、咎なくも夢の如く行はれんや。今報國の忠薄ふして、生涯の賞を蒙ん事、是に過たる國賊や候まじとて、則補任を返しける。又或時德宗領に沙汰出來て、地下の公文と相模守と訴陳に番ふ事あり、理非辨論して、公文が申處道理なりければ、奉行頭人等、德宗領に憚りて、公文を負しけるを、青砥一人權門にも恐れず、理の當る所を委細に申立、終に相模守を負しけり。公文不慮に利を得て安堵しければ、其恩を報ぜんとや思ひけん、錢三百貫文を俵に納て、後の山より潛に青砥が邸の内へぞ入にけり。青砥是を見て大にいかり、沙汰の理非を申付るは、相模守殿を思ひ奉る故なり、全く地下の公文を引にあらず。若引出物を取るべくば、上の惡名を申留ければ、相模守殿よりこそ悅びはし給ふべきなり、沙汰に勝たる公文が、引出物をすべき樣なしとて、一錢も用ひず、悉く持返させて遣しける。自餘の奉行頭人も此事を聞、おのれを恥ける故に、聊も理に背たる事なし。既に時頼記太平記等に見えたり。誠に古今稀成廉士なり。去ども東鑑には、青砥左衛門が事曾て見えず、左ばかり善政を行し名臣、實錄に洩けるこそ怨なれ。然しながら青砥が、十文永く滑川に朽ん事を歎きしは、程子の賢慮に同じき振舞といへども、日本六十餘州にて、日々に六道錢と成て土中に朽ち、或は國々の

靈窟に參詣のもの、賽錢に投捨る錢幾ばく成らん。青砥是を制禁せざるは、彼大佛を鑄崩して錢こして世を賑したる、松平伊豆守信綱の大智より見ては、滑川の十文は瑣細の沙汰にして、只世俗の耳目を感ぜしめ、一己の譽を得るのみにて、天下の爲には大功ならず。然ば青砥、信綱の賢才には及ぶべからず。去れ共大庄八ヶ所給はりても請ず、三百貫の賄賂を返したる潔白の振舞は、上古末代比類なき善士成るべし。か樣の善行東鑑に記さゞるは、靑砥が不祥こ云べし。哉惜、

卅四　藤房

藤房は萬里小路大納言宣房の長男にして、後醍醐天皇の寵臣也。性忠純にして志節あり。且博學強記にして、正四位中納言に進む。元弘に主上東夷の難を避て、山州笠置の城に籠らせ給ふ。藤房及び舍弟季房等隨ひ奉りしが、終に逆臣の爲に落城して、主上は隱州へ流され給ひ、藤房は常州へ配せらる。正慶に朝敵高時亡びて、建武に主上復位し給ひ、藤房も歸洛せり。四海の逆浪忽ち鎭りて、公家一統の世に返りて、京師靜謐に成しかば、いつしか主上華奢逸遊に耽り給ひ、先づ大内裏造營有べしこて、諸國の地頭へ二十分一の功課を懸られ、或は鳳闕の西二條高倉に、馬場殿こて離宮を建られ、常に御幸ありて、歌舞蹴鞠の間には、弓馬の達者を召れて、競馬笠懸を叡覽有て興じ給ひ、政事多くは准后の口入にて、賞罰正しからず。斯て元亨以來戰功有輩に忠賞を行はるべしこて、洞院左衛門督實世を上卿に定られけるに、忠有は功を賴みて諂ず、又忠なきは、媚を以て上聞を掠めければ、事正統にあらずこて、頓て召返されて、上卿を改て藤房にぞ命ぜられければ、忠否を糺し淺深を分て、廉直に沙汰せんこしけれ共、准后に便りて、内奏祕計によつて、只今迄朝敵たりし者共、安堵を給はりて、忠なきも數ヶ所の所領を給はりければ、藤房諫かね、病こ稱して奉行

を辭けり。其頃雲州の住人鹽谷判官高貞が方より、希代の駿馬を進奏す。主上則叡覽有て、我朝には天馬の出たる例を聞ず、朕が代に當りて、求ざるに此良馬出來たる、吉凶いかにと御尋有しに、洞院相國公賢申けるは、是吉事にあらず、房星の精馬と化して、天の心を蕩すと申せば、吉事に非ずと奏聞す。此時主上逆鱗の御氣色付て、御遊も止りける。其後猶直言數度に及ぶといへ共、曾て聞届給はず。藤房諫むべからざる事を知て身退き、洛外北山の石倉に趣き薙髮せり。此處も猶都近しとて、一首を殘して行方しれず、

住捨る山も浮世の人訪はゞあらしや庭の松もこたへん

其後藤房の在所を知る人なかりし所に、暦應の頃、新田義貞の臣畑六郎左衛門時能、越前國鷹巢山にて、藤房に似たる桑門を見て歸り來り、斯と語りければ、一條少將行尹、時能を伴ひ、彼所へ行て見るに、いつしか跡を隱して、石上に和歌を殘せり、

こゝもまた浮世の人の訪くれば空行雲に宿もとめてん

少將是を見て、疑ひもなく藤房の手跡なりと、落涙しけるとかや。其後藤房は和州芳野を通り、便りを求て洞院實世に書を寄する中に、

君が住む宿のあたりを來て見ればむかしに濡す黑染の袖

實世是を見て、是藤房の筆なり迚、叡聞に達しければ、勅して近國を尋求るといへ共、知れずとかや。世に貧賤にして老衰し、餘命なく、或は病身にして、出世の賴みなき身だに、捨難き浮世なるに、況官祿等倫に過ぎ、才德人に超え、齡もいまだ不レ逮レ盈人の、父母妻子を捨たる事惜べし。是を以て古今桑門の有樣を見るに、或は恩遇の君に別れて、一

君に仕へじと世を遁るゝは、良岑の宗貞、顯基の中納言、吉田兼好が類なり。或は色欲に迷ひ、一念發起して遁るゝは、遠藤武者盛遠、齋藤瀧口、北條時賴が類是なり。或は最愛の女に別れて世を遁るゝは、花山法皇、大江定基が類是なり。或は男に別れて世を遁るゝは、大磯の虎子代、熊野勾當内侍、或は男に捨られ世を遁れしは、室の遊女宮城、祇王祇女、横笛が類なり。或は父母に別れて世を遁るゝは、平三郎貞近、白拍子微妙の類是なり。或は名利を厭ひ世を遁るゝは、開城皇子、藤房、高光、肥後、(宗本ノマヽ)長門新文、佐藤憲清が類是なり。或は世に捨られて世を遁るゝは、惟喬親王、建禮門院、平判官康賴が類是なり。或は恥を見て世を遁るゝは、信濃前司行長、若狹少將勝俊が類是なり。殊勝なる振舞と云んか。然しながら無住禪師の歌に、

遁世の遁も時代に書替んむかしは遁る今は貪る

實に宜哉。遁世者の遍照が元慶寺の座主と成り、僧正に補せられ、輦を許され、又文覺が神護寺の住職となり、上人と唱へられし類は、實にや世を貪る盜人僧なるべし。花山法皇の四の君に通ひ給ひ、兼好が成忠が女と密契せしは、淫を貪る成べし。其外にも遁世の名のみにて、和歌に迷ひ藝に迷ひ遊び、世上に浮游して專ら名に走り奢る輩、枚擧すべからず。藤房の如く遁れ、再び世を顧ず、山林に隱れて生涯を終りたるは希なり。扶桑隱逸傳に、藤房進ては則君に忠あり、退ては佛に忠有と云へるも宜哉と、頻りに感歎しければ、見石翁から〱と笑、先生また藤房を贔負し給ふや。藤房忠臣なりといへ共、君を諫て善道に歸らしめずして、終に身退きしは、本分に叶へるのみにして、眞忠の振舞に非ず。往昔中府宰相綱重卿の近臣、根津宇右衞門、君を諫て手討に成といへども、猶も忠臣の英魂死しても滅せず、其夜より平日の如く小袖上下を著し、御前近く顯れ、諫言數日に及ければ、さしも猛勇の綱重卿も、其忠烈を感じ給ひ、善

道に歸し給ひ、根津が靈魂を神と崇め給ふ。則根津權現是なり。且宇右衛門諫言して、君を善道に歸せしめしは、誠に古今無雙の忠臣なり。藤房何ぞ死を以て深く諫め、君を善道に歸せしめざるや。傾を見ながら、扶けはせで身を遁れしは、一己を安ずるのみにて眞忠にあらず。隱逸傳に、藤房進ては則君に忠有と云へるは許すべし、退ては佛に忠有と云へるは、藤房においては本意にあらず。元より神國に生れて、神の御末の朝廷に仕へて、黄門侍郎の位に居る身を釋門に入り、先祖數代の血脈を絶し、釋迦の氏族となりしは、不孝の甚しきに非ずや、あゝ惜哉。藤房さばかり賢才有て、忠孝を無にして、何の益か有らんや。され共能く名利を避て隱れしは、今の世の盜人坊主とは甚しき分ち有り。今の僧は女を犯すを第一とし、世を貪るは俗よりつよし。彼等から見れば、一向善く遁る成るべし。

卅五　義貞

義貞は淸和天皇の正統にして、新田六郎太夫朝氏の子、氏光の嫡男なり。幼年小太郎と號す。元弘の亂に官軍に屬して、大塔の宮の令旨を給り、朝敵追討の旗を上て、大に武威を振ひ、北條高時を始め、一族郎等悉く鏖にしける其有樣、雪に湯するが如く、火に水を投るが如く、兼て楠正成と示し合せ、日本六十餘州の兵を集て、武藏相模の兩州に對すと云共、勝事を得難しと云し鎌倉の强敵を、僅か二十日の間に攻亡し、忽ち天下泰平に歸せしめ、後醍醐天皇伯耆國船上より還幸あり、再び帝位に卽給ふ。是を以て鑑るに、むかし伊豫守賴義の嫡子八幡太郎義家、奥州の貞任宗任を征伐有しも、九年を經て亡し、武衡家衡を討ちしも、三年を經て平らげ、蒲冠者範賴判官義經平家追討も、二年を經て功を遂げたり。元より東夷は、少か奥州羽州兩所に威を振ふ逆賊なり、平家は西海の浪に漂ふ落人なり。去れ共容易に亡ずして數年を經たり。况高時は、時政が代より數年天下の權を執て、武威を振ひ四海を呑て、一族郎等皆關八州に蟲く。然

も各弓馬劍術に達したる勇士なり。義貞は僅に上州世良田の領主にて、一族郞等皆々小身にして、其勢僅か百五十騎に過ず。是を以て鎌倉の大敵を挫かんと思ひ立しは、古今無雙の勇將なり。尤早速越後國の一族、二千餘人にて馳來り、續て甲斐信濃の源氏、其外近國の武士馳加りて多勢と成り、是に依て義貞は龍の水を得たる如く、大に武威を振て、不日に鎌倉を焦土となしぬ。是を以て見れば、賴義父子の東夷を平らげ、義經兄弟の平家を亡したる功は、物の數ならず。然れば義貞は先祖に勝れし名將、忠臣英雄と云つべし。然るに後醍醐天皇、諸將に忠賞を行はれけるに、足利尊氏六波羅を亡せしを第一の功として、武藏下總常陸三ケ國を給はり、同舍弟直義に遠州を給はる。是兼て尊氏、帝御寵愛の准后に賄賂を贈り、內奏して恩賞を貪しとかや。次に義貞は鎌倉を亡したるを、第二の功として、上野播磨兩州を給はり、舍弟義助には駿河國を給はる。勿論軍功の賞其功に當らざれば、義貞の老臣共甚だ憤り罵りけるは、尊氏が僅に籠鳥の如くなる、六波羅の探題を討しと、當家の小勢を以て、鎌倉の强敵を亡したると、同樣に忠賞有らんさへ口惜かるべきに、尊氏を以て第一の功とし給ふは何事ぞやと、口々に申けるを、義貞聞て、元來我に不義なし、他家の不義は云に及ず、後代に取沙汰有べしと、更に愁の氣色なし。帝此由を聞召れ、義貞に一理有りとて、子息義顯を召して、越後國を給はり、則越後守に任じ給ふとかや。然れば義貞功にほこらず功を施し、事を積て其賞を求ずと、本文の心に叶ひたる、至忠の武臣なり。されば官軍に屬せしより已來、始終忠義の志動かず、尊氏朝敵と成て、逆威を振ふに及で、義貞節刀を給はり、官軍の總大將として、數萬の軍兵を引率して、專ら忠戰を勵むと云へ共、後醍醐天皇不德に因て、天下の武士朝家を怨で、尊氏が逆意に與して、凶徒益强大にして、官軍は日々に減じ、剩へ帝は尊氏の詭謀に欺れしかば、義貞數戰の功忽ちむなしく成て、遂に帝都を發して北越に落行しが、猶も忠義金鐵の如く、朝敵退治の謀に心を委

ね、尊氏が黨類と數々戰て、武勇を振ふといへ共、天運時至らずして、延元二年七月、越前國黑丸の戰に、流矢の爲に落命せらる、時に生年三十七歳なり。嗚呼命なる哉。さしも賴し宮方の柱石碎て、官軍闇夜に燈の消えたる心地して、涕泣せざるものなし。惜哉義貞、蓋世の智謀有といへ共、其行一失の瑕玼、末代の誹を遁れず。去ば建武の始に、義貞大内守護の折から、勾當の内侍を垣間見しより、戀慕深くして已事を得ず、媒を求て一首の歌を贈る、

　我袖の涙にやどる影だにもしらで雲井に月や住らん

内侍此歌を見て、いと哀なる氣色に見ながら、叡聞を憚て手にだにふれざりけるに、如何して聞し召れけん、御遊の折からに、義貞を召れて天盃を給はり、勾當の内侍を此盃に付て、勅諚有しかば、義貞日頃の志を遂て、限りなく悅びしが、頓て迎取て寵愛淺からず。是よりして軍慮に怠り、尊氏に勝べき軍の圖を外せし事數度に及しも、内侍に暫しの別れを惜みける故とかや。是偏に帝叡慮淺うして、大將に美女を給はり、傾城傾國の禍を招せ給ふ社うたてけれ。然しながら義貞、好色なれども其惡き事を知らば、何ど色欲に身を果さんや。然らば義貞を亡せしは、尊氏に非ずして勾當の内侍なるべし。古語に、美女は命を斷つ斧なりといひけんも宜なる哉。恐るべし愼むべし。

卅六　尊　氏

尊氏は淸和源氏の嫡流、足利讃岐守貞氏の次男にして、尊氏の功は淸盛賴朝より輕くして、罪は又相均しと云り。其罪悉く士武太平記に記せし事顯然たり、因て是を略す。大塔宮を弑し奉る一事を以て、其惡を知るべし。元來尊氏は、性柔弱にして智勇なし。舍弟直義が邪智姦計を以て、淮后を迷はし、帝を欺く功を以て重賞を貪り、朝廷の衰運に乘じて已が逆意を企、自然に膝下へ轉び掛りたる天下を取て、然も家名十三代相續て、忠臣義貞正成は、却て逆臣尊氏が爲に亡び

たるは、兩將の至忠天の照覽に洩たるが如し、神明何んぞ冥助あらずや。若神明の明鑑に洩なば、佛何ぞ利益あらざるや。若佛の兩眼に洩なば、何ぞ閻羅王尊氏を擱んで、無間地獄へ投入ざるやと勾る時、兎毛先生莞爾として云く、顏回不幸短命にして、盜跖富て長壽也。倩々世間を觀るに、世に善人と云へる人の、生涯貧にして窮し、飢寒に苦しみ、或は不圖災來り、不慮の辱を見、或は子を先立、或は親族に別れ、然も短命にして、剰へ難病を受け、死期病にくるしみ、又は葬送の日、風雨雷電して、世俗に業人と誹らるゝ者有り。義貞正成は此類成らんか。又世に惡人と呼れて、一生富貴にして歡榮に誇り、惡をなせ共災に逢ず、又酒色に耽れども、無病にして年を終り、然も臨終正しく、葬送の時に後生人と褒らるゝあり、尊氏此類か。されば尊氏は暴惡を以て、一旦天に勝といへ共、積惡の餘殃子孫に及て、武將の名のみにして武威を臣下に奪れ、或は弑せられ、又は追れて邊土にさまよひ、天下一日も穩かならず、終に天誅此に至て亡びたり。義貞正成不幸にして本意を遂ずといへども、積善の餘慶子孫に及んで、今正成の血脈列國の諸侯たり。元より義貞の英名連綿として四海を照し、萬代不易の御代と共に、盡る期あるべからず。是豈天私あらんや。尊氏が功を遂げしは、柔よく剛を制するの謂ならん。

卅七　正成

楠正成は卅一代敏達天皇五代の後胤、井手の左大臣諸兄公廿四代の孫、橘正遠が次男也。宅邊に楠樹あり、仍て姓とす。志貴の毘沙門の申子たるによりて、楠多門兵衞と名乘る、後に河内守に任ず。性寬仁にして武德誠忠、凡日本開闢より古今獨歩の元帥たり。其戰功擧て計べからず、末世の諸葛孔明と被稱、湊川の石碑に英名を照し、千歲不朽、誰か是を誹らんやと、不覺感涙を催しければ、油煙公微笑して、先生も諺の楠公贔負なるや。尤正成は古今絶倫の良將なりといへ

ども、聖賢の誹を以て誹る、學の趣意たり、何ぞ彼を淺さんやと云て申けるは、正成始めて後醍醐帝笠置の皇居へ召れし時奏しけるは、天下の草創の功は、武畧と智謀との二ッにて候。若勢を以て戰はゞ、日本六十餘州の兵を以て、武藏相模の兩國と戰共、勝事を難得と云しか共、義貞小勢を以て、僅廿日の間に鎌倉を攻亡し、然も奇計妙策を用ひたる沙汰も不聞、然らば正成言を失たるにあらずや。又奏しけるは、合戰の間にて候へば、一旦の勝負は調ひ難しと御覽ぜられ候べし。正成一人未だ存命と聞し召れば、聖運を可被開と思召れ候へと云しは、高慢自賛の詞にして、然も後醍醐帝聖運を開きしは、楠が功にはあらず、義貞鎌倉を亡し、忽ち天下泰平に歸しける故、帝船上より還幸ありて、再び御位に卽せ給ふ。然れば是又正成が言を失ひたるにあらずや。又楠が釣塀藁人形等の謀、古今の美談なりと雖も、良將の好んでなすべきにあらず。小敵をも侮らずと云り、況や大敵をや。是敵を愚にする謀にして、必勝の良策にあらず。殊に藁人形の謀は、唐土にて敵を欺きし謀にして、新に正成が肺肝より出しにあらず、然らば奇とするに足らず。又建武に、尊氏筑紫より大軍を引率して帝都へ攻上る。天皇正成を召て、急ぎ兵庫へ馳向ひ、義貞と力を合せて防戰すべしと勅定有しに、正成奏しけるは、小勢を以て機に乘て懸る大軍と戰はゞ、必定味方討負べしと奏しける所に、坊門宰相清忠に被拒、忠言を用られざるを憤りて討死せしは、私の怒に公を忘れたるにあらずや。元來清忠は軍慮に闇く、管見を以て、したり顏に僻事を宥るを知りながら、正成再應の諫奏せざるはいかにぞや。清忠如きに言掠められて、口を閉しは勇なし。剰へ渠にさへぎられて、忿に堪へず討死せしは智なし。少しきに忍びざる時は、大謀を亂ると云り。大將は恥を忍び難きを避け、命を全ふして、終の勝利を本意とする計事を辨へざる正成にはあらず。□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□、既に藤房諫奏をして退きた

り。元來藤房正成義貞三人は宮方の三傑にして、鼎足の如し。朝家の存亡は此三人の身にかゝりて、至て重き身なり。藤房世を遁れて、鼎足一つ欠けたりといへども、新田楠の兩足全うして、君安泰成りしに、正成討死して、官軍は流に棹を失ひたる心地して、終に帝吉野に潛幸有り。義貞は北越の鬼と成り、尊氏は巷に落たる物を拾ひし如く天下を掌握せり。楠存命せば、豈尊氏に天下を奪はれんや、いと口惜しき。凡討死は敗軍の味方を助ん爲に、或は君の命に替らんが爲に、一人踏止て討死するは古今勇士の本意とせり。されば佐藤繼信同忠信が義經の爲に忠死し、上山六郎左衞門、師直が爲に討死せし類は、一死を以て大功を立たる忠臣義士なり。正成が討死は、清忠を恨み君を見限り、死すべき時と覺悟して、常に替りて血氣の勇を振ひ、敵味方の目を驚かし、花々敷討死を遂たるのみにて、せめて尊氏兄弟の内、壹人なり共打取らざれば、君の爲の忠死には非ず、却て味方の弱りと成りたる、不忠の討死と云んか。正成管置にては、合戰の習にて候へば、一旦の勝敗は必ずしも御覽ぜらるべからず、正成壹人存命と聞し召れなば、聖運を開かせらるべしと思召れ候へと云ひしに違ひ、君を捨て一死を輕んじけるは、言を食みたるに非ずや。又太平記の評には、正成兼て尊氏が朝敵と成べき事を、未然にさとりたりといへり。然らば正成尊氏と會しける時、謀略を廻らして討果し、兩葉にして朝敵の根を斷べき事成に、空しく默止たるは、死を顧て忠義を忘れたるか。果して大木と成に及んで、斧柯を用るに勞して無功、終に討死せしは誰が爲ぞや、子孫の爲といひ、不忠不義勿論なり。彼稲葉氏が堀田正俊を刺殺せしは、身の爲子孫の爲にあらず、忠義一途にして、戰死よりは猶難き忠死なり、是至忠勇猛の振舞なり。依レ之是を見れば、正成忠臣の名有といへども、稲葉氏に不レ及。嗚呼忠臣成哉葉稲氏、嗚呼惜哉正成、功なく討死して、多年の忠孝一時に失ひけることを遺恨なれと歎息すれば、楮皮子忽然として曰く、油煙公の正成をそしるは、莫耶を鈍とし鈍刀を利とす

るが如し。正成衆に先じ官軍に屬し、僅の城郭に楯籠り、小勢を以て東國の大軍を欺きたる勢ひに誘はれて、官軍に屬するもの廣大なり。尤も義貞は朝敵の根を斷といへども、みなもとは正成にして、既に漢の高祖の三傑、張良蕭何韓信をひとつにせし元帥たる事、云ふに不レ及。元より君を見限りて、清忠を怨て討死せしといふは、甚だ僻事なり。士は死すべき時に死せざれば、死に勝る恥有と云り。正成討死して、武名彌高し。□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□正成討死せずんば、義貞の如く君に被レ捨て、百戰の功忽ち空敷すべし。正成可レ死時を知りて討死を遂しは、智有り勇有り。元來最期に臨んで、嫡子正行へ遺言に、至忠金鐵の志は日を貫く事、太平記を讀て感涙に咽ばずと云事なし。徳を子孫に殘して三代の節義を守る、然らば正成死すと云へ共死せず、湊川の石碑に、武徳誠忠赫々として萬世に朽ず、是を以て離倫絶類の英雄たる事を知るべし。巧言は徳の賊なり、邪僻の見を以て猥にそしるべからず。

卅八　僊人

昔唐土に仙人と云者有て、限なき齢を保ち、奇妙なる術をなしたるを、書に著し繪に畫て翫ぶを見るに、或は鶴に乘て空を翔り、劍に乘て海を渡り、鯉に乘て瀧に登り、或は形(かたち)を吹出し、又は瓢簞より駒を出し、石を打て羊を出し、羅を切て蝶とし、水を酒とする、其術尤奇成といへども、戲術に似たり。人これを學んでなす時は、御咎有て身を亡す。彼は狐狸の妖怪にして、毛蟲の仙とや云んか。されば世に狐を使令して、幻術を行ふもの有とかや。俗に是を飯綱遣(いづなつかひ)と云ふ。座敷を忽ち海となし、源平西海の軍船の形勢を顯し、矢叫び鬨の聲を發す。壺公が壺中の天地も奇なりとするに足らず。或は跣(はだし)にして猛火を蹈み刄を渡るは、上利劒のつるぎに乘て海を渡るも難しとせず。或は紙に乘て虛空を翔り、天

の川の魚を取て歸るは、黃鶴仙人が鶴に乘りて空を翔るも微笑すべし。又は形を變じて鼠となり、鐵拐おのれが形を吹出すも物の數にならず。況や張果老が瓢箪より駒を出すは、見せ物にするならば、馬の籠ぬけより劣るべし。費文程が鶴を舞すも、鼠の三番叟より劣り、琴高が鯉に乘り、吳猛が車に乘りて海を渡るも、女に乘りて子をこしらへるよりは次なり。張□が羅を切て蝶となし、初午が石を打て羊となすも、豆藏が品玉に同じ。仙術何ぞ怪むに足らんや。長生又益なし。彭祖が八百年生る間に、四拾九人の妻五十四人の子を失ひ、愁におひしは、長命ゆゑ恥多しと、莊子が云しも宜ならずや。顏回不幸短命なりといへども、德行彭祖が下に出でず。然れば身死して英名朽ちざるを仙と言べきか。釋名に老て死せざるを仙と言といへども、豈老て死せざる者あらんや。元來生あれば死あり、孔子も死生命ありと宣へり。命は天數にして、強て長壽を求むべからず。去れば長生の仙藥を服して、却て紅鉛金石の毒を發し、非業に死する者無にあらず。凡仙法を學ぶもの穀を食はず、木の實草の根を食し、或は霞を喰ひ氣を吞で、生を保つと云は異むに足らず。世に五穀を食はず、菓を食し水斗を吞で命を保つもの、往々有りと云へり。蛇蛙三冬は土中に蟄居して、氣を食して死せず、況や仙人韜息胎食の術、導引の修養、外丹内丹の良藥を服せば、長生もすべし。五雜組に、千年の人參の根は人の形となり、千歲の枸杞の根は狗の形をなす。中夜の時に出て遊戲す、煮て是を食へば必ず地仙と成る、然共二物固に逢ひ難しと傳ふ。女道士師弟二人、深山の中に居る、其徒出て井畔に汲む、道に一の嬰兒を見る、其師に語る、師抱て至らしむ、一ッの木の根と成る、師大に喜んで火を設け是を烹る、いまだ熟せず、たま〳〵糧盡て山より下りて米を化す。師門より出ると、水大に漲て還る事を得ず、徒饑る事甚し。烹る所の氣を聞けば香美なり、徒遂に是を食ふ、三日にして喰ひ盡しぬ。時に水落て師還る、其徒已に飛昇す。又維楊と云所に壹人の老叟有、常に衆の酒食を擾る、一日衆を

邀へ具を治む、丐者二人手に盤を捧て至る、一ッは蒸せる小兒、一ッは蒸せる犬なり。衆嘔噦して食せず。道士懇に請へども從がはず。則歎息して自ら是を食ひ、既に盡して、其餘りを諸丐者に分ち與へて食はしむ。衆に謂て曰く、是千歳の人參枸杞なり、求る事甚難し。是を食ふ者は白日に天に昇る。我諸公の延遇を感ず。依て相報ず。然るに食せず、信なる哉仙方の難き事と、云ひおはりつるに、群丐化して金童玉女となり、道士を擁(かこ)んで上天す。夫此二事、或は是にあへ共知る事あたはず、又は是を知れ共食ふ事能ず。弟子及び丐者、心なきを以て是を得たり。豈命に非ずして何ぞやと云へり。尤も人參枸杞は良藥にして、千年を經ぬれば、是を食して生を養ひ、壽命を延べき事疑ふべからず。此二物を食して弟子登仙し、丐者金童玉女になりて、天に昇ると云る類は怪談なり。葛洪(かつこう)が抱朴子に曰く、仙の要は忠孝和順に、信を以本とすべし、君徳を修せずして仙法術を務るは、長生する事を得ずと云へり。然らば無徳の丐者、千年の人參枸杞を食したりとも、豈神仙とならんや。博物志に曰く、丹水石穴は蝙蝠の大なるもの例多し。百歳なるものゝ集る時は倒れ懸る、腦重きが故なり。是を取て乾干にして、末(まつ)にして是を服すれば、神仙ならしむと云へり。是又大なる僞にて信ずるに足らず。書言故事に、塵世の外におこり出るを神仙なりと、昔人云ることあり。世に豈仙人あらんや、悉く妖妄耳(えうまうのみ)と云り。然ば山林に遁れて名利を避け、喜怒哀樂の情なく、思按に勞せず、疎食を喰ひ、色情を絕ち、思ふ事なく、晝は草木を友とし、夜は燈下に見ぬ世の人を友とし、光陰の移るをも知らず。如斯の境涯とならば、自ら長壽なるべし。去ども莊子が、上壽百歳中壽八十歳下壽六十歳、病疲死喪憂患を除き、其中口を開きて笑ふは、一月の中三四度に過ざるのみと云へる如し。山居の樂しみも苦しみも、色替らぬ松風の音無にしも非らず。商山の四皓も終に塵世に歸り、松葉茯苓を服し、霞を飲み氣を呑み、飛騰の術を得るといへども、彼一ッの迷ひ止難く、久米の仙人も女の

脛の白きを見て忽ち墮落し、四海の龍神を禁淫する術有し一角仙人も、栴陀羅女に欺れて通力を失ひ、後漢の費長房も、壺公に仙道を授り、一ッの符を得て、是を以て人に祟りをなす百鬼を制服せしが、其後鬼の爲に其符を盜まれ、却て百鬼に被ν殺しと云り。是仙は德を修せざるのみならず、方便も又未練の仙術ならん、いとをかし。殊に一笑すべきは、晋の王質と云ふ樵夫山中に入、仙人の碁を圍むを見て居たるに、いまだ一局の碁終らざるに、王質が持し斧の柄朽しかば、驚て家に歸れば、已に七世を過しと云へり。盧生が黄粱一睡の夢よりもはかなき有樣憐むべし。されば古詩に、

人說仙家日月遲　仙家日月轉堪ν悲　誰將百歲人間事　唯換山中一局碁

誠に王質仙境に入て、千年を經て神仙の遊樂をなさば、長生の甲斐あるべきに、只一局の碁を見る內に七世を經たりしは、長生にはあらず、壽命を縮るにひとし。浦島が蓬萊に入て、七日經るといふ間に七世を送り、剰へ仙女に貰ひし玉手匣を開きて、忽ち老衰して、百年の齡を只七日に促しは、王質同日の趣にて、いと哀れなる有樣なり。七世とはいへども、大略三十年を一世と云へば、王質浦島が世は凡二百十年成るべし。武內大臣の三百貳十餘歲は、然も身體健にして、六朝に仕へたるは、生きながらの神仙と云べし。仙法の靈藥を服したる沙汰をも聞かず。趙の廉頗は、年八十歲に及て、米一斗程肉十斤を喰ひければ、天下の諸侯是を恐れて、敢て趙の界を犯さずと云へり。然れ共仙藥を服したる沙汰もなし。元來命の修短身體の强弱は天性に有り。假令仙道を學て長壽を保つ共、武內廉頗が如く天下に功なくば、王質浦島が如く、馬鹿に名を擧げて益なし。三浦大助八十九歲にて、賴朝の爲に討死し、齋藤別當實盛は七十三歲にて、鬢髭を墨に染て戰死しけるは、長命の甲斐有り。彼の小角、葛城山にて松の葉を食し、密呪を持して幻術を顯すといへ共、正直中道の神國に相應せず、終に日本を去り異國へ渡り、喜撰法師は宇治山に入しが、終に雲に乘りて飛去るの類は、佛

者の僞也。能因法師が歌にて雨ふり、菅公の御歌に梅の飛たるは、誠に天地を動したる樣な大僞なり。總て奇妙は皆邪法也、是を知るべし。只奇妙々々と云て俗を誑すのみなり。つら〳〵思ふに、和漢專ら仙術流行せしと見えたり、今は捨られて、世一統錢術を學ぶなり。去ば仙家の子母錢も、日濟貸(ひなしがし)の錢術に落ち、壺公が壺中の樓觀も、飴賣のからくりと成り、西王母が桃も、棒手振の籠にあり。松江の鱸も南樓の鯉も、肴賣の生擔荷に有り。是錢術を以てすれば忽ち爰に來る。其外唐物の品日本に有らざれども、錢術を以てすれば至らずといふ事なし。浦島が契し蓬莱の仙女も、女肆(をんなみせ)にあり、魚鶴仙が鶴より四手駕が早く、張伯鶴が浮木より早き猪牙舟あり、是皆錢術也。白晝に人の腰に附し巾著を切るは橋の錢術なり。賽を投て乞目を出すは博奕打の錢術也。其外四民色々の錢術有り、算ふるにいとまなし。彼王質が類は、途中にて狐に魅(はか)されたる心地ならんとは可レ笑。

卅九　宗論人

自讃他毀は佛の十重禁戒の制法と聞しに、いかなれば淨土宗日蓮宗、互に念佛題目の勝劣を論じ、倶に誹謗の罪を犯すや。元來佛法の源は釋迦の一統にして、同じ流の法水を汲ながら、豈水波の論あらんや。古歌に、

わけ登る麓の道は多けれど同じ雲井の月をこそ見れ

雨あられ雪や氷とへだつれど落つれば同じ谷川の水

愚老元來佛法の甚深微妙はしらざれ共、此歌の心を推量するに、わけのぼる麓の道は多けれどと云ふは、八宗十宗と分れたれ共、其至れる所は彌陀唯心の淨土たるべし。最此唯心の淨土に赴く道、甚だ難所にして容易に越る事難し。則佛の四十二章經に說給ふ、殺生偸盜邪淫妄語綺語惡口兩舌貪欲嗔恚愚痴十惡の難所也。此嶮難切所を克く愼み凌ぐことを善

なく越えざれば、唯心の淨土に至る事決して叶ず。衆生は此嶮難に行悩み、跌きて此惡穴に陷るもの少からず。唐の白樂天行路の詩に、行路難非レ水非レ山、只在二人情反覆間一と云ひしも、此難所なるべし。依レ之諸宗元祖たるもの、惡道に陷る凡夫を導き、唯心の淨土に至らしめんと思ひしより、道を拔き取々に教化する中に、法然と日蓮といふ馬鹿坊主、末世の衆生の俗性を能呑込み、器に隨て法を說き、近道からだまし込み、彌陀の名を唱へたり、又は法華經の題目を唱ふれば、罪業悉く消滅し、現世にては祈禱となり、病厄を除き壽福無量にして、來世は極樂淨土に生れて、紫摩黃金の佛となり、九品蓮臺に安座し、百味の飮食に飽き、晝夜歌舞の菩薩音樂にて、伽陵頻迦の舞遊を見物して、思ふ事なく泣く事なく、常に名におふ極樂世界に往生する事、念佛題目の功力に寄るなどと、跡方もなき僞りにて、姥嚊の耳に入り易く、然も六字七字にして、覺えよく唱へやすく、馬士船頭競ひ組の愚痴無智の大べらぼう、婬れ歌の替りに諷ひ、腕に彫物して、自然と念佛の緣となり、托鉢乞丐の者と成り、皆念佛と題目の德に浴して世を渡る者、幾百萬ぞや。依レ共兩宗に歸依の大馬鹿共、草に風を加ふる如し。是を以て日本六十餘州、淨土宗の寺拾四萬廿箇寺、日蓮宗の寺拾八萬三千貳拾餘箇寺、餘宗は兩宗の上が一にしも及ばずと云り。是を以て念佛題目廣大無邊のたはけも有れば有者也。斷て一派の宗門ひらきたる法然日蓮、此族は凡人に非ず。法然は勢至菩薩とやらの再生、日蓮は上行菩薩の化身として、倶に衆生濟度の方便に穢土に生れて、愚痴無智の凡夫を思ふまゝにだまし、無造作なる念佛題目の弘まりしは、兩坊主の働なり。然るに兩宗の僧俗共に、唯念佛題目を唱さへすれば佛になると心得、惡を止め善を修する事を外にして、佛の禁戒に背き、互に讐敵の如く誹り、甚だ我慢偏執にして、勢至や上行の面よごしなり。然れば此族も誹謗の罪あれば、墮獄の基たるべし。勿論、念佛の流行ても題目の妨にも成らず、題目が繁昌すればとて念佛の害にもならず、如何なれ

ば妬み猜みて確執に及ぶや。愚痴暗昧の凡俗は論ずるに足らず、然るに僧の身こしては、甚だ恥べき事に非ずや。最佛法の本意に違ひ、勢至上行の二菩薩の冥慮にも背べしこ歎かはし。定て四老の中にも、兩宗の信者も有べし。今より必自讃他毀の邪念を離して、彼我の隔てなく、念佛題目雪や氷こ名は異なれ共、解くれば同じ谷川の水こ、此の如く和順して、念佛なりこ題目なりこ口に任せて唱へ、勢至上行の二菩薩に便り、手を引きて寂光淨土に往生し給へこ。時に油煙公莞爾こして曰く、誠に先生の宣ふ如く、淨土日蓮の二宗は、諺の犬こ猿智惠の族、やゝもすれば啀合て、口業の罪を犯し、地獄の種を植るこそ悲しけれ。夫が中にも殊に甚しきは、先年天仰こ云へる談義僧、日蓮宗をそしるをもつて名を照し、高座の上に日蓮の木像を置て、日小僧こ呼はり、飽まで訇り恥しめ、剰へ扇を以て打擲する有樣、恰も提婆達多が釋迦を打けるも斯や有らんこ、身の毛も立て淺ましく、心有輩は爪彈して憎みけり。本より天仰が談義は、衆生濟度の爲ならず、賽錢備米を貪り、徒らに後家を引入る術こは言ひながら、三衣を著し高座に上りて、虚にも佛の眞似する大盜人坊主、佛戒を犯し惡言を吐のみならず、凡僧の身を以て菩薩の化身こ詐り、尊者の木像を打擲する事、上下尊卑の禮を辨へざる、放逸むざんの惡僧也。諺の佛こも法こも辨へず、職分に似合はざるあばれもの也。釋門の徒こして菩薩を打擲する事、佛敵こや云ん。佛身より血を出すは五逆の罪の一にして、鬼畜の業、外道の所行成るべし。傳へ聞龍樹菩薩は引正太子に失はれ、伽留陀夷は舍衞商人に殺され、目蓮尊者は竹枝外道に亡さる。皆是宿罪怨憎の報なりこいへり。上行菩薩いかなる宿罪有て、天仰如き外道の爲に、佛體を穢され恥を受給ふや。凡夫ならば直に怨を報ゆべきに、佛は大慈大悲にして、怨憎嗔恚の惡念有事無れば、冥罰を當て給はざるは、天仰が幸ひ成べし。されごも日蓮宗の俗共是を憤りて、天仰が說法の高座へ礫を打事雨の如く、天仰が頭に疵を蒙りて、辛ふじて迯去こいへごも、又此事

を得ず金銀を貪んと、他所において說法をはじめし所、以前にも懲りず、日蓮の像を匂り打擲なせば、又爰にても日蓮宗の輩が礫を打、或は喧嘩口論に及び、果は公邊の沙汰に成て、寺院騷動に及びし事、予若年の時見聞せり。斯て邪僧を招き誤義を說せ、佛像安置の道場を、天魔波旬の街と成す、住僧の心の程こそ拙けれ。當時も天仰が流の水没談義僧、往々有と聞きけれ共、いまだ日蓮宗の談義僧、法然の木像を罵打擲したる沙汰のなきは、責てもの殊勝也。是を以て淨土宗の談義僧恥べき事也。一年尾州より、關通と云る淨土宗の僧江戸に來り、本所邊にて說法せしが、當世談義僧も大きにしやれて、佛は愚痴人を教化する最上の法にて、五穀に比すれば米なり、最上の米も飯に炊て日數を經ば、饐くさりて蛆と云虫わく也。其如く佛法も澆季に成て、天仰如きの蛆湧たり。甚歎かはしき事也と云ける。實に天仰が如き賣僧、佛法を匂り打擲する、惡魔外道の談義を聞て、共に地獄の釜焦とならんよりは、豆藏がおどけ咄を笑ひ興ずる内こそ、即身の彌陀唯心の淨土なるべし。元來地獄極樂爰を去る事遠からずと、釋迦の制法の十戒を守り、十惡を愼むものは、現世の極樂世界に安居し、十惡を犯す者は、現世の地獄に墮落する事疑なし。然らば十萬億土の、遠き極樂へ往生して金色の佛になり、耕さずして百味の飲食に飽き、織らずして綾羅錦繡の衣を著、斧を執らずして七寶莊嚴の臺に坐し、無量の樂を極めんと願ふ心あらば、大欲にして却て墮獄の基たるべし。是に依て我はあながち佛に成たし共、あたはぬ欲をば願はず、念佛をも執せず、又題目をも善みせず、兩宗共に贔負せぬは言迄もなし。時に硯石翁白眼にして曰く、油煙斎何んぞ言を食むや、念佛題目の兩派贔負もなきと宣ふと云へ共、天仰を誹り給ふは日蓮に荷擔するに非ずや。尤も天仰如き、關通和尚の詞の如き、佛法の蛆蟲なれ共、渠が類は諸家にも多かるべし。下官或時日蓮宗の信者へ、鬼子母神は子育の由來、利生有事を問けるに、信者曰く、鬼子母神は佛在世の時、五道大臣の妻女にして千人の子

有り、是を育るに、人の子を取て其肉をもつて育けり。釋尊是を悲しみ給ひ、懲しめんとて千人の內、殊に寵愛の末子を捕へ、鉢の底へ隱し給ふ。然るに鬼子母神、千人の子あれ共、壹人失ひたるを甚歎き、我今より人の子を殺さず、却て守りとならんと誓て、釋尊に子を返し給はりねと詫ける故、卽ち返し與へ給ふ。今訶利帝母とて小兒の守りに懸る、則ち鬼子母神の一名と云へり。由來を聞ば子育の利生あらん左もあらんが、千人の子有とは疑ひなきに非らず。凡世に子福者と云はるゝもの、十人の子有は希なり。貴人に多く有とも二十人に過ず、腹は皆替り、一腹一生にあらず。晋の姚才仲は子四十二人有り、吐谷渾は子六十人有れ共、妾腹にして一腹にはあらず。顏之推賦に、魏の嫗何多、一孕四十、中山何夥、有子百二十といへり。古今希成る事也と、五雜俎に見えたり。又博物志に云へる賢都千佛の說は、怪談に近く信ならず。然るに鬼子母神の千人の子有は、年子にしても千年の長壽にあらずば設けらるまじ。假令長生成とも、男女交合の道は年齡に限り有るべし。或良醫の云へるは、凡男は陽氣を以て生るれば、陽計りにては立ざるゆゑ、中に少し陰氣を含て、少陰の數にて、八月にして齒を生じ、八歲にして腎氣實して齒替り、二八十六歲にして陽精盛んに溢れて、交合すれば子を設け、八八六十四歲にして陽道絕ゆ。女は陰氣を以て生ずれ共、中に陽氣を含む故、小陽の數にて、七の數を以て七月にして齒を生じ、七歲にして腎氣盛に成て齒替り、二七十四歲にして月水通じて、交合すれば子を生ず、七々四十九歲にして陰道絕ゆ。月水通ずるも陽精溢るゝも、皆陰陽自然の理也といへり。天竺の人とて道理は違ふべからず。然し鬼子母神長生にて、四十九歲にして陰道絕ずと有らば、年子にても有まじ。懷胎十月に足らず生るゝは常にして、七月八月にて生るゝも希なれば、年子といふにも有まじ。一產に二子三子生むは儘あり。四子五子或は七子を產ける者、古記にも見ゆれば道理とも云べし。若又鬼子母神禽獸魚蟲の如く、一產に十子二十子產けるや。若佛家の常語

の神通力方便などゝ云はゞ、鬼子母神其時はいまだ神ならず、五道大臣の婦にて凡身なり。縦へ神になりたりとも、神佛に淫欲は有べからず、いかにして千人の子を設けたるにや。鬼子母神夫婦、多く子を設る程の荒淫にて、陰虚火動の沙汰なきは、無類の大腎張と思はれていとをかし。尤千人の子を育るに、千人の嫗千人の抱守などなくては養育成るまじ。家居も廣からずば、數千人の住居なるべからず、尤五道大臣なれば、高貴富祿の族、榮花の人なるべし。鬼子母神子を育て兼て、人の子を取て其肉にて養ひけるはいかにぞや。釋迦の托鉢修行の掌に乘て持し鉢の子なれば、大抵知れた物なり。どふして小兒を鉢に入れしにや。若佛の通力にて、異しき放品玉のわざしたるや。皆是僞也。佛説のあやしきは噓の噓、神通方便或は過去の因縁抔と、つらまらぬ樣に迯口上斗りぬかし、方便は如何成術ぞ、因果因縁はいかなる事ぞと問ふも、入ほがに落れば、一休和尚の言の葉の、隅の月代石の髭と合點して、鬼子母神の千人の子も、鯝の子といふ魚の類と心得、子育の利生と云も、千人の子を育る程の功者なれば疑べからず。但鬼子母神は男女配偶の利益有といふはいぶかし。却て佛に緣結びの祈願をなす女は、貞なるは稀なり。元來男女配偶の事は、父母の計ひ勿論の事也。然ども浮薄淫風の女、兼て思を懸し男に添たき願、或は父母の目を掠めて密契せし男と、夫婦に成度邪の願を、神佛に祈る事、愚昧の婬婦なれば論ずるに足らず。元來神佛非禮非義を受給はず、鬼子母神斯る邪の願を納受するや。殊に邪淫は佛の重き禁戒なれば、鬼子母神私に佛の制法を犯して、淫風の願に利益を與ふるか。尤不幸にして緣遠き女抔の願は、納受すると見えて、鬼子母神の堂に、願ほどきの爲に奉納したる女の細工物、且子育の願に上たる小兒の小袖紅の猿山の如し。又百度参の男女絶る時なし。何事のおはしますかは知らね共、流行事をかし。近來は堀の內の木偶人も、流行事さかんなり。尤觀音不動の木偶人ども、何れも善惡の差別なく、諸願納受祈禱護符護摩、大笑の事共也。

釋迦の思ひ入はいかゞ有らん。夫が中に髭題目に、天照太神宮を始として、三十番神を書加ふる事いかにぞや。元來太神宮は佛法を禁じ給ひ、宗廟に僧尼を禁じ給へば、題目に神號を書入しは甚非禮也、神明を恐れざるに似たり。但し兩部習合の社は、別當は僧なれば勿論僧尼を忌ず。是は勸請の神明なれば、宗廟幾所にもなきいはれなるべし。然ば題目の神明を書加ふる事憎(にくみ)有るべし。殊に日蓮も神國に生れたれば、神の御末ならんに、先祖代々の氏神を捨て釋氏に入たれば、せめて神恩を忘れまじきが爲に、神號を題目に書加ふるか。公朝僧正は日域無緣の身を尊て、本朝相應の像を輕んずべからずとて、淨衣を著し幣を以て神を拜せしと云へり。日蓮も公朝僧正も同氣を求むるか。然しながら佛者の說に、天照太神は、本地勢州安濃津國府の阿彌陀也と云へり。然れば日蓮宗とは仲違ひの筋なるべし。佛家には佛は本地、神は垂跡にて、佛が神と成て衆生を利益すと、說法に本地の說あれど、强て牽合附會の妄說成べし。實に天照太神は阿彌陀ならば、神代に佛法を弘め給ふべきに、其沙汰なきは、例の賣主坊主の工み成事明らけし。されば慈鎭和尚は本地垂跡の說をば用ひず、迹を垂るとは何故云ふと詠ぜしとかや。或神家の書に、六根清淨の祓といふ物は、常盤大連(ときはのおほむらじ)の說にして、後人の作なる事疑なきにや。六根清淨の四文字、先ッ佛語なる事明らかなり。且此祓の天照太神の託は、大倭姬命傳へ給ひし埒もなき事なり、且舊事紀にあり。則神託を釋したる祓なれば、諸法影と形の如しと云より以下、皆從因果生ずと云迄の二十字は、金剛界禮讚の文の偈にして、不空三藏の作とかや、たはけたる物なり。然るを辨へず、此偈の中を三種の神器の理に當て解する人あり。諸法影像と云を神鏡の理とし、清淨にして穢なきを神璽の潔白にたとへ、所說不可得、皆從(より)因果生(ず)といふを、神劍の決斷に比せり、尤よく折合たる理も在るか。如斯突合せしならば、何れが佛說か神託か、埒もなき事也。今と違ひ昔は坊主が商ひ上手にて、日本の神道を天竺の佛道に交ぜて、兩部などと習

合して恣にしても、坊主に神の罰もあたらず、神職の人何こ心得て居るや、大べらぼう。神道は其はず、高の知れたる神代の卷或は日本紀、皆鼻の先計り書たる日本の恥辱の書也。佛が社の亭主にて神は出店なり、別當が本店、神主は出店の如く心得、別當を尊敬して神主を賤しむるは尤也。實は神道が馬鹿らしい故也。祈念祈禱も珠數に奪はれ、幣帛は塵拂の如く、名ばかり大造なる中臣の祓を讀て門々に立つ。神道者鉦たゝき、同心者に叩き立られ、口惜かるべし。併佛者の說のごこく、誠に佛衆生利益の爲、神になり又は僧に生れて、所緣由緒もなき日本人を世話にしてやるは、佛には似合し所行ならんか。佛の法力にて衆生を濟度するこそ本意ならめ、神に化て神威をかり、金儲けを仕ようこは、坊主程ふこひ者は有まじ。凡神代より以來、神の人に生れたるを聞ず、勿論神の佛に化て、佛威を借りて神道を照す例もなし。是らは少し神道は正直な振をして誑すなれご、他を犯し我道こするの邪曲には勝るべし。元來神は神の道あり、佛は佛の道あり、人は人の道あり、我道に非ざる事をなすは、正道には有るべからず。況や佛の神にばけ、又は人にばけ牛馬にばけるは、皆狐狸の類也。釋迦めが魔術をなして、仕たでも有ふが淺まし。勢至上行の二菩薩、いらざる由緣もなき日本の人を化さんこ、法然又は日蓮こ化けて、念佛題目を弘めん爲に思慮を費し勞せしは、末世の坊主共に、骨折ず金儲けをさすれば、自然こ祖師こ末々まで長く敬はるゝこ云のみなり。是を濟度こ見込し仕事なり。右二菩薩ごも憤恚をもやし、互に地獄の種を誹り合ふは無益なり。彼を見是を見れば、佛菩薩共も種々の世話有れば、極樂に往生して佛になり、無量の樂を極めんこ思ふより、我等はやはり馴染の婆婆が心よし。極樂の抹香くさいは誠の穢れなり、何ぞ名聞に泥て極樂の蓮花望みなし。寂光淨土の七寶莊嚴臺も、安ずる所は膝を容るゝに過ず、豈膝をいるゝの易きより、一味の爲に佛こ成て、衆生濟度の苦を求めて、此身を苦めんや。

四十　論語讀

伯夷が淸なるも、淸に僻する譏有り、柳下惠が廉なるも、自己に僻する誹有り。柴は愚に參は魯に、師は僻に由は喭なる、皆其僻する所に謗ありと見えたり。況や庸人においてをや、誰か譏なからんや。愚老或時、平家物語の評判せし書を見るに、何人か定かならず。然れ共、文武二道の達人と見えて、さしも古今の名將と楠正成も稱美せし、九郎判官義經を初として、源平に名高き良將勇士の戰場の働き、悉く偏く、此軍に何某が斯有しは甚だ武畧に拙し、彼戰に渠が斯る大將と云しは文に闇し、斯云はゞ道に當るべし、斯計ば必定勝利たるべし抔と、七書の語を引て、傍若無人に譏れる有樣、恰も張良韓信が肺肝を出たるが如し。然れ共此人治世に生れ合て、血臭き目に逢ず、唯靑表紙を知り、自讃に、疊の上に安座して大言のみにて、誠の畑水練成べし。然れ共言を工にして譏れば、史記の呂望諸葛を欺く程の元帥と思はる。譏らるゝ人は皆愚痴蒙士と聞ゆるもをかし。下官が誹草も、彼等の粕鉢に似たれど、聖賢と云へども斯譏らば譏らるべき哉と、世の能譏る人に效ふて、戲れの筆遊にして取に足らず、文庫の文、見る人目に觸れざれば、野語鄙曲も恥べきに非ず。元來毀譽褒貶は我黨の常にして、善惡共にそしらずと云事なし。去ばたま〳〵仁義を守れば孔子臭しと譏り、守らざれば物知らずと譏る。禮讓を守れば空拜みと譏り、守らざれば橫柄者と譏る。智を出せば差出物と譏り、謙退すれば不埒者と譏る。信を守れば馬鹿者と譏り、守らざれば不實者と譏り、道理を云へば理窟者と譏り、言はざればうつけ者と譏る。廉直を守れば惡堅きと譏り、守らざれば權柄と謗る。儉約を守れば吝嗇と譏り、守らざれば放埒者と譏る。多能なれば萬能一心と譏り、無能なれば穀潰しと譏る。書を讀ば知つた顏と譏り、讀ざれば文盲と謗る。根問をすれば入りほがと譏り、早合點すれば輕はづみとそしる。勤むれば手練者と譏り、勤めざれば氣儘者と譏る。愼めば偏

臆者こ譏り、愼まざれば自墮落者こ譏る。愛想よければ上手者こ譏り、愛想なければ無愛想こ譏る。勇氣なれば一徹者こ譏り、柔弱者をばひゝり者こ譏る。性急なれば我儘者こ謗り、性緩なればあはう者こ譏る。利口をば口きゝこ譏り、言はざれば佞人形氣こ譏り、世事賢こければこりこうこ譏り、世事疎ければ愚昧者こ譏り、淸者をすね者こ譏り、濁れる者をばしれものこ譏り、富める者を腹ふくれこ譏り、貧者を不覺者貧乏神こ譏り、諂ふ者は不忠こ謗り、忠を守れば諂ひ者こ譏り、孝心なれば贋者こ譏り、不孝なれば人非人こ謗る。主衰へて從者に譏られ、親衰へて子に譏られ、夫貧なれば妻に譏られ、師懦弱なれば弟子に謗られ、別當は神主に譏られ、本妻は妾に譏られ、駕籠舁は乘人（のりて）を譏る。瞽子は女郎を譏り、禿は傾城を譏り、片目が盲を譏り、相撲取は傾城こ駕籠舁こ川越こ後に居る見物に譏られ、大兵大食の罪この時に報ふなり。驛中の馬士（まご）は眠る者を譏り、婦人醫者は取揚婆を譏り、天文者は船頭に誹られ、金借は金かしを譏り、金遣はぬ客は傾城に譏られ、俳諧師は連歌和歌師に譏られ、張付師が左官を譏り、淨瑠璃かたりが三味線彈に譏られ、謠諷ひが鼓打を譏り、手書が筆を譏り、繪書が紙を譏り、物縫が針を譏り、料理人が庖刀を譏り、祈て驗（しるし）なければ神を譏り、風雨不順なれば天を譏る。誰かよく謗を免れんや。夫が中にも、論語讀（ろんごよみ）を論語讀ずが譏るは、盲人が貧なる目明（めあき）を譏るが如し。盲人にて富貴を取らんか、目明にして貧を取らんか。我は目明の貧を取らんこいふに、顏氏家訓を學ぶ者牛毛の如く、成る者は麟角の如しこ云へり。誠に學んで行はざるは、論語讀の論語知らず成るべし。去ながら古人の狂歌に、

論語讀の論語讀まぬはうらやまし論語讀まずの論語しらずは

宜哉學て成らず、九仞の譏を得るこも、牛毛の數にいらまほしき事にこそ。

そしり草　終

里靏風語

序

大悟者南无彌陀之先生博識之强長也一揮毫欲拔擢於題目髭一二揮聿要斥非不淨說法之聲色類肖狂奴話三四謗書苛々然而搖於外物之細僅也傍鬪之則不容陶氣不憑辛勞頗似隣疝氣病頭痛也越而里寉面謁言不遁引理當表和臯睦娟而裏些詰屈迫附若釜熱油雖怖烹之實以卓犖而不恂之說客也悟公亦曉阿郎忽崛起許諸趣段猶三舛鳴神路考立入可謂大緖人物迄兩傑矣噫咨寓言含實者乃噓戯作信而孤匪獺之嚙鬪耳細羸之爲略財亦目前也里寉者何人乎丁子屋比那都流之表德云爾

風來散人 印 印

里靏風語

淺艸のほとりなる閑素幽捿の聖大悟和尚念佛の片手間に庭前を眺て岸淸うして龜出て曙け松暗うして鶴飛歸るこ高吟

に靜座をたのしまるゝ所へ歳の比十八九と見えてはてやかなる美女ひとりとめ木の薫さつとかうはしく紅の浪うち寄るやうな裾ふみしたき外八もんしにゆりかけて和尚の前にのつしりと居直りけれハ後に十二三はかりのおなご中ふさの大廣袖にはさみ帶しやんと利口けなるがあゆみふりまて同し樣に付添ひかしこまるを和尚つく〴〵みられ扨〳〵あてやかなる女姓顏かたち髮のかゝり嬋娟たるありさま沈魚落鴈のおもひ誠に當世の小町とも云そうな生れつき殊にふたりの女の童色界の二尊か摩耶夫人の再來ならんと合掌して居らるれハかの女小しうち咲ワたしは御見知も御さんすまいくるハの雛鶴と申んす者ちと御咄かありんしてまいりんしたと云に和尚うなつかれ是ハはしめてあいました聞およふ花街のつとめうき川竹のやるせない身のうへいとゝ罪ふかい女子のまして多くの人をまよはせたる懺悔または後生菩提の爲我等か血脈を受にワせたものてあらうきとく〳〵と物貰ふたより嬉しそうにサアと口なめつりをして南無歸依佛としやにかまへらるれハひな鶴顏そむやイヽヘそんなこつちやありんせんとひんとして客の食くれた時いやと云たをよそ見したやうにとつてもつかねハ和尚きよつとしサア是は是ハ何か魔か入かゝつたそうおれも數年の行者何のそのやるものしやないと皺たらけな臍下はつて祐天のかさねにむかはれたやうに息をつめていらるゝに雛鶴莞爾笑ひとつと前おまへの法の兄御萬隨意院良石さんか松葉屋の瀬川さんに出會んして池水を夜な〳〵人は來て汲と月も曇らす水もよどますと云しやんしたれハ瀬川さんか身の上に夜な〳〵客は替れとも月もよどますやゝもやどらすと答へさんして色〻問答かありんしてから夢にたにはなのくるハをしらすして唯いたつらに老にける哉とよまんしていかふさとらしやんした事かおりんすさぞかし御存てありんせうおまへも世の中の事よふ知て居さんすけれとまた青い御方なまさとりか笑止さほんのいき佛にならんすやうにふかう世話にしてあけたさひまかいてまいりんしたと云に和尚

所化の時分から喰物もくわす爪に灯をとほすやうにして書物見た御影に大寺ふまへ今は隱遁して念佛一三昧に多年の功積りてもはや善導大師そこのけ三尊の彌陀の一組や二組は淸涕の中からも出さるゝやうに思はるゝ氣からむつとして齒齘はかりな口を書習ひのへの字のやうに澁面つくりなま悟とは不屈なやつサア何か法にたかつた事かあるとせかるゝにまつ氣をしつめてきかんせもつとも佛さんの敎に違ふ事ゝありんせぬか佛さんと云も元はお人人は皆あめつちの氣をうけて生るゝゆへ小天地とて二儀阴阳の外ゝないけにありんすその陰陽の交りを捨てむりやりにかたまつて居さんすか間違ひ梵網經のをしえは花のまゝりに垣結たやうな物て狼籍のないやうにとあふれぬまてのおきて邪婬とはよこしま斗の事てかたらひの道をたち切たるてはないけにありんす婬欲卽是道とて人は元より生ある物このまとひないはありんせぬちかい比も見さしやんせぼんさんがむりな色さんしたとてさらしものがありんしたあの通りきつとならぬ事せぬことゝ掟が强いゆへの事戒といふ物かあるゆへ破戒といふ科人もありならぬ事して見たいは人情禪宗の門に石碑立て葷酒を禁じておかんすれゝさかつきてはならぬゆへおめしの椀へ湯桶から唐茶うけて引かけさんすゆへ惡い生酔も出來病いにあたりもしんすやうなもの放生會とて小鳥放して功德しやと立てあるゆへこゝろよう野山にあそんている物を籠にとり入くるしませて買入待て直賣せんとたくゝへて置もその人の科てはなしそんな事がなけりやくるしませる人もないはづそんな方便說になつんて本ンのさとらんせぬ故の事虛無寂滅のおしへは身の上の繩はりまこと寂滅爲樂なら煩らゝん時藥のまんせすたのしミにおもゝんす極樂へ早ういなんすかよし人參に高金出し鍼よ灸よと養生さんすゝやつはり苦の娑婆火宅の內か能と見えんす石上樹下のすまひに糞僧衣着てはち披かんすゝ仕合のわるいせうことなし金鑭の袈裟か掛たい乘物て七五三ふませたいと願ゝんす出世念も談義說法にいろ〳〵な軍ばなしして役

背のこハ色つかふていき込かよいのしうたんか能のこ評判取てぢゝさんばゝさん達にごらうたせ鬮出して佛さんの押賣さんすも元は寺建立の爲となりよりこちの門が大きいこゝの須彌檀ハ能光るこ人にひけらかして尊い寺は門からこたこへのふしに仕たいばかり他宗ハごうじや惡魔じやの外道じやのこあられもない惡口云て數万の人に愼恚たきつけさんすもよそはみなわるいこちが能こいはせたさこかく我田へ水を引くめん又隱遁して金貸て高利取て樂〱こゐようか仕たいこおもはんす人欲もまたべしてもない事世話にして書物作りむかしの名高いお人達が爰がわるいごこがこうしたこいさゝかな事譏りまはしかまひにもならぬ事骨おつていさんすも博學な御方じやあんな人はもふないこうやまはれんこおもはんすもこりも直さす慾心やつはりまよひそれも是も皆玉に似た瓦金に似た眞鍮むかしも今も云て見れバおつれバおなじ谷川の水かけ論はつきぬ事をごふじやこふしやこいきせはらんすハこなりの事やつかむやうな物て畢竟おねがせまいからの事善惡不二邪正一如こ一呑に粹な事云ておかんした釋迦さんはぬけめのない大の先生その釋迦さんの御祕藏やしゆたら女さんの事ハいわひでも御存そのほかむかしの名僧釋の淨藏さんハかゝさん持んして御子達までありんしたけれご法力に違ひハありんせぬ深草の玄誓さんや親鸞上人さんたち皆色しのぬしさんたち今の世にも破戒じやの墮落じやのこそしる人のないは大きな御手からさこつたハみなあんなものおまへも今名高いお方名利貪欲を止て天地自然の道にたちもごらしやんすやうにワたしがいらぬ事ながら仕こんであげんせうこ顔に似合ぬ古文眞寶に甘味な加味してむつくりこいけんするに和尙横手を打扠も〱そなたは高い見識なる程おれもそんな事しらぬでもおじやらぬがむかしの名智しう女ほん肉食をせられしも德あるゆへわれらがやうな者是をせば鵜のまねにて烏羽の黑き衣もきられまいこ卑下せらるゝにイ、へ今の名高い御方はおまへひこり誰がこんなここ聞分やしやう花街の

習ひ色を表に立て色氣もなう色のない内に色のあるのが誠の色業平さん見るやうなとのごでもうつくしいのになづみ
はせすちりあくたのやうに金遣ふお人もいきがワるけりや明た目で見もせぬが里の習ひいやみと高まんとをさらりと
ぬけてやはらかですんとしてことわけ知たお方にうら茶屋でやりくりして眞實に逢かたのしみこちからつとめ出して
逢とげるお人のかたへかならず身ぬけして行でもなしつらい勤のうさはらしとハ其日〳〵をおもしろうをくるばつか
りまたしんから野ぼな御方と見れハ猶いとしく一座のさはり云そこなひまで引とつて恥かゝせぬやうに繕ふて上んす
が本ンのまこと久しう馴染たお人は元より二三度あふた客衆でもワけもなくて外の女郎衆にあハんすりや待うけて髪
をきりほんさんなれば眉毛おとして曲輪中の人にわらハせその上ハふり返りて見もせずわけすべさへよふ立ハ一間の
うちて二人や三人の女郎衆にあハんしたとて不義とも放埒とも云ものはありんせぬ是がくるわのならハし着して着せ
す流不流のさかひはいはゞ高いこゝろもち爰はおまへ早う通しんす筈それで若いおさんたちの内〳〵て人のかゝさん
や箱入の娘子さんたちにうき身やつして疵が付たの捨つたのとむつかしい事出來ぬやうに花街を立ておかんすからハ
やつはり此世の極樂淨土皆一度づゝはまらしやんしてにくいかあゆいのわけをおぼえさんすからは佛さんのおしえも
をなし事遠い未來の車大連に座臥の事は云んすけれど近い花街の三蒲團に定佛のわけハ夢ていさんすが笑しさ燈臺も
とくらし本ンにおかしうありんすなる程〳〵古きことはに佳肴も食せざれハその味ひを知らずと佛法と茅屋の雨は出
て聞けじやおれも若ひ時はそんな事もちとハやつたが年が寄ておのづと淸僧のやうに成たハ元氣のをとろへそふくハ
しく聞てはまた初めねばならぬ先問うおれが云事答へて見よと山内の法問日に鐘聞たやうに叉手してじつしりと落つ
きそれがしあたまハ兀面は皺いはゆるかうち法印に似たり汝が客といはゝいかん雛鶴答へて

花ならぬ梢もゆかし榊ばの
しげりあハなん影とたのまバ

また問すゝのおれか木のはしとゆふべきかたち是にても客といはんや
なよ竹のすへともいはし岩根なる
まつのときハもをなじみどりぞ

それがし岩ぐゝのやうな身を汝が花の姿に添ぶしせバうかるべきや
さゆる夜もよそはさしもぞ水鳥の
あら磯浪にうきねしのびて

それがしがごとき金なきものいかん
こかね花咲みちのくもなごかえん
心くもらぬ月のみやこに

それかしいたつて酒を嫌ふ汝も飲まじきや
さかづきになごやはくまん竹のはの
露だにいとふ袖としりなバ

それかし小唄淨瑠利三味線物まね等の藝なし是にておもしろかるべしや
松風も鳥の色音も何かせん

しづけきやごの夜半の手枕

人皆いへり貲いふこはいかん

はかなしや葎の宿もてりまさる

玉しく庭こ人にかたりて

かく問に應じてつらねけれハ和尚はやく〵こ微笑して

美婦ゝゝ　來告ニ北州一

巉岩摧裂　涓觀ニ清流一

已去ニ瓦閣一　且臻ニ玉樓一

形分ニ天地一　氣滿ニ春秋一

自然情理　鴛鴦入レ眸

如意寶樹　依レ君相求

無量壽海　依レ君得レ搜

一一交態　忽滅ニ百憂一

百憂旣盡　千心大休

對レ君晤談　萬物悠々

有無渺茫　身如ニ輕舟一

こうたはれけれハ雛鶴よろこひて

　雪解やおもえハ元の水車

和尚また興に乗して

轉丸寢末見眞實　野父哉四十餘年　土平土平潺渚勢　風落沙落月夜頭

短刀是醫者眞似　道理聲瓜唐紫幹　解釋替貌爲動作　頓兮茶釜化藥鑵

此狂作を詠してうかれらるれはア、いかうきうくつにありんしたとするく〵とよりて何か壹貫貳百匁ばかりある輕い身を和尚の膝にもたれかゝり人のをもひハ今更にふかうなるほど初心らしいと小聲にうたふもかはゆらし翡翠の色のつやゝかなる鬢に一貝三匁五分の百助が名題の銀出し梅花のかほりひたく〵とにほひ込むに和尚も煩惱卽菩提心とどふやらあぢな氣になられ暮の餅の三月比かひたやうな顏にしほの目してはれやれよいこゝろもち前度七間町よし町てたけの延た野郎あけて日ましの竹の子喰たよりは百はいのやはらかさ上品蓮臺てあそんださて皆變生男子の角つき合是が本ンの大極上黑品の卷頭外面如菩薩內心もやつはり如菩薩しやと何にかゝつてもはかいきしてついらちのあくのは君子の德袖にからねをさし入てても扱もすへく〵とした肌てハあるとふところふかく探らるゝ時ひなつるついと飛退近いうちくるハへ御さんせかならすまつそへと小つま揃へてふりむきもせす立て行うしろ姿和尚も手のもの鳶にとらハれたやうに口あいてうつかり見送りてもきさうな歸りやう能〻おもへハ普賢菩薩我道心をこゝろ見んとかりに女と化し來現ありし物ならん今ころは大かた白象と共に白雲に打のり西の空に行給ふならんと障子のすきより覗ひて見らるれハ鏡蒲團かされ敷たるおろせ駕に打乘り遣りて若いものうちつれて北の里へサツサく〵

世の中善悪鑑

人善なせハ善かならす返ル、悪をなせは悪かならずむくふとは、聖のおしへなり。予もまた小册をつゝりて、世のなか善悪かゝみと、なつけ、いさゝか好事の家に、是見よかしのたわことをいふ。

頃は心のこまのひものゆるめるなか月

風來山人誌

世の中善悪鑑

風來山人作前

こゝ五重の天守雲に聳へ、金の鯱日に耀て、朝鮮人さへ馬をとゞめ、日本一よか〳〵と、ゆびさして通りたる事、嘘でない、本國の繁昌。枇杷橋より宮まで三里の間、市町軒をつらね、行程三箇の津に續たる大都會、外にあらはいふて見給へ。都といへど海なくして生た魚は見馴ず、江戸は水あしくして酒造らす。夫をもひとつに兼たる自由。尤外より取集て、京も江戸も事は欠ねども、其地に産するは風味格別にて、色をも香をも知る人はしるべし。第一米穀天下に勝れ、薪は堀川に入船あらそひ、木曾のざいもく白鳥に山をなし、鹽は南野に焼出し、陶は瀬戸より運ふ。川魚は西より集り、山の

物は東北より入る。かゝる目出たき城下に、遊女町のなきは玉に疵と、浮氣人の殘念がれど、それも又有難き御制。百何十年終になくて、外に噺き夫もなし。もとより押出して惡所と號すれば、佛なぶりの祖父婆ゝも、後生善處とこそ願へ、惡處はねがふ所にあらず。まだ云たき自慢もあれど、さのみはと口をしめたる袋町筋に、大黒屋二俵衛とて、商賣は搗米や、一に俵積ならべ、二に賑やかな見せ付、三人の娘を持て、世渡りにかしこく、明暮の碓ふむ足に味噌とやら、次第に内證も暖に成、客も彌生の節句過ちかきころ、聞ばいかなる好事か、千もとの櫻を移し植て、八事を花の山となしけるとかや、夫終に見ぬも癡人、一年の氣延しにと、娘ともいざなひて、たまく〵の花見の趣向、是は米櫃から駒が出たと、供の調市も我を折斗。朝はとふから出たれども、めづらしき道草に時を移し、山へ着たは晝の日脚。爰かしこ梢を詠れば、まだ咲ぬもあり、散もあり、盛はまへなる娘なれども、往來の醉人の惡口を聞もよしなし、辨當はいかにも靜なる所もやと、人のいかぬ脇道へつたひ入は、竹一村の奥、世にすねたらしき菴あり。門の明たるを幸に、内へ入て樣子を見れは、主は五十余り、とゞら冗たる天窓つき、僧でもなし俗でもなく、夢借舍と額打たる、世を遁れし男とは見へたり。下女も調市もなき自炊の棊端、きれい成住居一段の所と立入て、爰しばらく借て休みたき由をいへは、心能挨拶して、隨分靜か成庵、そこに一間もあれは、ゆるりと辨當でもおつかいめされ、茶を焚付てまいらすべしとの云葉うれしく、一間に寄に床かけて、八疊床には伯隱の達磨の自畫賛、巴靜、巴雀が評點の古巻とも、腰張に張交たるはしやつも古風の俳諧好と見へたり。佛らしき物なければ、海老かまほこの辨當も遠慮なし、披きてさめ酒主にもすゝむれは、くつろぎて飮かはし、いかにも氣さく成老人、娘ごもを愛相らしく譽なぐり、今名護屋はさぞ賑敷開帳芝居もさむらはん。我等も一昨年比、藤塚町にむらさきの所縁たづねて城下の逗留、大須の芝居めづらしく見物いたせしに、山本京

四郎が忠臣藏夥敷大入。けに人の性は善也こや、忠臣義臣の思ひ入、斯まで人の悦ぶからは、見る者の心も改り、巳等か今まで主人への心入、夕部も肩もめこいわれそふな氣ざしを見て、小便にはづしたるが、こふではなかつたものをこて、奉公振の替りたる者も有へきに、其氣のなさそふ成は淺ましき人情、しからば心にうつらぬかこおもへは、おさん茂兵へや、お染久松なごの狂言見ては、おのが心に好たる事こて、其眞似したふなり、主の內義に鞘當し、若い手代に寄付たがる。たゞ勸惡の端にのみなれは、娘子達は芝居なごは見ぬかよさそふなものでござるこ、今世にてはやらぬ了簡をいへば。中〳〵二俵衞はこんな理屈好にて、されは〳〵我等も御覽の通り澤山な娘共もござれは、彼等がゆく末行跡も、親心の案事過し、常〳〵教訓らしき事は申せこも、口重くして云取かたく、喩に引べき故事故語もしらねは、心に思ふたばかり。けふは幸の御教訓、娘共もおもしろそふに聞ていれは、猶も咄して聞せ給へこのぞめば、菴主も興に乘じ、そも〳〵近年は野にも山にも蜜夫のさた、聞にうるさく問にうたてし。昔はたま〳〵蜜通し、其事の顯るれば、女はここに恥をしりて、或は身を投、首を縊るためしも有しが、近年は人中でおならひつた程にも思はす、頰かひ拭つて居る有樣、薄皮な生れ付も面の皮は隨分厚し。是は世上に澤山成ゆへ、有習ひこおぼへたる成べし。蜜夫の不屆は勿論なれご、第一女に教なく、心に守る性根なきゆへなり、惣して蜜夫は其家したしき者のする事なれば、もしいゝかけてはねつけられ、亭主にそれを告られては、もふ其家へは面目なく、不通こ成大事なれは、何程の徒者も、卒爾に他の女房に不義を云かける物にはあらす、先そろ〳〵こ其女の心立を探りて、或は人の居らぬ時近くへ寄、婬たる世間咄をしたり、怪我のやうにて手をさはらせ、膝あたらせて試に、心の正しき女房なれは、人のなき時は側へ寄付ず。たはれた咄には眞顏に成て、手にさはれば驚き、膝があたれば逃退きすれは、こやつ心の正しきこわものなりこ氣遣ふて、もふそれ

までにして止るものなり。人の妻たるものは此身持が鏡でござる。それを自堕落なる女房なれば、たはれた咄にけたけたとわらひ、手があたりても逃ず、膝がさはりても笑て居るゆへ、もふ是はたわひなしのべら作のと呑込で、文を付たり、不義を云かけたり、徒事の是を名付て通り者じや粋とやらのと嬉しがる。それは傾城茶屋女の身のうへの事、人の妻として通り者の粋のと見立らるゝは大き成恥なり。通り者とは悪性者の唐名と職源抄にもござるとや。サア悪性な内儀と見ると、はや旦那寺の和尚も方便品をときかけ、出入の醫者も通氣散を盛かけ、師匠の座頭は戀慕ながしを彈かける、みな此方のそなへによる也。それも又流石に悪事は悪事と知るゆへに、我が娘を此子徒者になれとは思はず、身持よかれと育つれ共、何がお袋の杓子内心皇定規がゆかんで居るから、ろくな娘にはならぬはづ、子供〳〵とおもふちに、いつか隣の多葉粉屋と文の取遣りはじまりて、親の目をぬすむうちは、跡がへらぬで氣はつかねど、銀をぬすんで駈落の段には、損をかけるやら、歎きをかけるやら、世上に有を御覧なされ。まことに忠臣は孝子の門より出て、心中も斯した家から出る事と、古人の言葉あたれるかな。我身ひとつの事にあらす、一家の亂と成まする。世に翫ぶ浄留璃本を御覧なされ。大經師昔暦鑓の權三がかさね帷子など、むかし有たる蜜夫事を作りし果は、御仕置の咎をあらはし、本の夫に斬れたる類い、此功徳の體を見せたるは、見やうに依て此樣なものも愼に成ばなるへし。其外ねから作り事の趣向を立るには、或は姫君のいひ名付有人を嫌ひ、外に男をこしらへる色事まては作れども、しかと夫にそふて居る女房の蜜夫する色事は、大かた作らぬ事と見ゆる。狂言とても其通り。これは作者の心持すへ〳〵までも崩れぬ樣にしたし。筑摩祭の鍋の數も夫を定めぬ女の事、陸奥の錦木も主ある門にたてるではなし。又は男の身の上も、蜜夫は男の第一の愼と心得て貰ひたし、ころび合の女夫でも本妻に定めてからは、又他人ともころび合とはゆめ〳〵おもひはせ

らるまし。愼あれは輕き棒手振にても人品格別に見ゆるぞかし。又女の髮衣裳付何ほど端手にしても、こゝろさへ正しければくるしからすとはいひかたし。人の內心を察するは、第一其形容から目利する。たとへは芝居を御覧あれ。顏に紅粉をぬり、大格子のひら袖着て、切幕からによつと出ると、これかたきやくの惡人形、わるものとは直に見ゆる。又鬢をそゝくらかし、片前さかりに着物きて、ふところ手して出ると、はや阿房の道外方とは子供もたちまちしる事なり。しかればかたちの端手なるは、徒者さぞあらんと、心ある人に見下されんは、まことに恥かしき事にあらずや。女は男とは違ひて、一度夫を定めてからは、殺されても他の男に通ぬ事は、人たる道の法にして、人と畜生との違ひ目はこれなり。むかし江戶に居てはなしに聞たる事有。實海とやらいふ貴き老僧のかたられしは、都而祈禱といふものは、叶はぬはづのことをいのればしるしはなけれど、其事品によりてなるほど祈禱はきく事なり。それに付或女の祈禱を賴まれて、慥にしるし有べしとおもふに、少しもきゝめなきをあやしみて、其女の樣子を聞ば、夫有ながらおり／＼密夫の名立し者と聞て、扨はと人の祈禱をやめて、これを畜生の取扱にして祈禱したれは、忽に驗を得たり。淺ましき事と語られしとぞ。しかれば身持の畜生なれは、人目にこそ人と見ゆれど、神や佛の御手前にては、いつかはや畜類にして有と見へたり。此世からさへ斯あれは、後の世はなほおもひやるへし。猫は傾城の生れ替りと世のたとへにもいはれ、哀れ今世には人と見へても、佛神の御目からは、また犬が參詣したよ、猫めはにやんの願ひに來たぞと、さぞ澤山に御覧あるへし。淺ましともにが／＼敷とも申計なし。これほど澤山なる密夫なれども、絕て久しく御刑罰なきは、みな／＼下にて事を納め、訴へて出る者なければ、上より鑿て御僉議はなきなり。それゆへ大罪成事を知らぬ者もおほかるべし。此事御仕置のだんに成ては、土器野に西を向て木の上に二人の立姿、別れを告ると憎まれし鴉めが意趣返し、鼈甲の櫛の跡に

遠慮なくこまつて、なるかならぬは目元で知れること、まづ一番に目玉からしてやり、情なく露顕すれば、これほどの目にあふ事ぞこいふ罪のおもきを合點したがよし。近年靜觀坊が下手談儀、單朴翁が雜長持、輕口のなぐさみ本に仕立、結構成敎訓、あらゆる世間の人情をつくせしが、女子の訓、未だこまやかなからずこ日頃おもひし事いはでふくれし腹、けふは相手のましく〳〵てげつそりこへらしました。御聽聞の御腹もさぞあらん。長物語に長い日もはや七つさがり、菴には冷飯の貯もなければ、せめて最一つ茶なりこもこ、立むこすれば二俵衞おさへ、ありがたいおはなしこれ何よりの御馳走。娘共も退屈なく聞入たる顏付うれしく、名護屋へ御出の節はかならず〳〵御立寄、女房どもへも御逢下され、けふの御禮を申させたし。畜生氣には案事なき生れ付を御目にかけふ。おさらば〳〵こ暇乞して出ける。爰に哀れをこゞめしは、辨當持の調市也。勝手の隅に肘枕、一寝入程やつて起たれこ、まだいつ立れそふな氣色もなし。窓元見れば彼岸のすへのこりか、艾の有を幸ひに、旦那の草履の裏に、たばこ呑顏して一火見しらせたれご、蛪ほごもきかぬこそ道理なれ。さめやらぬ目に取違へ、菴主が草履の裏をこがせし。菴主はなしの内にもゝ尻して、我等常に小便にはかたいが、何こしてやら、けふは頻に立たふ成ますこて、一二三度も裏へ立しが、これ灸穴のまちかひこは、後にぞおもひ知られたり。

世の中善惡鑑

風來山人作後

葉たれ雪竹の寢るほご降て、此ゆふぐれの淋しさ、友まつは雪の名のみならず。問ふ人もかなこ心に祈るしるしも有て、

神風や伊勢町にすむ、名も古市といふ座頭の坊、御見舞と申上る聲めづらしゝ此雪の日に何としてか、人戀しき折からわたりにふね、碇おろして咄せとあれば、私もけふは大隙。只今家路に歸るとて、御門前にて下駄をきらし、三助に鼻緒を頼まんとて、御臺所まで立寄所に、御伽にならば夜ともにおはなし申上ませうと、這奴も大臣の付た貌付。幸〳〵扨珍らしい世間の沙汰もなきか。いや無にしもあらず。まづ噓か眞か、いざ白壁町に黒猫が化たはなし、四五日まへに六寸のしちやが、鉢坊主にかたられた物語、造子町にて比丘尼が孕んだの、惠比須町で女を釣たのと、たいもなき事に尾鰭をつけて、世上咄のうけ賣。こと〳〵く終りて是までなりや、妙惠上人、さて此日の雪に、有る御屋敷の娘御さま、御稽古に參りました。御旦那は江戸、留守奥樣もおさひしく、ねぐら鳥のまつ虫のと、四つ五つねざらへも濟で、少しは退屈欠伸交りの、うつら〳〵と彈懸る、沖の石の折こそあれ、そのかたきは煮ても灸ても桑名町の伯父御樣、お見まいといふより、座敷のおさわき三味線も追取置て、それ御通り道の手盥とれ、めじろの籠は椽へ出せ、猫は部屋に繋でおけ、役者評判をそこらへ隱せ、火燵の飯櫃は有ても大事ない物ぞと、唯一人の下知に依て、茶ばかりの御客なれども、一騎ものこさずにへかへり、奥樣も自身に白柄の箒振廻し、長刀ほどの御働き、私も掃出さるゝ覺悟して、たばこ入を探り廻し、半疊斗おぼへずしさつて爰かしこと思ふ時、古都は此間勝手へ居て、ゆるりと休息あるべしとの、おふせかしこまつて御次へ立、蹴つまづいたはさいわひ、火鉢は爰に須磨の浦おはしたの。明石にきせるを借出し、鼻の先あぶりながら、近き後ろのふすまごしに、伯父御のおはなし面白ふ承りました。廿斗と十六七の御子息方ならべ、咄しながらの御教訓。かねの灰吹カチン〳〵と、三つ四つ鳴たが御談儀の序開。さて皆丈夫につき揃ふて、よい若い者になられたゝ親父か江戸へ立まへにわせて、子供も背尺が延ました。能方へも惡方へも人品の定るころ。留守に我儘が心

元ない。隨分行跡に量見して能方へ仕入て下されと、くれ〴〵頼まれた。きけば武藝も精か出る、學問もしやるげな。重疊〳〵。若い者はひまながわるひ。身が樂なと無分別が出て、博奕を打たり、娘を盗んで走などはいふにも及ぬ事。よもやそれ程の阿房はせられまいが、三味線けいこにかゝつて居るの、淨るりを習ふのと、それがかうじて歌舞伎狂言の眞似。女形に手が荒てはおかるの役がつとまらぬと、鑓や劍術をやめる樣に成はさたの限り、たゞし武藝も隨分上手になるはよいが、其藝を用る所と用ぬ場を辨へるかよし。是が肝要。士は義理を體として、業は體から遣ふ事。たとへば熊坂の長範が大長刀を振廻し、十人前の働きしても、其事の道にかなはねば、座頭の八人藝よりは劣り、次信が八嶋で能登殿にかすり手も負せず、たつた一矢で落射されども、忠義にいさみ矢面を恐れず、眞先に進むたる心の剛。忠義專を賞翫して、今も世に譽てはないか。義に叶、手柄もすれば鬼に鐵棒、大工に才槌、いとふやうもなけれど、勝負は時の運にもより、きられて死でも義にかなはゞ譽べし、首尾よふ斬ても不義ならば憎むべし。それをよい歳な衆もわろうすれば、喧嘩が有たの人が斬れたのといふを聞ては、我が同流じやが大袈裟によふ斬た。閑遊信高は見事に斬るのと、其事の理非は棚へ打上て、ねから吟味もなく、理非はどふあれ斬さへすれば、士のやうに覺へて、評判するは大きに心得違ひ、それを若い衆が羨で、どうぞ斬事がでかして、斬て見たひと鍔元くつろげて、斬能そふな相手を心掛て步行は、病犬よりはこはいもの。其義ら非かと辨へるは、學問でおじやる。扨殺生の遊山のとてつれを誘引も、大勢はかならず御無用。つれと成からは、いか樣の事が其連中に出來ても、其時は見捨られず。乘かゝつてはづすは非義なり、臆病なり。大勢の中には大酒醉狂の人や、一徹無法の仁も有もの、必連の多を頼に、つねより氣がさに成て、さまでない事に、人を打擲したり、女中の連に無禮を仕掛たりする事が有たがる。それに事が起ておもはぬ卷添にあふて、名

をうたはれたりしぬる事も立退事も有て、一生を誤るは歎しいことぞ。事にのぞんではづすは臆病なり、事のできぬうちに其連を迯るは臆病ではさら／＼なく、愼といふ物ぞ。此さかひを合點めされ。又おの／＼身分で、全體袴をかけて供も一人つれるが本の格式なれど、常にそれもならぬ。綿服で無僕でも步行るゝであらふ。その體を他から見ては、倍臣やら足輕やら同じ者に見ゆるゆへ、人がそれ程に道もよけず、無禮な事も有物、さては知行取の諸士とは見知らぬ故ぞと、輕いものへこちからも道を讓る容に、格式をやつした時は心にも格式を引さげて步行は、ふんだり斬たりする程の無禮はないかとおもはるゝ。其證據には倍臣や足輕の魂もあれど、彼等が終に無禮者とて。斬た沙汰も聞及ず。又供連たり絹ぎらの人が人を斬たためしもなし。是は其分限の心で居る故、こちから咎る事もなし。先も諸士と見ゆる人には無禮もせぬ成るべし。又四十を越たる人は、あまり人を斬ぬ物なり。歲のふけたる人とて、人がさはらぬはづもあらねど、其人はりやうけん分別も有ゆへならむ。それとても腰ぬけの名もたゝず。しかればやつして步行時は、鐺にあたつても棒の先がさはつても、麁相で當たものなりと、すこしの事は其分にして恥にも成るべからず。若もだまつて通られぬ程ならば、たゞ咎ずに叱て通るが能からん。叱といふは、無禮者めとか麁相な奴めとか、それぎりで事が濟、似たやうな事で、こりやなぜ當たと聲かけるは咎るといふもの、わざとあたる道理なければ、なぜと問はれでも知れた事、あてたのに當りましたと答へる者も有べからず。そこで侘て誤れば、一段の首尾なれど、先の奴も問れては云分にも心にさはり、いやこちから當りませぬといふから、もふむづかし。それならばよいと仕廻れず、とらへて天窓をはるか蹴倒すか、踏かむなうち喰せるか、斬て退ねば仕廻が付ず。一言の句作りにて、いかい骨をおらねばならぬ。或はせりふの定りに、こゝな眼ぬけといふ流もあるが、これらもいはぬ惡對なり。先の奴も麁相はそさうなれど、眼は拔ずに二

粒有から、それが虫に障て、得手に口答もする物ぞ。さふ成と斬ねばならぬは士の習ひなり。同じくはそんな事の出來ぬ内に、事をしづめるが愼なり。亂世戰場では、我に意趣もなく、別に過もなき者とも、敵と名が付と用捨はない、斬て／＼きりまくる勿論の事なれど、かゝる治世の平生に、一旦の怒り、さしてもない事に、ひと一人命を我か手にかけるといふは不仁の至り、むごらしい事。親も有、妻子も有べし。その歎きその難儀、それ故乞食に成者も有べければ、まことに不便の事にあらずや。上からの御目には、蠅一疋ほどの輕き者の罪過を犯しても、隨分糺明僉議のうへならでは、死刑にはおこなはれず。されば殺さで叶はぬ道理に逼てのうへに、斬も殺しもすべし。ここに百姓や町人や中間とても、一本さしたは竹篦やら赤いわしやら、無刀同然の者を相手にして、日頃の稽古に鞘はなれの手の內、修練をもつて斬て捨るは、大根切も同然、いと安き事なれは、手柄なるべからず。輕き者は討捨きりどく、我腹へは病の來ぬ、高をくゝつて、てんがうにも斬たかと、下心をうたがはるゝは恥かし。これらをよく／＼合點しやれ。かやうにいへば若い衆の勇氣をくじくやうなれど、ゆめ／＼左樣にはあらず。勇氣は養ひ立て、何ぞ御用に立ふとおもひ、義に叶ひては弓箭八幡壹寸もおくれじと、常心懸るがまことの武士といふものじやぞ。扨／＼長い物がたり、みな／＼退屈であらふ。ちと宅へも近日おじやれ。長いはなしはやめて、溫鈍でも振廻ふ。皆々さらば／＼と立れたる、伯父御のおしめしいかさま尤な事、感心が胯をくゞりましたと、あぢな所へ故事を入て、富樓那にあらぬ古都が、不辨舌ながら聞はつりの咄も、おかしう反古のうらに書留ぬ。理屈詰にたけき武士の心をなぐさめ、目の見へぬ座頭もあはれとおもせたる、伯父はいかなる人にか。彼白藏主の例もあれば、もしは尾でもなかつたか。おかへりに赤犬めが見咎て、ほへたは合點がまいらぬと、彌減らあやしみけるとぞ。

索引

凡例

一この索引は上集、下集の本文にあらはれた人名、地名、物名等を摘出したものである。

一物名の稱呼は主として音讀によることゝしつとめて、和名をさけた。

一配列の法は五十音圖によつた。

一配列の語は專ら口語の發音によつて、イとヰ、エとヱ、オとヲ、カンとクヮン、シャウとショウなどの區別をさけた。

索引

ア

オ

カ

キ

ク

ケ

コ

サ

シ

ス

セ

ソ

ツ

マ

ユ

（終）

目次

源内先生のことども

一 略系

（父）國久 ― 白石茂左衛門、延享二丑正月 居移新町眞覺寺前
寛延二己巳正月六日歿 行年五十歳 法名春山宥淸

―新吉（早世）

―喜太郎（早世）

―國棟（クニムネ） 幼名 四方吉、傳次郎後嘉次郎、更ニ元内又源内ト改ム
國倫、字士彝、號鳩溪 母山下氏（安永九年十月二十四日歿 法號 心月貞照信女）
寛延二巳年正月六日親茂左衛門死去ニ付後役願出候處、寶曆四甲戌七月病身ニヨッテ退役願出、同八月二十四日於元
御藏寺島覺兵衛殿、伊藤與五兵衛殿竝ニ石川十太夫殿御立合ニテ被仰渡趣

一 其方儀近年病身ニ罷成御奉公難相勤ニ付御扶持切米指止御暇頂戴仕度由願之通御暇（以下缺）

安永八己亥十二月十八日於武都霞關館舍卒

葬淺草總泉寺 法名 智見靈雄大居士 行年五十二

一女　智與
　女　爲
　女　伊路
　女　（不明）
　女　（早世）
　女　（早世）
　小次郎　（早世）
　周　實岡田重五郎元隆嫡子
　　　幼名磯五郎、後權太夫
　女　里與

この略系は平賀家藏の源内の書き殘した平賀氏由來之事と稱するものゝ殘缺本を底本として、同家藏の源姓平賀氏系圖を參照したものである。この二書によると源内の父の代までは白石を名乘つてゐたのを源内の代になつて平賀氏と稱したのである。參考のために源内の書いた平賀氏由來之事のまえ書きを示さう。

平賀氏由來之事

平賀鳥左衞門國行ハ先祖平賀三郎國綱七世孫也、國綱子ヲ平賀二郎國宗奥州白石ニ居住シテ是ヨリ家號ヲ白石ト號ス、國行曾祖父ヲ平賀壹岐守國長ト號ス、ハ信州ニテ武田信玄討絶平賀源心子也。國長子ヲ平賀内記國光ト云、國光子

ヲ國家ト云、伊達陸奥守宗賴公ニ仕ヘテ白石ヲ居住シテ、宗賴公三男遠江守宗利ハ伊豫國ヘ下向之時國家モ老臣トシテ伊豫國宇和嶋に下向シテ正保三戌年三月十五日七十五ニテ卒ス。其子ヲ白石十郎兵衞國行ト號ス。阿部淸兵衞トハ相役也シテ二人ヲ朋友臣ヨリ讒言シテ阿部淸兵衞ハ切腹ス、白石十郎兵衞ハ讃岐國寒川郡小田浦に流給、夫ヨリ名替テ喜左衞門ト號シテ土民トナレリ、夫ヨリ牟禮村ヘ參ル、天和二戌正月六日八十五ニテ記付申候國綱先祖有時之先祖之家號

國倫（花押）

二　高松藩松平家の家譜と登士錄とに見ゆる履歴

（イ）松平家譜「比ノ部」所載

元内
平賀源内

寶曆九卯九月二日醫術致修行ルニ付三人扶持被下
同　十辰五月十二日藥坊主格被仰付御切米銀
拾枚四人扶持
同五月廿七日元内と改名
同十一巳九月廿一日醫業師匠も老格ニ付此節晝夜手ニ
附踏込修行仕度存意之趣御內々達御聞格別之

思召ヲ以テ御扶持切米被召上永御暇被下御屋敷え
立入之義是迄之通相心得他え仕官之義は御構
被成候旨　仰付

（ロ）　松平家登士錄卷四十四「比ノ部」所載

府定

断　平賀

○　元内　國倫

江　初源内　寶暦十年辰五月廿七日更元内

奉　初給三口先是詳後付……寶暦十年辰
五月十二日給四口銀十枚爲藥坊主格同十一年
巳九月二十一日辭職俸

三　年　齢

源内の年齢については、今まで四十八、五十一、五十七と三説がある。讃岐志度の平賀家の位牌、過去帳及び平賀家の菩提所である自性院にある源内の墓には五十二となつてゐる。五十一説は源内の友人杉田玄白の碑銘に見えてゐる。この五十一の一は呼びかた聞きかたによつては七と間違へられる、或は五十一を五十七と誤つたのではあるまいか。

今かりに五十一歳として、源内の生れた年を逆ると、ちようど享保十四年となる。そしてこの十四の四がまた七と間違へられる恐れがある。そこで享保十七年に生れたとすると、源内の死んだ安永八年はちようど四十八歳となる。たゞこゝに四十八歳を裏書するものは平賀家に傳へてゐる自性院の寺請證文の寫である。これは寶暦十四年に三十三歳とあるから、安永八年は四十八となる。しかしこんな寺請證文などは毎年々々轉寫して行くので、調査の年が改まつても、年齢などそのまゝ書いた例があつて、二つや三つくるいがあることは往々ある。こればかりで年齢を定める譯には行かない、また杉田玄白の五十一も原文がないから判らない、或は五十二を五十一と誤り傳へたのではないかとも考へられないこともない。さりとて過去帳や、位牌や墓標などに、遺族が五十一歳であるのを、五十二歳とまちがつて書いたとも思はれない。よし安永八年の暮十二月十八日に死んで、その通知がその翌九年に讃岐に達したので或は一つ間違へて五十二歳と記したのではあるまいかとも思はれるが、その遺族は源内の母と妹「おりよ」と、その夫で、しかも源内の從弟である權太夫であるから、まさか源内の年齢を間違へて書き付けたとも思はれない、要するに當時平賀家では五十二としてゐたと信ずる。

一　位牌

(表)　歸眞　智見靈雄居士　靈位

(裏)　安永八己亥年十二月十八日
三代目白石茂左衛門良房二男
白石改姓平賀源内國倫於江戸卒
行年　五十二歳

二　墓碑銘

（右）安永八己亥十二月十八日卒

（正　面）智見靈雄大居士

（左）平賀源內國倫

春秋　五十二歲

三　過去帳（括弧內ハ朱書）

十八日

智見靈雄居士　安永八亥天十二月

（父宥湍）（春秋五十二歲）

（母貞照）平賀源內事（實名國倫ト云フ）

四　長崎再遊說

源內が長崎に遊んだのは寶曆二年と明和七年との二回である。このうち明和七年の再遊は今まで正確な文獻に記すところがないとて、これを否定する人もある。ところが平賀家の文書、南大曹博士の書翰竝に埼玉縣秩父郡大瀧村幸島家

の鑛山日誌によつて長崎再遊説が確認された。

鑛山日誌秩父鐵山の項に

明和五子年迄掘出ル事丑寅卯三ケ年間休山其の間平賀源内長崎へ行云云

とある。この丑、寅、卯は明和六、七、八の三年であつて、其の間源内の不在で鐵山が休山したことを意味するが、この日誌はその日〳〵に書き付けた日誌ではないから、これで源内が長崎へ再び遊んだことを立證する史料としては絶對的のものではない。南大曹氏藏某年卯月二十五日の書翰に

私儀四年以前長崎へ參去秋罷歸ル又〻此度鐵山之義に付中津川へ參逗留

とある。この手紙によつて、源内は或る年に長崎へ行つて、その翌々年の秋歸つたことが知られる。しかし又〻この此鐵山の義付中津川へ云々とあるが源内が秩父に行つた最初は。寶暦十三年であるから、この卯月二十五日を寶暦二年の長崎遊學とは考へられない、即ちこの手紙は恐らく明和再遊後の某年の四月二十五日のものとせなければならない。

次ぎに源内の下細工人嘉七が、源内のエレキテルを僞造して訴へられた平賀家藏の訴訟狀の殘缺に

私先年長崎逗留之內種々丹精仕候而漸手掛出來仕歸府之後七年之工夫ニテ去去年十一月始而成就仕候

とあつて、年月日を缺いてゐるけれども、源内が長崎から歸へつてから九年目であることだけは明らかである。ところがこの訴訟狀に對する詫狀の殘缺には幸にも末尾に安永七年戌年十月とあるから、かりにこの訴狀を安永七年のものとすると、去る年は安永五年である、安永七年から九年目前である年は明和七年であるが、もし鑛山日記にある秩父鐵山の休山した最終のである明和八年歸つたとすれば、それから九年目に出來たとすると、この訴狀は安永八年のものとな

る。それでは訴狀が安永七年十月であるから、辻褄があはない。南氏の書翰に四年以前を、かりに鑛山のやすんだ最初の年を明和六年とすると、去秋罷歸つたとある年は、明和八年となる。ところが明和八年に歸つた說は、前記の訴狀によつて否定せられるから、長崎へ行つた年を休山の前年である明和五年とすると、去秋は明和七年となる、この明和七年に歸つたとすると、その九年目は安永七年になつて訴狀の日附と符合する、ところがエレキテールが歸寄後七年で成就したとあるから、源內の歸附を明和七年とすると、その七年目は安永七年となる、そして厚生新編に源內のエレキテル發明に關する記事に、「一とせ西賓參向の春云云」とあるが、この安永五年の三月に西賓が參向してゐることなどから考へて、この訴狀が安永七年のものであることが判かり、源內の長崎再遊說が確められた。ところが源內の日記によると明和五年七月頃は秩父にゐたらしい、そうすると源內は明和五年の初秋に長崎に行つて、その翌々年である明和七年の秋に長崎を去つたことが明白となる。

五　陶器製造および器械發明

源內燒と云ふ一種の陶器を製造してゐる。それは最初先生が長崎に遊學した時に、支那や交趾などの美しい陶器を見てその燒方を硏究し、讃岐に歸つてから先生の鄕里志度から二里程南の富田村の土をとつて、綺麗な源內燒を作りはじめ、人にもその燒き方を敎へた。明和七年先生が二度目に長崎に遊んだ時、其筋に次の樣な建議をした。今利、唐津はやきはよいが風流でない、近頃阿蘭陀の燒物を珍らしがり、高い金で買ふ人が多いが、肥後天草郡深江の粘土が製陶に最も適してゐるので、その土を採つて、熟練した職人を呼びよせ、長崎で阿蘭陀や支那の陶器を手本

にして燒かせ、外國品よりも優良な品が出來たら、自然と外國人も好んで買ふようになる。そうなると日本の土で唐、阿蘭陀の金銀をしぼりとることが出來て、國益になる云々」。斯樣に建議したばかりでなく、天草の土を長崎に運送する方法までも述べてゐる。今日源內燒として遺されてゐるものは、必ずしも源內自身が燒いたものではないが、その製法と意匠とはたしかに源內の腦裏から出たものに相違ない。序に云ふが、源內燒の皿に、萬國圖をあらはしたものがある(口繪)。この頃我が國の地球圖の描き方は、大抵橢圓の圖法であるに、源內はうまく皿の圓形を利用して、橢圓形の圖法から一步をすゝめ、圓形の圖法を採つて居る。これはこの頃では源內でなければ、何人も想像もつかないものである。次ぎに先生はまた色々な機械を作られてゐる。香川縣敎育會に先生の製作した磁針器と平線儀とがある。磁針器と云ふのは鑛山用のもので、今日でさへこの機械は幕末頃に日本に渡つたものと思ふてゐる人がある位であるのに、先生は最初長崎に留學して間もない頃、卽ち寶曆五年先生の二十九歲の時に、旣に阿蘭陀人の製作したものによつて、摸作して居る。平線儀と云ふのは、今日の水準器で、これも恐らく阿蘭陀物を摸作したものであるらしく、寶曆十三年に出來たものである。これから考へても源內は色々な機械にも興味があつたものらしい。明和二年(皇紀二四二五)先生三十九歲の時、長崎の通詞吉雄幸左衞門が、阿蘭陀でも十數年かゝつて漸く出來たと云ふ、今の寒暖計を先生に見せたが、源內は一寸見て直にその製作法を說明したので、吉雄は勿論のこと、友人の杉田玄白、中川淳庵なども大に感心したとの事である。其後明和五年の春、少しの暇が出來たので、源內はその機械を製作し、日本創製寒熱昇降器と名づけ、說明書を添へて知人へ送つた。これが我が國最初の寒暖計である、しかしなんと云つても大發明はエレキテルである。

六　エレキテルの完成年代

我が國人で、はじめて電氣に手をつけた人が平賀源内であり、またはじめてエレキテルを製作したのが、平賀源内であることは何人も知るところであつて、しかも源内の製作したエレキテルが二個迄も遺存することは、吾人の歐米人に誇りとするところであります。しかしそれが製作された年代については、今まで說がまち／＼であつて判らなかつたが、今夏はからずも、松浦正一氏が讃岐志度の平賀家から發見した一文書によつて、エレキテル製作の年代を、たしかめることが出來た。まづ從來の說をあげたあとで、結論を述べよう。

一　寶曆七年(皇紀二四一七)の說と同九年(皇紀二四一九)說。

この說は出所があいまいである。源内の友人であつた太田蜀山人の奴凧(この事後に云ふ)や大槻茂質の厚生新編(後に述べる)によつて妄說であることが確められる。

二　明和七年(皇紀二四三〇)長崎での製作とする說。

この說は奴凧に「明和七年癸辰の頃長崎に赴き大通商吉雄幸左衛門について阿蘭陀本草を學びエレキテルと云へる奇器を作る事を學び得てかへり云々」とあることによつて、立說するのであるが、厚生新編に

本邦に此器舶來せしは寶曆の末明和の初めにやと知らる。明和の初年平賀國倫長崎に至り和蘭陀譯司西善三郎といふ者久しく所藏せし諸機の缺損せしものありしを購ひ得て、都下に歸り其缺損を補足して用に供せんと工夫を凝しぬれど、容易に其機會を曉り得ず。又久しく藏め置しが、一とせ西賓參向の春、就て是を質すに、其製造の理を辨へたる人なし、時に隨從の老譯生庄三は、機智ある性の者にて、暫く是を弄して遂に其製法を曉會し、乃ち國倫に傳ふ、國

倫ここに於て自得し、再修成して人にも示す如く云々とあるが、明和七年の長崎遊學後、和蘭人の來れる最も近き年代は、安永元年であるから、この記事によつて明和七年説は否定せられる。

三　安永元年(西紀一七七二)江戸にて製作すとの説。

これは厚生新編によつて立説したるものであるが、平賀家の文書によつて、今度全くくつがへされることゝなつた。

四　安永五年十一月(西紀一七七六)江戸にて製作す平賀家所藏文書の一説に

エレキテルと申而硝子を以天火を呼病を治し候器物阿蘭陀に有之候由兼て承り傳へ私先年長崎逗留の内種々丹精仕候而漸手掛り出來仕歸府之後七年之工夫に而去々年十一月始而成就仕候其後高貴の御方樣へ茂被爲召私浪々之渡世の一眼にも相成申候右彌七儀は十年以前より私下細工致させ候者故右細工をも爲手傳候に付見覺へ罷在候然る處同店玉細工人忠左衞門と申合せ私名前を申立右エレキテル拵候由にて龜井町文藏店鑄師嘉七相賴右細工に入用之由にて屋敷方より金子貸り取右器物に似寄り候品出來致候得共火出不申用立不申由に御座候右に付嘉七儀御屋敷に對し申譯無之彌七と不和に相成候段嘉七儀私え委細申聞候云々

とあるが、此の文書によると、源內がエレキテルの發明は長崎へ遊學後七年の日子を費やして或る年の十一月に完成したが、その翌々年に僞物が出來たので、それを奉行所へ訴へたものである。この文書には日附がないので、文中の去々年とあるのは、何れの年であるか判らない、しかし長崎逗留後七年とあるが、源內が長崎へ遊學したのは、寶曆二年と明和七年との二度である、文中の長崎逗留を最初のときとすると寶曆八年となり、再度の遊學とすると安永五年になるのである、また文中に去々年とあるのは、いつの年からさしたのか判らないが、源內のエレキテルを僞造して訴へられた彌七が、其後源內に宛てゝ差し出した詫狀の斷片に安永七戌年十月とある。もし源內の訴へた年が、詫狀と同じ年

であるとすれば、前記の訴狀の文中にある去々年は安永五年となる、さうして、それが長崎再遊後七年に相當するから、去々年十一月とは、たしかに安永五年であらう。しかるに厚生新編に「一とせ西賓參向の春」とあるが、安永五年の春三月に和蘭人が江戸に來てゐるから、文中の去々年とあるのはたしかに安永五年に相違ない。さうすると、安永五年は源內の長崎再遊から七年目に當り、安永七年からは去々年に當り、厚生新編の記事とも何等衝突しない、これ等の點から推定すると源內のエレキテルの發明の年代は確に安永五年に相違ないのである。かく苦心の結果出來上つたエレキテルは至るところで實驗したものと見え、彼の著書である放屁論後編や、玆にあげた訴狀にもあるやうに高貴の人々の面前で、實驗したとある。信州松代町田中庸三郎氏所藏の文書に

以御手紙啓上仕候愈御莊健奉珍賀候然は今日御屋敷へエレキテル持參仕候樣明日御約束奉申上候處田沼直吉樣同織吉樣私深川下屋敷へ花見御見物に御出可被成旨夜前俄に被仰出候是は去る二十二日田沼大和守樣水野中務少輔樣右別莊へ被爲入候夫故又之俄に右の御催御座候仍之今日御屋敷樣へ參上仕候儀難仕甚奉恐入候得共今日之所何分御用捨被遊被下何卒明後六日羅上候樣に御取斗被成下度此段御願奉申上候初而參上仕候筈に昨日御懸合仕今朝差掛御斷申上候段私甚失禮貴公樣にも被仰上候も御難儀之段奉察上候へども格別之筋合にて無是非此段奉申上重疊奉恐入候其所何分宜御取成奉願上候急早々申殘候以上

七年四日　　　　平賀源內

立田玄道樣

急用

この文中の立田玄道は松代藩醫で、大和守は田沼意知、中務少輔は二男の意正、直吉とあるは四男雄貞、鐵吉は五男の隆種である。この手紙によると源内は松代藩主幸田伊豆守幸弘公の深川小松町の下屋敷でエレキテル實驗の約束をしたが都合がわるいので七月六日に日延をした。いよ〳〵七月六日には實驗したものと見へ、松代町羽田桂之進氏の文書に

尙々兩太夫奉始皆樣へ宜奉願上候御臺所御目付御兩人樣別而宜奉願上候

昨日は段々難有奉存候被爲入御意候趣難有仕合奉存候

一御家中御見之節は火出乘散々の仕合殘念奉存候〇十一日御出立の由夫より内一日御出奉待候

一今日は大に勞れ亂筆御用捨可被下候

一御留被遊候品々御歸國以前に御返被下候樣呉々奉願上候外方に而は一向差置不申候以上

七月六日　　平賀源内

立田玄道樣

とあるが、眞田侯の家中の者共へ、花火を實驗して見せたが、うまくゆかなかつたことを殘念がつて居るし、また彼れは電氣を病氣の治療に應用したことは、先哲像傳に載せられた源内の手紙によつてよく判る。すなはち

夜前は段々難有仕合奉存候御母上樣へ宜奉願上候扨は立軒樣御病氣エレキテルに而一廻りも御療治被成候はゞ極めて宜奉存候御服藥と違いきかいても害に相成不申候若御療治被成候はゞ初は私參後には家内の者に而も相濟候(下略)

これはある年の霜月十二日に、源內からその友人であつて、醫者である千賀道有に宛てたものである、この手紙によると源內のエレキテル治療は、たとへ效驗あらはれずとするも、害にならないからお勸めする、はじめは私が參上して治療しますが、あとは家內で出來るからよく立軒樣へよくかけあつて、都合によつては、私が參上致さうと云ふのである。こんな風に源內は各所で、實驗や電氣治療の效能を述べてゐるが當時の日本は鎖國主義であつて全く理化學の知識の乏しかつた時代に、人の體から火をとる方法と云ふのであるのだから、凡てめづらしいものは切支丹のバテレンの方法として、人々にもてはやされたものであるにちがひない、さうであるに、源內はエレキテル發明の翌年である安永六年の放屁論後篇のなかに

エレキテルセエリテイといへる人の體より火を出し、病を治する器を作り出せり抑此器は西洋人の電の理を以て考、一旦工夫は付けれども其身の生涯には事ならず、三代を經て成就しけるといへり、阿蘭陀人といへども知る者は至て少く周朝鮮唐天竺の人は夢にもしらず況や日本開闢以來創て出來たる事なれば高貴の方を初めとして見ん事を願ふ者夥し

と宣傳したのである、なる程理化學の知識の貧弱な當時の日本人にとつては餘程珍奇な不可思議なものであるので、甚しく一般民衆の好奇心をそゝのかしたものであらう。

これを要するに源內のエレキテルは、彼が再び長崎に遊學してから七年間の苦心をしたあげく、老譯生庄三からヒントを得て漸く今から百五十六年前の安永五年十一月に完成したものである。さうして源內は至るところで高貴の方の面前で實驗を試み、或は病氣の治療にエレキテルを應用するなどで、日なほ足らずと云ふ有樣であり、人々の好奇心の高

潮であつた時であるから、エレキテルは忽ち一般民衆からもてはやされることになつたので、この風潮にわるたくみな彌七などは、僞造して一儲せんとしたものであらう。とにかく橋本宗吉、佐久間象山などの電氣學者が輩出してもなほ、一般民衆の頭には電氣はなほ源内先生の專賣である如く思はれたのも無理はない。

註「エレキテル」舶載の年代については一七七三年（安永二年）長崎入港の蘭船「社運隆昌號」（'S Compagnies Welvaren）の積荷明細書の第九十八、九十九、百及び百一番の箱には「來年幕府への進獻物を收む」とあり、その第百番の箱の品物中に1 Een Electriciteijt met die stoebheooren エレクトリシテイト附屬品共一揃」と見える。これは「エレキテル」舶來の重要なる史料である。「エレキテル」舶來の年代について厚生新編に「寶曆の末、明和の初にやと知らる」とあるが、確實なる史料によつて證明されるのは右の安永二年舶來のもので、それが恐らく翌安永三年甲比丹江戸參府の時進獻されたであらう。その時の甲比丹は Arend Willem Feith で、太陽曆の四月二日に江戸に着し、同月十一日に登城進獻二十日に江戸を出發して歸途についてゐる。

七　源内と秩父

源内が秩父地方へ足を運んだ最初は、寶曆十四年即ち明和元年の初春で、その橋渡しは後に源内の門人となつた武藏兒玉郡猪股の名主中島利兵衛貞叔である、この貞叔と源内とはその前年寶曆十三年の川田玄蕃の江戸の屋敷で對面し、その縁故によつて、翌十四年の訪問となつた。中島家で滯在中、或日秩父郡中津川村兩神山へ登つて石棉を發見し、中島方で火浣布を織出したと中島家の記錄に見えてゐる。源内は寶曆十四年の三月火浣布に關する說明書を公けにし、明和

二年刊行の火浣布略說に「予此物織べき事を考出して、過し申のきさらぎなかば創めて製し出す」とあれば、源内の火浣布創製は寶暦十四年の二月中頃である。この布はもし油や墨で汚れたとき、火に燒くと垢は悉く燒け落ちても布は少しも損じない、恰も火で洗ふやうであるから火浣布と名づけられた。紅毛國でさへ、昔は着物に拵へたが、今では織方さへ忘れられ、我が國では竹取物語の「至つてないもの」の部に「火鼠の裘」といふ名前のある珍物である。石棉は細い纎維狀のもので觀世捻に挾んで織つたと云はれて居るが、或年の八月十日附中島理兵衞から同苗の利兵衞貞叔に宛てた手紙に、

火浣布今朝織かゝり申候處、織はたにかけ候而は糸よわく、のり附そこない申候。是は縞木綿はたにものり附そこないはある物に御座候。此段先生へも申上候。御歸之節糸屋にて白のねりくり拾六文斗御調被レ遊可レ被レ下候。火浣布に用申度奉レ存候。

とある、文中の先生とは源内その人で、纎維狀の石棉に白の練繰を加へ、觀世捻のやうにし、のりを附けて織成したものと考へられる。とにかく、これが源内と秩父との最初の關係である。

ついで明和二酉年三月二十日、源内は中島利兵衞と打連れて中津川にて、かんすい石を發見し、その四月二十二日にはまた同人と登山して金・銀・銅・鐵・ろくしやう・明ばん・たんばん・磁石などを發見したばかりか、金山採掘の交渉があつた。この時には、先づ大切なことは大造作であつて、まづ中切り水拔より力を得て、其の後大切り掘續の事に決定、中切り水拔三五のかせ附る。そして翌三年の七月二十五日には正木源八と云ふ役人と同道で登山し、色々調査の結果立札

などを建てたが、その年は工夫などと一しよに秩父で越年し、翌四年と五年まで採掘したらしい。詳しいことは幸島家の鑛山日誌に見えてゐる。そして日誌には、「明和五子年まで掘候事、丑寅卯三ヶ年は休山、其間平賀源内長崎へ行」とあるが、南大曹博士所藏の某年卯月二十五日淸水家の醫師服部玄廣に宛てた書翰に、「私四年以前長崎へ參、去秋罷歸候」とあり、また同文中に、「且又四年以前、田沼侯御世話に而、阿蘭陀本草飜譯のため、長崎へ罷越候云々」とあるが源内がエレキテル發明の時日を物語る下細人彌七を訴へた訴狀に、「私長崎より歸京後七年の日子云々」とあることに考へ合せて、この手紙が明和八年卯月二十五日附であることが明かである。さうすると四年前とは明和五年で去秋とは明和七年である。殊に秩父町岩田丈五郎氏所藏の十月十三日附の手紙に、「拙者儀來る十五日長崎へ出立云々」とあつて、源内の著書「石の枝折」に明和戊初秋とあるから、源内は明和五年の九月頃には秩父を引上げて居たらしいが、この時の採掘事業はさしたるものではなかつたらしい。源内がこの地で大規模の採掘事業をしたのはどうしても長崎から歸つてからであることは史料の示すところである。

さて源内が試みた採掘事業はいつも中津川の幸島家に滯在して計畫され、久那村の岩田三郎兵衛が萬事切盛をする女房役であつた。源内が長崎より歸つてから、この秩父の鐵山について其の筋に請願したものが、明和九年卽ち安永元年の九月には松平周防守の檢分となり、その十一月には代官より出頭を命ぜられ、同月二十六日に出府して、十二月八日に中津川に歸つた。越えて安永二年の春、岩田三郎兵衛・幸十郎等の人々が採掘の準備として普請工事があり、三月十八日に御奉行の中津川下向となつた。その二月十六日、岩田三郎兵衛宛の書翰に、「鐵山の事誠に時節到來云々」とあり、また「是非々々當年は吹掛り申候に付」と述べてゐるが、越えて六月十五日には次のやうな一札が交はされてゐる。

一札之事

一　秩父郡中津川村鑛山之儀、段々貴殿被致世話候間、此以後稼方相募利潤有之候節は、御運上諸雜用引殘、利潤之内貳拾分之壹永く差遣可申候、爲後日仍而如件。

安永二年癸巳六月十五日

平賀源內㊞
國倫（花押）
千賀道有㊞
芳久（花押）

岩田三郎兵衛殿

この文書によつて、安永二年六月には最早採鑛事業が開かれてゐたことは明らかである。菊池寛氏所藏安永二年某月十五日の黃山宛の書簡には

私數年願望之秩父鐵山も成就仕、追々生鐵・鋼鐵共澤山出、且刀劍ニも爲作候處、無類之上鋼鐵ニ而、利劍を鍛出、先日より田沼君へ差出置候。近々御樣させ被下候筈ニ御座候。

と秩父鐵山を有望視してゐたのに、その翌安永三年には早くも休山したらしく、鑛山日誌に「月論見人平賀源內大しくじり有之故也」とあるが、これは源內の採鑛事業に對する見當ちがひで、しかも吹方に對する知識が貧弱であつたので失敗したらしい。尤も源內は最初から吹方については自信がなかつたものと見え、服部玄廣宛の書翰にも、

鐵山之儀ハ和漢蠻國古今未曾有之珍事ニ御座候。年レ去いまだ吹方手ニ入不レ申、大に苦ミ罷在候、吹方さへ成就仕候へバ永々之寶山に御座候。

とあるが、安永四年十一月二十五日平賀權大夫宛の書翰にも、「秩父鐵山之儀いまだ吹方熟不レ申行兼候」とあることから、源內の鑛山事業は採鑛に對する知識が不十分であつたために、失敗に歸したのであらう。今日平賀家に「武州秩父郡中津川初吹金並中津川產爐甘石」と題して、詳しい說明書が添へてある小塊の金と爐甘石とが遺存するが、明和度に得たものか安永度に得たものがよく判らなければど、恐らく明和度のものと察せられるもので、源內が鑛山事業に手を出したことゝ博物學の知識のあつたことを物語る唯一の遺品である。

かくて源內は自分の技術の未熟と無經驗とから鑛山業に手を出したので、全く失敗に終つたけれども、その附帶事業としての荒川通船工事には成功した。それればかりかまた秩父の樹木で木炭燒出までやつて可成の實績を擧げて居る。荒川に川船を通ずる工夫は鑛山用として鑛山業に着手した頃から計畫されたものであらう。安永四年十一月二十四日附平賀權大夫宛の手紙に、「鐵通行之爲ニ川船工夫いたし、十五六里の間往古より無レ之場通船いたし申候」とあれば、荒川の通船は秩父の鐵鑛運搬のために考案されたものである。この通船の開始については年代はよく判らないが、秩父町久保道藏氏所藏十一月二十三日久保四郞右衞門宛の手簡によると、この工事には久保四郞右衞門外二三の人が助力してゐて、源內の胸中には最初兩三年の間は全くの缺損ではあるが、まづ十年もして、郡中に通船が出來るやうになれば、最初の損失を償ふばかりか、甲州の荷物までも秩父の方へ奪ふことが出來るとまで考へたらしい。言ひ換へると、鑛業

專用の川船を一般貨物の集散に利用せんとまでしたのであるが、この計畫は果してどの程度まで業績をあげたか判らない。果てはこの通船は木炭運搬用に轉用されることゝなつた。しかしこの川船の權利は、其の後一種の權利株となつて文化年中に、この川船の權利を得んとしたが、その筋では平賀の緣故者に許可すると云つてなか〳〵權利を附與しなかつたものである。

源内が炭燒をはじめたのは、鐵山休山後の安永四年のことで、その月日は判然しないが、十一月二十四日附平賀權大夫宛の手紙に、「是迄朽捨候山々之木皆炭に相成候。是も炭燒頗相濟夏以來二千俵計燒セ試候」とあるから、安永四年の夏には既に燒出してゐる。しかし、これは試驗的のものであつたらしく、その十二月には源内の名義よりは都合のよい久那村岩田三郎兵衛・喜左衛門兩人の名義で、改めて出願し、大規模の炭燒業を開始したものと思はれる。

けれども、源内が炭燒業を開始せんとした頃、源内は自分の名前で出願することは都合がわるかつたと見える。それは影森村の一百姓の所有である橋立山で炭燒を交渉したときも、久那村の三郎兵衛と喜左衛門兩人の名義で契約し、諸準備が出來て、試に炭燒をすると、收支償ふことが出來るので、山本文野右衛門　相談して、炭燒に取り掛つた。そして諸費用を差引いた純益のうちから、一割を炭燒出願の御禮として差上げるから、御兩人で分配して與れと一札が差入れられてある。更に阿部豐後守の領分である秩父郡川浦山御林・蟬山御林・白久村熊倉山御林都合三箇所の雜木で炭燒せんとしたときにも、源内自身の名前をあらはすことを避けて、矢張り喜左衛門名義で出願し、其の禮として賣上金のうち、諸雜費を差引いた純益の貳拾分の壹を差上げる。そして出し人足や色々世話料として、更に出炭壹萬俵に金五兩

を差出すことを伊勢屋(岩田)三郎兵衛を證人に立てゝ喜左衛門に一札を引入れたのは同月十二日のことである。其の頃炭相場は一兩に六貫俵が二十七八俵であるが、江戸まで運搬して問屋仲間では一兩で十九俵位であるから利益が多いが、手燒では埒が明かないので、伊豆の炭山師山本文野右衛門と相談して利益を分配することとし、一年に三萬表俵位燒出させ、成績によつては十萬俵位燒出さんとまで目論んだらしい。然し年月を逸した平賀家所藏源內尺牘の斷簡に、「炭燒人夫三十四五人を使傭して十八個の竈で月に四千俵の炭を燒出させ、それを荒川の川船に積下ろした」とあるので、源內の炭燒業の規模と實際とが朧氣ではあるが、これを推測するに難くない。

以上で源內が秩父での事業の大略を述べたが、吹出鐵・荒川通船並に炭竈などの事業に對しては收入の幾らかを運上として、其の筋に納めることが條件であつたことは、安永六酉年十二月六日附で代官前澤藤十郎宛の書翰に、「御書付奉二拜見一候。然ば吹出鐵　荒川通船・炭竈之儀委細書付差上、冥加永之儀來る十五日迄に上納可レ仕旨被二仰下一候趣、委細承奉レ畏候得と相しらべ可二申上一候。以上」とあることで確められるが、その上納の高はこの書面によつて代官より示されたものであるが、その書付が逸失してゐるためこれを知るに由ない。

次に一言述べたいのは「神靈矢口の渡」の戲曲である。戲作の動機はこゝでは言はないが、幸島家の鑛山日誌には「神靈矢口の渡淨瑠璃幸島家逗留金山鐵山堀割中作也」とあり、そして同家八疊の間で作られたと傳へられてゐる。そして幸島家では、源內が逗在中、或晩源內の寢言に、「こまつたことだが、娘を殺さなきやいかぬ」と言つたので、幸島家の娘が驚いて、その翌朝父親から源內に聞いて見たところ、「それは矢口の渡の淨瑠璃起草中で、多分お船を殺さなけり

や芝居にならないから、多分そのことを言つたのであらう」とのことであつた。ところが兒玉郡大澤村猪股の中島家でも、あの戯曲は中島家で作られたと傳へられてあつて、第三燒餅坂の條に出づる野中の松と云ふお相撲は中島家の下部であるとのことで、作曲場所について異說がある。某月二十八日附明和七年の某月であるらしいが、桃源宛の書簡には、「去々年もかな川ニ而金子五兩請取書遣、夫ヲ路金ニ大阪迄登り申候」とあつて、明和五年十日十五日頃長崎に向つて、明和七年の四五月頃は源内も長崎にゐたことは確かであるから、この義太夫は明和五年長崎出立以前に全部脫稿したので手金をもらひ、完成の上長崎から送りよこしたものではあるまいか。源内の動靜から見て、どうしても幸島家のことや中島家・野中の松のことなどが文中の人となる。源内のことであるからひま／＼に、あちこちで筆をとつたこともあつたとしても、大部分は幸島家でなされたものであらう。そして神靈矢口の渡の奧附に、明和七年正月十六日とあることから、完成は明和六年のいつかはしらぬが長崎逗留中であつて、その年末に翌七年正月十六日の日附で上木されたものではあるまいか。

終りに秩父地方に今日源内の風容について次のやうな傳說があることを注意しておく。

一、肩がいかつて出尻の人であつた。

二、顏が長くて、左の眼の尻にホクロが二つあつた。

三、鼻が大きくて眼が細長かつた。

四、左の顋に瓜の種のやうな小さい痕があつた。

五、人指指が並の人よりも長かつた。
六、足袋は十文半であつた。
七、聲は美音であつた。
八、毎夜碌々眠らないで書きものをしてゐた。

八　物産書目に就いて

源内が自分の藏書目錄を作成したかどうか判らないが、平賀家には物產書目と云ふのがある。またこの書目が源内の藏書目錄の一部分であるか。これだけ單獨のものであつたか不明であるばかりでなく、物產書目としても現存するものが全部であるか、その殘缺であるかも判明しない。けれども何かの參考ともなるであらうと、ここに載せた。原本美濃判、罫付八枚、そして原本の一枚をここでは一段に組んだのである。

九　死後の供養と追悼會

源内の死歿を安永八年十二月十八日としてゐるが。或る說では翌年即ち安永九年の二月に死んだと傳へてゐる說もある。また源内は死んだのではなくて牢獄を脫出して、遠州相良の田沼侯の領内に餘生を送つたと云ふ說もある。どうしても脫出說は考へられない、源内が久しく滯在してゐた秩父中津川の幸島家では源内の卒したのを聞いて、紙位牌を拵え、その靈をまつてゐた。今日でもその位牌が幸島に保存されてゐる。讃岐志度の平賀家には智見靈雄居士喪中入用帳

と云ふのがある。それによると安永九年正月二十七日より八日え初七日、二十九日より晦日え、五七日、越えて二月六日より七日にかけて、僧衆十四人、尼一人とで、七七日の法用を相營んでゐる。安永九年二月死去の說は否定される。そしてまた源內の鄕里では友人達があつまつて、一週忌の法會を營んだらしい、それは源內と同鄕であり、しかも親交のあつた渡邊桃源の追悼文に

半百の齡なほ志の遂げざる事をさぞ口惜くもあるべきと今はの時の心さへ思ひやられて胸ふさがりぬ「村雨や夜は衾に晝は袖」とは其の愁吟なり光陰流れてはや小祥忌になりぬ驚き定めて涙を閑窻に拭ふて昔を思ふのみ「友呼はよく我を知る千鳥哉」三千舍　桃源拜

とある。また源內の死後江戸では源內の友人等が一週忌の法會を營んで鎌倉に近い金澤に、源內の碑を建てようまでしてゐたことは今日平賀家にある杉田玄白が源內死後の翌々年に志度の弟權大夫によせた手紙によつても源內の死は確かであることがよく判かる。次ぎにその手紙をあげよう。

三月二十六日の御報此節相達致拜見候時分柄暑氣相成候所被成御揃愈御平安被成御暮候由珍重奉存候隨て私儀罷在候間乍慮外：：易覺え可被下候先達て御出府之節者御旅館へ御尋申上候所無程御歸國被成爾已後御尋も可被下候處何分御多用被成御座候思候樣にも相成不申候由御尤至極御互に遠國之義存候樣難參：：御同苗樣御小祥忌之節も朋友共申合御法會等も相營申候に付段々被入：：御：：不候共汗顏仕候扨々何かに付存出候事已に御座候兼々御存生之內鎌倉近所に金澤と申候所風色奇絕之地御座候右之所へ御隱居可被成御望御座候能見堂と申は中にも宜地に御座候故何卒右之土地へ碑文にても相認不朽にいたし申度心懸罷在候是非相斗可申候且又御尊母樣にも萬

朧御遠行被成候由扨々驚入候御義奉存候御力落相察候彼是存合申候所御年齢は七旬にも可被爲成義と奉存候如何
に申事御座候得共御年に御不足は無御座候得共近年之御不幸氣之毒至極奉存候將又紅毛本草之事御無心申上候所
御承知・・・以來奉存候前以申止候通御忘兄樣手製被成候品別て大悦奉存候幸便次第金子差上せ可申上候先樣へも
また明日迄に仰之通り至可申上候相願候右御報御禮旁々如此御座候恐惶謹言

五月二十八日　　　　杉田玄白

翼（花押）

尚々次第に暑相募申候間折角〱御自愛可被成候且當方（以下缺）

平賀權太夫樣御報

物産書目

紅毛本草　ドヾチウス著　壹帖

紙員

一　七百九拾一紙　書畫

一　四紙　白紙

〆七百九拾五紙

明和二乙酉歳春三月得之

(朱書)

紙ノ大サ大奉書程御座候此書

有德院樣御代五部渡候由

上樣ニ一部田村元雄ニ一部長崎通詞方ニ

二部此方ニ一部有之候

紅毛魚譜　壹帖

紙員

一　二百紙　書

一　百八十五紙　畫

〆三百八十五紙

千六百八十六年メニ作

當丑歳マテ八十二年ニナル

明和五戊子歳春三月得之

八十一年ニシテ得

紅毛禽獸魚介蟲譜　壹帖

紙員

一　三百五十七紙　書

一　七十九紙　獸畫

一　四十七紙　魚畫

一　二十紙　介畫

一　六十一紙　禽畫

一　四十紙　蟲畫

一　三紙　白紙

凡六百七紙

千六百六十年ノニ作

當丑歳マテ百八年ニナル

明和五戊子歳春三月得之

（朱書）百七年ニシテ得

日本一書

〰〰〰〰〰〰

紅毛花譜　壹帖

紙員

一　十七紙　書

一　百九紙　畫

一　四紙　白紙

凡百三拾畫

此書紅毛國初ヨリ千六百三十一年メニ作

明和六己丑歳マテ百三十七年ニナル

但紅毛國初ヨリ當丑歳マテ千七百六十

八年ニナル

寶暦十一辛巳歳夏五月得

書成テヨリ百二十九年ニシテ得

（朱書）

是ハ大奉書ヨリ大ク御座候　日本一書ニ而御座候

〰〰〰〰〰〰

紅毛介譜　右譜附　壹帖

アンブンス。フリテノト　力

紙員

一　二百七紙　書

一　五十八紙　畫

一　四紙　白紙

凡二百六十九紙

千七百五十年ノニ作

當丑歳マテ六十三年

明和三丙戌歳春三月得

六十年ニシテ得

~~~~~~~~~~

紅毛蟲譜　壹帖

紙員

一　百二十二紙　書

一　十一紙　畫

一　四紙　白紙

凡三十七紙

千六百六十九年ノニ作

當丑歳マテ九十九年

明和四丁亥歳春三月得

九十七年ニシテ得

右六帖草木禽獸魚

蟲介石悉備

~~~~~~~~~~

世界圖　壹帖

ゼイ　アツトラス
ニウエアツトラス
　ブルツクテル著

紙　員
一　二紙　書
一　二十六紙　圖畫
凡二十八紙

千七百五十九年〆ニ作
　當丑歳マデ九年
明和五戊子歳春三月得之
　八年ニシテ得

（朱書）
是ハ世界ノ圖委相分申候古今之珍書
阿蘭陀之新板物九年前ニ出來候書
去年八年ぶりにて一萬三千里の所より
手ニ入候古今之珍物に御座候

～～～～～～～～～～～～～～～～

百工祕術　（朱書）小本　十四帖

スコートテイル
ラツタヤール著

（朱書）
是ハ紅毛國ニ而諸職人之仕方委相記申候
船ヲ作事家ノ建方より小細工迄委書
居申候先頃風車にて臼ヲ挽候雛形ヲ
拵申候面白キ仕方にて諸人目を驚申候
其外種々珍布事御座候

千七百四十八年〆ニ作
　當丑歳マテ二十年
明和己丑歳春三月得之
　二十年ニ〆得

～～～～～～～～～～～～～～～～

一〇　總泉寺境内源内墓石調査の記

昭和三年十二月十日東京市淺草區橋場町總泉寺境内の墓所修築に決し、同月十七日午後一時から總泉寺住職大石觀法師導師となり、寒川恒貞、堀田璋左右、小倉右一郎、江崎郁郎、江崎觀室、入田整三の諸氏出席して、墓前祭を嚴修し、後數人の人夫によつて墓石の取除けに着手した、源内墓は東向に建てられてゐるが、その最下底の礎石は長方形の二枚の板石が南北に長く東西に短かく置かれ、その東に花立石がある。この花立石と東にある礎石と接する線の略〻中央部で、その線から三寸位西に片寄つた地下から一個の瀨戸燒の壺を發見したのは午後二時四十五分であつた。壺は八寸六分、口徑四寸八分、胴徑七寸三分、底徑五寸三分のもので、口部に缺損がある(圖2)。其の埋沒の狀態は口部の缺損部を東に地下約一尺五寸の處に置き、底部は花立石と基石と接する線から約六寸の地點で地下二尺三寸位の斜になつて發見せられた、そして壺の口部には破損した黄瀨戸皿で、蓋された

改修前の墓(1)

昭和三年十二月十七日撮影

(2)發掘された骨壺

(3)發掘された時の壺と皿

ま丶發見された(圖3)。その蓋を除くと、壺のうちは八分通りまで、骨片及一本の歯が土砂に混在してゐた外、何等の銘記もなく、墓志もない、余等は清水で骨片と土砂とをゆり分け、元の如く壺に納めて總泉寺の本堂に安置した。この壺と菊皿とについては、帝室博物館の北原大輔氏の說を紹介しよう。

壺は徳川中期頃瀨戸窯の所産にして、細き付着高臺(ツヶ高臺)と見られ、底裏には糸切の痕跡あり、裾以下を露出して無數の漆黑斑を有する赭色の所謂セト釉を施せるものなり、約二百年以前の瀨戸窯に多くこの種の類作を見る。口部に缺損あり。蓋は破損せる黃瀨戸の菊花形の皿にして、白土體なり、見込に置目三ヶ所あり、高臺附近白土を顯して、稍草綠色を帶ぶる透徹淸麗な黃瀨戸を施せるものなり、凡そ元祿前後に行はれたる黃瀨戸菊皿の類に近きを覺ゆ。

とあるから、源內時代としては、壺も蓋も相等して居る。しかし銘記がないから嚴密に云ふとこの骨片は源內とは斷定出來ないが、源內の墓石下から發見されたのであるから、まづ源內の

遺骨として差支ない。從來杉田玄白の碑文にも
官法不聽取其尸諸姪相媒斂君衣服屐以葬淺草總泉寺とありて、源内が牢死であるから、國法によつて、屍體を引きとることをゆるされず、仕方なく衣服屐を斂めて墓標を建てたと信じられてゐるが、この壺の發見で、從來の說を打消すこととなつた。何故にかく總泉寺に葬つたか、總泉寺は源内と緣故ある秋田佐竹侯の菩提所であり、源内の家來の福助が葬られてあり、また源内と親交のあつた醫師千賀道有の菩提所でもある、殊に當時は源内が知遇を辱ふした田沼侯の全盛時代であり、一說に獄中に病死せしを本町の藥店池永道雲之を得て總泉寺に葬るとあるから、それ等有力者によつてここに葬られたのであらふ。それ故、表向は衣服屐を斂めたと云つて、其の實は屍體を引渡され、荼毘に附して、總泉寺境內に埋葬したものではあるまいか。その精密なる考證に至つては他日に俟つこととした。

結びのことば

上に述べたことは今まで全く知られてゐなかつたことや、あまり注意されなかつたこと及び誤り傳へてゐたことなど、氣のついたことのあらましであるが、なほこの外にも云ふべき事も少なくないけれど、あまり下手の長談義となるからこの位で筆をとめた。（昭和九年六月二十五日）

平賀源內全集編纂始末

本集は平賀源內顯彰の記念事業の一として有志各位の醵金によつて編纂されたものである。この編纂と刊行との計劃は去る昭和四年三月にたてられた。越えて五年二月二十四日の理事會に於て、理事入田整三氏が編纂主任、理事長尾折三、同堀田璋左右の二氏竝に故待鳥清九郎氏が編纂相談役に選ばれ、內容體裁其の他編纂及刊行に關する總ての事を委囑し、編纂の事務所を入田理事方に置いた。ついで同年五月軒原利雄・小里瓈の二氏を擧げて編修補助とし、書記澤田篤二郎氏とともに、資料の蒐集と原稿の作成とに著手した。同年六月理事入田整三、同小倉右一郎の二氏は埼玉縣の菅原一氏の同道にて秩父地方に出張し、七月兩理事と軒原氏の三氏は香川縣高松、丸龜、志度、阪出その他各地に、八月、九月の兩度に、入田理事は大阪、奈良、濱松、長野縣松代町に、各編纂資料を採訪して少なからざる效果を擧げた。かくて同年十一月初旬漸く第一稿が完成したので、同月十三日堀田理事、入田理事の外に待鳥清九郎、軒原利雄及び澤田篤二郎の諸氏が集まつて、第一回の編纂協議を遂げた。卽ち全集はこれを上下二册とし、本草及工藝、散文集、文書類、戲曲、補遺、附錄の部門に分ち、戲曲以下を下集とし、印刷の體裁校正の方針等を決定し、戲曲、補遺、附錄以外の原稿を、その完成順に印刷所に囘附し、尾崎元春、加藤宗厚、高橋勇、本多法學、松浦貞俊、森銑三等の諸氏が校正の任に當られ、昭和七

年十月漸く上集の印刷を完了するに至つた。よつて裝幀を小林萬吾氏に依賴した。氏は意匠を源内先生手製の手文庫に取ることとなり、小林氏及び堀田、入田の兩理事は手文庫の所藏者である秩父の久保道藏氏方へ出張すること二回に及んで漸く出來上つた。そしてこの裝幀裂の製作について、入田理事と印刷所杏林舍と協議の末、これを東京女子家政學院の講師である瀧浦潭氏に依賴した。瀧浦氏は裝幀裂の型紙製作者である伊勢國白子に工場をもつ長谷川德松氏と再三回の協議を遂げ、型紙の完成をまつて、製作に著手し、同年十二月二十二日全く其の功を終へた。かくて製本の上同月二十四日納本をすませ、翌八年一月二十四日東京市淺草區橋場町總泉寺境內なる先生の墓前に之を捧げて上集の完成を報告し、二月配本を完了した。この間五年十二月末及六年四月上旬の二回入田理事は京阪地方に資料を採訪の事があつた。ついで同年二月二十三日戲曲以下の第一回編纂打合會を上野精養軒に開き、藤村作、坂垣市藏、片岡良一、城戶甚次郎、小池藤五郎、小柴値一、野村八良、軒原利雄、待鳥清九郞の諸氏並に入田理事出席して校訂の方針を決定し、各人の分擔を定め、既成第一稿を手交して再校を依賴した。その後編纂打合會を開くこと兩三回漸く校訂の方針全く確定し、原稿の完了順に之を印刷所に回附した。越えて昭和八年四月不幸にも待鳥清九郞氏が永眠されたので、同氏分擔の校正は堀田理事が代行せられた。その外附錄の校正は加藤宗厚、武田政一の二氏と入田理事とがその衝に當られて、本年四月を以て印刷完了した。然るに索引の編纂に至りては昭和八年一月に計劃され、二

月、尾崎元春、關根龍雄、原平三、福山精義、小菅進之助の五氏を其編纂委員に擧げ、數次の會合によつて索引編纂の方針略〻決定し、爾來五氏は專ら之れが編成に當られ、本年四月末を以て脫稿し、五月八日、十五日、二十三日の夕景の會合によつて整理を了し、淨書の完了をまつて、同月末日印刷所に之を回附して六月中旬に印刷全く終了するに至つた。顧みるに昭和五年二月本擧を決定して以來滿四箇年五箇月を費して、全集刊行の擧を終へた。誠に豫定の歲月を超過して會員各位の期待に副はなかつた所が少なくないことを恐る。此點に就いては余より各位へ深く鳴謝する所である。而も編纂關係者は非常の努力を以て事に當り鳩溪翁の遺編としては、殆ど完備に近きまでに蒐集し得たことは本會事業として甚だ矜とする所であり、會員各位の此の永き歲月を隱忍せられたことは感謝措く能はざる所である、終りにこの間、直接間接に少なからざる犧牲を拂はれ、この集の完成を得せしめた有志各位の厚意に深く感謝の意を表するとともに本集の刊行を快諾せられ、その完成に努められた印刷所杏林舍の各位にも多大の謝意を表して擱筆する。

昭和九年六月二十五日

平賀源內先生顯彰會長

伯爵　松　平　賴　壽

平賀源内先生顯彰會役員（イロハ順）

會長　伯爵　松平頼壽
副會長　林　毅陸
同　鎌田勝太郎
理事　入田整三
同　林　喬
同　堀田璋左右
同　大西一郎
同　小倉右一郎
同　渡邊富三郎
同　川崎舍恒三
同　鴨居　武
同　多田善樹
同　多田嘉德
同　竹内長生
同　中村　實
同　長尾折三

理事　山川波次
同　松田登三郎
同　牧　伴五郎
同　江崎郁郎
同　有馬忠三郎
同　秋山　襄
同　寒川恒貞
同　三好今三郎
同　三好常三郎
同　三好松太郎
同　白川朋吉
同　廣瀬小三郎
同　樋口恒藏
會計監督　兒玉謙次
同　鈴木幾次郎
會計主事　牛窪德太郎

平賀源内全集
上下全二冊

昭和十年二月十日印刷
昭和十年二月十五日發行

著作者　平賀源内先生顯彰會代表者　入田整三
發行者　東京市牛込區辨天町一七四番地　中村時之助
印刷者　東京市本郷區駒込林町一七二番地　柴山則常
印刷所　東京市本郷區駒込林町一七二番地　合資會社杏林舍

發賣所　東京市神田區神保町一ノ三五　荻原星文館　電話神田三〇三八番　振替東京三〇四六番

定價金拾五圓